仮面ライダーブライ　～欲望の物語～

ラージ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダーブライ　～欲望の物語～

【Ｎコード】
Ｎ３９３３Ｐ

【作者名】
ラージ

【あらすじ】
此の世の全てを生み出した欲望。それらは善悪の区別無く、人々の心を揺れ動かす。そして、その欲望のメダルより誕生せし怪人グリード。彼等と戦いを繰り広げし戦士が現代に復活する！
欲望の怪人グリード転生した一人の異形の天才と、それを愛する我欲に満ちた一人の男。その二人が合間見える時、物語という名の歴史が始まる。己が欲望の為に戦いし者、その名は仮面ライダーブライ！

転生と出逢いと変身（前書き）

鴻上
「ＨＡＰＰＹ　ＢＩＲＴＨ　ＤＡＹ　ＴＯ　ＹＯＵ
ＨＡＰＰＹ　ＢＩＲＴＨ　ＤＡＹ　ＴＯ　ＹＯＵ
ＨＡＰＰＹ　ＢＩＲＴＨ　ＤＡＹ　ＤＥＡＲ・・・・・・」

ラージ
「なにケーキ作ってんだ鴻上？しかも二つ」

鴻上
「勿論、今日を持って誕生するブライの物語と！」

ラージ
「ブライと？もう一つは？」

鴻上
「ＬＡＲＧＥ（ラージ）・・・・・・ＨＡＰＰＹ　ＢＩＲＴＨ　ＤＡＹ　ＴＯ　ＹＯＵ！」

ラージ
「・・・鴻上・・・・」

鴻上
「１６年めの誕生日おめでとうラージ君！！」

（本当に今日＝１２月９日は作者の誕生日です）

ラージ

「ありがとよ。・・・・・・では新連載、仮面ライダーブライ！開幕です！！」

転生と出逢いと変身

「欲望」

それは人間・・・・・・いや、地球上に生命が誕生した時から存在している。
原始生命達の「生きたい」という生存本能から始まり、それは次第に進化へと繋がった。

進化した生物達はより効率的な存在となるべく、進化を続けた。
生きていたいが故、子孫を多く残すため。

だが、地上を人間達が支配し、人間が文明を築いて現代に至るまで進化を果たし、その「欲望」は急激に増殖し、肥大化の一途を辿ったのだ。

「あぁしたい」
「こうしたい」
「何かが欲しい」

そんな欲望に満ち溢れる、混沌なる世界。
しかし、人間達はその欲望を抑圧すべく、世界に法を創ったのだ。
しかしそれは、逆に人々の欲望を心の影で増長させる場合もあれば、その増長した欲望を糧に何かの成功を果たすこともあり、欲望を叶える。

でも時として、人間には叶うことのない欲望はどうしても現れてしまう。
そういった種類の欲望は途中で潰えるケースが多い。

なぜなら、世界そのものが定めた法則と、人間そのものに定められた限界が、その欲望を拒絶するからだ。

しかし人間の欲望には底が無い。
そして、その欲望はやがて・・・・・・。

強欲（メダル）の怪人となる。

＊＊＊＊＊

とある山中の洞窟の最奥。

そこには、ある一個の石棺が後生大事そうに安置されており、周囲の壁には古い文字が刻まれ、何かと何かが戦っている絵までが記されている。

その静寂な場所で、

――チャリン、チャリン、チャリン、チャリン――

洞窟の天井とでも言うべき場所から、何から不気味な色をした空間の歪みが出現し、数百枚の銀色のメダルと九枚の血錆色のメダルが落ちてきた。

そして、そのメダルの山は、九枚の血錆色のメダルを中心に集まり、結合したことで、一体の怪人の姿となったのだ。

『・・・・・・・・・・・』

血錆色の体色をした怪人は、まじまじと不思議そうに自分の身体を見る。

幸いなことに、地下水が溜まっていた上、光がある程度は差し込んでいたので、水鏡で自分の全貌を見渡せた。

龍の如き頭部と翼、肩には龍の手が宝玉を掴んでいるかのようである。

鬼の如き屈強な胴体と豪腕。

天馬のように精錬された脚部。

そして、本来の色を失い、バックルに嵌っているべきな物さえ消え失せたベルト。

『・・・・・・・・・ふーん』

怪人は自分に置かれた状況を、見て理解した。

そうすると、その姿を微量の光を放ちながらその姿を変貌させる。

それは意外にも女の姿であった。

死装束のような白い小袖を着て、長い黒髪をしている小柄で清楚な女だ。

もっとも、骨が浮き出てきそうなまでに筋肉の見えない細い腕や、長期間陽光にあたっていないかのような青白過ぎる肌。

見るからに不健康そうな外見だが、それが彼女の美しさに拍車をかけていたのやもしれない。

「まあ、いいでしょう・・・・・・いえ、悪いのかしら？」

女は邪悪な微笑をする。

「せっかく七花（しちか）に殺してもらったのに、これじゃあ意味がないもの。おまけに正真正銘の化物になったみたいね」

まるで他人事のように独り言を呟く女。
すると女の注意は、石棺と周囲にある文字と絵に向いた。

「・・・・・・・・・・・・」

女は文字と絵を並列して見始めた。
まるでその文字の意味を最初から知っているかのように。
あらかじめ誰かから聞いていたかのように。

壁に描かれていた絵には、二人の戦士が幾体もの異形と戦っている姿が描かれていた。

一人の戦士は、赤い鷹の頭、黄色い虎の腕、緑色の飛蝗の脚といった鎧と仮面を身につけていて、腹部には赤・黄・緑のメダルが嵌め込まれたベルトを装着している。

もう一人の戦士は、血錆色の龍の頭、血錆色の鬼の腕、血錆色の天馬の脚といったように、全身が血錆色に染まり果てた凶悪な姿であり、腹部には三枚のメダルが嵌め込まれたベルトを装着していた。

「成る程、理解したわ」

女は絵と文字の意味を容易く看破した。

「・・・・・これですね」

女は石棺のさらに向こう側の祭壇に祭られていた奇妙な石版を手に取る。

そして、小袖の内に仕舞いこんだ。。

――チャリン――

「あら？」

石版を取って洞窟から出ようとすると、足の爪が何かを弾いたらしい。

少し身を屈ませてみると、それはメダルだった。

赤が三枚、黄色が三枚、緑が三枚、白が三枚、青が三枚。

合計十五枚のメダル。

「面白そうですね。貰っておくとしましょう」

女は拾った十五枚のメダルも、小袖の中に仕舞い込んだ。

そして、何事も無かったかのように、洞窟から出て行った。

――ガタガタガタガタ・・・・・！！――

女が洞窟から出て行くと、タイミングを計ったかのように、石棺が音を立てて揺れ動き始めた。
妖しい光を放ち始め、それは次第に大きくなっていき、洞窟全体を照らすにまで至ると、

――ジャリィィィィィィン！！――

石棺自体が数百枚のメダルとなっていく。
そして、赤が二枚・黄色が二枚・緑が二枚・白が二枚・青が二枚。
合計で十枚の核（コア）を中心に細胞（セル）が集まっていく。

そうして、一体の異形が覚醒した。

＊＊＊＊＊

同時刻。
とある巨大企業の本社ビル。

「会長、例のグリードが復活した模様です」
「そう」

山奥における、一体の怪人の覚醒を知るものが居た。

ダークブルーでセミロングの髪をした上、生真面目そうで女物のビジネススーツを着こなした美人秘書は、会長席に座っている女に報告していた。

そして会長と呼ばれた女は膝にまで届く長い金髪をしていて、瞳には緑色の輝きがある。そしてなにより、彼女の美貌は一言では語りつくせず、見るもの全てを虜にするような妖艶さといやらしさを含んだ絶世の美貌を振りまいていた。

「また始まるのね。欲望の渦巻く戦いが」

金髪の女はグラスに注がれた、血液を彷彿とさせる赤ワインを飲み干す。

「それより会長。その服装は・・・・・・」

「ん、なにか？」

秘書は言葉を躊躇う。

だったら語り部が代わりに勝手に言う事にしよう。

一言で言うと、会長と呼ばれた金髪の女の服装は”チャイナドレス”だった。

しかも生地が薄いせいか、彼女の豊満極まる爆乳と括れたウエストと淡く実ったヒップといったグラマラスなボディラインがクッキリハッキリと表れている上、スカートのスリットも腰の部分にまで及んでいる為に穿くべき物を穿いていないのが丸分かりである。

もしこの服装で突風が吹き、スカートが・・・・・・・・・などということになれば、現場にいるであろう男性陣は鼻血の海に沈むであろう。

「いいじゃない。減るもんじゃないし♪」
「いや、そういう問題じゃ・・・・・・というか、仮にも一大企業の会長がコスプレマニアっていうのは・・・」
「公の場ではちゃんとした服装になるわよ。御堅いこというもんじゃないわよ、バット・ダーク」

会長はこの時、秘書の名を呼んだ。

「それに・・・・・・ノーパンノーブラのほうが、興奮するわよ／／／／／」
「淫乱ですね」

バットは直接的に言った。

「どうとでも言って頂戴。でもね、これで私達”トライブ財閥”も漸く大見得きって動き出せるわ」

先ほどの淫乱で妖艶な表情とは打って変わり、一気に何かを企んでいるかのような顔になる。

「確かに。これでセルメダルの生産量は格段に跳ね上がるでしょう」
「フフフ♪楽しみね、これからが。・・・あ、念のため、吹雪君に連絡しといてね♪」
「わかりました」

ルナイト・ブラッドレイン・シルフィード。
世界有数の巨大企業・トライブ財閥会長。
妖艶さと淫乱さを絵に描いたようなグラマー美女だった。

＊＊＊＊＊

時間は流れ、グリード覚醒から三日後。
とある街中を歩く一人の男が居た。

その男は実に目立つ容姿をしていた。
頭には染めたわけでも脱色したわけでもない天然モノの白髪。
服装は黒い着流しに黒いズボンといったものだ。

「もう一息だ」
「いや、流石にねぇ・・・」

白髪男はなにやら刃物店の男と話しこんでいた。
どうやら包丁を買いに来たらしい。

「そう言うなって。どの道この包丁、倉庫でホコリ被りだろ?買ってやるから砥石もつけてくれ」
「いや、言ってることメチャクチャ！」

なにやら交渉をしている。
十分後、白髪男は満足そうな表情で店を出て、店長と思われる男は疲れた顔をしていた。

「高級包丁一本に高級砥石一個で二千円か。あの類の店にしては安目にしたほうだな」

この白髪男の名前は鋼刃介（はがねじんすけ）。

「これだから値切り云々は止められない」

がめつい男だった。

両手に包丁と砥石を包んだ袋を片手に帰路についていると、

♪～～～♪～～～♪～～～

美しい歌声が聞こえてきた。

刃介は気になって歌声のする方向に足取りを変えた。

三分と経たぬ内に、刃介が辿り付いていたのは、自宅からしても近所にある公園。

その公園のベンチに座り、美しい歌を歌う一人の女が居た。

その歌はまるで、自らの脆弱さと儚さを物語るような、哀しい歌。

彼女自身を現しているとしか思えない歌詞と曲だった。

余分な贅肉も筋肉などまるでついていない、か細く小柄な体躯。

死装束のような白い小袖を着ていて、黒くて長い髪を伸ばしている。

血液が通っているかどうかさえわからない青白い肌。

それが歌い手の女の特徴だった。

「綺麗だ」

刃介は無意識にそういった。
あれほど美しい女は見たことすらないと思うほどに。

だがそれはそれで奇妙な何かを感じた。
歌い手の女は・・・・・・死人のようだ。死人というより死体。死体というより物体のようである。
そんな無機物的美しさだった。真夜中に出会えば生霊にでも見えそうである。

しかし刃介は、そんな彼女を一目見ただけで、あっけなく心を奪われてしまった。
一目惚れである。

あれで手が血まみれで顔に血が飛び散っていて、邪悪でいやらしい笑顔をしてくれたら最高だ!と、刃介の歪んだ何かが叫んでいた。

「・・・・・何か御用でしょうか?」

「ッ!」

唐突に歌い手の女が話しかけて来た。

「歌・・・、上手いな」

刃介は咄嗟に女の歌を褒めた。

「それはどうも。・・・・・えーっと、貴方は?」

女は平然と頭を下げる。
そして尋ねてきたのだ。

「俺の名前は鋼刃介」
「私は鑢七実（やすりななみ）と申します」

これが、刃介と七実の最初の出会いだった。

＊＊＊＊＊

とある某所。

「山から降りて三日ほど経つが、数百年で随分と変わったものだな」

電柱の天辺に立つ女は町並みを見てはそういった。
正直いって電柱の天辺に登って立つなど、常識はずれもいいところだが、生憎彼女は普通ではなかった。

まずは容姿から説明すると、かなりの美人だ。
１７０に及ぶ身長、キリリと引き締められた凛々しい顔立ち、髪型は流麗の如き黒髪をロングポニーテールにしている。さらには衣服の上からでもボンッ！キュ！ボン！なボディスタイルが伺える。
もし彼女が現役女子高生だったら「お姉さま」と呼ばれても違和感がない。

だが、彼女の服装はこの時代・・・・・・否、この世界ではかなり異質だ。

首・両腕・腹部・両脚といった五体に鎖を巻きつけた上、袖を切り落とし、覆面すらない忍び装束で、装束のあちらこちらには龍の刻印がされていて、忍者刀を腰の左右に一本ずつ帯刀している。おまけに装束の上半分は和風だが、下半分は両脚の付け根にまでスリットが入ったロングスカートのようになっていて、長くて綺麗な脚が惜しげもなく晒されている。もっとも本人は動きやすさ故にこの服装をしているのだろうが。

「さてと、ヤミーを生むに相応しい人間は・・・・・・」

女忍者は周囲を見渡すが人通りが少ない。
だが、グッドタイミングなことに、そこへ一人の中年男が複数の護衛を連れた状態で現れた。

「ほう、これは中々・・・！」

女忍者は標的を定めると、己の姿形を変貌させていく。

鳥類の如き赤い頭、大型生物のように頑強な銀色の胴体、昆虫のような緑色の右腕、猫科のような黄色の左腕、水棲生物の如き青い下半身といったキメラチックな異形に。

ただし、首・腹部・二の腕・太腿から腰にかけてが不完全だった。

『予備に作った十枚は兎も角、あとの五枚だけは必ず取り戻さなければ』

異形の怪人はそういって、中年男の前に立った。

「ひ、ヒィ！」

男は悲鳴を出す。
それと同時に周囲の黒服は拳銃を怪人に向けて発砲する。

――パンパンパンパンパンパンパン！！――

四人の黒服はそれぞれ二発ずつ発砲するも、

『・・・・・・・・うせろ』

怪人は気にも留めず、両腕から雷と風を引き起こして黒服達をブロック塀などに吹き飛ばす。

「あ、あ・・・あ・・・」

中年男は恐怖で何もいえないでいる。
怪人は三枚の銀色の円盤＝セルメダルを持ってこういった。

『その欲望、解き放て』

その言葉と共に、中年男の額に現れた投入口にメダルを入れると、
中年男の背中からはズルズルと一体の白いミイラが姿を現していた。

『素晴らしいな。本来亜種合成型は、投入先の欲望が相当でないと、
屑ヤミーになってしまうのだがな』

怪人が褒めて称えると、ミイラ・・・・・・・・・白ヤミーは生れ

落ちた瞬間に成長した。
鷹の頭・虎の腕・飛蝗の脚をした”タトバヤミー”にだ。

『私のコアメダルを探索し、回収せよ』
『リュウギョク様の仰せのままに』

命令の聞いたタトバヤミーは凄まじい跳躍力で移動し、それの親玉であるグリード＝リュウギョクも無言で其の場を離れた。

「・・・・・も、森様・・・」
「大丈夫、ですか・・・？」

ブロック塀に吹き飛ばされて叩きつけられた黒服たちが、雇い主に声をかける。

「グリード」

中年男は確かにそういった。
永遠の欲望を秘める男、森光蘭が刃介と合間見えるまで、もう少しの時間を要する。

＊＊＊＊＊

鋼家。
それはハッキリ言って、町外れにあるだけの普通の雑貨屋だった。
先ほど刃介がしていた買出しも、ここの商品を揃えるためのものだ

ったらしい。
といっても刃介と七実が今いるのは、雑貨屋兼自宅ではなく、その裏隣で繋がっている鋼家所有の道場だった。

公園で七実が宿無しだと聴き、刃介は自分好みの美女をこのまま野に置いておくのは非常に勿体無いと思い、思い切って彼女を居候させることにしたのだ。
七実も行くところが無かった上、この異世界ともいえる此処において、自分は戸籍上で存在しない存在。下手にうろついて役人（警察）の御用になると後々が面倒だと考え、刃介の好意に甘えることにしたのだ。

そして、二人が今居る道場の表札には”我刀流道場”と書かれていた。

「んじゃ、改めて名乗らせてもらうぜ。俺は我刀流二十代目当主・鋼刃介だ」
「鑢家家長、鑢七実です」

刃介の家系に伝わる我刀流は、八百年前における先祖にして開祖の鋼一刀が興した流派で、規則云々を徹底的に無視した流派だった。
敵の技を常に盗みとっていき、それを遠慮会釈なく、反則モノの技だろうと平然と使う。
要するに勝てれば何でもいいという、ケンカ紛いな流派なのだ。我刀流における独自の奥義を編み出したのも、四百年前における十代目当主だけなほどである。
それ故に認知度は全くの無名で門下生など一人も居ない。もっとも、有名であろうとも、刃介なら「メンドくせ」の一言でバッサリ切り捨てるだろう。

一方、七実の血族に伝わる虚刀流は、先祖にして開祖の鑢一根（やすりかずね）が興した流派で、初代は勿論のこと、子孫達が刀剣を扱うを一切持たなかったが故、己が肉体を一本の日本刀として鍛え上げることで成立する流派だ。
拳法ではなく剣法であり、列記とした殺人剣術である。

「まあ、お互いに名乗りあったところでアレだが・・・・・・一ついいか？」
「なんでしょうか？」
「お前一体何者だ？」

刃介は初歩的なことを聴いた。

「多分、もう直ぐわかりますよ」
「なんでだ？」
「それよりも・・・・・・」

七実は刃介が座っている向こう側、
丁度道場の一番奥に奉ってあるものを指差す。

「あぁ、あれか」

刃介は神棚に奉ってある物をおもむろに自分の手で握ってきた。

「こいつは初代の頃から我が家に受け継がれてきた家宝だ。なんに使うかは知らんが」

家宝といわれた物、それは・・・血錆色に染まった龍と鬼と天馬のメダルだった。

「・・・・・・・・・・・・」

七実はまじまじと見ていた。

なにしろそれは、自分の核（コア）なのだから。

――ドンドン！――

いきなり道場の扉を叩く音がした。

「誰だ？」

刃介が出迎えようとすると、

――バギィィィン！――

「うわッ！？」

扉が破壊された。

『匂うぞ。コアメダルが・・・』

扉を破壊して不法侵入してきたのは、タトバヤミーだった。

「なんだよこの化物！？」

「ヤミー」

刃介が困惑していると、七実がすんなりと言った。

「ヤミー？」
「欲望の塊です」
『お喋りしてる暇があるのか？』

タトバヤミーが会話の隙をつき、七実に攻撃しようと、両腕の鉤爪を彼女に突き立てようとする。

「甘いです」

その瞬間、

――ガシッ！――

「な、七実・・・！？」

七実は、グリードとなった。それも刃介の目の前でだ。

『虚刀流、蒲公英（たんぽぽ）』
『ハッッ』

七実は一切の予備動作もなく、構えですらない構えから、タトバヤミーに対して貫手を行った。
異常な危険を察知し、タトバヤミーは片腕で七実の腕を叩き、貫手が皮一枚スレスレのところで外すことに成功した。

（や、ヤバすぎる・・・！）

タトバヤミーは危険を察知する本能が警報をならしまくっていることを感じ取っていた。

下手な動きをすれば後は無いと。

「おい、七実・・・だよな？」

『その通りですよ、刃介さん』

「人って気がしなかったが、本当に人外とはな」

『・・・・・御気になさらずに。この家畜を毟ったら、出て行きます』

「こら待て」

”出て行きます”という部分に、刃介は待ったをかけた。

「七実。俺は何故お前を此処に居候させたかわかるか？」

『はい？』

そして、刃介は胸を張って、堂々と言って見せた。

「俺はお前に惚れてるからな。だから俺は、お前が欲しい」

実に一直線な告白だった。

「例えお前が化物でも」

『・・・・・・・・・・・うふふ』

すると、七実は笑った。

そして、人間の姿に戻った。

「面白い方ですね、気に入りました」

七実はその時、この世界における生きがいを見つけた。

そして、彼を試すべく、ある物を使わせることにした。

『ま、まさか！それは・・・！？』

洞窟で回収し、小袖から取り出された石版。
タトバヤミーが驚くのも構わず、七実はそれを刃介の腹部に押し当てる。
すると、石版は邪悪な光を漏らし始め、

――バチンッ！――

石の部分が砕け、本来の姿を取り戻し、ベルトとなって装着された。

「うおぉ！？」
「刃介さん。本気で私に惚れたと仰るなら、ヤミーを倒してください」
「あの化物を？」
「今持ってるメダルを三枚、バックルに嵌め込んで下さい。力が得られます」

七実は”ブライドライバー”を装着させて、刃介の持っている三枚のコアを使わせようとする。

『待て人間！その女の言う通りにすれば、貴様は・・・！』

タトバヤミーは最悪の状況を避けるべく、刃介を説得しようとするも、

「化物（テメー）の意見なんか聞いちゃいないな。こんな血化粧の似合いそうな美人と同棲できるってんなら、幾らでも代償を払ってやる」

刃介は迷わずに、メダルをブライドライバーのバックル＝ローグレイターの装填口に投入し、斜めに傾ける。
すると七実は、ベルトの右サイドにぶら提げられているローグスキャナーを手に取り、刃介に渡す。

「最後はこれで読み込んで、変身ください」
「あぁ」

そして刃介は、ローグレイターのコンダクターを滑走路のようにして、ローグスキャナーで三枚の妖魔系コアメダルをスキャンした。

「変身！」

≪ＲＹＵ（リュウ）・ＯＮＩ（オニ）・ＴＥＮＢＡ（テンバ）≫

刃介の周囲には複数枚のメダルが出現し、彼の周りを飛び交い、

≪Ｒ（リ）Ｉ・Ｏ（オ）・ＴＥ（テ）！Ｒ（リ）ＩＯＴＥ（リオテ）！Ｒ（リ）Ｉ・Ｏ（オ）・ＴＥ（テ）！≫

血錆色のそれが一つの円形（サークル）をつくり、刃介の胸に張り付くと同時に、彼の姿は激変する。

小太刀の刃を取って付けたような角を額から生やした龍の如き頭、袴袴を模した肩パーツに銀色の飾布を巻きつけて腰部分にまで垂らした鬼のような腕、
走力に特化したであろう天馬のような脚。
そのどれもこれもが血錆色だ。漆黒の複眼・リュウアイがタトバヤミーを睨む。

数百年の時を経て、己が我欲の為に存在する戦士、仮面ライダーブ

ライ復活の瞬間である！

『ば、バカな・・・！』

「えぇ。少しばかり、胸をときめかせてくれる御馬鹿さんです」

タトバヤミーの言葉に七実はそう返した。

「これが、俺の体なのか・・・？」

ブライは道場にあった鏡で己の姿を確認する。

「そう、それの名はブライ。どれだけの力かは、実戦でわかります」

「らしいな」

すると、ブライの胸にあるローグラングサークルの中央にある鬼の紋章が輝くと、それはラインドライブを伝わってオニアームに伝達し、篭手状の鞘に収められていた二振りの鍔無しの日本刀、魔刀（まとう）『釵（こがね）』を装備した。

「お、こいつはいいな。・・・さて、ここで暴れると修理代がかかるので、とっとと表でやがれぇぇ！」

そう叫ぶや否や、ブライはタトバヤミーに刃を突っ込み、そのまま破壊された扉から一気に屋外に飛び出した。

そして屋外に出たのをいいことに、ブライはさらに追撃する。

ローグラングサークル上部の龍の紋章が輝き、ラインドライブからリュウヘッドに伝わると、

「ッハアアァァアアア！！」

口から盛大にコアメダルの生命エネルギーを吐き出す”龍之息吹（リュウノイブキ）”を発動する。

『うおあぁぁ！！』

タトバヤミーは思わず、無理矢理刀身から逃れて仰け反った。すると、彼の体からは何枚かのメダルがチャンリンチャリンという音を立てて零れ落ちる。その間にローグラングサークル下部の天馬の紋章が輝き、エネルギーがテンバレッグに伝達される。

「いいぜコレ！力が漲ってきやがる！」

ブライはそこから一気に助走をつけ、一気に低くジャンプすると、そのままタトバヤミーに連続キックをかました。

またもやメダルがチャリンチャリンと零れ落ちる。

『図に乗るな！』

タトバヤミーはお返しとでもいわんばかりに、飛蝗の脚で高くジャンプし、自由落下にまかせて虎の爪でブライを切り裂いた。

「いって・・・！」

「刃介さん。中央にこれを」

七実は観戦しながら、ブライに赤いメダルを投げ渡す。

「鳥か？」

ブライはとりあえずメダルを換装し、再スキャンする。

≪ＲＹＵ（リュウ）・ＨＯＵＯＵ（ホウオウ）・ＴＥＮＢＡ（テンバ）≫

鬼の腕は、赤き鳳凰の翼となった。

ブライは基本形態のリオテコンボから亜種形態のリュウオウテンとなったのだ。

ホウオウアームのホルスターに収まっている二丁の拳銃、鳥刀（ちょうとう）『鏃（やじり）』を手に持っている。

「今度は銃か」

ブライはなんとなく自身の使っているものの機構がわかってきた。

（もう一度スキャンしたらどうなるんだ？）

そう思い、なんとなく再スキャンする。

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

スキャニングチャージされた生命エネルギーは、鳥刀『鏃』に送られた。

「そんじゃいくか・・・！」

引き金に手をかけ、

「チェストォォォ！！」

掛け声をあげながら、銃口より二つの巨大な炎弾を発射した。
結果として、

『う、うおおおあああああああ！！！』

――ジャリィィィィィン！！――

タトバヤミーはブライのリュウオウテンブラストを直撃で喰らい、爆発した。
あたり一面には彼を構成していたセルメダルが大量に撒き散らされる。

「メダルで構成された身体だったのか？」

ブライは周囲に散らばるセルメダルを見る。

「・・・・・・・・・・・・・・」

そんなブライの戦いを陰で見るものが一人居た。
黒いヘルメットに白いライダースーツを着込んだ青年は、奇妙なバイク・ライドベンダーに跨っている。

「こちら凍空（いてぞら）。ブライが戦闘を行い、ヤミーを倒したっす。会長、指示を頼むっす」

バイクのカウルに乗っている緑色の飛蝗型ロボットに向ってそういい

っていると、

『それじゃー、タカちゃんを一杯使って頂戴、吹雪君。まあ、無駄になるだろうけどね』

「了解っす」

凍空吹雪と呼ばれた青年は、手に持っていた赤いジュース缶のプルトップをあけると、そのジュース缶は鷹型のロボットとなり、他にも大量に配置されていたジュース缶も一斉に変形し、セルメダルを回収しようとする。

だがしかし、

「ん、なんだあれ？」

ブライは反射的に銃口を鷹のロボットに向けて、

――パンパンパンパンパンパン！！――

とりあえず連射した。

そして、メダルを口に銜えて持ち去ろうとした鷹型ロボットを全て撃墜した。

「・・・・・・・・・・・・」

それを見た吹雪は、無言でライドベンダーを走らせ、其の場を後にした。

「合格ですね」

七実がそう言いながら近づき、ローグレイターの傾きを直して、ブライの変身を解いた。
その瞬間、

「うっ！！・・・う、あ、アアあああああああああ！！！！」

刃介は右腕をおさえながら絶叫した。
突如右腕に激痛が走ったからだ。
まるで子供の頃にあった、骨が成長する際に起こる成長痛を何十倍にもしたような痛みが、右腕に集中している。

「くううううぅぅぅぅぅぅ！！」
「・・・・・・・・・・・・」

必死になって耐え続ける刃介。
それを冷淡に、平然と見ているだけの七実。

一分もすると、痛みも大分和らいできた。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・・・・！！」

必死になって息を整えようとする刃介。

「貴方は先ほど、こういいましたよね。幾らでも代償を払ってやる、とね」

七実はそんな彼を見てこういい続ける。

「常人との触れ合いと、人間であることを捨ててもらいます」
「・・・・・・・・・！」

刃介の異形となった腕を見て・・・・・そういったのだ。

刃介の右前腕部は、まるで刀をイメージさせる漆黒の腕だった。
指の部分は刃物そのもので、右前腕部そのものが刃物で組み上げられたかのようにすら見える。

「こいつは、キツい・・・ぜ」

激痛に耐えつつも、体力の限界を超えてしまい、刃介は倒れた。
薄れいく意識の中、自分は七実にこういわれていた。

しかも膝枕されながらで

「鋼刃介。私に惚れていいですよ」

それは奇しくも、七実の弟の所有者となった奇策士と同じ萌え台詞だった。

急展開に次ぐ急展開で始まった物語。
これが欲望の物語の、第一節なのである。

転生と出逢いと変身（後書き）

次回、仮面ライダーブライ

説明とヤミーと空間破砕

登場人物紹介

鋼刃介（はがね　じんすけ）

主人公兼仮面ライダーブライ変身者。

白髪頭に黒い着流しと黒いズボンといった風貌をしている。

鋼家に代々伝わる我刀流二十代目当主。普段は雑貨屋を営んでいる。

自分の欲望にとことん正直な男で、買い物の際は大抵値切り交渉を行っている。

公園で見かけた七実に一目惚れしたのをきっかけに、戦いの運命に巻き込まれていく。

そして何故か彼の一族には、七実が宿すべき妖魔系コアが三枚、家宝として受け継がれていた。

年齢：二十五

職業：戦士／雑貨商

所属：我刀流／鋼雑貨店

身分：当主／店主

所有刀：？？？

身長：１７５ｃｍ

体重：５２ｋｇ
趣味：値切り交渉

鑢七実（やすり ななみ）
「刀語の世界」において絶対的な強さと天才性を持っていた女性。
前世＝人間の頃に実弟の七花に殺してもらう道を選び、死を迎えた筈だが、何の因果か妖魔系グリードとして転生してしまう（記憶も前世のそれを引き継いでいる）。
自分に堂々とプロポーズしてきた刃介のことを気に入り、彼にブライドライバーを譲渡した。秘技・見稽古によって一度見れば大抵、二度見れば磐石に他の技を使いこなせるようになるといった、規格外の強さを誇る。
コアメダルが九枚あるにも関わらずベルトだけが不完全（セルメン）だが、本人は大して気にしているわけではないようで、オーメダルそのものにもあまり関心がないという、グリードにしては無欲な性質である。
グリードとしての能力については追々説明することにする。因みに極度の方向音痴だったりする。

年齢：二十七（人間時の享年）
職業：無職
所属：虚刀流
身分：家長
所有刀：なし
身長：四尺九寸（１４８ｃｍ）／怪人体：２００ｃｍ
体重：七貫六斤（２９．８ｋｇ）／怪人体：９０ｋｇ
趣味：草むしり

我刀流（がとうりゅう）

８００年前より始まり、鋼家に代々伝わる流派。開祖の名前は鋼一刀。

「我欲」「我流」といった二重の意味が込められており、その名の通りに我欲のままに戦い、対峙した相手の技を盗み学んでは自分の技としてきた流派。そんな矜持故に我刀流独自の奥義を編み出したのも十代目当主だけである。

刃介はその二十代目当主であり、「技を盗む」という行為に必要なスキルが一族の中でも最も大きく成長し、七実の見稽古と同等の観察眼を得ている。

説明とヤミーと空間破砕（前書き）

これまでの、仮面ライダーブライ
前回の三つの出来事！

一つ！異世界における超天才、鑢七実がグリードとして転生！
二つ！物語の主役、鋼刃介が七実とであい、彼女に一目惚れする！
三つ！刃介は、ブライへと変身した！

説明とヤミーと空間破砕

「・・・・・・・・・・・・・・・・ッッ」
「おや、気がつきましたか？丸一日寝てましたよ」
「・・・七実・・・」

初めてブライに変身し、タトバヤミーを滅した刃介。
眼を開けてみると、自分は布団の上に寝転がり、隣では七実が正座してこちらを見下ろしている。
どうやらここは自宅の居間らしい。

さらに視線をあちらこちらに移すと、卓袱台の上には大量のセルメダルが無造作に置かれていた。
どうやら七実がきちんと回収したらしい。

「・・・・・・やっぱ、夢じゃねーな」

そして、異形となった右腕を確認して、体を起こした。

「あ、その腕ですけど、元の状態を想像すれば簡単に戻りますよ。外観だけはね」

七実はそう言った。
刃介は七実の言葉に耳を傾けて、素直にそれを実行してみた。

（戻れ）

その思考と共に、右腕は外見の上では元に戻った。
だがやはり、体中に漲る力が、自分の身に起きた現象の証拠になっ

ている。

「・・・・・・・・教えてくれ」

「私の正体、ヤミー、メダル、そしてブライのことですね」

七実は刃介が訊きたくて仕方がない項目を先に口走る。

「勿論お教えしますよ。全てを・・・ね」

七実は悪そうな笑顔でそういった。

＊＊＊＊＊

トライブ財閥会長室。

「フフフ♪想像以上の腕前だわ」

シルフィードは会長席の座りながら、モニターで録画されていたブライの戦闘映像を鑑賞していた。

勿論、好物の赤ワインを口の中に注ぎこみながら。

「確かに、会長から直接ブライの話は伺ってはいましたが、想像以上の一言に尽きますね」

バットも素直に感想を述べる。

「君はどう思う？吹雪君」

そこへシルフィードは、部屋のソファーに座りながらモニターを見ている青年に声をかける。
服装は白いライダースーツだが、前と違ってヘルメットを手に取っているので、素顔が表にでていた。
雪のような白い髪、少々細身ながらも長身でがっちりとした体格、純朴そうな顔立ちだった。

凍空吹雪（いてぞらふぶき）。
それがこの青年の名だ。

「なんというか、がむしゃらだったっすね。もう勝てれば何でもいいって感じで・・・」
「ふーん、やっぱり彼も我刀流の一族なのね」

シルフィードは吹雪の感想に、なにかを確認したかのような態度になる。

「バット、我が財閥が開発中のアレとアレは？」
「例のグリードが復活した日に、既に完成しております」
「お、遂にあれをブライにプレゼントっすか？」

バットが冷静に受け答えをすると、吹雪が食いつく。

「その通りよ。次の戦闘が起こり次第、届けて頂戴」
「了解っす」

そういって吹雪は会長室からでた。
するとシルフィードは、会長席から腰を持ち上げると、会長室内に

特別に設けられたミニバーの椅子に腰かける。

彼女がいかにワイン好きかがわかる。

シルフィードはからになったグラスに、もう一杯分の赤ワインを注ぐ。

「会長、お酒を飲むことに関してはもう何も言いませんが・・・」

「言いませんが？」

「やっぱりそのコスプレをどうにかして欲しいのですが？」

今回のコスプレは、毛皮服だった。

もっとも、露出度はかなり高めで、上半身は胸を手ぬぐいで巻いた程度しか隠れていない上、爆乳なせいもあって今にも零れ落ちそうだ。おまけに下半身はミニスカートである。

こんなシルフィードの姿を見ても吹雪が平然としていたところをみると、こんなことは日常茶飯事で、吹雪自身もう慣れてしまったのであろう。

こんなみょうちくりんな空気が流れる間にも、ブライの新しい力が、始動をを迎えようとしていた。

＊＊＊＊＊

鋼家。

「つまりお前は元を正せば異世界の人間で、死んだと思ったら、グリードという欲望のメダルの怪人になっていたと」
「平たく言えばそうですね」
刃介はまず、七実の正体を理解した。
「一々訊かれるのは面倒なので、こちらから一方的に説明しますね」
と、七実は語り始める。
「オーメダルというのは、さっき言った通り、人間の欲望から生まれる物質です。種類にはコアとセルがあって、私達グリードはコアメダルを心臓部とし、セルメダルを血肉にして存在しています。さっき貴方が倒したヤミーは私以外のグリードがセルメダルを基に誕生させた家畜のようなもので、人間の欲望をエサに成長します。そして、親となった人間や投入されたメダルによって、喰らう欲望や成長方法が異なってきます」
七実は要点を絞って説明する。
「・・・・・成る程、大体わかった」
そして刃介は理解した。
「そしてブライはコアメダルの力を宿すことでグリードと対等に戦ったとされる凄まじい戦士らしいです」
「らしい？」
「私は八百年前、この世界にはいませんでしたから、実物を初めて

見たのは昨日です」

ならば、それはそれで疑問もある。
八百年前にはこの世界にいなかった七実。
ならどうして鋼家には彼女のコアが三枚あり、八百年前のブライはどうしてそれを使っていたのか？

（ま、謎は後でゆっくり解きほぐしていくか）

刃介は、山盛りになった疑問の解決は、現時点においては不可能とし、もう少し休養をとることにした。

＊＊＊＊＊

「予想はしていたが、やはりブライが復活したとはな」

ここはとある廃屋。
５系統のコアを宿すグリード・リュウギョクは、ここを暫定的な隠れ家にしていた。

「だが一番気になるのは、私のコアを持ち去ったあの女グリード・・・・・いったい何者だ？かつての戦いには、あんな奴はいなかった。・・・ブライが最初に使っていたメダルは奴の担当系統のようだが・・・」

廃屋のなかにある椅子に腰かけながら、リュウギョクは考え込む。

「・・・・・もう一体ほど、ヤミーを放って様子をみるか」

そうしてリュウギョクは怪人態となる。

『奴の子孫の力量を測る為にもな』

そうして、リュウギョクは自身の体をメダル化させて飛んで行った。

苗床となるであろう、欲望を探して。

所変わって、街中の裏路地。

「はぁ～～」

変に長いため息を出す者が居た。

「やっちゃったよぉ・・・・・・あぁ、やっちゃったよ」

なにやら後悔しているようだ。

「こんなことなら、あんなのに注ぎ込むんじゃなかった。なんであの場面であんな駄馬が追い上げてくるんだよ!?」

どうやらこの男、競馬で負けたらしい。

「あーあ、どっかに金目になりそうなうまい話はないもんかね～?」

そんなこと言ってる暇があるのなら働け。

だが、そんな時だ・・・。

『金が欲しいのか？』
「だ、誰だよ？」
いきなり女の声が聞こえてきた。
すると、
――ジャリンジャリンジャリンジャリン！！――
音を立ててあつまる大量のメダル。
それらは一つに結合し、一体の怪人となる。
「ばっ・・・化物！？」
『その欲望、解き放て』
リュウギョクは一枚のメダルを男に投入した。
そして白ヤミーがズルズルと男から産まれ出でると、呻き声をあげながらどこかへと彷徨い歩いていった。
「お助けぇぇぇえ！！」
男は情けない声を出しながら逃げていったが、リュウギョクは一切きにしないと言った感じで、どこかへと立ち去って行った。
『成長する頃には、ブライの奴でも気づくだろう』
一言だけ呟いて。

＊＊＊＊＊

一方、刃介と七実は・・・。

「ほれ、これで全部だ」

「ありがとうございます」

刃介は家中にあった本を全て、七実に読ませていた。
現代社会において、彼女をいち早く順応させる為だ。

「・・・・・・・・・・へぇ」

時折、感心したかのように声を出すときもあったりする。
七実が人間だった頃＝「刀語の世界」は江戸時代に等しいレベルだ。
なので当時では考えようもなかった技術の数々に驚いているのだろう。

「さて、いってくるか」

「何処へですか？」

外出しようとしている刃介に七実が聴いた。

「お前の着物買いにだよ。今着てるのしかないんだろ？」

「えぇ」

「知り合いの古着屋に行って、安く買ってくるから」

「でしたら私も一緒にいきます」

と、七実は本を閉じて立ち上がった。

「自分で着る物くらい、自分で選びたいので」

「まぁ、いいけど」

そうして二人は古着屋に向った。

＊＊＊＊＊

その頃白ヤミーは。

『う〜〜』

うめきながら街を彷徨っていた。

が、絶好の標的を見つけるのに、時間はかからなかった。

一言で言うと、闇金融会社でした。

よりにもよってなんでこんな場所をチョイスしたのやら。

もしかしたら、濁りに濁った欲望の影響なのかもしれない。

――ドガァァン！！――

白ヤミーは荒っぽいやり方でドアを蹴破った。

「なんだテメー！！？」

「ケンカうっとんのか！？」
「ナメたことしてんな・・・？」
明らかにヤバい方たちのが歓迎してくれるも、

一分後

「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・」

全員沈没。

白ヤミーは金庫にある札束を全て喰らった。
喰らって、セルメダルに変えていく。

――チャリン、チャリン、チャリン――

＊＊＊＊＊

その頃、刃介と七実は古着屋で小袖と襦袢を何着か買いに求めていた。

「えっと・・・・・これと、あれと、それと・・・あとはこの着

物を」
「そんなもんでいいのか？」
七実が選んだのは、今着ている死装束のような白い小袖と同じ物と、薄緑色の小袖と水色の小袖と桜色の小袖だった。あとは襦袢と長襦袢だ。
「えぇ、下手に多く持っていても仕様が無いので」
やはり彼女は無欲だった。
「まぁ、いっか。んじゃ、ちょっくら交渉してくるかな。じっちゃんにばっちゃん！」
そして彼は強欲だった。
値切り交渉を行うべく、店主をしている老夫婦に声をかけると、その瞬間に・・・
――チャリン、チャリン、チャリン――
「「ッ！」」
（この音は・・・？）
（セルメダル）
二人はヤミーの気配を察知した。
七実はともかく、刃介までということは、やはり彼もグリード化の影響を色濃く受けているのだろう。
「なぁ頼むよ～！」

「ん〜〜、どうしたもんかねぇ」

しかし何故か刃介は値切り交渉を続けている。
七実は刃介にヒソヒソ声でコッソリと話す。

「いいんですか、ヤミーがいますけど」
「ふん、お前の説明どおりなら、ヤミーはエサを喰って成長するってんなら、喰って成長したところを叩けばいい」

要するにこの男は、メダルが貯まりに貯まるまで、ヤミーを放置するきでいるのだ。

「まあ、貴方がそういうなら、お任せしますけどね」

そして七実は、雑草（たにん）に一々気を留めるような性格ではなかった。

「うぅ、どうするかね婆さん？」
「ジン君には何時もお世話になってるしねぇ」

老夫婦は悩みに悩んでいた。
刃介はこの店の常連な上、暇で退屈極まった時には、よく古着屋の力仕事をやってくれたりしている。
それゆえに、

「じゃあ、半分で」
「お、サンキュー」

着物の値段を半分にした。
着物を全て袋に入れて、刃介と七実に私、刃介は代金を渡して古着屋から出た。

「日頃からの下準備が大事だな」

刃介がなんか腹黒いことを小さく呟いたりしてたが。

＊＊＊＊＊

とある銀行。

「チクショ～～」

そこでは一人の高校生あたりの少年が悔し涙をうかべていた。

「この花菱烈火（はなびしれっか）、一生の不覚だ・・・・・・」

この烈火という少年は、仲間達とで昼飯を奢るかどうかで勝負したようだが、結局それに負けてしまい、奢ってもらうつもりが逆に奢らされる羽目になったらしい。

しかも、財布が空っぽだからこそ言い出したが故、負けたら負けたで銀行の残高を引き落とすことになっちゃったのである。

だがしかし、

『お～～！』
「ッ！キャアアアアア！！」

白ヤミー出現。
客たちは絶叫してしまう。

「ッ！」

その叫び声に気づいた烈火は、反射的に白ヤミーの前に立つ。

「おいテメー！なにもんだ！？」
『うぅぅぅ』

烈火が訊いてもなお、白ヤミーはうめくだけ。
烈火には一切興味を示すことなく、逃げ惑う人達を掻き分けて、金庫に侵入した。
勿論力技で金庫の扉をこじ開けてだ。

――ガツガツガツガツ！！――

そして大量の札束や金塊を食べ始めた。
それこそ、なんの遠慮も無く、ただただ純粋にだ。

「止まりやがれ！」

烈火は白ヤミーに組み付き、止めようとする。

『うぅぅおおお！！』

白ヤミーはそれに対し、烈火を振り払った。

素手で金庫をこじ開けられるほどの腕力なので、ケンカ・・・・・・戦闘なれしている烈火も向こう側に叩きつけられる。

「ぐはっ！」

そうこうしている間に、白ヤミーはどんどん欲望を喰らっていく。

――ガツガツガツガツ！！――

＊＊＊＊＊

鋼家に戻った二人は、買った着物を卓袱台の上においていた。

――チャリン、チャリン、チャリン――

「そろそろか。・・・七実、いくぜ」

「構いませんよ。楽しませてくださいね」

そうして二人はとんぼ返りするかの如く、再び草履を履いて外に走り出した。

＊＊＊＊＊

『うぅおおおおおおお！！！！』

一方こちらでは白ヤミーが満腹となり、ナナフシヤミーへと姿を変えていた。

いや、この表現には誤りがある。

正確に言うと、ナナフシヤミーが繭＝白ヤミーからでてきているのだ。

そして、役目を果たした白ヤミーは粉々に砕け散った。

「なんなんだ？あのデッケー虫は？」

烈火は今起こっていることがなに一つ理解できていなかった。

が、烈火は右手の指を摩擦させると、

「出でよ、炎！！」

右腕の手甲が一瞬だけ煌き、彼の右手からは赤き炎が放射され、ナナフシヤミーを包み込む。

これこそが烈火の一族だけの固有能力。

ほんの少しの摩擦熱と精神力を用いて、自由に自然発火現象を操る炎術士（えんじゅつし）！

『ヴェエエエエ！！』

しかし、成長体であるナナフシヤミーには微塵も効果がない。

「だったらこれだ！」

烈火は指で空中に字を書く。
書かれた字は、砕！

「竜之炎弐式（りゅうのえんにしき）・砕羽（さいは）！」

その瞬間、烈火の右腕から炎の刃が生えた。
烈火の宿る八匹の火竜の一体・砕羽の力だ。

「うらぁぁぁ！」

烈火は勢いに乗せた炎刃（えんじん）をナナフシヤミーに突きたてた。

『ヴェエエエ！ヴェエエエエエ！！』

――チャリン、チャリン、チャリン、チャリン――

ナナフシヤミーの巨体からはセルメダルが漏れ出していく。
ようするに多少は効いているのだ。

「よし、このまま！」

意気込む烈火。
しかし、

――バシッ！――

『ヴェアアアア！！』

「いってぇ！」

ナナフシヤミーはその細い体躯からは想像もしえないようなパワーで烈火を振り落とした。
しかも六本の脚のうち二本の足による攻撃つきだ。

烈火も堪らず頭を抑えて蹲ってしまう。
痛みは想像以上にあり、とても数十秒で引くようなものではなかった。

烈火が蹲っている間にナナフシヤミーは銀行の壁を食い破り、隣にあるビルに侵入していく。

――スタスタスタスタ――

そこへ、ナナフシヤミーの成長ぶりを見ているものが、歩いてこちらに近づいてくる。

「こいつは上々だな。たっぷりメダルを稼げそうだ」
「満腹になるには、建物を食い尽くす必要がありそうですね」

刃介と七実だった。
そして烈火は、二人の会話を聞き逃さなかった。

頭に出来たコブをおさえながら、二人に歩み寄る。

「おいあんたら、あの化物のこと知ってんのか？」
「・・・・・・・・・」
「答えろよ！」

烈火は刃介からヤミーについて問いただそうとする。
が、

『ヴェエエエエアア！！』
「ぎゃあああ！！」
「助けてくれぇぇ！！」
「化物よぉぉぉ！！」

そこへ聞こえてくるのは、助けを求める人々の声。

「・・・・・・・・・」
「刃介さん。いきなり黙り込んだりして、どうしたんです？」
「別に」

被害者達の悲鳴に耳を傾ける刃介に、七実が声をかけた。

「うわぁぁぁん！！」

そこへ一人の子供が涙で顔を濡らしながら走ってきた。

「どうしたチビっ子？」

烈火は問いただすのを中断し、子供に駆け寄る。

「ぐすッ・・・・・父さんと母さんが、まだ・・・まだ・・・」

どうやらこの子の両親はビルの上階で取り残されているらしい。

「・・・・・・・・・・・」

刃介はその子供を黙ってみていた。
そして・・・・・・。

＊＊＊＊＊

十五年前。
刃介は少しばかり、心の中の記憶にいた。
思い出されるのは、血の色と匂いと味しかしない、最悪の記憶。

「ここの・・・・・・押入れに隠れていて！」
「絶対に外に出ちゃダメだぞ！」

そういって自分達を押入れの中に隠したのは、刃介の両親だった。
鋼鉄郎（はがねてつろう）と鋼鏡子（はがねきょうこ）。

「こ、怖いよ・・・兄さん・・・」

妹の鋼金女（はがねかなめ）。

「・・・・・・・・・」

そして自分はなぜか、酷く冷静だった。
まるで無機物のように、一本の刀のようにだ。

――ブシュゥゥゥゥ！！――

「ヒィ・・・・・・！」

金女は怯えた声を短く出した。
なにかが一気に裂けて、なにかが盛大にふきだす音。

――ゴトリ・・・――

なにか二つの物体が、床に落ちる音。
その押入れの中から垣間見た光景を見た瞬間、刃介の記憶は少しとんでいた。

「白くて真っ赤だ」

それが記憶の途切れた先で、彼が覚えている言葉の一つだった。
鏡を見てみると、自分の髪の毛は白かった。染めたわけでも脱色したわけでもないのに白かった。
元の色を完全に喪失していた。

そして、彼の体と手は赤黒かった。
両手には子供の手には丁度いいサイズの小太刀が握られていて、その刃は勿論のこと、衣服さえも血で染まっていた。

「い、いや・・・・・・いや！イヤァァァアア！！」

そして、恐怖の余り家から飛び出し、以来十五年間音信不通の妹。

当然のことだ。
何しろ実の兄が、両親を殺した強盗を斬殺したのだから。

＊＊＊＊＊

回想終了。

「一丁、やるか」
「「・・・ッ」」

ここで刃介は戦うことを口にする。

「待つんじゃなかったんですか？」
「気が変わった。俺はただ、自分のやりたいようにやるだけだ。・・・いつだってな」
「そうですか。では私はなにも言いません」

七実がそういって、ブライドライバーと三枚のコアを渡す。

「小僧」
「なんだ？」
「手伝え」
「・・・・・あぁ！」

刃介の協力要請に、烈火は力強く答えた。

二人は一気にビルの上階を目指して走り出す。

「さて、私は外に出るとしましょうか」

そうして七実は、床に落ちていたメダルを拾い、屋外に出て行った。

＊＊＊＊＊

高層ビルの二十階

そこには三十歳前後の夫婦が、窓越しで見えるナナフシヤミーの巨体に恐れていた。

ガクガクブルブルと体を震え上がらせ、互いに抱き付き合っている。

『ヴェアアア！』

「きゃあああ！！」

「うあああああ！！」

ナナフシヤミーは一本の足を伸ばし、女性の体と男性の体を掴んだ。

二人自身は、自分の命運もここまでかと思った。

そして二人揃って思い描いたのは、

（（生きて、生き延びて！））

我が子のことだった。

「竜之炎壱式・崩！」

――ビュンビュン！！――

その時だ、いくつもの炎弾がナナフシヤミーに直撃し、思わずナナフシヤミーの足の力が弛んだ。

「虚刀流」

刃介は、昨日見たばかりの技を使う。

「蒲公英」

右腕をグリード化させての攻撃故に、ナナフシヤミーの足を刺し、夫婦を救出することに成功した。

「あ、ありがとうございます！！」

「なんと言えば良いのやら・・・！」

「いいっていいって！・・・それよりも、チビっ子が待ってるぜ！」

「「は、はい！！」」

夫婦は烈火に促されて、急いで最下階に降りていく。

「さーてと、あとはこいつをどうするかだな」

「奴は俺がやる」

刃介がブライドライバーを装着し、コアをセットしたとき、

『ヴェヴェヴェヴェアアアアアアア！！！！』

ナナフシヤミーがこのうえない怒りを示したのだ。
崩の炎弾と刃介の蒲公英が原因だろう。
ナナフシヤミーは他の足を突っ込み、烈火を掴んだ。
「うわッ！？」
そして外に放り投げたのだ。
だがこれで終わるほど、烈火は素直ではない。
「竜之炎参式（りゅうのえんさんしき）・焔群（ほむら）！」
空中に『焔』の字を書き、右腕に縄状の炎を巻きつけると、その炎を伸ばしてビルの柱に巻きつけてみせた。
「おーい、大丈夫かー？」
「あ、あぁ・・・なんとかな」
刃介も少しばかり心配になって烈火に声を掛ける。
そこで、刃介は一つ考えた。
「とぶぞ」
「・・・え？」
「跳ぶぞといった。正確には飛び降りるだが」
「ちょ、ちょっと待て・・・・・・えぇぇ！？」
烈火は心底驚いた。
目の前にいる男は、普通に考えたら自殺宣言をするに相応しいことをいっているのだから。

「んじゃ、俺はいくぞ」

そう言って、刃介は本当に飛び降りた。

「お、おい！！」

烈火は必死に手を伸ばした。

無駄で無謀とわかりながらも。

しかし、その無駄と無謀は別な意味で成立した。

「変身！」

≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＥＮＢＡ≫

≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！ＲＩＯＴＥ！ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！≫

魔化不可思議な変身ソングが流れ、終わったときには、

一人の男は、血錆色の凶悪な戦士となっていた。

――ガリガリガリ！！――

落下する速度を魔刀『釵』の刃をビルの壁に突き刺すことで沈静化させていったのだ。

通常の刀では到底できない手法である。

「随分無茶なことをしますね」

地上にまで降りると、呆れ顔の七実にそんなことを言われる。

「なーに、訊きたいことと、貸して欲しいものがあったのさ」
「なんです？」
「このブライの能力についてだ」
「影を操る能力。腕を飛ばす機能」
七実はブライ・リオテコンボの固有能力と、共通機能を口にする。
「成る程、わかった。・・・あ、それから、他のメダルを頼む」
「いいでしょう」
七実は二枚の緑色のメダルを渡した。
――ブゥゥゥウウゥゥゥゥゥゥゥン！！――
その時、バイクのエンジン音が聞こえた。
振り返ってみると、向こう側からは一人の人物がバイクに乗ってこちらに近づいてくる。
白いライダースーツに長身かつ細身でがっちりとした体格。
ヘルメットをとってみると、雪の色をした髪の毛と純朴そうな素顔をみせてくれた。
そう、凍空吹雪だ。
そして彼が乗ってきたバイクはライドベンダーではなく、黒を基調として血錆色のラインが複雑に走るバイクである。
吹雪はバイクの荷台部分から一つの箱を取り出してブライと七実に近づく。
「俺っちの雇い主からの、贈りものっす」

「贈り物？」

ブライに箱を手渡した吹雪は、箱の蓋を開けた。

「コレは・・・？」

「なんですこれ？」

箱の中にあったのは、一丁の大型の銃だった。

ブライは箱を投げ捨てて銃を手にとって見せる。

「そいつの名は”メダマガン”。ブライ専用の銃型ウェポンっすよ」

「俺の？」

「そうっす。ついでにこのバイク、”シェードフォーゼ”も譲るっす。好きに使ってください。セルメダルを投入すれば、起動するんで」

ブライは吹雪の説明に少し胡散臭いものを感じたが、先ほどナナフシャミーに蒲公英を決めた際に得た数枚のセルのうち一枚をシェードフォーゼのメダル投入口に入れてみせる。

≪ＭＯＢＩＬＥ　ＭＯＤＥ≫

すると、シェードフォーゼは圧倒言う間に変形していき、ロボットとなった。

シャードフォーゼ・モビルモード。

「スッゲーじゃねぇか」

ブライは素直に感心した。

『～～～～～～』
「乗れってか？」
すると、シェードフォーゼはブライに対し、自分の背中に乗るよう、ボディランゲージをして伝えた。
――ジュボォォォォオオ！！――
シェードフォーゼの脚部に搭載されていた”デザイアジェットエンジン”が作動し始め、ブライを乗せたまま、空中を飛んでいく。

＊＊＊＊＊

ビルの屋上。

「喰らえ虫野郎！！」

烈火はナナフシヤミーを足止めしていた。
今の自分の力では、この化物を足止めするのがやっとだということは、既に承知している。

（こんな時に、あのエロジジィは・・・！）

もっとも、火竜のなかで最も威力のあるアレを使えば話は別だろうが、ホイホイと使えるようなものでもないが故、他の火竜の力を使っていた。

だが、その化物について知識があり、奇妙な歌と共に変身した刃介ならばと思ってのことだった。

「よく踏ん張ったな小僧！」

そこへ聞こえてくるはブライの声。

「後は俺に任せろ！」

シェードフォーゼが屋上の直上にまでくると、

「よし、バイクに戻れ」

『・・・・・・・・・』

音声入力式ではないのか、シェードフォーゼは反応しない。

「ん？・・・・・・あ、スイッチか」

≪ＢＡＳＩＣ　ＭＯＤＥ≫

首部分にあったスイッチを押すと、ガシャンガシャンという音を立てて、バイク形態のベーシックモードに戻った。

床から2・3メートルあたりは離れていたので、ブライはともかくシェードフォーゼにとっては荒っぽい着地になった。

「んじゃ、早速メダルチェンジといくか」

ブライはメダルを換装し、スキャンした。

≪ＲＹＵ・ＨＡＣＨＩ・ＩＮＡＧＯ≫

腕は蜂の毒針＝虫刀（ちゅうとう）『釘（くぎ）』を装備したもの、脚はイナゴのそれへと変わったリュウハチナへと変わる。

「脚と、腕が・・・！？」

烈火もブライのコンボチェンジに驚いた。

もっとも刃介はコンボチェンジをメダルチェンジと呼んでいるようだが。

「あらよ！」

――バシュン！バシュン！――

両腕の虫刀『釘』から発射された二発の巨大な毒針。

射出して以降も、新しいものが生えてくる。だから鳥刀『鏃』ほどではないが連射が利いた。

嫌な音を立てて刺さる虫刀の針に、ナナフシヤミーの体は侵食されていく。

『ヴェ、ヴェア、ヴェエエエ！！』

ナナフシヤミーの体勢は今にも倒れかねない不安定なものになっていく。

さらにはナナフシヤミーが立っているのは屋上の際どい部分だ。うっかり脚を踏み外せば確実に落ちてしまう。

そこへ、

「落ちろ」

――ザスッ！――

ブライは無情にも虫刀『釘』の毒針が光る両腕によるダブルパンチを、ナナフシヤミーにくらわせた。
結果としては当然、ナナフシヤミーは地上に落下していった。

「よし」

ブライはそれを見ると、ベルトの左サイドにあるオーメダルネストから一枚のセルをとりだし、横に倒れているシェードフォーゼに投入した。

≪ＭＯＢＩＬＥ　ＭＯＤＥ≫

たちまちロボット形態のモビルモードとなる。

「先に降りてろ。んで、奴の足止めをしてろ」
『・・・・・・（コク』

シェードフォーゼはその命令をきき、デザイアジェットエンジンを起動させて地上に軟着陸した。

「おい、俺たちはどうすんだ？」
「決まってんだろ」

ブライはメダルを換装し、スキャンする。

≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！ＲＩＯＴＥ！ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！≫

リオテコンボ。
ブライはビルの屋上の際どい部分に足をかける。
そして、飛び降りた。

「ッ！！」

烈火は勿論驚く。
二度も飛び降りなんてする人物は早々いないからだ。
つーか絶対にやらない。

「お前も来い小僧」

――ガシッ！――

「・・・・・あれ？」

掴まれた。飛び降りたはずのブライの腕に。
少し視線を変えればその疑問は一瞬で解決する。

一言でいうと、ブライの右腕の肘から先の部分が、二重螺旋型の鎖・エナジーチェインと呼ばれるもので繋がれながら飛んで来たのだ。
そして”チェインハンド”のエナジーチェインは勢い良く巻き戻っていく。
勿論手に掴まれた烈火もそれに強制同行させられた。

「んじゃ、もう一丁！」

ブライは烈火が自分の真上にきているのを確認して、左手の指をパチンと鳴らした。
するとどうだろうか？
周囲にある影という影が形を変え、姿を変え、位置を変え、ブライと烈火が着地するポイントに巨大なトランポリンのような状態で形を一時的に固定させたのだ。
これがリオテコンボの固有能力・”黒影操作（こくえいそうさ）”である。

「あ、あんた、規格外すぎねぇか・・・？」

烈火も常人離れした能力を有するが、ブライの力はそれ以上だ。
着地が成功しても生きているという心地がしない。

「あ、そう。・・・シェードフォーゼ、戻って来い！」
『・・・・・・・・』

ブライの声をきき、シェードフォーゼはビームソードに変形させた右腕と、連射波動砲に変形させた左腕を元に戻し、主人のもとに急いだ。

「戻ってもらうぜ」
≪ＢＡＳＩＣ　ＭＯＤＥ≫
バイク形態のベーシックモードに戻し、ブライはそれに跨った。
「免許あんのか？」

「免許はある。バイクは今迄持ってなかったがな」

つまり、教習所でバイクの免許をとっていこうはバイクに乗っていないということだろう。

「そこで待ってろ」

そうしてブライはさっきから全く使っていなかったメダマガンのマガングリップを握った。。

「こいつにもメダルが要りそうだな。数は三枚ってところか」

ブライはオーメダルネストからさらに三枚のセルを取り出して、メダマガンの硬貨投入口（メダルインジェクション）にセルを三枚いれた。

そしてメダレバーを引き、三枚のメダルが銃身のクリスタルユニットに装填される。

――ブゥゥン！ブゥゥゥゥゥン！！――

ブライはエンジンを吹かせてシェードフォーゼを発進させ、ナナフシヤミーの巨体の真下を駆ける。

勿論メダマガンによる銃撃も行っているので、セルメダルが幾度ともなく漏れ出していた。

「これで締めだぜ！」

ローグスキャナーをメダマガンのプラチナターミナルに滑らせ、クリスタルユニット三枚をスキャンする。

≪ＴＲＩＰＬＥ・ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

トリプルスキャニングチャージが行われる頃には、ブライとシェードフォーゼはナナフシヤミーの巨体を駆け抜いていた。そして、銃口（ノズル）（マガン）を敵に定めた。

「ぶちまけろ！」

――バンッ！――

引き金を引いた瞬間、ナナフシヤミーの体には風穴があいた。

というより、ナナフシヤミーの腹部周辺の空間が破砕されていた。

そしてナナフシヤミーんも体以外の部分の破砕された空間が修復されると、

――ドガァァァアアン！！！――

盛大な音を立てて、ナナフシヤミーは大爆発し、数百枚のセルメダルが雨のように降り注いだ。

これこそがメダマガンによる必殺銃撃・ブライクラッカーの威力！

「こりゃ凄いな」

「全部拾うの大変ですね」

「・・・・・・・・・・・・」

刃介と七実は能天気に言っていたが、烈火は二の句がつげられなか

った。
金属音を立てて地面におちていくメダル。

「・・・・・・予測を越えたっすね」

吹雪は戦いの一部始終を見届けると、足元に落ちていた十数枚のセルを拾い、とある自販機に近づき、メダルを投入する。

――ポチッ――

そして黒いボタンを押すと、自販機はあの黒いバイク・ライドベンダーに変形した。
黒いヘルメットを被った吹雪はライドベンダーに乗って、走り去った。

（あの女と同じ空気吸うのは、本当に不愉快至極極まるっすよ）

ヘルメットごしに、七実を睨みつけてから。

＊＊＊＊＊

とある廃屋。
そこでリュウギョクは、

――斬ッ！！――

左腕の鉤爪で、廃屋の壁を切り裂いていた。

『まさか、虚刀流・・・・・・奴の血族までもが・・・』

リュウギョクは苛立つように喋る。

七実の存在を知ったことから、今後の展開の悪さを予感しているのだろう。

『むやみにメダルを取り返すのは無理か・・・・・・なら』

リュウギョクは決意した。

『またつくるしかないな、コアメダル』

＊＊＊＊＊

トライブ財閥。

「実際のところ、ブライが使うとこんな凄い威力になっちゃうわけね」

シルフィードは戦場のあちらこちらに仕掛けていたバッタカンドロイドが得てきた映像を見て、感動していた。特にメダマガンによるブライクラッカーが印象的らしい。

そして今は彼女一人っきりの部屋で、シルフィードはひっそりと口

を開くのだ。

「精々楽しませて頂戴よ？虚刀『鑢』ちゃん、我刀『鋼』くん」

説明とヤミーと空間破砕（後書き）

次回、仮面ライダーブライ

欲望と火影と裏麗

仮面ライダーブライ
鋼刃介が三枚のコアメダルとブライドライバーを用いて変身する戦士。基本形態は、妖魔系のリオテコンボ。８００年前においてはオーズと共にグリードと戦ったことがある存在のようだが、戦闘能力はオーズのそれを凌駕する。しかし、その半面で代償は大きく、変身者の肉体をグリード化させていく。七実が十五枚のコアメダルを持って来たことで、現時点においては六系統のコンボに変身可能である。

リオテコンボ
身長：２００ｃｍ　体重：９０ｋｇ　キック力：１６トン　パンチ力：１０トン
ジャンプ力：１２０ｍ　走力：１００ｍを２秒　固有能力：黒影操作　カラー：血錆色
必殺技：リオテキック&ａｍｐ;リオテスラッシュ　属性：闇

リュウヘッド

複眼の色は漆黒。ブライの感覚能力を全体的に強化し、口からは”龍之息吹”を吐き出す。

オニアーム
前腕部の篭手を鞘とした二振りの鍔なしの日本刀、魔刀『釦』を装備する。魔刀『釦』は、硬丈さは絶刀『鉋』に匹敵し、鋭利さは斬刀『鈍』に匹敵する。

テンバレッグ
ブライの脚力を極限まで高める上、それに見合った骨格と筋肉を形成する。特に走力が発達している。

ツール
ブライドライバー
ブライの変身ベルト。コアメダルによる変身や必殺技の発動手順はオーズドライバーと同等。ベルトの部分は黒で、バックルは銀色に金色のフォースドライブが刻まれている。最初は石版だったが、使用するにあたって封印が解けて本来の形状となった。ローグスキャナーとローグカテドラルとオーメダルネストで一式を為している。

メダマガン
ブライ専用の銃型武器。全コンボ共通で使用される。セルメダルを三枚投入してスキャンすることで、空間ごと標的を撃ち抜いて空間破砕を引き起こすブライクラッカーを発動する（破砕した空間は元通りになる）。トライブ財閥製のメダルウェポン。普段はシェードフォーゼの収納スペースに入れられている。

チェインハンド
ブライの両腕に備わっている機能で、全コンボ共通で使用される。
両肘から先をエナジーチェインで繋いだ状態で飛ばし、中距離・遠距離の目標を掴んだり攻撃したりできる。

シェードフォーゼ
トライブ財閥がブライ専用ビークルとして開発したスーパーバイク。
カラーは黒を基調に血錆色の複雑なラインが刻まれている。最高時速は５００ｋｍ。
セルメダルを投入することでバイク形態のベーシックモードからロボット形態のモビルモードに変形する。投入されたセルメダルが一定時間を越えて消滅すると強制的にベーシックモードに戻る。ベーシックモードでの燃料はガソリンだが、モビルモードではセルメダルに切り替わる、一枚のセルメダルにつき三十分ほど変形していられる。
モビルモードでは右腕がビームソード、左腕が連射波動砲に変形する。
両脚部分にはデザイアジェットエンジンが組み込まれているので飛行が可能。

モビルモード
身長：２３０ｃｍ　体重：３００ｋｇ　パンチ力：２０トン　キック力：１０トン

欲望と火影と裏麗（前書き）

仮面ライダーブライ！
前回の三つの出来事は！

一つ！七実がオーメダルに関する情報を話す！
二つ！グリードの一人リュウギョクが、新たなヤミーを誕生させる！
三つ！ブライは新しい力を手に入れた！

欲望と火影と裏麗

ナナフシヤミー戦から一週間後。
数百枚に及ぶセルメダルと、新装備を手に入れたブライ。
七実も漸くこちらの生活に慣れてきた頃、刃介は一つ疑問に思うことがあった。

「んー」
「どうしたんです？」
「妙だな」
「妙、とは？」

刃介は新聞やテレビを見ながらそういった。
確かに、妙なことはある。

「此間の戦いが全然話題になっていない。あれだけの被害が出た上に目撃者も大勢いたんだぜ。普通なら今でも新聞やニュースの一面を飾ってるはずだろ」

刃介の言った言葉は決して間違っては居なかった。

「誰かが情報操作したってことでしょうか？」
「だろうな。大方メダマガンを持ってきた体育会系野郎の雇い主あたりが怪しいな」

刃介は断言する。

「ま、考えても仕方ない。その内向こうから接触してくるだろうしな」

刃介は予測する。

「七実、飯食ったばかりで悪いが、残りの技のほうを見取らせてくれねーか？」

「いいでしょう。今日で虚刀流の技は全部見せられるでしょうし」

そうして二人は道場に向った。

＊＊＊＊＊

トライブ財閥。

「ホント今回は色んな人脈・金・権力を振りかざすことになっちゃったわね」

『いやいや！ブライの戦闘データを得られたというのなら、このくらいは安いものだよ！』

シルフィードは誰かとモニタリングし合いながら話している。

それゆえか、服装もきちんとした女物のビジネス・スーツになっていた。

「今回は力添えのほう、ありがとね♪」

『気にすることはない。我々は同志じゃないか！』

モニターに映っているのは、自分の机でケーキを作っている男だっ

た。

「・・・・・そうね。今度も宜しくお願いするわ」

『任せたまえ！』

「それじゃ、また何かあったら話し合いましょう・・・・・・鴻上光生（こうがみこうせい）会長」

『あぁ。ではまた会おうルナイト・ブラッドレイン・シルフィード君』

そうしてモニタリングの会話は終了した。

「同志・・・ねぇ？」

シルフィードは右手に血錆色をしたジュース缶・・・・・・カンドロイドを持っていた。

＊＊＊＊＊

我刀流道場。

「虚刀流――『七花八裂（しちかはちれつ）』」

虚刀流に伝わる七つの必殺奥義を連続で繰り出し、敵を八つ裂きにする奥義。

それは一人であろうと、七人であろうと有効な技である。

七実の使ったそれは、あっと言う間に七枚の分厚い木材を全て破壊していた。

「おー、中々便利なもんだな」

「えぇ。一つずつ奥義を見せるのは面倒だったので、思い切って七花八裂をお見せ致しました」

七実は汗ひとつかくこともなく、そういった。

「奥義でない技も二回ずつ見せてもらったし、後は奥義をもう一回で済むな」

「それでは今度は、改良したものをお見せします」

七実は再び構えない構え、自然体そのものともいえる零の構え『無為(むい)転変(ちへん)』を行う。

「虚刀流最終奥義――『七花八裂（改）』」

＊＊＊＊＊

片やその頃・・・・・・。

「・・・・・時は満ちた。我が此の世の全ての頂点となる「時」がな・・・・・・」

前々回において、リュウギョクにヤミー生産の為に利用された男・

森光蘭は、これでもかというほどに偉ぶった態度で椅子に座っていた。
その隣には長髪で黒衣を纏った十代後半あたりの美少女と、額にはバンダナで顔に包帯を巻いた男が立っている。
そして前方には五人の男女が立っていた。

「８００年前に存在し、封印されたグリードが現代に甦った今、遂行すべきことはより早急に進めなければならない」

やはり森は、グリードのことをある程度知っているようだ。

「第一に・・・”彼の地”に眠る最強の魔導具、天堂地獄!!　私はこれを煉華(れんげ)と共に探しに行く」

煉華とは黒衣の少女のことだ。
実は彼女はクローンであったりする。

「第二に・・・行方のわからぬ紅麗(くれい)の生死を確かめること――捜せ!!死体を見るまでは安心できん!」

紅麗とは烈火の異母兄弟で、彼と同じ炎術士の力を持つ青年だ。
とある理由から森の養子になっていたが、煉華の誕生によって用済み扱いされ、彼女に殺されかけたが、寸でのところで紅麗の部下・音遠(ねおん)の尽力によって、逃げられてしまったのだ。

「第三!火影、治癒の少女の監視だ」

第三に挙げられた少女については追々説明する。

「ヒヒヒ・・・紅麗が万が一生きていたところで何もできはしないがな。奴の「麗(うるは)」にはもう誰もいない」

森は紅麗をあざ笑う。

「元、十神衆(じゅっしんしゅう)『螺閃(らせん)』、今は私、森光蘭率いる「裏麗(うらうるは)」の首領」

森は自分の前方中心にいる青年をみた。
その青年は、表情はおろか感情さえも完全喪失したかのように無表情だった。

「螺閃、君は賢いぞ・・・・・紅麗に義理立てしても、命を落すだけだ。火影をマークしろ!隙あらば一人ずつ殺してゆけ!」

この時、森はまだ気づかなかった。
裏麗のメンバーのうち数人がイレギュラー要素と遭遇することに。

＊＊＊＊＊

森との話が終了し、裏麗のメンバーはこぞって集まった。

「さて!とりあえず、ここには五人いる訳だけど。・・・まァたクセの強い奴が揃ったわねェ」

グラサンをかけ、髪をポニーテールにした女・鬼凛(きりん)はそういった。

「双角斎（そうかくさい）・・・」

全身を黒マントで隠し、大きな壺を背負った男。

「神威（カムイ）・・・」

モヒカンヘアーで、眼にバイザー的なものを装着した男。

「牙王（がおう）・・・」

恰幅のよい長髪の男。

「そして・・・我等を束ねる――――螺閃！！」

「人の事など言えるのか？おまえこそクセだらけではないかよ、鬼凛！」

双角斎が笑い混じりに言う。

「他の裏麗はなにやってんだ。葵とか・・・ヤベえ奴はまだいるだろ？」

「紅麗を捜したり、裏切り者捜したりさ」

牙王の疑問に鬼凛が答える。

「裏切り者？・・・ああ、抜け忍三人衆か」

そんな不名誉なことを言われている人物の名は、餓紗喰（ガシャクラ）・月白（つきしろ）・火車丸（かしゃまる）である。

「あんなのほっといていいじゃない。どーーせ、裏麗の中でも端っこな奴等よ？関係ないわ」

神威は女口調でいった。

というか、こいつ絶対オカマだ。

「とりあえずてめェらのターゲットは火影だ！そろそろ行動に移せ！！いつまで遊んでやがるんだ！！」

バンダナと包帯を巻いた永井木蓮（ながいもくれん）がそう怒鳴ると、

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

螺閃はただなにもせず、死んだような眼つきで木蓮を見出した。

「ヒッ！！？な、なんだよ！！」

木蓮は植物そのものとなった左腕をだして警戒する。

というか怯えているのだ。

「口の利き方には気をつけなよ木蓮。君に言われんでも”時は来た”のさ」

鬼凛は木蓮に注意し、代弁するかのごとく喋る。

――フッ・・・――

そして木蓮を残し、五人は一瞬で姿を消した。

＊＊＊＊＊

時刻はもう既に夜。
刃介と七実はというと・・・。

「ご馳走様」
「お粗末様でした」

能天気に夕食を済ませていた。
しかも、七実が作った夕食だ。因みに和食である。

「お前ホント、なんでもできるんだな」
「こんなの知識さえあれば大抵の人ができますよ」

七実は山菜や獣肉以外の料理スキルを身につけた。

『リュアアア！！』
『ルァァアア！！』

奇妙で奇怪な機械チックな鳴き声がした。
しかも二つ。

「窓の外になんかいるぞ」
「血錆色の・・・・・・龍？」

そう、窓の外でやかましい鳴き声をだしていたのは龍を模した二体のロボット・リュウカンドロイドだった。

刃介が窓に近づくと、リュウカンドロイドは遠くにいくかと思われたが、雑貨店の入り口近くで待っていた。

「ついてこいってことか」
「どうします？」
「行くしかねーだろ」

刃介は迷わなかった。

「でも二体とも別方向にいるんですけど、別行動でいいですか」
「勿論だ」

そうして、この二人はさらに歴史の裏に関わっていくのだ。

＊＊＊＊＊

そこは不良達のたまり場となっていた廃屋。
そこで今、一人のモヒカン頭の巨漢学生がピンチに陥っていた。

「オイオイ。石島（いしじま）・・・土門（どもん）っていったけか？本気で来いよォあぁ？」

腐乱犬（フランケン）と渾名されるモヒカン学生・石島土門は、裏麗の一人である牙王に追い込まれていた。
牙王は口にチョコボールを放り込んでいる。

「何者だ、てめェ！！」

土門は仮にも裏殺陣武闘会決勝戦で、優勝候補チーム”麗（紅）”の呪（ノロイ）という魔導具そのものともいえる相手に対し、強靭な精神力で打ち破った男だ。
平凡な一般人が自分を圧倒できるわけがないというのは重々に承知していた。

「牙王。てめえにゃちょっとした縁のあるモンだ」
「一体どんな縁なのですか？」
「そりゃおまえ・・・・・・」

牙王は周囲を見渡した。自分と土門しかいないこの空間で若い女の声がハッキリと自分に質問してきたのだから。

「オイ誰だ？出て来い！」

牙王は声を荒げて叫ぶ。

（だ、誰なんだ？）

土門も気になってきた。
この状況で登場しうる人物を。

ストストといった重みのない足音が暗闇のなかから近づいてくる。

「こんばんわ。鑢七実と申します」

そして、鑢家の歴史上において最強過ぎる最強の天才が現れた。

「女の子・・・？」

「はッ！なんのようだ小娘！？」

牙王は荒っぽく聞いた。

「ちょっとお尋ねしたいことがあったんですけど、この状況を見る限り必要なさそうなので止しておきます」

「だから何の用だってんだよ！？どいつの回し者だ！？」

「質問は一度ずつでお願いします」

七実はあくまでも冷静な態度を決して崩さない。

「フン！答えるきが無いってんなら、ぶち殺す！！」

牙王は自分の豪腕を七実の細い体躯に振り下ろす。

「危ねぇ嬢ちゃん！！」

土門は必死に叫んだ。が、その必要はなかった。

「虚刀流『雛罌粟（ひなげし）』」

七実は一瞬で牙王の懐に入り、手刀を下から上にはらうことで――

――ブシュッッ！――

「ぶはッ！」

牙王の腹を切り裂いた。

しかし、出血量が少ないところを見ると、寸前でかわしたようだ。

「こいつ・・・！もう容赦しねぇぞオイ！」

牙王は一個の玉が嵌め込まれた一本の長い棒を取り出す。

「こいつはな、魔導具『石棍』といってな、周囲にある石や岩を自由に操れる。使いようによってはこうもなるんだぜ！！」

牙王は自慢げにいうと、周囲にある石という石を全て身に纏い始め、首から下を全てを石の甲冑で覆い尽くしたのだ。

「どうだ！これなら幾らてめェの手刀が鋭くとも、意味はないんだよ！」

自分の勝利を確信する牙王。

だが、甘い。虚刀流の前では、鎧など意味をなさないからだ。

「虚刀流四の奥義」

七実は再び牙王へと接近。

「柳緑花紅（りゅうりょくかこう）」

前触れなく繰り出された七実の拳。
それは牙王の鎧に直撃し、周囲には衝撃が走る。

「がッ・・・!!て、てめェ、小娘が、なにを・・・!」

牙王は口から吐血し、ひざまづく。
そしてダメージゆえか、石棍による石の鎧を解除する。

「これは鎧通しといわれるもので、拳が命中した物質の内部に全ての衝撃を伝導させます」
「くうっ!」

牙王は心から屈辱を感じた。
パッとでてきた素性不明の女にここまで圧制されているのだから。

「す、すんげぇ・・・」

土門は七実の実力に素直に感心した。
すると、

「なんだと!!?「退け」とはどういうことだ鬼凛!?こんな恰好悪いざまのまま帰れるか!!」

突然牙王が叫びだす。
まるで通信をしているかのようだ。

「!!」

が、なにかを伝えられたのか、顔色が激変する。

「わ、わかったよ・・・言うとおりにする・・・・・・そう螺閃に伝えてくれ・・・」

牙王はそういうと、

「石島土門！鑢七実！次こそは死を！！」

其の場から消え去った。

「はぁ、疲れた」

七実は退屈そうに呟いた。

「おい嬢ちゃん！」
「はい？」
「あんた何者だ？」

土門は至極もっともな質問をした。

「・・・・・次にお会いしたときに、お話いたします」

そう返して、七実も消えた。

＊＊＊＊＊

とある高校の校舎の屋上。

前回に登場した炎の少年、花菱烈火は自分が主と認めた佐古下柳（さこしたやなぎ）の絵本作りに付き合っていたら帰りが夜になっていて、いざ一緒に帰ろうと思ったら、裏麗の螺閃と鬼凛に遭遇して現在絶賛交戦中である。

「・・・・・・・・・・・・」

「なんとか言え固羅！！」

＜無理よ・・・＞

先ほどから無口であり続ける螺閃に烈火が怒鳴ると、みなの頭の中に声がした。

＜螺閃はある事によって・・・表情と言葉を失ってしまった人だから・・・・・・＞

それは紛れも無く鬼凛の声のはずだ。

＜だからって彼は意思も伝える事のできない、孤独な人間じゃないわ・・・＞

「なに・・・この声・・・？頭に直に聞こえる・・・・・・」

柳も困惑に困惑を重ねる。

＜彼には彼の理解者が存在する。彼の口となり、表情となり、彼の心を代弁する者・・・＞

そこで心の声は途切れる。

「「心眼」の、鬼凛」

鬼凛は右腕に砲鬼神（ほうきしん）という魔道具を装着した状態で、螺閃に抱きついていた。

「この指輪型魔導具「心眼」で、私は人の心を読み、心を読ませることができる。烈火君は途中で気付いたみたいだけど」

一旦鬼凛は区切る。

「「頭が悪い」って前情報の割には結構鋭いじゃん！！あっはっはっは♪」

「誰だぁ！？言った奴は！！」

戦闘中であるにも関わらず、雰囲気がコミカルになった。

だが直ぐに烈火は雰囲気をシリアスに引き戻す。

「・・・・・下がってな、姫。固羅、鬼凛とかいったなぁ？」

ここで烈火は宣言する。

「別に俺は追い込まれて屋上に出た訳じゃねぇぞ。校内で一番広い場所――――」

烈火は右腕から炎を出して、力強くいうのだ。

「ここなら戦えるからだ！」

「そいつは良い心がけだな」

「「「ッッ！！」」」

「この声、確か・・・・・」

突然聞こえた男の声。
耳を澄ませば、屋上へとつながる階段をのぼってくる足音がしてくる。

――ギィィ・・・――

そして、男はトビラを開けて、月光の元に自分の姿をさらした。

「貴方、誰？」
「俺か？俺は「あん時の変身ヒーロー！！」・・・・・・（怒）」

折角カッコよく決めようとしたところに、烈火の叫びが妨害した。

「烈火君・・・あの人知ってるの？」
「知ってるもなにもねぇぜ！トンデモなく強ぇぞ！」
「お前らなぁ、自分らが置かれてる状況わかってるか？」

刃介はすこしコメカミを押さえながら二人にいった。

「まあいいや、メンドくせぇし。・・・自己紹介はあとだな」
「いきなり乱入しといて随分余裕ぶっこいてくれてるね」
「負ける要素がないからな」
「そんなの強がりだよ。今から君の心を覗け――ッッ！！」

その瞬間、鬼凛は気持ち悪そうに口を抑えた。

「な、なに今の・・・！？ドス黒くて、不気味で・・・グロテスクなものが・・・本心を覆い隠して・・・・・・」
「もしかしたら、それって俺の欲望かもな」

「・・・欲望・・・」

鬼凛は心眼でなんどとなく人の心を覗いてきた。
しかし、本心を覆い隠すというだけでも稀有だというのに、そればかりかこちらの気分を害させるほどの強烈な欲望を持つ人間など聞いたことすらなかった。

「変身するまでもないか」

刃介はナナフシヤミーを倒して以降は、ブライドライバーとリュウコア・オニコア・テンバコアを常時携帯していたが、今は使わずにすみそうだ。

「とっとと、済ませるかな」

刃介は零の構え『無花果』から一気に駆け出し、まずは鬼凛に向った。

「虚刀流五の奥義『飛花落葉（ひからくよう）』！」

合わせた両手を花が開花するように突き出して掌底を繰り出した。
この技は鎧崩しの一種で、柳緑花紅とは真逆の奥義である。
要するに、衝撃云々を外側にのみ伝導させる技で、虚刀流奥義のなかで足止めの要素を持った奥義だ。

「うあッ！！」

勿論、多少手加減されているとはいえ、刃介は右腕をグリード化させてこれを使っている。
致命傷とはいかなくとも、ダメージも相当なものだ。

「さて、あとはあの無口野郎潰して洗い浚い吐かせるか」
拳をゴキゴキと鳴らして、螺閃に近づく刃介。
が、
――瞬ッ！――
――ガッ！――
螺閃は一瞬で刃介の背後をとって後頭部を殴ろうとするも、刃介はいとも簡単に受け止める。
そして、投げ飛ばすことで、螺閃をフェンスに叩きつける。
「えっと、お前の名前は確か・・・？」
＜『自己紹介するよ、拳法家君。私の名は裏麗の螺閃だ』＞
螺閃の心の声が聞こえる。
流し目で見てみると、鬼凛が少しずつだた立ち上がってきているのがわかる。
「『君を消すのは冗談抜きで骨が折れそうだ。なので次回は万全の状態で君を待ち受けることにする。君との戦いに相応しい場所においてね』＞
螺閃の心を鬼凛が口にしていく。
「一応訊くが、どこでだ？」
「『じきにわかる。ここまで関わった以上、自ずと君もその場所に来ることになる』」

「・・・・・以上、螺閃の言葉を私、鬼凛が代弁しました♪」

喋り終わる頃には、鬼凛も大分回復していた。

＜あなた達が来なくてはいけない場所・・・・・ヒントは・・・＞

心眼による声が一度途切れた。

「「天堂地獄」！！烈火君のママならきっと意味わかるよ。ぢゃね♪」

そうして鬼凛も螺閃も立ち去っていく。

＜また会える日を楽しみにしてるわ――火影に、拳法家さん！＞

そうして、鬼凛の心音が聞こえ終わると、二人の気配が完全に消えた。

「いや、拳法家じゃなくて、戦士なんだけどな・・・・・」

刃介は間違った認識をされて、少し呆れ顔をしていた。

そして、烈火と柳のほうに顔を向けた。

「そういえば、まだ自己紹介がまだだったな」

「あ、はい、そうですね。・・・私は佐古下柳っていいます！」

「火影忍軍七代目頭首・花菱烈火！」

「俺は我刀流二十代目当主の・・・鋼刃介だ」

こうして、火影忍軍と我刀流は、歴史の中で交わることとなったのだ。

＊＊＊＊＊

同時刻。
森光蘭と煉華の前に一人の人物が現れていた。

「誰だ貴様？」
「ふふふ、この声に聞き覚えはないか？」
「ッ・・・ま、まさか！？」

初めて会ったときは異形だったが故に気付ける要素など皆無だった。
森と煉華の前にいるのは、全身に鎖を巻き、袖を切り落とした覆面すらない忍び装束を着込んだ女忍者。・・・・・リュウギョクだった。

「パパ、この女誰？」
「お前は黙ってなさい！！」
「うぅ・・・・・・」

森に怒鳴られ、煉華はシュンとなる。
それを尻目にリュウギョクは怪人態となってこういって見せたのだ。

『永遠の欲望を秘めし者、森光蘭よ。私と手を組んでみないか？』

それを耳にした森は、表情こそは恐怖で染められていたが、心の中

では笑顔になっていた。

＊＊＊＊＊

トライブ財閥会長室。

「会長。例の物、鋼刃介の家に送っておきました」
「ありがとう」

バットの報告に、シルフィードは素直に感謝する。

「貴女が開発したこのリュウカンドロイドも中々良い出来ね」
「それはどうも」
「そろそろ我々も、彼に本格的な接触が必要ね」

シルフィードはカンドロイドを弄り回しながらそういった。

「あのゲス野郎とグリードとの戦いには、我々のメダルシステムが役に立つことは実証済みですもの」
「だからこそ、あれを彼にというわけですね。にしてもおまけが多すぎるのではないですか？」
「契約で得られる物に比べれば安いものよ」

そしてここにおいても、着々と進行するものがあった。

＊＊＊＊＊

翌日の朝。
鋼家にはあるものが届いていた。
それは最新式のスマートフォン二台と最新式のノートパソコンが二台に、綺麗に装飾された箱だった。

「一体誰がこんなものを？」
「身に覚えが全くありませんね」

二人はそういうも、疑問なんてものは箱を開けた瞬間に解けた。

「これって、昨晩の龍だよな？」
「多分そうだと思いますよ」

中に入っていたのはリュウカンドロイド・1ダースだった。
箱の中にはそれだけでなく、一通の手紙があった。
開けてみると、それは実際には手紙ではなかった。

「招待状？トライブ財閥会長、ルナイト・ブラッドレイン・シルフィードからだってよ」
「行ってみたらどうですか？花菱くんのほうには私が代理として行きますので」

実は昨晩、烈火とはきちんと話し合うため、『火影隠れ屋敷』の場所を教えてもらっていたのだ。

「・・・・・・あぁ、頼む」

こうして、烈火たちの所へは七実、トライブ財閥へは刃介が行く事となったのである。

＊＊＊＊＊

――ブゥゥゥゥゥウウウン！！――

刃介はシェードフォーゼに乗って、トライブ財閥の本社ビルの前にやってきた。

みちのく人は、刃介の異色な身形に好奇の視線でジロジロ見回していたが、刃介はそれを殺気を飛ばすことで散らした。

そして受付嬢に招待状を見せて会長と会わせるようにいうと、

「ッッ！は、はい！ただいま直ぐに！」

なんか凄い慌てた様子でパソコンを打ち込み始めた。

そして端末から出てきたカードを刃介に渡した。

「どうぞごゆっくり！」

「あぁ」

刃介はカードを持ってエレベーターに乗っていった。

近くにいた女子社員は、受付嬢に近寄って聞いてみる。

「なんかあったの？随分と慌ててたみたいだけど？」
「あの人、超ＶＩＰクラスの招待状を持ってたのよ」
「はぁ！？あのプラチナペーパーを！？あんな人が！？」
「信じ難いけど、ね」
「会長も何考えてんのかしら？」

この二人が話している間にも、刃介の乗るエレベーターはどんどん上昇していき、会長室に直結している階層に到達する。

「会長、お客様がお見えのようです」
「らしいわね」
「どんな展開になるかが不安っすよ」

三人はそれぞれ言っていると、

「よう、呼ばれたから来てやったぜ」

刃介が偉ぶった態度で登場してくる。

「ようこそ、鋼刃介くん♪私がこのトライブ財閥会長を勤めている、ルナイト・ブラッドレイン・シルフィードよ♪」

シルフィードはウインクしながら自己紹介する。

「なあ、一つ訊いていいか？」
「なんなりと」
「どうして”着流し一枚”なんだ？」
「貴方とお揃いでしょ♪」

シルフィードはまた、妖艶でいやらしい笑顔でウインクする。
刃介の言うとおり、シルフィードは今、黒い着流し一枚だけを羽織った状態だ。
しかもかなり着崩しまくってる為、このまま変な体制になったり、転んで仰向けになりでもすれば、間違いなく刃介に全裸姿（オールヌード）と同じものをみせかねない。

「・・・・・・・・・とりあえず、俺をここへ呼んだ理由を言え」
刃介は勝手にソファーに腰掛けて訊いてみた。

「いいわよ、教えてあげる」

シルフィードもシルフィードで軽率そうな口調のままで喋り続ける。

「鋼刃介、私達と契約してみない？」
「契約・・・・・・メダルか」
「察しが良くて、助かるわ」

つまりシルフィードは、鴻上がオーズとアンクに持ち掛けたのと同じ取引をするつもりでいるのだ。

「契約が成立すれば、私達トライブ財閥は貴方と七実ちゃんに対しては最優先にメダルシステムを提供するわ。そして貴方達は契約して以降からは、ヤミーを倒して得たセルメダルを何割か私達に渡す」
「へぇ」

シルフィードの説明に刃介が相槌を打つ。

「悪くない取引でしょ？」

「確かにな。・・・でも」

「でも？」

「メダルを渡す度合いは未決定だよな？」

この時、刃介の眼が煌き始めた。

刃介はソファーから立ち上がってこう宣言した。

「さあ、交渉を始めよう！」

強欲漢、鋼刃介の趣味、値切り交渉が始まる。

しかし、その様子は余りにも地味で退屈なので、省略することとする。

三十分後

「じゃ、じゃあ・・・４０％でどうかしら？」

「よし、乗ったぜ！」

こうして刃介は、メダルシステムの提供の代わりに今後得たセルメダルの４０％をトライブ財閥に譲渡することになった。

ちなみに、そこまでするのに刃介がかなりねちっこい話術を用いたりしたのだが、そのへんの話はこの際おいておこう。

ただし、刃介は後にこんな名言紛いなことを言っちゃったりするのだ。

――この世に値切れないものはない――

何時言うかは未だ皆目見当がつかないが。

「んじゃ、俺帰るぜ」
「ちょっと待った」
「なんだよ？」

シルフィードは刃介を呼び止めると、シルフィードはバットと吹雪にアイコンタクトを行い、部屋から退場させた。

「３０％なんて破格モンにしてあげたんだから、少しくらいは私のお願いを聞いてもらえないかしら？」
「なにをお願いする気でいる？」
「うふふ♪」

シルフィードは刃介に抱きつき、自慢の爆乳を胸板に押し付けた。しかも、抱きつく直前に刃介を上半身裸にし、自分も着物をさらにはだけさせたので彼女も上半身裸の状態で抱きついている。

「「／／／／／／／／／／」」

つまりは、上半身裸の男女が抱き合う絵面と化していた。
ある意味シルフィードだからこそできる大胆極まる行動だ。
双方がお互いに赤面しあう中で、シルフィードはこう呟いた。

「貴方の血を週一でちょうだい」
「・・・・・はい？」
「だって私、吸血鬼（バンパイア）だから♪カァープ♪」
「ッ！？」

シルフィードの牙が刃介の首筋に突き立てられると、刃介の意識はどんどん遠のいていき、意識を失う直前に、眼にして耳にしたのは・・・・・・。

「美味しかったわ、ご馳走様／／／／／／」

顔を赤らめ、自分に感謝するシルフィードの笑顔だった。
その後、刃介は週一でトライブ財閥に足繁く通うこととなり、社員達からは”会長の恋人説”が囁かれ始め、羨望と嫉妬の的になるのは、何れ先のお話である。

欲望と火影と裏麗（後書き）

次回、仮面ライダーブライ！

魔導具と紅麗と戦いの理由

魔導具と紅麗と戦いの理由（前書き）

仮面ライダーブライ！
前回の三つの出来事！

一つ！欲望の塊、森光蘭が動き出す！
二つ！新生火影メンバーが裏麗に襲われ、そこに刃介と七実が助けに入る！
三つ！刃介はシルフィードと、メダルの契約を交わした！

魔導具と紅麗と戦いの理由

火影隠れ屋敷。
そこには文字通り、火影忍軍縁の人物達が集まっていた。

「だからさぁ、あんたらを助けた二人は、何者だったんだい！？」
新生火影忍軍の紅一点であり、上級魔導具の風神の使い手、霧沢風子（きりさわふうこ）はそう問い正す。

「そう言われても、俺様は名前しか知らないしよぉ」
「俺と姫も、名前と変身ヒーローであることしかわかんねぇよ」
風子の質問に土門と烈火はそういった。

「全く役に立たない男共だよ。誰か教えてくれないかな？あの二人について」
『勿論今すぐお教えしますよ』

（（この声！））

烈火と土門はこの女声に聞き覚えがあった。

――チャリン、チャリン――

「ん、メダル・・・かな？」

柳は何時の間にか足元に落ちていた銀色のメダルを拾うも、そのメ

ダルは何時の間にか烈火の背後に集っていたメダルの大群に吸い込まれていた。
九枚のコアを中心にセルが結合し、一体の血錆色の異形が現出する。

「「「「「「「「「っっっ！！？」」」」」」」」」

異形の怪人の出現にその場にいた全員が警戒心をあらわにする。

『そういきり立たないで下さい。今日は刃介さんの代理として来たんです』
「その声やっぱり・・・」
『また御会いしましたね。花菱君に石島君』

そうして血錆色の異形は、鑢七実へと戻っていく。

「あぁ、それからこのご老人はお返し致しますね」

七実は片手に持っていた、ニット帽にグラサンをかけた隻眼の老人を投げてよこす。

「虚空のジジィ！あんた何やったんだ！？」
「この屋敷に近づいたら、この人が行き成り現れて私の胸やお尻を触ろうとしたので、お仕置きしてあげたまでですよ」

因みに虚空（こくう）という老人は火竜の一匹なのだが、特殊能力によって生前の姿で烈火の体外に自由に外出できたりする。
しかし、いまの蛸殴りされた状態では威厳もくそもないが。

そして虚空のセクハラ未遂を聞いたメンバーは、

「「「「「「「「「じゃあ、仕方ないな」」」」」」」」」

と、あっさり退いた。

「さて、私と刃介さんについて・・・・・・このご老人が起きる前にお話しますね」

そうして七実は語った。

自分が転生者（グリード）であることを、オーメダルのことを。

刃介との出逢いを、ブライのことを。

大体程度だが、話した。

「なんだか、信じ難い話ね」

烈火の実母であり、烈火を戦火から逃すべく、時空流離（じくうりゅうり）の術を使った代償に不老不死となって四百年以上を生きた火影くの一・陽炎（かげろう）といえども、八百年前に封印されたグリードのことなど知る由もない。

「ですが、真実です」

「確かに、あの虫野郎との戦い・・・・・・あれは覆しようのない事実だ」

烈火は改めて刃介が踏み込んでいる領域の凄まじさを知った。

「・・・・・・・・・ん、ふぁぁ」

「おや御老人。予想より早いお目覚めで」

そこへ虚空が起きて欠伸をした。

「ぬお！？さっきのお嬢ちゃん！！」

虚空は自分を一瞬で気絶させた七実の顔を寝起き一番に見てビックリする。

――ポンポン――

そこへ虚空の肩を叩く二つの手。

「おいこらアホジジィ」

「ここまで堕ちるとは思いませんでしたよ」

額に青筋を作っている風子と陽炎だった。

実はこの二人、そのうら若き肉体と抜群のボディスタイルゆえに虚空から幾度と無くセクハラを受けているので、虚空の節操なしな行動に苛立った様子である。

「大丈夫ですよ、お二方」

そこへ七実が声を出す。

「またやったら・・・・・そうですね、御自慢の炎で諸悪（せいよく）の元凶である場所を焼き尽くせば良いのですから」

「ヒヒェェェエエ！！！このお嬢ちゃん超怖いんですけど！！」

七実の顔色一つ変えずに、男の象徴焼却案に虚空は股間をおさえて涙目になる。

「閑話休題。・・・そんなことより御老人、昨晩の人たちが言っていた・・・「天堂地獄」とはなんですか？」
「――――ッッッ」

自分で蒔いた種を自分で刈り取り、七実は新しい話題を持ち出す。
もっとも、その禁忌的なをきいた陽炎は固まったが。

「て・・・天丼地獄！！」
「一人で食ってろよ」

一人だけ、聞き違いをした土門（バカ）はほっといて、説明が虚空の口から行われる。

「天堂地獄（てんどうじごく）。それは――最強にして最凶最悪の魔導具！！」

元々、身体能力や拳法・剣法にも特別優れているわけではなかった火影忍軍が、どうして歴史の影で隆盛を誇れたか。
それは彼らが創り上げた魔導具（まどうぐ）にあった。
風子の使う風神（ふうじん）は気流＝風を自由に操り、水鏡凍季也（みかがみときや）の使う閻水（えんすい）は水分を刃として自由に操る。

現代科学でも到底つくりえない物を、戦国時代に彼らがつくりあげていたロストテクノロジー。

「昔・・・・・・」

そして虚空は語りだす。

火影がまだ若い忍者集団だった頃、里に二人の天才武器職人がいた。
彼らの創造せし武器、それこそが・・・火影魔導具!!

彼らは同じ目的へ競い合う。
「我こそ最強の魔導具造り」と・・・
だが二人には決定的な違いがあった。
・

一人は――――
「殺す為ではなく人を生かす為の、守る為の武器を造る」と論じ・・・

一人は――――
「殺戮だ」
「綺麗事を言うな。武器とは人を殺す為の物!私は人を殺す為に武器を造る!!」と論じた・・・

一人が式紙(しきがみ)を造ると一人は式髪(しきがみ)を造り
一人が鉄丸(てつがん)を造ると一人は石胄(せきちゅう)を造り対抗した。

同じ時代に共に生れ落ちたのもまた、運命か・・・
二人が競って「強い魔導具」を造ってゆく度――――
当然互いの魔導具の力は洗練され、強力になっていった。

「成る程!ライバル心が互いを高めていったんだな」

「だからケッコー似た魔導具があるのか。闇水と氷魔闇(ひょうまえん)なんかモロだよね」
「うむ」
土門と風子の意見に虚空が頷く。
「特徴として例にすると――闇水のように割と毒気の無い導具は前者の造りし物で・・・氷魔闇のような殺傷能力の高い、禍々しい物が後者の作品ぢゃ」
（四季崎以上の武器職人がいるとは・・・・・・驚きですね）
七実はかつて自分が胸に刺し込み使った悪刀(あくとう)『鐚(びた)』の作り手である伝説の刀鍛冶・四季崎記紀(しきざききき)以上の職人がいることに驚いた。
もっとも、四季崎には火影の誰もが持ち得ない能力があったりするのだが。
話を戻そう。
「そして・・・「殺す為に造りし」者の最後の作品こそ・・・天堂地獄・・・」
「そして代々、火影の民によって護られてきた魔導具の中で――天堂地獄だけは危険視された。この国の何処かにへ、誰もふれられぬ場に封印されたと聞く」
陽炎は捕捉した。
「御老人」
そこへ七実は、正座を一切崩さずに喋りだす。

「刃介さんの話と、会話に混ざる前から盗み聞きした話によると、そこの佐古下柳さんが昨晩集中して襲われなかったのは、刃介さんの助けだけでなく、もっと別の要素があったんじゃないですか？例えば、その危険物の在り処を敵が判明させて、目下回収に乗り出しているとか？」

七実は本来水鏡がいうべきところを全て、憶測で言い当ててしまった。

この勘のよさは相変わらずのようだ。

虚空は顔からたっぷりと冷や汗を流し始める。

「あそこは・・・あそこだけは行ってはならん！危険すぎる・・・！教えるわけにはいかん！！」

「そんな我侭を言っていても仕方ありませんよ。現実逃避しようと、目の前にあるモノは立ち去ってはくれません」

「その通りやな。森さんが天堂手（てんどう）にいれたら、それこそ危険て事もあるやろ」

障子の向こう側から聞こえる男の声。

「誰！！？」

「今の関西弁・・・・・・まさか・・・」

そうそのまさかだ。

障子を開けて出てきたのは、

「自分が、教えたります」

帽子を被り、長い棒状の物体を布で包んで持った青年だった。

「何方ですか？」

「ん？なんや新しいのがおるな。まぁ折角やし、改めて自己紹介や」

帽子の青年は一息いれて名を名乗る。

「ワシは麗十神衆が一人、ジョーカーや！」

「ジョ・・・っ、ジョーカーっ！？」

烈火は果てしなくギャグ的顔で叫んだ。

「あ！疑いのカオしとるっ！信じとらんな！？ちょっと待っとれ！」

ジョーカーは少し障子の向こうでドタバタとして、

「どやっ！」

裏武闘殺陣のさいに身に着けていた被り物をして、烈火達も納得する。

「ところでジョーカーさん。先ほどの言葉から察するに、貴方はその危険物のある場所を御存知なのですね」

「そういうこっちゃ」

ジョーカーは素直に答えた。

「一体どうやってです？」

「森さんが変な動き見せたんでな。軽～くスパイしてみたんや。な

んや見たことない女の子と、全身に鎖巻いた忍び装束着込んだくの一と一緒に、とある場所に入っとくのを見たっちゅーわけや！」

「鎖を巻いた忍び装束・・・・・・」

七実はそれに関しては心当たりがあった。

「多分そこが魔導具の隠し「信じられねぇ！」

ジョーカーの言葉を烈火が遮る。

「花菱君。その人の言ったことには信憑性があります」

「なんでだよ！？」

「嘘だとしたら、わざわざ鎖を巻いた忍び装束の・・・・・・真庭忍者のことを言う必要はないじゃないですか」

七実の発言のなかにある単語に、

「真庭忍者？」

陽炎は知識にないものがあったのだ。

当然だ。彼ら真庭忍軍は本来の歴史では存在しない、異端の歴史の中でだけ存在するのだから。

「卑怯卑劣を売りにしている暗殺専門の忍者集団です。以前、虫組三人衆という方々が私を拉致しようと襲ってきたことがありました。勿論返り討ちにしましたけどね」

七実はお茶を飲みながら語る。

「それも、君の元々いた世界での話か」

「えぇ、そうです」

水鏡の質問に七実は平然と答える。

「なに言うとるかわからんけど、嬢ちゃんはワシの言う事、信じてくれるんやな」

「えぇ、一応は」

「ぬ・・・ぬぅ・・・」

烈火は七実がジョーカーを信じるという意見に難色を示すも、

「ジョーカー!!」

「!」

ジョーカーの肩をつつくものがいた。

「オレは、信じるよ!」

新生火影忍軍斬り込み隊長の小金井薫(こがねい かおる)。

「小金井くん・・・・・・」

「ジョーカーは麗のメンバーだったけど、そんなに悪い奴とは思ってないよ。戦ってみてなんとなく沿う思ったんだ」

小金井はついでに、

「その代わり、ウソだったら六之型お見舞いね♪」

「あ、あれもっかいはゴメンや・・・(汗)」

鋼金暗器(こうごんあんき)をだしてそういった。

ジョーカーも体中に刃を突き立てられたことがあるので、流石にキツいようだ。

烈火はその様子をみて覚悟を決めたらしい。

「ジジイ！オレは天堂地獄のある場所に行くぜ。いつも調子モンのお前が、大マジなツラして引き止める。よっぽど危ねえトコなんだろう・・・心配してくれてる事もわかる。けどよ――」

烈火は実に真剣な表情だ。

「あのイカレ野郎が天堂地獄を手に入れちまったら、姫や・・・オレ達にもっとでけぇ危機が迫る筈だ！」

「森よか先に最強魔導具見つけて・・・」

「壊す！！争奪戦だな、こりゃ！」

「・・・・・・・・・」

烈火、風子、土門の言葉に虚空は黙ってしまう。

「勝手にせい！！ワシャもう知らん！！」

怒鳴った虚空。

「たまーにマジになるとこれぢゃ！フン！！」

などといいながら陽炎のお尻を撫で回そうとした瞬間、

――ゴキッ！ボキッ！――

「御老人。やんちゃは程々に」
「あんぎゃあああああああ！！！！」

七実によって、腕があらぬ方向に曲がっていた。
そして、数分ほどのたうちまわり、

「心して向えよ！」
（（（（（（（（（（回復早いな・・・））））））））））

そして烈火の中へと戻っていく。

（あそこには火影の民も近寄せようとはせんかった！裏麗だけが、敵ではないぞ！）

烈火の心にそう言い残してだ。

「・・・決まりですな。ほな、その地に向いますか」
「その前にジョーカー、知ってたら教えて欲しいことがある」

烈火が知りたいことは、

「紅麗は・・・・・・死んだのか？」

鬼凛から告げられたことの確認であった。
ジョーカーは帽子を深く被り直し、

「今・・・紅麗さんを中心とした「麗」という舞台は・・・無（の）うなったといってええ」

現状を語りだす。

「裏武闘にて戒（カイ）、幻獣郎（げんじゅうろう）、磁生（じしょう）、呪（ノロイ）・・・・・四人の十神衆が死亡。雷覇（らいは）さんは決勝戦の途中で姿を消し――音遠（ねおん）さんは紅麗さんを助けるため、自分も海に落ちたそうや」

状況は芳しくないようすだ。

「木蓮を中心とした兵達達も、殆ど裏麗に寝返った。そして最悪なのは、姿を見せなかった十神衆の二人のうち一人が・・・裏麗の首領として君臨した！」

男の名は――――螺閃！！

（あいつ・・・十神衆の一人だったのか！？）

烈火は内心驚く。

「螺閃についてはワシもよう知らん謎の男や。紅麗（あのひと）は麗を失ってしもうた・・・けどな・・・」

ジョーカーは絶対の自信を持って、

「命は失っとらんで！！あの人が死んでたまるかい！！」

叫びに叫んだ。

そして我に返った。

「じ、自分としたことが、な～～にムキになっとんのやろ・・・。ん～～ま、いずれ生死もハッキリしますやろ」

頭をかきながら言った。

（だよな・・・・・あのバカ、体だけは頑丈だしな）

烈火よ、それはお前も一緒だ。

「ねっ♪なーんかウズウズしてこない？なんかね？私らこーゆーの好きになったのかな？」

「平穏な日常生活ってヤツも、オレらにゃしばらく無縁なんだな」

「オレも鉛筆にひってるより、コッチのほうが好きだよ」

風子・土門、小金井はワクワクしながらノリ気になる。

「みーちゃんも来るのよ！」

「だ、誰も行かないなんて言ってない・・・」

さりげに水鏡がそんなことを言われていた。

（ま、まただ・・・まただよぉ・・・・・・また風子を待つ長い一人の時間が来るんだ・・・）

さっきから空気化していて、居てもいなくても同じだったチビっ子、森川願子（もりかわがんこ）がそう思っていた。

「では決まりですね、皆さん」

七実がそういうと、烈火はニカっと笑い、

「いくぜ、火影！！あと＋α」

「酷くないですか・・・？」

火影忍軍と欲望の者、再度戦いの地へと赴く。
目的は・・・・・・天堂地獄破壊！！

＊＊＊＊＊

トライブ財閥。
会長室階層。

「・・・・・・・・あ」
「あら、起きたの？」

刃介が眼を覚ましたのは、妙に大きいキングサイズのベッド。
その直ぐ近くにはシルフィードが自分の寝顔を覗き込んでいた。

「えっと・・・・・・なにこの状況？」

ハッキリ言わせてもらうと、ベッドの上にいる男女二人。
しかも男は上半身裸で、女も着流し一枚で上半身裸。
もし第三者が目撃すれば間違いなく誤解するだろう。

「貴方気を失っちゃったから、会長室と繋がってる私の寝室に運びこんだの。ここって私のオフィス兼自宅だから」
「あ、そう」

刃介は無愛想に受け流す。

「それよりもお前、吸血鬼って・・・・・・」
「私がこの肉体的若さで会長っていうのにも、説明がつくでしょ？」
確かに、肉体年齢二十代半ばのシルフィードが大企業の会長というのは多少不自然だ。
しかし、吸血鬼という人智を超えた存在ならば、人間以上には生きていられるだろうし、特殊能力をもっていようと不思議ではない。
「テメー歳幾つだ？」
「ん～？どのくらいかな～？・・・・・・大体８００歳、かな？私はそこらにいる連中より遥かに高位だから、寿命も能力の程度もずば抜けてるの」
自慢話をするかのように語ってくれた。
「・・・・・・・・・・」
「なに？ジロジロ私のこと見て」
「いや、お前の体ってケッコー綺麗なんだな」
「にゃあ！？／／／／／／」
刃介の言葉にシルフィードは顔を赤くした。
「さっきからそのデカ乳にしか眼がいかなかったが、こうして改めて見ると、中々良いな。くびれた腰といい良く実った尻といい」
「そ、そう？／／／」
どうやらシルフィードはここまで直球的に容姿を褒められたことはないらしい。
というか、ある種の主人公がよくたてそうな旗的（フラグ）なものが・・・・・・

・。

「じゃ、じゃあ・・・こっちも見る？／／／／／／」

そう言いながら着流しの紐を解き、着流しを脱いで自分の全てを刃介に見せようとする。

だがしかしだ、

――チャリン、チャリン！――

「ヤミー」

「え・・・？」

セルメダルの音と、ヤミーの気配。

「悪いが帰る」

「ちょ、ちょっと待って！」

着流しを着なおして出て行こうとする刃介をシルフィードが止める。

「なんだよ？」

「これ、持ってきなさい」

シルフィードはベッドの横にあった小さな棚においてあった箱を刃介に渡した。

「カンドロイドの詰め合わせよ」

「ほう、ありがたく貰って行こう。じゃあな」

「えぇ、またね」

そうして刃介はエレベーターへと向った。
そしてシルフィードはというと

（フフフ♪やっぱり長生きはするものね。・・・七実ちゃん、貴女と刃介君と私の三人でするっていうのも良いかも♪／／／／／／）

長い間冬だった吸血女のなにかが、急速解凍されていた。

＊＊＊＊＊

烈火達「火影」と七実は天堂地獄を破壊する為、新たなる戦地へと出発した・・・・・・そして一方・・・。

紅麗・・・
紅麗・・・
麗・・・

イ・・・チャン・・・
ニイ・・・チャン・・・
オニイチャン・・・

思い浮かばれるは、彼が最も愛する女性と、それを模して造られた者。

貴様の全てを・・・私が奪う！！

仮初めの父の欲望にまみれた言葉。
そして・・・。

散散威張り散らしてたチミが今やイモ蟲だぜ
煉華
お前の分身だ
紅の細胞を混ぜて造ったクローン
天堂地獄
肉の塊と化す仮初めの母
オニイチャン
オニイチャン
紅麗暗殺ニアッタノダヨ

「わあぁぁぁぁあ！！！！」

元麗首領・紅麗は悲鳴ともいえぬ叫びを起こし、目覚めた。
収まりきらぬ動揺。
それを鎮めて見せたのは、

「・・・紅麗さま・・・・・・・・っ・・・・」

一人の美しきの女の声。
それは今尚紅麗を慕う麗の生き残り。

「音遠・・・？」

十神衆の音遠。

「よかった・・・よかった・・・もう目を・・・あけてくださらないかもと・・・」

音遠は紅麗に抱きつき、涙する、

「・・・・・ここは・・・・・・？」
「ここは、人気の無い場所にある、人住まぬ建物です」

確かに、紅麗が暫定的に眠っていたこの部屋の内装もかなりボロボロで、廃屋としかいいようがない有様だ。

「あれから・・・私達は見知らぬ岸に流れ着きました。十日も、貴女は眠っていたのです」

それでも、森の追っ手から逃げられたのは幸運だろう。

「病院に連れて行って差し上げたい・・・でも森の手が回る事が恐ろしかった。このような場で、まともな治療もできないことを、お許しください」

音遠は紅麗の体に包帯を巻き終える。

紅麗は生気の無い表情できいた。

「音遠・・・痩せたのではないか?顔色も悪い・・・」

それを聞いた音遠は

「お優しい言葉、もったいのうございます・・・私は・・・あなたの為になれることが嬉しいのです」

心から嬉しそうな表情で涙を流していた。
まるで長年の夢が叶ったかのように。

＊＊＊＊＊

――ブゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥン!!――

都会から大きく外れた森の中。
そこをシェードフォーゼのエンジン音が鳴り響く。

(ヤミー・・・それも随分育ってやがる。・・・・・・それになんだ?この・・・烈火と似た気配は?)

この時、刃介はまだ知る由もなかった。
もう一人の炎術士・・・・・・死を司る炎の堕天使との邂逅に。

＊＊＊＊＊

「お水と、食べ物です」

音遠はコップ一杯分の水とパンと、少量で簡素なシチューをだした。

「要らん・・・お前が食べろ。お前こそ何も食べていないだろう」

「平気です！ダイエットになるし、好き嫌いはいけませんよ！」

音遠はそういいながらクスクスと笑い出す。

「どうした？」

「今・・・少し昔のことを懐かしく思いました。私は紅麗様に仕えるメイドで、お世話を承り、とても幸せな毎日を送っていました」

それも今や昔のこと。

失われた、戻らない日々。

「あの時も、紅麗様はワガママで私を困らせていたものです」

「そ・・・そうだったか？」

紅麗は音遠にスプーンで食べ物を運んでもらう。

「お前には迷惑ばかり・・・・・・」

――ドクン・・・っ――

その時に、紅麗の脳裏によぎったのは、

無色な偽りの娘、強欲な偽りの父、優しき偽りの母、

そして・・・そして・・・・・・・

「がほっ・・・・！！」

「紅麗様！！」

紅麗は一気に口を抑え、音遠は卒倒する。

「やめろ・・・・っ、やめろ！！ぐあああああ！！」

「紅麗様！！」

混乱に混乱を重ねる紅麗に、音遠は彼を抱きしめて落ち着かせようとする。

「大丈夫・・・大丈夫です・・・。怖くない・・・ここには怖い事などありません・・・」

音遠は優しく語り掛ける。

「いやだ・・・もう戦いたくない・・・・・・・・・・・・みんな消えてく・・・みんな失ってく・・・・・・・・・！！」

恐怖にかられ、戦いを拒む今の紅麗を烈火がみても、彼を紅麗と認識できるかどうかは凄まじく妖しい。それほどまでに、今までの紅

麗が心に纏ってきた憎悪と殺意の仮面は大きく分厚かった。

「もう戦うことはやめましょう。あなたはたくさん・・・たくさん傷ついた。戦いの中であまりにも辛い想いをしてきた。もう充分でしょう。これからは平穏に生きてください。誰もそれを責める事はありません」

音遠は紅麗を抱きしめ、語りかけ、そしてもう一度紅麗の顔を真っ直ぐ見据える。

「私でよければ最後まで共に居ます。二人で誰も知らぬ地へ逃げましょう」

「みんな・・・消える・・・消える・・・」

あらいきをつき、恐怖に怯える紅麗の目。
そして彼はその恐怖から逃れるため、目の前に今居る、自分のことを慕う女を抱くことで。

音遠は紅麗が自分を寝台に押し倒したことに驚きこそはすれ、抵抗の意志は一切無く、それどころか紅麗の為になにかでき、彼の支えになれるという喜びがあった。

二人はゆっくりとその唇を重ね合わせ、心と体も重ね合わせた。

ワタシハ・・・キエマセン・・・
いつまでのあなたの傍に――――紅麗様・・・・・・・・・・

＊＊＊＊＊

何時間後だろうか。
音遠との情事を終えた紅麗は、夕涼みがてらに屋外にでていた。
これからどう生きていくかも含めて。

そして、音遠が言ってくれた言葉を思い出す。

（それも・・・・・一興か・・・）

自分にはもう戦うべき理由が無い。
生きていく理由もなくした自分に唯一手を差し伸べてくれた女。
彼女を愛し、生涯を影に潜ませて生きていくのも悪くないと思った。

「！！」

が、それを選択するには、彼は罪を重ねすぎたのかもしれない。

「フヒャヒャっ」

不気味な男の気配に気づく。
その男は見るからに不健康そうな肥満体質で、両手の十本指には鉤爪を装備していた。
そして、”首や腕に包帯のような物が這っていた”。

「クヒャヒャヒャヒャ！！」

この男の名は裏麗の鉞（まさかり）。
原典においては幼稚な口調が特徴であったが、今のこいつは笑い声しか出さなかった。

――ズガっ！――

鉞は紅麗を殴りつけた。

「裏麗・・・森の手の者か・・・？」
「ヒヒャヒャヒャヒャヒャ！！」

鉞は一切答えず笑うだけ。
表情から察するに、完璧に正気を失っている。

――ガドン！！――

鉞は紅麗を踏みつけた。
全快時なら余裕でかわし、反撃するだろうが、今の心身共に疲労した状態で”今の鉞”に勝つのは厳しい。

「ヒャーッハハハハハハ！！」

――ゲシっ！ゲシっ！ゲシッ！！ゲシッ！！――

容赦なく紅麗を足蹴にする鉞。

「紅麗様！！」
「！　来るな！音遠！！」

騒ぎに気がついた音遠がこちらに駆けてくる。

「ん～～？」

鉞は音遠に気づき、

――ブンッ！！――

彼女を全力で殴り、気絶させた。

「ッッッ」

その瞬間に、紅麗の脳裏には、憎き養父の顔と言葉。

――貴様の全てを、私が奪う！！――

そんな我欲に満ちた言葉。

「ふ・・・ざ・・・けるな・・・」

紅麗は身震いし始める。

「フヒャヒャヒャヒャヒャ！」

鉞は音遠を踏みつけた。実に愉快そうな表情でだ。

「汚い足をどけろ、豚。言葉の通じる「人間」でさえなさそうだがな」

「！？」

鉞は紅麗のほうに顔を向けた。

紅麗は腹違いの弟の言葉を思い出した。

――オレは守る為に戦う！！――

「不愉快極まりないが・・・あいつの言葉が今、少し理解できる」

紅麗は先ほどまでの穏やかな表情を捨て去り、

「やはり私には、平穏は許されないらしい」

狂気と殺意の表情をはりつけ、腕輪がされた左手からは炎をだす。

そして、鉞が不愉快な声を出す直前に、

彼の左腕と左足を焼ききった。

「ふひ・・・ぷぎゃあああああ！！ぎゃああん！あぎゃはああーーっ！！」

果てしない苦痛にもだえ苦しむ鉞。

（焼き殺す）

それを見る紅麗の表情は実に冷たかった。

自分の精神をここまで持ち直させてくれた女を、人を愛する喜びを

与えてくれたもう一人の女を傷つけた塵芥を、汚物を見るかのようにだ。

だが、その瞬間から彼もまた「欲望」とはちあわせするのだ。

「んあっ!?う、う、いぎゃあああああああ!!!」

鉞の体は突然幾百ものメダルに包まれた。

「なに!?」

紅麗もこれには驚くしかない。
鉞の代わりに自分の眼前に立っているのは、
山猫の頭。ジャガーの腕、スミロドンの脚をした怪人。
同種混合型の一体、ヤジャガドンヤミー。

『ミギャァァ!』

明らかにこちらに対して敵意むきだしなヤジャガドンヤミー。
紅麗もこれには前人未到の死闘を覚悟した。

が、しかし

――ブゥゥゥウゥゥゥゥゥゥウウウン!!――

天は以外にも、この男を寄越してきた。
紅麗がもっとも忌み嫌う男とは、別種の我欲に満ちた男を。

『ミギャ！！』

バイクでヤジャガドンヤミーを跳ね飛ばした男は、ヘルメットをとって周りを見渡す。

「おいおい、ヤミーの気配がしたかと思えば、なんなんだこの状況は？」

我刀流二十代目当主・鋼刃介。

「誰だ貴様？」

「ん？オレか？あの化け猫にようのある、ただの雑貨屋だ」

といいながら、刃介はブライドライバーを装着。

「七実からメダルくすねといて良かったぜ」

といいながら、黄色いメダルを三枚だした。

そう、コンボだ。

「んじゃ、いくかな」

メダルをバックルにはめ込み、スキャナーで読み込む。

「変身！」

≪ＹＡＭＡＮＥＫＯ（ヤマネコ）・ＪＡＧＵＡＲ（ジャガー）・ＳＭＩＬＯＤＯＮ（スミロドン）≫

≪ＹＡＪＡ（ヤジャ）・ＹＡＪＡ（ヤジャー）！ＹＡＪＡＧＵＡＤＯＮ（ヤジャガードーン）！≫

黄色い閃光に包まれ、摩訶不思議な歌を奏で、彼は変身した。

青い猫目が光る山猫の黄色い頭。
獰猛な爪が鈍めに黄色く光るジャガーの腕。
走り出せば誰も視界に留めることもかなわないであろうスミロドンの脚。

ブライ・ヤジャガドンコンボ！

「オオオオォォォォオオオオォォォォ！！！！」

あらん限りの咆哮を天にあげ、彼の変身した戦士は体中の光を放っていた。
野太く眩い光線・・・・・・・ビームを。

『ミミ、ミギャ、ミギャアアアア！！』

その野太い光線を浴びるためのように、ブライ真正面にたっていたヤジャガドンヤミーは光線（ビーム）を浴びて数十枚のセルメダルが飛び散る。
幸い紅麗と音遠はブライの背後にいたので光線をあびずに済んだ。

（なんだあれは？あんな魔導具、私はしらないぞ！？）

紅麗は時空流離で現代に流されてしまった頃には、きちんと物心があり、火影にどんな魔道具があるかは、火影忍軍六代目頭首の嫡子として知っていた。

だが刃介の使うブライは火影以上に歴史の古い存在だ。
紅麗が知っているはずがない。

「よーし、逃げられないうちに一気に決めるか！」

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＲＧＥ≫

ブライはメダルをスキャンし、前方に展開されたメダル状の巨大なリング。

「虚刀七の構え『杜若（かきつばた）』」

クラウチングスタート時の構えをとるブライは、両腕にある猫刀（びょうとう）『鉤（かぎ）』を地面に軽く突き刺し、

「よーい、どんっ！」

一気に駆け出すと同時に、ジャンプした。

リングを潜り抜ける為なので、両腕を前にだして身を伸ばし、さらには体にドリル回転を加えて、ヤジャガドンヤミーに突っ込んだ。

（悪く思うな。ゲスデブ・・・）

そう思いながら、ブライは一気にリングを潜り抜け、

「チェストォォォオオ！！」

ヤジャガドンヤミーを貫いた。

――ドガァァァアアァァァアアン！！――

ヤジャガドンヤミーは爆発した。
当然爆炎からは大量のセルメダルがあふれ出した。
なかには”血塗れたメダル”もあった。

こうしてブライは勝利した。

――カチャ――

変身解除した刃介は、右腕をグリード化させてセルメダルを吸収し始める。

「ん・・・・・・っ」

時折、片腕をおさえて痛みに耐えるような仕草をしていた。

「貴様、何者だ?」

紅麗は手から炎をだしながら聞いた。
刃介の行動には感謝しているが、肝心の刃介が敵か味方かが判明していない。

「我刀流二十代目当主・鋼刃介。お前の名は?」
「・・・・・・紅麗だ」

とりあえず名は名乗りあった。
自己紹介している間に、刃介は全てのセルを回収したようだが。

「紅麗。さっきから気になってたが、その美人はどうするんだ?」

刃介は音遠を指差す。

「・・・・・彼女は充分尽くしてくれた。もう、私の傍にいるには惜しい女だ」
「そしてお前は、再び戦場か・・・」

紅麗は自分でも不思議に思った。
何故会って間もない男にここまで心開いて話せるのかと。

「泣くぜ、その女」
「構わんさ。それで音遠を守れるなら」
「男だねぇ」
「私はただの臆病者だ。愛する者を失うことを恐れ、戦うことしかできない、ただ臆病者だ」

紅麗はそう喋り続ける。

「あ、そう。それがお前の決めた道なら、誰も文句は言わねぇよ。だがな紅麗、一つ訊かせてくれ」
「なんだ?」

「お前は何の為に戦う?」

「何の為に?」
「俺は自分自身の為に戦う。お前は、何を為す為に戦う?・・・・・・・・勿論返事は先延ばしでいいがな」
「・・・・・・・・・考えさせろ」

紅麗は穏やかな表情で言った。

「何時か答えを訊けるのを楽しみにしてるぜ」

そうして、刃介はシェードフォーゼに乗って発進した。

七実の、明らかに意図的にだだもれにしているコアの妖気を追って。

「・・・・・・・・・」

紅麗はその様子を見届けると、未だに気絶している音遠を抱きかかえる。

「紅麗・・・紅麗様・・・」

寝言を呟くところからみると、大丈夫そうだ。

（・・・・・許せよ・・・音遠・・・おまえのことは生涯忘れん――――然らばだ・・・・・・）

それは、紅麗の中にある一番の愛情だったのかもしれない。

＊＊＊＊＊

それからどれだけの時間が経ったのか、音遠はとある場所で目覚めた。

「・・・ここは？」
「おお！目覚めたか、おじょーさん。大丈夫、もう心配はいらん」
そこには白衣を着た眼鏡の老人がいた。
「ここは小さな町の診察所だよ。いつもはジーサンバーサン相手にやっとるから・・・あんたみたいな若いコは嬉しいよ」
「紅麗様・・・紅麗様は！？」
「顔に火傷のある男かい？もう行っちまったよ」
医師は意外そうにいった。
「やさしい・・・綺麗な顔をしとったなあ・・・・・・あんたを心配そうに何度も見とった・・・「伝えて欲しい」と、メッセージもあずかっとる」
そして老医師は、口調から声量まで、そのまま音遠に伝える。
「お前だけでも、幸せになってくれ」
それから数十分間から小一時間ほど、音遠が大きな声で泣いた。
ただただ、愛しくて仕方ない想い人のことを想って。

＊＊＊＊＊

その頃の紅麗は・・・・・・月乃宮（つきのみや）にいた。

「非常事態!!全ての兵を門前に向わせろ!!」
「紅麗だ!!」

紅麗のやさしき養母の住む館は、要塞化していた。

そこに現れた紅麗は以前のような黒衣を纏い、顔には眼光の鋭い片目の仮面をしていた。
湧き上がった感情を再び殺すかのように。

「やはり・・・生きていたか!!」
「森様の仰った通りだ!!」
「生きていたなら育ての母を求め、まずここに来る!!」

黒服たちは慌てだす。

「オイ・・・月乃様は・・・」
「言うな!構うことねーよ!俺たちには強い味方がいる!」

その強い味方とは、

「やあ、紅麗」

眼鏡をかけ、片手に弓のような魔導具をもった優男だった。

「バラ肉になっちゃった君のママならまだ残ってるよ。見る?」

皮肉たっぷりの物言い。

「初めまして。裏麗の魔樹也(まきや)だ。そんなボロボロの躰(からだ)でここに来るなんて脳みそないのかな?ボクがいるって知ってたら良かったのにね」

「・・・・・・・・・」

「ボクの魔導具の力、見せてあげるよ」

そして、

「森光蘭は、何処だ?」

魔樹也は灰塵となって消えた。

紅麗の言葉は実に温度というものがなかった。

「一撃!?」

「魔樹也さんが一撃で・・・!!」

「うわああー!逃げろ!!」

月乃宮に存在した全ての人間の命は狩り取られる。

残された「人間」の心を一人の女の元に置き去り・・・男は再び「鬼」と化した。

死を司る堕天使・紅麗復活

「鋼刃介・・・・・貴様の問い、何時か必ず」

魔導具と紅麗と戦いの理由（後書き）

次回、仮面ライダーブライ

突入と呪いとジャンケン

ヤジャガドンコンボ
キック力：１４トン　パンチ力：７トン　ジャンプ力：１００ｍ
走力：１００ｍを０．１１１秒　固有能力：高速移動と光線照射
属性：風
必殺技：ビーストスパイラルとワイルディーザー　カラー：黄色

ヤマネコヘッド
複眼の色は青。どんな暗闇でも見渡せるヤマネコアイと、遥か遠くの物音さえ聞き分けられるヤマネコイヤーを備える。強烈な閃光・ワイルドフラッシャーを放てる。

ジャガーアーム
前腕部に鉤爪状の武器・猫刀（びょうとう）『鉤（かぎ）』が装備される。

スミロドンレッグ
視認不可能な超走行力とそれに見合う脚力を得られる。

突入と呪いとジャンケン（前書き）

仮面ライダーブライ！
前回の三つの出来事！

一つ！七実が新生火影に接触！
二つ！最凶最悪の魔導具、天堂地獄の在り処が判明！
三つ！元麗首領の紅麗が刃介と邂逅し、炎の堕天使としてが復活する！

突入と呪いとジャンケン

某県の某所。
そこには、天堂地獄を封印された土地があった。

「うわー・・・でっけぇ樹！」

烈火たちはそこにいた。

「・・・でも、どこに森達がいるんだ？」
「おーい、ジョーカー！ホントにこんな山の中に、天堂地獄があるのかよ」
「正確にはまだここやない。もう少し、時間経つの、待っとってください」

どうやら、多少時間が余り休憩中らしい。

「ねぇねぇみんな～！」

そこへ柳が、

「ほらっ♪綺麗なお花！」
「あ――ーっホントだねーっ、姫――――っ！」

野に咲く花の話題をし、烈火がボケた。

「ハイキング気分だな。これから敵の待つトコへ乗り込むってのに・・・・・柳だってなんで連れてきたんだよ？」
「勘違いするなゴリラ」

呆れる土門に水鏡が釘をさす。

「森光蘭があくまでも柳さんを狙っている事を忘れるな。奴が天堂地獄を手に入れるか壊されるか・・・どちらにしても次は柳さんに牙を向ける」

「要するに、我々と行動を共にしたほうが、守りは磐石ということですか」

「その通りだ、鑢七実。どこぞの猿人類と違って実に聡明だ」

「水鏡・・・オレのこと嫌いだろ？」

土門は背景に効果音がでそうなほどに涙を流している。

そうこうしていると、現在時刻は1：58＝深夜2時前となる。

「時間や」

ジョーカーは腕時計で確認した。

「風子さん。なんでもえーから魔導具の「核」、貸して下さい」

「ん？盗んだら殺すよ」

と言いながら、鬼爪の核を貸した。

「おーきに」

ジョーカーは、その核を大木のある部分――丁度よく大木から二本の爪が出ているようで、核の玉をスッポリと納められるくらいのスペースのある場所にはめ込む。

「開け！！オープン・ザ・ドア！！」

なんか中二病紛いな台詞を大声を出す。

皆はてっきり入り口が開くのではないかと思ったが

『『『『～～～～～！！』』』』

入り口は開かず、代わりにミイラのような怪人が四体現れた。

「おいジョーカー！入り口どころか、怪物でてきてるぞ！」

「お、可笑しいな！こんなはずは・・・」

「屑ヤミー」

烈火がジョーカーを責めていると、七実がボソっと呟く。

「くずヤミー？」

「以前花菱君が遭遇した白ヤミーの出来損ないです」

「あぁ、アレか！」

言われて見ればこの屑ヤミー達は、包帯の面積が少ない上に動きもかなり鈍重で顔に大きな黒丸があり、呻き声はおろか油の切れた機械のような擦り切れまくった音を出している。

『『『『～～～～！』』』』

「まあ、大方一般人を通さないための警備兼警報じゃないでしょうかね」

七実は屑ヤミーを目前にしても眉一つとして動かさない。

「・・・・・刃介さん、近くに来ているのでしょ」

「今来てる途中だがな！」

そこへ、七実の言葉を返すべく、遠くからでも聞こえるような大声で喋る男の声。

よく聴いてみるとエンジン音も聞こえてくる。

皆が驚いてる間に、刃介はシェードフォーゼに乗って登場し、屑ヤミーをはねてバイクから降りた。

「話は後で聞くが、まずはこの雑魚どものお掃除からだ」

刃介はブライドライバーを装着。

オニコアとテンバコアを投入し、リュウコアを投入した。

そしてローグレイターを傾け、ローグスキャナーで読み込む。

「変身」

≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＥＮＢＡ≫

≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！ＲＩＯＴＥ！ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！≫

「「「「「っっ！！？」」」」」

柳、風子、土門、水鏡、ジョーカーは驚く。

話には聞いていたとはいえ、本当に特撮ヒーローみたいな存在が、今こうして目の前に現れているのだから。

「さーてと、刀で一気にきめるか」

そういって、両手には魔刀を一本ずつ握る。

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

そしてスキャニングチャージ。

すると、ブライの前方には三つのメダル状のリングが血錆色の鈍い光をしながら、屑ヤミーへの道標として出現する。

ブライは全速力でリングを三つとも潜り抜けていき、

「チェェェストォォォオ！！」

掛け声を出しながら二振りの魔刀による必殺斬撃・リオテスラッシュを喰らわせた。

当然屑ヤミーは全て砕け散り、後にはセルメダルの破片だけが残っていた。

「やっぱり、奴さんは俺らは来る事を予測していたな」

「それに森という男はグリードと手を組んだというのも、確信となりました」

七実がセルの破片を見ていると、ブライは変身を解除する。

「・・・・・す・・・スゲェェ！！」

「カッコイイ！！」

ブライの戦いにゐの一番に歓喜したのは小金井と柳だった。

「ま、マジかよ・・・？」
「いざ生で見ると、半端ないね・・・・・・」
「刀の扱いは、そこそこのようだな」
土門と風子と水鏡も相応の反応をする。
「こりゃ、えらい人呼んでもうたかもしれへんなぁ」
ジョーカーも呟く。
しかし七実はそこで皆に告げた。
「皆さん、もう直ぐ扉が開きますよ」
「なんでわかるんだ？」
「月光です」
七実の言うとおりだった。
戦っている間に雲は風で流され、月の光が差し込み、窪みに嵌め込まれた核へと降り注いだのだ。
そして核を通した光が岩へとあたると、岩はあっと言う間に形を変えて洞窟への扉を開く。
「あ・・・穴が、あいた！！」
七実の言葉が実現し、一同は驚く。
「どうしてわかったんだい？」
「幾つか開閉方法に候補を立てていたんですけど、一番有力なものが潰れたので、二番目に有力だったものかなと」
要約すると、七実は幾つかの候補のうちの一番とは、ジョーカーが

やったように、窪みに核をはめ込むことで扉を開閉するものだ。
しかしそれは外れだった。ならば、時間に気にしていたことを考慮して、夜を照らす月光にヒントがあると七実は考えたのだ。

「流石は俺が惚れた女だぜ！」
「褒めても何も出ませんよ。それから刃介さん」
「今度はなんだ？」
「勝手に黄色のコアを持っていきましたね」
「・・・・・・・・すいません」

とりあえず刃介は誤ることにした。
口論であろうと実力行使であろうと、彼は七実に到底かなわないから。

（あのお嬢ちゃん、ただもんやない・・・！）

ジョーカーは内心で、七実の内包する凄まじさを思い知る。

「キミタチ。覚悟はよろしくて？」

そこへ風子が呼びかける。

「どちらの覚悟だ？とりあえず僕は、まだ死ぬつもりはないがね」

水鏡は冷静にそういった。

「・・・・・・・・・・」

土門は牙王にボコボコにされた時と、七実に助けられた時を思い出すと、

――パンっ！――

表情を切り替え、拳と掌をぶつける。

小金井も、中学のクラスメート達のことを思い出す。
初めて出来た同い年の友達のことを。

「とーぜん生き抜く覚悟だよね？風子お姉ちゃん」

とぼけた表情でそういったが、覚悟は伝わった。

「心配すんなよ！姫は誰にも渡さねぇ！」
「うん・・・／／／」

烈火の言葉に柳は顔を赤らめる。

「そんじゃあ・・・・・・いくぞ固羅！！」
「「「がってん！！」」」
「フッ・・・」

烈火の言葉にメンバーたちは答えた。

「俺らも行くか。メダルには成りそうにないが、後々の危険な芽は摘めそうだ」
「まあ、適当に草むしりに勤しみましょう」

こうして一向は洞窟へと突入していった！

ただし、なんだかよく漫画とかにありがちなトラップがあったりし

たのだが、七実と刃介が先に全部の罠を壊してくれたお陰もあって、実にスムーズに進めたという。

＊＊＊＊＊＊

一方、封印の地の奥深くでは

「・・・・・1、2、3・・・4、5、6・・・・・・8人ね」

彼らの突入を感知するものがいた。

「彼らの念を感じる。やっぱり来たよォ、火影に・・・ブライ♪」

鬼凛は愉快そうな笑顔だった。

そこには、裏麗のメンバーたちが集まってたりもしたが、その中央にいたのは

「楽しくなるといいね、螺閃♪」

＊＊＊＊＊

封印の地に突入して暫く経った。

「はぁ」
「漸く罠もネタ切れか」
刃介と七実は先頭を歩いていた。
後方では烈火たちが点呼をとってたりしたが、どうでもいいのでスルーしようと思ったが、
「ジョーカーは？」
ジョーカー行方不明？
「あぁ、さっきの関西弁の方なら外に出ちゃいましたよ」
七実はそういった。
「まぁ、やりたくない事はやらないって性格っぽいからなぁ。ほっとこうぜ」
あんまし気にされなかった。
「しかしよぉ、花菱・・・「天堂地獄」ってどんな魔導具なんだろうな？最凶最悪ってみんな言ってるけどよ、どんなふうにだ？どんな力を持ってるのか、全く誰も知らないんだぜ？」
そういわれてみると、天堂地獄は謎まみれだ。
「・・・オレにもわかんねぇ。ただあの虚空（ジジィ）があそこまで恐れる――ペキッ――」
「誰！！？」

木の枝を踏む音で、皆が気づく。
そして振り向いてみると、

そこには成長体ヤミー、白ヤミー、屑ヤミーさえもマシに見えるゾンビトリオがいた。

『グ・・・グゥ・・・』
『か・・・あ・・・』
『シュ・・・お・・・』

呻き声をあげるゾンビ。

「なんだぁ!?このゾンビ集団は!!」
「さっきの屑ヤミーみたいな化物か!?」

風子と土門はゾンビに殴りかかろうとするも、

「・・・・・・・・・・・・」

ゾンビの口の動きを見て、
ピタっと動きを止めた。

「やっぱり、気づきましたか。霧沢さん」
「うん・・・こいつら、敵じゃない」

そうして、ゾンビどもはこう呟く。

『こ・・・殺して・・・・・・』

『俺たちを殺して・・・・くれ・・・』

自殺志願の言葉だった。

それから少し時間を置き、皆は頭の中を整理してゾンビトリオの話を聞くことにした。

『俺たちは・・・・・元々盗賊だった・・・・・・』

『今でこそ・・・こんな醜い化物になっちまったけど・・・・・・』

『昔は、ちゃんとした人間だったんだよ』

衝撃の走るものだった。

「ウソだろ・・・？」

「なんでそんな姿になっちまったんだ？」

『天堂地獄・・・』

『この封印の地の最奥に眠ってるあの魔導具の呪いで・・・・・・・・俺たちが死ねなくなったんだよ』

（死ねなく・・・なった！！？）

烈火はゾンビたちの告白に驚く。

『どれほどの月日が経っているのかはわからないが・・・・・・・オレ達は気が遠くなるほど昔、ここに入った・・・』

盗賊（ゾンビ）らは語りだす。

俺たちが人間だった時代、「火影」という忍軍があってな・・・その忍軍は「魔導具」という魔力を秘めた武器を所有していたのだ。
それが災いして火影は武将、織田信長に滅ぼされたが――その魔導具はあらゆる地へと隠された。

その中で「最強」という天堂地獄がここにあるという事を知った我々、盗賊団二十一名は――それを求めてここへ来た。

一人・・・また一人・・・・・・死んでいった。
宝を護るように自然の守護者達は我等に牙をむき、俺たち三人だけが生き残り・・・遂に天堂地獄を見つけた!!

ところが、奴に触った瞬間・・・

――あああ熱い!熱いいい!!体が・・・焼ける!!うわあああ!!――

そして頭の中にけたましく響く声が――

――愚かな者達よ・・・主等に我を手にする資格は無い!!選ばれ者のみが我を所有できる!分際をわきまえぬ馬鹿共には地獄の苦しみを与えよう――

そう、それは

――呪い・・・だ・・・――

『・・・そして俺たちは時間の流れで死に逝くことを奪われた』
『入り口は固く閉ざされ、光も忘れた・・・』
『死んでいった仲間たちをうらやましく思った・・・』

盗賊らはまだ語る。

『何度も死を望み・・・自殺を試みたが駄目だった・・・肉体をいくら傷つけても魂は消えぬ』
『痛みだけがいつまでも残り・・・乾き・・・餓え・・・』
『それでも・・・・・・・・死ぬ事ができない・・・天堂地獄のせい・・・・・・せいでな・・・・・・』

盗賊らは涙する。
すると、柳が盗賊の一人に抱きつく。
よく見ると大粒の雫を瞳から流していた。

「・・・今まで・・・辛かったよね・・・苦しかったよね・・・・・・でも・・・私には何も・・・何もしてあげられない・・・・・・ひどい奴だね・・・私って・・・・・・・」

涙を流しながら、自分の無力さをなげく柳。

『・・・・・あんた・・・こんなに臭くて・・・汚い俺たちを抱いてくれるのか・・・・・・?こんな化物のために・・・涙を流してくれるのか・・・・・・?』

盗賊らは柳の行動に意外性を感じた。

だがそれだけではない、

『優しい心・・・温かい心・・・』
『ああ・・・やっぱり・・・・・・』
『人間って、いいなあ・・・』

盗賊らの心に一時の癒しを与えていた。

「へぇー、で？」

そこへ刃介の無関心極まる言葉がでた。

『で？って・・・・・・』
「お前らの自業自得トークはいいから、天堂地獄の居場所を教えろ。とりあえずぶち壊すからさ」
『天堂地獄を壊す・・・・・俺たちを、救ってくれるのか？』
「だから、救うとかじゃないから。俺にとって目障りなだけだ」

刃介は遠慮会釈なしに本音を喋る。

『この先のおくには、二手に別れたところがある』
『どちらを進もうとも、修羅の道となる』
『だが、どちらでもたどり着ける』

盗賊らは簡潔に答えてくれた。

「ほう、ありがとよ」
「では行きましょう」
『待ってくれ！』

盗賊の一人が呼び止める。

『君達は、魔導具や不思議な力を持っているね』

『その力で、我々を殺してはくれないか？』

盗賊の三人は、烈火たちに殺人を頼み込んだ。

『まだ年端もいかぬ君達には頼めん。・・・だから・・・』

『そこのお二方に、お頼みしたい！』

『俺たちには「死」という自由が欲しい！』

盗賊は刃介と七実に頭を下げた。

「相わかりました」

七実が返事をした。

「いいのか七実？」

「わかるんです、彼らの気持ちが。昔の私と同じように・・・・・・楽に死ぬこともできず、楽に生きることもできず・・・・・・生き損ないだった頃の私と」

七実は盗賊らと、昔の自分を重ねていた。

『ありがとう。君らの摩訶不思議な力なら、きっと魔導具の呪いも断ち切れるやもしれん』

『頼む！殺してくれ！！』

「・・・・・・・・・はい」

「やめろ！やめてくれ鑢！！」

七実は盗賊たちと至近距離にまで近づく。
そして、グリードとなった。

『虚刀流『雛罌粟（ひなげし）』から『沈丁花（じんちょうげ）』まで、打撃技混成接続・・・！』

眼にも留まらぬスピードで繰り出される七実の腕。
真庭蝶々から見取った忍法足軽なども使用していない。

故に、盗賊らは二百七十二回・・・・・死んだ。
殺し続けて死なないというわけではない。
その再生速度や可能範囲を越えるスピードで殺せばどんな存在とて死ぬのだ。

もっとも、七実はこの混成接続技を、一種の麻酔として使ったに過ぎない。

『冷気封印』

一言呟くと、七実の掌からは凄まじすぎる量の冷気は放射され、盗賊らを絶対零度の大氷の中で眠らせた。恐らくコアやセルのエネルギーを冷気に変換してみたのだろう。
もっとも、彼女はそれを思いつきでやっているところこそが、驚嘆すべきポイントである。

そして人間に戻る。

「不死だというなら、一時的に殺して、その間に急速冷凍して仮死状態にすれば・・・・・擬似的に死を体感できるでしょう」
「・・・七実・・・」
「私の場合は、このようなことさえも、出来ませんでしたから」

七実はこの世界に来て初めて、悲しそうな表情をした。
自分と同じようで似た存在を・・・・・・いたわるような、同情の眼差しだ。

「あとは、天堂地獄を破壊すれば、この方たちも救われる」

それを訊いた烈火は、分厚い氷に手を当てた。

「・・・・・もう少しだけ、我慢してくれな・・・・・・・約束する。お前らの魂、必ず浄化してやる・・・」

そして、まだ見ぬ物に対しては、

「天堂地獄を、ぶっ壊す!!」

憤怒を燃やした。

＊＊＊＊＊

同時刻、封印の地・最奥。

＜・・＞

禍々しい何か・・・

＜我に選ばれし資格を持つものが来る！！天堂地獄（わたし）の力を得るものが！！＞

殺意に満ち溢れし意思は、眠りから覚めつつあった。

＊＊＊＊＊

一方森達はというと、

――コツ・・・コツ・・・――

洞窟内を歩き進んでいた。

四人が歩いていると

――ドゴッッ！――

突然頭上から岩が崩れ落ちてきた。

が、

――ボンッ！――

煉華はその岩を糸も容易く燃やし尽くした。

いや、壊したというべきだろうか。

「ふは・・・ふはははは！！いい子だ！いい子だなあ、煉華は！

！お父さんはお前がいれば安心だよ！！」

森はハイテンションになって煉華を撫でた。

「それに引き換え、リュウギョク君はなにもしなかったね」

「私の役割は戦闘であって護衛ではない」

皮肉を言ってくる森に臆することもなく、リュウギョクは威風堂々としていた。

「まぁいい。おい、喉が渇いた。飲み物をだせ」

「はっ！」

側近の八神に命じ、ジュースを出させると、森はそのジュースを飲み始める。

（ヒヒヒ・・・もうすぐ・・・もうすぐだ！じきに最凶最悪の魔導具・・・天堂地獄が！我が手中に・・・！）

森は今も尚、欲望を膨らませていた。

しかしながらだ、その時にカツーン、カツーンという音が聞こえてくる。

「森様！足音です！」

「誰だ！？ここには誰もいないはず！」

「戯け。よーく見てみることだな」

慌てる八神と森に、リュウギョクが呆れてそういった。

そう、現れたのは火影でもブライでもない。

その姿を見たとき、森はジュースを地面に落とした。

「螺閃!!鬼凛!?な、なぜ貴様らがここにいる!?貴様等A班は火影暗殺の命を受けたはず!何故だ!答えよ!」

森は螺閃の胸倉を掴んで問いただす。

「・・・・・そ、それとも・・・お前ほどの男だ。全員殺したという報告なのか?」

淡い期待を抱くも、無情に螺閃は首を横に振った。

「なぜだ、馬鹿者ォ!!」

森は怒りのままに、螺閃を全力で殴った。

「奴らの事だ!もし生かしたままならば、ここに来る!イヤ、もう来てるかもしれんぞ!?」

「というか、もう来てるぞ・・・奴らは。入り口に待機させていた屑ヤミーも倒されたようだしな」

「なっ!?」

リュウギョクの報告に森は表情を凍らせる。

「でもその方が都合がいいんだよ」

そこへ鬼凛が口を挟む。

「表立って人殺しなんてケッコウメンドくさいのよね。だったらこ

の中に引き寄せて始末したほうが”男性一人、女性一人、少年達五人が行方不明”で簡単に済むの」

（果たして上手くいくかどうか）

鬼凛の腹が読めたのか、リュウギョクは成功率を脳内でシュミレートしている。
が、やはり成功率は低いものしかでない。

「ここは火影の民が作った地下の世界・・・・・・彼らのお墓には一番ピッタリだと思うのよ。んーーっ！ナイス！鬼凛ちゃん、賢くてカワイイーーっ！」

きゃははは！と笑いながら鬼凛は締め括った。

「（馬鹿女が・・・）よかろう・・・だが今度奴らを殺し損ねた時は・・・貴様らも紅麗のようになる事を忘れるな」
「『どうぞ――――ー御自由に』」

螺閃は鬼凛に代弁してもらう。

「失礼します」

そして持ち場に戻っていった。

その後姿をみて、煉華は笑っていた。

「何を笑っている？煉華」
「パパ・・・あの人達も殺すの？」
「・・・・・・・・・・さてなァ・・・・・・・」

質問に答える際、森の表情は実に残忍としていた。

（素材としては素晴らしいな。素材としては、だが）

そんな森を、リュウギョクは大きすぎず小さすぎずの評価をしていた。

「・・・・・ねえ、パパ、どうしてさっきあれだけで許したの？あの人達・・・悪い奴をこの中に入れちゃったんでしょう？言ってくれれば煉華が殺してあげたよ？」

「ふふふ・・・！」

「なにを笑っているのだ、リュウギョク」

煉華をあざ笑うリュウギョクに森が腹を立てる。

「煉華一人では、火影全員を殺すことはできん。ましてブライや鑢七実（グリード）がいるとなれば、敗北は決定したも同然」

「そんなことないもん！煉華がんばるもん！！」

煉華は可愛らしい仕草と口調で反論する。

「・・・・・そういう言葉は私に一度でもいいから、勝ってから言え」

「う・・・っ」

リュウギョクが同盟の話を持ちかけたとき、森は勿論煉華とリュウギョクを戦わせた。

当然、煉華の惨敗、リュウギョクの圧勝となったが。

「だが・・・だがリュウギョクよ！あの螺閃という男は別格だ！奴の力は、ある意味、紅麗をも凌駕する！」
「・・・・・・・・・・・・・」
森の言い訳がましい言葉に、リュウギョクはただただ沈黙した。

＊＊＊＊＊

その頃火影一向は盗賊らの言った分かれ道に直面していた。

「あの盗賊の言ったことが本当なら、あとは二手にわかれて双方両方に行くかだけだな」
「チーム分けってことか」
「はい！はァい！！」

柳が小学生ばりに手を挙げる。

「ジャンケンがいいな！」
「そんな大事なこと、そんなもんで決めんな！！」

土門がイチャモンをつけた結果。

「うえ～～っ、うえ～～ん！！」
「ジャンケンでいいじゃねーかボケ！！」
「殺すぞ！！」
「死ね！」
「ふがっ！あああああん！！」

柳を泣かし、烈火と水鏡と小金井からたっぷりとリンチをくらってました。

（（（（・・・なにかが間違ってる・・・））））

刃介、七実、風子はその光景に呆れと違和感を感じた。

まあ、とりあえずは・・・・・・

「グーとパーだけな。ジャーン・・・ケーン・・・」

ジャンケンで決めることになった。

「「「「「「「「「「ポイっ！！」」」」」」」」」」

パー組
烈火、土門、柳、刃介

グー組
水鏡、小金井、風子、七実

に決定した。

「駄目だ！！」

が、土門が異議を申し立てる。

「俺は風子様と同じが「ワガママぬかすな！！」

しかし、結局変わらないものは変わらないのである。
兎にも角にも、、これでチーム分けは完了し、パー組は左、グー組は右へと進行していった。

「あ、七実」
「はい、なんでしょう」
「コアメダル、貸してくれ。残りの全部だ」
「いいですよ」

七実は懐から十二枚のコアをだし、刃介は右腕をグリード化させてそれらを吸収する。

「それからだな」

（（（（（（まだあるの？））））））

「これ、持っとけ」

刃介は七実に緑色のジュース缶を渡した。
そう、バッタカンドロイドだ。

「これは？」
「通信機だ。なにかあったら使え。こんな環境じゃ、携帯電話は使えんからな」
「委細承知。ではまた会いましょう」
「おう！」

＊＊＊＊＊

んでもって、パー組の進行具合はというと・・・・・・。

「――ポケ～～～――」

っとしたモヒカンがいた。

「いつまでボケてんだ！しゃきっとせんかい、腐乱犬（フランケン）！」

土門（フランケン）は威厳もなんもない敬礼をした。

「こっちは戦闘できる人数が一人少ないんだからよ、頼りにしてるぜ、土門」

それを聞いて、土門をハッとなる。

「ああ・・・そうだったな・・・・・・（あのちっこいお姫様を・・・助けてやんなくちゃな・・・）」

「見て三人とも！広いトコに出るよ！」

柳の言うとおり、一同は不自然なまでに広い場所にでた。

洞窟というには妙なものを感じるほどに整備もされている。

「いらっしゃ～～～い！」

「！！」

そこで待ち受けていたのは、

「へっへぇ・・・運がいいぜ、こりゃ・・・・！土門がいらぁ・・・・」

ポッキーチョコを食べながら待っている、恰幅のよい長髪の男。

「出やがったな、牙王！」

「あぁ、七実にボコられた噛ませ犬」

――ブチっ！――

「誰が噛ませじゃゴラァァァ！！」

刃介の言葉に牙王は激怒して殴りかかろうとするも、刃介はあえて牙王をギリギリまでひきつけると、指を牙王に向けて

「忍法爪合わせ」

――シュン！――

――ザクっ――

「ってあぶねぇ！」

突如、刃介の爪が刀のような鋭利な刃となってきたのだ。

牙王はとっさに避けて顔に爪がかすった程度ですませた。

「ほほー、意外にやるな」

肉体の生理現象を制御し、爪を好きな時に好きな長さ、好きな鋭さ、好きな硬度で伸ばせるのだ。もっとも、回数や時間に限度がある。

「テメー、なにもんだ?」
「我刀流だ」
刃介は不適に笑った。
そして、メダルが投入されたドライバーを装着する。
「悪いがこっちは火急の用があるんだ。あっさりと決めさせてもらうぜ」
ローグレイターを傾け、ローグスキャナーをてにもつ。
「変身」
スキャンした。
≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＥＮＢＡ≫
≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ!ＲＩＯＴＥ!ＲＩ・Ｏ・ＴＥ!≫
不可思議な音が部屋に響き、強欲な戦士は現れた。
「・・・・・おかしな魔導具を使いやがる」
「生憎、魔導具とか違う」
「・・・まあいい。鑢七実をぶち殺す前座には打ってつけだ」
牙王は自分に恥をかかせた七実も抹殺対象としていた。
「テメーを殺す前に、見せてやるモンがあるぜ」
牙王は自分のすぐ後ろにある物を、手にとって見せた。

それは大きなビンだった。

なかに入っていたのは、

白骨化した首だった。

「きゃあああああぁぁぁ!!」

「くっ・・・首!?」

柳は悲鳴し、烈火は驚愕する。

「この・・・この首は・・・この首はなぁ・・・・・・俺の・・・俺の弟・・・石王の首なんだよ」

牙王は別人のような表情で涙を大いに流し、説明した。

石王(せきおう)というのは、烈火たちが火影や魔導具と関わりだしてまだ間もない頃、拉致監禁された柳を救出すべく紅麗の館に侵入した際、土門が初めて倒した魔導具使いであり、石胄を用いて土門を苦しめた男である。

「弟!?石王って紅麗の館にいた、でっけぇ奴のことか!?」

「あぁそうさ。テメーのせいで石王は、クソバカ紅麗にこんな姿にされちまった。あの野郎は死んじまいやがったけどよ・・・まだ復讐する人間は残ってる!

まだ牙王は知らない。紅麗がまだ生きている事を。
そして何より、そのことを刃介が知っている事を。

「てめぇだ、土門!!首を斬りとって!ビン詰めにしてやるぜ!そしてあの女も、それを邪魔した報いを受けさせてやる!まずはそこの仮面野郎を始末してから、土門⇒鑢七実の順番で殺してやる!!」

牙王は実に残忍な表情で叫んだ。

「フフフ・・・、フハハハハハ」

その時、ブライが牙王をあざ笑うかのように、笑い出した。

「なにが可笑しい?糖分足りねぇのか?チョコ食うか?」

牙王は石棍を持った状態でブライに聞いた。

「いんや、お前の身の程知らずさが余りに度を越してるもんでな」
「あぁん?」
「言っておくが、七実の実力が正に神業だ。俺を瞬殺できるくらいでなきゃ、七実に勝とうだなんて、一万年早いぜ」
「・・・・・御託はいらねぇよ、仮面バカ」

牙王はそう言いながら、石棍を地面にトンと突いた。
その直ぐ横には石王の首。

「ここで見てるんだぜ、石王!兄が・・・この牙王が!仇をとる華々しいファーストステップをぉぉ!!」

牙王はブライを未だ前座扱いして突進してくる。

「バカはお前だぜ。・・・・・ッハァァアアアア！！」
「！！？」

ブライの口から吹き出された龍之息吹。
それを予想外の射程を見せて石棍以上のものとなり、牙王に降り注いだ。

「うおおあああ！！」

予想外の攻撃方法に牙王は痛みに耐えながら攻撃範囲外に脱出する。

「ふーん、今のを避けるとはな」
「嘗めんじゃねぇぞコンニャロぉぉおお！！」

牙王は石棍の核を光らせ、地面から岩石製の巨大な腕を出現させた。

「周囲にある石を自由に操るってのは本当みたいだな。その能力でここも整地したってことか」
「潰れろォォォオオオ！！」

石の腕はブライを握りつぶそうとする。

「甘ったるいな、こんなやり方じゃーよぉ」

ブライはテンバレッグの走力で石の腕の後方に回り込み、メダルを換装する。

「まだまだーーーッ！」

牙王は諦めずに、もう一本の腕を発生させて追撃しようとする。

≪ＢＡＫＵ（バク）・ＭＡＭＭＯＴＨ（マンモス）・ＩＮＯＳＨＩＳＨＩ（イノシシ）≫

≪ＢＡＭＡＨＩ（バマーイ）・・・・・・ＢＡＭＡＨＩ（バマーイ）！≫

ブライの頭と腕と足は一気に重厚なものへと変化した。

赤い複眼が鈍く光る頭、無骨な斧が装備された両腕、今にも猪突猛進しそうな両脚。

これぞ、ブライ・バマーイコンボ。重量系コンボである！

「姿変えたからってなんなんだよ！！」

牙王はさらに石という石を操作して、ブライを巨大な石棺のなかに閉じ込めた。

「暑さ１０００ミリの石の棺。悲鳴も聞こえてこないぜ！ジワジワと死ぬんだな！」

牙王は表面にブライの紋章が描かれた石棺を見据え、

「さぁ次はてめぇだ土門！！てめぇの首は俺の小便で満たしたビンに入れてやる！！」

牙王がそう言ってると、

――ガシャガシャガシャガシャガシャガシャガシャガシャガシャガシャ！！！！――

巨大な石棺が一気にひび割れ、

――ボガンッッ！！！――

崩れ果てた。

中からはブライが悠々とした姿を見せていた。

勿論牙王は反撃しようとするも、

「くッッ・・・！」

すぐに反撃せず、懐に手を入れる。

烈火たちは他に魔導具があるのかと思ったが、取り出したのは、チョコだった。

「お前ホント好物なんだな」

「俺はよ・・・スゲェイライラした時にこれを喰うんだ。自分を抑えられる薬みたいなもんでさ・・・・・・はぁ・・・あぁ・・・きくぅ・・・きくぜぇぇ！これで・・・補充完了だ」

するとさっきまで鈍りまくっていた核の光が再び輝きを取り戻す。

恐らく牙王の回復を示しているのだろう。

「ま、いいけどさ」

ブライは両腕に一本ずつある重刀（じゅうとう）『鉞（まさかり）』を装備した。

「気が変わった。少し遊んでやるよ」

「図に乗るなよ！この特撮野郎がああああああ！！」

石棍の力で幾つ物腕を出現させる。

しかしブライはそれをチャンバラゴッコのように振るう『鉞』によって次々と破壊する。
実にメンドくさそうに、実に他愛もなさそうにだ。

「この、野郎・・・・・・！！！」

牙王もこの展開が実に面白くないらしい。
表情がドンドン強張って行く。

「どうした？もっとこいよ？」

ちょっちょん、と手を使って誘ってくるブライ。
それを見て牙王は余計にイラっときた。なにしろウォーミングアップのつもりで戦っていたというのに、土門を相手にしたほうがマシとも思えるほどに苦戦させられているのだ。
おまけにブライはわざと牙王にトドメの一撃を加えないでいるようにも見える。

「うらあああああああ！！！」

牙王はさらに巨大な石の腕、巨大な石柱、巨大な石版。
などなどを次々に、ブライに命中させようとする。

が、

「ウウウゥゥゥゥゥオオオオオオオオオ！！！！」

ブライは天井に向って叫びだす。
すると、彼に牙をむいていた岩石たちが突然、猛スピードで落下したのだ。

牙王に命令もなしで。

それもそうだ、これはブライ・バマーイコンボの重力操作による物なのだから、牙王にわからなくて当然といえよう。

「な、なにが起こって・・・・・・うっッ！」

牙王は顔を下に向け、口に手を当てる。

当然あれだけやれば、体力もくるわけで・・・・・・。

「流石にこれだけ出血大サービスすると・・・疲れてくるな・・・」

牙王は再び、チョコをだした。

今度は板チョコだ。

「あふ・・・あぁあ・・・甘い・・・はうぁあ・・・にゃはっ・・・ひゃあ・・・キク・・・ンアァ・・・」

明らかに正常とはかけ離れた表情と声音でチョコを口にする牙王。

だが石棍の輝きは一気に取り戻される。

「ウウウうううあああああ！！！！」

叫びに叫ぶ牙王。

それを見た烈火は・・・。

「し、しかしなんなんだ？危なすぎるぞあいつ！チョコレート中毒者か！？」

もしかしなくてもそうです。

それもかなり重度の。

「石王・・・石王よォオ～～・・・！」

核の光が強くなると、周囲の石が牙王にくっついていく。

「お前の技で・・・お前の力で・・・一緒に戦おうじゃねぇかぁあ！」

「・・・・・・・・・」

ブライはこれといって驚かなかったが、烈火たちは驚く。

特に土門は大いに驚いた。

「せっ・・・石王!?」

そう、それは石王が魔導具・石胄の力で全身に石の鎧を纏い武装したそれと全く同じだったからだ。

もっとも、細部に違いはあるが。

「・・・・・それ、柳緑花紅が効くようだが、それじゃつまらねー。コイツで決めるぜ」

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

ブライは両手の重刀『鉞』を二本のダブルアックスから、一本のグレートアックスへと合体させると、大きく振りかぶり、

――ズドン!!!!――

地面に叩きつけた。

「教えてやるぜ。地表を操れるのは、なにもお前だけじゃないってことをよ」

「何を言って・・・・・・っ!?おいこら!なんだこれ!?」

重刀が地面に叩きつけられた途端、牙王の周囲の石達が全て、牙王を取り囲んで動きを封じていた。

ブライによって操られているそれらは、牙王の命令さえも頑として聞きつけない。

「クソっ!クソッ!クッソォォォオオ!!!!」

牙王の悔しさと絶望と怒りの叫びが響き渡れど、ブライはそれに耳を貸さず、重刀『鉞』を構えて、

「チェストォォォォオオ!!!」

掛け声を出しながら突進し、前に突き出された一本の武器の刃先は、牙王の鎧を容易くぶち破った。そして、牙王自身さえも向こう側の壁に吹っ飛ばして見せた。

音のほうは凄まじすぎて表現できないが、烈火たちが顎を外しかねないくらいに驚いてるところをみれば、それほどの威力かは明白だ。

「こ、殺しちゃったの・・・?」

柳は恐る恐る聞いてみた。

「いや、忍法足軽（にんぽうあしがる）を使って、今の一撃から重さを除去しといた。そうじゃなかったら、今頃あの中毒野郎（ジャンキー）はバラバラの肉片だったろうな」

ブライは実に淡々とした声音で説明した。

「とは言ったものの、回復して後ろから追いつかれたらあまりにウザいので、こうしておこう」

ブライは壁に叩きつけられ、ボロボロで疲労困憊で満身創痍な牙王に歩み寄り、指をパチンと鳴らした。
すると周囲の岩がこぞって変形しだし、牙王の体を石で固めてしまった。

「ついでにコレも壊すか」

そういって、石棍の核を握りつぶした。

「よーし、こんなもんか。行くぞぉ」
「なぁ、あんたホントにチートだな」
「人間の基準でいえばな」

烈火の言葉に悠長に答えつつ、ブライは変身も解くことなく、他のメンバーと一緒に部屋を出て行った。

そして、パー組が部屋を出て行くと、首から下を分厚い岩に閉じ込められた牙王は、その顔を涙と憎悪で歪めながらこう言った。

「すまねぇ・・・すまねぇ、石王・・・！だが・・・まだだ！この

怨み・・・忘れねぇぞ・・・・・・我刀流！！」

そして、

「ちくしょおおおおおおおおお！！！！」

ブライＶＳ牙王

圧倒的力量差にて、ブライの完全圧勝。

四人は天堂地獄を求め、また奥へと進む。

別ルートの七実達もまた、今こうしてる間に前に突き進んでいるのだから。

突入と呪いとジャンケン（後書き）

次回、仮面ライダーブライ

水脈とゲームとオカマ

バマーイコンボ
キック力：２１トン　パンチ力：１６トン　ジャンプ力：７０ｍ
走力：１００ｍを５．５秒
身長：２０５ｃｍ　体重：１１０ｋｇ　固有能力：重力操作と地形操作
必殺技：バマーイショッキング　属性：大地　カラー：灰色

バクヘッド
複眼の色は赤。他人の精神に干渉する能力があり、寝ている人物の夢世界（精神）に出入りすることも可能。重力操作や地形操作の要たる役割を果たす。

マンモスアーム
前腕部に強固な篭手を形成し、斧型の重刀（じゅうとう）『鉞（まさかり）』を装備できる。重刀『鉞』の重量は双刀『鎚』に匹敵し、ダブルアックスとグレートアックスの二形態がある。

イノシシレッグ
一直線に全力疾走すれば時速４０ｋｍものスピードで走れる為、突

進するのに有効である。

水脈とゲームとオカマ（前書き）

仮面ライダーブライ！
前回の三つの出来事！

一つ！天堂地獄が封印された地に、新生火影とブライと七実が突入！
二つ！ゾンビ化した盗賊より、天堂地獄の情報を得る！
三つ！ブライはバマーイコンボの力で、牙王を倒した！

水脈とゲームとオカマ

刃介らパー組が左のルートに進行している際、七実らグー組は右のルートを進行していた。

歩いてから暫くして、四人はちょっとした障害に行き当たることになった。

――ゴオォォォォォォ！！――

轟々と音を立てて流れる大量の水。

「なぁんでこんな地下に川があんのよぉ？」

「地下水脈というヤツだな」

「流れ、けっこー速いよ。落ちたらヤベーや」

「でしたら、こうしましょう」

七実は助走もつけず、

――ピョン――

あっさりと向こう岸にまで跳躍した。

忍法足軽を使い、自分の体重を零にしたお陰もあってか、着地は実に緩やかだった。

「さあ、皆さんも御一緒に」

「「「いや、できないから」」」

助走もなく、一っ跳びで川を渡ってみせる者などそうそういない。

「でもまあ・・・進むしかないっしょ！」

だが風子は腹を括り、軽快なステップで川の途中にある岩を踏み台にし、向こう岸に渡って見せた。

水鏡も風子が着地する少し前から既に川を渡りきり、余裕の表情である。

残るは小金井一人だ。

「さて、最後は小金井君ですね」

「あの、七実姉ちゃ「小金井君」・・・はい」

自分のことを姉ちゃんと呼ぼうとした小金井に七実は

「私を姉ちゃんと呼んで良いのはたった一人だけです♪」

「Ｙｅｓ，ｓｉｒ！」

なんか軍人みたいな返事をしてしまう小金井。

それもそのはず、七実の邪悪な笑いを真正面から見てしまったのだから。

だが小金井はすぐに自分の雰囲気を戻してこういった。

「俺・・・カナヅチなんだけど・・・」

「「「・・・・・・・・・」」」

この状況でカナヅチ＝失敗すれば溺れる。

「でしたらもう跳ぶしかないのでは？」
「そうだよ！身のこなしの鋭いあんたなら大丈夫！水に落ちなきゃいいのよ！」
七実の案に風子が賛同する。
「がんばって。溺れたら人口呼吸してやるから」
「／／／／／／・・・いらない。土門兄ちゃんに殺されたくないし」
顔を赤らめながら、小金井は返す。
そして覚悟をきめたのか、
「てや！！」
掛け声をだしてジャンプする。
順当に行けば、小さめな足場に足を乗せて再びステップを踏める。
はずだった。
――ドッ――
「！？」
何処からか飛来した一本の短剣（ナイフ）が、小金井の足に突き刺さった。
「こっ・・・小金井ーーっ！！」
激流に流されていく小金井を心配して風子は叫ぶ。
「飛び込むぞ風子、鑢！！」

「う、うん！」
「仕方ありませんね」
三人は小金井を救出しようとする・・・・・・が
――カンッカンッカンッカンッカンッ――
複数の短剣（ナイフ）が三人の足元に投降される。
その方向へと振り返ってみると、人影が一つ。
「逃さない・・・・・・私の獲物・・・・・・」
底冷えするような声音で、その人物は呟く。

＊＊＊＊＊

一方その頃、左ルートと右ルートの選択と地点には、二体の異形がいた。

『・・・・・我等が主の仲間が、流されたようだな』
『よし、あっしは流された小僧の方へ行こうぞ』
『ならば、ワシはあの小娘を手助け致そう』
『では、折角貰い受けたこの短命の身。派手に使い散らすとしよう』

二体の異形はそういって右ルートに進んでいった。

＊＊＊＊＊

小金井にナイフを投げ刺したのは、両手に奇形な刀型魔導具と思われる武器を逆手に持ち、体中に傷跡のある短髪の女だ。

その女はハイライトの無い瞳でコチラをじっと見てくる。
すると女は、自身の腕を上げて、その指で風子を指差す。

「女・・・お前が獲物だ。来い」
「えっ・・・獲物ォーーっ！？」

いきなりの御指名に混乱する風子。

「風子さん」

そこへ七実が話しかけてくる。

「こんな時になんですが、このような事態に備えて助っ人を二人程用意しています」
「助っ人？」
「もう既にこの洞窟に入ってきていますが、よければその内の一人をお貸ししますが」
「・・・・・・・・・いや、気持ちだけ受け取って『それでは困る』って、ンギャアア！！？」

行き成り登場してきたのは、先ほどの異形の一体。

なんだかイタチのような印象をうける姿形をしている。

「思ったより早かったですね、カマイタチ」

『七実様の為です』

その異形、カマイタチヤミーは七実の眼前で傅く。

「まさか、そのイタチちゃんって・・・・・・」

「私のヤミーです」

そう、七実は刃介の家に居候してからの数日間で、こっそりとヤミーを育てていたのだ。

それも二体だ。

『七実様、あの小金井という少年には、もう一人のほうが向っています』

「そうですか」

カマイタチヤミーは悠々と説明し、七実も淡々と聞き入れる。

それをみた傷跡の女は

「おい、面白そうだから、風神の女とそこのイタチ、纏めて来い」

などと言ってきた。

「ん～～～」

風子は頭を悩ませる。

「・・・・・わかった。一緒にやろう、イタチちゃん♪」

『あぁ、宜しく頼む』

「では風子さん、カマイタチ。ここは頼みますよ」
「僕らは、もう一体のヤミーとは別に小金井を捜す」
「はいはい、早くいきな。・・・・・みーちゃん、七実ちゃん」

風子は突然テンションを下げてこう言う。

「小金井に会ったらさ・・・言っといて。ごめんよって・・・無理させちゃってゴメンって」
「それは私が言うべきことですよ」
「というか、僕らは伝言板じゃない。生きて帰って自分で言うんだな」

それを聞くと、風子は清清しい笑顔で

「あんたらも頼みがいの無い奴らだねぇ」
「かもしれませんね」

――バシャン！×2――

七実は自嘲気味にそういうと、水鏡共々、激流のなかに飛び込んでいった。

（小金井を頼むよ、二人とも！・・・・・・さーて、風子ちゃんにイタチちゃん、発進！！）

風子は女らしさが微塵も感じられない豪快な歩調で歩き、その隣を

カマイタチヤミーが歩いた。
そして到達したのは

入り口と出口以外は全て・・・・・・針の寧ろと化しているフィールドだった。

「な・・・なんだぁこりゃあ!?」
「針の山・・・・・・・」

そこへ傷跡の女が、鋭くとがった石筍に足を乗せてながらボソっと呟いた。

『地獄に存在するとされる場所・・・・・・ここは正しくそれだな』
「そうそして・・・我々の戦いに相応しい場だ」

意外にもこのカマイタチヤミー、けっこう博識っぽい。

「紹介が遅れた。私は緋水(ひすい)。戦いを求め、此処へ来た」
「霧沢風子!天堂地獄、壊しに来たよ!!」
『カマイタチヤミー。七実様のお言葉に従い、霧沢に助太刀致す』

こうして、魔導具使いＶＳ魔導具使い＆ａｍｐ;ヤミーという有り得ない構図が出来上がった。
に見えたが、

――ボガァァン!!――

向こう側の出口から、なにかが変な音を立てて現れた。

全身の容姿を見て連想するのは、

「飛蝗（バッタ）・・・？」

『甲虫と蜂と稲子のヤミーだ』

その異形、カブハチナヤミーは即座に訂正した。

「言っておくが、私らも助っ人を使わせてもらう」

緋水は無感情に告げる。

というか、このような助っ人がいなければ、カマイタチヤミーの参戦など最初から認めていなかったであろう。

「へぇー、あんたらにも心強い味方がいるんだね」

「不本意ながらも・・・だがな」

その言葉と同時に、この二組は同時に動き、攻防を繰り広げる。

風子は風の爪で緋水に攻撃しようとするも、緋水は魔導具でそれを受け止め、逆に反撃するも風子は寸でのところでジャンプして避けた。

カマイタチヤミーもカブハチナヤミーと凄まじい一進一退を行っている。

強烈極まる旋風を引き起こすことで真空の刃を連続発射するも、カブハチナヤミーはそれを両腕から連射する太い毒針で相殺していた。

「・・・強いな・・・お前」

「これでも火影の一員さ！ウチには弱いやつなんていないのだ！」

『随分と、図に乗ってくれているな』

『それはどうかな？同種混合型』

とりあえず両者は互いの力量を確認したようだ。

「強くば生き・・・・・弱くば死す。果たして、どちらが生き残るのだろう・・・？」

『無論俺たちだろう？』

緋水は不気味に笑い、カブハチナは奇妙に笑い、腕を振りかぶった。

――ゴドゥゥ！！――

短く太い音がする。

それは緋水の武器の刀身と、カブハチナの毒針が天井の鍾乳石を斬ったり撃ったりしたせいで、一気に崩れ落ちてきたのだから。

「げげ！？」

『拙いな』

風子とカマイタチは危機感を正常に持つ。

が、緋水は戦いを賭けやゲームとしているが故、死を恐れない。

カブハチナのほうはわからないが。

「無茶苦茶な奴だね、あんた・・・・・・」

『完全に自分達のことさえも考えていなかったな』

風子とカマイタチはギリギリのところで鍾乳石を避けた。

それに対し、緋水はというと

「まだ死なない・・・フフ・・・強い・・・面白い・・・この獲物、楽しい。フフフフフフフフフフフフ・・・・・・」

（この姉ちゃん怖・・・）

このうえなく危ないスマイルをし、カブハチナもそんな緋水の壊れぶりに心で大量の冷や汗をだしていた。

すると緋水はさっきの攻撃の際に、何時の間にかついてであろう腕の傷から流れる自らの鮮血に気がつき、それを舐めていると

「風子・・・といったな？」

風子に語りかけてくる。

「ロシアンルーレットを知っているか？」

「拳銃に弾丸を一発だけ入れて、互いに一回ずつ引いていくっていうアレだろ？」

「そう、相手が死ぬか自分が死ぬか・・・運のみが左右される死のゲーム」

（（悪趣味だが、欲望が渦巻きそうだな））

説明を聞いて、二人のヤミーの思考は一致していた。

「極限の緊張感・・・恐怖感・・・助かった時の安堵感。戦いと同じだとは思わないか？」

――ドゴン！！――

緋水は前ふり無しに風子に切りかかる。
勿論風子はそれを避けて見せた。

「今、お前は避けることができた。弾丸が入ってない弾倉を撃鉄が打った。そうとれるとも思わないか？」
『要するにこの女は、戦いを人間ゲームとして捉えているのさ。自分という最大のチップを賭けた、運に左右される人生の一時ということだ』

カブハチナはそう要約した。

「当然・・・」

緋水は刀身をふって、近くにある石筍を斬った。
石筍の断面は鑢がけされたように綺麗で、彼女の腕前を示している。

「互いの力が拮抗している程・・・・・運に左右される確率は大きくなる」
『多分オメーらとは楽しいバトルが出来るだろうぜ！』

――ブンッッ！！――

――バチバチ！！――

緋水は石筍の先端を、カブハチナは頭部の角から雷撃を飛ばす。
風子とカマイタチは表情を厳しくし、

「鎌鼬！！！」
『旋風斬！！』

二人は風の刃を引き起こし、石筍と雷撃とで相殺させる。

「言いたいことはわかったけどさ、好きになれない！運の一言で済ませちゃったらおしまいでしょ？」

（それは表側だけだと思うが・・・）

風子の言い分にカマイタチは心中で反論する。

「ホラ、運動会とかでも、それまで一生懸命やってきたっていうのがあったりさぁ、ボクシングとかでも負けられないっていうのがあるじゃない？」

なんか妙な例え話をだしてきた。

「そーいった気持ちが運とかを越えちゃうってのもあるぞ！モノサシじゃ計れないのよ！」

『おい、後ろだぞ』

「へ？」

そう長々と語ってる間に、緋水とカブハチナは後方に回っていた。

『突風弾』

カマイタチは即座に腕から強風を引き起こすことで、後ろにいた緋水を吹っ飛ばす。

が、カブハチナは違った。

――ヂグッ！――

聞くのもいやになるような音がした。
その針が刺さったのは、

「ッッ！・・・い、イタチちゃん！！」

カマイタチだった。

『ぐぅ・・・！』

毒針が刺されたのは三秒足らずだが、毒を送り込むには充分だ。

「霧沢風子。・・・そう言った気持ちを運命が上回るのが現実だ。
実際、今のお前はくだらない話をして油断し、味方に損害を与えた。
・・・・・こんな話をしよう」

すると緋水は一方的に語り始めた。

裏麗予備軍・・・・・戦いの中に投入される為、集められた人間。
日常の中では生きられぬ者・・・過去を捨てた人間達が、そこには沢山いた。

想像を絶する地獄・・・・・自ら望んで死んだ者も少なくなかった。
生き残った者だけが、人間から戦士として調教され続けた。

「・・・なぜ・・・あの地獄のなか、私のような脆弱な人間が生き続けてこられたか・・・あのときは・・・もしかしたらお前の言う気持ちが・・・運命を上回っていたのかもしれない」

＊＊＊＊＊

回想、？年前

「緋水！」

当時、まだ傷跡が顔にしかなかった緋水に呼びかけるものがいた。
その声は実に爽やかな男のもので、とてもこの場に相応しいものではなかった。

「今日もお互い、生き残れたなあ！！」

ヒデキ・・・・・互いを蹴落とすのが常の掃き溜めのなかで、彼らは互いの生を喜び合った。
彼の笑顔を見る為に生きている・・・そう思えた。

（愛シテイル・・・・・私ハコノ男ヲ愛シテイル・・・・・）

「いいか、緋水？なにがあっても生き延びろ！例えその為に人を殺めねばいかん時もあるだろう！仕方ないんだ。人は生きる為に、獣や魚の肉を食う。生きる為に奪わなきゃいけない命だってあるんだ！」

それは正しく弱肉強食の世を生きているからこそ言える台詞であった。

「生きろよ、緋水。お互い生き延びるんだ・・・」

それがヒデキと緋水の間にある「気持ち」「絆」「愛情」だった。

だが運命は血に汚れた者に鉄槌を下したのかもしれない。

森光蘭から告げられた最終テストによって。

その際の生存者は３０名、合格定員数は１５名。

つまり、一対一での死合だ。

口と鼻を覆い隠す拘束具、耳には詰め物、暗闇の中でのテストが始まった。

五感を失った中での死合・・・・・・・・・・・・その戦いに緋水は、今尚も身体に残る傷を負いながらも、敵の首に一撃を与え、血に染めた。

「勝者、緋水！！」

そして、照明がつけられると、取り戻した視覚は緋水に残酷極まる運命を用意していた。

緋水が殺し、緋水に殺されたのは

恋人のヒデキだった。

１／２９の悪夢。

その時、何かが彼女の中で弾けた。

――ああ、こうなる運命だったんだ――

――戦いは・・・人生はゲームで、私が勝って、彼は負けたんだ――

＊＊＊＊＊

回想終了

「・・・それから私は敢て危険な任務にばかり志願した。でも・・・周りが死んでいくなか、私は何時も生きて帰った。不思議な気分だ。恐怖と快感が入り混じっている・・・・・私にＧＡＭＥ（ゲーム）　ＯＶＥＲ（オーバ）ってあるのか・・・？私が一発だけ弾丸の入った銃で死ぬことってあるのか？」

緋水はハイライトの消え失せた瞳で、
カブハチナは足を力を込めて、

――ザシュゥウ！！――

――ドゥガァア！！――

「うぁあああああああああっ！！」
『ぐぉぉあ・・・・・・！！』

風子の左腕を突き刺し、カマイタチの身体を思い切り踏みつけた。

「私はこれからも試し続ける。戦慄（ゲーム）の中で・・・・・・」
『そしてオメーらは、その実験台』
――ズボっ・・・！――
刀身が腕から引き抜かれる。
「次は・・・右腕か？」
「冗談！！そう簡単に乙女の肌を何度も傷つけられちゃ・・・たまんないよォ！！」
『ワシもこれ以上、時間を食うわけにはいかん！！』
風子とカマイタチは風を引き起こし、敵との距離を強制的にとった。
――キュッ――
――チャリン、チャリン――
「あんたのことはよくわかった。でも――」
『ワシらもここでゆっくりしておる暇は無い！！』
風子は左腕に布を巻いて止血する。
一方カマイタチの身体からは数枚のセルメダルが出ていた。
緋水はゆっくりと腕をあげ、魔導具の刀身を超長距離にまでにまで伸ばした。
「神慮伸刀（しんりょしんとう）」

それが魔導具の名前だ。

「持ち主の意思を読み取り、どこまでも伸びる刃。私の唯一のパートナーだ」

『ま、俺はただの捨て駒だがな』

緋水は伸ばされた刀身、カブハチナは両腕の毒針と角からの雷撃で天井の鍾乳石を攻撃。

当然、鍾乳石たちは凶暴な刺客となって、敵味方関係なく降り注いだ。

「うぎゃっ！まーたこいつは・・・！！」

『また捨て身か！？』

『その通りだな』

――ザゥ！――

緋水とカブハチナは地をけり、

――ゴッ！！――

見事な打撃と蹴撃を風子とカマイタチに食らわせる。

「あうっ！」

『こやつ等・・・！』

しかし、その攻撃を行った二人にも洗礼はあった。

緋水は、右肩と右足に鍾乳石の破片が突き刺さっており、カブハチナも身体の到る場所から少量のセルメダルが音を立てて零れ落ちていた。

「命知らず、ここに極まれり・・・だね。ゾットすらぁ・・・・・・」
「死など怖くない。試してみたいのさ。私がどこまで勝ち続けていられるのかを」
緋水は相も変わらずハイライトの無い瞳をしている。
「違うね！試しているんじゃない。求めてるんだろ？緋水――あんたは死に場所を求めてるんだ！死を望んでるんだ！」
「・・・・・・・・・」
緋水は答えない。
「そんな命知らずは勇気とはいえないし・・・賛同できないんだよね。だから決めた！風子ちゃんは勝つ！！　＋・・・あんたも死なせてやんない！！」
『全く、七実様も、酔狂な連中についたものだ』
「そう言わないでさ、一緒にいくよ！」
風子とカマイタチは両腕を大きく振った。
「風神！！！」
『旋風斬！！』
二人の引き起こした風は一直線に突き進む。
その進行先にいる者
「お前に何がわかる？聞いたような事を言うのはやめろ、風子！」
『甘ったるいんだよ！』

緋水とカブハチナは力技で強引に風を止めた。

「勝者は生き、敗者は死すのみ！その覚悟の無いお前の楽観的思想こそ・・・賛同できん！」

『新生火影ってのは仲良しグループなのか？』

あくまでも互いの思想は合間見えないようだ。

『ならば、ワシらはこう提案する』

「来なよ。その刀で刺せるモンならやってみな、緋水」

『ついでに、そこのヤミーにも、この案に乗ってもらうぞ』

「・・・どういうつもりだ？風子・・・」

『決着を早々をつけたいってことか？』

『その通り。次の一撃でワシらに致命傷を与えればそちらの勝ち。できなければこちらの勝ちだ』

カマイタチが丁寧に説明する。

「・・・言葉の意味がよく理解できないな。なぜ刺さねば私が負けるのか・・・しかし、敢て乗ろう！」

『次で幕にしてやる！』

緋水は低姿勢になり、刀身の切っ先を風子に定めカブハチナも角の電気を腕の毒針と脚部に移し、それを足元にゆっくり落とし

「神慮伸刀！！風子を、貫け！！！」

『雷蹴針（らいしゅうしん）！！』

神慮伸刀の刀身は凄まじい勢いで伸び、電気を帯びた毒針も勢いよく蹴られ、まっすぐに風子とカマイタチに襲い掛かる。

二人はそれを待ち望んでいたかのような面持ちであり、容易く一撃をかわした。

そして、

「勝利宣言!!ＲＯＣＫＥＴ　ＤＩＶＥ　ＲＥＡＤＹ」

『これで決まりだ』

「『ＧＯ!!』」

見事なまでに息をそろえ、風神と左手から凄まじい突風を起こし、正しくロケット噴射の勢いで突貫してきた。

（（風の力で、空中を飛ぶ!!？））

余りに想定外な行動に驚き、思わず接近を許し、

全力で殴られた。

「・・・・・・・・・そ・・・うか」

緋水は気づいた。

「神慮伸刀が伸びれば伸びるほど・・・私の懐に入りやすくなる」
『それに、あんな規格外な行動をとることで、俺たちの動きを鈍くする』
「あの時の風神と旋風斬は私達への攻撃ではなく、私達の懐に入る為の道を作る為だった」

もっとも、その為に風子もカマイタチも随分体力を使ったようだが。

「・・・フ、お前らこそ相当の命知らずだ、風子・・・無茶するのはお互い様だったようだな」
「私の場合はね、生まれつきなのさ！」

実に明るい笑顔で風子はそういった。
それを見ていたカブハチナは

『・・・ま、所詮こんなものか。緋水が負けた以上、俺の命もここまでだな』
『なに・・・？』
『リュウギョク様からの御命令でな、もう俺は存在意義を失くした。先に逝かせてもらう』

――ジャリィィィン！！――

そう言い遺し、カブハチナヤミーは大量のセルメダルへと還元され、二度と動くことはなかった。
緋水は、それをみてゆっくりと立ち上がった。

「どこに行くんだ?」
「ゲームは終わったんだよ。私のゲームオーバーだ。末路は彼と同じだ」
その表情は実に虚しそうで、悲しそうだった。
「(末路・・・)あんた・・・やっぱり!!」
緋水は予測された通り、次々と跳躍を繰り返し、高台にあがる。
「緋水!!」
「来るな!!・・・私は負けた・・・・・戦いという賭けに負けたんだ」
自分と他人に言い聞かせるような言葉。
「やはり永遠に続くものなどありはしない。どこか・・・安心したよ。このまま勝ち進んでいたら、快楽を伴った恐怖に押し潰されていただろう。これで楽になれる」
そして緋水はこう思った。
「死を望んでいる」
・・・お前にそう言われた時・・・自分の気持ちを理解した。
そうだ・・・そうだったんだよ・・・ヒデキのところへ――――
自ら命を絶ったらヒデキに怒られそうな気がした・・・

何があっても生きろ
・・・彼はそう言ったから。

賭けに負けたら死ねる・・・そう思って・・・思い込んで戦っていたんだ・・・
終わったよ・・・・・・ねぇヒデキ？

もう・・・いいよね・・・・・・

そして緋水は身を投げた。
真下にあるのは、大きく鋭い石筍の大針。

『させん』

――バッ！――

「や。ヤミー！？」

カマイタチは、空中で緋水を突き飛ばした。

――グサッ！――

そして嫌な音が聞こえた。

「い、イタチちゃん！！」

風子は急いでカマイタチに駆け寄る。
石筍の大針が彼のどてっ腹を貫いていたのだから。

しかしカマイタチは無理矢理に状態を起こすことで石筍をおり、セルが溢れ零れる身体を引き摺りながら緋水に歩み寄る。

『緋水、今ワシがお前を助けたのは何故か・・・わかるか?』

「・・・・・・・・なぜ・・・なぜ死なせてくれない!?お前に邪魔する権利があるのか!?」

『天誅!』

――ゴンッ!――

「いた・・・ッ」

カマイタチの拳骨が緋水の頭頂部に炸裂。

『理由としては、命令されたからだ。ワシは宿主の中に居た際、七実様にはこう言われた、救いようのある奴は死なせるな・・・・・・これは七実様からの厳命だった』

「な、何故そんな命令を・・・?」

『さぁてな。ただ、七実様はお前ら人間のことを知りたがっている。人間の欲望に秘められた何かを・・・・・・だから助けただけだ。どの道、ワシらヤミーは短命の身。こんな感じで死に逝くのも悪くないと思ったのもあるがな』

カマイタチは無理矢理に顔の形を変えて笑った。

「どうして・・・笑えるんだ・・・?あの時・・・私がヒデキをこの手で殺してしまった時・・・マスクをとった彼の顔も、笑ってた

んだ・・・・・・？」

それは緋水の心に引っ掛かり続けていた疑問だった。

「教えてくれよ！なんでなんだ！」

そう叫ぶ緋水に、風子は彼女を優しく抱きしめた。

「何があっても生きろ・・・とその人は言った。途中であんただって気付いたんだね・・・・・・どういう結果になろうとも・・・あんたが生きることを望んでたんだ。”生きようっていう気持ちを持て！”運命なんか変えちまえ！」

「ヒデキは・・・私の為に・・・自分から死んじゃったんだよ・・・？それとも・・・馬鹿なのかな・・・風子・・・？」

緋水はそう呟き、

「うあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁ！！」

思い切り泣き叫んだ。

ただただ、想い人との、短くも楽しかった日々を思い出して。

それは否定のしようもない、幸福と不幸の記憶だった。

そして

『霧沢』

「・・・なんだい？」

『ワシと奴のセルメダルを、七実様に届けてくれ。遺言と思ってくれていい』
「わかった・・・・・・必ず、届けるよ」
『感謝する』

――ジャリィィィィン！！――

そうして、カマイタチヤミーもセルメダルへと還元された。

そうして、十数分後
風子は針の山から出て、緋水から教わった方向に進んでいた。

ヤミー二体分のセルメダルを運ぶには、風子の黒いヘソ出しタンクトップ一枚に短パン紛いなジーンズという恰好は余りに不適合で、どうしようかと思っていたとき、緋水はメダルを入れて持ち運ぶのに丁度良さそうな袋を風子に渡してこういった。

・・・こっち側の穴から先へ進め。川の流れの方向だ。
一緒にいた三人とも何時か合流できるはずだ。

一本を風子・・・お前に預ける。
お前とカマイタチには借りが出来た。
いつか返すときまで使ってくれ・・・それが――――
私の生きる証だ。

「右手に風神。左手に神慮伸刀！なんかカッコイイ！」

とはしゃぎつつも、風子はこう思っていた。

（負けんな・・・緋水！そして、見ててよ・・・イタチちゃん！）

＊＊＊＊＊

一方、激流にのまれた小金井は

「あ？」

洞窟のどこかの砂浜っぽいところで、一枚の毛布を掛けられて眠っていたが、両目の端に雫を浮かべた状態で眼が覚めた。

「それにしても、ここ・・・どこ？」

周囲を見渡しても、岩や砂ばっかりだ。

（確か俺はえーと。水鏡と風子姉ちゃんと七実さんと一緒で、川を渡ろうとして失敗して落ちて・・・失敗・・・っていや足にナイフが刺さったからで・・・・・・）

色々と脳内を整理中。

「あれ？」

ふと目に付いたのは、ナイフが刺さった右足に巻かれた包帯。

『お、ようやくお目覚めかい？』

「もう大丈夫」

が、そんな疑問云々は一人の異形と一人の変質者の登場で吹き飛んだ。

「ウフ♪神威よん♪」

『あっしはカッパヤミーでさぁ』

裏麗の一人と、七実がはなったもう一体のヤミー。

「う・・・うわ・・・うわあぁああぁあああああぁ！！！」

「ちょっとォ、待ちなさいよ～～～！人見て逃げるなんて失礼じゃないかしら？」

逃げようとする小金井のベルトを掴み、ガッチリと捕まえる神威。

まあ、「人見て逃げる」とは言っても、一人だけ怪人がいるわけだが。

「な、なんでお前がここに・・・って・・・うわ！！オレ、上半身裸だよ！！なにをしたっていうんだぁ、何を！？尻小玉でも抜き取るのか！？」

パニックを起こす小金井。

「まだ何もしてないわよぉ」
『尻小玉を抜くなら上ではなく下を脱がす』
さりげなくツッコム二人。
「風邪ひかないように脱がせただけよ。もう直ぐ乾くわ」
確かに小金井のシャツは焚き火の近くで干されていた。
因みに、カッパヤミーは服が乾くまでの間、自分の素性を小金井に話した。
信用してもらうのにけっこう時間がかかり、危うく服が焦げるところであったが。
どうやらカッパヤミーと神威は小金井が寝てる間に一切戦いことなく、妙なことに意気投合していたらしい。
一体なにをどうすれば妖怪と変態の間にそんなことが起こるのかが、果てしなく疑問だが。
つーか、知りたくもない気がしたりもする。
「御飯、食べる？」
と、神威はキャンプやサバイバルで使われてそうな炊飯道具を手に持ってそういった。
炊飯道具の中にある白米はきちんと出来上がっているらしい。
とりあえず小金井は服を着て神威の提案に頷き、インスタントカレーを熱湯で暖められる光景を静観することにした。
――グツグツグツ――

「ウフ♪バーモンボカレ～～～♪」

神威はインスタントカレーをヒョイとつまみ出した。

「たーらら～♪たりぃーー♪あぁあんあ～ん♪」

「『・・・・・・・・・・・・』」

なんか意味不明な歌を歌う神威を小金井とカッパヤミーはとりあえず黙ってみておく事にした。

「おぉ～、彼のお口にぃ♪カレ～カレカレ～♪」

白米が盛られた三枚の皿に、それぞれ一袋ずつ、カレーを白米に盛って行く。

「なあ・・・鋼金暗器とってきていい？」

「アラ、予告奪回？正直な子ね。でもダメ～～。三人で一緒に御飯（カレー）食べたら、返してあげるっていったでしょ？」

といいながらカレーを差し出す神威。

小金井はくんくんとカレーの匂いをかぐ。

その際、彼からは獣の耳と尻尾生えて見えるのはどうしてだろうか？

「・・・・・しびれ薬とか入ってない？」

『心配御無用。あっしがずっと見てたが、神威はそんな物混入させてる仕草はありゃあせんぜ』

「そうよ！私は○○○する時は無理矢理しないの！今は○○○よりご飯！！」

「誰もそこまで聞いてない・・・・・」

色々と食欲を萎える言葉を二回も聞いてげんなりとする小金井。

（なんか・・・変な奴）

そう思いながらカレーを食べていると、神威は小金井を愉快げに見ている。

「な、なんだよ・・・？」

「食べ方カワイイ♪」

「ブバァァア！！」

（勿体ないな・・・・・・）

いきなりの発言に小金井、盛大に吹いた。

美少女や美女に言われたのであれば、この上ない萌えだったであろう。

しかし小金井を褒めたのは、モヒカンヘアーのオカマ。

なんかもう、色んな意味で願い下げだった。

「そうなの！！やっぱり男の子はカワイイに限るの！子犬のようにね！」

主張！これは主張である！

「・・・・・・・・ハァ・・・ユウウツ・・・・・・・」

ため息混じりにいった。

「ホントは私、貴方たちを殺したくないの。だってに好きになっち

やったんだもん」

「・・・・・・・・・・・・」

なんか小金井の表情がどんどん微妙に・・・・・・。

もっとも、カッパヤミーはそんなことを気にせず、カレーの最後の一口を食べているが。

「でもダメ。私と貴方たちは敵同士・・・愛し合っていても結ばれてはいけないのよ」

（早く終わらないかな～～）

なんか妙なＤｅｌｕｓｉｏｎ　Ｗｏｒｌｄ＝妄想世界に突入しているバカにカッパヤミーも飽きを感じ始めた。

「そう！！ロミオとジュリエットのように！！・・・・・・・・・・・・・・悲しいけど仕方ないのよね」

神威は寂しそうに呟き、鋼金暗器を小金井に投げ渡す。

するとカッパヤミーは小金井の隣に立ち、神威と対峙する姿勢となる。

「楽しい時間をありがとう。貴方たちとの思い出は忘れない。すごく・・・使い古された台詞、言っちゃおうかな・・・・・・」

神威は一呼吸をおき、

「私の心の中で生き続けるのよ！！カッパちゃん！！薫！！」

――ザンッ！――

――ギィン！――

神威は魔導具でもなんでもない両刃剣を振るうも、カッパヤミーが背中の甲羅で弾く。

「好きだけど、かなァ？・・・ううん・・・やっぱり、好きだから殺すの。ウフフ♪」

今此処に、新生火影の斬り込み隊長＆ａｍｐ；欲望の怪人ｖｓモヒカンヘアーでショタなオカマとの激戦が始まる！！

水脈とゲームとオカマ（後書き）

次回、仮面ライダーブライ

サイボーグとタッグと冷血？

サイボーグとタッグと冷血？（前書き）

仮面ライダーブライ！
前回の三つの出来事！

一つ！グー組の四人が、地下水脈にてバラバラになる！
二つ！風子はカマイタチヤミーと共に、裏麗の緋水とカブハチナヤミーと戦う。
三つ！小金井とカッパヤミーは、彼らに求愛する神威と戦うこととなる！

サイボーグとタッグと冷血？

激流によって分散してしまったパーティー。
その激流に流されてしまった小金井と、七実の遣いであるカッパヤミーは、目の前にいる変質者と対峙していた。

「好きよ・・・・・・薫、カッパちゃん・・・・・・・何も不自然なことじゃないのよ。。人が人を好きになる理由なんていらない。理屈じゃないのよね」

両刃剣を持って語る神威。

「それが例え、子供や怪人でも・・・・・・同姓であっても・・・」

最後にキモいことこの上ないことをいった。
それから飛び掛り、小金井に斬りかかるも、それをカッパヤミーが神威の腕を掴み、投げ飛ばして阻止する。それに構わず、神威は喋り続ける。

「私の中で違う私が言うの。愛しいなら殺せ・・・・・・愛しいからこそ殺せ。最も強く独占欲が満たされる方法とは・・・愛するものを誰にも触れさせない所に連れて行く・・・自らの手で亡き者にすること・・・だってね」

刃介もある意味、独占欲ゆえに七実を居候させているが、神威のような歪んだ思想はしていない。
彼は七実が生きているからこそ・・・・・・否、生きているようで

生きていない、生きていないようで生きている。そんな儚い美しさ故に彼女に惚れ込んだのだ。間違っても殺す事で情欲を満たすなんてことはしない。

「抹殺指令のでた火影の写真を見て・・・貴方に心から惹かれたわ。サルとゴリラ、ブスが三人。そのなかで貴方は宝石のように輝いていた・・・私は小金井薫に標的を定めた。他の人達なんかに殺させてなるものですか・・・ってね。それにカッパちゃんも、会って間もないというのに、しかも敵同士だというのに、こんな私とここまで心を通わせることができた。生まれて初めての大親友と言える程に」

神威は長々と語るが、

『神威、あっしはあんたがそういう変態の世界から足を洗えば、もっと親密になれると思ってやしたがね。つーか、あっしも小金井も、そういうアブノーマルな趣味がありゃーせんぜ』

カッパヤミーが釘をさした。

「そうだね。俺らの邪魔すんなら、痛い目に遭ってもらうからね」

小金井は鋼金暗器を薙刀形態の「一之型」牙から鎖鎌形態の「二之型」龍に変形させ、神威に攻撃する。
その際に両刃剣を奪いとることも忘れない。

「どう？今なら許すぞ」

シリアス顔をケロっと崩して喋った・・・

「好きッ！！」

結果、神威に抱き付かれた。

「スゴイ！！見事よ！今のォ！ほれ惚れしちゃった」

微妙を通り越して硬直する小金井の頭を撫でる神威。

「今なら許すぞだって♪ププ！生意気でカワイイ～～～！！」

さらには頬擦りまでするウザさ。

とっとと画面から消えて欲しいくらいにキモい。

『なあ、カミッチ。戦う気あるんかい？』

「もちよ！ハッキリ言って殺すわ！」

なんか神威をあだ名で呼び始めたカッパヤミー。

どんだけ打ち解けてんだコイツら。

「ただね・・・時間をかけて・・・貴方達との戦いを楽しむわ。色々な表情を見てみたい。苦悶の表情とかね」

――バジャッ！――

「わッ！！」

『お・・・ッ』

神威はいきなり砂を蹴り上げ、二人をおどかす。

というか、目潰しが目的のようだ。

「色々な声を聞いてみたい・・・・・・恐怖に満ちた叫び声とかね」

小金井とカッパヤミーが眼を擦ってる間に、

「き・・・消えた・・・」

『どこかに隠れやがったようだねぇ』

二人は周囲に目を配る。

両刃剣を破棄したところから、次は魔導具による攻撃を行うと読んだ。

こんな岩場だらけの場所だ。隠れる場所――狙い撃ちできる場所を選ぶのは容易だ。

となれば残りの頼るべきものは聴覚＝音だ。

二人は神経を全て耳に集中させる。

――コツン――

（こっち！！）

（そこか！！）

小金井は右、カッパヤミーは左に顔を向けた。

小金井は振り向いたほうの音は石の音。

つまりは、

『させるかカミッチィィ！！』

「だったら強行突破よォォ！！」

――ズガガガガガガガガガガ！！！！――

カッパヤミーの正解。
神威は右腕に装着されたガトリングアームによる一斉連射を行う。

しかしカッパヤミーも、仮にもヤミーだ。
銃弾を喰らっても死ぬような軟弱な身体はしていない。

というか背中の甲羅で全部受けきった。

「流石はカッパちゃん。でもドンドンいくわよ～！」

そういって神威は姿を消す。
カッパヤミーは勿論五感全てで神威を追うも、今一発見できないのか、舌打ちした。

だが、小金井はそんなカッパヤミーとは裏腹にトンでもないものを見つけていた。

「な、な、なんだよコレ・・・・・・」

神威の右腕だったもの。
しかしその実体は、

「！！　機械！？」

義手だった。

『なるほど、全身を機械改造によって、様々なアタッチメントを扱

えるようにしているわけかい』

カッパヤミーは納得する。

「カ・オ・ル♪カッ・パ・チャ・ン♪」

不気味な声に振り返ると、

「問題、これな～んだ？」

『レーザーアーム』

「ピンポーン！御褒美に・・・！」

――シュゥゥゥ・・・！――

エネルギーがレーザーアームに集束し、

――ビューーーーーッ！！――

岩さえもスライスカットするようなレーザーが発射された。

「うわ！！うわあああああ！！」

『ハッチャメチャじゃないかぁオイ？』

慌てる小金井に対し、カッパヤミーは口から時折水撃弾を発射しながら落下する岩を粉々にしながら走る。

「ま、マジもんの改造人間（サイボーグ）かよ・・・！」

『だから、そういったじゃん。・・・とはいったものの、これでは迂闊に近寄れやしねー』

カッパヤミーの能力は近距離や中距離では有効だが、遠距離には少々分が悪いところがある。

――ピュウウウウウウウウウウウウン！！――

「うひゃあああああ！！」

『オイオイ！！』

と言ってる間にも、ミサイルの乱れ射ちが襲来している。

勿論、二人は必死になって逃げる。

その途中で見つけたのは、左の義手。

「ねえ薫にカッパちゃん。壁や岩をよーく見てみて。丸い玉が埋め込まれてるでしょ？」

神威が離れた場所から話してくる。

「それ・・・・・「灯」っていう魔導具なんだって。熱を、光を生んでいる。こんな地下の世界に光があるのはそれの力らしいわ」

確かにこの場所だけで、数百もの灯が存在している。

「すごいわよね。４００年以上もその玉は輝きを失わずに今も光を齎している。羨ましいと思わない？人間なんていっても１００年そこそこでお終い。・・・森光蘭の永遠の命への執着・・・私にはわかるわ。この手に、指先に、顔に醜くシワが刻まれていく・・・・・・それは恐怖。だから私は考えた・・・老いた部分は取り替えればいい。壊れた部分は取り替えればいい。・・・そうしてたらね・・・

」

そして神威は一気に二人の眼前に現れ、

「体中、機械になってたの」

「で、出たぁあ！！」

『どこ行くんだ小金井？』

神威の登場に涙目で逃げ出す小金井。

が、神威がそれを許すはずはない。

――ガキッ――

「なによぉ！人をオバケみたいにィ」

「いててて！！」

クレーンアームで捕まえられた小金井。

「つっかま～～えた♪」

（あちこちにアタッチメントを仕掛けてくるとは、まるで”千刀巡り”の真似事だな）

カッパヤミーは主の弟が三番目に戦った巫女の技を、知識としてだけなら知っていた。

「さて！覚悟はいいかしら？」

「『・・・・・・・・・・・』」

神威のマジな雰囲気に、小金井もカッパヤミーも黙った。

＊＊＊＊＊

一方、トライブ財閥。

「今頃彼らはどうしてるかしらね～～？」
「さあ？」
「あら、つれないのねぇバット」

シルフィードはバットと話をしていた。

「でも仕方ないっすよ会長。俺っちは兎も角、会長の出番はもっと先なんすから」

勿論吹雪も同席している。

「ま、そうなんだけ・・・・・あれ？」
「どうかしました？」

シルフィードは何かに気づき、バットは問うてみる。

「吹雪君、ちょっと急用ができたかもしれないわ」
「なんすか？」
「これ、鋼君に渡してきて頂戴」

投げて寄越されたのは黄色いカンドロイドだった。

「今からっすか？」
「お願い、特別手当てつけるから」
「じゃ、行って来ます」

早々と返事をした吹雪は会長室から地下の駐車場に向っていった。

「トラカンドロイドですか」
「あれって結構使えるのよね。あの根暗人形男の技術力も、相も変わらず凄まじいもんだわ」

明らかに個人のことを言っている。

「しかし大丈夫ですかね？彼に封印の地へ向わせて」
「大丈夫よ。彼には何時も低レベルながらも魔導具の核を持たせてるから、なんなく通行できるわよ」
「いや、そうではなく」
「じゃあ、なにかしら？」

バットは一呼吸おいて言った。

「凍空吹雪・・・・・・彼の一族をほぼ殲滅した鑢七実と再び顔を会わせることです」
「バット・・・吹雪君だって子供じゃないわ、余計な心配は無用よ。・・・それとも・・・」

今度はシルフィードが一呼吸おいた。

「貴女は”私の使い魔”の分際で、私に反抗する気なのかしら？」
「・・・・・・いいえ、個人的な感想を述べたまでです」

「そう。だったら良いのよ」

シルフィードは妖艶に笑った。

着用（コスプレ）している、真庭忍軍風の忍び装束の殺伐さとは裏腹に。

「あ、ついでに貴女も行って来なさいよ。封印の地に」

「気紛れですか？」

「増援よ。無許可のね」

シルフィードの物言いにバットは呆れてため息をだす。

「わかりました。では、転移魔法で一っ飛びしてきます」

「行ってらっしゃい。全て魔法の使用許可を出しとくから」

「委細承知」

知らないところで、火影に二人の増援者が送り込まれていた。

＊＊＊＊＊

一方小金井は小金井で、大ピンチに陥っていた。

「うわぁ！！あああああああ！！」

叫びというか絶叫し尽くす小金井。

それもそうだ。眼の前には自分の唇を奪おうとする変態（あくま）がいるのだから。

『止せ、カミッチ！！』
「邪魔しないでカッパちゃん！」
神威に羽織締めをかけてくれているカッパヤミーがいるのがせめてもの救いか。
だがそれでも神威は小金井にキスしようと頭を動かす。
でも小金井は体を動かして器用に避け続けた。
「なんで避けるわけぇ！！？」
「自分のムネに聞けぇーっ！！」
なんか不必要な剣幕がはられている。
「フンッ！！いいわよ、ケチ！キスくらいなにさ」
『いや、ケチとかいう以前の問題だから』
神威は小金井を乱暴に下ろし、さりげなくカッパヤミーにツッコまれていた。
「・・・さて、そろそろ時間もあれだし・・・・・・！」
神威は狂気と殺意に表情を染め上げ、
「ＫＩＬＬＩＮＧ　ＴＩＭＥ♪」
殺害予告をしてきた。
そして再び姿を眩ます。
「楽しかったわ、薫、カッパちゃん・・・・・・安心してね、薫の

亡骸はキレイに剥製にしてあげるし、カッパちゃんのメダルは永久保存するから」

「・・・・・そうだな、確かに時間もない。風子姉ちゃんや水鏡、七実さんとも早く合流したいし・・・・・そろそろ、こっちからもいくか」

『ふん、ならば援護は任せてくれや』

神威の言葉に対して、二人は吹っ切った表情で呟きあった。

そして、作戦が実行される。

「熱反応・・・・・感知・・・」

神威は岩陰からあたりを観察し、バイザーにて温度探査を行っていた。

「グッバイ♪Ｍｙ　ｆｒｉｅｎｄ・・・」

アームを構えて一斉掃射の準備に入る。

だが、

――ピッ、ピッ、ピッ――

「何・・・・・これ？一つ・・・二つ・・・まだ・・・まだ増え

てる・・・どういうこと・・・？」

作戦が発動した。

――ピッ、ピッ、ピピッ――

「二つ・・・三つ・・・熱反応が幾つも増えてる！そんな・・・バカな・・・！？」

神威は「う・・・・・・うぅ・・・・・・」と呻き、

「ずるいわ！！何をしたのよ二人共ォ！！？」

――ドガガガガガガガガガガ！！！――

バズーカアームによる乱射を行い、辺り一面をボロボロにした。

そしてその過程で漸く気がついたのだ。

熱反応の正体は

「灯の魔導具・・・これが・・・熱反応の正体・・・」

一箇所に集められることで、人間の体温並みの温度をもった核の玉。

「しゃらくさいマネしてくれるわね・・・・・・あいつらぁ・・・」

神威は自分でも自分が苛立っていくことを感じていく。

「カメラモードＶｅｒ．２――赤外線スコープ」

バイザーの視界をチェンジし、再捜索。

（でもきっと無駄ね・・・あのコらのすばしっこさで反応についていけないわ。・・・かといって、これ以上乱射しちゃったら、私の居場所を教えちゃうばかりか、岩が崩れてひとたまりもないわよね）

少し冷静になって考える神威。
そのさきで行き着いたのは

（獲物と狩人・・・・・・立場が逆になっちゃったみたいね）

自分の不利さかげんだった。

――カツッ――

聞こえた音に神威は振り向く。
音の正体は小石の落ちる音。

しかし神威はそれにすらビクついた。

（なんてこと!?私は今怯えている!?冗談じゃないわ!!私は常に主導権を持ちたいのよ!受けに回るなんて真平御免だわ!!）

そう、神威はこの機械のボディになって・・・・・・いや、なる前からそうだった。

自分好みの少年を徹底的に怯えさせ、恐怖させることが楽しくて愉快で快楽的だった。
そしてその恐怖が最大限まで引き出され、端正な顔が怯えに歪んだところで
獲物を殺す。

若々しい綺麗な顔は恐怖にその表情を歪めて形どる。
その顔に手に足に体に何度も刺す何度も刺す何度も刺す。
悦楽の瞬間。

（今まで・・・ずっとそうだったじゃない。怯えた顔が大好き。その顔をグチャグチャに潰すのが大好きそんな私が・・・逆に・・・怯えてるですって!?）

神威は膝を地面につき恨めしそうに言った。

「許さない・・・許さない・・・許さない・・・悪いコね・・・」

だが、そんな神威の視線に偶然か運命か。
あるものが映りこんだ。

（あれは・・・・・・）

しばしの沈黙。それは神威の言葉によって砕かれる。
その声は実に弱弱しかった。

「・・・・・・・・ねぇ薫、カッパちゃん。出てきて頂戴。私のこと見てるんでしょ?謝るわ・・・もう降参するから、出てきて欲

しいの・・・」

かといって、すぐに出てくるほど、小金井もカッパヤミーも愚かではない。

「見て。もう武器は捨てた・・・これは只の義手よ。お願いよ、二人共・・・・・・もう許して・・・・」

――ザリ・・・――

小金井とカッパヤミーが岩陰から出てくる。

「・・・・・手を、上に上げて」

『まだ信用しきれないので、距離をとる。とあえず手を上――ドバァァン!!――!!?』

砂地からいきなり、行く本もの腕がでてきた。

触手のような機械の腕は驚く二人にお構いなく、二人の両腕をつかんでつるし上げる。

「はァい、バンザーイ♪」

二重の意味をこめてそういう神威。

「あはははははははははは!!」

二本の腕からさらに生えた幾数本の腕。

その先には五本指や鎌などといったものがついている。

「アシュラアーム・・・・・隠し腕を砂地に潜り込ませてたのよ

ね・・・・・・残念でした。ウフフ♪」

神威は得意げになって小金井の顔を覗いた。
最高の恐怖を期待して。

「・・・・・・・・・・・・・」

小金井は質素な無表情であった。

「・・・怯えなさいよ・・・ねえ・・・カッパちゃんもさぁ・・・・・・」
『知りゃせんぜ』

カッパヤミーも冷たい声音だ。

「何よ!!その落ち着いた顔は!?怖がってよ!泣いてよ!貴方達はもう直ぐ死ぬのよ!殺されるのよ!」

「みんながみんな、恐怖に縛り付けられると思うなよ」

小金井は一言言った。

「烈火兄ちゃんが・・・・・・願子を焼こうとした紅麗にそういった。「誰に負けるか」ってね。烈火兄ちゃんってすっげーバカなんだけどさ」

小金井もカッパヤミーも、武器と身体能力であっと言う間に自分達の枷を切り刻み、

「そーいうトコ、好きなんだよね」
『確かにソイツは、好感がもてまさぁ』

神威の両腕と両脚と、根元からぶった切った。

――バチッ・・・バチン！――

切断されたアシュラアームから火花が散る。

「悔しい・・・なにが悔しいって・・・負けたことよりも、貴方達に「好き」って言わせた男の存在よ。嫉妬しちゃうわね、殺してやりたい」

無力となった神威は虚しくそういった。

「俺なんかに負けてちゃ、烈火兄ちゃんは殺せないぜ。じゃなッ！」
『んじゃ、また』

そういって去っていく

（ああ・・・・・薫、カッパちゃん・・・・・・・）

と思われた途端、引き返してくるのはどうしてだろう。

（ん？）

引き返してきたのはカッパヤミー一人で、小金井は向こう側で悪戯めいた笑顔で居る。

カッパヤミーは神威の髪の毛を引っ張って引き摺りながら歩き出す。

「きゃぁぁーー！！嬉しい！！帰ってきてくれたのね！あぁん好きよ！！どこへでも連れてって～～！！」

『沈め』

――ドボンッ！――

カッパヤミーは、ドSボイスで神威を川に落としたのであった。

「ひ、酷い！！助けてぇぇーー！！」

「『達者で～～～♪♪』」

彼を見送る二人の顔は、実に邪悪そうな笑顔と悪戯めいた笑顔なのでした。

ちなみに、

（ウフフ♪でもそんなイタズラっ子なトコも好きだったりして♪なーんて・・・そんな余裕ないみたい・・・体・・・錆びちゃうかしら・・・）

小金井＆amp;カッパヤミーＶＳ神威

小金井とカッパヤミーの完勝（カッパヤミーに到っては特殊能力未使用）

＊＊＊＊＊

一人の男がいる。
水の刃を携えるその姿は、線の細さ、長い髪からか女性に見紛う。
性格は冷静沈着。計算高く無口。
そして・・・非情だ。

一人の女がいる。
生き損ないと評されるその雰囲気は、無機物的な絶世の美しさを放つ。
性格は無欲で無関心、殺人を一切厭わない。
そして言語道断空前絶後の天才性ゆえに、虚しく儚い。

その名は水鏡凍季也。
そして、鑢七実。

この二人は今、びしょ濡れの体に気をつかわず、川の最果てにある場所に辿り着いていた。
植物の根がある程度張っていて、幾つ物石仏が設置されていた。
火影に縁のある者を供養する場所なのだろうかと思う場所だ。

「しく・・・しく・・・しく・・・ぐす・・・しく・・・しく・・・ぐすっ・・・しく・・・しく・・・」

その石仏の後ろで女の泣き声がした。

「誰だ？」

「なにを泣いてるんです？」

石仏の後ろにいたのは、長い髪を三つ編みにした眼鏡の少女。

「あ・・・あなた達こそ、誰・・・ですか・・・？」

お互いにお互いの正体をしらない現状。

「もう・・・許して・・・・・・酷いこと・・・しないで・・・帰して・・・家に、帰してよ・・・・・・」

途切れ途切れに、涙声で訴える少女。

水鏡と七実はとりあえず濡れた服と体を乾かす意味も篭めて、少女と話し合う為に焚き火をした。

そのへんに枯れ木と、七実の力でどうにかなかった。

「私・・・・・・美由紀（みゆき）っていいます」

とりあえず少女は名乗ってくれた。

「いつものように学校に行く途中・・・変な男の人に攫われました。眼が覚めたらここに・・・ケータイも圏外で、助けも呼べません・・

・」

説明を始める美由紀。

「私を・・・ここに連れてきた・・・長髪の片目の男に・・・・・・
嫌がる私を何度も・・・何度も・・・辱められて・・・・・・もう
死にたい。でも、こんなところで死ぬのはイヤ・・・イヤよ・・・」

震えながら説明されていて、水鏡は心当たりのある人物を思い出す。

（木蓮・・・だな・・・）

烈火たちが出会った中で最低最悪の人物。永井木蓮・・・・・・。

――きゅっ――

すると美由紀が水鏡と七実の腕を掴んできた。

「お・・・お願いです・・・一緒にいてください。私を・・・ここ
から助けてください。お願いします・・・・・・」
「まあ、構いませんよ。我々もここでやること終えたらとっとと出
て行くつもりですから」
「だが、色々と保障はできないし、足手まといにもなるな」

一応同行させることにした。

数分ほど歩いていると

「・・・・・・・・あの・・・水鏡さんに鑢さんていいましたっ
け？好きな人とか・・・つき合ってる人とかいるんですか？」

「いない」
「私はいますよ」

正直に答える二人。

「水鏡さんって、なんか男子校だったら狙われちゃいそうな顔ですよね」
「・・・・・・・・・・（汗）」

能天気に言ってるつもりであろうと、本人としては言って欲しくなかったりする。

「私・・・今、お付き合いしてる人がいるんです。すごく変な人なんですけど、愛してるんです」
「・・・私のほうは、かなり欲深な変人です。告白も向こうからしてきましたね」

つられるように、七実も恋人（じんすけ）のことを断片的に話した。
恋人の話をする美由紀の表情は実に真摯で、ウソなど一片もなかった。

そうこうしている間に三人はドンドン進んでいき、光の差す場所のすぐ寸前まできていた。

「あ・・・・・広いところに出る。もしかして、外に出られるのかしら？またあの人に会える・・・うれしい・・・うれしい！もう・・・あんまり嬉しくて・・・私・・・私・・・」

そして、

「貴方を殺しちゃうわ」

美由紀は水鏡の左胸をナイフで刺した。
七実はそれを黙ってみていた。

「くく・・・あぁはァ・・・」

美由紀は奇妙な声をだし、眼鏡を捨てて髪をとき、上着を脱いだ。

「お久しぶりねぇ色男。命を司る女神、命(みこと)よ・・・」

露出度の高いくの一装束を着込んだは、元麗十神衆が一人、命という名の悪女だった。

「油断しちゃったわねぇ！あんな私もなかなかカワイかったでしょ？風子じゃなかったのは少し残念だけどね・・・この調子で一人ずつ・・・一人ずつ狩って行くよ！そこのチビ女と一緒に今、殺してあげる」

得意げになって喋る命。
七実のそれより遥かに邪悪な表情で、自らの美貌を歪める。

だが、

――バシャァァァン！！――

水鏡は、水となって弾けた。

（流石は、水傀儡）

七実は最初から全て理解していた。
そして本当の水鏡は命の背後に居る。

「相も変わらずの女狐君・・・そこそこ笑える猿芝居だったがね、どれだけ猫を被ろうが貴様の性悪なニオイは消えない。二人揃って三秒で敵だと思ったよ」
「命さん。貴方が学生を演じるには八年は遅いですよ。人のことは言えませんが」
「なっ・・・なんだとてめぇら!!」

命は二人の顔をビンタした。
お返しに二人の拳を顔面にくらったが。

「あ・・・痛・・・殴った、鼻血・・・・・・・」

ヨロめく命。

「女に手をあげるのかい!?まったく風子といいテメーらは暴力集団だね!!」
「関係ないな。フェミニストじゃないんでね」
「戦人に、男も女も関係ないでしょ?」

ヒステリーになる命とは裏腹に、水鏡も七実も実に冷めきった表情だった。

「相変わらず威勢だけはいいねェ男女!裏武闘で初めてお前を見たときから、気に入らねえとは思ってたんだよ!戒(カイ)程度に負けたマヌケバカが、私に勝つつもりなのかい?」

戒・・・・・麗十神衆が一人であり、水鏡の扱う流派・氷紋剣（ひょうもんけん）の兄弟子。
自らを水鏡の実姉の仇と偽り、魔導具・氷魔閻を用いて水鏡と相対した。
その戦いは実に激戦と呼べる代物で、最後は水鏡も彼の剣士としての純粋な強さとプライドに敬意を表し、自分の敗北を素直に認めたほど。しかし戒は最後は氷魔閻にて自害し、水鏡の本当の仇は氷紋剣の師匠である巡狂座（めぐりきょうざ）であると言い残し、さらには水鏡にある言葉を投げかけて逝った。

紅麗に対して堅い忠義をもっており、紅麗も彼の死を悼んでいた。
ある意味、音遠・雷覇・磁生にならぶほどの高潔な男だったともいえる。

そんな彼を侮辱された水鏡の反応は、

「訂正しろ。お前如きが戒を上回ってるつもりか？分際を弁えることだな。お前は麗のなかでも最低に値する」

静かなる怒気が沸騰点に近づきつつあった。
その瞬間、

――ギュルルル！！――

「・・・・・草が」

――バサっッ！！――

木の根が水鏡と七実に絡み付いてきたが、それを不快に思った七実が手刀にて切り裂く。

「オイオイ・・・牙王から聞いた時は言い訳のデマと思ってたが、マジモンかよ。まあいい、男女(ソイツ)みつけられたしよ！」

向こうから、木の根を操っている男が近づく。
頭にバンダナを巻き、長髪で隻眼の男。

「みぃーかぁあ・・・ぐぁみぃいぃ～～」
「・・・・・木蓮」
「へー、あの人が」

七実は初めて見て聞いた木蓮の姿と声に、ゲスな人種の気配を察した。

「惜しかったな命。あんな化物が居るのは計算外だぜ」
「もう！出てくるの遅いよ～～木蓮！私、この馬鹿達に殴られちゃったんだよぉ」

命はいきなり人が変わったかのように、木蓮に対して甘えた声をだした。
肩を抱き合いベタベタする二人は、

接吻した。

「・・・・・・・・・・・・」
「はい・・・？」

水鏡は絶句。七実も七実で素っ頓狂な声をだす。

「キスで治る」
「バカ・・・／／／」

「・・・・・・・・・・・」
（さっきの話、本当だったんですね）

いきなりのバカップル空間発生。

「私達・・・つき合うことになったの」
「見せ付けちまったかぁ？羨ましいかぁ？イヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ！」

思いきり自慢するアホども。

「昨日の夜はスゴかったよな、命・・・またアレしていいか？」
「バカ！こんなときになに言ってんだ／／／」

もしこの場に非リア充である人生をこの上なく怨念的に思ってる方々がこの場にいたら、今は正しく幸せ絶頂のリア充バカップルのコイツらを完膚なきまでに叩きのめすであろう。

「ふ・・・・・」

水鏡は呆れ混じりの絶句から復活。

「祝福の言葉を贈るよ。イカレた者同士、お似合いのカップルだ。人気の無い山奥にでも行って、死ぬまでイチャついてくれ」

現実的に堂々とイチャついてる奴が至近距離にいたら、ウザかったり気まずかったりする。

木蓮は木の根のムチで水鏡を叩こうとするも、両腕の自由が利いているので、閻水にて木の根は切り裂かれる。

「すいません。雑草は雑草らしく、雀られてください。虚刀流六の奥義『錦上添花（きんじょうてんか）』」

一気に木蓮へと接近した七実は両の手刀を上方に持ち上げてから一気に振り下ろし、木蓮の両腕にキツい一撃をくらわせた。

――ボキッ！――

右腕。

――グシャ！――

左腕代わりの植物。

「ぐぎゃあああああああ！！」

「木蓮！！」

水鏡によって斬られた左腕部分に生やしていたはともかく、生身の右腕は完全に骨折した。

「このクソ女！！よくも私の木蓮を！！」

命は怒りに怒り、地面からあるものを呼び出す。

「おいでぇ白髭(しらひげ)ぇ！！」

現れたのは、体長2メートルを越す、人形型魔導具。

「人型魔導具は一体だけじゃないのさ！魅虚斗(ミコト)を遥かに凌ぐパワーを持つ魔導具白髭！！」

命は自慢げに説明した。

「こいつにのって、ブッ殺してやるよ！！」

そう断言し、白髭の内部へと搭乗する命。

自分が乗り込むこともできれば、魔導具との別行動をとっての戦闘もできるのが、命が御自慢の人型魔導具の特性だ。

「シェードフォーゼ以下、ですかね」

さり気に七実は品定めをするように白髭の性能に酷評を下していたが。

「ブツブツうるさいんだよ！！ションベン漏らして死んじゃえ！！」

乱暴かつ乱雑な言葉遣いで叫び散らす命。

「はぁ」

七実はため息をつき、自分から白髭の懐に飛び込んだ。

そして、彼女は足りないリーチを補うべく、グリードとなる。

「避けるんだ！！命！！」

無駄とわかりつつも、木蓮は叫ばずにはいられなかった。

『虚刀流二の奥義『花鳥風月（かちょうふうげつ）』』

刀の刃先の突き如く、七実の貫手は白髭の外装を突き破り、完全に貫通していた。

「命ォォオオ！！」

木蓮は急いで白髭内部にいる命に駆け寄った。
白髭の腹が開き、そこからは無傷の命がでてくる。

「命！！大丈夫か！？」

ぺたんと座り込んでしまう命に、木蓮が問いかける。

「こ、この化物・・・わ、わざと・・・・・・スキマを縫うようにして、刺した。・・・肉体的ではなく・・・精神的ダメージを・・・狙って・・・」

恐怖に顔をゆがめる命。
そんな彼女の秘部からは小水がだらしなく排出され、彼女の足と地面を濡らした。

「うっ・・・・・・」

流石の木蓮も、恋人である命のはしたない場面に直面し、引いた。

『あらあら、木蓮さん、いけませんよ引いちゃ。一度愛し合うと決

めた以上、恋人のどんな酷い所に受け入れてこその『愛』じゃないですか』

と、七実は木蓮に注意する。

まあ、ある意味七実にはそれを言うにたる経験はある。

何しろ七実に一目ぼれした男は、七実の邪悪さにさえ惚れ、遂には化物であることすら受け入れているのだから。

『さて、適当に雀るとしましょう』

そういって七実は木蓮に近づき、技を放とうとする。

殺人剣術たる虚刀流の技をだ。

「ま、待って!!」

しかしその時、命が七実の足にしがみついた。

『・・・・・・・・・』

「ヒッ・・・・・・・」

命は七実の雰囲気と目に恐怖した。

元から平静だった表情はグリードとなって消えたが、それでも尚、木蓮と命を道端にある草のように見る彼女の視線に。

「お・・・お願い・・・この人は、木蓮を・・・殺さない・・・で・・・・・」

命は踏ん張った。上っ面だけの愛情でここまでする奴はいない。

『・・・・・・いいでしょう』

七実も察したのか、人間の姿に戻った。

「ただし・・・・・・わかってますよね？」

でもしかし、その雑草を見るような目つきは変わらない。

「念のため、そちらの木蓮さんが隠し持ってる物、暫しの間没収させていただきます。命さんは抑えててくださいね」

七実はそういって木蓮の体に貫手を刺した。

「ッッ！！うアアアアあぁぁぁぁぁあああああぁぁぁぁぁぁぁあああ！！！！！」

「耐えて・・・！！堪えて木蓮！！」

他人の手が自分の内臓を引っ掻き回しながら魔導具・木霊（こだま）の核を引っ張り出す痛みは想像を絶するモノがあり、木蓮は体中を動かして抵抗する。

命の抑えがなければ、今頃どうなっていたか。

（彼女は・・・・・・絶対敵に、回すべきじゃない・・・）

水鏡は冷や汗をかいてそう思ってると、七実は木蓮の体から手を抜いた。

血で染まりきったその手には、木霊の核が握られている。

「あ、あ・・・あ・・・・・・」

木蓮はそのまま気絶寸前の状態にまでダウンしてしまう。

「はぁ・・・」

七実は血で染まった手と核を水で洗いながら溜め息をだす。
それは他人ではなく自分にだった。

（私はいつから、こうなったんでしょうか？）

そう、人間だった頃の七実なら武器没収なんて温いことだけでは済まさず、真庭蝙蝠にしてやったように、尋問や拷問を行うことも厭わなかっただろう。そして聞きだせることを全て聞き出したら、問答無用で殺したはずだ。

（やっぱり、人は変わるもの・・・なんでしょうか？）

思い出すのは、自分に惚れたと言った男の後姿と、新生火影の仲良しぶり。

「まぁ、気にしても仕方ありませんね。・・・というか、そろそろ出てきたらどうですか？」
「僕もさっきから、奇妙な存在感を感じていたよ。誰か一人、こっちを覗き見している」

七実と水鏡は、敵意の視線で観察者を見抜く。

「そ、そうだ！！頼む！！もうあんたしかいねぇ！！そいつらを殺してくれぇ！！」

激痛が走る中、その痛みを誤魔化すかのように叫んだ木蓮。

その言葉に反応して姿を現したのは、左目の下に十字型のペイントをしていて、左腕に三つの玉をつけている少女?だった。
顔つきは中性的であったが、スカートをしているところから誰もがその人物を少女と思うだろう。
しかし、

「殿方がその恰好・・・・・・趣味なんですか?」

七実は見抜いていた。

「ハハハ」

少女改め少年は短く笑う。

「初めまして、水鏡さんに鑢さん。ボクは葵(あおい)っていいます」

原典の世界において、水鏡は今までに見た事もないものを見ることとなる。
そしてこの葵に敗れた。

しかし、七実の天才性と能力は・・・ただ圧倒的だったとだけ・・・語るとしよう。
鑢七実の全力を出した勝負の詳しい内容など、語る価値もないのだから。
そう・・・グリードとなって、少しの間は出せるようになった全力など・・・・・・。

サイボーグとタッグと冷血？（後書き）

次回、仮面ライダーブライ

選択と影と増援

今年最後の更新です。

明日＝来年もよろしくお願いします！

選択と影と増援（前書き）

仮面ライダーブライ！
前回の三つの出来事！

一つ！オカマサイボーグ神威に、小金井とカッパヤミーが勝利！
二つ！シルフィードがバットと吹雪を増援に決定する！
三つ！七実は強大な力にて、敵を完全に撃破した！

選択と影と増援

鋼刃介・花菱烈火・石島土門・佐古下柳＝パー組の四人はというと、牙王を余裕で倒して先に進んでいた。現在は幾つモノ鍾乳石と石筍が天井と地面を繋いでいるかのような場所にいる。

ブライはそこに来た際、懐からバッタカンドロイドを取り出す。

「さて、七実たちはどうしてるかな？」

プルトップスターターを開けて、カンモードから飛蝗型のメカモードにチェンジさせる。

「七実、そっちの調子はどうだ？」

『ああ、刃介さん』

バッタカンドロイドを通して、七実の声が聞こえる。

『今のところ、敵の妨害にあって三手に分かれさせられました』

「なに・・・？」

『御心配なさらず。すぐに合流して、そちらとも一緒になります』

「・・・・・わかった。お前がそういうなら信じよう」

『ありがとうございます。では、また何かあったらこっちから連絡します』

バッタカンドロイドはカンモードに戻った。

「どうしたんだ鋼？」

「七実さんから連絡ですか？」

烈火と柳が聞いて来た。

「・・・先を急ごう」
「お、おい待てよ！」

小走りで進行しようとする刃介に土門が止めようとすると

「あれ？」

柳が何かを見つけた。
ブライもそれに反応し、足を止めた。

「張り紙？」
「なんだ？」

四人の誰かが必ず見つけられる場所に張られたそれには、こう書いてあった。

”死に向う男と女　助けるならどちらか”

「・・・・・・・・・・なんだこりゃ？」

烈火が首をひねっていると、ブライは後方に跳躍して、

「お前ら、そこ危険だぞ」

それを告げた瞬間に、烈火と柳と土門がいた足場が崩れた。

「なっ・・・なんだぁあ！！？」

「きゃあああああ！！」
「うわあああああ！！」
「だから危険だと言ったんだ」
そして・・・！

＊＊＊＊＊
一方その頃風子は
――カシャ・・・――
誰かに遠方から無断撮影の対象となっていた。
――カシャ、カシャ――
「キヒヒ・・・」
不気味な笑い声。
「たまんねぇ体してんなぁ・・・・・・あの乳・・・・・・・ケツ・・・・・もう誰かに触られちまってるのかねぇ」
インスタントカメラで撮影した写真を手に取る者。
「関係ねぇか・・・もうすぐ・・・俺だけのものになる。キヒヒヒ

ヒヒヒヒ「盗撮は犯罪ですよ変質者」だ、誰だ!?」

いきなり声をかけられ、盗撮魔は後ろを振り返った。
そこにいたのは、女物のビジネススーツを着こなしたダークブルーの頭髪をした麗人だった。

そしてもう一人、

「あーあー眼つぶっちゃってる!お前写真撮るの下手だねぇ」
「!!?　ふ、風子!?」

霧沢風子本人。

「ところでさ、あんた誰?」
「トライブ財閥会長秘書のバット・ダークです」

風子に問われ、バットは素直に名を名乗った。

「会長からの命令により、貴方方火影の助力となりに来ました」
「ふーん。鋼といい七実ちゃんといい・・・ここんとこ最近、妙な連中が助っ人してくるねぇ」

風子はこれといって疑う様子もなく、バットを信じた。

「あ、そうそう。そこの変質者。あんた好い加減目障りだからさ・・・命令、”三秒で消えろ”!じゃなきゃボコボコ」

そして視線を双角斎にむけて言ったのだ。

「気の強い女だ。そっちの仕事人風なのはよく知らんがまあ良い。

俺は気の強い女をなぁ・・・ジワジワジワジワと、泣かせていく過程が大好きでね・・・”断る”」

「上等！！」

「参ります」

＊＊＊＊＊

そして烈火たちはというと、

「おーい、大丈夫か？」

「これが大丈夫に見えるなら眼科いけ！」

烈火が土門の手を握り、土門が柳の手を握ることで、三人は奈落の底へ沈まずに済んでいる。

だが、誰とも触れずにただからかうようなことをいうブライに、烈火は苛立って叫んだ。

「まぁ待ってろ。今すぐ引き上げるからよ」

ブライはいま牙王を倒した状態＝バマーイコンボのままだ。

人間二人分を持ち上げるのに苦労など皆無。

地面に這いつくばって仲間を支える烈火の腕の先に手を伸ばして何とかしようとしたとき、

――ヒュンヒュン！――
――ザクッ！――
――カキンッ――

「なんだ？」
「あでででで！！」
「花菱！大丈夫か！？」

どこからか苦無が投げられて、烈火の肩に突き刺さる。
しかしブライには一切の効果もない。

「構うな。このまま引き上げる」

そういってブライはバシュッ！という音を立てて両腕のチェインハンドを飛ばし、力任せに土門の頭と柳の腕を掴んで引っ張り上げた。

（チッ！あの仮面・・・あんなこともできるのかよ！）

影でそれを見ていた苦無の投擲手はブライに悪態をつく。

「さて、絶好のポジションで震える仔鼠には」

≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＥＮＢＡ≫
≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！ＲＩＯＴＥ！ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！≫

「たっぷりとお仕置きといくかな」

リオテコンボとなったブライは両の拳を鳴らしながら口に出す。

「あぁそうだな。面出せボケナス！ナメたマネした御礼返しといこ

うじゃねぇか！」

すると、

「くっくっ・・・くっくっく・・・」

暗闇から聞こえる不愉快な笑い。

――ヒュッ！ーー

――カッ！――

そして地面に突き刺さる苦無つきの紙。

「読みな・・・花菱烈火」

「なんでぇ一体！言いたいことがあんなら口で・・・・・・・・・・・・！？」

声に言われる通り、一応は紙に書かれた内容を読んだ。

「ど・・・どうしたの烈火くん？」

――ビリビリビリ！！――

烈火は凄まじい勢いで紙を破りまくり、柳をビクっとさせた。

「クソくだらねぇこと書いてんじゃねぇよ！面出せよてめぇ！勝負してやるよ！」

「・・・断る。君の力を私は甘く見ていない」

謎かけ人は間を開けて答えた。

「あの紅麗を倒した男と、グリードに匹敵するであろう戦士に正面から戦おうなどとは馬鹿げている。間接的に攻撃させてもらおう。それも花菱烈火が一番嫌がるやり方でな」

「根性のねえ野郎だな！！ならこっちから探してやらぁ！」

走り出す烈火、その時だ。

――カチッ――

――ボム！！――

烈火の足元が爆発した。もちろん避けたが。

「地雷を仕掛けるとは、随分とまあ用意周到なことで」

「君達相手にこのくらいでやり過ぎということはないだろう？」

謎かけ人は再び苦無つきの紙を、柳の足元に投げた。

烈火君に見せても破かれてしまうからな。彼女に見てもらおう」

「見るな、姫！」

といわれつつも柳は読み上げる。

「父と仲間と姫君・・・助けるならどちらか・・・？」

「トンマなこと言ってんじゃねーよターコ！俺の親父がこんなトコにいるかよ！」

「そうだぜ！花菱の親父さんは、今頃家でまったりだ！」

烈火と土門がそういってると、『声』と記された魔道具の核が放り投げられた。

『てやんでぇ馬鹿野郎がっ!!!なんなんだぁこん畜生!!?』

「こ・・・この声は・・・」

それは十数年間も常に聞き続けた声。

『文丸(ふみまる)様・・・こちら地上!花菱邸付近です。ターゲット「花菱茂男」捕獲に成功!いつでも殺せます』

『なんのつもりだてめ、固羅!!あぶねぇ!卑怯者!ロープほどてめぇ!!』

「オ・・・親父・・・」

余りにお決まりで緊張感をぶち壊す展開と声音。

烈火もそれに対して呆れを通り越して地面に突っ伏している。

「いかがかな?君の父は我々の手の中にある。助けたくとも遠く離れた地上、為す術もあるまい。どちらかは殺す。言っておくが”どちらも嫌”だった場合は両方殺す」

文丸は陰にて語る。

「父と仲間と姫君、どちらを選ぶ?」

「お前バカだろ?」

「は?」

突然のブライの声に文丸は間抜けな声を出す。

「俺は花菱と出会ってまだ日は浅いし、茂男とかいうオッサンとは知り合いでもなんでもない赤の他人だ。要するにだ――――」

ブライは一瞬でその場を離れ、文丸のいる場所に出向いた。

「な、なんでここが！？」

「俺には人質など意味を成さない」

――バギボギッッ！！――

「ぐぎゃあああああ！！」

薄汚れた忍び装束を着込み、髭を生やし、眼帯をしていて、頭頂部にまで禿げ上がった落ち武者みたいな頭をした中年。それが文丸だった。

「こ、この野郎！俺に手を出した以上、花菱茂男には死んでもらうぞ！」

「だからお前はバカだっつってんだよ。花菱家に今いるのはそのオッサンだけなわけないだろ」

そう、ブライは知っていた。

七実から聞いた際における烈火の家族構成を。

そして連れて来ればある程度は戦力になったであろう不死のくの一のことを。

『な、なんだお前・・・うわっ――ボコッ！――ぐぁあ！！』

「ど、どうした？なにが・・・！？」

魔導具の核から聞こえてくる部下の声に、文丸は不安を覚え始める。

『バカな子。私の存在を知らなかったの？』

烈火の実母、陽炎の声。

『助かったぜ陽炎さん！あ～～～自由って素晴らしい！』

この様子だとロープも解かれたらしい。

「アホンダラ殺せ！！さもなきゃてめぇが殺されるぞ！！」

『うっ・・・うわぁぁぁぁぁぁ！！』

文丸の言葉に反応し、部下が茂男を殺そうとするも

『固羅、小僧！俺を誰だと思ってやがる』

そこからは、

『無（ムン）！！』

――ドゴゴゴゴ！！――

何かの炸裂音が聞こえてきた。

『ガハハハハ！油断しなきゃあこんなもんよ！烈火（あいつ）に・・・火薬（コレ）教えたのは俺様だからな！まだまだ腕は衰えとらん！』

どうやら手に持った火薬玉を投げつけて撃破したようだ。

『花菱茂男を殺したかったら、戦車でも持って来い！！がはははは

ははははは!!!』

「・・・・・・・・・」

もはや二の句が告げていられない文丸。

――ポンポン――

そんな彼に仮面の死神が呟いて見せた。

「遺言くらいは聞くぞ。聞くだけだがな」

なんか烈火たちはこんなブライを見てこう思った。

（（（あれ?どっちが悪党?）））

「ま、まだだ!まだ終わっちゃ居ないぞ!」

そういうと文丸は懐から玉のついた針を複数本取り出し、烈火たちやブライの影に投げさした。

「こいつは影縫(かげぬい)!これに影を縫い刺されちまったら誰かが影から抜いてくれるまで動けないぞ!!これで一気に形勢ぎゃ「無駄な足掻きだな」

そう、影・・・・・それは今のブライ・リオテコンボにとっては専売特許といってよかった。

「黒影操作」

固有能力名が語られた途端、ブライの影は形を歪めた。

そして、ブライの影は彼の直下にまで縮み、影縫の針から逃れた。

「こ、こんな・・・ば、バカなことが！！？」

「現実を受け入れろよ落ち武者モドキｏｒ忍者モドキ」

ブライの拳が文丸の顔面に飛ばされた。

「ぶがあああああッッ！！」

「きゃあぁあッ！」

しかし文丸の飛ばされた方向には柳がいて、文丸が吹っ飛ばされた勢いで柳まで吹っ飛ばされてしまう。

文丸はこれを好奇に思った。

「選択だ！！来たらこの女を殺す！！俺を見逃してくれたら、この女は助けてやる！！どうだ！？」

小太刀で柳の首を狙いつつ、なんともまあお約束の小悪党な台詞がでてきた。

「はぁ、ホントに哀れな奴だぜ。花菱、あいつのトドメはお前がさせ」

――パチンッ！――

ブライは指を鳴らして烈火の影を変形させた。

自由になった烈火は黙って文丸のほうを向いて、柳にこういった。

「姫！目、閉じててくれ」

「・・・・・？・・・・・・・・・！」

その言葉の真意にきづくと、柳は眼を閉じた。
土門も勿論を眼を閉じた。

「人の話聞いてんのか馬鹿餓鬼！！見逃すんなら姿見えなくなるまで全員、遠くに離れやがれ！！」
「見逃すつもりはねぇよ」

空中に描かれた「刹」の一文字によって現れし火竜の名は、竜之炎（りゅうのえ）肆式（んししき）の邪悪竜・刹那（せつな）！

「テメーは調子に乗りすぎた。許すわけにはいかねぇな」

当たり一面を暴れ回る刹那。
怨念じみた叫び声を発しながらも動き続け、無眼に見えるその姿。

しかし奴が隠し持つ独眼の瞳を見た者は、

「瞬炎（しゅんえん）」

一瞬にして焼き尽くされる。

文丸の体は燃やされ、柳は竜之炎伍式（りゅうのえんごしき）・円（まどか）の結界の力で護られた。

「・・・・・まだだ・・・文丸様は不死身なのよォ！！」

全身に火傷を負いながらも、文丸は戦おうとする（卑怯卑劣に）。
だが、

「ぶごばッ！！」

烈火の拳が文丸に炸裂した。
それによって吹っ飛ばされた文丸は、断崖絶壁の崖の淵まで、あと１m有るか無いかのところに追い込まれた。

（しまった・・・）

さらに烈火は竜を呼び出す。
書かれた文字は「塁」
現れたのは竜之炎陸式（りゅうのえんろくしき）・型無（かたなし）の塁（るい）。
姿を見せた塁は幻炎（げんえん）にて姿を変え、人間だった頃の姿と成る。

長くて綺麗な黒髪、妖艶でグラマラスな容姿。
そして身に着けているのは薄手の着流し一枚だけ。
それが塁の人間だった頃の姿の代表だった。

「さて・・・お前に選択と言う名の、謎かけをしよう。我が型無の炎に向こうてくるか・・・・・・はたまた奈落の底に堕ちるか、どちらが利口かな？」

それはつまり、どちらを選ぼうとも命は危ないということだ。

「・・・今度はてめぇが答える番だな、文丸！！」

烈火は自信満々に言って見せた。

「う・・・うっうッ、うう・・・」

文丸は一度崖の下を見てみると、そこへ堕ちる選択をした自分を想像する。

（嫌だ！嫌だ！！嫌だ！！！）

どう考えても助からないのは明らかだ。
そして今度は墨のほうを見た。

墨はのんきなことに「おいでやすー」などと言って手招きしている。
招いた瞬間に敵を焼き尽くすとは思えんような笑顔だ。
胸元もはだけさせており、さらし布さえ巻いていないが故、豊かで形の良い巨乳があらわになりかけている。

文丸は思った。

（下に堕ちればまず助からない・・・・・・・・・だが、炎とはいえ・・・女ならば！！）

勝てる！そう文丸は考えた。

「こっちだぁあぁあぁあ！！」

しかし幾ら見た目が美しかろうと、今は炎の亡霊だ。
墨の姿は一瞬にして猛火へと変わる。

「勇気ある選択ととれなくもないが・・・・・・利口ではないな」
「ぎぃぃあああああああああ！！！」

こうして文丸は黒焦げの無惨な姿になった。
まあ虫の息だったりもする。

「・・・・・・・・・うぅ（涙）」

「どうしたの土門くん？」
「俺ってさ、ここにいる意味あんのかな？」
さっきからロクに台詞さえもらえず・・・・・というか、描写さえマトモにされなかったが故に、完全に空気化していた巨漢学生であった。

＊＊＊＊＊

数分後。

「あーあー、聞こえてますか陽炎さん」
『そっちも大丈夫みたいね、四人とも』
「おお！通じたぁ！」
「スッゲ！そこらのケータイよりよく聞こえるぞ！」
「んー、バッタカンドロイドのほうがいいか・・・・・」

声の魔導具にて連絡中。

『丁度よかった！烈火、大事件よ！朗報か悪報かどうかが複雑だけどね。遠目の能力を持つ影界玉（えいかいぎょく）が見つけたわ』
「？」
『紅麗は生きている！そっちに向ってるわ！』
「ん？紅麗って、顔に火傷のある野郎か？」

そのブライの一言で、みなの視線が一気に集まる。

「紅麗を知ってんのか!?」
「ここに来る途中、ヤミー倒す時に居合わせたんだよ。あの様子からすると、戦人であることは間違いないと思っていたがな」

勿論ブライは直接紅麗の名を聞いたわけではない。
彼の視界から去る際に音遠が呟いた彼の名を聞いただけに過ぎないのだ。

「がはははははは!!やっぱりな!!」

烈火が大笑いする。

「『「・・・・・・・・・」』」

それに対して、柳も陽炎も土門も少し引いた。

「あの野郎がそう簡単に死ぬかってんだ!俺の八竜全てを受けてピンピンしてた化物だぜ?そうこなくっちゃ面白くねえってもんよ!!」
「なんか烈火くん、凄く嬉しそう」

すると烈火は

「全然嬉しくねーよー」

メチャクチャ笑いをこらえていた。

(嬉しいんだ、嬉しいはずよ!絶対嬉しいんだわ!)

柳は確信した。

「ところで石島。花菱と紅麗ってどんな間柄なんだ?」
「腹違いの兄弟で・・・一度は命を賭けたマジ死合をした仲だよ。あのバカウンチ兄弟は」

『と、とにかく気をつけるのよ!また一人とんでもない人間がそっちに向うことになるのだから・・・・・何かわかり次第また報告するわ!』
「あいよ母ちゃん!」

明らかに嬉々とした表情の烈火。
ブライはそんな烈火をみて仮面の下で笑った。

(わかりやすい奴だな。ま、いがみ合っていても兄貴ってことか)

自分には最初からいない兄という存在を持つ烈火の笑顔を見ながら。

＊＊＊＊＊

その頃、鬼凛と螺閃はというと、

「・・・神威、敗戦。木蓮と命、敗戦。文丸、敗戦。挙句の果てには葵までもが敗戦。・・・・・負け越しなことこの上ないね」

鬼凛は冷静そうな表情でも、内心あせっていた。

「まさか裏麗という組織の中、螺閃と私に次ぐと言われる実力者達『四死天（ししてん）』の一人が敗れるなんて、どんだけバグキャラなのかしら？鑢七実っていうグリードは」

鬼凛も流石にこの状況は想定していなかったらしい。

「まぁそれでも、トドメ刺される前に逃げられたというだけでも奇跡中の奇跡ねコレは」

「・・・・・・・・・・・・」

「うん、そうだね螺閃。でも逆に楽しみじゃない！そろそろ誰かが私達のいるここに近づいてきた。一体誰が一番乗りしてくるのかしらね？」

＊＊＊＊＊

そして風子とバットはというと、

「うへへ・・・霧沢風子。・・・初めてお前に会ったときに言ったこと、覚えてるか？」

「忘れた。どーでもいいことは憶えない性格なのだ」

風子はキッパリと言い切った。

「じゃあ・・・もう一回・・・言ってやる。”お前は身も心も俺だけのものになる”」

「妄想劇場は御自宅だけでなされたら？」
「へへへ・・・そんなこと言われると、お前のことまで欲しくなる」

余りにクサい台詞に、バットが容赦なく毒を吐く。
だが、双角斎は逆に何かを心の中で燃やし始め、懐に手を入れてあるものを取り出す。

「な・・・何それ・・・？まさか・・・・・・私・・・・・・・！？」
「そう・・・・・・俺が作ったフィギュアだよ。霧沢風子１／１０スケール。ふ、服は着脱式で制服バージョンと私服バージョンがある・・・小さいが下着もちゃんとある・・・」
「その器用さを利用して就職しようとは思わないのですか？才能の無駄使いですよ」

またも毒込みのツッコミ。

「キヒヒヒ・・・・・・１／１の等身大スケール、作っちゃおうかなぁ」

――ベロ・・・――

双角斎の下がフィギュアに触れるのを見て、

（（ゾゾゾゾ！！））

二人の背筋が一気にこおり、色々と接触してはならない嫌悪感が緊急警報を鳴らしまくる。

「なんなんだてめぇは！！？」

「今すぐ消滅しなさい！！」
「おっと」
二人の拳とビンタを巧みに避ける双角斎。
（な、な、ななな、なんて気持ちの悪い奴だ！！生理的嫌悪感がハンパ無いよ！！きっつぅ～～！！）
（ま、まさか、世の中にこんなイカレた変態オタクが存在しているとは！様々な情報を仕入れるべく、裏社会に精通したこの私さえも・・・！これなら会長の淫乱コスプレ趣味に方が遥かにマシではないですか！！）
二人は体を震えさせる。
そんな二人の心情を真っ向から無視するかのように、奴は改めて自己紹介した。
「我が名は双角斎、お前らのご主人様になる男だ・・・・・・！！」

＊＊＊＊＊

同時刻、なにやら古い巻物を手に道を進む一行の姿あり。
「・・・真ん中だ、行くぞ！」
ただ一人、何の障害も無く、確実に最凶の魔導具に近づく者・・・

森光蘭。

「近い・・・・・近いぞ！天堂地獄！！」

（やはり、人間の欲望が進化し、愚かになったな。特にこの男は・・・・・別格だ）

地下世界に存在する全ての人間に・・・・・どのような運命が待ち受けているのか？

それは天堂地獄だけが、知っている。

選択と影と増援（後書き）

次回、仮面ライダーブライ

妄想狂人と王子様と純情

妄想狂人と王子様と純情（前書き）

仮面ライダーブライ！
前回の三つの出来事！

一つ！卑怯卑劣な落ち武者風の忍者モドキ、文丸にブライらが完全勝利！
二つ！風子に助っ人として、バット・ダークが参戦！
三つ！紅麗が、封印の地へと向っていることが判明する！

妄想狂人と王子様と純情

双角斎。
この男は裏麗の中で1・2を争うレベルで嫌われている。
なぜなら・・・・・・・。

「霧沢・・・・・・風子・・・・・・・。お前・・・俺が好きだろ・・・好きだよな・・・・・・・愛してるだろ・・・俺を・・・・・・・なあ？」

「「・・・・・・・・・・・・？？」」

いきなりの意味不明な発言に、風子とバットはポカンとした表情になる。

「いいよ・・・何も言わなくてもわかってるよ・・・わかってるよ・・・お前の目がさあ・・・言ってるよ・・・・・・俺に抱いて欲しいって訴えている・・・・・・」
「おめえ、〇〇〇〇？」
「脳みそ取り替えたらどうです？」

双角斎の余りに度を越そうとする発言に微妙な表情となる。

「照れるなよ・・・受け入れるよ・・・へへ、へへへ。・・・・・・・俺は毎日日記を書く。最近はお前のことだらけだよ風子・・・・・・書くたびに感情は本能となっていく。電波も感じた・・・指令だ・・・運命だ・・・」

一人語りは続く。

「みるみる・・・脳内麻薬の分泌が凄まじくなってきて・・・小説を書いてみた。主人公は俺と・・・お前・・・とても美しく・・・淫らな・・・官能小説だ。その世界では・・・お前はとても素直なイイコだ。哀願・・・しながら求めてくるよ・・・・・・カワイイ・・・カワイイよ風子」

まだ続く。

「・・・そのうち文字の羅列だけじゃ、物足りなくなった・・・お前に触れてみたい・・・・・・持ち運びできる大きさのお前を作った・・・・・・・・まだダメだ・・・人形は動かない・・・肌も作り物だ。そして・・・お前の体を写真にとってビデオで写した」

――フッ・・・――

いきなり双角斎が消える。
そして風子とバットの中間位置に現れ、二人の肌に触れた。それも超至近距離で。

「本物・・・だぁ・・・あったかい・・・や、やわらかい。大丈夫・・・・・・俺も愛してる・・・」
「「ッッ!!」」

――ボグッ!――
――ドガッ!――

「うぎゃッ・・・」

風子は神慮伸刀、バットは拳で双角斎を殴った。

「さわんな。おまえ、気持ち悪いよ」

「今すぐ地獄に直行してください」

二人が実に冷めた表情をして言い切っていると、

「ひゅひゅ・・・やっぱり・・・いいよなぁ・・・・・・・反応が返ってくる・・・ってさぁ」

起き上がる双角斎。

だが、

「う!?」

なにか違和感を感じ、フィギュアを取り出す。

すると、

「う・・・あ・・・ああ・・・」

首と右腕がもげていた。

「ぁあぁ!!うわあぁあぁあぁあぁん!!壊れた!俺の!うわあぁあ!!」

（（こいつと戦うのヤだ））

心の底から本気で風子とバットは思った！

「なんでだよ・・・？」

――バチンッ――

双角斎が背負っている壺の鎖を解く。

（あの壺・・・もしや・・・）

「なんで・・・こんな酷いことすんだよ・・・？俺を愛してるんじゃ・・・ないのかよ？そんなら・・・・・俺にも考えがあるよ・・・」

――カパッ――

「使うぞ」

双角斎が壺の蓋を開けた。

――ゴウゥゥゥゥゥオオオオォォォォォ！！！――

「「くッ・・・！！」」

壺は掃除機の数百倍はあるであろう勢いで空気を吸い込み始める。

（な・・・に！？吸い込まれる！？）

「魔導具・・・・・・魂吸(たます)いの壺・・・・・・・この壺のなかに・・・人間を閉じ込めることが・・・できる」

「きゃ！！」
「拙い！！」

まともに立つ事すらも叶わず、二人は岩にしがみつく。

「風子にバット・・・もう一回聞くぞ。俺を愛しているんだよな？じゃなきゃ・・・永遠に・・・壺の中の住人になってもらう・・・」
「へん！何言ってんだバーカ！てめぇなんざ大嫌いだ！！ぶっ殺してやる！！」
「右に同じですね！！」

風子は中指を立て、バットはアカンベぇをしながら言った。

しかしそれが拙かった。
両手でやっとだったのに、ジェスチャーのために片手を使った結果、

「「しまった」」

驚くくらいにあっさりと壺に吸い込まれてしまった。

――パコ・・・――

「照れ屋だなぁ・・・・・・」

蓋を閉じる双角斎。

「へひゃひゃひゃ！！もう少し素直に・・・なってくれよぉ！！この中で・・・一生・・・！一生飼ってやるからな！！」

＊＊＊＊＊

『もう歩いて随分になりやすが、一向に他の方々に出くわしませんなぁ』

「広いところにまで来たけど、道・・・あってるかな？」

小金井とカッパヤミーは神威を撃退し、とりあえず道なりに進んでいた。

「つーかなんなんだろうねこの門？」

『さぁて？もしかしたら、ここで待っていたら他の方たちも来るんじゃ？』

二人はこの広い空間において明らかに異質な西洋風の鉄の扉のまえに腰をすえた。

するとだ、

「おーい、お前ら」

向こう側から聞いた事のある声。

「この声って・・・！」

『もしかして・・・刃介の旦那！』

「ご名答だ」

おくの洞窟からはブライはテクテクと歩いてきた。
勿論後ろからは烈火たちもついてきている。

「烈火兄ちゃあああぁぁぁん！！」
「小金井ィィいいいい！！」

小金井と烈火は互いに飛びつきあい、再会を喜ぶ。

「つか、この河童だれだよ！？」
『あ、始めまして。あっしは七実様の遣いのもんでさぁ』

土門の言葉にカッパヤミーの能天気な受け答え。

「七実から聞いたが、三手に分かれさせられたらしいな」
「うん・・・・・・」
「そうしょげるな。その内待ってれば来「もう来てますよ」・・・
早いな」

何時の間にか七実が刃介の後ろをとっていた。
七実の隣には気絶した木蓮を担いだ水鏡と、同じように失神させられた命が居た。

「水鏡先輩に七実さん！」
「柳さん、これで殆どのメンバーが揃いましたね」

水鏡は平然といった。

「じゃあ、残りは風子だな。あいつなら五分もせずに来るだろうな！」
「でもビリだったわけだな！」

「「ワハハハハハハハハ！！」」
烈火と土門は幼稚に大いに笑う。
そこへだ。
「仲がよろしいことで結構だわ～」
向こうの岩陰から姿を現す一人の女。
「テメーは確か・・・」
「鬼凛ちゃんでィーす♪」
鬼凛は相も変わらず気軽そうな声音をしていた。
「テメーがここにいるってことは、門番役か？」
そう訊かれると、彼女は刃介らにあるものを見せた。
「カギ・・・？」
柳の呟きどおり、それは鍵だった。
鬼凛はポケットから出したソレを見せながら説明する。
「この門の鍵だね。こいつは火影の民が造った強固なもんで・・・
魔導具の力でも壊せない。この鍵が唯一の術なの。ここをくぐれば
天堂地獄はすぐだよ。さっき森さんも入ったばかりだからまだ間に
合うかもね」
「くれ！」
「イ・ヤ。男なら力づくで奪って♪」

この面子の前になんて命知らずな発言をする鬼凛。

「・・・・・・一つ良いか？」

「あれ？なにかしら？」

いきなり刃介が鬼凛に質問してきた。

「霧沢の行ったルートにはどんな奴がいたんだ？」

「・・・・・・勘がいいんだね」

鬼凛は刃介の思考を察した。

勿論心眼ぬきでだ。

「おい、どういうことだよ？」

土門が刃介に意味を問いただす。

「霧沢風子・・・彼女は私達裏麗でも毛嫌いしてる双角斎っていう奴と戦っていたの」

それには鬼凛が答えだす。

「妄想壁の強いストーカーでね、気に入った女はどんなことがあっても手に入れる男だ。奴自体はそれ程強くないけど問題は魔導具！魂吸いの壺――人間を壺の世界に閉じ込めてしまう。・・・・・・そして、彼女ともう一人は壺の仲の住人となってしまった。これでもう無事に外には出られない」

（ん？もう一人？）

刃介は鬼凛の説明の一部に首をひねる。

「あの壺の中は完全な無の世界。音も光も、出る術も無い虚無の空間。時間だけが外より早く過ぎていく。一時間が十日分・・・もう彼女らは何日無を体験しているのか・・・・・何も見えない、何も聞こえない密閉空間に長時間おかれた人間はどうなると思う?――確実に・・・精神に異常をきたすわ。もう・・・君達の知ってる明るい風子は、きっと・・・帰ってこない」

心なしか、それを語る鬼凛の口調には悲痛なものを感じた。

「そ、そんな、風子、ちゃん・・・・・・ウソ・・・・・・ウソだぁああ!!」
「ああそうだ!!ウソに決まってる!!」

涙交じりに泣き叫ぶ柳の言葉を土門が怒鳴るように肯定した。

「土門、くん・・・・・・」
「柳・・・あの風子が、こんなことで負けちまうような奴だと本気で思ってるのか?今まで俺たちの戦いを見守って来てくれたお前ならわかるはずだぜ。俺たちの――風子の強さをよォ!!」

土門は堂々と言い切った。

「そうだね、私弱気になってた。うん、風子ちゃんは絶対に来るよ!」

柳は土門の言葉により、柳は一気に活力を取り戻す。

「フ、ゴリラにも、役立つところがあったんだな」

「水鏡、お前後で覚えてろよ・・・！」

さりげに水鏡の皮肉たっぷりの言葉が引っ掛かったが。

「よし、じゃあ鬼凛。もし霧沢がその変態野郎をぶちのめしたら、素直にその鍵を渡してもらうぜ」

「いや渡さないから！何勝手に私が鍵を渡すようなフラグを発言したみたいになってんの！？」

刃介の勝手な言い分に鬼凛はツッコんだ。

これから先に起こる果てしない本能の恐怖も知らずに。

＊＊＊＊＊

魂吸いの壺内部。

風子とは中身を落としてきてしまったかのような空ろな表情をしていた。

そう、自分の中身を落としてしまったかのようにだ。

そんな彼女に悪魔の囁きが。

――・・・風子・・・風子ォオ・・・・――

「風子さん、聞いてはダメです」

外から聞こえてくる双角斎の声と、隣で全くの平常状態で風子に声をかけるバット。

――カワイイ風子・・・どうしたんだい・・・元気ないよ?――

「いや、貴方のせいでしょうが」

にしてもバット・ダーク、この劣悪な環境において自我を保つとは――伊達にシルフィードの秘書をやっていないということか。

――つれないこというなよバットォォ・・・・・・お前も照れてんだろ?――

「・・・・・・もう何を言っても無駄ですか」

(あれ?誰だっけ?今話してるの?)

風子は心が空っぽ状態だ。

故に、バットと双角斎の会話?の内容以前の疑念を抱いていた。

――二人、とも・・・出してあげても・・・いいんだぞ。俺を好きだと、愛していると・・・そう言えば・・・・・・・!――

「はいはい。妄想は自室限定でお願いします」

――ホラ・・・言うんだ風子・・・〝愛してる〟と!〟永遠の愛を

誓う”と・・・・・・・・！！――

「ん、狙いを風子さんに絞りましたね・・・！風子さん、無視しなさい」

「（・・・・・・・・・・・なにもわからない。もうどうでもいい）え　い　えん　の」

風子は口を開き始めた。
実にのっぺらとした調子でだ。

――言え！！楽に・・・なる、楽になれるぞ・・・・・・・！！――

「風子さん、口を閉じていて！」
「あい　を」

バットを無視して風子はほんの少しずつ喋る。

＊＊＊＊＊

双角斎は喋りきろうとする風子に歓喜した。

「言え風子！ヒャハハハハハハ！！」

――ガスッ――

「・・・・・・・・・あへ？」

なにかが双角斎の手の甲に刺さった。

「これ・・・しゅり・・・」

手裏剣。

忍者などが使う暗器の一種で、主に投手武器として使われる。

「ぎゃあああああああ！！！」

双角斎は情けなく叫んだ。

「ダメですねぇ。そんな形で隙って言われて嬉しいですか？」

そこへ手裏剣の投手が現れる。

「女の子は感情の無い人形じゃありません。それなりのマナーとモラルが必要でしょう。貴方は不合格ですね」

長く伸ばされた黒い髪。

身に纏った白い忍び装束に背中に背負った忍者刀。

女と見紛うほどの綺麗な素顔。

「十神衆雷覇、ここより私がお相手します」

語り口の優しい青年であった。

「ぐッ・・・ら・・・雷覇だと・・・・・・・！？」

「はいっ」

雷覇はニコニコとして答えた。

（な・・・何故だ!?裏武闘の最中に姿をくらました男が、何故此処に!?）

双角斎はあせっていた。

なにしろ鬼凛から与えられた情報によれば、雷覇の強さは紅麗に次ぐ＝十神衆最強とさえ言われるものがあったからだ。

（お、お、穏やかなツラしやがって・・・とんでもねぇプレッシャー与えてやがる!逃げられねぇ・・・逃がすつもりがねえ・・・!!）

そして、

「う、うわああ!!」

ヤケクソになってあるモノを雷覇に投げつけ、それは忍者刀によって斬られる。

が、それは・・・

――パラパラパラ――

粉の入った袋だった。

「?」

「かかったぁ!!」

雷覇の身に粉がかかると、すかさず双角斎は魂吸いの壺を発動。

「わぷっ」
「馬鹿め！その粉を浴びた人間は・・・この壺に閉じ込められちまうんだよぉ！！風子とバットも・・・そうやって中に入れてやった！！」
二人に異常なまでに、超至近距離にまで近づいたあの時だ。
「成る程、やっぱり風子さんとかの麗人はその中なんですね」
雷覇は地をけり、
「てやぁーー♪」
自分から壺へ飛び込んで行った。
「！？」
驚いた様子であったが、とりあえず双角斎は壺の蓋を閉じる。
「・・・・・・・・・・ほ、本当に強いのか・・・？自分から入った・・・ただのマヌケとしか思えん・・・」
拍子抜けか、意外だったか、双角斎は腑に落ちなさげだ。
「・・・・・ヒヒ・・・まあいい。風子とバットは・・・場合によっては出してやるが、奴は一生この中だ・・・・・・！勝った！！あの雷覇を倒したんだぁぁ！！イヒヒ！！風子にバットォオ！！お前らへの愛が俺を強くする！！」

もう独りで一生やってろといいたくなる絵面だった。

＊＊＊＊＊

壺内部。

「あれ？新入りでしょうか？」
「・・・・・・・・・・・だれ・・・？」

どっちがどっちの言葉かは、まあ言うまでも無いか。
外からやってきた彼は、自分のことをこう称した。

「助けに参りました。王子様です」

果てしなく使いふる・・・・・いや、クサい台詞だった。
だが、嫌な感じはしなかった。

（・・・・・・・・・王子様・・・？あれ・・・？前にも・・・前にも・・・こんなことがあったような・・・・・・ダメだ、思い出せない・・・・・・）

「さっきからこの調子なんです」
「これはなんというか、流石ですね」

風子が思い耽っていると、バットと雷覇が話し合っていた。

「この異常な空間において、精神崩壊を免れることはできずとも、

それを軟化させるために”無意識に心を空っぽ”にしたみたいです」

バットは簡単に風子の状況を説明した。

すると、雷覇は「ん～～」と少し考え、右手を前に突き出し

――ムニュ――

風子の左の乳房をタッチした。

「・・・・・・・・・女子高生好き？」

「ち、違いますよ！これはですね、そう、感情の激流です！年頃の女の子なら、このような事に対して何らかのアクションを起こす筈です！」

「行き成りおっぱい触られたら、誰だって否が応でも反応しますよ。というか、そんな方法をチョイスするってことはやっぱり女子高「だから違いますって！！」

雷覇よ、色んな意味で説得力０だ。

一方風子の思考は空っぽの状態から

――私の胸に私の胸に私の胸に私の胸に――

――まっ暗――

――ｌＢ８７から最近８６――

――そーいや今日私、ブラしてたっけ？――

――双角斎――

――右手H――
――チカン――
――ちかん――
――痴漢――

思考の嵐となっていた。

そして心の状態が完全に戻って眼にしたのは、自分の乳房にタッチしている雷覇。
結果、

ＣＲＡＳＨ！！だった。
簡単にいうと、雷覇が風子に殴り飛ばされたのだが。

「何してやがんだコノヤロー！！死にたいのか馬鹿！！」
「風子あん、落ち着いてください。暫定できながらも、味方が死にそうですよ」
「へ・・・？」

風子はなだめられ、ゆっくりと足元をみた。

「・・・雷覇くん？」

そこには頭から血を流したギャグ仕様な雷覇が倒れていた。

数分後、雷覇が回復し、状況説明が始まった。
双角斎に魂吸いの壺に入れられてから、勿論風子とバットは出口らしきものを探した。

もっとも、そんなものは最初から期待していなかったしあるはずもなかった。

だったら兎にも角にも暴れ回ってみたが、壺はビクともせず、風子は最終手段である風神の核のスペアたる小玉の最後の一個を使おうとまでした。しかし今後のことを考えたバットは当然のようにそれを止めるようにいった。

肝心の核がなくなり、スペアさえもなくしたら風神はただの趣味の悪い腕輪に早代わりだからだ。

しかし、風子はその制止を振り切って使ってしまったのだ。

そして風神に宿っていた人格はこう言い残した。

――ダメだ・・・・・ごめんよ、ゴシュジンサマ。力になれなくて、ゴメン・・・・・・――

その声は実に切なそうだった。

――これで小玉は全てなくなった。風神は冬眠する・・・・・早く本体を見つけて・・・ボクを・・・――

バットに止められたのに、それでも無茶をして、結果として小玉を無駄に消費してしまった。

力を完全に失い、自分は我侭な判断をしたせいで、これから仲間たちの力になれない。

そんなネガティブな想いが起因して心が空っぽになってしまったらしい。

「あなたらしくないなぁ！」

雷覇はひとしきり話を聞いて明るく言い切った。

「人間ですからネガティブなことだって考えます。絶望することだってあるでしょう。でもね、結局マイナス思考でいいことなんて何もないんですよ。全てが楽天的で何も考えていない人よりマシですけどね」

雷覇は言い聞かせるように語る。

「あなた達は・・・どんな時だって、頑張って戦って・・・そして紅麗様に勝った。立って、出口を探しましょう！問題なのは絶望したあと、そこかた立ち上がる勇気です！」

雷覇はそういうと、少しとぼけたかのような――心配するかのような表情で

「・・・・・説教くさかったですか？」

などと尋ねる。

「・・・ううん！ありがと！！」

風子はすっかり元気を取り戻したようだ。

するとバットは雷覇にこう呟く。

「お見事でしたよ」

「いえいえ、大したことではありませんよ」

バットは雷覇のことを高く評価したらしい。
彼女も裏世界には表世界と同様に、善い奴と悪い奴がいることをよーく熟知している。
雷覇はどちらかといえば立場上悪い奴になるのだが、人間としては善い奴に分類されるだろう。

「では気を取り直して、この薄暗い牢獄に光を差し込ませましょう」
「え、どうやって？」

風子がきくと、バットは左腕にしてある腕輪を光らせた。

「さっきからコレにこの空間の解析をやらせていたんですけど、どうやらこの壺の内部は特殊な結界を張る事で視覚を遮り、空間を無限ループさせるようにしていたようなのです」

バットはそう説明し、手刀を構える。

「炎熱」

言語と同時に右手には奇妙な青黒い光が灯り始める。

「属性付加」

そして、灯った光は激しい青色の炎となった。

「うそ・・・？烈火と紅麗以外にも・・・！？」
「これは炎術士の才能ではありません。私の体内にある魔力を炎熱に変換して右手に纏わせただけです」

驚く風子に説明しながらバットが手刀をふるい、視覚封じを司って

いた呪符を燃やした。
それと同時に闇が一気に晴れ、広大であると思っていた空間は多少広い部屋程度のものだったことを強制認識させたのだ。

「全く持って愚かしい男です」

バットは自分らの周囲にいる被害者らを見て呟いた。

「本当にそうですね。己の独占欲を満たす為だけに、何人もの未来ある女性を閉じ込めて自由を奪った」

周囲にあるのは数人分の死体。
その殆どが白骨化した女の死体。

「あまりに自己中心的なこの悪魔にはそんな彼女達の悲痛な声も届かなかったのか」

雷覇は忍者刀の刃先を内壁に当ててこういったのだ。

「忌まわしき元凶に・・・・・・死を」

――ズガッ！！――

突き立てられた白刃は、壺を貫通して外へ出て、双角斎の体を貫いた。

「おぶえッ・・・ばらがあああああああ！！！！」

奇妙奇天烈な絶叫をする双角斎は吐血し、背中に背負った御自慢の壺も割れ果てて、中に居た三人が元のサイズで出てきた。

手刀と忍者刀を構える雷覇とバットに

「許ッ・・・ゴボッゴボッ・・・・・・」

命乞いしようとしているが、吐血のせいでうまくできないらしい。

「お願いです、風子さん・・・・・・目を閉じていてください」
「貴女が見るには、これはあまりに残酷で醜悪ですから」
「・・・・・・うん・・・」

雷覇とバットの言葉に、風子は素直に応じて眼を閉じた。

「頼む!!命・・・!命だけは許して・・・ッ!」

さっきまでの優越感を金繰り捨てる双角斎。
これが新生火影メンバーならどうにかなったかもしれない。
だが彼に鉄槌を下すのは、

「そう言った女にお前はどう答える?」
「電気と冷気、属性付加」

(・・・・・誰かが言ってたな・・・雷覇は”昼行灯”だと・・・
・・・冗談じゃねぇ・・・今の眼・・・コイツは・・・コイツらは・
・・!!)

首だけとなった彼の――それが最期の思考だった。
だがもし、彼の命がもう少し長く続いたら、多分このような言葉が出ていただろう。
死神、悪鬼、羅刹・・・・・・と。

＊＊＊＊＊

「！・・・双角斎が、死んだ」

一方鬼凛は、青ざめる。

『双角斎ってたしか、風子さんとやらと戦ってた奴ですよな？』
「そう。あいつは風子ともう一人を魂吸いの壺に封じて勝利した。もうじきここに来るはずだった・・・あの男さえ現れなければ・・・とんだ、計算ミスだよね」

勿論鬼凛はそれが誰だが知っている。
双角斎は念話的なもので鬼凛にこう報告していた。

――いい情報だ・・・鬼凛。雷覇を倒した・・・！――

もっともその報告も勘違い以外のなんでもなかったが。

『つーことは、あっしらの心配のタネは一切合財刈り取られたってことですかい？』
「多分そうでしょうね、カッパヤミー」
カッパヤミーの言葉に七実が肯定した。
「そんじゃ、こっちもこっちでおっ始めるとするかな」
そしてブライがメダルを換えながら鬼凛の前に立つ。
≪ＫＡＢＵＴＯ・ＯＮＩ・ＩＮＡＧＯ≫
変化したのは頭と脚だ。
カブトムシの立派な一本角が雄々しくそびえるカブトヘッド。
亜種形態の一つ、カブオニナだ。
「だったら私はこれでいくよ、砲鬼神！」
鬼凛は右腕に砲型の魔導具を装備し、その窪みに『蛇』と書かれた玉をはめ込んだ。
「バキュン！！」
砲鬼神は花弁のように砲身を開くと同時に、内部にあったもう一個の嘴状の部品が現れて射出される。
「虚刀流・・・『梅』」
それに対してブライはエネルギーが伝達されたイナゴレッグで、回

し蹴りを行い、弾き飛ばした。

「ひゃんっ・・・・・・まだまだ、いっくよぉーー！！」

鬼凛は砲鬼神の玉を入れ換えた。

今度は内部の部品も口を開き、太く大きい刺を延々と射出し始める。

「甘い甘い」

――バチバチバチバチ！！――

ブライはカブトレッグから緑色の雷撃を行って刺を全てを撃ち落す。

「う～～！やっぱり君の心って読みにくいというか、読みたくないというか・・・・・・」

そう、心眼によって他人の思考を読み取れる鬼凛は戦闘において凄まじいアドバンテージをもつ。

しかし刃介の心はヘドロのような欲望で本心が覆い隠されているので、読めないというより読む気にさえさせないのだ。

流石に自分の敗北を予想する鬼凛だが、ここで彼女の想像を真っ向から裏切る発言がでた。

「・・・・・・・・つまんねぇな。飽きたわ。・・・おい、他に誰か相手してやってくれないか？」

「うぇ？」

ブライの言葉に鬼凛はマヌケな声を出す。

「おいおい鋼、そりゃないだろ！」
「そうだよ！折角楽勝で先に進めそうなのに！」
勿論烈火と小金井がブライに文句をつけた。
口にはださないが、他のメンバーも似たように思っていた。
「だってよぉ・・・これじゃ只の弱いもの虐めだし、つまらない上にあっけなさ過ぎるぞ」
なんだかゲーム感覚みたいなことを言い出すブライ。
「つーか俺も正直疲れてんだよね。ちょいと休みたいから・・・・・・石島、ちょっとお前が相手してやってくれ」
「お、俺がか！？」
いきなりの御指名に慌てる土門。
「何故よりにもよってゴリラなんだ？心眼対策のつもりか？」
「さぁてな、何となくだ。でも、あいつなら絶対勝ちそうな気がするんだよね」
水鏡の言葉にブライは悠長に答えながら前線を引いた。
「んじゃ、宜しく頼むぞ。お前なら絶対に勝つと信じている。多重な意味で」
「やっぱり俺がやんのかよ・・・・・・」
肩をポンポンと叩かれ、土門はいきなり鬼凛と戦うことになってしまった。
これが鬼凛の悪夢の始まりとも知らずに、

「ふーん・・・いいよ、私は」

鬼凛はこの勝負に乗ってしまった。
多分この門を護れずとも、一人くらいは敵戦力を削るチャンスとでも思ったのだろう。

「二番手！石島土門見参！！」

土門は威圧感たっぷりに名乗った。

水鏡が「心眼対策」といったのは、土門が基本的に何も考えずに戦う猪突猛進型ファイターだからと思ったからだ。何も考えず闘争本能に従ったままの攻撃は思考云々では片付けられないものがあるからだ。
しかし、ブライが土門を選んだのは単純な気紛れであったことは、今語ることではないだろう。

まあ作者的には原作通りにことが進むのでスムーズに書けたりする。

「ウガーーーっ！！」

思いきり咆哮し、土門は全速力で疾走した。
まさしく猪突猛進。何も考えていないことこの上なかった。

「ぬん！！」

勢いに任せた拳。
しかしそれを鬼凛は余裕でかわす。

「ムリムリ♪計算の無い戦いでも、その程度のパンチなんか簡単に――ピッ――」

その時、悪夢之時間（ナイトメアタイム）が本格始動した。

ハッキリ言おう。

鬼凛が胸にしていた布が、土門のパンチをかわした際にドモンの爪が偶然あたり、外れた。上半身――それも胸だけを隠すようにしていた布が外れたのだ。

周囲の空気が完全に塗り替えられた。

そして土門の雰囲気も変わった。一気に幼児の様な無表情な顔とは裏腹に圧倒的な威圧感を漂わせている。

（ん？）

それを不自然に思い、自分の姿を改めて確認した鬼凛が視認したのは――

見事なまでに豊満な美巨乳を曝け出した上半身裸の自分だった。

「きゃあああああああああ！！」

当然大絶叫が起こる。

「なんでぇ！？キャーーッ！！あぁあぁあーーーん！！」

自分の胸を隠して叫びまくる鬼凛。

「ひどいよもう！！バカバカエッチ！！」

そして布を拾って再び胸に巻く。

『なんでさぁ？あの取り乱しようは？』

「さあ？この方なら知ってるんじゃないですか」

そういって七実は命を起こした。

最初は色々反抗しようとしたが、七実が少し脅したら一発で話してくれた。

「鬼凛は、すっごく純情だって聞いた事がある」

命は以前に聞いた鬼凛の噂を語りだす。

「男とキスしたことがない。エッチィテレビ番組もまともに見れない。エロ本読んだだけで熱が出るなど・・・」

「要するに貴女方と正反対の人ということですか」

「そうだよ、悪かったな！」

命と木蓮は”あんなことやこんなこと”までしちゃった関係だ。

１９歳になる現在まで純潔云々以前のものさえ穢していない鬼凛とは正に対極と言えよう。

「そんな天然記念物もんな純情娘が生乳をみられたとなれば、ダメージ８００だなこりゃ（しかし、眼福でもあるな♪）」

「刃介さん」
「・・・・・・はい」

ブライがなんか心で呟いていると、それを察知したのか、七実がブライの首に手を添えた・・・！
お仕置きかとおもったが、

「そんなにお胸が見たい、というなら、家に帰った後に幾らでも見せてあげますよ／／／／／／」
「是非お願いします・・・・・・！！」

頬を染めて耳打ちする七実の手を握り、ブライは意志を強めに表現して発声した。

まあ横道はこれくらいにして本筋に戻るとしよう。

（や、やっぱりこんな恰好で来るんじゃなかった・・・・・・）

と、鬼凛が後悔していると

――おっぱい――

心眼を通してこの単語。

（なに・・・！？）

発生源は当然土門。
一見幼稚な無表情だが、実際には・・・

――オッパイ――

脳内で鬼凛の乳房に頬擦りしている自分を妄想していた。

（なッ・・・なんて卑猥な妄想！！）

幾らなんでもこれにはドン引きを通り越すものがあった。

――おっぱい・・・オッパイ・・・オッパイッ――

「いやあぁーーーッ！！」

因みに土門の妄想は切り替わる。

今度は”人気の無い海の浅瀬で全裸姿になっている鬼凛”だった。

「来ないでえぇーーーっ！！」

クリアに心を読めるぶん、ダメージは大きかった。

それも、そんな妄想をかきたてる男が自分を捕らえようとするかの如く近づいてくるのだから尚更だ。

論理的なことを言わせて貰うと、心眼の心を読む力は強烈だが、鬼凛のような純粋な人間が使うと生じるデメリットがある。それは前述のような刃介の欲望や土門の妄想が最たるものであろう。

しかし、普通の人間は考えを必要としない超至近距離での戦い以外ではある程度の思考をもって戦い、鬼凛はそれを読み取って優勢となってきた。

しかし今の土門は戦闘とは一切関係の無い思考によって、己を見失

い・・・動きを無意識的にする程の状況と化している。特に鬼凛のようなタイプの存在を動揺させるには持って来いの思考によって、限定的ながらも激強な状態となっていた！

まあ真面目に長々と語るとこんな感じなのだが、もっと簡単に短くまとめて述べるなら、”サカリがついてエッチモード突入”ということになる。

ついでにもう少し言わせて貰うと、同じ女でも七実や命ならこんな危機には陥るまい。
たとえ同じように裸体を見られたり妄想対象にされても命なら激怒してボルテージをあげるだろう。
七実の場合は、裸体を見られたところで羞恥心の薄い彼女のことだから冷静に服を着なおし、妄想対象にされても呆れ果てるだけであろう。

「冗談やめて！！こんなんで負けたら馬鹿じゃん！砲鬼神！！」

――ズボっ！――

嘴が土門の右肩に命中する。

（性的思考は本能！なまじ強いぶん、冷静な判断力は希薄となる。つまりに防御に弱い！）

鬼凛の考えは全く持って間違っていなかった。
相手が今の土門でさえなければ。

――おッパいオッパいおっぱイおっパイオッぱイおっぱいオッパイ

――

原作通りにする為とはいえ、こんな単語を連呼的に書かなければならないというのは抵抗感ありまくりである。

そして土門の妄想だが、今度は鬼凛がノーブラの状態でシャツをめくって乳房を見せて、

”また大きくなっちゃったよ。キミのせいだぞ♪”なんて言うものだったりする。

「いやぁあああああ！！計算ミス！！」

鬼凛よ。こんな状況を予測できる奴が居たらそいつは最早神レベルだろうよ。

「今の状況じゃ心眼はハンデ極まるよ！まったくなんて奴だい！心の眼・・・・・『閉』！！」

心眼の指輪を外した鬼凛。

これで勝率が上がったと若干思ったようだが、時既に遅し。

前方にある土門の体と彼の股間。

ひとことで言い表すならば、”チョモランマ”とでも言うべきだろう。

ちなみにチョモランマとは標高８８４８ｍの高山です。

それを目撃したとたん、鬼凛の心象風景が一瞬宇宙の隕石群になっていた。

「そろそろ潮時か。柳さん」

「は、はい？／／／」

もう隠すのメンドイので率直にいうが、土門のズボンを突き破らん勢いでデカくなったナニを見て「やだ土門くん・・・／／／」と顔を赤らめていた柳に水鏡が耳打ちした。
土門の暴走を止める為に。

一方、鬼凛は色んな意味で絶対絶命だった。
逃げ場をなくし、前方には性欲の塊状態の土門。

「いや・・・やだ・・・」

ガタガタと震えて、冷や汗ををかき、眼の端っこに涙を浮かべる鬼凛。

「私・・・・・・私・・・は・・・」

そして彼女は大声で言った。

「螺閃だけの女（モノ）なのーっ！！！」

言葉虚しく、土門が鬼凛に飛び掛ろうとした瞬間、

「風子ちゃんに言っちゃうよ！！！」
「っッ」

柳の口から発せられた一言により、土門が鎮まった。

そして、

「イヤ・・・あのさ・・・俺どうやって勝ったんだ?」
「それはな・・・アレだ・・・」
「アレ、だよね・・・」
『なんというべきか、迷いまさぁ・・・・・・・・・(汗)』

房総状態のことをまるで憶えていない土門にどう言えばよいのか、烈火も小金井もカッパヤミーも等しくこまっていた。勿論他の面々もだが。

まあ、この洞窟を脱出したあと、刃介と七実が真実を渋々、包み隠さず話したら、土門は部屋の隅っこで鬱病寸前の状態で縮こまっていたらしいが、今はどうでもいいことだ。

「・・・途中経過はともあれ・・・」
「これでまた一歩前進ですね」

失神してしまった鬼凛のポケットから鍵が取り出され、一同は先へと進む。
そして、大いなる鉄の門の向こう側にいる番人は・・・?

妄想狂人と王子様と純情（後書き）

次回、仮面ライダーブライ

螺閃と母親と到達

螺閃と母親と到達（前書き）

仮面ライダーブライ！
前回の三つの出来事は！

一つ、風子とバットが、イカれた妄想狂人の双角斎に囚われる。
二つ、十神衆の一人の雷覇が、風子とバットを助けた。
三つ、鬼凛は土門の果てしない卑猥妄想の前に完膚なきまでに敗北した。

螺閃と母親と到達

裏麗の一人、鬼凛が性欲の塊とかした土門によって失神させられたことで勝利した火影一向。
重苦しい門が開かれると、その向こうにはグロテスクで趣味の悪い石像が壁に埋め込まれるようにして彫られていた。

あ、ついでにいうと木蓮と命はその場に放置したが、鬼凛は何か情報を知ってるかもしれないので土門に担がせている。

「（この奥に・・・天堂地獄が）――いくか」

烈火は決意を新たにする。
そんなとき、

「薄汚いのが来ましたね」

と、七実がため息混じりに行った瞬間、刃介と七実以外の者達に頭痛が走った・・・・・。
そして、周囲が白バックの奇妙な空間に成り果てた。
その空間の空中には、目玉のようなものが幾つも浮かんでいる。
”来た”という言葉を何度も繰り返して皆の精神に直接語りかけてくるそれの正体を、このうちの数人はすぐさま読み取る。

「天堂地獄か」
「意外なヴィジュアルで」

烈火が激情を込めて喋るのとは裏腹にブライはただ単に興味深そう

にみるだけだ。

『我が名は天堂地獄・・・・・・!!己の意思を持ち、果て無き力を持つ真の魔導具・・・、この日を幾年も待った!我が力を得るに相応しい資格を持った者の存在を!』

天堂地獄は喋り続ける。

『永き時間我は待ち続けた!そして今、その資格を持った者は来た!!』

(ほう、四季崎の変体刀がそうであったように、貴方も所有者を選ぶというわけですか)

語る天堂地獄に七実は心の中でひとり喋る。

(成る程、天堂地獄・・・・・・となるとテメェを携えるに相応しい奴は、ここにいるバカと、一歩先んじてる中年のどっちかというわけか)

ブライもまた然り。

すると烈火は、空中に”崩”の文字を描く。

「ゴチャゴチャやかましい!いいか?これは宣戦布告だ!――粉々にしてやる」

崩によって発生した弾炎は見事なまでに幻影全てを吹っ飛ばす。

「にゃはははは!!よっしゃ、いくかい野郎ども!!」

烈火は何時もの底抜けに明るい笑顔で呼びかける。

（もっともこのバカなら、例え求められようとも圧し折りそうな気がしてならないぜ）

心の中でまた、ブライは烈火の人格を評価していた。

＊＊＊＊＊

一方別ルートでこちらに向ってくる三人は、

「なんなんだろ！今の声！？もしかして天堂地獄！？」

「あのドブ川みたいな色した声は、多分そうでしょうね」

風子とバット、そして・・・。

「おそらく・・・彼の封印が解かれるのも近いということを予感させます」

雷覇もまた、天堂地獄の声を聞いていた。。

というか洞窟にいる奴大半が聞いているだろう。

「天堂が誰に興味を示し、求めているかはわからない。ただその人間を天堂は指し示したのでしょう」

「仏教用語で”天堂”は極楽ですから・・・ね」

「だからなんなのさ！？」

バットのもったいぶった言いぶりに風子が詰め寄る。

「所有者によって善にも悪にもなる純粋な力――あるいは、所有者にとっての極楽で被害者にとっての地獄やもしれません」

バットの予想の後半は見事的中することになる。

だがそれはまだまだ後先のお楽しみだ。

＊＊＊＊＊

火影一向は進軍を一旦中止した。

広い場所にでた矢先、そこに待ち受けていた男。

服、肌、髪・・・全てが白一色で統一され、その顔も白紙のように無表情だ。

「・・・最期の砦を護るのは、やっぱりてめぇか。螺閃――」

重々しい雰囲気の中。

「よいッ」

土門が鬼凛を下ろした。

「ふにゃ？」

そうして鬼凛が眼を覚ます。

「あり?私は一体・・・・・・あーーッ!!螺閃んん!!」

「・・・・・・・・・」

涙ながらに螺閃との再会を喜ぶ鬼凛。
何も答えない螺閃の表情は喜怒哀楽のどれをも示さない。

「おい人形野郎。こっちは先を急いでるからそこを退け。それからグラサン、お前奴の代弁やれ」

と、ブライは明け透けな物言いで螺閃にいった。
少しムっとした鬼凛だが、仕方なく螺閃の意思を読み取ると

「さ・・・＜サヨウナラ。君達も消えるんだ。僕の母親のように・・・！＞」

鬼凛は一字一句間違えず、代弁した。

「テメェの母親のように消えるだと?」

ブライが首を捻っていると、螺閃は伸縮性警棒を取り出す。
今の段階では打撃武器にしかならないその警棒の柄の末端にはなにかがはめ込まれるようなスペースが存在している。

「あっそう。どーしても邪魔してくれちゃう訳か」

烈火は宙に”砕”を描き、右前腕の手甲から炎刃を生やす。

「なら容赦しねぇ。俺たちはなにがなんだって、天堂地獄を・・・

・・天堂地獄を壊さなくちゃいけめえんだよ!!」

烈火は地をけり、炎刃と警棒を衝突させる。

「どけ!!とんでもねえことになっちまうかもしれねえんだぞ!!てめーら!!どんな奴に肩入れしてるのかわかってんのか!!?目ェ覚ませ馬鹿野郎!!」

そう怒鳴り散らして烈火は螺閃をなぐり、彼の頬には切り傷ができて鮮血が流れ出す。

「＜初めから正気だよ。森光蘭がどういう人間かもわかっているつもりだ＞」

鬼凛が代弁しだした。

「＜正直言うと・・・森も天堂地獄にも興味なんてないんだ。僕は自分のために動いている＞」

「自分のためというと?」

ブライが質問する。

「＜知っているかもしれないが・・・僕は麗の元十神衆。紅麗の下にいたこともあったが、これといった行動を起こした事は皆無に等しいがね＞」

語りはまだ続く。

「＜僕は、音遠・・・雷覇、磁生。彼らのよに忠義の心を持った者とは違う。幻獣郎や命のように、隙あらば殺そうと考える人間でも

なかった＞」

次に上げられた者の名前は

「＜戒。あの男には少なからず共感を覚えたことがある＞」

戒・・・・・・それは誇り高き剣士。

「僕に戦いを挑み、勝利する事を生きる全ての目的とした・・・十神衆の中にいながら”個”の戦いに執着した。君にも、同じように生きる目的があるのか？」

水鏡がそう訊いた際、

「＜・・・そんなものはない。戒は・・・君を倒すことに命を燃やし、そして朽ちた＞」

螺閃は相も変わらず一切構えずに答える。

「＜彼との相違点、僕ははじめから死んでいる。死者は歩くんだ・・・・・たった一つの探し物の為に＞」

螺閃は一個の核をとりだし、

「＜見つける場所はどこだって構わない。例え其処が、悪魔の下だとしても・・・＞」

警棒にはめ込んだ。

――カァァァァ！！――

核が警棒にはめ込まれると、凄まじい閃光が放たれる。
それに皆は目を閉じてしまう。

（あれは！！？）

すると、烈火にしか聞こえない声が。

「あちゃッ！！」

烈火の右手の甲には”虚”の文字が浮かび上がり、虚空が人間形態で外に出てきた。

「あの男・・・・・・！！あんなモンを使っておったのか！」
「おいセクハラジジイ！なんだあの魔導具は？」

ブライが虚空に問うてみた。

「あの”光”と書かれたモンの名は――――」

次の瞬間、ブライは虚空を突き飛ばした。
そうして螺閃の警棒攻撃をさけて反撃する。

――バチバチバチバチ！！――

カブトホーンから放たれる緑色の雷撃。
それは見事命中すると思われた。
しかし、

次の瞬間には、雷撃は消え去っていた。

ただ螺閃が魔導具こみの警棒を振るっただけで。

「ん・・・!?」

「電気を壊した!?」

「いや・・・・・・違う!!」

目の前の現象・・・・・・それは、

「消したんじゃよ。文字通りな・・・」

単純な消滅だった。

「光界玉(こうかいぎょく)!」

虚空はその魔導具の名を告げる。

「光界玉?」

「数多の魔導具の中でも珍品中の珍品でな。その昔、火影の民も誰一人として使い手になろうとする者さえ現れんかった、最悪の魔導具じゃ!!」

(ああ、成る程)

ブライと七実は理解した。

彼らだからこそ理解できた。

「その魔導具・・・光界玉っていうのは、正しく呪われた両刃の剣というわけか」

刃介(ブライ)は理解した。規模が違うとはいえ、ある意味同属ともいえるよ

うな力を今正に身に纏っている彼だからこそだ。

「初対面から気になってたその人形ぶりもまた然り「やめてよ！！」」

ブライの言葉を鬼凛が遮った。
エグい過去を無理に詮索されたように。

「やっぱな」
「・・・やはりな」
「おいお前ら！何自分たちだけで納得してんだよ！どんなふうに珍品なんだありゃぁ？」
「うむ――――」

虚空が説明しだした。

「光界玉・・・・・ある意味コイツほど、術者の真価が問われる物はない。影を生み出す影界玉と対となる魔導具でな――――この世の万物全てを消し去る事ができる」

「全てを、消す・・・？」

余りに抽象的だが、直接的かつわかりやすい言葉に、烈火は本気になって問うてしまった。

「簡潔に言ってしまうと、紙に描いた絵を消しゴムで消すように消失させる。物理的に殺すわけでも魂を抜く訳でも何処か異次元へ幽閉するのとも違います。完全なる消滅なんですよ」

七実が捕捉した。

ちなみに、ここにいたる直前、土門がわざと「柳の胸も？」などと消滅対象範囲を聞いていたが、勿論ソレは悪ふざけだ。でもそれは遠回しに柳を貧乳呼ばわりしている事であり、柳を涙目にさせて烈火が土門をモロにボコるトリガーにもなってたりしたが、あまりに見苦しいので皆スルーした。

「では念のため、もう一回だけ確認するか」

ブライは遊び混じりのような動作でメダルを換えた。

≪ＨＡＹＡＢＵＳＡ（ハヤブサ）・ＨＯＵＯＵ（ホウオウ）・ＩＮＡＧＯ≫

メダルチェンジによって、ブライは亜種形態の”ハヤオウナ”となる。

――パンパンパンパン！！――

二本の鳥刀『鏃』の銃口から発射された四発は、

――カァ・・・――

光界玉の光と共に消え去る。

『炎の弾丸まで消されやした！あれもう反則じゃありやせんかい？』

カッパヤミー、この場において漸く口を開く。

「虚空、全てを消す、といったな？ブライや八竜なども消せるのか？」

水鏡が最悪のシナリオを口にした。

「・・・・・・・・形無き物とて例外の範疇には入らん。記憶でも、病魔でも欲望でも打ち消す力があるはずじゃ！結論、八竜（わしら）やブライも消せよう！」

「無敵だぁぁあああ！！」

虚空の説明に土門が叫んでいると、

「ただ――――螺閃は消さないよ。八竜も、ブライもね」

『ん、意外とフェアな奴？』

「＜違う＞」

鬼凛は代弁した。

「・・・・・・う・・・・・・それ・・・言っていいのね、螺閃・・・？わかった・・・」

そこから代弁再開だ。

「＜彼らを消す事に躊躇は無い。ただ・・・原因があるのさ。光界玉の本当の恐ろしさはそれだけじゃない。何かを消した後に術者に起こる、反作用こそが真の恐怖＞」

その光界玉の致命的な欠点は、

「＜消すたびに己の大切なものも消えるのさ。僕はそうして声を・・・感情を・・・そして、母を消してしまったんだ＞」

螺閃の告白は予想以上にショッキングなものだった。

「＜・・・・・僕の顔を見てくれないか？さっき烈火に斬られた傷。あれほどの傷の血がもう止まっている。これは止血じゃない。先ほどの雷撃と弾丸を消した代償に血を少し消されたんだ＞」

螺閃は血を蹴り、警棒をブライに叩きつけるも、ブライの装甲はビクともしない。

「＜消すものに比例して・・・・・僕もそれ相応のモノを奪われていく。ブライの言うとおり、究極の元派の剣なんだよ＞」

説明がひとしきりおわると、

「・・・・・なんでだよ・・・・・なんでだ、螺閃・・・！？」

烈火が身体を震わせていた。
恐怖とは全く持って違う震え。

「自分の母ちゃん消しちまったんだろ！？悲しくねえのかよ！！」
「＜・・・・・・・・・感情も消えている＞」
「憎くねぇのかよ！！その魔導具は、お前の母ちゃんも・・・心も消しやがったんだぞ！！」
「＜・・・・・呪いを吐く声も消えている・・・＞」

いたちごっこのような遣り取り。

「なんでだ・・・・・なんで・・・！！」

烈火は地をけり、拳を構え、

「なんでそんなモンまだ持ってやがる！！！」

――ガゴッッ！！！――

螺閃を思い切り殴り飛ばした。

勢いよく吹っ飛んだ螺閃は声一つだすことなく、壁に激突した。

（なんだ、この力・・・この男・・・急に――――）

螺閃は疑問する。

「この局面、俺と七実が手を貸す必要は無いな」

とブライが口にした。

本来なら烈火の言葉に「じゃあ俺のブライはなんなんだよ？」と皮肉を言ってやりたがったが止めておくことにした。

「立てよ」

烈火のピンとした言葉に、螺閃はゆらりと立ち上がる。

その瞬間、

――ドゴッ――

烈火が螺閃を殴る。

（・・・なんだ・・・？この力は・・・・・・・・なんだ？）

螺閃は困惑する。

「オイ・・・戦況が変わったな。さっきまでの”ヤベェ”って感じがしねぇ。寧ろ”勝てる”ペースだ」
「うん・・・烈火くん、怒ってる」
「何かを消す事の見返りに自分も何かを失う魔導具・・・・・・」
「自分の母も消してしまったと言ったな。それでもなお奴はその魔導具を使い続けている」

土門、柳、小金井、水鏡はシリアスにそういった。

「正気とは思え「おっす!!やってるねーーー!!」」

土門の声を遮る元気のいい声。

「ちゃース♪」
「漸く合流できました」

「ふ・・・」
「風子ちゃん!!」
「・・・・・・」
「バット・・・お前も来てたのか」

霧島風子とバット・ダーク。
火影本陣に合流。

「風子!!」
「風子ちゅわぁぁぁん!!」

土門と虚空が風子に駆け寄ると

――バギッ!!――

「あああああああ！！！！」

虚空にはアッパーカット。

「元気だったかどもーーーん！！」

――バチン！！――

土門には見事なビンタ。

「なーんか皆久しぶりだねぇ！イェイ！ちゃんと全員生きていて良かったよ！」

そのうち二人が軽く死にかけだ。

（・・・風子だ・・・）

土門は起き上がる。

自分たちの知っている、いつもどおりの霧島風子が今ここにいる。

「おかえり風子様！！！」

敬礼する土門に、風子も敬礼で返した。

「鋼さんに鑢さん」

「「ん・・・？」」

バットがブライと七実に声をかける。

彼女の手にはカマイタチとカブハチナ、二体分のセルメダルが入っ

た袋。

「このセルメダルは、取引でのお約束どおり、トライブ財閥のほうで頂かせてもらいます」
「やっぱそうなっちゃう？」
「あなた方はもう一体のヤミーがいることですし、セル不足にはならないでしょう？」

そう、カマイタチとカブハチナのセルは持っていかれても、まだコチラにはカッパヤミーがいる。
セルメダルを数十枚手に入ることは確実だ。

「フン、持ってけ泥棒」
「では確かに頂戴いたしました」

といってバットは袋を懐にしまった。
こういうところはシッカリしている。

まあ、横道はこれくらいにして本筋に戻ろう。
と言いたいところだが、まずここで回想場面にいくとしよう。

＊＊＊＊＊

それはある日烈火が小学校の頃、喧嘩をして帰った日。

「どーした烈火！まーたケンカしたんかい？」

「父ちゃん」
「ん？」

腫れのある顔で烈火がこう聞いてきた。

「俺には母ちゃんがなんでいないの？」
「・・・・・・・・・・」

茂男は少し黙り、

「おやつでも食うか！」
”さいこん”ってのしないの？寂しくないの？」

――ポンッ――

茂男は烈火の頭に手を乗せて、優しい笑顔で言った。

「さびしかねぇぞ！お前がいる！」
「・・・・・花火作ってるときにタバコ吸うなよ」
「お前、今照れただろ。照れたよな？」

ぎゃはは、という下町風な笑い声が響いた。

そして其処からさらに時は流れる。
ある日のこと、珍しく風子の家に遊びに行ったときだ。

「あら、いらっしゃい烈火くん！」
「おばさんウッス！！」

烈火が大声で挨拶した。

「トランプ？いいわね、おばさんも入っていい？」
「おう！入れ入れ！」
「ダメ！」

そこで風子が待ったをかけた。
今思えば、これは烈火に対する好意ゆえか、それとも別のなにかか。

「私たちで遊んでるの！ママは邪魔！」
「はいはい。じゃ、お買い物にでも行くわ♪」

――ゴンッ――

烈火が風子の頭に拳骨をくらわせて、

「邪魔なんて言うな！母ちゃん大事にしやがれ！！」

＊＊＊＊＊

「その後は何時も通り大喧嘩。懐かしいな。あいつは・・・ちっちゃい頃からお母さんがいなかった。他のお母さん見て”いいなぁ”と思っても僻むってことはなかったな。いねーとつまんねぇぞって、いるんなら大事にしろって感じだった」

風子は思い吹けるように言い出す。

「母ちゃんいなくても切ないって思う暇ないだろ！あそこは親父さんおもしれぇから！」
「うん、面白いよ！”シゲちゃんのダンス見やがれ”って言って踊るし」
なんかシリアスを崩すギャグ顔で話す土門と小金井。

「・・・烈火くん、螺閃さんを・・・・・・自分と照らし合わせてるのかな？」
「そうかもね。烈火は柳を守るってこと以外に、陽炎さんの呪いを解くって目的がある。自分の知らないところで苦しんでいた母親を、楽にしてやりたいって思ってる。だから納得できない。自分の母親を消してしまった魔導具を未だ手にして、戦ってる螺閃のことが」
柳の言葉に風子はそう長々と答えた。
それは烈火と１０年ちかく悪友をしていた彼女ならではの言葉だった。

そして螺閃は荒く息をつきながら必死に体力を回復させようとおもう最中にこう思う。

（なぜ・・・ここまで戦える！？体力に限界は無いのか？化け物か・・・！？）

今思うと、烈火も紅麗も、裏武闘決勝戦での際、お互いに火の粉さえ出せないほどに全てを絞りつくし、挙句の果てドームを全壊させて尚、原始的な殴り合いでその勝負を続けたのだ。

「・・・・・・・・・・・・・」

「烈火さんの気持ちを読み取って、螺閃に教えてあげてください。鬼凛さん」

「・・・・・・雷覇・・・・・・・」

沈黙する鬼凛に、雷覇はそういった。

ただただ静かなる表情で。

「俺は守りてえって気持ちで戦える！あの紅麗だって・・・・・・死んだ母ちゃん(麗奈)が愛した火影を誇ってる！守れなかった人達に詫びながら・・・それでも踏ん張って戦ってる！！」

烈火は荒息混じりにそう告げる。

「・・・うまく言えねえけどよ、お前にはその魔導具を持って戦ってほしくねぇ！お前の母ちゃんもきっとそう言う。母ちゃんの気持ち、大事にしやがれ」

それはウソ偽りのない言葉。

「＜・・・・・君と紅麗が何度も立ち上がった訳・・・・・・わかったような気がするよ。背負っているんだ。僕にはたった一つの探し物があると言ったよね。自分の消えるときを探しているんだ＞」

螺閃の言葉にも嘘偽りはなかった。

「＜母さんを戦いの中で消してしまった罪・・・・・・己自身を消す事を罰と定めていた。ただし中途半端な消え方じゃない。意味ある消滅を求めた。他に望みはない・・・消え場を探す歩く死体さ。僕は・・・背負ったものを捨てようとしていたんだ＞」

螺閃は語り続ける。本音の言葉を。

「＜これでは・・・・・・勝てる筈もないか・・・・・・（僕には感情が無い・・・でも、なんだろうこの気持ち？）＞」

螺閃の代弁者である鬼凛は、それを代弁できることに嬉しく思い、涙した。

「＜僕の負けだ＞」

ただ螺閃は、探し物を見つけた気がした。

「・・・・・はぁ」
「どうかしました？」
「いや、ただ・・・」
「ただ？」

刃介（ブライ）は心底面倒くさそうに言った。

「甘ったるいと思っただけだ。・・・・・それよりも」

ブライはある人物を指差す。

「そこの忍装束で黒いロン毛、誰だお前？」
「彼は雷覇。紅麗の腹心といえる十神衆の一人で、私と風子さんを助けてくれた人です」
「へー・・・ってお前に聞いてないぞバット」

バットが何気に説明し、ブライが小さくツッコむ。

まあ脇道はさておき、

「ホントもうすぐだぜ、天堂地獄！」

烈火の締まるような声に、一同は洞窟に入ってからのことを思い出す。

なお、

「確かに・・・いろいろあったよ・・・・・・」

『あー、そうでやんしたねぇ』

小金井とカッパヤミーは何気にオカマサイボーグを思い出して、泣きっ面だったり呆けた面してたりしていた。

（凄く嫌なことあったんだね、薫くん・・・・・・）

柳はそんな小金井に同情していた。

「いっちょ暴れてやるか！！クソ魔導具に泣き入れさせてやろうぜ！！」

そうして一同はリレー形式にハイタッチしあい、そして全員がタッチし終えて拳で円形をつくるようにして前に差し出し

「火影忍軍、出陣！！」

＊＊＊＊＊

一方、螺閃と鬼凛は。

「・・・・・螺閃、私たち・・・外出よっか！ホラ、いい空気吸いに行こう？」

と鬼凛がいっていると、螺閃はふと視線を脇にずらした。
そこにはベレー帽を被り、顔には十字型のペイント、女物を服装をした人物がいた。
もっともボロボロなんだが。

「お互いに負けちゃって残念無念ですね、螺閃さん」
「なんだ、葵・・・・・あんたまだこの中にいたんだ」
「ふふぅ、確かめたいことがありまして。お二人に質問があります」

葵はボロボロの身体を引きずるようにして、無理矢理貼り付けていた笑顔の仮面を一瞬だけ剥いだかのようにいった。

「今後、彼らと戦う意思はありますか？」

それはつまり、これからも裏麗でいるか？という質問だった。

「＜無い。僕は探し物を見つけた。その真意を確かめる事が今後の中心活動。敵に回るつもりでも裏切ったわけでもないが、これからは好きなように動く＞」
「・・・・・あらま・・・」

確固たる決意の言葉だった。

「相変わらず我侭なんだね」

葵が急速に身を乗り出して接近してきた。

「君、一応裏麗(ボクタチ)の首領なんだよ？責任感皆無じゃないか。ムカツクなぁ」

「＜関係ない。ムカついたらどうする？ケンカでも売るのか？＞」

狂気の笑顔たる葵に対し、とことん無表情な螺閃。

「売りませんよぉ、クスクス。君ほどの人間が素直に彼らを通しちゃったことで、答えはもうわかってましたから♪・・・・・・そこで君の首領としての最後のお仕事なわけさ」

葵は再び偽りの笑顔をはりつける。

「綺理斗(キリト)、蛭湖(ヒルコ)、門都(カドツ)・・・そしてボク、葵の死四天(シシテン)を、新たな首領として引継ぎをしてもらう」

「＜結構。森にもそう伝えてくれ＞」

「ハイハイ、ゴクロー様ぁーーっ♪バイビー螺閃ちゃん♪」

そうして、葵は消えていった。

すると、螺閃はなにかを思考したらしく、それを鬼凛が読み取った。

「・・・ううん。私はずーっと貴方の側にいる。なにがあってもそれだけは変わらないよ。貴方の意思は、私そのものだよ」

鬼凛の想い。それは紛れも無く、本物だった。

＊＊＊＊＊

火影一向たちは、天堂地獄を封印した場所の手前部分。
火影の紋章の直情に歪な髑髏が掘られた門の前にきていた。

「・・・よいか・・・もう後戻りはできん。最後の選択は生か死かじゃ！」

虚空は魔導具の核を掲げた。
すると、光が髑髏の目に入り込んでいく。

『・・・・・・火影魔導具・・・・・・・火影所縁の者と認める・・・・・・封印の扉・・・・・・・解放・・・・・・・』

扉にある髑髏の機械的な声が冷たく響き、門は大仰な音を立てて開いていった。

「出発進行だな。強欲中年の顔でも拝んでいくかねぇ」

ブライはその後、「ついでに殴って顔変形させるか」などと危ない発言をしていたが、スルーの方向で。

＊＊＊＊＊

彼は子供の頃からそうだった。
食べ物が欲しい女が欲しい金が欲しい家が欲しい絵画が欲しい。
何かが手に入れば次の物次の物。
満たされることなど味わったことがない。

永遠に尽きない、欲望。

そして考える。どれだけ金を集めても宝石を集めても、死んだら意味を成さない。
それゆえに、彼は思い至った。実に夢物語臭い子供じみた発想に。

そう、永遠の命が欲しいと。

そして彼はたどり着く。
その眼前に、目と鼻の先にある物、それこそが彼が求めていた物。
歪な空間において、様々な柱や刃物が突き立てられ、それらには幾重もの呪符付きの鉄線が張り巡らせてある。
その中心には数百年の年月をおもわせる古い鎧甲冑が安置されていた。

「ひゃはははははは！！天堂地獄だァぁあ！！」

森は一目散に駆け寄っていく。

こいつが手に入れば恐れる物など消える。
火影も殺す、紅麗も殺す、メダルの戦士も殺す。
そして治癒の少女を我が物にした私は・・・・・と。

しかし現実は甘くない。

――バキャァァァン！！――

なにかが森を弾き飛ばし、激痛を味合わせる。

「ぐ・・・ぐぎゃあああああああぁぁあぁぁちくしょう！！！」

「森様！！」

「パパ！？」

八神と煉華は森に近寄るも、リュウギョクだけは違った。

「成る程、四百年前における全ての技術を用いた大結界による封印か。これは生半可な力では壊せそうに無いな」

などと冷静に分析している。

「じゃあ私の炎でもダメかな？」

「やってみればわかる」

といわれると、煉華は物は試しにと高出力の火炎を結界に放射した。けたましい音がたちこめ、森達ももしやと考えたが、結果は変わらなかった。

「では今度は私の番だな」

とリュウギョクが腰の鞘に収めてある二振りの忍者刀を勢いよく抜刀して逆手に持って構えた。

刀の刃が結界に届く寸前に、

――ガコォォン――

門が開いていく音がして、リュウギョクが刀をピタリと止めた。
結界は壊すのは、グリードたる彼女なら決して不可能ではない。
しかし、邪魔者が来たというなら話は別だ。

≪ＫＡＢＵＴＯ・ＨＡＣＨＩ・ＩＮＡＧＯ≫

男声の電子音声が聞こえてくる。

≪ＫＡＢＵ（カーブ）・ＫＡＢＵＫＡＢＵＨＡＣＨＩＮＡ！（カブカブハチッナ）ＫＡＢＵＨＡＣＨＩＮＡ！（チナ）≫

そして奇妙な歌声を聴いたとき、四人は確信した。
そして門が完全に開ききり、彼らに初めて声をかけるものが、一言いった。

「初めまして、強欲中年の森光蘭（カブハ）」

頭部には雄々しく立ったカブト虫の角に橙色の複眼。
両腕には凶暴な蜂の如き毒々しい毒針が生えている。
そして両脚にはギザギザとしたイナゴのソレがあった。

上・中・下の全てが緑一色で統一されている。

「ブ・・・ブライ・・・火影・・・」

仮面ライダーブライ・カブハチナコンボ。
その姿を目にした森は腰を抜かして座り込んでしまう。

そして思い出すのは、自信たっぷりだった螺閃たち。

「あの・・・あの・・・役立たずどもがぁあぁーーーっ!!!」

全ての怒りを吐き出すように、森は叫んだ。

「他人を怨み呪うのはテメーの勝手だが、ちったぁ自分の置かれた状況を確認したらどうだ?」

ブライは見下すようにしていった。

「どうやらあの古ぼけた鎧が天堂地獄らしいですね」

『となればやることは一つでさぁ』

七実とカッパヤミーがそういうと、烈火は天堂地獄に呪われた哀れな盗賊たちを思い出して、

「やるぜ」

一言だけそういった。

「させるか!!八神ィ!!煉華!!リュウギョク!!殺せぇ!!!」

森は叫びに叫び、それに反応して三人が向っていく。

「無駄だよ。そこのくノ一ならいざ知らず、そんな人間如きでどうにかできはしない」

そういった瞬間、

――ビュンビュンビュンビュンビュンビュン！！！――

ブライは分身した。
空間スペースのことを考えると、最大１００体は無理だったので、
精々２０体くらいだ。
しかしそれでも八神と煉華を組み伏せるには十分だった。

「きゃう！！」
「ぐはっ！！」

壁や地面に叩きつけられ、身動きを封じられる八神と煉華。
残るはリュウギョクのみ。

「流石はブライのコンボだ。やはり人間程度でどうにかできるわけもないな」

と、薄らと笑いながら言った。

「その初っ端からコンボを使ってくる心意気に敬意を表して、私もソレ相応の力でお相手しよう」

そうして、チャリンチャリンという音を立てながら、リュウギョクは怪人形態になっていく。

「「「「「「っっっ！！？」」」」」」

これには火影のメンバーも驚くしかない。

本物のグリードといえば、七実くらいしか知らないのだから。
そんなリュウギョクに近づく者が一人いた。

「お久しぶりですな、”真庭殿(まにわ)”」
『あの時の火竜か』

虚空だった。
彼はリュウギョクに恐れる様子も無く彼女に話しかけていた。
おまけにリュウギョクも虚空を知っていたのか、妙に落ち着いた口調で返答している。

「何故そのような男に手を貸す？確かあんたは、ああいう人種が一番嫌いだったのでは？」
『四百年前と今現在においては事情が違う。コアを生産するには、森の欲望が必要不可欠』

リュウギョクはそう言いきり、虚空も諦めたかのように彼女を素通りして天堂地獄へと歩いていく。

「おい、とっとと始めようぜ」
『そう急かすな。女と酒は同じだ。ゆっくり熟さずにガッツいても大して美味くはないぞ』

ブライとリュウギョクは構えた。

「我刀流二十代目当主、鋼刃介、推して参る！」
『あぁ来い。私も、貴様に飽きられぬよう多彩な忍法を見せてやるとしよう』

そして、戦いは始まる。

＊＊＊＊＊

一方、洞窟の外――丁度封印の地への入り口付近。

「食い止めろ！！ここを突破されたら後がない！！」
「こいつを封印の地に入れるな！！」

裏麗の防衛陣が、招かれざる者を跳ね除けようと躍起になる。

――ボォォアアァァァ！！――

しかし、全ては消し炭にされた。
紅蓮の炎の恐ろしさを直視した一人は

「うっ・・・わぁぁあぁあ！！」

生存本能に従い逃げようとする。
しかし、

――ビシッ！！――

誰かの手刀が、ソイツの首をうち気絶させたのだ。

「ここから先の案内役は任しといてください」

気軽な口調で話すのは、ジョーカー。

「・・・・・うれしいやないですか！やっぱりあんたは生きとった！」

そして彼が話しかけるのは、

「紅麗さん！」

黒衣を纏いし炎の死神だった。
だがそこへ、

――ブォォオォォォォン！！――

バイクのエンジン音がしてきた。
二人はその方向を見てみると、向こうからはライドベンダーに乗った一人の若者の姿が見えてきた。

「ん？」

若者はライドベンダーを止めて紅麗たちの前に止まった。

「あんたは、確か・・・紅麗さんっすか？」

怪力一族の生き残りが一人、凍空吹雪。
元麗首領・紅麗と遭遇。

螺閃と母親と到達（後書き）

次回、仮面ライダーブライ！

資格者とバケモノと再会

カブハチナコンボ
キック力：１８トン　パンチ力：９トン　ジャンプ力：２００ｍ
走力：１００ｍを４．８秒
身長：２１０ｃｍ　体重：９０ｋｇ　固有能力：多重分身　属性：雷
必殺技：カブハチナスタッブ　カラー：緑色

カブトヘッド
複眼の色は橙。カブトホーンによって強烈な頭突きが可能にある上、雷撃を行うこともできる。カブハチナコンボでは全分身体の制御を担う。

ハチアーム
前腕部に毒蜂を模した虫刀『釘』によってパンチに刺突力の追加をする上に、毒針自体の発射も可能である。

イナゴレッグ
ジャンプ力に特化していて、両足全体にギザギザとした刺が生えている。

資格者とバケモノと再会（前書き）

仮面ライダーブライ
前回の三つの出来事！

一つ！天堂地獄への道のりにおける最後の番人・螺閃に、烈火が相対する！

二つ！螺閃は、光界玉の副作用によって自らの母を消してしまったことが判明する！

そして三つ！火影一同は遂に、天堂地獄にたどり着いた！

資格者とバケモノと再会

ブライとリュウギョク。
この二人による激闘が始まろうとしている中、虚空は結界内にある天堂地獄をただ静かに見つめ、過去の記憶を手繰り寄せていた。

（・・・・・久々じゃのぅ・・・・・・・お前に会うのも。天堂地獄――いや・・・・・・海魔（かいま）・・・・・・・）

海魔（かいま）――それは殺す為に魔導具を造った男。

四百年以上前、火影忍軍六代目頭首が誕生する前のこと。

＊＊＊＊＊

「殺すんだ!!私の造りし魔導具で血を流せ!!殺せ!!殺せ!!」

それだけで海魔という男がいかなる人物かがわかった。
しかし、そんな真庭忍軍以上の人格破綻者が、穏やかな性質をしている火影忍軍において何時までも平和に暮らせるわけもない。

「海魔を捕らえろ!!」
「許せぬ!幼子を魔導具の力量を測る、と言って殺しおった!!」
「十一人もの女子供を殺して尚も逃走中じゃ!!」
「奴はもう火影ではない!!」

「鍛冶場に追い詰めたぞ!!」

当然のように、海魔は火影一族から罪人とされた。
しかしこれは海魔の歪んだ欲望から発生した当然の結果だ。

「・・・愚か者どもめ・・・・・・・」

海魔は鍛冶場である箱を持って立っていた。

「貴様達に私を殺す事はできぬ」

大勢の元同属達の殺気にも気にせず。

「この・・・・・・私の最後の作品で私は・・・・・・人を越える!!!」

海魔の狂気そのものたる表情に呼応するかの如く、箱から漏れ出した悪しき光。

「天堂地獄!!我に永遠の命と果て無き力を与えたもう魔導具よ!!」

――ザシュ・・・・・・!!――

次の瞬間、海魔は火影たちの刃によって刺殺された。
その中には、生前の頃の虚空が鋼金暗器を手に、海魔を突き刺す一人となっていた。

「・・・・・・私は永遠を生きよう。そして永遠に人間を殺し続ける」

そして海魔の、人間としての最後の言葉。

「私の造りし魔導具と共に・・・・・・」

＊＊＊＊＊

回想終了。

「・・・・・・あれから四百年余り・・・・・・・・未だ、その邪な志を忘れず、動くときを待っておったか・・・・・・・」

虚空は右手を突き出し、炎を生み出した。

（お主は滅す!!せめてワシの手でな!!）

しかし、

――ガキッッ!!――

後頭部を石で殴られ、虚空は気絶させられた。

「やらせるか!やらせるかよォ!!天堂地獄は私の物だ!!」

森光蘭。
目的の為ならあらゆる悪行にも手を染める男である。

――ガシッ――

森は結界の一端を担っている柱の一本をつかみ外そうとした。
しかし、柱を抜き取ろうと思った瞬間に、森の掌の皮が切り裂かれていき、血が吹き出す。

「がっ・・・がぎゃあああああいぎぃあああああ!!!!!!」

聞くのにも覚悟がいりそうな必死の叫び。

「『!!!??』」

その声量に、思わずブライとリュウギョクも意識をそちらに向けてしまう程の物だ。

「天堂!!天堂地獄!!我が呼びかけに応えろ!!」

イカれるとかもはやそんな次元の言葉ではなかった。

「力が欲しい!!力だ!!私は・・・欲しいものは必ず手に入れる!!お前も例外ではない!!」

メリメリといった音まで聞こえるというのに、森は柱から手を離そうとしない。
結果として、

――ザキュ・・・!!――

「ひゅ・・・・・・あああああああああああああ！！！！！」

左腕が千切れた。

血潮が吹き出しに吹き出し、血だまりをつくらん勢いだ。

（腕が千切れてるのに・・・・・・なんて・・・なんて執念だ！）

烈火は想像以上の森の欲深さに冷や汗を流した。

「我に・・・力・・・を・・・・・・・」

その時、

――ウオン・・・・・・・――

古ぼけた鎧の面の割れた部分から、奇妙な眼光が宿った。

そして、ガシャという音を立てながら、古ぼけた鎧は自力で立ち上がったのだ。

ただただひたすらに力を求める森光蘭の強烈極まる欲望の波動に反応したか、それとも別の何かがあったのかは最早気にするべきポイントではなくなってしまうほど、今の状況にはインパクトがありすぎた。

結界を司っていた呪符が全て、臨界点を突破したかのように燃え尽きた。

そして古ぼけた鎧はこう言うのだ。

『・・・我は・・・天堂地獄・・・・・・』

それはまるで、この世の全てから隔絶されたかのように錯覚させる声だった。
いや、ある意味そうなのかもしれない。

一方、ブライとリュウギョクの戦いは――

「さーて、おっ始めようじゃねーか！」
『ふっ・・・では参ろうではないか』

ブライとリュウギョクの間には表現をするにもおこがましい雰囲気が漂いまくる。
何者の干渉さえも拒むような・・・。

『真庭忍法――影分身（かげぶんしん）』

――ビュンビュンビュン・・・・・・！！――

凄まじい勢いで行われる分身生成。
ブライは別にそれを意外とは思わない。
分身の術とかは忍者の代名詞と言えるし、なにより今自分が使っている三種類のコアは元を正せば彼女の物だから。

「だったら俺も帳尻合わせと行くか」

――ビュンビュンビュン・・・！――

リュウギョクが本体を含めて十体に分身したように、ブライも分身を十体追加した。

「いくぜっ！！」

ブライたちは一気に駆け出していく！

「「虚刀流『薔薇（ばら）』！」」
「「虚刀流『野苺（のいちご）！」」
「「虚刀流『百合（ゆり）』！」」
「「虚刀流『石榴（ざくろ）』！」」
「「虚刀流『菖蒲（あやめ）』！」」

十体のブライは二体ずつ同じ技を繰り出していく。
それに対して、

『『『『『『『『『『真庭剣法――流水剣（りゅうすいけん）！！』』』』』』』』』』

十体のリュウギョクは両手に忍者刀を逆手に持った状態でたった一つの技で迎え撃つ事を選択した。
勿論使っている忍者刀は相当な業物であるのは明白だ。なにしろリュウギョクがこの戦いで使っている一品なのだ。下手な刀剣を持ってくるわけがない。

リュウギョクの構えは待ち伏せるかのような邀撃の構えだ。
しかし、その構えは前や横からならいつでも対処できるようにされている。

「「「「「「「「「「オゥラァァァア！！！！」」」」」」」」」」

十体のブライが繰り出す攻撃。
それに対するリュウギョクは邀撃の構えである『小流（しょうりゅう）』で待ちうけ、

――ス・・・ッ――

刀身にて全て受け流した。
水流剣・小流の型の名に恥じることのない動き。

『今度はこちらからだ・・・！激流（げきりゅう）の型！』

リュウギョクは小流の型とは打って変わり、邀撃から攻撃へと転じた。
荒れ狂う河川の如き圧倒的な激動となり、ブライを圧倒する。
何度も打ち鳴らされる剣戟の音。

「く・・・ッ」

幾度と無く鳴り響く金属と金属がぶつかり合う音。
それに混じってブライの危うい声が漏れ出す。

真庭剣法・流水剣。
それは古い真庭忍軍の歴史の中で使い手を失い消え去ったはずの剣法。
だがそれをリュウギョクは達人の領域で使いこなしている。

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

ブライは一斉にローグスキャナーを滑らせてコアメダルをスキャン

する。
それと同時に両腕に装備された虫刀『釘』を両足に装備しなおして一気にジャンプした。

「「「「「「「「「チェストォォォオオ！！」」」」」」」」」」

掛け声を上げながら『釘』をつけた両足を突き出しながらリュウギョクに突貫していくブライ。
その間にも分身の数は三倍に増えていく。
この多重分身による必殺の多重キックの”カブハチナスタッブ”は、リュウギョクへと迷い無く突き進んでいく。

『ふふふ・・・・・・』

攻撃を喰らう側とすれば、ブライたちは空から振ってきた槍にも見えたであろう。
しかしリュウギョクは微笑んで次の手をうった。

『忍法――疾風迅(しっぷうじん)』

――瞬ッ――

次の瞬間、全てのリュウギョクは全てのブライの目前に移動していた。
それこそ音もなければ気配も無く、一瞬でだ。

『続いて、剛力無双(ごうりきむそう)』

――ドスッ・・・！！――

「「「「「「「「「「「が、は・・・・・・ッ！？」」」」」」」」」」」

重たい・・・余りに重たい。

そんな一撃が繰り出され、ブライは元の一体に戻ってしまった。

『やはり我刀流といえども、初めて見る技の全容はしれないか』

リュウギョクも影分身を解いて静かに呟いた。

（こんなことなら、シェードフォーゼ――メダマガンもってくるんだったな・・・・・・）

ブライは遅い後悔をしだした。

しかし、メダマガンもシェードフォーゼも洞窟の入り口に置いて来てしまっている以上、後の祭りだ。

『さあ立て。この程度で死なれては余りに退屈だ』

リュウギョクは見事なまでに上から目線で言った。

「・・・あぁ、しんどい」

といいながらも、ブライは立ち上がった。

「でもさ・・・惚れた女の前で、恰好悪いトコは見せられねぇよな・・・」

そう、七実の前で無様に敗北するような場面だけは見せたくなかっ

た。

「仕切りなおしと行こうじゃねーか」

『当然、私もそのつもりだ』

≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＥＮＢＡ≫

≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！ＲＩＯＴＥ！ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！≫

ブライはリオテコンボに戻り、魔刀を手にして再びリュウギョクに切りかかった。

――ガキン！ガキン！！――

打ち鳴らされる剣戟音。

上手く受け流すことによって、忍者刀が切断されぬよう、そして上手く反撃できるよう、リュウギョクは洗練された動きで戦う。

一方ブライは今まで取り込んできた技法の全てを結集させて、リュウギョクの動きに追いついていた。

しかし、リュウギョクはコンボで為し得る超絶的身体能力や固有能力を真庭忍法によって再現する。

それぞれのメダルの特性に合わせたコンボに一々形態変化させなければならないブライとリュウギョクの間にある隔たりはここにあると言ってよい。

――ガキィィン！！ガキィィン！！――

打ち合う鉄の音。

（このままじゃジリ貧だぜ！・・・かといって今更七実に助力を請

うのも・・・）

ブライは少し考えた結果、

（いや、アリか）

あっさりとプライドより勝利欲をとってしまった。

「七実！カッパ！」

「はい？」

『なんでやんすか？』

「一発デカいのきめっから、ちょっと時間稼ぎ頼むわ」

と言って、ブライは後方に大きくジャンプした。

「はぁ、しょうがないですね」

七実はそう言いながらも怪人態になる。

『ではいきますよ、リュウギョクさん』

『お手柔らかに頼んまさぁ』

『まあ、この展開も予想済みだったがな』

七実とカッパヤミーとリュウギョクは対峙し、衝突した。

そしてブライは、

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

ローグスキャナーでローグレイターに嵌っている三枚のコアをスキャンしていた。

「まだ足りないか・・・」

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

二度目のスキャニングチャージ。

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

三度目にして、ブライも満足のいくレベルでエネルギーが充填されていく。

「よし・・・・・七実！！」

『あ、はい』

ブライが大声で合図し、七実はカッパヤミーごと戦線を離脱する。

「ハァァァ・・・！」

ブライの両足にはラインドライブを通して送られたエネルギーが蓄積され、脚部には無機質な翼が生えた。

「ハッ！」

そして、その状態で助走をつけて跳躍し、出現したメダル状のリングを三つ――キックの姿勢で潜り抜けていく。血錆色の光を身に纏いながらリュウギュクに迫っていくブライ。

「チェストォォオオォォォ！！」

掛け声を上げながら必殺の両足キック、”リオテキック”を叩き込まんとしているブライに対するリュウギョクは

『面白い！』

雰囲気にノったのか、彼女もまたソレ相応の力で迎え撃ちつことにした。

『真庭忍法――劉殺生（りゅうせっしょう）！！』

リュウギョクは二振りの忍者刀を構えて、ブライの必殺技を自身が誇る最強の忍法で歓迎してみせることにしたのだ。
しかし、それは互いに空振りに終わってしまう。

――ビューーーーーーーッッ！！！！――

ハッキリ言うと、ブライとリュウギョクが戦っている間に、これだけのことが起こっていた。

烈火が破壊しようとした天堂地獄は、虚空のレーザー砲でも破壊されず、烈火のことを罵倒しつくした末に森光蘭を所有者として認めた。

天堂地獄と融合して異形の姿と化し、失った筈の左腕までが異形の腕となって再生。
その威力を確かめるかのように、八神を殺害。虚空の説明によって、

海魔が天堂地獄に自らの魂を注入し、自ら魔道具となったことで、現在森の体には二つの魂が存在していることが判明。

そして、烈火が虚空のレーザー砲で森ごと天堂地獄を焼き尽くそうと試みるも、森は体に大穴を開けられた状態でも平然とし、逆にそのレーザー砲を口から撃ち返すと言う離れ業をやってのけたのだ。

前述にある効果音はそれである。

「『ッッ！！？』」

ブライもリュウギョクも、それには驚き、動きを一旦止めてしまい、互いに技は不発となった。

「おい、まさか今ので、この洞窟崩れるんじゃないか？」
『長々と勝負するわけにもいかなくなったな』

ブライは些か焦り、リュウギョクはこんな状況でも冷静さを失わない。

『森よ、あまり大袈裟な事はしないでくれ。こっちの戦闘が中途半端に終わってしまった』
「ヒャハハハハ！そう無粋なことを言うな！今私は最高に気分がいいぞ！！」

森は、体の腰から上の左上半身から禍々しい刺やら目玉やらを生やしたおぞましい姿で歪な笑顔で返事をした。

「それに洞窟が崩壊するまでもう少し時間がある。お前ほどの実力ならどうにかなるだろう？」
『屁理屈を』
リュウギョクは不愉快そうに返答した。
すると、
「森様、リュウギョク様」
二人を呼ぶ声。
『緋水・・・か』
「・・・はい・・・裏麗所属、ＮＯ．１３神慮伸刀の緋水です」
門からこちらへと登場してきた緋水は、一応再三自己紹介した。
それから森に一目視線をおくり、
「天堂地獄を手に入れたのですね、森様・・・・・・」
「ああ！見よ！この美しい体を！芸術的とは思わぬか！？私はな・・・人間を超越したのだよ、緋水！！」
森は変貌した醜悪極まる姿に感銘しながら、自慢するように返事をした。
いや実際のところ、これは立派に自慢しているのであろう。
「・・・・・おめでとうございます」
緋水は無表情でそういった。
しかし、彼女が此処に来た理由は・・・・・・

「御気分のよろしいところ、無粋とは思いますが、今日は森様に答えていただきたいことがあり、参上いたしました」

洞窟が刻一刻と崩れていく中、緋水は喋り続ける。

「裏麗採集テストの時のことです。一対一で殺し合い、勝った者が合格というシステム・・・後に対戦表は予めつくられていたと聞きました。そして、それをつくったのが貴方ということも」

「・・・うむ、相違ない」

森は素直に答えた。

「私はその戦いで大切な人を自らの手で葬ってしまった。・・・無礼を承知でお尋ねします。我等二人の関係を知っての上であのカードをつくったのですか?」

そう聞いてきた緋水に、森は少し間をおいて、歪で醜い笑顔で説明しだす。

「・・・・・感情を抜き取って初めて人は躊躇無く人を殺せるのだ。まずそれを学ばねばならなかった気様らが恋愛感情だと?あれは教育だったのだ!面白い見せ物だったよ、笑いが止まらなかった!」

――ザシュ!!――

その瞬間、神慮伸刀の刃が、森の首と胴体を切断した。

その光景に火影のメンバー達は驚いた。

裏麗所属の彼女が、実質的頂点の立場にある男の首を斬ったのだか

ら。

「お前はもう・・・人ではない・・・・・・・！！」

今まで封印していた感情を解き放つかのように、無表情の仮面がわれて、瞳から哀しい涙を流す素顔が現れた。緋水がここにやってきたのは、見極める為だったのだ。もし森が娯楽目的ではなく、外道な感情抜きであの対戦表をつくったのだとすれば、状況は違ったかもしれない。

しかし、緋水の心は、森の一言で決した。

ピクピクと痙攣する森の首。
このまま痙攣もなくなってくのかと思えば。

「・・・そうさ。ちょっと前からな。何か不都合があるかね？」

首だけで喋った。
そして首の断面からはおぞましい触手が生え、森の首を支えるものとなった。
首のない胴体も、未だ意思があるかのように動いている。

「人間というのはな、何かを手に入れるために何かを捨てなければならない。鋼刃介がブライとなる代わりに、グリード化の代償を背負っているのと同じだよ」

「――――ッッッ！！？」

緋水は戦慄した。
上澄みの感情を全てをすっ飛ばし、本能で恐怖した。

「あの男を犠牲にお前は命を・・・力を手に入れた。何故其処に満足できない？礼を言われることはあっても首を斬られる筋合いはない。そういうのをな緋水・・・・・・」

森は一息おいて、

「飼い犬が手を噛むというのだ！！」

胴体から生えた殺傷性抜群の腕が伸び、緋水に向っていく。

だが、

≪ＢＡＫＵ・ＭＡＭＭＯＴＨ・ＩＮＯＳＨＩＳＨＩ≫

≪ＢＡＭＡＨＩ・・・・・ＢＡＭＡＨＩ！！≫

――ズドン・・・・・・！！――

重苦しい斧、重刀『鉞』が上段から打ち下ろされ、伸ばされた腕を粉々に粉砕した。

「森・・・・・いや、天堂地獄」

勿論、それを打ってきたのはブライ・バマーイコンボ。

「お前の言うとおり、人は感情を一時的に抜き取って人を躊躇無く殺せるし、何かを得るために何かをしてねばならないという点に関しては賛成しよう。実際俺がそのいい例だからな。・・・しかし――」

ブライは緋水を庇うようにしてこういった。

「お前の欲望は惨め過ぎる上に迷惑極まるんだよ。それに俺は肉体的には人間を捨てているが魂まで人を辞めたわけじゃないからな」

ブライは首をかき切るサインを行ってこういった。

「さっさと・・・・・・Ｇｏ　ｔｏ　ｈｅｌｌ！！」

地獄に逝け！と宣告したのだ。

みなはその言葉に唖然とする。

「バット・ダーク」

そしてその沈黙を破るのもブライだった。

「花菱達連れて外に出ろ」

「いいんですか？」

「早くしろ」

「・・・・・・委細承知」

バットは指示に従った。

「みなさん、いきましょう」

「ってオイ待てよ！俺はここに残るぜ！」

「私も残るよ！」

烈火と風子がそういった。

「土門、水鏡、小金井。そういうことだから、お前ら先に行ってくれ」

「でも・・・！」
「姫を、頼むぜ！」

食い下がろうとする小金井に、烈火はサムズアップして頼んだ。
それに応えるべく、土門は気絶した柳を背負い

「上で待ってるぜ、花菱！！」

そういったのだ。
それを聞いた小金井も、

「絶対帰って来いよぉーー！！死んだら殺すからね、烈火兄ちゃーーーん！！」

などと希望を託していった。

結果として残っている味方勢力は、
ブライ、カッパヤミー、七実、烈火、風子、緋水といった感じになっている。

一方敵勢力は、
天堂地獄、リュウギョク、煉華の三人だ。

しかし、敵味方の区別があいまいな雷覇は、

「はじめましてですよね。貴女も逃げなくていいんですか、煉華さん」

悠長に煉華に話しかけていた。

「うん！パパ見てるの！強くなったパパが悪い人達やっつけるとこ
ろ見てるのよ！」
「・・・・・貴女は・・・・・・あの森の姿をみてどう思ってる
んですか？」

常人なら、今の森をバケモノと断言するであろう。
しかし煉華は、

「カッコイイ・・・かな？」

何かが破綻していた。
その一方で、戦いはデットヒートしていた。

「私は、私は弱虫だったよ風子！真実を知る事が恐ろしかったんだ。
もしそうだったとして自分に何が出来る？と・・・疑惑を胸に秘め、
死に向う戦いで気を紛らわせていたんだ。でも今、自分に正直にな
れた！！」

緋水の腹の底に在る本音を吐き出す。

「お前とカマイタチは教えてくれたんだ！お前にそれを言いたかっ
た！！」
「うん・・・！」

その言葉に、風子は心底嬉しそうにした。

「弐竜！！砕羽！崩！」

烈火は火竜を二体同時召喚を行い、

「くらえ、化物！！」

幾多もの切り裂く弾炎をくりだし、森の胴体をズバズバと切り裂いていく。

「よっしゃああ！！」

攻撃がクリーンヒットし、烈火は有頂天になったその時、

『「！」』

緋水とカッパヤミーは見た。

風子に照準を合わせている森の首と、ブライに刃先を向けるリュウギョクの姿を。

――運命なんて、変えちまえ！――

「風子！！」

『旦那！！』

思考より先に体が動いたときには、

――ドンッ――

風子とブライの体を押しのけ、自らが攻撃の餌食となっていた。

光線は緋水の体を貫き、凶刃はカッパヤミーの五体を切り裂いた。

「・・・外したか・・・」

『・・・・・・・・・』

森はふてぶてしくいい、リュウギョクは無言のままだった。

「ひ・・・緋水ぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！」

「カッパ・・・・・・・」

風子は必死の叫びを上げ、ブライはカッパヤミーに静かに声をかけた。

『へへ、旦那・・・大丈夫で、すかい？』

「当たり前だろ」

『そいつはようござんした。・・・あっしはもう、これで、御勤め終了でさぁ・・・』

カッパヤミーは体がどんどんセルを失って不安定になっていくのもお構いなしで喋る。

「一応聞くが、どうして俺を庇った」

『そりゃ、旦那は七実様の恋人だからですぜ』

カッパヤミーは当然のようにいったが、次にこう付け足した。

『いやそれだけじゃありやせん。あっし個人が、あんたの心意気に惚れ込んでいたんでしょうかねぇ・・・？まあ理屈はもうわかりませんし、どうでもいいんですがね・・・・・・多分緋水も同じ気持ちで動いたんじゃないですか？』

そして最後に、

『旦那、絶対勝ってくだせぇ』

「あぁ、お前は俺の中で生きろ」

――ジャリィィーーン！！――

そして、カッパヤミーは数十枚のセルメダルへと還元された。

『・・・・・奇襲は失敗か。従順な下僕のお陰で命拾いしたなブライよ』

「そうだな。にしても不意打ちとは、テメェもくどい手を使うなリュウギョク」

『もとより忍者は卑怯卑劣が売りだ。文句を言っても受けつけんぞ』

リュウギョクは忍者刀を体内に収納した。

そして、体にメダル投入口を出現させて、そこへ三枚のセルを投入する。

すると、リュウギョクの体内から一体のヤミーが現れた。

バクの頭、マンモスの牙がある腕、猪の野太い脚。

同種混合型ヤミーの一種、バマーイヤミーだ！

『では私は一旦、引き上げさせてもらおう』

――シュン！――

そういってリュウギョクは空気のように洞窟から出て行ってしまった。

するとだ。

「ちょっとイイっすかぁぁぁああ！！」

――ブゥゥオオオォォォォォン！！――

（この声・・・）

ブライはバイクのエンジン音に混ざって聞こえてきた若者の声に聞き覚えがあった。

「鋼さん、お届け物っすよ！」

ブライにトラカンドロイドを投げ渡したのは、シェードフォーゼに跨った吹雪だった。

「俺のシェードフォーゼ・・・・・持って来てくれたのか」

「会長からの指示っすよ。そのトラカン渡すついでのね。・・・ア、それから面白い人も来てるっすよ」

吹雪が指差している先にいたのは、

「おっ・・・・・お前は・・・！？」

「探しましたよ・・・・・・・・・・・父上」

仮面にて全ての感情を押し殺した炎の死神・紅麗。

その姿を見た途端、森は紅麗に関する全ての記憶を一瞬にして、走馬灯のように駆け巡らせた。

恐怖の感情が記憶と一緒に蘇る。

そう簡単に死ぬ奴ではない。

そんなことは吐き気がするほど知っている。

死体が上がらなかったのは何故か？

生きている――生きていたからだ！

「は・・・っ、しぶとい男だ、紅麗・・・！まさか再び会うことになるとはなぁ・・・・・・！！」

天堂地獄の胴体は、腹の部分に顔が形成された状態で喋った。

「しかし――――」

その先の言葉が紡がれることはなかった。

――ズズズズズズズズ！！！――

紅麗は背中から生やした紅蓮の片翼から翅炎（はえん）というなの炎熱手裏剣を叩き込み。

胴体を完膚なきまでに燃やした。

その圧倒的な力量は、正しく組織の頂点にたるものである。

「よぉ紅麗」

「・・・・・・鋼か」

ブライは恐れもせず、紅麗に話しかけた。

「答えは見つかったか？」

「いや・・・・・・まだだ」

紅麗は仮面で閉ざされた顔にてそういった。

「おい、お前らなんの話してんだよ？」

「「黙れ馬鹿猿」」

「なんでだよ！？なんで二人同時！？」

烈火はギャグ顔でツッコんだ。

「黙れといったはずだぞ烈火。少しは分際を弁えたらどうだ？今さっきまで、私の目には貴様の存在など視界に入っていなかったのだぞ。あの程度の出来損ないに手間をかけているマヌケを気にせんのは、至極当然といえよう」

紅麗はある意味、言葉の暴力を投げつける。

「紅麗様」

そんな紅麗を呼びかけるのは、

「よくぞ、御無事で」

雷覇だった。

「お前も元気そうで何よりだ。会いたかったぞ、雷覇」

「もったいなきお言葉。ここへはどのようにいらっしゃったのですか？」

「案内人が居た」

「ワシや、ワシ！！」

「じょ、ジョーカー！！」

能天気に手をふっているジョーカー。

「変なのもついてきたがな」

「・・・・・・・・・」

勿論それは吹雪のことだが、当の吹雪はキツい表情で紅麗をにらん

でいる。
変なの、と言われたのが気に喰わないらしい。

「・・・ここにいれば・・・貴方に御会いできると待っておりました。報告いたします」

雷覇は膝ま付きながらこういった。

「月乃様は生きておいでです」

その一言に、紅麗は仮面の内側でだけ、僅かになにかを変えた。

「裏武闘殺陣決勝戦時、私は月乃宮へと向いました。たとえどちらが勝とうとも、月乃様の命、危ういと考えたのです。・・・・・・・・・・危険な賭けでした」

「・・・・・・・・・・”雷神”を、使ったのか？」

紅麗は察した。
雷神、それは雷覇の切札たる魔導具の名称だ。
能力については、名称から察しがつくであろう。

「月乃様の体内に埋め込まれた遠隔性の爆弾。体外より”電流”を流す事で破壊する・・・・・・あまりに危険ゆえ、今まで行動を見送ってきました。しかし事は急を要し、万一の時は死して償う覚悟のもと、この手に雷神の力を携えた。・・・・・・結果、あの方を縛り付けていた物は消えました。今は安全な場所にかくまっています。ご安心を」

雷覇は絶対の自信を持っての言葉を口にする。

「・・・・・・・・・そうか・・・・・・・・」

紅麗は静かに答えた。

（紅麗さんは生きとった・・・・・・そして・・・・・・三人や！雷覇さんがおる、自分だっておる。紅麗さんの為に戦える人間はまだおんねん！”麗”もまだまだ死んどらん！！）

ジョーカーがそう思っているとき、

――ポンポンっ――

ブライが紅麗の肩を軽く叩きながらこういった。

「紅麗・・・とりあえず、ここは共同戦線張らないか？」

「・・・・・・よかろう。お前は烈火より遥かにマシそうだからな」

紅麗とブライの目には、リュウギュクとバマーイヤミーだけでなく、四つの何かにも向けられていた。

「コラ、紅麗！鋼！何勝手に話し進めてんだよ！つーか此処もそろそろマジでヤベェ！脱出のほう考えたほうがいいんじゃねーのか？」

烈火はそういうも、

「五月蠅い。私は奴にまだ用がある」

「出て行きたいならお前らだけで行け。俺達でなんとかする」

「なんだぁその言い方！！・・・って、奴？」

烈火は紅麗の言葉の一部を抜粋し、土煙のなかにある異形をよーく

目を凝らして視認する。

そこには首だけのを加えて、四体のバケモノが存在していた。

「・・・四つに増えてる・・・・・・！！」

「雷覇、ジョーカー、手出しは無用だ」

「七実も、手は出さないでくれ」

「「「――コクっ――」」」

驚く烈火をよそに、紅麗とブライの言葉に三人は黙って頷いた。

「烈火・・・・・・今は貴様の命、有ることを許してやろう。邪魔だ、立ち去れ」

「馬鹿」

――ガンっ！――

烈火は紅麗を殴った。

「ホンッットに相変わらず嫌な奴だなテメーは！なんでテメェみたいな性格の奴に雷覇とか音遠が付き従ってるのかが、不思――ドバッ！――」

言い切る前に、紅麗の掌打が烈火に直撃した。

勿論それは烈火の口を黙らせる意味もあったが、もう一つ意味があるとしたら、

――ズガァァァン！！――

敵の攻撃から避けさせるがためともいえよう。

「・・・・・紅麗・・・・・・・お前は変わらないなぁ・・・野蛮で粗悪・・・救いようがないよ。礼も弁えぬ、下卑た山猿だ」

「随分と口が回るな。自分一人では何も出来なかった臆病者が、見事な変わりようだ」

森の言葉に対して余裕を持って答える紅麗。

「まあなぁ・・・・・もはや貴様とて”生物として核下”というレッテルがはられた。今の私には力がある！先ほどの貴様の炎でも、我が体を滅することはできなかった！翅炎により細かく斬り裂かれた体の破片は、またそれぞれがより集まりあい、三体の個として複製され「うぜぇぇ！！」

――ブゥゥゥウゥゥゥゥン！！――

――バギィィイイィィィン！！――

「ぐばあああああああ！！！」

ブライの乗ったシェードフォーゼの車体が、首だけの森を跳ね飛ばした。

「さっきからウザいっつの！もういいんだよそういう説明はよぉ！どうせこのあと、複製体にはお前の精神が宿ってますとかいうんだろ？いいよ、もうそういうのメンドくせぇから」

「き、貴様・・・！そんな理由で・・・・・・」

「そんなもこんなもねーだろ。俺たちは敵同士だからな」

ブライはあけすけに、見下すように、森に対してそう言いきって見

せた。

「さてと、届いた御ＮＥＷカンドロイドの力、試してみっかな」

ブライはプルタブスターターを作動させ、カンモードからトラメカモードに移行させた。

『キシャァァ！！』

トラカンドロイドは鋭く咆哮すると、シェードフォーゼのカウル上部に飛び移り、もう一度咆哮すると、シェードフォーゼのカウル部分は中央から真っ二つに分かれていく。

そこからトラカンドロイドが地面に転がっていくと、シェードフォーゼの前輪も真っ二つとなっていき、後輪部分を補助するようなパーツとして後方に駆動する。

そして、トラカンドロイドは突然巨大化し、転がってシェードフォーゼの前輪代わりにならんといわんばかりに車体と合体すると、トラカンドロイドからは一対の足型車輪が飛び出し、さらにはカウル部分には凶暴な口のようなものが競りあがって接続された瞬間、

『キシャアアアアアア！！！』

シェードフォーゼの血錆色のラインはあっと言う間に黄色く染まりはて、猛虎の唸りをあげるビーストマシン・トライドフォーゼへと変形合体したのだ！

『キシャーー！シャアアアァァ！！』

「うわッッ！？」

トライドフォーゼは乗り手であるブライの身を案じることなど皆無で、ただただ野獣の如き動きでガムシャラに走り回っていった。

――バギッ！グギッ！グシャ！――

暴走するトライドフォーゼ。
それに巻き込まれ次々と踏み倒されていく天堂地獄の複製たち。

「こ、こいつ、制御が利きやねぇぞ・・・！」
「イエローコンボを使うっす！そうすれば属性が同調して制御できるっすよ！」
「あ・・・なるほど」

ブライは吹雪の助言に従い、バックルにあるメダルを全て取り替えて、スキャナーを滑らせた。

≪ＹＡＭＡＮＥＫＯ・ＪＡＧＵＡＲ・ＳＭＩＬＯＤＯＮ≫
≪ＹＡＪＡ・ＹＡＪＡ！ＹＡＪＡＧＵＡＤＯＮ！≫

奇怪な歌が奏でられ、黄色い閃光が発せられて収まると、そこにはトライドフォーゼを完全に乗りこなしたブライ・ヤジャガドンコンボの姿があった。

「お、マジで制御できた」

ブライは少し感動した。

「今の鋼さんなら、その暴れ虎の特殊機能も使える筈っすよ」
「特殊機能？」
「論より証拠。とりあえず、メーターの横にある黄色いスイッチを

押すっす」
「コイツか？」

ブライはとりあえずスイッチを推した。
すると。

『ギシャーーーッ！！』

トライドフォーゼは咆哮し、大気を震わせると、

――ビカァァアアン！！――

口部分から強力かつ広範囲な熱性光線が発射された。

『ウォォオオオ！！』

それを察知したバマーイヤミーは、口からエネルギーを噴出させて壁をつくり、どうにかこうにかで天堂地獄をまもった。

「お、驚かせおって・・・しかし、このヤミーと我が無限の力があれば（退け！！）――――ッ」

頭のなかで、森に警告する声がした。
無論それは、海魔！

（我等はまだ完全体ではない！このままでは危険だ！我等の体は数多の数に分裂する！そしてその度、力も分散されていく！私とお前が共存する本体は死滅する事はない。しかし・・・我等本体が分裂

を繰り返せばどうなる?力は細分化され、いずれは――人間はおろか・・・虫以下の存在として永遠を生きる!!)

海魔の説明をきき、森は驚愕した。

「そんな馬鹿な!?一体・・・どうすれば!?」

(完全体になればよい・・・・・我等がある者を吸収すれば力は分散されることは無くなるはずだ)

森が人であった時から狙っていた者。

(その者を取り込んで我々の体の一部とすることが必要だ!先ほどまで此処にいたなぁ・・・あの女を喰らえば・・・・・・)

「そうか!あの女!!まだ間に合う!!」

「・・・・・・・・好い加減にしとけよ」

複製体が柳のもとに行こうとするも、それを許す烈火ではない。

結界王・円の力で敵を封じ込め、

「姫は俺が守る」

そして崩の弾円が結界ないにて炸裂した。

「ぎゃあああああ!!」

「同胞!!」

複製体の死に、本体が大声をあげた。

「破ッ!!」

――バシュン！！――

それと同時に、紅麗も複製体を一体燃やし尽くした。

「・・・・・簡単な理屈だな・・・焼き尽くせばいいだけのこと。消滅してしまえば分裂すらできまい」

「完璧じゃねぇ今なら、潰せる！」

「ヤミーのセル諸共、その薄汚い命は貰っとくぜ！」

次回にて、洞窟編終了。

資格者とバケモノと再会（後書き）

次回、仮面ライダーブライ！

脱出と誕生秘話と火竜の長

トライドフォーゼ

シェードフォーゼにトラカンドロイドが合体して完成するモンスタービークル。トラカンドロイドが合体した影響でカラーが黄色となったうえ、ネコ系コンボ以外では制御できないという暴れ馬ならぬ暴れ虎の如き特性を得ている。

しかしその分性能は段違いに上昇しており、最高速度も1．5倍となり、前輪部分からはメダル状の弾丸を発射したり、口からは熱性光線を放つことも可能である。主に敵が広い場所で大勢存在する場合に有効なビークルであると言える。

脱出と誕生秘話と火竜の長（前書き）

仮面ライダーブライ！
前回の三つの出来事は！

一つ！ブライはリュウギョクの圧倒的な忍法に苦戦する！

二つ！遂に森光蘭は、天堂地獄を手に入れた！

そして三つ！ブライはトライドフォーゼの力を得た！

脱出と誕生秘話と火竜の長

烈火は思い出す。
天堂地獄によって全てを狂わされ、苦しめられ、潰えていった者達のことを。

紅麗は思い出す。
その天堂地獄を所有する男が、今まで自分の大切なものをどれだけもぎ取ってきたかを。

そんな二人とは裏腹にブライは黙っているだけだったが、トライドフォーゼのハンドルをしっかり握っている。

そして三人の考えは一つ。

（（（潰す！！！））））

「なに共闘してやがる！！馴れ合ってんじゃねぇよ蟲がぁぁ！！」

天堂地獄の複製体はそう言いながら刺を伸ばすも、

『ガォォオオオ！！』

トライドフォーゼの車体によって刺は砕かれ、

「ウォオオオオオオオ！！」

ブライが全身から発する眩い光――――攻撃性の光線が全方位に向けて照射されていく。

刺はあっと言う間に灰となっていく。

「はあッ！はあ！はぁあ！」

一方首だけの本体は、まるで芋虫のように身をうねらせながら地面を這って行き、必死になって紅麗から逃げる。

（なんという惨めな姿だ！！結局・・・・・・また紅麗に脅えてるではないか！）

（・・・・・今だけだよ・・・・・・その恐怖心はお前の心に生まれる最後のものだ。逃げて・・・戦況を立て直すのだ・・・！完全体を得るが為に！！）

焦りに焦る森に、海魔が論ずる。

（案ずることはない。運命は必ず、我等を生かす！！）

断罪の火炎を放たんとする紅麗の前に、

「パパは、やらせないよ♪」

煉華が立ちふさがる。

そしてその姿は、

（紅・・・・・・）

紅麗の最愛の女性と被った。

（バカ・・・な・・・）

――ザシャ・・・ッ――

紅麗が戸惑う隙に、煉華は炎の矢を打ち出し、紅麗のわき腹に命中させた。

「ぐっ・・・・・惑わすか・・・・・・・！紅は・・・ここにいる！ここにいるのだ！！」

そう、紅麗の最愛は、今まさに彼の中に居る。

一方七実は、

――カっッ――

腕を振るって発生させた衝撃波をどこぞの壁にぶつけていた。

「・・・・・あの時の女装少年さん。そこでなにをされているのでしょうか？」

「流石は僕をボコった相手・・・・・・と言うべきか？な～～んて♪バレちゃった」

姿を現したのは葵だった。

「お迎えに参りました、森様。ここより撤退致しましょう」

「おお！まっておったぞ、葵！！」

森は歓喜に打ち震えると、口から光をもらしていき、

――チュドォォオオオ！！――

口からレーザーを発射して洞窟の天井を撃ち、さらに状況を悪化させた。

「まずいで！！マジで崩れるわ！！」

「紅麗様！！」

ジョーカーと雷覇もこの状況に危機感ＭＡＸだ。

「森・・・・・・光蘭・・・・・・・！！」

紅麗はわき腹をおさえながら、殺意と憎悪に満ちた目つきで森をにらむ。

「また会おう。烈火、紅麗、ブライ！貴様らが生きてここから出られたらの話だがね」

森は首から伸ばした触手を煉華の腕に絡ませながら、憎たらしい笑顔で離脱宣言をした。

（奴を逃がすな！！とんでもないことになるぞ！！）

「わーってらぁーー！！」

烈火は急いで本体を殲滅しようとするが、そこへ残った複製体が烈火を足止めする。

『ガォォオオ！！』

「だったら俺が！」

『～～～～！！』

今度はブライとシェードフォーゼを、バマーイヤミーが怪力にて止

めた。

「さらばだ」

森は憎たらしい笑顔のまま逃げていこうとする。
しかしそこへ、何の妨害もうけていない紅麗が、強力な火炎を森達に食らわせようとする。
だが、タイミング悪く岩が天井から落ちてきたせいで、炎は森たちに命中しなかった。

「・・・落盤が我等を炎から守る盾となった！これは・・・運命の女神も私に微笑んでいるのだろう。残念だったな三人とも！！」

森は最上級のいやみをこめて”ひゃはははははは！！”と笑いながら、煉華と葵共々、洞窟から姿を消していった。

「運命の女神、ですか。もしいるとしたら、あの下手人になにをさせるつもりなのでしょうか？」

七実は静かに、虚無にその疑問を投げかけていた。

＊＊＊＊＊

その頃バット達は

「おぉーい！まだ出口じゃねーのか！？」

土門は柳を背負った状態で文句たらたらなことを叫んでいた。

「あッ」

その時、先頭をはしっていたバットが止まった。

「ヤバいですね」
「ヤバいってなに！？」
「あれ」

バットが指差した方向には、

「出口が、落盤で塞がれてる・・・！？」

絶望的状況があった。

――オオ・・・・・・――

その時、薄暗い洞窟の中で光るものがあった。

「凍りづけにされた・・・盗賊・・・」

氷の中にいる盗賊の一人は、手を無理矢理動かして氷を削り、拳を握ったなかで親指だけをだし、ある方向を指し示す。

「え？」

その方向をみると、そこにはなんと、もう一つの出口が！

「あそこから出ろって教えてくれてるの・・・？自分たちは逃げられなかったのにお、俺たちを助けてくれるの・・・？」

小金井の声にも当然反応を示さないが、答えはさっきの行動で十分示してくれた。

「ありがとう」

小金井は涙ながらに礼をいうと、水鏡とバットが軽く頭をさげ、土門は合掌して感謝を告げ、そして退路に向っていった。

（（（生き延びよ。若き者たちよ・・・・・そして・・・何時の日か、天堂地獄を破壊し、我々の魂を浄化してほしい。御主らなら必ず成し遂げてくれると信じている・・・・・信じているぞ・・・）））

＊＊＊＊＊

一方烈火たちは、

「くひひひ・・・・・私と海魔が共存する”本体”は無事脱出した！本体の私はまた力を蓄える。治癒の少女を捕らえ食す！そしてその時こそ、究極の魔導生命体、天堂地獄は完成するのだ！！」

複製体は自慢げにかたる。

「バカどもが！！逃げられた！逃げられてやがるぅ！ぎゃははははは！！さ・・・て、少しでも本体が楽になるように、一人でも多く殺しておこう！緋水やカッパのようにな！！」

そのとき、なにかが複製体に近づく音がした。

「天堂地獄、万歳！！」

――ズバッ！――

極めて長い刀身が、複製体を貫いた。

「・・・緋水・・・私、生きるよ。戦うんだ。神慮伸刀、一本もらっていくね・・・お前の気持ち持って生きたいから・・・！」

風子は、全てを覚悟した戦士の顔で、緋水の亡骸にそう告げた。

――ザグッ！！――

「おびょれぇぇえええ！！」

一気に刀身が上方へと引き抜かれたことで、体を半ば半分に切断された複製体。

「死ぬ前に本体に伝えてやれ。”すぐ会いに行くぜ”」

烈火はそういって複製体を全力で殴り飛ばした。

そして宙に『刹』の一文字をえがく。

『塵塵塵塵塵塵塵塵塵塵塵塵塵塵塵塵塵塵塵塵』

刹那の呪詛じみた声とどうじに一つ目が開かれ、複製体を完膚なきまでに燃やし尽くした。
もっとも、一部分だけ焼け残ったが、

――グシャ！――

紅麗がそれを踏み潰した。

「さて、残りは一匹か」

そしてブライの鉾先はバマーイヤミーへ向う。
ブライはローグスキャナーでコアメダルをスキャンした。

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

「我刀流奥義・・・！」

ブライは『杜若』の構えではなく、自然体の構え『無花果』のままでいた。
そしてそこから、軽くジャンプして足を振るった。

「風花乱舞（ふうからんぶ）！！」

七回振るわれた足。
そこから発せられた衝撃波ならぬ斬撃波は、正しく”風に乱れ舞う花弁”だった。

『ンガァァアアア！！』

スキャニングチャージによって強化された風花乱舞の七撃は、見事全てクリティカルヒットし、バマーイヤミーを爆発させた。

――チャリーン！――

――パシッ――

「チッ・・・三枚だけか」

ブライは手中にある三枚のセルメダルを手に、少し苛立ちを覚えながらオーメダルネストにしまった。

「・・・・・んじゃ、俺らも出るかな」

＊＊＊＊＊

封印の地、そこにはゴンゴン！！という音が響いていた。

――バゴォォォン！！――

「いぃぃよっしゃぁぁああ！！」

石島土門、腕力とタフが売りの男であった。

「ち、地上だ！戻ってきたんだ！！」

「・・・あとは、あの四人だな」

水鏡は柳を地面に寝かせてそういった。

「じゃあ待つの？」

「現状ではそうするしかないでしょう」

というわけで、待つ事にした。

しかし、

「・・・・・・・随分時間が経ったな・・・・・・」

「探しにいくか？」

「でも・・・」

「大丈夫ですよ。少なくとも鋼さんと鑢さんの生命力は半端じゃありませんし」

などと四人が論議していると、破壊された壁から三つの人影が・・・！

紅麗、雷覇、ジョーカーだった。

「紅麗・・・・・・（やはり、生きていたのか・・・！？）」

水鏡は紅麗の登場に驚く。

「なんでテメェがいるんだよ！？花菱たちはどうした！？」

「・・・・・・・・・・」

紅麗は何も答えない。
その代わりに、

――ゴバーーーッ!!――

『ガウォオオオオ!!』

地面から炎のレーザーと、猛虎の熱光線が地上に登ってきた。
それによってあいた風穴から、

「よーし、地上へ到着だ!」
「随分荒っぽい脱出でしたね」
「でもお陰で助かったっすよ」

一方の穴からはブライ、七実、吹雪が。

「バカ!!今ので頭に石落ちてコブできたぞ、ヘタクソ!!」
「文句言うな!!」

もう一方からは風子と烈火。
その時、

「烈火くん!!」
「うおッ」

何時の間にか起きていた柳が、烈火に抱きついた。

「よかった・・・烈火くん・・・」
「お・・・おう!」

顔を赤らめて烈火は返事をする。
しかし、

「流石は桜火の息子だ。生存能力は実に高いな」

女の声がした。

「リュウギョクか」
「ふふふ」

ブライは木に取り掛かる人間態のリュウギョクを仮面越しににらみつける。

「テメッ！さっきの続きやろうってのか！？」

烈火はケンカ腰でそういった。

「違うな。ただお前らの様子見をしに来ただけだ。第一、そこの虚刀流はともかく、他の面子では私には勝てない」
「ッ！だったらやってみっかぁぁ！！」

烈火はバカにされたと思い、リュウギョクに殴りかかっていく。
しかし、その行動はまさしく愚の骨頂といえた。

「真庭忍法」

リュウギョクの瞳が、一気に変わって虹色になっていき、烈火の瞳を直視した。

「夢幻惑い（むげんまど）」
「――――――――――」
烈火は動かなくなり、
――バタン！――
倒れた。
「烈火くん！！」
「烈火！！」
「花菱！！」
「烈火兄ちゃん！！」
「ッ！」
柳も風子も土門も小金井も水鏡も、みな烈火に近寄り心配した。
「あなた、烈火くんに何をしたんですか！？」
「”幻惑の魔眼”で幻覚を見せただけだ」
リュウギョクは冷ややかに答えた。
「紅麗よ。その仮面に逆字ながらも火影の印を刻む以上、”そういうこと”なのだな」
「・・・・・あぁ、私たちは”裏火影”麗として戦う。それだけだ・・・」
リュウギョクの質問の意味を理解し、紅麗は冷淡に答えた。
「それだけ・・・か。まあ良い、”忍びは生きて死ぬだけだ”」

リュウギョクはそういうと、今度はブライと七実に向けてこういった。

「何れ又会おう、我刀流に虚刀流。今度は互いに万全の状態でな」

――ボンッ！――

それだけいうと、リュウギョクは懐に忍ばせていた煙幕弾をつかって姿をくらまし、逃げ去った。

煙が晴れた頃には、リュウギョクは勿論のこと、紅麗たちもいなくなっていた。

「・・・真庭・・・」

宿敵のいなくなったその場所で、ブライは刃介に戻っていく。

（侵食が進んでいる）

その姿を見た七実は率直な感想を抱いていた。

ハッキリいって、刃介は左前腕部までもがグリード化していた。

いやそれだけじゃない、色が変わっているのだ。

今までは漆黒だったが、今は”金色（こんじき）”としてそこに存在している。

（コア、三枚分といったところですかね）

＊＊＊＊＊

あれから三日後。
ここはトライブ財閥の会長室。

「なんのようだシルフィード？また俺から血を吸い上げるのか？」
「それに、どうして私まで呼びつけるのですか？」

そこに刃介と七実がいた。

「実はね、貴方達に話しておきたいことがあるのよ。極秘情報だから、外部には絶対もらさないでね。そのためにバットも吹雪君にも席外してもらってるんだから」

シルフィードは何時ものおちゃらけた態度をかなぐり捨てたように真面目な表情をしていた。
服装も会長としての風格のある礼服になっている。

「具体的にいうと？」
「まずはグリードの誕生秘話についてよ」

シルフィードは席に座りながら語り始める。

「８００年前も昔のこと、当時の科学者たちが人工生命体を生み出そうと切磋琢磨した時期があったわ。様々な生物のエネルギーをメダルに凝縮し、それを核とすることでね」
「それがコアメダルってわけか」

シルフィードは黙って頷く。

「初めに作られた十枚のコアは、あくまでただの道具、装飾品と同じ存在だった。でもね、その十枚のメダルから一枚ずつ抜き取って９枚という不完全な数字にした時、それを満たそうとする『欲望』が生まれたの。その凄まじい欲望は進化を齎し、それらに魂といえるものさえ宿らせたわ。その生命体の名、それがグリード」

シルフィードは一旦区切って続ける。

「鳥類王アンク、昆虫王ウヴァ、猫王カザリ、重量王ガメル、水棲女王メズール。この五体の力は余りに凄まじく、彼らに対抗するために抜き取ったコアの力で戦い封印した者、それが『オーズ』・・・！」

「オーズ・・・ですか」

「あの時の甘ちゃんか」

仮面ライダーオーズ。

その存在を七実と刃介は知っていた。

「だけど、リュウギョクは他のグリードとは違うの」

「どういう意味だ？」

「彼女の核となるメダルを、”私たち”はつくっていない。にも関わらず、彼女はブライが誕生する少し前何処かからかフラりと現れたのよ」

「私たち？つくった？」

刃介は不穏なキーワードを見逃さなかった。

「私はね、８００年前、コアメダル研究に参加した一人よ」

「マジ・・・？」

言われてみれば、年齢が８００以上でオーメダルについて詳しいのだから、ある意味有り得ないことでもない。

「大体、８００年前の技術であんな化物達を造れると思う？」
「成る程な。魔導面に通じた者の協力も必要だったわけか」
「その通り。もっとも当時の私は人間だったけど、グリードたちが封印された後、後のことを同志達に託されて、人間上がりの吸血鬼になったのよ。だから正確な年齢は８２５歳ってこと」

様々な情報を開示していくシルフィード。

「ついでに言わせてもらうと、バットは蝙蝠を素体にしてつくった私の使い魔よ。中々優秀で、私の秘書役だけでなく、トライブ財閥の重要施設の統率も一挙に引き受けてくれていて助かってるわ」
「使い魔・・・・・意外と身近にファンタジーな存在が満ちていきますね」
「七実。それいったら俺たちはなんなんだ？」

「それからね、吹雪のことなんだけど。彼が七実ちゃんのこと嫌ってるの・・・気づいてた」

七実は頷いた。

「率直に言わせて貰うとね。彼は苗字どおり、貴女が滅ぼした凍空一族の生き残りなの」
「・・・・・よく逃げ延びられましたね」

七実は無表情でそう呟く。

「吹雪君は貴女から必死に逃げ惑っているとき、突然世界が歪んだといっていたわ」
「世界が？」
「詳しくはわからないけど、きっと次元の歪みかなんかに巻き込まれたんでしょうね。気づいたら私の管轄内で気絶していて、超人的な怪力を見込んで雇ったのよ」

シルフィードは大きく息を吸い、さらに喋り続ける。

「さて、ここからはブライに関する話よ。ハッキリ言うけど、ブライの誕生には私たちは直接関与していないわ」
「じゃあ誰が造ったんだ？」
「・・・・・さぁてね。ただ、我刀流開祖の鋼一刀の話によると、”とあるイカれた刀鍛冶”から”血錆色の三枚のコアをベルトごと貰った”・・・ですって」

「お前初代と知り合いだったのかよ・・・・・」
「えぇ、一緒にお酒も酌み交わした仲よ。かなり喧嘩っ早い不良だったけど」

シルフィードは過去を思い出しながら口を開く。

「あのシルフィードさん。情報の開示はもういいので、本題に入っていただけないでしょうか」
「あぁぁ・・・・・そうね。貴女の前で無駄話してもダメか」

シルフィードは少し残念そうにする。
そして意を決したように言い切った。

「貴方達、新しいコアメダル欲しくない？」

「「・・・・・・・・・・・・へっ？」」

あまりに唐突な言葉だった。

「実は我が財閥のほうも、コアメダルを何枚か所有しているの。その内の三枚をあげるわ」

「・・・・・・条件はなんだ？」

「理解が早くて助かるわ」

シルフィードは妖艶に微笑んだ。

「まず七実ちゃんにはこれから、ヤミーを何体かつくってセルメダルを稼いでもらうんだけど、苗床となる人間はうちの社員の中から選んでね。外部の人間使うと、もしものことがあっても揉み消し切れないことがあるから」

「まぁいいですけど」

シルフィードのシビア混じりな言葉に七実は二返事で了承した。

「そして鋼君。貴方にはある物を回収しに行って来てもらう」

「なにを取りに行く？」

「それを言う前に確認事項が二つある」

シルフィードは指を2本立てた。

「一つ目。貴方達が作業に取り掛かってる間に、あの佐古下柳って娘、確実に拉致られるわよ」

「・・・・・・続けろ」

「二つ目。鋼君・・・・・・もう一度、人殺しになる覚悟はある？」

シルフィードは瞳の奥に、大氷塊のような冷たい物を宿しながらそれを問うた。
刃介は長い長い沈黙の末、こう答えた。

「どの道、今の俺ではリュウギョクには勝てない。新しい力はどうあっても必要だ。多少のリスク程度は覚悟する・・・・・・！」
「刃介さん・・・・・・」

七実は不変ともいえる刃介の決意に、なんとなくだが、彼の名前を呟いていた。

「決まりね。じゃあ手付け及び前払いとして――――」

シルフィードは席を立つと、何時も通りの妖艶な笑顔で刃介に異常接近し、

「いただきます♪」

その首筋に、牙を立てた。

「ん・・・・・・」
「ちゅ～～／／／／／／」

少しばかり、痛みに耐える刃介とは逆に、恍惚の表情で血を吸うシルフィード。
相当彼の血が美味なのか、それとも・・・・・・。

「あの、そろそろ離れてくれません？」

そこへ七実の不機嫌そうな一言。

「あら、ごめんなさい」
「・・・ふぅ・・・」
その一言でシルフィードは牙を外し、刃介は一息ついた。

こうして、今から数日間、鋼刃介という男は”この世界”から消失することとなった。
さらに、七実のヤミーによってトライブ財閥は数千枚のセルメダルを得ることになる

＊＊＊＊＊

その頃、森光蘭の居城となっている建造物内部。
その廊下を歩く一人のメイド。両手には食事を乗せた蓋付きのトレーをもっている。
無表情で廊下を歩くメイドは、二人の黒服が警護している大きな扉の前に立ち止まる。

「食事を・・・もってまいりました・・・」

淡白な口調でそういうと、黒服の一人がセキュリティパネルにカードを通してロックを解除した。

扉が開くと、部屋の中は不気味なまでに薄暗く。

メイドは無表情のまま、心臓音を大きく高鳴らせ、震える身を隠すように喋る。

「森・・・様・・・お食事を、こちらに・・・」

テーブルの上に食事をおくメイド。

「旨そうだな、近頃は食欲があってな」

暗闇の中で、森の声が響き、照明のスイッチが押されると、薄らと明かりがつき、狂気の表情をした森の姿が露になる。もっとも今は人間らしい姿だが。それに、首だけにされた肉体も外見上は完全に元通りだ。

「理解しているのだな、娘」

「（・・・・・この部屋・・・・・生臭い・・・この、ニオイは・・・）何が・・・でしょう？」

震えながらも無表情を保ちつつ質問するメイド。

しかし、その無表情もあっけなく崩壊する。

自分の周囲に、血まみれの女性たちの死体があれば。

しかもその死体らが食い散らかされたかのような惨状ならば。

「ひッ・・・あっ・・・あっ・・・ああ！！いやあああああ！！出して！！許してぇぇえええ！！」

メイドは必死になって扉も叩くも、外の黒服たちが開けてくれるはずもない。
彼らはこのことを承知しているのだから。

「人間には三大欲求というものがある。”睡眠欲・食欲・性欲”だ・・・」

森は顔を醜く変貌させながら話し始める。

「この体になってから変化があったよ。睡眠欲が殆ど消えた。食欲と性欲が一つのものとして感じるようになった。どんな美食家でも味わう事叶わぬ・・・性的快楽を伴った食事・・・」

森は全身をゆっくりと変貌させていき、メイドは壁に背中をくっつけ、尻餅をついて悲鳴にもならない声をだしている。

「ひ・・・い、や・・・」
「理解したな娘?・・・お前が餌だ・・・!」

(・・・・・あ、れは・・・・・・?)

その時、メイドは死の淵の間際に目にした。
常人では見ることは叶わぬはずの物が。
何十何百にも及ぶ卵が入った巣のような物を、彼女は眼にし、食い尽くされた。

そして、メイドが死体になった頃、扉から入ってくるものがいた。
それと同時に、メイドが見た巣の中から、一個の卵から一体の怪人が生れ落ちた。

鯨の祖先の頭、古代鮫の腕、太刀魚の脚をした水棲系の同種混合型・ゼメタヤミー。

「想像以上の成長速度だな」

それに感心するのは、流麗の如き長い黒髪をポニーテールにし、全身に鎖を巻いた忍び装束を身に付けた美女、リュウギョクだった。

「あぁ・・・これが私の”欲望”の結晶か・・・・・・」

森は血だらけの体でクメタヤミーをまじまじと見る。

するとゼメタヤミーはジャリンという音を立てて、百枚近くのセルメダルへと還元された。

リュウギョクはそれを残さずに回収する。

「1枚のコア生産に必要なセルは５０００枚。お前の欲望から生まれたヤミーは量も質も段違いだな。これなら思いのほか早くコアが揃いそうだ。いや、それどころか釣銭がくるな」

リュウギョクは森の肩をポンと叩くと。

「では、私の為にもお前の為にも、もっと欲望を解き放て」

そういって、リュウギョクは部屋を出て行った。

「ふん・・・言われるまでも無い」

森はそんなリュウギョクに、話しかけるように、ひとり呟いた。

＊＊＊＊＊

火影の隠れ屋敷。

シルフィードの言うとおり、刃介と七実が留守の間、柳は拉致された。

葵が”神楽　葵”という偽名で学校に潜入し、彼女に近づき、友人となることで柳と打ち解けることで屋外での交友を謀り、そこにつけこんで拉致したのだ。いや、拉致というより、柳が付いて行く気にさせたというべきだろう。

葵の魔導具によって、柳を守り通す為に命を散らしていくやもしれない火影メンバーのＩＦともいえる姿を幻視させることでだ。

勿論烈火たちも気付かなかったわけではない。

しかし、現場に駆けつけようとしたさい、四死天が一人・蛭湖によって妨害されてしまったのだ。

結果は最悪なものとして終わった。

連絡も無しに居なくなり、未だに消息がつかめない刃介と七実のことも幾度が議題にのったが、今日この時、火影にとって最重要ともいえる情報が陽炎から告げられる。

「森光蘭の居場所が、わかったわ！」

陽炎はそういって、日本地図を広げると、ある一点を指した。

「日本の中心部にあたる中部、近畿地方。山脈が犇くある一点に強烈な反応があった。おそらく登山に利用されていない、私有地としての山岳に連中の要塞はある。そこに森光蘭が、柳ちゃんがいる！」

――がっ！――

それを聞いた途端、烈火は外に出ようとする。

「花菱！！」

「どこ行くの！？」

「決まってらぁ！姫を助けに行く！！」

烈火は大声で叫んだ。

「待ちなさい烈火！！柳ちゃんはまだ生きてる！影界玉が彼女を感じているわ！」

「だからなんだ！？森は姫を取り込んで、完全体になるって言ってんだ！一刻の猶予もねえ！！あいつが危ねぇんだ！！」

己の主張を大声で押し出す烈火。

しかしその烈火の前に、いつのまにか虚空がたっていた。

「・・・どけ、虚空」

「・・・・・ぬしの気持ちはようわかる。だがの・・・」

虚空は一息間をあけ、

「覇ッツ！！」

「ぐは・・・っ」

烈火をぶっ飛ばした。

「このような時にこそ・・・静かなる心を保て。さもなくば敵陣に乗り込んだところで犬死じゃ」

虚空は厳しいようで変え様のない事実を突きつける。

「烈火・・・ごめんなさい・・・・・・あの時に、私と土門が居たら・・・もしかしたらこんな事にはならなかったかもしれない・・・・・ごめん・・・・・・私たち、心のどこかであの二人に頼ってたんだ・・・・・・ごめんよ・・・」

風子は涙ながらに謝った。

確かにあの夜、刃介か七実がいれば容易く蛭湖を撃退して柳を助けられたかもしれない。

しかし、あくまでそれは想像に過ぎない。刃介と七実のいない自分たちの実力の浅はかさに嘆く言葉でもあった。

「ええい！何時までもしみったれたれとるなぁぁあ！！柳ちゃんはまだ大丈夫じゃ！！」

「何の保証があって言ってんだジジィ！！てめぇになにがわかる！？」

「わかる！！」

そして驚愕の一言。

「ワシも魔導具を造った一人じゃ」

世界の時間が、止まって感じた。

「「「「「「ウソォーーーッ!!!??」」」」」」

信じられなくて当然といえよう。

「風神・・・闇水・・・鋼金暗器・・・土星の輪、みなワシの作品じゃよ」

かつて海魔と虚空は互いを競うようにして魔導具を造っていった。
殺める為、生かす為。
価値観の相違が魔導具の能力を相反する物へと変えていった。
ただ魔導具にはみな一つの共通点が存在する。
”魔力”である。

そして治癒の少女・佐古下柳に秘められし力は・・・それとは全く逆の力。

「前例があってな・・・互いの力が反するものだという事が確認されておる」
「・・・・・・前例？」

「いずれわかる。・・・つまりじゃ！」

虚空は未だ残る希望について語る。

「水と油の力が一つになるにはそれなりの準備と時間が必要！単純に”食せばよい”という事ではない。それは奴のなかに在る海魔とてよく知っているはずじゃ！」

それを聞いた途端、

「そっか・・・姫は助かる・・・まだ助けられる！！」

希望の火が灯り始めた。

「そう・・・・・そして・・・おそらくこの戦いこそ、最後の戦い！永きに渡る血塗られた火影忍者の歴史・・・呪い・・・全てを断ち切る重き戦いとなろう！！」

虚空は厳正とした口調と雰囲気で語り続ける。

「火影忍軍七代目頭首、花菱烈火！会わせたい者がおる」

その名は、

「八匹の火竜の頂点、裂神（れっしん）！！」

脱出と誕生秘話と火竜の長（後書き）

次回、仮面ライダーブライ

敵陣と育成と裂神

ルナイト・ブラッドレイン・シルフィード
年齢：８２５歳　職業：企業家　所属：トライブ財閥　身分：会長
身長：１７０ｃｍ　体重：自由自在　趣味：コスプレ　スリーサイズ：Ｂ１００／Ｗ５８／Ｈ８５

輝くブロンドのロングヘアに緑色の瞳、見る者全てを魅了するであろう妖艶な容姿とグラマラスなボディスタイルをした絶世の美女。
鴻上ファウンデーションと対等かつ協力関係にあるトライブ財閥の会長で、様々なメダルシステムをブライ陣営に提供している（その代わりにブライ側はヤミーや戦いで得たセルメダルの４０％を提供する契約と刃介の血を週に一度提供する契約をしている）。
その正体は８００年前コアメダル研究に参加した一人で、グリード達が封印された後、吸血鬼となることで数百年の時を生き永らえた元人間。出自こそは人間だが吸血鬼としては高位に属するらしく、基本的能力の他に風や重力を操作することができる上、他人に自分の血を流し込んで回復力を大幅に高めることも可能である。

血液をイメージさせる赤ワインを良く好んでおり、会長室にミニバーを設けている上、実はソムリエの資格まで取得している程である。

露出度がかなり高かったりボディラインをくっきり出すコスプレ衣装を着用するのが趣味で、ノーブラノーパン主義者でもある（公の場では普通の礼装をする）。性格は淫乱で少々おちゃらけた感じだが、状況によっては冷徹とも言える判断を下す。
ちなみに刃介に対しては特別な感情を持ち合わせているらしい。
コアメダルの開発においては魔導面を担当していたので、それに見合った高い魔術の素養を備えていると思われる。人間上がりでありながら高位の吸血鬼として格付けされている要因はここにあると推測される。

バット・ダーク
年齢：不詳　職業：会社員　所属トライブ財閥　身分：秘書
身長：１６５ｃｍ　体重：４０ｋｇ　趣味：無趣味　スリーサイズ：Ｂ９０／Ｗ５５／Ｈ８６

シルフィードの秘書役をしている麗人。その正体は蝙蝠を素体とする使い魔で、シルフィードには絶対の忠誠を誓っている。基本的な業務は勿論の事、裏社会からも仕入れを行う役割を帯びている上、トライブ財閥の重要施設の統制を全て任されている。普段は冷静沈着で落ち着いた口調をしているが、時折毒舌混じりな言葉を吐いたりする。
頭髪の色はダークブルーで、服装は女物のビジネススーツであることは殆どである。場合によっては戦闘地域に送り出されるエージェントとしても活動する。

凍空吹雪

年齢：２３歳　職業：会社員　所属：トライブ財閥　身分：用心棒
身長：１８５ｃｍ　体重：６０ｋｇ　趣味：日曜大工

「刀語の世界」の蝦夷・踊山に住んでいた凍空一族の生き残り。
七実が村を襲撃した際には空間の歪みに巻き込まれ、別世界に流れ着いた結果、シルフィードの用心棒として雇われることとなる。ブライにメダルシステムを届けたりすることが多いが、村を壊滅させた七実に対しては憎悪と嫌悪感を抱いている。
その気になれば一族特有の怪力でヤミーと交戦することも可能である。
髪は白く、普段着も白いライダースーツである。

敵陣と育成と裂神（前書き）

仮面ライダーブライ！
前回の三つの出来事！

一つ！火影一同とブライ達は、封印の地より脱出！

二つ！シルフィードの口より、グリード誕生秘話が語られる！

そして三つ！烈火は遂に八竜の長・裂神と会いま見えることになる！

敵陣と育成と裂神

連れ去られた柳。
彼女は今、とある薄暗い一室の寝具の上で眼を覚ました。

「・・・・・・・・・」

そっと目を開いていき、

「！」

ガバっと体を起こした。

「・・・目覚めたか・・・治癒の少女・・・」

そこへ聞こえてくるのは底冷えしたかのような声。
柳は焦点の合わないほど動揺したじょうたいで、その姿をみた。

「今日は誕生日だ・・・貴様と私が交わり・・・生まれる・・・神となる私が生まれる」

その者の名は、

「ようこそ。佐古下柳よ」

天堂地獄
森光蘭

「いやぁあぁあ！！いやあああああああああ！！」

柳はそのおぞましい姿に対して盛大に泣き叫んだ。

「泣け！！喚け！！誰もここには来ない！！」

森は悪鬼としかいいようのない声音と表情で柳を恐怖させ、身動きを封じる。

「ふはははははははは！！」

高笑いをし、森は柳の体に触れ、その身を喰らい尽くそうとしたとき、

――カァァ！！――

突如、柳の体から神々しい光が溢れ、森を退けた。

「おおおおおおおあがあああああああ！！！」

森は光を浴びると、体中に激痛を感じて床に倒れ伏す。

「体が・・・溶ける！？なんだ！？どういうことだ海魔！？」

（この女子の治癒の力とはすなわち”陽”の力。”陰”の力の我等が普通の女子のように喰らうのは無理というもの・・・・・・焦るでないぞ宿主・・・・・・！）

海魔は己の知識を引き出し、冷静に森に論じる。

（方法ならある！もう暫く待つのじゃ・・・！）

「ぬがあああああああ！！！」

森は海魔の説明をきくとうんざりしたかのように叫んだ。

「よいな、治癒の少女！貴様は既に私のものだ！！喰ってやる！喰らってやる！！私と一つになるのだ！！」

そう言いながら、森は乱暴に扉を開け、そして閉めていった。

「・・・・・・う・・・うっ・・・ふっ・・・・」

柳は毛布に包まって泣いていた。

「烈火くん・・・・・・烈火くん・・・・・・烈火くん・・・」

ただひたすらに想い人の名を呼ぶ柳。
しかし次の瞬間、彼女のなかで信じ難い出来事が起こった。

「！？」

烈火に関する記憶が薄れ・・・・・・いや、違う。

（どうして・・・・・・？烈火くんのことが・・・・・・思い出せないことが・・・・・・どうして・・・？）

＊＊＊＊＊

地平線など見えないほどに存在する砂の山。

砂しかない砂漠の世界。しかし空は夜のように暗い。
これこそが花菱烈火の精神世界。彼の”心象風景”であり、火竜たちの住処でもある。

烈火はかつて虚空の手でこの場所に訪れ、火竜達と今一度戦って火竜の力の有難味を再確認したことがある。

「・・・さて！そんで？裂神のタコはどこじゃい！おーい、出て来いてめぇ！！」
「・・・・・・相も変わらずの礼儀知らずの怖いもの知らずめが。聞いちゃってるかもしれんからダマッとれ！」

烈火の物言いに虚空はイラつきながら制した。
その瞬間、

「！」

何かの気配を察して後ろを振り向くと、そこには五人の男女が居た。

両目の下に斑点方の模様がある美形の青年の正体は、砕羽。
烈火と同年代くらいで長い黒髪を纏め上げた美少女の正体は、崩。
大柄で太っちょな体型をした男の正体は、円。
スキンヘッドで上半身裸の男の正体は、焔群。
着流し一枚だけの妖艶な美女の正体は、塁。
刹那はいないのか？と思う人がいるだろうが、刹那は火竜の中でも特に気性が荒くて残忍獰猛。宿主たる烈火の命を散らそうとしたこともあったので、この場には来させていない。

「おう、おめーら！」

烈火は思わぬ再会に感激した。

「実際・・・大した男と思うぞ、烈火！ついに・・・ついに裂神が会談の席をもうけた」

「力になるとも限らん・・・だが、彼とて今までのお主をその眼で見てきたのは事実！」

「天堂地獄を破壊するには心強い力となるはず。行くのです、烈火」

崩、砕羽、塁はそういうと、ある場所を指差す。

「裂神はあそこで、貴方を待っています」

それは、この砂漠の風景には馴染まないようで馴染んでいる屋敷だった。

＊＊＊＊＊

ここは森の本室。

そこにあるキングサイズも真っ青な大きさのベッドに、森と煉華が腰かけていた。

そして部屋の壁にはリュウギョクが背を預けていた。

「・・・・・お前はいい子だな、煉華。これから・・・私が数多の女どもを喰い尽くしていこうとする中で、お前だけ喰わずにおく理由がわかるか？」

「ううん」

煉華は素直に答えた。

「お前が私にとって必要だからだよ、わかるか？」

「うん」

「何も考えず・・・ただ私の力となれ、煉華」

（ふん、こういうのを、エゴイズム・・・というのであったな）

リュウギョクは、純白な煉華の心、何も知らない心に深く何かをじっくりと刻み込んでいる森に嫌悪していた。とはいうものの、そういう人間こそがリュウギョク達グリードには必要なんだが。

「リュウギョク君」

「・・・・・なんだ？」

「煉華と一緒に部屋に行っていてくれ」

「あぁ」

とりあえず森の言う事には従うことにした。

――ギィィ――

なんだか嫌な音を立てながら開くドア。

リュウギョクは煉華をつれて廊下を歩いていく。

しかし、そんなときに廊下でバッタリ出会ったのは、

「葵か」

「リュウギョクさん」

「あ！葵ちゃん！」

「・・・・・・」

リュウギョクの言葉には応じるも、煉華の言葉には無反応な葵。

「元気ー？」

「近づくな」

葵は自分に歩み寄ろうとする煉華に冷たく言い放った。

「はぁぁ・・・大変ですよね、リュウギョクさんも。こんなお子様のお守させられるだなんて」

「コアの為なら安いものだ」

リュウギョクはドライに言い切る。

「葵ちゃん、煉華は子供じゃないよ！大人だよ！」

「図体だけはそうだけど、頭の中はお子様でしょ？」

「むぅ～～」

頬を膨らませる煉華。

やっぱり子供っぽいとしか言いようがない。

「ところでリュウギョクさん。煉華と一緒にどちらへ？」

「雇い主のところでちょっとした会議」

リュウギョクは面倒そうに答えた。

「ねー、聞いてよ葵ちゃん！私ね、パパに褒められたんだよ。”お前はいい子だな”って！」

煉華がいきなり会話に割り込んだ。

「パパは私が必要なんだって！悪い事を考えないお前が必「煉華、その辺にしろ」・・・え？」

空気を余りにもよめていない煉華の言葉を遮るリュウギョク。

「ホント、その辺で自慢話を止めて欲しいんだよね、成功作さん」

葵は口と目を三日月のようにして不気味に笑い、煉華がコクコクと頷くと、機嫌を悪くしてある部屋に向かって行った。

「ねぇ？私なんか拙いこと言ったかな？」

――ズドッ！――

言葉の代わりに拳骨がおちた。

「いった～～い！」

「煉華、少しは空気を読め」

リュウギョクは呆れ果て、片手を顔に当てる。

「お前と一緒にいると実に疲れるな」

リュウギョクが何故煉華を叱ったのか、それは葵もまたクローンだからだ。

正確に言うと紅麗と紅の遺伝子情報で生み出されたクローン。煉華と同じ出自なのだ。

しかし、炎術師の才覚を得た煉華に比べると、葵の扱いは・・・・・・。

――葵には炎の資質がありません――

――そのうえ・・・人間としてあまりに欠落部分が多く危険といえます――

――失敗作か・・・――

他のクローンたちはマトモな容姿も知性も出来上がらなかった。

人間としての体裁を保ったのは、

炎術師であり戦闘能力には特化しているが、幼稚で単調な行動しかできないうえに、誰かに縋らなければどうしようもない煉華。

残忍で狡猾だが、その分紅麗ゆずりの高い知能を備え、作戦行動には向いている。しかし、少々精神面では不安定な葵。

この二人だけだ。

（ボクは煉華（あいつ）に劣ってなんかいない！何故それを認めてくれない！？）

周囲の自分に対する評価。ある意味葵を捻じ曲げた要因の一つといえよう。

（柳ちゃんをちゃんと攫って来たボクを・・・森様は一言も褒めてくれなかった・・・・・・）

その時、葵はふと思った。

（・・・柳ちゃん・・・）

＊＊＊＊＊

柳は現在、ベッドの上に腰かけていた。
森の一件で恐怖していた表情もどうにかこうにか安定し、表面上では平静そのものだ。
服装も施設の人間から支給された、生地の薄い簡素な白いワンピースに着替えている。

――ガコン・・・――

「！あ・・・あ・・・」

しかし扉が開きそうになると、恐ろしい森の記憶が蘇って恐怖の顔となる。

――ギィィ・・・――

扉が開くと、そこにいたのは葵。
柳は涙混じりにとぼけた表情になると、

「よかったーー♪」
「？」

などといって、葵に疑問を抱かせた。

「ああ～～、安心したら泣けてきちゃった！ちょっと待ってね、神楽さん！」
「う、うん・・・（汗）」

柳の予想外の言葉に戸惑う葵。

「柳ちゃん・・・・・・怒ってないの？ボクは敵で、君をここに連れてきたんだよ？」
「んーーーっ・・・確かにそんなこともあったけど・・・思いっきり憎めない。友達だから」

「ッッ！！？」

それを聞いた瞬間、葵は一瞬停止した。

「同じ学校にいって・・・同じ制服を着て・・・お話いっぱいして、一緒に遊んだ友達！」
「柳ちゃん・・・・・君・・・こんな状況で・・・・・・まだ友達なんて言ってるの・・・！？」

実に爽快な笑顔でいる柳の言葉に、葵は現実味さえも味わえなかった。

「うん。神楽さんは学校で、すごく生き生きしてたよ。皆とも楽しそうに接してた。自分が烈火くん達の敵だってことは誤魔化してたけど、あの時間を楽しく過ごしてた神楽さんは嘘じゃない！」
「・・・・・・・・」

凛とした確かな言葉、確固たる意志。

（・・・・・いつからだ・・・こんなことを考え始めたのは。他人が羨ましい、周りが妬ましい・・・と）

葵は呆気とられた表情から、薄らと自嘲気味に笑った。

「また来るよ、柳ちゃん。じゃあね・・・（ボクには足りないものが一杯あるってボクを造った博士たちが言っていた。足りないから・・・欲しがってる・・・？）」

葵は部屋を出て行き、扉を閉める。

（ずーーーっとボクが持ってないモノを持ってる奴が羨ましくて憎らしくて・・・・・それを少しでも埋めようとしたいって考えて・・・出来ずに絶望してみたり・・・・・・いつも嫉妬感に塗れてスキマを感じてた）

しかしそこで、

――友達だから――

思い出す言葉。

（でも、なんだろう・・・この感じ・・・・・・？）

きっとそれは、人間なら誰しもが持ち、葵が失敗作ではないと後々胸を張って言える感情だった。

＊＊＊＊＊

煉華の部屋。

「ぐす、ふん・・・ぐす・・・ぐす・・・」

「あーよしよし」

幼児向けの遊具が散乱するこの部屋で、煉華は泣きじゃくり、それをリュウギョクが慰めていた。

「ひどいよね！ひどいよね、リュウギョクさん！葵ちゃん私のこと嫌いなんだよ！だからあんな言い方するんだ！」

「いや、あの場合ではお前にも非があると思うぞ」

「でもでも、だからって・・・・・・」

しょんぼりする煉華。

（あぁぁ、全国のお父さんお母さん。私は今あなた方の苦労を身をもって知りました・・・・・）

リュウギョクは中々機嫌をなおしてくれない煉華の世話をやいているうちに、なんだか内なる世界に逃避し始めた。

「あ、そうだ！」

「ん・・・？」

何時の間にか気分を変えていた煉華が部屋の隅にあるタンスの引き出しからある物を取り出してきた。

「これ私が作ったんだ！リュウギョクさんにプレゼント！」
「私にか？」

子供の喜怒哀楽は移ろいやすいなと思いながら、リュウギョクは煉華が差し出した物に手を伸ばした。

それは不恰好なマフラーだった。
煉華は自分で作ったと言ったが手編みというわけではなさそうだ。
単に五色の異なる長い布を刺繍して作っただけだの簡素なマフラー。

色はリュウギョクが司る五系統のコアのそれに準じたもので、色と色の境目には煉華が施したと思われる未熟な刺繍糸が出鱈目に這っている。お世辞にも上手とは言いがたい、素人丸出しの代物だった。

「ねぇねぇ！」
「・・・・・・・・・」

少し苦い表情をしかけたが、期待に満ち溢れた煉華の純粋無垢な瞳には逆らえず、渋々マフラーを首に巻いてみる。まあ煉華の意志を無碍にしてまたグズられては困るというのもあったが。

「わー！似合う似合うぅぅ！！」
「そう、か・・・？」

パチパチと手を叩いて褒める煉華。
それに対して少し戸惑うリュウギョク。
マフラーは使いようによっては覆面代わりになるので、真庭人軍の自分がこれを身に付けることに対して抵抗があるのやもしれない。

（・・・まあ、悪くはないか・・・）

リュウギュクはそれから、基本的にその五色のマフラーを常に首に巻いておくようになった。

＊＊＊＊＊

トライブ財閥。
その本社ビルのとある一室に、幾人もの社員が呼びだされていた。

「あのダークさん。我々をここに呼びつけたのは何故なんですか？」
「なんの連絡もなしに呼び出されるなんて初めてなんですが」

社員らは部屋の中に入ってきたバットに聞いた。

「実は今から三日後。貴方方に昇格の機会となる試験をしようかと思っています」
「「「「「えッ！？」」」」」

社員らは驚く。
いきなり財閥の重臣中の重臣に呼ばれたかと思えば、それは出世話だったのだから。

「み、三日後ですか！？」
「そうです。貴方方は絶え間ぬ努力を惜しまないストイックな人材だと聞いています。故に三日間でどれだけの努力を行い、どれだけの成果を上げられるかを見せていただきます」

「それで、試験に合格した際はどのように？」

バットの説明に社員が質問した。

「合格すれば勿論成果に合わせて階級を上げて給料も以前よりアップさせます。不合格だったら別になにかのデメリットがあるわけじゃありません。今まで通り頑張っていけば一歩ずつ上に行けます」

バットの説明が終わり、彼女が部屋を出ると、残された社員らは。

（（（（（（やるしかない！！））））））

やるき満々だった。

しかしそんな二人をドア越しに見るものが居た。

――ジャリィィィィン！――

するとドアの隙間から大量のメダルが入り込み、二人の背後で一体の異形に結合した。

そう、七実だ。

先ほどの昇格試験の話も、七実がヤミー＝セル量産の為に作ってもらった機会だったのだ。

「「「「「「うわぁぁぁああ！！」」」」」」

怯える社員らに、七実は幾枚ものセルメダルを持って

『貴方の欲望（ねがい）、叶えましょう』

――チャリーン！――

セルメダルを同時に社員たちの頭部に発生した投入口に投げ入れた。

『『『『『うぅぅぅ・・・・・・・！』』』』』

「「「「「「ひぃぃ・・・・・・・！！」」」」」」

すると白ヤミーが生れ落ちた。

『『『『『うぁぁぁ・・・・・・・』』』』』

そして白ヤミーは親となった社員たちに掴みかかり、妙な音を立てながら同化していく。

寄生ではなく、同化していく。

「「「「「「あ・・・あ・・・」」」」」」

社員たちは一斉に気絶していく。

七実は再び姿をメダルに変えて部屋から出ると、また一つに結合して人間態となる。

「首尾はどうでしたか？」

「えぇ、上々ですね」

部屋の外で待機していたバットは七実に声をかけ、七実は答えた。

「私のヤミーはメダルを投入された瞬間に生れ落ち、親となる人間と一時的に完全同化して、苗床の欲望を強めます。しかし理性を失うわけじゃないし、寧ろ欲望を叶えるべく、努力しようとする想念が何時も以上に膨れ上がる上にヤミーと同化したこともあって、隠された潜在能力が全解放される」

七実は語り始めた。自らのヤミーについて。

「欲望を叶えようと努力する間にもセルが貯まりますし、その努力が実を結んだ時に発生する充足感や満足感によって一気に大量のセルメダルが生産され、ヤミーは成長体の状態で出現する。ヤミーが出てきたら、親の能力値は元通りになりますけど、使う人間を間違えなければ一番安全な方法だと我ながら自負しております」

七実はそう言いきった。

「あんなミイラの一件のあとで、本当に努力しようとするのでしょうか？」

「心配御無用です。ヤミーが誕生して同化する際の記憶は自動的に消去されますので」

なんとも都合の良い育成方法だ。

「・・・・・次は経理課です。その次は総務課になります」

「相わかりました」

ちなみにさっきの社員たちは営業部。

こうして着々と七実とトライブ財閥のセルメダル大量生産は進行していくのであった。

＊＊＊＊＊

精神世界の和風屋敷の前。
烈火は心構えをするかのように、屋敷の前に立っていた。
屋敷の門を開けていく。
（この中に・・・・・この中に、裂神がいる！）
気合たっぷりで臨み、玄関先に入る。
そこには胡坐をかいて座る人影がある。
「よくぞ参った！火影忍軍七代目頭首、花菱烈火！」
黒い忍び装束を着込んではいるが、体型は三頭身で幼児レベルの身長で、ギャグマンガみたいに丸い顔をした人物だった。
（なんてこった！こいつが・・・こいつが裂神の人間の姿！！意外だ！！）
先に言っておくが、これが裂神の本性ではないので、あしからず。
「おい裂神！話ってのは一体・・・・・・ん！？」
完全に目の前の三頭身を裂神と勘違いしている烈火。
三頭身は火の灯った蝋燭を手にこういった。
「今更ではあるが・・・ここで主を試させてもらおうか。この館の奥に会談の席がある。そこまで案内するので追って来てもらう。ただし、この蝋燭が燃え尽きても辿りつけぬ場合・・・主と話をする視覚は無しということにしよう」

と言ってきた。

「ゆくぞ」

「おいまて！追うってなにを・・・・・・」

聞いてる間に、三頭身は部屋から消えていた。

「にゃろ！！」

烈火はヤケクソぎみに障子をあけて進んでいく。

「ぬ！入り口が二つ！・・・・・・右！」

右の戸を開けて進むと、

「オオオオオおおおおおおおお！！！！」

竹やりが待ち受ける奈落の罠が。

――ガリガリガリ！！――

とっさに炎刃をだして難を逃れた。

「なるほど・・・・・・そーいうことかい！」

烈火は半ば宙吊りの状態で納得した。

「燃えてきた。やってやろうじゃねーか！」

烈火は素早く穴から脱出し、さっきとは違って左の戸を開けて進んだ。

進んだ先には穏やかな茶室があった。

一応戸はあるのだが・・・・

（・・・・・罠だな。・・・入り口は・・・）

一瞬で罠を見破り、手に持った苦無で茶室にある掛け軸の紐を投げ切った。

「む！やるな！」

するとそこには三頭身と隠し通路が現れる。

「またんかコラぁぁああ！！」

烈火は猛火の如く三頭身を追った。

すると三頭身は廊下の途中で不自然なジャンプをした。

そしてジャンプせず走りまくる烈火は、三頭身の踏まなかった罠を踏んで、

――サグググッ！！――

床からせり出した刃達の餌食に・・・・・

――ボォウウ！――

ならなかった。

串刺しの烈火は炎となって消えた。

「なに！？墨の幻炎か！」

「正解」

本物は三頭身のすぐ横。

しかし三頭身は、

――くるっ――

背中をくっつけていた壁に仕込まれた回転式隠し扉で逃げる。

（・・・思ったよりやるのォ！正直驚いたわ！七代目！仲間を守りたい一念がこの者を強くしたのか・・・！はたまた・・・・・・）

三頭身は烈火に追われながら考えた。

（卓越した忍の動き！この確かな才能！火影の血を引きし者・・・頭首としての器量か！）

そして遂に、

「どうした？もう鬼ごっこはお終いか？」

追い詰められた。

（息一つ・・・乱さず！強い！心も力も！・・・蝋燭も・・・半分も溶けておらぬ・・・）

答えは決まった。

「合格じゃ、烈火！あの中にて裂神がまっておる！愉快な一時であったぞ！」

向こう側の障子を指し示し、三頭身は煙に包まれて木の葉一枚となった。

一片の簡素な木の葉に。やはり使い魔の類だったのだろう。

（今度こそ奴が居る・・・来てやったぜ・・・）

烈火は大障子の前に立ち、心に思う者はただ一人。

障子の向こう側にいるもの。

裂神（れっしん）！！

その雄々しくも恐ろしい姿は正しく火竜を束ねるに相応しい威厳と風格があった。

（な・・・んて・・・圧迫感だ！）

『久しぶり・・・というべきか・・・・・・よくぞ参ったな、烈火

！』

裂神は高らかに烈火を招きいれた。

『褒美に我が人間の姿を見せよう！』

火竜とは、想いを成し遂げられなかった炎術士の魂が、浄化されず炎の化身となる火影の呪い。
そして、この者も・・・またその一人。

白い忍び装束を着こなし、長い黒髪を後ろで纏め上げて無精髭を生やした壮年の男。顔の右半分を縦に走る大きな傷跡。
それが裂神の正体・・・・・・その真なる名は――――

「火影忍軍六代目頭首、桜火（おうか）。お前と紅麗の父親だ」

彼は、桜火は名乗った。息子の前で堂々と。

「・・・そして今はお前の中を塒とする、炎の源として存在する八竜の長。裂神・・・・・・それが今の名だ」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
「ん？状況にかなり困惑しているようだな？無理もない・・・が、久方ぶりの親子の対面だ！」

桜火は両手を大きく広げ、

「来い、烈火！この父の胸に飛び込んで来い！」
「・・・・・・・・・」

烈火はもはやなにがなんだが解らぬまま、桜火のもとに歩み寄って

いく。
すると、

「戯けぇーーーーっ！！」

なんか意味不明なアッパーカットが飛来した。

「例えどのようなときも心を空にするでない！それは油断じゃ！油断は死に直結する！常に心に己を入れよ！わはははははは！！」

桜火は豪快に笑い飛ばした。

「・・・へへ！なんかあんたオヤジ（茂男）に似てるぜ！緊張も解けちまった！」

烈火は明るく笑った。

「やれやれ、涙の再会とは程遠い親子じゃのぉ・・・」
「あ、ジジィ！！」

虚空登場。

「・・・・・ついに息子と会う気になったのだな裂神。いや、桜火殿。このような時くらい、父としての顔をしてもかまわんのだぞ？」
「いや、赤子のときより会っていないワシはこやつにとっては他人も同然・・・なんぞてれくさくての！こういうのが楽でよい！」

虚空の笑顔な呼びかけに、桜火は笑顔で答えた。

「それにこいつの馬鹿ぶりは中からずーーっと見とった！情けのーて父の顔もできん！」
「もっぺん言ってみろクソ親父ィィ！！」
（センチメンタルの欠片もない親子よのぉ・・・）

「ところでよぉ・・・・・・親父！・・・俺はいいんだ。今俺にはもう一人親父がいるからさ。今更しんみりとはなんねぇから。でもよ・・・・・・」
「陽炎の事か？」

烈火の考えを桜火は言い当てた。

「なあ、一回くらい会ってやってくれよ！あんた初めて俺から出てきた時、母ちゃん居るの知ってただろ？」
「あぁ」
「じゃあ・・・」
「会えぬ」

桜火はキッパリといった。

「なんで！？」
「ワシは虚空のようにお前の外に軽々しく出れぬ。それに、もうワシは人間ではない・・・・・・」

その声には絶望が混じっていた。

「言ってみれば妖怪・・・・・・化物の類じゃ。このような姿で陽炎に会えると思うか？この手に抱く事すら叶わぬ・・・あいつを苦しませるだけだ。・・・ワシは鋼殿のように、自身が異形となって

尚、想い人を抱き寄せる自信が無いのじゃ・・・・・・」

己をあざ笑うかのように桜火は語る。

「寧ろあれの幸せを願うならワシを忘れ、違う男と一緒になってほしいと思う。例えば茂男殿とかな！あれは良い御仁じゃ！」

日本中探してもここまでの心意気をした男は何人いるのだろうか？

「ワシが陽炎にできるのはあいつの呪いを解こうとするお前のシリを叩く事！わかるな烈火？」

さらに一言。

「・・・問題は・・・紅麗だ」

口調が一気に重くなった。

父親として紅麗のしてきたことは・・・・・・流石に褒められたものではない。

「あれも御主の子であったな桜火殿。随分と烈火とは違う道を歩んではおるようじゃが・・・・・・・・・・それなりに心配か？」

「当然であろう！！」

殺気を総動員したかのような凄まじい形相をする桜火。

その今にも血涙を出さん勢いの表情に流石の虚空もたじろぐ。

「うっ・・・これは失言！許されよ・・・！」

「・・・いや・・・よい・・・・・・・烈火もそうだが、奴には本当に辛い思いをさせた」

話を些かまたぐが、火影忍軍頭首の血筋には代々ある掟がある。戦国時代や江戸時代における、里や国の頂点が正室の他に側室や妾を娶る事は珍しい事ではない。実際のところ、烈火は正室たる陽炎から、紅麗は側室たる麗奈から産まれた。

しかし、火影忍軍頭首最大の証たる炎術士の才を受け継ぐのは原則として一人だけとされている。もし継承者が二人いた場合、生まれたどちらかは火影に災いを齎す”呪いの子”として処断されることとなっていた。

麗奈は烈火が呪いの子だと主張したが、里の大ジジは紅麗の心の中に邪悪な闇があるとして、紅麗のほうが呪いの子と判断し、紅麗は危うく殺されかけた。しかし、陽炎の決死な呼びかけもあってか、紅麗が処断されることはなくなった。

でも、それと引き換えに麗奈と紅麗は次期頭首と次期頭首の実母としての地位を剥奪され、完全に村八分にされてしまい、それがきっかけで真っ白な紅麗の心は歪んでいき、”烈火がいなければ自分も母も苦しまずにすむ”という考えのもと、四歳の頃に赤子だった烈火の頬を小刀で刺したのだ。

その小刀による傷はかなり深く、今尚傷跡となっている為に烈火は絆創膏でそれを隠している。

「・・・確かに紅麗は呪われし炎に取り付かれていたかもしれん。だが邪悪な心などありはしなかった！もしそれが生まれたとすれば、紅麗を呪いの子として扱い続けた火影の民が！救う事ができなかったこの父が！奴を育てた森光蘭が！運命が紅麗を捻じ曲げていったのだ！」

勿論それが理由で紅麗の罪がどうこうなるわけではない。

「境遇で人間はいくらでも変わる・・・ワシもあれをただの悪人とは思っておらん」

虚空はそういった。そう、人は境遇で簡単に変わる。
刃介がその最たる例ではないか。

「初めてお前の前に裂神として現れたとき・・・目の前にはあまりに心の荒んだ紅麗がいた。あの時は父としての戒めのつもりで奴を打った。・・・当然、殺さぬ程度に力を抑えてな」

あの時、とは紅麗の館の際の話だ。

「それにああでもせねば、お前は確実に殺されていた。あの頃はほんっっっとに弱かったからな」
「ぬぐ・・・（い、言い返せねぇ・・・！）」

まったくもってその通りだ。

「・・・・・だからお前ら兄弟が戦っているのを見るのは実に虚しかった・・・鋼殿の仲介有りとはいえ、もっと素直に歩幅をあわせてくれていたらな」

桜火は寂しそうにいった。

「で、でもよ・・・・・・あいつ俺が何言ってもシカトだしよ・・・・・」

「親子三人頑固者じゃしな」

「「俺(ワシ)は違う!!」」

「そっくりではないか」

また一瞬シリアスがコミカルになり、またシリアスに戻る。

「ところで呪われた炎ってなんなんだよ親父!よくそれ聞くけどよ、俺と紅麗の炎のどこが違うんだ?」

「・・・・・奴の力がどういうものかはお前らもとっくに聞き及んでいるだろうが、あれは死者の魂を炎とする力を持っている」

正しくソレは魔性の炎。

「つまり・・志なかばに倒れた我等炎術士の魂が火竜となったお前の炎とは違い、奴の炎は死者を無限に自らの炎として造っていくことができる。炎術士のそれぞれに異なる炎の型・・・紅麗の呪われし炎の型の正体は――――」

それは、尽きる事を知らない不老不死の代名詞であり、炎という点については竜に匹敵するであろう架空の存在。

「不死鳥!!」

敵陣と育成と裂神（後書き）

次回、仮面ライダーブライ

戦国時代と真庭忍者と託す望み

戦国時代と真庭忍者と託す望み（前書き）

仮面ライダーブライ！
前回の三つの出来事！

一つ！森光蘭こと天堂地獄は着々と力を蓄える！

二つ！七実はトライブ財閥社員たちの努力を糧にヤミーを次々と育成！

そして三つ！烈火は裂神である己の実父、桜火と邂逅する！

一つお報せです。
登場キャラ達の内、三人のイメージＣＶをここに書いておきます。

ルナイト・ブラッドレイン・シルフィード
イメージＣＶ：柚木涼香

バット・ダーク
イメージＣＶ：能登麻美子

凍空吹雪
イメージＣＶ：堀川亮

といった感じにしようとおもいます。

戦国時代と真庭忍者と託す望み

紅麗の呪われし炎の型の正体は、不死鳥。
その姿はもはや眼にすることはできないと桜火は語った。
なぜなら、その炎は既に人間の魂魄に憑依して姿形を変えてしまっている。

火影の長い歴史においても前例の見られない現象。
その特殊な炎の型によって、新たなる姿と力を、炎の亡霊となって得た存在。
それこそが紅！紅麗が生涯において最も愛する女性の成れの果て。

そして、桜火はこのようにも語った。

火影忍軍が滅びてから既に四百年以上が経過した今尚、火影最大の遺産たる魔導具を欲する欲深き者達によって生み出される悲劇。
その代表格ともいえる存在こそが、森光蘭であり海魔であり天堂地獄なのだ。

桜火はそういうと、烈火が此の世に生まれてきた意味を説いた。

「烈火・・・お前は選ばれたのだ！呪われた火影の因縁を断ち切る者として！」

と・・・！

時代は常に変化し続け、それに合わせて人々は古き物を捨てて行き、新しいものを作り上げて行く。

しかし、とうの昔に歴史から退場させられた火影の因子は今尚生き延びている。

それによって生まれた悪鬼(森光蘭)！それによって生まれた悲劇！それらを止める役目を背負った火影最後の頭首。
それが火影忍軍七代目頭首、花菱烈火！

「八代目はないぞ？」

と桜火がいうと、烈火はこういった。

「戦わなきゃいけねぇ奴らが居る。共に戦ってきた奴らが居る。そんで――――」

思い浮かべるは生涯唯一の君主であり、想い人である姫君。

「守んなきゃいけねぇ人が居る！姫は、俺が守る！！」」

その決意に揺らぐ隙など、微塵もありはしない。

「・・・柳殿・・・お前が忠誠を誓った姫君か」

桜火は確認するように呟くと、とんでも発言をした。

「烈火・・・あの女子もやはり火影に関わりがあると言えるのだ。ワシは人間の頃、あの娘に会っている。そして、今はお前らの敵たる真庭忍者のリュウギョク殿にもな」

――プチッ――
→
青筋の立つ音。

「親父は四百年以上前の人間だろうが！！姫はまだ１６歳だぞ！！
それにグリードだって８００年前から今の今まで封印されてた連中だって聞いたぞ！！」
「最後まで聞け馬鹿野郎！お前は陽炎が昔話してる時もそーやって話の腰を折っとったではないか！」

思い切りに叫びあう親子。

「・・・正確には・・・転生・・・というのかもしれんな。そしてまたリュウギョク殿も、凄まじい戦いの果てに封印され、運命の悪戯で叩き起こされたのだ」

ここから語られるのは、烈火と紅麗が生まれる前、火影が滅びるよりもずっと過去の話。
西暦１５６８年――永禄十一年のこととなる。

＊＊＊＊＊

西暦１５６８年――永禄十一年。
それは尾張の領主・織田信長が時の将軍、足利義昭を奉じて京都へと上洛した頃。
時代が戦国から安土桃山に移り変わろうとする中間みたいな時期だ。

そして舞台は天下統一を一考するのさえアホらしくなるような小さな領分の小さな城での話し。
と言いたいところだが、その前に少々語るべき場面を書く事にする。

とある深い山のふもと。
付近の里の者ですら滅多に入らないその山から一人の美女が出てきたという噂で里は一時の間賑わったことがあった。
噂によるとその美女は、流麗の如き長い黒髪を後ろで纏め上げて凛々しい雰囲気を漂わせた上に凛然とした美麗な顔立ちをしていたというのもあるが、話題性になったのは彼女の服装にあったといってよい。
覆面がない上に袖を切り落とし、野太い鎖を全身に巻いた忍び装束――――それが彼女の身形であった。

そして里の人間が彼女の姿を見たとき、微かにこう言っていたのが聞こえていたという。

「コアメダル・・・・・・必ず奪い返す・・・・・・！！」

と言っていた・・・・・・。
そしてもう一つ。その山から忍び装束の女が出てくる数日前に、とある大名の遣いが山に入り、ある物を持ち帰ったという噂もあった。

閑話休題、本題に戻ろう。

「お館様、本日も高杉殿より使者が参られた。”桜姫、我が側室へと招く事”・・・・・・”返答は如何に。”これで六度目の書状にございます」

城主の間にて、家老と思われる老人が書状を読み上げていた。
勿論この場にて城に籍を置く重鎮達が同席しており、簡素な上座には疲れ果てた印象の濃い人物が座っていた。
少々・・・・・・いや、全くといっていいほど迫力に欠けたこの城主の名前は沢木(さわき)と言った。

「う・・・うむ。困ったことになったのぅ」
「高杉は戦になれば負け知らずの強国にして大国！恐れ多くもこれを政略結婚とするならば、これは良縁にございます！逆に申し入れを断ればなにが起こるかわかりませぬぞ！！」

家老は城主に対し、必死に主張した。

「わかっておるから悩んでおるのだ・・・・・・当の、桜がのぅ・・・・・」

沢木は己が娘の意見も尊重してやりたいと考えていた。
ある意味保身に走らず身内のことを考えるあたり、戦国時代では変わり者であり、現代では実に好感のもてる人物であった。

何より沢木は知っていた。娘の桜姫とと家臣の清水小平太(しみずこへいた)貴光(たかみつ)は相思相愛の間柄であることに。

しかし、一国の姫と家臣という身分の隔たり故にその愛がまかり通らないことに苦しんでいたことを。
なにより戦国時代において一国の姫というのは、弱小の国にとっては名のある大名と親戚関係をもつ為の政略結婚の道具に使われるのが専らであることなど、歴史の授業を受けていれば誰もが知っていることであった。

しつこいようだが、時は永禄十一年。
小国の姫君の桜姫――この時御歳十六であった。

数日後、貴光は沢木に呼び出されていた。

「清水小平太貴光」
「は！」
「其方は桜を慕っておるのか？」
「め、滅相もございません！！そのような身分も弁えぬ「正直に申せ。その為に人払いをしておるのじゃ」

それは沢木なりの配慮だった。

「・・・然ればこの貴光・・・お館様に心の内を御明かし申す。恐れ多くも桜姫様に恋心有りは事実！しかし私とて、沢木家の家臣！お家を思うならば、桜姫様が高杉に嫁ぐ事に異存はありませぬ！」

貴光は心の内を暴露した。

「ワシはのぅ貴光、桜の亭主が其方でも良いと考えておった」
「！？」

これには貴光も驚く。
普通こんなあっさりと家臣と姫君の婚約を承諾する大名は滅多にいないから。

「結局ワシは男の子宝に恵まれんかった。しかしワシには多くの兄弟がいる故に跡継ぎには困らん。この戦乱の世を静かに暮らす我が国には政略結婚も必要ない」

一国の主としては稀有なほど無欲で平和主義だ。

「・・・そして桜を思えば、其方を一緒にさせたほうが良いと思っておる」
「お・・・お館様・・・」
「しかし問題は高杉・・・・・・あれが大人しく引き下がるとは思えん」

高杉獣伍郎正金（たかすぎじゅうごろうまさかね）
小国であった高杉家の先代、己の父を殺害して戦にて国を大きくしていった武将。
性格は残虐にして冷酷非道。
少しでも気に入らない者は重臣はおろか正室や側室であろうと斬り殺すと言われいる。

「桜もとんだ男に目をつけられたもんじゃ・・・・・・」
「お館様、某に妙案がございます」

困り果てる沢木に貴光が言い出したのは、

「火影を御存知ですか？」

忍者の力を借りることだった。

＊＊＊＊＊

火影の里。

そこには数日前からある異端な客人が上がりこんでいた。

偶然にも里を通りかかった際、里の者達が素性を問いただそうとしたが、そいつはそれを無視して歩もうとした。

しかも、問いかけに応じないそいつに里の忍者たちが試しに威嚇攻撃を行ったところ、そいつは人間離れした動きで攻撃を避け、一分程度にて火影忍者を気絶レベルにて返り討ちにしたのだ。

しかも倒された輩は全員魔導具を持っていたにも関わらずだ。

「姐さん！好い加減俺らに稽古をつけてくだせぇ！」

「お願いしますよ姐さん！」

「お頼み申しますお姉さま！」

「リュウギョクお姉さま！」

「一切合財断る」

そう、謎の客人は余りにも華麗で美しい技法にて勝利したせいで里中の連中から一気に憧れの的となり、特例として火影の里に身を置いているのだ。奇抜ながらも彼女が上級忍者ということもあってか、

彼女に稽古をつけてもらいたがる者も続出した。
もっとも、中には百合の匂い漂うくノ一の声もあったが。

もうわかっていると思うが紹介しよう。
彼女の名前はリュウギョク。今から四百年後、我刀流二十代目当主・鋼刃介こと仮面ライダーブライと対立する忍者グリード。

彼女は封印されて復活するのは二回。
その内の一回は勿論現代。もう一回はこの戦乱の世の話だったのだ。
当然アンク達五大グリードらが未だに封印されている今、実質的にグリードの中でこの日ノ本の土を踏んでいるのはリュウギョクだけということになる。

「あ、そういえば姐さん、聞きましたか？頭首様が小国の依頼話を直接伺いにいったって」
「・・・・・・・・・・」

若者の言葉にリュウギョクは黙っている。

「どこの国のだ？」
「なんでも最近高杉家に婚姻の書状を叩きつけられている沢木家だと聞き及んでいますが」
「（高杉っ・・・！！）――――その依頼について、私も混ぜてもらうとしよう」

そうしてリュウギョクは沢木家の城に出向いていくのであった。
そう、貴光が火影に頼む事、今現在の沢木家の状況から見て一つしか思い浮かばない。
真庭忍軍である自分が最も得意とする分野、暗殺なんだと。

＊＊＊＊＊

沢木家。

そこには桜火が依頼を受理するかどうかの判断の為、直に沢木と話す意もこめて来ていた。

勿論桜火がここへくる途中にリュウギョクは余裕で追いつき、話し合いの席に同席していたのだった。

「ほう、火影が別の忍軍の者を居候させておるとはな」

「・・・・・大して気にする事ではない」

リュウギョクは沢木の言葉に冷たく返した。

すると沢木は桜火に視線を戻した。

「ついに七度目の書状で”沢木を討ってでも桜を連れて行く”と申してきた。選択は二つ！桜を渡すか決戦あるのみ！・・・だが・・・もし高杉正金を亡き者にできれば・・・・・・あれほど敵の多い男だ。家臣は離れ、周りの国より高杉は狙われよう」

「なるほどね。しかしこの仕事、受けるかどうかは時間を頂く。我等は忍。主を持たずに人を見て依頼を受ける。その者が仕えるに値するかどうか、つまらん者なら受けませんぜ」

桜火はキッパリといった。弱小ながら仮にも一国の主に向って。

「ではもし火影が任務を受けなかった場合は私一人で高杉を始末す

るとしよう。個人的にも奴には用件があるしな。それに暗殺とは、真庭忍軍の専売特許だ」

「ん、なんじゃ用件とは？」

「それは秘密だ」

リュウギョクは沢木の問いをはぐらかした。

＊＊＊＊＊

城の庭、そこには一人の美しい少女が居た。

実に明るそうで聡明そうで、なにより一本の芯が真っ直ぐ立っている印象が見受けられた。

その容姿は正直なところ、佐古下柳と瓜二つだ。

この者の名前こそ桜姫――佐古下柳の前世とも呼べる姿である。

桜姫は一匹の雀と戯れていると、

『姫様！桜姫様！ご機嫌麗しゅうございますか？』

「鳥が・・・話をした？」

桜姫は目を見開き、

「面白い！！」

「なにぃーーっ！？」

賞賛の声の直後に驚愕の声。

そして木の上から一人の男が落っこちる音。

「忍法声帯移し・・・か。相生忍軍の者達を思い出すな」

そこへ顔を出すのは懐かしむような顔をするリュウギョク。

「・・・今の、どっちじゃ？」

「・・・・・・ワシじゃ」

桜火が挙手した。

「某らは新たに姫のお側につくことになった・・・・・・ん？」

何時の間にか桜は桜火の手を持っていた。

そして、

「怪我をしておる」

さきほど木から落ちた際につくられた切り傷は、暖かな光と共に綺麗に塞がった。

「「っ！」」

この現象にリュウギョクも桜火も驚くしかなかった。

「もう、大丈夫」

桜は正しく花のように可愛らしい笑顔で告げた。

いくら時が流れて肉体が入れ替わろうと、こういう根底の部分は変わらないらしい。

「傷が・・・治った？」
「治癒の力じゃ。生まれながらにもっておった。何故かはよくわからんが」
「生まれながらの力ならワシももっとる！！」
「まあ、私にもあるな」

桜火は自慢気全開でいうも、リュウギョクは相変わらずクールだ。

「とくと、ご覧あれ！！」

――ゴォォォウ！！――

桜火は手甲がされている右掌より火炎を生み出した。
やはり火影六代目頭首なだけってその炎は実に色鮮やかだ。

「炎！？面白い！わらわも炎をだしてみたい～～！」
「・・・なんと無茶苦茶な姫君だ・・・これは術ではなく力だというのに」
「忍軍の頭首のくせして力を見せびらかすお前のいう台詞か」
「うっっ」

能天気な桜とは裏腹に、リュウギョクの一言でちょっぴり落ち込むダメ頭首。

「それで、お主の力は？」
「悪いが易々と使っていい力ではない。忍法ということにしているが、これも先ほどの炎と同じく、使いようによっては簡単に人を死に至らしめる呪われし幻惑（げんわく）の魔眼（まがん）・・・・・・」

リュウギョクは少し虚しげに池の水面に映る自分自身を見ていた。

「にしては桜姫。あなたは先ほど炎を出したいと言っていなかったか？」

「うむ。わらわもあれをやってみたい！」

「では良い物がございます」

桜火はあるものを取り出す」

「偽火（にせび）、という」

手甲型の魔導具。

「それをつけて念じるとよい。”火よ生まれよ”と」

「んーー・・・・・・」

桜は教えられた通りにしてみせる。

すると、

――ピキ・・・っ――

嫌な音がして、

――パリィィィン！！――

核が砕けた。

「あ、壊れた」

（馬鹿な！！強固に造られた魔導具だぞ！なに故に壊れる！？）

（もしや、魔導具に宿りし魔力にとってこの桜姫の治癒の力は、天

敵だということか？）

桜火とリュウギョクは些か動揺しながらも、忍びとしての冷静さを取り戻して状況を速やかに分析する。

まあそれは兎も角、まだ自己紹介がまだだったので、一応お互いに名乗っておくことにした。

「ほう。桜火にリュウギョクと申すのか。奇遇じゃ、わらわも桜という！にしてもリュウギョクはどんな漢字を使うのじゃ？」

「気にする必要は無い。所詮リュウギョクなんてのは偽名に過ぎん」

「偽りの名前、というわけか」

「真庭忍軍は暗殺専門の忍者集団。場合によっては本名の一つや二つくらいは伏せる」

リュウギョクはサバサバと答えた。

「ところで桜姫様。一つ・・・お聞きしたいことがあります。・・・今、この国に戦が起ころうとしています。滅ぼされるかもしれません。沢山の民が・・・女子供まで死ぬでしょう」

桜火は桜姫を子ども扱いせず、一国の姫君と対して話していく。

「避ける術はある。ただしそれは人身御供（ひとみごくう）！好色にして殺戮を繰り返す男の下に嫁ぐ事！」

「当然無理強いはしない。・・・さて、どちらを選ぶ？」

桜火とリュウギョクは真剣な目つきで問う。

すると桜は少し顔をうつむかせるも、すぐに顔をあげた。

「どちらも選びません！高杉正金を斬り、わらわも死のう！」
「「・・・・・・・・・・・・」」

実に凛々しくキリっとした桜の表情と言葉に、リュウギョクと桜火は少し黙った。

「ぷっ・・・！わははは！わはははは！！気に入った、面白いぞ！！」
「私もだ。ここまで見事な啖呵を切った依頼人、それもお姫様となれば、長い人生で初めてだぞ。ふふふふふふ！」
「何を笑うか二人共！」

火影の首領桜火。
自らとリュウギョクがこの仕事を行うことを報告する。
なすは暗殺、狙うは高杉獣伍郎正金の御首（みしるし）。

＊＊＊＊＊

高杉正金の城。
その天守閣で高杉は何かを眺めていた。
普段はこの時間、正室か側室か妾か侍女あたりを閨に引っ張り込んでいるような男だが、今日は珍しく一人で夜を過ごしていた。

「くははははは・・・！」

数日前、高杉は部下に命じてある物を山奥の洞窟で回収させていた。

どう考えても武将なのか?と疑うような肥満体型。元から醜いが、戦場でついた傷跡や歪んだ笑顔でより不気味に見えてくる。

「伝説というものもあながち侮れんものよのぅ。〟コアメダル〟とかいう未知なる力の結晶が真に存在していたとは」

綺麗に梱包されていた箱の中には五枚のコアメダルが入っていた。

「これさえあれば、余が日ノ本の王となる日も・・・!」

どうやら彼は伝説を履き違えていえるようだ。

確かにコアメダルの力は強大極まるが、普通の人間ではコアどころかセルメダルさえ満足に使えない。それなのに高杉はコアメダルを持っていれば自分は何れ天下統一が可能な存在になると信じているらしい。一体どのような敬意でオーメダルの存在を知ったかはわからないが、戦国時代の人間ならそういう眉唾な話も信じるだろう。

「・・・・・殿、沢木家より書状が届いてございます。桜姫との婚礼の儀、承ったとの知らせです」

「・・・そうか・・・」

しかし彼はこの時、彼は未だに気づかない。

後々に降りかかる我が身の不幸と、最大限の悲劇に。

「かちかねた・・・・・・待ちかねたぞ・・・・・・桜姫!」

＊＊＊＊＊

後日、仰々しい籠が幾人者武将達に運ばれて道を行く。
その中に貴光がいたことから、籠の中にいる人物にも予測がついた。
そして籠は高杉の城にたどり着いた。

籠の中にいた人物は純白なる和服で身を包み、薄らと化粧をしていた。
それから高杉本人とその家来らがいる間で彼女はこういった。

「・・・桜と申します。不束者ではありますが、何卒宜しくお願いいたします」
「苦しゅうない、はるばるよう参った！余が高杉獣伍郎正金じゃ！」

暗殺作戦の第一段階。

そこへ時間は一気に飛んで深夜となる。

天守閣――つまりは高杉の居室であり寝室だ。
一体ここで何人の女人が体を汚され泣かされたかは数えたたくも考えたくもないが、今此処でそれを思ってもしょうがない事だ。

桜は布団の上で正座、高杉は布団の上で胡坐状態だ。
状況的にも二人共薄手の襦袢姿だ。

「くへへへ・・・では、初夜の契りといこうではないか？」
「断る」

襦袢を脱ごうとする高杉に対し、桜の余りに冷え冷えとした拒絶の声。

「貴様のような小物の言の葉は聞けぬよ、戯けが！」

――ドスっ！――

「ッッッ！！？」

貫手による一撃が喉笛と鳩尾に炸裂した。
その上、手裏剣や苦無が顔に突き刺さった。

「貴、様・・・！な・・・に・・・も・・・の！？」

「ふッ」

桜と思われていた人物の輪郭は崩れ、あっと言う間に別の姿へと変わった。
顔立ちや体格だけでなく、服装までもだ。

「死に逝く貴様如きに名乗る名前は無い。我が忍法夢幻惑いの牢獄にて、未来永劫囚われるが良い」

真庭忍軍の忍装束姿のリュウギョク。
そう、最初から桜姫はここには来ていない。
ただリュウギョクが自分の視界に入った者全てを”幻惑の魔眼”により、桜姫と誤認させていたのだ。それにリュウギョクは熟練した忍者なので、余分な気配は遮断できる為なお効率良くうごくことができた。

「コアメダルは返してもらう」

「こ、コア・・・メダル・・・・・・だと」

リュウギョクがキリっとした表情で忍者刀を抜刀しようとした時、

「！（・・・・・この術は）」

リュウギョクは背後に感じる気配を感じ取った。

『こんなことだろうと思っていた・・・・・あっさりと婚礼に了解を得たからな』

背後に舞うのは幾つモノ人魂。
人の顔をするものもあれば般若の顔をするものまである。

『貴様、忍者だな？』

「幻術か」

リュウギョクは忍者刀を抜刀した。
そして、逆手に持ち

――バッ！――

背後にいる者を斬った。

「ぐッ！」

斬られたのは黒い忍び装束を着込み、目元に並んだ三つのホクロが印象的な長髪の男。

「良くそれで大名に召抱えてもらったものだな。・・・貴様、名はなんだ？」

「・・・・・甲賀五十三家の高峰蔵人（たかみねくらうど）」

「甲賀忍者か。私と相対したことが運の尽きだったな」

リュウギョクは肩口に刀傷を負った高峰を見下ろすようにいった。

「さらばだ」

――斬ッッ――

こうして、高杉獣伍郎正金は、高峰蔵人共々、黄泉の世界へと蹴飛ばされた。

「さて、後はコアメダルを取り返せば用済みだ」

リュウギョクは部屋の中を物色し出した。

すると、一つの箱を見つけた。蓋を開けて中を確かめる。

「ヤタガラス、ゼウグロドン・・・・・他のメダルがない」

二枚のコアメダルを手に取り、怪人態になってそれを取り込み、首と下半身部分が復活したが、まだ三枚足らず、右二の腕と左二の腕と腹部が不完全（セルメン）だ。

『こんなことなら、聞き出した後に殺すべきだった』

リュウギョクは高杉の死体を見下しながらそう言った。

そして、

『忍法疾風迅』

天守閣から姿を消し、城から出て行った。

「あの化物め・・・・・・！！」
「不覚をとりましたね」

一言で言おう。
高杉も高峰も死に切っていなかった。

高杉と高峰が負わされた傷は致命傷だったはず。
ではなぜ生きているのか？

「このような物、なんの役に立つかと思いましたが・・・・・・」
「流石は化物の源じゃよ・・・！」

高杉は口からコアメダル三枚を出した。
高峰も口からセルメダルを五枚出して吐き出し、セルメダルは消滅していった。

よく見てみると、二人の傷は急速に癒えていたのだ。
これもある意味、オーメダルの力なのかもしれない。
もしかしたら、高杉の強大な欲望がコアと反応した結果かもしれない。

「おのれ沢木・・・！忍の如き化物を影に余を殺そうと思うとは！戦じゃ！！兵を出せ！！沢木を討つぞ！！」

＊＊＊＊＊

翌日の早朝。

「高杉より兵が動いたとの報告です！」
「その数約三千！我が兵の三倍の数にございます！」

沢木の地は未曾有の危機に直面していた。
当主である沢木や家臣たちは鎧を身に纏った万全装備の状態だ。

「・・・どのみち・・・合戦は免れんかっただろう。迎え撃ってやろうぞ！」
「「「「「「「おおおぉぉぉおおおお！！！！」」」」」」」

家臣たちは盛大に賛成した。

（これで・・・これで良かったにでござる、桜姫様！かくなる上はこの貴光、命を賭けて貴方様をお守りいたします・・・・・！）

そして庭では。

「リュウギョク、桜火。お主らも、合戦にいくのか？」

装備を整えていた二人に桜が訊いた。

「此度の合戦は私の不始末が原因だ。故に依頼があろうとなかろうと、私は勝手に戦わせてもらう。ケジメをつけるためにもな」

「我等火影にも、リュウギョク殿一人だけに事をやらせてしまった責任がある。自ら志願して戦場に赴くことにした」

二人は己と忍軍の誇りのために戦うと決めた。

「わらわは・・・辛い・・・わらわの為に・・・この国の者が血を流す・・・小平太も・・・父上も・・・つらかろう、苦しかろう・・・・・」

桜は涙で顔を濡らしながら悲しんだ。

「桜姫よ。そう悲観することはない。私も桜火も、そして兵士達も皆、強制されたのではなく、自国とお前を守りたい一心でいる。真庭忍軍とは違って利益ではなく情義によって動く者を見るのは実に懐かしいよ。連中はさぞかし、桜姫という人間に惚れ込んだかがわかる」

「あぁ、ワシも姫が気に入ったから仕えた！それでいいのだ！見ておれ、火影忍者と真庭忍者の力を！」

＊＊＊＊＊

戦場の最前線。

「来おった！！」

「高杉正金の軍勢三千！！」

「三の丸、二の丸、北の丸に兵を置け！！」

「本隊は城より出て突攻をかける！！」

その中に貴光が居た。

（姫様・・・桜姫様・・・・・・！この清水小平太貴光、命に代えても貴方様を守って見せます！！）

幼少の頃より桜のことを妹のように世話してきた貴光。

思い出される桜との記憶の為に、そして彼女自身の為に。

「ゆくぞーーーっっ！！！！」

彼は号令をかけた。

「「「「「「「「「「わあああああああああ！！！！」」」」」」」」」」

大勢の兵士達が鎧や兜をつけ、刀を持ち、槍を持ち、弓矢を持ち、

己が信念に順ずるまま駆けて行く。
馬に騎乗していくものも地に足をつけて走る者も、皆刀と槍によって斬られ突かれて血を流し、地面に倒れ伏していく。

「殺せ！！女子供も皆殺すのだ！！高杉正金を馬鹿にしたその大罪！！死を持ってしらしめよ！！この顔の痛み！！沢木の者ども全てに倍として返せ！！」

敵陣の本丸のなか、高杉は顔に包帯をまきつけて馬に跨り、頑丈な鎧甲冑をまとって怒号を飛ばしていた。

そんな地獄絵図一歩手前の戦場を見下ろす二つの人影があった。
隠すことではない、桜火とリュウギョクだった。
今回この二人が参加するこの戦には増援が居ない。
仮にも頭首自らが受諾した任務を外部の忍者に任せて失敗した結果がこの様なのだから、それに伴う責任をとる必要がある。

「桜火様！リュウギョク様！」

そんな二人の背後から聞こえてくる声。
振り返ってみると、そこには黒いくノ一装束姿の二人。

「私らも御一緒させてください！何もせずただ待つなど、耐え忍べません！」
「迷惑はかけませぬ。共に戦うことをお許し下さい！」

十四歳の頃の陽炎と十五歳の頃の麗奈だった。

「・・・・・・・・まだ小娘と思っておったが・・・」
「少し目測を誤ったな」
「「よし！」」

「「敵は三千！！ぬかるな！！」」
「「はい！！」」

四人はそうして戦場に飛び込んでいく。

「どけどけどけーーーーっ！！」

桜火は大きく跳躍していく。

「火影忍者桜火見参！！儀によって沢木家に助太刀致す！！」
「真庭忍者リュウギョク！！私怨と情義故に沢木に加勢する！！」

――ゴォォウ！！――
――ビリビリビリビリ！！――
――ビュウウゥゥゥン！！――

桜火の炎術は敵を燃やしつくし、リュウギョクの雷と風は敵を薙ぎ払った。
陽炎と麗奈も魔導具を武器にして戦う。

「こいつら・・・忍か！？」
「手強いぞ！！」

思わぬ敵の登場に高杉勢は慌てだす。

「おお！桜火殿にリュウギョク殿！」

それとは反対に貴光は歓喜する。

「死ぬなよ、小平太！」

「おうよ！！」

桜火の言葉に貴光は馬を走らせてさらに敵陣へと突っ込んでいく。

すると、

『・・・お主らに他人の命を心配する余裕は無い・・・・・・火影に真庭と言うたか・・・知らぬ名だな』

それはリュウギョクがみた幻術と同じもの。

『片方のほう、見れば私と同じ火術を使うようだが、力の差を思い知らせてくれよう』

「甲賀者か」

『いかにも。臆するか？逃げるか？」

「殺す！！」

そう桜火が言った瞬間、

「ならば、死ね！！」

「にしても良く生きられたものだな。致命傷を与えたはずだというのに」

「なに。貴様が大事にしているメダルとやらの力を拝借しただけのこと。最も上様は顔の傷が治らず不機嫌だが」

高峰はリュウギョクの言葉に答えた。

「・・・・・・桜火、この下忍はお前に任せる。私は他の軍勢どもを叩く」

「・・・・・・わかった」

リュウギョクはこの場を桜火に任せ、他の連中の撃破に回った。

「ふむ、あのくノ一を果たし合えぬのは残念だな。・・・では代わりに貴様で我慢しよう」

「ふん！ぬかせ青二才めが！」

「「勝負！」」

＊＊＊＊＊

一方その頃沢木の本城では、桜姫が手負いの兵士達の手当てをしていた。

勿論治癒の力でだ。

「おお！傷が・・・！」

たちまち癒える傷に兵士らは感動していた。

「よし！次の怪我人、参れ！」

「なりません姫様！その力で貴方様もお疲れではありませぬか！！」

「よいのじゃ・・・みな、わらわの為に血を流している・・・その傷を癒すのは当然のこと!!」

と、気丈に振舞うが、

「すまん・・・すまんの、皆のもの・・・・・・わらわは戦えぬ・・・・・こんなことくらいしかできない・・・・・・・」

ボロボロと涙を流した。

「怪我人じゃあぁあぁあ!!」

「清水貴光殿を御連れした!深手じゃーーっ!!」

その時、最悪の報せが舞い込んできた。

兵士の一人が肩を貸して担ぎこんで運ばれた貴光は、全身に刃物傷を負っていて、かなりの量の血液が流れていた。

「小平太!!小平太ぁぁあ!!」

「・・・・・その声・・・姫・・・桜姫様・・・」

「待っておれ!今・・・その傷を癒す!死ぬな!死なないでくれ、小平太!!」

桜は必死になって貴光の体に手を当てて力を放出する。

しかし傷の癒え具合は微々たる物とかしつつある。

(力が弱い・・・そんな・・・そんな・・・!!)

「姫・・・・・最後に・・・お願いが、ございます・・・・・・」

「最後などと申すなぁ!!わらわを娶ってくれると約束したではないか!?小平太!小平太ぁ!!」

必死になって貴光に抱きつき、彼を此の世にとどめようとする桜。

「申し訳・・・・・・――――」

そこからの言葉は全て途切れた。
永遠に途切れたままになってしまった。

「小平太・・・？」

安らかな表情で一切動かない小平太。
周りの者達は胸や心を痛めたり、涙を流して悲しんでいた。

――この戦に勝てば姫様をくださるとお館様が申してくださった！
良き働きを期待してくだされ！――

合戦場にいく間際、小平太がいってくれたプロポーズの言葉が脳裏を蹂躙した。
そして、

「小平太ぁぁぁぁああああ！！！！」

桜姫の、女としての嘆きが響き渡った。

＊＊＊＊＊

方や戦場では、

「ハァ！！」

――ビリビリビリビリ！！――

――ビュウウゥゥゥン！！――

リュウギョクが右手から雷、左手から風を巻き起こして敵兵を蹴散らしていた。

「ハァァアア！！」

さらには口から火遁の術の如く火炎まで吐いてみせるという大技つきで。

「流石はリュウギョク様・・・・・・！私たちも負けていられない！」

「あぁ全くじゃ！・・・それにしても、桜火様は何処に？」

陽炎と麗奈が感激と心配をしているとき、桜火は・・・！

『逃がさぬぞ、火影の桜火・・・名も無き忍共にしてはようやったが・・・・・・ここで死んでもらおう』

禍々しい炎の幻術が桜火の体に巻きつき纏わりついた。

「ぐぬ・・・！動けん！」

「忍法・・・炎蛇（えんじゃ）」

身動きのとれない桜火に高峰が術名を明かしながら登場した。

「熱くはなかろう？これは幻術。真の炎ではないからな。しかし貴様の自由はもはやきかぬ！甲賀忍者の恐ろしさ、思い知ったか！・・・さらばだ、下忍！」

高峰の忍者刀が桜火に降りかかろうとする。

「お・・・・・・おおおおお！！」

――ずっ――

桜火はそれによって、顔の右半分に大きな刀傷を縦に入れられた。

「ん？首を狙ったはずだが・・・・・・」

――ゴド・・・――

気がつくと、自分の腕が地面に落ちる音。

そう、高峰は右腕の肘から先をバッサリと斬られていた。

「馬鹿・・・な・・・」

吐血しながら倒れ伏す高峰。

「幻術は・・・所詮幻じゃ！」

と桜火は言い切った。

つまりは気力だけで忍法による幻影を打ち破ったのだ。
桜火は一旦戦場の様子を見た。

（・・・・・リュウギョク殿は既に産百人近くを蹴散らしたか・・
・しかし、沢木の兵はどんどん少なくなっていく・・・このままで
はもたぬか・・・・・・！）

戦場のリュウギョクはというと、

「剛力無双及び流水剣・激流！！」

自らの腕力を極限まで強化する忍法と、鉄砲水のように徹底的に攻め立てる剣法を同時に振るい、リュウギョクは一気に十人近くの敵を斬り殺した。

（チッ！やはり人間のままで戦う分には限界があるか。かといって迂闊に本性をみせるわけには・・・・・・！）

リュウギョクは心の中で舌打ちした。

「一旦戻って状況を見直すか」

といってリュウギョクは本丸に引き返した。
途中で桜火と合流し、たどり着くと、何故か皆シクシクと泣いていて活気自体が死んでいた。

「どうかしたのか？」

「お・・・お館様が・・・・・・・討ち死にされた・・・・・・・」

一人の老兵が答えてくれた。

「沢木家はもう、お終いじゃ・・・・・・・」

「うう・・・・・・お館様・・・・・・・」

「ならば、桜姫は何処に居るのだ！」

「姫様もお労しや・・・・・・想うておった清水貴光殿が先ほど・・・・・・・・・亡くなられた」

それを訊いた途端、リュウギョクと桜火は館内を走り回り桜姫を探しまわった。

そして見つけた、あっけないほど簡単に。

その時、桜が見に纏っていたのは白い着物に、腰に差された小太刀。

（（死・・・・・・死装束！））

「・・・・・・・・・・・・世話になったな二人共・・・・・・・・わらわの最後の願いを聞いてくれるか？」

桜の言葉はこうだった。

「わらわはここで自刃する。この館に高杉の兵を一人も入れず、それを食い止めよ！直に館に火が回る。わらわの心も体も、高杉正金には髪一本わたさぬ！」

その際の笑顔は全てのしがらみから解放されたと言わんばかりに清清しかった。

「頼まれて、くれるか・・・？」

断れなかった。汚い所業に手を染め、歴史の影に生きる忍者が彼女に「生きろ！」などという資格等一切ないのは当人らが十二分にわかっていた。

故に己の無力を祟った。

そして。

「心得て候！！姫様の御首、誰にとらせましょうや！！」

「お心・・・静かに・・・」

――カチン・・・ッ――

そうして二人は忍者刀をもって金打（きんちょう）した。

忍者如きが武士の真似事のような約束の仕方をするのかと、自分たちでもあざ笑った。

しかし、今の二人にはこれ以外思いつかなかった。

「ありがとう・・・・・桜火にリュウギョク、もし・・・今度生まれ変わることがあれば・・・愛した者と・・・・・・幸せになりたく願うぞ・・・・・・」

そうして桜姫は戸を閉めて部屋にこもった。

そして拳を深く握った桜火とリュウギョクは屋外に出た。

（（・・・・・・誰（じゃ）だ・・・・・・・））

表情も心も穏やかにあらず。

（（桜姫の幸せを奪ったのは・・・・・・・・・桜姫に死に逝く運命を辿らせたのは・・・・・・・・・））

眼前に広がるは大勢の敵軍。
沢木軍とリュウギョクの働き効してが半分近くの千五百あたりになっているが、それでもこの状況なら大軍だろう。

「許さぬ・・・」
「下郎ども・・・」

声は実に重く低い。

「我が命の欠片盗るだけでは飽き足らず、良くもまぁここまで調子付いてくれたな・・・・・・・！！」
「姫の成さろうとする事、我等が力を持って守る！邪魔する者は、皆死だ！！」

鬼や閻魔も及びつかない激怒と憎悪の顔。
迫り来る大軍に彼らは恐れもしない。

そして、リュウギョクは大きく息を吸い、一気に言葉として吐き出す。
館の奥にいる桜姫にも、否が応でも聞こえるような大声で。

「真庭忍軍十二頭領総補佐！！！真庭竜王！！！通称”奇蹟の竜王

”！！！！推して参るぞ腐れ外道めが！！！！！」

真なる名と肩書きを大声で告げたリュウギョ――否、竜王は桜火と共に突撃していった。

「「おおおおおおおおおおお！！！！」」

桜火は右手より業火を、竜王は炎・雷・風を放出しながらいく。

「こいつら、たった二人でこの軍勢と戦う気か！？」
「炎や風や雷をだしておるぞ！」
「ええい！なにを怯んでおるのか！？忍者ごとき某が！！」

敵に武将の一人が二人に突っ込んでいこうとすると、

――ガシッ！――
――ボムッッ――

桜火に顔をつかまれた男は、その首が灰塵となるまで燃やされた。

――ザシュザシュザシュ！！――

竜王もまた二振りの刀で織り成す剣法をふるい、敵に有無を言わさず斬り伏せていく。

＊＊＊＊＊

時間は少々遡り、暗殺を請け負うと決めた直後にこととなる。

「不思議なモノだ。桜火にはああ言っておきながら、お前と話していると忍としての矜持を忘れて己の秘密を言い漏らしてしまいそうだ」

「お主らの話は面白いからわらわもよう聞きたい。そういえば・・・リュウギョクの属する真庭忍軍には頭領が十二人おって、リュウギョクはその十二人全ての補佐なのじゃろ？」

”如何にも”と竜王は返した。

「だが私は真庭としてはマトモ過ぎると言われたことがある。・・・・・いや、だからこそ、十二頭領らの総補佐役に選ばれたのやもしれんな」

「んー・・・・・なんで真庭には頭領が十二人もおるのじゃ？」

と桜は素朴で当然な質問を投げかける。

「真庭忍軍は人格破綻者の集まる場所。故に集団行動には向いていないのだ。おまけに個人が扱う忍法が強力な分、固まって動くと互いに足を引っ張りかねん。だから頭領を十二人にすることで集団行動の意味を破棄した。その凄まじい試みは成功に至り、永きにわたって敵対していた相生忍軍との戦いに勝利を齎したほど」

リュウギョクはペラペラと喋った。

「もっとも私は歴史の影の更なる闇に生きる存在。十二頭領以外に

は、私のことを知る里の人間は一人としていなかった。だが、だからこそ、出来る事がある。私の存在など正しくは影。一族繁栄の為なら、栄誉など要らぬさ」

「しかし、それだけ頑張ったのじゃから。もっと多くの人に褒めてもらうべきじゃ。わらわは、リュウギョクのことを褒めるぞ。だって、今こうしてわらわはリュウギョクと話、お主のことを知っておるのじゃからな」

＊＊＊＊＊

回想終了。

「臆するな！！」
「相手は二人ぞ！！」

敵兵が迫る中、桜火と竜王は静かに立っていた。

（桜姫よ。ならば散り逝く際に、我等がなす大業に賛美の言の葉を貰い受けよう！）

竜王の決意はじつに固かった。

――バチ・・・――

一方で桜火は右腕の手甲に手をかけていく。

「桜火様！リュウギョ・・・・・・竜王様！助太刀せねば・・・！」
「まって、麗奈！」

少し離れた場所に居た陽炎と麗奈は眼にする。
火影六代目頭首と真庭頭領総補佐の実力を。

――カラン――

手甲が外され投げ捨てられた。

「出でよ。我が真なる力！！」
「全身全霊を尽くし、愚者共に死を！！」

桜火の右腕より、彼の炎の源が姿を現した。火炎そのものとさえ言える七匹の火竜達。
そして竜王の姿もまた、グリードとしての異形に成り果てる。

「な・・・な、なんじゃあ！？」
「これは・・・『余所見をしている暇があるか？』

敵兵が七竜の登場に恐怖する。
そして竜王自身が名づけたもう一つの姿に対する名前、リュウギョクが敵兵共に襲い掛かる。

『真庭忍法影分身！！』

一気に多重分身を行い、量を質でおしていく。

「「「「「「「「「ぐぎゃあああああぁぁぁぁぁぁああああ！！！！！」」」」」」」」」

それと同時に七竜らの猛烈な体当たりによって兵士達の体が燃え盛っていく。

「陽炎・・・・・・！！あれ、は！？」

「・・・七匹の竜・・・」

「あれが・・・桜火様の炎の型！？」

「炎術士により様々な形を持つという炎の源・・・・・・七竜（しちりゅう）」

「だが、竜王様のあの姿は！？」

「わからない。・・・でも、もしかしたら、あの姿こそが竜王様の真なる・・・・・・」

陽炎と麗奈は遠くからこの惨状を目の当たりにしていた。

「どけ！！火影の桜火と真庭の化物は、この高峰蔵人が殺る！！あの程度で死んだと思うたか桜火ぁあ！！」

兵を押しのけ、隻腕状態にも関わらずに高峰が出張ってきた。

「同じ火術を使うこの高峰に脅しはきかぬ！！我が炎蛇と同じ幻か！？」

高峰は手裏剣や苦無といった暗器各種を片腕で器用に投げ飛ばした。

しかし、暗器は火竜をただすり抜けるのではなく、燃やし熱せられてすり抜けた。

（幻ではない）

高峰は悟ったがもう遅い。

気が付けば、残っていた左腕もぶちきれ、両足もわき腹も、到る部分が火炎によって抉り取られていた。

（本物の・・・・・・炎の化物・・・・・・・）

そうして高峰蔵人は討ち死んだ。

「なんじゃ・・・あの化物だけでのうて、炎の竜・・・・・・ワシは悪夢でもみているのか？」

高杉は包帯で隠されていようとわかるほどに動揺していた。

「桜姫・・・」

「お逃げくだされ殿！！」

「もはや桜姫などと申されている場合では・・・！」

「ひっ・・・ひいい！！」

高杉は部下に促されたのをトリガーに、一国の主にあるまじき情け無い悲鳴をあげて、馬に乗って本国に戻ろうとする。

が、それも叶わない。

『コアメダルを返せ・・・・・・！！』

竜王（リュウギョク）がいた。

「そ、そそ、その方の探す物は・・・ここには、な・・・無い！」

『では何処にある？』

リュウギョクの冷え冷えとした態度に高杉はただただ恐怖する。

「す、すまぬ！とある輩に売り飛ばしてしまった！し・・・しかし安心せよ！生かしてくれるのなら、直ぐにでも買い戻して『もうよい。消え失せろ塵芥』

リュウギョクは忍者刀を逆手に構えてこう告げる。

己の最強の忍法の名を。

『真庭忍法、劉殺生（りゅうせっしょう）！！』

一言で述べるなら、高杉は一瞬でバラバラに分解され、ただのグロテスクな肉塊とかした。

忍法劉殺生。

ただ単純に竜王が習得している忍法全てを総動員するだけの忍法。

幻惑の魔眼による夢幻惑いにて敵を確実に捕え、影分身で複数人となって敵を囲み、剛力無双によって得た怪力を疾風迅による神速の速さで振るい、流水剣・激流によって敵を斬殺する。

それが彼女の奥義であり必殺技なのだ。

その時、リュウギョクと桜火にある言葉が心の中に響いてきた。

――心せよ・・・・・桜火・・・・・我等七匹の火竜は汝と竜

王の心に同調し、一度だけ力を貸した。しかし・・・・・・哀れにも汝の心が晴れず朽ちていったその時は――

言葉は一旦途切れたが、すぐ紡がれる。

――汝が八匹目の火竜となるのだ・・・！我は七竜の長、虚空。また・・・会うやもしれぬな・・・・・・・――

＊＊＊＊＊

そうして、合戦は終わった。

良い方に言えば引き分け、悪く言えば双方殲滅で。

竜王と桜火は、読みきれぬ表情で戦場跡を高台から見ていた。

「本当に言ってしまうのか？」

「あぁ、コアメダルを取り戻す必要があるからな。それに・・・・・・」

「それに？」

竜王は少し儚げな自嘲気味な表情でこういったのだ。

「忍者はあくまで歴史の影に生きる黒子。噛ませ犬は噛ませ犬らしく、化物は化物らしく、主人公たる英雄に封印されるだけのこと」

そうして竜王は去っていく。

「ま、待て！」

「我等は所詮忍者だ。忍は生きて死ぬだけ・・・・・・それだけなのだから。転生しようと、それは変わらぬ」

竜王は今度こそ消え去ってしまった。

桜火はただ呆然と立ち尽くしていた。

――桜火――

すると、聞き覚えのある声がした。

――別れの挨拶を、言いに参った・・・・・・竜王がおらんのが残念じゃが・・・――

幻影のようにも思ったが、違うかもしれないし、本当に幻影だったのかもしれない。

――其方が己を責める必要は無い。其方らの力でわらわは敵に辱められることもなく天寿をまっとうできた――

だが語りかけてくるのは紛れも無く、

――わらわは其方らに救われた・・・・・・お前らなくして今のわらわはおらぬのじゃ――

悲運なる姫君、その名は桜。

――礼を言うぞ桜火。・・・竜王に宜しく頼む。そして――

いや、悲運などとは第三者からの意見だ。
彼女はきっと、

――さらばじゃ・・・――

最後の最期にはほんの少しだけ、幸せだったかもしれない。

この話は、烈火が生まれる前で紅麗が生まれる前。
時に永禄十一年のお話・・・・・・・・・・・・。

この一年後、桜火は陽炎を正室に、麗奈を側室に迎え入れる。
後に火影が滅ぶのは西暦１５７９年＝天正七年、天正伊賀の戦いにおいて伊賀が攻められる事の三年前であった。

＊＊＊＊＊

現代の花菱烈火の精神世界。

「・・・・・・今までの話が、ワシが過去に柳殿と竜王殿におうていると言った意味じゃ。無論、転生するまえの”桜姫”ではあるがな」
「・・・・・・懐かしい話じゃのぉ・・・あの時ワシらは桜火殿と真庭殿の心に打たれ、力を貸した。それは烈火が紅麗と初めて戦った時と同じ気持ちだったのやもしれん」

桜火は決意を新たにするように、虚空は懐かしむようにする。

「ワシはお前の中よりお前の人生の流れを共に見てきた。当然、柳殿や竜王殿に初めておうた時のこともまた然り。その時ワシは、確信した」

桜火は裂神としての意見をいう。

「柳殿は桜姫が生まれ変わりし者だと！」

「・・・・・・・・・」

烈火は黙ってその話をきく。

「あれから時が流れた。互いに姿形は変わっている。しかし・・・ワシにはわかるのだ。！あれは彼女だ！」

桜火は過去を思い返し、表情を震わせ、拳を振るわせる。

「・・・ワシは・・・・・・ワシは・・・・・・本当の意味で姫を救ってやる事ができなかった・・・！竜王殿も、あの時ワシがもっと強く引きとめていたら、再び四百年の眠りにつかせることも、あのような形で再会することもなかったろう・・・・・・！！」

桜火は眼を見開き、烈火の両肩をガシっと掴む。

「だからお前の託すのだ！！烈火！！」

その眼に涙を滲ませながら。

「せめて・・・今度こそ桜姫を・・・柳殿を救ってくれ！！前世で報われぬまま短い生涯を終えたあの娘を！！今も残された治癒の力

が、ワシには桜姫の無念に思えてならん!!」

すると烈火は父の手を払いこう言った。

「言われなくても当然やる。それが忍だ。俺は最後の火影忍軍頭首、花菱烈火!」

烈火の答えは最初から決まっていたのだ。

「呪われた火影の歴史も・・・・・・それによって悲しみをつくっちまった奴らの気持ちも・・・・・・姫だった人も、姫も!全ての呪いも因縁も断ち切る!」

それが烈火の決断。そしてその結果が、

「変な言い方だけどよ、火影つぶすぜ!俺たち新生火影忍軍がよ!」

そう、戦いが終われば、火影忍軍の力は不必要となる。

それゆえに”火影をつぶす”ということになる。

「うむ!ならばそろそろ現実の世界に帰れ!他の連中も集まっておろう!時の流れが違うので、既に三日はたっとる」

「何!?マジでか!?早くしねーと!!」

虚空の言葉に烈火が軽くパニくった。

するとタイミングを見計らうように現れた奇妙な鏡。

「えーと・・・またこの鏡に入ればいいんだよな!」

と、途中まで進むも

「オヤジ！うまく言えないがよ、やっぱり俺はあんたの息子で、そいつをスッゲー誇りに思う！！」

それみおまた、純粋なる思い。

「そういうことだ！！じゃあな！！行って来るぜ！！」

そして、烈火は鏡を通っていった。

「・・・墨も砕羽も・・・皆あれが好きらしい。良い御子息じゃの桜火殿」

「・・・・・・・・・いや・・・頭の悪い未熟者じゃ・・・ワシの息子だからな・・・」

そういうものの、桜火の表情は笑顔だった。

息子の成長をこの目で見届けて確信したような、そんな父親の笑顔だった。

戦国時代と真庭忍者と託す望み（後書き）

次回、仮面ライダーブライ

ＳＯＤＯＭとチェリオとＣＤデータ

真庭竜王（まにわりゅうおう）

グリードの一体で、鳥類系・昆虫系・猫系・重量系・水棲系のコアを宿した異質な存在。偶然にも七実にコアメダルを予備を含めて十五枚持っていかれたせいで不完全状態（セルメン）になっている。五系統のコアを宿しているだけあって、一度に多数のセルメダルを使うことで合成型ヤミーを生み出すことが可能であり、ヤミーの育成方法は他のグリード達のそれに準ずる。また、五千枚のセルメダルを結合させて一枚のコアメダルを生産する能力を備えている。

自分のコアメダルを持っているのが強力なグリードとブライであることを知り、森光蘭に取り入ることで誰にも邪魔されずにセルメダルの大量生産、及びコアメダル生産に専念できるようにしている。

人間態の際は流麗の如き美しい黒髪をロングポニーテールにし、全身に鎖を巻いて袖も覆面も無い上、上半身は和風だが下半身部分は脚の付け根にまでスリットの入ったリロングスカートといった奇抜な忍装束を着込んでいて、腰の左右に二本の忍者刀を帯刀した凛々しい風貌の美女の姿となる。

ちなみに鎖は首・両腕・両足・腹部へと二重螺旋を描くように巻か

れている。

元を正すと彼女もまた「刀語の世界」からグリードに転生した存在で、元々は十二頭領結成当時＝真庭忍軍全盛期に活躍していた忍者で、十二頭領の総補佐役をしていた。もっとも、彼女の存在は同じ里の者の中において十二頭領しか知らなかったらしい。単純な高い戦闘能力だけでなく、初代十二頭領達からも”マトモ過ぎる”と言われる性格ゆえに総補佐に選ばれたらしい。

通り名は『奇蹟（きせき）の竜王（りゅうおう）』

グリード化していこうは”リュウギョク”という名前を基本的に名乗っているが、時折本名を堂々と口にすることがある。複数の忍法を会得している上、剣法の使い手としても一流に値する腕前の持ち主。

生まれ持っていた虹色の”幻惑の魔眼”によって対象に幻覚を生じさせ、時には幻想世界に引き込んでしまう忍法「夢幻惑い（むげんまどい）」。

実体つきの分身体を複数生成する忍法「影分身（かげぶんしん）」。

十秒間だけ通常の千倍の速度で動ける忍法「疾風迅（しっぷうじん）」。

一日に数回だけ凄まじい怪力を発揮する忍法「剛力無双（ごうりきむそう）」。

邀撃を司る”小流”と攻撃を司る”激流”といった二つの様式をもった真庭剣法の一つ「流水剣（りゅうすいけん）」。

そして、全ての技法を駆使して敵を一瞬で殺す忍法「劉殺生（りゅうせっしょう）」といった六つの技法を駆使して戦う。

因みに、これら六つの技のうち五つは、五大グリードの特性に準えて設定しており、夢幻惑いはアンクの嘘の上手さ、影分身はウヴァのコア三種で発動するガタキリバから、疾風迅はカザリの風を操る能力から、剛力無双はガメルの怪力ぶりから、流水剣はメズールの

属性からである。

年齢：不詳　職業：忍者　所属：真庭忍軍　身分：総補佐
身長：２１０／１７５ｃｍ　体重：１２３ｋｇ／？？？　趣味：歌
スリーサイズ：Ｂ９５／Ｗ５６／Ｈ８７　イメージＣＶ：清水香里

SODOMとチェリオとCDデータ（前書き）

仮面ライダーブライ！
前回の三つの出来事は！

一つ！烈火の実父・桜火より、四百年前における柳の前世たる桜姫とリュウギョクとの想い出が語られる！

二つ！リュウギョクの正体は、真庭忍軍十二頭領総補佐の真庭竜王だった！

そして三つ！桜火は息子の烈火に、生前果たせなかった望みを託した！

SODOMとチェリオとCDデータ

とある山奥の片田舎。
そこに建てられた和風の屋敷。
紅麗はそこに訪れていた。育ての親と再会する為。

屋敷のおごそかな和室に、月乃と紅麗は正座して座布団に座っていた。

「よくご御無事で・・・・・・！心より嬉しく思います、母上」
「あなたこそ、紅麗！元気そうで何よりだわ！」

月乃は優しい表情で返した。

「雷覇さん・・・といったわね。あの人が来てくれなければ今頃どうなっていたか。月乃がとても感謝していたと伝えてちょうだい」
「はい」

紅麗は素直に答えると、

「母上、本日は・・・しばしの別れを言いに参りました」
「・・・・・・・・・やはり行くのですね」

予想はしていたが、やはりいざ言われると虚しくもあり寂しくもあった。

「まだ全てが終わったわけではありません。森光蘭(あの男)だけは・・・・・・
・この手で討たねばならない！！」

誰になんと言われようと、それだけは譲れなかった。

「そうね・・・・・もうあの男を父と呼ぶ鎖は切れたわ。私が奴の妻であることの呪縛が解かれた様に・・・・・・」

「・・・・・最近同じ夢をよくみます」

紅麗が話題の方向を変えてきた。

「幼き頃の夢・・・・・火影の里、母の麗奈、そして本当の父たる桜火の夢です」

かつて紅麗は呪いの児として子供からも大人からも疎んじられた。桜火はそれを黙って見ていたわけではないが、頭首ということもあって麗奈と紅麗を連れて抜け忍となることもできない身の上に心から紅麗に詫びた。

麗奈も村八分にされたせいでマトモな衛生的生活もおくれずに病にかかりがちになり、紅麗はそれを看病する日々が続いた。しかし麗奈は病に蝕まれながらも、烈火と陽炎の陰口を叩こうとも、彼女は紅麗にこういったのだ。

――紅麗、父を・・・・・桜火様を恨むでない。あの御方は火影の頭首として生きねばならぬ御方なのじゃ・・・・・・――

それを語るときの顔は、実に儚げで美しかった。

元から顔立ちは良かった麗奈だが、愛する夫と息子を想うその気持ちだけは、一切の穢れもない美しさがあった。

――父としてあの御方は、烈火は勿論・・・・・・お前にも愛情をもっておることを忘れるでない・・・・・・――

「・・・良いお母様だったのですね」
「はい」

紅麗は即答した。

「そして貴女も、私にとって良き母でありました」
「嬉しいわ。・・・・・・本当のお父様のことはどう思っているの？」

月乃が聞くと、紅麗は軽く下げていた頭を上げて、仮面の無い綺麗な素顔で胸を張ってこういった。

「尊敬しております。父は火影の為に生き、火影の為に死んだ」

今の顔・・・・・・火影としての純粋な誇りに満ちた綺麗な顔こそ、紅麗の本当の姿。

「・・・それでは失礼致します。母上もお体にはお気をつけくださるように」

――トン――

席を立って外にでようとする紅麗の背に、月乃が抱きついてきた。

「たとえ・・・血の繋がりがなかろうと・・・生まれた時代が違お

うと・・・貴方は私の息子でした・・・・！！元気でね・・・・・・・・紅麗・・・・！」

涙を大粒でもたりないほど流し、別れの言葉を告げる月乃。
彼女自身わかっているのだ。これがきっと、今生の別れになってしまうことに。

「行ってまいります、母上」

紅麗はまた、愛する者を置いて死地へ赴く。

（そう、これが私の答えなのだ）

かつて刃介に問われた紅麗は、既に答えを出していた。

（私は戦う。ただ・・・守る為に・・・！たとえ傍らに居られなくとも・・・！！）

孤独な仮面の死神、紅麗。
再びその暖かき素顔を隠し、冷血なる仮面を被る。

＊＊＊＊＊

トライブ財閥の会長室。
そこに刃介と七実はいた。

「ご苦労様。お陰様で助かったわ」
「・・・あぁ・・・」
シルフィードのお礼に対し、妙に低いテンションな刃介。
「・・・・・ごめんなさいね。私たちの失敗が原因して、貴方には迷惑かけちゃって」
「気に病むな。あの暗黒騎士王のことも、尾張城で殺した連中のことも、お前が謝ることではない。それに、報酬はキチンと貰った事だしな。それにコンボの多用で体内に宿るコアも六枚にまで増えた。コイツらを含めれば九枚だがな」
刃介の手には金色(こんじき)のコアメダルが三枚握られていた。
「そう、ありがとう。・・・それに七実ちゃんにも感謝するわ。セルメダル五千枚はありがたく受け取るわ」
「どういたしまして」
七実は軽く頭を下げて礼儀を返す。
「指定した物全てを回収してくれたもう一つの報酬として、森の潜伏先を教えるわ。多分火影メンバーも向ってる筈よ」
「すぐ教えろ。早急に出発する」
「まった。その前に一つ、こっちからの要求を一つ言うわ」
「お前言ってる事矛盾してないか？」
「気にしないの！別に大層なことじゃないわ」
と、シルフィードは言った。

「では一体どんな要求なのでしょうか？」

七実は問いかけると、この後シルフィードはとんでもないことを言い出した。

「はぁぁ！？お前らも森の要塞にいくだと！？」

「そうよ。正確には私とバットと吹雪君。それからあと一人」

「ん？誰だよそれ？」

「それは目的地までのお楽しみ♪」

シルフィードは指先を唇に乗せて妖艶に笑って見せた。

「私たちは色々と準備があるから、貴方達は先に行ってて頂戴。絶対においつくから」

「・・・・・わかった」

「ではまた御会いしましょう」

そうして刃介と七実は会長室から出て行った。

「いよいよ我々も本格的に出陣ですか」

「腕がなるっすね～！」

そこへ入れ替わるようにバットと吹雪が登場してきた。

「どう二人共？新しい武器（エモノ）の具合は？」

「問題ありません」

「俺っちはちょっと小細工ありきっすけど、どうにかなりますぜ」

「そう・・・それは良かった」

シルフィードは静かに口を開く。

「Wとイーヴィル・・・このダブルライダーの先にあるオーズとブライ。・・・そのブライが円滑に行動できるよう、私たちも頑張るとしましょう」
「そうですね。コア&クラスト戦の時のように、黙って眺めるだけというのはもう飽きました」
「体ってのは思い切り動かさないといけないっすよ」
吹雪とバットは賛同の言葉をだした。

「えぇ、そうね」

そしてシルフィードは、その返事に大変満足したように、安からかな微笑みを浮かべた。

＊＊＊＊＊

その頃、柳はというと・・・・・・。

竜王の歌声を自室で聞かせて貰っていた。
竜王の声は実に綺麗で、歌声を邪魔させる気さえ消失させるものがあった
そして歌は山場に突入。
そして終局。
和風なこの歌に相応しい締めを見せりと、聞かせてもらっている観

客二人は同時に大きく拍手する。

――パチパチパチパチ！！――

「すっごぉぉい！素敵で綺麗な歌声！」

「本当にそうだね」

観客は柳と葵の二人だけだ。

「それはどうも」

簡単な返事を返し、竜王は座る。

「化物だの言っても、やっぱりリュウギョクさんはこんなに綺麗な歌ができるんだから、不必要な存在なんて誰一人いないんだよ。それを奪う権利もね」

柳は嬉しそうに言った。

「私はリュウギョクさんに比べて、１６年しか生きて無いから偉そうには言えないけど、誰かが死ぬと・・・きっと誰かが悲しむんだよね。親だったり、子供だったり・・・友達・・・恋人とかね」

柳は表情をめまぐるしく変えていく。

「自分よりも大切な命だってある。自分が犠牲になっても守りたいくらい、重い事だってあるんだよ」

柳の言葉に葵は納得した。
何故柳を強制的に拉致するのではなく、火影の死を流せ、などという幻覚を見せて誘導的に拉致するように命令が下されたかを。

精神操作（マインドコントロール）。
葵の魔導具は左腕にしてある三つの核からなる”神慮思考（しんりょしこう）”。
他者の思考や記憶をある程度操作することができる魔導具。
ただし、その記憶を術者も知っていなければならないし、操作許容に限界値が存在する上、距離的な能力範囲限定・・・・といった弱点が存在している。

学校に潜入した際に火影メンバーが神楽葵に警戒しなかったのは、一重にこの魔導具の力といっていい。もっともその効果は火影メンバーには効力がとっくに切れているだろう。
距離的に離れたせいでもあるが、もう一つにして最大の要因は、柳一人に神慮思考の力を集中させることで、彼女の思考を根本から捻じ曲げていく為でもある。

結果として柳からはある人物に関する記憶が消去されようとしている。

「そのような考え故に、お前は葵に付いてきたというわけか。自分がどうなるか、ある程度は覚悟した上で。しかしそれだと、火影の連中の命は守れても心は傷つけてしまう」
「・・・・・・そうだよね。私、言ってること矛盾してるね・・・・・」

竜王の言葉にうつむく柳。
本来こんな言葉をかけるのは葵の役だが、今日に限っては竜王がし

ていた。

二人は「またね」と言って外にでた。

（不思議だ、わからない、人間ってなんだ？）

葵は困惑していた。

（少し前まではこんなこと考えたこともなかった・・・・・ボクが普通の人間じゃないから？欠落した部分があるから？）

葵のこの疑問は少々お門違いだ。

（・・・そうか・・・・・ボクがよくここに来る理由、柳ちゃんと話していると今まで考えられなかった事が植えつけられていく感覚を覚えるんだ。欲しかったものが・・・足りなかったものが埋められていく心地よさ・・・・・けど、逆にボクは彼女から奪っている）

その奪いつつあるもの、それは・・・！

（少しずつ消えている彼女の中の、花菱烈火の記憶・・・・・！）

＊＊＊＊＊

今更ながら紹介しよう。
ここは、あらゆる者の侵入を許すこと無き山岳地帯の奥深く。
Ｃ－ＣＯＭ（コム）財団の中心部。
忍者集団”裏麗”を統括する森光蘭の最期の砦。

要塞都市
通称――ＳＯＤＯＭ（ソドム）。

そのＤ－２地区のバイオノイドドーム内部。

「・・・キリト、今日はまた随分違うイメージ」
「んー・・・まぁね」

奇妙な民族衣装に奇妙な仮面をした男は、小学低学年あたりの少女に声をかけた。

「しかし・・・よく見るこれ！この化物たち、すごい数！！」

二人の目の前には数多くのカプセルが設置されており、その中身はというと

「光蘭の遺伝子組み込まれた人間！もう人間じゃない、怪物！どうしてこんなものつくる理由ある？どうして思う？」

巨漢は幼稚な喋り方で語る。

「イヒャヒャヒャ！！光蘭、この世界の生態系変える、言ってた！光蘭を中心にする世界に造り変える、言ってた！」

狂ったように狂った事を眺め続ける。

「すごい！笑わないかキリト？まるで子供の考え！まるで映画！絵に描いたような悪者！！イヒャヒャ！！恐竜滅んで人間、この世界の中心になった！これからは光蘭が人間に代わり、頂点に立つと夢みたいなこと言ってる！クレイジー！！イカれてる！！」

「あのね、あまり自分の主人を笑っちゃダメだよ門都ぅ。だいだいどーして君はここにいるのさ？」

「面白いからに決まってる！俺もクレイジー！！」

＊＊＊＊＊

一方その頃、柳は場所を移されていた。

そこには以前の部屋のような豪華さなど一欠けらもなく、ただただ不気味な薄暗さしかない。

あるものと言えば、柳自身の自由を束縛している樹木くらいだった。

「「・・・・・・・・・」」

柳の手足と自由を縛りつけるその部屋に、竜王と葵はきていた。

「精神衰弱レベルCまで達した。これからは食事も睡眠もとらせないらしい」

「融合の時は刻々と・・・か。天堂地獄も繭状態といったところか」

そしてもう一人は、蛭湖。

「佐古下柳の治癒の力と森光蘭の天堂地獄は全く持って対極に位置している。陽と陰、水と油が一つとなるには下準備が居る」
「その為に彼女の”生きる力”と精神力を極限まで削り取る！そして森様は繭状態の幼体から成体に生まれ変わる。それによって治癒の力を受け入れる受け皿をつくるのだ」

竜王と蛭湖が話していると、さっきから黙っていた葵が口をひらいてこういった。

「融合・・・ってさ、やっぱり・・・このこ・・・死んじゃうってことだよね？」
「・・・・・・恐らくな。可哀想だが、これも命令。仕方がないか・・・・・・そういえばお前は・・・彼女の精神力を衰弱させる為、彼女の最も大切な記憶を奪いつつあったな」

葵の素朴な疑問に蛭湖が冷静に受け答えする。

「・・・・・・命令だったから・・・でも・・・なんだろう・・・変な気持ちだ。気分が悪いような、苦しい気分・・・」
「・・・・・・驚いた。葵の口からそんな言葉がでるとはな」

蛭湖は些か瞳を動かした。驚いた、とはいうものの表情にはまったく出ていないが。

すると突然、

――エリア内に侵入者を確認！！迎撃態勢に備えよ！！繰り返す！侵入者を確認！！――

「遂に嗅ぎ付けて来たか。新生火影・・・ブライ・・・！」

竜王は期待するような表情と声音で言葉を紡いだ。
こんな要塞都市に挑んでくる理由がある侵入者など、彼らを良く知る者なら一瞬で判断できただろう。
警報とアナウンスが鳴る前よりも、竜王を初めとする多くの裏麗がこの状況を予測していただろう。

＊＊＊＊＊

ＳＯＤＯＭの周囲にある樹海。
それを越えた先にある断崖絶壁の崖の上に、彼らは居た。
言わずもがなだが、火影忍軍の烈火・風子・土門・水鏡・小金井・陽炎の六人と、
シェードフォーゼに乗った刃介と七実だ。

「イェーイ！！発見！！」

風子がノリノリな様子で声を上げる。

「この中に柳が・・・！」
「よーし！」

土門が気合を入れて入れると、

「あのー・・・それなーに？」

導火線に火がついた玉でお手玉する烈火。

「宣戦布告じゃあぁぁぁ！！行くぞぉぉお！！」

気合ＭＡＸで玉を思い切り空中に放り投げる。

――ッパァァァン！！――

夜空に美しい花火が咲いた。

「たーまやー！！」

烈火は満足げな表情でそう言った。

「あら、随分粋なことするじゃない」

と、女の声がした。

「遅かったな、シルフィード」

「だから言ったでしょ、準備してくるって」

しかしその声に対し、刃介は冷静だった。

そうして、姿を見せた三人の男女。

「あ、バット！」

「また会いましたね、霧沢風子」

その内のバットは何気ない口調で風子に軽く会釈する。
しかし、この場におけるバットの服装は以前と大きく違っていた。
簡単に言うと、胸元が大きく開いたコンバットスーツを着用していたのだ。
そして敢て開かれていた胸元の中央には、

「悪刀（アクトウ）『鐚（ビタ）』」

七実はバットの胸に挿し込まれている物の名を口にする。
四季崎記紀が鍛え上げし完成形変体刀十二本が一本、悪刀『鐚』。
かつては七実も胸元の奥深くに挿し込んで使用し、生命力を無理矢理活性化させていた最も凶悪な変体刀。

「それにそっちは、賊刀（ゾクトウ）『鎧（ヨロイ）』に双刀（ソウトウ）『鎚（カナヅチ）』・・・・・・凍空か。お前も伊賀忍法筋肉騙しが使えたのか？」
「ははっ！その通りっすよ。一目で見破るとは流石っすね」

全長は２ｍを優に越えた上に全身銀色の露出度零の西洋甲冑と海洋生物を模したであろう甲冑姿で、上下の区別が曖昧な分厚くて無骨で何物よりも重い石刀を持っているのは凍空吹雪。
しかし、規格外なまでに巨大なサイズをしている賊刀を着こなすには２ｍ余りモノ身長が要る。１８５ｃｍの吹雪では些か無理ではないかと思われたが、刃介は大方シルフィードの魔術かなにかで身長に細工したのだろうと自己解釈した。流石に吹雪が伊賀忍法を使うなど考えにくいから。

「俺が盗って来た物を早速運用してくるとはな」
「こうでもしなければ裏麗の連中とは渡り合えないわ」

と言って来たのは何故か礼服姿のシルフィード。とてもこれから戦いに行くようには見えないが、もしかしたら彼女なりの何かがあるのやもしれない。
しかし刃介にとって着目すべき点はそこではなかった。

「お前なんかさ、胸がコンパクトになってないか？」

そう、バストサイズ１００を誇るシルフィードの爆乳が目立たなくなっていたのだ。

「あぁこれ？流石に戦闘場面じゃ邪魔になるから、晒し布をキツく巻いてね」

とシルフィードは説明した。

「あの、もしかしてこの方達は・・・？」
「一応助っ人ってことになるな」
「一応って酷くないかしら？」

陽炎の疑問に粗雑に答える刃介に対し、シルフィードは少々不服な様子。

「あの、ところでさ・・・・・・」

そこで小金井が心配するように尋ねる。

「大丈夫なのかな？胸に刺さってるソレ・・・・・・？」

バットの胸元に刺さり、血管を浮かび上がらせている悪刀を指差す。

「問題ありませんよ。用事が終わったら然るべき処置をして抜きます」

バット本人はいたって冷静に受け答えをする。

「ちなみに、俺っちのことも心配無用っすよ。一見重そうで暑そうに見えても、実は「誰もお前の意見は聞いてねぇんだけど」・・・・・・そうっすか」

刃介にバッサリと言い切られ、『鎧』の中で吹雪はしょんぼりとした表情になっていたが、見えない為に誰からも労われなかった。

「ところで、あと一人は？」

「それならもう直ぐ来るから大丈夫。早く行きましょう」

その言葉を聞き、烈火はハッとなった。

そして気合を入れなおし、こう言った。

「・・・・・・よし！」

眼を少し閉じ、心を落ち着ける。

「行くぜ！！火影！！」

快進撃が始まった。

＊＊＊＊＊

ＳＯＤＯＭの入り口・・・・・・とさえ言えない場所、第一防衛ラインといったところか。

故にここを警備する者はあくまで人間（ＳＰ）だった。

勿論常人相手に彼らが苦戦するわけないのだが。

すると、

――パチパチパチ！――

一人分の拍手が聞こえてきた。

「よォ～～こそおいでくださいました！まさかこの要塞都市ＳＯＤＯＭまでいらっしゃるとは思いませんでしたよ」

市販の眼鏡に短髪の黒スーツのＳＰ。

「お前・・・」

「森の側近の八神・・・って・・・あれ？」

一つの矛盾が生じた。

「質問。俺様の記憶が確かならあいつ・・・・・・」

「死んだ男だ」

八神のあの時、天堂地獄とかした森によって殺されたはず。

――ガパァァ！――

なんの前触れもなく、八神の口部左半分が裂けた。
しかも筋肉や皮膚を無理矢理引き裂いたかのように血液がドバっとでた。

それと同時に、八神の背後に現れる無数の異形たち。

「死んだんじゃねーんだな。生まれたんだ！理解できまい！？無知で無学な必要なしのゴミ共が！死ぬ事で懺悔しな！！」
「たとえそうであっても、テメェにだけは言われたくないぞ三下眼鏡」

刃介は八神に余裕で言って見せた。
というより、ここにいる八神は恐らく本元の細胞から作り出したクローンである線のほうが強い。もっとも森の遺伝子が多少入ってくることもあって化物じみているが。

「さて、肩慣らしだ。たまには未変身でも戦えるようにしないとな」
「貴様こそ嘗めるな！！」

刃介の余裕満ち溢れる言葉に八神が憤慨し、異形らをけしかける。
刃介が『無花果』の構えで迎え撃とうとすると、

――シャリィィィン――

背後に突然、編み笠を深く被り、手には錫杖をもった四人の男が居た。
男の一人は異形の一体を豪快に殴り飛ばすと、編み笠をとってみせた。

「どうやら、間に合ったようだな」

その正体は、首に大数珠をかけたスキンヘッドの巨漢僧侶。

「久しいな、火影！！それに見新しい顔もいるな」

「空海（くうかい）のおっさん！！」

裏武闘殺陣において烈火たちと第一試合を行ったチーム空の主将である空海だった。

「それに・・・・・・大黒（だいこく）！南尾（みなみお）！藤丸（ふじまる）！」

長い棒を武器とした生真面目そうな男、大黒。

体の異常な柔軟さによってトリッキーな動きを得意とする猫目の男、南尾。

眼つきがなんか悪くて如何にも小悪党面な男、藤丸。

そして、

「千鶴（せんかく）！！」

魔導具・式紙によって幾重もの紙鶴を異形らにぶつけて攻撃する中性的な少年、最澄（さいちょう）。

「行ってください、皆さん！ここは僕たちが食い止めます！！」

「陽炎殿からカラスを使った書状を頂いてな！おぬし達の力となりに参った！」

「他の”空”の仲間たちも呼んである」

「見たいテレビがあったんだぞ。感謝しろよ」

上から最澄、大黒、南尾、藤丸の台詞だ。

「行け！！あの娘を助けに！！」

「おう！！」

「よく分からんが、感謝するぜ坊さん！」

烈火も刃介も空海らの好意を素直に受け取る。

「逃がすんじゃねーーーっ！！ゴミが増えただけだ！まとめて処理しろ、兄弟たち！！」

八神が怒号まじりに指令を下すと、異形らが烈火たちの進行を阻もうとする。

が、

――斬ッ！！――

その異形は切り裂かれた。

「ゴミねぇ・・・・・気高く気品ある美しい僕の心はブレイクさ。君、死刑決定」

「ここは任せていくでゴザル！！」

新たな助っ人。

元裏麗所属にして裏武闘殺陣でチーム麗（魔）として出場していた二人。

口に薔薇をくわえたナルシストの月白に、魔導具の偽火を扱う忍者の火車丸。

「月白（つきしろ）！火車丸（かしゃまる）！」

風子が次々と現れる予期せぬ増援たちに感激していると、その隙に異形の一体が、

――ズシャアアァァァン！！――

２m半ばはあるであろう巨体をし、その巨体をゴツい鎧で武装をした男が両腕による万力で潰した。

「行け！！火影！！」

彼の名は餓紗喰（ガシャクラ）。月白や火車丸たちと同じく、裏麗の抜け忍。チェーンつきのモーニングスターを振り回して異形たちを粉砕していく。

「ありがとっ！じゃあお先に失礼するわ！」

「皆さん、御武運を」

「頼んだっすよ！」

そんな彼らのおもいに、シルフィードたちも素直に受け取り、先へと前進していく。

「くくく・・・・・あいつらよぉ、ここで殺されてたほうが楽だったと思うぜ。テメーらもな・・・カッコつけて出て来やがって。ムカつくからぶっ殺す」

刃介も火影もシルフィードらも居なくなると、あっと言う間に元気

を取り戻す八神。
すると、今度は八神の後ろからは異形は異形でも、

『キシャアアア！！』
『ガァルルル！！』
『シュシュシュ！！』

ヤミーだった。
正確にいうと、ウツボヤミーとイカヤミーとパンサーヤミーの三体だ。

「な、なんだコイツら！？」
「へへへ・・・！そいつはリュウギョクさんから賜ったヤミーって言う名の家畜さ！さっきまで相手にしていたのとは格が違う！やっちまえ！」

『シュシュシュ！！』

八神が命令を飛ばすと、イカヤミーは口から溶解性のイカ墨を吐き出した。
一同は全員避けたが、地面に落ちたイカ墨は地面を腐食させている。

『キシャアアア！！』

今度はウツボヤミーが両腕を伸縮自在に伸ばして鞭のように振るう。
バチンバチンという音を立てて、人間の肌に傷を作って行く。

『ガァルルルル！！』

そしてパンサーヤミーが鋭い爪で彼らの肉に切り傷をつくっていく。

「く、くそ・・・！こいつら、桁が違うぞ・・・！」
「ヒャハハハ！当然だろ？さあ、ゴミクズは消えな！」
八神は心底愉快そうに空海らを侮辱する。
しかし、その減らず口もそれまでだった。
「不閉（とじず）・・・黙ることを知らない口ですね」
「ん？」
突然聞こえてきた謎の声。
――ビュンビュン！！――
――ザクザクッ！！――
「ひ、ひ・・・ひぎゃあああああ！！」
それと同時に、暗い夜の死角より、二つの刃が蛇のような連結刃となって、八神の体を削った。
「一体誰が？」
周囲を見渡すと、そいつは暗闇からゆっくりと歩み現れた。
「不外（はずれず）」
と、一言呟く謎の戦士。
黒いアーマーに銀色のスーツを着込み、体中にはガチャポンカプセルのようなものが付いていて、頭部にも巨大なカプセル型ヘルメッ

トと額金型のバイザーが青く輝いてはその明かりを落として黒くなっており、その容姿は何処となく忍者を連想させた。

腰には奇妙な金色のバックルのあるベルトをしていて、サイドバックルの左右には二振りの刀剣を収めるホルスターがあった。そして、その両手には先ほどの攻撃で使ったと思われる二本の忍者刀が握られていた――もっともその形状は従来の物とは異なっているが。

――ガチャ！――
――チャリン！――

謎の戦士はバックル中央で上下に開かれたトランサーシールドを閉じると、一枚のセルメダルをバイスロットに投入し、

――キリキリ・・・！――
――パカン！――

銀色のグラップアクセラレーターを二回ほど回してトランサーシールドを開き、内部にあるセルリアクターを解放する。

≪ＥＮＴＯＵ・ＪＵＵ≫

無機質な電子音が響き、胸部装甲（ファイアフレーム）のリセプタクルオーブが開いたかと思えば、奇妙な光球が現れ、それはあっと言う間に精密で細々とした機械の部品となり、組み立てられた状態で両手に収まった。

それは、現代人なら誰しもがわかる武器だった。

「二丁の拳銃か？」

「正確に言えば、一対の刀です。歪ながらもね」

餓紗喰の言葉が聞こえたのか、謎の戦士は訂正の意をとなえる。
そして肝心の一対の刀だが、種類的にいうと自動式連発拳銃と回転式連発拳銃。
もしこの場に刃介がいたら、それの名を言い当てただろう。

炎刀（エントウ）『銃（ジュウ）』・・・・・・と。

――ガチャ！――
――チャリンチャリン！――
――キリキリ・・・！――
――パカン！――

今度はセルメダルを二枚投入した。

≪ＣＥＬＬ　ＢＵＲＳＴ≫

「断罪炎刀（だんざいえんとう）」

謎の戦士は技名を口にし、セルメダルのエネルギーが充填された『銃』を両手に持ったまま、パンサーヤミーの真正面に移動して炎刀を振るった。

結果、

『ギニャアアアアアア！！！』

パンサーヤミーは体中に刀傷を受けて爆発四散し、あたりには何十枚ものセルメダルが散らばった。
謎の戦士はそれを何枚か拾って、

――ガチャ！――
――チャリン！――
――キリキリ・・・！――
――パカン！――

≪ＴＯＵＴＯＵ・ＮＡＭＡＲＩ≫

同じ手順を踏み、炎刀『銃』の代わりに、左前腕部（アームフレーム）にある装備を身につけた。
腕の外側にスキマが空いていて、そこからは二十に及ぶ手裏剣や苦無が見え隠れする武装。
その名は投刀（トウトウ）『鉛（ナマリ）』。

――ガチャ！――
――チャリンチャリン！――
――キリキリ・・・！――
――パカン！――

≪ＣＥＬＬ　ＢＵＲＳＴ≫

同じ手順で発動するセルバースト。
それによって熱量と光量を帯びていく暗器たち。

「ハッ！」

謎の戦士が叫んで左腕を振るうと、仕込まれていた暗器の類は全てイカヤミーに飛んでいき、その全てが命中した。

『シュ、シシュ・・・ゲソォォ！！』

二度目の爆発と飛び散るセルメダル。
だが謎の戦士は気に求めずに同じ手順を踏んで武装を換装していく。

≪ＳＥＴＴＯＵ・ＲＯＵ≫

切刀（セットウ）『鏤（ロウ）』。
一言で言えば、右前腕部（アームフレーム）に装備するチェーンソー型アタッチメントだ。

「フッ」

謎の戦士はペースを崩さずにウツボヤミーに近づく。

『き、キシャーーー！！』

ウツボヤミーは危機感を感じ取ったのか、腕を伸ばして攻撃しようとするも、

――ギュイィィィィン！！――

『鏤』を振り回す謎の戦士によってそれらを切断されて意味を成さない。
そして接近を許してしまい、

「フン」

――ギジュウゥゥゥゥ！！――

嫌な音を立てて削られていくセルメダル。
切刀はそのセルメダルを磁石のように引っ付けている。

ウツボヤミーは何とか逃げ出そうとするが、謎の戦士によってアイアンクローをかまされて逃げるに逃げられない。

『キ、ギ・・・ギシャアアアアアア！！』

断末魔を遺し、ウツボヤミーもまた、爆発してただのセルメダルとなった。

≪ＡＮＴＯＵ・ＫＡＭＡ≫

謎の戦士は右腕全体にアタッチメントを装備する。

イメージとしてはバースのクレーンアームの先端部分が、三つの鎌の刃によって龍の爪っぽく見えていて、ワイヤーが三重の鎖に挿げ代わっていると言ったところだろうか。

暗刀（アントウ）『鎌（カマ）』・・・・・・それがこの武装の名称だ。

「さてと」

謎の戦士は暗刀『鎌』の先端部分を飛ばし、磁石のように散らばるセルメダルを一枚残さず回収した。

そして、暗がりの中に置いてあった大型のアタッシュケースの中に詰め込んだのだ。

セルメダルの量は軽く二百枚はあったが、それでもアタッシュケースはあと三倍くらいはどうにかなりそうなスペースを余らせていた。

「不解（とかず）・・・・・・なんてわけにはいきませんね」

独り言をいった謎の戦士は、バックルのブランクケージにあるセルメダルを取り出し、それが消滅すると同時に変身を解いた。

「くノ一の・・・仮面ライダー・・・？」

八神は震える体で無理矢理言葉を紡いだ。

そう、謎の戦士の正体は女だったのだ。

それも、首から上は額金に覆面によって両目と茶髪のミニポニーテール以外を隠し、服の内に鎖帷子（くさりかたびら）を着込んでいるが、袖は切り落としている上に中途半端な丈をした焦茶色の忍装束姿の女忍者。

「不名乗（なのらず）・・・・・なんてことは忍者にとっては日常茶飯事ですが、今回は特別です。私はトライブ財閥会長から『仮面ライダーチェリオ』変身者としてブライの戦闘補助を依頼された『鋼金女（はがねかなめ）』と申します」

と、女忍者は自らの素性を丁寧に教えてくれた。

「まあここまで名乗った以上、敵である貴方がどうなるか分かっていますよね？ヤミーも異形も、さっきの戦いで全滅しましたから」

「あ、あ、あ・・・あ・・・あ・・・」

八神はもう言葉を出せなかった。

「では、さようなら。・・・忍法生殺（にんぽうなまごろ）し」

その時、その様子を見ていた空海も餓紗喰も、他の連中も皆全て、彼女の行動を目撃はしたが止めようとすら思えなかったのだ。邪魔したらこちらの身が危険だと判断したからだ。

金女は返り血すら浴びずに八神を始末すると、空海達にはなにも言わずに立ち去ってしまった。
手に持った大型のアタッシュケースからセルメダルの音を漏らしながら。

「兄さんは、私が私ってことをわかってくれるでしょうか？」

そして、独り言を漏らしながら。

＊＊＊＊＊

同時刻、刃介らはＳＯＤＯＭの入り口と思われる建物の中に入っていた。
建物の中は静まり返っていて、不気味なまでに人気がなかった。
唯一、巨大な液晶画面の真正面に立つ、全身をマントとフードで隠す人物がいたりしたが。

「敵！？」
「イヤ・・・」

マントの人物は首を横に振った。

「ようこそ、要塞都市ＳＯＤＯＭへ。このような間柄ではあるが、我等は紳士的に君達を迎えよう。ついてはこの都市での君達の動き方をお教えしよう」

マント男はリモコンを取り出してスイッチをおし、液晶画面にＳＯＤＯＭの見取り図を映した。
御親切なことに現在地である建物は勿論、重要な施設にはなにやらマークが施されている。

「これがＳＯＤＯＭだ。中央のタワーを囲うように、幾つ物ドームと施設が設置されている。そして中央のタワーの中に、佐古下柳がいるわけだ」

そのタワーの名は、

「ＨＥＬＬｏｒＨＥＡＶＥＮ――我等が神、森光蘭様の居城だ」
「それで、どうやって入れば良いのでしょうか？」
「どうせ何かキーアイテムが要るんだろ？」
「ククク、流石は我刀流に虚刀流。理解が早いな」

「え、どういう意味？」

三人の会話に小金井はついていけてないようだ。

「つーか、タワーに姫がいるなら、周りの湖泳げばいいじゃねえかよ」
「んだんだ」

いや、烈火も土門も理解していなかった。

「それは僕が説明する。・・・まず最初にあのタワー周辺の水質はコールタールのように粘っていた。とても人間が泳げる状態じゃないし、僕が闇水で水面を凍らせてもセキュリティシステムが働いたり、鋼と鑢が忍法足軽で行こうとしても高圧電流が流れる可能性が

ある」

水鏡は事細かに説明した。
タワー周辺の湖は、日本の古城における堀といっていい。

「その通りだ、流石は水鏡凍季也！そう、物事には順序というものがある。それではルールを説明しよう」

マント男は懐からあるものを取り出した。

「ＣＤデータ、これが要塞には五枚ある！それをお前らが二人五組と一人で探さねばならない」

なんか初っ端から面倒なことになってきた。

「同じ人間が立ち上げるとウイルスが流れるようにプログラムされている。おっと、ちなみにコイツは見本で空っぽのＣＤだ。・・・そして五枚のディスクデータを合わせると・・・ＨＥＬＬｏｒＨＥＡＶＥＮの入り口への進入方法たる電子キーアクセスＮｏ．！全てがわかるだろう！」

マント男は得意げになってきた。

「つまり・・・個別バトルオリエンテーリング！それぞれが施設に向かいディスクを探す！当然ディスクの無い所だってあるやもしれん」

「ハッ・・・ゲームの司会進行役なだけあって、よく喋るじゃねーかよ」

「ククク、何事もルールがなければゲームは始まらないし面白くもないからね」

マントの男は心底面白そうに笑う。

「数多の施設の中には裏麗の人間達が存在する。君達と戦いたがってる者が何人も待っているだろう。データ自体を消去するのが障害としては一番簡単だが、そんなことしてもそこの化物カップルは容易に障害をクリアしてくるだろう。ゲームを面白くするにはそれではダメだ。なにより・・・森様がもう一度・・・できれば君達に会いたいと仰っている」

「ほう、あの蛆虫馬鹿が随分と調子付いてくれたものね」

と、シルフィードが悪態をつきながらあざ笑う。

「森様はこう言われた。治癒の少女と同化した・・・完全体の私を見せたい・・・・・・となな」

――ギリ・・・!――

血走るような眼つきをした烈火。

爆発寸前のところで、

「そうだなぁ」

風子が制した。

「集団でいられるより、分断させたほうが狙いやすいもんね。おまけにその内の一人は余るから、あんたらにも十分にメリットがあるわけだ。上等!のってやろうじゃん!」

「餌ぶら下げて個別化すれば、俺たちに勝てるってか?なめんな!」

「余裕丸出しなの、絶対後悔させてやるよ！」

それから、風子と土門と小金井は意気込みを口にする。

「一介の高校生達が此処まで決心するとは」

「こりゃ・・・俺っち達も踏ん張り時っすねぇ」

そのようすを見守るバットと吹雪。

そして、

――ガッッ！――

皆は円形に並んで拳を互いにぶつけあった。

（ククク・・・・・来い・・・死にに来い・・・一人一人狩ってくれようぞ、火影！個人的には貴様等には償いをしてもらわねばな・・・・・復讐だ・・・・・・！）

マント男は邪悪な意思を漂わせまくりの状態で姿を消した。

（地獄へ堕ちろ・・・！）

新生火影忍軍。

敵軍の本城たるＳＯＤＯＭに侵入成功。

天守閣への活路を切り開く為の死闘遊戯が開始された！

SODOMとチェリオとCDデータ（後書き）

次回、仮面ライダーブライ

怪力コンビと音遠の愛情と再来するオカマ

凍空吹雪
所有刀：賊刀『鎧』と双刀『鎚』

バットダーク
所有刀：悪刀『鐚』

怪力コンビと音速の愛情と再来するオカマ（前書き）

仮面ライダーブライ！
前回の三つの出来事は！

一つ！新生火影とブライ一同は、敵の要塞都市ＳＯＤＯＭに到達！

二つ！新ライダー・チェリオの登場！

そして三つ！ＳＯＤＯＭの中枢へ進入すべく、五枚のＣＤを捜索することとなった！

怪力コンビと音速の愛情と再来するオカマ

A地区の格納庫。
そこには皆と第一の分岐にて別れた土門の吹雪が居た。

「なんか暇だな」
「そうっすね」

適当に其の場凌ぎの会話で場を繋ぎながら進んでいく。
すると次第に格納庫らしき建物が見えてきた。

二人は中に進入していく。
格納庫の内部は会社のビルのような構造でエスカレーターや受付席などがあった。

「たのもう!!」

と、土門が大声を張り上げるが、返答するものは誰一人として居ない。

「人っ子一人いない・・・・・・ってわけじゃなさそうっすね」

吹雪はそういうと、手に持って肩で担いでいた『鎚』を構えて、

「そらよ!」

エスカレーター近くの柱にぶん投げた。
勿論『鎚』の重量と吹雪の怪力による投球速度もあいまってトンデモないことになったが。

「驚いた。石島土門以上の怪力がいるなんて」
「火影と他勢力もここに乗り込んでたのね」
活発そうな短髪の少女に一見大人しげな黒髪の少女。
「誰っすか？」
「こいつらは麗（音）に所属していた亜希（あき）と魅希（みき）だよ」
土門は簡潔に説明した。
「あぁ。報告にが聞いてたっすけど、ホントにここに来てたんすね。
でも・・・本当に俺っちらに勝てるんすかね？」
確かに単調な戦闘力なら土門と吹雪のほうが上だろう。
「嘗めるな！」
亜希は叫ぶように告げて、一瞬で吹雪の背後に回りこんだ。
「フン！」
両手で作ったハンマーで吹雪を殴ろうとするも、
――グァァァン！！――
「イッッタァァイ！！」
逆に手を傷める亜希。

「へへへ。仮にもあの四季崎が防御を要としてつくった『鎧』が、そんな一撃でビクつくわけないっすよ」

――ガシッ――

吹雪は亜希の体を掴み、

「キャア！！」

――バシンッ！――

床に叩き付けた。

「さて、えっと・・・・・・魅希でしたっけか？この子も捕まえたことですし、平和的な会話をしませんかね？」

「ふ、ふざけるな！誰がお前らと！」

吹雪の平な口調に魅希は苛立ちを覚えた。

「ほほぅ」

吹雪は何を思ったか、双刀『鎚』を亜希の直ぐ横へと、

――ズスィィィイイィィィィン！！！！――

落とした。

結果、地面へと自重だけでめり込んだ『鎚』の重量の規格外さと吹雪の怪力ぶりを、土門も魅希も亜希も強制認識してしまった。

吹雪は恐怖で動けなくなった亜希にお構いなく、地面にまでめり込んだ双刀を軽々と拾い上げてこういった。

「ＹＥＳ　ｏｒ　ＮＯ？」

脅迫という言葉が三人のなかで浮かんだ。

「・・・・・わかったわ。だから亜希を放して」

「交渉成立っすね」

吹雪は素直に亜希から離れた。

「にしても、お前らがここに居るってことは・・・・・」

「あの十神衆の一人もここにいるんすか？」

土門と吹雪は素朴な疑問を投げかけた。

そして、その返答は当然のように決まっていた。

「・・・この施設は大きく分けてＡ棟とＢ棟の二つある。一つは私たちのいるここ！もう一つにはお姉さまが向った。紅麗様の憎むべき敵、森光蘭を討つ手がかりを探すためにね」

「五枚のディスクか・・・・・その情報を得たことでお前らと組んだ必然性ができた」

亜希と魅希がそういうと、

「そりゃ良かったっすよ。でもお二人さん。このまま「わかってる。あんたらとは一時休戦よ」――ＯＫ！共闘っすね！」

エスカレーターで移動しながら会話する四人。
いや、吹雪だけは表現的に不適切だ。

まず吹雪はエスカレーターに乗っていない。双刀『鎚』の重量面を考慮し、『鎚』を上の階にぶん投げた直後に自分も上の階にジャンプして『鎚』を受け止め、またそれを繰り返して上に昇っていた。
というかどうやって会話を成立させていたのかが不思議な構図だった。

「漸く六階。この上への道は・・・？」

少し歩いて別の昇りエスカレーター・階段・エレベーターを探していると、

「きたきたァ！！敵よ、クルミーーッ！！」
「そうねミルク！おそーじしてて良かったね♪」

「「「「・・・・・・・・・・」」」」

二人のロリッ娘メイドがいました。

「よーこそおいでくださいマシタ！不束者ですがよろしくですぅ！」
（それって嫁入りの言葉じゃ・・・？）

ロリメイドの言葉に吹雪は首を傾げる。

「ミルクちゃんでぃーーす♪」
「クルミと申します」

元気でロングヘアなのがミルク、ショートヘアでそばかすなのがクルミらしい。

元気のいい二人の幼女メイドに対して、四人はなにやらヒソヒソと話し始める。

「オイオイなんだありゃ？ホントに敵か？」
「知るか！」
「ここにいる以上は只者じゃないでしょ」
「とりあえず話を聞いてみたらどうっすか？」

ってなわけで、

「あのー、君達は俺たちと戦うつもり？」

土門がクルミに聞いてみた。

「はい。そうだと思います」

――チャコン――

妙な音。
それはクルミの持ってたモップの末端の部品が外れて

――ボンッ！！――
――ヒュルルルル！――
――ドカァァン！！――

小型ミサイルが発射されて向こう側の壁を吹っ飛ばした。
最早銃刀法違反云々がノンスットップで破られまくってるこの裏の

闇世界であっても、こんなシュールな光景は早々お目にはできないだろう。

「おいでぇーーーっ♪ミクルちゃーん！」

ミルクが大声で呼ぶと、吹っ飛ばされた壁の向こう側から、

メイドっぽいカスタムを受けた、ゴツいロボがいました。
しかもミクルって・・・・・・完全に名前負けも良いところだ。

「否崩(いなくず)れ」

吹雪は一言呟き、

――ドゥウ！！――

ミクルが動いたと同時に全体重をかけて突進を行い、

――ガシュ！！――

鈍い音を立ててミクルと拮抗した。

「へー、おじさん力持ちなんだね」
（お、おじ・・・・・・！！？）

凍空吹雪・・・・・・まだ二十代前半の若者の心に釘が打たれた。

「でも無駄だよぉ？」

――ピピピっ――

ミルクとクルミはモップで何かを操作した。

すると、

――ガシャン！――

なんかミクルが変形して、

――ドドドドドド！！――

ミサイルを連発しだしました。

「おおお！！」

流石に驚いた吹雪は、思わず跳躍してミクルの背後に回りこんだ。

「手ぇ込んだロボットっすねぇぇ」

冷や汗を若干流していく吹雪。

「すごいねおじさん！そんな恰好してるのにジャンプできるなんて！」

しかしどこまでも幼稚なミルク。

そんな彼女らに対する吹雪は、

「すいませんが、こっちもこっちでやたらと時間かけてる暇はないんすよね。だから手っ取り早く済ませることにするっすよ」

吹雪は双刀を構えた。
最早技でもなんでもないが、一応演出的に・・・・・・
「横薙(よこな)ぎ」
文字通り、双刀『鎚』を右から左へと真横に振るった。
――バギィィィイィィィィン！！――
当然凍空一族の怪力によって振るわれる双刀『鎚』の威力は半端ではない。
故に、ミクルは見事なまでに真っ二つと化した。
「「ふぇ・・・・・・？？」」
ミルクとクルミは目の前の事象が信じられずに頓狂な声を出す。
ただ力任せに振るわれた石造りの刀一本で、軍用のロボットが粉砕されたのだから。
「そんじゃまぁ・・・お嬢さん方――この棟にはディスクは無さ気ですし、暫くの間大人しくして貰うっすよ」
そうして吹雪は、ミルクとクルミに拳骨を落とした。
「「ふぎゃ！！？」」
結果として一発で気絶する二人のロリメイド。

そんな光景を見ていた三人はというと

「なぁ？俺らって「それ以上は言わないで！」
「言ったら最期、虚しさしか残らないわよ」

すっかりお株を盗られて半ば空気化していましたとさ。

＊＊＊＊＊

片方の棟方面。
吹雪と土門＆亜希と魅希が第一の関門を突破した頃、もう一人が軍事特化したB棟の中枢に歩んでいた。

ゆっくりとした歩調をしていて、後ろ腰に提げた一対の刀がその存在感を増していた。
その女の名は、音遠（ねおん）。
紅麗の御身が為に在る麗十神衆の生き残りが一人。

重苦しい扉を開けた先には

「おや・・・これは意外な人物が入ってきた」

案内役をしていたマント男だった。

「やっぱり生きていたんだね、幻獣郎（げんじゅうろう）！」
「知能指数の低そうなお前でもきづいたか。ほめてやるわ・・・音

遠！」

マント男は身に纏ったフードつきマントを取り払い、本性を現した。
少しボロついた和服に細身をした老人、元麗十神衆が一人、幻獣郎。

「あの時、私はお前を殺した。そう思っていた」

あの時、とは裏武闘殺陣の際に、幻獣郎が紅麗に反逆すると言った上に烈火に負けた直後のことである。

「思えば迂闊だったよ。お前の能力を忘れていた。実体ありの幻影を生み出す別魅（わけみ）をね」

それは紅麗さえも真髄を引き出しきれなかった超高等術。
ある意味竜王の影分身と同類たる忍術であり法術である。

「バラバラになった死体の破片がすっかり消えてしまったことは後で聞いた。おめおめと逃げたお前を裏麗に捜索させたが見つからなかった。当然だね、既に奴らは森の実行部隊という本性を出していたのさ。恐らく、我等麗でも容易に踏み込めない森の城に匿われていたのだろう」

「その通り。リングを降りる際、ワシは別魅と摩り替わって逃げた。こんな面白そうなことが起きようとしている今、誰が死んでやるものか」

幻獣郎はそういって左腕の袖をめくった。
手首から先の部分が、眼も当てられない程に醜く豹変した異形の腕だった。

「この左腕をみよ！烈火に斬られたことで新たに生まれたこの腕を！森光蘭に与えられた力じゃ！」

烈火に斬られた、というより幻獣郎が八竜の刹那の逆鱗に触れたせいで焼き切られたというべきだろう。

もっとも、八竜の力を烈火から引き剥がして己が身に宿そうとした考えこそ、幻獣郎が紅麗への反逆を思いつき、烈火は刹那の力を得たきっかけでも在るのだが。

「知っておるか音遠！火影の最高の力をもつ魔導具は人と融合することで発動した！欲にまみれたただの人間だった森は自身が魔導具となった！ワシの考えは正しかったのだ！魔導具はただの武器にあらず！人体にも、その未知なる影響を与えるのだ！」

幻獣郎は研究成果をみせびらかすように喋りだす。

「そして森はこれからも楽しいものを造り、見せてくれるだろう。哀れな貴様はまだあんな糞餓鬼の犬になっているのか？それは、愛情か？」

「・・・・・・・・・」

音遠は聞かずに鞘に納刀していた磁双刀（じそうとう）という名の魔導具を抜刀する。

刃介が完成形変体刀等などを回収している数日の間、亜希と魅希と協力して裏武闘のドーム跡から発見したのだ。幸いな事に無傷の状態でだ。

「磁生の魔導具・・・・・センチメンタルな話だ。愛や情で戦う・・・だから貴様は頭が悪いのだ！紅麗（あの男）は貴様など必要としていない！駒だ、道具だ、消耗品だ！」

それは完全なる邪推だ。紅麗は音遠を愛しているからこそ堅気の世界に戻そうとした。刃介の問いかけへの答えどおり、”傍らに居られなくても守る為に”。
それがいかに双方の涙腺を刺激する選択かは十二分に分かった上で紅麗は音遠を手放した。これを愛と言わずしてなんと言うのであろうか？

「ただ・・・貴様と女という道具。抱いてもらったのか？あの間抜けめに？」

トドメとばかりに聞こえた幻獣郎の下卑た言葉に、音遠は表情を修羅に変えて、

――斬ッッ――

幻獣郎を六分割した。

「・・・そう感情的になるな・・・」

しかしそれは幻。

今度は本物が現れる。

「元は仲間じゃったろうが・・・クククククククク・・・」

――ブゥンブゥンブゥン・・・！！――

すると音遠の後ろで隔壁が開く音がしてきた。
開かれた隔壁からは球体に複数のカメラと簡素なマジックハンドと

脚部のついたロボットが数機でてくる。

「Ｖ（ブィ）－ＩＩ（ツー）という機兵じゃ。ＳＯＤＯＭのあらゆる場所においてある。・・・思えば紅麗率いる十神衆もバラバラになったものよのォ・・・・・まあ貴様と雷覇だけはいつまでもくっついとると思っていたがな」

冷静な幻獣郎の言葉とは裏腹に機兵らは次々と音遠に襲い掛かる。プログラムされたとおりの動きしかしない機械とはいえ、耐久力も数も音遠の数倍はある。

勝負は些か厳しいものとなっている。

「同じ女でもな・・・・・命にはまだ救いがあるわい。あれも頭は悪いが、身の振り方くらいは知っている。体を使ってこちら側へ入った賢しい女よ」

すると幻獣郎は糸目になっていた目を少し開き、息を荒くしながら、

「貴様もワシの夜伽をするならばなんとかしてやらんでもないぞ？正直・・・ワシはお前の美しさは嫌いではない。紅麗にくれてやるにはもったいない女じゃ」

この上なく下品で卑劣な誘いをかけてくる幻獣郎に対し、音遠は冷淡にこういった。

中傷云々を織り交ぜた薄い笑顔で。

「使い物になるのかい？まさかアレまで森にもらったなんていうのかしら？」

その表情は、思い切り嘲笑う、という言葉を凝縮したものだった。

「馬鹿・・・女が・・・・・・・・！！殺せぇぇええ！！」

多重的にプライドを粉砕された幻獣郎は、ヤケクソ気味に叫んだ。
その瞬間に機兵らが突撃する――――

――――筈だった。

「フンガァーーーッ！！」

土門の怒りの拳が機兵をぶん殴っていた。

「縦薙(たてな)ぎ」

そして吹雪が上から下へと双刀を振り下ろしていた。

「い、石島・・・土門？それにもう一人？」

音遠は意外な人物らの登場に内心驚いた。

「このロボットらはお任せ下さいお姉さま！！」
「今はこの怪力コンビは味方です！！」

と、亜希と魅希が伝えた。

「馬鹿な！？なぜ火影と麗が共闘を！？しかも・・・ミクルまで倒してきたのか！！」

幻獣郎は打って変わっての大ピンチ。

「じょ・・・冗談ではない！ワシにはまだやるべきことが、見るべき物がある！こんなところで・・・・・・こんなところで死ぬわけにはいかん！ワシはまだ此の世に必要とされている！！」

あくまでその得たいのしれない術を世の為人の為に使っていたら、の話だが。

――バチッ！！――

「ぎゃふぁ・・・こ、これは・・・」

なにかが幻獣郎の逃亡を拒んだ。

「結界！？」

「お前も迂闊だった。私の能力を忘れていた」

それは音遠が展開したものだった。

「烈火が瑪瑙（めのう）と戦っていたとき、この力で助けてやったのは誰だったかね？」

瑪瑙というのは烈火が戦った女子高生の名で、幻獣郎に父親の命を盾にされて従わされ、魔導具・式髪を埋め込まれて頭髪を用いた戦闘を強いられていたが、烈火の活躍で全ての呪縛から解放された。

「さらに言わせて貰えば、森こそお前など必要としていない。駒だ、道具だ、消耗品だ」

音遠は磁双刀を構えて、誇りに満ちた綺麗な顔で、

「私は紅麗様を愛するが故に戦う！たとえ必要とされずとも、この気持ちが変わることはない！」

己の存在意義を発言したのだ。

「永遠に――――」

一言がつむがれた際、幻獣郎の体は真っ二つになった。

そしてその直後に、奴の五体と五臓六腑は多数に分割されていった。

二度と復活することなど夢にも思わないほど、残酷なほどにだ。

「紅麗様に仇なす者は、この私が決して許さない。今度こそ、永遠（とわ）を彷徨え！」

＊＊＊＊＊

ウェポンドーム。

そこには一人のモヒカンでオカマでサイボーグなアホがいた。

「フンフン♪フンフーン～～♪」

イヤホンでなにやら音楽を聴いてるのは、神威。

ここの番人は彼のようだ。

「フンフ・・・あ！！」

途中でイヤホンを外し、神威はモニターの片隅にうつった人影を発見。

「来たぁ！」

そのあとの絶望感も知らずに。

「薫ゥゥウウウ！！会いたかった！会いたかったわぁぁあああぁぁぁあああ！！！私、帰ってきたのよ！！あなたに、あなたにもう一度会いたくて！！」

大音量で声を張り上げる。

「あなたとカッパちゃんとの美しくも儚く甘い思い出（メモリー）・・・・・・忘れることなんてできなかった。カッパちゃんは死んじゃったって聞いた時はショックだったわ・・・・・・でもあなたはまだ生きてる！！」

どこをどうすればアレが美しく儚く甘い、に豹変するのであろうか。

「ムネが苦しいわ・・・・・・あふ・・・カオリン・・・」

――パシュ・・・――

扉が開いた。

「！！」

期待感ＭＡＸで神威は精一杯の持て成しをしようとした。
だが、

来たのは烈火と刃介だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
→
なんかもう暗黒。

「・・・・・なんか悪い事したか？」
「いや、あんな気色悪い方法だったから小金井の奴・・・・・・」

――ここには入りたくない！！ヤダヤダヤダヤダヤダヤダーーーっ！！！――

皆さん。もし目の前の液晶画面に、

ＣＯＭＥ　ＯＮ！！！！
＞ＫＡＯＲＵ

ＫＡＯＲＵ　ＫＡＯＲＵ　ＫＡＯＲＵ　ＫＡＯＲＵ
ＫＡＯＲＵ　ＫＡＯＲＵ　ＫＡＯＲＵ　ＫＡＯＲＵ
ＫＡＯＲＵ　ＫＡＯＲＵ　ＫＡＯＲＵ　ＫＡＯＲＵ
ＫＡＯＲＵ　ＫＡＯＲＵ　ＫＡＯＲＵ　ＫＡＯＲＵ
ＫＡＯＲＵ　ＫＡＯＲＵ　ＫＡＯＲＵ　ＫＡＯＲＵ
ＫＡＯＲＵ　ＫＡＯＲＵ　ＫＡＯＲＵ　ＫＡＯＲＵ
ＫＡＯＲＵ　ＫＡＯＲＵ　ＫＡＯＲＵ　ＫＡＯＲＵ

KAORU　KAORU　KAORU　KAORU　KAORU
KAORU　KAORU　KAORU　KAORU

こんな感じで・・・・・・・普通は嫌がる。
もはやストーカー云々ではすまない気がしてくる上、心当たりがある分余計にイヤだ。
もし作者（ラージ）なら、命の安全と身の安全が保証されていて尚且つ凄まじい特典が無い限りは、絶対に拒絶まっしぐらだ。

――ズガーーーン！！！――

神威のハートが砕け散った。

「そんな・・・そんな・・・・・・」
「「・・・・・・・・・・」」
→
オカマの扱いに困る二人。

（あの美しい思い出は・・・思い・・・・・・）

そこで神威は思い出した。かなり余計な事項を。

「・・・・・・・・あなた・・・・・・名前は？」
「花菱烈火。火影だ！」
「我刀流二十代目当主の鋼刃介」

二人は問われて自己紹介する。

薫に”好きなんだよね”と言わせた者がここにいた。

「あーーーら・・・・・・・そう・・・・・・・！」

メチャクチャ不吉な笑顔の直後、

「このガキャアアァァアア！！！！」

腹部から特大のガトリング砲をだした。
そこのサイボーグ猫かと思わん勢いで。

――ズガガガガガガガガガガガ！！！！！――

途切れなく発射されていく弾丸の嵐。

「「！！？」」

二人は乱射ではもう片付けられないその攻撃に驚き、とっさに弾幕の中に隠れた。
勿論神威とてバカじゃない。

「そう簡単に・・・！」

腕から業物の刃物を飛び出させ、弾幕のなかにいる烈火の影を発見する。

「いくとは思ってないわよォーーー！！」
「そうかよ、変身！！」

烈火に斬りかかろうとする神威の前に、ベルトを装着した万全状態

の刃介が躍り出て、ローグスキャナーでコアを読み取った。

≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＥＮＢＡ≫

≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！ＲＩＯＴＥ！ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！≫

ブライ・リオテコンボに変身すると同時に魔刀を手にとって神威の武器を受け止めた上、それを逆に切り裂いた。

「お前なんなんだよ？」

「・・・花菱烈火・・・お前ね？私のカオリンを・・・・・・誘惑するサルは、お前のなのね！？」

「鏡花水月（きょうかすいげつ）！！」

「ゲフっっ！！」

ヒステリックに喋る神威に対してブライは虚刀流最速とされる掌打の一撃を喰らわせた。

「まぁさ、なんのことはか知りたくもないが、ディスク持ってるなら寄越しやがれ。このオカマサイボーグ」

ブライは刀の切っ先を神威に向けて冷酷に言い放つ。

「ウフフフ・・・・・報告以上の戦闘力ね。でもだからといっては私は花菱烈火を認めない！カオリンが認めて私は絶対に認めてやらない！！」

神威は左手から飛び出させた役に立たなくなった武器を捨てて一直線に走った。

ドームの奥深くへと。

「オホホホホホホ！！」

出しながら走っていく神威。

「待ちやがれこの野郎！！」

「あの性格・・・・・小金井（クソガキ）が嫌悪しまくるのも頷けるぜ」

烈火とブライは跡を追うべく走った。

その先には何も無い部屋があった。

いや、何も無いわけじゃない。隠されているのだ。

この建物の名前はウェポンドーム。

――ガコンッ――

――バンッ！――

「「うお！？」」

部屋の壁にも天井にも床にも、

――ガコッ！ガコッ！ガコッ！――

――ドン！ドン！――

気づけば四方八方を据え置き型の銃火器と光学兵器が二人と一機を狙っていた。

『ハァ～～～イ♪ひっかかったわね、ベェ～～イヴェッ！！チェ～～～ックメェェェイト！！』

どこぞかのスピーカーから聞こえてくる神威のオカマ口調。

『今・・・私はこのドームの心臓部と結合した！私の思考でこのドームの火器は動くってことよ。このウェポンドーム自体が私となっている！貴方達は私の中でくたばるのよ！』

神威の自信を裏付けるようにご大層な銃火器らが並べられているこの部屋で、ブライはその銃火器と光学へいき全てを見据える。

「花菱・・・前面部分の銃火器は俺がやる。お前は背後にあるの全部おとせ」

「・・・わかった、やってやろうじゃねぇか！」

『オホホホ！！この状況じゃ蜂の巣になる以外に道はないわよ！恋敵、死んでぇ！！』

――ズダダダダダダ！！――

――ビュンビュンビュン！！――

狂い舞うように連射される銃弾とレーザー。

それらが狙う先には烈火とブライ。

誰もがここで木っ端微塵なＤＥＡＤ　ＥＮＤを予想するだろうがそうはいかない。

「陸式”型無の塁”！幻炎！！」

命中したのは幻惑の像だけで、本体は無事だ。

（あれが噂の火竜！？炎術士烈火の力！！？）

神威は初めてみる炎の竜に戦慄する。
そして

≪ＹＡＭＡＮＥＫＯ・ＪＡＧＵＡＲ・ＳＭＩＬＯＤＯＮ≫
≪ＹＡＪＡ・ＹＡＪＡ！ＹＡＪＡＧＵＡＤＯＮ！≫

「ウォォオオォォォアアアア！！！！」
「うわッ！眩しい！！」

ブライ・ヤジャガドンコンボの全身から放たれる攻撃性の光線・ワイルディーザーによって、彼の宣言どおりに据え置き型の武器たちが次々と破壊されていく。
その際の凄まじい光量に思わず烈火は目をふさいでしまうほどだ。

（うぅぅうう！！）

一方で神威は心臓部と接続していた武器たちが破壊されたことでフィードバックを受けてダメージを受けていた。
簡単に言うと汎用人型決戦兵器のシンクロ操縦と同じみたいなもんだ。

「おぉぉおおお！！」

そこへ烈火が大声を張り上げて力を搾り出した。
以前烈火は火竜を同時に二体呼び出して様々な攻撃法を生み出したが、今回はその比ではない。

――火竜には火竜の出現律が存在する！術者の精神力によっては、二匹以上だすことも不可能ではないのじゃ！！全ては・・・主の力次第――

それが虚空の言葉だった。

「おおおおおおお！！」

烈火は声を出しながら空中に指で三つの文字を描く。

焔、砕、崩の三文字を。

『『『ーーーーーーッッッ！！！』』』

焔群、砕羽、崩の三匹が同時召喚された。

「こいつは中々・・・・・・」

『あれが噂の火竜！？』

ブライはともかく、神威は心底驚いた。

『でも・・・・・ちょっとまって！！三匹だせるなんて聞いた事ないわよ！？』

データにない事象に困惑するが、烈火は待ってはくれない。

「・・・よし・・・」

小さく呟いた烈火は意を決したふうに表情を固定した。

すると三匹の竜たちは互いに互いの体を複雑に絡ませあい始めた。

『きゃッ・・・。・・・・・・！何よ・・・あれ？』

神威は一瞬、激しい閃光に視界を奪われたがすぐに回復し、トンデ

モないものを見てしまった。

そこには、三つ首の火竜がいたのだ。

『火竜が一つになった!?これは・・・・・なんかヤバいわ!!ウェポンドーム!!』

神威は残った兵器全ての標準を定める。

『目標捕捉!!花菱烈火とブライ!!撃て!!』

本来なら命令と同時に近代兵器たちの総攻撃の嵐となっていただろう。

だが烈火はそれが始まる直前に、

――ドンッ!ドンッ!ドガァン!ズバァン!――

全ての兵器(ユニット)を残さず破壊した。

高熱火炎によって生まれた弾炎から飛び出した無数の刃。

それも鎖鎌のように変幻自在な軌道を描く炎刃がドームないの全てを斬る。

『そ・・・んな・・・速過ぎ・・・・・・がッ!!あぁあぁあぁあぁ!!!』

一斉に武器が破壊されたことにより、システムエラーが重大なレベルで発生する。

『まるで・・・体の中で暴れ回る病原菌ね・・・とんでもない奴らだわ・・・』

神威はか細い声を出していると、小金井が言っていた台詞が思い出される。

――俺なんかに負けてちゃ、烈火兄ちゃんは殺せないぜ――

（そうね・・・カオル・・・くやしいわ・・・）

体中に発生したエラーの影響で、全身の接続部分が小さく爆発しながら、自分に迫り来る死を受け入れようとした時、

――カッ！――

痛みがスッと消え去った。

なぜなら、烈火が神威のところにまで来て、砕羽の炎刃で神威とドームを接続するコードを全て焼き切ったからだ。それをガラスを破ってまでだ。

「・・・・・・・・・あ・・・あんた・・・なんで助けるの？敵を・・・」

神威は当然の疑問を投げかける。

「俺たちは人殺しはしねーんだ。小金井だってそうだったろ？」

「チョコパフェくらい甘いなお前ら」

烈火の言葉にブライが呆れていると、

（あ・・・／／／）

なにかが神威のなかに芽生えた。

（こんな・・・機械だらけの私を人間として見てくれるの？何・・・こいつ・・・・・なんか・・・カオリンが「好き」って言ったのがわかる・・・わかる気がする！烈火・・・・・・花菱烈火・・・・・！！）

結果として・・・！

（この胸の高鳴りは・・・・・・・・・恋！？）

そして・・・！

「烈火くん！！許されないのはわかってる！！でも・・・でもね！」

「その気無し！！！」

――ドガァァン！！――

烈火のアッパーカットが綺麗に決まった。

「色んな意味でオメーは危ないからな！暫くそーやって寝てないさい！」

「とりあえず追って来ないように、コイツで縛っとくか」

（・・・・・私に残されている生身の部分・・・・・・脳髄とハートがうずいてるわ・・・・・・・・・カオリンといい烈火君とい

い、最後まで手厳しいのね。またフラれちゃった。・・・・・・そして――――）

――ビリビリビリビリッッ！！――

（貴方だけは好きになれそうにないわね、鋼刃介！！）

自分の体に巻きついて電流を放出している電気ウナギカンドロイド三機を置いていったブライに、神威は心の雄叫びを上げていた。
まあ、結果としては刃介はキモいオカマサイボーグによるイベントから永久除外されただけでも良しとしよう。

そして、烈火とブライが次の場所に映ろうとした時、

『あれからまた強くなったねェ烈火ぁ・・・・・・・・・・・』

スピーカーから神威とは違う別の男の声が響いた。

『イヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ』
「この・・・・・・声・・・！」

導き出される人物はたった一人だった。

「木蓮か。このドームのどこかにいるな？」
「木蓮？ああ・・・七実にやられた三下か」
『くッ・・・・・・ああ、そうだよ』

木蓮は気分を害したように喋りだす。

『思えば初めて会ってから色々とあったなぁ烈火・・・・・・・・・・俺の人生の中でお前だけは忘れられねぇ存在になったよ。小金井・・・水鏡・・・風子・・・土門・・・全員殺意の対象だがね・・・やはり花菱烈火は別格だよ』

木蓮はスピーカー越しの低く重苦しい声音で喋り続ける。

『奥までやってこい、烈火・・・・・・殺してやる。面白いヤミーと一緒になって、そこのブライも一緒にブッ殺してやるよ。――――俺とテメェの最後の殺し合いだ!!』

静かな声音が途中で一変し、純粋な殺意は憎悪に穢れた殺意へと変わった。

怪力コンビと音速の愛情と再来するオカマ（後書き）

次回、仮面ライダーブライ

金女と牙石王と年長美女

金女と牙石王と年長美女（前書き）

仮面ライダーブライ！
前回の三つの出来事！

一つ！土門と吹雪の二人が第一の刺客を突破！

二つ！十神衆の音遠が幻獣郎を葬り、紅麗への揺ぎ無い愛情を告白する！

そして三つ！ブライと烈火は、ウェポンドームで神威を撃退した！

金女と牙石王と年長美女

ここはピラミッドらしき建物の周辺の林の中。
ブライ＆烈火ＶＳ神威が勃発している頃、一人の忍者はある悲鳴を聞いた。

「きゃあああぁぁぁああああ！！！」
「おや？」

悲鳴を聞きつけた彼女は林の中にいる者の素性を確かめるべく、そこへ向った。
もっともこの場所に居る時点で一般人ではないという確信もあったが。

「風神・・・！鎌鼬！！」

――ビュウウゥゥウウゥゥゥゥン！！――

そこへ現れた一人の少女が、右手につけた奇妙な魔導具（アクセサリー）から空気の刃を放って、悲鳴を上げた人物を助けた。

「不失（うせず）――それが風神の本来の力ですか。もし予備玉と核が一緒だったら台風も楽に引き起こせたでしょうね」
「誰よ！？」

風神の少女、霧沢風子は近づいてきた女忍者に警戒する。
女忍者は風子が破壊したロボットの残骸たちに目をやりながら答える。

「不恐（おそれず）――怖がることはありません。私はシルフィード会長の依頼によってあなた方の補助に参りました」
「え・・・？じゃあ、あんたが最後の一人？」
「はい。鋼金女と申します」
「は、鋼って・・・まさか・・・！？」
「あのー・・・・・・・」

二人の会話に割り込んだのは、先ほど助けられた人物。

「助けてくれてありがとう・・・」

長い黒髪で眼鏡をかけた気の弱そうな少女だった。

あの場所に長居する用もないので、三人はピラミッドの中へと入っていった。
中に入り、奥へと進む階段通路を歩んでいく。

「私は実験用モルモットと呼ばれてました。周りに見えたのは沢山のカプセルとその中に入った沢山の人間・・・生まれたばかりの子供も・・・老人も・・・男も・・・女も・・・外国人もいました」

少女は語りだす。

「一日ごとにその人間達はヒトでなくなっていった・・・今日は私じゃなかった・・・明日かも・・・その次の日？と毎日カプセルの中で怯えていた」
（なるほど、ここまでは嘘を言ってないようで。もっとも、一部分を除外して・・・）

金女は忍者として少女の言葉の虚実を区別する。

「ある日、一つのカプセルから怪物になった人が暴走したの。他のカプセルを壊して・・・室内を破壊して回って、最後は処分されてしまった。運良くカプセルが壊れた私は隙を見て外に逃げたわ。でも外で警備ロボットに見つかって・・・」

少女は言葉を区切ると、

「ありがとう!!あなたは命の恩人よ!!あのままだったらきっと私・・・・・・」

と風子の手を握って感謝する。

・・・・・・と思ったら今度はいきなり柱に隠れた。

「貴女達・・・何者?」

「火影くの一、霧沢風子!ここの悪い奴ブッ潰しにきたの」

「私は相生(あいおい)の鋼金女。とある会長の依頼でアホ共を斬り捨てにきました」

「・・・・・・警察の人?」

「「どこが?」」

この少女、意外と天然だ。

そうして歩いていると、何時しか広い一室にたどり着いていた。

もっともその部屋の中央には象形文字が書かれた石棺が置かれているのだが。

すると金女が前にでてこういった。

「言っておきますが、この場に敵が不出（いでず）なんてのは皆無でしょうが、それでも構いませんね霧沢さん？」
「私はいいけどさ・・・・・・ねぇあんたやっぱり外にいたら？」
「やだ・・・一人は怖い」
風子は少女に進言するも、少女は怯えながら拒否する。
「でしたら精々足手纏いにはならないでくださいね」
金女は忍装束から八つの苦無を取り出し、指の間の挟んで投げつけた。
ヒュンヒュン！という風を切る音を立てながら進む苦無らは石棺に命中し、刃先が刺さった。
そして、その苦無にはある物が仕込まれていた。
少し細めな糸に火が一気に導火線を伝って爆走していき、
――ドガァァアアァァン！！――
八つの苦無は爆発し、石棺を吹っ飛ばしてしまった。
「さて、起きてくださいな」
金女は家族を起床させるような風に言った。
石棺の中には何かが入っていた。
そしてそれは一気に態勢を変えて立ち上がったのだ。
全身を紙の包帯で巻きつくしたその姿は正しくミイラ男。

「火影の霧沢風子に・・・・・・あとは、誰だお前？」

ミイラ男はゆっくりと訊いた。

「いやぁぁあああ！！なにこの人！？」

「外出ろといっただろうが！！」

モロに怖がる少女に風子が怒鳴っていると、

――シュルッ――

ミイラ男は包帯を伸ばした。

「危ない」

――パシュ――

それを金女が敢て受け止め、腕に包帯を巻きつけられた。

「こ、この技・・・！」

風子は自分の身代わりになってくれた金女に内心感謝しながら、敵の能力をつかんだ。

ミイラ男は自供するように舌をだして口内にあるものをだした。

「やっぱり、最澄とおなじ式紙！陽炎が魔導具一つだけでもあれば、量産されたものもあるって言ってたけど・・・・・・」

「ほう・・・俺のほかにもこの魔導具の使い手がいたか」

ミイラ男は何時の間にか紙の包帯に油を染み込ませている。
最初から仕込んでいたとしか思えないような染み具合だ。

「ならそいつは、こんな使い方をしてたか？」

ミイラ男はライターの火を包帯に近づけて、

――ボォォォン！！――

着火した。従ってその先にある、金女の体に巻きついた包帯にも火が行き届く。
しかしミイラ男のほうは安全策があるのか被害無しだ。

「俺の名は搦（カラメ）！死四天・門都様の配下、式紙使い！」
「かっ・・・金女さん！！」
「大丈夫だよ、きっと」

慌てる少女に対して風子は冷静だった。

「変身」

――パカッ――

その瞬間、金女は全身に装甲を纏って変身していた。
忍者ライダー・チェリオへと！

「ッッ！？・・・え、え・・・えぇぇぇえ！？」
「あいつの妹っていうから、想像はしてたけど、これは・・・！」
「な、何者なんだ貴様！？」

三者三様の反応。

――チャキッ――

チェリオは気にも留めずに両サイドバックルに提げている二振りの忍者刀・忍刀（ニントウ）『鎖（クサリ）』を抜刀する。

「不忍（しのばず）」

そして戦いが開始された。

「破ッッ！！」

チェリオは忍刀を巧みに振るい、搦を圧倒する。

「くッ・・・！」

チェリオの実力が自分を上回っていることを剣戟だけで悟った搦は少し悔しげな声を出す。

「相生剣法だけで渡り合える所からすると、貴方が番人であるこの場所にはＣＤデータはダミーですかね」

「ふん・・・言っておくがお前らはもう逃げられないぞ。調子に乗りすぎたんだ！」

「負け惜しみですか？」

「それもあるが一応聞いとけ。我が君主の門都様は既に動かれている。死四天も全員動くことになるだろう」

搦は自分の敗北を背負った上で語る。

「それは確か、ここの最上級幹部でしたね」
「そうだ。門都様に、葵、綺理斗、蛭湖の四人さ。今現在の裏麗を統括する四人の首領！戦闘能力は桁外れだ！」
（まるで真庭忍軍の変形版ですね・・・・・・）
チェリオは些かここの組織制になんともいえない感情をいだく。
「その中で最も私が恐ろしいと思うお方こそ門都様！まぁ・・・・・・他の連中は会ったことも無いから、良く知らんが・・・・・・例えお前らの力と言えども勝てるかどうかの力量だ。だから、私は慈悲深――バシッ！！――いぃ！！？」
喋ってる途中の捌の首筋に、チェリオが突然背後に回りこんでチョップをかましていた。
「不面白（おもしろからず）――話が長い上にメンドさいので背弄拳（はいろうけん）でキメちゃいましたが、もう少し聞くべきだったのでしょうか・・・？――まぁでも、これだけはいえますね」
チェリオは倒れる捌にこう宣言する。
「今も未来も、『師匠』以上に大きな背中はありません」
胸を張ってそう口にした瞬間、
「キャアアァァァアア！！」
「こいつ、ヤミー！？」
『カナカナカナカナ』

昆虫系ヤミーの一種、ヒグラシヤミーが現れる。

「おや、こんなトコにヤミーが出張ってくるとは、あながち外れではありませんでしたね」

チェリオはそう言いながら忍刀『鎖』を握りなおす。

――ジャキッ！――

さらに半円形の鍔を一回転させる。

「お二方、ちょっと避けてくださいね」

「「え？」」

次の瞬間、

――ジャリリリリリリリ！！――

忍刀『鎖』の刀身は一気に伸び、名前通り鎖のような軌道を描き、連結刃というもう一つの姿で攻撃し、ヒグラシヤミーの身をそいでセルメダルを落させた。

『か、カ・・・カァァナカナカナカナカナカナァァ！！』

ヒグラシヤミーは昆虫系の人サイズにしては珍しく知能が低いのか、ただただ鳴き喚く。

その際にヒグラシヤミーの口から放たれた怪音波で壁や天井の一部が破壊されてもチェリオは全然気にしない。

「次で仕上げです」

チェリオはそういうと、二本忍刀を合体させて一本の両刃大剣とした。
そうすることで出来上がった硬貨投入口（メダルインジェクション）に６枚のセルメダルを投入した。

――シュリ・・・！――

忍刀『鎖』の鍔を刀身にまで持っていって研磨するようにして刃先まで持って行き、そして一気に下ろしていった。

≪ＣＥＬＬ　ＢＵＲＳＴ≫

発動するセルバースト。
チェリオは柄を両手で握って構えると、

「忍刀両断（にんとうりょうだん）・・・・・・！！」

――ザシュ！！――

『カァァナァァアア！！』

ヒグラシヤミーはその斬撃によって爆発して数十枚のセルメダルへと還元された。

≪ＡＮＴＯＵ・ＫＡＭＡ≫

「回収回収っと」

チェリオは忍刀を鞘に納めると、暗刀『鎌』を装備してセルメダル

を回収。
持ってきていた大型アタッシュケースに詰めた。

「ん～～、次の戦いで一気に消費しないとそろそろ溢れそうですね」

とか言いながらケースを閉じて変身を解いた。

「では二人共、先を急ぎましょう」

覆面で隠されたせいもあって表情は今一読み取れないが、多分金女は真顔でその台詞を言ったのだろう。そしてアタッシュケースを手に先へズカズカと進んでいく。

「（こりゃスゴイ援軍がきたもんだ）」

「あ、あの・・・」

風子が金女（チェリオ）の実力に高評価をしていると、少女がごにょごにょと話しかけてくる。

「一緒に行かなくていいんですか？」

「あ、ヤベッ・・・！」

指摘されて慌て気味に金女を追いかける風子の姿に、少女はクスクスと歳相応の笑顔で微笑んだ。

＊＊＊＊＊

一方で、小金井と組んで行動していたバットはある男の大規模な攻撃を受けかけた。
弟が死ぬ要因である火影と、そして復讐を邪魔した者に全ての憎悪を向ける一人の男。
男の名は――――牙王！

彼の攻撃によって、二人が目指していたバイオノイドドームは粉砕され、小金井とバットは瓦礫の下敷き状態にされた。

「よいしょっと！」
「あ、危なかったぁ」

もっとも、とっとと瓦礫をどけて立ち上がっているが。

「へ・・・・・・へへへへ・・・生きてる・・・・・・生きてやがる！いいぜぇ！！」

――バゴッッ！！――

二人の眼前には牙王がいて、口には革製のマスクをした状態で居た。
さらには素手の握力だけで石を砕くなんてことをしている。

「テメェェらぁぁぁぁぁ！！答えてもらうぜ！！」

牙王は一気に距離をつめて二人の体を手にした長い棒で叩き殴ろうとする。

「土門と我刀流はどこだァァァ！！」

攻撃こそはかわされているが、その威力はかなり激しく、岩や瓦礫を容易に叩き割っていく。

「お黙りなさい」

――バギッ！――

「ぐぼぁ！？」

バットの拳が腹に決まった。

軽く吹っ飛ぶ牙王の体。それと同時に懐から零れ落ちていくものがあった。

「チョコを大量常備・・・・・・そして予備（スペア）と思われる魔導具・石棍。貴方が牙王ですか」

「あぁ・・・そうだよ。我刀流に敗北したあの日以来、俺は一口もチョコを喰っていない。ビターやミルク味やストリベリーにホワイトといった大量のチョコを前にした状態でそれを敢て喰わねぇ！自らを封印する事で攻撃性と残虐性を極限まで高めようと思ってなァ！！」

牙王は地面に転がるチョコを見ることなく説明しだす。

「そしてあの野郎どもを殺した時こそ・・・俺は好きなだけチョコを喰えるというルールを自分に課した！心理的にいう報酬効果ってやつだ！餓える・・・餓えるぜぇぇ・・・！」

牙王は嫌な汗をかいた顔でそこまでいうと、

「人間は何かをしてぇから頑張れんのさァァ！！」

思い切り心の内のマグマを解放した。
それと同時に地面から岩の腕が形成されて二人に襲い掛かろうとする。

が、

――バギン！！――

岩の腕は砕かれた。

「参之型”極”――大鋏」

それは、鋼金暗器を一瞬で変型させた小金井によるものだった。

「お前は一生土門兄ちゃんと鋼兄ちゃんに会えない。ここで負けるんだ」

「・・・・・カチンときたぜ。ムカつく・・・火影って奴らはみんなこうなのか？」

牙王は小金井の余裕振りが気に入らないようだ。

「知らしめてやるぜアホどもォ！餓えた体・・・餓えた心・・・！
極限まで追い詰められた人間の底力をなぁ！！」

――ガギガギガギガギガギガギガギガギガギ！！！！！――

大地は牙王の意のままに動き、全ての力を一点集中すべく、一つの

巨大な塊を生み出す。

――ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！！――

そして集められた石と岩は、その姿を現す。

一言でいうなら、それは――――

岩の巨人だった。

それもビルに匹敵しそうなほどの巨大さだ。

「喰いてぇ・・・・・・」

牙王はその巨人の体を昇っていき、あっと言う間に頭の上にまできた。

「腹の皮が破れるくらい・・・体中の血が砂糖みてぇに甘くなるくらい・・・チョコが喰いてぇぇ！！」

そして石棍を両手で持ち、

「おぶぉぉぉおおおおお！！！」

あらん限りの雄叫びを上げて石棍を巨人の頭上に突き立てた。

「で・・・デッケー・・・・・・」

「規格外ですね」

驚く小金井と冷静なバット。

「岩の大巨人”牙石王（がせきおう）”！！俺様が石棍の能力を最大限まで引き出

して編み出した採集奥義！！」

牙王は上からこちらを見下ろしている。

「精神状態を平常化させる為のチョコレートをあえて断つ事で、怒りを・・・殺意を・・・狂気を極限まで膨らませた！結果、今までは腕を造る程度の力がここまで強くなった！全ては弟の仇、土門を殺し、それを邪魔した我刀流に一矢報いる為！！お前ら火影を皆殺しにする為よォォオ！！」

牙王は叫びに叫び、牙石王を動かす。

牙石王は大きさが大きさのなので、踏みつけられただけでも致命傷になりかねない。

なので絶対に牙石王の両足では有効な攻撃はできない場所から攻めていくに限るだろう。

――ガギィィン！！――

鋼金暗器を壱之型に戻して斬撃を食らわせるも、

「かってぇ！！」

一切効果なし。

「そんな玩具効くか、馬鹿野郎ーーッ！！」

「小金井君よけて！！」

――ドガッ！――

「ぐ・・・ッッ」

牙石王の足がバットに直撃し、彼女の体が吹っ飛ばされる。

「イッテテ・・・・・・」

もっとも、体をさする余裕はあるらしい。

だが、

――ダダダダダダッッ！！――

何かが上から降ってきた。

「石の弾丸だ。逃がしはしねーよ。女のほうは良く知らんが、もう一人は裏切り者の小金井だったか・・・。てめぇらは今日！此処で！――死ね」

牙王は冷酷無比にそうはき捨てると、さらに大量の弾丸を撃ちだして二人を追い込む。

（全く・・・コイツを倒す手段はもはやたった一つ。しかしそれを実行できるのは・・・！）

バットは無表情のまま小金井を見た。

この勝負、金属製の武器を持つ小金井が一番、バットの考える策を実行するに値している。

「ぎゃはははははは！！よォし！てめぇらを殺したら四つ！四つだけチョコを食べていい御褒美を自分に与えよう！気合が入るぜ！グシャグシャにしてやらぁ！！」

牙王が暴言紛いな台詞を吐いていると、バットが小金井に近づき何かを呟きだした。

「小金井君、いいですか・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・・・・・・・・え？・・・・・・・・・あ、そうかっ！」

小金井はバットに教えられた策で、かつて紅麗から教わったことを思い出した。

自分のような小柄な人間でも大柄な人間を崩せる戦法を。

「いきますよ」

「おう！」

バットの合図と同時に二人は地を蹴った。

そして牙石王の足元に近づき、

――ガキィィン！！――

鋼金暗器で斬りつける。

「へっ！なにをするかと思えば！言ったはずだよなクソチビ！そんな玩具は効きゃしねってよ！！」

「そいつはどうでしょう？」

「チっ！心底苛立つなオイ！！特にその目つきがよぉぉ！！」

バットの物言いと何かを企んだ感じの目に不愉快さを感じた牙王は、牙石王の指から弾丸をさらに連射する。

しかしそれは不発と同じ結果と化す。

「鋼金暗器、弐之型”龍”！鎖鎌！！」

――ドスッ！――

一瞬で変型させると、鎌の部分を突き刺す。

少し話は変わるが、かつて麗予備軍に属していた小金井に、紅麗はこう説いたことがある。

――・・・・・いいか小金井。戦いにおいて、小さきものが大きな者を倒すということは決して不可能ではない。どんな人間も大地に根を張っている。引力というものが存在する以上、決して大地から逃れることはできない――

それはバットが考えていたものと同じだった。

――体を支える根を砕け。スピードを、バランスを、力を支える根・・・・・・・・・・足だ――

「四之型”三日月”武羽冥乱（ブーメラン）！！」

――ガゴォォ！！――

さらに変型を行い、今度も足を狙っていく。

「チョロチョロ動き回ってネズミみてぇな奴だな！！」

イラつきながら叫ぶ牙王。

「ふッ・・・ぐ・・・」

突然牙王が苦しみだす。

（餓える・・・・・・チョコレートの、禁断症状が・・・・・・！！もう少し・・・もう少しの辛抱だ！あと少しでこいつらを殺して四つだけ食って、次のエモノを・・・・・・・・・）

全ては可愛い弟の為。

牙王にとって唯一の肉親だった石王のため。

するとどうだろうか？

さっきまで荒い息をしていた牙王の表情はあっと言う間に鋭い狩人のものへと元通りだ。

（お前の仇を討つんだ！！見てろよ！この兄が・・・・・・無念を晴らす戦いを！！）

牙王の決心は正しく岩石の如く固い。

「くたばれ、前座共ォォ！！」

――ドゥガアァァァアアアア！！！！――

牙石王の渾身の拳が大地を揺るがした。

凄まじい衝撃によって地面は砕かれ、土煙であたりは充満する。

その時、小さな音を立てながら風が吹き、土煙が晴れていくと――

「「・・・・・・・・・・！！」」

そこには、確かな光を瞳に宿す小金井とバットの姿。

「堅固な物は一点を集中して狙え。水でも何れは岩に穴をあける。・・・五之型”暗”魔弓！」

――ドヒュ！！――

勢いあまる音が立ち、一本の黄金の矢が放たれた。
そしてその矢が牙石王の脚部に見事命中する。

「最後の一押し」

そこへバットが一気に跳躍して跳び蹴りの姿勢をとり、

「ハァァアアア！！」

――ドス・・・ッ！――

魔弓の矢を釘とするなら、彼女のキックは鎚だったろう。
今までの攻撃による損傷が蓄積した足に、その釘を思い切り打ち込めば、メキメキメキという音が立ち始める。

そして、

――ゴボ・・・ッッ！！――

牙石王の右足が砕けた。

「そんな・・・・・何故砕ける!?この大巨人が・・・・・・牙石王がぁあぁーーーッ!!?」

完全にバランスを失った牙石王は倒れた。
倒れた先は、薄暗い水が漂う湖。

大きな音と波で水面を乱しつつ、牙石王は湖の底へと沈んでいった。

「・・・・・あの男、這い上がってくるでしょうね」

バットが呟いた瞬間、

「ぐっ・・・・・・ち・・・くしょう・・・ちっくしょう!!」

ホントに牙王が這い上がってきた。
ずぶ濡れの体のことなど気にもせず、また敵を見据えようとしたが、
その前に目に止まったのは

大量のチョコレート。
牙王の活力源だった。

(・・・・・何も見えねぇ・・・イヤ・・・見える。チョコレート、大好きなチョコレートだ・・・。なんでオレこんなに、我慢してるんだ?苦しい、苦しい・・・・・・!我慢する意味なんてあるのか?)

牙王の脳裏に流れまくる願望。
そして結論づいた。我慢する意味など・・・・・・。

（無い。欲望を制約する必要なんてないじゃねぇか）

そうして彼は

「も・・・う・・・ダメだ・・・！）

マスクを剥ぎ取り、欲望に身を染めた。

「あああ！う・・・うめぇ！！甘いぞ！！やっぱこれがなきゃダメだ！！」

獣のような勢いでチョコを食べ始める牙王。
そんな牙王の姿がこの上なく醜いと感じられたのか、バットは彼から視線を逸らす。
それでも視界の片隅に入っていたのか、こんな言葉を語りかける。

「この勝負、貴方の負けですね、牙王」
「・・・・・あ？何言ってんだテメェ！？まだだぜ！牙石王が砕けたくらいで勝ったつもりか？」
「違います。貴方と私たちの勝負でなく、牙王対牙王の勝負のことです」

バットは悟りを開いたような表情だ。

「貴方は報酬効果云々以前に、弟の仇を討ちたいが一心で此処まで来た。牙石王という巨大な力を生み出すに足るまでに進化した。し

かしそんな純粋たる欲望は、己の私腹を肥やしたいというだけの醜悪な欲望に負けてしまった。・・・・・要するに、貴方の弟に対する思いと信念はその程度だったと、貴方自身が証明してしまった」

どう考えても言い返しようの無い真実。
それを聞いた牙王の顔は自分への絶望一色になった。

「ぶぐ・・・げぇえぇえっ！がっ…がぁあぁあぁ！！」

牙王は突然口を押さえると、それでも抑え切れない量のナニカが彼の胃袋から食道を通り、体外へと吐き出される。

「力を磨くのも結構ですが、その前に志という純粋な欲望を磨いておく事を推奨します。言っておきますが、貴方の心根は弱いですよ、誰よりもね」

哀しげな瞳をして言い切ったバット。

「・・・・・・・・・そうかい」

牙王はフラりと立ち上がった。

「そうだよなぁ・・・俺はダメな兄貴だ・・・」

その顔には自分の敗北を受け入れ、どこか虚しさを感じさせるものがあった。
その顔を見て、これ以上牙王には戦意が無いと確信する。

「行けよ。どうせこのドームにディスクはねぇしよ」

牙王は地面に座ってそういった。

「・・・自分への確認の為言うが、俺はてめぇらに負けたわけじゃなく、俺自身に負けたんだ」

「それが分かっただけでも、一歩だけ進歩できますよ」

それだけ言って、バットは小金井を連れて先へ進んで言った。

他の場所にあるディスクを捜し求めて。

「・・・

だけど、世の中は上手くいかない。

――ガラララ・・・・・・！――

「ッッ！！」

金女が上方からの音の正体に勘付いて後ろにバックステップをとった瞬間、

――ガァァァン！！――

風子だけが、天井から降って来た檻に閉じ込められた。

「あちゃ～！我ながらカッコ悪いや、引っ掛かっちゃ・・・・・・」

「やはりそうでしたか」

檻が降りてきた理由。

それは、少女が柱に仕込まれたカラクリを動かしたから。

「テメーッ！！敵だったのかぁぁあ！！」

「不疑（うたがわず）――この場にいる人間が一般人だと本気で思いこんでいたとは・・・・・・と、金女は溜息交じりに呆れます」

「どこのクローンネタ！？」

二人が漫才じみたことをしていると、少女は気軽な足取りで石棺に近づく。

「これは頂いちゃうね」

「不名乗（なのらず）――一応訊きますが、貴方は何者ですか？」

「私はキリト。死四天の一人。当然貴方達に話したことはぜ～～んぶ、ウ・ソ♪」

堂々と名乗ってきたキリトだが、金女が一人の忍者として彼女にも疑念をもって接していたので大して驚く様子もなかった。

「ならば、貴女には山ほど訊きたい事があります」

死四天の一人なら他のメンバーの特徴やディスクの所在地も知っている可能性は極めて高い。

拷問してでもキリトから情報を引き出すつもりで金女は凄んだ。

「ん～～～・・・だったらこの仔倒して私を捕まえられたらね？」

『キュキューーン！！』

すると現れたのは”イルカヤミー”だった。

「それじゃあ、そういうことで♪」

そう言い残して走り去っていく綺理斗（キリト）。

「霧沢さん、彼女を追ってください。私も後で追います！」

「合点承知！！あの女、ずえったい泣かす！！」

――ビュオオオオオン！！――

風子は檻を真空の刃で切り裂き、綺理斗を追った。

「変身」

――パカン！――

金女もセルメダルとチェリオドライバーで変身する。

「もう一度、不忍（しのばず）に参りましょう」

≪ＳＥＴＴＯＵ・ＲＯＵ≫

チェリオは右腕に切刀を装備し、イルカヤミーめがけて振り回す。

――ザシュ！ザシュー！ザシュン！――

猛回転する刃が当たるごとに、イルカヤミーの体からはセルメダルが零れ、あたりを鏤めて行く。

『キュイーーン！！』

イルカヤミーは突然鳴き出した。

すると奴の口から凄まじい量の水が津波のように噴出され、

「うわッ！？」

その水圧にチェリオも思わず壁にぶつかってしまう。

「イタタ・・・・・・だったらこれで」

≪ＣＨＩＮＴＯＵ・ＯＭＯＲＩ≫

両脚部に無骨なアタッチメントが装備される。

擬似変体刀の一種、沈刀（チントウ）『錘（オモリ）』。

その形状は至るところ殆どから刃が突き出すように生えていて、触れることさえ危ぶまれるようなものだった。おまけに靴底とその周辺部分のそれはとくに凄まじく、ベルトコンベアのようなものさえついていた。

――ギィィィィン！！――

凄まじい金属音をさせながら地面を駆ける沈刀『錘』
その重量は約２００ｋｇなので戦車のように鈍重そうだが、フルスピードを出せば４０ｋｍ程になる。

「それッ！」

チェリオはイルカヤミーの放水など気に留める必要が無くなり、沈刀を足と一緒に振るってイルカヤミーに斬撃をくらわせる。

『ギギャ・・・！！』

自慢の放水を沈刀『錘』の重量で無効化された上にダメージを負わされたイルカヤミー。

「そろそろ決めますか」

≪ＳＨＡＴＯＵ・ＧＥＮ≫

左腕全体に装備された新たな装備の名前は射刀（シャトウ）『鉉（ゲン）』
一言で言い表すと弓矢だ。

≪ＣＥＬＬ　ＢＵＲＳＴ≫

チェリオは弓と化した左腕を構え、右手で矢を引き、狙いを定める。
チェリオは炎刀『銃』を多数の敵や広範囲攻撃に、射刀『鉉』を単一の敵や精密一点攻撃に使用している。

『キュイ!?』

イルカヤミーは危険を察知してトンズラしようとするも、

「不逃(のがさず)――精密刀射(せいみつとうしゃ)」

無情な一言が発せられると、

――ビュ・・・ッ!――
――バシ・・・ッ!――

矢が放たれ、矢尻ががイルカヤミーに直撃し、決着がついた。

「・・・・・・・・・」

チェリオは急いでセルメダルをケースに入れると、これまた急いで風子のもとに駆けて行く。

そして目にしたのは

「南無阿弥陀仏」

落ちた古い吊り橋の向こう側にて笑顔でそういう綺理斗（上着を脱いでいて、下の黒い服にも”南無阿弥陀仏”と書いてある）。

そして、

「覚えてろよテメーー！！絶対に――――」

言葉が最後まで紡がれずに激流の川に飲まれていった風子だった。

「・・・・・・・・・・」

「おやくノ一さん、もう来ちゃったんですか？・・・というかお仲間はいいんでしょうか？」

明らかにわざとらしい笑いでそういってくる綺理斗。

普段の金女なら遠慮なく綺理斗のほうに向っていくだろうが、今回は事情が違った。

このＳＯＤＯＭに向う直前、シルフィードからチェリオシステムを受け取り、依頼された際、最後の最後にシルフィードからこういわれていたのだ。

――あ、そうそう。出来れば可能な限り火影の子達は死なせないようにして頂戴――

――それは何故でしょう？――

――・・・・・・あまり、子供が死ぬっていうのは、胸糞悪いでしょ・・・？――

「はぁぁ・・・本気で溜息が出ますね」

そしてチェリオは、

――ザブン！！――

激流へと自ら飛び込んだ。

＊＊＊＊＊

研究所。

その頃、金女にそんな注文をだした張本人、ルナイト・ブラッドレイン・シルフィードは、陽炎と共に行動していた。

「どう？陽炎さん」

「ダメね。影界玉が何も示さないわ」

陽炎の手にある影界玉は、まるで砂嵐なテレビ画面の如く何も映せていない。

「科学技術で魔導具に干渉できるとは思えないし、かといってこの場に魔術師がいるとは思えないし・・・・・・」

「となると、やはり考えうる可能性は一つ」

「「天堂地獄」」

二人は冷静に状況を把握する。

するとだ、

『ウェルカム！マダ～～ム＆レディ～～～！！』

何処かからかスピーカーを通した声が聞こえてくる。
その直後に、ロビーの壁に備え付けられていたモニターに一人の男が映る。
なにやら細い目つきが印象的な男だ。

『今回は貴女も含め、多くのイレギュラーが参加してるみたいですね陽炎さん。にしてもそのイレギュラーがトライブ財閥の人間とは思いませんでしたよ。しっかしお二人とも、写真とかで見るより全然キレイじゃないか！』

男は急になれなれしい態度になり、

『とても一児の母だったり大企業の会長だなんて思えないなぁ・・・充分、イケてますよ。ホントの歳ってイクつなの？』

こんな馴れ馴れしいことまで訊いてくる。

「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・」

『アラララララ、つれないっすね。もうちょっと会話を楽しみましょーよー。どんな声してるのか聞きたいなぁ』

男のエザったい言葉に二人は何者も映さぬ鏡面のごとき表情でこう言い放つ。

「・・・ごめんなさい、坊や。私たち、忙しいの。静かにしてくれる？」

「こうして喋って声も聞かせて上げたことだし、お姉さん達を通してくれるかしら？」

『・・・・・・いい声』

無理矢理作ったような声音。

『データディスクが欲しいんでしょ？お二人さん。右に入り口あるよね？入ってみなよ』

言われた通り、近未来的な扉をくぐった。

『心配しなくても罠じゃないですから。ちょっとしたショーを見せてあげたいのさ』

「「！！」」

そして目にしたのは――狭いカプセルに入れられてなにやらかなり苦しむ狐と、その狐を助けようとしたいが首輪によって束縛された狐。

『野生の狐の親子ですよ。電流を死なない程度に浴びせられ続ける母狐。それをみて助けることもできずもがいている仔狐』

仔狐は首輪が自分の体に食い込み、血管が破れて血が出る要因となっているのにも関わらず、痛みなど気にも留めずに母へと向っていこうとする。

『ねぇ？実に涙を誘うシナリオでしょ？』

「（なんて事を・・・！）式髪！！」

陽炎は魔導具を手にし、髪の毛を１０～２０本辺り抜いた。
針のように硬質化した髪を投げると、髪はカプセルに命中して楕円形を描くようにして穴を開ける。

――パリン！――

母狐はそれに乗じてカプセルを破り、仔狐に擦り寄った。

『素晴らしい・・・・・だけど・・・エンドテロップはまだ流れてないんですよ』

男の声が不吉満載な台詞をのせてきた。

――ドクン・・・！――

母狐の体に異変が起こり始めた。

――めきっ！ばきんっ！メキッ！バギンッ！――

そうして、

『ギャオオオオオオ！！』

母狐は異形と成り果てた。

『あぁ！なんということでしょう！！仔狐が必死に守ろうとした・・・・・・母狐は既に、化物でした』

「「・・・・・・・・・・・」」

男の不愉快な言葉に二人は黙る。
しかし、手元はそうではなかった。

シルフィードは片腕をスッと上に掲げると、そのまま一気に片腕を下方に下ろした。
その瞬間、

――ズシャ・・・・・・！！――

母狐だったものは、通常の十数倍の重力を身に受け、

『ガ・・・ガァ――――』

静かに息絶えた。

『クゥン・・・クゥン・・・』

仔狐は母狐の亡骸に近寄り、治療のつもりか舌で舐めていた。

『・・・おい・・・化物共・・・お前らこそがこの脚本における主役なんだぜ。気に入ってくれた？』

今までの丁寧語混じりな言葉は完全なタメ口になっていた。

「哀れな坊や、出てらっしゃい・・・・・・お姉さんたちが相手してあげるわ」

その時のシルフィードの声は、正しく流氷のように凍えきっていた。

『ウヒヒヒヒヒ・・・・・あーそうかい。でもな、余裕ぶっこい

てる暇はないぜ？』

――ガシャ！！――

突如として、部屋の扉が全て閉じられた。

『完全密室！！そして、毒ガスだ。化物共』

男の下種な声が実に耳障りなものとして感じる。

『会長さんはどうかは知らないが、黒尽くめのほうは斬っても刺してもしなないらしいからな！けどなぁ・・・・・毒で体の自由奪っちまったら！？後はコンクルートづめにでもして生きたまま海に沈めてエンドよ！！』

男の下種な声はまだ響く。

『ウヒヒヒヒヒヒ！！』

下卑た笑い声と一緒に・・・・・・。

「「・・・・・・・・・・」」

そうして、二人の姿と影は、毒ガスの中に紛れていった。

＊＊＊＊＊

監視部屋。
毒ガス機能発動から五分後、部屋はガスで満ちた。

「充分だな」

男は監視モニターを見ながら頃合を計らって停止スイッチを押した。
それによって毒ガスは止まり、手早く換気が施される。
男は二人が見事失神した姿を期待したが、結果はその１８０度違う方向のものだった。

一言でいうと、二人の姿はおろか影さえなかった。

「いねぇ!!?そんなバカな!?逃げ道なんてねえ筈!!何処だ・・・・・他の部屋か!?」

男は必死になってモニターを見回す。

「い・・・ねぇ、いねぇ!!どっこにもいねぇ・・・・・・・カメラに写らないところに隠れてるのか!?・・・・・・そんな筈ねぇ!この施設は全ての場所にカメラを置いてる!センサーだって設置してあるから反応くらいあるはず・・・・・・」

だが一つ、落とし穴がある。

「・・・・・・いや・・・カメラもセンサーもねぇ所が一つだけある」

カメラもセンサーも設置する意味の無い場所。
そもそもその監視を行う場所。――そう、この部屋だ。

「ど・・・どこだ、化物!?」

男は半ば怯えながら両腕に刃を装備する。
部屋にある二つの照明が彼の影を一つではなく二つとし、彼の不安定さを示すようにも見える。

しかし誰もこんな発想にはいたるまい。その二つの影から、陽炎とシルフィードが出てくるなんてことを。

「転移魔術は疲れるわね、相変わらず」

シルフィードが実に冷めた口調で言い捨てる。

「ヒ・・・ヒヒ・・・俺の影から出てきた?二人揃って影から影へと移動したってことか!?」

男は声を震えさせながら強気に振舞う。

『ギッ・・・ギャ・・・』

すると、陽炎が抱えていた仔狐が陽炎の手を引っ掻いて逃げ出し、椅子の下に隠れてしまった。

「あらら!?痛いのか!?そんな体のクセに痛いっていうのか!?面白いよな!笑わせてくれんな!」
「不死の体とて痛みは在る。・・・だが痛いのは、体よりも心。母を失った仔狐の心を思えばこその痛み。殺めたのが自分たちである

ことの痛み」
「け！！綺麗事いってんなぁ偽善者！！毒が効いてるのは判ってんだぜ？足がふらついてらぁ」

男は両腕を構えると、

「首斬りおとしても生きてやれるか試してやんぜ！！我が名は裏麗忍者「ウザったいわね」

その瞬間、

――ビュオオォォォオオオオォォォォン！！！――

「！！？」

シルフィードが手をかざしただけで、男は強烈な烈風に飲み込まれ、壁に頭を叩きつけられた。

「あんたみたいなクズの血で私たちの手を汚す意味すらない」

シルフィードはそういうと、ポケットからある物を取り出した。
一見金属リングで束ねられたメモ帳だが、それらは捲る毎に赤・黄・緑・灰・青といった五色の紙が三十枚ほど束ねてあった。

シルフィードはその内の一枚を束の中から千切って見せた。
中央部分に切れ込みが入り、左右にウナギの紋章が二つに別けられた青い髪。
一枚から二枚に割られると同時にその紙はシルフィードの手首に自

ら張り付いていった。
すると、
――ビリビリッ！――
シルフィードの両手に一対の長い電気鞭が現れていた。
鞭の名はウナギウィップ。本来はオーズが使うはずの武装。
「コイツに巻かれて、電撃地獄でも味わっときなさい」
シルフィードは素早く男の体にウナギウィップを巻き付けて拘束する。
電気ウナギの属性を備えた鞭で体を巻かれた男がどうなったかは、語るまでもないだろう。
もっとも、陽炎とシルフィードはそんなことには一切興味を示さぬまま、ディスクを一枚ゲットしていた。
「これで後４枚ね」
シルフィードが残りディスク枚数を口にしていると、
『・・・クゥン・・・』
さっきの仔狐が二人に擦り寄ってきた。
「どうしたのお前？私たちが怖かったんじゃ・・・・・・憎かったんじゃなかったの？」

陽炎が手を差し出しながら問うと、仔狐は陽炎につけてしまった傷を自分の舌でなめて綺麗にしようとしていた。
それをみた陽炎は、謝った。ただただ「ごめんね」と・・・・・・。
そしてこうともいった。

「ありがとう」

と・・・・・・・。

（結局・・・・・・大きな戦いで泣きを見るのは、こういう無力な命・・・・・・・）

その様子を見ていたシルフィードは、とても哀しそうな瞳をしていた。
まるで昔のナニカを見つめるような、虚しい瞳で目の前の現実を見据えていた。

金女と牙石王と年長美女（後書き）

次回、仮面ライダーブライ

木竜とブルーコンボと剣術

木竜とブルーコンボと剣術（前書き）

仮面ライダーブライ！

前回の三つの出来事は！

一つ！仮面ライダーチェリオ＝鋼金女が霧沢風子と合流！

二つ！バットと小金井が牙王を撃破！

そして三つ！シルフィードと陽炎が、データディスクを手にした！

木竜とブルーコンボと剣術

ウェポンドームの奥部。
そこへ続く通路を爆走する者がいた。

――ブゥゥゥゥオオオォォォォォォン！！――

けたましいエンジン音を迸らせ、ただただ怨敵のいる場所へと走る。

佐古下柳という少女を救い出し、天堂地獄を消滅させることで、数百年に及ぶ火影忍軍の忌まわしき因縁をぶち壊す為に。

そして、全ての元凶にたどり着く為！

――ガゴォォォオオオォォォォォォン！！――

シェードフォーゼは鉄の扉をぶち破った。

「到着だな」
「あぁ」

ブライと烈火はシェードフォーゼから降りた。
たどり着いた部屋は・・・・・・。

「まるで貯水槽だな。ハスの葉のバージョンアップ版までありやがる」

そんな感じの場所だった。

「オオオニバスっていうもんだ。南米アマゾン川水域に自生するハスの葉さ。浮力が強いから子供一人乗っても沈まないんだぜ」

たどり着くと、なにやら池に浮いてる植物の説明をする男の声。

「それもこいつはオレ特製のスペシャル版で、大きさも浮力も倍以上って代物よ！よく来たなぁお二人さん・・・・・・！！」

醜悪で凶悪な笑みを浮かべる長髪でバンダナを巻いた男、永井木蓮。

「最後だ・・・俺とお前の戦いはこれで最後。どちらかが死んで終わる。引き分けも再戦も後腐れもねぇ！！思い残さないように殺し合おうぜ！！」

――バシャアアン！！――

ナニカが池から飛び出す。

「お前らが前に進むか、俺が大笑いするのか！？勝負だァァ！！花菱烈火！！」

――バシャアアァァン！！――

さらにもう一種が飛び出してきた。

「おいおい何だよあの巨大モウセンゴケは！？しかもヤミーと一緒だと余計キモいし！！」

「キモくて悪かったな。言っておくがこのモウセンゴケはサイズだけでなく、凶暴性や酸性の強さも段違いだから、人間だって喰うぜ」

「食虫植物を食人植物にジョブチェンジさせんじゃねーよ！！」

ブライと木蓮の会話の間にも、モウセンゴケと”ゲンゴロウヤミー”が迫ってくる。
しかもこのゲンゴロウヤミー、意外と巨大だ。

『シュシュシュシュシュシュ！！』
「なにがシュシュシュだ！冗談じゃないぜ！焔群！！」

――ボォォォオオオ！！――

焔群の火炎がモウセンゴケを燃やし尽くしていく。
多少水で湿っているとはいえ、火力の強さと勢いの強さの前には湿り気など意味をなさない。

「こっちのヤミーは本職に任せろ！」

ブライはメダルチェンジしながらゲンゴロウヤミーと対峙し、ローグスキャナーを走らせる。

≪ＲＹＵ・ＭＥＧＡＬＯＤＯＮ・ＩＮＡＧＯ≫

ブライはリュウメナとなり、両腕に三節棍の状態でマウントされた水刀（スイトウ）『銛（ヤリ）』を２本の長槍状態にして両手に持ち、脚部にギザギザした刺を生やしたイナゴレッグが備わる。

しかし、

――ドゥガ・・・・・！！――

なにか鈍い音がした。

「ん、小僧？・・・って、お前は？」
「初めまして。私の名前は命よ」
烈火の後頭部をトンファーで殴った命は悠々と名乗った。
でもその間に、
――バクッ――
「うわぁあああ！！」
モウセンゴケが烈火を捕まえた。
「花菱！クソ、この虫野郎・・・！」
『シューッシュシュシュ！！』
ブライもゲンゴロウヤミーとの戦闘で手を離せない状況。
「おいおい、二人共・・・・・俺ぁまだここから一歩も動いてねーんだぜ？あれほど殺したかったお前はそんなもんだったか？失望あさせねぇでくれよ」
木蓮はオオオニバスの一枚に乗りながらそういうと、左腕を変貌させていく。
水鏡によって斬られ、義手だったであろう左腕を跳ね除けて生え出した巨大な植物。
「ごぁぁぁあああぁぁぁああああ！！！」
悲鳴なのか気合入れかは知らないが、木蓮はとにかく絶叫した。

「これが俺の新しい左腕、鋼鉄の処女（アイアンメイデン）！！」

どこが？と思う方は、この後すぐにわかるであろう。

木蓮の左腕は一気に長さを伸ばし、モウセンゴケに囚われる烈火にまで届くと、

――バクッ！――

烈火を捕食？した。

「ステキ♪」

その様子を見てうっとりする命。

「いててて！！今度はハエトリグサか！？」

ハエトリグサの中で針にささされて痛がる烈火。

「わりとポピュラーな植物だからな。流石に知ってたか。なら鋼鉄の処女（アイアンメイデン）は知ってるか？」

「１５世紀のドイツにあったっていう拷問器だろ？外観はマント姿の仏頂面女で、内部に複数の大きな針があるので、中に閉じ込められた瞬間に血の池地獄ができあがる。処刑の匙加減具合の判断にも使われたらしい」

ブライは戦闘中にスラスラと答えた。誰にも言われず、一人で勝手に。

「なんでそんなに詳しい？」
「いや、もし拷問有りな場面に出くわしたらどれが効果的かな？・・・と」
ブライは言いずらそうに答えた。
「まぁつまり・・・・・・」
――バグゥゥ！！――
「ぐあああああああ！！」
ハエトリグサの針が烈火を苦しめる。
「こういうことだよ」
――ガグゥ！！――
さらに圧力を高める。
「俺はなぁ烈火・・・・・いつも屈辱にまみれてたぜ。何故だと思う？初めにお前と戦って、小金井と戦って、水鏡と二回戦って、鑢七実と戦った。どれも共感するものを感じていたぜ。敗北感よりも許せないものだ。全員、俺を見下してた、屈辱感だ」
木蓮は目を見開いた。
「俺を格下の雑魚のように扱ったんだァァーーーッ！！そりゃあ許せねぇよなぁぁぁぁぁ！！！強烈に打ち付けてやんぜ！！」
「（やばい・・・ッ――あの野郎、花菱を壁に叩きつけるハラか・・

・！）」

『シュッシュッシュッシュ』

「あーもうウゼェェ！」

戦力低下は避けたいが、こっちもこっちで手が離せない。

このまま烈火は壁に激突かと思ったが、

――ピタ・・・・・・――

ハエトリグサは止まった。

「俺が入ってきた事に気づかなかったか？」

すると一枚のオオオニバスの上でハエトリグサの幹を両腕で掴む男が居た。

「相も変わらず小さき男よ、木蓮！その程度の考えしか出てこぬことが見下される所以と知れ！」

「おや・・・貴様は見覚えがあるぞ。空（くう）の大将、空海！」

木蓮は記憶の引き出しを開けた。

「どうした烈火！？早く出て来い！！まさか、この程度でギブアップか？暫く見ぬ間にひよったな小僧」

――ボンッッ！！――

直後、烈火を飲み込んでいたハエトリグサの一部が燃えあがった。

「ざけんなハゲ」

砕羽を発動させて出てきた烈火に、空海はニヤっとした。

「別にお前を見下してたわけじゃねーぜ、木蓮」

烈火は静かな口調でいった矢先、

「てめぇが大っ嫌いだっただけだ」

「確かにな。つーかよぉ・・・お前はやっぱり三下だぜ。この噛ませ草が」

ブライは一旦ゲンゴロウヤミーから距離をとって烈火の近くに移動し、二人揃って中指を立てていた。

――バッ――

烈火は勢い良くハエトリグサから飛び降りた。

――ズベッ――

「おぼ!?」

なんか水に落ちかけたが、

「・・・・・・・・・」

なんとか持ち直した。

「・・・ぷっ――ガハハハハ!!相変わらずぬけたところは直って

おらぬな烈火！！」
「んだとコノヤロー！そんなに爆笑「礼儀知らずも相変わらずか？」
・・・助けてくれてありがとー」
「うむ」

一応お礼は言っておく。

「それから仮面の戦士」
「なんだ？」
「お前の身内と思われる女忍者・・・・・・鋼金女と名乗る、もう一人の仮面の戦士に出くわしたが」
「っっ！！？か・・・金女が、だと・・・！？」

ブライは空海の言葉に心底驚いた。
金女とはもう十五年も会いもしなければ連絡すら取り合った覚えが無い。
その金女が忍者ライダーとしてこのＳＯＤＯＭに来ている。

その瞬間、ブライの脳内で一つの結論が出た。

「あの吸血女・・・あとでタップリ・・・」

後々の彼の標的にシルフィードがロックオンされた。

「まあ・・・兎にも角にも、手ぇ貸してくれや、お坊さん」
「無論、そのつもりで来た」
「頼むぜ、仏様」

三人は再び戦陣に躍り出る。

「ホラァ出番だよォ！！大飛出（おおとびで）ぇ！！」

――ザパァァン！！――

命の言葉に従い、水中より貴族風な傀儡型魔導具が現れる。

「からくり師・命の最後の傀儡魔導具！倒せるもんならやってみな！！」

命は大飛出に搭乗する。

「烈火は木蓮、仮面のは化物を、こやつは任せよ！」

「アイアイサー！」

「ふん、元からそのつもりだ」

三人は各々の敵に向う。

「命か。まさかお前と戦う日が来るとはな。お前のように心がねじれた者でも人を守ろうとする心があったか？」

「うるせーよハゲオヤジ。沈めて土左衛門（ドザエモン）にしてあげる」

空海と大飛出が取っ組み合う。

だがそこで、

「隠し腕！！」

大飛出からもう一対の腕がでてきた。

その隠し腕は両手でハンマーをつくり、それをもって空海の頭を強打する。

「ああそうさ！こんな気持ち初めてなんだ！自分より大切な人がいるなんて！らしくないってかい！？てめぇに迷惑かけたか！？」

こんな捻くれまくった穢れた魂をした自分を受け入れてくれたのは、生涯において木蓮だけだった。

彼が自分の耳で「愛している」と囁いたとき、自分の中にある女としての喜びを確かに感じ取った。

今はそれこそが命の活力源であり、戦う理由。

「木蓮（あの人）はやらせない！私たちは二人で一つなんだ！」

ブライはそんな命の清浄な心根を耳にした。

（愛の力ってのは偉大だな。どんな阿呆さえも、美しくするんだからよ）

心の中で、僅かながらも命に敬意を表していた。

『シュシューー！！』

「っと！余所見してる暇はないか」

――チャキ・・・！――

ブライは水刀を構えなおして再びゲンゴロウヤミーに挑む。

そして再び命ＶＳ空海。

（見ててよ、木蓮！私・・・あんたの力になるよ！）

命は穢れない心に従い、二対の腕で空海に攻撃をしかけ、ゴキ！と

いう音が立つ威力で空海の顔面を殴りつけた。

「まだまだァーー!!」

――ベキャ!!――

空海に対し、強烈な攻撃を仕掛けるのはこれで”三度”目だ。

「空海!!」

「坊主・・・」

空海は吹っ飛ばされて水に落ちていった。

「ホホホホホーーーっ!見てた?見てくれた木蓮!?」

命は自慢げに高笑いする。

だがしかし彼女は・・・・・・

――ザバ・・・・・・――

空海は水中から這い上がってきた。

上がってきた空海は恐ろしく無表情だ。

それを見た烈火は、恐ろしげに呟く

「・・・出た」

「何がだ?」

要するに命は三度目の攻撃によって

「仏の顔も三度まで」

空海の中で塞き止めていた物を抉じ開けてしまった。
首にかけていた大きな黒い数珠も行き成り切れていってしまう。
そして、体の色も黒々しくなっていく。

「我、今より鬼。色即是空」

仏の尊顔から鬼の形相へと変貌した。

（久々に見たぜ・・・・・・！！）
（なんつー殺気だよ・・・・・・・）

その場に居るもの全てが、空海の圧倒的な気配の前に動きを止めていた。

三発以上の攻撃を引き金として、仏の空海は鬼の空海に変わる。

「・・・へっ！なにが鬼だよ、馬鹿じゃないの！？所詮は同じ人間！何も変わってはいない！！」

――ガっ――

大飛出の拳が空海に直撃した。

「・・・・・・・・・・・・・」

空海は何事も無かったように黙っている。

「うわあああああああああ！！」

それに対する命はほんの少しでも雑念を消すように、我武者羅になって四本の腕をつかって空海を殴りまくった。

「死ね・・・！！死ねぇ！！」

――ドスッ――

そして、アッパーカットが決まった瞬間、命の敗北は決定したと言って良かった。

空海は、しっかりとした出で立ちで拳を構え、ガッチリと大飛出を掴んでいた。

「南無」

それを口にした時の表情は、明鏡止水に達したかの如く、無色透明といっても良かった。

次の瞬間、

拳一発で、大飛出がバラバラになった。

「オニヤミーとかいたら、あんな感じなんだろうなぁ・・・・・・」

それを見たブライは、なんだか現実逃避にも近いしい言葉をぼやいていた。

生物学的には普通の人間が何の装備も無い上、本気とはいえ拳一発

であれなのだ。
盗見取ったものの、たった一回だったのでもう一回だなんて無粋なことも言えなかった。

「くふ・・・痛・・・んっ・・・・」

命はギリギリのところで脱出し、オオオニバスの上に乗った。
大飛出は文字通りバラバラにされてしまったので、力なく水の底へと沈んでいく。

「も・・・・・・木蓮・・・・・・・」

命は先ほどの攻撃でかわしきれなかったが故に負った腹部の傷を手で押さえながら、木蓮に歩み寄る。

「ごめん・・・・・・ごめんよ・・・私・・・力になれなかった・・・・・痛い・・・苦しいよ、木蓮・・・助けて・・・・」

足を引き摺る度に、腹部から血は溢れだし、葉を赤黒い血液を吸わせていく。

「もう、帰ろう・・・・」

そうして命は、木蓮の体に抱きついた。
力なく、でも必死で。

「ねぇ・・・医療棟につれていって・・・・・・・体が変なんだ・・・こいつらには勝てないよぉ・・・・・・もう戦うのはやめよう?私と一緒に逃げてどこかで暮らそう?」

涙を溢れさせながら命は懇願する。
もう闇の中でいきる刺激は要らない、寧ろ怖くなってしまったのだ。
今までの所業を思うとかなり虫のいい話だが、今の命は”普通な平穏”が欲しかった。

「お願い・・・木蓮」

だが、世の中と人に潜む闇は、たった一つの光では照らしきれないこともある。

木蓮がナイフで命の腹部を刺した。

「どうして・・・・・・!?」

痛み云々を通り越し、悲しみで涙を流す命。
心から惚れて愛した人の裏切りの冷たさに。

「俺の人生を変えようとするな」

その声は、倒れる恋人に向けるものにしては余りに無機質だった。
いや寧ろ見下すような印象さえ覚える。

「来いよ、烈火。戦いはまだ終わらねぇぞ」

そして何事もなかったように話しかける。

「俺とは違った意味での我欲漢だな。しかも性根が腐った方向（ベクトル）ってわけかよ」

――ギュ・・・・・・・！！――

ブライは無意識に拳を思い切り握り締めていた。

「木蓮ーーーっ！！」

烈火は木蓮のいる場に飛んでいき、全力で木蓮を殴った。

が・・・

（倒れねぇ！？）

木蓮は微動だにしなかった。

「今までの俺は一歩もここから動いてねぇ。お前らは俺を動かすことすらできなかった。その間、こっちはしっかりと根を張る事ができたぜ」

「っ！花菱、離れろ！！」

ブライは木蓮の足元を見て確信が行き、叫んだがもう遅い。

「うあああああ！！」

烈火は吹っ飛ばされた。

木蓮が足から生やした樹木の勢いの凄まじさで。

その樹木の根は足から脹脛へ、脹脛から太腿へ、そして下半身全部へと広がっていった。

そうして出来上がった巨大な樹木の根は、まるで北欧神話のミドガルズオルム（ヨルムンガンド）のように水中にも蠢いていた。

「烈火・・・お前が使うのが火竜（かりゅう）なら、さしずめ今の俺は木竜（もくりゅう）といったトコだなぁ・・・！魔導具使いって奴はインスピレーションとオリジナリティが必要だぜ。一つの能力が様々な形へと変わる！」

「へ～、あっそう」

『シュシューーーッッ！！？』

木蓮の説明にブライが相槌をうった。

その近くには、土手っ腹を水刀をぶっ刺されたゲンゴロウヤミー。

『シューーーッ！！』

ゲンゴロウヤミーは口から泡を吐いてブライに攻撃しようとするも、

――シュンシュン！！――

ブライは手刀を目にも留まらぬ速さで繰り出し、泡を散らした。

「あらよ」

――ズボッ――

『シュジュウウウウウウ！！！！』

二本の水刀が無理矢理引き抜かれ、ゲンゴロウヤミーはセルメダルを零しながら暴れ回る。

「好い加減くたばれよ」

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

ブライは冷酷なまでに冷血にその台詞を口にしてスキャナーでメダルをスキャンする。

それと同時に二本の長槍状態だった水刀『鑓』を一本の三叉槍型とする。

そして水刀『鑓』を構え、全力でゲンゴロウヤミーに投げ飛ばした。

『ジュ・・・ジュ・・・』

水刀はゲンゴロウヤミーの頭に直撃し、円形のサークルを作り上げた。

「トォ！」

ブライは思い切り跳躍して飛び蹴りの体勢となり、

「チェェェストォォォォ！！」

掛け声をあげ、展開されたサークルに渾身のキックを喰らわせた。

――バリィーン！！――

『ジュシュゥゥアアアア！！！！』

サークルが小気味よい音で割れ果てると同時に、ゲンゴロウヤミーは爆発四散した。

何十枚かのセルメダルが水中に落ちていったが、そんなものを気にする状況ではなかった。

「・・・・・・・・・」

ブライは無言でオオオニバスに降り立った。

「カッコイイ！！惚れちゃいそうだぜェ仮面ライダー！！」

「さァて、スクラップの時間だぜェ！クッソ野郎がァァアア！！」

茶化す木蓮とは真逆に怒りの感情をむき出しにするブライ。

憤怒するなか、彼はコアメダルを換装してスキャナーを走らせる。

≪ＺＥＵＧＬＯＤＯＮ（ゼウグロドン）・ＭＥＧＡＬＯＤＯＮ（メガロドン）・ＴＡＣＨＩＵＯ（タチウオ）≫

≪ＺＥ（ゼ）・ＺＥ（ゼ）ＭＥＴＡ（メタ）！ＺＥ（ゼ）・ＺＥ（ゼ）ＭＥＴＡ（メタ）！≫

軽快な歌声が響くと、バシャーンという水の音が弾けて彼は姿を変えた。

古代鯨の頭（ゼウグロドンヘッド）、古代鮫の腕（メガロドンアーム）、太刀魚の脚（タチウオレッグ）

その全てが青く染まった海洋の覇者、ゼメタコンボ（水棲系コンボ）！

「いいねぇいいねぇ！お前みたいに本音曝け出しまくりな奴ァ好きだぜ俺は！」

「噛ませ草に褒められても何も出てきやしないだろうがな！」

ブライは木蓮の言葉に刺のある言葉で返した。

「人間なんて一皮向けばどんな聖人君子だって欲望の塊だ！その点俺もお前も自分の本音には素直に生きている！”誰かの為”なんて

理由で動く奴は皆偽善者だ！立場によっちゃ、俺とお前は悪友になれたかもしんねーぜ？」

「ふん、死んでもゴメンだぜ。テメーみたいな腐れ外道は特にな」

ブライは何時にもまして威勢良く喋る。

「花菱、悪いがこの勝負は俺に譲ってくれ。あのクソッたれは俺が地獄に落とす」

「鋼・・・・・・」

「いいな？異論は認めんぞ」

「・・・・・・わかった。お前がそこまでいうならな」

烈火はブライの奥底にある怒りの炎を感じ取り、戦いの権利を譲渡した。

「つーわけで、テメーの相手はこの俺だ！」

「ヘッ！面白い！烈火の前にお前から始末してやるよ！」

「そいつはどうかな？・・・・・・我刀流二十代目当主、鋼刃介、推して参る」

「木霊の木蓮だ！あの世逝っても忘れんなよ？」

ブライと木蓮は、見上げる形と見下ろす形で向かい合う。

「オラ喰らいやがれぇぇ！！」

木蓮が鋼鉄の処女（アイアンメイデン）を振り回してブライに攻撃を仕掛ける。

だがそれは不発に終わる。いや、別に攻撃が当たらなかったわけではない。

ただ、

――バシャン！――

ブライの体が水となって弾けたのだ。

「「「んな！！？」」」

それを見た三人は目が飛び出しそうなほど驚く。

だがこれはブライ・ゼメタコンボの固有能力である”液状化”によるものだ。

液体は斬られても突かれても決して滅されることはない。

『フッ！』

ブライは液状化した状態で水中を自由自在に泳ぎまわる。

そうして木竜の最下部分、根っこにあたる部分と鉢合わせすると、液状化を解いた。

「ウゥゥゥ・・・！ハッ！」

そこから少し力み、両脚のタチウオレッグの装甲が幾多モノ巨大な刃となったのだ。

「オラオラオラオラァァァア！！」

――ザシュザシュザシュザシュザシュ！！――

ブライが脚を動かす度に魚刀『鋒』の刃達が木竜の幹を切り裂いていく。

無論、植物は光と水さえあれば幾らでも再生できるのだが、ブライ

の猛攻はその再生スピードを上回っていた。

「おいおい？なんの真似だ？そんな根っこ部分ばっかじゃ、俺には届かないぜ？」

「あぁそうかい。だったらこれでどうだ？」

ブライは液状化して木竜の再生中な幹へと侵入していった。

人間は体外の脅威に対しては即座になんらかに対応をとれる。

しかし体内に入り込んだ病原菌などを退治するにはそれ相応の準備が必要だ。

要するに、

「ん・・・！？なんだ・・・あの野郎・・・中で、なにしてやがる・・・！？」

木蓮は内部から攻撃を受けることになる。

『甘かったな木蓮！お前の魔導具の特製は植物の寄生と操作。だったら植物が最も必要とする物になればこの通りだ！』

すると内部からブライの声が低く響いた。

「クソッ！こんな無茶苦茶な能力、反則だぞ！」

『反則？そんな言葉を他人に言う権利、テメェには無いな！』

――バキィィイイィィィン！！――

「ぐあああああああああ！！！」

「フッ」

木竜の内部から液状化を解いたブライが、木の幹を破って現れた。
さらには木竜の首部分＝木蓮の直ぐ近くの幹に足を乗せた。

「木蓮、これで終わりだな」
「このヤロ・・・降りろ！！」

木蓮は左腕でブライを叩き下ろそうとするも、

――ブシュウウゥゥゥゥウウウ！！――

ブライはゼウグロドンヘッドから周囲の水素を集めて高圧水流として発射する”ハイドロポンプ”で鋼鉄の処女（アイアンメイデン）を粉砕する。

「な、なんでだよ！？それだけの力がありゅー・・・幾らでも好き勝手できるってのに・・・・・お前も偽善者ってことか！？」

「馬鹿かお前？俺は何時だって己が我欲に従ってるぜ？戦い時に戦って休みたいときに休む。それは何処の誰がなんと言おうと邪魔させやしねぇ！花菱たちだって、正義の味方ってわけじゃない、たった一人のアホ女連れ出す為にここに御足労してんだ。コイツらは自分の欲望のままに此処へやってきて、天然娘の笑顔見たいって言う我侭でここに来ただけなんだよ」

ブライは誰かを奮い立たせるように語る。

「もう一度言うぜ？俺たちは正義の味方じゃなくて、自分（テメー）の味方だ！」

これもまた、欲望の形の一つ。

「あ、有り得ねぇ！！そんなチッポケな欲望で命をかけるだと！？テメェらだって自分が一番の筈だ！！」

「五月蠅い。好い加減邪魔な噛ませ草はここで雀られてろ」

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

スキャニングチャージが発動し、コアメダルの力が全解放される。

ゼウグロドンアイとローグクォーツが淡い光を漏らすと、ブライは液状化して上空に舞い上がり、液状化を解除して両腕にマウントされていた水刀『鑓』を三叉槍型の状態にして手に取り、水刀の先端がバシュ！という音を立てて発射され、正しくは『鑓』のように木蓮に突き刺さった。

「こ、この・・・放せ！」

「放せといって放すかよ！」

ブライは『鑓』の持ち手と先端部分を繋ぐ十重二十重のワイヤーを滑車代わりに滑っていき、再び魚刀『鋒』を幾多にも展開した状態で両膝を前方に思い切り出した。

「チェエエエストォォォォォォ！！！！」

ゼメタコンボの必殺技、フィッシュスライスが鮮やかに決まった。

「グギャアアあああああああ！！！！」

木蓮は無様な悲鳴を上げ、木竜の状態も維持できずにオオオニバス

へと落下していった。

「よっと」

それに引き換えブライの着地は見事なものである。
今ここに、勝負は決したのである。

「スッゲー・・・！カッコ良すぎだろありゃ・・・！」
「鋼刃介・・・面白い男だ・・・」

その戦いぶりを見ていた二人は素直な感想を口にした。
すると、

「ちょっとーー！！早く逃げるのよあんた達ィーー！！このドームはもうすぐ爆発するわ！！」
「オカマサイボーグ！？どういうことだ！？（つーかどうやってカンドロイドを振り払ったんだ？）」

現れたのはなんと神威だった。

「恐らくＨＥＬＬｏｒＨＥＡＶＥＮから自爆指示コードが入ったのよ！私はこのドームと一体だったからそのプログラムを読めたの！もう止める事はできない！あと三分弱で大爆発よ！！」

神威がもってきた情報は随分ショッキングなものだった。

「三分か。全力だせばどうにかなるな」
「あぁ、なんとかなりそうだ」
「早くここからトンズラしようぜ」

三人はその警告を素直に受け取ることにした。

――ブゥゥゥウウゥゥゥゥゥン！！――

ブライがシェードフォーゼで駆けて行くのを切っ掛けに、他の三人も出口目指して走っていく。

しかし、

「待ち・・・やがれ・・・」

ここに諦めの悪い奴が一人。

「終わったんだね、木蓮・・・・・・」

そして、そんな奴に恋した女。

「とうとう・・・最後まであいつに勝てなかったね。残念だったね・・・・・」

「何言ってやがる！？まだだ！これが最後じゃねぇ！今度あったら二人まとめて・・・・・・！」

「最後の戦い・・・って言ってたくせに」

命は葉の表面を這いながらも言葉を紡ぐ。

しかしその瞳は、もはやなにも映していなかった。

「・・・・・お前、もう目が・・・」

「うん、殆ど見えない・・・」

命は正直に言った。

遠回しながらも、自分の命脈はもうないのだと。

「木蓮・・・私ね・・・幸せだったよ。貴方と出会えてよかった」

「・・・・・・・・・・ちっ・・・・・・・」

命の告白に、木蓮はバツが悪そうに舌打ちする。

「馬鹿かお前？俺はお前を刺したんだぜ？それは虚栄心か？ただの自己満足か？」

「違うと思う・・・・・・多分、私は木蓮と一つになったんだよ」

木蓮は悪態をつきながらもすわり、命の身を委ねられたようにした。

「一つ？」

「うん。木蓮が怒ってるのには私も怒ってる・・・・・・木蓮のしたいことは・・・私のするべきこと。心で一つになってた」

「・・・ちぃ・・・・・・」

木蓮はまたバツが悪そうにした。

しかし、先ほどまでの邪気は無い。

「テメーの馬鹿な話を聞いてたら逃げる時間無くしたぜ。どうしてくれるんだよ？」

残り時間はもう殆ど残ってないだろう。

「フフフ・・・木蓮は自分が一番だもんね・・・」

そして、

――ピ・・・ッ――
――ボンッ!!――

爆発が開始される。

それによってこのエリアも壁や天井が崩れ始めて危険な状態となる。

「・・・ねぇ・・・木蓮・・・」

それでも二人は会話を続ける。

「もう・・・・・休んでいいよ・・・・・・つかれたでしょ・・・・・・?休・・・もうよ・・・・・・私・・・・・・疲れた・・・」

そうして命の両目は静かに閉じられ、二度と開くことはなかった。
実に安らかな表情でこの世との繋がりである肉体から魂が離れていく。

「く・・・くくく・・・・・・・・くくくくくくくく!!」

だが木蓮は、なぜか笑い出す。

「花菱烈火!!次だ!!さっきは我刀流のせいでお流れになったが、今度戦うときは・・・次こそ殺してやる!!」

木蓮の心の声はこう叫んだ。
俺が勝つまで終わりなんざねぇのさ!!

「ひゃはははははははははははははははは!!!!」

永井木蓮（ながいもくれん）
麗四番隊に所属。後に裏麗へと寝返る。
愛用していた魔導具は木の属性、「木霊（こだま）」

万物を組成する五種の元素。
木火土金水（もっかどこんすい）の称を「五行（ごぎょう）」という。
火影の中での四人がこれに関する魔導具や能力をもっていたのは只の偶然だったのか。
そしてただ一人、敵となった木の男がいたこともあるいは――

人が常に身に備えるべき五つの大事、仁義礼智信（じんぎれいちしん）を「五常（ごじょう）」という。
五常は五行に通じ、木は仁、火は礼、土は信、金は義、水は智を司る。
五行の正理として木気が過ぎるのは「不仁（ふじん）」となる。

仁無き男、木霊の木蓮。
今わの際まで叫びしその悪鬼羅刹の如き執念。
叶う事はもう二度とない。

＊＊＊＊＊

ウェポンドームから脱出した四人は、爆発して燃え盛るドームを遠巻きに見ていた。

「・・・・・・・・」
「随分派手な演出だな。あの様子だと、あいつら・・・・・・・」

崩れ落ちるドームを黙って眺める烈火。
ブライは冷静さを取り戻しながら台詞を口にして、バックルの傾きを直して変身を解いた。

「ま、それはさておき、ディスクは何処にあったんだ?」
「拙いな。あのドーム内だったとすると・・・・・・・」

刃介と空海は初っ端から出鼻を挫かれたと思った。

「あー。それなら大丈夫よん!」

――カシーン!ピピ・・・ガリガリガリ!――

神威からみょうちくりんな音が聞こえてくる。
すると。

「ハイ!!」

神威の胸からデータディスクが保存状態で出てきた。

「良く渡す気になったな」
「お前は森側の人間であろう?」

刃介はディスクを手に取った。

「なんかそんなことどーでもよくなっちゃったわ。火影の方が面白い子多いしね」

神威は空海の問いにメンドくさげに答えた。

「それに、”なにが何でも死守せよ”って命令は受けて無いし、寧ろあげちゃっても問題ないカンジだったわ」

「「「・・・・・・（どういうことだ・・・・・・？）」」」

＊＊＊＊＊

一方研究所では、陽炎とシルフィードがパソコンを起動させ、なにやらマウスとキーボードを動かしていた。

「なるほどね。さっきから携帯電話もバッタカンも使い物にならないと思ったら、こんな内向的な代物を使わせる為とは。・・・・・・完全に遊んでるわね」

シルフィードは椅子に座ってキーボードとマウスには見向きもせず、ただ画面だけを見ている。

ただし、キチンとマウスもキーボードも彼女の手で動かされている。

大企業の会長なだけあって、相当パソコンなれしているのが垣間見える光景だ。

「ＳＯＤＯＭの敷地内のパソコンでだけアクセスできるＢＢＳ（掲示板）。書き込み件数は現在５件」

陽炎は事細かに詳細を読み上げようとする。

「一件目、このＳＯＤＯＭというＨＰの管理人からの挨拶文・・・・・二件目、死四天を名乗る”キリト”という人間からの予告メッセージ・・・・・・」
「それから三件目はっと――――」
シルフィードがマウスを動かして画面を切り替える。
「土門君と凍空君がディスクをとった一人目ね」
「流石は我が用心棒だわ♪でも、麗十神衆の音遠と一時的な協力をしてるみたいね。おまけにキリトもぶちのめす的なことも言ってるし」
それからの物はと言うと、

〔４〕キリト発見！！
投稿者：石島土門

キリトを発見した
逃げられちまったけど姿は見たぜ
変なマスク被った太った小男だった。
能力的には毒を使う奴だった
みんな、気をつけろ

〔５〕てめぇウソつくな
投稿者：石島土門

おいこら馬鹿野郎
人の名前騙ってんじゃねぇよ、このウソつきが
〔本物の俺の情報〕
キリト＜若い女みてーな顔して隻眼。今追いかけてる

「・・・・・・両方とも偽者ね」

陽炎はキッパリと言った。

「確かに。吹雪君がいるから三件目と四件目の書き込み間隔が短さは納得できるとしても、五件目のところから既に”語るに落ちた”もいいところよ。追いかけてる途中、パソコンに向ってる暇があるなら、相手をとっ捕まえてから朗報を書き込む筈だもの」

シルフィードも部下の性格を考慮して結論を出す。

「コイツを作った連中の狙いの一つは、十中八九情報操作といったところね」

「えぇ。でも・・・実に子供じみた下らないやり方ね。ウチの子達だけなら兎も角、皆には一人ずつ冷静な判断のできる助っ人がついてるのだから」

二人は仔狐を連れたまま、席を立った。

＊＊＊＊＊

その頃、水鏡と七実は、研究所とバイオノイドドームを地図上であわせれば、三角形の頂点の一つに位置するであろう場所に来ていた。

ギリシア共和国の首都・アテナイのアクロポリスにあるという殿堂を模した建造物。

その名はパルテノン。

二人は何食わぬ顔でその中に入っていく。

全体が石造りの建造物は、この夜空の時間帯では何となく寒気を感じさせた。

しかし、寒気など一発で吹き飛ぶ事柄が、このＳＯＤＯＭにはウジャウジャ存在している。

「歓迎しよう。ようこそＳＯＤＯＭへ！そちらのお嬢さんには初めましてと言っておこう。私の名は蛭湖（ひるこ）だ」

「どうも。鑢七実です」

敵の出現である。

だが七実は蛭湖に対し、軽くお辞儀をした。

――ギッッ！――

その瞬間、何かに対し、蛭湖が目を見開き、

――タン・・・ッ――

咄嗟に後方へと下がった。

「速いな」
「時間が無いんだ」

その攻撃は、水の刃をなした闇水をもった、水鏡によるものだった。

「・・・・本来なら君と一戦交えたいところだが、鑢七実がいるとなれば、素直に撤退することにしよう」
「随分あっさりしているのですね」
「君は我等死四天の一人、葵を一発で戦闘不能にした実績があるし、葵も下の者達全員に君との不用意な戦闘は控えるよう命令しているくらいだ。そんな神業的猛者とは戦う気にさえならない」

蛭湖は裏麗において如何に七実が脅威として認識されているかを話した。

「だから私は素直に撤退する。しかしその前に、水鏡凍季也に話すべきことがある」
「お前に話してもらうべきことなどない」
「巡狂座のことでもか？」
「ッッ！！」

蛭湖の口から出た言葉に、水鏡は目を見開いて反応する。

「やはり・・・いるのか？ここに・・・？」
「いる。ＨＥＬＬｏｒＨＥＡＶＥＮの中だよ。実際にこの目で見たからな。あれほどのプレッシャーを与える男もそうはいまい・・・・・・檻の中から出て彼はまずこう言った」

――敵の中に・・・剣を使う者はいるのか？――

――・・・います。純粋な意味での剣士なら、一人心当たりが・・・・・・――

――そうか・・・もしその男が氷紋剣を使うのであれば、会わねばなるまい。時が来たのだ――

「巡狂座（めぐりきょうざ）・・・確か水鏡さんの師匠でしたね」

「あぁ。そして僕の育ての親でも在る」

七実の確認に水鏡は顔に動揺の色を浮かべながら答えた。

「あの男を見たとき、体中の血が凍るようだった。牢獄生活での疲労、高齢による衰えこそあったが・・・その力を弱体化させるまでには至らない覇気を感じた。過去、麗の紅麗と会ったことがあったが、違うタイプだ。ある意味紅麗以上の力をもっているかもしれん」

蛭湖はさらに語りだす。

「そんな男に・・・・・なぜ会いにいく!?死が恐ろしくないのか!?鑢の存在ゆえ、恐怖が無いのか水鏡?」

怒鳴るように問いただす蛭湖。

「あるさ。怖くてたまらない。鑢七実が側にいようといまいと関係ない。自分にどんな結末が待っているのか・・・・・・確かに死ぬ事だってあるかもしれない。何もわからない。其れは恐怖だよ」

「正直だな。しかし、行く・・・と。復讐か?」

蛭湖は話を詰めてきた。

「多少の話は聞き及んでいる。姉を殺された復讐心がお前を動かすのか？」

「・・・少し前まではそうだった。仇を討つ気持ちだけで戦っていた。命すら惜しくなかった・・・・・・」

しかし、そんな水鏡の凍て付いた心に熱が加わるきっかけとなった男の言葉があった。

――死を恐れろ！死に急ぐ必要などない。復讐という負の力だけで戦うな。想いが遂げられたとき、死しか残らなかった・・・私のようになるなよ――

「教えてくれた友がいた！・・・だから僕は行く。全てを知る為に行くんだ」

「ならば行け、水鏡。全てを知って来い！君個人との戦いは巡狂座に譲ることにするよ。そっちの方が面白そうだ」

「粋なことをするのですね」

七実はあっさり過ぎるほど水鏡の戦いを肯定した蛭湖にほんの少し賛美の言葉を送る。

「粋って程のことじゃない。ただ師弟の因縁に割り込むほどヤボでもない。他の相手を探すことにするよ」

そうして蛭湖は姿を消していく。

「・・・全てが終わって互いに生きていた時は、一対一で戦おう。水鏡凍季也。そしてさらばだ、鑢七実」

こうして七実と水鏡は、一切合財のバトルを行わずに別の場所に赴くこととなる。

（うふふ、面白い殿方でしたね。・・・大方魔導具だったのでしょうが、心臓の鼓動がしてましたね。血液を武器に戦うといったところでしょうか？・・・うふふ、刃介さん達はどうしてるんでしょうかね？）

その無血の原因は、この異形なる天才・鑢七実の圧倒的才能による賜物であることを決して忘れてはならない。
そして七実は、自分の恋人（所有者）のことを考えながら、邪悪な笑いをした。

木竜とブルーコンボと剣術（後書き）

次回、仮面ライダーブライ

女狐と紅茶と最後のディスク

ゼメタコンボ

キック力：１２トン　パンチ力：７トン　ジャンプ力：１４０ｍ

走力：１００ｍを４．５秒

身長：２０５ｃｍ　体重：９０ｋｇ　固有能力：液状化　属性：水

カラー：青　必殺技：フィッシュスライス

ゼウグロドンヘッド

複眼の色は黄色。周囲の水素やを利用して強烈な高圧水流・”ハイドロポンプ”を放射することが可能。

メガロドンアーム

両腕に三節棍の状態でマウントされている水刀（スイトウ）『鑓（ヤリ）』が装備される。水刀『鑓』は使用する際は二本の長槍型か一本の三叉槍型のどちらかで使用する。尚、この水刀『銛』は名前の通り、穂先や節の先を飛ばして敵を突き刺したり捕縛することもできる。さらには壁や天井に飛ばして簡易なワイヤーアクションさえ可能にする。

タチウオレッグ

両脚に背鰭状の刃、魚刀（ギョトウ）『鋒（ホコサキ）』が装備される。この魚刀『鋒』は複

数の巨大な刃として展開することも可能で、その状態での刃達はブライの思うがままに動く。

女狐と紅茶と最後のディスク（前書き）

仮面ライダーブライ！
前回の三つの出来事は！

一つ！永井木蓮との最終決戦が勃発！
二つ！ブライはゼメタコンボに変身し、木蓮を倒す！
そして三つ！死四天・蛭湖の口より、水鏡の剣術の師匠・巡狂座のことが語られる！

女狐と紅茶と最後のディスク

ＨＥＬＬ　ＯＲ　ＨＥＡＶＥＮ
要塞都市ＳＯＤＯＭの中心にして、裏麗の真の本拠地。
その内部にて、一人の男が帰還していた。

「おかえりなさい」
「随分と早いお帰りだな」

やたらと広い部屋にはガラス張りの巨大な水槽が壁一面にあって、ガラスの向こう側では様々な魚介類が生息していた。
そして、その魚介類らを一望できる位置にテーブルと椅子とパソコンを設置して帰還した男を待ち受けていたかのようにしていた者が二人いた。

「噂以上の実力者のようだな、鑢七実という女は。水鏡凍季也も、この前よりもずっと強くなっている。火影は本当に楽しませてくれる」
「楽しそうだね、蛭湖」
「全くだ。しかし、奴らは着実に此処へ来ようとしている。現在のディスク獲得者は、土門と凍空、陽炎とシルフィード、烈火と我刀流か」

この先の展開に笑みをこぼす蛭湖に、葵と竜王はパソコンの画面に向かい合って掲示板を確認していた。

「変だな？水鏡たちがパルテノンに来たということはあと一枚あるはず。脱落者でもでたか？」
「搦（カラメ）が取られたけど、キリトさんが取り返してくれたみたい」

「やれやれ。そんな必要はないはずだが・・・キリトめ、遊んでいるな」
「まあ、奴の魔導具はある意味変幻自在だからな」
竜王は呆れる蛭湖にそういった。
そんな中葵は掲示板に追加された新たな書き込みを見ていく。

〔6〕火影各位へ
投稿者：陽炎とシルフィード

ディスクを一枚入手しました。現在地は研究所ですが、私たちはこれより更に奥へと進みます。
このＨＰの画像データでＳＯＤＯＭの地図があるのでプリントアウトすることを皆にすすめます。
私たちの知る限り、烈火と鋼さんはウェポンドーム、風子さんと助っ人はピラミッド、カオル君とバットさんがバイオノイドドームにいます。

なお、情報操作による混乱を避けるため、我々しか知らない「キーワード」を必ず書き入れてください。また、同じ内容のものも書かないこと。キーワードがない、もしくは不必要なものの内容は信じない事。

［キーワード］
土門くんは風子さんが好き

〔7〕わかった母ちゃん
投稿者：花菱烈火と鋼刃介

今俺たち、ウェポンドームでディスク取って近くの山小屋でコレ書いてるぜ！
すぐそこにピラミッドてのがあるけど、風子どうなってる？
みんなどこにいるのか書けコノヤロウ。じゃまた！

［キーワード］レッカマン６のタイトル「私は炎」

〔8〕さあて、またがんばるぞ
投稿者：キリト

さっき一枚ディスクを火影の人から取った。
霧沢さんと一緒に居た助っ人さんはくノ一装束を着込んでいて、セルメダルとベルトで仮面ライダー変身する。名前からして鋼刃介の家族っぽい。
二枚目のターゲットを確認したのでまた行ってきます。

「へぇ・・・あの男にも肉親がいたんだ。しかも忍者ライダーとはね。・・・にしてもキリトさんまたやってる♪」

葵は書き込みを眺めて笑った。
するとその時、葵の表情が強張った。

「どうした？」

「ＩＣＱだよ。ＳＰからだ。なにかあったみたい」

葵は早速その内容を開封した。

そして、表情を驚愕に塗りつぶされることになる。

「蛭湖・・・門都が死んだ」

「ば・・・馬鹿な・・・・・・あの門都が！？信じられん！！」

「事実を受け入れろ。残虐的なまでに焼き尽くされた死体があったのはバイオノイドドームと研究所の間。そして時間的に考えると、花菱にもブライにも実行は不可能」

竜王が論理をまとめあげ、

「紅麗の炎」

結論をたたき出した。

「ッ・・・・・麗か！」

「紅麗たちをゲームに参加させた覚えはないよね（計算違いだ）。早急に居場所をつかんで殺すよう、兵に命じよう（できるとは思わないけど、時間を稼がないと。――森様と竜王さんが完全体になるまでは・・・・・・！！）」

葵は内心焦りながら方針を決定した。

「ところで竜王殿、残りのコアの枚数は？」

「この通りだ」

竜王は懐から緑・黄・灰・青のコアメダルを取り出した。

残るコアは一枚。赤い鳥のメダルのみ。

＊＊＊＊＊

研究所の外。
陽炎とシルフィードは他の場所に行こうとしていた。
ただし、仔狐が中々離れようとしない。どうやら懐かれてしまったらしい。
山へ帰るよう言っても、二人の頬を舐めるだけで聞こうとさえしない。

そんなとき、

「会長！！」
「陽炎！！」

二人の巨漢がやってきた。

「吹雪くん！」
「土門くん！」

見覚えと聞き覚えのある声に、二人は即座に反応した。

「二人共無事だったっすか？」
「漸く他の仲間に会えたぜ！」

分かれたグループのうち、二つのグループが合流した。

「「「「ジャン！！」」」」

四人は獲得しあったディスクを出し合った。

「ここにあるのが二枚。ピラミッドで風子たちも一枚とったらしいから三枚だな？」

「三枚？それは妙ね。あの子たちは掲示板に書き込みやってないわよ」

「風子さんから直接聞いたの？」

「いや、全身ミイラ男から聞いたっすけど」

因みに土門と吹雪は音遠らと分かれたあと、ＳＯＤＯＭ中を必死に駆け回っていたのだ。

空海と偶然会ったり、門都に遭遇しかけたり、バイオノイドドームで崩れた牙石王を発見したり。

ピラミッドでは搦あたりにその情報を聞きだしたのだろう。中途半端な情報と知らずに。

「二人共、もしかして「ヒャあああああああああ！！！！」

陽炎の声を遮るように、老婆の悲鳴が聞こえてきた。

「今の声って！？」

「こっちだ！！」

四人は急いで現場に駆けつけた。

するとそこには二体の機兵が腰をぬかした老婆に迫り来る光景があったのだ。

それを見つけたやいなや。

「後如(ごしく)！」

吹雪はまず体当たりで一体を破壊。

「ふん！！」

土門も拳でもう一体を破壊した。

「早いわね・・・流石吹雪くん」

「強くなったわね、土門くん・・・」

陽炎とシルフィードは素直に賞賛する。

「大丈夫か、バアちゃん？」

「お、おう・・・助けてくれてありがとよ」

眼鏡をした小柄な老婆だった。

四人は歩きながら老婆の素性を問いただすと、老婆はこう語りだした。

簡潔に纏めると、自分は「実験用モルモット」と呼ばれ、カプセルの中に閉じ込められていたのだが、ある日怪物とかした人物がカプセルを破壊して部屋中を暴れ回り、自分はその隙に脱出したのだという。しかしその矢先、ロボットに見つかって死ぬところだったと・・・・どこかで聞いた気がする話を聞かせてくれた。

「ありがとう！！あんたらは命の恩人じゃ！！あのままじゃったら

きっとワシは・・・・・・」

老婆は土門の手を握りながら感謝する。

「はっ！」

だが次の瞬間、木陰に隠れだす。

「お前達・・・何者じゃ・・・？」

なんか同じものを見た気がする人、それは気のせいじゃありません。

「大丈夫だバアちゃん！俺たちはここの人間じゃねぇ！」

「そ、そうかい？ウソじゃないだろうね？」

「大丈夫！俺ってバアちゃんっ子だからよ、ウソはつかねって！」

「「「・・・・・・・・・・・・」」」

陽炎、吹雪、シルフィードは老婆に疑惑の眼差しを向けていた。

その真相を追究するときが来るまで、四人は老婆の案内に従ってある場所に来ていた。

全体が石造りとなっている建物の近くにまで。

「・・・ほれ、あそこがパルテノンじゃよ。ワシは元々ここの研究員じゃったらから地理には詳しい。助けてもらった礼じゃよ」

「あそこにみーちゃんと七実ちゃんがいるかもしれないんだな！」

「とりあえず、はりきるっすかね」

「うふふ、そうね」

「ありがとう、キリトさん」

「なぁに・・・――――」

その返事をした瞬間、老婆は口を閉ざした。
それと同時に空気もかたまった。

「え？」

土門は別として。

「大正解みたいね。ストレートなウソは裏返せば真実となる」
「でも今の名前に反応したのは痛かったわね、ご本人さん。奇襲は失敗ね」

陽炎とシルフィードは冷徹に言い放った。

「あ？え？」
「まだ気づいてなかったっすか？」

まだついてこれてない土門。

「貴方は裏麗死四天の一人。そうよね、キリト？」
「くっくっく・・・・・つい呼ばれて返事してもーたか。やりおるのぉ女狐ども！確かにワシがキリトじゃよ！」
「金女チャンたちがどうなったか教えて欲しいわね」

正体を明かしたキリトに対してシルフィードは問いかける。

「川底に落としてやったワイ。もう一人のくノ一は風子を助ける為に自分から川を泳いでいったがの！」
「何ィィーーっ！！このババァ！！風子は生きてんのかコノヤロー

！！」

「おお怖い怖い。さっきまではボクおばあちゃんっ子なんだよとか言っておったくせに」

「こーのーバーバァ～～～！！」

土門の頭から湯気が噴出しだす。

「まああれだけ腕の立つ忍者が助けにいったらな生きておるじゃろうな。しかし大切なディスクはここにある。そんで、今もう一枚手に入れた」

キリトの手には二枚のディスクがあった。

「！！」

土門は急いで自分の荷物をガサガサとチェックした。

その結果、

（俺達のジャン！！）

絶望した。

「気づくのが遅かったようじゃな。鎧の方は持ってないと思い、さっきあんたからスラセてもらったよ。手を握ったとき思ったが、風子といいアンタといい、どうも火影の子たちは隙が多いね」

「返しやがれババァ！！」

「おっと」

土門の腕など簡単に避けて木の枝に跳躍してのるキリト。

「さぁて！このまま逃げさせてもらうよ！次は烈火くんとブライのディスクでも頂こうかのぉ！！」

高らかに宣言するキリト。

が、

「アラ、偶然。私とシルフィードさんも一枚ずつ」

「要するに二枚持ってるんだけど」

「「！！？」」

ディスクを一枚ずつ見せながら笑顔でそういう陽炎とシルフィード。

「俺っち達三人が見ず知らずの人間を初っ端から信用すると思ったっすか？念のために会長が土門くんのディスクをすり替えといたってわけっすよ」

吹雪は兜越しの声を響かせる。

「じゃあババァが持ってるのは？」

「ただの音楽ＣＤっすよ。陽炎さんが持参してたヤツ」

「まあ兎にも角にも、騙す相手はキチント選ぶべきだったわね、キリトお婆ちゃん？」

「こ、の・・・・・女狐ども！」

――ピンっ――

キリトは懐に忍ばせていた手榴弾のピンを二つとも取り外し、そのまま木の上から地面へと投げ落とした。

当然凄まじい爆発と黒煙が発生し、丁度いい煙幕の役割をはたしたようで、キリトは老体では考えられない動きで木の枝の次々と飛び

移っていく。

「追うわよみんな！」
「えぇ、勿論」
「ハ、ハイ！」
「了解っす！」

四人は一斉にキリトを追って走る。

「石島くんの為に敢て説明するけど、あのキリトってヤツはプライドが高い部類よ。だから私たちに一矢報いるべく、仕掛けを打って置くはずだわ」
「あのぉ・・・・・・それって俺がバカって言いたいのですか・・・？」
「だってそうでしょ？」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
→
なんか色々沈んだ。

「まあ一応ディスクは返しておくわ。今度は盗られないようにね」
「おう！」

陽炎から投げ渡されたディスクを受け取る土門。

そうして走っているうちに、四人は拓けた場所に出た。

（（・・・・・このあたりだ））
（（いる））

四人は直感で悟った。

――ヒュオオオオ――

風が虚しく吹く音。
しかしそんな音の侘しさをぶち壊すように、

「オラ出てこいやキリトォー！！ディスクならここにあるぞーーっ！！」

阿呆がバカな行動に出た。

「てめぇは風子を騙してディスクを奪い取った卑怯者だ！打っ飛ばしてやっから来いやぁーー！！」
「バカ！！盗られないでって言ったばかり「平気♪」

ディスクを手に持ってそれを言われても全然説得力が無い。

――ボンッ！――

土門の後方にある地面が炸裂した。
激しい土煙を一気に突きぬけ、キリトが姿を現す。

――ゴキッ！――

「おご！！」

キリトは空中で土門の後頭部に回し蹴りをキメて、ディスクを宙に回せた。
結果、

「ありがとよ、若いの！」

キリトにディスクを盗られた。

「コノヤロー！！」

土門はすぐさま力づくで取り返そうとするが、

「殴れるかい？噛み砕くよ！」

キリトはディスクを銜えた。

これでは手が出せない。ディスク一枚一枚は代用のない一点もの。

一枚でも破損すればゲームオーバーだ。

だがしかし、

陽炎とシルフィードは、背後と正面からキリトの頭を殴った。

ディスクが小気味よい音をたてて割れ散った。

――ドッ――

キリトが気絶して倒れた瞬間、

「馬鹿野郎！！なんて事しやがる！！そのディスクがなきゃ柳を助けられないだろうが！！」

「土門くん、一旦落ちつくっす」

「落ち着いてられっかこんな状況で！！」
「はい、本物の二枚」
陽炎がキリトの懐にあった二枚のディスクを取り出して宣言した。
「・・・・・・・・・・は？」
「私たちがだしたディスク、土門君に返したディスク、今壊れたディスク」
「どれもこれも偽物（フェイク）だったの」
シルフィードと陽炎は、最初から本物のディスクなど面にだしていなかった。
キリトが奪ったディスクを奪い返すため、土門まで巻き込んだ芝居だったのだ。
「「あら」」
すると仔狐が二人の足元によってくる。
「またついてきちゃったのね」
「こらこら、そんなに舐めないの」
――ペタ・・・ッ――
見事に騙された土門は地べたにすわり、仔狐と戯れる二人の美女をみて思った。
（女狐だ・・・・・・）
「まあまあ土門くん。今回の芝居は君の単純さあってこそっすよ。誇っていいっすよ」

（全然嬉しくねー・・・・・・）

下手なフォローが逆に痛かった。

「く・・・くくく・・・」

するとどうだろうか。

さっきま失神していたキリトが起き上がった。

「そういうことだったのかい・・・・・ここまで馬鹿にされたのは初めてだよ！遊びのつもりだったから・・・・・こいつを出すのはＨＥＬＬ　ＯＲ　ＨＥＡＶＥＮの中にしようと思ってたが、我慢ができない」

キリトは右手首にしている核らしき小さな玉が埋め込まれた悪趣味なブレスレットを手にしながら、最大限の怒りと気合を込めて叫んだ。

「死愚魔（シグマ）ァァァア！！！」

その瞬間、

――ギュオオオオオ！――

「なんだァ！？」

（空間が裂けた！？中から何かでてくる！）

「好い気になるんじゃあないよ、お前達！あくまでワシが遊んでいたということを思い知らせてやるよ！出ておいで死愚魔ーーーーッ！！」

空間の裂け目から現れた者、それは一言で言うと、
化物以外の何者でもなかった――――

エイリアンのような頭部から後ろの部位はもはや表現する言葉さえ見つからないほど奇怪で醜悪で生物的だった。ただ、体の両側には翼っぽいものが二つある。羽ばたかせてはいないので飛行用というわけではなさそうだが、その巨大な翼が化物の存在感をより浮き出しているのも事実であろう。

「あひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！！これがキリトの魔導具じゃーーッ！！」

キリトは自慢げに高笑いする。

陽炎とシルフィードは怪物を隅々まで観察し、動きと呼吸などを確認して、確信した。

（生きている・・・・・・！？確かに意志をもつ魔導具は存在するけど、あれは・・・まるで・・・生物じゃない！）
（大方海魔って野郎の作品なんだろうけど・・・・・・トコトン狂い乱れてるわね！）

「いっといで、死愚魔♪」

キリトは優しく命令を下すと、

――ブォン！！――

死愚魔は音がするような強い力で翼と足に力をいれ、地を蹴り空を

裂き、土門と吹雪に突貫していく。

「使いたくなかったっすけど、しょうがないっすね」

――ガシッ――

吹雪は片手一本で死愚魔を止めた。

「んなッ！！？」

その光景にキリトは驚くが、肝心の吹雪の表情は賊刀『鎧』に隠されている。

吹雪は片手で目標をしっかり掴んだまま、もう片方の手でしっかり握った完成形変体刀が一本、双刀『鎚』の刀身としてきた部分を柄のように握りなおした。

元々無骨な外観をした双刀は上下の境界が曖昧だ。

故に普段持ち柄としてもった部分を刀身として扱うとき、双刀『鎚』は超重量によって比類なき打撃武器と化す。

どちらが刀身、つまり頭か向きがわからない。だから上下どちらも頭にできる。

すなわち双頭（そうとう）！名称の由来はここから来ているのだ。

――ブゥン！！――

吹雪は双刀『鎚』を数十メートルもの上空に放り投げた。

放り投げられた双刀は自重によって凄まじいスピードで落下してくる。

常人なら落ちてくる双刀に触れようとした時点で指が使い物になら

なくなるだろう。
しかし、強固な鎧で身を固めた凍空一族の成人男性ならどうなるのであろうか？

「完成形変体刀が一本、双刀『鎚』の限定奥義・・・！」

子供の時点で双刀を自由自在に扱える凍空一族の成人男性が、落下の勢いを殺さずに、全力で双刀『鎚』を敵に向けたらどうなるか？

――ガシッ――

「双刀之犬（そうとうのいぬ）！！」

――グジュ・・・・・・ッ！！――

「し、し・・・死愚魔（シグマ）ァァァァァア！！！！」

キリトは喉が潰れそうなほどの大声を出した。
それもそのはず。生物型魔導愚・死愚魔の頭部が、グチャグチャに潰されたのだから。

「さってと・・・一つ聞くっすよ、お婆さん」

吹雪は血で濡れた『鎚』と『鎧』のことさえ気にせず、キリトに声をかける。

「此処でぶちのめされるか、大人しく退散するか。どっちがお利口っすかね？」

「くッ・・・貴様・・・！覚えていろ！！」

――ギュオオオオオオ――

キリトは空間の裂け目を作り、悔しそうな表情をして帰っていく。
死愚魔のほうは急がないと腕輪ごと崩壊するであろうから、火急な修復が必要なのは目に見えていた。

火影の吹雪＆土門・陽炎＆シルフィード、ディスク所有数三枚。

＊＊＊＊＊

キリトを退けた四人は、そのままパルテノンに一番近い巨大な建物に向った。
地図上でいうと、ＨＥＬＬ　ＯＲ　ＨＥＡＶＥＮの真西に位置するその建物は名称さえ不明だったが、なにかあるのは明らかだ。

四人は意を決して扉を開けた。
そしてそこに居たのは、

「「あ」」
「こ・・・小金井！」
「バットさん！」

土門と吹雪は先にたどり着いていた仲間の姿に歓喜した。

「生きてたかこの野郎！」
「そっちこそ！」

――パァン！――

土門と小金井はハイタッチをかわす。
ここにきて更に仲間と仲間が合流した。

しかし、今は感動の再会を味わっている場合ではない。

「うーん」

土門が悩むように唸った。
その原因はこの部屋に存在する森光蘭の石像と、その直下にある謎の機械。

「どうやらこの機械のスロットに五枚のディスクを入れるみたいね」
「言われてみればスロットは五段、ディスクも五枚っすからね」
「ディスクを全てこの機械に差し込めば、本拠地への道も開けるようですね」

トライブ財閥組は早速状況の整理に入った。

「なるほど・・・今此処に三枚ある。あと二枚ってことだな」
「ええ！？なんで土門兄ちゃん達そんなに持ってるの？」
「お前らはどうなんだ？」
「まだ一枚もないよ！」

結果、

「罰」
「うわぁぁぁん！」

プロレス技をかけられました。
しかも小金井一人だけ。

「やめなさい」
「大人気ないわよ」

そんな土門に陽炎とシルフィードがやんわり止めにはいる。

「まあ兎にも角にもですよ。ここはあくまでディスクを使う場所であり、敵も目的もない。となれば、残る場所は二つです」

バットはシルフィードから借りた地図を見ながら説明する。

「パルテノンは大方水鏡さんと鑢さんが攻略済みでしょうから、恐らく奥に向ったと思います」
「となると、あの二人が居るのは”マリーの館”って場所ね」
「そして、まだ調べてない場所は、此処から南東にある”貯蔵庫”」
「どっちにしろ、この二つのどっちかにラストディスクがあるってわけっすか」

話がどんどん纏まっていく。

「よし、じゃあチーム分けしましょ！一つはマリーの館にいく、もう一組は貯蔵庫へ、最後はここで皆の帰りを待つ」
「チョキがマリーの館、パーが貯蔵庫、グーが待機ってことですね」
「固まって動くより、分散して時間短縮ってわけっすか」

シルフィードの提案とバットの捕捉でジャンケンが始まる。

「「「「「「ジャーンケーン・・・！」」」」」」

一呼吸おいて、

「「「「「「「しょい！！」」」」」」」

「「マリーの館！」」

「「貯蔵庫！！」」

「「待機・・・！」」

（って、さっきと同じ組み分けじゃんかよぉ・・・・・・）

チョキ、土門と吹雪。パー、小金井とバット。グー、陽炎とシルフィード。

＊＊＊＊＊

ＨＥＬＬ　ＯＲ　ＨＥＡＶＥＮ

「ほら、セルメダルを早くしておくれ！今にも死愚魔が壊れちまいそうだよ！！」

「はぁぁ、無茶した挙句にこの様とはな」

――チャリン、チャリン、チャリン、チャリン――

竜王はセルメダルを懐から両手一杯にとりだし、キリトの左腕にし

ている腕輪に近づけ、腕輪の凄まじい破損を修復した。

「ふーー、やっと一安心したよ」

「これ以上の無茶はやめてくれ。たかがセルメダル、されどセルメダルだ」

死愚魔の修復のために急遽帰還し、それが終わったキリトはそこでとんでもない悪報を聞く事になる。

「門都が・・・死んだ・・・!!?」

漸く死愚魔が復帰したばかりだというこの瀬戸際にトンデモない報告だと思うだろう。

「馬鹿な!?ワシは信じないよ!」

「ボクだって信じたくないさ。でも事実なんだから仕方ない」

「火影は強い・・・それに、ブライたちは更に強い。門都を殺したのが紅麗だとしても、その意見は変わらない」

激昂するキリトを葵と蛭湖が鎮めようとする。

「・・・・・・・・確かに。火影だけならいざ知らず、あの化物どもは・・・!」

キリトは先ほどの苦汁を思い出し、歯軋りした。

が、しかし

「っつ!」

「また腰を痛めたか?いくら死愚魔との相性が一番良いといっても、”老人の姿”は思いのほか疲れるらしいぞ?私の旧友の話によれば

な」

「うるさいよ！憎まれ口叩きおって・・・・・・」

キリトは竜王の忠告を蹴飛ばし、右手首にしている腕輪型魔導具を作動させた。

腕輪についている鐘の装飾に埋め込まれた核が光ると、キリトの体が劇的な変化を向かせる。

老年期から中年期、中年期から青年期、そして青年期から――――

「・・・・・部屋で待機してますね。お疲れ様！葵さん、蛭湖さん、リュウギョクさん！」

風子達と接していた若年期へと『若返った』のだ。

キリトは足早に自分の持ち場に駆けて行く。

「・・・あの時の年齢の時の性格が一番いいな」

「そう？ボクはお婆ちゃんのキリトさんも好きだよ」

「しかしながら、何時見ても複雑な気分だ」

もう見慣れたことのように雑談する。

「ねぇ二人共・・・足りないモノが沢山ある人間と、自分が多すぎる人間って・・・どっちが哀しい生き物なのかな？」

「「・・・・・・・・・・・・・」」

そんな葵の問いに、竜王と蛭湖は沈黙した。

＊＊＊＊＊

マリーの館。
そこで土門と吹雪は訳のわからん光景を見た。

「あら、お二方。思いのほか早かったですね」
「・・・・・・・・・・」

ヨーロッパ風の洋館の中庭のウッドデッキに置かれた椅子に座り、テーブルの上にあるポットとカップで優雅にハーブティーを飲む七実。
そして幾つかの椅子を分解してつくった簡易な木製ベッドに寝かされた水鏡だった。

「あの、ちょっと・・・何やってんの？」
「なんで優雅に紅茶を飲んでるっすか？」

「実はここの主と仰ったマリーさんにお茶を勧められて飲んだんですけど、実はそのお茶のカップの淵に神経毒が仕込まれていたようなんです。もっとも、マリーさんはあらかじめ一部分だけに毒を塗らず、そこからお茶を飲むことで偽りの無実を証明し、水鏡さんはうっかりお茶を飲んでしまったというわけです」

七実は懇切丁寧に説明した。

「でも私は毒や病に対して免疫がありますので当然のように効果は無く、マリーさんと亭主（ペット）のポチさんは私を殺そうとしたんです」
「ちょっと待って！今亭主と書いてペットと読んだよね？ポチってどういうこと！？」

「まあ勿論返り討ちにしてあげましたよ。今は館の中で大人しくしてもらっています」
「無視か！？オイ、無視なのか！？」
土門の問いを真っ向からスルーしながら説明する七実。
「取りあえず当面の敵は居なくなりましたが、水鏡さんの毒が抜けるまでこうして待っていたのですが・・・・・なにか問題が？」
「「大有りジャアアアアア！！！！！」」
吹雪と土門は大音量で絶叫した。
「何コレ！？新手のボケっすか！！あんた微妙にそういうの似合わないキャラでしょ！？」
「つーか此処にディスクはあったのかオイ！！？」
「いえ、影も形もありません」
「「じゃあ早く石像のトコ来いよ！！」」
色々とみんなのキャラクターが総崩れしてきている。
「えぇ行きますよ。丁度水鏡さんの毒も抜けてきたようですし。そうですよね？」
「あ・・・あぁ・・・なんとかね」
水鏡はゆっくりと上体を起こす。
すると、
――バシィィン！バシィィン！――

なんか鉄の扉の向こうから鞭打つ音が聞こえてきた。

「あ、その扉は開けないほうがいいと思いますよ」

七実はそういったが、

――ギィィ・・・・・・――

土門と吹雪は薄らと館内部を覗き見してみた。

館の中は・・・・・拷問用具の博物館とでもいうべき惨状が広がっていて、その空間に居る人間は二人だった。

一人は目隠しにギャグボールをされ、上半身には革ベルト、下半身にはボロボロの大きな布を纏った巨漢。もう一人は革製の鞭を所持？、スカートに大胆なスリットが入ったドレスを着た三十路前後の女性だった。

そう、この二人こそがポチ（巨漢）とマリー（女王様？）である。

「――――――」

ポチは何か気絶していた床に倒れ伏しているが、マリーはというと・・・・・・・。

「あぁぁ／／／んぁぁぁん／／／／い、いい！／／／／／／」

なんかエロボイスで喘ぎながら三角木馬に乗っていた。しかも両手の自由を自慢の鞭で奪われている。

――ギィィ・・・・・・・・――

扉が閉められた。

「「・・・・・・・・・・・・・」」

沈黙する土門と吹雪。

そして、

「オイィィィいいいいい！！何アレ！？どこをどうすればああなったんすか！？」

「色んな意味で正視に耐えないよアレは！！」

「なんか最初は鞭でポチさんを叩いて喜んでようなんですけど、私が圧勝したら急にあんな感じになっちゃったんです」

「「んな訳あるか！！！」」

信じられないようだが本当である。

マリーは亭主をポチと呼んだり鞭で叩いたりするのが大好きなドS女王様だが、一転して主導権を相手に握られるとドM化するのである。

なんだか言いようのない空気が場を支配する。

――ブゥゥウウウゥゥゥン！！――

バイクのエンジン音。

「火影忍軍頭首、花菱烈火参上だぜ！」
「あーはいはい」

そこへ烈火と刃介がシェードフォーゼに乗って現れた。

「ん？どうしたお前ら？結構数揃ってるのにどうして沈んでるんだ？」

烈火が訊いて見たが、

「・・・・・兎に角、ここにはディスクもないし充分休んだ。石像のところに行こう」

水鏡は立ち上がってそういった。

「おいどういうことだ？石像ってさっきの場所に逆戻りか？」

因みに烈火と刃介は一度石像の間に訪れ、陽炎とシルフィードにディスクを預けてからここにきています。

「そうですね」
「・・・・・そうっすね」
「・・・ここにいると、無駄な力使っちまいそうだ・・・」

なんか皆が妙な雰囲気の中歩き出した。
元いた場所へ帰る為に。

「「あれ？俺たちが来た意味は？」」

多分、つーか確実に・・・・・無駄。

＊＊＊＊＊

貯蔵庫。

一方その頃、土門と吹雪がマリーの館で奇妙奇天烈な体験をしている頃、小金井とバットはこの中で――――

ご飯を食べていた!!（といっても、喰ってるのは殆ど小金井）

数分後、二人は保存食を食い尽くした（しつこいようだが、殆ど小金井が食べた）

「満足ですか？」

「満腹満腹♪」

二人はあらかた蹴散らしたＳＰたちと、周囲のことを確認していく。

「これで階下の部屋は全部調べ終わったな」

「大量の弾薬、武器、水分、食糧や保存食、生活用品・・・・・・確かに燃料補給の為だけの場所みたいですね。もっとも、それは此処までの話みたいですが」

そう、まだ上の階層を調べていない。

小金井とバットは未だにディスクをゲットしていない。

しかし土門たちが三枚も取得したという現実が頭から離れない。

「では行きましょう」
「うん！」

二人は力強く足踏みし、敵地へと乗り込んで行った。

――ウィン――

機械の音がすると同時に開く自動ドア。
その向こう側には殺風景で妙な空間が広がっていた。

冷たい雰囲気漂う広すぎるほど広い部屋。
長く高い壁には何かを収納していると思われる隔壁のハッチが複数ある。
そして部屋の中央には絨毯が敷かれていて、その上には一人の長髪の研究員が椅子に座り、デスクにはパソコン一式と大量の資料が置かれていて、研究員は画面と睨み合いながらキーボードを叩いている。

「・・・わからないな・・・不思議だな、魔導具能力原理・・・そしてオーメダル。オーパーツとしかいいようがない・・・・・・不思議だな・・・」

一般人が見てもチンプンカンプンなグラフやデータが数多く映された画面を見ながら、研究員はブツブツといっている。

「グリードのセルメダルによるヤミーの誕生・・・・・・ブライドライバーとコアメダルによる変身、メダル換装による部分的形態変化と強力なコンボのパワー・・・・・・全くもって不思議だ。リュウギョクの奴、セルの一枚くらい寄越せってんだ・・・・・・」

愚痴る研究員。

「・・・オイ」

「天堂地獄、体内異物混入による人体影響・・・遺伝子変化・・・ウイルスではない・・・不思議だ・・・」

小金井の声を無視して研究員はボヤく。

「おい！ここにディスクあるか？教えろ！」

小金井が二度目にきくと、研究員はゆっくりとこちらに振り向いた。

「鋼金暗器・・・か。超常現象を生むタイプのモノではないなァ・・・パズルタイプの只の武器と言っていいだろう。そっちの女の胸に刺さってる物は、大方電気によって心臓と内臓を刺激して生体活動をより活性化させてるってトコかな？・・・つまり然したる興味は皆無だ」

研究員は死んだ魚のような眼で分析した。

「風神か闇水・・・・・・・欲を言えばコアメダルやセルメダルが見たいなァ・・・・・・お前らはいらん。出て行け」

――ガギン！！――

「ヤ・ダ・ね」

「同じく」

小金井は鎖鎌で威嚇攻撃した。

「ゼット」

研究員はイラっとした様子で誰かの名前を読んだ。

「あいつら・・・なんとかしてくれぇ・・・・・・少しならうるさくしても我慢するからよぉ・・・」

それによって現れたのは、全身を白い帽子、長ったらしい布、白い長袖の服、白い手袋、白い長ズボンで固めた大柄な男だった。唯一垣間見えるのは、服と帽子のスキマから見える眼光だけだ。

ゼットと呼ばれた男はポケットからある物を取り出した。
それは笛、ゼットの手で持つには些か小さい笛だ。ゼットはそれを口元に持っていき、

――ピィィイイイイ!!――

思い切り吹き鳴らした。

――ガン・・・ガン・・・ガン・・・――

次々と開いていく壁の隔壁のハッチ。
その奥からは、死体が腐ったような臭いと、今にも死にそうな息遣いが耳と鼻を刺激する。

「ゾンビ!?」
「しかも大量に待機させてましたか」

――ピッ――

『シュオオオオ』

笛の音と同時にゾンビたちはノロノロ動くかと思えば、予想以上に俊敏な動きで二人に襲い掛かる。

「弐之型”龍”！！」

「ハイキック！」

二人は武器と体術を繰り出してゾンビを蹴散らしていく。

しかし、蹴散らせど蹴散らせど、隔壁の向こうにある薄暗い空間からはゾンビたちが新たに出張ってくる。

（キリが無い！貯蔵庫って・・・ゾンビまで貯蔵してたのかよ・・・・っ）

（ならば狙いは一つ。統率者の始末）

――ヒュ・・・ッ！――

バットは一度跳躍し、思い切り右足を突き出した状態で降下していく。

「ハァァァア！！」

――ズドッ！――

見事な飛び蹴りがゼットの胴体に命中した。

「効かん・・・」

「ッ！」

――ガシッ――

ゼットは一言呟き、バットの足を掴むと、

――ブン！！――

「キャアアア！！」

思い切りバットを床に叩きつけ、壁に投げ飛ばした。

「おォいゼット・・・オレっちの空間・・・絨毯から中に何も入ってこねーよーに暴れろよー。一歩でも踏み込んだら集中力が途切れるぜ。あと出来るだけ静かになァ・・・」

研究員はキュポキュポと音を立てながら耳栓で耳の穴を塞ぎながら命令を下した。

――ピィイイイ！！――

それに応答するようにゼットは笛を吹き、ゾンビたちを統率する。

『ギシャアア！！』

（ただっ広い空間、複数の敵。六つの型を持つ鋼金暗器でこの状況に適している型は二つ！）

小金井は素早く状況確認と自分の戦力確認を行い、鋼金暗器に手を加える。

「四之型・・・”三日月”！武羽冥乱（ブーメラン）！」

――ブゥン！――

小金井は全力で武器を投げ、その軌道上に存在するゾンビたちを細切れにしていく。
けれども、一度に攻撃できる敵の数は限られている。

――ピィ――

ゼットは笛を吹き、まだ開いていない他のハッチを開けていき、中からは更なるゾンビが現れる。

（まったく、これでは先の見えないマラソンマッチですね。やはり、あのゼットという男か、白衣の研究員を止めねば・・・！）

「いいぞ・・・強いといっても人間。しかも女子供だ。人海戦術で攻め続ければいずれ動けなくなる。そのアホども休ませるなよゼットォ。・・・・・・いや待てよ、そっちの女は電気で主要な内臓は勿論、筋肉にまで刺激を与えているとなると・・・常にマッサージを受けている状態だろうから疲れねェか。・・・・・・美人ではあるが、しょうがないな・・・腕と足の一本くらい？いでおかないとなァ」

研究員はさり気に悪刀『鐚』の特性と攻略法を頭に思い浮かべる。
そう、いくら悪刀といえど、損失した部位を活性化させることなどできはしない。

「そいつらが帰ってこなきゃ他の火影連中もここに集まってきやがるよ。魅力的な魔導具、そしてメダルを持ってるカモがノコノコと

なァ・・・・・。闇水、風神、土星の輪、コアメダルにセルメダル――能力原理を調べてみてえお宝ばかりだぜ」

研究員はまたブツブツと喋りだす。

「報告によると火影メンバーもブライ達も全員生き残ってるらしいからなァ・・・よりによって一番つまんねェ魔導具が来ちまったってことか。不運だぜ」

研究員の呟きを小金井は聞き逃さなかった。

「おい、おじさん！それ本当！？水鏡も風子ねーちゃんも！？」

小金井は叫ぶも、研究員はなにも応答しない。
煙草を吸ったりビールを飲んだりするだけだ。

「耳栓ですね」
「って、おいオヤジ！！人の話聞けってんだ！！ていうかまずこっちを向け！！」

小金井は研究員の下に走り寄ろうとする。
しかしその為には取り払うべき壁がある。

「行かせない。そう命令を受けている」

――ドコォ！！――

「ごふ！！」
「小金井君！」

ゼットの蹴りを腹部に喰らってしまい、小金井の体は吹っ飛ぶ。

「・・・とは・・・いえ、そいつらを除いてあと四・五人の火影と四人のブライ側・・・ここに保管してあるゾンビだけじゃ到底役不足だろうなァ。Ｖ―ＩＩ（ロボット）はオレっちの範囲外だし、ゼットに外のゾンビたちを呼ばせるか・・・」

研究員は今後の算段を立て始める。

あの強豪達を直に見たこと知らない者がこういうことをする諺をご存知だろうか？

「なにしろゾンビは消耗品。この煙草と同じだしなァ。それとも”ディスクやるから魔導具とメダルおいてけ”って取引するか？それもいい！そりゃいいぜ！」

取らぬ狸の皮算用（失敗確実の無謀Ｖｅｒ．）

しかし、今の台詞を聞いた二人は、眼光を一気に鋭くした。

――ガシッ！――

「き、貴様・・・！」

「小金井君、行って！」

「オッケー！」

バットはゼットに羽織い締めをかじぇ、小金井を行かせた。

「単細胞生物的生態か・・・？それじゃまるでプラナリアじゃねェか・・・斬っても失った器官が共に再生・・・個別の生命体へと・・・・・――ビッ――」

その時、研究員の耳から何かが抜き取られた。

「これで聞こえるでしょ？ちゃんと会話しよーぜ。ディスクここにあるって本当？」

小金井は手に耳栓を持った状態で、デスクとパソコンに足をかけていた。

「ブツブツ独り言ばっかでガタガタやってて暗いな！で、なに？命令ばっかであんたは何もしない人？」

すると研究員は呆然とした表情だったが、すぐさま顔の陰影が濃くなり表情は一瞬で険しくなった。

数多くの吸殻が山盛りになっていた灰皿をグッと掴み、思い切り投げつける。

「おっと！」

勿論あたりはしなかったが。

すると今度は絨毯の隅に置いてあるインテリ風の観賞用植物に足をむけ、

――ガシャ！！ガシガシッ！！――

八つ当たり全開で蹴りまくった。

「ゼットォオオオ！！てめぇ馬鹿なにやってやがんだァ！！オレっちの空間に何も入れるなって言ったじゃねえかよ、マヌケーーーッ！！」

そこへきて矛先は部下にむかっていく。

「おかげで集中力が一気にパーだよ！また集中すんのにどれだけ労力が必要だと思う！？捕まってんじゃねェよ木偶の坊！！早くこの必要無しども殺しちまえよ！！」

「・・・・・・掴んだときの感触に違和感を感じましたが・・・もしかして、この方の体は？」

「あァ！？・・・・・・なんだ。気づいたのかよ」

研究員は憤怒の態度からゆったりと冷静さを取り戻し、バットの疑問に気づく。

「お察しの通りだよ。おいゼット、ちょっくら見せてやれ」

するとゼットは捕まえられた状態で、服のジッパーを下ろしていく。その服のしたには

「お前だってゾンビだってトコをよォ」

「「！！？」」

腐り果てた異形の体があった。

バットも流石に正視に堪えなかったのか、心なしかゼットをはなした。

「そういうことですか。・・・・・・さっきの独り言から察するに、森の遺伝子で変貌していたゾンビ達のうち、人の心を残した貴重な個体。だが肉体の限界を越えたパワーと、腐敗と崩壊の進行を抑制すべく、仕方なく従わされている・・・といったところでしょうか」

「そういうことだ、百点満点だぜェ！そう、ゼットを侵食している森さんの細胞を抑える延命薬はオレっちだけが持っている」

研究員はその延命の為のカプセル型の錠剤のちらつかせる。

「ゼット・・・ご褒美欲しかったら暴れろ」

「了解・・・！！」

ゼットは崩れそうな声で応答し、小金井に向けて拳を振るう。

小金井は巧みに避けて研究員にこう言った。

「お前・・・自分が何やってるかわかってんのかよォォ！！お前それでも人間なのか！？」

「あーー。オレっちは人間様だァ。だけどこいつらは違うだろ？実験用のマウスにいちいち同情してたら科学の発展は望めねェ！」

――ピィィイイイ！！――

研究員の開き直りと同時にゾンビたちが笛の音を合図に襲ってくる。

（い・・・イヤだ・・・戦えない・・・）

真実を知り、小金井の心は揺さぶられる。

「何をボーっしてるんですか！」

バットはそんな小金井の前に立ち、ゾンビ達の急所やクビにチョップやパンチを繰り出していく。

「小金井薫・・・・・・なぜ戦おうとしない？」

ゼットはそう訊いた。

「・・・・・戦えない。どうすればいいのか、俺にはわからない。今は怪物になっちゃったけど・・・・・お前達も元々は人間で、今はその記憶がなくなってしまった。でもゼットは・・・まだ人間の心が残ってる。っとけばすぐに死んじゃう体を・・・・・・薬があれば命を延ばすことができるんだよね？」

小金井は返答しだす。

「お前達は悪くないのに・・・生きる為に戦わなくちゃいけないんだ。俺は・・・お前達と戦うことはできない。生きようとして戦うお前達に”やめろ”なんて無責任なこともいえないよ」

その表情は実に辛そうだ。

「・・・同情は要らん。人間として生きているお前らには本当の意味で我々の苦しみを理解することができない。・・・・・・で、結局どうするつもりだ？」

「わからない・・・何も出来ない・・・」

小金井はただうつむく。

「なら退いていなさい。後は全部、私が片付けます」

「バット、さん・・・」

バットは小金井の前に勇ましく立ち、全身に力を入れ始めた。

「人化形態封印――巨獣形態解放・・・！」

――パァァアアア！！――

バットの体から眩い閃光が発せられた。
この場の全員がその光に眼を開けられずにいる。

そして光が収まった時には、

「「「ッッ！！？」」」
『キィィイイイ！！』

巨大な蝙蝠が空中で鳴き声を上げていた。
その胸には悪刀『鐚』が刺さっており、ダークブルーの色をした体の皮膚中に血管が浮かんでいることが何よりの証明となっていた。
目の前の羽ばたく獣がバット・ダークの正体であることに。

「ひ・・・ひはは・・・・・・スッゲェェェ！！興味心がハンパないぞオイ！！ゼット、奴は生け捕りにしろ！後でタップリ構造調べてやる！」

研究員は狂喜乱舞してバットの姿を凝視した。

「・・・・・お前らには憎しみも恨みも無いが、許せ。優しさで救われるモノには限りがある」

ゼットがそういって笛を鳴らした瞬間、バットは口を大きく開いた。

『ソニックノイズ！』

――ギュイイイィィィィン！！――

バットの口から発せられた超怪音波は凄まじく耳障りなもので、耳を塞がずにはいられなかった。
しかし、影響はそれだけではなかった。

『ギシャアア！！』
『シュウウウ！！』
『ギギギィィ！！』

ゾンビ達は一斉に統制を失い、自分勝手に暴れだしたのだ。

「（あ、あの女・・・音波を利用してゾンビを逆に・・・）何してるゼット！笛で制御を取り返せ！」

研究員は怒号を飛ばすも、肝心のゼットは耳を塞いでいて意味を為さない。

「不奏（かなでず）――完全なる不協和音の騒音ですが、阿呆の眼を覚ますには丁度良い」

――ビュウウウウウウウン！！――

そこへある女の声が、凄まじい疾風の音と一緒に聞こえてきた。

「ホント。でも意外とカッコいいね、バットさんのそういう格好もさ」

後続してくる少女の声。
それは紛れも無かった。

「ふ・・・風子ねーちゃん・・・」
『金女さん・・・（巨獣形態封印――人化形態解放・・・！）』
小金井は嬉しそうに名を呼び、バットは業務的な声音で名を呟き人間形態に戻る。
そして、研究員は風子の右手に装着された魔導具と、金女が手に持っているメダルを眼にする。
「おっ・・・おおっ！風神にセルメダル！！？」
喜びが倍増した。
「来た来た来たよォォ！！おい、てめえら！あれとってこい！本物だぜ！今の風見たか？ホラ、取って来い！！」
研究員は無我夢中になってゾンビどもに命令を下した。
幸いバットが人型にもどった影響もあって、指揮の乱れはなおっていたのだ。
「不来（きたらず）――あんまり寄り付かないでくれませんかね？」
――チャリーン！――
「変身」
金女はセルメダルを指ではじき、そのままバイスロットに入ったのを確認すると、即座にグラップアクセラレーターを捻った。
――パカッ！――

展開される球体状のフィールド。転送されてくる幾つ物リセプタクルオーブを起点に、両腕・両脚・胸部・背中・頭部といった部分がフレームとマスクで覆われていく。

「不忍（しのばず）」

仮面ライダーチェリオ、只今推参！

「新しい・・・仮面ライダー・・・？」

小金井は呆然としたようすでチェリオのビジュアルを眺めた。
勿論、研究員のやかましい声もあったが、この際全て聞き流しおこう。

「壁の直ぐ近くで盗み聞きさせてもらいましたが、随分不愉快なお話でしたね」
「だから手荒なことはしたくないけど、邪魔すんなら容赦しない！私たちは優しくないから」
「あららら、ひでーなァ！こいつら可哀相じゃねーかァ？生きる為に戦うしかない奴らにそりゃあんまりってもんだぜ！」
「我々はヒーローではなく、ただの高校生とただの人殺しですよ」

研究員の言葉を真っ向から切り捨てる言葉。

「困ってる人を全員救えるわけじゃないし、自分のできる範囲でしか救えない。ここへは友達を助けにきたんだ。冷たいようだけど、あんた達の為じゃない」
「私も所詮は金で雇われた傭兵崩れの忍者。依頼以外の余計なことはしたくありませんし、したくもありません。でも、それと関係な

く一番貴方達のためにできることは」

「「其処のバカに天罰を喰らわせる」」

二人は声をそろえ、底冷えする表情と瞳で宣言する。
指差された研究員は煙草をくわえながらこう言い返す。

「はい？何言ってんのあんたら？オレっちはこいつら延命してやれる救世主なんだぜ？こいつらがそんなこと願ってるわけねーっしょ」
「関係ありません。取りあえず敵は斬り伏せるのみ」

チェリオと風子は歩いて研究員に近づくと、ゼットは笛を吹こうとする。

「ゼット・・・俺・・・ちょっと前にお前達と同じような人に会ったよ。その人達はさ・・・天堂地獄にさわって死ねない体になった。人間じゃなくなって何百年も生きてる、今も生きてる。その人たちが俺たちになんて言ったと思う？」

小金井はあたりったけの感情を込めた。

「人間ていいなァ・・・・・・我等を楽にしてくれって。あの人たち、最後は人間でいたかったんだよ」
「・・・・・・・・」

ゼットは黙って聞いている。
その一方で、

「・・・オイ・・・なにやってんだよォゼットくん？ホラ・・・早く笛ふいて命令しろよ。こいつらを止めるようにってさァ」

研究員の危機は刻々と迫る。

「お前だって人間だろ、ゼット！！」

「・・・・・・・・・・・・・・ッ」

その時、ゼットの頭の中で何かが動いた。

――ブンッ！！――

それと同時に、研究員の体も二つの拳によってぶっ飛ばされた。

「ぐはッ！！」

「アホらし・・・」

いとも容易く机に体をぶつけた研究員の有様にチェリオは呆れる。

変身する必要さえあったのかと疑うほどだ。

「ちくしょ・・・こいつら・・・・・・ゼットォーーッ――バギッ！！――おぶ！！」

言葉を紡ぐ途中で顔面に風子とチェリオのけりがはいった。

「ゼット！！笛を・・・早く吹け！！」

「・・・・・・・・・・・・・・」

ただ沈黙するゼット。彼の心には、先ほど小金井の言葉が響き渡っていた。

――ゴン！――

「あぐ・・・・・・！！」
「不黙（だまらず）――いい加減、気を失って欲しいのですが」
「・・・ゼット・・・早く、命令を・・・」
（まだ言いますか）

研究員のしぶとさにチェリオは本気で呆れ始めた。
次の一撃で斬り殺そうかと思うくらいに。

一方でゼットは震える手で笛を吹こうとするも、
お前だって人間だろ・・・・・・そういってくれたときの感情が忘れられない。

――カツン――

とうとう、笛が床に落ちた。

「わからない・・・・・・」

そう呟いたゼット。
その瞬間、

――バンッ！――
――ガキン！――

研究員は風子めがけて拳銃を引き金を引いたが、チェリオは弾丸の軌道上に腕を添えて防御する。
研究員は舌打ちし、狙いをゼットに変えた。

「この出来損ないが・・・・・・！！」

――バンッ！――
――バリィィン！――

二度目の銃声。しかしそれも無駄に終わる。
バットの魔力で一時的に形成された氷の壁によって。

「なぜ・・・だ？なぜ俺を・・・？」
「理由はこのお子様から聞いてください」
「お子様言うんじゃねーよ！」

小金井は反論するが、反論したせいでより子供っぽく見える。

「さっき話した呪われた人達もさ、やっぱり俺たちを助けてくれたんだ！自分たちは何百年もずっと地下から出られなかったのに、俺たちを外に出そうと氷の中で道を教えてくれたんだ。だから、俺は今、生きてる！だから俺もお前を助けたい！」

小金井の顔には決意の二文字があった。

「ケッ・・・・・・」

――チャキ――
――斬ッ！――

「無粋な真似は許しません」

拳銃は忍刀の刃によってガラクタに変えられた。

「・・・・・・・・もう一度聞こう。その呪われた者達も”人間

”を望むのだな?こんな姿になった俺でも・・・・・・俺でも人間でいいんだな?」

小金井は頷いた。ただただ純粋に。

「そうか・・・」

ゼットは笛を手にした。

「そうだ、吹け!!こいつらを殺して風神とメダルを手に入れろ!!」

――ピイイイイイイイイイ!!!!――

ゼットは全力で笛をふき、甲高く大きな音を奏でた。

『グル・・・・・・』
『ウゥゥ・・・・・・』

するとゾンビたちの動きは静かになり、皆一斉にハッチのなかの持ち場に帰っていく。

「ただ”生きたい”。こんな姿になった俺の考える事はそれだけだった。しかし少し間違っていたのかもしれん」

ゼットは”全てのゾンビ達の沈静”を行い、結論をだしていく。

「”人間らしく生きる”。例えその結果が死であろうと、惨めにみすぼらしく生き続けるよりはきっとマシだろう」

「ゼット・・・お前・・・」

小金井は涙混じりに声を出す。

「いいのだ。我々はもう日常には決して戻れない。薬もいずれ底を尽きる。なにより、生まれが最初から化物でも、人らしく美しく生きていける者とも出会えた」

「どういたしまして」

バットは社交辞令か、それとも本音か。かるくお辞儀をした。

「行け・・・」

そして五枚目のディスクを手渡すと同時に、

「生きろよ!!」

全てを託した。

＊＊＊＊＊

そして全てが終わった頃。

「・・・あーあ、逃がしちまいやがってマヌケがァ・・・・・・で？おめーはどうすんの？薬を奪うか、オレっちを殺して恨みをはらす？」

研究員はゼットを二人きりになった部屋で再びパソコンのデータを

向き合っていた。

「薬はもう要らない。殺しもしない。最後まで人間として生きたいからな」

「へェ・・・・・・・」

――ゴギャ！！――

ゼットは予告無く、拳でパソコンを粉砕した。

「さらばだ」

そして、『人間ゼット』はいずこかへ立ち去った。

「・・・・・あーあ・・・バックアップデータまで・・・今までオレっちがやってきたことが全部パーですかい？」

研究員は煙草をデスクの表面に押し付けた。

「なーーんかどうでもよくなっちまったなァ」

研究員は大量の錠剤を取り出していく。

「大体よォ、てめーらうるせーんだ。研究に集中できやしねーよォ・・・・・静かになったし・・・寝るか・・・・・・」

研究員は何十粒もの睡眠薬を一気に飲み干した。

「そういえ、四日も寝てねえ――――」

生きるとか死ぬとか、どうでもいいじゃねェの。
長いか短いか、早いか遅いか、それだけのことだろ？

そして男は、永遠の眠りにつき、二度と目覚めることはなかった。

女狐と紅茶と最後のディスク（後書き）

次回、仮面ライダーブライ

ＤＥＡＴＨと蛭湖とジョーカー

ＤＥＡＴＨと蛭湖とジョーカー（前書き）

仮面ライダーブライ！
前回の三つの出来事は！

一つ！土門＆吹雪と陽炎＆シルフィードが合流し、キリトからディスクを奪い返した！

二つ！マリーの館には、ちょっとしたギャグシーンが展開！

そして三つ！小金井とバットは、ゾンビ達のリーダー・ゼットから五枚目のディスクを託された！

ＤＥＡＴＨと蛭湖とジョーカー

ＨＥＬＬ　ＯＲ　ＨＥＡＶＥＮへ突入する為の唯一の建造物。
名前は一切不明だが、この建物の中枢である石像の間に全員が集まっていた。

「・・・・・久しぶりだな」
「えぇ、お久しぶりです兄さん」

そこで、十五年もの間、音信不通となっていた兄妹が再会した。
白髪の無造作ヘアに赤い瞳をした兄の名は鋼刃介。
忍装束に茶髪のミニポニーテールをした妹の名は鋼金女。

「まさか相生忍軍の教えを受けていた上、仮面ライダーになっていたとはな」
「生き延びるにはそうするしかなかったもので」

二人は確認しあうように会話する。
とても感動の再会とは程遠い会話内容である。

「お互い随分見ぬ間に変わったもんだ」
「変わらない物などこの世にはありません。この世界は変化の連続で構築されていますからね。それはそうとにーにー」
「なんだよにーにーって？どこの妹ネタ？」

何処ぞの金髪ロリっ娘の真似をする金女。

「変わったといえば、兄さんの声も杉田智和と中井和哉を足して二で割った感じですね。それにダークな感じのイケメンになってます

し」

「どうでもいいことだろ。つーかなんでプロ声優の名前をスラスラ言えるんだ？顔の評価については嬉しいけどさ！」

その時刃介は、金女がどんな道を歩んでいるのかがメチャクチャ気になってきた。

「まあ、その辺は後で聞くが・・・・・・シルフィード」

「なにかしら？」

「テメェ金女（コイツ）のこと知ってたなら何故俺に教えなかった？」

「その辺は後で聞いて頂戴♪」

ウインクしてエメラルドグリーンの瞳を薄ら光らせるシルフィード。

「テメェ・・・・・・」

ブラッドレッドの瞳に力をこめ、今にも喰ってかかりそうな表情をする刃介。

「落ち着けよお前ら！今はこっちが先決だろ！」

と、烈火が止めに入った。

刃介は舌打ちしながらも矛先を引っ込めたようで、烈火たち火影はホっとする。

そして目の前の本題に視界を向けた。

小金井達がラストディスクを手に入れて戻ってきたとき、石像は森光蘭という人間の形ではなくなっていた。

一言で言うなら、刺々しい繭。

「手に入れたディスクを次々入れていったら、段階的に変化して、第四形態に移行したわ」

シルフィードは軽口を叩くようにいった。

そう、これはあくまで第四段階。まだこの先に最終段階があるのだ。

「そして・・・・・・」

シルフィードは小金井からラストディスクを受け取り、機械にさしこんだ。

「これで最後（ラスト）ね」

――ピキ・・・ピキ・・・――

すると、繭状態の石像は嫌な音を立てて罅割れ始める。

「出てきますね、最後の鍵が」

「あぁ」

それを見ていた刃介と七実は呟く。

――バギン！！――

そしてとうとう、石像の繭は砕け散った。

「なるほど、そういうことですか」

それの正体をみた金女は納得したように眼を細めた。

繭という殻を破って現れたのは、眼球のような球体からは視神経のような物が伸びている物体。
全ての火影の民にとって、禁避すべき物の象徴。

天堂地獄。

つまり森光蘭は石像を通して、自らの変貌の過程を誇示したということなのだろう。
一体それになんの意味があるのかは不明だが。

そして機械の液晶にはこんな文章が映し出されていた。

「かなり舐められてますね」

金女は苛立つように言った。
文章の内容はこうだった。

次の英字を並べ変えてお前達の運命をつくれ
――ＫＥＹ　ＷＯＲＤ――
ＤＩＳＫ１　＞Ａ
ＤＩＳＫ２　＞Ｔ
ＤＩＳＫ３　＞Ｈ
ＤＩＳＫ４　＞Ｅ
ＤＩＳＫ５　＞Ｄ

「阿呆らしいことを」

それを見た七実は小さく呟いた。

「取りあえず入力するぞ。あ、それから火影のバカガキども、訳わからん単語はつくらんように」
「なんだよやぶから棒に！」
「それは俺たちがバカってことか！」
「バカガキだと言ってるのにそんな質問してくるからバカなんだよ」

刃介は烈火と土門に返答しながらキーワードを入力する。
余りに簡単で、敵がいかに勝利を確信しているかを予想させるアナグラム。

ＡＴＨＥＤ
←
ＤＥＡＴＨ＝死

――ウォン・・・・・・――

すると石像が音を立てて降下していき、直下にある穴に鍵を差し込むようにして合着した。

「今度は何・・・！？」

――ゴゴゴゴゴ・・・！――

地響きのような音がしていき、石像と機械と一体になっていた上座がゆっくりと後ろへ下がっていく。
すると、その下に隠された通路は現れた。

「見ろよ。ラストステージへの入り口だぜ」

烈火はそれを見て、決意を新たにするように告げた。

「なるほど。下り階段の隠し通路ということは、あの湖の水面下たる地下道を通って本丸に行けというわけだな」

刃介はシェードフォーゼのエンジンをふかしながら呟く。

「・・・みんな・・・よくここまで頑張ったわ」

そこへ陽炎が全員に声をかける。

「私は・・・みんなを心から誇りに思います」

全員は顔を引き締めて言葉に耳を傾ける。

「そして願わくば――勝利を手に入れましょう！」

そうして、ファイナルダンジョンへと足を踏み入れていった。

＊＊＊＊＊

ＦＩＮＡＬ（ファイナル）　ＭＩＳＳＩＯＮ（ミッション）
ＨＥＬＬ（ヘル）　ＯＲ（オア）　ＨＥＡＶＥＮ（ヘブン）

遂に新生火影忍軍は、裏麗本拠地に到達した。

『ようこそ火影忍軍！』

そこへスピーカーから声が出てくる。

『要塞都市ＳＯＤＯＭの観光は如何でしたか？』

「烈火・・・この声」

「葵だ」

風子と烈火のみならず、彼と面識のあるものは全員声の主を特定した。

『そこへ七つのエレベーターがあるのが見えますよね？定員二名のエレベーター・・・・・・各人お好きなところへとお入り下さい』

確かに向こう側にはエレベーターのドアが７つ。

『止まる階は自動的に決まり、７つ全ての出口は違う。どのルートも最終的には最上階まで来る事ができます。今までの戦いから見て、難易度を更に上げるべくヤミーを各種配置しております』

葵は懇切丁寧に説明する。

『・・・何人上がってこれるかな？今度は本気で殺しに行くよ』

「ざけんな馬鹿野郎！！そっちこそ頭洗って待ってやがれ！！」

（頭じゃなくて首だろ）

さりげに刃介は烈火の間違いに内心ツッコむ。

「俺たちゃ火影！！最強無敵だ！！全員でテメーの前に現れる！！」

烈火は大声で叫び、

「姫は、返してもらうぜ」

そして最後に宣言した。

「キャ～～♪烈火カッコい～～♪」
「お？そうかい？」
「惚れ直した流石リーダー！！」
「おお！そうかいそうかい！？」

見事な啖呵に風子と小金井が大絶賛し、天狗になる烈火。

「洗うのは頭じゃなくて首だぞ。バカだな」
「あ”ーーうるせぇうるせぇうるせぇうるせえ」
「俺も同じこと考えてたぞ」
「あーもうやかましいやかましいやかましい」

水鏡と刃介の言い分に不貞腐れる烈火。

「水鏡！お前はホント嫌な奴だ。初めて会ったときからずーっとそうだ！冷たいしよ！」
「・・・・・・・・・」

そういわれた水鏡は”ほっとけ”とでも言わんばかりの表情になる。

「お前もだ、風子！いつまでも女らしい色気がでてこねぇ！そんなんじゃ嫁さんになれねーぞ」
「っッ！！／／／／／／」

それを言われた風子は顔を真っ赤にしながらガーンとなる。

（うふふ、風子さん・・・そういうことでしたか）

その風子の変化に七実は何か勘付いたようだ。十中八苦恋愛関係であろうが。

「小金井ナマイキすぎ！小せぇんだから牛乳飲んで身長伸ばせ！」
（牛乳だけじゃ背は大きくなりませんよ。ちゃんと栄養とって眠らなきゃ）

金女は烈火の言い分に内心、きちんとした科学的根拠のある補強策を述べていた。

「土門はゴリラ！！」
「んだとテメーっ！！」

うん。こっちはどうでもいいな。

「母ちゃん優しく甘えさせろ！タマには綺麗な服着ろ！」

その言葉をキョトンとして聞いている陽炎。

「七実ちゃん！もっと楽しそうに笑え！その黒い笑み怖いぞ・・・」
「あら、すいません」

七実は邪悪な笑みから真顔に戻った。

「そんで鋼！ガメついのもいいけど、溜め込みすぎずに時折パーっと景気よくイケ！！」

「それだけの蓄えができたらな」

と、刃介は返答する。

「んでもって皆大好きじゃ！！勝手に死ぬなよ！！以上！！」

そうして烈火は、全員に向けて渇を入れたつもりなのだろか。無理矢理最後を締め括った。

「フッ・・・言われずともこんな陰気臭いところでくたばりはしねーよ。けどな、そんな啖呵をキッた以上、テメェも死ぬんじゃねぇぞ花菱」

「おうよ！！」

『我刀流に火影よ』

「「！！」」

行き成り会話に割り込んでくる女の声。

今度のものはスピーカーから流れてくるものではない、まるで壁そのものから音声が出ているかのようだ。

『うかれているのなら、今すぐその考えは捨てることだ。この先に用意したヤミーは中々の出来栄えだからな』

「リュウギョク、か。・・・忍法『声帯移し（せいたいうつ）』か？」

『相生忍軍ではそう呼んでるらしいが、真庭忍軍では忍法「音飛（おとと）ばし」と呼んでいる』

刃介はかつてそれを使った男のことを思いしながら言うも、竜王はそれを壁を媒介にして否定する。

本来は有機生命体を利用して音声を伝達させるのが声帯移しや音飛ばしという忍法なのだが、無機物無生物を媒介にできる忍者という

ことが、竜王の実力と練度の高さを証明している。

「忍法の御教授なんざどうでも良い。俺とお前はどの道、殺し合うんだからな」

『ならば直ぐ来るがいい。こちらの準備もそれまでには完了する』

「あぁ・・・死装束用意して待ってろ」

『悪いが私が忍び装束を脱ぐのは風呂に入るときだけだ』

一見不毛そうに見える会話だが、その裏ではお互いにお互いの心情という腹の探り合いをやっているのだ。

「あ、そ。兎にも角にも、残りのコア全部貰うからそのつもりで覚悟しろ」

『二度目だが、ならば直ぐに来るがいい』

そうして、竜王の気配は完全に掻き消えた。

「上等だぜ。完全体になっていようと、俺は俺の『欲望』でそれを越えてやる」

誓いを立てるように、刃介は口にした。欲望に忠実な彼だからこその台詞。

ただ単純に負けたくない、絶対に勝ちたいと思うが故の言葉だ。

我刀流二十代目当主、鋼刃介。

先祖代々その心に憑かれし欲望は、その名の通り刃金（はがね）という単語が相応しい。

＊＊＊＊＊

Ｈ（ヘル）　ＯＲ（オア）　Ｈ（ヘブン）（ルートＣ）

石島土門と凍空吹雪

このルートを進む巨漢パワーファイターたちを待ち受けるのは、やけに広々とした部屋に佇む一人の青年と一体の怪人。

裏麗四大首領が一人、蛭湖。

そして重量系の”バクヤミー”。

「あんたらが俺っちらの対戦相手って訳っすか」

「死四天・蛭湖。隣にいるのは束の間の相方であるバクヤミーだ」

『グゥゥゥ』

バクヤミーはいびきをかくように唸る。

「まあ宜しく頼むよ。石島土門に凍空吹雪」

「・・・・・あんた、礼儀正しいな」

土門は蛭湖の態度に意外性を感じた。

「そんな事は無いさ」

蛭湖はそういうと、ナイフを取り出す。

「神聖な戦いにおいて相手に敬意を表するのは当然だ」

そのナイフで右手の甲を突き刺し、流血を起こした。

ボタボタと流れる血液、それは大した時間もないうちにあっと言う間に固まり、歪な血の剣となす。

「！！？」

「まさか・・・・・・」

「そうか。君達と私は初対面。私の能力を知らないか・・・。私は己の血を武器にする。こんな風にね！」

簡単に説明し、蛭湖はこちらへ低姿勢で跳躍してくる。

「おわ！？」

土門はギリギリでかわしたが、

――ザシュ！――

蛭湖は空かさず軌道を変え、土門の体に切り傷をつくる。

（速ェ・・・！）

高度な戦闘技術に土門も焦る。

『グゥゥゥオ』

するとバクヤミーが唸り、鼻の部分からなにやら光量をを漏らし始めた。

「させないっす！」

――ズガァァン！！――

そこへ吹雪が双刀を思い切り叩きつけてバクヤミーを吹っ飛ばした。

『グウォォォン！！』

しかしそこは重量系ヤミーだけあって壁に激突した程度で済んだらしい。

「意外と梃子摺りそうっすね。そっちはどうっすか？」

「ぺっ・・・なんとか大丈夫だ。にしてもこの野郎、キリト並の強さかもしんないな」

土門は血の刃を噛んで折り、蛭湖に拳を喰らわせたらしい。

そして血の刃を吐き捨てて返事をする。

「けれど、一つ気になることがある」

「・・・・・・背中っすか」

そう、二人は薄薄勘付いていた。

蛭湖の背中に纏わり付く邪気を。

その邪気の正体は、”不死身の蛭湖”という通称の由来でも在る。

「私の背中の邪気に気づいたか。流石は火影の一人、そしてトライブ財閥の用心棒。眼が利くらしい」

すると蛭湖は羽織っていたコートを脱ぎ、背中にある邪気の正体をみせた。

――ドクン、ドクン、ドクン・・・！――

「生体魔導具『血種（けっしゅ）』」

核の玉が埋め込まれた心臓が、蛭湖の背中に張り付き、血管という根を張っていた。

「通常の場合、血液が体外へ1／2流れ出ると人は出血死する。この命の液体を武器として操る私の力の源はここにある。私の二つ目の心臓だ」

血種の鼓動音をバックに、蛭湖は己が唯一の魔導具の特性を語りだす。

「この魔導具により精製される『魔血（まけつ）』・・・私の体を巡りこれは、常人の血液の濃度、量を凌駕する。循環作用、凝固作用、運搬作用、全て意のままに操ることができるのさ」

すると蛭湖は砕かれた血の剣を一度液状にすると、再び凝固させて握力で砕いた。

それによって繰り出される技は、

「血塊弾（けっかいだん）！」

凝固を極めた血液の一斉掃射。

手動による投手ではあるが、蛭湖の身体能力と血液の硬さもあいまってかなりの威力になっている。

「「うおっ！」」

思わず土門と吹雪は身をかがめてそれらを避けた。

不発に終わった血塊弾は壁に激突し、穴をあける。

「大型の弾丸もいいとこじゃないっすか？」

「だったら先手必勝だ！」

土門は陽炎から貰った”物品を収納する”魔導具”蔵王（くらおう）”からあるものを取り出す。

「嘴王（くちばしおう）！！」

取り出されたのは、名前の通り鳥の嘴を模した攻撃部位に、何十メートルもの鎖が付いた魔導具だった。

「とォー・・・りゃ！！」

「回処帯（かいじょたい）！」

土門が嘴王がブン投げると、吹雪も勢い良く突進していく。

結果、

――ゴドォ・・・・・・！！――

実に鈍くて嫌な音を立てながら、蛭湖とバクヤミーに攻撃が命中した。

体から流れ出る血液とセルメダルの量はかなりのものだ。

（（避けない！？））

土門と吹雪は、最悪受け流せそうな攻撃をあえて受けたのだと悟った。

「ふ・・・フフフ・・・」
『・・・・・・・・・』

蛭湖は吐血まじりに笑い、バクヤミーは無言のままとなる。

「火影忍軍石島土門・・・・・私は見極めたい。君のその強さの根源を！数々の強豪たちを打ち破った力の正体をね！」

蛭湖は流血する体には気にも留めず喋りだす。

「そして凍空吹雪、君は刮目することになる。バクヤミーの能力をね」
『グゥゥゥ！』

バクヤミーは再び唸り声を上げた。

――オンッ――

奇妙な音をたてて、蛭湖の姿が複数に視認される。
この技の名は幻術の別魅（わけみ）。紅麗も使用する分身の術のようなものである。
もっともこの幻術は極めに極めれば幻の像にも実体を持たせることができるが、それほどの境地に到っているのは幻獣郎や竜王くらいのものだろう。

「嘴王！！」

土門は再び嘴王の鎖を部屋中に散乱させるくらいの気合で武器を投げ、次々と分身していく蛭湖を攻撃する。
しかし攻撃が命中してもそれは幻ばかりだ。

『グウォォォン！！』

すると今度はバクヤミーが咆哮し、飛び散ったセルメダルに光を灯していく。

光が灯ったセルメダルは次々とバクヤミーの頭上に集まり、巨大なエネルギーの塊となる。

『グウォン！！』

――ブンッ！――

バクヤミーはその巨大なエネルギーを丸ごと吹雪に投げつけた。

「ッ！させるか！」

吹雪は即座に反応し、バッティングの要領で武器を振り、エネルギー弾という玉を打ち返した。

しかしそれは意味が無いものだった。

――バクッ！――

バクヤミーは打ち返されたエネルギーを逆に吸収してみせたのだ。

モデルとなった獏という生き物は実在するものと架空のものがある。

片方は実在していて草や果実を食べている草食動物としての獏。

もう片方は中国において悪夢を食すと言われている獏だ。

この光景はまるで、バクヤミー自身が味わった苦痛という悪夢を自ら食したようにも感じる。

「リサイクルなヤミーっすねぇ・・・・・・」

目の前の光景に吹雪は半ば感心するように呟いた。
もっともそのリサイクルは限定的なようだが。

だが向こうでは、体中に血を浴びせられ、固まった血で体の自由が利かずにいる土門がいた。

「・・・賭けをしよう、土門君。死か生か。君が今日まで生き残ってきた強者の資質、是非確かめさせて欲しい」

蛭湖の攻撃準備は万端である。

「――死・・・仲間に救われてきた。運が良かった。それまでの男だったとする。――生・・・実力も当然、運をも味方にする天賦の才をもつ戦士と認めよう」

そして降りかかる一撃。

「血塊弾!!」

血液の弾丸が、土門の肉体に次々と命中していく。

「土門くん!」
『グゥゥモォォ』
「くッ」

吹雪は当然助けようとするがバクヤミーが邪魔で加勢にいけずじまいだ。
しかし、本当に加勢は要らなかった。

「おおおおおおおおおおおお！！！！」

土門は攻撃に耐え切って見せた。

「こんな銀玉鉄砲効くかよ、バカチン！！ぬるいぜ流血野郎！！」

――メキメキメキメキ！！――

――ピキピキビキビキ！！――

土門のバカ力が、彼自身を戒めていた血液の枷を剥がしていく。

「りゃあ！！」

――パキィィィィン！！――

「ばッ・・・（血固めが壊された！？）」

蛭湖は今まで潜り抜けた者のいない技を筋力と根性で打ち破った男の出現に、心から驚く。・

「うっ・・・（しまった・・・使いすぎたか・・・）」

蛭湖は両膝を床につき、音がするほどに呼吸する。

「貧血だな蛭湖。オレぁ少々血の気が多い性質でな。まだまだ余裕だぜ？むしろ血塊弾で輸血状態になったかもな。おい、保健室いくか？」

それは要するに降参するか？という言葉の遠回しである。

「その必要は・・・・・・」

蛭湖は一息いれ、

「無い！！」

拒否した。

そして部屋の壁につくられた数多くの棚の近くにより、棚の上においてあった赤い液体が入ったビンを手に取る。

「弾倉に6発しか入らないリボルバー。撃ち終わったらまた弾丸をこめる。同じ事さ」

――バリィィン！！――

宣言通り、六つの血液入りのビンは無惨に割られ、蛭湖の全身に血の雨となって降り注ぐ。

しかし血種が降り注ぐ雨を一滴残さずドクンドクンと吸収する。輸血が滞りなく完了していく。

「まだ終わらない！！血塊弾！！」

再び幾つもの血液の弾丸が発射されていく

かと思われた。

「丸後如！！」

「ぐおッッ！！」

バクヤミーを振り切った吹雪の体当たり、蛭湖はぶっ飛ばされてしまった。

「な・・・ぜ・・・だ？なぜ君達は倒れない！？少なくとも火影の殆どはさしたる戦闘教育も受けていない筈なのに、何故君達は倒れない！？我々は戦いのエリートなのに、なぜ互角に戦える！？」

蛭湖は今まで吹き黙っていたもの全てを吐き出すように問い詰めた。

「俺っちはただ、見ず知らずの俺っちを拾ってくれた会長に恩を返したいから戦ってるっす。正直な話、戦闘訓練なんて積んでない・・・殆ど直感と怪力頼みで戦ってるっすよ。はっきり言って化物と直接戦うなんて怖いっすけど、恩人に仇を返すような不始末だけはやりたくない・・・・・・それだけっす」

「俺たちもよ、倒れたくないから倒れないんだよ。俺ら火影はみんなで”柳助けようマラソン”をバリバリ走ってんだ。まだ一人も脱落してねぇ！全員辛いのも痛いのも忘れてる！ゴールは目の前だ！」

吹雪と土門はただただ本音だけで語った。

「蛭湖・・・あんたは何の為に戦うっすか？文字通り、血達磨になってまでね？」

「使命感」

一言だけ、蛭湖は返答した。

「地獄のような戦闘教育、実践を繰り返し気づけば与えられていたポスト、裏麗死死天！理由など無い！私は只任務を遂行し、自分の居場所でなすべきことを成す！」

蛭湖は血の剣を生やし、低姿勢で跳躍する。

「私は死四天の蛭湖！その使命は戦うこと！！」

蛭湖は己の何かが命ずるままに動く。

その刃を土門に突き刺すべく動いていく。

「眠調（みんちょう）！」

『グウウウウ！！』

一方吹雪とバクヤミーは体当たりと体当たりをぶつけ合っていた。

――ドゥガン！――

『グムゥウウウ！！』

「っしゃ！」

結果としては吹雪の眠調が勝った。

バクヤミーは十数枚のセルメダルを撒き散らしながら床を転がる。

だが、

「ぐぁあぁあああ！！」

土門の悲痛な叫び声が聞こえて来た。

「ぐッ・・・痛・・・・・・・」

不自然な曲がり方でだらりとぶら下がる土門の右腕。

確実に骨は折れたとみたいいだろう。

それを引き起こすだけの硬度を誇ったものが、蛭湖の左手に纏わりついている。

いや、超硬度に凝固した血液で左の拳全体を覆っているといってよいだろう。

「血塊球（けっかいきゅう）。これで君の利き腕は封じた！」

しかし、先ほどの血塊弾と今の血塊球によって蛭湖はまた多くの血液を消費した。

「もっとだ・・・もっと血を・・・」

若干ふらつきながらも棚に足を向けて補充を行おうとする蛭湖。

「これ以上――ズドォオオオ！！！――ッッ！！な、なんすかこの極太の光線は！！？」

止めようと思った矢先にそれは必要なしとなった。

凄まじい轟音を発しながら、ＨＥＬＬ　ＯＲ　ＨＥＡＶＥＮの階層を破壊する光線が、蛭湖の血液ストックを周囲の壁ごと粉砕したのだ。

「こ・・・の、波動は・・・死愚魔！？（しまった・・・血液が！）」

最悪なことに、仲間であるはずのキリトが別の場所で行った戦闘の副産物を思わぬところで喰らってしまったのは、味方である蛭湖という皮肉な結果だった。

（ッ――チャンス！）

蛭湖はアクシデントに気を取られているうちに、吹雪は一度双刀『鎚』を投げ捨て、身をかがめて構えを取った。

「完成形変体刀十二本が一本、賊刀『鎧』の限定奥義！」

吹雪は体中に力をいれ、『鎧』全体に付随した刃の一つ一つに気合を伝達させるくらいの意気込みでいく。

「刀賊鴎（とうぞくかもめ）！！」

ズン！という音を立てて、吹雪は全力で駆け出した。

目標は、バクヤミー！

「ウオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

大声で叫び、全速力で突進していく吹雪。

今まで使ってきた体当たり技とは比べ物にならない程の勢いだ。

賊刀『鎧』は本来、素で２ｍを優に越える体長をした人間が、自分の体重と賊刀の重量を勢いに乗せることで初めて効果を発揮する。

しかし吹雪の体重は超というほどのものじゃない。

しかしそこは凍空一族特有の怪力で補う。いや、補うどころではなく、より強化するのだ。

『グゥゥオオオオ！！』

――ドガァァアアアン！！――

結果は言うまでも無く、バクヤミーは大量のセルメダルとして爆散した。

「はあ、はあ、はあ・・・・・・」

流石に全力を出しての突進だった為、流石の吹雪も荒息をつく。

「土門くん、こっちは片付いたっす。今か「残念だがもう遅いよ」

だけど振り返ったときには、蛭湖は土門の体にしがみつき、いつでも彼の首を圧し折れる体制をとっていた。

しかし蛭湖の狙いはそこではない。ただただこの場を切り抜ける為ではなく、次の場面でも戦えるように体の血を補充する必要がある。

「死か生か・・・最後に運は私に巡ってきたようだよ。人間の血液の質を探る事もできる血種で君の血液型を調べた結果！私と同じ血液型、この意味がわかるな？」（デッド・オア・アライブ）

「まさか、土門くんの血を吸う気っすか！？」

「ご名答だ！」

――シュオオオオオ――

血種の効力により、傷口から流れ出る血液が、土門の体内から体外へ吸い出され、蛭湖へと送り込まれてしまう。

「君は素晴らしい戦士だ。ここで君が死しても、その勇猛な血は私の中で生き続け、涸れる事はない！戦えたことに感謝する、石島土門」

そう言いながら血を吸い続ける

「どの道私は凍空吹雪との戦いでは負けるだろう。ならせめて一人だけでも減らす。私は与えられた使命を果たす！」

「薄っぺらいっすね。そんな事しても、土門くんは何度だって地獄から這い上がってくるっすよ」

吹雪の言ったとおり、土門は決して志半ばで死ぬような男ではない。

「おおおおおおおおお！！！」

まだ希望を捨ててはいない。

（おかしい！？石島土門の体から血液が流れてこない！戦いであれだけ血の道をつくったというのに・・・・・・！？そして密着している体が感じる違和感！首を折れない、固い、そして・・・・・・冷たい！）

蛭湖の頭の中から勝算が疑問に変わっていく。

（血液が失われていく為の低温ではない！これはまるで、鉄・・・・・・鉄！？）

気づいた時にはもう遅い。

土門の肘打ちが蛭湖の胴体に直撃していた。

「がはっ！」

勢いをつけられて吹っ飛ぶ蛭湖。

床に大の字になって転がり、動く気配は無い。

「そうだ。忘れていたよ・・・・・・石島土門は複数の魔導具の使い手。土星の輪・・・嘴王・・・・そして、発動させたのか・・・！」

そう、土門が体内に宿す最後の魔導具。

発動した瞬間、肉体を鋼鉄のように硬め、肌色を浅黒くし、額には鉄の文字が浮かぶ効果を持つ。

「身体硬化魔導具、鉄丸(てつがん)！」

ある意味この状況においてはうってつけの魔導具といえよう。

「傷だらけの体を硬化させ、筋肉を限界まで縮小、強制的に傷口を閉じたのだな？その体では首を折るに至らない。見事な防御だよ」

そして全てを勝機を失ったことを、蛭湖は素直に認識した。

「いけ、私の完敗だ」

任務失敗。

そう思っていた蛭湖だが、土門がとった行動は意外なものだった。

「割れてねーのがあったぞ。輸血しな吸血鬼」

輸血ビンを三つ、蛭湖の近くにコトンと置いたのだ。

蛭湖は目を見開いた。普通なら蛭湖に再戦するだけの余力を与えかねない行為だからだ。

「なァーーにパチクリしてやがる！早くしねぇとテメェ死んじまうだろ？それとも任務失敗したから死んでもいいやとか思ってたのか

!?こーーーの馬鹿野郎!!!」

――パコン!――

土門は蛭湖の頭を軽く殴った。

「てめぇは操り人形でも捨石でもねぇ!意志を持てよ!自分の考えで動きな!機械にはできねえ芸当だぜ!!」

そう言い残し、鉄丸の効力が解除されながら土門が先へ進もうとすると、吹雪が蛭湖にこういった。

「火影の人間ってのは、誰に命令されたわけじゃなく、ただ一つのことをみんなが一緒にやりたいからやってる集団なんすよ。そこに義務とか責務とかはなくて、あるのは己の魂だけって感じっすね。もっとも、俺っちも会長の力になりたいってだけで此処にいるわけっすけど」

それだけ言い残すと吹雪は双刀を拾い上げ、土門の後を追うように歩いていった。

(・・・・・・・・・・・どれだけ自分の心を偽ってきただろう)

ふと、蛭湖は考え出す。

(命令されたならば共に戦ってきた仲間や同志さえも葬ってきた・・・・・なんでもした。己を殺す事で、力を手に入れて、そして・・・・・失うものは増えた。見極めたよ。――石島土門、凍空吹

雪）

地面に伏せる今の蛭湖の両目には、威風堂々と自分の道を真っ直ぐ突き進む二人の後ろ姿が、とてもまぶしく映っていた。

＊＊＊＊＊

土門と吹雪が蛭湖と接触したほぼ同時刻。

ＨＯＲＨ（ルートＢ）
小金井薫&ａｍｐ;バット・ダーク

「では、前に進みましょう」
「うん！柳の姉ちゃんのトコに、俺たちで一番乗りだ！」

と、気合を入れる小金井。
だが、

――ゾクっっ――

なにか背筋の凍る感覚が二人を覆った。

「この殺気・・・・・」
「向こうの角から・・・・・」

二人が直感したとおり

――コツン・・・コツン・・・コツン・・・――

足音が向こうの通路の角から聞こえてくる。

そこから現れたのは男だった。

ニット帽を眼深に被っていて目元の表情はわからないが、口元の様子で笑っているのがわかる。男の割には妙に伸びた長髪が何処と無く似合い、黒のシャツとズボンといった全体的にラフな恰好だ。

しかし、それ以上に印象的なのは、右手に持った歪な魔導具だった。

その魔導具は薙刀にも三叉槍にも見えたが、穂の根にあたる部分には巨大な一つ目の装飾が施されている。こんな魔導具を持っている人間は一人しか居ない。

「小金井君めっけ！戦闘開始や！」

「ジョーカー！？」

麗十神衆が一人、帝釈廻天（たいしゃくかいてん）のジョーカー。

「おや、あの時の関西弁の人ですか。ちょっとだけ、お久しぶりです」

「おーっす。元気にしとったかい？」

「えぇ。お陰様で」

「ってちょっとまったぁぁ！！なに和んでるの！？つーかなんでジョーカーがここにいんの！？」

小金井は思い切りツッコんだ。

「なにゆーとんねん小金井くん？サーファーが海におるよう、戦士

が戦場におるのは当然やないか！」
「よくわかんないけど、今は急いでるんだ、邪魔しないでよ！俺たちは柳ちゃんを助けに裏麗と戦いに来たんだ！今回はお前達が相手じゃないんだよ！」
と、小金井はジョーカーを説得しようとする。
ジョーカーは何食わぬ表情でこういった。
「そんなん関係あらへん。自分は小金井くんらと戦いにきたんや」
一発で交渉決裂。
「我侭言うな！！今はジョーカーと戦う意味が無いだろ！！」
「こっちは大有りや。裏武闘のカリ返さなあかんやろ。自分も残り少ない麗の一員や」
「避けては通れぬ道、だと仰りたいのですね。新生火影と麗の関係性は・・・・・・最早強固に定まっていると」
「よーわかっとるやないか。此間は利害が一致しとったがな、双方の関係はあくまで敵同士や。そっちの都合なんざお構いする気はないで」
ジョーカーは帝釈廻天の穂を二人に突きつけながら宣言する。
「ならば、こちらが取るべき手段は一つです」
「そうだね。火影（オレら）と麗（そっち）は、相容れない間柄だったしね」
二人は真剣な目つきをし始める。
「ジョーカー！！」

そして、

「バイバイ！！」
「さようなら！」
「そんなアホな！！？」

敵前逃亡を選択した。

「ズッコけかけたで今のは！カムバーック！！」
「すいませんが、我々も其方の都合などに構ってられません」

ジョーカーの言葉をバットがバッサリと斬り捨てる。
小金井とバットは走りに走り、通路の到る所を駆け抜けながらフロアを調べていく。

ただし、幾ら走っても階段はおろかエレベーターもエスカレーターも見当たらない。
だが止まればジョーカーとの戦闘にはいってしまう。

「なぁ何時までこの鬼ごっこやるつもりや？」
（（追いつかれた！））

伊達に麗十神衆を名乗っているわけではない。
この程度は朝飯前なのであろう。

「いい加減勝負しようやないか？今度こそ決着つけよーやー！」
「柳ちゃん助けたらやってやるよォ！次にしてよ次！！」
「次は・・・無いかもしれないやろ？」

ジョーカーの言葉、それはどちらかが戦いで死ぬかもしれない、と

いう意味を指す。

「次はないかもしれへん！だから今や！」

ジョーカーは鋭い眼光を覗かせてそういった。
しかし二人はここに来て漸く巡り会えたのだ。

「っ！小金井君！」
「エレベーター！」

次のステージへの扉を。

――バッ！――

二人はエレベーターの扉へと飛び込んだ。

「ふ、振りきった・・・・・・上「どうやら、タダではないらしいですよ」・・・へ？」

二人が潜り抜けた先には、長い黒髪の少女が待ち受けていた。
エレベーターと思われた扉の先にあった部屋には、蜘蛛の巣の如き粘着性の糸が張り巡らされている。

「ホイ逮捕ー♪さ、リターンマッチ！立って！」

ジョーカーは気軽な口調で追いついてそう言うも、目の前の状況を見て考えが一変する。

――ガシャ！――

そして扉が強制的に閉じられ、逃げ道が封鎖された。

「なんやねん君？何か用？」

「裏麗死四天キリトと申します。ここに侵入する者を殺すよう命じられています」

このルートの番人は風子と金女に一杯食わせたキリトだった。

「火影の小金井くんですね？初めまして♪」

（大人しそうな女の子・・・・・この子が裏麗！？）

（今までのデータからすると、まあ驚くほどのことではありませんね）

小金井とバットの考えは拮抗する。

バットは今までの火影の戦歴データを見てきている。なので火影が外見・内面・能力に著しいギャップのある人間と戦ったことがあるのを知っている。

「殺すぅ？できるんかいオジョーチャンに？兎に角自分たちの戦いが予約済みなんや。そこでまっとってな」

「そうはいかないんです」

「・・・・・自分らを誰や思ーとる？」

「火影の小金井くんに助っ人の一人ですよね？貴方は知りません」

キリトはニッコリ笑顔でジョーカーと話を進める。

「麗十神衆ジョーカーや！下がっとれ！」

「知りません。誰ですかあなた？」

あくまでジョーカーのことを知らないというキリト。

いや、本当に知らないのかもしれない。麗という組織が組織でなくなった以上、首領だった紅麗は兎も角その部下のことを新たな首領が一々気に止めるとも思えない。

「・・・・・・・・・・よっしゃ小金井君にお嬢さん。こっちの戦いは後回しや」

ジョーカーはゆっくりと言い放ち、

「世間知らずにモノ教えたる！」

再び紫電の如き鋭い眼光を覗かせた。

「ではお願い致します、一時共闘で宜しいですね？」

「当ったり前や！」

「くすくす・・・」

バットとジョーカーの会話に、キリトが笑いを零した。

「別に私は三人相手でも構いませんよォ♪そうでもしなきゃ貴方達も大変だと思いますし。ね♪」

そういわれたジョーカーは口元だけを笑わせ、鋭い犬歯を際立たせた。

「少っしもおもろないボケやのー。自分、女の子にはめっちゃ優しくすんねんけど、嫌いなタイプにはけっこー冷たくなれるクールな奴なのよ。あんたはタイプちゃうわ。遠慮なくいこか！！」

ジョーカーは宣言どおり、全力で帝釈廻天を振り回した。

しかしキリトは次の瞬間には穂の上に乗っかっていた。
ジョーカーの攻撃をあっさり過ぎるほどに見切った上での行動だ。

「質問？――貴方は何歳ですか？」
「歳ィ？数えとらんからよう覚えとらんのォ！２５か２６やったかなァ？それがどないした？」

――ビュ！――

指の間に挟んでいた苦無が飛び交う。

「キャーー♪」

しかしキリトが余裕で避けた。

「小金井さんは情報だと１４歳でしたよねぇ。フムフムー。あ、ところで其処の型はお幾つですか？」
「さぁ？私にとって年齢など有って無きが如しですからね。ついでにいうと私は普通じゃないので、ちょっと体をイジれば肉体年齢くらい変えられますよ」
「へえ、そうなんですか？」

キリトは蜘蛛と糸に靴底をつけ、逆さ吊り状態で質問したが、返答を聞くと

「私と同じですね」

そして、彼女の傍らに空間の裂け目が発生した。

その裂け目から出てくるのは、一度は吹雪の使った双刀之犬で頭を

潰され、竜王のセルメダルで修復された存在。

『キァァアアア！！』

死愚魔（シグマ）！

「なるへそ！複数相手でもかまわんのはこれかい！！」

「となると、ヤミーが一体くらい居そうな気がしますが？」

「取って置きでお楽しみ一体は直ぐ出てきます。仮面ライダーや鑢さんとかが此処に来てたら十体でも二十体でも投入してましたけど、貴方達ならパワーアップした死愚魔とあの子だけで十分です♪」

思い切り余裕を見せるキリト。

それと同時に、

――バギャアァァン！！――

何処からか妙な音を立てながら何かが姿を現した。

『ふー・・・漸く出番か』

流暢な日本語でそれは喋った。

全身が黒光りする生体装甲で覆われ、頭部には2本の触覚、口には鋭い顎がある。

クロアリヤミーだ。

「これで三対三。フェアプレイというわけですか。あのジョーカーさん、あの化物は貴方にお願いしていいですか？私はヤミーを相手にしますので」

「ん～～・・・・・まあ美人のお願いやし、一度くらいならその指図受けたるわ」

ジョーカーの返答にバットはペコリと頭を下げた。

「じゃあ俺は！」

小金井の相手を消去法で決定した。

「攻撃目標キリトちゃん！！」

一目散にキリトへ向っていく。

「質問？」

――ガシャッ！――

キリトは警棒を取り出す。

「私は何歳だと思いますか？」

笑顔の状態でそんなありきたりな質問をし、ガギンという金属音を立てながら鋼金暗器を受け止める。

「えっとね・・・柳ちゃんよりちょっと下に見えるからな。１４でタメ！」

結果は、

「ハズレよ。ボ・ク♪」

さっきとは比べようも無く大人っぽくなったキリトによって不正解とされた。

「罰ゲームね」

――ゴッ！――

「がッ・・・！！」

警棒による突きを腹に喰らい、強制的に距離をとらされた小金井。

「お前・・・何者だ・・・？」

その言葉は当然であろう。
自分と同年代と思われた少女が行き成り二十代前半の成人女性へと変貌したのだから。

「この問題にはね、答えは無いの。ゴメンね♪」

先ほどとは打って変わり、成人したキリトの顔にあったのは笑顔ではなく、大人特有の静かで余裕ある表情だった。

そして、三人はこの後に知る。
人間が如何に歪み易い心を持つか、如何にシブトイ存在かを。

ＤＥＡＴＨと蛭湖とジョーカー（後書き）

次回、仮面ライダーブライ

さいならと光界玉と雷覇

さいならと光界玉と雷覇（前書き）

仮面ライダーブライ！
前回の三つの出来事は！

一つ！遂に裏麗の本丸、ＨＥＬＬ　ＯＲ　ＨＥＡＶＥＮへの道が開かれる！

二つ！土門と吹雪は、バクヤミーと死四天の蛭湖と戦い勝利した！

そして三つ！小金井とバットはジョーカーと遭遇し、さらには死四天の綺理斗（キリト）とも遭遇してしまう！

死四天の一人、綺理斗（キリト）。
彼女は幾つモノ顔を持つ存在だ。

「少しいいこにしていてね、死愚魔」

キリトは己が従僕に命じた。

「ちょっと私の話をしてあげる。私は自分の本当の年齢を知らない」

キリトは極めて平らな表情でそう告げた。

「左手のブレスレット、魔導具『輪廻（りんね）』」

それが発動した瞬間、

「ウソや・・・・・・」
「成る程・・・・・・」

ジョーカーとバットが呟いた。

美しい黒髪は白髪となり、小奇麗な顔はシワのよった意地悪そうな老婆のそれに変わったのだ。

「魔導具能力、術者の肉体年齢の変幻自在！！」

老人状態の姿は、シルフィード達と出くわしたのと同じもの。
つまりはＳＯＤＯＭ中にいたキリトはどれもこれも同一人物なのだ。

「驚いたかいの若いの!?ウヒャヒャヒャヒャヒャヒャ!!」

キリトはしてやったり、と言わんばかりに大笑いした。

「・・・・・その魔導具、副作用はなんですか?」

しかしバットは何時もの冷ややかな表情でそう訊いてきた。

するとキリトは笑うのをやめ、今度は真顔となり、老年期から幼年期となる。

「スパイ活動の時は便利だったけど、強制的な肉体年齢の変動には、肉体年齢と共に精神年齢にも影響が現れたの」

「今は、9歳あたり・・・ですか?」

「うん」

バットは見事言い当てた。

「9歳の体の時には9歳の私が、お婆ちゃんの体の時にはお婆ちゃんの私が――私は全然意識してないのに、性格が変わるって周りの人が言ってた」

「人間なんて、子供の頃から大人に成長して年老いるまで、何回かくらいは人格が変動していくものですからね。大方貴女の場合、中身が変動し過ぎて、原形としての自分自身を見失ったといったところでしょうか」

バットの確信めいた台詞に、今度は青年期になったキリトが答える。

「ご明察通りよ。私は元の年齢も性格もポッカリ忘れている。数学の知識があるから子供じゃないんだろうけど、ひょっとしたらお婆

ちゃんなのかもしれない。輪廻で変化する度にその私を本当の私だと信じるけど、やはりわからないから、知りたいの」

バットはまた何か言おうとするが、キリトはそれを許さないと言わんばかりに喋り続ける。

「輪廻を壊せば答えが出るかもしれないけど、好奇心と共に恐怖心も生まれる。真実の自分を知る恐怖」

今度は若年期へ。

「だってそうでしょ？鏡を見たらお婆ちゃん。若い私になりたくても輪廻は無い。堪えられない♪それに、これだけ人体に影響するものが壊れたときになにが起こるかわからないもん。取り合えず魔女っ娘気分を楽しむことにしました♪」

正直なところ、人生を嘗めまくってるとしか言いようの無い主張である。

「ふーん、ケッタイな魔導具やねぇ。ところで、質問杉？！ぎょーさんおる人格の中で、自分らをほっといてくれる心優しい年齢の君はおるんか？」

ジョーカーのそんな質問に、

「いないと思う。遊び好きでノーテンキな１４歳の私でも、ウキウキしてたでしょ？」

真顔で答えるキリト。

「だったら最早それでも構いませんが、もう一つの魔導具は？」
「右手のブレスレット、魔導具『涅槃（ねはん）』・・・能力は、死愚魔の操作！！」

それと同時に死愚魔がこちらへ襲い掛かってくる。

『ーーーーー！！』
「お黙りなさい！！」

――ゲシッ！！――

しかしバットが死愚魔の頭に飛び蹴りを行った。

「火影の忍者を殺したら、本当の私を教える。森様そう言ったの。リスクなく真実を知るにはこれが一番ね」

と、キリトが悠長に語った。

――ドスッ！――

すると、鋼金暗器の鎖鎌の刃が死愚魔も突き刺さる。

「バカ言ってんじゃないよォ！！姉ちゃん、森がどんな人間か知らないのかよ！！？あいつは、自分の欲望の為にしか動かない人間なんだ！いや・・・人間さえ捨てた！！緋水も、紅麗も・・・ボロクズみたいに捨てた！姉ちゃんもきっと捨てられる！！」

「質問？――じゃあ、貴方に本当の私を教えられる？」
「そ・・・そりは・・・・・・」
「小金井君、無駄です。この手の輩は極限まで追い詰めなければ言

葉に耳を傾けません。今は戦いに専念しなさい」
「で、でもさぁ！！」
「デモもストもありません！！」
「ッ！」

小金井はバットの大声にビックリした。

――チャキ・・・ッ――

「鋼金暗器、刃の部分を回収しておきました。あんなバカデカい化物に刺したら逆に振り回されますよ？」

といってバットは先ほど突き刺さられた鋼金暗器の刃を小金井に返す。

「お取り込み中のところすいませんが、また質問のほう、よろしいでしょうか？」
「えぇ」

キリトはそうきいてきた。
彼女の頭上では死愚魔が蜘蛛の巣の中央を陣取り、奇妙な唸り声を上げ、両の翼のような翅のような部分をガパっと開いて何かを外に出し始めた。

「質問？・・・あれはなんでしょう？」

あれ・・・とは死愚魔が出している幾つモノ球状物質である。

（卵？）
（餌？）

（この魔力・・・・・・まさか！）

小金井とジョーカーは大ハズレの予想をしたが、魔力に敏感なバットは気づいた。

「答え・・・・・・」

『～～～～！！』

そして、

スっ・・・とキリトが腕を上げた瞬間、死愚魔が咆哮した。

球状の物体全てから、極太の光線が乱射された。

――ドンッ！！ドンッ！！――

「伏せて！！」

「のわッ！？」

――ドゴッ！！ドゴッ！！――

その圧倒的な破壊力の前に、ただの壁など障子紙に等しい。

辺りはボロボロに破壊され、光線が発射される前とは比べようもない程の惨状だった。

因みに前回をお読みの読者の方々はもう既に察しているかもしれないが、この光線こそが蛭湖の血液ストックを破壊した元凶なのだ。

皮肉にも蛭湖は仲間によって勝機を奪われてしまったと言ってもいい。

「あはははははは!!ビックリした?」

当のキリトは玩具を自慢するように笑いこける。

「あれ?」

だが耳にしていたイヤホン型の通信機に誰かが連絡を入れてきたらしい。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はーい」

暫く一方的に報告を聞いていると、から返事気味に返答し、通信を終了する。

「管理室の人に怒られたじゃない死愚魔ーっ!出力少し下げろって命令したでしょう?」

『グル・・・』

「もう!!」

『もう!!って・・・あんた楽しそうに笑ってたろ?』

「ありゃ?いたのキミ?」

『さっきからいたよ!!』

とここで漸くクロアリヤミーが会話に出てきた。

黒いだけに影と化していたのであろうか?

『うるせぇよナレーション!!作者がオレをど忘れしたからこうなっちまうんだろうが!!』

「クロアリ、誰と話してるの？良かったら医療班呼ぼうかな？」
『余計なお世話だ！』

漫才真っ盛りなやり取りである。
その隙に、バット・小金井・ジョーカーはヒソヒソと作戦会議を行う。

「では私はヤミーを、ジョーカーさんは死愚魔を」
「了解や！そして小金井くんが無防備になったキリトのお嬢ちゃんを叩くっちゅーわけやな」
「うん、それでいこう！」

作戦会議終了。

「作戦会議は終了かい？」

するとキリトは老年期となる。

「やっぱり、今のワシが一番、死愚魔との相性がいいねぇ。どれ・・・もう一度、魔弾をみまってくれようか！」

自信満々のキリトの耳に入らぬよう、声を潜める三人。

「ではまず私たちが行きます」
「ＯＫ！」

そしてタイミングを合わせる。

「行きますよ黒蟻ィィ！！」
『かかって来やがれぇ！！』

バットとクロアリヤミーは肉弾戦を繰り広げ始めた。
悪刀によって体力が無制限となっている今のバットは疲れることなく動き続けて腕と脚を攻撃手段として扱い続ける。

『人間にしてはやるな』
「お生憎様ですが、私は普通の人間では在りません」

一方ジョーカーはというと、

「くっ・・・」

自身の魔導具を発動させていく。

「帝・・・釈・・・廻・・・天!!!」

完全に発動した。

「重力結界（＋）!!」

ジョーカーの持つ魔導具によって球状の結界が完成した。
その周囲というか直下付近には凄まじい音が立ち、床をズタズタにしていた。
勿論ジョーカーにも何かしらの負担はかかっているようである。

「この結果に一歩踏み込んだら・・・通常の何倍もの重力がのしかかる!化物、体重何キロや?」
「何か企みがあるな!?そうはさせないよォ!!」

キリトはジョーカーの邪魔をしようとするが、

「邪魔はさせない・・・！」

それを更に小金井が邪魔する。

「この状態で帝釈廻天尾部に重力結界（一）をつくる！これによりなにが出来るかと言えば！」

穂先部分には重力増加作用、尾部には重力減少作用。

つまりは投げ易く、飛び易い状態ということである。

「ピッチャー第一級ーーっ！！投げましたァーーーっ！！」

実況者のような大声で自らのピッチングを宣言するジョーカー。

投げつけられた帝釈廻天は一切ブレることなく飛んでいき、一直線に死愚魔の体めがけてその刃を突き刺す結果となった。

よって重力結界による重力増加効果範囲内にスッポリ包まれてしまったのだ。

「死愚魔ーーっ！！」

キリトは絶叫するも、もう遅い。

「今です小金井くん！！」

――ビュン！！――

バットの声が発せられると同時に小金井は床を蹴った。

「だあああああああ！！！！」

力の限り叫ぶ精一杯の声。
鋼金暗器は壱之型となり、

死愚魔の首を斬り、討ち取って見せた。

――バギッ！――
――ペタ・・・っ――

その瞬間、涅槃が壊れ果ててしまい、キリトは青年期の状態となって尻もちをついてしまう。
いや、尻餅というより、戦意そのものを落っことしてしまったようにも思える。

「・・・最後の質問ね・・・」
（こりゃ・・・ここはもうダメだな。クソ・・・完全に見せ場ナシで終わる損な役回りか・・・）

キリトの声音から自分のこれからを予想する。

「戦う術をなくした今・・・私は・・・私はどうやって私を知ればいいの？」

涙の雫を流し、キリトは尋ねる。

「「・・・・・・・・・・・・」」
「・・・輪廻を壊したらええ。自分らには答えることができひん」
「ダメよ。私にそんな有機は・・・ない。できない・・・・・・」

そうして、死四天の綺理斗は崩れ落ちた。
あとはクロアリヤミーを倒せばよいと誰もが思ったが、世の中は上手くいかないのは小説も現実も変わらないらしい。

――ドンッ!!――

何者かがこの部屋に通じる扉に猛攻撃を仕掛けてきたのだ。

「!!」
「今度はなんや!?自分らの入ってきたドアから!」
「まさか、敵襲?」

そのまさかだった。

――ドゴォォォン!!!!!――

体中のあちこちが傷だらけの血だらけでボロボロだが、その姿は見間違えようがない。
奇妙な仮面に奇怪な民族衣装を着た色黒の巨漢。

「こいつ・・・!最澄さん達と戦っとった奴やんけ!紅麗さんに焼き殺されたはずやのに・・・!?」

ジョーカーは驚くついでに説明してくれた。

「オォォォォォォオオオオオオオオオ！！！！」

誰に向けてのものか、鼓膜に響く大きな大きな咆哮が響く。

「門都（カドツ）・・・？生きてたの・・・？」

キリトはかすれるような声で仲間の名前を呼ぶが、当人はそれを聞いてるだけの精神的余裕は無かった。

「殺す！！殺す！！！殺す！！！！！」

やたらと殺すというフレーズを連呼する門都。

けれど、

『黙れ死に損ない！』

――グンッ！！――

「ゲバァ！！」

意外なことにクロアリヤミーが門都に攻撃をしかけてきたのだ。

「・・・・・小金井くん、ジョーカーさん、チャンスです。連中が共食いしてる間に前進しましょう」

バットはこの状況下である意味正しい判断を下し、それを伝える。

「自分はもう一暴れしてくるで」

だがジョーカーは帝釈廻天を背負いながらトンデモないことを言い出した。

「・・・・・それは麗としてですか？」

「そうや。それ以外に理由なんていらへん」

ジョーカーは鋭い眼光をさらしてバットに応答する。

バットはその眼光を見て、小金井の体を片手で持ち上げた。

「え、ちょっと、何すんだよ！？」

小金井は混乱するがバットは気にしない。

「御武運を」

「はいはい」

手を適当に振るジョーカー。

そんなジョーカーにバットは全てを理解した上で前へと進んだ。

小金井がなにやら喚いているが、今はそれにつき合ってる暇は無い。

これから起こることを考えれば、この場に留まることは愚行としか言いようが無いのだから。

「さて、と」

ジョーカーは後ろに振り向き、

――パギィィン！！――

門都を殴った。

「おブ・・・！！」

蹲る門都。

「自分が一人で残った理由は二つや。あんましあの二人に嫌われたかないんでご機嫌取りするってのと・・・・・・」

ジョーカーは其処から一呼吸おき、実に冷淡な口調で言い放った。

「なんでワレ生きとんねん？」

――ゲシ！ゲシッ！――

「紅麗さんの死刑執行で生き残る奴なんて初めて見たわ。褒めたいところやねんけど、やっぱワレ、生きとったらアカンよ」

ジョーカーは門都を足蹴にしながら一方的に話をしていく。

「紅麗さんのミスは自分がケツふかな。麗の一員としてワレをもう一回死刑にする」

そして

「死ね」

ジョーカーの体を、門都の刃が貫いた。

「ヒャ・・・ヒャ

ヒャ！！！！」

狂い咲くような門都の笑い声。

が、

『だから黙れっての！！』

――バギッ！――

「グゲ・・・！！」

クロアリヤミーは相当笑い声が不愉快に聞こえたのか、門都を殴った。

「あんた、サンキューな・・・・・・そんで、スマンな・・・」

『別に・・・』

ジョーカーの感謝と謝罪の意味は、何となくクロアリヤミーに伝わっていた。

（ホント、オレって悪党には向いてねーやぁ）

クロアリヤミーはほとほと自分の中途半端な性格を嘆いた。

「帝釈廻天・・・・・・重力結界（十）究極値！！」

その瞬間、ジョーカーと門都とクロアリヤミーを重力場が包み込む。

「ぐぎゅ！！？」

「重力に重力を加えると・・・メチャクチャ強力な重力場によって・

・・空間が歪む。この時空間をなんてゆーか知っとるか？」
『ブラックホール』
それはあらゆる物体、光さえも捕えて放さない永遠の暗闇に続く終焉の穴。
「ギャ・・・ボぁ・・・」
門都が黒い闇に喰われ呑まれた。
残るは・・・・・・。
（やっぱし、オレって善にも悪にもなれない、半端者・・・か）
（ホレ・・・見い。次がのうなってしもうた・・・・・・・・・損な性格やな、自分）
――オオオオォォォォォ・・・ン――
そして、森羅万象を無限に飲み込み喰らう暗黒の穴は、静かにそれを閉じていった。
「あ・・・・・・・・・」
効果の範囲外にいたキリトは、それを死人のような眼で見ていただけだった。
「門都も・・・関西弁の人も・・・クロアリも・・・消えた――」

――ザグッ！！――

そして、帝釈廻天だけが残された。
まるでそれは切札と呼ばれし男の墓標にも見えた。
もし彼にもう少し時間があれば、必ずこんな言葉を言い残した出あろう。

”さいなら、紅麗さん”

＊＊＊＊＊

ルートA
陽炎とシルフィード。

この二人もまた、他のルートと平行して進行中である。

「・・・・・・・・・・・・ねぇ」
「なに？」

長い沈黙のあと、シルフィードと陽炎が口を開く。

「誰かに見られてないかしら？」
「あら奇遇ね。私も勘付いたトコよ。美し過ぎるってのも困りモノよね」

と、おちゃらけてみせるシルフィード。

「気配はあのドアの向こう側、中ボスさんの部屋ってカンジね」

指差された方向には分厚い隔壁にもにたドア。

「それにしても気になるわ。今までＳＯＤＯＭに入ってからこの手の視線や気配は感じていたけど、どういう訳か殺気や敵意が混じっていない」

「その答えはこの扉の向こうじゃないの？」

――ギィィィ――

自動ではなく手動の扉だったらしく、シルフィードは手で押しながら進み、扉を開けて部屋に入っていった。

部屋の内部は一言で言うと、憩いの場を模したリング場だった。

部屋の外周に当たる部分には椅子とテーブルが多数設置されており、シルフィードたちが進入してきたものを含めて四つの出入り口が十字架のように道を交差させている。

そして、中央部の四角い高台は、四隅に噴水や花壇があったが、十字の中央において、ボロ雑巾の如き状態で寝転がらされている男によって、その優雅さはなくなっていた。

「そいつは裏麗の龍虎丸（りゅうこまる）。元同僚なんだけどネ。ちょっと邪魔なんでオネンネさせたんだ！」

すると四隅の噴水の近くに座る一人の女。どうやらここの番人を片

付けたのは彼女らしい。
にしても龍虎丸、という名前だったとは・・・ボロ雑巾状態の雑魚には勿体無く、名前負けもいいところだ。

「貴女陽炎さんでしょ？あったりぃー♪そっちの金髪さんは知らないけど」

その女は黒いサングラスをかけ、露出が高くボディラインを出す服を着た女だった。

「私は鬼凛ちゃんでぃーッス！！ヨロシク♪」
「はい宜しくね。・・・二人纏めて、ね」

シルフィードは笑顔で返事したかと思えば、一気に冷めた声音で後ろを振り返った。

そこに居たのは白い髪に白い服といった白だらけの恰好をした無表情な男だ。

（この視線だ！私を何度も監視していた・・・何者？）

陽炎は様々な思考を脳内で錯綜させる。

「初めまして、といえばいいのかしら？心（キリン）を読む女と全（ラセン）てを消す男？」

それにかまうことなくシルフィードは一応確認を意を込めて彼らの名を呼んだ。

「ところでヤミーが居ないようだけど、何処かしら？」

「さぁてね？私たちが龍虎丸をボコって貴女達を待っていた間、ヤミーはおろか子供一人来てないわ」

鬼凛は嘘偽り無くそう告げる。

「そう。ということは・・・」

――ズンッ！――

何かが天井から降って来た。

「貴方達は眼中になかった。それだけのようね」

シルフィードと陽炎の背後に降って来たそれは、二種類の生物の姿をしていた。

まるで毒蛾ように不気味な翅と触覚と複眼、ナマズのような髭と体表の滑りや腕と直結した鞭。

名づけるなら”ドクガナマズヤミー”とでも言うべきだろうか。

「これが、ヤミー・・・！！」

陽炎ははじめて見るヤミーの姿に圧倒されかけたが、しっかりとその姿を見据える。

「さーてと、ちょっちキツいけど、役割分担として私が一人でヤミーの相手するから、陽炎は一人でそっちのバカを相手にしてちょうだい」

シルフィードはヤミーの出現に対しても焦りも怯えもせず、何時もの口調で言葉を紡ぐ。

だが、

「鬼凛ちゃん、急に気分が変わったわ。陽炎さんと金髪さんの二人でヤミーと戦って。私と螺閃はここで見物するから」

鬼凛は行き成り戦闘を見送った。

一見ヤミー戦を押し付けたようにも見えるが、実のところは違う。

＊＊＊＊＊

封印の地から脱出してから、螺閃はこんなことを考えていた。

（僕は・・・・・花菱烈火の母の呪いを消す）

「何言ってんのよ螺閃!?光界玉の力忘れたの!?消すモノの大きさに比例して・・・貴方も其れ相応のモノを奪われるのよ!!」

勿論鬼凛は猛反対した。

「そんな強力な呪いを消したら貴方自身が!!」

（僕は”自分の消える時”を見つけたんだよ）

しかし、螺閃の決意は堅かった。

「なんでよ!?なんで螺閃が烈火くんのママを助けるのよ!?」

（彼も母親のことで苦しんでいた。それを背負って戦って・・・背負ったものを捨てようとしている敵の僕を・・・剥き出しの心で叱

ってくれた）

思い起こされるのは封印の地での戦い。

（それがただ・・・嬉しかった気がした。自らの力で消してしまった僕の母は二度と戻ってこない。だが、彼だけでも・・・この苦しみから解き放ってやることはできないだろうか？）

感情の無い・・・いや、失ったはずの螺閃が機械的とは到底言いがたい思考をし、それを鬼凛が読み取る。

（似たような境遇の者の心を救って、この身が消えるなら本望だよ。僕は陽炎に会いに行く）

「・・・そう・・・でもさ・・・陽炎の呪いは”不死”・・・望みは死にたいってことだよね？光界玉を使う前に、私に試させてくれないかな？」

そこで鬼凛は妥協点をうった。

「もし、私が陽炎を殺すことができたら」

鬼凛は拳を強く固く握り締める。

「螺閃とずっと一緒にいられるんだよね！？」

そして、涙の雫を溢れさせながら、最後の確認を行った。

＊＊＊＊＊

これこそが鬼凛が陽炎とシルフィードのヤミー戦をさせる理由。
魔導具を使う人間以上の戦闘力を発揮するやもしれないヤミーの力なら、より高確率で陽炎を殺せるかもしれない。
自分はあくまで諦めは悪いだけの我侭な普通の人間だから、都合よく現れた化物に汚れ役をさり気に肩代わりさせた。・・・・・・ただそれだけなのだ。

「昆虫と水棲のキメラタイプ・・・だったらコレかしら？」
「ん、それってあの時のメモ帳・・・？」

シルフィードはポケットから例のメモ帳を取り出す。
様々な生物の紋章が描かれ、その生物のしゅるいによって色分けされたメモ帳。

「こんなモンかしら」

選び終えた二枚のページを金属リングから外し、中央の切れ目で割って四枚に分割する。
分割された四枚のソレは、両手首と両足首に張り付いた。

「バッタの蹴りとゴリラの拳でも喰らってなさい」

すると、シルフィードの脚部にはバッタレッグと同じ装甲、両腕にはゴリラアームと同じガントレットのゴリバゴーンが装着されている。

『オォオズゥゥゥ！！』

「あら、装備が同じだからって勘違いはしないでね」
ドクガナマズヤミーの唸り声にも似たそれにシルフィードはやんわりと返答する。
「行き成りで悪いけど、ちょっとコレ喰らって」
シルフィードは両腕を前に突き出し、
「バゴーンプレッシャー！！」
――バシュン！！――
――ゴガァァン！！――
『グヲァァア！！』
「と、とんだ？ロケット、パンチ・・・？」
陽炎は口をだらしなく開けてしまった。
何しろシルフィードが装着したゴリバゴーンが文字通りロケットパンチとなってドクガナマズヤミーに直撃したのだから。
「次はカマキリ！」
シルフィードは蟷螂のレリーフが描かれた緑色のページを取って両手首に張る。
すると飛んでった猩々（ゴリバゴーン）の拳の代わりに今度は蟷螂（カマキリソード）の鎌が逆手に持つ状態で現れたのだ。
「ハッ！」

バッタの脚力で跳躍し、

――バシュン！――

ドクガナマズヤミーにキックする。

続けて・・・！

「羽ばたく前に翅は斬り落とすわ！！」

――ザシュ！！――

『グウォォ！！き、貴様ッ！』

片方の翅を斬られたドクガナマズヤミーは怒り心頭の様子だ。

『だがもう一枚あるぞ！！』

ドクガナマズヤミーはバサバサと残ったもう一枚の翅を大きくはためかせる。

勿論飛行する為ではなく、蝶や蛾にある物を振り撒くためだ。

「まさか、毒の鱗粉・・・！？」

シルフィードは急いで懐から布を取り出し、口と鼻を覆うようにして巻いて簡易なマスクを作った。

だが、そのことも向こうは予想済みだったらしい。

『隙だらけだ！』

――ビリビリビリ！！――

「うあッ！！」

電気の迸る鞭をシルフィードの体に巻きつけ、高圧電流を流したのだ。

幾ら吸血鬼とはいえこれは流石に堪えるだろう。

「シルフィードさん！！」

陽炎はそこに割って入り、感電覚悟で鞭を素手で手に取り、無理矢理に取り上げた。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

陽炎は体中から煙をだしていて、荒息をついている。

しかし、そんな感電による傷や残留電気も、不死の呪いによって掻き消されてしまう。

『（あの女、目障りだな・・・・・・）』

ドクガナマズヤミーは陽炎のことを後々の禍根になると判断した。

すると、”キャウン”という仔狐の鳴き声がしてきた。

「まだついてきてたの！？」

「来ちゃダメよ！！」

『もう遅い』

――バチバチバチバチ！！――

ドクガナマズヤミーは触覚から雷撃を放った。
シルフィードはカマキリソードとバッタレッグで何とか凌いだが、
仔狐を庇った陽炎は背中に酷い怪我を負ってしまった。

「仕方ない仔ね・・・危ないから下がっているのよ」

我が子のように仔狐を抱き抱える陽炎。
背中についた怪我も凄まじい速度で治癒していく。
いや、彼女の場合は時が戻っていくといったほうがいいだろう。

『ほほ～。大した生命力だ。だがしかし、たった一匹の為に身を投げ出すのも、その身の特異さ故ではないのか？』

ドクガナマズヤミーは嘲笑うように陽炎にそういった。
遠回しに自己満足行為ではないか？と訊いているに等しい言葉だ。

「笑いたければ笑うと良いわ。もっとも、させないし、できる時間も与えない」
『ん？』

振り向くと、其処には脚部を飛蝗（バッタレッグ）の脚から狩猟豹（チーターレッグ）の脚に換装したシルフィードの姿があった。良く見ると首部分にも赤い紙が張り付いている。

まるでオーズ・タカキリーターを擬似的に再現をしたようにも見える。

「タカキリータースラッシュ」

技名が発音された瞬間、赤・緑・黄といったメダル状のリングが三つ展開される。
シルフィードはそのリングを全速力で走り抜け、

「セイヤァァアアアア！！！」

大きな掛け声をだしてカマキリソードの刃を振った。

――ザシュ・・・・・・ッ！！――

『ッ！ば、バカな・・・！ヤミーが、人間如きにぃぃぃ！！』
「ごめんなさい。私は人間じゃなくて、吸血鬼よ♪」

――ドガァァァン！！――
――チャリンチャリンチャリン！！――

ドクガナマズヤミーは爆発し、数十枚のセルメダルが床に散らばった。

「回収回収っと」

シルフィードは屈んだ姿勢となり、セルメダルを一枚一枚丁寧に拾っていく。
だがその間に、陽炎に近づく者がいた。

（・・・仔狐を助ける貴女の姿に、母親を感じとれたよ、陽炎・・・・）

それは螺閃だった。

（僕が・・・・・あの日以来見ることも無くなった・・・優しかった母親の姿だ。正直・・・花菱烈火を・・・・・・羨ましく思うよ）

螺閃は光界玉が仕込まれた警棒の先を陽炎にむける。

「まって螺閃！！！時間を・・・私に時間をちょうだい！！！」

（この人を救うことが、僕の母親へのせめてもの気持ちのように思えるんだ）

鬼凛の言葉にさえ頑として聞かない螺閃。

（・・・今までありがとう・・・鬼凛・・・）

そしてとうとう・・・・・・

（貴女の体を蝕む不死の呪いを消そう！陽炎！！）

その瞬間、とても眼を開けていられないような眩い閃光が部屋中に満ち溢れた。

（花菱烈火！君と戦ったあの日・・・鬼凛を中継して感じた、君の凄まじいまでの思い・・・・・治癒の少女を助けたい想いと・・・母を助けようとする想い！君が母親を救うんだ！！）

光が収まると、陽炎の体から何かがあぶりだされ、虚無に還っていく。

――カタン・・・・・・――

螺閃は警棒を床に落としてしまった。
体中の力が抜けていき、床に大の字になって寝そべる螺閃。

（ごめんよ・・・鬼凛・・・これで僕も・・・母と同じように消え・・・・・）

この途切れ方は、螺閃自身が消滅したからではない。
単に螺閃の思考を塗り替えるものがそこにいきなり現れたのだ。

見えたのは母――――螺閃の母親の姿。

彼女はただの幻影でしかないだろうと螺閃自身心のどこかで自覚はしていた。
だがその幻影は不覚にもこういったようにも聞こえてしまった。

――大丈夫――

（母さん・・・が、見える・・・笑ってる・・・どうして？僕が母さんを消してしまったのに・・・・・・なのに・・・なんで・・・！？）

そこへさらに鬼凛が螺閃に抱きつく。

「うえぇぇえええええええん！！」
（何故・・・・・・消えない？）

全ての現象に疑問を覚える螺閃。

「光界玉の力がいかに強大とはいえ、不死の呪いを消す事には許容範囲を越えていた。魔導具自身が呪いの魔力に耐えられずに砕けた

のよ。今まで貴方から多くのものを奪ってきた悪魔の玉は死んだ」
「確かにあんなＥＸ級の呪いを解呪するなんて芸当、魔力の篭った術式の塊たるメモ用紙でオーズの能力や装備を再現できる私といえども、超長期間の準備が必要だもの。砕けないほうが可笑しいわね、その魔導具」
そこへ陽炎とシルフィードが語りだした。
「・・・あなたのお母さんはね・・・きっと貴方を最初から許してる。母親とはそういうものよ。貴方が消えなかったのも、きっとお母さんが助けてくれたのかもね」
その時の陽炎の顔は、見間違うことなど有り得ない、慈愛と優しさに満ちた母親の顔だった。
そして、螺閃は涙を流した。
感情を失ったはずの彼が流すはずのない、暖かな感情の証の雫が。
そして、陽炎とシルフィードは其の場を足早に去り、次のステージを目指す。
「あの螺閃って男、きっと元々は感情を消されたのではなく、肉親のことで自らに深い罪悪感を纏わせてしまったことで、己の心を殻に閉じ込めていたんでしょうね」
シルフィードはチラっと螺閃と鬼凛をみてそう言った。
「でもこれからは、きっと自分自身を許して生きていけるでしょう

ね」
「えぇ・・・きっと」
「キャンキャン！！」

すると二人の足元にまた仔狐が。

「まだついてくる気みたいよ」
「この際、事が全て終わるまで連れてったら？一々不意に登場されるよりはマシよきっと」
「そうね・・・ってコラ、引っ掻かないの！」
「尻尾振り回して何興奮してるのかしらね？」

しかしここで陽炎はあることに気づく。

「・・・・・治らない」

そう、仔狐に引っ掛かれてできた傷はゆっくりと血を流しているだけで、治る気配は全く無い。

「烈火に教えてあげなくちゃ・・・・・・！」
「おめでとう」

大粒の涙を流して喜ぶ陽炎に、シルフィードは静かに祝いの言葉を贈った。

時の止まりし火影くノ一、陽炎。
光界玉にて時の呪いより解放され、不死の化物から、母たる一人の人間に戻った。

＊＊＊＊＊

ＨＥＬＬ　ＯＲ　ＨＥＡＶＥＮ
ルートＥ

霧沢風子（火影忍軍）
鋼金女　（相生忍軍）

「ここですね。この扉の端末に例のパスワードを入れることで解除され「いいから早く中に入ろうよ！！」

説明途中で風子は端末に”ＤＥＡＴＨ”と入力して扉のロックを解除した。
扉が重苦しい音を立てて開かれていく。

そして、

「おっ「邪魔」

――ゲシッ！！――

中から出てきた血だらけの男は、金女によって足蹴にされた。

「ひ、どい・・・・・・」

そしてバタンとぶっ倒れるザコ。

「どうやら我々以外に侵入してきた先客がいるようですね」
「あんたって、意外と冷徹だね・・・流石は鋼の妹ってだけのことはあるけどさ・・・」
風子は金女の冷静さに感心する。
「忍者とは忍ぶ者です。気配を殺し感情を忍ぶのも、忍者にとっては必定です」
金女は当然だと言い切った。
「そういえばあんたって何処で忍者になったの?前から相生がどうとか言ってたけど」
確かに金女は十五年前の忌まわしい事件以来、ずっと音信不通の状態だった。
それが相生忍軍の業を受け継ぎ、さらには仮面ライダーとして帰ってきたのだから無理からぬ話だ。
「今は語る時ではありません。何れお話します」
「・・・・・・・・・」
これ以上聞いてもダメだと判断し、風子は黙って扉の向こうにある空間に歩んでいった。
そこには無数の鉄パイプが縦横無尽に設置された貯水槽のようであって、その水を送り出す水道所のような印象をうける場所だった。
そしてこの場には一人の青年が忍び装束を纏い、長い黒髪を靡かせてこちらに背をむける状態で佇んでいた。

「あの御仁は、確か麗十神衆の・・・雷覇？」
「そうだよ、雷覇くんだよ！やっぱり雷覇くんも来てたんだよ！」
しかし、その声に反応してこちらを振り向いた雷覇の顔は、何処と無く悲しそうだった。
「やっぱり来てしまったんですね、霧島風子。初めてお目見えする御方もいるようですね」
雷覇はじつに静かな雰囲気でそういった。
（・・・・・違う、何時もの雷覇くんと・・・・・・）
普段の雷覇なら、風子に飛びつくくらいの勢いで喜びそうだが、今は全く違う。
「ねえ・・・雷覇くん。あの裏麗の奴倒したの・・・雷覇くん？」
「・・・風神と雷神・・・・・・」
「は？」
雷覇は質問に答えずに魔導具の名前を呟いた。
「火影という名の忍軍は、長である炎術士を要に魔導具と呼ばれる武具を操り、その力を示した。数多の魔導具を創造せし者は二人の天才」
虚空と海魔。
「製造技術は拮抗するも、互いの思考の違いが双方の魔導具を全く

異なる質へと変えていく。生かす為の魔導具と、殺すだけの魔導具。対極となった二人の魔導具の中でも『最高傑作同士』と謳われた自然現象発動型の魔導具があった」

それこそが、

「虚空の『風神』。海魔の『雷神』」

「今、貴方の腕に取り付くソレがですね」

そう。雷覇の左手には使い手の腕に不気味な触手を伸ばす昆虫型の手甲が『キィ・・・ギュギュギュギュギュ』という嫌な鳴き声を漏らしていた。

「雷覇さん、この場にヤミーは居ない・・・というより、貴方が片付けてしまったようですね」

あたりに視線を移すと、周りにはセルメダルがチラホラと転がっている。

「はい。この雷神の力を全解放して漸くですが、勝てない相手ではありませんでした」

「にも関わらず、その疲労を表に出さない点については賞賛に値しますね」

「どうも。だが一つだけ私はこの運命が悲しくて仕方がない。まるで風子さんと私の魔導具がお互いを壊そうと殺し合いを強要するようでね」

金女は全てを悟っていた。

「あの、雷覇くん?もしかして・・・?」

「私は紅麗様の忍・・・彼に仇なすものは皆、殺す。森光蘭でも――」

そして、

「君でもです」

――カキィィン！！――

何かを弾く金属音。

「中々の手裏剣術」

どうやら金女が雷覇の手裏剣を苦無で弾いたらしい。

「二人がかりでも構いませんが・・・風子さん、風神を使ってください。私が貴女に返した核で本来の力が出せるはず」

行方不明となり、小玉の力でどうにかこうにか機能していた風神。その核を持っていたのは雷覇だったのだ。雷神の力を封じる為の方法として。

「さもなくば、簡単に死にます」

――バチっ！バチッ！――

「雷刃（らいじん）・・・！」

技名が告げられる。

「一緒に森を倒せばいいじゃんかよォー！！言う事聞かないとブッ殺すぞバカ！！」

そんな風子の叫びも今の雷覇には届かない。
雷刃はけたましい音を立てて風子と金女に襲い掛かろうとする。

だが、

「変身」

――パカッ――

それらの雷撃は全て防がれた。
金女がチェリオへと変身する際に発生するフィールドによって。

「その姿は・・・？」
「今の私の名は、仮面ライダーチェリオ」

額金型のバイザーを青く光らせ、チェリオは威風堂々と名乗った。
”逃げも隠れもしない”異端の忍者集団、相生忍軍らしい態度といえよう。

すると突然、風神の核から風の塊が飛び出てきた。
その風の塊は大きなボールあたりの大きさで、中からはある者が出てきた。

『出てきなよ、雷神・・・・・・そこにいるんだろ？』

全身からフサフサした体毛を生やした風神の化身。
愛らしい瞳をしていて獣耳を生やし、額には目玉のような何かがあ

る。
手も小さくて愛らしく、先端が丸い尻尾や、何かを履いているようなカンジの足。
まるで小柄な妖精やマスコットキャラのようなイメージがする風神の化身。

『ゴシュジンサマ・・・・・あいつは――ムギュ！――』

突如風神の化身は、誰かに抱きしめられた。

「はぅー！かぁいいよー！」

何かに萌えまくったような声の主はというと、

「おっ持ち帰り～！」
「ちょっとォォ！！キャラ崩壊してるよ金女さん！！？感情を忍ぶんじゃなかったの！？」

チェリオ＝金女でした。

「風子さん、この子お持ち帰りしてもいいかな？かな？」
「ダメだから！！つーか時と場所を考えろ！！」

忍者である金女を虜にする風神の化身。

「あの、もういいでしょうか・・・？」

そうしてると、ジト眼になった雷覇が尋ねてくる。

「この可愛さは反則です～／／／／／／」
『ムギュー！！』
「それ以上抱きしめたら風神ちゃんが潰れちゃう！！」
でもチェリオの暴走という名のかぁいいモード発動で答える暇のない風子。
「雷神」
待つのを止めた雷覇は一言命じた。
「我が体内への侵入を今再び許そう」
――カッ――
その瞬間、雷神の背中にある保護膜が開かれ、雷神の核が露出する。
そして伸びた触手が伸び、ドスッっという音を立てて雷覇の首に突き刺さった。
『気、気をつけて二人共！！』
すると風神が漸くチェリオから逃れて二人に警告を出した。
『出るよ、奴が』
次の瞬間、雷覇の隣に、”奴”が現れた、
其の場にいるだけで幾多もの電気を撒き散らす様子は、まさに雷神。
『やはり、外は広々として心地好いな・・・・・』

まるで猪に野太い一本角と鬣と髭が生えたような姿をした雷の獣。

「なに・・・アレ？風神ちゃん？」

『雷神の・・・本体さ！』

「天と地ほどの差ですね」

『久方ぶりだ、風神・・・・・・姿を見せて会うのは何百年ぶりか？』

三人の会話が一旦途切れると、そこへ雷神が話しかけてくる。

『永き事、ようもこのワシを封じていてくれたの・・・貴様の姿を見るほどに、怒りで頭がおかしくなりそうだ！！』

『可笑しいのは初めからだと思ってたけど？』

雷神の怒りを皮肉で返す風神。

『言いえて妙かな・・・のォ・・・主、雷覇？』

雷神が己が主人に語りかける。

しかし、今その行為は無駄としか言いようが無い。

今の雷覇は人形のように表情と感情を失っているのだから。

「どうしたの雷覇くん！？」

『ダメだ！ゴシュジンサマ！！』

駆け寄ろうとする風子を風神が制した。

『雷神が彼の肉体を支配した！今はゴシュジンサマの声も届かない！雷神の尾針が体内を通り、脳に根を張って直接指令を下すんだ！

あいつはただの魔導具じゃない！逆に術者を媒体・・・道具として使うんだ！！今の彼は、ゴシュジンサマの知ってる彼じゃない』

風神はトドメとばかりに言い放つ。

『雷神だ』

「つまり私たちの手で、あの悪趣味で醜悪な手甲を外すか、破壊すれば良いということですね？」

『う・・・うん・・・そうだよ』

「なんで避けるんですか？」

風神の要注意人物に鋼金女が永久登録された。

『どれ――――雷覇よ、主の命の力を使うて・・・・・・・・・・・・・・・少し暴れさせてもらうぞ！！！』

咆哮するように宣言する雷神。

雷覇の生命力を削り、そして放たれる一撃の名は・・・！

『狂雷（きょうらい）！！！！』

――バチバチバチバチバチバチバチ！！！！――

雷刃とは比べ物にならない電撃が一斉に解き放たれた。

天の怒りを示すかのように、雷神から発せられる雷撃は本物の雷さえも消し飛ばすような威力を誇っているに違いない。

――バシャアア！！――

「冷てぇ！」

今の攻撃でパイプが破損し、そこから水が雨のように振り注いだ。

『注意して！水は電気を通すよ。幸い、足元には排水溝が沢山在る！逃げ場がなくなるほど、水浸しにはならない筈！』

風神がそう注意していると、雷覇の方に変化があらわれる。

「ぐっ・・・！」

『疲れたか、雷覇？』

意識の無い雷覇が両膝をついたのだ。

『先ほどのヤミーとやらの戦闘、さらに今の一撃では、これ程の手練でも相当の生命力を失うか。ワシの力がいかに強大かを物語っておるわ』

雷神は冷静に雷覇の状況を判断し、

『休ませながら大事に使わせてもらおう。なにしろ、数百年ぶりの主だからな・・・！』

尾針を首から抜き取った。

すると虚ろになっていた雷覇の瞳は元の色を取り戻した。

しかし、狂雷の代償にかなりの体力を消耗している。

「私は・・・！この力を使って君達と！天堂地獄を討つ！！全ては

紅麗様の為に！」

だが雷覇はすぐに息を整え、忍者刀を抜刀して構えた。

（何が彼程の忍を此処まで？）

チェリオは雷覇の姿勢に疑問を抱く。

「・・・・・なんでさ？もう一回答えてくれよ！そこまで紅麗を守ろうとする理由はなんだ！？答えろ！！十神衆雷覇！！」

風子の絶叫じみた問いに、雷覇はこう答える。

「・・・”血”です」

その時、雷覇の手から一滴の血液が床に落ちた。

「私の体には、卑怯者の火影忍軍の血が流れている」

さいならと光界玉と雷覇（後書き）

次回、仮面ライダーブライ！

全装備と師弟と巡狂座

全装備と師弟と巡狂座（前書き）

一つ御報せを致します。
テレビ２９話でカザリがシャチパンダヤミーをつくったのを見て、「あれ？パンダと熊って仲間じゃ・・・？」と思ってみて調べると、パンダも熊も同じネコ目の動物だということがわかりました。このままだと重量系コンボが成り立たなくなる恐れがあるので、少ししたらシロクマを別の動物に挿げ替えます。

仮面ライダーブライ！
前回の三つの出来事！

一つ！奇跡的に生き延びていた門都を再殺する為、ジョーカーはクロアリヤミー共々ブラックホールに呑まれた！

二つ！かつて裏麗首領の螺閃は、光界玉の力で陽炎の”時の呪い”を解呪した！

そして三つ！風子と金女は、雷神が手にした雷覇と遭遇し、戦うこととなる！

全装備と師弟と巡狂座

今から十五年前。
そこは異なる次元にある異なる世界で、幼かった頃の彼女は、乱世の犠牲を食い物にして生き延びていた。

血に染まった土と丘。そこに重なる死屍累々。漂う屍たちの腐り行く臭い。
そしてその死者達は、皆戦国時代や江戸時代での鎧や具足、槍や刀などを持っていた。

その死人の集まりとも言えそうな悪趣味な悲劇の空間で、たった一人の少女が屍を座り台にして何かを食べていた。
およそ八歳か九歳くらいだろうか？そんな幼い少女が死体から食べ物や物品を漁って生きる糧としていた。

――ムシャムシャ・・・・・・――

口いっぱいに御結びを頬張る少女。
その表情はじつに混沌としていて、瞳の光は何もかも失っていた。

しかしそこへ少女に近づく一つの人影があった。

「・・・・・・ッ」

少女はすぐさま気がついた。こんな生活を送っているだけに、人の気配や視線には敏感になっていたのだ。

「死人を喰らう小鬼が出ると聞き、面白半分で来てみたが、これは

また可愛らしい小鬼がいたものだな」

近づいてきたのは一人の青年だった。
ただし、身につけているのは通常の物とは些か意匠の異なる忍び装束で、腰には忍者刀を差している。
紛れも無く忍者だ、と少女は確信した。

――バッ――

少女は死体から飛び降りて、懐から血で染まった小太刀を取り出して、切っ先を忍者に向けた。

「それも死人から取り上げたのか」

忍者はいたって平凡な口調で喋る。

「・・・・・一見かなりみすぼらしい姿だが、ある意味その”逃げも隠れもしない”態度は立派だな。そうして女の童子（わらし）の身で独り、自分を守ってきたのだからな」

忍者は少女の所業を否定ではなく肯定した。

「しかし、その刀はもう不要だ。敵に怯え、自分を守る為だけの刀など、捨ててしまえ」

忍者はそう言うと、腰に帯刀していた忍者刀を取り外し、気分良く少女に投げ渡した。

「ッッ！？」

少女は忍者の行動にとても驚いたが、ギリギリで忍者刀を受け止めた。

「くれてやろう、私の刀。だからもう、そんな血塗れた刀は捨ててしまえ」

「・・・・・・・・・・」

少女は混沌とした瞳で忍者を見やる。

当の忍者は、少女に忍者刀をやると、そのまま背を向けて帰ろうとする。

「刀（それ）の本当の使い方と、生きる術を知りたかったら、ついて来るといい」

忍者は堂々とそう言い放った。

「・・・・・・・・・・・・ッッ」

少女は渡された忍者刀を少し眺めていたが、一度眼を閉じて、再び開くと同時に走った。

そして忍者の背中めがけて、

――ビョン――

跳躍して忍者の背中におぶさる姿勢をとった。

いきなりの出来事に対し、忍者は対して驚いた様子も見せず、余裕の表情である。

そのまま忍者は少女を背負いながら歩き、少女にこう訊いた。

「お前の名前は？」

「・・・金女（かなめ）・・・」

それが、忍者と少女の、初めての出逢いであり会話だった。

「その刀の使い方、今から簡単に二つだけ教えてやろう」

忍者は誇らしげな口調で少女に説いた。

「敵を斬るのではなく、弱き自分を斬る為に。己を守るのではなく、己の魂を守る為に」

＊＊＊＊＊

少女が忍者に拾われ弟子となってから十年後。少女は十八歳となり、少女とは言えない歳となり、幼い頃に拾われた時には想像もつかないほど美しく成長していた。

彼女が忍者から全ての技術を譲り受け、見事免許皆伝となって間もない頃、忍者は親友に殺された。

「師匠！師匠！！」

「か・・・な・・・め・・・・・・・」

弟子の腕の中で言葉を紡ごうとする忍者。

その顔に表情はない。いや、親友によって削ぎ盗られてしまったのだ。

「なぜ・・・何故だ!?なんで師匠の親友である貴方が師匠を!!?」

弟子は必死になって目の前にいる男に叫び問う。
袖を切り落として体中に鎖を巻いた奇抜な忍装束を着込んだ鳥の如き忍者へと。
その手には削ぎ盗った忍者の面の皮がある。

「我ら真庭忍軍の為、お前の師匠・・・・・・我の親友の顔と人格を貰い受ける。我が忍法『命結び』によってな」

親友はそういって削ぎ盗った面の皮を自らの顔に貼り付けて去って行く。

「待て鳳凰(ほうおう)!!」

弟子は苦無や手裏剣を有りっ丈取り出して投げるも、親友は避けるか弾くかして防ぎ、もはや弟子の力では追いつかない所にまで逃げてしまった。

「くそ・・・くそっ・・・・・・ちくしょうぉぉおおおお!!!!」

自分を救ってくれた師匠を殺した親友に対して、最も敬愛する師匠を助けることも出来なかった自分に対して、弟子は喉が潰れん限りに叫び続けた。

その腕の中に、顔の上半分を削ぎ盗られ、『心を殺された』師匠の体を抱きしめながら。

＊＊＊＊＊

あの忌々しい事件からどれ程の月日が経ったか？
弟子は師匠の下を離れる事を決意した。

「今まで御世話になりました」
「あぁ・・・私も今まで楽しかったよ」

新しい主と出会って師匠は変わり果てた。
服装は上下ともに正装たる洋装。顔の上半分には主人より半強制的に頂戴させられた『不忍（しのばず）』の文字が縦に並ぶ仮面をするようになった。

弟子が憧れ続けた師匠は、忍者であることを捨て去った。かつての誇りさえ捨て去った。

「本当にこれでいいのか？私と共に、姫様の下で働くこともできるのだが・・・・・・」
「私が憧れた師匠は亡くなった。それに、今の私の恩人である師匠は、誰かに仕えるような忍者ではなかった」

弟子はかつての師匠と共に歩むことを拒んだ。

「それに、私は・・・・・・」

弟子は自作した忍装束で身を包み、マフラーと一体化したかのよう

な覆面で顔の下半分を隠しながらこう言った。

「私はあの否定女が嫌いですから」

「・・・・・・そうか」

「でも、私は自分のことも嫌いです。だから戒めに、貴方と同じ『不』の一文字を冠しましょう」

それが弟子と師匠の最後の会話となった。

「さようなら、鋼金女（はがねかなめ）」

「さようなら、左右田右衛門左衛門（そうだえもんざえもん）さん」

＊＊＊＊＊

ＨＥＬＬ　ＯＲ　ＨＥＡＶＥＮ

ルートＥ

雷覇の言葉。

それは自らを火影の子孫と名乗る言葉。

しかし何故「卑怯者」という単語を使ったのか？

答えは簡単だ。

天正四年。

静かであった火影の里に、近江・美濃・尾張国の織田上総介信長（おだかずさのすけのぶなが）の軍勢が攻め込んだ。
忍者の力を恐れた信長は数多の忍の里を焼いたが、それらとは違う意味合いがこの襲撃にはあった。

火影魔導具。

天下を欲する信長は、この神秘の武具を欲した。
初めて本格的に種子島（てっぽう）を戦に投入した策士は新しき力に大いなる魅力を感じたのだろう。

勇気ある火影の民は、魔導具が信長の手に渡った後の世をおもい―
―魔導具を隠し、自分たちの力だけで戦うことを決意した。

しかし――――

家族同然であった仲間達が死んで逝くなか、我が身可愛さに里を捨て、逃げる者達が居た。
女も・・・子供も・・・身重の母も火影として死んで逝く。
その屍の上を歩き、逃げた卑怯者の火影の忍！

「憎むべき裏切り者。私にはその血が流れている。私は・・・・・・この血を恥じている。しかし、あの御方はそんな私を信じてくれている」

雷覇にとっての紅麗は――――

「火影忍軍の首領なる炎術士が、裏切り者の子孫を共に戦い者とし

て認めてくれる。これを・・・喜びと言わずしてなんと言うのか・・・？」

雷覇は懐からある物を取り出した。
それは紙――血文字で名前が三つ書かれた紙だ。

「これは。十神衆の三人が紅麗様の為に命をかけて戦うことを誓った証。血判状です。磁生という大男は、魔元紗に殺された後も紅麗様の炎と化し、その誓約を今も守っている。音遠は、森光蘭に殺されかかった紅麗様を命懸けで救い、彼をまた戦地へと羽ばたかせた」

となれば残るは、

「次は私の番」

――カカカッ！！――

すると風子の足元に三つの手裏剣が投げられる。

「先祖の失態はこの身を以って晴らす！例え相手が誰であろうと私は絶対に逃げることは無い！戦ってください風子！無抵抗のまま殺すのは、余りに不憫」
「不面白（おもしろからず）――何を偉そうに長語りしてるんですか？このヤサロン毛が」

雷覇の風子への語りに、チェリオが割り込んできた。

「不成（なさず）――貴方は言ってる事とやってる事が矛盾してるし、全てにおいて私を苛立たせますね」
「何のことですか？」

突如発生しだしたチェリオの怒気に雷覇は奇妙な感覚を覚える。

「本当に紅麗の為に戦いたいなら、こんなトコで油売らずにザコだろうが死四天だろうが倒して上に上がって行けばいいでしょう。紅麗が思いっきり森と海魔のいる天堂地獄を壊せるようお膳立てすることでしょ？なのになんで邪魔する意志のない私達の前に立つんですか？」

チェリオは雷覇に対し、追いかけるような強い口調で問いかける。

「本当はその雷神が怖いんじゃないですか？その凶暴性が紅麗の大事な一瞬を台無しにするんじゃないかと思ってたんじゃないですか？でも自分だけの力で紅麗の役に立てるかどうか、そんな疑惑の念ゆえに雷神を自分から捨てられずに訳の判らない御託を並べて風子さんと風神に忌まわしい力を如何にかして貰おうと都合の良い思考回路をしてるんじゃないんですか！？」

チェリオの口調がどんどん強迫じみたものになっていく。

それと同時に彼女が歩き出し、自分の足で一歩ずつ雷覇に近よっていく。

「貴方は力を捨てる覚悟さえ定まりきらない只の臆病者だ」

「・・・・・違う・・・・・」

ここで初めて雷覇が反論した。

「風子さんは仲間と共にあることで決して折れることの無い強い人です。そんな人が臆病者と戦うなんて、これほど贅沢なモノはあり

ません」
「ちょ・・・ちょっと言い過ぎじゃ・・・？」

風子はチェリオの物言いに少し制動をかけようとするも、チェリオは止まらない。
遂には雷覇とは目と鼻の距離にまで近づき、肩をガシっと掴んだ。

「臆病者の相手は同じ臆病者で充分です。貴方の相手など、この私で、充分だ・・・！」

そう、自分は師匠一人さえ背負い返すことも出来なかった臆病者だ。
命の恩人に何一つ返すことができなかった只の大馬鹿者でしかない。

「黙れ・・・！」
「貴方に、恩義を語る資格は無い！」

チェリオは、あの日――自分を独りの世界から連れ出してくれた師匠の背中の大きさと暖かさを思い出す。

「貴方なんかに、恩義ごと誰か背負う背中が、あるかぁぁぁあああ！！！！」

――ゴンッ！！！――

チェリオの頭突きが、雷覇の額に凄まじい衝撃を与え、周囲の空気に激しい音の波を震わした。

「・・・・・金女ちゃ・・・いや、金女さん」

その時に風子は、金女のことを敬称で呼ぶべき存在として再認識した。

だがしかし、

『ヴォォォおおおお！！！』

一匹の獣の咆哮が叫び散らされた。
それは言うまでも無く雷神の咆哮。

『くノ一よ。だらだらと語りおって、お陰で我が主の戦意がそがれてしまったではないか？』
「だったらそこを突いて勝負を終わらせるだけですよ」

金女は雷神に対し厳しい口調でそう宣言する。
その手には幾枚ものセルメダル。

「不在（おらず）――雷神。私は貴方の存在を『否定』する」

――チャリン、チャリン、チャリン、チャリン、チャリン、チャリン、チャリン――
――キリッキリッ――
――パカン！――

≪ＳＥＴＴＯＵ・ＲＯＵ≫
≪ＡＮＴＯＵ・ＫＡＭＡ≫
≪ＳＨＡＴＯＵ・ＧＥＮ≫
≪ＴＯＵＴＯＵ・ＮＡＭＡＲＩ≫
≪ＣＨＩＮＴＯＵ・ＯＭＯＲＩ≫

≪ＨＩＴＯＵ・ＨＡＳＡＭＩ≫

全ての擬似変体刀が一斉に装着された。
その姿が圧巻であったし、忍者的スタイルのチェリオには不恰好ともいえた。
しかし、決して弱そうには見えなかった。

「チェリオ・グッバイ」

別れの言葉を二重に纏った重装甲形態、それが『チェリオ・グッバイ』。

『面白い！雷覇よ、貴様の生命力を捧げよ！全てを終わらせる！！』
「・・・・・・・・・」

――グサッ！――

尾針が雷覇の首に刺さった。
そして意識が途絶える間際に雷覇はチェリオの姿を見て、

（ソウ・・・カ。ダカラ　貴方は　強インデスネ・・・）

片言になりかけだったが、金女の秘める何かに少しでも気付いた。

『わはははははは！！漲る！力が漲るぞォーーっ！！許さぬぞ、くノ一、風神、女！最早構わぬ！！雷覇の命を全て使うた力を食らわせてやる！！』
「ならばこちらも・・・！」
『死ね・・・！』
『拙い！あれを使うよ、ゴシュジン！』

様々な者達の思いが交差する。

――チャリン、チャリン、チャリン、チャリン、チャリン、チャリン、チャリン、チャリン、チャリン、チャリン――

≪ＣＥＬＬ　ＢＵＲＳＴ≫

チェリオは大量のセルメダルを投入する。

『束ね束ねよ幾重にも・・・！』

雷神は己一個に全ての力を集中させる。
それによって発動する奥義の名は、

『降御雷（ふるみかずち）』

それは正しく、雷神と銘をうたれた魔導具に相応しき、天上をも突き破り、燃やし焦がす程の一撃だった。

勿論風子もチェリオも黙ってやられるわけではない。
風子は風神の化身を一個のボール状の風の凝縮体に変形させている。

「風魂（かざだま）ぁーーっ！！！」
「漆填抜刀（しちてんばっとう）！！！！」

――ギガァァアアアアアア！！！！！――

そうして、三人の奥義が凄まじい鬩ぎ合いを始めた。

「風子さん・・・！こんな時にあれですが・・・不迷（まよわず）」

「不迷（まよわず）？」

「そう、もし今貴女が心に迷いを持つなら、今まで自分がやってきたことを忘れなさい。只今目の前にある、己が叶えたい欲望という信念に眼を向けなさい！」

「信念・・・・・・」

風子は正直な話、迷いかけていた。

今まで自分が誰かに吐いてきた言葉と、それに矛盾する今までの気持ち。

それを自分で自問自答していたら、きっと戦いに集中できなかっただろう。

だが今は違う。

――ガッ！――

頼れるバカが今、ここに来て、彼女の背中を支えてくれているから。

「いいぞ風子！もっと力を込めてやれ！しっかりと、前を見てな！」

「土門・・・！！」

ルートCに居たはずの土門と、

「金女さん。今の台詞、ちょっと痺れたっすよ？」

「凍空さん・・・？」

吹雪がやってきた。

「なんで・・・お前らここにいるんだ?違うエレベーター乗ったのに・・・なあ?」

さらに風子は自分の右肩を支えている土門の手を見る。

「その手・・・不自然だぞ?折れてる・・・・・・!」

風子は土門の状態に少々動揺する。
しかし当の土門は冷静な表情で人形状態の雷覇を見た。

『カァァアアアアアア!!!』

雷神はそこで更に出力を上昇させた。
それによって少しだけチェリオと風神の技が押される。

「なあ風子?思えばお前はどんだけ戦っても逃げなかったな。エロ野郎の藤丸、餓紗喰、、命・・・・・・火影唯一の女だったけどよ、女だからって楽してる時なんて一度もなかった!」

土門は折れた手で風子を支え続ける。

「それが当たり前みたいになってて、みんな風子だけは特別に強いって思ってる。男勝りの爆弾娘だと思ってる。お前自身ですらな。違うんだなぁ。特別な存在でも何でもねーんだ!」

土門は肩から手へと、支えるべき部位を変え、折れた右手を使う痛みに眉をピクリとも動かさずに話しかける。

「戦いの前には震えているような、女らしい女の子なんだぜ」
「・・・・・・・・・ッ」
その言葉に、風子は無性に嬉しくなった。
「人が死ぬトコだって見てきた。十代の女の子とは思えないほど、体には一生残るキズもできた。それでも逃げねえ！止めたって聞かねえ！呆れた女の子様だ！だからよ、支えてやる」
『もっと！！もっとだァァ！！生命の力を、力を捧げよ雷覇ぁ！！』
――ドクン！――
「カハ・・・ッ」
一気に生命力を吸い上げられ、雷覇は吐血を床に零した。
「弱音吐いたっていい！泣いたっていい！俺が支えてやる！一生支えてやる！俺は男だからな！！」
その間にも雷の出力はどんどん上昇していく。
『ぐぐッ・・・・・！！鋼妹のお陰で如何にか力は均等だけど、これ以上雷神が・・・・・雷覇の命を使い切って来たら・・・！！』
「不案（あんじず）！そんなに案ずることはありませんよ、風神ちゃん。貴方の主人には、頼もしい人がいます！」
『・・・うん、そうだったね！』

風神はチェリオの言葉を聞き、再び気力を振り絞る。
体中の装備からセルメダルのエネルギーを放出しまくって共に戦ってくれる仲間の声を聞いて。

「しっかり支えてやがれ、土門！逃げねーぞ！雷神壊すぞ！！」
『身の程を知れ、小娘！！我こそは、海魔より生まれし最強の魔導具雷神よ！！！』

――ドギュウウウウウウウ！！！――

さらに雷撃の威力が上昇する。

「ならば、メダルを・・・！」

チェリオがさらに何枚かのセルメダルを使おうとしたその時、

――カチ、カチ。カチン・・・・・・・――

「！？」

風神の小玉スペースに三つの魔導具の核がセットされていたのだ。

「嘴・・・鉄・・・土ィ！？これ・・・・・・・俺の魔導具の核か！！？」

持ち主たる土門もこの現象に驚くほかない。

――カチ・・・ン――

そしてもう一個。

神慮伸刀の核。
まるで緋水からの応援のようにも見えた。

「これは・・・・・・行ける！！」

金女は確実な勝機を掴み取ったことを実感した。

――チャリン、チャリン――

≪ＣＥＬＬ　ＢＵＲＳＴ≫

その瞬間、風魂は猛烈な変化を遂げた。
優しい球状から、エモノを求める獰猛な獣の如き姿へと変わっていく。
そして漆填抜刀と合体し、さらに巨大に成長していったのだ。

『風魂が変化！？バカな・・・・・・！！？』

そう思った時にはもう遅い。
雷神本体は、幾つもの人達の思いを乗せた渾身の一撃の刃に貫かれていた。

『ガファ・・・！！壊れる！！？我は海魔の造りし魔導具雷神ぞ！！？雷神が風神に負けるのか！！？』

「雷神。貴方は風神だけじゃなく、私や火影に負けたんです」

『ギュ・・・ギュボ・・・・・・！！ギィイイィヤァアアアーーーーッ！！！！』

――バリン！！――

雷神の核は、無様な悲鳴を背景に砕け散った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・くッ」

そうして漸く雷覇が意識を取り戻した。

「雷神が・・・負けたのか・・・」

あれだけ生命力を攻撃力に変換されてもなお、生きていられるというのは賞賛に値するだろう。

「・・・・・・・・風子さんは、生きてますか？」

「あたりめーだ！力使いすぎて気絶しただけだ！」

「そうですか」

そうして雷覇は、チェリオの頭突きが原因で額から血を流しながらも、

「良かった」

心から嬉しそうに笑った。

「あの、雷覇さん。あんたひょっとして最初から霧沢さん殺すつもりは無かったんじゃないっすか？」

「そうですよ」

吹雪の問いに雷覇はあっさり答えた。

「やっぱり・・・・・紅麗にとっても火影の人間は敵。ならば、その一員である霧沢さんも敵。忠誠ゆえに例外は作れなかったとい

うわけっすか」

「ハッキリ言うと・・・私はそこにいる彼女の言うとおり、力を手放すのを恐れ、他人の壊して貰いたかった臆病者かもしれませんね」

雷覇は自分に呆れ果てたように笑う。

「貴女のお名前、まだ聞いてませんでしたね」

「相生忍軍所属、鋼金女」

変身を解除した金女は真っ直ぐ眼を見据えて名乗った。

「お願いがあります、石島土門、鋼金女。天堂地獄を必ず討ってください。風子さんをよろしくお願いします」

雷覇は真剣みがあり、優しい表情でそういった。

「言われるまでもねーや！」

「不別（わかれず）――何時かまた会いましょう、雷覇さん」

「んじゃ！」

そうして火影の面々は去っていった。

そして一人残った雷覇。

「雷神は粉々・・・右腕は使い物にならない。おまけに生命力を吸われ続けて立つのがやっと・・・これではもう戦えませんね。紅麗様の足手纏いになってしまいます」

それは独り言ではなかった。

「結局、私だけ彼の役には立てなかったですね。音遠」
「血判状・・・あんたが持ってたのね、コレ」
そこには本当に音遠がきていた。
「此処に来てたんですねぇ。紅麗様から戦線を引くように言われてたはずなのに、困ったお方だ」
「引き際の悪い女でね。私にとってあの方以上の男なんていないもの。知ってるでしょ？」
音遠の清清しい表情に、雷覇はニコニコとしていた。
「霧沢風子・・・というか鋼金女との戦い、つらかった？随分ボロクソに言われてたけど、逃げたくなかった？」
「逃げませんでしたよ」
雷覇は誇らしげに答えた。
「・・・お前は昔から自分に”裏切り者の血”が流れていることを恥じていたけどね、戦い・・・傷つき・・・流れた血は忠義の証だ！四百年も昔の先祖の行いが・・・血がお前のアイデンティティか？それが理由でお前は十神衆になったのか？違うね！お前は紅麗様が好きだから仕えたんだろ？」
音遠は遠慮なく自分の意見を吐き出す。
「死に逝く者、裏切る者が十神衆を少数部隊にしていった。最後の戦いで紅麗様の側に残ったのはたったの二人。その者こそが紅麗様が最も信頼していた人間に他ならない！」

そしてこう言って見せた。

「あの方にとってお前以上の忍はいない。雷覇！」

例え誰がなんと言おうと、紅麗は雷覇を永遠の従者として認め続ける。

それだけは確かだ。

「ハッキリ言って嫉妬してるけどさ！そこまで彼に心を許させる存在のあんたが、役に立たないなんて皮肉も、いい所！鋼刃介の妹が何を言おうと、あんたが臆病者なんかじゃない！」

音遠は雷覇の服の胸倉を掴みながらさらにこう続ける。

「胸をはれ、昼行灯。お前は”火影の子孫”という人間じゃない。”十神衆雷覇”という人間だ！これからも彼の力になれる。お前こそ忠義の士だから・・・」

「・・・もったいない・・・言葉ですねぇ・・・・・・」

＊＊＊＊＊

ルートG

水鏡凍季也

鑢七実

二人は今、進むべき道を進み、一つの扉の前に辿りついた。

そして、その扉の向こうには――――

岩を削って作ったようなただっ広く殺風景な部屋の中央を陣取る一人の老人と一体の異形。
そしてその近くにいる若者だけだった。

「師・・・巡・・・狂座！」

スキンヘッドで長い白髭を蓄えた上、体中に鉄球付きの枷を付けた老人を、水鏡は師と呼んだ。

その時思い出されるのは、兄弟子の戒の言葉。

――お前の姉を殺したのは、巡狂座――

「くッ・・・（落ち着け！）」

水鏡は己の意識を必死に鎮める。

「・・・・・・これはまた、歪なヤミーを」

一方七実は座って胡坐をかく巡狂座とは対照的に、只佇むヤミーに眼をやった。
正直言ってこれほど多くの種類を混ぜ合わせたヤミーは見たことが無いが、ある意味これは七実がここに来ることを見越した竜王の策なのかもしれない。

以前現れたタトバヤミーに更なるパーツが付け足されていた。

頭はそのままだが、片腕がゴリラで片脚がタコのそれとなっている。
いうなれば”タトゴバタヤミー”と呼ぶべきなのかもしれない。

「お久しぶりですね、師・・・・・・お変わりないようで」

一方水鏡は師匠に挨拶するも、彼に返答というアクションが起こらない。

「置けばいいんだな？」

すると顔に包帯を巻きつけた若者が両腕に抱えていた布に包まれた大きな荷物を地面に突き刺した。
当然布が外れて・・・・・・・

「それは！？（戒の・・・氷魔閻！？）」
「水鏡・・・・・・これより先なにが起こるか、主は知っておる。さすればこの枷を斬ってはくれぬか？」

巡狂座は胡坐しながらそう頼む。

「・・・・・僕は貴方と戦う気で来たのではありません。全てを知る為にここに来ました！お聞きしたいことがあります！姉を「水鏡――」」

巡狂座は弟子の意見などまるで聞く耳をもたずに、

「枷を斬ってくれぬか」

頼むというより命ずるように言って見せた。

「・・・・・・・・・・・・」

――ザシャッ！！――

水鏡は少し迷ったが、振るわれた闇水の一太刀は一瞬で全ての枷の鎖を断ち切った。

――ドン！ドン！――

――ジャラジャラ！――

崩れる枷の音。

巡狂座は気にも留めずに左手に氷魔闇を装着した。

「ふむ・・・・・上手くなったな、水鏡。それに・・・・・・いや、もう少し確かめてみるか」

弟子の成長を喜び、老人らしい優しい笑顔になる。

しかしその直後、

「久方ぶりに刃を交えてみたい」

戦え、と直球に言ってきたのと等しい。

「どうやら説得しても聞かなそうですね

「その女の言うとおり。久方ぶりに刃を交えてみたい」

巡狂座は決して我を曲げる気は無い様子だ。

「ふひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！！」

すると若者が大笑いする。

「ほんっとガンコなジイさんだぜ！葵さんに死なせないように丁重に扱えって言われてたんだからよ！飯も水もやったのに、絶対口にしねぇんだ！人の言う事聞きやしねぇ！言う事聞くしかねーぞ、色男！」

その瞬間、

――ガキン！！――

金属が金属を弾く音がした。

『余所見するとは、らしくないですね』

そこにはグリード化した七実が手刀を構えていた。

「ほう、噂通りの使い手だな。確かにこやつ程の力なら、人間では到底太刀打ちできまい」

と、巡狂座は過小評価も過大評価もしなかった。

「ところで水鏡、ワシの体を朱に染めよ。一太刀入れるたび・・・その度少しずつ・・・・・真実を語ろうではないか」

それを聞いた時に思い出されたのは修行したての頃の話。

巡狂座に木刀で一太刀入れればその日の修行は終わるという至極簡単なもの。

「あの頃は結局、最後までいれることができなかった・・・」

清清しい表情でそういった水鏡は一瞬で地を蹴って師匠の眼前に躍り出た。

「これは水傀儡」

巡狂座はバっと判断を下すと、後ろから迫るもう一人の水鏡にザクっと刃を突きたてた。

――バシャ！――

「おお！」

そして漸く気づいた。

だが既に肩を浅く斬られていた。

『・・・・・・・・・気を傀儡と本体とで』

タトゴバタヤミーは独り言をいうように呟く。

「ホホホ！本当に上手くなっておる！傀儡に気をずらすとは、やられたな！」

巡狂座はこの程度では倒れない。未だに余裕がある。

「どれ、一つ語るか。まず主の姉の仇――」

（嘘で・・・嘘であってくれ！！）

「あれは・・・・・巡狂座に相違ない」

嘘にはならなかった。

＊＊＊＊＊

数年前、水鏡が巡狂座に拾われ、食事をしているとき。

「喰え」

日本の食卓によくある和の食事。
白米が盛られた茶碗、焼き魚の乗った皿、味噌汁の注がれた入れ物。

「旨いか？」
「不味い。姉ちゃんの御飯の方が旨かった」

ナマイキにかつての水鏡はそうツッパった。

「凍季也。姉を殺めた者が憎いか？」
「憎いさ！！殺してやる、殺してやる！！絶対に殺してやる！！」
「ならば恐れるな。それを成したくばお前は進んで地獄に堕ちよ。
地獄の底より這い上がり鬼神の力を手に入れよ。そして何時の日か
姉の仇が目の前に現れた時は・・・忘れるな・・・迷わず斬り殺せ」

＊＊＊＊＊

「嘘だ・・・・・・そんな話信じない！！僕はあの時犯人をこの眼で見ている！！嘘をつくのはやめてくれ！！」

水鏡は有りっ丈の声を張り上げる。

「仇どころか・・・・・・・・・あの日以来身寄りをなくした僕を・・・・・・育ててくれた、強くしてくれた・・・・・・・・・恩人じゃないか」

『水鏡さん。無粋な事を言うようで申し訳ありませんが、あの御老人は嘘を言っている眼でも雰囲気でもありません。直接的な意味でなく、間接的な意味で自分が殺した・・・と言っているのでは？』

「ッ！」

その一言で水鏡は何かに勘付き始めた。

「異形の女よ。剣士と剣士の果し合いに横から口を出さないでもらおう」

『おや、すいません』

七実は素直に謝った。

「水鏡よ、次なる真実を求めるならこの体を更に朱に染めよ」

巡狂座は威圧感を垂れ流して水鏡に一気に駆け寄る。

――カキン！ギン！ピン！――

闇水と氷魔闇。
二つの刃が幾たびも重なり合う。

『・・・・・・あれが水鏡。・・・巡狂座の弟子・・・』

その戦いを見ていたタトゴバタヤミーがまた呟く。

『しかし・・・・・・あれではな・・・』

そして、鷹の目で見抜いていた。

（・・・昔から、一度口にしたことは決して曲げぬ方だ。一度閉じた口を無理に開かせようとしても無意味。ならば・・・・・・）

次の瞬間、

――バジュ！――

先の斬り合いで、二人の肩から血液が流れ出た。

「その気になってきたようだな、水鏡。真実をしってゆけ。ワシは麗の一員だ。麗は魔導具を欲しておったな」

その言葉に対して水鏡は、

「・・・・・・もし、それが真実だとして、麗の巡狂座が姉の持っていた闇水を奪う為に姉さんを殺したとしても、姉から闇水を奪うことはなかった。姉から僕の手に渡った後も、あの頃幾らでも奪う機会のあった闇水に手を出していない」

水鏡は矛盾点を糾弾する。

『貴方はなんの為に回りくどく、そして本当のことを言うのですか？』

「其方の気にすることではない。・・・死合を続けるぞ、水鏡・・・・・」

だがその直後、

「ぶはっ！！」

巡狂座が吐血した。

「師匠！！？」

『高齢の身にあれだけ鞭を打ったのだ。普通なら栄養失調でとっくにギブアップのはずなんだがな』

「おい水鏡に虚刀流っての！！なにしたいかは知らないがもう終わりだ！！行きてぇならもう上に行っちまってくれよ！！巡りのジジィも止めやがれ！！」

すると若者が巡狂座を案じて止めるようにいう。

『人間よ。水鏡一人ならいざ知らず、虚刀流を通すことが絶対にまかりならん』

「だけどよ、ヨボヨボのジジィのこんな場面・・・気分最悪だよ・・・」

どうやらこの若者、日陰者の割には案外気が善いほうらしい。

だが、水鏡は決して止まるわけにはいかない。
師匠が嘘のような回りくどい言葉の裏に隠す真実をしる為にも。

そして何より、闇水の刃さえ満足に形にできなかった頃の自分をここまでの剣士に仕上げてくれた師匠の、秀才と言われるまでの頭脳の基礎を叩き込んでくれた恩師の、そして風邪で寝込んだ時に看病してくれたり一緒の風呂がまに笑顔で入ってくれた恩人という名の、もう一人の父親の素顔を知る為に。

「水鏡・・・・・言った筈だ。姉の仇が眼前に現れし時は迷わず斬れと！斬れ！！そして全ての真実をしってゆけ！！」

眼を見開き、血走った眼で此方をにらむ巡狂座、

――想いが遂げられた時死しか残らなかった、私のようになるなよ――

一方で水鏡の脳裏には、あの男の言葉が浮かんでいた。

（そうか・・・・・戒！！お前が教えてくれた・・・！方法はある！！）

――ピキパキ・・・っ！！――

水鏡は闇水の刃を凍りつかせた。

『お手並み拝見ですね』

氷紋剣の師弟対決が開始された。

――ギンッ！――

水鏡は氷の刃を四つの小さな氷塊として分離させる。その配置は東西南北を描くようにされている。

（全ての刃を使って”蛇”をつくる？これを最後の一撃に決めたか、水鏡！）

巡狂座の読みどおり、四つの氷塊は互いに形を変えて絡み合い、巨大な形をなしていく。

元の大きさや質量を遥かに越え、相乗効果としかいいようのない大きさになっていく。

そうして完成された造形はそのままこの技の名となった。

「氷成る蛇！！」

『ほう。正しくは氷の蛇。氷紋剣、ですか。思ったより興味深いですね』

七実ははじめて見る氷紋剣の技に関心をもった。

――ガグァァ！！――

大きな口を開いてかみ殺そうと牙を向ける氷の大蛇を、巡狂座は力技で止めて見せた。

「ホッホ！なんと重い蛇！老体にはこたえる。流石は金の資質をもつ水鏡！しかし――」

――ピキ・・・ッ――

氷魔闇の刃と接している氷成る蛇の口が裂けようとしている。
だが、

――グルン！――

蛇は突然動きを変えて、攻撃ではなく捕縛を行う。
それも左腕の氷魔闇を重点的にしてだ。

「腕をとる？まさか・・・・・・！」
「戒は僕との死闘での末、自ら命を絶った。己の武器で」

身動きのとれない巡狂座に水鏡が近寄る。
その手に赤黒い刃を携えて。

（血の刃、そんな切札を・・・・・・！！）

こんな芸当はあらゆる液体を刀身とする闇水ならではだ。

「簡単なことを見落としていた。あと一撃でこの戦いを終わらせることができる」

するとそこへ、

『血だ！！血をくれ！！この氷魔闇に血を！！水鏡の血を！！』
「飲めよ」

やかましく語る氷魔闇に水鏡は死刑宣告のように言い放った。

――ズギャ！！！――

『プギ・・・――――』

血の刃が、氷魔閻の核を突き砕いた。

――バリィィン！！――

核を失い、氷魔閻という魔導具は此の世から消滅する。

『上手い手だな。如何なる達人といえども、剣士である以上は、武器なくして戦えまい』

敗北決定にも関わらず、タトゴバタヤミーは腕を組みながら、水鏡の戦法を評価する。

「師・・・巡狂座。勝負ありです」

水鏡は清く澄み渡った聖水のように笑って見せた。

「良い顔で笑うようになったなぁ。お前は変わったよ、水鏡」

それに反応し、巡狂座も好々爺のように優しく微笑んだ。

しかし、

巡狂座は吐血した。

「師匠！！？」

「かまわん・・・死期が近いのはワシが一番良くわかっとる。どの道あと三日はもたなかっただろう」

巡狂座は自らの命に執着する様子などなく、その苦しそうでも凛然であろうとする態度は正しく武人。

「間に合った。やっとお前や美冬に罪滅ぼしができるのだ・・・・・・・そして・・・・・・全ての真実を語ろう。我が孫凍季也に――――八年前・・・・・・」

そして、巡狂座は語った。全ての真実を

八年前、水鏡の両親が死んだ事から全てが始まった。

当時はまだ存命中だった水鏡の実姉である美冬（みふゆ）は巡狂座の住まう和風屋敷の呼ばれていた。

その時に巡狂座が述べた言葉はとんでもないものだった。

”凍季也を氷紋剣伝承者にする”というものだったのだ。

当然これには美冬は大反対した。如何に祖父の言葉とはいえ、それだけは聞けなかった。

当時の水鏡は巡狂座（祖父）の存在を知らなかったうえ、巡狂座は実の息子夫婦の葬式にさえ顔を出さなかったのだ。

しかし巡狂座としては今まで氷紋剣を学んでいた水鏡の父親が死んだ為に、氷紋剣の新たな後継者が必要となっているのは事実。そし

て火影魔導具である闇水と氷魔闇を守りながら次世代の人間に受け継がせていくのが水鏡家の裏にある使命だった。
巡狂座の使命に対する念は強く、美冬から了承を取れなくても”連れ去ってでも教える！”とまで発言したのだ。

巡狂座を説得するのはもはや無理と判断した美冬は苦汁の決断を下した。

”私がそれを引き継ぎます”

大粒の涙を流しながら――

”私が『巡狂座』になります。だから、あの子だけは許して・・・・・”

”狂座が巡る”

愛する弟のために、自らの人生を差し出したのだ。
そう、美冬と巡狂座の発言から察すると、巡狂座というのは個人名ではなく、氷紋剣伝承者に代々受け継がれてきた異名であり称号なのだ。

美冬は弟の身代わりとなり、未熟な女手一つで彼を育てながら氷紋剣を祖父より教わっていた。
だがそんな生活が一年近く経った頃に、悪夢が起こってしまった。

巡狂座はある夜、一人のチンピラを氷魔闇で斬り殺した。勿論斬り殺された男は裏世界の住人である。
その男と一緒にやってきた男はチンピラが死んだことに大して関心せず、魔導具を素直に渡してもらえなかいと言い出してきた。

巡狂座が素性を尋ねると、男は自らを”磁生”と名乗った。
目的は氷魔閻だけでなく閻水をも獲得することにあるとまで語った。
巡狂座は磁生たちが閻水のことを知っているとなれば確実にあの姉弟に危害を加えると確信し、何とかしようと奔走したが、最早手遅れだった。

美冬は裏麗の前身ともいえる外道二人組によって殺された。水道口から閻水の刃たる水を得ようとしたが、その隙をつかれて背後からナイフで刺されてしまったのだ。
外道二人組は水鏡姉弟を二人まとめて殺し、ゆっくりと閻水を探し出そうとしたが、美冬に致命傷を与えたことで、彼らの死は確定してしまった。

結論から言うと、その外道二人組は巡狂座によって斬殺された。
遠距離からの果てしない殺気を受けた二人組は水鏡のことを後回しにして逃げようとしたが、その逃げた先にこそ殺気の発信源である巡狂座が待ち伏せしていたのだ。

その場には磁生もいたが、仮初めとはいえ部下の弱いものイジメを通り越した最低最悪のやり方に腹を立て、敢てその二人を見殺しにした。

愛すべき弟子であり孫である美冬を殺されたことで失意と悲しみにくれる巡狂座に磁生は深い謝罪の言葉を述べた。
この時の磁生の主は森光蘭だったが、後に彼は紅麗率いる麗の十神衆となることを明かし、巡狂座と最後の身内である水鏡の身の安全を考慮して、巡狂座に手を差し伸べて麗に勧誘したのだ。

巡狂座の実力なら十神衆になるのは不可能ではないし、麗の一員になれば氷魔閻は兎も角、一時的に閻水は麗が所有しているとして誤

魔化せる。
巡狂座はその時、磁生の手を取った際に己の無力さと愚かさが身に染みてこのような結論を出した。

”美冬を死なせたのは・・・この者達ではない。殺したのは、ワシと・・・・・巡狂座という称号だ！！”

そして、幼き日の水鏡と巡狂座は出会い、師弟となった。
麗の一員になったのも、水鏡の自分の頭上や美冬の死の真実を語らなかったのも、全ては水鏡凍季也が自分の身を自分で守れるくらい強くする為の愛情であり罪滅ぼしだったのだ。

「せめてお前にだけでも力になってやらねば、仇をとらせてやらねばと思った」

巡狂座は吐血跡が生々しく残るなか、未だに口を開き続ける。

「七年の修行を終えてお前が下山してすぐに、戒という剣士が現れた。”この男を伝言板にしよう”と目論んだ。戒に敢て非道な言葉や仕打ちを行い利用した。凍季也がこれ程の男に勝てるまでになったら、ワシと戦う時だと考えた」

巡狂座が本当に望んでいたこととは、

「巡狂座という仇を討ってほしかった」

全ては、あの日の罪に報いる為の贖罪。

そして、その時は今やってきた。

「凍季也・・・・・・殺せ。姉の仇をとれ」

巡狂座は横になり、一切の抵抗の素振りをみせない。
水鏡は巡狂座の手に触れてこういった。

「貴方は仇ではない。僕の師であり、家族だ」

その表情には一切の邪念はなく、彼の名前通り、心身をうつす水の鏡そのもの。

「ここに来る前に、姉の姿を見ました。笑っていました。幻だったかもしれない・・・でも・・・姉もきっと許しています」

水鏡の脳裏には墓参りの際、美冬の霊ともいえる幻影の姿がハッキリとうかんでいた。

「もうこれ以上自分を責めないでください」

水鏡は祖父の冷たくなりつつある手を握り締めた。

「やはり・・・・・お前は・・・変わったよ、凍季也。氷のようだったお前に・・・暖かなものが・・・・・・」

巡狂座は驚きつつも、祖父らしい笑顔をうかべる。

「教えてくれ・・・山を降りて、何を見た?何を知った?何がお前の氷を溶かした?」

水鏡は少し間をおき、

「戒・・・彼は色々なことを僕に与えてくれました。一人だった僕に、一人ではないことを気づかせてくれました」

「そう・・・か・・・あいつがなぁ・・・・・・」

「僕は決して一人じゃなかった」

そう今の水鏡は一人じゃない。

「僕を変えてくれたんです」

仲間達が傍にいてくれている。

それを聞いた巡狂座は、人らしい本当の笑顔を見せてくれた。

可愛い孫と共にいることを、その孫の成長を喜ぶ祖父としての笑顔。

そして彼はこういった。

「のぅ・・・虚刀流」

『なんでしょう?』

怪人形態の七実に話しかけた。

「今わの際に、その身に秘めし神業・・・・・・この死に逝く老い耄れの眼に、焼き付けさせてはもらえぬか?」

『構いませんよ。では餞別に、虚刀流の八番目、最終奥義の改良版をお見せしましょう』

それは一発で勝負を決めるという意味だった。

『結局こうなったか』

タトゴバタヤミーは首を横に振りながらこの後の展開を予想する。
そして七実の正面にたった。

『すいませんね』
『ヤミーなんざ、生まれて一週間も生きられれば上等だろ？それに、ブライかお前のどっちかが来た段階で、俺の生死は決まったも同然』

その語り口はどこかスッキリしており、後腐れや未練が感じられない気持ち良いものだった。

『虚刀流所属、鑢家家長、鑢七実』

一人のヤミーと一人のグリードは向き合う姿――――それを水鏡、若者、そして巡狂座が見届ける。

そして、

『虚刀流最終奥義、七花八裂（しちかはちれつ）・改（かい）』

虚刀流の全てに魅せられ、巡狂座はさらなる剣士の境地を見せ付けられ、穏やかに満足に・・・その長きに渡る生涯を閉じた。
因縁の象徴たる称号は最早必要ない。全ての戦いはもう直ぐ終わる。

狂座はもう二度と巡らない。

全装備と師弟と巡狂座（後書き）

次回、仮面ライダーブライ

クローンと紅蓮コンボと誕生儀式

鋼金女（はがねかなめ）

仮面ライダーチェリオ変身者にして刃介の実妹。

八歳の時、兄の刃介が無意識に行った仇討りという名の凶行に心底恐怖して勢い余って家を飛び出してしまう、空間の歪みに巻き込まれて「刀語の世界」に迷い込んでしまう。

その後は凄まじい速度で環境に適応し、死人から追い剥ぎをして生きていたが、そんな時に若き日の左右田右衛門左衛門と出会い、彼に拾われて弟子入りする。しかし免許皆伝となって間も無くの頃、右衛門左衛門が真庭鳳凰によって精神的に殺されてしまい、それを切っ掛けに右衛門左衛門が否定姫を主と認めて仕え、遂には忍者であることを辞めたが故に自ら師匠の下から離れた（否定姫の事が嫌いだからというのもある）。

右衛門左衛門が変わってしまったのは、自分が臆病者だったからという戒めの意を込めて、師匠と同じく『不』の一文字を用いた口調で話すようになる。基本的に敬語で喋るが、感情が昂ると少々荒っぽい口調になる。

そしてどういうわけか元の世界に帰還することとなり、相生忍軍の技法を駆使して凄腕の暗殺者となる道を選び、彼女のことを探し出

したシルフィードに抜擢されてチェリオシステムを受け取ると同時に『ブライの戦闘補助』という依頼を受理した。依頼を引き受けた動機は”兄との再会”と”高額の報酬金・二億円”の為である。

因みに相生忍軍の技術で幾多もの困難な暗殺の依頼をほぼ確実に成功させている為、相当な金銭を稼いでおり、依頼人の中には日本はおろか各国の要人も存在している為、金女が逮捕されることは、事実上あり得ない（要人達が自らの犯罪を認めるに等しいので）。

忍者としての腕前は一流だが、何故かアニメキャラのパロディを多用するネタキャラとしての側面も強い。
暗殺業や戦闘の際には、首から上を額金と覆面で両目と髪の毛以外を隠し、鎖帷子をしてるものの袖を切り落とした上に中途半端な丈をした焦茶色の忍装束姿で活動する。仕事を完遂した際の達成感に喜びを見出しており、過程が多少酷かろうと結果的に事が上手く済めば良いと考えている節がある。

年齢：二十三歳　職業：忍者　所属：相生忍軍　身分：暗殺者
所有刀：炎刀『銃』　身長：１６５ｃｍ　体重：不詳　趣味：情報収集
座右の銘：終わり良ければ全て良し　スリーサイズ：Ｂ９２／Ｗ５７／Ｈ８６

仮面ライダーチェリオ
鋼金女が変身する仮面ライダー。モチーフは忍者。カラーは黒と銀。
相生剣法・相生拳法・相生忍法を駆使して戦う。バースシステム同様にセルメダルを利用する機構となっていているが、トライブ財閥独自の技術によってバース以上の性能を誇る上、金女自身の戦闘技

術も相まって凄まじい戦闘力を発揮する。
専用ビークルなどは無く、使うとしたらライドベンダーに限られる。

身長：１９０ｃｍ　体重：８５ｋｇ　キック力：１２トン　パンチ力：７トン
ジャンプ力：６０メートル　走力：１００ｍを２．５秒

チェリオドライバー
チェリオ専用のベルト型変身装置。基本的な造形や変身プロセスはバースドライバーと同じだが、カラーの方は逆転しているのが特徴。

忍刀（ニントウ）『鎖（クサリ）』
チェリオの通常武装たる二振りの忍者刀。普段はベルトの両サイドバックルにある鞘型のホルスターに納刀されている。『鎖』の一文字に相応しく、鍔を回転させることで刀身の切れ目を境に鎖のような連結刃として中距離・遠距離の敵にも攻撃できる。刀身を蛇のように伸ばせる為、使い方によっては捕縛武器にもなる。
そして二振りの忍刀『鎖』を合体させて一本の大剣と成し、硬化投入口（メダルインジェクション）に六枚のセルメダルを投入し、鍔によって刀身を研磨するように上下させることでセルバーストが成立し、『忍刀両断（にんとうりょうだん）』が発動する。

暗刀（アントウ）『鎌（カマ）』
擬似変体刀の一本にして右腕全体に装備するアタッチメント。
三本の刃によって形成された爪のような部分を三重の鎖で繋いだ状態で飛ばし、遠距離の敵を攻撃・捕縛したり、磁力によってセルメダルを回収する機能を備えている。

切刀（セットウ）『鏤（ロウ）』
擬似変体刀の一本にして右前腕部に装備するアタッチメント。

高速回転するチェーンソー型の武器で、これを振り回すだけでも充分すぎる程の凶器となる。これにも磁力が備わっているので、ヤミーやグリードのセルメダルを削った矢先に引っ付けることができる。近接戦闘向きの装備といえる。

投刀（トウトウ）『鉛（ナマリ）』
擬似変体刀の一本にして左前腕部に装備するアタッチメント。
セルバーストによってで内包した数多くのホーミング機能付きのな手裏剣や苦無を敵に投擲する『一投多刀（いっとうだとう）』を発動する。

射刀（シャトウ）『鉉（ゲン）』
擬似変体刀の一本にして左腕全体に装備するアタッチメント。
文字通り弓矢型の武器で、セルバーストによって一本の矢を敵に向って正確に狙い撃ちする『精密刀射（せいみつとうしゃ）』を発動する。

沈刀（チントウ）『錘（オモリ）』
擬似変体刀の一本にして両脚部分に装備するアタッチメント。
キャタピラレッグとフォルムは似ているが、こちらは殺傷力を更に高めた物で、いたる部分に刃が取り付けられた刺々しいデザインをしているのが特徴。

飛刀（ヒトウ）『鋏（ハサミ）』
擬似変体刀の一本にして背中部分に装備するアタッチメント。
チェリオに飛行能力を与える機能を備えており、その際の飛行速度は時速３００ｋｍに達する

炎刀（エントウ）『銃（ジュウ）』
チェリオが取り扱う変体刀の中で唯一、擬似変体刀ではない本物の完成形変体刀。
鑢七花が左右田右衛門左衛門との戦いで彼の命と共に破壊してしま

った物を強化改修してチェリオシステムに組み込んでいる。弾丸はセルメダルのエネルギーと連動していて新たなメダルを投入すれば幾らでも発砲可能となる。
セルバーストを使えば『断罪炎刀（だんざいえんとう）』を発動できる。

チェリオ・グッバイ
七本の擬似変体刀全てを装備した重装備形態。
火力や防御に優れているが、その分装備が終えるまでに少々時間が掛かる上にセルメダルの消費が激しいというデメリットも抱えている。
必殺技はセルメダルを１４枚投入によるセルバーストで発動し、七本の擬似変体刀から凄まじいエネルギーの波動を放射する『漆填抜刀（しちてんばっとう）』。

クローンと紅蓮コンボと誕生儀式（前書き）

仮面ライダーブライ！
前回の三つの出来事！

一つ！チェリオの重装備形態、チェリオグッバイが発動！

二つ！水鏡と七実は氷紋剣の師範・巡狂座と遭遇！

そして三つ！全ての真実を語り終えた巡狂座は安からに生涯を閉じ、
巡り回る狂座の運命は破壊された！

クローンと紅蓮コンボと誕生儀式

約四百年前。
この日ノ本の国が漸く乱世から治世の時代を迎え始めた頃、とある場所で英雄と怪物の戦いに終止符が打たれていた。

「・・・・・・何故？」
「・・・・・・・・・」

そこには二人の男女が距離をとりながら互いに対峙しあっていた。
男の方は長く綺麗な黒髪で、どこか優しい印象の目付きをした美丈夫な上、腹部には異様なベルトを身につけている。
女の方は袖を切り落した上に覆面もなく、全身に鎖を巻いた奇天烈な忍装束で、身体中からは大量の出血によって忍装束を赤黒く染め上げている。

最早言うまでも無いだろうが、この二人こそ、真庭竜王――そして、我刀流十代目当主、鋼劉十（はがねりゅうと）。

「なんで最期の一撃を避けなかったんだ？君ほどの実力ある忍者なら、致命傷は避けれた筈」
「・・・・・・グリードといえど、私の本質は忍者だ。所詮歴史の黒子が・・・化物が英雄に刃向かおうとも、結局はこの様だ」

竜王は今にも死にそうな体でありながら流暢に喋る。

「さあ、その手にある刀という鍵で、私の生涯を閉じて見せろ」
「・・・・・・リュウギョク」

劉十は躊躇いの表情を見せる。

「出来んのなら、お前の息の根を止める！！」

――バッ！――

竜王は残された力で己が身を振るわせた。
その手に握られた忍者刀で劉十の喉笛か胸元を斬って抉る為に。

しかし、

「・・・・・・すまない・・・・・・・」

――斬ッ！――

英雄の刃が、怪物の体に、更なる赤い線と傷をつくった。
怪物は何一つ不満も後悔している事は無いかのように、欲望の名を冠する者としては清清しいくらいの表情でこう言った。

「それでいい」

欲望の怪物と化した埒外の忍者は、再び封印という眠りにつく。
四百年という長い歳月を、暗く冷たい石棺の中で、新たな運命の時まで。

＊＊＊＊＊

ＨＥＬＬ　ＯＲ　ＨＥＡＶＥＮ
中枢部の天堂地獄の間。

そこには今か今かと、天堂地獄の完全体にならんとする森の肉体が繭状態となり、不気味な姿で玉座に踏ん反りかえっていた。
周囲には全身をマントと頭巾で覆った奇妙な集団で警護されており、幹部クラスでなければ入ってくることさえできないだろう。

しかしこの異形な空間では、なんとも美しい歌声が響いていた。

それは異端なる女忍者、真庭竜王の歌声。
人間だった頃から、仲間たちの記憶に留まっていた頃から、彼女の歌声は里の中で最も美しく、最も人を魅了していた。

歌詞に篭る歌声はどんどん磨きが掛かっていき、誰もその歌を邪魔しようとはしない。
首には妹分的存在から貰った不恰好な五色のマフラーが巻いてある。

混沌とした闇の空間で、異彩を放つ美声の歌は、この悪しき空気さえ忘れさせてくれるようだった。
そして一気に終局を迎えた。

歌い手の竜王自身は、実に満足した表情で――――とは言い切れず、何処か霧がかった表情をしていた。
だがしかし、他者が聞けば紛れも無く彼女の歌に高得点を出したであろう。

真庭忍軍初代十二頭領総補佐、真庭竜王、通称『奇蹟の竜王』

その美しき歌声は、この現世においても健在であった。

＊＊＊＊＊

その頃、火影最後のグループ。
花菱烈火＆鋼刃介。

「退けやザコどもがァァ！！」

――バギ！バギッ！ドゥガ！ドゥガ！――

「げぼぅあああああ！！！」
「ぐべぶぁぁあああ！！！」

惨めな悲鳴をあげる黒服たち。手に持っている黒金の銃火器もまるで意味を成さない。
まあ相手が本物の化物である刃介というのが一番の理由だろうが、素手の相手にやられるというのが一番屈辱だろう。

「来たな！」

すると通路の影から一人の男が出てきた。

「こいつらじゃ不服だろ？」

自信有り気にする強面の男。ある意味とんでもない怖いもの知らず

であることを記しておこう。

「天才格闘家・幻神(げんしん)様が魔導具『歓喜天(かんきてん)』でお前らぶっ殺「死ねやゴラァァアア！！」――ボガァァン！！！――ーひでぶぅぅぅぅう！！！！」

二度目の名前負けシリーズであった。

名前負け野郎は一発で気絶した。

「あれ、俺の出番は？」

「行くぞ花菱！」

「お前はなんで初っ端からハイテンションなんだよ？」

思えば刃介がこのルートに入ってきて以降、憂さ晴らしをするように雑魚共を一人で片付けており、烈火はただただ刃介の背中を追いかけているだけの状況だ。

今も尚、刃介が本能の赴くままに走る方向を追っているに過ぎない。

だけど、何故か刃介の進む方向には間違いが無いように思えてくる。

「お、なんか胡散臭いドアがあったな」

「ああ、そうだな」

走り回った挙句に漸くドアを発見した。

「さて、どうやって開――ウィーン――あ、自動ドアか」

刃介は何時ものペースに戻ってドアの奥へと足を踏み入れていく。

部屋は実に広く、向こう側の壁一面にはガラス張りの巨大水槽があった。

そして、その巨大水槽の手前には一台のパシコン一式を乗せたテーブルとそれにあわせた椅子に座る一人の人物がいた。

「へー。ここの番人はお前か」

「どうも、我刀流さん。そして学校でお別れして以来ですね、烈火さん」

「てめぇは神楽・・・・・・いや、葵！」

冷静な刃介とは裏腹に、今度は烈火が熱くなりだした。

「此処でのお前のパートナーは何処だ？」

「天井ですよ。多分、貴方が今まで見たこと無いタイプ」

そう言われて天井を見ようと思った瞬間、幾枚もの羽根を撒き散らしながら翼をはためかせ、床に下りてきた。

「鳥のヤミー」

『・・・・・・・・・・』

刃介は呟く。沈黙する赤き鳥のヤミーに向って。

ハヤブサの鋭き眼と頭、鳳凰の如きド派手な胴体、ヤタガラスの如く三本目の足とも言える長く太い尾羽。まさにそれは『ハオウラスヤミー』と呼ぶべきだろう。

「ところで葵・・・姫は・・・？」

「生きてるよ。ここにはいないけどね」

葵はあっさりと答えた。

「つまり、テメーらをぶちのめして先に進まなきゃならないってか」
「平たく言えばそうかな」
またもあっさり答える葵。
――・・・ルートB・・・ゲーム終了！キリト・・・戦意喪失！――
その時、スピーカーから各所の報告が流れ出した。
――死愚魔は破壊されました！生きていた門都もほぼ同時刻死亡！――
――こちらルートC！蛭湖敗戦！火影は先へ進んでいます！容姿から石島と凍空・・・・・・――
――ルートA！龍虎丸がやられた！相手は・・・螺閃と鬼凛！陽炎とシルフィードと接触！――
――ルートEです！オロチが雷覇に殺されました！雷覇も霧沢と鋼金女に倒されています！石島と凍空が現れた模様――
――ルートG！巡狂座、死亡確認！水鏡と鑢、上階へ進行中！――
裏麗にとっては最悪の状況だが、火影には最良の戦況だ。
『まさか、人間程度に敗れるとは・・・我らヤミーも、堕ちた者だな』
ハオウラスヤミーは呆れるように嘆くように首を横に振る。

「まあそれもあるけど、予言通り本当に全員生き残っているみたいですね」
「ったり前だヴァーカ！！あいつらゴキブリ以上じゃ！！」
烈火は凄まじい悪戯小僧の面構えで大見得を切った。
「・・・・・でも、こんなゲームつまんない」
『同感だな』
「刺激を加えなくちゃ。まずリーダーに死んでもらおう」
どうどうと殺害予告をしてきた。
「うるせぇぞ女装野郎が。とりあえず先へ進む方法教えろ」
「くすくす」
刃介の問いにも余裕な葵。
「このカードキーは・・・・・この部屋の奥にあるエレベーターを動かすのに必要です。これを通して貴方達が手に入れたパスワードを入力すれば、柳ちゃんのいるところに貴方達を運んでくれるでしょう」
と懇切丁寧にカードキーの現物を出しながら教える葵。
「つまり・・・・・」
――グニュ・・・！――
「やめッ――やめろ葵！！」

――ビョン！――

握力で少し変形したカードキーは、握力がなくなると同時に元の形に戻った。

「冗談ですよお二人とも！そんなに取り乱しちゃってイヤだなぁ。ゲームスタートです」

そうしてカードキーは今一度葵の懐に戻っていった。

四人は互いに近づき、対峙し合う。

「四つ聞いていいか？」

烈火は四本の指を突き出した。

「一つ目。リュウギョクのコアはもう揃ってるのか？」

「多分今すぐにでも出来上がって、完全復活すると思うけど」

葵は素直に受け答える。

「二つ目。森はまだ姫と接触してねーな？」

「・・・・・まだ生きているってことは確かだね。だけどもうすぐだ。柳ちゃんは森様と一つになる」

「三つ目。てめぇはそれをなんとも思わねぇんだな？」

そう言われると、葵の表情は実に苦々しいものとなる。

――不必要な命なんてないよ。それを奪う権利も――

――失敗作か――

脳裏をよぎるのは、自分を人として扱ってくれた柳の優しさと、あくまで自分をクローンの出来損ないとして扱う森の非情さ。

「思・・・わない。思いたくない」

「四つ目！おめぇ――――」

烈火が最後に訊いたのは

「男？女？」

「体は・・・男なのかな？学校じゃスカート穿いてたからわからなかった？」

「そっか！」

烈火は一気に安心して、

「じゃあ遠慮しねぇ！！」

――バギッ！！――

全力で葵の顔面を殴った。

「変身！」

それをゴング代わりにして、刃介がスキャナーを滑らせた。

≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＥＮＢＡ≫

≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！ＲＩＯＴＥ！ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！≫

ブライ・リオテコンボの登場である。

「くッ」

それを見た葵は右手に仕込んでいた手甲型魔導具を起動させ、質量保存の法則を無視した大きさの刃を出現させる。

（ホラ・・・出してよ。炎出して見せてよ）

その瞬間、

――ぉおぉおおお！！――

一匹の火竜が現れ、烈火の右腕には炎の刀が現出する。

「キレイ・・・・・・」

葵は砕羽によって生まれた炎刃にうっとりとした様子でいる。

「・・・ボクも・・・欲しかった。その能力が欲しかった」

葵は一気に暗き羨望と嫉妬の表情となる。

「お前の相方、やっぱ暗いな」

『余計なお世話だ。そういうお前の女房も死人紛いではないか』

「・・・・・過ぎた毒舌は身を滅ぼすぜ」

『お互いにな』

なんだか相性最悪同士の会話である。

きっと刃介とアンクが出会ったらこんな陰湿な会話になりそうな気がする。

ブライはその手にメダマガンを持ち、ハオウヤスヤミーは両手を構える。

『ハァァア！！』

――バギュンバギュンバギュンバギュン！！――

互いにぶつかり合う羽根手裏剣と魔之弾丸。
幾多モノそれがぶつかる度、それらからはエネルギーの火花が散った。

「ちったぁやるみたいだな、チキン」
『貴様もな。業突く張り』

互いに罵り合いながら評価する。

『それにしても、人間というのは実に業が深い』
「ん？」
『母胎を介さずに人の手で人を造り、造られた者は己が存在意義を求め足掻く』

恐らくこれは葵のことを言っているのだろう。

『全く持って阿呆なことだ。自分の出自がなんだ？そんな者が己の欲望に左右するのか？』
「さぁてな。ただし、コレだけはいえるぜ」

ブライは水槽の中を泳ぎまわる『深海魚』に目をやった。
ただし普通の深海魚ではない。天堂地獄の遺伝子で突然変異して気圧も光も関係なく泳いでいられるゾンビ深海魚・・・・・しかし

その代償として、餌とするのは他の魚の命かその死骸という有様。

森が天堂地獄と化し、完全なる究極となれば、表の世界と裏の世界がひっくり返るだろう。巨大水槽のゾンビ深海魚の二の舞になりかねない。

しかし葵はそれを望んでいるがアリアリとわかる。彼にとってそんな闇色の世界こそ住みやすい世界なのかもしれないが、その為に少々変わった力の持ち主が罪も無く死なされる。

葵にとっては尊い犠牲として天堂地獄に捧げるのであろうが――

「お前らの欲望は完熟させねー。実る前に?ぎ取ってやる」

『やれるものならやってみろ』

売り文句に買い文句とは正にこのことだ。

『フゥアア!!』

ハオウラスヤミーは背中から大きな翼を二枚広げた。

――チャリン、チャリン、チャリン――

≪ＴＲＩＰＬＥ・ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

ブライもメダマガンにセルメダルを久々に投入してスキャンする。

『喰らえッ!!』

「ぶちまけろ!!」

――バサーッ!!――

――バギュン！！――

全力羽根手裏剣とブライクラッカーが正面衝突した。

＊＊＊＊＊

佐古下柳は今、何も無い真っ白な空間にいた。

もっとも肉体的ではなく、精神的にではあるが。

（あれ？――ここはどこ？――まっしろだ――何も無いよ）

当然だ。いま彼女の精神には記憶が残らず片隅に追い遣られているのだから。

（――さびしいな――会いたいな――誰に？――誰だっけ・・・・・）

自問自答しても、何時まで待っても答えは出てこない。

しかし、そんなときに奇蹟が起こった。いや、起こされた。

「こんにちは」

何時の間にか柳の世界に侵入していた者がいたのだ。

「こんにちは。あのう、どちら様ですか？」

白い服で身を包み、見るからに慈愛に満ちた風貌をした美しい長髪の女性。

「”くれない”っていいます。何度か貴女に会っているわよ」
「んーーー？くれないさん？（わからない）」

名前だけなら、いや、その素性も柳は知っている筈だ。
”くれない”はそんな柳の顔と瞳を見ながらこう言った。

「あなたも・・・大好きな人と離れ離れになってしまったのね。その悲しみすら忘れてしまった・・・更に深い悲しみ・・・」

愛に満ちた母のような口調。
すると”くれない”の体からは火の粉が上がり始める。

「でもね、また一緒になれるわ。私には見える」

そして、彼女は炎の堕天使と化した。
人間の形をした、炎を鏡とした魂の姿。

「それは幸せかもしれない、不幸なのかもしれない。私は後悔しなかった。あの人はこんな姿になった私でも側においてくれる」

炎の堕天使の出現と共に、柳の体にも炎が灯り始めていた。

「体が燃えてる！！！（違う！！私自身が炎になってる！！？）」

目の前にいる彼女と同じ存在となる感覚が柳の全身に広がっていく。

「私には見える。あなたの運命。私がそれを望んだように、あなたもきっと・・・・・・あなたもきっと――――」

そこで、柳の中に入り込んだ女の魂は何処かへと消えていた。
彼女との出会いはまるで、柳と彼女の境遇のなんと似通う点ゆえ、運命が彼女達を引き合わせたのかもしれない。

最愛の男の手によって、魂を炎に変えられる運命同士ゆえに。
炎の堕天使の名は紅(くれない)。
炎術士・紅麗にとっての生涯において、昔と今を支える最愛の女の成れの果て。

＊＊＊＊＊

一方其の頃、ブライとハオウラスヤミーは激戦に次ぐ激戦を繰り広げていた。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラァァァアア！！！！！」
『喰らえ喰らえ喰らえ喰らえ喰らえ喰らえェェェエエ！！！！』

互いに凄まじい攻防を繰り返しあい、そのたびに決着がつくかどうかと思うほどの状況になるが、今一歩のところで互いに届かずじまいになってしまう。

ブライクラッカーと羽根手裏剣の激突で部屋の面積の半分が煙幕で包まれてしまっていたが、その煙幕さえも彼らの激闘の波動で消し

飛ばされていた。

『それにしても、葵の奴も風変わり欲望を持つ』

「ん？」

『大抵の奴なら持ちえず、影の初心者なら一度は持ちえる欲望』

「・・・・・・・・・日常の尊さ」

刃介はハオウラスヤミーという媒介を通して葵の心に触れているような気がしてきた。

『そうだ。葵のような者共（クローン）は生まれながらにして、それに触れられず当たり前のように小僧どもが送ってきた青春や人生の喜怒哀楽に憧れている。最も葵の場合は、日常を欲するのではなく、全てを自分たちの所まで引き下げて真っ平にするのが願いらしいがな』

ハオウヤスヤミーは一旦構えを解いて話し出す。

「はぁ・・・阿呆ですかァ？」

対してブライはハッキリと言った。

「何自分だけメンドくせェ星の下とは思ってるわけ？その泥まみれの願望をさ、テメェ以上に酷い境遇の連中にいえるの？そんな境遇でも希望持ってる奴に言えんの？」

ブライは嫌味を思い切り込めた口調で語りだす。

「俺や七実みたいな例外は兎も角、此の世の裏には葵以上に酷い目に会ってる奴なんざ幾らでもいる。葵の野郎はただ生まれ方に問題あるだけで、そのほかの面では結果だせば其れ相応の裕福な生活が

保証されてるじゃねェか」

最も刃介は葵が欠陥品の烙印を押された状態でどれだけ血反吐を吐いて今の地位にたどり着いたかをわかっているからこそ嫌味を吐いている。

だってそれは・・・・・・。

「何も持ってないということは、あいつは『ちょいと変わった人間』ってだけのコトだろ？」

自分は化物と成り果てたからこそ言えた言葉。

「佐古下のバカとて、あの能力ゆえに幼少の頃から多少は疎んじられていたんだろうな・・・・・・もっとも、人殺しの俺よりはマシだろうがな」

ブライは『無花果』なのか無防備なのかさえわからない風体で語り続ける。

「花菱たちとダチ公になったり、ガキんちょ相手に紙芝居自作したり、そのために手先器用な石島を半ば監禁したりはしたらしいが、それでもアイツは孤独から脱して見せた。些細な切っ掛けを初めとしてな」

ブライの・・・・・・刃介の真意が薄ら薄らに見えてくる。

「とどのつまり、葵はクソガキの如く自分と現実から目を背けて逃げてるだけだ。意外と切っ掛け等、足の一本手の一本で作れるものだ。ただただ今の自分が他人に愛される資格が無いという建前を並

べて恐れる余りに心を閉じたプチ引き篭もりだ」

『・・・・・何を言うかと思えば、貴様が説法を説く気でいるのか？』

「まさか。・・・ただ葵のバカは臆病者だって言いたいだけだ。あの佐古下柳っていう天然バカは、ダチ公と認めた奴を裏切りはしねーって気付こうともしない虚け者だってな」

『・・・・・・・・』

ハオウヤスヤミーは両手を下ろし始める。

「クローンがなんだ？化物がなんだ？んなこと知ったことじゃねぇ！俺は俺の欲望に従って動き、欲しいものは必ず手に入れる！葵も我々と同じ『人間』である以上、それが出来ない筈は無いんだよ！」

そうしてブライは両手をバックルに伸ばし、三つのメダルを全て取り外した。

そして別のメダルを投入していき、再度バックルを傾ける。

最後に、ローグスキャナーが欲望の力の溢れる結晶を読み取った。

『ッ！！』

ハオウラスヤミーは思わず身構えた。

それもそのはず、なぜならば・・・・・・

≪ＨＡＹＡＢＵＳＡ（ハヤブサ）・ＨＯＵＯＵ（ホウオウ）・ＹＡＴＡＧＡＲＡＳＵ（ヤタガラス）≫

≪ＨＡＯＵＲＡＳＵ（ハ～オ～ウラス～～）≫

赤き円盤型の鳥達のシンボルが一つの円となるとき、聖歌の如く響

くその歌声は、全てを焼いて浄化する紅蓮の炎を呼んだ。
その太陽の如き火炎の中で新たな力が開帳された。

全てが赤く統一された隼の頭（ハヤブサヘッド）、鳳凰の腕（ホウオウアーム）、八咫烏の足（ヤタガラスレッグ）。
天空を支配せし鳥類王アンクと同じ属性を誇るその雄姿の名は――

ブライ・ハオウラスコンボ！！

「フアアァァア！」

ブライは両腕を構え、

「ハッッ！！」

一気にそれを左右かつ水平に構え直した。
それと同時にブライの背中からは見る者全てを魅了する美しき羽根（ラプトリアルフェザー）が扇子のように開かれた。

ブライが両手をあげるとそれらに羽が一斉に動き出し、

――シュン――

腕が下ろされたと同時に全ての羽がハオウラスヤミーへと飛んで行った。

『甘いわ！』

しかしハオウラスヤミーも馬鹿ではない。同じように羽手裏剣を飛ばして相撃ちとした。

「甘ェのはそっちだぜ！！」

――パンパンパンパンパンパンパンパン！！！！！――

空かさず両手に握られた鳥刀『鏃』の引き金を何度と無く引いて敵の身に弾丸を浴びせ続ける。

飛んで回避したいが生憎ここは屋内。飛び回るにしては狭い場所だ。

しかしブライは飛ぼうが飛ぶまいが変わらずに引き金を引いて弾丸を連発する。

――カチッ――

すると今度は鳥刀『鏃』の撃鉄を起こした。

そして引き金を引くと、

――ヴォオオォォオオオオォォォオオオオオ！！！！！――

銃口から大火事を連想させるような特大の火炎放射が暴発したかのように吹き出てきたのだ。

『ブオォ！！』

ハオウラスヤミーは堪らずコレを同じ炎を吐く事で防いだが、正直な話、後手に回ったのは失敗としか言いようが無い。

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

聞こえてくる男声の電子音声。

それは炎の中から聞こえてきた。

その時ハオウラスヤミーは悟ったがもう時既に遅し。

「チェェェストォォオオ！！」

猛火の中より現れ出でたブライは、その両手に太陽と同じ熱を放つ一対の刀を握っていた。
そして、

――ザシュ・・・・・・！！――
――ドゥガァァァァン！！！――

光冠（コロナフィーバー）の炎刃の１０万度を誇る熱き斬撃は振るわれ、一太刀で敵を細かな欲望の結晶に変えていた。

「フゥ・・・・・・さて、メダルメダルっと」

一息つくと、すぐさま床に散らばるセルメダルを回収し出す。

「一ぃ二ぅ三ぃ四ぉ五・・・・・・こんなとこか。向こうの決着もついたようだしな」

回収が終わる頃には、烈火と葵の戦いも終わっていた。
そこには感動か嬉し泣きかはよくわからないが、ただただ何か暖かなものに初めて触れて、涙を流しながら崩れ落ちる葵の姿があった。

「花菱、行くぜ」
「おう！」

カードを手に持った烈火とブライはそのまま仲間と共に先へと進んでいった。

そして、葵が一人残されていると、一人の男が部屋に入ってきた。

「随分ボロボロだね。何しに此処に来たの？」

葵の言うとおり、男の体は血だらけでまさにボロボロだが、男は真っ直ぐに立っている。

「仲間が心配してきてやったのに、其れは無いな。立てるか？」

腕を組んでそういう男の名は、蛭湖。

「あれれ？すごく意外な言葉が出たなぁ。・・・君、負けたらしいけど、これからどうするの？」

「私は任務のために動く事はもうやめたんだ。今日からは己の意志で動く！」

その言葉に迷いは無く、そうなった理由は

「火影が、その強さを見せてくれた！」

「・・・そう・・・君も踏み出して、歩き出したんだね」

「何の話だ？お前と戦った火影はどうした？」

「烈火さんも鋼さんも、もう行っちゃったよ」

葵は素直に答えた。

「『道を踏み外して・・・他の人間を轢いて暴れる暴走車を止めにいく』って――『大切な宝物を奪い返す道を走る』ってね。・・・ねえ蛭湖。ボクも・・・歩いていいかな？歩けるかな？」

葵は静かに問いかける。だが直ぐに喋りだす。
それはもはや自問自答と言ってよいだろう。

「ボクは柳ちゃんに謝りたい！ボクも友達を助けたい！」

その時の葵の瞳には光が満ち満ちていて、何処までも『人間』らしかった。

＊＊＊＊＊

天堂地獄の間。
そこでは夥しい量のヤミーたちが種類を問わず点在している。
勿論それらの存在理由は、主の力の源となるべき生贄なのだが。

「散り逝け」

――チャリン、チャリン、チャリン、チャリン――

彼らの主が命令を下すと、ヤミーたちが瞬く間に姿形を失い、ただの銀色のメダルへと還元されていく。ヤミー一体でもけっこうな量のメダルがでる為、１００体以上のヤミーが還元されてできたセルメダルの山には目を見張るものがあった。

「漸く揃ったな、５０００枚」

竜王は５０００枚ものセルの山に手を触れる。
するとセルメダルの山は紅蓮の閃光を放ち始め、重力から解き放た

れて宙を舞い、果てのない欲望の渦を巻いていく。やがてはたった一枚を生み出す為、セルメダルのエネルギーは互いに共鳴しあい、最後には目蓋を開けることさえ許されないような凄まじい輝きが生まれた。

そして光が収まり、竜王の手には一枚のメダルが握られていた。彼女が完全復活する為の最後の鍵である、赤いコアメダルが。

「これで全ての準備は整った」

それを皮切りに、仮面とマントで全身を覆い隠した集団の一人が大きく手を振って宣言する。

「天堂地獄!!天堂地獄よ!!決して涸れず、決して滅せず、決して終わりのこない刻を迎えよう!!生物が誕生して以来、存在し得なかった永遠の徘徊!!命に光を与え市少女と一体となり、その永遠は永劫と成る!!その喜びを何に感謝するのか!?神か?」

彼らの前、天堂地獄の直ぐ近くには、完全に心を失って人形のように黙る柳がいた。
その表情や立ち振る舞いからは、人間らしい生気は一切感じられない。

「神など存在しない!!あえて掲げればそれは今より誕生する!!」

そして一同は同時に叫ぶ。

「「「「「「「「「「「「天堂地獄!!!!!」」」」」」」」」」」」

剣を上方に掲げるものや手を組んで祈りを捧げる者までいるその状

況は、まるで礼拝堂に集まった信者のようだ。これより誕生する神の儀式に参列する信者・・・・・・。

「永遠を生きて何をなすの？殺戮？破壊？」
「もうちょっと有意義で面白い欲望にジェブチェンジしないのかしら？」

そこへ割り込んでくる二人の女の声。

「私たちは８００年と４００年という暗黒の時間を一人で生きた。それは永遠と呼ぶには足りなかったかもしれないけれど・・・私には無限の地獄にも思われたわ」
「それにリュウギョク。折角コアが揃って完全復活する間際で申し訳ないけど、全部ぶち壊させてもらうわよ」

二人は堂々と宣言した。

「面白い。たった二人でどこまで出来るか見せてもらおう」

竜王は挑発するように微笑み、刃介か七実が来るまでは此処を動かない姿勢をとった。

「あ、そう。だったら張り切っちゃおうかなぁ？」

その瞬間、シルフィードが手先を適当に上げて、

――バヒュン！！――

空気を凝縮した風の弾丸を打ち出し、一人の信者にぶつけた。
結果としてそいつは頭と胴体が消し飛んで死んだが、残った者達は

「なっ・・・」

信者達は走り出し、それによって仮面とマントが取れた。
そして、

「なめるなァァあああ！！」

醜い化物の本性を晒したのだ。

（（森、光蘭！？））

余りにも意外なその姿に、二人は驚くしかなかった。

「って、近寄るな汚らわしい！！」

とシルフィードは重力を制御して化物を地面に平伏させた。

「なるほど、天堂地獄の分身体どもか・・・・・道理でウジャウジャいるわけだわ。だって本体からはみ出た味噌っかすなんですもの」

シルフィードは嘲笑うようにして口にした。

「えぇ全く持って其の通りですね、会長」

――ビュン！――
――グサッ！――

その時、別の女性の声がしたかと思えば、いきなり空(くう)を裂いて突き

進む一条の矢が分身体の眉間に突き刺さった。

「二人共、加勢しに来たよ!!」

「薫くん!」

「ナイスタイミングよ、バット!」

増援の出現に陽炎とシルフィードは喜んだ。

「あ、それから矢はきちんと返却してもらいますよ!」

バットは一気に跳躍して分身体を思い切り殴り、あとは力任せに矢を眉間から引っこ抜いて回し蹴りをかました。

「小金井くん」

「ありがとう。・・・柳ちゃん!!」

小金井は矢を受け取って礼を言うと、息を吸って大声で名前を叫んだ。

「柳ちゃん!!俺だよ、小金井だよ!!柳ちゃん!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

幾ら呼びかけても柳からの返答はおろか、リアクションの一つさえ帰ってこない。

「クク・・・・・・ククククク」

そしてその状況に笑いコケ始めるものが一人。

「ふはははははははははははは!!!ふひゃはははははははははは

は！！！！」

分身体の爆笑は余りにも不愉快なほど、部屋中に響き渡った。

だが、

「黙れゲス」

――ズンッ！！――

「グバ・・・！！」

通常の5倍の重力がかかった状態から10倍の重力に変更し、分身体はより一層地面にめり込んで行く。

「・・・・・まだ繭状態のトコを見ると、私たちにはまだ猶予が残されてるわ」

シルフィードは別人のような冷たい表情で語りだす。

「連中も柳ちゃんを殺すことだけはしないだろうから、本体が目覚める前に繭を潰すことが、今の私達に出来る最大の行動」

そう、リュウギョクがこの場にいる限り、刃介か七実がこの場に来ない限り、自分たちに出来る事の範囲など高が知れている。それ故の判断だ。

「一応私もさ、年甲斐も無く恋の炎に身を焦がしてるわけよ。だから同じように恋する乙女の恋路云々通り越して、人形モドキにした元凶たる輩が凄く殺したくて仕方が無い」

いつもの淫乱でおちゃらけた雰囲気は吹雪の向こうに飛ばされたとしか思えなかった。

「に・・・人形か。確かに・・・そう言える。あの女は・・・もう誰の声も聞こえず、誰の姿も見えていない。・・・”生きる力”を・・・極限まで削り取った状態ならば、正と負の力の差は・・・限りなく無となる。今なら負の力・・・天堂地獄が、正の力を喰らう事ができる・・・のだ」

分身体は押しつぶされそうになりながらも喋った。もっとも途絶え途絶えではあるが。

「あとは――”死の力”を天堂地獄が・・・極限まで膨らませれば・・・」

「はいはい、もうわかったから・・・死に晒せ」

――グチャ――

その時のシルフィードは実に迷い無く、容赦が無かった。

まるで蟻んこを潰すような感覚で分身体周辺の重力を一気に１００倍に増幅して息の根を止めた。

「そうね。あのコは私の義理の娘になるかもしれないのよ」

そこへ陽炎までもが冷たい眼差しを敵陣に向けていく。

「勝手に人形にしないでくれます？」

その声は雪が積もる山で吹き荒ぶ何かの如く、温かみを一瞬で奪っていく声だ。

そこへ、

≪ＣＥＬＬ　ＢＵＲＳＴ≫

「断罪炎刀」

緋色に輝く炎の刃が二つ放たれ、更に多くの敵を焼き払った。
それを見た竜王は一言呟いた。

「また面倒なのが来たな」

＊＊＊＊＊

そして烈火と刃介は今まさに、天堂地獄に間に向おうと扉を堂々とくぐっていった。恐らくたどり着くまであと十分もかからないだろう。
しかしそこへ、

「まて、烈火」

呼び止める老人の声。

「ついにこの時がきたのぉ。決戦のとき!主の中にいると、こう・・・なんだ、血が騒ぐのだ。お主ならきっと・・・必ず成し遂げてくれると、期待が膨らんでしまう」

老人の姿を見た烈火は小憎らしい笑顔でこういった。

「最後まで勝手に外にでやがってよ、ジジィ！」

竜之炎漆式、虚空。

「・・・烈火・・・もう一度『己の世界』へまいれ。崩、砕羽、焔群、刹那、円、塁、虚空！八竜のうち七体の炎の型を極めしお主に――――」

虚空は一旦区切り、

「桜火殿が最後の力を授ける時が来た」

遂に八竜を得るときを言い放ったのだ。

「どうすんだ花菱？行けばもっと強い力が得られるかもしんないぜ？俺がお前なら即刻決断するが」

「行かねぇ」

烈火は穏やかな顔でそう静かに告げた。

「みんな今頃姫のために戦っている」

全く持って其の通りである。

「俺たちが行くのをみんな待ってる。一秒だってムダにできねぇ！力を貸してくれるつもりならそっちから来てくれ。そう親父に宜しく」

烈火はそういって虚空の出した巨大な鏡を無視して行こうとするが、

「ならばお主は九匹目の火竜となるじゃろう」

其の一言で立ち止まる。

「虚空、裂神の固有能力はなんだ?」

「核心をついた質問をしてくるの」

「こっちは暇じゃねぇからな」

刃介は虚空に己の想像を確かめるべく、訊いた。

「大方、裂神の力・・・っつーか炎は、大抵の人間にとって受け入れがたいモノとしか思えない。特に仲間との絆を重要視する輩にとってはな。使ったら最後、花菱は実父はおろか、己自身を呪いかねん」

「そこまで読めているとは・・・・・」

虚空は刃介の洞察力の高さに驚いた。

刃介は裂神が今まで烈火の力とならなかったのは、自分の能力が戦闘向きでなく、また烈火の性質に合わないものだと考えていた。

しかし、桜火の嫡子たる紅麗の炎となった紅や磁生のことをシルフィードから貰ったデータから考察すると一つの結論に達したのだ。

「花菱。お前の親父さんの力は、きっとお前にとって一生に一度使っていいかどうかさえ判らない代物だ。だが最悪の場合を考えた場合、必ず必要になる力でもある」

刃介は烈火と向き合い、話し出していく。

「テメェの人生だ。テメェが決めて好きなようにしな」
「捌式『裂神』・・・・・どんな・・・力なんだよ?」
「知りたくば、ゆけ。桜火に会いに行け!」

クローンと紅蓮コンボと誕生儀式（後書き）

次回、仮面ライダーブライ！

呪いの児と完全体と七竜

ハオウラスコンボ
キック力：１８トン　パンチ力：１０トン　ジャンプ力：２００ｍ　走力：１００ｍを１．５秒
身長：２０３ｃｍ　体重：９０ｋｇ　固有能力：超々音速飛行　属性：炎　カラー：赤
必殺技：コロナフィーバー

ハヤブサヘッド
複眼の色は緑。遥か彼方にある物体さえ寸分の狂い無く捉え、透視力さえ備えている。ある意味超遠距離狙撃には打って付けと言える。

ホウオウアーム
両前腕部に鳥刀『鏃』を収めるホルスターが装備される。両肩からは１０枚のホウオウウイング、背中からはラプトリアルフェザーでの羽根手裏剣を繰り出せる。

ヤタガラスレッグ
ベルト後部から三本目の足とも言える赤い尾羽が生え、それをブラ

イの意志で自由に操れる。伸縮自在な為、両手と両脚が使えない際に有効とされる。

呪いの児と完全体と七竜（前書き）

仮面らいだーブライ！
前回の三つの出来事は！

一つ！刃介と烈火は、クローン人間である葵と戦うことになる！

二つ！ブライは赤い鳥系のハオウラスコンボに変身！

そして三つ！天堂地獄の誕生儀式の最中、火影の勇士たちが殴りこんだ！

呪いの児と完全体と七竜

花菱烈火の精神世界。
大量極まる砂ばかりの、まるで砂漠のような空間。
そこで父と息子は向かい合っていた。

場所が場所ゆえ、刃介は此処にはこれず、先に決戦場へと急いだ。

「・・・・・・烈火・・・・・・・火影の歴史上、炎術の資質ある子が生まれるのは一代に一子。二子生まれるのは災いを生むとして、心の魔性を感じ取られた紅麗が”呪いの児”として殺されかけた」

桜火は少し区切る。

「しかしな・・・今思えば・・・・・・・烈火・・・呪いの児はお前であった」

そこで、トンデモない一言を投げつけたのだ。

「この姿となりお前の体内に入り、漸くわかった。実に信じられなかった。――お前は炎術士ではないのだ」

トンデモ事実第二弾。

「炎術士の生み出す炎の源に『炎の型』というものが存在する。様々な姿を形どるその『力』は術者に炎を与える礎となるのだ」

そこへ来て話題を少し別の観点で語りだす。

「焔群は蛇、砕羽は鷹、円は亀、紅麗は不死鳥。・・・しかしお前の体内においては――『炎の型』がなかった。炎術士の資質が無かった」

ならばどうして烈火は炎を操れるのか。

「『火竜』とは・・・強い無念・・・怨念を残して死した炎術士が姿を変えた炎の霊魂。彷徨う霊は生きている炎術士に取り憑く。己の無念を・・・・・炎術士を通じて晴らし、成仏するが為に。・・・不思議に思わんか烈火？」

その不思議とは、いわば特殊な儀式で何者かを呼び出す為の呼び水や触媒の有る無しに等しい。
無論、触媒や呼び水とは、炎術士としての『炎の型』をさす。

「数えて七匹にもなった迷える火竜達はお前が生まれて直ぐワシから離れ、炎術士の紅麗ではなく炎の資質なき烈火に憑依したのだ。結果、ただの人間だったお前の体には『火竜』という究極の炎の型が埋め込まれた」

それはまるで運命や魂が触媒云々を無視して亡霊を己が身に引き寄せたに等しいのだ。

「異端の炎術士。火影に災いを生む異端児」

そして話は結論に達していく。

「火影にとっての災いとは、火影の滅亡以外に無し。お前は選ばれた、託されたのだ。火影に関わる全てを、打ち砕く為に！」

そう・・・この呪われた歴史に終止符を打つために。

「何となく理屈はわかった。俺は無理矢理つくられた炎術士って事なんだな？じゃあ俺が死んでよ、九匹目の竜になったらどうなる？」

「何も無ぇ」

実にキッパリと答えた。

「なーんも能力が無い役立たずの馬鹿な竜が出来上がる。紅麗の中に棲み付くだけの無駄な火竜になる」

――ボカボカッ！！――

「あ！父を蹴るな！！」

結局は微妙にギャグが入るのがこの世界観ゆえだろう。

「・・・・・だから・・・・・お前は最後まで人間でいろ。炎の霊になどなるな、人間のままでいろ」

父は息子の背中をおすべく、力強く言い放つ。

「火影を打ち砕け！！」

「応よ！！」

息子は二返事でそれを受諾した。

全ての悲劇を生み出した元凶が火影の異端者であり、魔導具ならば、それらを含めて火影そのものを歴史から抹消するのが最善の策。

「・・・これが・・・炎術士としてのお前に伝えるべき最後の言葉

になるだろう。全てを知ったお前は苦悩する。しかし、烈火――――
お前は選ばねばならぬ」

そして父は、その大きな背中を息子に向けて語った。
己が秘める力の本質と正体を――――それが息子の心にどう響くかを
わかった上で、しかし、それでも・・・・・・。

「ワシの生前の炎の型は『――――』。故に裂神の力は『――――――
――――――』ことだ」

それを聞いた瞬間、烈火は両膝と両手を地面についてしまった。

「・・・いらねぇ・・・いらねぇよ・・・俺は・・・絶対あんたを・
・・裂神を呼ばないからな!!そんな炎、使えねぇ!!」

トドメとばかりに大声で、

「そんな炎いらねぇよォーーーっ!!!」

＊＊＊＊＊

天堂地獄の間。

「おやおやおやおや・・・・・・これはまた、随分増えたモノです
ね」

炎刀『銃』を両手に持つチェリオは、そこかしこにいる山千と海千の文字が入った二種類のマント男たちから漂う雰囲気と匂いから、言葉の中に蔑みの色をちらつかせる。

「不有(あらず)――おまけに女の子から表情はおろか感情さえ根こそぎ奪うとは、万死に値します」

「ふん、やはり忍者だけあって勘は鋭いようだな」

と、チェリオに返答する一人の海千。

「やがてこの娘は永遠に生きる肉体の一部となる。融合して消滅するのだ」

バサッという音を立てて、海千はマントを取り払った。

『永かった・・・・・永かったなァ・・・・・私がまだ人間で・・・海魔という名前だった頃からの永い夢であった』

首から下は完全に化物と化した分身体。

『永遠の命、遂に叶う』

(なるほど、このハゲが・・・・・・)

チェリオは森とはまったく違う、落ち武者のような髪型の分身体の正体に勘付く。

『海魔・・・本体の覚醒はいつになる?』

『じきだよ光蘭』

(やっぱり。あれが魔導具の造りし歪んだ男)

状況は正しくクライマックス寸前のようだ。

『あの繭が割れて生まれ変わった天堂地獄が、治癒の少女を喰らって進化は完了する！！』

『生態系はたった一つの生命体によって狂う！祝え！！』

『『完全なる我らの誕生だ！！』』

分身体どもは大声で歓喜する。

だが、

「お慶びのところすいませんが、今から始まる行事は一つではありません」

チェリオは他のメンバーを無視して前に出た。

「始まりが終わりを、終わりが始まりを示すよう――天堂地獄の生誕祭と同時に、御葬式を兼ねさせてもらいます」

そして一気に、

「忍法生殺し」

小うるさい分身体の二体を、彼女は一発で仕留めて見せた。

文字通り、一撃必殺とはこのことである。

「柳ィィィイ！！！」

それを機に、風子が大声を出した。

「聞こえなくたっていいよ！とりあえず聞いとけ！！あんたはどこ

にも行かない！！帰ってくるの！！」
「そこは柳ちゃんの大好きなところで！」
「今までずっとお前がいた場所だ！」

柳を良く知る風子、小金井、土門の声が響いた。
それから風子は大量の山千・海千を前にしてこう啖呵を切ったのだ。

「どけ。柳を返せ」

その結果は

「イヤだね」
「イヤだね」
「イヤだね」
「イヤだね」
「イヤだね」
「イヤだね」
「イヤだね」
「イヤだね」

完全ある否定。
その返事の間、彼らは身に纏っていたマントを内側から破っていき、

『『『『『『うははははははははは！！！』』』』』』

醜い化物の姿を高笑いを混ぜ合わせて晒して見せたのだ。

『圧巻だろう？忌むべき火影とそれに与する者達よ』
『封印の地で烈火と紅麗とブライに殆どの力を奪われた私達が・・・

・・・コレほどの分身体を造るまで・・・力を復元させるため、随分と時間を費やしたよ』

しかしその間に、ブライ側も其れ相応の準備をすることができた。

『何百人、何千人もの人間を食い散らかしてきた！そして今宵、最高の食材を喰らうことができる！！』

それは言うまでも無い。

『喰える！！！』
『喰える！』
『喰える！！』
『喰う喰う喰う喰う！！！』

分身体の醜悪の叫びは姿形と同じく、常人の精神なら見ていられるものではない。

「全く、こんな時にあの二人は何処にいるのかしらね？」

ふと、シルフィードが口を開いた。

「それって烈火くんと鋼さんのコトっすか？」
「他に誰がいるのよ？一応はこの歴史の主役みたいな立場でしょ」
「しかしながら、まだ来られていないのも、また事実です」

トライブ財閥組はそう話す。

「あの二人と、残りのメンバーが来るまで、ここは私達だけで死守する必要がありそうね」

「ま、少なくとも兄さんは確実にやって来るでしょうから、せめてあのキモ繭だけでも潰しておきましょう」

そしてみなの心の向きは同じ方向となった。

「待ってろよな、柳ィ！！」
「もうすぐお前の忍が来る！！」
「頑張れ！！頑張って柳ちゃん！！」

もう一度、風子と土門と小金井の叫びが轟いた。

「いきましょう、皆。烈火たちが来るまでに、少しでも敵の戦力を削り取るわよ！！」
「それじゃ甘いわよ陽炎。敵を全部、ブチＫＩＬＬ勢いじゃないとね♪」

そんな彼らの遣り取りを繭の傍らで、最後のコアを手に持ったままの竜王は、

「甘いのはお前らだ。我刀流か虚刀流のどちらかが来ん限り、お前等に勝ち目は無い」

と呟いていたのだ。

そして戦闘は激化していく。

「皆さん。一発大きいのを決めますから、その時間稼ぎをお願いします」

チェリオは両手一杯にセルメダルを持った状態でそう告げた。

「いいけど、急ぎなさいよ」
「不案（あんじず）」

――チャリン、チャリン――

≪ＣＥＬＬ　ＢＵＲＳＴ≫

「鎌鼬！！」
「弐之型！！」
「ドォォりゃあああ！！」

チェリオが後方でエネルギーを充填してる間に、前方で仲間達がそれを成功させようと攻撃を開始する。

――チャリン、チャリン、チャリン、チャリン――

≪ＣＥＬＬ　ＢＵＲＳＴ≫

メダルのエネルギーが充填されるごとに、炎刀の銃身と銃口には昂りのあるエネルギーが溜まっていく。

「否崩れ＋正突き！！」
「セエエイヤァァァア！！」
「タトバキック！！」

吹雪は体当たりの要領で突進し、双刀を刃先を敵に向けてぶつけた。
バットも渾身のハイキックを相手に食らわせる。
シルフィードも首に赤い鷹の紙・手首に黄色い虎の紙・足首に緑な飛蝗の紙を貼り付けた状態で跳躍し、三つのメダル状のリングを潜

り抜けながら敵に必殺キックを叩き込む。

――チャリン、チャリン、チャリン、チャリン、チャリン、チャリン――

≪ＣＥＬＬ　ＢＵＲＳＴ≫

「不空（すかさず）――充填完了。皆さん、退いていてください」

「「「「「「「「「ッッ！」」」」」」」」」

そのひとことを耳にした一同は咄嗟の判断で其の場から離れていく。

そしてチェリオは両手に弾けんばかりのエネルギーの詰まった一対の『銃』を構え、静かに技名を言い放った。

「獄炎刀砲（ごくえんとうほう）」

そして、カチャという獄小さな引き金の音がすると同時に、

――ッッヴゥゥオオオォォォオオオオオ！！！！！――

銃口より信じられないほど巨大な火炎が放射されたのだ。

一対の銃口よりでる火炎は互いに二重螺旋を描くように絡み合い、よりその熱と威力を高めている。

恐らく数万度はあるであろうこの劫火で焼かれて生きていられる者がいたとしたら、そいつは最早神代の怪物か、宇宙からやってきた存在だと思ってもいいだろう。

『させるものかァァァ！！』

分身体たちは一斉に繭の前で肉の壁をつくり、全滅覚悟で本体死守を決め込む。
自分たちが消えても、竜王が残れば本体の警備になんの支障も無いがゆえの行動。
しかし、

――パクッ――

竜王は最後のコアメダルを口の中に放り込んだ。
すると彼女の体からは表現の仕様が無いオーラが溢れだす。

――バシャーーァァアアア！！！――

そして片掌から、大洪水に匹敵するであろう超絶的高圧水流を放ち、瞬く間に獄炎刀砲の焔を消火してしまったのだ。

「私がただ見てると思ったか？立場上は一応、こやつ等の協力者なのだぞ？」

竜王は涼しい表情で言い切った。
文字通り、コアメダル十五枚が揃った完全復活状態で。

『おおォォ！！よくやったリュウギョクよ！！』

森の分身体がそう叫んだ直後に、当の竜王本人は「ふ・・・っ」と何処吹く風のようにしているだけだ。

――ドクン・・・ドクン・・・――

そうしていると、本体の繭からは不気味な鼓動音が聞こえてきた。

――ブシュ・・・！――

すると今度は、繭に張り巡らされた血管のような部分が次々と裂けて血が吹き出していく。

『繭が割れる!!目覚めるぞ光蘭!!我らの本体が覚醒する時が遂に来た!!』

『おお!!』

森と海魔らは大いに喜ぶが、火影側からすれば悪報この上ない。

「なんか、ヤバい!!みんな!今のうちに、あの繭を壊せぇ!!」

「そうしないと、取り返しのつかない事態に!!」

風子とチェリオは決死の叫びを散らすも、簡単にコトは進んではくれないものだ。

『そう・・・は・・・させるかァァァア!!』

「不生(いかさず)!!」

――ザシュ!!――

チェリオは突っ込んできた分身体を『鎖』で撫で斬り殺す。

状況は完全に切羽詰っており、下手な時間つぶしを喰らった瞬間にアウトだ。

「吹き飛びなさい」

――ビューーウウウゥゥン！！――

その瞬間にシルフィードが凄まじい竜巻を起こして分身体を壁に叩きつけさせると、陽炎と並び立ち、

「「覚悟」」

実に冷たい言の葉を口に出す。

無論、分身体などという戦闘員の強化版程度などまだ生温いことは重々承知している。

繭を護る最大の砦である竜王があの場にいる限り、繭を破壊することは夢のまた夢。

いや、たとえ持ち場を離れさせても真庭忍法を使われれば一発でお終いだ。

だが、だからといって、はいそうですかと引き下がるのはプライドが許さない。

「はぁ・・・無謀な「本当に無謀と思いますか？」・・・この声」

竜王の言葉を遮る若い女の声。

その声がした方向を探る前に、彼女の体は本能的に両の忍者刀で防御の姿勢をとっていた。

「虚刀流、蒲公英」

――バキン！！――

繰り出された貫手によって、２本の刀の刃は一発で折られてしまった。

そこへ更に、

「氷紋剣、氷舞」

地面から野太い氷の刃が生えてきて竜王の胴体を串刺しにしようとするが、

「通さん」

竜王は片腕をグリード化させてそれを防いで見せた。

「水鏡くん！七実ちゃん！」

シルフィードは更なる合流という戦力増強にとても嬉しそうな声をだした。

しかし後から考えると、この感情は糠喜びと表現すべきであろう。

え、何故かって？それは当然――――。

――ド・・・クン――

「目覚めた」

時間切れだからである。

――バシュ！！！！――

繭は割れた。内側から裂けられて、血を撒き散らしながらだ。
一瞬、腕が最初に飛び出したかと思えば、次の瞬間には何かの上半身が出たように見えたが、瞬きする毎にそれの出具合は進行しており、次に瞬きした時はもう既に

「きっ・・・消え――ガシッ！！――」

陽炎の背後で、鋼刃介がグリード化した右腕で、誕生した異形者の肩を掴んでいた。

「よう、待たせたな。ラスボスさんよォ」
「遅かったですね、刃介さん」

刃介は何もかも最初から知っているように異形へと話しかける。

白くて逆立った髪の毛、クールさを思わせる美形な顔立ち、額や上半身に浮かぶ不気味な目玉、顔や上半身に刻まれた奇妙な刺青っぽい模様、下半身はまるで山羊のような異形の者。

言うまでも無い、天堂地獄の『本体』である。

『・・・・・・・・』

天堂地獄は無言で刃介の顔を見た。
そして刃介もギョロリと動いた天堂地獄の眼を直視した直後に、

――ブァガン！！――

凄まじく大きな音がした。
拳と拳がぶつかり合う音であり、その衝撃波が発生した証明でもある音だ。

天堂地獄は一旦距離をとり、自分の体をまじまじと見つめた。
まるで品定めでもするように。

『これ・・・が・・・新しい私か・・・悪くない』

その時の表情は何処までも冷血そう見えた。

『全てが計画通り。あとは、治癒の少女との融合だけだ』

そして矛先は、未だに海千と山千のマントとマスクを纏った分身体たちが後生大事そうに固まって囲んでいた、人形と化した佐古下柳へと向けられる。

『一つの肉体の中に二つの人格が同時に存在するというのは不思議な気分だ。『人間』だったころは森光蘭と海魔という、生まれた時代すら異なっていた二人が――同じ思考、同じ目的で混じり合っている。今も我等の意見は一致した』

天堂地獄は一度はうつむかせた顔をあげ、『人形』と化した者を見やる。

『治癒の少女を喰らいたい！！』
「ふざけんなボケナス」

――ゴギッ！！――

刃介は空気も勢いもあえて読むことなく、天堂地獄の脳天に踵落としを決め込んだ。

「何カッコ良さ気に決めてんだよ悪役？そういう奴に限って黄金パターンでやられるんだよ」

『・・・貴様・・・やはり阿呆だな』

天堂地獄は刃介の足を振り払う。

しかし刃介は構わずにこう言った。

「阿呆ねぇ？だとしてもテメェ程じゃないさ。永遠なんざ手に入れても、手に入れた途端に意味の無い時さえ過ごす事になりかねないからな。だから俺は不死なんて要らない。滅亡でもしてクソつまらなくなった世界で生きかねないなら、俺は死にたい時だけ死ねる命が欲しいね」

そう。永遠を得るということは、陽炎がそうだったように孤独になるしかないということであり、時の果て、いや果てしない時さえも永久に生きねばならない重荷を自ら背負ってしまうのだ。

「だから俺はテメェを叩っ斬る！お前の欲望は冗談抜きで迷惑だからな」

『フン・・・・・リュウギョク』

「なんだ？」

天堂地獄は竜王に話しかける。

『この大虚け者を相手をしてやれ』

「別に構わないが、お前は他の連中全員とやるという認識でよいのか？」

『構わぬ』

それを聞いた瞬間、竜王の全身は五色に煌くメダルに包まれ、怪人形態である龍の宝玉（リュウギョク）へと変わったのだ。

それを見た刃介は天堂地獄から目線を放してリュウギョクに意識を集中させる。

ブライドライバーのローグレイターに三枚のコアメダルをセットして傾かせる。

そしてローグスキャナーでそれら三枚を読み取って見せた。

「変身！！」

≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＥＮＢＡ≫

≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！ＲＩＯＴＥ！ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！≫

欲望の剣士、仮面ライダーブライ――暗闇と血錆のリオテコンボ。

「ふぅぅ」

『ふふふ・・・』

ブライは少し長めに息を吐き出す。リュウギョクも嬉しそうに笑みを零した。

「なにが可笑しい？」

『いや、嬉しいのだ。これで漸く私がブライに勝てると思うとな』

コアメダルが十五枚揃い、全身とベルトが完全復活した今のリュウギョクの脅威は計り知れない。

「そうか。俺も嬉しいよ。コアとセルが大量に手に入りそうだ。それも一気にな」
『出来るものなら遣って見せろ。出来れば、の話だが』
リュウギョクは挑発するように言って見せると、先ほど折られた忍者刀の柄を手にして構えた。
すると忍者刀の折られた刃は、なにやら妖しい光を纏い出し、その光が煌きながら動くたび、刀身は瞬く間に復元されていく。
それを見たブライも魔刀『釦』を両手に持ち、構えた。
「『破っ！！』」
二人は同時に駆けた。
両の足で地面を蹴り、全力で正面の相手に向かい合う。
――ガキン！！――
魔刀と忍者刀がぶつかり合い、あたりには衝撃が走る。
ジリジリと刃が擦れ合い、今にも火花が散りそうな状況だ。
「爆縮地（ばくしゅくち）！」
その瞬間、ブライは消えた。
『ん、何処に？』
「こっちだ！」
そして後ろに回りこんでいた。

爆縮地とは、『刀語の世界』の堕剣士・錆白兵や家鳴将軍家十一人衆が一人・浮義待秋が使う移動法。
その名の通り、爆発的速度で距離を縮める足運びである。
もっとも、刃介が見取ったのは浮義待秋の爆縮地なので、錆白兵のそれには及ばないだろうが、初見であれば敵を錯乱させるには充分だ。

「六の奥義、錦上添花（きんじょうてんか）！！」

――ザシュ！――

本来なら両の手刀を上から振り下ろして敵に攻撃する奥義だが、今回は魔刀を手刀代わりにして使用し、より斬撃に特化したものとなった。

『ほう、中々の威力だ』

しかし数枚のセルメダルさえ零すことすらなく、リュウギョクは平然としている。

「流石は、完全体・・・か」

ブライは些か感心したようだが、動きは止めない。
そこから更に、リュウギョクの体をジャンプ台代わりに跳躍して上方に跳んだ。

「七の奥義、落花狼藉（らっかろうぜき）！！」

上空から繰り出す戦斧に見立てられた片足による踵落とし。
落下の速度とブライ自身のパワーも合わさり、その一撃は巨大な岩

さえ真っ二つに割ってしまうだろう。

だが、

『フン！』

リュウギョクは耐えた――というより、忍者刀で受け流したと言うべきだろう。

結果としてブライの身はそのまま片足をあげた状態で地面につくこととなる。

正直言って恰好の餌食としか言いようの無いだが、

「まだまだぁぁ！三の奥義、百花繚乱（ひゃっかりょうらん）！！」

地面についていたもう一方の足を思いきり上げ、リュウギョクのベルトのバックルに飛び膝蹴りをかましたのだ。

ガギン、という音が強く響き渡る。

『くッ・・・流石は我刀流。勝利に対する執念は凄まじいな』

「当ったり前だろ。こんな場所で寿命を中断したくないからな」

ブライは胸を張って言い切った。

『ならば、此方も其れ相応の忍法でお相手しなくては失礼だな』

リュウギョクは構えた。

『もう少し戦いを楽しみたいが、お前ら一族は戦いが長引けば長引くほど脅威になっていく。ゆえに、一撃で仕留めさせてもらう』

そういった直後、彼女の両の眼は薄らと虹色の光を灯しだす。
他者を幻想に魅入らせる幻惑の魔眼――魔眼は幾つか階級分けがなされており、ある一定を越えると相手と視線を合わせずとも効果を発揮できる。

しかもリュウギョクの魔眼は最上級の虹色。彼女の視界に入った者は、問答無用で幻想の世界に引きずり込ませる。

そうしてブライの動きは一気に鈍くなった。
そしてリュウギョクは二振りの忍者刀を手に、複数体の影分身して囲み、河の激流とも言える太刀筋を天下無双の怪力と疾風の速さで振るう。

『真庭忍法！劉殺生！！』

――斬！斬！斬！！！！！――

発動する必殺忍法。容赦の無い連続同時攻撃。
乱れ舞う血飛沫と地面を濡らす真っ赤な血貯まり。

――バタ・・・ッ――

『これで、私「まだだ・・・・・・！」――な・・・に・・・！？』

有り得ない！

そう思えざるを得なかったが、前例があるのを思い出した。

そう、８００年前に初代オーズが五大グリードを封印した後、お流れとなったブライとの決着を果たす為、リュウギョクは日本のある拓けた場所で鋼一刀を倒す為、忍法劉殺生を使った。
結果として彼は左腕を斬り飛ばされ、体中から今にも死にそうなほどの出血を起こした。
だがそれでも彼は諦めずに喰らいついてきた、只単に負けたくないが故、戦いによる勝利を味わう欲望の為だけに。

あの時の鋼一刀の人間としての『何か』を超越しきった眼光に、かつてのリュウギョクは心底身震いさせられた。
思えば、あの予想さえ出来ない『何か』の所為で、リュウギョクは石棺の中に封印され、４００年の眠りにつかされたと言える。

（まさか、こやつも・・・・・・！！）

刃介が我刀流――鋼一刀の血族であるならば可能性が零ということこそ有り得ない。

「俺ぁ・・・まだ負けちゃいねぇぞ」

体中から血を流し続ける血濡れのブライは、そのあまりに凄惨な姿とは真逆にしっかりと立っていた。
揺ぎ無く、２本の足で立派に立っている。

「あ・・・・・・でも、やっぱちょいと疲れたな」

といって、ブライは座り込んだ。
リュウギョクは首をかしげてブライの行動に疑問をもつが、次の一言で合点がいった。

「おい、花菱」

名前を呼んだ。

もう一人のヒーローの名前を。

そして、

「おォォォうよ！！！」

――ガッッ！！！――

花菱烈火の右手が、天堂地獄の顔面に拳を叩き付けた。

「火影忍軍七代目頭首、花菱烈火、只今参上だぜ！！」

ヒーローは名乗りを挙げた。

迷いの一片さえなく、堂々と誇らしげに。

「ふっ、悪くない登場だぜ、ヒーロー」

そんな烈火にブライは、珍しく賞賛の言葉を投げかけたのだ。

そしてさらに、

「竜之炎壱式・・・『崩』」

よろめく天堂地獄に、火炎の弾丸こと弾炎（だんえん）が無数にわたって撃ち放たれ、天堂地獄の体を焼き散らしていく。

「竜之炎参式『焔群』」

――ズシャ！――

そこから一気に炎を右腕に纏わりつかせての強力なパンチを食らわせた。

「おい、風子！！」

「はッ・・・ハイ！」

呼ばれた風子は返事をした。

そして烈火の口から、

「今殴った奴誰だよ？」

思い切りズッコケを誘う一言が出てきた。

「何いってんのさ！！アイツが本体の天堂地獄だって！！」

「顔、違うじゃん」

「でもそうなの！繭から出てきたの！」

「ふーん」

なんだか状況的に不釣合いな会話だが、烈火の登場になんだか慌てだす分身体。

『花菱烈火だぁーー！！治癒の少女をとらえよ！！』

その海魔の号令で他の分身体が一斉に柳の身柄を確保しようとした瞬間、

『塵塵塵塵塵塵塵塵塵塵塵塵塵塵塵塵塵塵塵塵塵』

呪詛のように唱える一匹の竜が、柳の身を護るようにしてとぐろを巻いて姿を現した。

――メキッ――

隠し持つたった一つの眼光、それが開かれた瞬間、

『瞬炎！！』

――ヴォン！！――

分身体たちが燃えていった。今ので五体は減っただろう。

「さ・わ・る・な」

烈火は冷ややかな目付きで分身体にそういった。

分身体・森は戦慄して、

（馬鹿な！？ブライは兎も角、奴だけは此処に来るまで殺せと命じたはず！あの・・・失敗作が！！ヤミーがついても、足止めにすらならんのか！！）

責任転嫁しだした。

「よッ・・・意外とナイスタイミングだったぜ、花菱」
「そうかよ。だったから今度なんか奢ってもらうぜ」
「言っとくが、下手に値が高い場所へは行かないぞ。精々ラーメン屋程度だ」

ブライは座って体の回復を待ちながら烈火と会話する。

「七実、金女・・・セルメダル」
「はい、兄さん。ほら、義姉さんも」
『わかっています』

刃介の体はグリード化がかなり進行している。
だから普通に自然治癒を待つよりセルメダルを吸収したほうがこの場合において効率は良いだろう。

しかしそこで、

『ふう・・・帰属せよ』

天堂地獄は、溜息をつき、一言発した。
その瞬間、

――ドギュルルルルルル!!――

幾多もの分身体たちが一斉に本体に吸収されていく。

『おぎゃ!ほぎゃあ!』
『ぉぎゃあああああ!!』

――にゅる！じゅる！――

嫌な叫びと音を立てながら吸収されていく分身体と、それを当然のようにして平然としている本体。

『察しの通り、今の状態では本体もダメージを受ける。しかし、元は本来一部だった我等が、割れることも可能だが戻る事も可能だとしたら・・・・・この意味がわかるなぁ？』

そして天堂地獄・本体は

『復元だ』

完治してみせた。

『ここに存在する数多の分身体は戦力とは考えていない。全ては本体復元の為の予備電源にすぎぬのだ』

完全に傷をふさいだ天堂地獄は、その端正な顔をクールな表情で保ったまま語る。

『とは言えその炎、相変わらず厄介だな』

「ホントにてめーか、森・・・！上等だな。復活する前に焼き尽くしてやんぜ！！」

「威勢がいいじゃねぇか花菱。なら俺も回復し次第、すぐさま戦いに復帰させてもらうぜ」

『おい我刀流。そんな回復の時間をこの私が与え「お姉ちゃーーん！！」・・・煉華？』

その時、リュウギョクを姉と呼ぶ声が聞こえてきた。

「お姉ちゃーーん！！！」

漆黒の衣を纏ったクローン少女、煉華。

人工的な炎術士は、身も心も恐怖に震わせながら、リュウギョクに抱きつき、その恐怖を伝える。

「お姉ちゃん助けて！！お兄ちゃんに・・・お兄ちゃんに殺される！！こわい！怖いよぉ！！助けてお姉ちゃん！！」

『全く、だからヤミーを連れて行けといったのに・・・・・・』

どうやら煉華は紅麗が進んでいたルートの番人だったようだが、例に漏れず返り討ちにされてここまで逃げ延びてきたのだろう。

リュウギョクも流石にこの無謀の結果には呆れ果てた。

『紅麗も生きているか。ならば今すぐにでも、免疫をつくるとしよう』

その時に初めて、天堂地獄の顔は醜く歪んだ。

『貴様に一つマジックをみせるよ、烈火』

――ドゴォォン！！――

岩の壁を突き破り何かが這い出てきた。

一言で言うならそれは、

『ギュオオオオオオ！！！』

全身に目玉を生やした黒い大蛇。

「あの蛇・・・・・・まさか!?」

それを見たシルフィードはコアの創造に携った魔術師として、何かを悟った。

――ガシッ――

すると、分身体が煉華の肩を掴んでリュウギョクから引き離すと、

――バン!――

突き飛ばした。

「え、パパ?」

『貴様も本体進化の生贄となれ。失敗作』

『ッ!煉華!私の手を!!』

分身体の一言で察したリュウギョクは急いで手を伸ばした。

だが、

――バクッ!――

煉華の体は大蛇に噛み付かれた。

「やだ・・・やだよ!!どうしてパパ!?助けて!!死にたくないよォ!!」

『煉華ェェ!!』

「お姉ちゃん、わ・・・た・・・し――」

――カキッ――

リュウギョクの叫びも虚しく、煉華は大蛇に銜えられたまま、物言わぬ石像へと変わってしまった。

「てめえ、自分の味方まで!!止めさせやがれ!!」

烈火は連続的に炎をうちまくった。

それによって多くの煙がでて、何かが燃えたかと思われたが、違った。

『・・・・・大蛇(これ)も我が肉体の一つでね・・・喰らった者の能力も喰える。つまりこの場合、炎の抵抗力が強い炎術士を喰ったことで――炎を手に入れた。そしてもう炎は効かぬ!!』

天堂地獄の右手から、煉華と同じ青緑の炎が燃え上がった。

『我等二体が天堂地獄の本体だ。我が『戦闘』を司るなら・・・大蛇(いっこ)は『吸収』を司る。喰うことによって吸収した力を我に流す事ができる。元が一つなわけだから造作も無い』

次の瞬間、

――スギャ!!ドン!ドン!ドン!――

天堂地獄の右手からは青緑の火炎弾が放たれる。

――円(まどか)――

だが烈火は炎の結界でそれを防いだ。

『ほーう。”炎を生む”というのはこのような感覚だったのか。あまり熱いとは感じない・・・思っていたより簡単に出る。面白いな』

天堂地獄は手から出る炎を興味深げに見ている。

『今にして思えば――』

天堂地獄は石と化した煉華をみて、

『貴様はこの為だけに生まれたのだな、煉華！あはははははは！！』

恩知らずとしか言いようのない死者に鞭打つ発言をしたのだ。

だが、

――ザシュ！！――

何者かが、天堂地獄の両腕を肩口からばっさりと切り裂いて見せた。

『なんのつもりだ？』

天堂地獄が余裕の表情で問い詰める。

それは、

『忍者とは古来より、卑怯卑劣が売りだ』

リュウギョクだった。

『お前の成体化と私の完全復活。この二つが満たされた時点で、私とお前が結託し続ける必要がどこにある？』

『所詮は主無き愚かなくノ一か』

今この瞬間、真庭竜王と天堂地獄の決別は完全なモノとなった。

『まあ良い。どの道、永遠を歩むのは我一人だけで充分だ』

天堂地獄は分身体を四体ほど吸収して両腕を復元した。

「リュウギョク・・・お前・・・」

『勘違いするなブライよ。あくまで私はこの下郎が気に入らんだけだ。この場が収まれば、私がすぐにでもお前との決着をつけるぞ』

リュウギョクは決意のこもった瞳で語った。

しかし天堂地獄は、

『誇り・・・命・・・実に下らない。それを奪い取るのも、一興であり、快楽だ』

冷静な表情でまた語りだした。

『そこから始まるのだ。此の世の全てから全てを奪い取る我が徘徊が。数え切れぬ程の人間・・・動物の命を毟り取る！全部は殺さずある程度残す。生きるものは繁殖し、また命を増やす。また毟り取る。残す、増える、毟り取る。無限に繰り返される地獄絵図・・・新たなる自然の摂理となろう』

――ヴォヴォヴォヴォヴォヴォヴォヴォヴォヴォヴォ！！！――

『思い浮かべるだけでもゾクゾクする。心地好い「終わらぬ人生」になりそうだ』

地獄を想像させる火炎が、リュウギョク・烈火・ブライに振りまかれた。

誰もが三人のダメージをイメージしたが、事態は凄まじく意外な一言で好転した。

「・・・・・烈火・・・くん・・・・・・」

人形となっていた柳が、声を出して愛しい人の名前を呼んだ。

その瞬間、火炎は弾け飛んだ。

「呼んだか？姫！！」

その時の烈火の表情は実に希望に溢れた嬉々としたものだ。

「柳・・・柳？今・・・なんて言った？もう一回・・・もっかい言って！」

「烈火・・・くん・・・・・・・」

表情はいまだ人形だが、心は・・・・・・！

「聞いた・・・？聞いたな、烈火！！柳が見てるぞ！！こんな状態でも柳はお前を見守ってる！！お前を待ってたんだよこんチクショーーーッ！！」

風子は喉が潰れそうなほど大声で烈火に報せた。

当の烈火はというと、

「ああ」

拳を握り、

「元気でた」

心のマグマを再び滾らせた。

烈火は端っこがボロボロになったシャツの袖を引きちぎる。
すると腕に刻まれた火竜の刻印が露になるが、それを見た陽炎は、

（まだ八匹目の火竜の封印が解かれていない！？火竜の長、裂神は烈火を認めていない！？）

正直にいうとこの予想は大いに違う。
はっきり言って、裂神が認めていないのではない、烈火が認めていないのだ。

『・・・いい加減遊ぶのも飽きたな。そろそろ貴様の八竜を喰うか』

天堂地獄は指先を舐めながら呟いた。

――砕羽――

右前腕部から生やされた炎の刃。
烈火は跳躍し、勢いに任せて天堂地獄の体をザシュンと斬った。
そこから距離をとると、

――焔群――

『キェェエ!!』

炎の鞭が烈火の右腕の動きに合わせて動き、天堂地獄に突撃していく。

『ふはははは!!全ての火竜を試す気か?あえて受けよう!そして知れ!!』

天堂地獄の体は炎の鞭によって拘束された。

――刹那――

『その力が!!無力である事を知れ!!』

『塵っ・・・!』

刹那の一つ目による瞬炎が、天堂地獄を飲み込んだ。

だがしかし、

『くく・・・くくく・・・見よ。其の眼で全てを焼き尽くす刹那も効かん!次はなんだ?何を出す!?』

「問うわ」

その瞬間、綺麗で長い黒髪と裸の上に薄手の着流し一枚だけという特徴的だが眼のやり場に困る格好をした妖艶な美女が現れる。

「あなたの運命、この後いずこへ向って?」

『知れた事。破壊と殺戮を繰り返す永遠の生!』

「・・・・・・・・・哀れな・・・」

そうして、美女の姿は変わる。炎の竜へと。

「私には火影の歴史と共に朽ち逝くお前しか見えぬ」

――塁――

塁の火炎が天堂地獄に直撃する。
だがまだ滅することはできない。

そこで烈火は、

――円――

まずは炎の結界で仲間達の身の安全を確保して

――崩――
――虚空――

最多と最強の組み合わせを発動する。

『これで七匹・・・全て受けきった後、貴様は絶望する!!撃てよ、烈火・・・!!我を殺す術は無い!!』

虚空の能力は、一個の『炎の玉』を作り出し、それを介して強烈極まる炎のレーザー砲を打ち出すこと。
崩の能力は幾多モノ『炎の玉』を作り出して敵にぶつけるというもの。
どちらも炎の玉を扱うものであり、この二匹を同時召喚した場合、

当然のことながら炎のレーザー砲は一筋だけでなく、三つにも五つにも七つにも増殖する。

そして――――

放たれる光は、眼前にいる全ての元凶に降り注いだ。

呪いの児と完全体と七竜（後書き）

次回、仮面ライダーブライ

友情と決意の答えと烈火の炎

友情と決意の答えと烈火の炎（前書き）

仮面ライダーブライ！
前回の三つの出来事は！

一つ！桜火の口より、烈火は火竜の力其の物で成り立つ異端の炎術士、呪いの児であることを明かされる！

二つ！竜王が完全復活し、天堂地獄が遂に成体として誕生する！

そして三つ！烈火は天堂地獄を倒すべく、七竜全ての力をぶつけた！

友情と決意の答えと烈火の炎

要塞都市ＳＯＤＯＭ
森光蘭が築き上げた其処の中心部にある巨大な2本の塔。
其れの名はＨＥＬＬ　ＯＲ　ＨＥＡＶＥＮ――

――今此処の最重要部において、人類の未来を賭けた死闘に次ぐ死闘が繰り広げられた。
そして、今・・・・・。

――虚空――
――崩――

「うぅおおおおおオオオ！！」

一人の異端なる炎術士に呼び出された二匹の火竜は、幾つモノ炎の玉を作り出し、その玉から輝かしい光線を放って見せた。
その威力は特撮番組でなければ有り得ない程のもので、この部屋のありとあらゆる敵を焼き尽くし、遂には壁やその他諸々を焼き払い、炎の赤色は塔から漏れ出していく。

「ドォォうリャあああああああ！！」

花菱烈火の叫びは正に魂のソレだ。
紅蓮のレーザービーム砲は更に勢いをつけていき、成体と化した天堂地獄・本体すらも火炎の中に巻き込んでいく。

あたりには白煙が立ち込める。
その中で砲撃手たる烈火は荒い息をつく。
七竜を連続召喚したのだから無理からぬ話だが、今の状態では火竜一匹使うのがやっとだろう。

しかし、

『八竜の中において最強の攻撃力たる虚空と最多の攻撃手たる崩の合体攻撃、か・・・・・・流石火影忍軍頭首。我にここまでのダメージを与えるとはな』

天堂地獄は体中を蜂の巣にされていることが白煙越しでも見て取れる。

『だが』

その口調はいたって余裕だ。

『貴様はバカだ』

白煙の中で焼かれなかった分身体全てが本体に向っていき、醜く形を変えて本体復元の糧となっていく。

『あれだけ乱発すれば気力も体力も根こそぎ奪われる。僅かな希望に縋って炎を撃ち続け、結果がこれだ。全く持って笑わせてくれるよ』

天堂地獄の言葉に烈火は動けない体に鞭をうってでも動かしたいが、生憎天堂地獄の言っている事は正論だ。

『しかし嘆くことはない。貴様だけではないのだ』

復元完了。

『此の世の全ては我を楽しませる為だけの存在している。・・・ふふふ・・・うははははは！！！！』

天堂地獄は聞くだけで耳が腐りそうな不愉快極まる笑い声を大音量でだした。

『本体！』

『何か？』

すると生き延びていた分身体が駆け寄ってくる。

姿から察するに、恐らく本体からの直接分離個体だろう。

『今の回復で予備につくった分身体は全て使った！いくら烈火が力を無くしたとはいえ、まだ紅麗が残っている！』

『それにこの場には我刀流と虚刀流、そして裏切り者がいる！早く究極体にならねば！！』

『確かに・・・・・ならば――そろそろ喰うか』

天堂地獄の注意は柳に向いた。

「ざけんなアホ！！柳に一歩でも近づいたら、お前のドタマカチ割っ――――」

風子が怒鳴っていると、行き成り一人の人間が現れた。

「死四天・葵。只今戻りました」

『ほう、生きていたか』

天堂地獄は意外そうに葵の姿を確認した。

「無事成体になられたようで何よりです。森様――なんて、言うと思った？」

葵の口調は上司のご機嫌伺いのそれではなく、

「ボクはこれから一人で泳ぐよ」

真っ向からの決別だった。

葵は石化した煉華を少しみると、

「煉華・・・可哀相に・・・」

と虚しそうに呟いた。

「おい、お前・・・・・・」

「柳ちゃん、ごめんね。本当にごめんね」

風子の言葉に意を介さず、葵は柳と向き合う。

「もう・・・大丈夫だよ。ボクのかけた精神操作を今解いて上げる」

左腕にある神慮思考が淡い光を放ちだした。

けれどもそれをよしとしない者も居る。

『葵ィィイ！！裏切るかぁぁあ！！』

『やらせるな！殺せ！！』

全力で駆けて行く分身体。
だがその凶行は阻まれる。

――ザンッ！！――

血の刃によって。

「毒林檎で眠らされた姫が眼を覚ます。邪魔は野暮と言うものだ」
「蛭湖！葵！」
「中々心強い――――嬉しい誤算ってやつか？」

烈火とブライは思わぬ援軍に心を振るわせた。

「烈火さん。柳ちゃんは、眼が覚めたらこんなボクでも許してくれるかな？”まだ友達だよ”って言ってくれるかな？」
「当ったり前だ！姫は友達を絶対に裏切りはしねぇ！」
「そいつの天然ぶり・・・というか根の甘さと優しさは特級だからな」
「・・・嬉しいな・・・」

一筋の涙を流す葵の感情に呼応して、神慮思考の光はより一層眩く尊いものとなる。

すると、烈火とブライは地面に座り込む。

「蛭湖、五分だ、五分だけ、頼む！」
「リュウギョク。お前も、セルメダル補充までの間だけでいい！」

二人はそう言って一時希望を預けた。

「心得た。受けたからにはその３００秒、命を賭して、食い止める！」

『良かろう。英雄（ヒーロー）らしい瞬間での復帰を祈るぞ、ブライ！』

「血塊弾！！」

『流水剣！！』

二人は二返事で了承し、巧みな技が炸裂する。

『な、何故だ！？リュウギョクだけでなく貴様らまで！！金か！？貴様等火影に金で買収されたか！！？』

「・・・・・低俗な邪推だな」

『私が裏切った理由を考えれば多少なりとも理解すると思ったが・・・所詮、下郎どまりか』

二人は不愉快そうな口調でさらに攻撃を繰り出す。

「ボクの初めての友達・・・死んでも助けてみせる！」

葵は更に力を込めていく。

すると、

「――――・・・・・」

「顔色が戻っていく！」

「聞いたか見たか烈火！柳がさ！」

風子は喜びのあまり明るい声で報せようとしたが、

「ＺＺＺ～～～！」

烈火は鼾をかいていた。

「こんなときに何で寝られるんじゃあああ！！」
「落ち着け風娘。花菱の真意を考えてみろ」
「花菱さんは今、少しでも活力を体に満ちらせようとしています」
『彼はまだ、天堂地獄の破壊を諦めていない。その為の五分』

ブライ、チェリオ、七実はそう説いた。

「ところで兄さん、気分はどうです？」
『セルメダルを五十枚は費やしていますが』
「まだ足りない。もう五十枚だ」
『随分奮発しますね』
「今はケチってる場合じゃないからな。確実にあのクソ野郎をぶち殺す」

ブライの仮面の奥にある瞳には、勝利への執念が渦巻いている。

『治癒の少女を目覚めさせるなァァァアア！！』

分身体は腕を異様な長さ・・・それも触手としかいいようのない動きで柳に手を伸ばそうとするが、

「氷舞！！」
「四之型！」

しかしその魔の手は氷の柱とブーメランによって切り裂かれた。

「水鏡！カオリン！」

状況は実に好転している。
だけど、

『貴様等・・・・・・・・・何か忘れていないか？』

天堂地獄はそう問いかけてきた。

（そう言われてみると、何かを見落としている。重要な何かを・・・！？）

陽炎は戸惑いつつも周囲を見やるもその正体はつかめない。

『希望は――――』

「３００秒！」
「回復完了！」
「ッ！」

此方の用意は整ったはず。
なのに、

『絶望に――――』

「烈火！――ガシャアァァン！――うわぁぁぁあ！！」

その時、床から何か巨大で長いものが這い出てきた。

『変わる』

黒くて長くて巨大で、体中に目玉を生やし、人形と人間の中間にある柳の体に噛み付いて放さない者。

「天堂地獄の吸収体・・・！？ぬかった！！」

そう、先ほどから姿を隠し、気配すら遮断していた邪なる大蛇の存在を忘れていた。

「柳ちゃん！！少し離れても、まだ間に合――パリィィン！――し、神慮思考が・・・・・・希望が砕けた！？」

状況は一匹の大蛇を起点にして一気に悪転する。

――バジュ！！――

「姫を放しやがれぇぇ！！」

「コイツ、ムダにしぶとい！」

烈火とブライは意地でも此処で柳を奪われるわけにはいかなかった。下手をすれば不死身の天堂地獄との終わらぬ戦いを興じる羽目になるのだから。

一方の天堂地獄はというと、体には奇妙な光が見て溢れつつある。それに反応して、

――ピキ・・・ッ――

体のほんの一部だけだか、柳の石化が始まった。

「姫ぇぇぇ！！」

「マズい！！」

『クフフハハハハハ！！素晴らしい！これがあの娘の力か。漲る、体が不死になっていくのがわかる。もう直ぐ我は究極体として生まれ変わる！』

吸収体から治癒の力を供給され、本体は実に御満悦な表情を浮かべる。

そうしてる間にも、石化はどんどん進行している。

「ボクが戻さなきゃなけなかった・・・・・・責任をとらなきゃいけなかったのに・・・・・・」

「泣き言なんか聞きたくねぇ」

絶望に染まってしまった葵に風子が叱責する。

「私たちは諦めない。柳ィィィィイイ！！！！」

風子は上方にて噛みつかれている柳にも聞こえるよう、大声を張り上げた。

そこから”聞いてね”という言葉を口から出し、初っ端から本題に入る。

「私ね、多分・・・いや・・・きっと、烈火のこと大好きだった！！今更こんなことぶっちゃけちゃってズルイよね私。でも、今はもう全然そんなの無いよ」

そこから風子は「けどね・・・」と寂しげな声の直後、

「私が身を引いたからには、ハッピーエンドになれってんだ！！起

きろぉぉぉお！！！」
「デケェ声だな」
その心の本音をぶちまけた風子に一声。
「強力目覚ましだ。あのバカ好きだったってのはショックだったぞ」
「・・・土門・・・」
「二番！石島土門！！」
土門は右腕をあげて己の心を語ろうとする。
「あのよぉ・・・えっと・・・・・・お前の絵本はヘタクソだ！！」
散散答えた結果がこれかと思うくらいにシリアスがぶち壊れた。
「でも俺は好きだ！！優しくて暖けぇ！チマチマ手伝っていた俺様の感想だ。夢を与える作家先生になりたいんだろ！？なろうぜ！起きろォォ！！」
実に真剣な表情で土門は言い切って見せた。
「柳ちゃん！・・・頭、真っ白で、何を言えばいいかな・・・？」
小金井は鋼金暗器を支えに立ち上がり、
「お話してぇよ。笑顔が見たい！起きてェェ！！」
涙と笑顔で面をグチャグチャにしながら、小金井は懇願する。

『死に逝く友に最期の言葉を送るか！？ひゃはははははははは！！』

天堂地獄はそんな彼らの思いを嘲笑う。

――ガキィン！ガキィン！――

『くそ・・・ッ！先ほど以上に硬度が進行的に増していく・・・！』

竜王は忍者刀で切り裂きつつも、少しずつ与えれるダメージが小さくなっていくことに苛立つ。

『治癒の少女の力によって、究極体になりきったら、もはや・・・・・！！』

打つ手はなくなってしまう。

「柳さん、聞こえますか？・・・水鏡です。僕は当初、復讐のことしか頭になかったし、仲間意識の強い烈火たちについて行けないところもあった。自分の欲望に正直になって行動できる鋼のことを、羨ましくも思った」

水鏡は少し後悔するように喋る。

「でも・・・彼らと共にいたから、今の自分がここにいるんですよね。今、間違いなく皆と同じ気持ちです。起きてください！」

水鏡もまた、切に願った。
するとどうだろうか？

下半身は完全に石化し、上半身も首にまで石化が届きそうだというのに、

「フ・・・コちゃ・・・土も・・・・・・・カオ・・・・く・・・みか・・・が・・・・」

柳の顔色と瞳の光は確実に戻りつつあった。
その口からはかすれつつも、仲間達の名前が呼びかけている。

「いけ、花菱！！」
「姫ーーッ！！」

烈火は勢い良く吸収体を蹴りつけて柳の元へ手を伸ばす。

「絶対に離さねぇぞ！！来い！！！」
「れっか・・・烈火くんっ！」

――パキィィン！！――

体に纏わりついていた、重々しい石が砕け散り、少女の顔には愛しい忍を求める何時もの優しい表情があった。

そして、彼女の忍は主君の体を力いっぱい抱きしめた。
二人の体は空中から重力に従って落ちてきた。

だが烈火の頑丈な体がクッションとなり、柳自身にはなんのダメージもない。

「・・・・・姫、姫!!俺が・・・俺がわかるか?」

烈火はそう柳に問いかけた。彼女はコクコクと頷き、

「烈火くん」

と笑顔で返した。

それを機に、みなの顔には瞬く間に歓喜の表情が浮かぶ。

(みんな・・・・・・また助けにきてくれたんだね)

柳もここまで自分のために骨肉を削ってきてくれた至高の友達に、心から感謝する。

だがこっちはというと、

『本体!!少女の意識が戻ったぞ!』

『これでは喰うことができん!!』

分身体の必死の叫びに本体は、

『・・・・・・・・・・・・かった・・・・・・・・間に合わなかった・・・・・・』

なにやら顔を俯けてブツブツと呟いている。

『ああっ!!』

分身体が両膝をつき、絶望する。

『間に合わなかった・・・終わりだぁ・・・少女・・・究極体の・・・不死の夢』

『本体ィィイ！！』

分身体が叫び散らすが、それは彼らが無知だからだ。

そして、コッチは――――

「薫くん。土門くん。陽炎さん。水鏡先輩。風子ちゃん。七実さん。鋼さん。――――神楽さん」

柳は親愛なる仲間の名を今一度呟く。

「本当に出会えてよかった！みんな大好きな、友達です。私は、幸せです」

だが、しかし。

――ドク・・・ン――

（（今のは・・・？））

七実とブライは、その異変に気づき始めた。

柳の体は途端に力を無くしたように、烈火の体にしがみついた。

「姫？」

「今まで生きてきて、一番楽しかった。一番嬉しかった。一番ドキ

ドキしたよ。一番大好きです。幸せを一杯ありがとう」
（（まさか・・・・・・！！））

柳のある種の言葉に、もはや確信がいってしまった。

「（だからせめて、一番大好きなここを）」

少女は悟った。間に合わなかったのだ。

「さようなら・・・」

そして涙を一筋流し、

「（私の最期の居場所にさせてください）」

動かなくなった。

『間に合わなかったなぁ！！既に治癒の少女は『黙れ下郎！！』

その静寂の時をかき乱すように叫ぶ天堂地獄を、リュウギョクは忍者刀を振るって黙らせようとする。

「・・・・・・・・・だよ。なんでだよ・・・・・・・？」

烈火の脳裏に、自分が主君として憧れ、恋人として恋焦がれた少女との美しい想い出が駆け巡る。

脱力し、地面に座り込んでしまった烈火を――その心情がありありとわかる言葉が、どんな雷鳴よりも大きな音として発せられた。

「なんでだぁぁぁぁぁアアア！！！！」

愛しい主君を腕にだき火影忍軍七代目頭首の慟哭は、部屋中に響き轟いた。

『ついに、一番欲しかったモノを手に入れた、今宵より我は――「不死」だ」

右手より青緑の炎を滾らせ、歪に笑う天堂地獄。

『哀れ・・・たかが小娘一人の死になんという滑稽な姿か。これが今日まで我を脅かしていた火影忍軍とは』

そこから意気消沈とした面々を見て、

『その顔が見たかった!!充分楽しませてもらったよ!!もう良い!消えろ!!』

普通この場合、天堂地獄の攻撃を阻止するのは、こんな状況下でも諦めないであろう、柳の死に深くは動揺しないであろう者。
ブライ、七実、チェリオ、リュウギョクあたりと連想しそうだが、実際には違う。

――ヴォォォオオォォォォォ!!――

炎の片翼を広げた黒い仮面の死神が現れた。

『くっ・・・くく・・・』

『紅麗ーーーィッ！！』

――翅炎――

『本た――――』

『おぶば・・・――――』

最期の分身体も焼却された。

紅麗の関心は、烈火の中で動かなくなった柳に向けられた。

「死んだか。思えば薄幸の娘だったか。――――ところでなんだ？その無様な姿は？」

――ゴンッ！――

『久しぶりだな紅麗。我がわかるか？貴様の父であった我を覚えているか？』

「今まで走り続けてきた貴様が・・・たった一人の死でこうも情けなくなるとは」

――ゴンッ！！――

『無視とは気に入らぬな、紅麗』

「私はどれだけのモノを失っても――決して立ち止まりはしない」

幾ら殴られようとも、紅麗は語る。

『我をよく見よ。この顔、皮肉をこめて貴様をイメージしてつくっ

たのだぞ？』
「貴様はそこで止まってしまうのだな」
『ッッ！！！！！』

天堂地獄には青筋がどんどん立ち始める。

「失望したよ花菱烈火」

そんな侮蔑の言葉に反応する気力も、今の烈火にはない。
そこへさらに、

「烈火。裂神を呼べ」

虚空が現れる。

「裂神――すなわちお主の父、桜火殿が人間であった頃の炎の型は『不死鳥』。竜之炎捌式で、柳を炎へと変えよ」

「ッ！？」
「ッ！？」
「ッ！？」
「ッ！？」
「桜火様・・・が、火竜・・・裂神・・・！？」

五人は想像もしなかった裂神の固有能力と正体に、驚きを禁じ得なかった。

「やはり、それしかないのか、虚空？」
「ああ。佐古下柳の魂を救うには、それしかない」

前々から勘付いていたとはいえ、ブライも改めて聞かされると、このインパクトに気圧されそうになる。

――ピキ・・・パキ・・・――

「見よ。柳の体が再び石化を始めた。魂の離脱を示しているのだ。完全に彼女の体が石化したとき、魂は肉体を離れ、天堂地獄の一部となる!!」

「それを防ぐ術は・・・・・・この場において、唯一か」

虚空の説明に、ブライはこの後の説明にも予想がついてしまう。不死だからというだけなら、連鎖的に消滅させるか、一気に細胞一つ残らず破壊してやればいい。

だが、そこに柳の魂があるとすれば、火影のうち何人が全力で天堂地獄と戦えるだろうか?

「天堂地獄は、海魔であり、森光蘭であり、佐古下柳でもあるということになるのだぞ」

「・・・酷い・・・」

其の果ての惨さに誰が呟いたかなど、もはや問題ではない。

「お主は、天堂地獄と戦えるか?それ以前に・・・・・・それ以前に、お主はこの幼くか弱い娘に仲間たちを殺させたいか?悪鬼とさせて、永遠の地獄を歩ませたいか?柳が一番望んだ場所はどこだった!?奪われる前に奪え!!」

「・・・・・・・・・ッ」

片や、

――ザグッ！！――
――ザシュ！！――

何時の間にか紅麗はリュウギョクと共同戦線をはり、貫手と刀身を天堂地獄に突き立てていた。

『効かぬ、無力なり。紅麗にリュウギョク』

どてっぱらを貫かれようと、幾らでも天堂地獄は再生する。

『我が最も恐怖した男、最も畏敬した女よ、消えてなくなれ』
「『ッッ！！』」

吸収体はその巨体を活かし、二人を吹っ飛ばした。
あわよくばそのまま貪れたかもしれないが、

――ドスッ！！――

一本の刀が、吸収体の眉間に突き刺さった。

「遅くなりました、紅麗様」
「紅麗様・・・！」

それは雷覇に肩を貸しながらここまで来た音遠の磁双刀。
だが紅麗は一旦部下達に感謝の視線をおくり、目線を烈火に向ける。

「見よ烈火」

紅麗の意思に答えて、紅蓮の炎の天使・紅が現れる。

「今お前は、あの時の私のように問われたのだ。最も愛しい者を奪われた苦しみ・・・！悲しみ・・・！」

紅麗の脳裏にもまた、最も美しい記憶と最も忌まわしい記憶が再来する。

「悪魔にその命を奪われるくらいなら、せめて我が炎で！紅が私の答えだ！」

紅麗が『兄』として烈火の背中を押す一言は、ある意味これが最初で最後となる。

「貴様も答えを出せ！！烈火！！」

その結果にあるのは柳を炎の化身としてしまうこと。
彼女に人間としての生を奪い、己に力に変えてしまう事。
幾ら言葉を繕ってもやることは天堂地獄と大差は無い。
だけど、烈火は・・・・・。

４００年前。過酷な時代の流転の為、思い人とは死別し、一族は壊滅状態にされながらも最後の誇りだけをもって点に昇った桜姫。

――其方が己を責める必要はない。其方等の力でわらわは敵に辱められることなく天寿を全とうできた。礼を言うぞ、桜火――

数年前。不遇な運命と冷酷な殺人者として育てられたが故の紅麗の

氷の心を陽光にて溶かし、彼の新たな拠り所となったが為、その命を花のように散らされた紅。

――どんなに醜くたっていい。紅麗・・・ずっと貴方といたかった――

そして、柳。

――土門くんが好き！風子ちゃんが好き！薫くんも水鏡先輩も・・・・・でも・・・烈火くんが一番好き！！何時までも、一緒にいてね――

その願いはどんな手を使ってでも成就させるべきであり、あらゆる魔の手から守り抜くに相応しい貴き想い。

烈火の答えが決まった。

（ごめんな、姫・・・・・答え、出したから）

そう。それは、紅麗と同じ答え。

「竜之炎参式、『焔群（ほむら）』！！」

呼び出された焔群は蛇のように長い体を唸らせて現れる。

「あら？焔群じゃない？裂神を召喚するんじゃないのかしら？」

「シルフィード殿は火竜には詳しくなかったの。捌式を呼び出すには特殊条件がある」

「特殊条件？」

「すなわち、『七竜同時召喚』――――今の烈火なら不可能ではない！！」

焔群の火竜としての姿の前には、人間だった頃の姿が浮かぶ。

『遂に裂神を使うのだな。親子の絆がいかに深いとて、かような不可思議な絆はあるまい。なあ、七代目火影頭首？』

「竜之炎伍式、『円（まどか）』！！」

『途中でヘバんじゃねぇぞ、ヘッポコ野郎！これでも円様はおめぇの力って奴を評価してやってんだ。見てるぞ、見せてみろ！！』

「竜之炎陸式、『塁（るい）』！！」

『大好きだったよ烈火！がんばれ、がんばれ、がんばれ！！』

「竜之炎肆式、『刹那（せつな）』！！」

『気に入らねぇ気に入らねぇ！気に入らねぇ天堂地獄とかいう餓鬼！！気に入らねぇ！！殺す・・・・・・！！』

「竜之炎弐式、『砕羽（さいは）』！！」

『お主が一番使うてくれたのは、崩と私であったな。・・・烈火・・・楽しかった・・・楽しかったぞ』

「竜之炎壱式、『崩（なだれ）』！！」

『・・・・・・・・・・・・』

凛々しい顔を保ちつつも、最期には歳相応の優しい笑顔を彼女は見せてくれた。

「右手を貸してくれんか烈火」

そして最後の一人。

烈火は素直に右手を差し出す。

「あくしゅ」

「え・・・？」

「この右腕――この右腕が・・・力を・・・勇気を・・・希望を与えてくれた。諦めるでないぞ、希望はきっと残っておる！」

「竜之炎漆式、『虚空（こくう）』」

『然らば！！』

七匹の火竜は召喚された。

この瞬間、最後の封印が解かれる。

八番目にして火竜の長たる者の封印が。

「竜之炎捌式――『裂神』」

それと同時に現れる紅蓮の竜。

その人間であった姿も幻影として映し出される。

「桜・・・火・・・・・・桜火様ーーーッ！！陽炎・・・・・・・・陽炎でございます！！」

陽炎は４００年前に死んだはずの最愛の夫の姿を今一度眼にして、涙を大粒にして溢れ出させる。
桜火はその姿をみると、少し名残惜しそうに眼を閉じた。

『なにをしている?どの道我を倒すことなど出来ぬというのに』
「烈火は答えを出した」

天堂地獄を遮るように、紅麗は立ち上がる。

「それがどれ程の苦しみと悲しみであったか、貴様には理解できまい！」
『邪魔はさせんぞ、下郎！！』

リュウギョクと共に、最後の瞬間まで。

そして桜火は、息子たる烈火に語りかける。

『烈火。ワシと竜王殿はかつて、柳殿の前世、桜姫を守りきることが叶わんかった』

桜火は石化が進行しつつある柳に一目やる。

『運命は皮肉にも、時と世代を越え、繰り返されてしまうのかもしれん。ただ・・・・・どのような結果になるかは見えんが、柳殿の心は救わなければならん！！』

桜火の姿は一時的帰消えて、裂神として炎の体を動かす。

『ゆくぞ、烈火っ！』

裂神の身を構成する火炎が、烈火の身を包んだ。

＊＊＊＊＊

ここは何処だろうか？
恐らくあらゆる法則と切り離された、精神のみが在る世界。
そこに柳は漂いつつも引き寄せられつつある。

『『オイデ・・・オイデ・・・オイデ・・・コッチニオイデ、ヤナギ・・・・・・』』

聞く事さえイヤになるような低く冷たい声が二重にしてくる。

『『ヒトツニナルノダ・・・ワレ・・・ト・・・オマエモ・・・・・・・天堂地獄ニ！！！！』』
「烈火・・・くん・・・」

愛しい者の名を呟いた柳。
その祈りが通じたのか、暗い闇に光が満ち溢れた。
柳は感じた。自分を後ろから抱きしめてくれるものの暖かな鼓動を。

『『カァアア！？花菱・・・！？花菱烈火ァーーーッ！！！』』

薄汚い黒があっと言う間に取り払われると、柳の眼には嬉し涙が満ち足りてくる。
その時に理解した、かつて紅が自分にかけてくれた言葉の意味を。

「連れてって!!ずっと一緒!!」

＊＊＊＊＊

石化しつつある柳の身体。
その輪郭には光が現れていた。
その光は次第に強くなり、彼女の身体はおろか、部屋全体を満たすほどに大きく暖かく輝かしい光となっていく。

その光のなかにある、尊い魂を見た一人の男はこう呟く。

「・・・見よ・・・紅・・・」

あたりには軽やかな炎の羽が舞い落ちる。
それは一対の雄大な翼から落ちた物であることを認識するのには少々時間がかかったが、それは紛れも無い。

その姿を見て、皆は一瞬で理解した。

八竜の渦巻く前で、大きな翼を大きく広げ、優しい笑顔をしている。
その姿は正しく天使としか表現できない。

「あの小娘、笑ってやがる。あんな良い面して、幸せそうに笑ってやがる」

ブライは信じられないような口調だったが、声音は実に暖かいもの。

『行こう。行こうよ烈火くん。一緒に、天堂地獄を倒しに行こう』

炎の化身となった柳は、烈火と手を繋ぐ。

「柳こそが・・・・・『烈火の炎』なんだ」

ブライもこの光景には心を洗われる思いに駆られた。
だがしかし、

『ハハハハハ!!喰え!我を喰え!天堂地獄・吸収体!!』

――バグン!!――

言葉どおり、本体は吸収体に喰われた。
元が一つなのだから帰属しあったというべきだろう。

吸収体の頭部からは本体の上半身が迫り出して行く。

『聞いて、烈火くん。私ね、嬉しいんだ』

それとは真逆に、今の柳の行動は一挙一動全てに眩いものを感じる。

『何時も、護ってもらってばかりだったけど・・・・・今は違う。
一緒に戦える!』

柳は今再び翼を大きく左右に広げ、辺り一面に所構わず炎をまき散らかした。
無論、その炎は天堂地獄だけではなく、火影にも直撃する。

「熱――くない？それどころか、傷が治っていく！？」
「これが、治癒の力っすか？」
「不殺の・・・『癒しの炎』ってわけね・・・」

トライブ財閥の三人は身をもって知った。
そう、元々柳が持ち合わせているものは『治癒の力』において他ならない。
輪廻転生においても不変だったほど魂と密接だったそれは、炎の化身となっても消えるわけが無い。

ある意味、戦闘補助にしか使えなさそうな能力だが、相手によっては絶大な効果を発揮する。
そう、一番の例えが、眼前にいる欲望の怪物こと天堂地獄。

『バカめ！今の我に炎など無意味だと何度言えばいい！！』

そう強がっているときも、正しくは夢幻に過ぎない。
ふと手を見てみると、

『うっ、ああ！？燃える！？燃えるぅぅ！！壊れる！！？』

着実に癒しの炎は天堂地獄の身を灰塵へと変えつつある。

『馬鹿な、不死の我が、あああ！！天堂地獄がアアアア！！！！』

竜巻のように織り成される炎の壁の中で、吸収体はどんどん崩れ落ちていく。

『貴方が、その身体を造る為に奪ってきた人達の命を癒します。成

仏する魂と共に、貴方が奪ってきた全ての力が消える』

柳は凛然とした表情で指をさし、こう断言する。

『終わりです。天堂地獄！』

吸収体は完全に燃え尽き、残ったのは身体中を焼かれた上に下半身を失った本体のみ。
その本体すらも、

『イ・・・ヤだァ！』

顔の造形が崩れだし、生きたいと言う欲望が顔のイメージを押し出して森と海魔の本性へと変わりだす。

『嫌だぁ！いやだぁあああ！！』
『死ぬのは嫌だぁあああぁあああ！！』

往生際の悪い事この上なし。
子供のように恥じも外聞も泣く叫ぶ彼らの運命は既に決した。

そこへ追撃として、

――ドンッ！！――

『愚者よ』
「消えろ」

紅麗とリュウギョクの同時攻撃。
そして、全てを吹っ飛ばされた天堂地獄に残ったものは、

核部分の球体に、森と海魔の顔だけが貼り付けられた、見るのも汚らわしい姿。
正に悪しき欲望に取り憑かれた者の末路そのものだ。

『永遠の、殺戮・・・』
『永遠の、欲望・・・』

そして――

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

片脚を突き出そうとするブライと、右拳を繰り出そうとする烈火の姿。

『『うぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあ！！！！！！』』

「「チェェェストォォォォオオ！！！！！」」

――永遠が・・・終る・・・。

友情と決意の答えと烈火の炎（後書き）

次回、仮面ライダーブライ

終焉と決着と日常

『烈火の炎』編、次回にて終幕。

終焉と決着と日常（前書き）

これまでの仮面ライダーブライ！
前回の三つの出来事は！

一つ！葵と蛭湖が裏麗を裏切り、烈火たちに味方する！

二つ！烈火は紅麗の後押しを受け、竜之炎捌式・裂神の力で柳を炎へと変える！

そして三つ！柳の『癒しの炎』の力によって天堂地獄は全ての力を失い、烈火の右腕とブライの一撃により、永きに渡る火影の因縁に終止符が打たれる！

終焉と決着と日常

＊＊＊＊＊

ＨＥＬＬ　ＯＲ　ＨＥＡＶＥＮ
今此処に、全ての元凶を討ち滅ぼし、一時の静寂が訪れていた。
異形の姿となっていた者達も皆、人間の姿に戻っている。
しかしながら、
――ピキ・・・っ――
「闇水・・・？」
なにやら不穏な音がした。
しかしながら、その間際に、
――さよなら、凍季也――
――然らばだ――
「姉さん・・・？おじいさん・・・？」
愛すべき家族の声が聞こえてきた。
それが幻聴だったかどうかを問いただすのは野暮だろう。
ただ一つ確実なのは、
――パキン！――

闇水という『魔導具』が壊れたということ。

一方で風子も、

――頑張ったね風子――

「・・・緋水・・・」

――パキン！――

神慮伸刀が砕けた。

そして、

『お疲れ様でした、ゴシュジンサマ。幸せになってね！サヨナラ！！』

――パキン！――

「風神・・・ちゃん・・・」

風神という『魔導具』も壊れた。

無論、二人だけではない。

蛭湖の『血種』も、土門の『鉄丸』と『土星の輪』と『嘴王』も、小金井の『鋼金暗器』もまた然り。

「魔導具が――――」

「砕けていく・・・！？」

その最大の原因は、

『火影が終わるのだ』

それらが『火影魔導具』だから。
その詳細を、裂神――桜火が語る。

『天堂地獄という邪悪な欲望、野望が消えたとき・・・火影に関わる全ての物が役目を終え、此の世から消滅する』

もう二度と、悪の手に渡らぬように。

『今・・・火影の歴史が終わる』

火影の全てが滅される。

火影に関わるもの全てが消えるということは――

「・・・・・・紅・・・・・・・磁生・・・・・・・」

紅麗は炎の亡霊となってまで自分に力を貸してきてくれた者達との別れを迫られるということでもある。

「今日まで・・・よくぞ共に歩んでくれた。お前達の事を私は生涯忘れない！決してな！」

――コク・・・っ――

すると、磁生は優しい笑顔のまま、無言で頷いて手を振りながら、消滅していった。

――サ・・・ヨナラ――

そして紅も、

――サヨウナラ。大好きな紅麗――

最愛の人に別れを告げて、消滅した。

「また、会おう」

紅麗はとても寂しそうに、悲しそうに呟いた。

『紅麗』

そこへ桜火が語りかける。

『火影頭首として生き、父として生きられなかったワシを許せとは言わぬ。しかし・・・ワシはお前と麗奈のことを、心より愛しておったぞ』

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

紅麗は無言で両膝をついて正座し、そこから地面に手をつけて頭を深く下げた。

偉大なる父への、精一杯の敬意と感謝を示す為に。

『陽炎――よくぞ４００年の間・・・火影の為に生き、ワシを忘れずいてくれた。これからは、己の為に生きてくれ』
「さようなら・・・桜火様・・・・・・・！」

陽炎は眼から一筋の涙を流しつつも、雄大なる夫に恥ぬよう、妻として凛然な表情で答えた。

そして火影の力が消え、紅と磁生が消えたことは、烈火が必死に柳を抱きしめる理由としては充分すぎた。

「イヤだ！！冗談じゃねぇ！！消えんなよ！！消えんなよ、姫・・・・・・！！お前が消えることねぇだろ・・・・・・！？」
『泣かないで・・・・・泣かないでよ烈火くん・・・・・・』

烈火も柳も大粒の涙を垂れ流しにする。
そこへ桜火は、

『烈火、よくぞ火影を滅ぼした！そして、よくぞ我ら八竜の心を晴らし、成仏させてくれた！』

言葉に従い、烈火の両上腕にある火竜の刻印は消滅していくではないか。
恐らく烈火の体内にいる火竜達の成仏を示しているのだろう。

『無念・・・怨念を残した炎術士は火竜となり・・・八竜の呪いは火竜を宿す者が晴らすこと消えることができる。お前はそれを成したのだ！』

だが語っている間にも、柳の炎の翼はどんどん消滅の一途を辿って

いく。

『火竜は消える。火影も消える。火影の力も・・・・・・皆消える』

――パリン！――

烈火の右腕の手甲が砕け散った。

『そしてなにより、解放された柳殿の魂の行方は・・・・・・』

結論から述べよう。

「ふえ・・・・・・」

柳は消えなかった。

そこにいるのは、どう見ても簡素なワンピースを来た女の子だ。

「くしゃっ！」

柳はくしゃみをした。

炎の化身ならば絶対にするはずの無いクシャミを。

「やっぱり、こうなりましたか」

七実は大して驚きもせず、そういった。

「そりゃそうだよな。紅や磁生と違って、まだ器があるんだからよ」

刃介もこの展開を読んでいたらしい。

「まあ、ここまで来て死別だなんて、どんなクソゲーかって話ですよ」

金女も同意して見せた。彼女なりの表現で。

烈火はそんな感想など気にも留めずに、

「姫・・・？・・・姫だ！！！」

飛びっきりの笑顔！

『天晴れなり花菱烈火！！然らば・・・！』

こうして、最後の火竜も成仏し、火影の呪いは全て解かれた。

忍者は少女を精一杯持ち上げて、最高の笑顔を互いに浮かべて、こう言い合った。

「おかえり！！」

「ただいま！！」

これこそ正に、ハッピーエンド！

「・・・・・・さてと」

刃介は紅麗の方に視線を向けた。

「・・・・・・なんだ？」

「ん・・・やっぱ声、似てるな」
「何の話だ?」
「いやいや、コッチの話だ。気にするな」

少し自分でも無神経と思いつつも、刃介は思わず『ドS魔人』のことを思い浮かべてしまう。
まあ、そんなことは一旦頭の隅に置いて、刃介は紅麗に問うた。

「あの時の答え、まだ聞いてなかったな。・・・・・・今一度問うぞ。『お前は何の為に戦う?』」
「私はただ、例え傍らに居られなくとも、『守る為』に戦ってきた」
「――お前、絶対に今までの中で、一番良いツラしてるぜ」
「ああ・・・そうだな・・・」

そうだ。紅麗は『守る為』に戦ってきた。
烈火とは違い、血に塗れた道を歩み、その過程で幾十人もの者達を失った。
始まりから終わりまで、この異母兄弟は正反対だ。
でも紅麗は戦ってきた。真に愛する者達の為、誇り在る火影の為に。

「雷覇――音遠――礼を言う」

――カラン!――

紅麗は仮面を取り去り、地面に投げ捨てた。

「今日までよく仕えてくれたな。麗は解散だ」

刃介のいう、『一番良いツラ』で、彼はそう告げた。

「然らば」

右腕をかざした瞬間、

――ビュウウゥゥゥン！！――

「なんだ！？空間に穴が・・・・・・！？」

「あれは・・・・・時空流離（じくうりゅうり）！！？何をするつもりなの、紅麗！？」

時空流離。

それは４００年前、陽炎が烈火を戦火から逃がす為に使った禁呪。

烈火と紅麗が纏めて現代に流され、今に到るまでになった禁術。

副作用として陽炎に不死の呪いを与えた禁忌の法。

「私の身体に残された、火影の力で使う最後の秘術。火影は消える。あなたのように不死にはならぬさ・・・・・・遣る事が残っていてね。私はあの時代へ還る」

「戦国時代に、戻るのか。あの”尾張の虚け”を討つのに最良の時代へ」

「ああ、一人でな・・・」

火影忍軍が歴史から抹消されたのは、ひとえに彼らの魔導具を欲した織田信長によって滅ぼされたが為。ならば遣る事は一つ。

誇り高き火影忍者として、紅麗がなさんとすることは”一族の仇討ち”に他ならない。

「御武運を！」

「紅麗様！！」

雷覇と音遠。
麗最高たる忍びたちも、君主の最後の旅立ちに応援の声を送る。

「紅麗ぃーーーっ!!!」

そして最後に、

「あばよ・・・アニ、キ・・・じゃねぇ・・・!あの・・・・・・」

烈火は何か言おうとするが、今までいがみ合っていた分、どういう台詞を吐けば良いかがわからない。
だから、言葉ではなく、

――グッ!――

行動で示す。サムズアップを決めて。
それを紅麗は、かつての穏やかで慈愛満ちた表情で受け取った。

紅麗は空間の穴に入って行くと、思わぬことに・・・・・・

「バイバイ、みんな。俺・・・紅麗についてくよ!一人じゃ寂しいだろうから!」

小金井までもが別れを告げた。

「すっげぇ楽しかった!これからも皆と楽しくやりたかったけど・・・・・紅麗のトコに行くよ!!」

この状況で時代を超えるということは、もはや現代に帰る事も会うことも永遠に叶わなくなる。

「そこが俺の、居場所なんだと思う！」

しかし、小金井の決心は変わらない。
幼い頃、自殺まで考えた自分をここまで立ち直らせてくれた、一生の恩人に報いるために。

「みんな元気でーーーッ！！」

少年はずっと一人だった。
少年は一人の青年と出合った。
少年は一人ではなくなった。

あの時の言葉を・・・気持ちを・・・忘れる事などできない。
全てを捨て、たった一人でいずこへと向う青年にかつての自分を重ねたのか、少年は青年のもとへ走った。

――兄弟となろうぞ・・・・・・――

青年も、少年も、もう一人ではない。

そして今――

「我刀流」
「・・・・・・リュウギョク」

――――もう一つの決着がつこうとしている。

「言葉どおり、決着をつけるぞ。今此処でな」

竜王は帯刀した忍者刀に手をかけた。

「ああ、悪いが今度にしてくれないか？大激動な戦いの後だし、なんかさぁ」

気だるそうにする刃介。

すると竜王は忍者刀を鞘から抜き放った。

「おいおい、俺はもう今日は――ビュン！――」

竜王は刀身を振るった。

それにより、

――ッツ！――

血が舞い散らされた。

身体の中にて流動する命の水。

身体に温もりを与える赤い液体が。

「・・・・・・・・・あ」

それは刃介から出ているわけじゃない。

刃介の直ぐ後ろに居た、

「へぇ・・・中々ですね」

余裕の表情で、顔から血を垂れ流している七実。

正確に言うと、額から左頬にかけてまで、刀身から出た斬撃波によ

ってつけられた刀傷。

それを間近で見た刃介は、顔を俯かせて呟く。

「・・・・・七実の顔を」

「これでヤル気になったか？」

「絶対許さん。絶対に殺す」

「全く、そんな生霊みたいな女の何処が良いのやら？才能と美貌だけにほれたのか？」

竜王は怒りに血を沸きあがらせる刃介を挑発する態度を取り出す。

「この戦いで、お前の心身を星屑の如く散らしてやろう」

その言葉を引き金に、刃介は怒りに燃え上がった形相を上げ超弩級の激怒の炎を背景に咆哮する。

「やってみろ！！ただしその頃には、お前は八つ裂きになってるだろうがな！！！！」

それは虚刀流七代目当主にして七実の実弟、鑢七花の決め台詞。

「漸く全力で戦えそうだ」

竜王はそう言って薄らと笑い、それを皮切りにお互いに名乗った。

「我刀流二十代目当主！！鋼刃介、参る！！」

「真庭忍軍十二頭領総補佐!!真庭竜王、通称『奇蹟の竜王』、来ませい!!」

それにより、刃介は初めてリュウギョクの素性と本名を知った。
だが関係ない、二人のこれから遣る事に変化があるわけではない。

竜王は再び完全体のリュウギョクへと変身する。
刃介もブライドライバーを装着し、懐から三枚のコアメダルを握りだす。

『そのコアは?』
「俺のコアだよ」

刃介のコアとは、今握り締められている『金色』のメダル。
それらをセットしてローグレイターを傾けれた準備完了。
仕上げにローグスキャナーを使って三枚のコアメダルをスキャンする。

「変身」

重く低い声、今の今まで聞いたことさえないような、憤怒を秘めた声音。
それに呼び覚まされたかのように、彼の周囲には色取り取りのメダルたちが踊る。

≪YAIBA(ヤイバ)・TSUBA(ツバ)・TSUKA(ツカ)≫
≪YABAIKA(ヤバイカ)・YAKAIBA(ヤカイバ)!YAIBAKA(ヤイバカー)!≫

金色の波動を胸に受け、彼は変身し、一本の刀となる。

巨大な刃と化し、白銀の眼が輝く頭。
境界たる役目を果たす鍔と化した胴体。
その力を振るう為の柄と化した脚。
その全てが金色だった。

これこそが、刀剣系グリードと化した鋼刃介の力の結晶にして我刀流の真髄が一つ。

「まるで・・・刀みてぇ・・・」

誰が呟いたか、最早問題ではない。
金色に輝く一本の刀たる雄姿。

仮面ライダーブライ・ヤイバカコンボ！

『新たなるコンボ・・・か。良いな、これで私も本気になって戦えるぞ』

それに対し、リュウギョクは強敵との対峙に武者震いしている。
緊張しきった空気。そこに対決しあう二人以外にこの戦いに介入する余地など一片も無い。

『真庭剣法・流水剣・・・連撃編！！』
「我刀流奥義！快刀乱麻（かいとうらんま）！！」

その瞬間、世界が震えた。

――ザシュザシュザシュザシュザシュザシュザシュザシュザシュザシュ！！！！――
――ザシュザシュザシュザシュザシュザシュザシュザシュザシュザシュ！！！！――

リュウギョクの刀とブライの手刀は相手に攻撃しようとした途端、
その攻撃を互いに止めあい、隙をついては攻撃して血を流させ、腕を引き戻して瞬時に腕を伸ばして敵を攻撃しようとして止められて、だが隙を見つけて刀傷を付け合う。

その動作の繰り返し。
だがそれは高速・・・・・・いや、超々高速の世界で行われている。
刀と手刀の残像が何十にも渡って視認され、それによって発生する衝撃波も凄まじく、二人の身体から血やメダルたちを舞を躍らせて『粋』なモノを感じさせる。

このまま決着は永遠につくかどうかさえわからないとき、

――ズッ――

「あ・・・・・・っ」
「っ！」

ブライは血溜りを踏んで、極僅かにバランスを崩したをの機会に、
リュウギョクは両目を虹色に輝かせて、

『真庭忍法・劉殺生！！』

――ブシュウウウゥ！！！――

高速を越えた光速の領域での一撃。
再び身体中から飛び散る血液の噴水。
普通なら誰しもがここで出血しを想像するだろう・・・・・・が。

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

ブライは諦めなかった。

「うぅぅおおおおおお！！！」

魂の根底から競りあがってくる咆哮。
それにはこの場にいる全員が、本当の剣士と忍者の命を賭けた死闘であることを再認識させた。

「トォ！」

ブライは全力で飛び上がり、全身のいたる箇所から金色のオーラを発して此方へ急降下してくる。
金色のオーラは次第に一本の刀剣のそれへと変化し、ブライの身を覆い被す。

両脚を突き出したままキックの姿勢で突っ込んで来て、目の前にいる好敵手を斬るべく、彼は技名を腹の底から叫んだ。

「我欲刀錵（がよくとうぼう）ォォォオオオオオ！！！！」

そして、

――ザグッッ！！――

一本の刀は、一人の忍者の胸に深く突き刺さった。

『ぐ、は・・・・・・ッッ』

流石にこの一撃にはリュウギョクもかなり堪えるらしく、大量のセルメダルが身体から飛び散っていき、彼女の身体は地面に平伏してしまった。

この間に、ブライはトドメを刺すべく、取って置きの『奇策』を発動する。

――ジャリ・・・！――

その手に、十八枚のコアとローグスキャナーを持って。

それを見たシルフィードは、

「ちょ・・・待って！！そんな一気にスキャンしたら、コアの力が暴走するわよ！！」

そう。シルフィードは８００年前の戦いの生き証人だ。

だから良く知っている。先代のオーズは欲張ってコアを多数同時に取り込んだことで、皮肉にもグリードを吸収し、オーメダルを封印する石棺へと変わり果てたことを。

「横からゴチャゴチャと言葉の槍を入れてんじゃねぇよ」

だがそんな警告にもブライは耳を貸さない。
十八枚のコアを空中に投げ、その全てを一度にスキャンする。

≪ＲＹＵ≫
≪ＨＡＹＡＢＵＳＡ≫
≪ＹＡＭＡＮＥＫＯ≫
≪ＫＡＢＵＴＯ≫
≪ＢＡＫＵ≫
≪ＺＥＵＧＬＯＤＯＮ≫
≪ＯＮＩ≫
≪ＨＯＵＯＵ≫
≪ＪＡＧＵＡＲ≫
≪ＨＡＣＨＩ≫
≪ＭＡＭＭＯＴＨ≫
≪ＭＥＧＡＬＯＤＯＮ≫
≪ＴＥＮＢＡ≫
≪ＹＡＴＡＧＡＲＡＳＵ≫
≪ＳＭＩＬＯＤＯＮ≫
≪ＩＮＡＧＯ≫
≪ＩＮＯＳＨＩＳＨＩ≫
≪ＴＡＣＨＩＵＯ≫

「ハァァアアアアァァアアアアアア！！！！」

周囲に満ちるは生命力の波動。

ブライから溢れる六色の輝きは部屋を照らしても尚足りないほどに眩い。
シルフィードとリュウギョクはブライの自滅を想像した。
だがしかし、
「行くぜ竜王!!」
『な・・・・・・――――ああ、来い刃介!!』
リュウギョクは心底驚かされた。
８００年前、刃介と同じく欲望の塊ともいえる一人の王はコアの力で石化という結果に終わったのに対して、ブライ＝刃介は十八枚のコアの力を完全に支配している。
幾ら与えようとも満たされない、まるでブラックホールのように限りの無い『欲望の力』で・・・！
「我刀流究極奥義!!」
ブライは全身に力を込め、好敵手の懐にもぐりこみ、溜めの行い強烈な貫通力の拳を突き出そうとする。
リュウギョクは咄嗟に皮膚と少し離れた距離で忍者刀を重ねて構えて防御の姿勢に移る。
だがそれはムダだった。
ブライは目の前だけでなく、背後にもう一人いたのだから。

『（こ、これは私の忍法影分身!?）』

なぜブライが自分の忍法を使えるのかと疑問に思ったが、疑問に思った瞬間、回答が導き出せた。

鋼一族は我刀流。
それは他者の技法を『盗見取る』流派。

オリジナルの技を造る事ができたのは十代目だけ。
ならば刃介は盗んだ技を結集して新たな技をつくる。

前方のブライからは――

「七花八裂・改!!」

後方のブライからは――

「忍法劉殺生!!」

――二つを合わせて!

「「望語（ノゾミガタリ）ッッ!!」」

そして、こうして、欲望の剣士と埒外の忍者の決着は、幕を下ろすこととなった。

＊＊＊＊＊

かつて火影忍軍が天堂地獄を地下深くに安置していた封印の地。
何時か昔のこと、この天堂地獄を求めて触れたが為、死ぬ事さえ許されなくなった三人の盗賊がいた。

今の彼らは苦痛と悪夢を忘れるべく、分厚い大きな氷塊で眠りについていた。
そんな彼らの魂は、今解放される。

（（（（魂が・・・浄化されていく・・・天堂地獄を壊してくれたのだな・・・・・・））））

哀しい呪いに縛られた彼らの魂は、全ての呪縛から解き放たれ、天へと昇る。

（（（（・・・・・・・ありがとう・・・・・・・））））

＊＊＊＊＊

「・・・・・・・・・・・・・」

――カチャ――

血と刀を滾らせた死闘の果て、勝利したのはブライ。
勝利者はベルトの傾きを直し、変身を解く。

「・・・刃介・・・」

変身を解いた刃介の姿に、烈火は思わず戦友の名を呟く。
上から見ていくと、白髪の所々は赤黒いメッシュのようになり、黒い着流しは奇妙な艶を発している。
何より、腹部と左鎖骨から胸までの大きな刀傷によって流れ出る多量の血液には度肝を抜かれた。

彼は実に威風堂々とした態度で、地面に横向きで倒れ、辺りに大量の血液とセルメダル――そして、十枚のコアメダルを撒き散らした女忍者にこう宣言した。

「俺の勝ちだ、竜王」
「・・・ああ。そして・・・私の敗北だ・・・」

二人の声音には悔いも恨みもない。
ただ純然たる勝負の結果を真正面から受け止めている。

「なあ、竜王。もし良かったら、このまま俺たちと――ビーッ！ビーッ！ビーッ！――ん、なんだ？この警報は！？」

うるさく鳴り響く警報の音。
それは正に、非常事態を告げていた。

――緊急事態発生！緊急事態発生！天堂地獄ノ破壊を確認！――

コンピューターによる合成音が見えざるスピーカーから流れてくる。

――エマージェンシーコードニ従イ、コレカラ３０分後ニ、セルボンバーニヨッテＨＥＬＬ　ＯＲ　ＨＥＡＶＥＮノ自爆ヲ決行シマス！――

「んな！？今時自爆システムだと！？」

刃介はとても大怪我をしてるとは思えない様子で大声を出す。

――裏麗ノ総員ハ直チニ退避シテクダサイ！繰リ返シマス！――

「っておい！どうすんだよこの状況！！？」

「なんでこんな状況で・・・っていうか、永遠求める奴が自爆装置なんか組み込むのか！？」

土門と風子は思いの限りシャウトする。

「兎に角、今は逃げる事が先決だ！急いでエレベーターに乗るんだ！」

水鏡は冷静にそう指示を飛ばすも、

――尚、侵入者対策トシテ、最重要部ニ通ジル全テノ出入リ口ヲ遮断シマス――

こちらの判断は読まれていたらしい。

「ど、どうしよう・・・！？」

柳も八方塞がりなこの状況に右往左往する。
しかしながら、

「あ、そうだ。会長の魔術でどうにかなりませんか？」
「え、私の？」

金女がシルフィードの魔術に頼る案を出してきたのだ。

「出来ない事も無いけど・・・・・・」
「じゃあ早くしてくれ！」
「いや、でもね・・・・・・」

シルフィードは歯切れの悪そうな表情と口調をする。

「私の力じゃ、一人だけ取り残すことになるわ。質量的にも重量的にも」
「よし土門。お前今すぐ軽くなれ！」
「出来るか！！」

烈火と土門のギャグは一先ず置いておこう。

すると刃介は、シルフィードに近づき、耳元で囁く。

「おい、シルフィード」
「何かしら？」
「皆のこと、頼む」
「・・・・・・鋼くん」

それはある意味、捨石になりかねない発言。

「心配するな。爆弾の名称からして、俺でも爆発を解除できるかもしれん。お前らはもし仮に万が一に備えて避難しろ」
「本当に、それでいいのね？」
「くどいぞ」

シルフィードはもう口答えしなかった。
懐から例の色付きメモ帳を取り出し、紙ではなくリング自体を取り外した。
結果として連なっていた紙は一気にバラけて、刃介を除くメンバー全員を円で囲うように地面に張り付いた。

結果として火影メンバーはなにやら騒ぎ出すが、シルフィードは気にも留めずに刃介にもう一度語りかける。

「頼んだわよ」
「ああ、任せておけ」

円形に並んだ紙は互いに呼応し合い、様々な色の光を発しだす。
そして、光はドンドン強くなっていき、遂には皆の姿を覆い隠そうとする直前に、

「七実」
「はい？」
「また会おうぜ」
「・・・・・・ええ、また」

そうして、シルフィードの空間転移魔術は発動し、皆をこの塔の外側に移動させた。

――セルボンバー起爆マデ、アト、２５分デス！――

無機質なアナウンスが報せるカウントダウン。
刃介は最後の仕事を遣り終える前に、この場に残っているもう一人に話しかける。

「竜王」
「・・・・・・刃介」
「お前、大丈夫か？」
「私から大量の血とメダルを散らした男が、よく言う」

どうやら喋る分には問題ないらしい。

「なあ、聞いてもいいか？」
「好きにしろ」
「なんで手加減した？」
「それはお前も同じだろ？」

そう。二人は互いに手加減していた。
竜王は忍者としての卑怯卑劣さを駆使すれば、刃介はヤイバカコンボに秘められた幾つかの力を使えば一回か二回は相手を出し抜く策を編み出せた筈だ。

にも関わらず二人は正面きって堂々と戦った。

「多分、俺とお前の考えは同じだな」
「ああ、私もそう思うぞ」

一言で要約すると、こうなる。

「「お前とは正々堂々と決着をつけたかった」」

二人の声が完全に重なった。
すると刃介はというと、今度はこんな質問をしてくる。

「お前、なんで天堂地獄を裏切った？ただ単に、友達喰われてブチ切れただけであなる忍者はいないと思うが」

そう。忍者とは心を刃で隠す者。
あらゆる苦境にも耐え忍ぶのが忍者だ。

「私は・・・ただ・・・自分を救いたかっただけかもしれん」
「自分をか？」
「ああ。私自身を姉と慕う者を可愛がることで、私にもヒトは残っているのだと、自己満足したかったのかもしれん。ある意味、それが私の欲望だったのかもな」

竜王は嘘偽りを赦さない表情で語る。
もしかしたらその表情は、自己に対するものかもしれない。

「刃介・・・私は常に孤独だった。しかし、前世において死んでいった仲間達との絆を思い出し、自らの存在意義を求め彷徨ってきた。だが、もう疲れた・・・・・・刃介、私が得た命は、無意味だったのだろうか？」

竜王の言葉に、刃介は血塗れた顔を横に振った。

「命は存在してこそ価値がある。・・・だからお前が得た新たな命にも、きっと意味がある。此の世に無駄な命（モノ）なんて、ありゃしねぇんだからよ」

それを聞いた竜王は、実に心安らいだ表情になる。

「刃介。私は新たな生涯の最期に、更なる進化を見出すお前を観た。お前ならきっと、その欲望で運命を越えて行ける」

――セルボンバー起爆マデ、アト、２０分デス――

「だが俺には、まだ為すべきことがある」

「それが何を意味するか、わからねお前ではあるまい？」

竜王もまた、刃介のすることを倒れながらも盗み聞きしていた。

「セルボンバーを止めるには、使われているであろう大量のセルメダルの力を完全制御しなければならない。今それができるのは、この俺だけだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

竜王は何も言わず、ただ目を閉じた。

刃介は申し訳なさそうな顔をすると、瞬く間に表情を変え、シェードフォーゼに乗って行ってしまった。

――ブゥゥウウゥゥゥゥン！！――

隔壁などを突き破り、下の階層へとドンドン降りていく刃介の姿を確認すると、竜王は血塗れの身体である物を掴んだ。

重要なものを十枚。

＊＊＊＊＊

ＳＯＤＯＭにある石像の間。
今となっては役目を果たしきった無用の長物たる場所である。

「ふう、上手く離脱できたみたいね」
「おいちょっと待て！鋼の奴がいないだろうが！」

烈火はシルフィードにとって掛かる。

「彼なら、もう一仕事していくと言ってたわ」
「ま・・・まさか・・・！？」
「ご想像に任せるけど、多分正解でしょうね」

その話を聞いたものは全て理解した。
刃介は爆発を解除するために残ったと。

「鋼ぇぇぇえええ！！」
「鋼さぁぁぁん！！」

烈火と柳は、喉が潰れんほどに、大きな声でＨＥＬＬ　ＯＲ　ＨＥＡＶＥＮに叫んだ。

＊＊＊＊＊

――ブゥゥウウウゥゥゥン！！――

最下層への直轄通路。
セルボンバー起爆装置への道のりは、螺旋階段状になっていた。
下に向って走るのに従って、最下層の装置から放たれる光と熱が少しずつ強くなっていく。

シェードフォーゼに跨って駆けながら、刃介は中心部の状況に冷や汗を流す。
だがその時、

――バギン！！――

何者かが壁を破壊して螺旋階段の通路に進入してきた。

「竜王！？」
「詰めが甘かったな刃介。コアさえ揃っていればセルが不足してても動ける。後始末は私に任せろ！」
「お前・・・・・・」

唐突に現れた竜王は刃介と平行して走りながら、自らが自分に下した決断を口にした。

「勝者には新たな未来が託される。お前は生きなければならない！」

そう強く言うと、竜王は跳躍してシェードフォーゼの一足先に行き、両手から火炎・雷撃・竜巻・水流・重力波を放射して、階段を破壊する。
丁度、自分と刃介との間に境界を作るように。

「竜王！！？」

刃介の戸惑いの声にも厭わず、竜王は一人でセルボンバーの起爆装置の元に飛び降りる。

「竜王ぉぉぉぉぉオオオ！！！！！」

「・・・すまない・・・」

最早常人の目では視認できるかどうかの上下距離にまで届く大きな声。

その声に竜王は呟くように謝る。

――セルボンバー起爆マデ、アト、１分デス！――

そして装置の中へ特攻した。

全てが奇妙なエネルギー光で満たされた異様な装置内という空間の中で、竜王は一人虚しく思う。

あまりの高エネルギー地帯ゆえに、忍び装束や肉体が着実に蝕まれていく。

「八百年・・・・・・思えば永かったな・・・・・・・・」

そう呟き、今度は頭の中で思う。

（蝙蝠、白鷺、喰鮫、蝶々、蜜蜂、蟷螂、狂犬、川獺、海亀、鴛鴦、人鳥、鳳凰・・・・・・すぐに私も逝く・・・・・・・・）

初代十二頭領達との再会を信じて祈りながら、

「漸く・・・全てから・・・」

一筋の涙を流し、グリードとしての運命（さだめ）から解き放たれることを喜びながら、真庭竜王――通称『奇蹟の竜王』は光の中へと消えていった。

そして、致し方なく螺旋階段を昇っていた刃介は、

「・・・竜王・・・」

とても虚しそうに戦友の名を呼んだ。

そして、

「うおおおおおお！！」

その”瞳を金色に”光り輝かせて、愛機の疾走をより加速させた。

＊＊＊＊＊

一方みんなは、石像の間にある隠し通路の入り口をじっと見ていた。

「鋼さん・・・大丈夫、ですよね？」

「きっと大丈夫ですよ。死んでるなら、今頃ＨＥＬＬ　ＯＲ　ＨＥＡＶＥＮは木っ端微塵でしょうから」

と柳に対して七実は顔の傷あたりを摩りながら冷静に答えた。

もっともこの程度の傷ならば、七実の自然治癒力によって数日でな

おるのだが。
そして、

――ブゥゥゥン！ブウウゥゥゥン！！――

「あっ・・・ホントに来ました！」
「お帰りなさい、兄さん！」
「お帰りなさい、刃介さん」

バイクの駆動音を鳴らして、

「みんな、ただいま！！」

――――英雄が、帰ってきた！

＊＊＊＊＊

刻は戦国の世に、奇なる忍の一族が在った。
火影忍軍。
彼らは一人の男によって歴史より葬り去られた。

天正四年＝１５７６年。
それは織田勢が火影の里に攻め入り滅ぼした年。

多くの勇敢な忍者達が立ち向かい、討ち死にした時でもある。

そして、あれから時は流れる。

天正十年＝１５８２年。

この時代での大事件を現代ではこう呼称する。

本能寺の変・・・と。

燃え盛る本能寺、数少ない護衛兵に刃を向けていく明智光秀の兵士達。

そんな中、もうじきその生涯を閉じようとしている者が、本能寺の本堂の中で座っていた。

「蘭丸――森蘭丸はおるか？」

織田上総介信長。

いまや死を逃れられぬ彼に近づく黒い影が一つ。

「何奴？」

「火影忍軍の紅麗――一族の仇、信長公の御首（みしるし）を頂に参った」

「火影・・・おお。寺に火を放ったはそちか」

やはりアレだけの事もあり、そして動機が動機ゆえ、信長にとっても火影攻めは印象深い記憶らしい。

「外は明智光秀の軍勢。内は面妖なる乱波集団の生き残り。もはやこれまでか・・・・・・」

そして信長は、歴史的に有名な詩を歌う。

「人間五十年・・・・・・下天のうちをくらぶれば――夢幻の如く也」

紅麗は手にした一本の刀の抜き放つ。

「一度生を得て、滅せぬ者あるべきか・・・・・・・・・」

こうして信長は、燃え盛る本能寺の中で、四十八年の生涯を閉じた。

そして紅麗は静かに本能寺から去り、その終始を見届けた。

最大の目的である、仇討ちを達成したのだ。

「終わったんだね、紅麗」

そんな彼に声をかける少年が一人。

「薫・・・・・・」

着流しを着て草履を履いた小金井を見て、

「そのカッコ、似合わんな」

と、正直に酷評をくだした。

「紅麗のカッコのほうがこの時代じゃ変なんだよ!!」

小金井も反論する。

紅麗は可笑しそうにクスっと笑うと、

「ああ・・・終わったよ」

そう報告した。

「あとは？これから何すんの？」

「そうだな。焼けた火影の里に帰って仲間達の弔いでもしよう」

信長を討った後となれば、そうするのが至極当然だろう。

「父上・・・桜火と、母、麗奈の墓もつくらねばな・・・・・・しかし、なぜ私についてきたのだ？もう帰る事は・・・」

――ドコン！――

小金井は紅麗に跳び蹴りをかました。

「今更何言ってんだよ！！『兄弟になろう』って言ったのはあんただろ！？」

小金井は小さな身体から精一杯声を絞り、

「ずっと一緒に居てやるよ、兄者！！」

その言葉を聞いた紅麗は、少々面食らった様子だが、すぐに慈愛満ちた優しい表情となり、小金井の頭をクシャリと撫でた。

「そういえばさ、みんなは今頃どうしてるかな？」

「さぁな。大方、何時ものようにバカ騒ぎをしてるだろうさ」

紅麗は続けてこう言う。

「それに鋼も、己の生き方という欲望を貫いているだろう」

語るときの紅麗の表情は、実に清清しく、感謝の念に満ちていた。

そんな紅麗の姿を見た小金井も満足そうな表情で月夜の空を見上げる。

（みんな、俺元気にやってるぞっ。そっちはどうだい？）

＊＊＊＊＊

あの現実離れした要塞都市での戦いから何日経っただろうか？

烈火と柳は、町の外れにある山の中に来ていた。

因みに言いだしっぺはやっぱ烈火だ。

「見せたい物ってなーに？」

「ちょっと前から準備してたんだよ姫！」

烈火は地面に固定してある大筒に手を加える。

「花火？」

「姫の為に作った特別製だ！」

すると、柳は大きく息を吸って大声でこう宣言した。

「もう姫はお終いだよ、烈火！！」

初めて烈火のことを呼び捨てにした。

「火影が無くなって、貴方はもう忍者じゃない。私ももう姫じゃないの」

柳は頬を薄ら赤く染め、初々しい表情でお願いする。

「『柳』だよ、烈火」

「・・・・・・・・・」

烈火はすこし戸惑ったが、

「打ち上げるぞ、柳！！」

「うんっ！」

花菱烈火。

火影忍軍七代目頭首。

炎の右腕で火影の歴史に終止符を打つ。

火影はもう、存在しない。

奇なる運命。

仲間と共に歩んだ運命。

運命の扉は今ゆっくりと閉じていく。

そして・・・・・・

また新たなる扉が開かれる。

＊＊＊＊＊

空高く打ち上げられた烈火の花火。
夜空に咲き誇る鮮やかな炎の花を見物する者が二人いた。

「烈火の奴、意外な才能があるな。流石は元炎術士・・・ってわけでもないか」
「なんでも、今まで育った環境が花火職人の家だったから自然と身についたのでは？」

我刀流二十代目当主、鋼刃介。
虚刀流の異端児こと、鑢七実。

この二人は烈火たちの姿を見下ろせる程度の高さの山に登り、彼らの様子と見事で美しい花火を肴にして、日本酒をお猪口に注いで飲んでいた。
もっとも刃介のお猪口には七実がお酌をしていたわけだが、何故か全然違和感が無い。

そして刃介は首に『不恰好な五色のマフラー』を巻いて、七実も懐に『三十枚のコア』をしまいこんでいた。

「つーか七実よ」
「はい？」
「お前あの時、わざと受けたろ」

あの時とは、顔を竜王の刃によって刀傷を負わされた時のことだ。

「さあ、どうでしょう？」

七実は邪悪に微笑んで誤魔化した。
否、邪悪に微笑んでる時点で、確実にわざとあの斬撃波を喰らったのだろう。
その際の傷もすっかり癒えて傷跡さえ残っていない。

「刃介さん」
「なんだ？」
「前に私は初めて貴方を変身させたとき、こういいましたよね」

私に惚れていいですよ。

そう七実は言っていた。

「今度は逆の事を言います」
「というと？」

――サッ――

七実は刃介の顔に両手を添えてガッチリと固定すると、

――チュ・・・――

唇と唇を重ね合わせた。
身長差のため、七実が身を乗り出す姿勢になるが、それでも何故か違和感が生まれることはなく、甘く優しい空気が場を満たす。

「・・・・・・・・・」

愕然とする刃介に、七実は暖かな笑顔で頬を薄らと赤く染めつつこう言った。

「私は貴方に、惚れてしまいました／／／／／／」

鋼刃介
所有刀：虚刀『鑢』と？？？

仮面ライダーブライ　～欲望の物語～

『烈火の炎』編――――完！

戦記と旧友と蒐集者（前書き）

これまでの、仮面ライダーブライ！

欲望から生まれた未知なる力、オーメダル！そこから生まれし欲望の怪物、グリード！

その欲望を軸にして戦う我刀流二十代目当主・鋼刃介と、平行世界より現れた異端なるグリード・鑢七実。

火影忍軍との共闘により、殺意と欲望の塊・天堂地獄を破壊した彼らの前に、新たなる戦いの運命が待ち構えていた！

対戦格刀剣火絵巻！

剣劇活劇欲望劇！！

短いながらも今此処に、第二章の開幕だ！

戦記と旧友と蒐集者

某日の深夜のこと。
トライブ財閥では、ある事件が現在進行形で起きていた。
そのトラブルというか事件を一言でいうならば・・・・・・窃盗事件だ。
財閥の本社ビルの特級武器庫に保管されていた十一本の刀のうち、三本が盗まれてしまったのだ。

――ヴィーン！！ヴィーン！！ヴィーン！！――

聞きなれてるようで聞き慣れていない警報の音がやかましく鳴り響く。

「おい、見つかったか！？」
「いや、まだだ」
「ったく、一体どこのどいつだよ？」

警備員達も慌しくビルの中を走り回っている。

そんな大混乱において、

「こいつは良い”お宝”だぜ。流石は四季崎の完成形変体刀・・・！」

整った顔立ちの上にあるモスグリーンの頭髪が特徴的な青年。
その腰には三本の刀が帯刀されている。

折れず曲がらず錆びず、というキャッチコピーが売りの直刀こと”絶刀『鉋』”。
此の世に斬れぬ物は無いと言われている絶対斬撃の居合刀こと”斬刀『鈍』”。
刀の毒気とされる四季崎記紀の残留思念を最も深く宿した黒刀こと”毒刀『鍍』”。

「刀語の世界」においては一本だけでも国一つ分の領土が買えるであろう国宝級の超芸術品とされている程の刀達である。

「にしても、絶刀と斬刀は兎も角、毒刀だけは取り扱い注意だな。
下手して抜き身のコイツを握ったらヤベーからな」

青年は変体刀の情報を前もって調べていたのか、毒刀だけは手が届きにくい場所に差している。
しかし、ビルの真正面でこんなものを腰に差していたら否が応でも目立つ。
幾ら屋内から出たばかりとはいえ、こんなところで無駄な口を叩こうものならば・・・・・・

「あ・・・！い、居たぞ！！」

ほら、こんな風に見つかる。

「鬱陶しい連中だなオイ？」

青年は機嫌が悪そうな表情になると、片手を上に向って伸ばした。

すると突然空間が歪み、灰色の超小規模なオーロラが発生し、青年はそこへ手を突っ込み、ある物を引っ張り出した。

「さて、出番だぜ・・・」

それは大きな黒い刀だった。
いや、刀というには些かデザインが奇抜ではあるが、それは紛れも無く刀だ。

青年はそれを使おうとした瞬間に、

『ヴォオオオ！！』

謎の怪人と遭遇してしまう。
それを観た警備員達は、

「な、なんだあの化物はぁぁ！？」
「に、逃げろぉぉ！！」

蜘蛛の子を散らすようにトンズラしていく。

「こいつは丁度良い。野次馬を楽しませる為に戦う趣味はないしな」

青年は目の前の異形に切っ先を向ける。

異形の外見は一言で言うならば、刀だ。
それも毒気を押し込めたような黒刀で積み重ねられたような外観をした怪人。

「なんか変わってるけど、ヤミーっぽいな」

『・・・・・・・・・』

青年は怪人（ヤミー）のことについても多少は知ってるらしい。

「それにしても誰が造ったんだ？こんなヤミーを担当するグリードなんて、観た事も聞いた事もないんだが」

しかし青年にもわからないことがあるらしい。

だがヤミーはいきなり無言である。まるで喋る必要がもう無いかのように。

（ん・・・？いきなり黙りやがって、なんだってん・・・・・・あれ？）

青年は漸く気がついた。

盗んで帯刀していた変体刀のうち、一本が無い事に。

暗闇と奴の黒い体躯ですこし気づくのに時を要したが、月明かりが直ぐに謎を解いてくれた。

『これは貰っていくぞ』

ヤミーの手に、鞘はおろか刀身さえも漆黒な毒刀『鍍』が握られている。

刀の鞘口から漏れ出る瘴気が異様なものを醸し出しているが、何故かこの刀のヤミーには似合っているように見える。

『否・・・返してもらう、というべきかな？』

「返して、もらう・・・？」

青年は首を傾げたが、ヤミーはそれに気にも留めず、思い切り跳躍

して都会の闇に紛れた。

「あ、毒刀！・・・ああもう、折角のお宝が！」

青年は悔しそうに腕を振り回したり地団太を踏む。
だが青年はすぐさま其れを止めると、

「絶対に尻尾掴んでやるぜ」

とだけ言って、残った二本の完成形変体刀を帯刀したまま、青年も暗闇に消えた。

＊＊＊＊＊

翌日の早朝。
鋼家の寝室にて、刃介と七実は布団の中で眠っていた――――

――パチっ――

と思われたが、七実は唐突に両目を開けて起き上がった。
布団から出た直後ということもあり、寝巻きである襦袢一枚きりの姿だが、七実はあまり気にする様子も無く刃介の静かな寝顔を優しげに見つめると、そのまま立ち上がって台所に向った。

かつての刃介は自分の食事は自分で用意していたが、あくまで一人暮らしだったのが理由だった為、自分より料理が上手い七実が来て

以降は彼女に一存するようになっていた。
傍からすれば刃介がサボっているようにも見えるが、しっかり者で働き者の七実にとっては意外と心地良い一時(ひととき)だったりする。

――グツグツグツグツ・・・・・・！――

ガスコンロに用意した鍋にある大量の水が沸騰してきた。
七実は間髪入れずに冷蔵庫から味噌を取り出し、更にはダシである煮干と鰹節も一緒に持っていく。

「えっと・・・こんなものですかね」

目測で味噌の量を加減し、熱湯の中に入れて混ぜ合わせる前に、ダシとなる煮干と鰹節を入れておく。そしてダシが出てきたのを待って味噌を入れて溶いて行く。
因みに鋼家の食卓では、味噌汁のダシは基本的に煮干・鰹節・貝類といった海産物で占められており、具なども入れずにダシと味噌の味を楽しむことを重点に置くことが多い。

だが真実を語ると、単に刃介の味の好みに合わせているというべきだろう。

そのまま勢いに乗って味噌汁を出来上がらせると、七実はまな板に置いておいたを包丁で切っていく。
今日は比較的簡単に済ませるつもりなので適当な漬物辺りであったりする。

すると、

「うっ・・・ふああ・・・」

刃介が起きて来た。

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

簡単な朝の御挨拶。

「すぐ出来ますから居間で待っていてください。御飯はもう炊けてますから、炊飯器から自分の分をお茶碗に入れてくれるだけでいいですから」

「そうか。じゃあお前の分も用意しとくよ」

「はい。お願いします」

簡素で何処にもありそうな会話を終えて、鋼家の食卓準備はどんどん進行していく。

刃介は棚から茶碗を二つ出し、炊飯器から杓文字で香しい白米を盛って卓袱台に置いた。ついでに二人分の箸と、茶を入れる湯呑みを用意することも忘れない。

後は七実が食事を盆に乗せて運んでくれば食事は始まったも同然だ。

「「いただきます」」

二人は爽やかな朝食を口を通して胃の中に放り込んでいく。

途中で七実が味の感想などを聴いたり、刃介が高評価を出すなど、一見すれば和風な一般家庭に見えないことも無い。

まあ、そんなこんなもあって朝食が終わり、二人共襦袢から普段着に着替える。

言うまでも無いが、刃介は黒い着流しに黒い布製の長ズボン。七実は死装束のような白い小袖だ。

実を言うと、この二人がさっさと食事を終えたのには訳が在る。

「刃介さん。ご自身のコアは今、何枚ですか？」

「変身用をあわせて十二枚。此間の戦いでコンボを連発した事だし、そりゃ増えもするよな」

「では、一度だけ試しに二人揃ってコアを全て取り込んで完全体になってみませんか？」

このような理由があったのだ。

実際のところ、刃介は当然ながらも、七実のコアのうち三枚は刃介が常に携帯していたので、基本的にコアは九枚の状態だったのだ。

しかし、刃介のコアが増えに増えたことを切っ掛けに、今後のことを考えて一度だけ完全体になろうと考えたのだ。

「んじゃ・・・行くぞ」

「はい」

七実はヤイバ・ツバ・ツカ、刃介はリュウ・オニ・テンバのコアを手に持ち、そのまま相手に向って投げあった。それによって三枚のコアは二人の体内に投入され、晴れて二人のコア枚数は十二枚となった。

二人はそのままグリードへと姿を変えた。

『・・・・・・・・足りませんね』

『ああ、何か満たされた気がしねぇ』

七実はベルトの部分も含めて肉体は完全復活している。
だが彼女も刃介も足らないと洩らした。肉体面は完全復活（変化）しているというのに、何が足らないのか。

因みに刃介のグリードとしての姿は、シンボルカラーは金色で、アクセントとして銀色のラインがあり、両目は赤黒くて鋭すぎる眼光をしている。頭には一本角が生えていて体のいたる部分に超が付く程の名刀や妖刀に匹敵するであろう鋭利さを備えている。
正直なところ、新劇場版のエヴァ初号機を想像してもらうと助かる。

『肉体的には満たされた感じなんですが、一体なんのメダルが欠けてるのでしょうか？』
『お前でもわからないんだな、キョトウ』
『幾ら私でも全知全能の神というわけではありませんよ、ガトウ』

キョトウ、ガトウというのは刃介と七実が自らのグリード体の名として、それぞれの血族が受け継いできた流派名をそのまま銘に据えたものである。
二人はそのまま人間体に戻って座布団に座り、顎や頬に手を添えて思案する。

するとその時だった、

――ピリリリリ！――

スマートフォンから着信音が鳴ったのだ。
刃介は懐からそれを取り出し、早速通話する。

「はい、もしもーし」
『鋼くん。私よ、シルフィード』
「ああ。何のようだ?また吸血か?」
『それもあるんだけど、別件で面倒ごとが起きたのよ』
「・・・・・それでまさか、来てくれってことか?」
『御名答よ』

刃介は少々怠慢味を帯びた表情をしだす。

「面倒だ」
『そう言わないでよ。きちんと報酬も払うから』
「――――――」

刃介は無言になって考える。

「刃介さん。行ってみては如何ですか?流石にシルフィードさんの頼みを無碍にすることはできませんし」

と、七実の一言がトドメとなり、

「わかった。良い酒と抓み用意しろよ」

引き受けることとなった。

ただし、この時の刃介はまだ知らなかった。
この決断が後になって、己が過去を振り返り、直視する道へ続いていく事には。

＊＊＊＊＊

トライブ財閥・会長室。

「いらっしゃい。要望どおり、上物のワインと御抓みを用意したわよ」

洋風な出し物とは打って変わり、シルフィード自身は和風な浴衣姿である。何時ものコスプレの一環なんだろうか。

因みに今日はバットも吹雪も会長室にはいない。なんでも、ＳＯＤＯＭの戦いの為他の仕事を溜め込む羽目になったらしく、今現在はデスクに向っているらしい。

「んで、俺らを呼び出す程の厄介ごととはなんだ？」

刃介は椅子に堂々と腰かけながら話しかける。

「なんだか結構、焦っているように感じましたが」

七実もチョコンと椅子に座り、行儀良くしている。

最も二人共、椅子の真ん前に在るワインをグラスに注ぎ、チーズを抓みにして一杯やっちゃうわけだが。

「実はね・・・・・昨晩において、我が財閥の武器庫からある物が三つ盗まれたのよ」

「ある物だと？」

「そう。貴方が以前に蒐集した、絶刀『鉋』――斬刀『鈍』――毒刀『鍍』の三本よ」

――ピクっ――

盗まれた物の名を聞き、刃介は眉辺りの筋肉を動かす。

「・・・・・盗んだ野郎は？」

「警備員達によると、モスグリーンの髪をした若い男だったそうよ。・・・ただしね・・・」

「なんだよ？最後まで言えよ」

シルフィードがすこし戸惑っていると、刃介が急かすようにしている。

「その盗人から更に、毒刀を取り上げた怪物がいたらしいわ。特徴から察して多分知性あるヤミーでしょうね」

「ヤミー？グリードが変体刀の中でも特に危険な毒刀を所有する意味があるのかよ」

毒刀『鍍』

完成形変体刀十二本の中で最も毒気が強いとされる黒い刀。

その毒気に当てられれば、”猛毒刀与（もうどくとうよ）”によって、自我を見失ったり、刀に宿った四季崎記紀の残留思念に肉体を奪われる恐れがある。

「そこへ更にね、鋼くんにとっては面白くない情報が一つ。ある意味、かなり不愉快なモノでしょうけどね」

「言ってみろ」

刃介は大して臆する事も無く、平然としている。

「じゃあ言うけど。聞いたところによると、ヤミーの外見はまるで

『黒い刀の集合体』ってことらしいわ」
「・・・・・・・・・は？」

刃介は思わず素頓狂な声を出した。
自慢ではないが彼はまだ一度もヤミーをつくっていない。
遣ろうと思えば何時でも出来るが、流石に時期尚早と思っていたのだ。

「それはつまり、刃介さんに些かながら疑いがかかっていると？」
「そうは言ってないわ。でも、これは鋼くん以外に刀のヤミーを造れる輩がいるってことの何よりの証でしょ。そのヤミーをふん捕まえれば、何か興味深い事実が判明するかもよ」

普通ではありえない事だらけだ。
それら全てを聞いた刃介は椅子から勢い良く（ワインとチーズを食した上で）立ち上がる。

「極めて了解だ」

結果として頼まれる事にした。

肉体面では兎も角、能力的に自分が完全変化しない理由もそこにあると踏んだのだ。
七実も刃介の所有刀として、主人の意見に反する気はなく、シルフィードから多種多様なデータを貰って大捜索の手伝いをすることとなる。

「それにしても、あの時・・・貴方の欲望という器の規格外さには心底驚いたわ」
「器・・・？」

「コアメダルを十八枚・・・・・・それを一気に解放して支配しきってしまうなんて、先代のオーズとはまるで真逆の結果ね」
「先代のオーズだと？」
シルフィードの言葉に疑問を抱く刃介。
「それは要するに、８００年前のオーズは、コアの力を使いすぎて自滅したと？」
「流石ね七実ちゃん」
七実の読みは当たった。
「それを説明するにはまずグリード・・・っていうか、オーメダルが造られたそもそもの理由から語らないとね」
「あ？人工生命体をつくる為じゃなかったのか？」
「なんというべきか・・・・・・グリード誕生の切っ掛けは、とある王が世界の支配者たる神に成り上がる為の力を求めたからよ」
シルフィードは一息入れて、
「８００年前のオーズとは、その王様」
グリードから見ても人間から見ても、まさに欲望の塊と言えたその欲望王は、一つの国を支配するだけでは満足できず、遂には地球そのものを我が物にすることを願うようになったのだ。
「私は当時まだ人間であり、様々な土地を旅していたフリーの魔術師だった。でも生来的才能にかなり恵まれていて、意外と名が知れていたのよ。そんなこともあって王様にスカウトされて、錬金術師と一緒にオーメダルの創造を行ったって訳」

刃介と七実は錬金術師というワードに大して驚くことはなかった。
現代科学の発達には錬金術が大きく関わっていたのは周知の事実であり、目の前に吸血鬼兼魔術師がいるのだからファンタジーな錬金術師が実在してもおかしくないと思えたのだ。

「多種多様な生命の力を宿したコアメダル。その全てを得ることで神に等しき存在になることを考えたのは王様だけじゃない。同じ目的ゆえにオーズに味方したグリードが一人・・・・・・それが、鳥類王アンク」
「・・・アンク・・・」

刃介は思い起こしていく。
右前腕部だけという不完全極まる状態で復活してしまった赤いグリードのことを。

「激闘に次ぐ激闘の中、戦いを更に激化させる者が突然にも現れた」
「それが・・・竜王か」

そこら辺については何となく予想がついていた。

「そして、その後に俺の御先祖様もご登場ってわけか？」
「そういうこと。正直言って、彼らを初めて見たときには度肝を抜かれたわね。だってオーメダル研究とは無関係である筈の日本からやってきたんだから」

シルフィードは両手をあげてリアクションをとり、いつものおちゃらけた態度になる。

「まあ兎に角・・・戦いは苛烈を極めたけどオーズとアンクは、ウ

ヴァ・カザリ、ガメル・メズールからコアを何枚か抜き取って弱体化させることに成功した。結果はそのまま二人の勝利となる筈だったけど、王様はアンクを見限ってトラクローを使い、彼から何枚かのコアを奪い取った」

刃介はその時、先代オーズはあくまでアンクのことを仲間でもダチ公でもなく、ただの都合の良い手駒や道具としか見ていなかったのだと確信した。

「そしてオーズはもぎ取ったコア全てを一気にスキャンして、その力について行けずに暴走か」

「そう。その際にオーズから発せられたフィールドに飲まれたグリード四体とアンクの右腕は、石化した上に石棺となった王の中に封印された。初代ブライとリュウギョクは咄嗟の判断で退避して、決着は日本に持ち越されることになったのよ」

シルフィードは一時置いてまだ語る。

「私はあの時の石棺と同型のを用意して鋼一刀に協力し、見事リュウギョクは封印された。四百年前にバカな武将のせいで封印が解けたけど、その時は我刀流十代目の奮闘で事なきを得たわ」

シルフィードが話し、途中でわざとらしく長い間をつくると、刃介はそのまま新しい疑問をぶつける。

「ちょっと待て。アンクの右腕？」

刃介は蛇のようなしつこさで疑問点を徹底的に追及する。

「説明しちゃうと、アンクはフィールド圏外に倒れて倒れてたんだ

けど、盗られたコアを求めて腕を伸ばした結果、精神と右腕だけ封印された。残った肉体の方は黒い包帯に巻かれてミイラみたいになっちゃったけどね」

「その身体、まだ残ってるんじゃないのか？」

下手な禍根を残しておくと面倒だと判断した刃介に対して、シルフィードはこう言った。

「確かに残ってるわよ。ただし、鴻上のバカが日本に持ち込んじゃったけどね」

「鴻上？・・・鴻上ファウンデーションのことか？」

いくら刃介でも、トライブ財閥と肩を並べる巨大企業の名前くらいはしっている。

「そうよ。あそこのバ会長がロストからコンドルコアを抜き取ったのが刺激信号になって肉体は覚醒しちゃったわ。八百年もの間、自らの片割れを求める欲望によって、子供みたいな自我まで芽生えた状態でね」

「（ロストって言うのは肉体の通称か・・・？）――ああ、面倒だ」

刃介は溜息混じりにそう言った。

「だからきちんと報酬は払うから元気だしてよ」

シルフィードは椅子から立ち上がり、刃介の双肩に手を置く。

「あの、シルフィードさん」

「何かしら？」

その時になって七実がこんな質問をしてきた。

「念を押しておきますけど、ここで刃介さんの血を吸ったりしませんよね」

「・・・・・当然よ♪」

（（今の間は絶対アレだ））

＊＊＊＊＊

町外れの郊外にある寂れた公園。

子供が十人か二十人いればそれでもう遊具は満席になる程度の公園。

そんな場所で七実は歌っていた。雑木林を背景にするかのように、

公園のベンチで・・・・・あの日あの時のように。

二番目の歌詞を、人の見る夢の如く儚い声音で歌い続ける今の七実を邪魔できる者など、例え今この場が人で溢れていようとも、そんな輩が現れることはないだろう。

「・・・・・はぁ」

歌い終えると、七実は短く溜息を吐き出す。

「聞く必要はないでしょうが一応訊いておきます。首尾はどうでしたか？」

「全然ダメっぽい」

ベンチで待っていた七実の前に刃介が歩み寄ってくる。

「全く、あいつから貰ったデータに基づいて地道な聞き込みなんて探偵紛いなことまでやってるっていうのによぉ」

「世の中は御都合主義とは最も無縁ですからね」

結論から言うと、会話の通り、有力な情報は得られなかった。

ヤミーどころか、こそ泥の一人のことさえ未だ不透明な状況だ。

「どうしたものかな？・・・このまま退散ってのはカッコ悪いしよ」

何よりシルフィードからは報酬の内容を聞けずじまいだ。

何を貰えるかが判らないのに働くなど、我欲漢である刃介らしからぬ事とも言える。

そんな時だった。

「オイ固羅！」

二人に投げかけられる乱暴な口調。

「何のようだ？」

「誰の許可得てこの辺嗅ぎ回ってんだ！？」

乱暴な口調の主は絵に描いたようなチンピラだった。

ただし雰囲気的には下っ端っぽいが。

「別に。ただ探し物があるだけだ」

「ほほぉ？」

（ああ、ウザったい）

チンピラの態度に心底刃介は面倒に思った。

「刃介さん。こんな人に構わず、他の場所を探しましょう」

「ああ、そうだ「ちょっと待った!!」・・・・・・なんだよ?」

七実が刃介に話しかけ、それに答える途中でチンピラが割り込んできた。

「今、刃介さんって・・・?」

チンピラの態度が一変した。まるで尊敬すべき貴い存在を目の前にしたような顔だ。

「まさか、鋼刃介・・・さん?我刀流の・・・?」

「確かに俺は二十代目当主の鋼刃介だが」

刃介がそう応答した瞬間、

――バッ!!――

「失礼いたしやした!!!」

行き成りチンピラが土下座してきた。

「あの、貴方は一体?」

「俺は”刀剣組(とうけんぐみ)”の者でございます!!」

「刀剣組、だと・・・・・・!?」

チンピラが属しているらしき組織名を聞いた途端、刃介の表情も一変する。

「そうか。まだ在ったのか・・・・・・」
「刃介さん。その刀剣組とは？」
「ああ、お前にはまだ言ってなかったな。・・・丁度良い機会かもしれん。おいチンピラ、啓示と雄一とは連絡はつくか？」
「へい！」
「ならさっさと連絡して案内しろ。今すぐにな」
「承知しやした！！」

チンピラは命ぜられるがまま、携帯電話を手にとって番号を押していく。

「五年振り、か。にしても、こんなトコで刀剣組とまた関わることになるとはな」
「その方達とはお知り合いなんですか？」
「旧友・・・ってところさ」

刃介は遠い昔を見るような遠い眼差しで青空を見上げた。
しかしその瞳には何処か虚しさがにじみ出ているようにも感じる。

「鋼さん。連絡がつきやした。案内しますんで、付いて来てください！」
「あぁ」
「私も行ったほうが良いんでしょうか？」
「もちの論だ」
「さあ、鋼さん、早く早く！！」

チンピラは子供のようにはしゃぎ、刃介の腕を引っ張っていく。

「追い待て、お前は子供かよ」

その時にはまだ気づかなかった。

――チャリン――

一枚のヤイバセルを懐から零してしまい、それが雑木林のほうに入っていき、

「ふーん。このセルメダル、あいつのか」

それを拾って刃介へと涼しい敵意を向ける一人の男の存在を。

＊＊＊＊＊

其処は一言で述べると、凄いという言葉が幾重にも似合っていた。

超大型マンションに匹敵しそうな広大なる土地、そこに建つのは何十人もの人間が寝泊りできるであろう和風の武家屋敷、二階建ての土蔵までもがあった。

高い塀で全体を囲まれ、唯一の出入り口は正面の大きな門だけ。

まさに大豪邸としかいいようのない造りだ。

最も、そこにすんでいる方達が・・・・・極道だというのが唯一にして一番のインパクトであろう。

まあ、よく映画やドラマに出てきそうな下級のチンピラ連中は屋敷に住む権利は無いらしく、信頼のある幹部連中が寝泊りしているようだ。

刃介と七実はチンピラの案内でこの屋敷の門前にまでやってきた。
そう、此処が刀剣組の本拠たる”刀剣屋敷”なのだ。

「・・・・・五年たって変わってると思ったが、凄すぎだろこりゃ」
「一体どんな悪い事をすればこうなるんですかね？」

第一印象がこれだった。

「では俺はこれで失礼します！」

役目を終えたチンピラはそのまま何処かへと去ってしまった。

――ギィィ・・・！――

内側から大門がゆっくりと開かれていく。
そうして現れた光景はというと、なんというか凄かった。

「初めまして。鋼刃介さん、鑢七実さん」
「我ら刀剣組一同」
「「「「「心よりお待ちしておりやした！！」」」」」

和服を着た幹部と思われる二人が挨拶すると、今度は後ろに控えていた大勢の黒服たちが屋敷への道をつくるように並んで頭を下げ、大声で挨拶をしたのだ。

「お、おう・・・」
「どうも皆さん、始めまして」

戸惑いを覚える刃介に対して、七実はどこまでも冷静だ。

「早速ですが刃介さん。啓示さんと雄一さんが屋敷の奥でお待ちです」
「二人共旧友との再会を心待ちにしておりやす」
「あ、ああ。案内頼むわ」
「「御意！」」
（何があって此処まで勢力拡大したんだ!?俺が抜けた五年間で何があった!?）

刃介は色々とメチャクチャに心の内でツッコみまくった。

まあ、そこら辺はさて置き、幹部二人に案内されるがまま、二人は屋敷の一番奥の部屋に通された。
そこは実に時代がかっており、江戸時代や戦国時代における一国一城の主の間を想像させた。
その部屋の上座には二人の人物が座っていた。

「久しぶりだな、刃介」
「まさかお前が、こんなに美人な大和撫子を恋人に連れ添ってやって来るとは思わなかったぞ」
「俺としてはお前らの状況にビックリ仰天したよ。啓示、雄一」

上座と下座で向かい合い、五年ぶりの再会を果たす。

上座の右に座っている男の名は、榛原啓示（はいばらけいじ）。眼鏡をしても鋭い眼つきを隠せない、なんだか冷たい印象を覚える男だ。

上座の左に座っている男の名は、本山雄一（もとやまゆういち）。全体的に大柄な体格で、顔も何処か人望味を感じさせる任侠的な男である。

ここまで来て何を今更と思うだろうが、実は刃介もまた、嘗ての刀剣組の一員であり、創設者三人の内の一人なのだ。

今現在、とある一件ゆえに刀剣組から離れてはいるが、刃介の存在は創設者にして現組長・本山雄一と組長補佐・榛原啓示の二人と同等に尊敬されているらしいのだ。

「まさか、昔は自警団紛いの刀剣組が極道クラスにまでアップしているとはな」

「おや、始まりは意外と小さいんですね」

と七実と刃介が洩らすと、本山は目元をキツくした。

「刃介よ。言っとくが刀剣組はあくまで任侠集団だ。極道などという形容の仕方はいただけないな」

「確かに俺たちは極道（ヤクザ）と近い存在だが、一緒くたにされるのは感心しない」

「・・・・・すまない」

後々のこと考えて、とりあえず謝っておく刃介。

そこへ榛原が、

「んで、此処に来た用件は何だ？一度は組織から抜けた男が、どの面さげて来たんだ？まさか組に復帰したいなんて横着は言わないよ

な」
「此処に帰属する気は無い。ただ単に力を貸してもらいに来ただけだ」
「それこそ横着なんじゃないか？」
キツい表情と声で刃介を威嚇するように睨み付ける。
「こら待て榛原。兎にも角にも、話だけでも聞いてやろう」
「ありがとよ雄一。・・・実はな――」
そうして刃介は話し始めた。
オーメダル関連のことは隠した上で、自分がトライブ財閥と深く関わっていて、財閥からとある泥棒が盗んだものを取り返すようにという頼みを受けているということまでを話した。

＊＊＊＊＊

此処は刀剣屋敷とは真逆の方角にあり、街の最果てに当たる深い森の入り口。
刀剣組の情報によると、この近くにモスグリーンの髪をした男がいたということなのだ。
まあ言うまでもないだろうが、刃介と七実は組長である本山から正式に刀剣組に力を貸してもらえることになったのだ。
「よし、適当に爆竹でも放り込んでみるか」

「第一声がそれですか？」

本当に爆竹の束とライターを手に持つ刃介に七実がささやかにツッコム。

「燻り出すんだよ。気にするな気にするな（どうせならロケット花火も打ち込んでやりたかったが）」

完全にヤンチャ坊主というより不良青年の考えである。

「あらよ」

着火された爆竹。それらの導火線が本体に届く前に、刃介は森の中に投げ入れた。

彼の腕力もあってか、爆竹はけっこう深いところにまで入っていき、そして――

――バチバチバチバチバチバチバチバチバチバチバチバチバチ！！！！――

大量の爆竹が小さな火花と爆音が森中に狂い咲かせた。

これがテレビだったら”良い子は真似してはいけません”というテロップやプラカードを出すべき場面だろう。

「ってうぉああ！！？」

そうして、一人の青年の驚きに満ちた声が響き渡ってきた。

「ほらな？」
「・・・・・・・・・」

自慢げにする刃介とは裏腹に七実は眉をしかめている。

「オイ誰だよ！？真昼間から爆竹投げやがったのは！！？」

森の置くから現れたのは情報どおり、モスグリーンの髪をした青年だった。

「泥棒野郎にんなコト言われたくないがな」
「泥棒・・・？ああ、トライブ財閥の刺客か」
「そんなトコだ。『鉋』と『鈍』を返却してもらうぜ」
「嫌なこった。つーか返す気があるなら最初から盗まない。俺としてはお前の方に聞きたいことがあるんだよ」

青年はそういったポケットから一枚のメダルを取り出した。
刀身が描かれた一枚のメダルを。

「それは俺のセルメダル・・・？」
「拾った時に俺は思った。俺から『鍍』を横取りしたのはお前のヤミーじゃないかってな」
「少なくとも俺のヤミーじゃないが、その言い振りからして俺がグリード化してることは調べがついてるようだな」

刃介は特に焦る事もなく、ブライドライバーを装着した。
つまり、目の前の青年に戦う術があると判断したのだ。

「結局は腕っ節か」

青年はそういうと何処からか黒い奇妙な刀を取り出し、別のポケットから一枚のカードを取り出す。
刀の刀身には金色のカバーをスライドさせて装填口を露にし、そのカードを入れた。

≪ＫＡＭＥＮ（カメン）　ＲＩＤＥ（ライド）≫

青年は電子ボイスの鳴った黒い刀を手に持ち、切っ先を上方に突き出すように構えてこう発音する。

「変身！」

≪ＤＩ（ディ）－ＲＵＤＯ（ルード）≫

柄のスイッチを押した瞬間、切っ先からは九枚の黒いプレートが上空に射出され、鍔部分からは立体映像装置のように光が漏れ出して幾つもの灰色な虚像が生み出される。
虚像は青年の周囲を舞うように動き続けるが、次第に青年の肉体と重なって強靭な鎧を形成する。そして、上空にある九枚のプレートは頭部へと突き刺さっていき、灰色だった鎧を深遠なブラックへと染め上げていく。

「（何処の変身システムだ？）」

刃介もそれに合わせてコアメダルを三枚、ローグレイターに投入して傾ける。そしてローグスキャナーで読み取った。

「変身！」

≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＥＮＢＡ≫

≪RI・O・TE!RIOTE!RI・O・TE!≫

仮面ライダーブライ・リオテコンボ。

「おい真っ黒クロ助。お前の名はなんだ?俺の名前や素性はとっくに探ってんだろ?」

「俺か?・・・俺の名前は坂木了(さかきりょう)。またの名を、仮面ライダーディルード」

ブライの初歩的質問に黒い剣士、ディルードはそう名乗った。

「まあ開闢者とも呼ばれてるんだが、好い加減性に合わない呼ばれ方はうんざりなんだ。だからさ――」

ディルードは己が得物、ディルードライバーの切っ先をブライに向けて、

「――世界の蒐集者(しゅうしゅうしゃ)ってのを名乗ってる。気軽に蒐集者(コレクター)とでも呼んでくれ」

次元を越えて、二人の剣士の斬り合いが始まる。

＊＊＊＊＊

刀剣屋敷の組長補佐室。

そこでは榛原が実に機嫌を悪そうにしていた。

元から目付きが鋭いせいもあり、今なら一にらみで子供を泣かせそ

うな感じだ。

「くそっ。雄一の奴、なんであんなアッサリと協力しやがったんだ？」

どうやらこの男、本山が刃介に対して協力的な姿勢をとったのが気に喰わなかったようだ。

「今の刀剣組にもう刃介（アイツ）は要らない。だが、この件が尾を引いて舞い戻りでもしたら・・・！」

榛原は危惧していた。刀剣組に居た頃における刃介が如何に人を引き寄せていたか。

今はどうかは知らないが、もし仮に万が一このまま刀剣組に返り咲いた場合・・・・・・。

「だが・・・刃介を始末するのは極めて難しい。まずはアイツに協力して、奴が刀に気を取られてる隙に・・・・・・！！」

そして密かに、榛原の心に潜む暗鬼が蠢き出す。

「この俺が刀剣組唯一の長となる」

欲望・・・・・・それは人の心を容易に突き動かす、生きる原動力。

召喚と暗躍と昔話（前書き）

遂にアクセス累計が１０００００を突破いたしました！
これからも皆様の応援を糧に頑張って参りますので、今後とも愛読のほど、よろしくお願い致します！

召喚と暗躍と昔話

とある街の最果てにある森の出入り口。
そこには二人の剣士が向かい合っていた。

一人は全身が黒色の鎧で頭には九枚のプレートが差し込まれていて、手に持つ刀まで漆黒という黒一色ぶり。世界の蒐集者を自称する仮面ライダーディルード。

もう一人は、胸のローグラングサークルに描かれた絵柄と色彩に従い、龍の頭、鬼の腕、天馬の脚をした血錆色の欲望戦士。我刀流二十代目当主の仮面ライダーブライ。

そして、この二人の戦いを静観する一人の小柄な女性。死装束のような白い小袖を着ていて、その美しさには無機物的な印象を覚える存在――虚刀流の異端児こと鑢七実。

「そんじゃあ、おっ始めるとしようや！！」

――ビュン！――

ブライは早速ラインドライブを通じてテンバレッグに生命エネルギーを伝達させ、思い切り跳躍した。低空的跳躍なので、その軌道は走幅跳のように見える。

「虚刀流『薔薇』！」

しかしそれは当然のことながら酔狂ではなく、ちゃんと跳び蹴りという形で技を繰り出すためのものだ。

「おっと！」

ディルードは咄嗟にディルードライバーを盾にしてブライの蹴りを防いだ。

「今度はこっちの番だ」

ディルードはサイドバックルにあるカードホルダーから一枚のカードを取り出し、ディルードライバーに装填。

≪ＡＴＴＡＣＫ（アタック）　ＲＩＤＥ（ライド）・・・ＳＨＯＣＫ（ショック）　ＷＡＶＥ（ウェーブ）≫

ディルードは掛け声も出さず、そのまま柄を握って刀身を勢い良く振るった。

それによって刃からは次元エネルギーの衝撃波が飛ばされる。

「っ！魔刀『釦』！」

ブライは両腕の篭手を鞘としていた二本の刀を手にし、ディルードショックウェーブを防ぐ。

正確に言うと、衝撃波を魔刀で切り裂いて防いだのだが。

「ヒュー！やるじゃん！」

「ムカツク口笛をありがとよ」

互いに嫌味のような皮肉のようなものを言い合い、戦いはさらに激化する。

≪ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ≫

「同じ剣士同士ならどうだ？」

≪ＫＮＩＧＨＴ・ＢＬＡＤＥ≫

カードを装填し、ディルードライバーを逆手に持って柄のスイッチを押すと、鍔の部分から光が溢れ、幾つもの赤・青・緑の虚像を作り出す。虚像が忙しなく動き、重なる事で実体を持って現れた。

蝙蝠を模したダークブルーの西洋の騎士甲冑型アーマーを身に纏い、腰にはレイピア型の翼召剣ダークバイザイーを帯刀した鏡面の騎士（仮面ライダーナイト）。ヘラクレスカブトのような仮面とスペードマークを模した銀色のアーマー、アイアンブルーのスーツを着込み、腰のホルスターには醒剣ブレイラウザーが収めてある蒼雷の剣士（仮面ライダーブレイド）。

西洋風ではあるが、紛れも無くその容貌は剣士のものだ。

「へっ。面白いじゃねぇか。おい、七実」

「はい」

「この勝負、手ぇ出すなよ」

「了解しました」

七実が加勢すれば直ぐに決着がつくのは火を見るより明らか。だが刃介は未知なる敵との戦いを楽しむ為、あえて協力は無しとすることにした。

「メダマガンとシェードフォーゼでいくか」

刃介は移動する為に使ってきたシェードフォーゼにめがけて一枚のセルメダルを投げ入れた。

投入口にセルが見事入った瞬間、

≪ＭＯＢＩＬＥ　ＭＯＤＥ≫

チャリンという音が鳴ってメダルが入ると、シェードフォーゼはバイク形態のベーシックモードからロボット形態のモビルモードに変形する。

それと同時に身体からメダマガンを機体外へと出した。ブライはそれを素早く手に取る。

「へ～。なんかファイズっぽくていいな」

「ファイズってのは今一知らんが、褒めてくれてありがとよ」

――チャリン、チャリン、チャリン――

――ガシャン！――

ブライは硬貨投入口（メダルインジェクション）に三枚のセルメダルを投入してレバーを引く。

するとクリスタルユニットにセルメダルが連なって移動する。

「漆黒剣士の相手をしろ。俺は西洋剣士どもの相手をする」

――コクっ――

シェードフォーゼは命令を理解したらしく、首肯してみせた。

「そこのロボットが相手か、いいぜ。そっちのお手並み拝見といこうじゃねーか」

ディルードはこれといって反発せず、そのままシェードフォーゼとの戦いに入った。

「さーてと、メダルチェンジだ」

ブライはベルトにある三枚の内、二枚のコアを取り外し、別のコアをセットする。

そしてスキャンしてみせた。

≪ＲＹＵ・ＴＳＵＢＡ・ＴＳＵＫＡ≫

それによって腕と脚が金色に変わった。

亜種形態の一つ、リュウバカだ。

ブライが左腕を立てると、胸のサークルからはヤイバカコンボの際のローグラングサークルを模した金色の手甲型武器、ヤイバスピナーが出現して装備された。

「手始めに銃撃の嵐をかわしてもらおうかな？」

――ズギュンズギュンズギュンズギュンズギュンズギュン！！！――

「「っッ！？」」

遠慮会釈の欠片さえ見れない程に連続した射撃。

一見かなり乱暴ではあるが、命中するであろう箇所は仮面や間接だったりと、地味だが確実にダメージを与えられる場所に集中している。

ナイトはＶバックルに嵌っているカードデッキから一枚のアドベントカードを引き出す。

ブレイドもブレイラウザーからラウズカードを十三枚収められるオープントレイを扇状に展開し、その内の一枚を手に持った。

ナイトは手にしたアドベントカードをダークバイザーの柄部分にベントイン。

ブレイドはラウズカードをブレイラウザーのスラッシュ・リーダーにラウズする。

≪GUARD（ガード） VENT（ベント）≫

≪METAL（メタル）≫

カードが認識された際、ブレイドはスペードの7に相当するトリロバイトアンデッドが封印されたカードの力により、全身が鋼鉄のように硬化するトリオバイトメタル。

ナイトは契約した蝙蝠型モンスターのダークウイングを背中の防御兼飛行マントとして合体させるウイングウォールを発動。

見事にメダマガンの連射を防ぎきることに成功する。

≪TRICK（トリック） VENT（ベント）≫

ナイトは新たなカードをベントインすると、本体を含めて三人に分身する。

シャドーイリュージョンという技だ。

「だったらこっちも、忍法――影分身」

ビュンビュンという風を斬り裂く音が聞こえると、ブライも本体を含めて三人の分身した。

≪≪≪ＳＷＯＲＤ（ソード）　ＶＥＮＴ（ベント）≫≫≫
≪≪≪ＦＩＮＡＬ（ファイナル）　ＶＥＮＴ（ベント）≫≫≫

空から突然大型の突撃槍ことウイングランサーがナイトの手中に現れて収まった。
ナイトはそこで一気に勝負をつけるきなのか、必殺技を発動する切札をベントインする。

「「「ハアッ！！」」」

三人のナイトは空中を天高く飛び上がって見せた。
ウイングランサーの刃先を下に居るブライに向けると、背中にいるダークウイングが翼を大きく広げ、漆黒の飛翼がナイトの首から下を包んでドリル回転しながら急降下してくる。
これがナイトの必殺技たる飛翔斬（ひしょうざん）（ファイナルベント）だ！

「「「フ・・・ッ」」」

しかしながら三人のブライは慌てることもなく、

≪≪≪ＴＲＩＰＬＥ・ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫≫≫

スキャナーでクリスタルユニットのメダルを読み取った。
そして銃口の先にある目標を見据えて、

「「「ブライクラッカー」」」

――バギュン！！――

引き金をひき、空間を敵ごと破砕した。

――ドゥガァァアアァァン！！――

破砕された空間こそは世界の修正力直っても、ナイト達にまでは及ばずで大きな爆発が起こった。
それと同時にブライは元の一人に戻った。

「さーってと、次はお前だな」
「くッ・・・！」

ブレイドはブライに指差されてブレイラウザーを構える。
そこからオープントレイよりラウズカードを取り出してラウズする。

≪ＳＬＡＳＨ（スラッシュ）≫
≪ＴＨＵＮＤＥＲ（サンダー）≫
≪ＬＩＧＨＴＮＩＮＧ（ライトニング）　ＳＬＡＳＨ（スラッシュ）≫

青き雷を纏う刃。
ブレイドはそれを手に此方へ全力で駆けて来る。

「ハァァアアァァァ！！」

スペードの2たるスラッシュリザードとスペードの6たるサンダーディアーを組み合わせて発動する下級コンボ技であるライトニングスラッシュ。
ブレイドはそれを突き技として放とうとしたが、虚刀流を得たブライからすれば突きだろうが薙ぎだろうが大差は無い。

「虚刀流」

――ガシッ――

「菊」

――バギン！！――

「ッッ！！？」

ブレイドは驚愕のあまり声が出なかった。
ブライは特殊能力の一つも使わず、ただブレイラウザーの刀身を背中と両腕でガッチリと挟んで掴み、梃子の原理を応用して折ってしまったのだから。

「こっちもトドメといくか」

ブライは左腕のヤイバスピナーのヤイバフェイスを開けると、七枚のセルメダルが収まったオークラウンが露出する。その内の三枚を取り外し、ブライドライバーにある三枚のコアを代わりに嵌め込み、ヤイバフェイスを閉じる。

一方ブレイドのブレイラウザーはラウズ機能までは失っていない。
急遽に他のカードをラウズしていく。

≪ＫＩＣＫ（キック）≫
≪ＴＨＵＮＤＥＲ≫
≪ＭＡＣＨ（マッハ）≫

「はぁぁぁ・・・！」

ブレイドの背後には三枚のラウズカードが、絵柄の中でアンデッドたちが動き回った状態で現れ、ブレイドの身体に吸収されていく。

≪ＬＩＧＨＴＮＩＮＧ（ライトニング）　ＳＯＮＩＣ（ソニック）≫

スペード６の電力を軸にして、スペード５のキックローカストで脚力を、スペード９のマッハジャガーで走力を強化して、

「ダァァアアア！！」

全力で走るブレイド。あまりのスピードにブライを追い抜いてしまうが、その反動を利用して跳躍し、そのまま空中一回転して赤熱するほどの蒼雷を宿した右足を突き出す。

「ウェェェェイ！！」

ブレイド・ノーマルフォームでの最強キックことライトニングソニック。

――カチャ――

ヤイバスピナーのリミッター解除装置であるフォースドロワー引くと、スキャナーをリボルストーンとスキャニングフィールドの上に置く事でオークラウンが高速回転し、短時間で七枚のメダルがスキャンされていく。

そして、

≪ＲＹＵ・ＴＳＵＢＡ・ＴＳＵＫＡ！ＧＩＮ・ＧＩＮ・ＧＩＮ！≫
≪ＧＩＧＡ　ＳＣＡＮ！≫

遂に発動するギガスキャン！
ヤイバスピナーのオークラウンに嵌った七枚のメダルがそれぞれの輝きを放ち、回転していることで光の渦を成していく。

「せぃあぁぁ・・・・・・！！」

静かに唸るブライ。
左腕のヤイバスピナーは光の渦を宿したまま、一部の光が血錆色に変化し、まるで龍が吐く息吹のようでいて刀の如き形状となっていく。
ブライは左腕を右方へと限界まで引っ込めて力を溜め込み、

「ウェェェイ！！」
「ッ！」

獲物が自分から飛び込んできた瞬間に、

「チェストーーッ！！」

――ズバッッ！！――

居合い斬りを連想させる動きで刃を振り、ブレイドの身体を一刀両断した。
傍から見れば、ヤイバスピナーから生えた血錆色の光刃が、ブライが腕を振るうと同時に急激的速度で伸び、ブレイドを見事に切り裂

いたかのようにしか見えなかっただろう。

「ふぅぅ」

ブライは敵を見事に倒し、一息ついた。

「シェードフォーゼ、もういいぞ」

ブライがそういうと、シェードフォーゼはディルードから離れて

≪ＢＡＳＩＣ　ＭＯＤＥ≫

バイク形態のベーシックモードに変形した。

「一々スイッチじゃメンドくせぇし、シルフィードに一旦預けて音声入力付きにしてもらったのは正解だったな」

「へー。お前ってコアメダル以外にかなりのお宝持ってるみたいだな」

「言っとくがやらねぇぞ」

ブライはディルードに釘を刺しておく。

「傀儡は片付けた。次はお前自身だな」

「だったら新しいカードを試すとするか」

ディルードはそういうとカードホルダーからカードを一枚取り出す。

≪ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ・・・ＣＨＡＩＮ（チェーン）　ＳＬＡＳＨ（スラッシュ）≫

「ほいよっと！」

――ジャリ！――

ディルードは刀身を全力で振るう。
するとディルードライバーの刀身は鎖で繋がった連結刃のように伸びていくではないか。
物理的な中距離・遠距離攻撃や捕縛にも利用できる応用性の強い技、ディルードチェーンスラッシュだ！

「危ねっ！」

ブライはそれをギリギリで避けた。

「だったら今度はこいつだ！」

≪ＺＥＵＧＬＯＤＯＮ・ＭＥＧＡＬＯＤＯＮ・ＴＡＣＨＩＵＯ≫
≪ＺＥ・ＺＥＭＥＴＡ！ＺＥ・ＺＥ・ＺＥＭＥＴＡ！≫

ゼメタコンボへとメダルチェンジを果たし、両腕に持った水刀『鑓』を振るって刃部分を飛ばした。
無論、刃と本体は鎖で繋がっているので、二本の得物と一本の連結刃は絡み合うこととなる。

それによって生じる隙を見逃すブライではない。
七の構え『杜若』から一気に全力疾走して、今度はディルードの目前で零の構え『無花果』となり、予備動作も最小限にしてこの奥義を繰り出した。

「虚刀流！『柳緑花紅』！」

――ズン・・・ッ！――

「ぐは・・・・・・ッ！！」

衝撃を内部に伝導させる鎧通しの拳。
変身したことで強化されたそれは、間違いなく坂木了という本体に届いた。

「マジ、か・・・よ・・・？」

「大マジだよ、バカ野郎が」

胸を押さえながら後ずさり、アタックライドの効果をキャンセルしてディルードライバーを地面にさすことで杖代わりにするディルード。

「あーイッテェ・・・・・・此処まで遣ってくれたのは廻くらいのもんだぞ・・・・・・」

「その廻ってやろうのことは知らんが、決着は流石についたろ」

「確かに俺の負けだ。でもな、肝心の変体刀の在り処を易々と話すと思うか？」

「大丈夫ですよ。今此処に絶刀と斬刀を持ってきましたから」

「・・・・・・・・・え？」

ディルードは突然介入してきた第三者の声にかなりズレた声を出す。

振り返ってみると、そこには七実が絶刀『鉋』と斬刀『鈍』を手に持っているのが見えた。

「貴方達が戦いに夢中になっている間、そこの森の中の土中に埋まっているのを発見し、掘り起こさせて頂きました」

七実は屈託のない笑顔でそういった。

（ヤバ・・・あの女の存在を完全に忘れてた・・・）

ディルードは流石に傷の痛みも薄らいできたと思った瞬間、自分の不注意に頭が痛くなってきた。

（こりゃ取り返すのは難しいな・・・・・・だったら）

ディルードは変体刀の奪取は無理と感じると、

≪ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ≫

「鬼共の大行進だ！」

≪ＨＩＢＩＫＩ・ＩＢＵＫＩ・ＴＯＤＯＲＯＫＩ・ＫＡＢＵＫＩ・ＴＯＵＫＩ・ＨＡＢＡＴＡＫＩ・ＮＩＳＨＩＫＩ・ＫＩＲＡＭＥＫＩ≫

召喚されたのは八人の仮面ライダーという豪華出演ぶり。

しかも全員音撃戦士という状況だ。

「あと宜しく！」

≪ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ・・・ＩＮＶＩＳＩＢＬＥ（インビジブル）≫

ディルードインビジブルの効果によって透明になり、気配も完全に透過したディルードは姿無く其の場から撤退した。

「はぁ。・・・アイツには別のお宝のことで説教してやろうかと思ったが、やっぱ俺のイメージに合わないし、止めとくか」

ブライは気だるそうにそういった。

≪ＫＡＢＵＴＯ・ＨＡＣＨＩ・ＩＮＡＧＯ≫
≪ＫＡＢＵ・ＫＡＢＵＫＡＢＵＨＡＣＨＩＮＡ！ＫＡＢＵＨＡＣＨＩＮＡ！≫

だが彼はメダルを換装し、コンボチェンジを行う。
甲虫の角、蜂の針、蝗の脚を備えた緑の昆虫王者、カブハチナコンボ。

「七実、お前は一番ド派手なのを殺れ。俺は残り七人を一気に始末する」
「極めて了解」

そして七実がキョトウに変身すると同時に、カブハチナコンボの力でブライは七人に分身してみせた。
ちなみに一番ド派手な奴とは歌舞鬼のことである。

『虚刀流最終奥義』
「「「「「「「真庭忍法！」」」」」」」
二人（はちにん）は間髪を入れることなく、弟が編み出した技、戦友から盗見取った技を繰り出す。

『七花八裂』
「「「「「「「劉殺生！」」」」」」」

「別のお宝か・・・・・・あいつら見張ってれば、その答えが見つかりそうだな」

そんなブライとキョトウを、撤退したはずのディルードが、遠方から二人の戦いを眺めつつ、一人で呟いていた。

＊＊＊＊＊

トライブ財閥の会長室。
会長専用の机の上で、緑色のバッタカンドロイドが両の複眼を光らせていた。

『おいシルフィード』
「聞こえてるわよ」

シルフィードは椅子に座りながら刃介と通信する。

『一応、絶刀と斬刀を回収してきた。一旦「鍍」の情報集めに一っ走りするから誰か来させろ』
「良いわよ。適当に誰か送っとくわ」
『頼んだぞ』

そうしてバッタカンドロイドはカンモードに戻る。

シルフィードはカンモードのバッタカンドロイドをもう一度バッタメカモードにして、ある人物と連絡を取る。

＊＊＊＊＊

トライブ財閥社員寮。
十階建ての一般的なマンションのような造りをしているこの社員寮は、和風の部屋と洋風の部屋の二種類が存在しており、一部屋分の大きさも中々で一人暮らしや二人暮らしならば充分なモノである。

そんな社員寮の和風部屋で寝泊りする一人の雇われ忍者が居た。
名前は鋼金女。苗字の通り、刃介の妹であり、仮面ライダーチェリオである。

フリーの暗殺者をしていた頃は長期の住居を持たず、長くて一年、短くて十日程度など、新たな依頼を受諾する度に住む部屋や住居を変えていた。勿論それは闇社会において名の売れた殺し屋などという職業についているが故、逆に自分の命を狙われないようにする為の処置だ。

しかしながらトライブ財閥に雇われるにあたって、オーメダルに関する戦いが終わるまでは社員寮で暮らすように、というのが雇い主であるシルフィードの要望だった。
理由は簡単。監視というのもあるが、手元に置く事で様々な厄介ごとの解決も頼む為である。

『というわけで、頼めないかしら？』
「兄さんも妙なことを引き受けてしまいましたね」

金女はバッタカンドロイドを手に、シルフィードと交信している。
因みに暗器の手入れ中だったのか、木製テーブルの上には苦無や手裏剣が屯している。
しかしながら、殺伐としているテーブルとは裏腹に、この畳や障子がある純和風の部屋の棚や物入れにはマンガ・アニメＤＶＤ・ファンシーグッズ・可愛い系の縫い包みがあったりする。

「わかりました。とりあえず刀を一旦回収してから兄さんと義姉さんと合流します」
『ありがとう』

通信終了。
金女はすぐさま普通の浴衣姿から忍び装束に着替えた。
無論、服に暗器達や忍具を仕込む事も忘れない。

「休息タイム終了。任務タイム開始」

一人の女忍者が、新たな運命の歯車として加わった。

＊＊＊＊＊

刀剣屋敷。

「どうだ首尾は？」

本山は第一声でそう訊いて来た。

「悪くない。上々だな」

刃介は当たり前だと言わんばかりの口調だ。

「本山さん。不躾で申し訳ありませんが、残る毒刀『鍍』の情報は？」

「ああ、すまんな。流石に裏社会の情報網でも、そんな怪物のことまでは引っ掛からんのだ」

「そうですか」

七実は残念そうにした。まあ表層上だけだが。

元よりメダルと無関係な組織が其処までの働きが出来るなどとは、七実は最初から期待していない。

だがしかし！

「雄一、その件ならこの榛原啓示が尻尾を掴んだぞ」

と榛原が部屋に突然入ってきながら堂々と言ってきたのだ。

「尻尾を掴んだとは、どんな情報を捕まえてきたんだ？」

「ああ、刃介。お前たちの追う怪物、ヤミーは廃棄された工事現場近くに居るらしい。俺の直轄が聞いてきた情報だ」

榛原はそのまま廃棄工事現場の場所を口頭で伝えた。

「わかった、早速行く事にしよう」
「ではまた御会いしましょう」

刃介と七実のコンビは脚早に行ってしまった。

「昔と変わらず、忙しい奴だな」
「全くだな。・・・・・ところで雄一」
「ん。なんだ啓示？」

榛原は座ったままの本山に立ったまま話しかけているので、必然的に上から視線を下に降らせている。

「刀とやらのことは、刃介のことだから直ぐに済ませるだろう。もう我々が力を貸すこともあるまい。逸早く本来の仕事に戻るべきだ」
「・・・・・ああ、そうだな」

本山の表情はすこし間を置いてキリっとしたものになる。

「今晩の列車に乗り、田舎辺りで他の組連中との手打ち式だったか」
「下手して遅れでもしたら、刀剣組は一発で終わりだ。くれぐれも時間には気をつけてくれよ」
「はいはい。わかっているよ」

本山はそういうよ立ち上がり、自分の部屋に戻っていった。
それを確認した榛原は、パチっと指を鳴らす。

すると戸を開けて入ってくる屈強な黒服が幾人と和服を着た幹部が一人。

「同志諸君。いよいよ決行の時が来たぞ。今のうちに最後の覚悟っ

て奴を決めて来い」
「「「

――パチ・・・ッ――

「ん？」

指先に妙な感覚を覚えた。

不信感を覚えた金女はスカート部分を少し捲り、両の太腿に巻きつけてあるベルトに収納されている投擲用の小型棒手裏剣を二本取り出す。なお、この棒手裏剣は下向きに収納されているが、磁石を仕込む事によって誰かの手が無ければ磁力で落ちないようになっている。

「それ」

金女が物は試しにと投げると、

――ビリビリッ！ビリビリッ！！――

棒手裏剣は変体刀を梱包している包みに触れると、高圧電流の餌食となった。

「不案（あんじず）・・・・・これなら確かに安全ですね」

金女は念の為にもう一度棒手裏剣を投げて電流が起こるかどうかを確かめてから刀を回収した。

「さてと、後はこれを財閥の武器庫に届けて兄さん達と合流するだけですね」

金女は『鉋』と『鈍』を手にバイクに歩み寄った瞬間、

『今代当主の妹にして、異端な相生忍者よ』
「誰ですか？」

突然誰かが話しかけてきた。
姿は見えないが、声質には人間性が一切合財感じられない。

『その二本は持って行こうが行くまいが結構だが、実兄が今身を置いてる状況を確認したらどうだ？』
「・・・・・・・・今一度問います。何者ですか？」
『我が名はメッキヤミー。――では鋼金女よ、さらばだ』

金女は黙っているかと思いきや、質問してきた。
すると、謎の声は自らをヤミーと名乗って姿を見せぬまま何処かへと言ってしまった。

「不遅（おくれず）――これはウカウカしていられませんね」

金女はバイクにあるスイッチを押すと、ライドベンダー自販機型のマシンベンダーモードとなった。

――チャリン――
――ピッピッピッピッ――

セルメダルを投入し、ボタンの四っつを一定の順番で押した。
すると、

――♪～～～♪～～～♪～～～――

≪ＰＴＥＲＡ・ＣＡＮ≫

奇妙なメロディが流れ出し、紫色のジュース缶が何十個も出てきたのだ。
金女はその内の一個を手に取り、プルタブスターターを開けた。

『プテラ！』

すると紫の缶はカンモードからプテラメカモードに変形する。
最近になって開発された恐竜型カンドロイドの一種、プテラカンドイドだ。

「貴方達はヤミーの動向を探ってください。ついでに刀剣組もね」
『プテラ♪』

プテラカンドロイド達は快諾してくれた。

「不外（はずれず）――当たりの情報を期待しています」

――チャリン――
――ポチッ――

金女はライドベンダーをマシンバイクモードに変型させると、ヘルメットを被ると同時に跨り、

――ブゥゥウウゥゥゥゥゥン！！――

完成形変体刀たる絶刀『鉋』と斬刀『鈍』を積みながらエンジン音を轟かせた。

＊＊＊＊＊

???

何処とも知れぬ廃工場。そこにメッキヤミーは来ていた。
近頃は幽霊屋敷のように思われている場所だけあって余計に無駄な雰囲気が出ている。

そこにはメッキヤミーともう一人が居た。

「んーー」

和服を着用しているが灰色の髪を隠すように頭に編み笠を被っていて、眼の下には菱形の刺青をしている謎の男は、メッキヤミーが横取りしてきた毒刀を両手で持っていた。
そして、暫し懐かしそうに眺めると、

「もういい。この毒刀も、お前も、まとめて我刀流に差し出すとしようか」

と、毒刀『鍍』をそのまま目の前にいるメッキヤミーに投げ渡した。
メッキヤミーは片膝をついたまま毒刀を受け取る。

『これで良いのですね、我が創造者よ』

「当然だ。我刀流をより完全な刀（もの）とするには些か準備が要るしな」

謎の男は机と椅子が積み上げられて出来た簡易な山に腰かけているので必然的にメッキヤミーを見下ろす感じになっている。

『了解です。ならばこの命、折られに行って参ります』
「ああ、じゃあな」
そうしてメッキヤミーを残して、謎の男は廃工場の外へと行ってしまった。

＊＊＊＊＊

廃工場に到着した刃介と七実。
シェードフォーゼから降りた二人は何時もと変わらぬ歩調で内部に入っていく。
この寂れた工場の内部は思った以上に物資が片付けられていて、残っているのはガラクタの入ったダンボールや、適当な鉄屑ばかり。
工場内部の空気も暗くて冷たい印象が漂う。
「おい、ヤミー！居るんならとりあえず出て来い！」
ムダと判っているが、一応は呼びかけてみる。
「オーイ！出てこ『言われずとも出てくる』
ほの暗い闇の中から聞こえてくる声。
「ほほぉ。随分潔い登場だな」
『一応、我が創造者の命令は実行せねばならんからな』

メッキヤミーは抜き身の毒刀を右手に、鞘を左手に持っている。
「それなら話は早い。その創造者とやらの情報を吐かせてやる」
刃介の赤い瞳の眼光がメッキヤミーを曇りなく捕捉した。
「七実、手は出すなよ」
「またですか？」
「ちょいとは運動しないとな」
「はぁ・・・・・・仕方ない人ですね」
七実は溜息混じりに了承した。
刃介はブライドライバーを装着し、コアメダルを投入。
「変身」
≪ＨＡＹＡＢＵＳＡ・ＨＯＵＯＵ・ＹＡＴＡＧＡＲＡＳＵ≫
≪ＨＡＯＵＲＡＳＵ≫
メダルのサークルが胸に張り付くと同時に、彼の肉体を覆い尽くしていく紅蓮の炎。
刃介は直接的に炎天の覇者たるハオウラスコンボに変身したのだ。
「んじゃ・・・行くかっ」
両手に鳥刀『鏃』を持ち、照準をメッキヤミーに。
『ふん。鳥系コンボは狭い場所では本来の力量を発揮しきれない筈だ。気でも触れたかブライ？』

「全然だな。だから、お前と俺が纏めてここをでりゃー良いんだろうが？」

すると、

「忍法・・・・・・疾風迅」

――シュン！――

その瞬間、たった一瞬の刹那の間に、ブライは見えなくなった。

そして、

――ドゥ！――

『な、なに!?』

メッキヤミーの身体に二つの銃口を突き当てて、

――パンパンパンパンパンパンパンパンパン！！――

零距離での連続発射。

それに伴ってブライはホウオウウイングを広げて勢い任せに廃工場から外へと出て来た。

「おらおらおらオラァァァアアア！！！」

『ぐおおおぉぉぉおおお！！』

ブライは銃口をメッキヤミーに押し当てたまま上昇していく、そこからさらに、

――パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパン！！！！――

二度目に連続発射。
避ける場所さえ無い空中に持ち上げられては、正に餌食としか言いようの無い状況だ。

『うあああああああああ！！』

メッキヤミーは地上へと落下していく。
無論、ヤミーなので落ちても身体中に鈍痛が走る以外にはダメージはないだろう。
ブライはゆっくりと地上に降下してくる。

「さーて、好い加減情報を喋ってもらうぜ」
『っ！知りたいのならば勝手にしろ！』

メッキヤミーはそう叫ぶと、全力で毒刀『鍍』を投げてきたのだ。
それも黒い刀身が剥き出しの抜き身の状態で。

流石のブライもこんな状況は予想していなかったのか、受け取り損ねた毒刀『鍍』の刃がローグラングサークルに突き刺さった。

「んあ・・・・・・！？」

ブライが自分の意識が闇の中に沈んでいくのを感じた。
何処か遠い別の場所へと向っていくように沈んでいく感じだ。

＊＊＊＊＊

８００年前の日本のとある夜中の土手。
ブライの意識が辿り着いたのは過去の幻影だった。
恐らくメッキヤミーの力によって毒刀がブライの意識をここへ導く役目を果たしたのだろう。

ブライはこの場ではただ見ているしか出来ない。声すら出せない。
だから今此処で聞こえる声は全て、過去の投影たちの織り成すものだ。

「おらおらおらぁぁ！！俺ぁ強いんだぁぁ！！」
「あんぎゃあああ！！」
「ぐばぁぁあああ！！」

そこには一人の青年が喧嘩を繰り広げていた。
相手は目付きの悪さしか特徴の無い男だった。
しかし、二人の相手に対しては手に持っている日本刀一本で撫で斬りにしたようで、体や顔には返り血が飛び散っている。

「なんだなんだなんですかー！？この辺の連中ってのは雑魚ばっかかよ！」

その青年は見るからに不良である。
上半身には所々に傷のついた着流し。下半身にはボロボロな袴。
顔については二枚目だが目付きが鋭い上、手入れなど碌にしていないであろう伸びまくりの長髪が彼の威圧感を増大させていた。

「威勢が良いな、小僧」
「あぁ？」

そこへ青年に声をかけるものが居た。
頭に編み笠を被り、眼の下には菱形の刺青をした男だ。

「噂を聞いて遥々こんな田舎にまで来たが、どうやら外れじゃなかったようだな。まあ、とりあえず及第点ってところか」
「何勝手に人様のこと評価してんだよ、てめぇは」

青年はにらんで凄むも、男は全く持って動じはしない。
青年が血塗れた刀を掴む手に強い握力を加えても、男は漂々とこう言う。

「言っとくが小僧、俺にとって刀ってのは全て味方であり部下みたいなもんだ。どんな刀を使うかでどんな攻撃をしてくるかは大体読めてくるからな」
「へっ！んなこと知ったことかよ！」

青年はその台詞を吐き捨てたまま刀の切っ先を男に向けた。

「・・・・・会って五分と経たずにこれとはな、噂以上の喧嘩野郎だな。及第点とはいえ、俺も欲張って完了から暗闇・・・・・・『完全』を目指す道筋で迷ったか？」
「完了から完全だと？」

青年は刀を下ろして鞘に納めた。

「この先の言葉によっては、お前には関係有るか無いかの話だ」
「益々持って意味不明だぜ。俺はただ己の強さを底上げしたいだけ

だ。そして、その力を示し続ける。自らの欲望、我欲のままにな！
そこには世情さえ介入する余地さえない！」

すると男は、

「かっかっか」
「何だよ？」
「いやいや、昔よ、お前と似て非なることを言った奴のことを思い出しちまっただけだ」
「俺と似て非なる？」
「まあ親友だったんだが、今は関係ないことだ」

男は一方的に話を区切った。

「小僧よ、世間の事柄に興味が無いのは俺も一緒だ。それに歴史に囚われないとこも気に入った」
「歴史？」

自分は一度もそんな単語を出した覚えは無いというのに、男は当たり前という風に口にした。

「以前俺は歴史を相手取る為、九百八十八本の刀から十二本、十二本の刀から一本の日本刀をつくった。まあ、結果としては敗北だったがな。だったら今度は一族の使命ではなく、俺個人の欲望で刀を作ってみたほうが面白そうだ。丁度いい素材も見つかったことだしな」

青年は男の話に半ばついていけなくなった。
ただただ、うざったい奴としか思えなくなってきた。

「訳わかんねぇ戯言を喋り続けるなら、ここで愉快な肉塊に変えっぞ？」

「物騒な言い分だ。だがお前じゃ俺を殺せない。何しろ俺はお前に力を与えに来たんだからな」

男は懐に手を伸ばし、あるものを取り出した。

男の手には血錆色のメダルが三枚、そして石版状の物体が握られていた。

男は気前良く、メダルと石版を青年に投げ渡した。

青年はメダルと石版を見事キャッチしたが、余計にこの男に不信感を持つ。

「てめぇ・・・・・何者だ？」

「ああ、まだ言ってなかったな」

男は漸く気づいたかのようにこう言った。

「俺は刀鍛冶だ」

「その刀鍛冶がどうしてこんな場所でこんな物をこんな俺に与えるんだ？」

「だから言ったろ、完了の奥にある完全を目指すってな。その為にお前が求める強大な力と、それを使って死ぬほど暴れられる舞台を用意してやる」

男は値踏みするように青年を観察すると、欲が表れた奇妙な笑顔を浮かべる。

「もっとも、きちんとした基盤になれるかはお前次第だがな――――

鋼一刀（はがねかずと）」

それは今から八百年も遡るであろう大昔の一節。
この世が乱世とされるよりずっと前の遠い昔話。

後の我刀流開祖、鋼一刀と――謎の刀鍛冶、四季崎記紀（しきざききき）との・・・
・・・これが、なめ初れだったのでございます。

召喚と暗躍と昔話（後書き）

唐突ですが、今月の２５日から２７日の間は学校関連の行事で忙しくなり、執筆を行うことができません。なので次回更新が遅くなりますが、どんなに遅かろうと更新を途絶えさせる気は毛頭ありません。

どうか皆さん、暖かく寛大なお心でお待ち下さい。

刀剣組と大集合とありがとう

「あ・・・・・・あ・・・・・・・あ――――」

――ズル・・・っ――

胸のローグラングサークルに突き刺さっていた毒刀『鍍』の刃がずり落ち、地面に刀本体が転がった。

（今の・・・は・・・８００年前の初代と・・・・・・四季崎記紀か！？）

刃介（ブライ）は四季崎の身体的特徴を知っているわけではないが、言動で四季崎記紀本人だと悟った。となれば、こんな映像を見せてきたメッキヤミーの主も大体見当がつく。

ブライは毒刀『鍍』を拾い上げ、顔を上げて問う。

「お前、四季崎の下僕（ヤミー）だったのか」

『如何にも』

メッキヤミーは一切合財隠すことなく明かした。

「一体奴はどうやってこの世界に・・・？七実や竜王と同じように、転生してきたのか？」

『転生？そんなチャチなものではない。我が創造者は記紀であって記紀ではない。最も、それは異端の虚刀『鑢』も埒外の真庭忍者とて同じこと』

「どういうことだ・・・？」

ブライはメッキヤミーの言っている事が理解できない。

『今直ぐ理解しろとは言わん。何れ創造主自身が御身を貴様等に曝し、真実を語る日が来る』

メッキヤミーは両手を左右に大きく広げた。

最早役目を果たした今、彼自身に生きる意志も意味も無い。

「・・・・・・・・・・・・」

ブライは無言でスキャナーを手に取り、

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

――ヴォォォオオオ・・・・・・！！――

鳥刀『鏃』の銃口から業火が噴出していき、照準をメッキヤミーに合わせると、引き金を引くと同時に技名を口にする。

「コロナフィーバー」

――バアアァァァァン！！！――

二つの銃口から超高温火炎弾が発射され、

『然らばっ』

――ジャリィィィィィン！！――

メッキヤミーは大量のメダルに還元された。
その様子を静観していた七実は、毒刀の鞘を手にし、ブライに歩み寄る。
「刃介、さん・・・？」
その時の口調は何処と無く不安そうだった。
「七実、一度ソレ毒刀『鍍』を財閥に届けるぞ」
ブライは変身を解除する。
「その次は、刀剣組の問題を片付ける」
そして、刃介はとっくに気付いていた。
自分が居ぬ間に回り出していた欲望の渦に。

＊＊＊＊＊

とある大きな駅構内。
そこには刀剣組一行の姿があった。
正直な話、任侠道に生きる者達のオーラのせいで周囲には人っ子一人として近寄るものは居ない。
大勢の黒服に囲まれ、中心に居るのは二人の男。

刀剣組組長、本山雄一。組長補佐、榛原啓示。

「あ、雄一。先に行っていてくれ。俺はちょっと用を足してくる」
「わかった早めに合流しろよ。列車に乗り遅れたら元も子も無いからな」
「言われずともわかってる」

という遣り取りの結果、榛原はトイレに駆け込んだ。
理由としては本当に用を足す為――――そしてもう一つ、これが真の理由。

（はてさて、後は列車に乗ってコトを起こすだけだが・・・・・・・少々こちら側の戦力に不安があるな）

榛原側についている人数はハッキリ言って状況を転覆させるには心許ない数である。

（だが、今となっては引き返せない！刃介が何れ我が組に復帰すると思わん内に――――！）

榛原はそうして用を足し、手を洗ってドアを開けて行こうとした際――――

「ほほー。興味深い欲望だな」

一人の男が現れた。
榛原同様に和服だが、笠を被っている。

「だ、誰だ？お前は・・・・・・？」

「俺が誰かなんて、大した問題じゃねぇ」

男は一枚のメダルを手に持った。

すると榛原の額に硬貨投入口が現れる。

「お前の欲望（ねがい）、貰い受けるぞ」

――チャリン！――

＊＊＊＊＊

トライブ財閥の会長室。

「ほらよ、持ってきたぜ」

刃介は荒っぽい仕草で毒刀を机の上に投げて寄越した。

「確かに受け取ったわ」

それをシルフィードが丁寧な手付きで受け取った。

「それで、ここに来たのはコレを届ける為だけではないんでしょ？」

「鋭いな。まあ隠す気は毛頭ないからハッキリ言う。――刀剣組の現状況を教えろ」

「ホントに本音丸出しね」

シルフィードは頭を掻きながら半ば感心したかのような口調で返す。

「それについては、貴方達と合流する筈だった金女ちゃんが行方を追って調べてるわ」

「変体刀の回収役はあいつだったのか」

「情報収集が趣味だと言っていた金女さん――否、忍者に打って付けの任務ですね」

七実はシルフィードの人選に納得したようだ。

こういった仕事には、戦闘能力と諜報能力を兼ね備えた優秀な忍びたる金女が最適だろう。

「まだ途中経過だけど、刀剣組は他の極道や任侠者達との同盟や仲直りの為に手打ち式ってのをやるそうよ。多分今頃、列車に乗ってる頃じゃないかしら」

「行き先は何処だ？」

「うふふ♪そういうと思って、キチんと調べてあるわよ」

――ス・・・ッ――

――バッ！――

シルフィードが懐から取り出したメモを見るや否や、刃介はそれを乱暴に奪い取り、足早に去って行った。

「ではまた」

「えぇ」

ただし、七実だけはちゃんと一礼して部屋から出て行った。

＊＊＊＊＊

その頃、金女はというと・・・・・・。

（はてさて、変体刀を届け終えてすぐさまに刀剣組を追ってみたものの・・・・・・）

今現在、金女は・・・・・・

（意外とキツいですね。屋根部分は――）

列車の直上にしがみ付いていた。
忍び装束と相まってある意味かなり忍者らしいといえばらしいのだが、下手を踏めば列車から振り落とされて地面に激突＝大怪我という惨事にもなりかねん状態だ。

（不悟（さとらず）――この状態では列車内の状況は把握しかねますし・・・・・・一丁、やりますか）

金女は懐に片手を突っ込むと、何処と無く奇妙な忍具を取り出した。
それは何だか小型の鋸と表現すべき形状で、それと一緒に取り出された爆薬によって如何なることに使用されるかが匂ってくる。

カチャカチャと小さな音を立てながら爆薬を車両と車両を繋ぐ柔らかな接合部分に貼り付け、簡易ライターで着火。

――ボンッ！――

これによって接合部分の強度は障子紙ていどとなり、あとは鋸型忍具で円形に切り取れば、

――シュタ！――

あっと言う間に侵入成功である。

だが勿論、

「おい、誰だ！？」

気付いちゃう輩は居るわけで。

「不答（こたえず）――忍者が逐一懇切丁寧に素性を明かすわけないでしょう」

金女はそう言うと、

「背弄拳」

――ボガッ！――

一発で黒服を気絶させた。

「浅はかなり」

腕を組み、静かな表情で金女はそう呟いた。

＊＊＊＊＊

そして列車の一席に座る本山。
窓から見える夜中の風景を眺めている。

（時間が経つのは早いもんだ・・・・・・）

本山は心からそう思った。
今日という時間も、五年前から現在という時間も。
気付いた時には、時というものは過ぎ去っていくものだ。

「よう、雄一。一人寂しく外なんか眺めてどうした？」

そこへ演技かどうかは知らないが、爽やかスマイルの榛原がやってきた。
因みにこの列車は刀剣組の貸切となっていて、組員しか乗車していない。
なので一つの車両に本山一人だけというシュチュエーションが出来上がっていたのだ。

「なあ、啓示」
「なんだよ？」
「刃介と一緒に刀剣組をつくった時のこと、憶えてるよな」
「・・・・・・忘れられる訳が無い」

啓示にとって、刃介と本山と一緒に刀剣組を創設した際の記憶は生涯残る掛け替えの無い想い出だ。
最も、良い意味でも悪い意味でもあったりする。

少しだけ、語らうことにしよう。

＊＊＊＊＊

今から十五年前、鋼鉄郎と鋼鏡子――つまりは刃介と金女の両親は殺された。
そして、刃介は無意識に小太刀を握って仇討ちを行い、血に染まって白髪となった。
金女はそれに恐怖して家を飛び出し、後に平行世界へ迷い込んで相生忍者の弟子となった。

無論、そんな大事件をマスコミが放って置く筈が無い。
一時的ではあるが、この一件は”仇討ち事件”として名付けられ、刃介自身は”小さな白髪鬼”とあだ名された。

刃介は当時１０歳の子供だった上に、両親を殺されて髪が白くなるほどの精神的変革が起こったということも相まって、刃介は正当防衛の無罪放免という形で家に帰された。
勿論の事、行方知れずとなった金女の捜索も行われたが、半年に及ぶ調査も平行世界にいる金女を探し当てるにはまるで分野も時間も桁違いで、結局のところ捜査は打ち切られてしまった。

事件以降、刃介は何故か白髪を決して元の綺麗で艶のある黒髪に染め直そうとはしなかった。
本人曰く、理由は三つあるらしく――一つ目は面倒くさい、二つ目は頭皮が痛みそう、三つ目は・・・・・戒めだった。

しかし、そんな若い刃介の総白髪は目立ちすぎた。
中学校に進学してからも、周りの人間は生徒や教師も含めて刃介を避けた。イジメなんて下らない考えは思いつかないほど、彼らは刃介を恐れたのだ。両親を殺されたとはいえ、人をあっさりと斬り殺した刃介の中に秘められたモノに。

刃介の最終学歴は中卒である。
理由は簡単、どの高校も受け入れてくれなかったからだ。刃介は在学中には模範といえる程の好成績をとっていたが、それでも教師側は進学推薦をしてくれなかった。

よって刃介は成り行きのまま、実家の雑貨店を十五歳という若さで経営して生活していく事になったのだ。でも刃介の店に買い物客は滅多に訪れない。訪れたとしても刃介のことを知らない遠出の人間くらいのものだ。

様々な意味で磨耗していた頃に、刃介はとある珍妙な客に出会った。
二人組の客が欲したのは、物品ではなかった。

「なあ、お前・・・・・俺たちと組まないか？」

刃介自身だった。
そう、これが刀剣組創設の瞬間とも言えた。
当然、刃介はこう訊いた。

「何故この俺を欲する？」
「お前の力が必要だからだ」
「俺たち三人が結成する――――刀剣組の為にな！」

その後、紆余曲折はあったが、当時の本山と榛原はなんとか刃介を説得し切った。
こうして、刀剣組は誕生する。
最初の頃、刀剣組は今のような任侠組織ではなく、創設者三人を頭とする大勢の血気盛んな若者で構成された自警団であった。刃介は組織が結成された当初は何の関心も興味もなく、ただただ遣るべきことを淡々とこなしていた。

因みに当時の刀剣組の専らの役目といえば、典型的な外道に堕ちた連中とのケンカだった。
そして刃介が直々に出向いたケンカは１００％刀剣組の勝利となっていた。

そんなある日のこと、刀剣組結成から二年後、１７歳となった刃介は気まぐれに一人の幼い子供を身を挺して守ってみたことがある。ただ単調にケンカに巻き込まれただけの子供一人を守る為、あえて敵の金属バットを身に受けたのだ。ついでに言っとくと、そんな程度では刃介は倒れず、結局のところその戦いは勝利する事となる。

「お・・・・・お兄さん、カッコ良い！！」
「カッコ良い？この俺が？」

その時、子供は刃介を憧れの対象として見ていた。
弱気を助け強気を挫く存在。子供からすれば、刃介はまさしくヒーローだったのだ。

「ヒーローか・・・・・・そういう生き方も、悪くない」

ある意味、この時の感情が今後の刃介の人格形成に大きく関わるものになった・・・・・・としかいいようがない。

それからの刃介は、特撮番組の主人公になったかの如く、私欲を捨てて他者に尽くした。
今の刃介とは想像さえつかない様な清浄な思考と行動を取る様になり、それが切っ掛けで刀剣組には刃介に憧れて入隊するものまで現れ出し、当初は２０人程度だった刀剣組はあっという間に５０人という大所帯となっていったのだ。

組織の拡大に伴い、刃介は刀剣組総隊長という地位に就き、正義の味方というべき働きを部下と共に、華やかな戦績を記録していったのだ。
そんな折、榛原は刃介にこう尋ねた。

「なあ刃介。なんでお前はそう強く居られる？」
「さぁてな。ただ、俺がこうしたかったから・・・・・・かな？」

刃介はあの頃、自分の歩む道に何の迷いも無かった。
己一人の欲望を殺して、何かの為に戦えば、自分には居場所ができる。心強い暖かな仲間が集まる。そんなヒーロー的な存在になれると思っていたが、今にして思えばそれは思いあがりや若気の至りという結論に達するだろう。

だがしかし、それは一時の夢でしか無かった。

結論から述べると、刃介が二十歳となった五年前、刀剣組は刃介の所為で壊滅しかけたことがあった。
その訳は、刃介が情けをかけて見逃した敵勢力の残党による奇襲だった。

その際は皆ボロボロになって戦い抜き、どうにかこうにか敵勢力を殲滅する事ができた。
勿論この戦いで最も多くの働きをしたのは刃介であった。
でも、榛原の不用意な一言が、刃介の居場所を奪い取ることとなった。

「全く、お前が無用な情けをかけるから、余計な仕事ができちまったぞ」

榛原からすれば、それはちょっとした愚痴だった。
しかし、それに悪乗りして便乗する者達が出て来たのだ。

「そうだそうだ！」
「鋼さんがヒーロー面しなけりゃ、俺たちはこんな苦労しなかった！」
「どう責任を取るつもりなんですか？」

心無い非難の嵐。

「お、おい皆ちょっとまて！」

本山はそれを見かねて説得しようとする。

「今回の事は情けをかけられて尚、我々を攻撃した根性の腐った連中にこそ責任があるぞ！刃介の正義感を責めて良いことにはならん！」
「でも本山さん。一組織の攻撃隊長を勤めてるお人の勝手な判断で、

下についてる俺らは酷い目に遭い掛けたんですよ。奴らをボコり終えて、刃介さんがまた情けをかけて・・・・・・ループしちまったらどうするんですか？」

食い下がる部下達。

「し、しかしだな！刃介「もう良い。そこまで言うならば、俺は・・・・・この刀剣組から去ろう」・・・・・・刃介」

刃介はコトを大きく荒立てない為、あえて自ら刀剣組脱退を受け入れたのだ。

「待ってくれ刃介！俺たちにはお前の力が！」
「だとしても、皆が幸せになれない存在が俺だとすれば、去り行くしかないだろう」

刃介はそういって出て行った。
最後にこう言い残して・・・・・・。

「これが俺の・・・・・・最後の正義だ」

そして、彼は変わった。
正義漢から我欲漢へと。

「そして俺は、他人の為ではなく己自身の為だけに生きる。俺はもう、一生分の正義を使い果たしちまったからな」

＊＊＊＊＊

場面は現在に戻り、榛原は口を開いてこう述べた。

「五年前のあの事件以降、俺は組織拡大に尽力し、雄一は集まった同志達を纏め続けた」

「ああ。だが俺は今でも思うよ。刃介が居てくれたら・・・って。あの事件は、俺たちが刃介に頼りすぎたバチだったんじゃないかってな」

二人は遠い目をして過去を思い出す。

ただ本山の眼には後悔の色が見え隠れしている。

「俺たちがもっと、あいつの事を支えてやれたらって、そんな都合のいい考えもよぎる」

「そうか・・・・・」

すると、榛原は右手を上げて、

――パチッ！――

指を鳴らした。

その瞬間、扉を開けて5人ほどの黒服が乱暴に入ってきた。

本山はそれに対して驚くことはなく、ただただ静かに外の眺めを見ている。

「雄一。刀剣組とは、俺たち三人で立てて挙げた旗のようなものだ。初めは無色であるその旗に多くのものが集まり、様々な色となって刀剣組という独自の色を持った旗となる」

榛原は雄一を見下ろすように喋りだす。

「だがな、旗を立てた一人である俺の色は黒だよ。暗闇のような漆黒。その色は何モノにも染まらないし、あらゆるモノを染め上げる。言っている意味がわかるか、雄一？」

「ふふふ、黒か、お前らしいな。だがな啓示、お前の表現は少々間違っているぞ」

榛原啓示が自分を裏切ったということを悟って尚、本山の態度は崩れない。

「御旗にあるのは、色なんてモンじゃない、垢だ。擦っても洗ってもこびり付いて離れない垢だ。その証拠に、刃介が残した垢の跡は決して消えずに皆の心に刻み込まれている」

そう言いきった本山の表情は実にすっきりとした気持ち良いものであり、どこにも邪念は感じられない。本当の意味で本音を語っているのだ。

「それが俺たち、刀剣組の魂なんだよ」

「えらい能弁ぶりだな。今にして思えば、その気持ちの良い人格ゆえに、お前は組織を治められたのかもしれんな」

榛原はそんな本山に敬服の念を送るも、視線は明らかな敵意を持っている。

「だがそれも今宵限りだ。これからの刀剣組は俺が統べて行く」

と、その時・・・！

――バタッ！！――

極めて乱雑に扉を蹴破り、侵入して来る者が一人。

「・・・・・誰だ貴様は？」

榛原は突撃してきた者の素性を訊く。

「相生忍軍所属――」

その女は、頭を守る額金をつけ、口元を襟巻と一緒になった覆面で隠し、両腕には手甲を装着し、袖を切り落とした中途半端な丈をした焦茶色の忍び装束を着ていて、服の内には鎖帷子を着込んでいる女忍者。

因みにＳＯＤＯＭ編以降は髪型がミニポニからアップスタイルに変更されている。

「――鋼金女」

逃げも隠れもしない異端の忍者集団、相生忍軍らしく、彼女は堂々と名乗った。

「不忍（しのばず）――忍者とは本来コソコソするモンですが、今回は正面きってやらせて貰いましょう」

「だ、誰だテメェは！？」

黒服の一人が荒っぽく怒号交じりに聞いてきた。

「ですから、さっき申しましたよ。相生忍軍所属、鋼金女と」

「お前・・・・・・もしかして刃介の妹かなにかか？」
「不間違（まちがえず）」

何時もの口調で金女は榛原に返答する。

「あいつに妹が居たとはな。兄貴が剣士で妹が忍者とは、鋼家ってのは節操が無いんだな」
「放っといて欲しいですね」

金女は溜息混じりに言い返した。

「・・・・・お前ら、こいつを先に片付けろ」
「「「「「はっ！」」」」」

榛原が先方の車両を目指して歩いていくと、黒服たちは懐から小太刀や拳銃を取り出して握り締める。

「本山さん。貴方は先方の車両に突っ走って下さい」
「しかし、女の子を一人だけ残して「甘く見ないで下さい」

本山の発言に金女は不愉快気な声音を出す。

「伊達や酔狂でこんな格好やあんな名乗りをしたわけではありません」
「・・・・・・わかった。君に任せる」

本山は金女の力を信じて、黒服たちの合間を縫い、前の車両に移動した。
普通なら誰かが取り押さえそうだが、金女の存在が抑止力となって上手くことが運んだ。

「では皆さん。これも仕事の一環ですし、殺し殺されても互いに恨みっこ無しということで」
「ほざけ！女がたった一人で何が出来る？」
「数の上ではこっちが断然上だぞ」
「うふふふふ」

黒服たちの言い分を聴くや否や、金女は可笑しそうに笑った。

「まあ、圧倒的実力差のある相手に対し、数で押すと言うのは悪くないでしょう。丁度いい瞬間に纏めて突っ込んで・・・・・・」

金女は手刀を構えてそういった。

「「「「「「っ！――うおおおおおおおお！！！」」」」」」

そして、

「忍法――生殺し」

全てが血に染まった。
車両の内側は全て、床も壁も天井も窓も、等しく鮮血の赤に染まった。
そんな中、ただ一人立っている女忍者は、自分の口元についた血を舐め取って吐き捨てると、妖艶な柄笑いを目元に浮かべてスパっと言ったのだ。

「纏めて死になさい」

＊＊＊＊＊

――ブゥゥウウゥゥゥン！！！――

その頃、刃介と七実はシェードフォーゼに乗って列車を追っていた。
常にノンストップで走行している為、二人がグリードでなければ喋る事さえ出来ない状態だ。

そこへ後ろから何かが自分達の跡をつけてくることに気が付き、後ろを振り返った七実がみたのは

「刃介さぁぁん！！姐さぁぁん！！」
「あっしらも、一緒に連れて行ってくだせぇ！！」
「お願い申し上げます！！どうか、共に行かせてください！！」
「お二人のお知り合いから事情は聞きました！！どうか、何卒！！」

黒い車に乗った大勢の本山派の黒服たちだった。

「「お前ら（あなたたち）・・・・・」」

刃介と七実は黒服たちの意気込みを見て、

「ああ、だったら死んでもついて来やがれ！！」
「ただし恨み言や弱音は無視しますよ」
「「「「「へいっ！！」」」」」

一同はさらに愛機のエンジンに叫びを唸らせ、友の居る場所へと駆ける！
夜の冷たい空気を一陣の風となって切り裂きながら。

＊＊＊＊＊

そして、榛原はさっきまでいた五号車からここまで歩いて先方の車両である三号車にたどり着いた瞬間に――

「啓示」

本山が追いついてきた。

「雄一か。思ったより早いな」
「まぁな。あの子のお陰だよ」
「ふん。刃介の妹だけあって、あの忍者もまた怪物並と言う訳か」

榛原は薄らとうんざりしたような表情となり、片手をあげた。
すると、

――バリィィン！！――

車両にある窓という窓全てから、異形の怪物が飛び込んできた。
異形達はまるで銀色の刀身がそのまま怪物に化身したような容姿で、それ以外に特徴らしい特徴はなかった。

「や、ヤミー！？」

本山はこんな場所で、しかも榛原の出した合図に従って多数のヤミーが現れたことに困惑した。

「今となっては黒服たちなど、雑兵もいいところ。此度の革命戦における最大にして最多の戦力、それが俺の欲望から生まれた”ツルギヤミー”だよ！」

「ツルギ・・・ヤミー・・・」

名称の通り、このヤミーは『多さ』を主題とした完成形変体刀が一本、千刀『？』をモデルとした刀系ヤミーだ。勿論、その能力は最大千体までの超多重分身！

『お前に恨みは無いが――』

『――欲望を満たす為――』

『――死んで貰うぞ』

ツルギヤミー達は一斉に本山を切り裂こうとした、まさにその瞬間！

≪ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ≫

「変身！」

≪ＤＩ－ＲＵＤＯ≫

ビュンビュンという音が鳴り、幾つモノ虚像が現れてヤミーを遮った。

虚像達が舞うように動き回ると、それは突然割れた窓から入ってき

た一人の青年の身体に重なって装甲を成し、頭部に九枚のプレートが突き刺さる事で漆黒の色を得た。

『何者だ貴様は！？』

「世界の蒐集者。仮面ライダーディルード」

漆黒の次元剣士、ディルードは惜しげもなく姿を晒し、ディルードライバーを肩に乗せて名乗った。

「お前、報告にあった盗人か。なんでそいつを庇うようなタイミングで登場してるんだ？」

「なーに。あいつの言っていた『別のお宝』って奴に興味が沸いただけだ。理由なんてそれだけで充分だぜ。それにヤミーを倒せばセルメダルが手に入るしな」

ディルードはいつもの御気楽な口調で話す。

「つーわけで、とりあえず化物は化物同士で乳繰り合ってもらうぜ！！」

≪ＫＡＩＺＩＮ　ＲＩＤＥ・・・ＡＮＴ　ＬＯＲＤ・ＤＡＲＫＲＯＡＣＨ・ＡＬＢＩＮＯＲＯＡＣＨ・ＭＯＬＥ　ＩＭＡＧＩＮ・ＭＡＳＱＵＥＲＡＤＥ　ＤＯＰＡＮＴ≫

「平成の戦闘員大集合！」

ディルードが有りっ丈のカードを装填してスイッチを押した。

すると車両の中には大量の怪人たちで犇めき合う。

アギトの世界において、蟻に酷似したアントロード。

ブレイドの世界において、ジョーカーやアルビノジョーカーの眷属たるゴキブリ型のダークローチとアルビノローチ。
電王の世界において、モグラのイメージによって此の世に現出したモールイマジン。
Wの世界において、ミュージアムの一兵卒が仮面舞踏会（マスカレイドメモリ）の記憶を用いて変身するマスカレイド・ドーパント。

それら全てが三体ずつ召喚されたのだ。

「おい、あんた此処は俺に任せて後ろの車両に退避しろ。あの忍者がとっくに連中を始末してる筈だ」
「お、俺は、また何もできないのか・・・・・・無力な俺には・・・・・」
「自分を卑下すんな。あんたは普通の人間なんだからさ」
「・・・・・・すまない」

そう言って後ろの車両に移動していく本山は自分自身にこの上ない屈辱と無力感を感じ取った。
五年前の時も、そして今現在も、自分は何も出来ない状態で居る。
ただただそこに居て、都合よく組織を纏められていただけの存在と成り果てつつある。
そう思うと、胸の置くが圧迫されるように苦しく辛いものになっていく。

「さあ、おっ始めようぜ！！」
「ふっ、面白い！ならば俺は遠くから高みの見物といこうじゃないか」

榛原は偉ぶった台詞を口にすると、

「遣れツルギヤミー！！この俺の眼前に、俺の邪魔者すべての御首級を捧げろ！」

『言われるまでも無い』

「へっ！やれるもんなら、やってみな！」

≪ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ・・・ＥＬＥＭＥＮＴＡＬ≫

＊＊＊＊＊

「不面白――まったくもって、次から次へと面倒な事態になりますね」

血だらけの車両内の中には、鋼金女という一人の人間と、

『『『くっはははははは』』』

外から進入してきた三体のツルギヤミー。

金女は腰にチェリオドライバーを装着し、懐から一枚のセルメダルを手に取る。

「変身」

――チャリン――

――キリッ、キリッ――

――パカン！――

その瞬間に彼女の身体は円形のフィールドの中で銀と黒の装甲服に覆われていき、首から上も見事な仮面で覆われた。変身が完了した暁として、額金型のバイザーが青く光る。

仮面ライダーチェリオ。

「不足（たらず）――今日はそんなに多くのセルメダルはありませんので、身体に染み付いた技法を駆使して戦わせてもらいます」

チェリオは腰の左右に帯刀している二本の忍者刀こと忍刀『鎖』をホルスターから抜刀して、相生剣法に従った構えを取る。

だがそこへ、

――ガラッ！――

「おや、本山さん」

「金女ちゃん・・・だったな。状況は想像以上に拙いことになっている！」

「えぇ。大方榛原さんが、ヤミーの親にされたといったところでしょうね」

チェリオは至極冷静な態度で居る。

「にしても、よくここまで戻って来れましたね」

「ディルードとかいう仮面ライダーのお陰だ」

「へー。あの盗人さん、意外と粋なことをなさいますね」

チェリオは仮面の中にある素顔を綻ばせながら驚いたような声音を出す。

「兎にも角にも、貴方は中間である四号車にいてください。そして、この五号車を含む後続車両の連結を断つのです」
「本当に、それでいいのか？」
「不案（あんじず）・・・・・・といったところですよ」

チェリオは自身たっぷりにそう返答した。
本山は金女を信じて四号車と五号車の接合部分に入った。

そして、懐にしまってある拳銃と小太刀を取り出す。

――パンッ！――
――ザギンッ！！――
――ガチャン！！――

鋼鉄の刺突と銃弾により、頑強な連結が外れた。

「ふ・・・っ」

音を鼓膜で、衝撃を身体で感じ取り、チェリオは準備万端とでも言う風な雰囲気である。

「では、一気にケリをつけましょう」

≪ＥＮＴＯＵ・ＪＵＵ≫

完成形変体刀、最後の一振り。
連射性と速射性と精密性の三つが主眼となっている、自動式連発拳銃と回転式連発拳銃。

≪ＣＥＬＬ　ＢＵＲＳＴ≫

「断罪炎刀！連撃編！」

炎刀『銃』は、主の命のまま、火を噴き敵を殲滅する刃となる。

＊＊＊＊＊

本山は扉のガラス越しに、米粒のように小さく眼に映るほど、距離が離れていった後続車両を見つめた。
彼は一日に二度も、それにこの短時間で己の無力さを痛感させられた。

「何故、俺はこんな肝心な時に・・・・・」

役立たずなんだ、という言葉を出そうとするも、それは喉に引っ掛かって上手く出なかった。
幾ら今回の件にヒトとは大きくかけ離れた怪物が絡んでいるとはいえ、自分の不甲斐無さに薄らと涙が目尻に浮かぶのを感じた。

その時、

――ブゥゥウウゥゥゥン！！――

バイクのエンジン音が鳴り響き、荒野に等しいこの場所に轟いたのだ。

「は・・・っ」

本山は俯いていた顔を上げ、ガラス越しに見つけた。
暗い闇夜をバイクのライトで僅かにかき消しながら、こちらに疾走してくる一台のバイクに乗った者の姿を。

ヘルメットをしていて顔はよく見えないが、その服装は間違いない。
黒い着流しに黒いズボン。見間違うわけが無い。

「なん、でだ・・・・・・!?俺は、お前に何もしてられなかったのに・・・・お前を護れなかったような、ダメ野郎なのに・・・・・どうして!?」

本山は扉に顔をおしつけ、極力顔が見えないようにする。

「お前はもう、この組織に尽くさなくてもいいってのに・・・・・・なんでなんだよ・・・・・・!?」

本山の心のダムは決壊した。
両目からは度を越した量の涙の雫、というより滝が流れ出る。

「刃介ぇぇぇえ!!!!」
「はーい!」

≪ＳＩＮＧＬＥ・ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

――ドガーン!!――

「のぎゃあああああああ！！！」

えぇと、一言で述べてしまおう。
刃介は何時の間にか手に持ったメダマガンで発砲しました。
そして、本山が身を預けていた扉に攻撃が命中して爆発しました。

「おい聞いたぜ雄一。お前、生意気なことに暗殺されかかってんだって？」
「今されかけた！！今お前がするトコだったぞ！！」

本山は爆風で吹っ飛ばされたが、刃介のボケに対して素早く復活してツッコんだ。
だが本山はその際、己が視界にあるものが入った。
それは目線を逸らす程度ではすまない規模で展開されている。

刀剣組の黒服たちが、生身で、通常兵器だけで、ツルギヤミーたちを抑え込んでいた。

「・・・・・・・・・・・・」

その誰しもが視線を奪われる光景に本山もまた、魂がなくなったかのようにそれを見ている。
その耳の奥にある鼓膜には、

「うぉおお！！」
「本山さんを護れーーっ！！」

「怪物だからってビクつくなぁぁ！！」
「根性の発揮ドコロじゃあああ！！」

仲間達の腹の底から出てくる空気の振動という声が届いてくる。

「雄一・・・・・・お前、どうしたい？」

刃介は率直に本題に入ってきた。
今の刃介にはツルギヤミーのことや榛原の裏切りより、本山の心根に関心があるらしい。

「刃介。俺はな、ぶっちゃけな話、皆と一緒じゃなきゃダメな奴なんだよ」
「ああ、知ってる、かなり前から。それがどうしたよ？」
「どうしたよって・・・・・俺は長年隣に居た相棒の心の闇さえ悟れなかった野郎だぞ」
「それで？誰かに責めてもらって、組長の座を誰かに譲って隠居すれば事が済むとか思ってんの？」

刃介は遠慮の二文字を斬り捨てるように迫っていく。
列車とバイクという格の違う乗り物に乗っているというのに、その差を一切感じさせない。

「たった独りじゃどうにかできない奴も、他人の心を悟りきれる奴も、此の世には一人として存在しない。居たとしたら、そいつは万能かつ退屈の見本として俺が標本にするぞ」

刃介はヘルメット越しに眼光を光らせる。

「お前は一長一短なだけだろ。他人の良い所は見つけられるクセして悪いトコは見つけらんない。豪快だが微妙に不器用。それと一緒だろ？人間なんざ、一つか二つ欠点があるほうが丁度良いんだ」

「・・・・・・刃介・・・・・・・」

「そんなお前だからこそ、後ろの阿呆どもはついて来たんだろ？だったら胸を張って眼前を見据えろ。どんなに屈辱に塗れても生き抜け。お前が居る限り、刀剣組終わらねぇからな。俺はあの頃のように、お前の刀になることはできない・・・・・・だがな――」

刃介はヘルメットを取り、後部座席に座って自分の身体をしっかり掴んでいる七実の片手に渡す。

そして、しっかりとした眼で、口で、心で語る。

「雄一。今も昔も、お前は刀剣組の御旗（たましい）だ。奴らはそれを護る剣なんだよ」

その言葉は実に一直線を描く、真っ直ぐな一言。

「刃・・・介・・・」

その語りに、本山雄一は眼を覚ました。

先ほどのような大粒の涙ではなく、一筋の涙が両目から流れ出た。

その時、

≪ＣＥＬＬ　ＢＵＲＳＴ≫

「漆填抜刀！！」

――ドギューーーン！！――

後続車両が吹っ飛んだ。
燃え盛る業火の中を、たった一人の重装備忍者だけが歩んで出てくる。

「向こうは終わったようだな。――金女（あいつ）は金女（あいつ）なりに、自分の信じた道を突き進んでいる。俺もまた、俺の欲望のまま動き続ける」
「・・・・・・ああ、そうだったな」

本山はさっきまでの泣き顔を表情から引き剥がし、組長としての顔になった。
そこへ、

「ならば、手早くこの列車を止めましょう。榛原さんも、この列車にいるのでしょう？」

さっきから全然喋ってこなかった七実が漸く口を開いた。

「ですが貴方、よく今まで殺されなかったですね」
「それが、ディルードって奴が助けてくれてな・・・・・・」
「あいつがか？・・・まあ良い。兎に角――」

刃介の言葉は紡ぎ切れなかった。
なぜなら、タイミングを計ったように先頭車両から電子音が聞こえてきたのだ。

≪ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ・・・ＤＩ・ＤＩ・ＤＩ・ＤＩ－ＲＵＤＯ≫

それと同時に煌く一閃が窓から一瞬もれ、内部には複数の爆発音と爆炎が立ち込めた。
勿論、先頭車両でそんなことが起これば、

――ギギウィィィン！！――

凄まじく嫌味な音がレールと車輪によって引き起こされ、列車は傾きだした。

「っ！雄一、乗れ！」
「お、おう！」

刃介の言葉に従い、本山はシェードフォーゼに飛び乗った。
その衝撃でバランスを崩しかけるも、数多の技術を吸収したうえにグリード化までした刃介の尽力によって水平を保った。

列車は完全に横倒しに倒れ、動かなくなった。
すると、先頭車両からは漆黒の次元剣士が出てくる。

「いやー。働いた働いた」

お気軽な口調・・・・・・紛れも無い。

「ディルード」
「よー、お前か」
「・・・・・終わったのか？」
「いんや」

刃介は一応問いかけるも、ディルードは否定した。

「あんなのは端っこに過ぎないって。本隊は、あちらに」

ディルードが指差した方向には、赤く塗装された鉄橋がある。
そして鉄橋の上を大挙してこちらへ押し寄せてくる一団の影。

簡単に述べてしまうと、ツルギヤミーの大軍である。
しかもその数が９００を余裕で上回っている。

「どうする？手ぇ貸して欲しいか？」
「随分とまあ積極的だな」
「ま、色々と見せて欲しいものがあるからな」
「ん・・・？まぁいっか。ならば、切り込みはお前に任せる。出来るトコまでやったら、後は俺と七実が片付ける」

刃介はブライドライバーを装着し、金色のコアメダルを投入しながら述べる。

「ふーん。別にいいが、後で『別のお宝』ってのをたっぷり拝ませてもらうぜ」

ディルードはそういうと、単独でツルギヤミー軍団に歩み寄っていく。
ツルギヤミーらも気がついて動きを止めた。

『なんだ貴様は？』
『邪魔をするな、退け』
『でなければ、斬るぞ』

ツルギヤミーたちは一斉にディルードをどかそうと口々に言うが、

言われている本人はそんな戯言には無関心で、あるものを取り出していた。

それは隅から隅まで、端から端まで、全てが漆黒（ブラック）で塗りつぶされたタッチ式ケータイ。

「行くぜ、俺の至高のお宝、ケータッチ」

ディルードはケータッチに一枚のカードを差込み、浮かび上がる紋章にタッチする。

≪ＤＡＧＢＡ・ＡＲＣ　ＯＲＰＨＮＯＣＨ・ＪＯＫＥＲ・ＧＲＹＬＵＳ　ＷＯＲＭ・ＤＥＡＴＨ　ＩＭＡＧＩＮ・ＢＡＴ　ＦＡＮＧＩＲＥ・ＵＬＴＩＭＡＴＥ　Ｄ・ＵＴＯＰＩＡ　ＤＯＰＡＮＴ≫

八つの紋章をおして最後にディルードのライダークレストが描かれた部分をタッチ。

≪ＦＩＮＡＬ　ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ・・・ＤＩ－ＲＵＤＯ≫

ケータッチをバックルに収めた途端、ディルードの額には一枚のカード＝ディルードのファイナルカメンライドカードが装着された。

すると全体のカラーリングも黒部分に銀のラインで統一され、胸部には黒で八つに仕切りされた部分こと、ヒストリーオーナメントが形成され、そこへ八枚のカイジンカードが現れて並ぶ。

彼の仲間が仮面ライダーの歴史を胸に刻むのなら、ディルードは怪人達の歴史を胸に刻む存在といえるであろう。

世界の蒐集者、仮面ライダーディルード・コンプリートフォーム。

『『『『『『っッ！！？』』』』』』』

ツルギヤミーたちはディルードの強化変身に驚き、お互いに顔を見合っている。
ディルードはそれを尻目にホルダーから一枚のライダーカードを取り出してディルードライバーに装填。

「出血大サービスって奴だ」

≪ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ≫

そうしてディルードライバーを逆手に持ち、柄のスイッチを押した。

≪ＦＩＮＡＬ（ファイナル）　ＥＮＥＭＹ（エネミー）≫

一枚のカードの力で現出したのは、八人の怪人達。
そのどれもこれもがディルードと並び立つに相応しい猛者ばかりだ。

戦闘民族グロンギの王にして白き究極の闇、ン・ダグア・ゼバ。
死の果ての進化種族、バッタの姿をしたオルフェノクの不死王、アークオルフェノク。
５３番目や死神と畏怖されし封印を司る黒い切札、ジョーカー。
コオロギの特性を備えた宇宙生物ネイティブこと、グリラスワーム。
その名の通り死神のイメージによって此の世に現出した、デスイマジン。
命を吸うファンガイア族がキングの真の姿、バットファンガイア。
ネオ生命体とダミー・ドーパントの融合体、アルティメットＤ。
理想郷の記憶を宿した巨大組織の使者、ユートピア・ドーパント。
どれもこれもが歴代の仮面ライダー達を大苦戦させた者たちばかり

だ。

≪ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ・・・ＤＩ・ＤＩ・ＤＩ・Ｄ
Ｉ－ＲＵＤＯ≫

ディルードが必殺技のスタンバイをすると、他の八体もまた、その構えを取る。

「『『『トォ！』』』」

ディルード、ダグバ、アークオルフェノク、ユートピア・ドーパントが宙に向って跳躍すると、残る五体はアルティメットＤの放つアルティメットボムを初めとして多くの遠距離攻撃を準備する。

「『『『ハァァアア！！』』』」
『『『『フンッ！！』』』』』

そして宙に跳んだ、一人と三体が空中からの袈裟斬りやキックを叩き込むのと同時に強力なエネルギー攻撃を発射した。

結果、

『『『『『『『『『ぐあああああああああああ！！！！』』』』』』』』』

ツルギヤミーたちが一気に薙ぎ倒されたのだ。
しかしながら一度に百体が限度だったようだ。
召喚された怪人たちは虚像として消えてしまった。

ディルードは己の得物の刀身を肩に乗せてこう呟く。

「まぁこんなモンか」

その言の葉には気負いらしい気負いは無く、ただ淡々としていた。
そこへ刃介と七実が背後に近寄ってくる。

「選手交代です」
「あ、そう。じゃあ休ませてもらおうかな？」

七実にそういわれてディルードはとっと後ろのほうに下がっていった。
残るツルギヤミーの数は８００前後。
でも大量ＶＳ一人という戦闘（くさむしり）には慣れている七実にとっては問題ない。

「虚刀『鑢』」
「はい」

刀としての名前で呼ばれて、七実は無機質な返事をした。

「俺は百体ほど殺るから、残った大半の連中を毟り尽くせ」
『極めて了解』

七実は人間の姿からグリードの姿であるキョトウに変貌する。
変貌を遂げた直後に、キョトウは敵陣に単身で突っ込み、モノの見事に七百の敵と百の敵（自分の得物 主人の得物）に分断させた。

刃介もローグスキャナーを手に取り、一気にバックルのコアを読み取らせた。

「変身！」

≪ＹＡＩＢＡ・ＴＳＵＢＡ・ＴＳＵＫＡ≫
≪ＹＡＢＡＩＫＡ・ＹＡＫＡＩＢＡ！ＹＡＩＢＡＫＡ！≫

全身の三つのパーツ、全てのラインが金色に煌き、白銀のヤイバアイが、一本の刀という冷え冷えとした印象を与えている。
刃介（ガトウ）自身のコアメダルによって変身する仮面ライダーブライ・ヤイバカコンボ！

「んじゃまー。初っ端からトバしていくとしようや！」

ヤイバカコンボとなったブライが手を挙げると、身体全体の金色部分がエネルギー伝達によって光り出し、ヤイバアイも奇妙な発光を映えらせる。

すると同時に空中に突拍子も無く現れたのは――日本刀である。
ブライによって造られ、空中に浮いていること以外は全て普通の日本刀。

ただし、その日本刀千本全部が、完全同一でなければの話だが。

「完成形変体刀が一本、千刀『？』――一斉掃射」

ブライが挙げた手をツルギヤミーらに向けて下げた瞬間、

――ビュンビュンビュンビュンビュンビュンビュンビュンビュン！！！！――

千本の平凡な日本刀（ブライの力で強化済み）が、魔弾となって豪雨のように降り注ぐ。
輝く刀身の銀色な光と風を切る音が相まって、その光景には一種の粋を感じさせる。
もっとも、
『『『『『『『『『んぐぁあああああああ！！！！』』』』』』』』』』
攻撃されて串刺しにされてしまっているツルギヤミーたちからすれば堪ったものではないだろう。
約一分間＝６０秒が過ぎて漸く千本の刀の射出が終えた。
当然ツルギヤミーたちは少しばかり安堵して反撃しようとするも、
「千刀『？』――模倣開始・・・・・・再創造・・・・・・再装填」
死刑を宣告するように、ブライの頭上には再び千本の刀たちが現れる。
そう、これこそがヤイバカコンボの真骨頂たる固有能力。
変体刀として識別される物体を完全模倣して現出させる。
固有能力名称は、　刀剣模造（ソードマスター）！
「再び、一斉掃射」
――ビュンビュンビュンビュンビュンビュンビュンビュンビュンビュン！！！！！――

『『『『『『『『『ぐぎゃあああああああ！！！』』』』』』』』』

千刀（セントウ）『？』（ツルギ）とツルギヤミー。

四季崎の変体刀に多少なりとも知識がある者なら、同じ銘を持つ物が同属に串刺しにされる光景に、切実とした皮肉の念を抱くだろう。

射出しては串刺しにされ、撃ち終れば再び造られ、また射出しては串刺しにされ、撃ち終れば再び造られる。

殺られる側からすれば無間地獄のような無限ループと言えるだろう。

そして、

――ピューーーー・・・・・・・！！――

『くッ・・・・・・』

残るは、もう一体だけだ。

「これで締めだぜ」

『おいブライ！』

「ん？」

ツルギヤミーはブライにこう問いかけてきた。

『なぜ今更、刀剣組なんぞに加担する！？もう一度、貴様は正義の

味方にでもなる気か！？』

半ばヤケクソ混じりな問い掛け。
それは本当にヤケクソだったかもしれないし、延命の為の時間稼ぎかもしれないが、ブライはこう答える。
左腕のヤイバスピナーに嵌っているセルメダルと、ベルトのコアメダルを取り替えながら。

「ハッ――本来なら問答無用なんだが、今回だけは、耳の穴掻っ穿って良く聞きやがれ！」

メダルの入れ替えを終えたブライは、大声でこう言った。

「俺は今まで、安っぽい正義の為に戦ったことなんざ、一度たりともねぇ！」

今にして思えば、あの頃の自分は照れていたのだ。
子供だったが故に、カッコ良い言葉を並べて誤魔化していただけ。

「正義が滅ぼうが流派が廃れようが、どうでもいいんだよ！俺は昔っから！」

ローグスキャナーに七枚のオーメダルが高速回転しながらスキャンされていく。

「今も昔も、俺が望むモノは何一つ・・・・・・！！」

目蓋の裏や脳裏に浮かぶのは、共に戦った者達との記憶。
戦友の為に己が身を散らした至高の好敵手。
そして、何よりも愛する女！

「変わっちゃいねぇぇ！！」

≪ＹＡＩＢＡ・ＴＳＵＢＡ・ＴＳＵＫＡ！ＧＩＮ・ＧＩＮ・ＧＩＮ！≫

≪ＧＩＧＡ　ＳＣＡＮ！≫

遂に完全なコンボのメダルで発動した真のギガスキャン。
ヤイバスピナーから金色の野太い巨大な光の刃が今此処に顕現された。まるで、刃介（ブライ）自身の限り無い欲望のように！

「我刀真剣（がとうしんけん）ッ！！」

夜明け前の闇夜を照らし出す金色の光り輝く刀。
それは留まるところを知らぬ勢いで威力を高めていき、直接触れずとも刃が放つ光に近寄るだけで身体に影響が出そうな程だ。

欲望の剣士は魂の底から叫びをあげ、一閃を振るった。

＊＊＊＊＊

横転して脱線した列車の先頭車両。
その際に頭をぶつけてしまい、その衝撃で気絶していた榛原は漸く意識を覚醒させる。

「チクショー」

目覚めての第一声がこれだ。
理由は複数存在する。

一つ目はディルードやチェリオの邪魔されたこと。
二つ目は列車が横転して止まってしまったこと。
そして最大の三つ目。自分の左腕の肘から先がごっそり無くなっていたこと。

「クソッ・・・・・あいつの攻撃に巻き込まれて！」

そう。ディルードが必殺技をこんな狭い場所で使ったが故、榛原はその余波の巻き添えをくらったのだ。しかし、左腕を失ってもいまだ冷静でいられるところは驚嘆すべきポイントだろう。

「ここまで、なのか・・・・・・」

仮面ライダーがここまで集まってきたのだ。
少なくとも本山達は逃げ切る時間を得たに違いないと判断する榛原。
だが彼は本山も刃介も此処に居て、戦いの渦にいることをまだ知らない。

「・・・・・ああ、立ち上がれない」

左腕を失った傷口から想像以上に血が流れてしまったのか、下半身の筋肉がいうことを聞いてくれない。全力を出せば歩くことができるだろうが、確実に寿命を縮めかねない行為だ。

そこへ、榛原の眼前に現れる者がいた。

「・・・・・・啓示・・・・・・・」
「雄一、か」

刀剣組組長の本山雄一。

「なぁ啓示。どうしてこんなバカ騒ぎを思いついた?あんな怪物連中まで雇ってな」
「・・・・・・絆(いと)さ」
「いと?」
「そうだ。刃介の誰よりも己に正直な生き様は皆を魅了して引き寄せた。そんなあいつを羨ましく思った反面、怖かったんだ。何れあいつの何かが俺の居場所さえ押しつぶすんじゃないかと」

榛原は異常なほど冷静に口を開いて言葉と認識される音を喉から出す。

「五年前の俺の失言から始まった仲間たちの責めで、あいつが刀剣組から去って行く時には寂しくもあったが嬉しくもあった。コレで俺の居場所は脅かされないとな。全く持って俺は救いがたい阿呆だよ。そんなのは人付き合いの超苦手な男の妄想に過ぎなくて、あの頃の刃介がそんな事を企むわけもないというのに」

本山は黙ってそれを聞き続ける。

「幼馴染のお前以外とでは誰とも噛み合わず、孤独な俺には、あいつの用に強くいることは出来ないかもしれん。だが俺はただ、絆(いと)が欲しかった」

榛原は深呼吸をするように口と喉と胸と腹を動かす。

「春には桜の下で酒飲んで騒いで、夏には海で疲れるくらい泳ぎまくって、秋には死ぬほど美味いモンを食い合って、冬には炬燵（コタツ）に入って鍋を囲み合って・・・・・そんな当たり前で暖かい絆（いと）が欲しかった。しかし何時の間にか、抑えようも無く膨れ上がって、『欲望』になっていたんだな」

「・・・・・啓示」

「ホント、さっきまでの俺は、チッポケな自尊心を護る為だけに、本当に欲しかったモノを見失っていたんだな」

本山は榛原の名を呟く。
あまりに小さい声にも関わらず鼓膜には届いたのは、切実な思いを乗せて榛原は喋り続ける。

「何故、わかった時には遅いんだ？――何故一緒に戦いたいのに立ち上がれない？――何故剣を握りたいのに腕が無い？」

榛原は二の腕を掴む。
その時の右手には、悔しげな何かが漂っていた。

「何故・・・・・漸く気付いたのに、俺は死んでいく？――死にたくない。死ねば独りだ。どんな絆（いと）さえ、届かない・・・・・・」

榛原の声は後悔のそれから嘆きのものに変わっていく。

「もう、独りは・・・・・」

「――――――」

ただただ沈黙し、長年の相方の言葉に耳を傾ける本山。
そこへ、身体のいたる部分に刀傷を負いながらも、二本の脚で立派

に立っている黒服三人が列車内に入ってきた。

「組長・・・・・・」

「その人を運ばせてください」

三人の黒服のうち二人は気まずそうながらも確認した。

これだけの被害を出した張本人である榛原啓示の処遇は、もはや極刑しかない。

黒服の二人は、現時点での刀剣組最高権力者の命令を待つ。

「連れて行け」

その一言で即座に反応した黒服の二人は、自力で立ち上がることさえ満足にできない榛原の両脇を二人掛かりで支え、ゆっくりとした歩調で進んでいく。

勿論、その時に榛原の身体からは少量ずつの血液が零れ落ちていた。

「組長・・・・・・いや、本山さん」

「・・・・・・・・・・・・」

三人目の黒服は、二人の黒服に運ばれていく榛原の後ろ姿をみて、今度は目の前にいる男に声をかける。しかし、その必要は無かった。本山の眼から溢れ出続ける涙が、彼の心情の全てを語っていたのだから。

＊＊＊＊＊

列車から出された榛原は、刀剣組一同が大人数で円を描くようにして取り囲む一帯の中心で拘束を解かれた。しかしそれは、巨大な円を組んだ彼らの前で彼が斬られる場面を見届ける為――間違っても彼が逃げ出さないように、こうして皆は大きく広がって大きな円を成している。

そして、その円を形成する者の一員として、金女も了も七実も・・・・・そして、本山もいる。

円の中心で倒れそうになる榛原に近寄り、刀を投げ渡すものが一人。白髪頭、黒い着流し、黒いズボンという出で立ち。

「抜けよ、啓示」

我刀流二十代目当主にして元刀剣組総隊長・鋼刃介。

「サシで、決着つけようぜ」

そう言われて榛原は死に逝く体に鞭を打って抜刀した。
刃介も組員から渡された一本の刀を抜刀する。

正直な話、榛原はもう何もせずとも死ぬ・・・・・・恐らく半日ともたずに死ぬだろう。
だが、だからこそ斬らなければならない。
彼をこのまま薄汚い裏切りのまま死なせるわけにはいかないのだ。
最期は剣士として、仲間として、生涯を終わらせてやる為に。

暗かった夜に薄らとした日の出の光が差し込んでくる。
その日の出が現れた瞬間に、二人は全力で地を蹴って駆けた。

「刃介ぇぇぇえ！！」
「啓示ぃぃぃぃ！！」

「「うおおおおおおおおおおおおおお！！！」」

叫びあう二人の剣士。一秒ごとに二人の距離は劇的に縮まっていく。
二人の距離が零となったとき、朝日の光に混じった一閃が成された。
そして、二人の影が交差し終えたて離れた時――

――榛原啓示の身体から、夥しい量の鮮血が流れ出した。

榛原自身は、何食わぬ顔だったが、あるモノを感じ取ったとき、僅かに表情が変わって、ふと後ろを振り返った。
そこには、刃介の身体から伸びて自分に繋がってくる一本の絆があった。
それに気付いた瞬間、より多くの綺麗な絆が、榛原の身体にどんどん繋がってくる。
恐らく榛原にしか視えていないだろうが、周囲を見渡せばこの場にいる刀剣組の者達全てから一本ずつの絆が自分に向って伸びている。

それを心で感じ取ったとき、榛原は今際の際に漸く手にすることができたのだ。
仲間との絆という、本物の『お宝』を――。

「・・・・・・が、とう」

榛原は顔を俯かせ、小さな声で何かを言いかける。
そして今度は顔を上げ、小さいながらもしっかりと聞こえる声でこう告げた。

「あり、がとう」

感謝してもし切れない程の想いの詰まった涙を流しながら、刀剣組組長補佐・参謀の榛原啓示は、親愛なる仲間に見送られながら、暖かな朝日の光を浴びながら、三十歳という若く短い一生を遂げた。

そんな旧友に対して引導を渡した刃介は、眼からたった一筋だけ涙の雫を零して、たった一言だけ呟く。

「大馬鹿野郎」

刀剣組編・完

刀剣組と大集合とありがとう（後書き）

ヤイバカコンボ
キック力：２０トン　パンチ力：１０トン　ジャンプ力：２００ｍ
　走力：１００ｍを３．５秒
身長：２１０ｃｍ　体重：９５ｋｇ　固有能力：刀剣模造（ソードマスター）　カラー：金色　属性：金属
必殺技：我欲刀鉈と我刀真剣

ヤイバヘッド
複眼の色は銀色。
仮面中央に大きくあるヤイバブレードの切れ味は超特殊合金さえも一発で貫通・切り裂く程のものである。またＸ線バイザーとしての役割も果たす為、透明化した敵も容易に発見できる。

ツバアーム
両肩と手首に装着されたツバメタルの効力によって、攻撃を行う時には普段の倍以上のパワーが出力される。またツバメタルの超硬度を活かしての防御も可能である。

ツカレッグ
脚部に彩られた美しい模様のツカパルテンによって両脚への負担は極限まで吸収され、疲労を感じることなく足技を行い続けることができる。

ヤイバスピナー
ヤイバカコンボ専用の手甲型装備。左腕の装着する。
タジャスピナーと同型機で、違いといえばカラーリングとヤイバフ

エイスの模様の違いである。オークラウンに収められた七枚のオーメダルを内部で回転させてローグスキャナーでスキャンさせることによりギガスキャンを発動し、通常のスキャニングチャージを大きく上回る必殺技を繰り出す事が出来る。

尚、エネルギー解放器としてでなく、メダル状の手裏剣を射出したり、刀身を現出させての斬撃や硬度を活かしての防具や打撃武器にもなり、汎用性の高い武器と言える。

デートと新コアと植物ヤミー（前書き）

ＣＯＵＮＴ　ＴＨＥ　ＭＥＤＡＬ！
現在、ブライが使えるメダルは！

リュウ・コア×４
オニ・コア×４
テンバ・コア×４
ハヤブサ・コア×２
ホウオウ・コア×２
ヤタガラス・コア×２
カブト・コア×２
ハチ・コア×２
イナゴ・コア×２
ヤマネコ・コア×２
ジャガー・コア×２
スミロドン・コア×２
バク・コア×２
マンモス・コア×２
イノシシ・コア×２
ゼウグロドン・コア×２
メガロドン・コア×２
タチウオ・コア×２
ヤイバ・コア×４
ツバ・コア×４
ツカ・コア×４

デートと新コアと植物ヤミー

あれから数日後、刀剣組は残ったことには残ったが、色んな意味で奔走した。
まずは他の組織との会合、榛原の亡骸の葬り、傷ついた組員らの治療など・・・・・・正直言って丸三日はフル稼働することとなり、全てを仕事を終えた本山の眼の下には濃いクマが出来たりしていて――――

「大変だったが、お前らのお陰で、大事な物を取り返せた気がする」

かなり気疲れしていたが、その時に浮かべた笑顔と優しい声音は本物だ。
刃介も七実も金女も満足した表情で、

「どういたしまして」
「不悪（あしからず）――良い笑顔ですね」
「取り戻したモノ、大切に持ってろよ」

と、言い返した。
んでもって坂木了はというと、この世界での『お宝』を見られたという言葉を吐き、さっさと別の世界へと行ってしまった。

「いいモン見せてもらったぜ。俺さ、ちょいと忘れかけてたよ。掛け替えの無い『仲間との絆』ってやつをさ」
「そうか。だったらその『お宝』はあの場に居た者全員の物であり、あの場にいた全員一人一人が持つべきモンだな」

お互いに決して演技ではできない表情を顔にして、彼はこの世界か

ら居なくなった。

そして・・・・・・

＊＊＊＊＊

トライブ財閥。
それは鴻上ファウンデーションと同盟関係にある世界屈指の巨大企業の一つ。
受け持つ分野は大きく分けて三つに及ぶ。
一つ目は地球上に存在する多種雑多な生物達の研究。
二つ目は高性能バイクやロボット工学の研究。
三つ目は多種多様な娯楽施設（レジャーランド）の運営などである。

そんなトライブ財閥が近日中にオープンする予定である大型遊泳施設・マリンブルーに、トライブ財閥会長のルナイト・ブラッドレイン・シルフィードと我刀流二十代目当主の鋼刃介は二人っきりでそこに居た。

白髪の無造作ヘアに鮮血のような赤い瞳。黒い着流しにゆったりとした黒いカーゴパンツ。
金髪に緑色の瞳。服の一部分を思いっきり盛り上げる爆乳とそれに見合う抜群のプロポーションと美貌。

既に建設工事も完了し、各種プールの準備も万全。

後はこの二人がモニターして問題なければ、予定通りの日程に開園することとなる。

「さーてと♪今日は全力全開で楽しんじゃうわよ！」

「あぁそう」

刃介と腕を組みようにして自慢の爆乳を押し当てつつ歩くシルフィード。

刃介は何時ものように冷静沈着な態度である。

どうしてこのＶＩＰ二人組が直々にこんな場所のモニターをやっているかというと、それはシルフィードの心情に大きく関わっているのだ。

ただ単に描写的な説明だけでは少々味気ないので、本格的回想にて説明する事にする。

＊＊＊＊＊

回想場面。

昨日の昼間において、刃介は会長秘書のバット・ダークに呼び出されていた。

場所はトライブ財閥本社ビルのロビーだ。

最早カード云々の身分証明をせずとも顔パスで出入りできるようになった刃介の存在は社員たちからすれば名物化間近の人物だったりする。

「珍しいな。シルフィードではなくお前が俺を呼ぶとは。しかも部屋ではなくロビーで」
「まあ、今回の話は個人的なものですから」
女物のビジネススーツでバッチリと決めたダークブルーの頭髪をした麗人のバット・ダークは、何時も通りの表情で話し出す。
「実は会長、ここんトコ元気ないんですよ」
「血でも足りなくなったのか？」
「それだけなら直に貴方を会長の寝室に呼んで会長と乳繰り合わせます。しかし今回はそれだけではダメなのです。最近の会長はやたらと溜息ついたり遠い目をしたりする始末」
妙に真面目な口調で語るがゆえ、なんだか反論しにくい。
「率直に言います。鋼さん、会長とデートしてあげてください」
「・・・・・はひ？」
素頓狂な声が漏れた。
あまりに意外な注文で。
「あ、七実さんのことでしたらご心配なく。既に私の方で許可を得てますから」
「おい、待て「それから”どうぞお互い、気が済むまで”とまで仰っていました」コラ待たんかい！！」
なんか自分の意見を無視するバットに刃介が怒鳴った。
「それじゃあ何だ！？既に逃げ道は無いのか！？デートするしかな

いのか！？逃亡すればヘタレ決定か！？」
「少なくとも会長ほどの爆乳美女を一日中侍らせられるんですからね。逃げたらもう男じゃありませんよ」
バットのどこまでも冷静な声音が胸の表面にチクチクと刺さってくる。
「それから、此間得たセルメダルは全部で３００００枚でしたね」
「それがどうした？」
セルメダル３００００枚。
それは変体刀強奪事件と刀剣組事件で倒したメッキヤミー一体とツルギヤミー千体を倒して得たメダルの総量だ。契約に従い、ブライ陣営が１８０００枚、トライブ財閥が１２０００枚ということになった筈だ。
「セルメダル２０００枚でどうで「是非遣らせて貰おうじゃないか！」・・・・・宜しくお願い致します」
あっさりとメダルの魔力に惹かれた刃介。
何処までいってもやはりこの男は我欲の塊である。
＊＊＊＊＊
場面回想終了。

要するに今この二人は業務（モニター）という名の逢瀬（デート）の真っ最中なのだ。
勿論オープン前なので今この場所には二人以外の人影は無い。正に貸切状態もいいところである。
しかもシルフィードはこれだけのシュチュエーションで想い人と二人っきりでデートを堪能できるとあって普段以上にハイテンションだ。

しかも今日は雲ひとつ無い快晴で日差しも強い方だ。
例え水着で泳ぎ回っても一切合財問題ない気候条件である。

「なあシルフィード？」
「何かしら？」

未だ刃介の腕に抱きついて柔らかな爆乳（バスト）を押し当てるシルフィードに刃介自身が訊いた。

「今日の格好は水泳とは無縁なんじゃないか？」
「あら、貴方の好みに合わせたつもりよ」

簡潔に述べると、シルフィードは巫女装束姿だ。しかもブロンドロングヘアも見事なポニーテールにしている。

「知ってるのよ。貴方が巫女萌え且つポニテ萌えだって事くらい♪」
「何時知ったんだよ！？つーかどうやって俺の性癖リサーチしやがった！？」
「好みなのは否定しないのね」

シルフィードはくすくすと妖艶に笑う。
刃介は何気にこの女の微妙な怖さを今更ながらに知るのであった。

「まあ此処の調子を測るには、やっぱり施設で泳ぐしかないでしょ！」

「やっぱそうなるのか。つーかお前水着持ってきたのか？見たところ今着てる巫女装束しか持ってないようだが」

言われてみればシルフィードは完全に手ぶらだ。

手荷物はおろか装束のうちに何かを忍ばせている様子すらない。

まあ、巫女装束なんかをノーパンノーブラの爆乳美女が着たら、袖以外の隠し場所などないのだが。

「大丈夫大丈夫。ちゃんと水着販売店も完備してあるから」

「流石に用意がいいな。伊達や酔狂で会長はやっちゃいないと言う訳か」

「いいから早く行きましょ！お互いに似合う水着で、思う存分遊びましょ♪」

＊＊＊＊＊

トライブ財閥の重要資料室。

そこにはバット・ダークがいた。

それから白いライダースーツを着込んだ長身の青年、凍空吹雪が居た。

そして虚刀流の神業的異端児、鑢七実がいた。

刃介とシルフィードが視察（デート）に勤しんでいる頃、三人は８００年前より続くオーズやブライとグリード達の戦いの記録。それにオーメダ

ルについての資料が数多く並ぶこの場所で何やら重要そうな話題をすることとなった。

三人は些か薄暗い部屋の中央にある大きな円形のテーブルを三つの椅子に座って囲んでいる。
テーブルには大きくて分厚いケースが置かれてあり、明らかに『重要』な物が入っているのが丸分かりだ。

「それで、わざわざ私達二人を分断してまでするお話とは一体なんなのでしょうか？」

七実は何時もの丁寧な態度で訊いた。

「いえ、訊くまでもありませんね。大方その大事そうな箱に入っている中身のことなのでしょうね。それも私にとっては『重要』な何かが」
「・・・・・・相変わらず鋭い指摘ですね。ほとほと恐れ入りますよ」

バットは両手をあげて降参しました、とでも言う風にする。

「ま、ハッキリ言っちまうと、この中には会長が四百年前にとある刀鍛冶から貰ったものが入ってるんすよ」

吹雪はケースを指差しながらそう言った。

「四百年前。我刀流十代目当主の鋼劉十が死闘の末に真庭竜王を封印した数日後、会長はソイツとであったらしいんすよね」
「それでこれの中身を貰い、今の今までこんな場所で神様みたいに特別扱いしていたというわけですか」

七実はその程度の説明で何となく悟り――はぁ、という溜息を吐き出す。

「そうつんけんしないで欲しいっすね。確かに鋼の旦那の恋人であり、刀を務めてるからには、他の女と逢瀬をされるというのはムカツクやもしれませんけどね」

吹雪は宥めながらも話を本題に持っていこうとする。
そして話を一気に進行させるため、ケースを開封して中身を見せた。

ケースの中にはある物が八枚封入されていた。
飛翼竜（ワイバーン）と悪竜（ドラゴン）の姿と頭が描かれた紫のコアメダル。

「・・・・・・・・・・・・・」

七実はその八枚のメダルをただじっと見ている。
見て、見切り、見抜き、見極めていく。

「成る程。そういうことですか」

そうして一人で納得する。

「グリードは本来九枚のコアによって形成される存在。ですか貴方のような例外の如く、それを越えた枚数のコアを秘めた者、竜王のように複数種類のコアを宿す者もいる」

バットは静かに口を動かす。

「我々の見方で言えば、この八枚のコアは、貴方が取り込んで初め

て最大の効果を発揮する者と考えています」
「オニコアとテンバコアが肉体、ワイバーンとドラゴンが能力――そしてリュウコアは肉体の能力の懸け橋と、俺っち達は思ってるっす」

七実はそう言われると、自分が完全復活できない現状に更なる理解を得る。
そしてコアを半分手に取り、キョトウとなった。

『では、試しに四枚ほど入れてみますね』

七実は掴んだワイバーン二枚とドラゴン二枚をそのまま胸板に押し込み、体内に吸収した。
すると、七実の身体からは異様とさえ言えるほどのオーラが不気味な色を帯びて現れる。
そのオーラの様子から見て、キョトウの身体と上手く同調しているのだろう。

『確かにこれは私が宿すべきコアのようですね』

これで七実の中にあるコアメダルは、自身の九枚と竜王の十五枚、そして今取り込んだのを累計して２８枚ということになる。
これだけのコアメダルを収めて尚暴走せずにいるのは流石というべきだろう。
もっとも、同じように二十枚以上のコアを体内に隠し持っている刃介も相当のものだが。

『さて・・・・・・』

キョトウは残りの四枚を手に持った。

『残るは四枚』

その時の声音は、グリードの姿に吊り合うほど、邪悪じみたものだった。

＊＊＊＊＊

所は戻ってマリンブルーの水着売り場。

刃介は早々にゆったりとした丈が長めの黒い海パンに着替えていた。

一方でシルフィードは未だ水着の選択及び試着などで決めかねているようだ。

些か退屈な時間を刃介は過ごしていた。

（あの御人好し、今頃どうしてるのやら？）

ふと思い浮かんだのは、自分と同じような境遇にある男のこと。

欲望のなんたるかを知りながら、彼自身は欲望を持たない。

（まぁいい。どっち道、何時か出会いそうな予感がするしな）

「おっ待たせ～～♪」

考えが途絶えた直後にあのお気軽な声が聞こえてくる。

「大人水着（バカ）」

それが刃介の真正直な感想という名のコメントである。
シルフィードの水着は黒いビキニだ。そこまではいい。
――だがしかし、水着の形状には大いに問題がありまくりだ。

通常ビキニという水着は乳房と股間を覆い隠す布とそれを身体に固定する為の紐で構成されている。
けれどもシルフィードの場合はその紐部分がかなり細く出来ている。
ブラ部分は面積が極小の三角形で乳首をギリギリ隠す程度であり、パンツ部分も恥部をギリギリ隠す程度でTバックのようにお尻を露出させている。

一言で水着の種類を述べてしまうとマイクロビキニと呼ばれる種類のものだ。だがしかし、露出具合は凄まじい為、この場合はヒモビキニとも言えるかもしれない。
構造が構造なので下手に激しい動きをすればポロリは当たり前だったり結んである紐が簡単かつ一遍に解けて全裸になる恐れがあるトンデモ水着だ。

おまけにシルフィード自慢の爆乳と括れた腰と淡く実ったお尻がより一層エロさを倍増させている。
もし今此処が貸切状態でなければ全力を持って着替えさせたい格好である。

（・・・・・もう何も言うまい・・・・・）

シルフィードの淫乱コスプレ趣味をこの上なく熟知している刃介は文句を述べる気力さえ萎え出していた。

「ねぇねぇ！最初はどこで遊ぶ？」

最早彼女の頭の中ではデートが９０％で仕事が１０％な感じになっていることだろう。

「・・・・・んじゃあ、ここはセオリー通りに――」

刃介は超ドエロ水着のシルフィードと一緒に歩きながら冷静な思考を保っていた。

出来る限りこのデートを楽しもうという気持ちはあるが、何故か興奮するという感情は沸き難い。

普通の青年ならこんな格好をしたシルフィードに劣情しそうなものだが、刃介は違った。

七実の存在というストッパーがある所為か、それとも刃介自身の精神力的なものなのか。

（そういえば俺・・・・・七実と出会うまでは、女に欲情したことなかったな・・・・・）

と、何だか『戦い』以外は無色透明に近いバトル全開な青春時代を思い出しつつ、刃介は溜息を吐き出す。

いや、青春時代を終えて尚、ただただ損得に拘って来たガメつい生涯だったような気がする。

「ちょっと、何一人で考えてるのよ？折角のデートなのに・・・・・」

シルフィードは不満そうに頬を膨らませて抗議する。

「ああ、悪い悪い。・・・・・にしてもさ」

「ん・・・・・・？」
「お前さ、案外なことに可愛いトコもあるじゃねぇか」
「にゃ・・・／／／／／／」

予想も無く自分の心を射止めに掛かってくる刃介の無自覚な一言。

（って、私が魅了されてどうするのよ！ダメよ私、こんなんじゃ！
今日は積りに積ったモノ全てを打ち明ける為に来たのに！）

自分に対する叱責を行うシルフィード。
普段は色香タップリのお姉さんでも、惚れた男の前では可愛らしい小猫ちゃんとなんら変わらないようだ。
例え齢８００越えだろうと、ルナイト・ブラッドレイン・シルフィード――その本心は恋に一途な乙女である。

「あ、そうそう」
「ん・・・？」

シルフィードは何かを思い出したように後ろを振り向いて少し歩き、近くの売店からある物を拝借してきた。

「オイルか？」
「正解よ」
「・・・・・俺に塗れってか」
「御名答♪」

何となく定番のイベントを察する刃介にパチパチと気軽な拍手をする。
妙に期待の篭った瞳で見つめてくるのは恐らく気のせいではないだろう。

シルフィードは刃介の手にオイルを手渡し、彼女自身はうつ伏せの状態で寝そべる。
勿論、刃介がオイルを塗りやすいようにと、ブラとパンツのヒモを解いている。

「はぁ」

刃介は溜息をつきつつも、キャップを外してオイルを手につけてシルフィードの背中に塗り始める。
ただし、この先を語るとこの小説は確実に場違いな事態に直面する為に割愛するが、ただ言えることは一つだけ。

シルフィードは自慢の身体と色香で誘惑する筈が、逆に刃介のオイル塗りテクニックに骨抜きにされてしまったという。しかも今までに無い喘ぎ声つきで。

＊＊＊＊＊

刃介とルナイトが本格的にデートを開始したころ、とある花屋で一人の古風な美青年が花を買い求めに来ていた。
店員の女性も見惚れてしまうような端正な顔立ちは、見様によっては女と見違い兼ねない中性的な美貌だ。着ている者も江戸時代の髣髴とさせる和装で、長い髪を総髪にしている。
そして何より、華奢な体付きに反して、その美青年からは明らかに超一流の剣士の雰囲気が漂っていた。未だその腰に刀を一本も帯刀

していないというのにだ。

「その黒いのと白いのを頂戴するでござる」

喋り方まで古風だ。

「は、はい！ありがとうございます！」

店員は若干テンパりながらも美青年が指差した黒百合と白百合の代金を受け取って品物を渡した。

「では、拙者はこれで失礼するでござる」

美青年はそういって立ち去っていった。

だけど、店員を含めた大半の人間は見当がつかなかっただろう。

その美青年が二種類の花を買い求めた本当の理由など。

美青年は誰の目にも付かない寂れた場所にまで辿り付くと、買った花を地面に置き、懐から有る物を二枚取り出した。

それは、セルメダルだった。

「欲望に、ときめいてもらうでござる」

すると、黒百合と白百合には硬貨投入口が現れた。

――チャリン――

美青年は二種の花に一枚ずつセルを投入した。

するとどうだろうか？

――メキメキメキ・・・・・・・！！――

黒百合と白百合は凄まじ過ぎる激的スピードで成長し、一気に怪人の姿に突然変異したのだ。

それは正しく、クロユリヤミーとシラユリヤミーと呼ぶべきだろう。
因みにクロユリヤミーは男性的でシラユリヤミーは女性的だ。

「まずは小手調べ・・・・・・行って来るでござる」
『『仰せのままに』』

二体のヤミーは全力で跳躍し、主からの命令を執行しに向った。
美青年はそれを暫し眺めて何処かへ去ろうとしたが、

「おい小僧」

一人の男の声が後ろから聞こえてきた。

「どうだ首尾は？」
「まだ判らんでござるよ」

後ろから出てきたのは和装で編み笠を被った男だ。

「それにしても、お主を含めた拙者らの紛い者を造ってまで完全としたい物なのかが、些か疑問に残るのでござるが」
「抜かりはねぇさ。完了作が側についてることだし、俺の選んだ血刀（けっとう）に間違いは無い」
「それならば、拙者だけが失敗作のようでござるな」
「そう文句垂れることはねぇ。きっと面白いモノが見れるぜ」

欲望の渦がまた、勢いある螺旋を描き出す。

「それよりも、何時になったら拙者の腰に刀を差す日が来るのでござるか？」

「さり気に自虐ネタに走ったな。まぁ心配すんな。そう遠く無い――近い内に取りに行けば良い」

編み笠の男はその後、ある刀の名前を口にする。

「お前の薄刀『針』をな」

＊＊＊＊＊

再びデート場面。

一言で述べると、シルフィードは膨れっ面でプールサイドに寝そべっていた。

どう考えても機嫌を良くするどころか悪くした者のする態度だ。

「おい、どうしたんだよ？」

「フンッ」

原因は刃介にあった。

流れるプール、ウォータースライダー、津波プール、洞窟探検アトラクションといった各種の場所を回った二人だが、シルフィードの度重なる色仕掛けにも刃介の反応は妙に薄く、彼女は結果としてこんな膨れっ面状態なわけだ。

ついでに言うと、逆に刃介が優しい笑顔を言葉を直球に放ってきたために、胸をキュンとさせられてしまったのも一因している。

「全くよぉ。まだ此間の報酬さえ貰ってないと言うのに」

「・・・・・・・・・・・・・」

シルフィードは刃介が呟くと顔をそむけてしまう。

「一体なにが不満なんだよ?ちゃんとエスコートしてやってるだろ?」

確かにエスコートは完璧にこなした。

しかし、完璧すぎるエスコートは逆に気を萎えさせるものだ。

「もういいわよ」

「はい・・・・・・?」

「貴方には理想の人が傍にいるんだし、こんな厚手がましい女の体を見ても興奮さえしてくれそうにないし」

「お前、何言ってるんだ?」

刃介よ。お前は好い加減気付け、鈍感な刀野郎めが。

「・・・・・・だったら全部、何もかもぶちまけてあげるわ」

シルフィードは寝そべった状態から一気に立ち上がった。

その際に彼女の瞳にはヤケクソ染みた眼光がギラギラとしていたのが見えた。

そして、息を軽く吸い込んで思い切って言い放つ。

「私は惚れてしまったのよ。貴方の全てにね／／／／／／」

顔を真っ赤にして堂々と愛の告白をぶちかましたシルフィード。
刃介は意表を突かれたかのような表情だが、直ぐに真剣極まる表情に切り替えた。
彼は彼女を傷つけまいと、歩み寄り、静かに暖かく抱き締めてやった。

「ありがとよ、ルナイト」

初めてファーストネームを呼ばれ、恋する吸血鬼の女は、薄らと瞳を潤ませて抱き着き返す。

「でも、すまない」
「いいのよ――でもね、刃介。だとしても私は貴方のことしか、見えてないのよ／／／／／／」

今のシルフィードの恋心には刃介の魂しか無い。
同じ怪物同志とはいえ、あれ程までに自分を易々と受け入れてくれた男。

「今はただ、私の想いが伝わればそれで良いの」

ルナイト・ブラッドレイン・シルフィードは今、吸血鬼として、魔術師として、会長としての全てを一瞬だけ忘れて一人の女として恋焦がれる男に胸のうちを打ち明ける。

そして実に自然な流れで、二人の唇が重なったのだ。
互いに互いの口腔内を舌と舌で蹂躙し合い、厭らしい水音が口から漏れ出し、二人が唇を離すと互いの下には唾液の橋がかかっている。
ルナイトは少しの間だけ刃介と距離をつくり、彼の瞳を真正面で見ながらこう言った。

「貴方が七実ちゃんとは一番に愛し合っていることは重々承知してる。だけど私も貴方のことを諦めたくないの・・・・・だから」
おっと。その先は倫理的にも社会的にも立場的にも拙いぞ」

刃介は指でルナイトの口を塞いで一方的に自分の意見を述べ始める。

「確かにお前の想いは受け取らせて貰った。だけどな、あくまで俺達は同じ目的ゆえに結び付いてるビジネスパートナーなんだぜ?それが一線を越えて愛し合ったら、色々と不都合が出るだろ?」
「刃介・・・・・・」
「まあ、くっ付き過ぎず離れ過ぎず・・・・・ってトコが今の俺らにとって丁度いいんだ。まぁ時折だが、こうして一緒に居てやるがな」

刃介はあくまでも一人の女への愛を貫きたいが一心で、目の前の女の肩を抱きながら少し距離を開かせるように腕を伸ばした。
この状況で報酬がどうのというほど刃介は業突く張りではない。寧ろ差し出して状況の沈静に当たるタイプだ。

「兎に角血でも吸って気持ちを落ち着けろよ」
「・・・・・ごめんなさい。私、色々と無理言っちゃって」
「気にすんな。俺の器はそこまで矮小じゃないっつーの」
「ありがとう。・・・・・カーップ!」

小さい牙が首の皮膚を突き破り、ルナイトの口に血の味を充満させる。
小さく一口ずつで時間をかけて飲んでいくルナイト。
一分もすると漸く満足したのか、彼女は自分から牙を離した。
傷跡から幾らか血が出ているが、刃介はあまり気にも留めずにいる。

「ご馳走様でした」
「お粗末さまでした」

二人は薄らと微笑み合い、さっきまでの空気をさっさと取り払った。
すると刃介は思い出したようにこんなことを言い出した。

「そういえば、お前最近さ、調子がでてなかったと聞いたが」
「ああ、そのことなら大丈夫。今さっき解決したところだから」
「そう、か。んじゃ、とっとと着替えて帰るか」
「うふふ、そうね。また機会があればデートしましょう♪」

ルナイトは何時もの妖艶な雰囲気を纏い直して色っぽい声音でそう宣言した。
今回は仕事以上恋愛未満的関係に押し留まったが、

「次回こそは絶対にね♪」

完全に諦めた訳ではない。
もし正妻になれずとも側室の位置を狙う勢いにあることは、何となく刃介も悟っているがゆえ、そのルナイトが浮かべた極上な満面の笑みに、つい嬉しそうな零し笑いをしてしまった。

（俺って、もしかしたら望む望まないに問わず、意外と幸せが転がり込んでくるタチなんかなぁ？）

もっとも、その代償に人を捨て、平穏を捨て、戦いに身を投じているが、それを差し引いても刃介は今の暮らしに満足している。

その理由は今述べはしないが、鋼刃介という人間（グリード）は、仮面ライダーブライという剣士は、平穏の隙間を縫うようにして在る戦いの中でこそ、最大の輝きという欲望を発揮する存在なのだから。

＊＊＊＊＊

トライブ財閥重要資料室。

キョトウは残る四枚のコアメダルを手に持っている。

観察でも診察でも見物でも無さそうな視線でただただメダルを見ている。

吹雪とバットも今一彼女の真意が掴み切れないのか、緊張感を張りながらそれを見守っている。

すると、

――ヴゥオォォン・・・・・・！――

四枚のコアメダルが紫色の禍々しい光を自発的に放ちだしたのだ。

『どうやらコレ等は、あの人に託すべき物のようですね。メダル自

体もそれを望んでいる』

キョトウは指の力を抜き切ってコアメダルを手放す。
そうすると四枚の紫に光るコアは自らの意思を持ったかのように飛び回り、部屋の外へ――――遂には建物の外へ、さらに遠い場所へと。

「こ、コアメダルが、勝手に・・・？」
「こんな現象が・・・・・・！？」

吹雪もバットも目の前の出来事に驚きを隠せないで居る。
唯一、ことの状況を完璧に理解しているキョトウは、自らの姿を七実に戻して呟く。

「近いうちに見られそうですね。――――龍神のコンボが」

＊＊＊＊＊

刃介とルナイトは元の服に着替える為、水着販売店に再び足を運んでいた。
更衣室にそのまま入れ替わるようにして服を置いてきたこともあり、二人はそのままスムーズに着替えを終える。

刃介は何時もの服装である黒い着流しに黒いカーゴパンツという格好に微妙に久しい感覚がするという何ともいえない心境である。
――――んでもって、

「ごめんごめん、遅くなっちゃったわ」

と、黒い大人水着から巫女装束姿に着替えたルナイト。

何故かはわからないが、身体に帯びた水気がどことなく彼女を何時も以上に淫靡的な色香を漂わせているし、素肌と装束がピッタリと張り付き合って胸の形が服の上からでも見当がついてしまうような状況なんだが、刃介はそれを一々ツッコム気にはなれなかった。

「では帰るとしようか」

刃介は足早に歩いて出入り口のゲートに向った。

だがしかし、そこには新たな戦いを齎す者が二体、佇んでいた。

そこには黒百合と白百合の怪人が居た。

「ヤミーか。しかも植物ってのは初めて見る種類だ。ルナイトは何か知ってるか？」

「解らないわ。少なくとも、私たちが造ったコアのグリードでないことは確かでしょうね」

（となると四季崎って線が強くなるな）

刃介は両腕をグリード化させてブライドライバーと三枚のコアを取り出す。

そして何時もの動作を流れるようにして行う。

「変身！」

≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＥＮＢＡ≫

≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！ＲＩＯＲＥ！ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！≫

仮面ライダーブライ・リオテコンボ。
両手に魔刀を握り締める。

『ブライ。コアメダルの力にて戦う者』
『メダル。欲望の塊であり我等が力の源』

クロユリヤミーとシラユリヤミーは能面のように声音をのっぺりとさせている。

「さて、オメーらみたいのは色々と面倒そうだし、手間隙かけずに一気に刈り取らせてもらう」

ブライはメダルを取り換えるとスキャナーを手に取り、バックルに沿って滑らせる。

≪ＹＡＩＢＡ・ＴＳＵＢＡ・ＴＳＵＫＡ≫
≪ＹＡＢＡＩＫＡ・ＹＡＫＡＩＢＡ！ＹＡＩＢＡＫＡ！≫

そこから金色に輝くヤイバカコンボにメダルチェンジ。
左腕のヤイバスピナーへと間髪入れずにスキャナーをセット。回転するメダル達が自動的にスキャンされていく。

≪ＧＩＮ・ＧＩＮ・ＧＩＮ！ＧＩＮ・ＧＩＮ・ＧＩＮ！≫
≪ＧＩＧＡ　ＳＣＡＮ！≫

セルメダルだけで発動したギガスキャンによってヤイバスピナーは銀色の波動を渦のように纏っていく。
ブライは左手を一旦引いてから。

「チェストォォォ！！」

一気に前に対して正拳突きの要領で押し出した。それによって七枚で形成されたメダルの円環が発射された。その攻撃は二体のヤミーに直撃するかと思いきや、

『『セルメダルもまた欲望。我等の糧となりしモノ』』

と口にして、体から多数の蔓を伸ばして円環攻撃（セルメダルたち）を見事に捕らえた。それればかりじゃなく、メダルの攻撃エネルギーを己の物として吸収してしまったのだ。

「ッ・・・・・成る程な。流石は植物――――根に近づく栄養は残さず吸収するってか」

ブライは感心した風にするが、ショックを受けたようではない。寧ろより効果的な攻撃を編み出そうとしている。

赤い鳥系メダルを三枚、リュウコアを一枚、カブトコアを一枚、ヤマネココアを一枚セットして――――あとは一枚のセルメダルを嵌め込めば準備完了。

「今度は火炎をベースに属性のごちゃ混ぜだ」

≪ＨＡＹＡＢＵＳＡ・ＨＯＵＯＵ・ＹＡＴＡＧＡＲＡＳＵ！ＲＹＵ・ＫＡＢＵＴＯ・ＹＡＭＡＮＥＫＯ！≫

≪ＧＩＧＡ　ＳＣＡＮ！≫

ブライは植物型ヤミーといえど、属性上は防ぎ切れないであろう効力を持ったメダルを選んでスピナーにかけた。

彼自身、これで片方のヤミーを片付けられると確信していたが・・・・・が。

それは不発に終わった。

――ビュンビュンビュンビュン！――

突然にも四枚もの紫色のコアメダルがブライめがけて飛んできたのだ。

（あのメダル・・・・・七実ちゃん、自分で取り込まずに・・・・・）

それを見たルナイトは事の顛末を高精度で悟った。

しかしブライは技を発動するタイミングでいきなり見たことも無いメダルが自分に向って来たこともあって混乱していた。そのせいでヤイバスピナーも上手く作動せずに停止してしまう。

「なんだよ・・・？この紫色のコアメダルは・・・！？」

――ズブン、ズブン、ズブン、ズブン！――

そして、四枚のメダルはブライを中心に回転するのをやめ、勢いに乗ってローグラングサークル・・・・・否、ブライを媒介として刃介の体内に侵入したのだ。

「んあ・・・・・ッ！！？」

それにより紫電が体中に走るブライ。

そのまま片膝をついてしまい、変身まで解けてしまう始末。

「じ、刃介！」

ルナイトは刃介に駆け寄って身体を支える。
如何にグリード化しているといえど、かなり無茶苦茶な方法で強力なコアが四枚も入り込んで来たこともあり、刃介の体力はある程度ながらも消耗させられていた。

――ビリビリ！バチバチ！――

未だ全身に紫電が走るこの状態でヤミーに攻撃されれば最悪の結果しか残らない。
だがどういうわけか・・・・・・。

『・・・・今回は此処までだ』
『また合間見えよう、ブライ』

と言ってどっかへと跳び去ってしまった。
ルナイトは戦闘続行という事態が降り掛からなかったことに心底安堵させられた。

「チッ――ちょいとコイツは、ヤベぇかも、しんないな・・・・・・」

刃介は見るからにフラついた足でよろりと立ち上がる。

「取り合えず病院で検査くらいした方がいいわよ？」
「いや、別にいい。オーメダル関連のことが現代医学で如何にかなるとは思えん。それならお前に治療してもらうほうが遥かに気が楽だ」

「ご指名してくれるのは嬉しいけど・・・・・・」

ルナイトは少々表情を渋らせた。
確かに回復や治療関係の魔術も会得してはいるが、メダル絡みの特殊なダメージまでは癒せるかどうかは判断しづらいところだ。

「でもね、やっぱり念を押して一応検査くらいはしましょうよ。あくまでダメージの回復は私や七実ちゃんがするから」
「・・・・・・・・・・・・（はあ、仕方ない。まあ休息場所くらいにはなるか）」

刃介は黙りつつも、それでいて内心ではルナイトの気遣いも考慮しておくことにした。

「一応言っとくが、患者のあれこれを詮索しないトコで頼むぞ」

今から一日足らずのうち、その病院でかつて共闘した男に再会することなど、現時点において刃介は未だに知る由すらなかった。

物語の歯車がまた一つ加わっては回り、そして歴史の一説がまた一字一説が増えていく。
渦巻く欲望によって際限なく人の世は様々な在り方を見せては変える。

そこには例え、英雄であろうと怪物であろうと、例外はないのである。

デートと新コアと植物ヤミー（後書き）

次回、仮面ライダーブライ！

恐竜と対極の器と荒ぶるコンボ

恐竜と対極の器と荒ぶるコンボ（前書き）

仮面ライダーブライ！

前回の三つの出来事は！

一つ！ルナイトの不調を回復させるため、刃介がデートに借り出される！

二つ！植物系ヤミーが誕生！

そして三つ！八枚ある紫のコアメダルのうち、四枚が刃介の体内に入り込んでしまった！

恐竜と対極の器と荒ぶるコンボ

刃介が病院に赴いた頃、植物ヤミーとは別の脅威が今や遅しと力を滾らせていた。
街のとある高層ビル――その屋上には不気味な二つの人影がある。
いや、それを人影と表現するには語弊があるだろう。

一言で述べてしまえば、そこには翼竜のような怪人が二体居た。

『渦巻いている』

男風な怪人は呟いた。

『渦巻いているな、欲望が』
『人の命の、源が・・・・・・』

すると横に居たもう一体の女風な怪人が漏らすように呟く。
よく見れば遥か超古代に絶滅したプテラノドンを擬人化したような二体の怪人は街を見下ろす。

『では、全てを無に・・・・・・』
『無に、還す』

両腕と一体化した翼を広げ、二体のヤミーは空気を切り裂きながら、宙を舞って行く。

＊＊＊＊＊

ルナイトの勧めによってとある病院で検査をすることになった刃介。基本的な検査項目の殆どは勿論、レントゲンにコアメダルの影が映るかどうかも試した。

しかしながら結果は予想に外れず全て異常なし、というものだった。だが刃介はこの結果を当然だと思って疑わなかったし、寧ろ幸運とも感じた。

もし仮に万が一メダルがレントゲンに映る代物だったら、体内に隠しているほかのコアやブライドライバーも見つかって問い質される恐れもあったからだ。

「これで粗方の検査は終了か？」

「えぇ。これと言った異常は見受けられませんでした」

「それは良かったわ」

医者の診断にルナイトは胸を撫で下ろした。

因みに今のルナイトは巫女装束などという目立ちまくりなコスプレではなく、スリット入りロングスカートにセーターという普通な格好をしている。もっとも下着などないので爆乳が布を押し上げているのだが。

「それにしても、奇妙なものですね」

「なにがだ？」

「実はちょっと前に気絶した患者さんが運び込まれて血液検査やレントゲン撮影込みで検査を頼んできたんですよ。体の中に何かが入ったかもしれないってね」

若い医師はそう語る。
すると刃介は立ち上がった。

「そいつは今どこにいる？」
「え、病室で寝てる筈ですけど」
「わかった。ルナイト、来い」
「え、ちょっと、待ってよ！」

聞くや否や足早に診察室を出る刃介とそれについていくルナイト。
廊下を無遠慮に歩く二人は格好や容姿も相まって実に浮いている。

刃介は闇雲に探す気が無いのか、近くに居た他の医者に聞いてみることにする。

「あの、すまないが『火野映司』という男は今この病院にいるか？」
「いますよ。この病室でお休み中です」

と、医師はすぐ後ろを指差す。そこには病室のドアがあった。

「彼のお知り合いですか？」
「まあ知り合いと言えば知り合いだな」

刃介は適当な言葉で誤魔化す。
だがしかし、内心では何だか実際に顔を会わすのに抵抗があるのだが。

「さて、どう切り出すかな？」

刃介が顎に手を当てて考えていると、

「だったら勢いある私に任せなさいっ♪」

等と言ってルナイトが戦陣を切って病室に入っていったのだ。
刃介は少し驚きつつも、ここはルナイトの小さな勇気に感心しつつ、後に続くようにして病室に入った。

病室の中にはベッドで休んでいる一人の青年を囲うように三人の男女がいて、少し奥にあるテーブルと椅子を一人で悠々と占拠する者を含めて五人居る。
突然の来訪者に皆が戸惑うなか、ルナイトは奥にあるテーブルと椅子を占拠して居る一人――金色で右より髪型をした青年に向ってこう言った。

「８００年ぶりね、アンク？」

アンクと呼ばれた金髪の青年は椅子から立ち上がり、驚愕の表情を示す。

「テメッ――何故此処にいるんだ！？」
「ご挨拶ねぇ。生みの親に対してソレはないんじゃないの～？」

アンクの怒鳴り声にも構わず、ルナイトは何時もの妖艶な態度で返答している。
ルナイトは困惑しているほかの面々の為、自己紹介しておくことにした。

「皆さん初めまして。私の名はルナイト・ブラッドレイン・シルフィード。トライブ財閥の会長を勤めてる者よ」
「え・・・！？貴方がシルフィード会長！？」

ルナイトの名乗りに生真面目そうな青年が反応する。

「えっと、貴方は・・・？」

「鴻上ファウンデーションの後藤慎太郎（ごとうしんたろう）です」

後藤は丁寧に頭を下げて名乗った。

すると隣に居る屈強な男が大きなタンクを傍らに名乗る。

「俺は伊達明（だてあきら）。知ってるかもしれないが、仮面ライダーバースだ。宜しく！」

「セルメダル集めで一億狙ってるそうね。今後とも宜しく」

「おい、そろそろ俺もいいか？」

そこへ刃介が割って入ってきた。

「貴方は誰ですか？」

そこへ黒い長髪をした大学生くらいの女性が尋ねる。

「俺は我刀流二十代目当主、鋼刃介。そこのお人好しと似た境遇にあるゴロツキだよ」

「い、泉比奈（いずみひな）です。――あの、映司くんと同じって・・・・・・？」

「まさか、お前がこの時代の・・・・・・」

アンクは赤い右腕を現しながら聞いた。

刃介は隠すことも無く両腕を変化させ、ベルトとコアを取り出した。

「あぁ。俺が今代の仮面ライダーブライだ！」

すると最後の一人、ベッドで休んでいる青年――火野映司（ひのえいじ）が驚きを

禁じ得ずにいる。

「えっと、俺はこの場合・・・・・・どういえばいいのかな・・・・・？」

しかしながら、刃介に投げかけるべき言葉が見つからなかった。

＊＊＊＊＊

重要資料室。

「何故コアメダルが独りでに？」

「もしや、貴方の意思ですか？」

バットと吹雪は七実にそう問い質す。

「恐らく、刃介さんの強大な欲望に引き寄せられたのでしょう。多数のコアの力を一手に掌握する程の深遠な欲望に」

七実はこれといって動揺することなく、真顔で答えた。

「そもそもコアメダルは欲望という思念の力で出来上がっているようですし、より強い力を求める大きな欲望に惹かれるのも自然の通りではないでしょうか？」

バットと吹雪はその説明で納得するしかないと結論付けた。

なにしろあの紫のコアは元を正せば七実は秘めてこそ真価を発揮するのだから。
いや、コアの力を装着者に余す所無く宿すブライもまた同じと言えるだろう。

「では私も行くと致します。刃介さんのいる場所へ」

そう述べると、七実は立ち上がって部屋を出て行った。

＊＊＊＊＊

病室から出た際、伊達と後藤は用事があって一旦別行動を取る事になった。――が、その代わりというべきか？
病室の近くにスタンバっていた男が一人。

男の名前は坂田（さかた）――――簡単で高額なバイトをやっていたつもりが、昆虫王ウヴァ（グリードの）に利用されてセルメダル徴収を行っていたことが判明し、何よりセルメダルの報酬で得た金銭を恩師の家族に寄付していたら、その家の母親が寄付金に甘えてダメ人間になってしまったという、まさに骨折り損な人間である。

因みにウヴァが行っていたセルメダル収集方法とは、とある金融会社の人間全てに屑ヤミーを寄生させることで一人一日一枚ずつのペースでセルメダルを増殖させ、それを時間通りに徴収しに来た坂田に渡すというもので、時間こそはかかるが、屑ヤミーの隠密性や使う人数によっては大きく稼げる遣り方に刃介は感心して――――

（今度、ルナイトに頼んで社員どもに・・・・・・）

などという腹黒いことを目論んでたりしたが、一応気にしないでおくことにする。

さらについでに書き加えておくと、刃介は坂田を有無を言わさず強制撤去させた。

少し可哀相にも思ったが、これから話すことはメダルと何の関わりも無い、ただ単にヤミー生成者になってしまっただけの一般人を交えてする話題ではないからだ。

刃介の必死な説得により、坂田は渋々帰って行った。

「・・・・・・ふぅ」

刃介は病院の直ぐ近くにあるベンチに腰かけ、溜息を吐き出す。

「今日は正に運命大激動だな」

「そうね。デートしてたらヤミーが来るわ、コアメダルが体内侵入するわ、おまけに病院でオーズと出くわしちゃうんですものね？」

隣にルナイトが座って相槌を打ってくれた。

「あの、それで俺たちと話したいことってなんなんですか？坂田さんを追い返してまで・・・・・・」

「いや、ブライの判断は正しい。下手に只の人間に聞かせていいような事柄じゃねぇ」

と、映司の疑問とは裏腹にアンクは珍しく他人を評価した。

「それにしても、まさか貴様が当時の姿のまま８００年間を生き永らえていたとはな」
「うふふ。貴方達グリードは死んだのではなく封印されただけだったのよ？ならば、後世を見守る為にも簡単には死ねないでしょ？」
「ふっ。その為に態々人を捨て、吸血鬼と成り果てるとは・・・・・・」

アンクはルナイトに対して呆れたようにしている。
だがルナイトは何時もの妖艶な態度で受け流している。

「でもねアンク？これはコアを生み出したと同時にグリードを生み出してしまった私の義務でもあるのよ。禁呪を使って吸血鬼化して、もう二度と人間には戻れないけど、決して後悔だけはしていないわ」
「ちょ、ちょっと待ってください！言ってることの意味がわかりませんよ！」

映司は知らないところで進んでいく話の流れに歯止めをかけようとする。

「言ってる意味なんてそのまんまじゃない。私はね、８００年前のオーメダル開発に携った一人なのよ」
「そして、８００年前のグリード誕生から封印の生き証人ってわけだ」

トドメを刺さんとする勢いで刃介が述べると、

「「えええええええええっっ！！？」」

映司と比奈が大声をあげて驚いた。
すると、

「声がデケェんだよ！」

――バゴンっ！――

刃介が右腕で二人の頭を殴った。

しかも、刀を連想させる異形となった両腕で。

「イッタ！――って、鋼さん、その腕・・・・・・！？」

比奈は痛がりながらも驚く。それは勿論、映司とて同じだ。

ただし、アンクは冷静な態度だ。

「随分派手に暴れてきたようだな」

「まぁな。両腕だけでなく、最早全身に侵食が進んでいるわけだが」

「あ、アンク！どういうことだよコレ！？」

映司は刃介の体についてアンクに尋ねた。

「簡単なことだ。ブライになった者はオーズを凌ぐ力を振るえる代償に、肉体がグリード化するってことだ」

「その通り。そしてコンボを使うたびに、侵食が進み、体内のコアメダルが増殖していく」

「「――――っっ」」

ここまできっぱりという刃介に、映司も比奈もただただ絶句するしかなかった。

だがしかし、

「鋼さん・・・・・どうして、そんな体になってまで？」

「どうして、だと？ハッ――死ぬ覚悟も無い癖に戦ってる奴に訊かれたくねぇな」

刃介はよーく知っている。

『彼方（あちら）の火野映司』にしろ、『此方（こちら）の火野映司』にしろ、根本的には自己より他者の意思と生命を優先してしまい、常に死と隣り合せであるにも関わらず、己という貴重な戦力を犠牲にしてでも”誰かに手を伸ばす”男だということを。

「火野。本来戦場に出るべきは目的を成し遂げる為に死ぬ覚悟をしてる奴だけだ。――いや、死ぬ覚悟をしてるからこそ、己の命の重みを知ってる奴になって初めて、戦いに出る資格があるんじゃないか？」

「死ぬ覚悟と戦う資格・・・・・・」

「自分一人が怪我すりゃ良い、なんて半端な覚悟で、理想に向っていくのは構わないが・・・・・・その遣り方では何れお前は理想を抱いたまま溺死するぞ」

そんな悟った表情で語る刃介に、映司は何も言い返せないで居る。

アンクは逆に興味深そうな表情をしていて、ルナイトと比奈は複雑そうな表情だ。

（まあ、人殺しの俺と御人好しのオメェとじゃ意見は合わないだろうがな）

「でも、鋼さん」

すると、映司は刃介が思考してる間にこう言った。

「俺はあくまで自分の手の届く範囲で、やろうと思ったことをやるだけですよ」

映司は両腕を左右に伸びし切り、

「例え甘いとか詭弁だとか言われても、俺は俺の腕と手が直接届く範囲で、何とかやっていくだけです」

「・・・・・好きにしろ」

刃介は半ば呆れるように体重を一気にベンチへと預けた。

「だがその前に、ヤミー退治が先決だ」

「ああ。さっきから気配が漂ってきてるぞ」

「っ！行こう！」

刃介とアンクの直感がヤミーの存在を気取り、戦いの場へと駆けて行く。

＊＊＊＊＊

ヤミーの気配を察知し、伊達と後藤と合流した一行は、比奈を安全な場所で待機させた後、気配を追ってビル街へとやってきていた。

「ここか？」

「間違いない」

伊達の質問に刃介が肯定する。

「見ろっ！」

すると後藤が上空を指差す。
そこにはビルの上層が怪しい黒い煙で包まれていた。
伊達は逃げ惑う人々のうちの一人を呼び止める。
「何かあったのか？」
「黒い変な煙が！触れた人が消えちゃって！」
それだけ言うと他の人達に紛れて逃げて行ってしまう。
だが次の瞬間、大きな翼を羽ばたかせながら、一体の異形が上方から舞い降りる。
『フフフフ・・・・・・』
もう一体はプテラノドンを擬人化させた男性的なヤミー。
「恐竜のヤミー・・・・・拙いわね」
「あの翼竜の何処が拙いんだ？」
刃介が些か焦りを見せるルナイトに尋ねようとすると、
『我々は、消し去る者』
「我々？」
プテラ♂の言葉に刃介が首を傾げると、
『ハッ！』
プテラ♂が光弾を発射してきたのだ。

一同はそれを素早くかわし、戦闘準備に入る。

「アンク、メダル！」
「受け取れ！」

映司はアンクから三枚のコアを受け取り、オーズドライバーを装着。
伊達もメダルタンクを降ろしてバースドライバーを装着し、刃介もまた然り。

――チャリーン！――

伊達が右手でセルメダルを弾いて左手でキャッチし、それをバースロットに投入してグラップアクセラレーターをキリキリと回す。
映司と刃介はバックルにメダルをセットし、オースキャナーとローグスキャナーを手に取り、コンダクターを滑走路にしてコアをスキャン。

「「「変身！」」」

――パカン！――

≪ＴＡＫＡ・ＴＯＲＡ・ＴＡＫＯ≫
≪ＲＹＵ・ＨＯＵＯＵ・ＴＥＮＢＡ≫

血錆色の龍の頭、紅き鳳凰の腕、血錆色の天馬の足をした仮面ライダーブライ・リュウオウテン。
赤い鷹の頭、黄色い虎の腕、水色の蛸の脚をした仮面ライダーオーズ・タカトラタ。
そして銀色のアーマーと黒いボディスーツ、Ｕ字型のバイザーを一瞬赤く光らせる仮面ライダーバース。

三人の仮面ライダーが集まったのだ。

「後藤ちゃん！逃げ遅れた人達の避難宜しく！」

「了解！」

バースは後藤に状況が円滑に進むよう指示を出し、三人でプテラ♂とクロユリヤミーに挑んでいく。

だがそこへ、

――ビュルルルルル・・・・・・！！――

異様な物音を立てながら、何処からとも無く蜘蛛の巣のように張り巡らされていく植物の蔦や蔓。

それを辿って現れたのは、

『ハハハ・・・・・・』

「またお前か」

クロユリヤミーの出現にブライは呆れたように言葉を漏らす。

『我等は欲を吸い取りし者。欲望は命を喰らって輝く』

大仰な様子で語るクロユリヤミーとは真逆に、

『メダルは欲望――――無に還れ！』

プテラ♂が飛行しながらこちらに攻撃をしかけてくる。

「オーズ、そっちは任せた！」

「は、はい！」

オーズはブライの言葉を聞きいれ、垂直なビルのガラスの壁をタコレッグの吸着力で不自然ながらも、地面のようにして立っている。
しかしプテラ♂の機動力のほうが上な為に苦戦させられている。

――パンパンパンパン！！――

ブライも銃口から炎の弾丸を発射する。
普通なら植物の大敵は火炎や冷気と考えるだろうが、

『甘い』

クロユリヤミーは何重もの蔓と蔦の壁を作り上げ、攻撃を阻止したのだ。
防御壁こそはメラメラと燃え尽きたが、クロユリヤミー自体は無傷だ。

そして、

『『フアッッ！！』』
「「「うわぁぁ！？」」」

クロユリヤミーとプテラ♂が発した奇妙な衝撃波によって吹っ飛ばされてしまう三人のライダー。
バースと離れ離れになるようにオーズとブライは階段を直ぐ後ろにした場所にまで吹っ飛ばされた。
追い討ちをかけるように二体のヤミーは、

『大いなる欲望、コアメダル――我が糧とならん』

『コアメダルは欲望。我等の前で欲望は無効』

プテラ♂とクロユリヤミーは対極の言葉を吐き、全身から紫の光がオーズを包み、数多もの蔓と蔦を伸ばしてブライドライバーに絡みついた。

「うあ・・・・・・ッ」

「ま、まさか・・・！」

気付いた時にはもう遅い。

二人の変身は強制的に解けてしまった。

「えっ！？」

「チッ――コアの無効化と、エネルギーの吸収による変身の強制解除か」

「あ・・・・・・」

映司は脱力して階段を転げ回っていくが、刃介は気力で踏み止まる。

（ルナイトが言ってたのはこの事かよ・・・・・・！）

刃介は深く考えなかった浅慮な自分が歯痒い者に思えてきた。

そこへ唯一セルで変身するバースが、

「おォォォオ！！」

勢い任せに突っ込んでいったのだ。

だがそんな計画性の無い攻撃が知能あるヤミーに通ずるわけもなく、

『邪魔だ』

――バギッ！――

「ぐあぁ！」

クロユリヤミーの一撃で吹っ飛ばされ、変身まで解除させられてしまう。

「伊達さん！」

映司は疲れの溜まった体に鞭を打つように伊達に駆け寄ろうとする。だが決して状況は好転しない。寧ろ悪くなっていく。

――バサッ、バサッ！――

――シュルルルル！！――

上空からはプテラ♀、地中からはシラユリヤミーが現れたのだ。

『『フフフフ・・・・・・』』

「そんな・・・！」

「メンドくさくなってきたな」

絶体絶命とは正にこのことだろう。

「火野！ハリガネ！」

「鋼だボケナスッ！」

さりげに自分の名前を間違えた伊達に怒号する刃介。

だが伊達が居る場所、階段の下にある隙間に三人揃って逃げる事は怠らない。

「もう一匹ずついたとはな。・・・・・それにしても誰の？」
「花の方は解らないけど、恐竜のは多分真木達の仕業でしょうね」
「つまり奴らが、映司に入り込んだ紫のコアを・・・・・・」

アンクとルナイトは一線はなれた場所で戦況を見守る。
一方で伊達らは、

「こりゃ一旦逃げるが勝ちだな」
「大賛成だな。一度戦況を立て直すぞ」

刃介はオーズとブライにとって相性最悪なヤミーに対し、準備も無く挑もうなどという愚かしいことは考えず、確実に勝てる機会と状況を望むが、

「「「「「「「「「「キャアアアアアアアアア！！！！！」」」」」」」」」」

逃げ遅れた人達がビルの中に隠れながらもヤミーたちに怯えて悲鳴を上げている。
やはり後藤一人でビル内全員の人間を避難させるのは無理があったのだろう。

「助けないと！」

映司は即座に避難箇所から駆け出していくが、

「って、おい！」

伊達の制止も聞かずに走った結果、

『フン！』

――ドゥガン！――

「うわッ！」

危うくプテラ♂の光弾の餌食になりそうになる始末。

「アホかお前は！？」

「死にてぇのか！！」

そんな命知らずな行動に刃介と伊達は怒鳴り散らした。

「ほっとけませんよ！！二人だってそうでしょ！？」

「生憎俺は医者でな。医者の仕事はまず自分が死なない事だ。できゃ誰も助けられない」

「第一、俺等が死んだら誰が戦うって言うんだ？」

映司は真剣に語る二人の”自分の命”の重みを聞いても、

「だとしても見殺しにはできません。俺に医者は無理そうですから」

――バッ！――

「ひ、火野！」

「あのバカ！」

結果としてなお他者を助けようとする映司。
ヤミーらはそこを狙って、

『『フッ！』』
『『ハッ！』』

双方揃って強力な波動を放ち、映司の直上にあるビルの一部を破壊したのだ。
ドガーンという盛大な爆音と爆炎を背景に、

『『フハハハハハ！』』
『『フッフッフッフ！！』』

二組のヤミーは悠然と去っていってしまった。

＊＊＊＊＊

その日の夜、映司とアンクの居候先であり、比奈のアルバイト場所でもある多国籍料理店・クスクシエ（コスプレ）にて。

「よくその程度の怪我で済んだな」

後藤は伊達に包帯を巻いてもらっている映司の傷だらけな身体を見て呟く。

ルナイトが野暮用で一度財閥に戻り、新たにもう一人加わっている

ので、この場には六人が居る。
因みにアンクは上の階だ。

「すいません」
「前から危なっかしいとは思っていたが、原因はこれだ。他人を助けようとするクセに、自分の命は無視してる」
「そんな・・・俺は死ぬつもりじゃ「それが軽いんだよ！」」

打ちのめすように伊達は強く言った。

「全くだ。間一髪のところで七実が来てくれたからいいものを」

そう、映司の怪我がこの程度で済んだのは遅れて到着した七実が忍法疾風迅で映司の身を救出したからこそなのだ。
当初は七実の外観とグリードであることのギャップに驚く映司たちだったが、そんなことを議論している時間も無く、とっとと映司をクスクシエに運びこんだわけだが。
そして、七実は映司にこう言った。

「火野さん。何が転機になって己の価値を軽んじているのですか？例え遊び半分であろうと、戦いには『死』が付き物です。なのに貴方の覚悟は常に中途半端です」
「・・・・・・・・・・・・・」

黙る映司に刃介が続けて様に言った。

「こう言っては悪いが、死ぬ覚悟をキチンとしてるなら、俺達は何も言わない。だが覚悟も無く賭ける事さえせず、のうのうと戦場に出られたんじゃ・・・・・・ハッキリ言って不愉快だ」

刃介の言葉と声音はまさに一本の日本刀のように鋭く冷たい。

「それに思い出したよ。――――火野、映司」

伊達は治療を終えてカウンターに向って過去を振り返る。

火野映司が欲望を失った理由を。

＊＊＊＊＊

上の居候部屋。

部屋に入って映司が最初に見たのは、高い位置に置かれて赤い布が敷かれたソファで寝転がるアンク。

「・・・・・・大丈夫なのか？」

アンクは珍しく心配する言葉を吐いた。

「ああ・・・・・・・」

＊＊＊＊＊

再び下の階。

「伊達さん、映司くんと会ってたんですか？」
「アフリカで働いてたときにチラっとね」

こう見えても伊達は医者のチームを組んで世界中の貧しい国の人々を治療していた経緯を持つ。
映司もかつては様々な国を自由奔放に歩き回っていたことがあるのだ。

「内戦に巻き込まれた政治家の息子が村を救おうとしたって大騒ぎになってさ」
「そういえば1・2年前にそんなニュースが・・・・・・あの政治家の息子が、火野？」
「え・・・・・・でも私が聞いたのは、女の子を助けられなかったって・・・・・・」

比奈と後藤の意見に、伊達は神妙な顔つきだ。

「――美談は作られる。命をかけて村を救おうとしたのは事実だけど、途中で親が払った身代金で、火野だけが助けられたんだ。・・・・・んで、村を救おうとしたってトコだけ大きく取り上げて・・・・・」
「要するに、見栄っ張りな政治家の親兄弟によって、人気取り(レッテルをは)の材料扱(られた)いってわけか」

刃介は伊達の話を聞いて大体の大筋を読んだ。

「火野の意思は無視、ですか、キツいですね。俺ならきっと・・・・・」
「怒る奴もいるだろうし、ジメジメ腐る奴も居る。――で、偶に妙に乾いちまう奴も居る。火野はそれだ。乾いちまって、自分に対す

る欲が無い」

＊＊＊＊＊

居候部屋。

アンクはソファからおり、椅子に座ってボケーっとしている映司に近寄り、

「お前の方がよっぽど”欲望の渦”にいたとはなぁ」

「まぁね・・・・・・でも、もう忘れた。何時までも拘ることじゃないでしょ？」

映司は椅子から立ち上がり、ベッドに腰かける。

＊＊＊＊＊

一階の営業場。

「そんな・・・どうして・・・」

比奈は虚しそうな声を出す。

「いいのいいの、理解しなくて。あいつなりの立ち直り方なんだろうし。でも、会長が言ってるでしょ？」

伊達は両手を挙げるポーズをとり、

「”欲望こそ生きるエネルギー！素晴らしい！”――ってね」

「我欲の無い人間など、進むことも退がることも無い、退屈な存在になるだけだ」

そこへ、店の扉を開く音が。

「その通り！！」

「・・・・・お前が鴻上光生（こうがみこうせい）か」

行き成りの登場に刃介は驚きもせず冷静に現状を受け止める。

「初めまして、鋼刃介くん！伊達くん共々いい指摘だよ。流石はブライとして幾つ物コアを使いこなし、果てにはグリード化した男だ！君は実に素晴らしい！！我々の出会いにＨａｐｐｙ　ｂｉｒｔｈｄａｙ！！」

鴻上は持ち前のハイテンションさを発揮する。

「んで、用件は？」

「ふふふ。君が”無限の欲望”でコアを支配する器なら、火野映司くんは”欲望の空白”でメダルを受け止める器ということさ」

「ほぉ」

その意見に刃介は興味が沸いてきた。

「人の身でありながらメダルをあれだけ使って暴走せずに済んでいるのもそこだ！」

七実が先を読むように、

「しかし、状況は一変した、と？」

そう呟いたのだ。

「ああ。その重要なことを報せる為に、今日は態々来たんだ」

鴻上が合図すると、同伴していた秘書・里中が持っていた箱の蓋を開ける。

「Ｈａｐｐｙ　ｂｉｒｔｈｄａｙ！！紫のメダルのグリード！！そしてそのヤミー！」

箱の中にはケーキが入っており、ケーキには恐竜を描いた紫のデコレーションが施されている。

「絶滅した今となっては想像上でしかない生物を使ったメダル！その欲望は・・・・・無だ。なっいぃぃぃ！」

鴻上の喋りに刃介は苦手意識を感じるが、一応我慢しておく。

「それがオーズに惹かれて映司くんの欲望の隙間に入った！欲望の空白が埋まれば・・・・・暴走の危険性は高くなる！！」

「「「「・・・・・・・・・・・・・」」」」
「映司くん・・・・・・・」

＊＊＊＊＊

上の居候部屋。

「お前わかってんだろ?自分の中にコアが入ったってこと」
「まあ、何となく。でも遣る事は変わらないし、兎に角今は、目の前の人を助けるだけ・・・かな?」

映司はベッドに寝転がりながら答えた。

「フッ、お前がバカでよかった」
「褒めてるつもり?」
「さぁな」

そうしてアンクもソファに戻り、二人揃って休眠の世界へとダイブしていく。

＊＊＊＊＊

三度戻って一階。

「おい、ルナイト」

刃介がドアに向って声を出す。

「あらバレてたの？」

そこにはジャリジャリと音を立てる大型のキャスター付きのスーツケースを持参したルナイト。

恐らくケースの中には報酬のセルメダル二千枚が入っているのだろう。

「俺の体内にある、二種類の紫はなんなんだ？」

「それなら私が説明したほうが？」

「いいえ。この件は私の口から説明するわ」

ルナイトはケースを七実に手渡して語りだす。

「最初に言っとくけど、あのコアたちとリュウのメダルで変身するコンボを使う際は大いに気をつけたほうがいいわよ」

「あ？」

「４００年前にあの八枚のコアを手に入れたとき、私は直ぐにそのコアを解析したわ。その結果、龍神系コンボになったブライは、”闘争本能という欲望”が最大増幅されて限界を越え、そして正気を失い暴走する」

「なるほど。”荒ぶるコンボ”ってことか」

刃介は納得したよう首肯する。

「そう。恐竜は地球上最強の生物だけど、龍種は幻想上最強の怪物。それによって発現するコンボの力は正に未知数。どんな結末を辿るかさえ判別不可能」
「構わんさ。大きな欲望ほど、叶える為の手順を踏む必要性があるってもんだ」

刃介は当然のように受け答えを行う。
それを見た鴻上は実に喜ばしそうに、

「素晴らしい！全くもって君の言うとおりだよ！欲望は大きくなれば成る程、叶える為の手順も増えるが、それらを越えた先にある歓喜は表現の仕様が無い！」
「そいつはどうも」
「しかし私には一つ疑問がある」

鴻上は視線を刃介から逸らし、その横に居る人物に向ける。

「鑢七実くん。この場には自身のコアが全てあるというのに、何故君は完全復活しようとしない？」
「私はただ、一本の刀として、刃介さんの御傍に居たいだけです」

七実は研ぎ澄まされたような雰囲気でそう答えるが、次の瞬間には刃介の腕に抱きついてこう宣言？してみせた。

「それに、誰かを”愛する”という欲望を抑えることほど暗愚なことはありません」
「実に！実に素晴らしい答えだよ！！」

鴻上は歓喜しすぎて今にも昇天しそうなほどに喜びまくっている。
もはや狂喜乱舞の一歩手前だろう。

「人類の歴史は”愛する”という欲望なくしては此処まで繁栄してこなかった。あらゆる偉人も天才たちも、突き詰めればその”愛の結晶”だからね。――今日は本当に面白い日だよ！此処まで満足した気分になったのは何時振りかな？」

鴻上光生。

己が欲望を妨害する欲望以外は全て受け入れる。正に欲望の求道者ともいえる男である。

＊＊＊＊＊

翌日の真昼、とある遊園地。

そこでは子供は勿論、大人達も笑顔で満ちていた。

家族や友人、恋人と一緒に幸福な時間を過ごしたいという欲望を叶えている真っ最中。

だが其処へ消去者達が上空より現れる。

『渦巻いているな、欲望が』

『人の命の、源が・・・・・』

それはプテラ♂とプテラ♀に他ならない。

彼等は繁華街で撒き散らしてあの黒い霧を、

『『フアアァァァ！！』』

口から大量極まって吐き出していき、遊園地全体を短時間で包んでしまったのだ。
黒い霧に包まれた人々は子供も大人も男も女も関係なく、みな等しく、気付かずに消えた者もいれば苦しみながら消えた者もいる。

『『フフフフ・・・・・』』

そんな光景に満足したかのように、二体の恐竜は地に降り立った。

＊＊＊＊＊

その頃、当然ヤミー達の気配を察知した刃介と七実は、

「「ヤミー」」

一発でその居場所を突き止める。
刃介はスマートフォンを使って早速戦力を呼び寄せることにした。

「おい、金女。俺だ」
『おや、兄さんですか』
「ヤミーがでたぞ。距離と方角からして、多分遊園地あたりだろう」
『不断（ことわらず）――ならば早速いきます』
「頼んだぞ」

連絡を終え、スマートフォンでの通話を終了する。

「よし、いくぞ七実」
「委細承知」
二人はシェードフォーゼに乗って、現場へと急いだ。

＊＊＊＊＊

遊園地。

――ビュルルルル！――
――シュルルルル！――

『『ハァア！』』

クロユリヤミーとシラユリヤミーが揃って現れ、プテラ達と顔を合わせる形となる。
だがそこへ、

――ブゥオオォォォン！！――

バイクのエンジンが喧しいほどに鳴り響き、そこを見てみると、シェードフォーゼに乗った刃介と七実、ライドベンダーに乗った金女の姿がある。

「二組揃ってのお出ましとは丁度いいぜ」

刃介がそういって愛機から降りると、七実と金女も地に足をつける。

そこへ、

「鋼さん！」

映司とアンクが走ってやってきた。

「火野か。今度はしくじらないようにしようぜ」

「はい！」

「それはいいが、あいつらの攻撃は絶対に避けろよ。変身が解ける」

アンクは映司にコアメダルを渡した。

二人はベルトを装着し、メダルをセットしてスキャナーを滑らせる。

「「変身！」」

≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＥＮＢＡ≫

≪ＴＡＫＡ・ＴＯＲＡ・ＢＡＴＴＡ≫

≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！ＲＩＯＴＥ！ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！≫

≪ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！ＴＡＴＯＢＡ！ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！≫

血錆色の龍の頭、鬼の腕、天馬の脚――ブライの基本形態、リオテコンボだ。

赤い鷹の頭、黄色い虎の腕、緑色な飛蝗の脚――オーズの基本形態、タトバコンボ。

「いくぜ！」

「えぇ！」

ブライは魔刀『釵』、オーズは虎の爪（トラクロー）を展開して四体のヤミーに挑んでいく。

しかし、ただでさえ実力の高いヤミーが四体いるというのに、こちらは二人。分が悪いとしか言いようがない。

「まだですかね・・・・・・って、漸く来ましたね」

金女の視線の向こうには走ってくる伊達と後藤がいた。

「あれ？なんで忍者がここにいるの？」
「初めまして。私は鋼金女と申します」
「え、まさかハリガネの？」
「ハリガネ？・・・まあキチンとした自己紹介は後にして、今は戦いに専念しましょう」
「おうよ！」

二人はベルトを装着し、セルメダルを手にする。

「「変身」」

――チャリン――
――キリッ、キリッ――
――パカン！――

伊達は仮面ライダーバース、金女は仮面ライダーチェリオに変身する。

「あれが、チェリオシステム・・・・・」

後藤はチェリオのことを僅かながらも知っていたのか、ぼやくように呟いた。
二人のライダーの介入によって、戦況は漸く五分五分になってきた。

しかしそこへ、比奈が映司達の後を追って来たのだ。

「映司くん・・・・・・」

これも一重に映司のことを心配してのことだろう。
当初は比奈も注意深く戦えばオーズ達にも勝機があると希望をもっていたが、それはあまりにもお約束な展開によって打ち砕かれてしまう。

「うぇぇん・・・！怖いよ～～！」

あの黒い煙からどうにか難を逃れていた一人の子供だった。
親兄弟が消されてしまったのか、行き場もなく判断もできず、物陰に隠れて泣いている。

「ッ！」

それを見たオーズは真っ先に子供へ駆け寄ろうとする。
だがそこへプテラ♂が光弾で攻撃しようとする。

「火野！」

――ズバッ！――

ブライはそこへ割って入り、プテラ♂の攻撃を切り裂いた。

「早くしろ！火野（おまえ）の遣り方は気に入らないがな、無関係なガキに死

なれたら胸糞が悪くなる」
「あ、ありがとうございます！――ほら、こっちへ！」
ブライに感謝しながら、オーズは子供に手を伸ばす。
それを見た比奈は、今までの映司の行動を思い起こす。
（映司くん、何時も誰かの為に手を伸ばして・・・・・お兄ちゃんにも、私にも。じゃあ、映司くんには、一体誰が・・・？）
それが火野映司に関わった者なら一度は思いそうな疑問。
「早くあっちへ逃げて！」
「う、うん！」
オーズは子供を安全な方向へ逃がすと、再びヤミー達に顔を向ける。
だが時既に遅し。
『フッ！』
「うあぁぁ！」
プテラ♀の波動によってオーズの変身が強制解除させられてしまったのだ。
『その力、頂くぞ』
「ぐぉ・・・・・・ッ」
ブライもまた、シラユリヤミーによってエネルギーを奪われ、変身が解けてしまった。
「ひ、火野・・・ッ」

「兄さん・・・・・・！」

バースとチェリオは必死になってプテラ♂とクロユリヤミーの相手をしながら仲間と肉親を呼ぶ。

「映司くん・・・・・・！」

比奈は無意識に映司のいる場所に足が動こうとしている。

「比奈ちゃん・・・危ない！」

しかし後藤によって止められ、何時ものようにただ見守ることしかできない。

生身の状態。しかもエネルギーを奪われて脱力しかけた刃介の様子をみた七実は、

「見られますね」

とだけ呟いた。

『『ハァ・・・・・・フアッ！』』

そして、プテラ♀とシラユリヤミーの攻撃が二人の身体に届こうとした瞬間――！

「うお・・・ッ！？」

「コレは・・・・・・！？」

二人の体から、紫のコアが飛び出してきたのだ。
映司からは三枚のコアが飛び出し、オーズドライバーのバックルに嵌り、自動的にオーレイターが傾く。
刃介からは二枚だが、先ほどセットしていたリュウのメダルが紫に変色して他のコアと共に自立的にローグレイターに嵌ったのだ。

「「――――――ッッ」」

突然無表情になった二人は、顔を上げて、紫色に輝く眼光を垣間見せる。
そして、スキャナーが一人でに動き出し、コアメダルをスキャンしてホルスターに戻った。

≪ＰＴＥＲＡ（プテラ）・ＴＲＩＣＥＲＡ（トリケラ）・ＴＹＲＡＮＮＯ（ティラノ）≫
≪ＲＹＵ（リュウ）・ＷＹＶＥＲＮ（ワイバーン）・ＤＲＡＧＯＮ（ドラゴン）≫

紫のメダル達が二人の周囲を舞い、上・中・下の三つが合わさって一つの円形（サークル）を生み出す。

≪ＰＵ（プ）・ＴＯ（ト）・ＴＹＲＡＮＮＯ（ティラーノ）　ＳＡＵＲＵＳ（ザウルース）！≫
≪ＲＹＵ（リュ）・Ｗ（ワ）Ａ・ＤＲＡＧＯＮ（ドラゴン）　ＫＮＩＧＨＴ（ナイトー）！≫

太古より続く力、幻想より出でる力。
それらは激しい旋律と歌声を奏でて現代に顕現した。

変身が完了すると同時に、二人を中心として、オーズからは氷河期

を連想させる凄まじい冷気が大地を凍りつかせ、ブライからは神話を連想させる火炎・疾風・吹雪・雷電が吹き荒れる。

そして・・・・・・！

「「ゥオオオオオオオオオオオ！！！！」」

二人の竜人の咆哮が、全てを打ち砕いた！

「何だありゃ！？」

「新たなコンボ・・・・・・！？」

バースとチェリオは勿論のこと、

「なに・・・・・・ッ！？」

アンクも驚きを禁じ得ない。

「なるほど、アレが荒ぶるコンボ」

だが七実だけは冷静さを保っている。

「「ヴォォオオオオオオオオ！！！！」」

天上へとあらん限りの咆哮を叫び続ける者。

紫色に染まり果てた三つの部位と黒から白に変色したボディスーツ。

オーズはプテラノドンの頭、トリケラトプスの腕、ティラノザウル

スの脚。
ブライは進化した龍の頭（リュウヘッド・ブレイブ）、飛竜の腕（ワイバーンアーム）、悪竜の脚（ドラゴンレッグ）。

「「オォォアアアア！！」」

太古の暴君竜、仮面ライダーオーズ・プトティラコンボ。
幻想の最強種、仮面ライダーブライ・リュワドラコンボ。

今此処に、双対の無敵が現出した。

クロユリヤミーとシラユリヤミーはリュワドラコンボのそれを見て、

『この波動は・・・！』
『極限に昂る神代の欲望』
『ならば、それもまた我等の根に！』

そしてプテラの二体はプトティラの姿を見て、

『この力は・・・・・・！？』
『この力は同類・・・・・・』
『同類にして、敵っ！』

四体のヤミーは一斉に襲い掛かろうとするが、

――バサッッ！！――

オーズの背面に伸びた羽状の部位こと”エクスターナルフィン”と、
ブライの両肩と背中から生えた”アルティメットフライズ”という
大翼の羽ばたきにだけで、四体のヤミーが吹っ飛ばされたのだ。

しかもブライのアルティメットフライズからは、羽ばたきの際に火・氷・風・雷さえ伴っているのだから殺傷能力抜群である。

『『く・・・フッ！』』

プテラ達は翼を広げて空へ舞うが、オーズのエクスターナルフィンもまた大きく羽ばたいて宙を自由自在に飛び回り、その頑強な翼でプテラ♂もプテラ♀も体当たりを喰らってしまう。

其処から更にラングサークルの下位であるティラノのレリーフが輝くと、大腿部を保護する強化骨格こと”テイルディバイダー”が幾重にも折り重なって一本の野太い尻尾となった。

「フゥゥン！！」

――ブンッ！ブンッ！――

オーズは力任せに体と尻尾を振り、二体のプテラに尻尾の一撃を与えて地上に引き摺り下ろしたのだ。
そしてオーズ本人は実に緩やかなスピードで地上に降りる。

一方、ブライは――

「ドゥアッ！！」

ラングサークル上位にあるリュウのレリーフが輝くと、顔面にまで光が伝わって口部分に集中していく。
そして大声を出しながら、龍之息吹（リュウノイブキ）が進化を果たした龍神気焔（リュウジンキエン）とい

う名の強大な光弾が発射されたのだ。

『『うおあああ！！？』』

まさに龍神の御技といって差し支えの無い威力の前に、クロユリヤミーとシラユリヤミーも避けるだけで手一杯だ。

しかしブライは手を抜く事など一切なく、寧ろ勢いを増長させていく。

「グルルルル・・・！」

野獣のように唸るブライ。

ラングサークルの下位にあるドラゴンのレリーフは光を放ち、両足からは凶悪で巨大な悪竜の爪（ドラゴンネイル）が伸長していく。

「グルァァア！！」

『ぬあッ！』

『ぐおッ！』

ブライはドラゴンネイルが大きく伸びた両脚を振り回し、二体のヤミーに大きなダメージを与えて吹っ飛ばしていく。

そして、二組のヤミーが同じ場所に固まると、オーズとブライもまた然り。

≪≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫≫

二人はスキャナーで三枚のコアメダルを読み取り、力を解放する。

「フンッ！」

まずはオーズが肩のワインドスティンガーを一気に伸ばしてプテラ♀の翼を串刺しにした。
そこへ緑色のプテラアイと黄色い嘴状のアンバーオークォーツが淡く光ると、再びエクスターナルフィンを展開し、大きく羽ばたかせて絶対零度の冷気をワインドスティンガーに沿って一直線に飛ばした。

勿論の事、ワインドスティンガーで自由を奪われているプテラ♀は氷付けにされる。
ワインドスティンガーが元の長大に戻ると、オーズは唸りながら腰を低く落とし、身体を大きく振ってテイルディバイダーでプテラ♀をブチ殴った！

――バギィィィン！！――

必殺のブラスティングフリーザの一撃で、プテラ♀はただの氷の破片と成り果て、出てきたのはたった一枚のセルメダル。
オーズは素早く大翼と尻尾を仕舞い、セルを手の中に掴んだ。

片やブライは、ラングサークルの上・中・下の全てから淡い光が止め処も無くあふれ出していき、それはラインドライブを通して頭と腕と脚に伝達されていく。
エネルギーが伝達された部位は今にも別の何かへと昇華しそうな程に力を蓄えていっている。

『（何も無い・・・？今が好機ッ！）』

と、突っ込んできたシラユリヤミー。
だがそれは飛んで火に入る夏の虫というやつだろう。
彼女は自ら、ブライの射程――それも一番防ぎにくい位置に立ち入ってしまったのだ。

ブライは全身に行き渡ったエネルギーの全てを各部位で昂りに昂らせて一気に頭へと送り込んだ。
そして！

「ヴォォアアアアアアアア！！！！」

それは正に、御伽噺や童話、神話や絵画でしかお眼にかかれない光景だ。
一言で表してしまえば、それは龍神の息吹（ドラゴンブレス）。
極太の紫色の光線が周囲を巻き込みながらシラユリヤミーを包み込む。

『――――――』

結果として、シラユリヤミーは悲鳴や断末魔もあげること暇さえなく、ジャリーンという音と共に大量のセルメダルを残して完全消滅した。
リュワドラコンボの必殺技であるドラゴニュートシャウトの一撃を防げるものは、恐らく完全復活したグリードくらいのものかもしれない。

オーズとブライは一枚のセルを手に、オーズは地面、ブライは空中に拳を叩きつけた。

すると、地面が罅割れて暴君竜の頭を模した剛健な戦斧・メダガブリューがオーズの手中に納まる。

さらに、空間を拳でぶち破ってブライが掴み取ったのは、龍をイメージさせる大剣・メダグラム。

オーズは超高硬度クリスタル・ディノグラスで構成された暴君竜の刃（フラグメントリーパー）にある硬貨投入口（エナジーエンハンサー）に一枚のセルメダルを入れると、それは硬貨抽出器（ヒュレットチャンバー）へ。その直後に、普段は下がっている砲撃用握柄（シザーグラップエンド）を上げることでティラノの頭を模した硬貨圧力部（クランチガルバイダー）がメダルを飲み込んだ。

ブライは紫色のドラグラスで構成された龍神の凶刃（フラグメントリーパー）にある硬貨投入口（エナジーエンハンサー）にセルメダルを入れて硬貨抽出器（ヒュレットチャンバー）に装填し、龍の頭を模した鍔たる硬貨圧力部（クランチガルバイダー）を手動で閉じてメダルを飲み込ませる。

≪≪ＧＯＫＫＵＮ（ゴックン）！≫≫

その音声と共に、セルメダルはメダガブリューでいうところの砲身――メダグラムでいうところの柄にあたる硬貨解放器（バドセルストリーム）に送り込まれたのだ。

そしてオーズはメダガブリューの持ち方を変える為、砲撃用握柄（シザーグラップエンド）を右手で、ステラグラップエンドを９０度曲げて左手で持つことで、斧型のアックスモードから砲型のバズーカモードに変型する。

だがブライのメダグラムは意外とシンプルで、硬貨圧力部（クランチガルバイダー）を上下にスライドさせた瞬間に、

≪ＰＵ（プ）・ＴＯ（ト）・ＴＹＲＡＮＮＯ（ティラーノ）　ＨＩＳＳＡＴＳＵ（ヒッサーツ）！≫

≪RYU（リュ）・WA（ワ）・DRAGON（ドラゴン）　HISSATSU（ヒッサーツ）！≫

歌声が流れてくると同時に、圧縮と解放で通常の三倍の力を発揮するセルメダルによって、砲口と刀身には渦巻くような紫の光が満ちていく。

そして、オーズは引き金をひき、ブライが一太刀を振るった。

――ズバァァァァン！！――

『『ぐあああァァァァ！！！』』

オーズのストレインドゥームと、ブライのギガキリングスレイヤーの一撃により、遠距離も中距離も関係なく、プテラ♂とクロユリヤミーは砲撃と光刃に飲まれて爆発した。

チャリーンという音と一緒にプテラ♂からはセルメダルが一枚、クロユリヤミーからは何十枚ものセルメダルが出てきたが、二人はそれに食いつくことなく、黙っている。

と、思いきや――――

「「ッッ！！」」

――ガギン！ガギン！ガギン！――

オーズはメダガブリューをアックスモードに直し、ブライのメダグラムとで切り結びだしたのだ。

「ウォォウ！」

「ガルァァ！」

猛獣にも等しい雄叫びを上げながら斬り合いを続ける二人の狂戦士。

「おい！止めろお前等！」
「兄さん止してください！」

後藤とチェリオが叫んでも二人は止まらない。
今この場に残った者の内、最も強い者との戦いを止めようとしない。

「チッ・・・まさか、暴走か」
「確かにこれは、拙いことになりましたね」

アンクも七実も歯切れが悪そうにしている。

「「ヴォアアア！！」」

――グァギンッ！グァギンッ！――

紫色の結晶の刃同士がぶつかり合う度に散る火花。
このまま放っておけば命尽きるまで戦うとしか思えない。

「何やってんだお前ら！」

バースもそう叫んだ。
だがその直後、

「「――――ッ！」」
「ひ、比奈ちゃん！」
「金女ちゃん！」

チェリオと比奈がオーズとブライに向って走っていったのだ。
しかもチェリオは走りながらブランクケージからセルメダルを抜いて変身まで解く始末。

戦況はオーズとブライが一旦距離を置いているところだが、二人は再び絶叫と共に刃を交えようとする。そこへ！

「映司くんダメ！！」
「兄さん止まって！！」

――ピタッ――

比奈と金女が飛び込んできた瞬間、メダガブリューとメダグラムがピタリと止まった。

「映司くん。私、映司くんの気持ちが解るだなんて言えないけど、でも手を伸ばす事はできると思う！！映司くんが辛いときは、私が映司くんの手を掴む！！」
「不抑切（おさえきれず）――兄さん。その余りにも強大な力・・・・・制御し切れないことは誰も責めません。ですけど、一番大事なのは、それをどう活かし、己の物にするかです。私は貴方の妹――唯一の肉親として、兄さんの欲望を信じます！！」

「「――――――」」

二人の精一杯の言葉に、オーズとブライの動きが完全に止まった。
比奈はオーズに、金女はブライに抱きつき、必死になって訴える。

「お願い！元に戻って！映司くん、お願い！！」
「兄さん！借り物ではなく、自身の欲望を取り戻してください！！」

「「ァ・・・・・・ア・・・あ、あ」」

すると、二人の手からは力が抜けて得物が音を立てて地面に落ちた。
オーズもブライも、頭を抱えながら後ずさり、そのまま変身が解除されたのだ。

「比奈ちゃん・・・・・・ありが、と――――」
「金女・・・・・・感謝す、る、ぜ・・・・・・」

そういうと、映司は倒れこみ、刃介は其の場に座り込んでしまった。

「映司くん！」
「兄さん！」

＊＊＊＊＊

鶴川通りのとある洋館。
そこは元鴻上生体研究所所長の真木清人（まききよひと）の生家。
その中でも一番拓けた場所で椅子に座り、テーブルの上で不気味な人形の服などを調整していた真木に、黄色い服を着た銀髪の青年が尋ねた。
実はこの青年の正体はネコ系グリード・カザリの人間態なのだ。

「どう気分は？」
「問題ありません。上々です」

カザリの質問に真木は平然と答えた。

「じゃあ、最後の一枚」

カザリは紫のコアメダルを投げ、投入口が現れた真木へと投げ入れる。

手元にあった紫のコア五枚全ての投入が終わり、真木の瞳が紫に変色した。

「――――――」

それを感じ取って興味を示したのは、サッカーボールを手に持ち、赤い服を着込んだ幼い少年だった。しかし、見かけに反してその正体は、アンクの肉体部分であるロストなのだ。

「人がグリードになれるなんて、面白いよね」

カザリがそういって階段で座ると、真木は懐から一枚のセルメダルを取り出し、メダルの投入口が現れた蝋燭の燭台に入れた。

――チャリン――

すると、燭台からは怪しい光が一気に放たれ、それは一体の怪物を生み出した。

＊＊＊＊＊

その頃、誰も知らない古びた武家屋敷。
そこでは二人の男性が無断で住み着いていた。

「どうでござるか四季崎？」
「ああ。中々良い感じみたいだぞ、白兵」

四季崎記紀（しきざききき）。
「刀語の世界」の戦国時代で活躍した天才刀鍛冶にして変体刀千本の製作者でもある。

錆白兵（さびはくへい）。
「刀語の世界」の尾張幕府時代で生まれた剣聖や日本最強の称号をもっていた堕剣士。

「んで、どうだ？久々に差した愛刀の心地はよ」
「まあ、悪くないでござるよ」

白兵の腰には一本の刀が帯刀されていた。

「いやいや。こっそりと盗み出すのには苦労したぜ、その薄刀『針』」
「お主も、自分の使う刀は出来上がったのでござるか？」
「いや、まだ仕上げが残ってる」

四季崎は白兵に対してややオーバーリアクション気味に返した。

「では、此間買って来たこれで、もう一度連中でからかって見るでござる」

――チャリン――

と、白兵はセルメダルを取り出し、庭の棚においてあった植物の内の一つに投入して見せた。

本当の戦いはまだ、開幕したばかりだ。

恐竜と対極の器と荒ぶるコンボ（後書き）

次回、仮面ライダーブライ！

高校時代と思惑と連れ去り

リュワドラコンボ
キック力：３０トン　パンチ力：２０トン　ジャンプ力：２５０ｍ
　走力：１００ｍを２．０秒
身長：２１０ｃｍ　体重：１００ｋｇ　カラー：紫　固有能力：超高エネルギー支配
必殺技：ドラゴニュートシャウトとギガキリングスレイヤー

リュウヘッド・ブレイブ
複眼の色は翠緑。龍の爪型デザインの追加や額から生えている刃型の角の複雑化が見受けられる。口から龍之息吹（リュウジンキエン）が進化した龍神気焔という高威力の光弾を吐き出せる。

ワイバーンアーム
両肩と背中から合計四枚の大翼・アルティメットフライズによる飛行や羽撃きが可能となる。羽撃く際には多属性のエネルギーの飛散やそれを利用して攻撃もできる。

ドラゴンレッグ
足の甲や臑から巨大な爪・ドラゴンネイルを生やして伸ばしたり、

蹴りの要領で飛ばすこともできる。

メダグラム

異次元空間から生成召喚されるブライ専用の大剣型武器。召喚する際はブライが拳で空間の一部を叩き割り、空間の裂け目に腕を突っ込んで取り出す。

全体的に龍を連想させる形状（デザイン）で、柄の部分であるバドセルストリームは龍の首、鍔の部分であるクランチガルバイダーは龍の頭、刀身であるドラグラスは龍の息吹をモデルとしている。全長は約１２０ｃｍ。

ギガキリングスレイヤーの発動に必要な武器であり、セルメダルのエネルギーを圧縮・解放することで通常の三倍近くの出力を引き出せる。最大でセルメダルを５枚まで入れられる。

高校時代と思惑と連れ去り（前書き）

仮面ライダーブライ！

前回の三つの出来事は！

一つ！刃介は、仮面ライダーオーズこと火野映司と赤き鳥のグリード・アンクと邂逅！
二つ！鴻上光生とルナイトの口から、紫のコアメダルの素性が語られる！
そして三つ！紫の力によって、刃介と映司は、リュワドラコンボとプトティラコンボに変身した！

高校時代と思惑と連れ去り

三種の欲望が渦巻くこの運命大激動戦。
恐竜ヤミーと植物ヤミーの登場。火野映司と鋼刃介に入り込んだ紫のコアメダル。
そして、そのコアで変身する太古の暴君竜（プトティラコンボ）と幻想の最強種（リュウドラコンボ）。

それらへの初変身からまだ大して時を置かずに、また新たな戦いが始まりつつあった。

「ハァ！セィ！」
「オリャア！」

港で戦う二人の戦士と二体の異形。
それはバースとチェリオ。
それから新生プテラ♂と――――

「今度はなんの植物だ！？」

伊達は医者ではるが植物に興味があるわけではないので、ヤミーの正体が今一掴めない。

「多分、食虫植物のサラセニアじゃないでしょうか？」
「なんで知ってるんだよ？」
「危険な植物・・・・というか、毒草をメインに色々なものを作っていた経緯がありますので、その過程で」

なんだか微妙に黒い過去を語るチェリオ。
そんな彼等を見守り、見物する者が二人いる。
「伊達さん、金女ちゃん・・・」
一人はセルメダルを弾丸とする強力銃、バースバスターをてにもつ後藤。
もう一人は、
「アンク、メダル！」
「またこのタイプか！」
「メンドくせぇなオイ！」
「兎に角やりましょう」
走ってきた映司・アンク・刃介・七実の姿を見て、
「来たね」
と呟く銀髪の青年、カザリ。
映司と刃介はドライバーを装着し、コアメダルをセット。
そしてスキャナーを手に取り――
「おい止せ！暴走しちまうぞ！ここは俺たちに任せろ！」
プテラ♂に踏みつけられながらも、バースの警告を促す声。
しかし、
「その時は俺たちを攻撃して止めてください」

「つーか辛い体勢でいっても説得力ねぇんだよ」

二人はそれを敢て無視する。

「「変身！」」

≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＥＮＢＡ≫

≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！ＲＩＯＴＥ！ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！≫

≪ＴＡＫＡ・ＴＯＲＡ・ＢＡＴＴＡ≫

≪ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！ＴＡＴＯＢＡ！ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！≫

オーズとブライに変身した二人は一直線に敵へ向ってダッシュする。

（紫のコアの力を借りれば、俺の身体を取り戻せるかもしれない。
その為には、映司をまたあのコンボに・・・・・・）

アンクはそう思った後に一瞬ブライに視線を向けるが、

（いや、無理か。あれは流石にパワーが強すぎる。右腕一本で如何にもならん）

と冷静に判断して、狙いを恐竜コアに絞った。

一方七実はというと、

（今度刃介さんが暴走するようなことがあれば、その時は私が）

アンクとは逆に刃介の身を案じるようなことを考えていた。

一方で四人がかりでヤミーを圧倒していたライダー達。

ブライは戦いを一気に進展させるべく、奥義の一つを開帳する。

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

メダルのパワーを引き出すと、ブライはまず左手を前に突き出し、右手を勢い良く振り下ろすと同時に左手を腰元に持っていく。そしてパワーを両腕に溜め込みながら、両手を胸の前に重ね合わせて力を高めていく。

「我刀流奥義」

ブライはエネルギーによって発光した両の拳を構えた。

「星拳波動（せいけんはどう）っ！」

全力の勢いで突き出された両の拳からは、血錆色のエネルギーが飛んでいき、

『『うわあっ！！』』

二体のヤミーに直撃して吹っ飛んだ行く。
ただし、

『んんん・・・・・！』
『嘗めたマネをッ』

それなりにダメージはあるが、致命傷にはならない。

「チッ。本来は右の拳だけで使うんだが、無理して両の拳でやれば威力も落ちるか」

などとブライがぼやいていると、

――ビュルルルル！！――

サラセニアヤミーにドライバー部分を絡めとられ、エネルギーを吸い取られてしまい、

『フアッ！』

「うわあああ！！」

オーズはプテラ♂の波動を喰らって変身が解けてしまう。

「ッ！火野、鋼！」

後藤はバースバスターを持ってヤミーに威嚇攻撃しようとするが、

「退け！！」

アンクがそれを邪魔したのだ。

「何をする！？」

（出て来い、コアメダル）

後藤の言葉に耳さえ貸さずアンクは映司達から出てくるであろう力を待ちわびる。

『フゥアア！！』

『ヘェアア！！』

そして、二体のヤミーが襲い掛かった瞬間、

（今だ！）

――バッ！バッ！バッ！――

『『ウオアアア！！？』』

映司と刃介から紫のコアが飛び出し、プテラ♂とサラセニアヤミーを吹っ飛ばした。

アンクは右腕という本体を、泉信吾（いずみしんご）という依代から切り放し、一直線に恐竜コアを掴みに言った。

――ガシ！ガシッ！――

『うぅ・・・！』

最初にトリケラ・コアを掴み、今度はプテラとティラノのコアメダルを掴んだ。

しかし、その三枚を一気に掴もうとしたのが拙かった。

幾らグリードといえども、右腕一本だけの状態では本来の１／１０以下のパワーしか出せない。

『ッ！うぁあああ！！』

結果として、コアに弾かれてしまい、メダルがオーズドライバーにセットされてしまったのだ。

刃介のほうも準備万端なようで、スキャナーで自動的に動き出す。

≪ＲＹＵ・ＷＹＶＥＲＮ・ＤＲＡＧＯＮ≫

≪ＰＴＥＲＡ・ＴＲＩＣＥＲＡ・ＴＹＲＡＮＮＯ≫

≪ＲＹＵ・ＷＡ・ＤＲＡＧＯＮ　ＫＮＩＧＨＴ≫
≪ＰＵ・ＴＯ・ＴＹＲＡＮＮＯ　ＳＡＵＲＵＳ≫

「「ヴォォオオオオ！！」」

プトティラコンボとリュワドラコンボ。
太古と幻想の力が今再び覚醒し、雄叫びを上げて敵へと突っ込んでいく。

一方アンクは、

「っ――くそ・・・・・・っ」

右腕を依代に戻して悔しそうに悪態をついた。

「「ヴォウ！！」」

――ザグッ！――

『『ぐあああああああ！！』』

オーズとブライの貫手はヤミーの腹部を貫き、二体は爆発を起こしてセルメダルへと還元される。

「「・・・・・・・・・！！」」

だがこの程度では二人の闘争本能は満腹になどなりはしない。
また新たな獲物を探して唸る。
七実はそんな二人――というか、ブライを見るとキョトウの姿に変貌する。

『刃介さんは私が抑えます』

とだけ言って、ブライに飛び掛って抱き付き、互いに身動きが取れないようにする。

「グルァアアア！！」

『刃介さん・・・・・・』

まさに怪物と呼ぶに相応しい咆哮をするブライ。

キョトウはそんなブライを抱きしめ続けながら彼の心が鎮まるのを待った。

片やオーズという問題が残っているが故に、バースとチェリオもキョトウと同じく、二人がかりで無理矢理オーズを押さえ込もうとするが、

「ウゥゥゥ・・・・・！！」

「クソッ、なんて馬鹿力だ！」

「これじゃ持ちませんよ！」

低く唸っているオーズは想像以上のパワーを出しているようで、チェリオとバースが二人がかりになってもギリギリで押さえ込めている状況だ。

後藤はその状況を見て何か良い手は無いかと考えていると、ふと目についたのは――

「あいつは、カザリ・・・・・・よし」

敵の姿を確認した後藤は、バースバスターの銃口をオーズに向けて

引き金を引く。

――ヴィンヴィン！！――

弾丸が二発ほど放たれ、オーズの背中に命中した。
当然オーズの注意は後藤に向く。

「火野！！」

後藤は大声を出しながら横へと小走りしながら発砲を続ける。

――ヴィンヴィン！！――

オーズは後藤と平行線を描くように横へと小走りする。
だが後藤が進む方向には、

「ん・・・？」

カザリがいた。
そして後藤はカザリの目の前にまできて足を止めると、オーズは後藤めがけて飛び掛るが、後藤は素早く前転をしてかわし、必然的にカザリは自分に向ってくるオーズと戦う為にグリード態となる。
ライオンの鬣を後頭部から生やし、虎のような鋭い爪を両前腕部に備え、その俊敏さはまるでチーターのようだ。黒い外装を上半身にしていながら下半身は焦茶色の素体が剥き出しな不完全（セルメン）。

「おお！後藤ちゃんナイス！」
「考えましたね」

バースとチェリオの褒め言葉が跳んだ一瞬の間にも、カザリとオー

ズの肉弾戦が続く。

『フッ！ハッ！』

「ウォウ！ウァァ！」

腰を少し低く落とし、二人は睨み合う。

そこから、

「『ハァアア！！』」

――ズドンッ！――

二人は一旦距離を置いてから一気に駆けて拳を繰り出して互いの胸に突き立てるが、パワーの差の所為か軽く吹っ飛ばされたのはカザリ。

『成る程、これはちょっと厄介かもね』

とだけいうと、カザリはさっさと撤退していった。

オーズはすぐさま後を追おうとしたが。

「うッ・・・・・・」

体力が底をついたらしく、地面に転がって倒れながら変身が解除された。

一方、刃介も・・・・・・

「大丈夫ですか？」

「ああ・・・・・・だが、かなり疲れた」

七実に肩を貸してもらうことで漸く立ち上がれている状態だ。
最初にリュワドラコンボへ変身したときに比べれば大分マシなほうかもしれない。

そして、彼等の戦いを眺めるものがまだいた。
一昔前のアナログな水色の車に乗る、後生大事そうな人形を持った眼鏡の男。
眼鏡の奥には不気味な紫の眼光を覗かせている。

「私とオーズ、そしてブライ。一体誰が終末を齎すに相応しいのですかね？」

元人間・真木清人――現在は紫を司るグリード。

＊＊＊＊＊

クスクシエの二階。
居候部屋の寝台で映司は寝かされていた。
因みに刃介は既に、サラセニアヤミーのセルメダルを吸収して体力を回復させている。
メダルさえあれば一発で回復できるのがグリードの利点である。

「火野、鋼。お前はもう戦うな。当分は俺と伊達さんと金女ちゃんで戦う」

紫のコンボを危惧した後藤がそういうも、納得しないものが二人。

「バカ言うな。人間がグリードに叶うわけ無いだろ」
「全くだ。ただでさえ厄介なのが増えつつあるんだぞ」

アンクと刃介だ。

「映司。お前もオーズなら、暴走しないでしっかり制御しろ。なっさけない」
「なんだよ！お前だって失敗したじゃないか！グリードなのに、メダルに弾かれて！なっっさけない！！」

ベッドで上体を起こしてそういった映司にアンクは、

「何だと・・・？お前になにが解る！！？」

当然の如く激昂するアンク。
映司も身を乗り出していこうとしたので、

「アンク止せ！」
「火野さん、頭を冷やしましょう」

刃介と七実が、

――ガッ！――

「「うッッ」」

二人の鳩尾に、ローブロウを一発叩き込んで黙らせた。
そこへ扉を開けてきたのが、

「映司くーん」

クスクシエ店主の白石知世子。

「あら、アンクちゃんと映司くん、どうかしたの？」

彼女が部屋に入って直ぐ眼にしたのは、ベッドで死んだように寝ている映司と、同じようにベッドに凭れ掛かって気絶しているアンク。

「御心配なく。疲れ果てて眠っているだけです。少し御休みしていれば眼を覚まします」

と、七実が最適な嘘をついて誤魔化す。

そんな二人を対して、比奈と伊達と後藤は、

（（（この二人は怒らせないようにしよう））））

そう堅く誓っていた。

「それでどうした？まだ注文でもあるのか？」

「いやそうじゃなくて、映司くん宛ての招待状を預かったのよ」

「招待状？」

刃介は取り合えずその招待状を代わりに受け取ることにした。

「なんでも映司くんの高校時代の知り合いだて言ってたけど」

「ふーん」

刃介は話を聞きながら招待状を開ける。

「レジャーランドのチケットに、メッセージだけか」
そのメッセージとはこう書かれていた。
映司へ
高校時代の親友
北村雄一より
「雄一、ねぇ・・・？」
旧友と同じ名を持つ人物に、刃介は興味を示した。
因みに招待状をチェックし終えた後。
「よし。じゃあ白石。また何か必要な材料やら道具やらが必要になったら俺の店を頼ってくれ」
「ええ、頼りにしてるわ。良い品を頼んだわよ」
「任せろ。うちの鋼雑貨店は俺自身が各方面を見て回って得てきた一品ばかりだからな」
などと、しっかりとクスクシエと鋼雑貨店の繋がりをつくり、自分がここにやってくる不自然さを完全払拭しておくのを忘れない刃介であった。
＊＊＊＊＊

映司とアンクが起きて直ぐ、刃介はさっさと映司からの許可を強制的に頂戴し、招待状にあるレジャーランドに赴く事にした。
人数はかなりの大所帯となっており――刃介、七実、金女、映司、アンク、比奈、後藤、伊達の合計で八人だ。

「ところで鋼さん」
「なんだ？」

強く希望して此処までやってきた刃介の心情に映司は興味が沸いたらしい。

「どうして俺たちと一緒に？」
「別に。ただ旧友と同じ名前した奴がどんなのかを見に来たってトコだな」

刃介は気負いせずにゆったりと答えた。

「不堅（かたまらず）――今日くらいは仕事やら責務やらも忘れて、思い切り楽しみましょう？」

と、膝くらいの丈をした真っ青な浴衣を着ている金女が緊張を解すかのように言った。

「でもアンクまで来るなんて意外だな」

と映司が漏らすと、アンクは映司に近寄り、

――ガッ！――

「――ッ！？」

「次にメダルが出たらしっかり掴んでやる・・・・・・・！！」

映司の腹に右拳を入れて恨み言のように囁いた。

そんなのどか？な丘にあるコテージ場に、

「よう映司」

聞きなれない男の声。

とあるコテージに備え付けてある屋根付きの下にある木製のテーブルと椅子に座ってこちらへ呼びかけるのは、立派なスーツ姿で眼鏡をかけた男だ。

「なんだ憶えてないのか？冷たいな」

映司からの反応が無く、男がそういうと、

「す、すみません・・・」

映司は謝りながら男に近づく。

「まあ仕方ないか。俺映司の隣のクラスだったし、引き篭もってたし」

「引き篭もり？」

「ほら。よくノート、届けてくれただろ」

「え？・・・・・・あ、もしかして、北村くん？」

試しに呼んでみれば。

「ああ」

「久し振りぃ！」
「懐かしいな！」

見事にビンゴ。

（こいつが北村雄一か）

刃介は北村の事を値踏みするように見ている。

「ありがとう招待してくれて！」
「何言ってんだよ」

北村は当然だとでも言う風に笑ってみせた。
そしてテーブルの上にある大量の食材を指出して、

「これ、皆に差し入れ」
「「ごちそうさまでーす！」」
「ありがとうございます！」

食いついたのは意外なことに刃介だけでなく、伊達と比奈もだった。
七実はそれを乾いた眼差しでみつつ、北村に尋ねた。

「あの、思わず大人数で来させて頂きましたが、此処を貸し切るのに相当お金がかかったのでは？」

と、大人としての意見を述べると、北村はテーブルにおいてある雑誌を映司に見せた。
開かれたページには北村の写真と記事が掲載されている。

「”若きネットベンチャー・北村雄一”・・・・・・”大型レジャ

ーランド経営に進出”――ってことは」

北村はレジャーランド一帯を見渡して、

「俺がここの、オーナーだ」

「「えぇぇっ！！？」」

伊達と比奈は大いに驚いた。

「火野。お前って自分を放置して他人のステータスを上げる体質なのか？」

さりげに映司のお人よしさをちらつかせる刃介であった。

＊＊＊＊＊

んでもって、「ゆめいろレジャーランド」の敷地内。

無論、客はここにいる一団のみだ。従業員の姿さえない。

殆どのアトラクションは全自動で動いてるらしい。

「高校時代の映司くんってどんな人だったんですか？」

比奈がそう訊くと、

「まあ、人気者かな？」

「ちょ、止めてよ！」

「いいだろ、ホントのことなんだから」
映司は気恥ずかしそうにするも、北村は続ける。
「面倒見がよくて、よく色んな問題に首突っ込んでたよな」
「へー。今と変わんない」
「クラスも違う俺を、引き篭もり生活から引っ張り出してくれた」
「だって放っとけなくて」
今昔に問わず、火野映司という人間の半分以上は善意で構築されているようだ。
「その時に俺に自分の夢語ってくれただんだよな」
「え、そうだったけ？」
「そのお陰で俺は立ち直れた。引き篭もりなんかしてちゃダメだ。夢に向って突き進まなきゃって」
北村が楽しい想い出を掘り起こしながら語っていると、
（夢、か・・・・・・）
刃介は一つの単語に内心で反応していた。
「・・・・・なんだ？今は違うのか？」
「あ、いや、ちょっとね」
北村の質問に気まずそうにする映司。
しかし映司の過去を考えれば栓なき話だが。
だがそこで、

「よーし！なぁまず、このフィールドアスレチックってのに行こうぜ！後藤ちゃんＣｏｍｅ　ｏｎ！！」

さっきから喋らずにパンフレットばかり眺めて歩いていた伊達が後藤と一緒に一っ走りしていった。

「あいつが一番童心に帰ってるな」
「不帰（かえらず）――誰だって童心に帰りたくないなんて、思いませんよ兄さん」

「じゃあ、また後でな」
「うん。また。・・・アンク、行くぞ」

北村と一旦別れると一同はさっさと歩いていく。
だがしかし、先ほどから一切喋らずに最後尾を歩いていたアンクは感じ取っていた。

「・・・・・・・・・・・・」

自分と酷似しまくった気配を。

＊＊＊＊＊

同時刻。レジャーランド敷地外の高台。
そこにはカザリが木製の手すりに身を預け、ロストがちょっとした

木に登っていた。

「さっさと右腕（アンク）を吸収できればいいんだけど、危ない事もしたくないしね」

「――――――」

カザリがそういっていると、ロストは木を降りて歩いていってしまう。

「バラバラに行動してくれないかな？ブライと新しいグリードも居るようだから、良い手がないと・・・・・・って、あれ？どこ行った？」

今更気付いたようだ。

＊＊＊＊＊

「「アホらしい」」

「申し訳ありませんが」

「私たちは止しておきます」

その一言の元、アンクと刃介はアスレチックを終始不参加を押し通していた。

理由はメンドくさい、参加したら結果が見え見えと言う納得感満載のものであった。

因みにアスレチックの数々はというと、

急な坂の脇にある金網を掴んで進んでいくモノ。
巨大なボールだらけで狭苦しい道を突き進んでいくモノ。
急な下り坂に設置された小さな足場を渡って行くモノ。

そして最後には、

「「「んんん～～！！」」」

中央の軸から太い丸太が幾つも伸びていて、その丸太を力いっぱい推す事で軸ごと回転して先へ進む道へいけるというものだ。
ただしこの場面（ステージ）、けっこう重くて辛い。
映司と伊達と後藤の三人が全力を押しても少しずつというにも関わらず、

「ふにゅ～！」

稀代の怪力女、泉比奈はあっさりとそれをクリア。

「いっちばーん！！」

上機嫌で迷路コースに進んだ比奈だったが、快調はそこまでだ。
何故かって？

――バサッ！――

「ッ！キャアア！！？」

いきなり網が比奈を捕えたからだ。

「今の声！？」

皆は逸早く迷路コースの入り口に急いだが、残っていたのは、

「これって比奈ちゃんの！？」

白いポシェットだけだった。

「アンク、ヤミーの気配は？」

「ヤミーの仕業じゃない」

「完全に人の手だなコレは」

アンクと刃介は一発で即答して見せた。

「兎に角手分けして探そう！！」

そうして、皆は一斉に敷地内で散らばり、比奈を探し始めた。

ただし、比奈の名前を叫びながら走る映司の姿を観察するものが一人居た。

＊＊＊＊＊

敷地内の高台。

そこには双眼鏡越しに映司を覗いている北村の姿が。

「・・・・・・よし、そろそろ――――」

移動しようとする北村だが、一つのイレギュラーによって足は止まる。

赤い服を着た少年が居たからだ。

「なんだ？迷子か？」

普通はそう思うだろうが、実際は全然違う。

少年は一枚のメダルを投げ、額に投入口が現れた北村に見事入ったのだ。

――チャリン――

それと同時に、赤い巨大な卵が出現し、それが勢い良く割れた。

中から産まれ出たのは、

――バァァァン！――

『うぅぅ・・・・・・』

「うわあああああ！！？バッ、化物ぉぉ！？」

「あーあ。ヤミー生ませちゃったんだ」

恐怖と混乱でパニックになる北村をよそに、カザリが現れる。

「ヤミー？」

白ヤミーの誕生に拍手するロストとは裏腹に、カザリは興味深そうな顔をする。

「気味の欲望、面白いね」
「よッ、欲望!?」
「ねぇ。僕の言うとおりにしてみない？」

＊＊＊＊＊

その頃、刃介はというと。

「ん、ヤミーか」
「不計（はからず）――こんなタイミングで？」
「出ちまったもんは仕方が無いだろ」

刃介は隣で愚痴る金女を宥めつつ、懐から血錆色の缶を取り出し、プルタブスターターを開けて、カンモードからリュウメカモードに変形させる。

「奴さんを見つけて来い」
『リュリュー！』

リュウカンドロイドは一声鳴いて飛んでいった。

＊＊＊＊＊

植物園。
そこはありとあらゆる植物たちが取り揃えられた、まさに植物達にとっては楽園の園たる場所。
適切な環境と栄養が完備された此処で唯一、他の植物達と隔離された巨大な花があった。

それを目当てにやってきら一人の堕剣士は、花の部屋に入った。

「植物園だけあって、良い品揃えでござる」

堕剣士は世界一の大きさを誇る花の悪臭に眉を顰めつつも、セルメダルを指で掴む。

「この臭い、少しは役に立ちそうでござるな」

――チャリン――

＊＊＊＊＊

一方、七実はというと、

「ふむ。居ませんね泉さん」

レジャーランドの端っこの端っこに来てしまっていた。

「やっぱりこの方向音痴ぶりは直さないと駄目ですかね？」

格好悪いようだが、嘘をついても仕方ないのでハッキリ言う。

七実は今、迷子になっていた。比喩表現とか抜きでマジで迷子になっている。

「ロープウェイの上に行くつもりが、こんなところに来てしまいましたし・・・・・・」

七実は二十年間済んできた手狭な無人島においても、浜辺にいくつもりが山についてしまうほどの方向音痴だ。怪物（グリード）となったことで『病弱』という最大の弱点を克服した最強無敵の才女が最後に抱える唯一の弱点だろう。

しかしそれは、明確な目印が無い場合に限る。

「っ・・・・・・ヤミー」

気配を一発で感じ取った。

＊＊＊＊＊

片や、キャンピングカーが多く停車してある出入り口付近では、

「比奈ちゃん！比奈ちゃん！」

映司が必死になって比奈を探していた。

「映司、どうした？」

そこへ現れたのは、

「北村くん！」

ヤミーを生まされた北村だった。

「友達が一人、いなくなっちゃって！」

「それは大変だな。詳しく聞かせてくれないか？」

しかし、北村のこの態度――ヤミー生成が行われた後にしては落ち着きすぎている。

＊＊＊＊＊

雑木林。

メダルタンクを持った伊達が、ゴリラカンドロイドのセンサーを頼りに走っていると、

『うあ、おぉぉ・・・・・・』

白ヤミーが鈍重な動きと呻きを見せていた。

「まだ育ちきってないが、しょうがないか」

伊達はベルトを装着し、セルメダルを装填する。

「変身」

――パカン！――

伊達は瞬く間にアーマーを装着し、バースに変身する。

「さあ、お仕事だ」

そう構えたときに、

『シェアアア！』

突然にも巨大な花を頭に乗せたようなヤミーが現れる。

「おお！厄介だけど育ったのが来たな」

バースは早速臨戦態勢に入ろうとするが、

「それは俺の獲物だ！変身！」

≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＥＮＢＡ≫

≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！ＲＩＯＴＥ！ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！≫

そこへ刃介が乱入してブライに変身。

「兄さん、頑張ってくださいね」

そこへ金女も現れるが、ベルトを装着しているだけでセルメダルを装填する気配が無い。
大方、白ヤミーがとっとと片付くから加勢は要らないと踏んだのだろうが、それは甘い見通しだ。

＊＊＊＊＊

その頃、映司たちは、

「そうか・・・・・わかった。俺に手伝わせてくれないか？」
「え？」

説明を受けた北村は自分から協力を申し出てきた。

「ほら、ここのことなら誰よりも詳しい。仮に攫われたとしても、捕まってそうなところに心当たりがある。それに・・・・・」

北村は一旦間をおいて、

「俺、お前の助けになりたいんだ」
「・・・・・・・・」
「なあ、いいだろ？」

北村は映司の手を取って懇願する。

「あ、ああ。頼むよ」

そういわれた瞬間に、北村の心からは喜びが満ち、欲望が満ちていった。

＊＊＊＊＊

『うぅああ・・・・・・』

片や、バースは白ヤミーにキャメルクラッチをかけていたが、白ヤミーは突然にもパワーを増大させ、バースを持ち上げながら立ち上がったのだ。

そして、

「って、ちょちょちょっとちょっと!!?」

バースが驚くのもお構い無しに、白ヤミーは奇妙な光を纏い出し、それが晴れたときには、

『キシャア・・・・・・』

フクロウヤミーとして成長を遂げた。

「こいつは・・・・・・」

「鳥のヤミーか」

「となると、ロストが近くに？」

アンク、ブライ、金女がそう言ってると、

『キシャアアア！』

――バサっ、バサッ！――

フクロウヤミーは翼を大きく羽ばたかせて突風を巻き起こす。

「うわあああ！！」

バースは思い切り吹っ飛ばされ、強制的に変身が解ける。

「伊達さん！」

後藤が近寄ろうとしても、

『シェア！』

「くっそ、邪魔すんなこの巨大花（ラフレシア）が！」

ブライとヤミーの戦いのために近寄れない。

しかも、

――ブシュウゥゥ！！――

「ッッ！？なんだ、このヒデェ臭いは！？」

花部分からトンデモない悪臭ガスを放ってきたのだ。

その隙にフクロウヤミーは、

『キシャアア！！』

なにやら黒い帯を伊達の体に巻きつけ、空の彼方へと飛び去ってしまったのだ。

「うあああああ！！」

「伊達さん！！」

後藤は叫ぶも、それは伊達に届いてもフクロウヤミーに届くことは無い。

『フン。シェェェ！！』

一方でラフレシアヤミーもどこかへ去っていってしまった。

ブライは漸く解放され、残されたベルトとメダルタンクを見て、

「チッ、面倒になってきたな」

＊＊＊＊＊

レジャーランドの端にあるゴミ置き場。

北村の案内でやってきた映司は実に真剣な表情で比奈を探す。

「比奈ちゃん！比奈ちゃん！」

「・・・・・・・・・・・・」

しかし、それを見つめる北村の顔が微妙な表情になっている。

「なぁ映司」
「どうした？」

不意に北村は、

「ウチの会社に来ないか？」
「・・・え？」

いきなりヘッドハンティングを仕掛けて来た。

「世界の子供たちを救う事業を立ち上げたって良い。ほら、高校時代からそれが夢だって言ってたろ？」
「ちょっと待ってよ、こんな時にどうしたんだよ？」

突然の物言いに流石の映司も困惑する。
北村はそんな映司に歩み寄る。

「お前の友達を悪く言うわけじゃないけど、あの変な髪型した金髪に利用されてんじゃないのか？」
「・・・なんでそう思うの？」
「兎に角俺は違うぞ。映司を利用するわけじゃない。映司がより映司らしくいられるよう、全力を尽くしたいだけだ！」

どんどん語りに熱が篭る北村。

「どうしてそこまで？」

「利害関係とかなしに何でもできるのが本当の親友だろ？」
「親友・・・・・・」
その単語に映司が口ごもる。
「高校のときのお前がそうだった。だから今の俺が在る。嘘じゃない」
「北村くん・・・・・・」
「彼女は、絶対に俺が見つけ出してみせる」
「――うん、ありがとう」
映司からの感謝の言葉に、北村は自然と嬉しそうな笑顔となる。
しかしそこで、
『キィーー！』
タカカンドロイドが空中で旋回している。
「ッ――ごめん、俺行かなきゃ！」
「え！？」
＊＊＊＊＊
映司は急いで下方へとおりていき、そこでバッタリ出くわしたのが、刃介とアンクと後藤と金女だ。

「火野。人探しの途中で悪いが、ヤミー退治だ」
「え？」
「伊達さんがヤミーに攫われた」
「そんな・・・・・・」

刃介と後藤の簡潔な説明に映司が意気消沈としていると、

「ついでに言っとくと、アンクの片割れたるロストが生み出したヤミーだ」
「ロストって、鳥のグリード？」
「そうだ、行くぞ」

アンクは映司の腕を引っ張るが映司はアンクの手を振り解く。

「それでも比奈ちゃんを助けるほうが先だっ！」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・」

アンクと映司は互いににらみ合い、

「――――勝手にしろ」

アンクが一人で探索に向ってしまった。

「おい、アンク！」

映司が引き止めても何の意味もなく、アンクは一人でズカズカと行ってしまった。
それを見た刃介は金女に耳打ちして話した。

「金女」
「なんです？」
「迷い子さがし」
「義姉さんを連れて来いってことですね」

金女は一発で意図を読み取った。

「俺は火野に同行して様子を見る」
「不否（いなまず）」

＊＊＊＊＊

アンクは別行動をとり、雑木林に来ていたが、機嫌は実に斜め一直線だ。

「映司の野郎・・・・・・」

アンクは映司の態度に苛立ち、木を殴った。

「クッ・・・・・・」

気が晴れぬまま林を歩いていると、

「お前・・・・・・」
「――――――」

木陰から北村が出てきたのだ。

「・・・・・お前か。ヤミーの親は」

アンクは持ち前の探知能力で見破って見せた。

「映司の前から、消えてくれないか？」

だが北村はそんなものお構いなしで、嫌味な笑顔をしながらアンクに告げる。

「ハァ？」

アンクは言葉の真意がわからず、取り合えず歩いて前進するが、それとは対照的に北村は後退する。

「お前に映司の何が解る？」

「何バカなこと言ってんだ？」

「お前に映司を支える事ができるのか？」

「フッ――そんなことより、早くヤミーの居場所を教えろ」

アンクの高圧的態度にも北村は全く屈せずに、

「――――プッ」

寧ろ鼻で笑っていた。

アンクも最初はわからなかったが、今地面を踏む感触でなんとなく理解したが、気付いたときにはもう遅い。

――バァア！！――

「うぉああ！？」

木の枝に巻きつけられた四本の縄で支えられた網が、葉っぱと土で紛れ、アンクを宙に捕えるときまでなりを潜めていたのだ。

「おいコレは何のマネだ！？」

「お前ジャマなんだよ」

「オイ貴様ぁ待てぇ！！」

自分を網に閉じ込め、何処かへと行ってしまう北村にアンクの怒号が響いた。

＊＊＊＊＊

そして北村は見事に映司たちの前に現れる。

「映司ぃぃ！！」

北村の大声にみなが振り向く。

「比奈ちゃんの場所、大体見当がついた！」

「ホント？」

「行こう！」

一斉にそこへ向かうが、

（あいつ・・・・・そういうことか）

ただ一人、刃介だけが見抜いていた。

＊＊＊＊＊

北村の案内でたどり着いたのは、”ＧＡＭＥ　ＦＩＥＬＤ２”などと銘うたれた場所。

恐らくアウドドアな遊びを主とした多目的空間と思われ、敷地内にはベニタ板やドラム缶などといった障害物のほか、かなり簡易な小屋なども建てられている。

「ここじゃないかと思う」

北村の言葉を契機に映司と後藤が走った。

「比奈ちゃん！」

「比奈ちゃん！」

構造上、確かに人一人を隠すくらいはできそうな場所だけに、捜査にも熱が入る。

「・・・・・・・・」

「あれ？貴方はいかないんですか？」

北村はただ立ち呆けている刃介に話しかけるも、その結果は

「あとでヤミーの巣の在り処を聞きだしてやるから、覚悟しろ」

「――――ッ」

トンデモない言葉が飛び出してきた。

「な、なんで・・・・・・」

「俺もアンクと同類でな。泉を助けたらゆっくり話し合おう」

ポンポンと刃介が北村の肩を悪どい面構えで叩いていると、

「比奈ちゃんがいた!!」

映司が小屋の中で眠らされている比奈を見つけ出した。

小屋と外界を隔てる仕切りを開けるため、ドラム缶を退かして行っていると、

『キシャアア!』

『シュアア・・・!』

フクロウヤミーとラフレシアヤミーが現れたのだ。

「な、なんだこいつら!?」

北村はヤミーが成長することを知らないので、白ヤミーとは別の怪物と思って驚愕する。

「人の欲望から生まれた怪物なんだ!」

「欲望・・・?」

映司からの短絡的な説明の中に、カザリのそれと同じ単語が混じっているがゆえか、北村はそれを繰り返した。

「取り合えず、片付けちまおうぜ」

刃介はドライバーを装着し、コアメダルをセット。

「変身！」

≪ＲＹＵ・ＴＳＵＢＡ・ＴＳＵＫＡ≫

ブライの亜種形態、リュウバカに変身。

「そっちの鳥は任すぜ」

とだけ言ってブライはラフレシアヤミーに突っ込んでいく。

『ジェェェ！』

ラフレシアヤミーは両腕からブライドライバーめがけて触手を伸ばすが、

「甘い！」

――ザシュ！！――

全てはヤイバスピナーの一刀のもとで斬り捨てられる。

「仏の顔も三度までってな！！」

――ドガッ――

ブライは遠慮会釈なく、ラフレシアヤミーを殴っていく。

一方で映司達は、

「ううううう！」

「くぅぅぅ・・・！」

後藤と二人がかりでフクロウヤミーを押さえ込んでいる。

「北村くん、今のうちに比奈ちゃんを！！」

「お、お前はどうするんだよ！？」

「こいつを何とかする！」

「無茶だ！怪我したらどうするんだよ！！」

「大丈夫。慣れてるから！」

此処まで言われたら北村といえど断るわけにはいかない。

一人で小屋の前にあるドラム缶を自力でどかし、小屋の中に入った。

「おい、大丈夫か？おい、おい！」

顔をペチペチと叩いて比奈を起こそうとする北村。

「火野、アンクはまだ来ないのか！？」

「ヤミーの気配なら、必ず拾って来るはずなんですけど・・・・・・」

＊＊＊＊＊

その頃アンクは。

「クッソォ！」

忌々しそうに網の中で暴れている。
しかし、その時だった。

――ビュン！――
――ドサッ！――

「おわッ！？」

突然縄が切れてアンクは落とされた。

「不傷（きずつかず）――大した怪我はしてませんね」

それは金女の放った手裏剣だったのだ。

「どうやらそのようですね」

傍らには彼女に連れて来られた七実が居た。

「フン、礼なら言わないぞ」
「最初から期待していません」
「兎にも角にも、早く現場に向いましょう」

＊＊＊＊＊

ＧＡＭＥ　ＦＩＥＬＤ２

こちらではラフレシアヤミーとブライが戦っていたが、一方で映司と後藤はフクロウヤミー相手に生身で苦戦している状況だ。
コアを管理しているアンクが居ないのではタトバコンボは他のコンボも亜種形態も使えない。
フクロウヤミーと距離を離している二人は、様子見をしながら話し合う。

「後藤さん、俺やってみます」
「何を？」
「ピンチになれば、またこのコアメダルが――」
「冗談はよせ！お前が暴走しても、俺一人では止められないんだぞ！」

唯一、この場でプトティラを止められそうなブライですらラフレシアヤミーとの戦いで手が塞がっている状況でプトティラコンボはあまりに危険過ぎる。

「じゃあ後藤さんがバースに！」
「ッ！？」

あまりに衝撃的な提案に後藤は絶句する。

「時間稼ぎます！」

映司はそういってフクロウヤミーに体当たりを行う。
後藤はその好きにメダルタンクと一緒にあるバースドライバーに手を伸ばす。

「俺がバースに・・・・・・いや、今の俺じゃ無理だ！」

後藤は懐から紫のカンドロイドを取り出し投げた、

『プテラ！』

プテラカンはフクロウヤミーの周囲を飛び回り、口から奇妙な波動を繰り出して足止めするが、

『キシャア！』

フクロウヤミーは手から黒い帯を放ち、プテラカンを捕縛してしまった。
さらに、

『キシャ！』
「うわッ！」
「後藤さん！！」

後藤とメダルタンクも黒い帯によって自由を奪われてしまう。
映司は完全に孤立無援で戦う状況になってしまう。
フクロウヤミーの魔の手から逃れようと、必死に体を後方に向けて転がしていると、

――バシュ！――

体からは三枚の恐竜コアが出現したのだ。

「――――ッ」

映司の瞳は紫となり、糸で吊り上げられたかのように身体を起こした。

（まずい、プトティラコンボに・・・！）

ブライもこの状況に危機感を持ったその時、

「映司！！変身すんならコイツにしとけ！！」

アンクが右手で三枚の灰色のコアメダルをなげ、それらは紫のコアを押しのけてベルトに収まる。

コアが身体に戻ると映司は正気に戻り、

「――ッ・・・・アンク！」

「急げ！！」

アンクの言葉に頷いた映司はオースキャナーでコアメダルを読み取った。

「変身！」

≪ＳＡＩ・ＧＯＲＩＬＬＡ・ＺＯＵ≫

≪ＳＡＧＯＨＺＯ・・・・・ＳＡＧＯＨＺＯ≫

サイの頭、ゴリラの腕、ゾウの脚。
重量系のサゴーゾコンボだ！

「うおおおおおおおお！！」

オーズは雄叫びをあげると、サゴーゾコンボの十八番である重力操作を利用し、フクロウヤミーを無理矢理地上に引き摺り下ろした。
そこへオーズはゴリラアームの腕力とゾウレッグの重厚さを利用したヘビー級の一撃を加えていく。

「フンッ！ハアッ！」

元々一対一の勝負には打って付けなスペックをしているサゴーゾコンボはこのような、特に飛行タイプの敵には格段的に有効なスタイルなのだ。

一方ブライは、

「刃介さん、これを！」
「やっと来たか！」

ブライは七実からコアメダルを投げ渡され、早速メダルチェンジを行う。

≪ＨＡＹＡＢＵＳＡ・ＨＯＵＯＵ・ＹＡＴＡＧＡＲＡＳＵ≫
≪ＨＡＯＵＲＡＳＵ！≫

紅蓮の鳥類系・ハオウラスコンボとなる。

「ハァァ・・・・・・・！！」

ホウオウウイングを広げると同時にラプトリアルフェザーを展開し、

「あらよっ！」

――バシュバシュバシュ！！――

『ンギャアアア！！』

次々と羽手裏剣を喰らい、吹っ飛ばされるラフレシアヤミー。
吹っ飛ばされた先にはオーズによって殴り飛ばされたフクロウヤミーもいた。

『グッ、ジュウェエエ！！』

ラフレシアヤミーは苦し紛れの煙幕代わりに悪臭ガスを噴射する。
しかもそれは自分たちの身を隠す為に広範囲で狙いをいとわないものと、

――ブシューーー！――

「うぅ、また・・・！ホントに、死ぬゥゥ・・・・・・」

好い加減かどうかはわからないが、悪臭ガスは不幸な事に再び金女に降り掛かったのだ。
常軌を逸したその臭さに、金女はあえなくバタンとぶっ倒れてしまった。

『キシャアアア！！』

そこへフクロウヤミーが黒い帯で金女を捕縛し、さらには後藤ごと連れ去ってしまう。
ラフレシアヤミーもそれに乗じて逃げてしまった。

「後藤さん!!」
「金女!!」

ブライはすぐに飛行して追いかけようとするが、

「う、あ・・・・・・」
「ってオイオイ」

体力が尽きたオーズがブライに寄り掛かる形で倒れてきたのだ。

「ったく」

チャンスを潰されたことにイラ付きながらも、ブライは変身をとき、オーズへの変身が解除されてしまった映司に呆れ返っていた。

「映司くん!」

そこへ眼を覚ました比奈が駆け寄ってくる。
一応北村も一緒である。

「大丈夫映司くん?」

心配する比奈と平行して北村が報告する。

「犯人の顔は見てないそうだ」

「捕まった瞬間に気絶しちゃって」
「そっか。でも良かった」
映司は両手両脚を地に付けていた状態から立ち上がる。
「お前いつもあんな無茶なことしてるのか！？危ない事しちゃダメだぞ！」
「オイ！」
そこへアンクが乱暴な声をあげた。
北村はアンクの姿を見た途端に、
「え・・・・・・ッ！？」
驚きを隠しきれないで居る。
アンクはそのまま歩いていき、何も言わずに北村の横を通り過ぎていった。
しかし、このまま何も起こらないはずが無い。
（あぁあぁ。ほとほと、面倒だな）
ただ一人、刃介だけは内心、溜息をついていた。

高校時代と思惑と連れ去り（後書き）

次回、仮面ライダーブライ！

繋がりとゼントウと生き損ないの本音

繋がりとゼントウと生き損ないの本音（前書き）

仮面ライダーブライ！
前回の三つの出来事は！

一つ！紫のコンボのパワーに手を焼く映司と刃介！

二つ！映司の高校時代の友人・北村から鳥のヤミーが誕生し、植物園ではラフレシアヤミーが誕生！

そして三つ！フクロウヤミーは、次々に人を連れ去ってしまった！

繋がりとゼントウと生き損ないの本音

一戦の後、映司は必死に走り回りながら伊達と後藤と金女を探していた。
一方、コテージに戻ったアンクたちは。

「おい、お前を攫った奴の顔、ホントに見なかったのか？」
「ネットを被せられて、すぐに気を失っちゃって・・・・・・」
「ハッ」

アンクの質問に対する比奈の返答に、刃介は短く吐き捨てる。

「おい、北村」
「おい！」
「比奈さん。お茶、淹れてくれないかな？」
「いいですよ。ちょっと待ってくださいね」

アンクと刃介に呼びかけられた北村は、比奈を一旦退場させる。
アンクと刃介は北村に歩み寄る。

「自作自演で想い出づくりとは、見下げた友情だな」
「な、何のこ「惚けなくていい。あのヤミーを生んだ欲望はなんだ？」

二人は徹底的になっている。

「俺の欲望・・・・・・」
「あのヤミーはお前の欲望を満たす為に動いている。自分の生んだ奴を巣に閉じ込めて、親鳥みたいに欲望を運ぶ」

「大方このレジャーランド自体が、巣ってことになるな」

北村はバシバシと突きつけられていく目の前の現実に絶句するほか無い。

「ま、言いたくないなら構わない。こっちで勝手に探すし、火野にも手伝わせる」

刃介がそういって北村に威圧感を加えると、当然のように北村は刃介を止めに掛かる。

「そ、それだけは止めてくれ！頼む！」

「なら教えろ」

頭を下げる北村に刃介が問い詰める。

「・・・・・映司に頼られたかっただけだ。でも、まさかあんな化物が出てくるなんて・・・・・・」

あの時、ヤミーが生まれた際に北村はカザリにこういわれた。

――ヤミーは気味の手伝いをしてくれるよ。あいつと友達になりたいっていう君の欲望――

――俺の欲望ッ！？――

――あいつに頼られたいんだろ？だから女の子を攫って捜すつもりだった――

「あんな化物が次々に人を攫うなんて・・・・・・」

「それはそれは、餓えた奴にありがちな欲望だな。暗い青春時代は、厚き友情を求めるってか？」
「酔狂な欲望だなぁ」
「お前等だって映司の仲間だろ？」
「仲間というより、ただの腐れ縁だ」
刃介はバッサリと斬り捨てるように言い切った。
そこへ、
「どうかしたの？」
映司がやってきた。
「あ、いや、「映司、いいことを教えてやる」
アンクが戸惑う北村を押しのけて喋りだす。
「北村（こいつ）がヤミーの親だ。そして――」
「言わないって約束だろ・・・・・・！？」
「あの女を攫ったのも、こいつだ」
北村の懇願も虚しく、アンクは全ての真実をぶちまけた。
「北村さんが、私を・・・？」
「北村くん・・・・・・」
その時、アンクはニヤっと嫌味な笑顔をした。
「映司ッ！違うんだ！」

北村は必死に取り繕うが、その必死さが逆に不自然さを醸し出してしまっている。
すると映司は、
「比奈ちゃん、ごめん！全部俺と北村で仕組んだことなんだ」
「え？」
「「はっ？」」
（火野さん・・・・・・）
突然、自分から泥を被った映司に、皆は素っ頓狂な声をだしてしまう。
「もう少し早くバラすつもりだったんだけど、ヤミーが出た所為で――な？」
「映司・・・・・・」
北村も映司の行動に眼を疑ったが、同時に感動さえした。
「ごめんね、やりすぎた」
「あ、はぁ・・・・・・」
状況を今一飲み込めずにいるのか、比奈は上手く言葉が出ない。
「ホントにごめん！」
映司は再三にわたって頭を下げた。
「北村、行こう。――あ、それから、あの三人は絶対に助け出すから！」

そういって北村の手を引いて行ってしまう映司。

「おい！」
「火野！」
「はあ、しょうがないですね」

そんな映司に、刃介とアンクと七実は追いかけていくしかなかった。

＊＊＊＊＊

一方、金女達はというと。

「あの、お二方、よろしいでしょうか？」
「「ん・・・・・・んぅぅ」」

呼びかけられ、眼を覚ます二人の男。

「不眠（ねむらず）――漸く起きましたね」
「お、金女ちゃん！」
「ここは？」
「植物園です」

伊達と後藤は自分たちがいる場所に困惑する。
周囲は大量の藁でつくられた鳥の巣そのもので、四本の黒い帯が巣と建物のガラスに引っ付く事で、巣を宙に吊るしている。

「どうやらあのヤミーたちはここを拠点（ベース）にしてるようですね」
「らしいな。でもあのニワトリには一杯食わされた」
「「あれはフクロウです」」
「あれ、そう？」

＊＊＊＊＊

その頃、映司達は。

「北村、あと行ってないトコは？」
「植物園と、観覧車だ」
「行こう！」

と、走り出した瞬間、

「おい映司！どういうつもりだ？」
「どういうつもりって・・・・・・」
「そいつ無茶苦茶だぞ。カザリに唆されて、俺まで捕まえやがった・・・！」
「え、アンク捕まったの？」
「――――うるさい」

アンクは不安を思い切りぶつけるも、映司は聞かない。

「今は北村に頼るしかないだろ。それに――――」
「なんだ？」

「北村がこんなことをしたのには、俺に責任がある」

（（お人好しも此処まで来ると・・・・・・））

七実と刃介は心の中で溜息をつく。

「しかし友達になりたいとは、人間ってのは奇妙な欲望をもつな」

「北村とは、高校時代からの親友だよ」

と映司は迷い無く答えたが、その時に引っ掛かるものが浮かんだ。

「北村。昔こんな感じのレジャーランドに来たの憶えてる？」

「勿論だ」

「おい、そんなこと聞いてどうする？」

「だって、北村から生まれたヤミーだろ。親の影響を受けるんじゃないかと思って」

映司の的を射た発想に刃介は感心した。

「ほほぉ。お前も段々欲望のなんたるかがわかってきたみてぇだな」

「それで、何処が一番でしたか？」

七実が確認する為に聴くと、

「・・・・・植物園！」

「きっとそこだ！行こう！」

＊＊＊＊＊

「そら、あともう少しです！」

金女たちは必死に身体を揺らし、それと連動させるようにして巣を揺れ動かしていた。

最初はゆっくりでも、徐々に大きくなっていけば、それが何度でも行われれば、如何にあの黒い帯といえども、

――ブチッ！――

何れは切れてしまう。

――ドシーン！――

結果として巣は大きな音を立てて地面に落ちた。

「・・・・・すいません」

突然、後藤が謝った。

「なんだ？」

「伊達さんが攫われた後、ベルトが残ってて・・・・・・あの時、変身してれば今頃――」

「できないと思ったからしなかった。・・・その判断は間違ってない。身の丈以上の力は、身を滅ぼすこともあるからな」

伊達はそう後藤に説いた。

「でも後藤さん。此の世の全てが努力で解決するわけじゃありません。でも、努力したからには其れ相応のモノが訪れる筈です」
「金女ちゃん・・・・・・」
「時は何時か来ますよ。後藤さんがバースたる力量をつけたら、ね？」

金女は知っている。誰もが努力して己を高めようとしても、全てが成功するわけではない。
それは裏社会で生きてきた金女ならではの意見。
しかし、そんな自分でも右衛門左衛門の下でしてきた修行の成果として此処にいるのだ。

「そうそう。俺達ぁ信頼してんだせ、後藤ちゃんのこと」
「兎に角、此処から早く出ましょう」

金女は浴衣の内に隠していた苦無で黒い帯を切り裂く。
どんな衣服だろうと、そこに隠せる要素さえあれば忍具を仕込むのが忍者というものだ。

「おお、金女ちゃんナイス！」

と、伊達が褒めた瞬間に、奴がやってきた。

「悪いが、今出られたら困るござる」
「ん？この緑川光ボイスは！？」

＊＊＊＊＊

「ん、この気配は・・・？」
「思った以上に面倒だな」
「どうしたんですか？」

植物園まえで奇妙な気配を察知した七実と刃介に映司が問う。

「グリードの気配だ」
「それも、今まで感じ無かった雰囲気だ」
「ッ！急ごう！」

＊＊＊＊＊

植物園内。
緑豊かな植物と、それにつられやってきた昆虫達で生い茂る空間で、

「おい！聞こえるかぁ！」

刃介が大声を出して呼びかける。

「ハリガネェ！こっちだぁ！」
「鋼だっつってんだろうが！！」

伊達の間違いに渾身のツッコミ。
だがお陰で場所がわかったので、行ってみると、

「――――――――」
「金女？」
「なにがあったんですか？」
そこにはうつ伏せで気絶している金女が倒れていた。
「それが、俺達に巻きついてるコイツを斬ろうとしたとき、妙な侍がやってきて――」
「そんで、金女ちゃんを一発で気絶させちまったんだ」
「侍、だと？」
「まあ兎に角、今は後藤さん達を！」
映司はクジャクカンドロイド羽部分の刃を使って、後藤の黒い帯を切った。
だがその時、
『『キシャアアア！！』』
二体のヤミーが現れたのだ。
「チッ、こんな時に」
「刃介さん、これを」
七実は刃介に二枚のコアを投げ渡す。
「亜種形態か」
「アンク、こっちも！」
「受け取れ！」

一方でアンクも映司にメダルを投げ渡す。

「サイにウナギにバッタって、適当に投げたろ！？」

「さっさと変身しろ！」

二人がそういってる間に、刃介はブライドライバーを装着し、メダルを投入。

「変身！」

そしてスキャナーで読み取った。

≪ＲＹＵ・ＭＥＧＡＬＯＤＯＮ・ＳＭＩＬＯＤＯＮ≫

血錆色の龍の頭、蒼い古代鮫（メガロドン）の腕、黄色いスミロドンの脚。

亜種形態が一つ、リュウメドン！

「先に行くぜ！」

ブライは一足先に戦闘に入った。

映司もドライバーを装着し、サイとバッタのメダルを投入し、最後にウナギを入れる直前――

『キシャア！』

「うわぁぁ！？」

脚に帯を絡められ、体制を崩してしまってメダルを落としてしまったのだ。

映司は必死に手を伸ばすが、コアに手が届く直前で、フクロウヤミ

ーが帯を引っ張って映司を引きずり込んでいく。

それを見た後藤は、

「伊達さん、待っててください」

「え、ちょ、後藤ちゃん！？」

後藤はさっきまで巣を吊るす役の一端をになっていた黒い帯を手に取る。

ダラリとはしているが、強度自体に問題は無さそうだ。

後藤は帯をロープ代わりにしっかりと掴み、助走をつけて思い切り跳んだ。

「ハァァアア！！」

まるで野生児のようなアクロバティックな体制から蹴りをかまされ、フクロウヤミーはガラスを突き破って屋外へと吹っ飛ばされてしまった。

「後藤さん！」

「火野！戦え！」

映司が促されたまま、ウナギを拾ってバックルにいれ、スキャナーで三枚のメダルをスキャンする。

「変身！」

≪ＳＡＩ・ＵＮＡＧＩ・ＢＡＴＴＡ≫

サイの頭、電気鰻の腕、飛蝗の脚。
亜種形態のサウバである。

「よし、こっちもお外で遊ぶか」

ブライは目の前のラフレシアヤミーに向って、

「あーらよっ！」

――グサっ――

『じ、ジェアアアア！！？』

水刀『鑓』の穂先を敵の腹部に刺したまま無理矢理屋外へ突入した。

＊＊＊＊＊

「フっ！ハっ！」

オーズが奮闘する中、フクロウヤミーは危険を感じたのか、空へ逃げようとするも、

「セィ！」

オーズは電撃が迸るウナギウィップを使ってフクロウヤミーの脚を捕えた。

そこからバッタレッグで跳躍し、

「ハァ！」

サイヘッドの角で頭突きをお見舞いする。
結果としてフクロウヤミーを地上に引き摺り下ろすことに成功したのだ。

「サイ・ウナギ・バッタって、適当じゃ無かった！」
「・・・・・・当たり前だ」

傍からアンクがオーズの発言に呆れながらも肯定している。

『フジャーーー！！』

片やラフレシアヤミーはお得意の悪臭ガスを放つ。
だが毎回それを喰らうブライではない。

「んなもん、焼き尽くす！」

――ヴォオオオァァアアア！！――

口から龍之息吹を吐き出すことで、悪臭ガスと相殺させる。

「もう一丁！」

スミロドンレッグで高速走行した状態で、

――ザグっ！――

『ギジェエエエエ！！？』

『鑓』の穂先がラフレシアヤミーに深々と刺さった。

＊＊＊＊＊

一方後藤はというと、

「無茶しすぎだよ後藤ちゃん！」

「あれぐらいの勇気がないと、バースにはなれません」

後藤は返答しつつ、クジャクカンドロイドで黒い帯を切り裂く。

「よし、金女ちゃんも起きた事だし」

「我々も参加しましょう！」

「ええ！」

＊＊＊＊＊

植物園からさらに離れた場所へと戦闘中に移動したオーズとブライ。

戦いに集中する最中、

「火野！」
「兄さん！」

バースとチェリオが、跳び蹴りをヤミーにかましながら登場してきた。
だが次の瞬間、

「映司、後ろだ！」
「え？うあっ！？」

オーズを攻撃したのは、

「お前はカザリ！」
『フフ、僕が相手になるよ』

虎のような刃の爪を立てたカザリだった。

「いいのかよ？二対一だぞ」

とブライが言った瞬間に、その出来事は起こった。

『爆縮地』

――シュン――

それは本当に一瞬の出来事だった。
技名がどこかから呟かれた瞬間に、そいつは現れた。

「お前は・・・・・・？」

ブライは見たことも無いグリードの姿に戸惑った。

犬や狼を連想させる胴体や頭部、甲殻類を思わせる両腕と両肩、植物を彷彿とさせる両脚。

その全てが、長い間放置された刃のように錆び付いた色をしていた。

そして何より、そのグリードの特筆すべき点は――

『か、完全体・・・だと・・・・!?』

カザリは驚いた。

肉体の全ては勿論、腰のベルトさえ元の色を取り戻した上に、バックル部位には黄金の石が嵌っている。今現在で誰もがなっていないグリードにとっての究極の形態。

『ブライ、お主の相手は拙者が勤めるでござるよ』

「ござる?拙者?・・・・・・それに今使った技・・・・・・」

ブライは得られた情報から該当する人物を一人に絞った。

「錆白兵」

『御名答。もっとも今はゼントウと呼んで貰いたい』

状況は、新たなるグリードの出現により、一層緊迫したものとなった。

そんなとき、遠巻きからこちらを見ていた北村は、アンクを見て思い出した。

――あのアンクって奴が一番君の邪魔になる――

それはカザリの言葉。

――アンクって奴は悪い奴でね。君の友達を利用して、下手すれば死なせてしまうような奴なんだ――

「あいつが映司の側にいたら危険だ」

ふとそう思った。

しかしそれも、一種の欲望としてカテゴリーされる。

とどのつまり、

『キシャアアア！！』

「ッ！こいつ！？」

フクロウヤミーがアンクを連れさるという意味だ。

「ッ――アンク！」

『隙有り！！』

カザリはオーズの動揺を見逃さず、空かさず爪で攻撃した。

結果として、オーズの変身が解け、コアメダルが地面に落ちてしまう。

そしてブライも・・・・・・。

「その刀、まさか『針』か？」

『無論』

ゼントウは自分が腰に差しているものの正体をあっさり明かした。

『試し切りに付き合ってもらうでござる』

「やなこった」

ブライは明らかな拒否の態度をとるが、

『速遅剣（そくちけん）』

――閃ッ！――

「ッッ――――!?」

一瞬の出来事だ。

ゼントウが薄刀の切っ先を振るうようにして向けた瞬間、ブライの身体に刀傷が入った。

速遅剣とは、錆白兵の扱う技の一つ。

その内容は一言で言うと、刀の刃渡りを自由に変化させたような、遠距離・中距離攻撃が可能ということだ。

これによってブライの変身も解けてしまう。

「え、映司・・・・・・」

北村は思わず友の名を呼ぶが、そんなのこの場では何の意味も成さない。

カザリは転がってきたウナギのコアを拾い上げる。

『もーらった』

一方ゼントウも、宙を待ってはじけるメガロドンとスミロドンの二枚のコアをつかんだ。

『・・・・・・・・・』

ゼントウは黙ったままで動こうとしない。
と思われたが、

『これは戦利品代わりに、持って帰るでござる』

と言い残してどっかへと去ってしまった。
カザリは、映司に爪を付きたてようとするも、

『やめた。またあのコンボを出されたら叶わないからね。それに、物事には順番がある』
「順番？」
『僕の狙いは君達じゃない』
「え・・・・・まさかアンクを！？」

そう、フクロウヤミーが出てきた以上、この近辺にはアンクを吸収せんとするロストがいるということでもある。

『またね～』
「あ、待て！」

といってももう遅い。
カザリを人間を越えた身体能力で跳び去ってしまった。

当然、ヤミー達も――――。

「クッソ！コア二枚も持ってかれるとは・・・！」
「酷い結果ですね」

刃介が苛立ち、七実が呆れていると、

「早くアンクを追いかけないと！」

映司がそういった。

「・・・・・コアのことは後回しだ。アンクを奪い返さんと拙い」
「下手を踏めばロストが完全体一歩手前ですからね」

そう判断してアンクの捜索に協力しようとした矢先に

「待てよ！」
「北村は安全な場所に居てくれ」
「いいじゃないか！この人たち助かったんだし！」
「北村・・・・・・」

このタイミングで北村が食い下がってきたのだ。

「あいつのせいで映司、酷い目に遭ってんだろ？戦って傷ついて死にそうになって・・・なんか昔の夢もなくなっちゃったみたいだしさ！そんなのお前らしくないって！」
「俺は何も変わってないよ！」
「変わったよ！そんなに眼の色変えてさ。ましてや、自分で戦うようなやつじゃなかったろ！？」

すると映司は、

「あの時も！」

「あの時？」

「北村の家に行ってたあの時と同じだよ！」

「映司・・・・・・」

「今は自分が出来る範囲で、今やるべきことをやるしかないんだ！」

映司は自分なりの意見と意思を精一杯伝える。

「ごめん、急ぐんだ」

そういって、他の皆と一緒に行ってしまった。

＊＊＊＊＊

その頃アンクはフクロウヤミーに連れ去られ、滝つぼ近くの林に連れて来られていた。
そしてそこへ現れたのは。

「ごきげんよう」

真木清人。

「・・・・・おい待て。なんだこの気配？まさか、お前も体の中にあのメダルを？」

「まだ完全ではありませんが」
「バカな・・・・・ブライでもない奴がグリードになるなんて――」
「映司くんも同じはずですか」
相も変わらず他人と目をあわさず、腕に乗せた人形を見て話す真木。
そんな会話の最中に、
「――――――」
人間体のロストが現れた。

＊＊＊＊＊

場面は一旦映司達のところに戻る。
他の面々とはバラバラにアンクを探していた映司と刃介と七実だが、その時、バッタカンドロイドから通信が入った。

『映司！映司！』
「アンク！無事か！？」
『早く助けに来い！！』

バッタカンを通してもわかる。
相当な焦りという感情が伝わってくる。

「おいアンクよ。どこに連れ去られた？特徴だけでもいい」

『滝があること以外は全然だ！！』
「一応確認しますが、行き方は御存知ないんですよね？」
『ああ』

アンクは即答する。
そこへ、

――ブプゥゥゥゥ！！――

自動車のクラクションの音が聞こえてきた。
それは黒い大型の車から発せられていたもの。
もちろんそれを運転していたのは、

「乗れ！」
「北村！」
「助かるぜ！」
「滝のある場所へお願いします！」
「わかった！しっかり捕まってろよ！」

思わぬところで北村の協力を得ることができた三人は、余すところなくその好意に甘えることにした。
刃介と七実が後部座席に乗ると、映司が助手席に乗ってシートベルトをつける。
猛スピードを出す車の中で、北村はハンドルを握りながら語りかける。

「俺さ、高校の時お前が家に来るのがイヤで堪らなかった」
「あ・・・お節介だった？」
「それ以上！屈託のない笑顔で夢を語るんだ。俺には眩し過ぎた。
そん時だよ、俺が初めて他人に夢を話したのは。お前は嬉しそうに

『絶対できる』って言ってくれた。なんの根拠もないクセに」

北村は北村なりの本音をぶつけた。

次は映司の番だ。

「俺、お前に謝らなきゃいけない」

「え？」

「昔の俺、自分の力で世界が変えられるって思ってた。皆を助けて幸せにできるって。でも、出来なかった」

＊＊＊＊＊

再び滝つぼ付近。

カザリの加わった状況により、アンクはまさに風前の灯火だ。

『フフフ、どんな気分代だい？』

「最悪だ！」

アンクは露骨に不機嫌な声音を出す。

すると、ロストは子供の姿から鳥類王の姿に変貌する、

『僕だ。――僕は、僕になる』

『もうすぐ、君は消えてなくなる』

「残念だったなぁ、残るのは俺の方だ」

とアンクは最後まで不屈の姿勢をとったのだ。

『強がりも言い収めだね』

カザリはそんなアンクの言葉を戯言のように受け止める。

『あぁぁぁ・・・・・・・！』

ロストも身を屈めて、アンクに近寄った。

分かれてしまった一体と一本を、元の一つとするために。

＊＊＊＊＊

ところ戻って車の中。

「何故あの男を助ける？利用されてんじゃないのか？」

「・・・・・誰かを助ける力が欲しいから、絶対に失いたくない。

――利用してるのは俺の方なんだ！」

「・・・・・・トバすぞ！」

言葉どおり、北村はアクセルを思い切り踏んで車を加速させた。

「なあ、火野」

「なんですか？」

突然、刃介が映司に話しかけた。

「お前も、夢を失った一人だったんだな」
「え、鋼さん・・・・・・？」

意味深な言葉に映司は戸惑う。
だがこの言葉の意味は、刃介の過去を詳しくするモノならよく解るであろう。

だが映司はそれを全く知らない。
質問したくても、刃介がどれだけ重いものを背負ってるかすら知らない自分が踏み入れてよい領域でもないと判断したのか、映司は聞かない事にした。

そうしている間に、車は目的地の近くについたらしい。

「お二方、参りましょう」
「ああ」
「映司、鋼さん。ちょっと待て」

北村は二人を呼び止めると、ポケットからあるものを三枚取り出し、持ち主に返した。
それはサイとバッタのコアと、リュウのコアメダル。
あの時、北村は自分の近くに落ちていたそれを、ドサクサに紛れて回収していたのだ。

「お前たちにとって大事な物なんだろ？」
「ありがとう！」
「感謝するぜ！」

今度こそ車から降りた三人は、アンクの元に走っていった。

＊＊＊＊＊

『ぁぁぁぁぁ・・・・・・・・！』

「・・・・・・・・・・」

超至近距離となり、目と鼻の先の状態な二人のアンク。

このまな二人が触れ合った瞬間、右腕は身体に吸収されそうなイメージさえある。

だがそこへ、

「「アンクー！！」」

「アンクさーん！」

例によって三人がやってきた。

「遅いんだよ！！」

本来なら感謝すべきだというのに、この台詞を吐くところは、流石アンクと言うべきだろうか？

『邪魔しないでくれない？いいところなんだからさ』

と、カザリが釘を刺すが、そこで退くような人格を彼等はしていない。

「アンク・・・・・・」

映司は全身を縛られ、腕一本も動かせないアンクを見る。
ウナギ・コアを盗られた今、映司が単独で変身できるコンボは、もはやアレだけしか残っていない。

「・・・・・・・・・・」

刃介も映司の意思を汲み取ったのか、同じように胸に手を当てて意識を集中する。

『なに？』

カザリが問うも、

「出てきてくれ・・・・・・」
「頼む・・・・・・」

二人は自身の中に棲み付いた物を呼び起こそうとする。
それを見た真木はどこかへと歩み去ろうとしているではないか。

『あれ？どこ行くの？』
「火野映司が現れたのは想定外です。メダルが十枚集まるのは危険です」
『あぁそう』

などと軽く流すカザリ。

「映司！鋼！」

アンクは大声で二人の名を叫んだ。

「「出(コアメダルよ)てきてくれ・・・・・・俺に力を貸してくれ(やがれ)!!」」

――バッ!バッ!バッ!――

宿主の求めに応じ、紫のコアメダルが飛び出してくる。

二人は瞳の色が紫となり、意識を力で飲まれそうになりながらも、宙に浮かぶコアを掴み取り、ドライバーに押し込んでバックルを傾ける。

そして自力でスキャナーを手にとって、こう叫んだ。

「「変身!!」」

≪ＲＹＵ・ＷＹＶＥＲＮ・ＤＲＡＧＯＮ≫

≪ＰＴＥＲＡ・ＴＲＩＣＥＲＡＴＯＰＳ・ＴＹＲＡＮＮＯ≫

≪ＲＹＵ・ＷＡ・ＤＲＡＧＯＮ　ＫＮＩＧＨＴ!≫

≪ＰＵ・ＴＯ・ＴＹＲＡＮＮＯ　ＳＡＵＲＵＳ!≫

解禁された太古の力と幻想の力。

それらはあまりに激しい波動を大地と空気に叩き込み、プトティラコンボとリュワドラコンボが今一度顕現した。

「「ヴォオオ!!」」

二人の狂戦士は雄叫びを上げながら敵へと突っ込んでいく。

そこには理性の一欠片も感じられない。

「アンクさん、大丈夫ですか?」

七実は黒い帯を手刀で切断する。

――斬ッ――

「もう少し早けりゃ、気分も爽快だったがな」

助けてもらってこの態度、やはり捻くれアンクとはこのことだ。

まあコッチの事はさておき、ブライたちの戦いに視線を戻そう。

「ヴアアアアアア！！」

『ギギャアアア！！』

オーズはトリケラアームの腕力を駆使してフクロウヤミーをつかみ、強引に前進していき、遂にはドシンという音まで立つような勢いで樹木に叩き付けたのだ。

その衝撃でフクロウヤミーからはセルメダルが飛び出し、オーズはその内の一枚を拾って地面に手を突っ込み、メダガブリューを装備する。

一方でブライは・・・！

『ジェジェエエエェェェ！！』

「ヴゥゥ！！」

数多もの蔓をブライに絡ませながら、ラフレシアヤミーが登場してきた。

だが、幾ら鎖や枷をつけようと、今のブライには無用の長物である。

「ヴゥアアアア！！」

――バリッ！――

力技で全ての蔓をもぎ取ったのだ。

『ジッ！？ジィィィイ！！』

ラフレシアヤミーはそれでもまだ蔓の触手をドライバーに伸ばし、エネルギーを吸い上げようとしたが、

――ゴクン、ゴクン、ゴクン、ゴグァアアアアアアア！！――

『ジェェェェイアアアアア！！！』

蔓はエネルギーの流れに耐え切れず、本体ごと小さな爆発を起こしてしまった。

幻想上最強の怪物のパワーは、最早一体のヤミーで収まりきる大きさではないのだ。

「ガァルゥゥ・・・！」

ブライは低く唸り、セルメダルを拾って空間を叩きわり、メダグラムを取り出す。

そして、

「「ヴォオ！！」」

そのままカザリとロストに向って行ったのだ。

オーズがカザリに、ブライがロストに攻撃を仕掛けていき、強大なパワーの赴くままに刃を振り回す。

この圧倒的な威圧感のせいか、カザリもロストも警戒して上手く全力を出せないで居るようだ。
しかし、そんな出し惜しみをしてると、

「グルァァ！！」
『ぐわああ！？』

オーズのメダガブリューの刃がカザリの身体に直撃し、数枚のセルメダルと共にチーター・コアが飛び出してきた。
アンクはすぐにそのメダルを掴み取る。

「フッ、ざまぁみろ」

そう吐き捨てるアンク。
その間にも激闘は続いている。

『くッ、このままじゃ拙いね』
『一緒にやろう！』

焦るカザリにロストが同時攻撃を提案する。
他に案も浮かばず、カザリとロストは前と後ろでオーズとブライを挟み込む陣形を取り、

『フゥッ！！』
『ハアアアア！！』

カザリの手からは本来ある風だけでなく、取り込んだ水棲系と重量

系のコアによって水流と重力波までもを最大出力で放射する。
ロストも空中から勢いをつけ、赤熱するほどの威力を誇る両脚キックを喰らわせた。

――ドォォォォォン！！！――

激しい爆音が当たり一面に轟いた。
地面に草が燃える中には、倒れたブライとオーズがいる。

『やったか？』

カザリがそう呟くも、それは淡い希望に過ぎない。

――ガシッ――

オーズとブライは立ち上がった。
各々の武器を掴み取って、闘争本能に駆られて見事な雄姿を見せ付けている。

「「オオオオオオオオオ！！！」」

二人は構わず特攻していき、ザシュザシュとカザリとロストに斬り込んでいく。
だがそこへ、

『キシャア！』
『ジュアア！』

フクロウヤミーとラフレシアヤミーが後方から覆いかぶさるようにしてオーズとブライの邪魔をする。
当然のように攻撃目標はそちらへと移り、激しい攻撃を執拗なまでに続けていく。

『ここまでか。行くよ』
『・・・・・・・・・』

カザリとロストはそうして退散していく。

ブライとオーズは武器にセルメダルを投入し、最後の仕上げを行わんとする。

≪≪ＧＯＫＫＵＮ≫≫

武器を構えたとき、二体のヤミーの運命は決まった。

≪ＲＹＵ・ＷＡ・ＤＲＡＧＯＮ　ＨＩＳＳＡＴＳＵ！≫
≪ＰＵ・ＴＯ・ＴＹＲＡＮＮＯ　ＨＩＳＳＡＴＳＵ！≫

無論、ヤミー達も空中や地中に逃れようとするが、全て無駄だ。

――バギュウウウゥゥゥゥン！！！――

ストレインドゥームとギガキリングスレイヤーの一撃により、フクロウヤミーもラフレシアヤミーも、大量のセルメダルとなって爆散した。

「「うぅぅぅぅ・・・・・・・！！」」

獲物が消え失せた今、二人の狂戦士の闘争本能を大いに満足させてくれる相手。
それはいま、互いの直ぐ傍に居るではないか。

それを見たアンクと七実。

「刃介さん！こっちへ！」
「映司！こっちだ！」

七実とアンクは互いに逆方向へと走り、オーズとブライを引き離す。
勿論これは一人で凶暴化したライダーを相手にするという危険極まりないものだ。

まずはアンクとオーズから見てみよう。

「フアア！！フン！！」
「くぅ・・・・・・！」

メダガブリューを乱暴に、乱雑に振り回すオーズの凶刃を必死になって避けるアンク。
だがそれを何時までも繰り返していたら何れコッチが捕まる。

「ヴオォ！！」

アンクは刃をかわす為、後ろの岩へと飛び移る。

「・・・・・・映司！！」

アンクは呼びなれた名前を大声で叫んだ。

「俺はお前がどうなろうと構わない。だがな！俺は必ず完全に復活を遂げる！そのために、お前の力が必要だ！！だから、だから手伝え！！」

己の意志をぶつけにぶつけたアンクは、そのまま岩を蹴り、

「うおおおおおおおおお！！！！」

オーズに向って跳んだ！

「あ、こっちです！」
「火野！」
「アンコ！」

そして、伊達と後藤と金女、北村が眼にしたのは・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・ッッ！！」
「ううううう・・・・・・・！！」

『右腕』の掌がメダガブリューの刃に食い込みながらも、必死にオーズを止めるアンク。
一種の膠着状態に等しいこの時間を突き破る為、アンクをさらに叫んだ。

「うおおおおおおおおお！！！！」

――ドン！カシャ！――

「うおぁ・・・！？」

アンクが一気にオーズの懐に入り、オーズのバックルの傾きを直し、強制的に変身を解かせた。
オーズから火野映司に戻り、倒れるその身体を受け止める。
バックルに収まっていた三枚のコアが体内に戻ると、映司は眼を開ける。

「ッッ――お、お前なら、絶対、止められると思ってた・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・」

映司のかすれた声に、アンクはあえて無言で居る。
映司も答えには期待していなかったのか、そのまま眠りについてしまった。
そこには、人間と怪物を越えた見ざる鎖が存在し、二人をしっかりと繋ぎとめている。

「・・・・・・映司・・・・・・」

北村もそんな映司とアンクの奇妙な信頼関係を感じ取り、身を引いたことを表すように、其の場から立ち去った。

今度は七実とブライのそれを見てみよう。

「刃介さん・・・・・・」
「ア、あ・・・ぁ・・・・・・」

一言で言うと、七実はブライに抱きついていた、グリード化することもなく生身の状態で。
そんな七実に手を上げられず、ブライは途切れた声を出すばかり。

「刃介さん、私には何の願いもありませんし、貴方が望むことを私も望みます。だからこそ、貴方という所有者が必要なんです。貴方の傍いれて、貴方に愛して貰えるなら、私の全てを差し上げます！どんな血の道だって共に歩みます！」

七実は徐々に涙混じりの声を大きくしていき、本音を所有者の鼓膜に叩き付ける。

「こんな生き損ないを、真(まこと)に愛して頂けるなら、私は・・・！だから、だから絶対！！」

父からも母からも、生まれてくるべきではないと蔑まれ続けた才能。
生き損ないと憐れみを受け続けた虚しくも哀しい身体。
そんな七実だからこそ、才能も運命も関係なく、自分を認めて愛してくれる存在が欲しかった。

唯一、自分を家族として認めてくれた鑢七花はこの世界には居ない。
故に、己を認めてくれる鋼刃介に愛して欲しくして仕方がない。

「な・・・・・・ナナミ」

ブライは、メダグラムを落とし、七実の身体を精一杯抱きしめようと腕を動かす。
今の自分が本気を出せば一発で折れるやもしれない、細い身体を、そっと抱き締める。

「七実」
「刃介さん」

気付いた時には、ブライとしての変身は解けていた。
そこには此の世でも得意な関係を気付き上げた男女が、互いを繋ぐ鎖を頑丈に強化するように、力一杯抱き締め合っていた。
その行為と光景は、此の世でも特に異様であり、そして美しかった。

「兄さん、義姉さん・・・・・・」

その光景を陰ながら見ていた金女。
だがそこへ、

「ふむふむ。中々いい雰囲気じゃねぇか」
「ッ！誰ですか貴方は？」

そこに突然現れたのは、編み笠を被った和装の男だった。

「安心しろ。今日は様子見と、ご褒美をやりに来ただけだ」
「褒美？」
「ほれ、渡してやってくれ」

謎の男は懐から金色のメダルを投げ渡す。

「これって、コアメダル？・・・貴方は一体！？」

「四季崎記紀」

――ビューーーン！！――

「ッッ！？」

名乗った直後、四季崎は凄まじいエネルギーの嵐を起こし、何処かへと消え去ってしまった。

「・・・・・一体、何を企んで？」

金女は、渡された一枚のコアを見て呟いた。

これから起こりうる、大きな出来事を予感しながら。

＊＊＊＊＊

数時間後のクスクシエ

そこでは知世子が電話でなにやら話していた。

「今日はお休みを頂いてまして、すみません。また次の機会にお願いいたします」

どうやら予約願いのようだが、映司達が出払っているので、知世子はやんわり断っていた。

だがしかし、

「「「ただいまぁぁ！！」」」

「あ！たった今大丈夫になりました！――はい！お待ちしておりますぅ！」

グッドタイミングで映司たちが帰ってきたため、掌を返すように予約を承る。

「みんなー！丁度良いところに帰って来てくれたわ！実はこれから団体１００人さんのパーティーなのよ！」

「え、すぐにですか？」

「そうよ。みんな手伝って！！」

それを皮切りに、

「じゃあ早速！」

「俺も手伝います！」

「なら俺もやります」

「ありがとう後藤君、うれしいわ！」

「だったら俺も、和洋中なんでもいきますよー！ギャラは一流ですけど」

「バイト代は弾むわ！皆で頑張りましょう！」

やたらと盛り上がる一同。

「アンクもよろしく！！」

「・・・・・バカか？」

とアンクは右拳で左掌を殴るが、

「いって・・・・・・！！」

右手を怪我してることを忘れたままだったので、ストレス発散は逆効果になったのであった。

＊＊＊＊＊

鋼雑貨店の奥＝鋼家

そこでは、とてもお子様の教育上、見せられない光景が広がっていた。

ピチャピチャクチャクチャと、淫靡な水の音が聞こえる上、なにやら暑い吐息も耳に入ってくる。

「七実・・・・・・／／／／／／」

「刃介さん／／／／／／」

もうわかると思うが、二人の距離はこの本件で一気に縮みまくったというわけで・・・・・・。

「ああ、いい香りだ」

「ちょ／／／そんなところに舌を這わせないでください／／／」

「いいだろ？折角布団しいたんだからよ」

この際隠すのも面倒だから暴露すると、刃介と七実は敷かれた布団

の上で、深い接吻は勿論の事、互いに互いの身体をまさぐったり、舌で身体を舐めたりと、このうえなくアダルトなことをやっちゃっていたわけで・・・・・・。

まあ、二人は着崩していて上半身裸ではいるが、下半身には服を着ていて、最終的なことをしていないのがせめてもの救いかもしれないが、それは確実に時間の問題かもしれない。
だって・・・・・・・・・。

「ホントに柔らけぇ／／／」
「そ、そんなにお胸を・・・・・されたら／／／／／／」
「じゃあ次は舐めるか」

――ピチャピチャ――

「あぁぁ／／／ですから、お胸は／／／」
「お前、けっこう感じやすいよな♪」
「刃介さんでなければ、こうはなりませんよ／／／」
「そいつは光栄だな」

どんどんどんどん桃色が濃くなった糖分ギッシリ空間を展開すると、ノクターン的なことになりかねないので、この辺で割合するが。コレだけはいえる・・・・・・。

「七実、愛してるぜ」
「私も貴方を、愛しております」

最早この二人の愛は止めようが無い。
しかしながら、刃介と七実には一つの疑問点があった。

何故、四季崎は自分からコアを？――という疑問が。

＊＊＊＊＊

はてさて、ラブラブムード一杯の空間とは一旦おさらばして、今度は冷たく暗い場面へと移ろう。

「どうだった白兵？」

『一応、二枚盗ってきたでござる』

ゼントウは奪ったコアメダルを見せた。

『そっちの首尾は？』

「ああ、一応あいつの妹に渡しておいた」

四季崎はゼントウの腰に差されてい薄刀『針』を見ながら返答する。

「どうだった？久々の使い心地は？」

『問題ないでござる』

ゼントウは一定温度のような平坦な返事をした。

四季崎はゼントウが取ってきたコアを掌に乗せてこういった。

「――ヤツを復活させるには、最低でも後三枚は要る。次の機会にまた盗りにいくか」

謎に満ち満ちた欲望は、今尚夕闇の中で蠢いている。

その行く末はまだ、誰にもわからない。

繋がりとゼントウと生き損ないの本音（後書き）

次回、仮面ライダーブライ

夢の破壊者と泉信吾と伊達の異変

夢の破壊者と泉信吾と伊達の異変

とある朝早く、朝霧が薄らとかかっている時刻。
そんな静かで澄んだ時に、街中を歩く二つの人影があった。
片方は恰幅の良い男、片方は小柄な女というのが何処と無く解った。

「どうだ七実？朝早くのデートっていうのはよぉ」
「ええ、中々に粋で素敵でございます」

鋼刃介と鑢七実。
二人は前件から急速に仲が進み、こうして穏やかな時間からデートを楽しむほどになっていた。
勿論、こんな時間から開いている店などは少ないし、二人はそれを考えないほどバカではない。
おもにこうして街中をぶらついたり、何処かで休憩しながら語らったりと、平凡ながらも満ち足りていた。

二人は緑の多い公園の芝生に腰掛け、薄らと東の空の果てから昇ってくる朝日を眺めている。

「刃介さん、お茶です」
「あんがとよ」

七実は気を利かせて大きなバッグから魔法瓶を取り出し、氷でギンギンに冷えた麦茶を器に注いで刃介に手渡す。
刃介は気持ち良さそうにそれを一気飲みする。

「ふぅ・・・朝霧に囲まれながら、朝日を拝みつつ、良い女の酌・・・・これで酒がついてれば文句なしだな」

「そう仰ると思って、キンキンに冷えたお酒を持って参りました」
そこには一本のデカい酒瓶が！
「よーし！この霧が晴れるまで、飲み明かすとするか！」
「はい。精一杯お楽しみください♪」
そういって七実はまたお酌をした。
刃介が注がれた日本酒をガブガブと気持ちよく飲んでいった。
「どうです？」
「惚れた女に酌してもらった酒が、不味い訳ないだろう？」
「うふふ。そう言って貰えて光栄です」
七実も褒めて貰って気を良くしたのか、再びお酌をした。
刃介はそれを半分ほど飲んだ。
「刃介さん・・・？」
七実は可笑しいと思った。
刃介は容器（カミコップ）一杯に注がれた澄んだ酒を半分残している。
二度に分けて飲むのかと思ったとき、
「七実、口を開けろ」
「はい？」
「いいから早く」
刃介の言葉に疑問を覚えつつも、七実は小さく口を開けた。
すると刃介は残った酒を飲んで――――いない。
喉の動きからして、恐らくまだ口の中だろう。

刃介はその状態で無言のまま七実の顔に近づき、

――チュ・・・・・・・ッ――

「・・・・・・／／／／／／」

七実は赤面した。

刃介は七実の唇を奪った瞬間、口に含んでいた酒を七実の口腔内に流し込んだのだ。

突然のことに七実は対処できず、ほんの少しばかりの酒が口からこぼれ、何ともいえない色気を醸し出している。

もしかしたら、これは刃介なりのお酌の仕方（恋人専用）なのかもしれないと七実は思った。

「あ、あの、刃介さん・・・／／／」

「なんだ？」

どことなく男の本能に訴えかけてくるような赤面した表情で七実が言葉を紡ぐと、刃介は優しい笑顔で返す。

「もう一杯、お願いできませんか？」

「ああ、何杯でも飲ませてやる」

そうして二人は、何度も何度も、お酌してもらっては飲ませてもらい、お酌してもらっては飲ませてもらい・・・・・・これを酒瓶のソレが尽きるまで繰り返した。

しかし刃介と七実はこの時、予想さえしていなかっただろう。

何れ黄泉の国より復活せし、ライバル？の存在を・・・・・・！

＊＊＊＊＊

その頃、とある古びた武家屋敷の広い庭にポツンとある土蔵の中では。

「よーし、こんなもんか」

一人の刀鍛冶が額に汗して一本の刀を鍛えていた。

刀鍛冶の名は四季崎記紀。

元々は占術師の家系であり、先祖伝来の予知能力を最も色濃く受け継ぎ、その力で未来の技術を逆輸入することで千本の変体刀を作り上げた人物である。

さらには刀鍛冶だけでなく、鍔師・柄師・鞘師といった刀にまつわる全てを一人でやってのけた天才でもあるのだ。

「うんうん。我ながら良い出来栄えだな」

出来上がった刀を持って見つめる四季崎。

その刀の刃はまるで影のように漆黒で、全長は切っ先から柄の末端を含めると１５０ｃｍもある長刀だ。

しかし、刀身の黒とは対象的に鍔と柄は純白だ。おまけに梵字まで彫られている。
傍に置いてある黒鞘にも、３ｍか４ｍ近くのとんでもない長さをした経文までもが巻きつけられていた。

「呪刀（ジュトウ）『鎮（シズメ）』」
「それが新しい変体刀の名でござるか？」

一人呟く四季崎に、また一人語りかけてくるものが居た。
その手には、刀身が極薄であるが為にガラス細工と見間違うほど透明な刃をした刀を持っている。
刀の名前は薄刀『針』。此の世で最も薄く、脆く、弱く、軽く、美しい刀。

「よう白兵」
「おはよう。それができた以上、お主も出陣でござるか？」
「ああ。ヤミーではなく、この俺自身がな」

返事を返した四季崎の表情は実に、愉快で楽しそうなものだった。

＊＊＊＊＊

泉比奈が通う服飾の専門学校。
そこでは今日、比奈や生徒達にとって心を大きく揺さぶるイベントが起こっていた。

そして、学校内にある広い講堂。
そこはまるでファッションショーそのまんまのセッティングがされていた。

「エントリーナンバー02、藤田美香さんの作品」

司会が声を出し、モデルの女性は赤と黒の服を纏い、セッティングされた舞台の上を華麗に歩いていく。

「腰から下は大胆なシルエットであるにも関わらず、フォーマルにもエレガントにも着こなせる、勝負服としての一着です」

そして、このデザインコンクールを見守る者が四人居た。
その内の二人は言うまでも無いだろうが・・・・・。

「ドキドキするわね」
「はい」

パイプ椅子に座って他者の作品を見据える知世子と比奈。
勿論の事、この服飾学校に生徒である比奈もこのコンクールに参加しており、彼女が今手にしているスケッチには、比奈地震が手がけた服の絵が描かれている。

「お店終わったあとも、寝ないで作ってたのよねぇ」
「ちょっと、難しいと思いますけど・・・・・ほら、見てください。審査員長の席の人」

比奈が指差した先には、ビシっとスーツを着こなした男が座っていて、実に厳しい目付きで作品をチェックしている。

「沢口先生――フランスで活躍するプロのデザイナーで、私の憧れの人なんです」
「きっと気に入ってくれるわよ。ねぇアンクちゃん、金女ちゃん」
二人の丁度真横にある二つの席には、
「不解（わからず）――私には判別がつきません」
「フン、下らない。なんで俺までこんなところに？」
行儀良く座っている金女（薄緑で無地の浴衣姿）と、脚を組んで行儀悪く座っているアンク。
因みに金女は刃介と七実の代理役である。
え、どうしてかって？
理由は単純――酒臭いから。
「ダメ！」
知世子はアンクの態度に腹を立てたらしい。
「お洋服つくるのは、比奈ちゃんの夢なのよ！人の夢を下らないとかいっちゃダメ！」
などといってる間に、三番目が終わったようで、
「あ、次私の番です！」
比奈本人も若干テンションをあげている。
「ナンバー０４、泉比奈さんの作品」

舞台の上に立ち、ライトを浴びているのは、比奈がデザインした服を着た映司。
他のモデル同様に、舞台の上を歩いていく。

「和服を大胆にアレンジ！まさに現代という合戦場で戦う為の戦闘服です！」

どこぞの殿様が着てそうな豪奢な和服に西洋的雰囲気を付加した服装で、映司は颯爽と歩き、独特のポーズをとった。

（けっこうセンスあるんですね、比奈さん）

と、純和風人間・鋼金女は内心、比奈のセンスに良き評価をくだしていた。
そして、全ての作品の発表が終わり、舞台上には発表者は勿論の事、モデルたちに立ち並んだ。

「それでは、審査結果を発表いたします」

沢口がそう告げて、若干の間を置き、

「優勝は・・・・・・」

焦らす様に、更に間が置かれる。

「泉比奈さん！」

その瞬間、比奈にスポットライトが当たり、あたりは歓声に包まれる。

因みに知世子の喜びぶりはハンパではなかった。

「泉さん、優勝おめでとう！」
「はい！ありがとうございます！」

沢口からトリフィーを受け取り、比奈は満面の笑みだ。

「やったね比奈ちゃん！おめでとう！」

映司も拍手して喜んでくれた。

「準優勝は、杉浦祥子さん」

続いて準優勝者が発表され、その人は一礼し、拍手がもう一度起こった。

そして、コンクールが全て滞りなく終了する。

「比奈ちゃんおめでとう！」
「ほんっとにおめでとう！」
「めでたいですね」

三人は比奈の優勝を喜んでくれた、が、アンクは未だに明後日の方を向いている――

――かと思いきや。

「おめでとう」

その一言だけが、アンクの口から出てきたのだ。

「え？」
「アンク？」
「――――なんだ？俺なんか言ったか？」
不思議なことに、アンク自身もどんな言葉を吐いたかわかってないらしい。
（まさか、依代の意識が・・・？）
＊＊＊＊＊
しかし、優勝を逃したがゆえ、苦い思いをするものもいた。
「残念だったな、祥子」
「父さん私「学校を辞める約束、忘れてないな？」
準優勝者の杉浦祥子はどうやら、このコンクールに全てを賭けていたらしい。
「でも準優勝！」
「約束は約束だ。わかってくれるな？」
それだけいうと、父親は歩み去って行き、
「――――――ッ」

祥子自身は、準優勝のカップを、ゴミ箱へと投げ捨てた。

＊＊＊＊＊

その頃、遊園地の劇で使ってそうなステージの近くをぶらつく男が居た。
右手にはセルメダルがあり、緑色のジャケットをハードに着こなし、髪をオールバックにしている男。

しかしその時、

――ビューーーン！！――

「うわッ！？」

突然の疾風に襲われ、男は吹っ飛ばされてしまい、辺りにジャラジャラとセルメダルを落としてしまう。
そして、それをやったのは、

「カザリ・・・！」

椅子に悠々と座っているカザリ。
男は激昂したように姿を変えた。

クワガタムシの顎らしき角、蟷螂のような複眼と右腕の鎌、緑と黒の体色をしているが、下半身は焦茶色の素体が剥き出しな不完全状態の昆虫王ウヴァへと。

『君に紹介したいヤツがいるんだ』

『なに？』

すると、劇の上から足音が聞こえてくる。

見上げてみると、そこには赤い異形がいた。

顔の右半分が欠けて紫の素体がむき出しになっている鷹のような頭と緑色の目。

孔雀のような極彩色の体色に、コンドルのような鋭い脚。

そしてなにより、アンクと同じ左腕をしていながら、右前腕部が不完全なグリード。

『アンク！？』

『そう、アンクだけど、まだ完全じゃない』

予想さえしなかった存在の登場にウヴァは驚きを隠せない。

『でも、君が持っているそのコアメダルがあれば・・・・・・』

カザリが説明してる間に、ロストは左肩から赤い翼を出し、緩やかの下降してこういった。

『僕のコアメダル、返して！』

ウヴァがオーズから盗ったコンドルを、取り返すためにやってきたのだ。

『最近、ブライ達が首突っ込んできて、僕等も力をつけなきゃならないんだよね』
『なに！？ブライだと！？』

ウヴァは本気で驚いた。
何しろ８００年前、自分たち五大グリードと同等の能力を備えたリュウギョクと対等に渡り合い、グリードである自分たちにさえ畏怖の念を抱かせた戦闘狂の存在を、彼等は忘れ去る事ができなかった。
だがしかし、今は思い出を掘り返している場合ではない。

『くッ！』

ウヴァは一気に最悪の状況に陥ってしまった。
ただでさえ、水棲系と重量系のコアを得て進化したカザリ一人相手でも相当苦戦したというのに、そこへ自分が苦手とする火炎属性を備えたアンク（ロスト）まで加わった日にはとてもじゃないが勝機など見出せない。

――ジャリン！ジャリン！――

カザリの爪によって攻撃されると同時に何枚かのセルメダルを削ぎ取られるウヴァ。
さらにそこへ追い込まれていき、カザリは鉄の手摺のある場所にまでウヴァを追い込み、上段へと昇って手摺と爪を利用してウヴァの角を挟んで捕えた。

ロストはそのタイミングで左腕に炎を灯し、ウヴァの胸に押し当てた。

セルメダルが何枚か飛び散り、遂には体内に隠し持っていたコンドルのコアメダルが露出する。

『ぁぁぁ・・・・・・』

自分のコアを取り返し、満足そうなロスト。

だがそこで、

『フンッ！』

――ビリビリ！バチバチ！――

ウヴァは角から雷撃を放電し、そのままバッタの如き跳躍で逃げ去った。

『逃げられたか・・・・・・まぁいいや』

カザリは若干残念そうにしながらも、ロストに近寄る。

『気分はどう？』

コンドルをとりこんだロストに聞いたが、

『僕は・・・・・・何処？』

やはり彼の頭には、右腕のことで一杯らしい。

＊＊＊＊＊

そして、逃げ延びたウヴァはというと。

『このままじゃ、分が悪すぎる』

カザリとロスト、オーズとブライ。そしてまだ見ぬ四季崎と白兵。
様々な敵要素が手を組んでいるなかで、ウヴァだけは未だに孤立している。

『メズール、ガメル・・・・・・』

彼はそんな状況を打破すべく、一つの起死回生の奇策を打つことを決意する。
己が手にあるサイとシャチのコアメダルを見つめながら。

＊＊＊＊＊

クスクシエでは、比奈の優勝にちなんで、

”泉比奈ｃｈａｎおめでとう！優勝記念フェスティバル”

などと、デカい垂れ幕まで降ろした上に、比奈がデザインした服の

スケッチなどが飾られていた。

「ホントにこれで営業するんですか？」
「勿論よ。これ、良いデザインよね！」
「ちょっと、恥ずかしいです・・・・・・」
「何言ってるの？未来のパリコレデザイナーなんだから、胸を張らなきゃ」

知世子と比奈が話していると、

「パリコレって？」

映司が話に入ってきた。
しかもコンクールの服装のまんまで。

「海外で活躍するのが夢なんですって」
「へー、すっごい夢だな」
「まだ先の話ですよ」
「比奈ちゃんなら絶対できるって！」

北村の時には根拠は無かったが、今回はきちんと実績があるので根拠はある。
そんな盛り上がる三人とは対照的に、なにやら考え込む男が一人。

（何かが可笑しい）

右腕のアンク。

（”あの時”からか・・・？それともこの身体が・・・？）

あの時、とは、ロストがアンクを吸収しようとしたときのことである。

だがそこへ、

「ねえ。お兄ちゃんの記憶わかるんだよね？」
「なんだ急に？」

妙なタイミングで比奈が話しかけてきた。

「なら知ってるの？私がどうして洋服つくりたいのか」
「そんなこと聞いてどうする？」
「私、お兄ちゃんに喜んでもらいたい」
「下らない」

愛も変わらず冷たいリアクション。

「そんな言い方ないだろ。お前も一回着てみたら？」
「・・・・・・・・・」

しかしアンクは無言で棒アイスを舐める。
そんな時、一人の来客が、訪れた。

「あのぉ、この店で泉比奈さんが働いてると聞いたのですが・・・・・」
「沢口さん！？」

来訪客は沢口審査員長だったのだ。

「ああ、泉さん。改めて優勝おめでとう」

「ありがとうございます。今日はどのような用件で？」

わざわざ来たのだから重要な用件であることは予想がつく。

「フランスで、勉強するきはないか？」

「え？」

「君には才能がある。もし、君さえ良かったら、フランスの私のアトリエで、勉強しながら仕事しないか？」

夢にまでみた大チャンス到来！

「すごい！すごいよ！」

「やったわね比奈ちゃん！」

根拠が完全なものとなり、映司も知世子に喜ぶ。

勿論比奈自身に嬉しいのだが、不安の種がたった一粒だけある。

彼女の視線の先には、無愛想にアイスを舐めるアンク。

「すいません・・・・・・少し考えさせてもらっていいですか？」

「「「え・・・？」」」

＊＊＊＊＊

とあるゴミ置き場。

そこには文字通り、不要となったものが汚らわしい存在となって捨

てられている。

「欲望の成れの果てですか」

そんな場所に自ら足を運ぶ、人形を腕に乗せた黒服の男が一人。

「やはり、欲望の行き着く先は終末ですね」

真木清人は、ふとあるものに目を付けた。

「このトロフィーには一体どんな欲望が？」

そこには、杉浦祥子が捨て去って準優勝のトリフィーが捨て置かれている。

真木はセルメダルを一枚持ち、それを落として転がすようにして投げた。

トロフィーには投入口が現れ、自然とセルメダルはチャリンという音を立てて入った。

すると、エネルギーが放出されると同時に一体の異形が生成された。

『・・・・・・・・・！』

幻想の中における一角獣こと、ユニコーンヤミー。

＊＊＊＊＊

同時刻、四季崎は欲望の種を探していた。
そして何より、四季崎は比奈の通っている服飾学校にいた。

「はてさて、俺の眼鏡にかなう欲望はっと・・・・・・」

極力目立たないよう気配を消しながら行動していたが、そんなことの意味があったのかと思うほどに、あっさりと見つかってしまった。

「ほほう。こいつはいい欲望だ」

四季崎は遠目からその獲物を見つけて薄らと笑った。
たた一人で椅子に座り、打ちひしがれている長い黒髪の女子大生の姿を。

「その欲望、貰い受けるぞ」

誰にも聞こえることの無い言葉と共に、四季崎はセルメダルを軽やかな手付きで投げた。
セルメダルは一直線に飛んでいき、女子大生の後頭部に出現した投入口にチャリンといった。

すると、

『――――――――』

一体の異形が、女子大生に気付かれることも無く誕生した。
一つの身体に対し、二つの頭を持ち、身体中が重量感溢れる鈍器で構築された黒金の怪物――その名はカナヅチヤミー。

『・・・・・・フッ』

カナヅチヤミーは一息はくと、そのままどこかへと去ってしまった。

「ん、あれ?今なんか・・・?」

女子大生は何か違和感を感じて周囲を見渡せど、既にヤミーは去ってしまっている。

「まぁいいか。・・・・・・はあ、本当に辞めなきゃいけないんだよね・・・・・・」

女子大生はあるものを手にしながらこの上なく絶望的な溜息をついていた。
そして、その手には、退学届が握られていた。

＊＊＊＊＊

その頃、刃介と七実はというと。

「七実ぃ。酒の臭い、好い加減とれたか?」
「ええ、お陰様で。刃介さんのほうも良いみたいですね」

どうやら完全にアルコールが抜け切ったようで、我が家の居間にしかれた畳で座る二人。

「しっかし、四季崎の野郎はどういう気なのやら？」
「自分からコアを渡してきたわけですしね」
右腕をグリード化させ、掌から一枚のコアメダルを出した。
先日四季崎が渡してきた金色のコアメダル。
裏面にはセル同様のバツ印が刻まれ、表面には一つの文字が書かれている。
そこには『叡』の文字が刻み込まれていた。
「もしかしたら、此間のツルギヤミーの件とあわせて考えると、四季崎が生み出すヤミーと、宿すコアの種類は完成形変体刀に順ずる――つまりは十二」
「そして、彼のコアを取り込むことで初めて、刃介さんは完全変化を果たす、というわけですか」
「俺とあいつは、対を成す存在なんだろう。――俺が身体で、奴が能力ってか」
刃介は神妙な面持ちでカンザシコアを見つめ、右手の指で掴む。
「まあ良い。今度出くわしたら、一枚か二枚は絶対に抉り出してやる」
＊＊＊＊＊

真木がユニコーンヤミーを生み出して少しした頃、とあるランナーが大会目指して走っていた。

「良いペースだ！世界大会、世界大会！」

車に乗り込んだコーチだメガホン越しに声をかけながら、時折指示も飛ばす。
そんな時、

――ド・・・ッ！――

ユニコーンヤミーがコーチの乗った車を正面から強引に、血から技で止めた。

「か、監督！大丈夫ですか！？」

ランナーはコーチをことを案じて駆け寄ろうとするが、

『お前の夢はなんだ？』
「う、うあっ！？」

ユニコーンヤミーはランナーの頭に触れた。
すると、ランナーからは『夢の具体例』ともいえる金メダルが具現化された。

『夢は夜に見ろ』

――パキッ――

ユニコーンヤミーはそういって金メダルを真っ二つに割った。

そして去っていったが、肝心のランナーは、

「・・・・・・・・・・・・」

まるで抜け殻のようになっていた。
だがそこへ更にヤミーがやってきた。

『儚く散った夢は蜜の味』

なんだか陰湿な台詞を吐きながら登場し、割られた金メダルを双頭で飲み込んでしまった。
もうおわかりだろうが、カナヅチヤミーだ。

＊＊＊＊＊

それから更に少ししして、
とある広場で二人組のアマチュアシンガーたちがギターを抱えて路上ライブをやっていた。
しかし、そこへ思わぬ乱入者が・・・！

「・・・・・・ひっ」

ライブを見ていた観客の一人が薄らと悲鳴をあげた。
歌い手達もなんだと思ったときには、

『お前たちの夢はなんだ？』

ユニコーンヤミーがいた。

「「「きゃあああああ！！」」」

当然、観客は蜘蛛の子を散らすように逃げていく。

ユニコーンヤミーはそんなのお構いなしにシンガーたちに頭にふれ、夢を具象化させていく。

片方からは店で売られていそうな豪華なジャケットに封入されたＣＤ。

もう片方からは全国ツアーライブと大きく書かれたポスター。

『夢は夜に見ろ』

パン、という音を立てながらユニコーンヤミーが手を叩くと、ＣＤもポスターも真っ二つに裂けてしまい、

『儚く散った夢は蜜の味』

そして、カナヅチヤミーにパクンと飲み込まれてしまった。

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

二人のシンガーは凍りついた無表情となって座り込んでしまう。

そしてそこへ登場してきたのが。

「馬のヤミー？それから・・・？」

「不当（あたらず）――あれは馬じゃありません」
「角があるからユニコーン。多分、恐竜のヤミーと同じ属性だと思います」
「ついでにもう一体のは、最近になって現れだしたタイプです。特徴から考えて、カナヅチヤミーとでも申しましょうか？」
伊達と後藤と、忍装束姿の金女。
「ユニコーンちゃんか」
「ではいきましょう」
伊達と金女はベルトを装着し、後藤はバースバスターをスタンバイ。
「「変身」」
二人はセルをバックルにいれ、一気に変身の手順を踏んだ。
――キリッキリッ――
『フっ！』
途中でユニコーンヤミーが攻撃してきたが、その攻撃は後藤がバースバスターで撃ち落す。
そうしてる間に、二人の変身が完了する。
「さぁてお仕事だ！」
「不忍（しのばず）」
早速二人のライダーはヤミーに向って突っ込んでいく。
だがそこへ、タイミングを計ったようにアンクと映司が現れる。そ

して刃介と七実もだ。

「映司」

「ああ」

アンクは映司にコアを渡す。

「「変身！」」

≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＥＮＢＡ≫

≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！ＲＩＯＴＥ！ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！≫

≪ＴＡＫＡ・ＴＯＲＡ・ＢＡＴＴＡ≫

≪ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！ＴＡＴＯＢＡ！ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！≫

二人はオーズとブライに変身。

メダマガンとメダジャリバーを手にしてヤミーに突っ込んでいく。

≪ＤＯＵＢＬＥ・ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

「初撃は大切だよな？」

といって、ブライはメダマガンに二枚のセルを入れてスキャニングし、

――バンッ！――

『んがあああああ！！』

カナヅチヤミーに強力な炸裂弾をぶちかました。

「映司。今の内にメダル換えろ」

アンクはタコのメダルを投げ渡そうとしたが、その瞬間。

――バッ！――

「ウヴァ・・・！」

突如ウヴァが現れ、タコを掠め取ったのだ。

おまけにアンクの周りには数体の屑ヤミー共の前に自ら身を曝した。

「鬱陶しい雑草ですね」

七実は心から面倒そうに屑ヤミー共の前に自ら身を曝した。

『虚刀流』

しかもキョトウの姿となって。

『雛罌粟から沈丁花まで、打撃技混成接続』

――シュシュシュシュシュシュシュシュシュシュ！！――

十秒にも満たない短時間。

その間に彼女は、２７２回もの打撃技をかましていたのだ。

結果として、屑ヤミーたちはクソの役にも立つことなく全滅。

『な、何！？なんなんだ、あの女は！？』

ウヴァは七実の存在など知る由もなく、ただ困惑する。

それを逃すアンクではなく――――

「映司！取り返せ！」

一枚のコアを投げ渡す。

オーズはスムーズにメダルを受け取り、ベルトに入れてスキャンした。

≪ＴＡＫＡ・ＧＯＲＩＬＬＡ・ＢＡＴＴＡ≫

腕を灰色で屈強なゴリラバゴーンのついたゴリラアームに換装し、亜種形態・タカゴリタとなる。

「なら俺もだ」

ブライはオーズのメダルチェンジを見て、自分もそれを行おうとする。

≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＡＣＨＩＵＯ≫

脚部分を水色のタチウオレッグに換えた、亜種形態リュウオニタとなった。

『（クソ・・・ッ、こんな筈じゃ・・・！）』

ウヴァは完全に計算違いな今の状況に後悔した。

まず一つ目は、自分の見知らぬグリードがライダーたちに味方していること。

もう一つは、向こうの戦力が自分が思っていた以上に、数も質も上だということ。

「余所見してんじゃねぇ！」

――ザシュ！――

『ウゥ！』

ブライの蹴りによって味合わされる斬撃は思いのほか効くようで、ウヴァのセルを少しばかり削った。

一方でバースとチェリオも。

≪ＥＮＴＯＵ・ＪＵＵ≫

「熱いのは好きですか？私は嫌いですけど」

などといいながら炎刀『銃』の引き金を引いて後方支援をしつつ、バースを援護する。

「うりゃ！たあ！」

バースも武器を持たない肉弾戦を仕掛け、時にはキックやパンチを、時には関節技なども使った。

しかし、その時だった。

伊達の異変が起こったのは。

「――うッ！・・・く、うぅぅ・・・！あぁぁ・・・・・・」

突如、敵を目前にしたバースが、頭を抱えたまま苦しみだしたのだ。

「伊達さん？」

――パンパンパンパンパンパンパン！！――

チェリオはバースの異変に気付きつつも、炎刀の発砲をやめる気配はない。

だが少しでも気をそちらにとられたのは拙かったかもしれない。

『隙あり！』

カナヅチヤミーはチェリオの隙をついて、地面を思いっきり踏んで音を立てた。

ズシンズシンという音まで聞こえるような地団駄。

それによって起こったこととは、

「ん？・・・って、ちょっと！」

チェリオは驚いた。

何しろ自分が今立っている地面が、パックリと地割れを起こし、自分がまるでそこを跨いでいるかのようになっているのだから。

「成る程。見かけ通りの重量を武器に戦うとは、不軽（かろんじす）に戦うべき相手のようですね」

といいながらチェリオは闘気を新たにしながら武器を構える。

しかし、カナヅチヤミーだけでなく、ユニコーンヤミーまでもを同時に相手にするというのは思いのほかキツい戦いになる。

『こんな事も出来るぞ！』

と大声を上げたカナヅチヤミーは、自分の身体の正中に自らの貫手を差し込んだのだ。
その状態で右と左、別方向に引っ張る手の力を入れると、

――バリッ！――

カナヅチヤミーは正中からバッサリと割れて、一つの身体に一つの頭がある、二体のカナヅチヤミーとして分離したのだ。

「分離能力まで・・・・・・」

流石にこれは予想できず、チェリオは仮面の下で冷や汗を流した。
三対一悪戦苦闘を想像したが、思いがけない事が起こった。

『『オーズ！ブライ！』』

言葉どおりカナヅチヤミーは、ウヴァと戦っているオーズとブライに向っていき、彼等の前に立ったのだ。

「邪魔する気かよ」

ブライが忌々しげに言った瞬間、

『ウオォォ！』

――ビリビリビリ！バチバチバチ！――

「「「ッ！」」」

ウヴァが雷撃を辺り一面に放ち、そのまま逃げ去ったのだ。
しかも、その雷撃には相当な力をこめていたのか、騒ぎに乗じてユニコーンヤミーとカナヅチヤミーまでもが逃亡する始末だ。

一同は変身を解除せざるをえず、ベルトを外した。

「伊達さん！」

その時、後藤が伊達に駆け寄った。
先ほどの異変はどう考えたって可笑しい。

「大丈夫。大丈夫だから」

しかし当の本人は直ぐに立ち直り、被害者の二人に駆け寄った。

「おい、大丈夫か？」

するとその二人は、

「「大丈夫です」」

と、かなり平坦で落ち着いた口調で返事すると、愛用のギターを回収することさえなく、そのまま帰っていく。

「おい！これ忘れモンだぞ！」

伊達が叫んだが、もはや興味の欠片も無いかのように、被害者二人組は本当に帰ってしまった。
そんな光景を遠目で見ていたものが一人いた。

「面白くなってきたね」

黄色い服装に帽子を被った銀髪の青年。

＊＊＊＊＊

真木の生家たる洋館。

今となってはグリードたちのアジトと化しているこの空間においては、混沌に満ちた空気で溢れている、としか言いようの無い雰囲気だ。

「おかえりなさい」

先ほどまで戦いを見に行っていたカザリに対し、真木は一言だけ出迎えの言葉を紡ぐ。

洋館の開けた場所は、基本的に真木とカザリとロストが洋館で一番顔をあわせる場所であり、その為か彼等のシンボルカラーと同じ色をした布が、敷かれていたり掛けられたりしている。

「如何でしたか？」

「あんたのヤミー面白いね。中々だよ」

カザリはそういったが、一つだけ気になる点がある。

「でもウヴァの奴・・・・・・」
「どうかしましたか？」
「なんで自分以外のコアメダルになんて興味を・・・？」

ロストがサッカーボールを壁に向けて投げ、反射したところをキャッチしてまた投げるといった一人遊びをしてる最中に、カザリは四枚のコアメダルを手に出し、推測を立てた。
自分と違ってコアによる進化を半ば否定しているウヴァがコアを集める理由。

「ひょっとしてウヴァの奴・・・・・・それなら乗ってやるか」

推測は確信へと変わり、カザリを眼に見える笑いを浮かべながら、階段に座った。

＊＊＊＊＊

一方、ウヴァは一時のアジトにしている廃墟に戻っていた。

「セルメダルは充分にある」

ウヴァは以前、屑ヤミーを用いて大量にストックを作っていたセルメダルの山を木箱に入れて保管していた。そして今回の鍵であるコアメダルを枚数を確認する。

「ガメルが三枚。――メズールが・・・四枚か」

二つの打楽器（ドラム）の上には、今まで持ち続けていただけのコアがある。

「まだ足りない。・・・カザリから奪うか？」

――バァァン！――

ウヴァは近くにあるシンバルを叩いた。

「いや、やはりオーズか？」

――バァァン！――

＊＊＊＊＊

杉浦祥子は、判子が押されて準備ＯＫな退学届を手にしていた。

「ねぇ祥子！」

「聞いた？」

「な、何？」

後ろから突然友人二人が声をかけてきたので、慌てて退学届の書類を隠す祥子。

「比奈がさ、沢口先生にスカウトされたんだって！」

「え？」

「フランスのアトリエで、一緒に働けるかもしれないんだって！」
「羨ましい～！」

友人二人がそう言ってる傍らで、

「そうね・・・・・・」

祥子はただ、何かが抜けたような声音をだしていた。

＊＊＊＊＊

鴻上ファウンデーションの会長室。

「・・・・・・・・」

なにかのレントゲン写真を見ている鴻上。
そこへ里中が伊達を連れてきて、急遽振り返る。

「よく来てくれた。――君は医者だったね。これを見てどう思う？」

そういってレントゲン写真を見せた。

「知り合いの青年なんだが・・・・・・非常に深刻だと思うのだが」

伊達はレントゲン写真を窓から入る光に当てた。

「非常に拙いですね」

頭部のレントゲンには、脳部分に妙な影がハッキリと映っていた。

「頭ん中に銃弾が残ったままだ。生きてるのが奇蹟といっていい」

「その患者の名は「伊達明！・・・俺ですね」

伊達自身、自分が命の危機にあることを認めた。

彼自身に覚えがあったし、レントゲンにも、ダテアキラ、と書かれている。

「これをどこで？」

「Ｄｒ．真木が残していった物の中に――」

里中はそういった。

「戦闘中に痛みに襲われたそうだね」

「・・・・・クビですか？」

伊達は自分の状態を考えれば、解雇されるのも充分ありえた。

「まさか！好きにしたまえ。私は君の欲望を気に入っているのだから」

鴻上はそういって、伊達の意思という欲望を尊重した。

＊＊＊＊＊

「・・・・・・・・・」

比奈はユニホームを着て野球をしている少年達が、元気に身体を動かしているさまが良く見える土手に腰を下ろしていた。
ただただボーっとしていると、誰かが打ったか投げたかしたボールが落ちてきた。

「すみませーん！」

少年の一人が手を振って大声をだしているのを見て聞くと。

「いくよ！」

比奈はボールを手に取り、軽く力を入れて投げた。
結果、

――ビュン！――

ボールは疾風を生む勢いで少年達を通り過ぎ、

――ギュルギュルギュルギュル！！――

フェンスに当たっても尚、火花が散るほどの勢いで回転している。

「ご、ごめん！」

呆然としている少年達に向って比奈は謝った。

「お前ホント人間か?凄空一族と張り合えるんじゃねぇのか?」

などという皮肉を言ってきたのは。

「鋼さん、七実さん・・・」

いつもの黒い着流しに黒いズボンといったいでたちの刃介と、死装束のような白い小袖をきた七実。

「ちょっとちょっと!鋼さん言い過ぎですって」

それを制するのは、

「映司くん・・・・・・」

「比奈ちゃん、ホントはフランスに行きたいんだよね?」

「――ムリ。お兄ちゃんのことを考えると」

ただでさえ今の泉信吾はアンクの移動手段兼人質という状況なのだ。

それをほっとく事など、比奈には出来ない。

「みんな、プロ野球選手目指してるのかな?」

比奈は野球をしている少年達の目標を想像する。

「あの、鋼さん」

「なんだ?」

「小さい頃に夢とかありましたか?」

本来の物語では映司に振られる話だが、比奈はここで刃介に聞いた。よりにもよって、過去に触れかねない質問を。

「親父とお袋が生きてたガキの頃は、我刀流の立派な次期当主になることを望んでいた」

「え、生きてたって？・・・まさか・・・」

「そう。殺されたよ・・・・・十五年前に、俺達を押入れに逃れさせて、強盗にな。この髪の毛もその時に色を失くしちまった」

「す、すみません！！私ったら、なんて無神経なことを！！」

「気にすんなよ。そのクソったれは俺が殺して仇はとったし、俺も金女もその過去を吹っ切ってる」

「「・・・・・・・・・・・・」」

あまりにヘビーな刃介の過去に、映司も比奈も黙ってしまう。

「泉さんは、服をつくるのが夢なのでしょう？」

場の空気を転換すべく、七実は話を比奈に振った。

「え、えぇ。・・・でも、諦めかけたこともあったんです」

＊＊＊＊＊

回想場面

「進学を諦めるって、どうして？」

数年前の朝。
トースト片手に信吾は驚く。

「だって・・・・・・」
「お金のことなら気にするな。俺がなんとかする」
「でも、今だってお兄ちゃんに迷惑かけっぱなしだし」
「あのな・・・・・・」

信吾は身を乗り出し、指を比奈の額にあてた。

「俺の夢が叶って、刑事になったとき、お前どう思った?」
「嬉しかった!」
「だったら、今度は比奈が俺を喜ばせろ。いいな?」

＊＊＊＊＊

それを聞いた刃介は、

「行けよ、フランス留学」
「え?」
「鋼さんの言うとおりだよ。刑事さんのことは、俺達が護る。だから・・・絶対に夢を諦めちゃダメだ」

幾つモノ欲望や夢を、世界の旅でみてきた映司は、そう論ずる。

「少なくともオメェの夢は俺がかつて抱いたものより現実的だ」
「私も昔は、ささやかな夢さえみる必要がなかった。だから、持てた夢は簡単に手放すべきではありません」

そして、刃介と七実。
夢を失った者。夢見る資格の無い者。
二人の言葉を耳にした比奈・・・・・・しかし、

「やっぱり行けない・・・・・・」

塞ぎ込んでしまった。

「だったら私に代わって」

そこへ唐突に声を投げかけてきたのは、

「祥子？」
「私に代わって。私も夢なの！」

祥子は本音を吐き出していく。

「私も、洋服つくるのが夢なの！ねえ、お願い！」
「っ、退け！」

刃介は前振りなく祥子を突き飛ばし、

「花鳥風月！」
「錦上添花」

七実と共に奥義を繰り出す。

そして二人の貫手と手刀を喰らったのは、

『『んー！！うぅぅ・・・・・・』』

ユニコーンヤミーとカナヅチヤミー。

（妙な気配したと思ったら、片方はこの女が親かよ）

（恐らく、夢を求める欲望）

『お前の夢はなんだ？』

『儚く散った夢は蜜の味』

お決まりの台詞を口にして、二体のヤミーが手を伸ばす。

「夢の破壊者に、夢の捕食者ってところでしょうか？」

「んなコトはどうだっていい。さっさとセルに両替する」

刃介はブライドライバーを装着し、メダルを取り出し装填する。

「変身！」

≪ＨＡＹＡＢＵＳＡ・ＭＡＭＭＯＴＨ・ＩＮＡＧＯ≫

ブライの亜種形態（ハヤマンナ）に変身し、構えを取る。

「七実」

「解ってます」

七実はブライと肩を並べ、カナヅチヤミーとユニコーンヤミーと相対する。

厳密に言うと、ブライがカナヅチヤミーと、七実はユニコーンヤミーと対峙している。

（ここは一発、牽制するか）

ブライはローグスキャナーを手に取る。

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

解放されたエネルギーは増幅され、ラインドライブを通じて三つの部位に伝達される。

「トォ！」

イナゴレッグでの跳躍。

ハヤブサアイは敵の急所を捉え、

「喰らえっ！」

重刀『鉞』の一撃が降り注ぐ。

『んをっ・・・！』

カナヅチヤミーはそれを両腕で必死に受け止め、まるで鍔迫り合いのような状態になる。

「アンクはまだか？」

映司はベルトだけしか装着できておらず、メダルを管理しているアンクの存在を渇望する。

そこへ、

――ブゥゥウウゥゥン！――

ライドベンダーに乗ったアンクがタイミングよく現れた。

「映司！」

ヘルメットを取ったアンクは、『右腕』で掴んでいる三枚のコアを投げ渡す。

映司はキャッチし、変身プロセスをとった。

「変身！」

≪ＳＡＩ・ＫＵＪＡＫＵ・ＺＯＵ≫

亜種形態の一つ、サジャゾ。

「祥子！」

比奈は戦いの激化を予見し、祥子をつれて避難する。

そして、オーズとユニコーンヤミーはというと、

――ドンっ！――

お互いの頭に生えた一本角をぶつけていた。

すると今度はオーズの左腕に装着されたタジャスピナーが輝きだし、

「ハッ！ハッ！ダァ！」

赤いエネルギーを纏った打撃を、全体重を乗せながら繰り出す。
このまあ攻勢にもっていけるかと思ったとき、

――ガシッ！――

『相手はこっちだ』

ウヴァがオーズの背後に現れた。

――ザシュザシュ！――

自慢の鎌で攻撃するウヴァ。

「ウヴァ・・・・・・」

そんなウヴァを忌々しげにみるアンク。
しかし、これでユニコーンヤミーの相手は空席になるかもと思ったタイミングで、

「ユニコーンちゃんの相手は任せろ！」

伊達がメダルタンクを背負いながら駆けつけてきた。

「変身」

――チャリン――
――キリッキリッ――

バースへと変身した伊達は、勢い良くユニコーンヤミーに突撃して

いく。
これで数の上では均等になった。
しかし、忘れていられないのがまだいる。

「変身」

そう。仮面ライダーチェリオ。

「おやおや、もう始まっていましたか」

チェリオは忍刀『鎖』を両手に握る。
しかし、相手をしてくれる空きのある者はいないため、適当なところへ加勢しに行こうとした瞬間、

『拙者に、ときめいてもらうでござる』

妙な台詞が風に乗って聞こえてきた。

「錆白兵、ですか。今はゼントウでしたっけ」

そこには三種族を複合したような姿をした錆色のグリードがいた。
仮にも日本最強や剣聖とまで呼ばれた堕剣士と渡り合えるかどうかの自信、正直言って金女にはない。
故に、

「義姉さん！」
『わかってますよ』

キョトウがチェリオのすぐ横に、瞬間移動したかのように加勢しに

出てくる。

『虚刀「鑢」――相手にとって不足なし』

一方でオーズとウヴァは、

「くッ、強くなってる・・・！」

防戦一方となってしまっているオーズ。
それを見たアンクは、

「映司、コンボだ！」

と叫んでゴリラ・コアを投げた。
オーズは素早くウヴァから離れてメダルをキャッチすると、早速メダルを換装し、スキャナーを滑らせる。

『させるか！』

ウヴァはコンボチェンジを阻止しようとするが、もう遅い。

≪ＳＡＩ・ＧＯＲＩＬＬＡ・ＺＯＵ≫
≪ＳＡＧＯＨＺＯ・・・・・ＳＡＧＯＨＺＯ！≫

サゴーゾコンボへのチェンジは急ピッチで行われ、ウヴァはオーズの拳を喰らって吹っ飛ばされた。

『いけっ！』

しかしウヴァはセルメダルの欠片をなげ、八体の屑ヤミーをオーズ

の周囲に配した。

「・・・・・・・・・」

静かに己の置かれた状況を見据えるオーズ。

その時、

――ドクン・・・！――

何かの力が、自分の中で鳴動したのを直に感じ取った。

「ひょっとして・・・・・・」

複眼を一瞬、紫色に変化させたオーズは、地面に向けて拳を沈めた。

すると大きな亀裂が走り、腕を戻すと、そこにはあるものが握られている。

「でてきた！」

それはメダガブリュー・アックスモード！

オーズは早速オーメダルネストに入っているセルを四枚、メダガブリューに入れ、飲み込ませた。

≪ＧＯＫＫＵＮ！≫

≪ＳＡＧＯＨＺＯ！≫

♪～～♪～～

サゴーゾコンボの変身メロディが流れると、オーズは一気にその刃を振るった。

「セイヤァァ！！」

たった一振りによって発生した”グランド・オブ・レイジ”で、八体の屑ヤミーは本当の消し屑となり消えた。

無論、その様子は戦闘中であろうとブライも見ていた。

「おおっ、だったら俺もだ！」

といってメダルを三枚とも取り替える。

≪ＺＥＵＧＬＯＤＯＮ・ＭＥＧＡＬＯＤＯＮ・ＴＡＣＨＩＵＯ≫

≪ＺＥ・ＺＥ・ＺＥＭＥＴＡ！ＺＥ・ＺＥ・ＺＥＭＥＴＡ！≫

ゼメタコンボへと姿を変える。

「んでもって！」

そして、拳を思い切り空に向って飛ばすと、バリンという音を立てて空間が割れて一本の大剣が現れる。

「お、マジで出てきた」

メダグラムを手に取ったブライは、早速セルメダルを三枚入れてみた。

ちなみにクメタコンボにちなんで、ゼウグロドンとメガロドンとタチウオのセルメダルである。

≪ＧＯＫＫＵＮ！≫

≪ＺＥＭＥＴＡ！≫
♪～～♪～～
同じようにコンボメロディが流れる。
「あーらよっと！」
『んおおおっ！！』
ブライがソレを振るうと、刃からは蒼いオーラが鞭のように伸び、カナヅチヤミーに直撃する。
そして一同は戦いの場を変え、人気の無い林へと足を踏み入れる。
≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！ＲＩＯＴＥ！ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！≫
≪ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！ＴＡＴＯＢＡ！ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！≫
その最中で、ブライとオーズは基本形態に戻っている。
「おらおらぁ！」
ブライは持ち前の気丈さでカナヅチヤミーを押して行く。
一方でバースも、思い切り良くユニコーンヤミーにぶつかっていく。
「おうらぁ！」
何度となくタックル、パンチ、寝技などを決めていくバース。

だがしかし、

「――――うっ・・・！あ、うぅぅあ・・・・・・」

再びバースが、頭を抱えて苦しみだした。
しかもユニコーンヤミーと至近距離にある中で。

『フン』

ユニコーンヤミーはバースを無視して、ある人物に向っていく。

「伊達さん！伊達さん！」

後藤がバースの身を案じて近寄る中、ユニコーンヤミーが向かって行ったのは、

「祥子、逃げるよ！」
「あ・・・っ」

杉浦祥子。
彼女は比奈に手を引かれて逃げるも、所詮は人の足。
一角獣（ユニコーン）に追いつかれるのがオチだ。

まあ、そんなことを待つまでもなく、

「キャっ！」

祥子はうっかり転んでしまった。

『・・・・・・・・・』

ユニコーンヤミーは祥子の頭に右手を伸ばした。
すると比奈がその手を掴む。

「ふんにゅ～～！」

持ち前の人間離れした怪力で、ユニコンヤミーの腕を掴んで放さない。
しかし、

『お前の夢は何だ？』

左手が、比奈の頭に触れた。

「――――――」

その時、比奈の表情が愕然となり、頭からは奇妙な煙が出てきた。
その煙は次第に形となり、映司がコンクールの際に着た、比奈がデザインした服となる。

「・・・・・やめて」

比奈の口から一言漏れた。
ユニコーンヤミーは宙に浮いたその服を手に取る。

「いや・・・いや・・・」

色が極限まで薄まった声。
その小さな声も虚しく、

――ビリっ！――

服は無惨にも破られた。

「離れろっ！！」

そこへアンクがユニコーンヤミーに突っかかり、左手で顔を掴むも所詮は児戯に等しく、簡単にあしらわれてしまう。

『夢は夜に見ろ』

とだけ言い残してユニコーンヤミーは去っていった。

一方でオーズは、

「比奈ちゃん！」

余所見をしたが為に、

「ぐわっ！」

ウヴァの攻撃を喰らってしまう。

だがしかし、そこで意外すぎる助っ人が現れた。

ウヴァとオーズの間に乱入してきた一匹の黒いネコ。

『貴様！』

『オーズ、助けてあげるよ』

「カザリ？」

そう。敵対しているはずのカザリがオーズの手助けをしたのだ。
どう考えても裏があっての助けとしか思えないが。

『フフ、フフフ♪』

鋭い爪を立てながらウヴァと交戦するカザリ。
しかし、その最中においても怪しい笑いを絶やさない。

そして、

――ザシュ！――

なにやらわざとらしく攻撃を受け、更には、

『うおぉぉ！』
『うあぁっ！』

四枚のコアメダルが勢い良く体外に飛び出してきた。

「メダル！」

アンクはすぐさま『右腕』を飛ばしてコアを回収しようとする。
飛び散ったコアはまず、ウナギ一枚をアンクが抑えた。
次に地面に落ちたシャチを取ろうとしたが、ウヴァの脚によって蹴飛ばされてしまう。

ウヴァはシャチを拾い、結果として三枚のコアを得たことになる。

『コイツは貰っていくぞ』

拾ったシャチ一枚に、空中でとった重量系が二枚。

『これはさすがに拙いね』

カザリはそんな捨て台詞を吐いて逃げ去った。

そしてブライはというと、

「さぁて、次はどのメダルで・・・・・・」

カナヅチヤミーに有効な攻撃ができそうなメダルを絞っていると、

『御馳走が惜しいが、今のうちに！』

といって逃げようとするカナヅチヤミー。

なんだか破られた夢を勿体無さそうに見てる気もするが。

「って、逃がすかよ！」

ブライは龍之息吹で足止めしようとした。

だが、

『悪いが、ソイツ倒すのは先にしてもらいてぇな』

（この声、まさか・・・？）

一度だけだが、記憶の中でだけ聞いた覚えのある声だ。

そして、その声が聞こえてきたと思ったら、

――バジューーーン！！――

「うおぁぁあああ！！」

上空から謎の怪光線がブライを襲ったのだ。
光線の威力は想像以上に凄まじく、一撃で周囲を焼き尽くすどころか消滅させ、ブライの変身さえダメージの過多で解けてしまう。

「くっ、うぅ・・・この程度で・・・！」

だが刃介は不屈の性根ゆえに立ち上がった。
ベルトとメダルを体内にしまいこみ、今度は全身をグリード化した。
初めて人前で、自分のグリードとしての姿、ガトウとなったのだ。

『ん・・・銀粉か・・・？』

上空から光に反射して美しく輝く銀粉が雪のように降り注いできたのだ。
まるで、玉鋼を削りに削ってつくったような銀粉には、なぜか共鳴するモノを感じてならない。

そうして、その原因はすぐにでも天空から舞い降りてきた。

「・・・・・・あ」
『ん・・・・・・』

その光景にオーズもウヴァも眼を奪われる。

そこには、銀色に輝く悪魔（だてんし）がいた。
天空より神々しい光を纏い、一枚欠けたことで１１枚となっている翼のような翅。
辺りに銀粉を撒き散らしながら、彼は地上に舞い降りた。

そして、彼は翅を消失させ、同時に周囲の銀粉も消失させた。

『俺と、同じ・・・？』

ガトウは眼を疑った。

目の前のグリードは、自分と全く同じ姿をしているのだがしかし、体色が真逆となっている。

銀色を主軸とした体に金色のアンクセント。鋭すぎる青白い眼光などを除けば完全にガトウと同じ容貌だ。セルメン部位もベルトだけとなっている。

『四季崎記紀・・・・・・！！』

ガトウは目の前にいる男の名を呼んだ。

『この姿の時は「デシレ」と呼んでくれ』

『デシレ？・・・・・・ＤＥＳＩＲＥ（デシレ）・・・・・・Ｄｅｓｉｒｅ（デザイア）』

ガトウはすぐさま名前の由来を汲み取る。

『お前にしては随分解りやすい名前だな』

『気にするな。今日来たのはお前の持ってるコアを貰おうと思ってな』

『丁度いい。俺もお前のコアを盗ろうと考えてたトコだ』

ガトウは拳をグキグキと鳴らす。

ヤル気のオーラさえ見てきそうな気がしてならない。

『ヤル気なとこ恐縮なんだが、さっさと済ますぜ』

そして次の瞬間に、

――ビシィィ！――

『これは・・・？』

ガトウの身体は、なんだか有り難そうな文字の羅列で覆われた云メートルもある経文によって束縛されていた。

それはデシレの身体から出てきた一本の長刀の鞘に巻きついていた経文だった。

『呪刀「鎮」』

『新しい変体刀かよ』

『まぁな。宣言どおり、とっとと済ますぞ』

デシレは動けなくなったガトウにゆっくり近づき、

――ズブッ！――

『ぐぅッ！』

左手で彼の身体の中に突っ込んでいき、あるモノを三枚抜き取った。

『よーし、狙いぴったりだ』

握りだされたのは、ハヤブサとマンモスとイナゴのコアメダル。

デシレはその三枚を体内に仕舞い込んだ。

だけども、

『俺も行ったはずだ。お前のコアを盗るってな』

――ズブッ！――

『んなッ！？』

なんとデシレは右腕だけながらも経文から逃れ、デシレの身体からコアメダルを抜き取って見せたのだ。抜き取られた金色のコアの表面には『銓』の文字が刻まれている。

『ははッ、一枚ゲット』

ガトウはしてやったりとでも言わんばかりの声音だ。

『はぁ、仕方ない。――ゼントウ、引き上げだ！』

『了解でござる』

大声に反応したゼントウは先ほどまで交戦していたチェリオとキョトウから距離を離し、薄刀『針』を鞘に納める。

『爆縮地』

――瞬ッ！――

そうしてゼントウは刹那のうちに消え失せた。

『あばよ。また会おうぜ』

そしてデシレも十枚の翼を拡げて大空へと飛翔していった。

（――って、魅入ってる場合じゃねぇ！早くあいつに！）

意外なことに、アンクは先ほどの光景に気をとられていたようで、
人形のように倒れ付している信吾に戻ろうとする。
だが、彼の右腕と一体化しようとした時、

『ッ・・・？』

何かの異変に気付き、戸惑った。
そして、その異変はすぐさま現れたのだ。

一言で言うと、泉信吾が、自力で目を開けて首を動かした。

「お兄ちゃん？」
「・・・・・・比奈――」

――その時、泉信吾（けいじさん）が眼を覚ました――

夢の破壊者と泉信吾と伊達の異変（後書き）

次回、仮面ライダーブライ！

失くした夢と依代と黄泉帰り

失くした夢と依代と黄泉帰り（前書き）

仮面ライダーブライ！
前回の三つの出来事は！

一つ！比奈が服飾学校のコンクールで優勝する！

二つ！真木がつくったユニコーンヤミーが人の夢を壊し、四季崎がつくったカナヅチヤミーがそれを貪る。

そして三つ！アンクに取り憑かれていた泉信吾が、意識を取り戻した！

失くした夢と依代と黄泉帰り

泉信吾（いずみしんご）。

泉比奈の兄にして、二十代前半という若さで刑事課に属し、三年前には凶悪犯罪者を逮捕した実績のある優秀な人材でもある。

しかし、グリード達が封印された石棺が安置されていた鴻上ファウンデーション所有の美術館の爆発事故の際、偶然そこでアルバイトをしていた映司と知り合ったことから、彼の人生は変わりだしたと言っていい。

彼は先輩と共にパトカーでパトロールをしていた際、ウヴァがつくったカマキリヤミーと遭遇し、その後を追跡。

映司とアンクが接触してカマキリヤミーに襲撃された際、拳銃で発砲するも一切効かずに返り討ちに遭ってしまい、先輩刑事は怪我ですんだが、信吾自身は瀕死の重傷を負ってしまったのだ。

そして映司が初めて仮面ライダーオーズに変身し、タカキリバスラッシュでカマキリヤミーを倒した直後、活動する為の肉体を欲したアンクに憑依されていた。

だがしかし、それが今・・・・・・。

「お兄ちゃん？」

「・・・・・・比奈・・・・・・・」

一言だけ呟き、信吾はまた目を閉じてしまう。

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！？」

体を揺さぶりながら、比奈は信吾を起こそうとする。
一方でオーズとウヴァの戦いはすぐさまに終わることとなる。
正直な話、ウヴァのほうが一方的に戦いを打ち切った感じだが。

『このくらいにしておくか。これ以上の長居はヤバいからな』

ブライ、チェリオ、キョトウ。
この三人をさっきまでおさえていたデシレとゼントウが帰った今、下手に留まれば折角奪ったコアを取り返される可能性を考慮し、ウヴァは早々に立ち去った。

その場にいる全員は変身を解く。

「くぅぅ・・・・・・」
「伊達さん!!」

しかし伊達は戦いによる弊害ゆえに膝をついてしまい、後藤はそんな伊達に駆け寄っている。

「お兄ちゃん!わかる?比奈だよ!」
「・・・・・・比、奈・・・大丈夫か・・・?」

今度は一言だけでなく、きちんとした会話としての言葉を紡ぐ。

『・・・・・・何故だ?』

アンクは空中で浮かびながら信吾の状態を見て、言葉を吐き捨てる。
しかし、今にして考えると、アンクが取り付いていた間に、信吾の肉体が回復したからだと見るのが一番妥当かもしれない。
アンクは不可解な出来事から逃避するようにどこかへ飛び去った。

「って、アンク！アンクー！」

映司が呼んでもアンクは戻ってこない。

重病人二人がいるこの林の中――そこへ、一台の黒い車がやってきた。

運転席のドアを開け、出てきたのは、

「乗ってください」

里中は伊達と後藤に言ったのだろうが、

「すいません！この人もお願いします！」

信吾に肩を貸して歩きながら、映司が頼み込み、信吾も伊達と一緒に車に乗せられることになった。

「比奈ちゃんも大丈夫？」

二人を乗せ終え、映司は比奈に聞いた。

先ほど、ユニコーンヤミーに夢を破られたことに対し、映司としては思うところがあるのだろう。

「何とも無いみたい」

「そう、良かった」

安堵するも、それは本当に少しの間だけのもの。

「比奈ちゃんも早く車に」

「はいっ」

後藤に促され、比奈は車に向って走った。
その途上で、

（ん？）
（服を踏みつけていった？）
（やはり、そういうことかよ）

その変化に、金女も七実も刃介も気付いた。

＊＊＊＊＊

病院へと到着し、伊達と信吾はすぐさま検査を受けることになった。
しかしながら伊達はというと・・・・・・。

――ピーッ！ピーッ！――

臨床検査室を抜け出そうとしていた、病院着の下に検査用のコードをつけた状態で。

「まだ検査中です、戻ってください！」
「大丈夫だって！」
「伊達さん・・・？」
「しかし先生からの指示も無く！」
「俺が医者だから！」
「伊達さん！！」

一度目の声は届かなかったせいか、後藤は二度目の声を思い切り大きくした。

「・・・・・・・・・」

結果として伊達は黙らざるを得なくなった。

＊＊＊＊＊

比奈はというと、病院のベッドで眠る信吾の傍にいた。

「比奈ちゃん！刑事さんは？」

「今直ぐ命に関わるような状態じゃないって」

比奈は医者からの言葉をそのまま映司に伝えた。

「じゃあ、アンクがついてなくても大丈夫ってこと？」

「・・・・・・でも、何時意識が戻るかはまだわからないって」

「そっか・・・・・・でも大きな前進だね」

比奈は信吾の布団をかけなおすと、映司に向き合う。

「私一度家に戻ってお兄ちゃんの着替え取って来ます。暫くはここでお兄ちゃんの様子見てますから」

「あ、学校はいいの？俺がここにいてもいいけど」

「ああ、学校なら辞めます」

あっさりと、色んなものを不意にする発言を言った。

「えらく唐突な発言だな」

「不重（おもんじず）――折角優勝して、未来のエリートコースの道筋がついたというのに」

「比奈さん、夢を諦めるんですか？」

そこへ刃介たちが喋ってきた。

彼等も病院に付き添ったのだが、そんな彼等に比奈はというと。

「いいんです。それに、お兄ちゃんが大変なときにお洋服作りたいだなんて、私可笑しいですよね？」

などと、前の比奈とはズレた言葉が出てきたのだ。

比奈はそのまま病室を出てしまった。

だがその時、意識が無いはずの信吾から、こんな言葉が紡がれた。

「夢だったじゃないか・・・・・・比奈・・・・・・」

それは寝言というには余りに絶妙だった。

「「「「「・・・・・・・・・・」」」」」

遺された四人は、ただただ沈黙し、信吾の様子をみていた。

＊＊＊＊＊

日もすっかり落ちた夜。
雨も強く降り出した頃に、アンクはたった一人、右腕だけの状態で屋外を彷徨っていた。

『んッ』

その時、一台の車が通りかかりると、水溜りにあった雨水がアンクにビシャアっとかかった。

『・・・・・・くそ』

弱弱しく吐き捨てたアンクは、そのまま宙を舞い、階段の下に移動して雨を凌いでいた。
まるで何時もの傲慢さまで、成りを潜めてしまったかのように。

＊＊＊＊＊

カザリ、真木、ロストがアジトとする洋館。

「こんなに簡単にメダルを奪われるとは、君らしくありませんね」
「そうだね。でも僕らしくないってことは」
「何か意図がある？」

真木は二階の廊下から中央の階段に移動しながら、広間にいるカザリと話す。

「ロスト（アンク）とあんた、それに僕。――もう少し仲間が集まったら、素敵だと思わない？」

その企みは雷鳴の如く、世界に轟いていた。

＊＊＊＊＊

その頃、ウヴァはアジトにおいて、今までの成果を発揮しようとしていた。

二つのドラムの上には、青い水棲系コアが五枚、灰色の重量系コアも五枚。

『復活して、俺より強くなられても困るからな』

といいながらウヴァは、青いコアを二枚、灰色のコアを一枚取り除く。

『これくらい抜いておくか』

ウヴァはメダルを手に持ち、トラックの荷台に配置し、人型に積み重ねた大量のセルメダルの隙間を通り、青い布と灰色の布を被せる。

そして、青い布の上にはウナギとタコを一枚ずつ――灰色の布の上

にはゴリラ二枚とゾウ一枚。

『メズール・・・そしてガメル』

ウヴァは荷台からステージ上に移動する。
そして、両腕を高らかに上げてこう叫んだ。

『復活の時が来た！！』

その宣言と同時に、布で覆い被されたセルメダルが起き上がった。
起き上がるに従い、布は落ちてしまったが、それと同時にセルメダルがコアの持ち主へと宿り、元の姿を象っている。

『お前等のコアだ。その欲望で、手を伸ばせ！！』

ウヴァは両手に持ったシャチとサイのコアメダルを持ち主へと投げつけた。
メダルの塊状態にある二つの物体は手に当たる部位でしっかりとコアをキャッチし、自分の胸に押し込める。
それに伴って彼等は色づき、明確な姿を取り戻した。

シャチの姿を模した頭と、肩にかかっているウナギのヒレ型マントをしているも、ウナギ型の華奢で美しい上半身やタコ型の細くて美麗な下半身が不完全（セルメン）な青き異形。
サイの角とゾウの鼻を併せ持った頭部、屈強で野太い両脚を備え、ゴリラのように重厚で強靭な筈の上半身が不完全（セルメン）状態にある灰色の異形。

水棲女王メズールと重量王ガメル復活の瞬間である！

『あぁぁ、よく寝た～』
『ウヴァ・・・・・・』

だが当のガメルは、今まで自分が消えていた間から復活したまでのことを心地よい熟睡タイムであったかのように欠伸をする。
一方でメズールは目の前に佇み、自分たちを復活させたウヴァの姿を冷静に見ていた。

『復活した気分はどうだ?』
『復活・・・・・・』

今にして思い出すと、メズールとガメルは真木の策略とカザリの裏切りにより、大量のコアメダルの『器』にされて暴走寸前状態にされた挙句、セルメダル５０００枚と昆虫コア二枚を吸収させられたことで、パワーの制御を失って巨大な怪物の姿へと変貌してしまったことがあった。
そして、そうなった彼等はバースとオーズによって始末されてセルメダルは消滅し、残ったコアもアンク・カザリ・ウヴァによって回収されていたのだ。

『成る程ォ』

状況を理解したメズールは、荷台から出てステージに足を運ぶ。

『俺のお陰だ。感謝しろよ?』

とウヴァがメズールとガメルに言うも、

『あれ～?お菓子無い、お菓子どこぉ?』

ガメルは美味しい駄菓子を求めて能天気かつ無垢にあちらこちらを探し回っている。

『カザリに一泡吹かせてやるのさ』

『それが貴方の目的？』

ガメルは一旦無視して二人だけで会話を進める。

『まず、オーズからメダルを奪う。それからカザリだ！！』

――バシィィィン！！――

ウヴァは今までの屈辱と憤怒の一部分だけでもぶつけてるのか、近くにあったシンバルを蹴りつけた。

＊＊＊＊＊

そして、とある武家屋敷の庭にある土蔵。

その中では四季崎記紀と錆白兵が、とある一人のグリードを再び復活させようとしていた。

人型に置かれたセルメダルの山――その上に被せられたのは、赤・黄・緑・灰・青で彩られた大きな布。

「準備のほうは終了でござる」

「ご苦労だったな」

どうやらセッティングを行ったのは白兵のようで、四季崎はあくまで仕上げ担当のようだ。

「こっちのコア一枚を持って行かれたが、まあ概ねこっちの筋書き通りだし、問題ない」

四季崎はそう言いながら袖から奪ったコアを取り出す。
まずはスミロドン・メガロドン・マンモス・イナゴを一枚ずつ、布の上においた。

「さあ、埒外の真庭忍者よ。今一度、産声を上げてみせろ！」

その言葉を契機に、ガメルとメズールの時と同じく、セルメダルは人型にかたまって起き上がり、四枚のコアを取り込む。
四季崎は最後の一枚であるハヤブサを手にこう言った。

「命の欠片を、コアメダルを掴み取れ！」

乱暴な手付きで投げられたコアを見事に受け取ったソレは、最後の一枚を自らの頭に入れ込み、実体化を果たした。

「成功でござるな」

白兵が呟いた直後、そこには一人の奇抜で美しい女が居た。
女は美しい顔立ちと凛然とした雰囲気とは裏腹に、どこか納得の行かない表情でこう囁く。

「二度あることは三度あると諺でいうが、今がまさにそうだな」

女の服装は実に異常だ。恐らくどんな時代のどんな国家でも馴染まないであろう。
全身に鎖を巻いて袖を切り落とした忍び装束を着込んでいるのだから。

「まさか、お前までメダルに絡んでいるとは思わなかったぞ四季崎記紀よ」
「ほざけよ。お前だって薄々勘付いていたんじゃないか？――真庭竜王」
「気安く本名で呼ぶな」

復活したグリードの名はリュウギョク。その正体は真庭竜王という暗殺専門忍者だ。
かつて８００年前と４００年前の戦いで初代ブライの鋼一刀と二代目ブライの鋼劉十に敗れて封印されていたが、この時代において再び復活を果たし、今代のブライである刃介と死闘を繰り広げた末に満足のいく形で敗北した。
そして刃介の身代わりになるように自らの身を犠牲にし、コアだけが刃介の下に残っていたのだ。

竜王はポニーテールにした長い流麗の黒髪を振り乱すように首を横に振った。
明らかな不機嫌さを表している。

「まぁまぁ、そうツンツンしないで頂きたい。拙者らはお主の戦友である鋼刃介の『完全』の為に動いているのでござるよ」
「刃介を、『完全』だと？」

竜王は目を細め、四季崎と白兵を警戒するような素振りを取る。

「そうだ。いずれアイツ自身の眼前で全てを話してやるがな。しかしその前に、お前に渡しておくものがある・・・・・・白兵」
「ああ」
すると白兵は錆色のメダルを纏いながら、怪人態であるゼントウとなる。
さらにそこへ、自分の胸に手を当てると、彼のベルトは色を喪失した不完全（セルメン）となり、完全体ではなくなった。
ここまで言えばわかるだろう。
ゼントウは自らのコアを何枚か取り出したのだ。
「何の真似だ？」
竜王は訝しい者を見る眼でゼントウに尋ねた。
『どうもこうも、お主に拙者のコアを分け与えるのでござるよ』
「ッ・・・・・・！？」
この発言には流石の竜王も驚くしかない。
グリードにとってコアメダルは正真正銘自身の命の欠片ともいえる核だ。
それを易々と明け渡すなど、相当の信頼か、腹積もりがなければ出来ない芸当だ。
ゼントウは驚愕している竜王の手にそのまま三枚のコアを握らせる。
「それからリュウギョク。お前に贈り物があるぞ」
四季崎は懐から長方形の石版を竜王に投げ渡し、竜王はそれを手にした。

その石版の形状は、グリードを封印した戦士二人のそれと非常に似通っていた。
そして何より気になることといえば、

「何故コアを六枚つけて・・・・・・」

そう。石版と一緒に、焦茶色のコア二枚と黒いコア二枚、そして・・・・・『銀枠』のコアが二枚。

（なんなんだ、このコアメダルは？）

『銀枠』のコアなど、今まで見た事も聞いたことすらなかった。
しかも『銀枠』のコアは、色がバラバラなのだ。
ゼントウに握らされたモノを含めれば、白と緑と赤といった三種の植物が描かれている。

「さて、リュウギョク。俺達はこれからお前がどうするかについては指図しねぇ」

四季崎は竜王のペースを塗りつぶすように話を進行させる。

「そいつを持ってどうするかは、お前が決めるんだな」

「・・・・・・・・・・・・」

＊＊＊＊＊

翌日の朝。
とある広場で一人の男性が野外写生に勤しみ、キャンバスに筆の軌跡を走らせていると、一番出会いたくない怪物に出くわす羽目となった。

『お前の夢は何だ？』
『・・・・・・・・・』

ユニコーンヤミーとカナヅチヤミー。

「う、うわぁぁあああっ！！？」

男性はわけもわからない状況に急遽遭遇してパニックに陥る。
そんな男性に対してユニコーンヤミーは無情にも腕を伸ばした。

頭を掴まれた男性からは夢の具体例なのか、立派な絵画が現れる。
ユニコーンヤミーはそれを持って、

『夢は夜に見ろ』

バリっと絵画を割った。

『儚く散った夢は蜜の味』

そしてカナヅチヤミーによって、破れた夢は喰い飲まれる。
男性は生気を失ったかのように座り込んでしまった。

「今度こそ逃がさないぞ！」

そこへ刃介が単身登場と思いきや、

『遅いぞ』

「アンクお前・・・・・・！？」

映司とアンクも到着する。

二人はさっそくやりなれた動作を行い、お決まりの台詞を叫んだ。

「「変身！」」

≪ＳＨＡＣＨＩ・ＫＵＪＡＫＵ・ＣＨＥＥＴＡＨ≫

≪ＹＡＩＢＡ・ＴＳＵＢＡ・ＴＥＮＢＡ≫

オーズ・シャジャーター。

ブライ・ヤイバテン。

亜種形態に変身した二人は、脚部にエネルギーを送り込んで即刻ヤミーに駆け寄って接近戦に持ち込む。

二人は一気に勝負を決めようとキツめのキックをヤミーにくらわせて吹っ飛ばす。

だがそれに乗じてユニコーンヤミーとカナヅチヤミーは塀の外へとジャンプしていく。

「お見通しだっての」

でも今のブライとオーズには意味が無い。

例え遮蔽物で遮られても、オーズのシャチアイには反響定位によってサーモグラフィのように映り、ブライのヤイバアイにはＸ線のように物体を透視できるのだ。

結果として、塀の外で走り、大きな門の近くにまで来たところでタジャスピナーとヤイバスピナーを構えて、

「「今だッ！」」

炎と刃の弾丸を標的めがけて発射する。

『くッ』

それに対してユニコーンヤミーは鼻から猛烈な息を噴出し、煙幕のようにして逃げ去った。
馬独特の鳴き声を残して。

「チッ、逃げられちまったか。まあ良い、後でメダルを得る楽しみが増える」

ブライは舌打ちこそはしたが、即座に思考を切り替えて変身を解く。

「大丈夫ですか！？」

一方で映司は被害者のほうに近寄った。

「え・・・・・あ、大丈夫です」

被害者の男性は実にのっぺらとした感じで答え、何食わぬ表情で立ち去ってしまった。

「やはり、あいつと泉比奈と同じだな」

刃介はそういって、あるものを懐から取り出した。

「それって、比奈ちゃんの服！」

先日、ユニコーンヤミーに破られた服の片割れ。
刃介があの時、ひっそりと回収していたのだ。

「大方あの馬面は、人間の欲望に形を与えて壊すのが趣味なんだろう。そしてカナヅチヤミーは、その壊れた夢を食らってセルとする」

言われてみれば、比奈の言動は明らかにヤミーの行動が起因してるとしか思えない。
信吾のことがあるとはいえ、あまりにスパっと夢を諦めているのだから。

「夢がなくなったら、人間はどうなるんだろう？」
『知ったことか』
「比奈ちゃんのこともあるんだし、少しは考えろよ」
『ふんっ。欲望もない、夢もない――お前も似たようなもんだろ』

アンクはお得意の毒舌をかます。
そこで映司は話題を変える。

「刑事さん、回復してた」
『やっぱりな』
「もうお前がついてなくても大丈夫みたい」
『そうか？』

そこへ刃介も会話に割り込んでいく。

「アンク。代わりの器でも探すか？」

『別に不自由はない』

とだけ言って、アンクはどこかへ行ってしまった。

「ま、いっか。どうせ戻ってくるんだからよ」

＊＊＊＊＊

服飾学校において、杉浦祥子は。

「おはよう祥子！」

「ねえ、最近比奈が学校に来ないんだけど、なんか知らない？」

女子二人は祥子にそう尋ねたが、祥子が知ってるわけもなく。

「フランス留学の話も断っちゃったみたいでさ」

「勿体無いよね？私なら絶対に行くのに！」

「・・・・・赦せない。折角のチャンスを不意にするなんて！」

「え、ちょ、祥子！？」

祥子はフツフツとこみ上げてくる怒りを吹き出させて、学校直前からある場所へと直行した。

＊＊＊＊＊

鋼雑貨店。

そこは以前と比べて売上が伸びつつあった。

理由は単純にして一つだ。

「ありがとうございます。今後とも御贔屓を」

看板娘がいるからだ。

お客を微笑みながら見送る彼女に、店の奥から白髪頭の男が歩み寄る。

「七実、精が出るな」

「働くのは好きですから」

刃介は平和な会話に意識を向けている七実は、この鋼家において家事全般や接客などを担当している。刃介は物品の仕入や財政管理、店の整備などを担当している。

そこへ、

「あの、鋼さん。ちょっといいですか」

「ここに、泉さん来てませんか？」

映司と祥子がやって来たのだ。

「火野に、ヤミーの親？」

「比奈さんなら、此処には一度たりとも来ていませんが」

二人は顔を見合わせながら答えた。

「泉比奈になんかあったのか？」

「ちょっと言いたいことがあって・・・・・・」

「言いたいこと？」

「赦せないんです。私が夢を諦めなきゃいけないのに」

祥子は辛らつな表情で語ってくれた。

あのコンクールで優勝できなければ、服飾学校を退学して父の会社の手伝いをせねばならないことを。

んでもって蓋を開けてみれば準優勝・・・・・その時の苦しみは相当なものだったのだろう。

「だから赦せないんです。自分から夢を諦める事が」

「なーるほどぉ。だったら一緒に探してやるか」

「念の為に、信吾さんのいる病院に問い合わせてみます」

そういって七実はスマートフォンを使って病院に電話をかけた。

七実は比奈が見舞いに来ているかどうかを受付役に尋ねてみたが、残念なことに今日はきていないらしい。

七実は通話をやめ、そのことを映司たちに伝えた。

「となると、最後に残った場所は自宅だな」

＊＊＊＊＊

泉兄妹が在住しているマンション。
そこにある泉家という名の部屋に赴いてみれば、凄まじく混沌とした光景が広がっていた。

一言で言うと、ズタボロに切り裂かれた洋服が部屋中に散乱しているのだ。
誰がやったのかと問われれば、それはこの部屋の住人である泉比奈しかいまい。

「えらい模様変えだな」
「能天気言ってないで比奈ちゃん止めてくださいよ！」

部屋に入った一同は比奈からハサミを取り上げた。

「比奈、どうしちゃったの・・・？」

祥子もこの状況には唖然とせざるを得ない。

「夢を失う・・・つまりは生きがいを失ってしまった、というところでしょう」

七実はあくまで冷静だ。

「映司くん、どうしよう・・・・・・」
「比奈ちゃん・・・・・・」
「大好きだった物が、大好きじゃなくなっちゃった・・・・・・私どうすればいいの？何をやればいいか、わかんないよ・・・・・・」

そうして、比奈は眠るように倒れてしまった。

まるで、心の隙間という奈落に落ちたように。

「・・・・・・他の連中も今頃は・・・・・・・」

＊＊＊＊＊

『・・・・・・・・・・・・』

その頃アンクは一人でじーっとしていた。
しかし、ただ不動の状態でいてもしょうがなく、どっかへ飛んで行こうと宙に浮かんだ途端、

――バシュ！――

水の鞭がアンクを捕えたのだ。
アンクは鞭に引き寄せられ、そのまま何者の手につかまれ身動きを取れなくされる。

『捕まえた～！』
『ガメル・・・メズール・・・！？貴様等なんでだ！？』
『お久しぶり、アンク』

消えた筈のガメルとメズール。
戸惑うアンクの前にウヴァが悠々と現れる。

『ウヴァ！・・・成る程な、だからお前が自分以外のコアメダルを』
『しっかり捕まえてろよガメル。コアメダルは全て頂く』
『うん、わかった』
『クッソ・・・！』

アンクは必死になってガメルから逃れようとする。
だがグリードの中において『重量王』の異名を冠するガメルのパワーには勝る事は出来ない。
なにせ今は右腕だけなのだから。

そんな絶体絶命の時、

――ビュンビュン！！――
――ガキッガキッ！！――

『んっ！？』
『何ッ！？』

何かがウヴァとメズールに命中し、二人の動きが鈍った。

『（今だッ）――デコピンッ！』

――バチン！！――

『イッタァ！』

アンクはガメルの手から力が抜けた瞬間、勢いよく飛び出した。

『チクショウ！誰だ邪魔したのは！？』
ウヴァは右腕の鎌を振り回しながら憤慨する。
『ねぇウヴァ、これって・・・・・・』
『ん、なんだ？』
メズールはそんなウヴァに、自分たちに命中した物体を手にとって見せた。
それは十字手裏剣と棒手裏剣だった。
『一体誰なんだろう？』
ガメルは何時ものノロイ口調で喋るも、
『今はアンクが先だ！探すぞ！』
『ふぅ、はいはい』
『あ、待ってぇ！』
三人は手裏剣の主のことより、目先（アンク）のことへとベクトルを向けて探し出す。
もっともアンクは、
（やはり、このままでは無理があるな。・・・・・・しかし、あの攻撃・・・まさか奴までが・・・？）
近くの物陰に隠れながら、自分を助けた者に目星をつけながら再び器を取りに戻っていった。

＊＊＊＊＊

鴻上生体研究所の所長室。
真木が財団を去って以降、空き部屋同然とかしたこの空間は、伊達と後藤が入り浸る状態となっている。
もっとも伊達は真木がいた頃からここに居候しているが。

「こんな状態で・・・・・どうするんですかこれから！？」
「よく今まで戦えましたね。普通なら絶対安静もんですよ」

レントゲンに映った銃弾をみて、後藤は怒鳴るように問う。
逆に金女は感心しているようだが。

「別に――今まで通りさ。一億貯めなきゃなんないからな」
「金より命が大事じゃないんですか！！」

後藤は怒鳴り散らしながらそういった。
そして、泣く寸前のような表情になり、

「死なないで下さい」

懇願さえする。

「ああ、俺は死なない。夢を叶える為にな」
「不聞――初耳ですね。一億はその為ですか？」
「ずっと考えてた夢がある」

＊＊＊＊＊

倒れた比奈を病院まで担ぎ込み、漸くベッドに寝かしつけた映司たち。

「比奈が目覚めないのは、全部あの怪物のせいなんですか？」

「うん。夢を壊しちゃうみたいなんだ。早く探して倒さないと」

「ま、カナヅチに喰われなかっただけマシだがな」

そう言っていると、祥子が思い立ったようにこう切り出す。

「夢って、なんだと思いますか？」

「え？」

「夢を失って、辛い思いをするくらいなら、最初から見ないほうが良いと思います」

すると、映司と刃介は

「俺もかつて、青臭い夢があったが、ふとした拍子で失くした。結果として今があるのだが、後悔はない。俺と火野のはデカ過ぎたが、お前のはまだマシで現実的だって言ったろ？」

「それに、大きな夢は叶える為に時間が掛かる。俺達は急ぎすぎて、大失敗した。だから、夢はゆっくり育てるべきだと思う。焦って、夢がただの欲望になっても困るし・・・だから・・・ゆっくり、じっくり育てれば良いと思う」

しかし祥子は浮かない顔をしている。

「でも、父さんが・・・」

「説得すればきっとわかって貰えるよ。じっくり時間をかければ」

「出来るかな？」

「だって、夢を諦めたくないんでしょ？」

映司の言葉に、祥子は自然と笑顔になって首肯する。

しかしそこへ、病院着を纏った金髪の青年が

「あら、アンクさん戻ったんですか」

「追い出そうとしても無駄だぞ。・・・この体が要るんだよ・・・」

「それは良いですけど、あとで比奈さんの返事を聞いといてくださいね」

「・・・・・・・・・」

七実にそういわれたアンクは、少しばかり比奈の顔を見ていた。

＊＊＊＊＊

とある街中。

そこでは大勢の人々がパニックになって逃げ惑っていた。

「く、来るな・・・！」

『お前の夢は何だ？』

『どんな味がするのかな?』

＊＊＊＊＊

所長室では、

『ｳｵ！ｳｵ！ｳｵ！』

ゴリラカンドロイドがヤミーの存在を察知していた。

「行くぜ」

「ええ」

伊達と金女は早速セルメダルを入れたタンクとケースをてにもつ。

後藤はバースバスターを準備しつつ、

「伊達さんを、死なせません」

「ああ、頼んだ」

＊＊＊＊＊

ユニコーヤミーとカナヅチヤミーが暴挙する街中。

「逃げてください！」

映司たちが漸く到着する。

「アンク、メダル！」

『邪魔だ』

ユニコーンヤミーは映司を殴り飛ばした。

「映司！」

『おっと、そうはいかん』

カナヅチヤミーはアンクに羽織締めをかける。

「チッ、仕方ない」

「刃介さん。念を押して、メダルは私が持っておきます」

「ああ、余分に持ってると、また持っていかれそうだしな」

刃介は妖魔系の三枚と刀剣系以外のコア全てを七実に預ける。

そしてドライバーを装着し、スキャナーを手にもつ。

「変身！」

≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＥＮＢＡ！≫

≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！ＲＩＯＴＥ！ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！≫

リオテコンボに変身すると、右腕を前に突き出し、

「久々だな・・・・・チェインハンド！」

――バシューー！！――

右前腕部が勢いよくロケットパンチのように飛び、ユニコーンヤミーの顔面に直撃した。
勿論、エネルギーの鎖で本体と繋がっているので、飛んでいった拳はすぐさま戻ってくる。

「ついでに影の鞭ってのはどうだ？」

リオテコンボの固有能力である『黒影操作』で自身の影と周囲の影を己の両手に圧縮して『影の鞭』をつくりだす。

――バチン！バチン！――

『ん～！おのれ、調子に乗るな！』

ユニコーンヤミーは鼻から白い息を盛大に噴出す。
それによってブライの動きは鈍り、

『お前の夢は何だ？』

ユニコーンヤミーの接近を赦してしまう。
彼奴の手がブライの頭に触れると、それはすぐさまに現れた。
大体、サッカーボールくらいの大きさをした黒い塊。

『なんだコレは？』

ユニコーンヤミーはそれに触れて壊そうとしたが。

――ジュウウゥゥゥ・・・・・・！！――

『な、何ぃぃ！？』

触れた瞬間、掌の皮膚が溶け出したのだ。
だがしかし、それによって黒い塊の外皮の一部が剥がれたらしい。
そして見えてきた、まるでブラックホールのように底知れない禍々しい漆黒によって覆い隠されていた鋼刃介の夢の中身が。

『なんと、これは・・・・・・』

ユニコーンヤミーも驚いた。
それは形容のしようさえない、美し過ぎる輝きをこちらに発して放つ何かがあった。
一体ソレがなんなのかは、全貌を明らかにせねば理解のしようがないが、一部分だけでもヤミーさえ虜にしそうな煌きがそこにあった。

「おい、馬面」

しかし、魅入っている時間はプツンと終わった。

「汚ねぇ手で、人の領分にズカズカ入りこんでんじゃあ、ねぇよ！！」

――ザシュ！！――

『うおぉぉあああ！！』

激昂したブライは、魔刀を手にユニコーンヤミーに斬りかかった。

それによってユニコーンヤミーは映司のいる方向に吹っ飛ばされる。
ユニコーンヤミーは気を取り直すように映司へと手を伸ばす。

『お前の夢はなんだ?』
「うっ・・・・・・」

結果、刃介とは別な意味で眼の離せないもの・・・・・・いや、離したくても、どうあっても視界に入ってしまうほどに巨大なものが現れる。

「あれが火野の夢?」
「成る程。そういうことですか」

火野映司の心の奥底で眠っていた夢。
それを具象化して出現したものは、地球そのもの。

『な、なんて大きさだぁ!!』

ユニコーンヤミーも想定外な事態に怯んでしまい、急いで夢を映司へと戻した。

「映司!」

そこへアンクがコア三枚を投げ渡す。
そして伊達達も到着する。

「さーて、お仕事お仕事!」

三人はベルトを装着し、それぞれのメダルを使い、叫ぶ。

「「変身！」」

――キリッキリッ――

――パカン！――

≪ＴＡＫＡ・ＴＯＲＡ・ＢＡＴＴＡ≫

≪ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！ＴＡＴＯＢＡ！ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！≫

オーズ、バース、チェリオ――そして、ブライ。

四人のライダーが漸く揃った。

≪ＤＲＩＬＬ　ＡＲＭ≫

≪ＣＡＴＥＲＰＩＬＬＡ　ＬＥＧ≫

バースは右腕にドリルユニット、両脚にキャタピラユニットを装備してユニコーンヤミーに突っ込む。

≪ＥＮＴＯＵ・ＪＵＵ≫

チェリオは炎刀『銃』を両手に、カナヅチヤミーへと引き金を引く。

「オラオラ行くぜぇ！」

「フッ！ハア！」

戦いは完全な二対一となり、このまま勝負が決まるかと思われた。

しかし、世の中はそんなに都合よく出来てはいないようだ。

――ズバァァアアァァァン！！！――

「「うわあああああああ！！」」
「今の攻撃・・・！」
「まさかッ？」

突如、水流・重力・雷撃が合わさっての攻撃がブライたちを襲い、
遠くへと吹っ飛ばしたのだ。
勿論それをやったのは言うまでもなく、

「ウヴァ・・・ガメル・・・メズール」
「不生（いかさず）――消えたはずのグリードまでいるとは」

「コア集めはこういうことでしたか」
「そして、ウヴァの奴が復活させたんだ！」

これで五対四。

『コアメダルを渡してもらおうか』
「――断る」
「渡す義理がありません」
『そうか。なら力づくで奪うまでだ！』

ウヴァたちは颯爽とオーズらに襲いかかろうとする。
だがしかし！

「真庭忍法――劉殺生！！」

――ザンッ！ザンッ！――

『ぐおッ！』

『キャア！』
『うわッ！』

凄まじい速度で何かがウヴァたちに攻撃したのだ。
あまりのスピードに姿さえかすんで見えてしまうほどに。

「今の技、やはりあいつか！」

アンクは先ほどからあった疑問を確信に変える。

『やっぱり、そういうこと！』
『おのれ！奴まで復活しているとは！』
『でも、なんでブライとオーズに味方する！？』

ウヴァもメズールもガメルも、襲撃者のことを思い出したらしい。
８００年前の激戦に初代ブライ共々乱入し、圧倒的な力量を見せ付けた五色のグリード。
ブライは、人生最高のライバルの名を叫んだ。

「来てくれたのか、竜王ッ！」
「懐かしいな、我が好敵手よ」

全身に鎖を巻いて袖を切り落とした忍び装束や腰の左右に提げた忍者刀
若々しく美しい顔立ちにスラリとした長身と抜群のスタイルやポニーテールにした流麗の如く長い黒髪。

最早見間違えようはない。

「真庭忍軍十二頭領総補佐にしてグリードが一角、真庭竜王――通称『奇蹟の竜王』」

誇らしげな表情でそう名乗った女忍者、竜王は堂々とした佇まいでドッシリと構える。

『リュウギョクぅぅ！アンクや其処の女と同じく、ブライとオーズにつく気か！？』

ウヴァは想定外を通り越した規格外な存在が最悪の形で登場してきたことに激怒する。

「見て解らんのか虫頭（ウヴァ）？私はもう、グリードとしての人生に終止符を打っている。これからは・・・・・・」

竜王は四季崎と白兵から受け取った石版とコアメダルを取り出した。そして、己の決意の下、新たな信念を告げる。

「仮面ライダーとして生きる！」

――バチィィン！――

装着した瞬間、石版は砕け散って内部のベルト本体が露出する。黒いラインが走る青いバックルにある三つの窪みに、植物（ぎんわく）のコアメダルを入れて傾け、サイドバックルに提げられたスキャナーを持って一気に流れのまま滑らせた。

「変身！」

≪ＢＡＲＡ（バラ）・ＳＡＲＲＡＣＥＮＩＡ（サラセニア）・ＲＡＦＦＬＥＳＩＡ（ラフレシア）≫
≪ＢＡ（バ）・ＳＡ（サ）・ＲＡ（ラ）！ＢＡＳＡＲＡ！ＢＡ（バサラ）・ＳＡ（サ）・ＲＡ（ラ）！≫

白薔薇の頭に輝く赤い複眼。
食虫植物（サラセニア）のような緑色の両腕。
ラフレシアのように赤い両足。

「新しい仮面ライダー・・・・・・！！」

誰もがその存在に圧倒されていた。
そして、本人は実に優雅な雰囲気をまとって名乗る。

「仮面ライダー・・・・・クエス！」

この瞬間、新たなる仮面ライダーが誕生した！

『リュウギョクゥゥゥ！！』

ウヴァはクエスに向って猛スピードで鎌を繰り出そうとする。
しかしクエスは一切戸惑うことなく、エネルギーを両腕に送り込む。
するとクエスの両腕と半一体化した伸縮自在な鞭状の触手『サラセニアフィーラー』が起動し、クエスの腕の動きにあわせてウヴァの体を絡め取る。

「ついでだ。特製の手裏剣を味わえ」

白いバラヘッドにエネルギーが送られ、ソレと同時に花弁を模した『バラペタル』から色鮮やかな花弁手裏剣が生成され、赤いバラアイの閃きに反応して一斉にウヴァへと放たれる。

――バチバチッ！――

直撃した瞬間、爆竹みたいな音を立てて、花弁はウヴァの体を削っていく。

『くぅッ！リュウギョク・・・・・・・！』

恨めしそうに此方を睨むウヴァ。
クエスは冷静な態度を崩さず、視線をブライたちに向けた。

「刃介、オーズ」
「・・・・・・ああ」

それだけで意思は汲み取れた。
互いに本当の意味で、戦いという場で分かり合うことができた戦友の意思を。

「行くぜ、火野。全力全開だ！」
「はい！」
「兄さん、まさか紫を？」
「待て！暴走するぞ！」

バースとチェリオは止めようとするも、そんなものを聞いてる場合ではない。
目の前にいる者に報いるためにも。

「大丈夫です」
「どうにかなるって」

二人は雄々しく佇み、体中に力を入れた。

「「俺に力をっ！」」

それと同時に複眼が一瞬紫色となり、体からはコアメダルが飛び出す。
勝機のメダルを掴み取った二人の手付きに迷いはなかった。

≪ＲＹＵ・ＷＹＶＥＲＮ・ＤＲＡＧＯＭ≫
≪ＲＹＵ・ＷＡ・ＤＲＡＧＯＮ　ＫＮＩＧＨＴ！≫
≪ＰＴＥＲＡ・ＴＲＩＣＥＲＡ・ＴＥＲＡＮＮＯ≫
≪ＰＵ・ＴＯ・ＴＥＲＡＮＮＯ　ＳＡＵＲＵＳ！≫

虚無を司る紫の波動が解放され、二人の周囲には冷気と覇気が満ち溢れる。

「って、ヤバ！」
「巻き込まれる！」

バースとチェリオは全てを凍えさせる冷気と全てを震え上がらせる覇気から逃れるように駆け出す。

「「ヴォォオオオオ！！」」

プトティラコンボとリュワドラコンボの雄叫びがあがった直後、冷気も覇気も弾け飛び、二人は本能のままに走り出す。

「映司・・・あいつまた・・・」
「大丈夫ですよ。あの二人なら」
アンクとは裏腹に七実には心配の色は見当たらない。
オーズはガメル、ブライはカナヅチヤミーに蹴りと拳を喰らわせて行く。
だがそこにはきっちりとした理性があった。
「・・・・・・問題ないな」
「えぇ、やりましょう」
――バリっ！――
ブライとオーズは拳を地と空に沈め、メダガブリューとメダグラムを召喚する。
それを見て、メズールとガメルは困惑する。
『なんなの？あのコンボは！？』
『誰のメダルだぁ？』
「「――――――ッッ」」
オーズとブライは得物を手にし、そのままグリード二人に斬りかかる。
≪ＤＲＩＬＬ　ＡＲＭ≫
≪ＡＮＴＯＵ・ＫＡＭＡ≫
バースはドリルアームでユニコーンヤミーを、チェリオは暗刀『鎌』

でカナヅチヤミーに攻撃をしかけていく。
その様子を見てクエスはサラセニアフィーラーの呪縛からウヴァを解放する。

『貴様ぁ！』

束縛されていたウヴァは敵意剥き出しでクエスに鎌を喰らわせようとする。
――が、

「悪いが、その手は喰わん」

クエスは紙一重で鎌を避けると、ついでにウヴァの腕を踏み台にしてジャンプした。
空中にいる間クエスは、クエスドライバーにある三枚のコアのうち、中央の一枚を焦茶色のメダルと換装する。

≪ＢＡＲＡ・ＫＹＯＵＫＥＮ・ＲＡＦＦＬＥＳＩＡ≫

地表に着地したと同時に、クエスの両腕は緑から焦茶色となり、そこには一対の小太刀（キョウケンソード）が握られている亜種形態の一つ、バラキシア！

クエスはメダルチェンジを完了させると、得物の特徴を生かしたスピーディな戦いに切り替え、刃を思う存分に小刻みに振り回す。その際の動きには何の迷いも鈍さもない。

「中々使い心地が良い」

クエスは攻撃に一旦区切りをつけ、キョウケンソードの使い勝手を評価する。

クエスは見分を終えると、次は脚部にエネルギーを伝達する。

「精々鼻が？げないよう気をつけることだな」

『なに？』

――ブンッ――

クエスが足を思い切り振った瞬間、

――プシュウウゥゥ！！――

猛烈な勢いで異様なガスが噴出されたのだ。

脚から出たガスはまるで煙幕のようにウヴァの周囲を囲う。

だが効果はそれだけではない。

『んッ！？な、なんだこの臭いはァ！？』

余りにも強烈過ぎる腐臭にウヴァは今にも意識がブラックアウトしそうになるが、持ち前の執念深さでどうにか乗り切った。

「しぶとい奴だ。・・・刃介、トドメだ」

でもそれさえ、クエスにとっては策の一つ。

ウヴァは何時の間にか、ガメルとメズール、そしてユニコーンヤミーとカナヅチヤミーが一塊になっている場所に誘導されていたのだ。

≪ＲＹＵ・ＷＡ・ＤＲＡＧＯＮ　ＨＩＳＳＡＴＳＵ！≫

≪ＰＵ・ＴＯ・ＴＥＲＡＮＮＯ　ＨＩＳＳＡＴＳＵ！≫

――バギュウウゥゥゥゥゥン！！――

次の瞬間、ストレインドゥームとギガキリングスレイヤーの合体攻撃が発射される。
グリード三体は咄嗟に逃げる事ができたが、代わりにユニコーンヤミーとカナヅチヤミーは直撃してしまい、一枚のセルと大量のセルメダルを残して爆発した。

戦いは終わった・・・・・・が、一同の顔はまだ晴れない。
理由は当然、クエスとなった竜王にある。

「竜王・・・・・・・」
「刃介・・・・・・・」

ブライとクエスは間隔１ｍのところまで近づきあう。

「・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・」

そんな二人を、残りのメンバーたちは無言で見守っていた。
驚天動地の物語は、更なる加速を見せる。

＊＊＊＊＊

そして、何とか逃げ延びたグリード三人衆は、体中に手傷を負いながらも港にある倉庫区域にいた。
その姿は少し前の彼等と比べれば余りに惨めだった。
しかし、それだけ分の悪い状態だったのも疑いようのない事実。

『フフッ、イイ格好だね』

そこへ三人にとって聞き慣れた声がしてきた。
声をかけてきたのは、ロストを連れてきたカザリだった。

『アンク・・・？まさか・・・！？』

ロストの存在を知らないメズールは、目の前の光景という現実すら疑った。

『ねえ、誰・・・？』
『敵、かな・・・・・・』

ロストに問われたカザリは返答しつつ、右手をウヴァたちに向けた。
ロストもそれを真似て左手を前に出す。

『に、逃げるぞ！』

正直な話、こんな状態でグリード二人を相手にするのはかなり無理がある。
ウヴァに促され、背を向けて退却しようとするがもう遅い。

『『フッッ！』』

カザリの風とロストの炎が同時に放射され、辺り一面に爆炎を起こ

させながらウヴァ達にダメージを与えたのだ。
当然、傷口を広げられるようなことをされて無事なものなどいるはずがない。

カザリとロストが自分たちにゆっくりと近づいてくるのを見たメズールはこんなことを言い出した。

『ねぇカザリ。アンクと貴方につくから、ウヴァを倒してコアメダルを分け合わない？』
『なッ・・・！？』
『うん。その言葉を待ってたよ』

カザリはウヴァの策を最初から見抜いていた。
つまり、メズールとガメルを戦力に取り込もうとしていたのだ。

『カザリが俺達を裏切ったことを忘れたのか！！』
『あーら、貴方だって同じでしょ』

かつてメズールはカザリによってコアを抜き取られ、残り一枚だけの状態にされて怪人態すら保てない状況に陥ったことがある。
その時にはウヴァもカザリの裏切りに対する激怒と『進化』という言葉の魔力にのまれ、メズールから最後のコアを奪おうとしたことがある。

『私たち、もう二度とバラバラになるわけにはいかないの』

メズールがそうしてカザリ側についたことで、

『う、うぅ・・・・・・メズール、俺も！』

彼女に甘えていたガメルまでもがカザリ側についた。

『くッ、バカな・・・！』

ウヴァは傷ついた体を引き摺りながら逃げようとするも、それは無謀とさえ言える。

ロストの火炎、カザリの突風、メズールの水流、ガメルの重力波。

四つの攻撃を背後から同時に喰らっては、

『うわあああああァァァ！！』

ウヴァの体は吹っ飛んでメダルに分解されてしまい、彼が抜き取ったガメルとメズールもコアも持ち主の下に帰った。

『やった！』

『はぁあ・・・』

コアを取り込んで嬉しそうにするガメルと、下半身が復活して恍惚な声音を出すメズール。

そして、ウヴァの昆虫系コアを回収し、四人のグリードは其の場を後にした。

重要なものを一枚だけ取り忘れたままで。

＊＊＊＊＊

戦いが終わり、映司達は病院に戻っていた。
しかし竜王は服装の関係上、屋上で待機で、刃介と七実もそれに付き添った。
そんな中で、比奈は両の目を開けて意識をとりもどす。

「比奈！良かったぁ！」

看病していたのか、祥子はそれを笑顔で喜ぶ。

「夢の中に・・・・・・お兄ちゃんが出てきた。――叱られた」

寝起きのせいか、妙に平坦な口調で喋る比奈。
祥子は病室の出入り口に立っている映司とアンクをみて、

「じゃあ比奈、学校で待ってるから」
「うん」

入れ替わるように病室を出た。

「比奈ちゃん・・・どうする？アンクに、出てってもらう？」

信吾の肉体は病院の治療でどうにかなる程に回復している。
その辺の審判は肉親である比奈が下すべきだろう。

比奈は暫くの間、真顔で黙っていて、痺れを切らしそうになったアンクが映司の肩を『右腕』で掴んで何か言おうとしたが、

「もう少し・・・・・・お兄ちゃんと、一緒にいて」

＊＊＊＊＊

病院の屋上。
そこには刃介と七実と竜王がいた。

「そっか。やはり四季崎のヤローか」
「ああ。お前を『完全』なものにすると言っていた」
「『完全』・・・・・・ただグリードの完全体するのとは、違いそうですね」

三人は実に真面目な空気を展開していた。

「まぁいいさ。その事はあいつが何れ話してくれるみてぇだからな」

刃介はパッパと話題を切り上げ、別の話題を持ってくる。

「竜王・・・・・・いや、仮面ライダークエス」
「なんだ、ブライ？」

二人はライダーとしての名前で呼び合った。

「これから頼むぜ、戦友」

そういわれると、竜王は自然と笑顔になった。
彼女らしい綺麗な笑顔で。

「ああ・・・・・・宜しく頼む」

＊＊＊＊＊

つい先ほどまで、五人のグリードがいた場所。
そこには一方的な攻撃によって散らばった木材などが散らばっていた。
だがそこには、明らかに異質なものが一枚だけ残っている。

――このままじゃ済まさん・・・・・・！！――

クワガタ・コア。
そのたった一枚には、凶暴な魂が宿っていた。

「ほほぅ。こいつはとんだ拾い物だな」

――ん・・・？なんだコイツ・・・？――

そして、それは一人の刀鍛冶によって拾われた。
この先の未来という水面にまた一つ、波紋を起こしていくかのように。

＊＊＊＊＊

そして、真木の洋館では、紫・黄色・赤の三色で彩られていた空間が変わろうとしていた。
紫と黄色と赤の三色に、青と灰を加えた五色へと。

自己を含めて合計五人のグリードが結集した。
カザリは本当に愉快で楽しそうな表情で、他の四人と共に階段をあがっていく。

「さーて、これからどうしようか？」

その時の口調は、実に面白そうだった。
これから起こりうる三つ巴の戦いに、思いを馳せながら。

失くした夢と依代と黄泉帰り（後書き）

次回、仮面ライダーブライ！

睡眠と医療と裏切り

仮面ライダークエス

真庭竜王がクエスドライバーと三枚のコアメダルの力で変身した姿。

錆白兵（ゼントウ）が秘めるべき植物系・犬系・甲殻類系のコアを用いている。

竜王自身に高次元な戦闘技術によって持てるスペックが最大に発揮されており、オールマイティな戦いを可能とする。

基本形態は植物系のバサラコンボで、一応は正規のコンボなのだが、色違いの所為かこのコンボには固有能力がなく、使用するコアメダルも縁が銀色になっているのも特徴である。

名称の由来は「要望」を意味する「Ｒｅｑｕｅｓｔ（リクエスト）」から来ている。

因みにスーツの色は蒼銀となっている。

バサラコンボ

キックリ力：１５トン　パンチ力：１０トン　ジャンプ力：１３０ｍ

走力：１００ｍを３．０秒　身長：２００ｃｍ　体重：８５ｋｇ

固有能力：なし

バラヘッド（白）

複眼の色は赤。花弁を模した「バラペタル」から色鮮やかな花弁型手裏剣を一斉に放つ事が出来る。

サラセニアアーム（緑）
両前腕部と半一体化している伸縮自在な鞭型の触手武器「サラセニアフィーラー」を装備している。

ラフレシアレッグ（赤）
両脚に入った出鱈目に這ったラインから、腐臭ガス「スメルガス」を噴出する。これの臭いは、人間と比べて五感が退化しているグリードさえ、余りの不快感に卒倒するほどのモノである。

クエスドライバー
真庭竜王が仮面ライダークエスに変身するためのベルト型ツール。色彩以外に関してはオーズドライバーやブライドライバーと機構は同等で、コールカテドラル・オーメダルネスト・コールスキャナーの三つで変身システムを成している。

睡眠と医療と裏切り

午前六時半の鋼家。
朝日が夢見町を隈なく照らし出すこの時間帯で、プチイベントが起こっていた。
といってもこのプチイベントは、色々と混乱を招き捲くるモノとなっただろう。

その元手は寝室であった。
七実はとっくに起きて朝食などの準備に取り掛かっており、何時もなら刃介は漸く眠りから覚めている頃だ。そう、何時もなら。

「・・・・・・・・・・・・んー」

眠りの時間から意識が解放され、目蓋をゆっくり開ける刃介。
だがまだ直ぐに起きるのがしんどいのか、適当に布団の中で手と足を動かしていると、

――ムニュ――

「んあっ／／／」

片手で何だか柔らかくて温かくて大きなモノを揉んだようで、布団の中から女の喘ぎ声が聞こえてくる。

（まさか・・・・・・）

意識が急速に冴えてきた刃介は、もう少し手と足を動かした。
するとまた、ムニュっとした感触を残った片手で感じ取った。

脚のほうでも、滑々した心地好い感触がしてくる。

（・・・・・・あ）

そして見てしまったのだ。

二つ並んだ布団のうち、自分が今いる布団の直ぐ近くに、見覚えのある『忍び装束』が乱暴に脱ぎ捨てられていた。おまけに、胸に巻く曝し布や股を隠す褌まであるではないか。

そこから導き出せる答えは唯一つ。

刃介は何かにトドメを刺すかのように布団を取り去る。

――バサッ――

「ん・・・・・・もう朝か？」

Ｂ９５の豊満な巨乳、Ｗ５６の括れた腰、Ｈ８７の熟した尻、長くて細くて綺麗な手足。

それら全てを曝け出した全裸（フルヌード）姿で刃介の布団に潜りこんでいた真庭竜王だったのだ。

「・・・・・・竜王」

「なんだ？」

「何故、俺の寝床に？」

「好きな所で寝て良いと言ってたではないか」

真庭竜王は現在、鋼家の居候している。

刃介は竜王に対して不覚にもこう言ってしまったのだ。

”好きなトコで寝ていて良いぜ。今更遠慮し合う関係でもないしな”

と、親愛を篭めていったつもりが、何故かこんなエロ展開に繋がっ

ている。

「それから竜王。なんですっぽんぽんで、体を隠そうとしない？」
「私は基本的に寝るときは素っ裸だぞ。それに、私とお前の仲ではないか」

などと、平坦に真顔で言い切った竜王。
どうやら疚しい気持ちでやったことではないらしい。

（拙い、拙過ぎる・・・・・・！）

竜王の格好もさることながら、刃介の状態もお世辞が通じない。
昨夜は寝苦しかったせいで、寝巻きの襦袢が着崩れて上半身裸になっているのだから。
もし、こんな所を七実にでも見られようものなら・・・・・・。

「刃介さん、竜王さん」

あ、もう遅いや。
七実は味噌汁をつくり終えたばかりだったのか、お玉を持っていた。

「朝御飯の支度が出来――――」

七実の視界は一瞬フリーズし、持っていた御玉がスっと畳みの床に落ちた。
まず目についたのは、忍び装束も下着も、髪留め用の紐さえしていない、まさに一糸纏わぬ裸体（ヌード）状態の真庭竜王。
そして、その竜王と同じ布団にいるのは、上半身裸でいる自分の唯一無二の所有者（こいびと）・鋼刃介。

状況を二つの目玉を通して色々と誤解して認識する鑢七実。
そんな彼女が取った行動とは、

「刃介、さん、の・・・・・・うっ――ぅ・・・ひっく・・・うぇぇ・・・・・・」
（なっ、泣いちゃってるぅぅぅぅ！！？）

こんな状況を一体誰が予想しえただろうか？
そして、今の無力な刃介に打開すべき手段は残っているのか？
否、ある訳がない！

「ま、待ってください七実さん！！貴女はこんなキャラじゃなかった筈ですよ！？」

などと言うが、それはある意味、逆効果としか言い様がなかった。
愛する男のトンデモ事態に、幼子のように涙を零す七実は、若干赤くなった目元で刃介を捉えた。

「うふふ、うふふふふ」

そうすると、両眼から涙を流した状態のまま、黒くて不気味な笑いまで・・・・・・。

（さようなら、俺よ）

そうして、裁きの時がやってきた。

「恥を知りなさい、この浮気者」

それは、ただ虐殺というには、余りに残酷すぎる光景であった。
ただ一つ言えるのは、我々は失ってしまったということだ。
何をかって？――決まっている・・・！――それは最高の戦士！
ありがとう刃介――我等に夢をくれて。
ありがとう刃介――我等に希望をくれて。
ありがとう・・・・・本当に・・・・・・ありがとう。

＊＊＊＊＊

トライブ財閥の会長室。
そこではルナイト、バット、吹雪の三人がシリアスムード満点で集っていた。

「まさか四季崎の奴、竜王を復活させたばかりか・・・仮面ライダーにするなんてね」
「大番狂わせとしかいいようがありませんね」
「でも、これから俺っちらはどうすりゃいいっすかね？」

などと、全員揃って最後に”ね”がついている。
流石にこんなシュチュエーションが出来上がるのは考えていなかっ

たのだろう。

「――まあ良いわ。起きてしまった事でクヨクヨしても始まんないし、開発したモノの、お蔵入りしてたアレをやっちゃいましょう♪」

「あ、アレをですか？」

「ん、アレってなんすか？」

ルナイトの発言に対してバットが戸惑い、吹雪は首を傾げる。

どうやらアレのことを知らない様子の吹雪に、バットは耳打ちするように教えた。

「え・・・・・マジで？」

それを聞いた瞬間、口調も個性も忘れて、吹雪はただ声を漏れ出さした。

＊＊＊＊＊

はてさて、此処は第二話にて登場した古着屋。

刃介と竜王と七実は此処に来ていた。

理由は実に単純――竜王の普段着を購入しに来たのだ、もちろん値切って。

しかし、この店をやっている老夫婦には一つ、来訪してきた刃介について、どうしても尋ねたいことがあった。

「じ・・・ジンくん・・・？」
「どうしたんじゃ？その生傷は？」
「ノーコメントで、お願いシマース」

棒読み気味に答えた刃介の体中には生々しい傷がついていた。
これもまた理由は単純で、七実の虐殺を超えたお仕置きの結果である。
まあ、逃げようと思えば逃げられたのだが、七実が泣きながら迫ってくるという激レアな状況もあって・・・・・・。

「・・・・・・・・・・・・」

そんでもって、当の七実は機嫌を損ねたままの状態らしく、そっぽを向いてしまっている。

「いや、その・・・本当に、すまなかった・・・」

竜王は竜王で、自分の軽率な行動の所為で刃介が嬲り殺しにされたことについては罪悪感が募っているようだ。

「あのさ、ジッちゃんにバッちゃん。竜王（こいつ）の着物買いに着たんだけど、安く譲ってくれないか？」
「「あ、あぁ・・・・・・」」

生気が全然感じ取れない今の刃介の棒読み口調を耳にしていると、無条件に情けをかけたくなる好々爺な老夫婦。

「んじゃあ、婆さん・・・」
「そうだね、爺さん・・・」

老夫婦は早速竜王に似合いそうな古着を店中から五着ほど選んでくれた。
その内の五着は無地の着物で、色はそれぞれ赤・黄・緑・灰・青だ。

「あ、そうじゃお嬢さん。折角来てくれたんじゃから、特別にこの一着だけ、タダでやるよ」
「え、いいのか？私にこんな上等そうな物を・・・・・」
「気にせんでえぇの。こういうのはやっぱり、若くて心の綺麗なお嬢さんが着るのが一番だしね」

老夫婦が竜王に渡したのは白菊の刺繍が施された黒い女物の和服だった。
帯も含めて、使われている布は実に上等であることが素人目でもわかる。

「ありがとう、御老人方」

竜王は素直に頭をペコリと下げた。

「んじゃあ、ジッちゃんにバッちゃん。これの値切りなんだけどさ」
「ああ、それなら半額にしとくよ」
「ジン君もえらい苦労しとるようだし、老婆心ながらも気を遣わせておくれ」
「あんがとよ。それじゃ此処に代金置いとくぜ」

なんだか交渉する間も無くあっさりと値切ることに成功し、着物の料金をさっさと置いて帰ったいく三人。そんな三人の帰り際の後ろ姿を見ていた老夫婦は――

「あの忍び装束を着たお嬢さん、ジンくんの何なんじゃろうな？」
「ただの居候ってわけではなさそうだったけど・・・・・・」
「ジン君はもしかして、ワシらなんかには及びもつかん世界におるのかもしれんなぁ」
「かもしれませんねぇ」

＊＊＊＊＊

鴻上生体研究所・所長室。
そこには後藤が、バース運用マニュアルを読み漁りながらパソコンに向って何かの資料をまとめていた。
しかし、後藤にはどうあっても気にかかるものがある。
直ぐ近くに置いておいた封筒から取り出したレントゲン写真。

（左後頭部に、４５ＡＣＰ弾・・・・・・）

伊達明に鋭い頭痛を与える元凶。

（本当にこのまま戦って大丈夫なのか？）

そして伊達が戦う理由は、

（一億――一体何の為に？）

と考えていると、一本の電話がかかってきた。

「もしもし・・・・・・はい」

電話の相手は病院の医者だった。

「伊達は今・・・・・え?検査に行ってないんですか!?」

後藤は思わず立ち上がった。

＊＊＊＊＊

さて、今日のクスクシエは?

「「「ニーハオォ!」」」

「香港フェアにようこそ!」

チャイナ服着た三人が出迎えた。

アンクは当然そんなことに参加しない。

比奈は信吾の体をもたせる意味も込めて、アンクに定食をだした。

「はい、ちゃんと食べてね」

といって比奈は仕事に戻った。

アンクはアンクで、疑問に思うことがある。

(あいつ、なんで・・・・・・)

どうして自分を追い出さなかったのかと。
しかし、今考えても始まらない。
アンクは慣れない手つきで箸を手にとって食事をとる。

「お待たせしました、カンフーポテトです」

映司は店の出入り口に一番近い席に座っている、新聞を広げた客こと伊達に料理を差し出す。

「今日は随分ゆっくりしてますね」
「うん、ちょっとね。暇つぶし」

などといいながらポテトを食べようとしたとき、

「あら後藤くん。久しぶりぃ」
「あの、伊達さん来てませんか？」
「えっ？」

後藤が伊達を探しにやってきた。
知世子が思わず視線をやった先にいる新聞紙を広げて顔を隠す客。
後藤は即行でその客に近づいて新聞紙を奪い取る。

「あっ」
「何やってるんですか？今日は病院に行く筈でしたよね？」
「え、病院？伊達さんどっか悪いんですか？」

などと映司まで食いついてくる。

「あ、ちょっと、虫歯がね」

ボロありまくりな言い訳。
多少頭の回る奴ならこう言い返すだろう。
なんで虫歯の奴が飯屋に来るんだ？・・・と。

＊＊＊＊＊

時間は一気に飛んで夕方。

「すみません。でも検査は常に受けてもらわないと」
「わかってるって、明日いくよ。ただし、俺の行き付けで」
「いいですけど・・・・・じゃあ俺も一緒に」
「おいおい、信用ないね。・・・・・じゃあ明日」
「はい」

そうして伊達と後藤は一旦別れた。
しかし、伊達は後藤の見えないところで。

「――――あッ、くぅッ・・・！」

足はふらつき、目眩や頭痛に苛まれている。

「不見（みられず）――酷い様ですね。見てられませんよ」

そこへ現れた奇妙な口調の女。

「金女ちゃん・・・・・・」
「こんにちは・・・というべきでしょうか？」

＊＊＊＊＊

グリードたちのアジトたる洋館。
そこには五人のグリードのうち、生粋のグリード四人がそれぞれ時間を潰していた。

ロストとカザリはボール遊び。
艶のある長い黒髪を伸ばし、青い服を着た女子高生くらいの少女に化けたメズールはファッション雑誌を読み、長身で屈強な体付きをした白い服を着た青年に化けたガメルは駄菓子を食べている。

そこへ、

「メズール君、ガメル君」

紫の男の声。

「私が貴方方を呼び戻す事に賛同した理由は一つ」

腕に乗った人形に向って喋る真木清人。

「勢力の統一です」

確かに今、８００年前に生まれたグリードたちは、アンクとウヴァを除いて集いつつある。

「現状の勢力分散が、コアメダルの分散に繋がっている。例え目的が違っても、まずはコアメダルの為「待って」

そこへメズールが待ったをかけた。

「余計な説明ならいらないわ。どうして私たちが大人しくあのカザリについてると思うの？あんな裏切り者に」

そういわれたカザリはわざとらしく肩をすくませる。

「そう・・・コアの為なら協力できる、わかってるわ。まず大量にセルメダルを集めるんでしょ？その為のヤミーならもうつくってあるの。ね、ガメル？」

「うん」

＊＊＊＊＊

その頃、とある高層ビルの屋上。

『ああ、いい眺めだこりゃ。さーって、ここで良いかなーっと』

えらく軽めで流暢な日本語で喋る異形が一体。

アルマジロの体――厳密に言うと、左半身にウニがくっついたよう

なウニアルマジロヤミー。

『ウニニニニニニニ！！』

ウニアルマジロヤミーは左肩から大量の小針を飛ばしまくった。
勿論ソレは下にいる人間たちに降り注ぐことになる。

だが人間たちには大きな被害はない。
その辺の子供やタクシードライバー、さらには知世子などの首筋に針が刺さっても、例え針が体に入り込んでも、ちょっとチクっとするだけであとは気にならない。

そうして、大勢の人間に針が打ち込まれる。

＊＊＊＊＊

「では私の考えに賛同なんですね？」
「ええ、これから宜しく。紫の坊や♪」

といってメズールは、真木の頬を撫でた。
撫でられた真木の反応も、それを見たガメルの反応も芳しくなかった。

「コイツなんかヤだ・・・・・・！」

明らかな嫉妬。

「ぷッ、坊やねぇ？」

カザリも思わず笑ってしまう。

「Ｄｒ（ドクター）・！――と呼んでもらいましょうか」

「いいわ、ドクターの坊や♪うふふ」

結局、坊やという点は変わらなかった。

＊＊＊＊＊

そして深夜に指しかかっている頃合に効果は現れた。

例えば知世子の場合、眠くなっていつもどおりに布団被って横になろうとも。

「な、なんなのよ？どうして眠たいのに眠れないのよ？」

布団から出て二日酔い覚悟で酒を飲んでも全然眠れないし、眠気は増すばかり。

そんな不眠症に悩まされる人々の声で、この夢見町の夜はチト騒がしくなった。

『フフフハハハハハ・・・・・・・・！！』

そんな人々の声を聞き届けているかのように、ウニアルマジロヤミーは不気味に笑っていた。

＊＊＊＊＊

翌日の朝のクスクシエ。
映司達が店の準備をしていると、

「おはよう・・・・・・」

知世子がやってきた。

「「おはようございます」」

と二人が挨拶を返すと、

「あぁぁ・・・・・・」

知世子はカウンターに凭れ掛かってしまう。

「おーい、注文の品、届けに来てやったぞ」

そこへ刃介が店の前にシェードフォーゼを止め、後部座席に積んでおいた荷物を届けにやってきた。
中身は調理器具や包丁といった物で、知世子が新調するために購入しておいたものだ。

「・・・・・おい、なんかよく解らんが、不眠症みたいな面してるぞ」

刃介は近くのテーブルに荷物をおき、知世子の顔色を見た。

「そうなのよ。昨日からとーっても眠くて眠くて仕方ないんだけど、何故か一睡もできないのよ。ホントに辛いわぁ」

「なら睡眠薬でも仕入れようか？」

「それよりまず、病院に行ったほうが良いよ」

「そうですね。今日は御休みしましょう」

ということで、映司と比奈は知世子をつれて近くの総合病院に行った。

「・・・・・微かだが、ヤミーの気配がしたな。こりゃあの女だけじゃなさそうだな。セルメダル稼ぐチャンスだし、七実や竜王に連絡しとくか」

スマートフォンに番号を打ち込みつつ、刃介は店から出てバイクに跨った。

＊＊＊＊＊

東亜総合病院。

ここの待ち合い場所にも、知世子と同じ症状で悩まされている老若

男女で溢れていた。

「ああ、眠い・・・・・」
「眠らせてくれ・・・・・・・」

と口々に言っている。

「映司くん、これって・・・」
「あぁ・・・」
「す、座らせて・・・・・・・」

比奈は知世子を空席に誘導したが、映司はこの事態に対し、なにかを感じ取っていた。

そして、伊達と後藤と金女は、この病院に来ていた。

「お前が自分から検査しにくるなんて、珍しいな」
「まあタマにわね。んで？」
「ん・・・・別に。ま、折角だし、健康診断くらいしとくか」

この病院こそが伊達の知り合いの医者がいる行き付けの病院だったのだ。

「安くしといてくれよ？」
「ハハッ」

軽口をたたきあいつつ、伊達はナースに連れられて健康診断を行うことになった。
すると金女は、物怖じせずハッキリと言った。

「やはり、伊達さんの弾丸、この病院で摘出するのは不出来なんですね」
「・・・・・あいつが連れてきたってことは、ザックバラに話していいってことかな」

藤田医師は伊達の遠回しの意思表示を汲み取る。
そして後藤が持ち込んだレントゲン写真を見て、

「ハッキリ言うと、この弾丸を抜くか抜かないかなんです。ただし、かなりリスクの高い手術で、取り出せる医者は早々いないでしょう。もっともこのままでも十分危険ですが」
「じゃあ、激しい動きとかは？」
「当然危険です。いつ脳を大きく傷つけるか」

藤田医師は冷静に伊達の身体状況を告げた。

「でも、わかってるからこそ、あいつは日本に帰ってきたんじゃないんですかね」
「そういえば、何か目的があるようなこと言ってましたね」

金女が相槌をうっていると、後藤が意を決したように尋ねた。

「あの、一億円と伊達さんが関係するようなこと、知りませんか？」
「一億・・・？」

一方ロビーでは、座席で横になる患者達が続出していた。

「あの、ここロビーなので寝たら困ります」
「眠いけど眠れないんだからしょうがないでしょ！」
「じゃなかったら病院に来ないって！」

従業員の注意もロクに聴こうとさえしない。

（これって、何かの病気かな？それとも・・・・・・）

映司がかんぐっていると、バッタカンドロイドが現れる。

『映司、ヤミーを見つけた』
「ッ！」

アンクからの連絡をうけ、映司は急いで現場へと走った。

そして診察室では、

「アフリカでそんなことが・・・・・・」
「なるほど」

藤田から話をきき、二人はどこか納得したような表情をしている。
すると、

「後藤ちゃん、金女ちゃん、行くよ！」
「あの、まだ、検査が終わってないんですけど！」

伊達もゴリラカンドロイドを通してヤミー出現に勘付く。
勿論、引き止めた看護士のことは無視して行ってしまう。
後藤と金女は藤田に一礼してから伊達のあとを追いかけていった。

＊＊＊＊＊

『もーいっかなぁ？そーろそろかなぁ？』

なにかを待ちわびるウニアルマジロヤミー。
背後からは映司と刃介らが駆けつける。

「もしかして、こいつのせいで、知世子さん達・・・・・・」
「ガメルとメズールか・・・まずは様子見だな・・・」

アンクは映司にメダルを渡す。

「さってと、テキパキやるかな」
「では、このメダルを先に渡しておきます」
「必要と在らば、私も加勢するぞ」
「サンキュー」

ブライドライバーを装着した刃介に七実は黄色いコアを三枚渡し、
竜王もクエスドライバーを装着して待機する。

『なんだお前たち！？』

ウニアルマジロヤミーは左肩から大量の針を飛ばしてくるも、

「「変身！」」

≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＥＮＢＡ≫
≪ＴＡＫＡ・ＴＯＲＡ・ＢＡＴＴＡ≫

周囲に展開されたメダルエネルギーが防壁となり、本体には届かない。

≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！ＲＩＯＴＥ！ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！≫
≪ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！ＴＡＴＯＢＡ！ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！≫

変身完了！

『ああ！オーズにブライ！！』

ウニアルマジロヤミーは即行で逃げようとするが、

「逃がすかよ！我刀流奥義！」

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

ブライは右の手刀を構え、力を蓄える。

「電光石火（でんこうせっか）ッ！」

――シュン！――
――バギンッ！ボギンッ！――

『ＮＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！！』

一瞬の間にブライはウニアルマジロヤミーに立っており、その周囲にはウニアルマジロヤミーご自慢の針山が無数に落ちていた。
つまり、刹那とさえ居える瞬間において手刀一本で大量の針を叩き斬ったということだ。
まさに電光石火の早業といえよう。

「ついでに目潰しだ」

ブライはメダルチェンジを行ってローグスキャナーで読み取る。

≪ＹＡＭＡＮＥＫＯ・ＪＡＧＵＡＲ・ＳＭＩＬＯＤＯＮ≫
≪ＹＡＪＡ・ＹＡＪＡ！ＹＡＪＡＧＵＡＤＯＮ！≫

黄色いネコ系コアの三枚ぞろい、ヤジャガドンコンボ。
それの発動と共に、ブライの全身から発せられる凄まじい閃光を伴って放たれる熱光線・ワイルディザー。

『アアアアアア！！眩しいぃぃぃ！！そして痛いぃぃぃ！！』

効果抜群である。
ガメルとそのヤミーは閃光に、メズールとそのヤミーは高熱に弱い。
その二つがくっついているのだから、効果覿面なのは当然といえよう。

「よし、このままメダルに両替『させんよ、ブライ・・・！』
『今はまだ、貯まり切ってないからな』

トドメを刺そうとしたとき、背後から声がした。

――バチッ！――

「うおッ！？」

背中を攻撃されてしまい、トドメの攻撃が行えなかった。

その妨害者はというと、

「チッ、錆と四季崎のヤミーかよ」

そこにいたのは、甲殻類系のカニヤミー。さらには変体刀系のヨロイヤミー。

どちらも硬度に自信のありそうなタイプだ。

「やはり、私も加勢せねばダメらしい」

竜王はそれを見てコールカテドラルに三枚のメダルを装填し、コールスキャナーで読み取る。

「変身」

≪ＢＡＲＲＡ・ＳＡＲＲＡＣＥＮＩＡ・ＲＡＦＦＬＥＳＩＡ≫

≪ＢＡ・ＳＡ・ＲＡ！ＢＡＳＡＲＡ！ＢＡ・ＳＡ・ＲＡ！≫

クエス・バサラコンボに変身する。

『クエスか・・・・・・』

『そのコンボで我等に対抗できるかな？』

「ふっ、ならメダルを換えるだけだ」

クエスはトリッキーな戦法を得意とするバサラコンボで戦うつもりなど思ってもいない。

≪ＯＯＫＡＭＩ・ＫＡＮＩ・ＲＡＦＦＬＥＳＩＡ≫

焦茶色の狼の頭、黒い蟹の腕へと変化した。

亜種形態のカミカニシアだ。

クエスはオオカミアイの青く鋭い眼光で睨みつつ、両前腕部に装備された大鋏型武器『カニシザース』を両手に持ち、臨戦態勢に入る。

さらにそこへ、

「おうおう！やってるねぇ」

メダルタンクを持った伊達が到着する。

「さーて、俺も稼がせてもらい――ガシッ――」

ベルトを装着しようとしたさい、それは何者かによって阻まれる。

「止めて下さい。もうバースは無理です」

「はあ！？ちょ、何言ってんの、放してよ！」

「放しません！」

「放せって！」

後藤は伊達の身を案じているのだが、結局は取っ組み合いになってしまう。

「ああ、やっぱりこうなっちゃいましたか」

「鋼の妹か。お前はどうするんだ？」
「不言（いわず）もがなです」

アンクと軽い会話をかわし、金女はチェリオドライバーを装着してセルメダルを投入する。

「変身」

――パカッ――

変身を終え、さらにセルを入れて見せた。

≪ＴＯＵＴＯＵ・ＮＡＭＡＲＩ≫
≪ＳＨＡＴＯＵ・ＧＥＮ≫

左腕には投刀『鉛』と射刀『鉉』が合体装着され、狙いを三体のヤミーにつけた。
直接的な助太刀ではなく後方支援に回るべく、チェリオはさらにセルを二枚、投入する。

≪ＣＥＬＬ　ＢＵＲＳＴ≫

――バシュ！！――

セルのエネルギーを受給された苦無や手裏剣らは、チェリオが弦を引いて解き放った瞬間、それら全ては三体のヤミーに降り注いだのだ。

「皆さん、今です」
「ありがとよ」

「感謝する」
「ありがとう金女ちゃん。アンク、メダル」
「ほれっ」

三者三様に感謝し、それぞれは隙をつくべく動いた。

≪ＴＡＫＡ・ＫＵＪＡＫＵ・ＢＡＴＴＡ≫

オーズはタカジャバへと変化し、左腕のタジャスピナーから火炎手裏剣を発射。

『どわあアツツツツ！！熱っちぃぃぃぃ！！ギャアア燃える燃える！！』

どうやら火炎攻撃はウニアルマジロヤミーに対し、効果は充分にあるようだ。

一方でクエスは、ラインドライブを通してオオカミヘッドに力を伝達していた。
そうして息を大きく吸い込むと、カニヤミーのほうに向って、

「ッ！アォォオオォォォン！！！！」
『ぬあぁ！！なんだこの咆哮は！？』

口から発せられた遠吠えの名は『錆狼慟哭（セイロウドウコク）』。
任意の相手にだけ、自らの咆哮を超大音響として聞かせる撹乱技だ。

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

ブライはエネルギーを全解放し、猫刀『鉤』を下に減り込ませるよ

うに『杜若』の構えをとった。
そして一気に、

「よーい、どんっ！」

目の前にある三つのリング――それらを全て、自らをドリル回転させながら潜り、敵へと突っ込むビーストスパイラル。

「チェーーストーーッ！！」

だがしかし、

――ガギン！――

「なに・・・！」

『甘く見られたものだ。この装甲を簡単に貫けるわけないだろ』

ヨロイヤミーは自分の胸を叩きながら誇るように言った。
だてに賊刀と同じ名前をしているわけではないのだろう。

『おい、2体共！引き上げだ！』
『は、はいよ！』
『逃げるが勝ち～～！！』

ヨロイヤミーの言葉にカニヤミーは素直に従い、ウニアルマジロヤミーは早い者勝ちといわんばかりにビルから飛び降りてしまった。

「あー、逃げられた・・・」
「構わんさ。まだメダル貯めてる途中だったみてぇだしな」
「もうちょっと後で、セルが増えた後で倒せば「好い加減にしろ！

！」

アンクの声を遮り、其の場になんともいえない空気を齎したのは、伊達の怒号だった。

「後藤ちゃん、藤田から俺のこと聞かなかった？」

「聞きました。伊達さんだって！」

「そう！わかってる・・・わかってやってるわけよ、俺。・・・・・・そこんとこ解ってくんねぇかな？」

「わかりません。命がかかってるんですよ！絶対止めます！」

言い争う二人。

しかしその中で不穏な言動があることに気付き、

「命がかかってるって、どういうことですか？」

オーズが変身を解きながらきくと、伊達は薄ら笑いしながらタンクに座る。

「なんですか・・・・・・！？」

「いや・・・俺を死なせないって言ったの、そういう意味かと思ってさ」

伊達は何時もの口調とは裏腹に、残念そうな感情を滲ませている。

「まだ一億には程遠いんだ」

伊達はタンクを背負い、

「後藤ちゃんの考えがそれってんなら、コンビは解消だな」

と、言い切ってしまったのだ。

「そんじゃ」

「あ、ちょっと伊達さん！」

映司の制止もきかず、伊達は一人で去ってしまう。

「はぁぁ、なにやってんだが・・・・・・映司、ほっとけ」

アンクも呆れ返って先に帰ってしまった。

それを見た刃介は、

「竜王、ちょっとの間、後藤と火野についてろ」

「情報収集か？」

「まぁな。俺等は俺等で調べたいことがある」

「別にいいが、着替えてからでよいか？」

刃介は首肯する。

さらに、懐に手を伸ばしてあるものを竜王に差し出した。

それは粗雑な素人丸出しな刺繍でつくられた五色のマフラー。

「このマフラー・・・・・・」

「大事なものだろ？返しておくぜ」

「・・・・・・ありがとう」

素直に礼を言ってマフラーを受け取る。

「では参りましょう、刃介さん」

「ああ、あっちこっち探してれば、手がかりくらいあるだろ」

「兄さんたち、誰を探すきですか？」
「なーに、イカレた刀鍛冶だよ」

＊＊＊＊＊

海沿いの公園付近。
後藤はそこで、ついてきた映司と竜王に伊達の容態を教えた。

「頭に弾丸が入ったままって！」
「医者として、紛争地域で働いていたとき、巻き込まれたそうだ」
「不幸中の幸いで、どうにか生きてるわけか」

映司はショックをうけ、竜王は感心している。

「取り出す方法とかないんですか！？」
「それが・・・・・でも、このままにしておいても・・・」
「どうしてそんな状態になってまで・・・・・」

それは火野映司が吐くべきセリフではないきがする。

「奴が狙う、一億とやらが絡んでいるのではないか・・・？」
「一億円・・・・・」

＊＊＊＊＊

街中の休憩所。

そこで伊達は腰を据えながら、ミネラルウォーターを飲んでいた。

だが、

「――がっ・・・！あぁぁ・・・・・・！」

頭痛に襲われ、ペットボトルを落としてしまう。

少しして漸く痛みが引き、中身が半分近く流れてしまったそれを拾おうとしたとき、

――スッ――

誰かが先に拾い、持ち主へ返した。

「あ、ドクター！」

「お久しぶりです伊達君」

「――元気そうじゃない。人形（コイツ）も「ヤメロ」

真木清人は他人が人形に触れることを著しく嫌う。

人形になにかトラブルがあっただけでパニクルような男だからしょうがない・・・・・・というわけでもないが。

「あんた、ホントにグリードになろうとしてんの？」

「いい話を持ってきました。前金で５０００千万、成功報酬で５０００千万、しめて一億です」

「・・・え？」

もはや、話をすりかえられたことにさえ気にならない話題が展開された。

「勢力を統一したいんです。バースは元々私がつくったものですし」
「・・・金であんたにつけってか？」
「君は元々それで動いていた筈です。それに、のんびり貯めてる時間もないのでは？」

まったくもってその通りである。
このままろくに治療を受けずに戦えば十中八九で伊達は死ぬ。

「痛いトコつくね」
「如何です？」
「・・・・・・・・・・・・」

＊＊＊＊＊

町外れの古びた武家屋敷。
そこには二人の住人が居る・・・が、そこへ二人の人物が踏み入ってきた。
家主である男は、玄関でそれを見て、薄らと笑って見せた。

「随分とまあ珍しい客人だな」
「フッ、お前に聞きたい事が山ほどあってな」
「こうして、お邪魔させて頂いたわけです」

不遜な態度で接する鋼刃介と、丁寧な態度で接する鑢七実。

「ま、いいか。白兵の奴も丁度出かけてるし、可能な限りなら質問に答えてやろうじゃねぇか」

「その言葉、忘れずにいてくれよ？」

この武家屋敷で、様々な秘密が開帳される。

しかしそれは、まだ中盤へと差し掛かったばかりなのかもしれない。

＊＊＊＊＊

同時刻――金女はルナイトに呼び出されていた。

「何の御用ですか？」

金女は率直に尋ねた。

「御用って程、大仰なものじゃないんだけどね。強いて言うなら・・・・・」

ルナイトは会長席に座りながら、どんな言葉を出すべきか迷っている。

「――やっぱ、大きな声じゃいえないし、こっち来て」

「はい？」

一応従って至近距離になるまで歩いた。
ルナイトは身を乗り出して、金女に耳打ちした。
どういうわけか、金女の表情はドンドンドンドン奇妙で今まで見せたことすらないくらいに、衝撃をうけた風にしていた。

「あの、マジですか？」
「私は到って大マジよ。超がつくってくらいにね」

シルフィードは机の上においてあるリモコンを手に取ると、スイッチを押して部屋においてあるモニターに向けて信号を飛ばす。
すると、あるものが映し出された。

「これが、ですか・・・・・・」
「そう・・・『最後の大仕事』って感じかな？」

モニターには、紅蓮に燃える一枚のメダルが映っていた。

＊＊＊＊＊

今から1・2年前のこと、アフリカで伊達と藤田が働いていた頃の話。
二人は医療支援の一員として、大きな戦いで傷ついた人達の傷を癒していた。
しかし、限界という奴は思いのほか早くやってくる。

「伊達！明日撤収が決まった。情勢が急変してて、かなりヤバい」
「クソッ、またかよ！？」
「仕方ないんだ・・・・・・」

当時、藤田も伊達も、紛争地域の危険度と、それによって生じるエゴに腹を立てていた。

「俺みたいな医者でも、居なくなったらここは終わる。いくら医療支援だっつっても、引き上げたら0に戻る。――そんなんじゃダメだ。・・・・・・俺達が居なくなっても残る医療支援でねぇと」

＊＊＊＊＊

藤田から後藤へ、後藤から映司らへと話は伝わる。

「自分たちが居なくても残る、医療支援・・・・・・」
「一億はそのためかもしれない。・・・なんなのかは解らないが」
「んー、現地の者達が自分で治療できるようにするとかではないのか？他所の医者を長期滞在させられない環境なら、それしかあるまい」

竜王の聡明な推測に、映司も思い出すように声を出す。

「きっとそうだ・・・！医療関係の学校を建てる為に、一億を・・・・・」
「学校・・・・・・寺子屋の発展版か？」

「まあ、そんな感じ」

戦国時代で生まれ育った竜王は映司の言葉を独特の解釈で拾う。

「俺、学校つくる活動手伝ってたことあるんですよ。普通の学校ですけど」

「・・・そっか・・・火野もあちこち、回ってたんだったな」

「今は全然ですけどね。――自分が居なくなっても残る・・・・・・凄いことですよね」

「自分の遺志を、少なからず持ち続けてくれる者が、出来るわけでもあるしな」

＊＊＊＊＊

クスクシエの二階部屋。

「なるほどな――ヤミーの狙いは睡眠欲か。だが、欲が高まってるだけで・・・・・・濡れてない。・・・これからか」

アンクは一人、開いた窓の外を見ながら、ウニアルマジロヤミーに行動に確信を立てていた。

「しかし、あの二体のヤミーは・・・・・・８００年前と違って、本当に面倒なことになったもんだ」

＊＊＊＊＊

グリードらのアジト。

「初めて力を融合させたにしては、順調みたいだね」

「やってみれば簡単なことね」

カザリは経過を確認するかのようにメズールに話しかけた。

「ガメルの欲望を自分の能力とするヤミー。大きさより数で育てる私のヤミー」

実は先日の深夜、ガメルの睡眠欲が高まっているのを見計らって、メズールがガメルにセルメダルを投入。それによってガメルの欲望がメズールの力と融合して生まれたウニアルマジロヤミーが出来上がったのだ。

「欲望を極限に育ててから、一気に」

そして、そのヤミーの能力によるセル収穫はもうすぐ成されようとしている。

「なるほど」

真木もこれには充分納得する。

すると、後ろの扉が開く音がし、真木はそれが誰が開けたのかを瞬

時に理解する。

「正しい決断です」

背負ったミルク瓶型のタンクから、メダルの音をさせながら歩く男に、真木は静かに賞賛した。

＊＊＊＊＊

武家屋敷内部の居間。

畳が敷き詰められ、何もかもが江戸時代レベルの道具ばかりがおいてある。

刃介と七実と四季崎が取り囲んでる卓袱台の上には、人数分の日本茶と煎餅がおかれていた。

「んで、どっから話すか・・・・・」

「まずは以前、メッキヤミーが言っていた”記紀であって記紀ではない”というトコからだ」

「あー、あいつんなこと言ってたのか」

四季崎は煎餅を齧りながら相槌を打つ。

「率直に言うとだな、今現世に居る四季崎記紀も錆白兵も鑢七実も真庭竜王も、その全てが偽者なのさ」

「偽者？」

「正確に言うと、本人と同じ容姿・人格・能力を備えた精巧な人形。

もっとも、グリードの力がある以上は明確的にそうなんだがな」

刃介は話がいきなり意味不明な方向に突っ走ったのかと思った。

そこへ七実が、

「その技術はどこで得たのですか？」

と聞いてきた。

「へー、流石は完了作だ。いい勘してるじゃねぇか」

「完了作・・・・・まさか、七実たちの虚刀流は、俺の我刀流同様、誕生にはお前が関与してるのか？」

「当然。鑢一根の張った根っこを軸にして、２００年の歳月をかけて鑢七花の代で完成したのが、完了形変体刀・虚刀『鑢』ってわけだ」

その一つの真実に、刃介も七実も大して驚いた風にしていない。

「なるほど・・・私や七花が変体刀の区別ができることの説明がいきました」

七花と七実には、変体刀に近づいた際、まるで生き別れた血族で出くわしたような感覚を覚えることがある――共感覚というやつだ。

「ちょっと脇道に入るぞ」

四季崎は煎餅をバリバリと食べ終える。

「実はな、俺達は元を正せば占い師の家系でな。四季崎家には代々予知能力があって、それを利用して歴史を改竄してきたのさ。千本

の変体刀をつくり、日本中にばらまいたのもその一環だ。ご先祖様が戦国時代に俺が都合よく生まれてくるように仕組み、一番歴史の流れが変わりやすい時代で脚色をやれる刀鍛冶になるようにもしたんだろうさ。まあ、占い師の伝統は俺の代で終わったんだが」

長々と語る四季崎はさらに続ける。

「もっとも、旧将軍や飛騨鷹比等（ひだたかひと）みたいな歴史の修正者はそれに勘付いて、俺達一族の計画を大幅に遅らせたわけだがな」

四季崎は記録を読み上げるような淡白な口調で語りだす。

「俺達四季崎家の目的というのはだな、某幕府や尾張幕府みたいなのを潰して鎖国を止めさせて、この世界で言うところの黒船を初めとする諸外国からの侵略を防ぐ為だったのさ。だがお前も知っての通り、家鳴匡綱（やなりまさつな）と御傍人十一人衆が死んでも、結局のところは失敗に終わった」

四季崎は心底残念そうな表情をする。

しかし刃介は、尾張城で殺した数百人の一般兵のことや、完成形変体刀奪取の為に殺した十一人のことを思い出す。そして何より、時空を越えてあの世界に流れ着いてしまっていた、あの暗黒騎士王のことも。

「そんで、お前はどうやって七実らをグリードとして作る力をつけた？」

「ああ、そこが二番目に重要だな」

四季崎は茶をすすりながらも一応は返答している。

「俺の未来予知はなにも、あの世界だけじゃなく、無数に存在する数多の世界の未来を見ることができるようになった。そして、本物の魔術や魔法が存在する世界から技術を盗んできたのさ。変体刀作りの時と同じだ。幸い俺には、それを実行するだけの実力があったらしいからな」

魔術という言葉に、刃介は著しく反応した。

「魔術って、ルナイトみたいなあれか？」

「魔術にも色々と分野がある。義手や義足を踏み越えて全身――自分そのものを作り上げてしまえる程の人形師（まじゅつし）もいれば、平行世界へ自由に干渉する魔法使いもいる」

要するに、四季崎記紀という男は、未来予知で得た人物達の情報を元にして、異世界の人形師の技術で自分を含む幾数の人形（にせもの）を作り上げた。そこへこの世界に存在していた錬金術師たちが練成したコアメダルの製法を得て、それぞれのコアメダルを創り人形（にせもの）に与える事でグリード化させた。

そして、それらの人形（にせもの）をこの世界に飛ばしてきた。

しかも、８００年前と現代に分けて。

「そうか・・・・・・なら最後に聞かせろ」

「なんでも」

「俺達一族をブライに選び、グリードというメダルの器にしたのも、虚刀『鑢』以上を目指した変体刀作りが狙いだな」

そこに疑念は一切なく、確信しかなかった。

「かなりヒント出したんだし、やっぱ気付くよな」

四季崎は気分良さそうに笑っている。
家の中なので編み笠を外しているので、その笑みはより露骨に出ていた。

「生前の俺は、完成の先にある完了こそは目指したが、完全は目指さなかった。それは、完全に到る事は闇に堕ちるのと同義と考えたからだ。しかし、その闇へ堕ちて尚、朽ちずにいられるモノこそが・・・・・・！」

『欲望』の力。

「そして、俺のコア全てを得て完全変化した際にお前は神の領域に片足を突っ込むだろう。初代は戦ってる期間の短さ、十代目は自律心が成長を阻害しちまったが、お前は見事な我欲のもとで長きに渡る戦いを繰り広げてきた」

四季崎はいつ終わるのかと思うほどに長々と語る。

「さらに、俺が作った全てのコアを秘めたとき、お前は『超完全体』となり、神さえ超越した存在に超進化するだろう」

語り終えたかは知らないが、一旦区切りがついたところで刃介が言葉を出した。

「そういうことかよ・・・・・・今の今までのことは、全部あんたが仕組んだ運命だってことか」
「別に悪い気はしねぇだろ？理想の女を始めとして良い女ども愛されてるし、仲間だっているじゃねぇか」

だが四季崎「でもよぉ」と付け足してくる。

「それでも決して満ち足りることの無い深遠で悠久なる欲望。――いや・・・『欲望そのもの』であることが８００年の研鑽の果てに作り出されたブライの器・・・！」

あらかたの概要を解説すると、四季崎は微笑んだままで刀の銘を告げた。

「完全系変体刀・我刀『鋼』」

「それを生み出して、貴方はどうするおつもりですか？」

七実もこんな大仰なことをする動機はすぐに思いつかず、本人に尋ねるも、彼は漂々とした態度でこう返す。

「それは秘密だ」

「・・・・・まあ」

「だと思ってましたよ」

最初からこの男の返事に期待してなかったようで、刃介も七実も聴きたいことを全て聴いたため、席を立って帰ろうとする。

「おい、お前等。一つ訊いていいか？」

「なんだよ？」

四季崎に呼び止められ、足を止める。

何を聞かれるのかと思えば、

「おめぇら、グリードになってから視界や食事に変化とか出たか？」

「別にねェよ。美味い飯は美味いし、綺麗なモンは綺麗に見えてる。

それだけだろ？」

質問に答えると、刃介は七実を連れて屋敷から出て行った。

すると、意外な場所から意外な人物が出てきた。

「話は終わったでござるか？」

押入れから錆白兵がでてきたのだ。

どうやら四季崎はもしもの保険にと、あえて嘘をつき、押入れに白兵をスタンバイさせていたようだ。

「かっかっか。俺等や竜王を含め、完了作も鋼刃介も、中々の成功作に仕上がりつつあるな」

＊＊＊＊＊

『そーろそろ良いっかなーっと！』

ウニアルマジロヤミーは前とは別のビルの屋上に上ると、人間には決して見えない波動を町中にばら撒いた。

波動は音速で町に広がり、針によって不眠症になっていた人々全員を解放した。

勿論、抑圧されていた睡眠欲が一気に弾けてしまい、例え路上だろうがロビーだろうが、睡魔に推されて熟睡しきってしまう。

だが、それと同時にセルメダルもこの上ないレベルで増大していく。

『ハッハハァァ！キタキタ来ましたぁぁ！！きもちぃぃぃ！！』

体内に何百何千ものセルメダルが一気に蓄積し、ウニアルマジロヤミーは興奮のあまりにビルから飛び降り、地面に激突した。

だが重量系の側面として頑丈さが備わっているので、この程度ではダメージにもならない。

逆に一般人たちがウニアルマジロヤミーを見て逃げ出すのだが。

しかしそこへ、彼の気配を感じ取ってきた映司と後藤と竜王、刃介と七実がやってくる。

『オーズにブライ！来たなぁ！』

ウニアルマジロヤミーがいきがっていると、そこへアンクも到着する。

「おい映司！こいつは大物だ！絶対逃がすな！」

と叫びながらコアを投げ渡す。

刃介はそれを見ると、ウニアルマジロヤミーがさっきまでいたビルの屋上に眼を向けていた。

「火野、合体ヤミーはお前に任す。俺と竜王はあいつらの相手をする」

「あいつら・・・・って、そうか。わかりました！」

言葉の意味に気付き、了承する映司。

そして三人は肩を並べ。

「「変身！」」

≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＥＮＢＡ≫
≪ＴＡＫＡ・ＴＯＲＡ・ＢＡＴＴＡ≫
≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！ＲＩＯＴＥ！ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！≫
≪ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！ＴＡＴＯＢＡ！ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！≫

映司はオーズ・タトバコンボとなり、メダガブリューを装備。
刃介はブライ・リオテコンボへと変身する。

「なら私は、別のコンボで行くとしよう」

コールカテドラルに植物系とは違うメダルを投入してスキャンした。

「変身！」

≪ＳＡＳＯＲＩ（サソリ）・ＫＡＮＩ（カニ）・ＥＢＩ（エビ）≫
≪ＳＡＫＡＮＩＢＩ（サッカッニッビ）・ＳＡＫＡＮＩＢＩ（サカニビー）！≫

蠍の頭、蟹の腕、海老の脚。
それら三つが黒く染まった甲殻類のサカニビコンボだ！

『フッフッフ・・・・・』
『面白くなってきたな』

そこへビルの屋上から落ちてきたのはヨロイヤミーとカニヤミー。
そうしてオーズＶＳウニアルマジロヤミー、ブライＶＳヨロイヤミー、クエスＶＳカニヤミーという構図となった。

まずはクエスの活躍から見てみよう。

『同じ甲殻類だからって、俺の殻を破れるのか？』

「いくら堅くとも、いずれは隙ができる」

そういうとクエスは両手を小さく広げ、自分とカニヤミーを取り囲むようにあるものを展開した。

『んな、結界だと！？』

これこそがサカニビコンボの固有能力こととシェルフィールド！

黒ずんだ殻の結晶のようなこの空間を展開した以上、どちらかが倒れるまで消えはしない。

「毒針でも喰らうと良い！」

――ビュ！――

紫のサソリアイが光ると、蠍の尻尾を模したサソリニードルから大型の毒針が打ち込まれる。

『へっへ！んなもん効くか！』

だがカニヤミーは背中の甲羅でそれらを防ぐ。

時には正面を向いて自慢のハサミで別の方向に殴り飛ばしたりもする。

だがこの時彼は気付かなかったのだ。

弾かれた毒針がシェルフィールドにぶつかった瞬間、それらは光を反射するように勢い良く飛んでいき、シェルフィールド内部で少し

ずつ数と速度を増やしている事を。

そして、カニヤミー自身が気付くときが来た。

『ハハハハハハぐがッ！！』

――ピキッ――

高笑いしていると、背中の甲羅が大きく罅割れた。

『ま、まさか、同じ所を正確にぃ・・・！』

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

「塵も積れば山となるだ」

クエスは増幅した力を全身に行き渡らせる。

すると、エビレッグについた胸脚型の鉤爪・エビスナッチャーが起動して鋭い刃を伸ばして剥き出しにすると、一気に接近して回し蹴りを喰らわせることでエビスナッチャーによる斬撃に加え、爪先から大量の泡を吹き付けて身動きを封じた。

そこへカニシザースでガッチリと挟んで拘束した上、サソリニードルが巨大化・伸長してまさに蠍の尻尾の如く、その強大な毒針を勢い良く！

――ブスッ！――

『ぐ、が、あああああああああ！！！』

背中の甲羅のヒビめがけて襲い掛かったサソリニードルの一撃によ

り、カニヤミーは猛毒を受けて爆発四散した。

「差し詰め、シェルドポイズン、とでも銘打つかな？」

静かに技名を思いつきつつ、クエスは静かに息を吸って吐いた。

ブライはというと、

「まず最初にこれだぜ！」

≪ＧＯＫＫＵＮ！≫

メダグラムにセルメダルを飲み込ませる。

≪ＲＩＯＴＥ！≫

♪～～♪～～～

コンボメロディが鳴ると、ブライは素早くヨロイヤミーの懐へ入り込み、

「あらよっ！」

『のぁぁあああああ！！』

思い切りメダグラムでの斬り上げをやってヨロイヤミーを上方へ吹っ飛ばす。

ブライはすぐさまメダグラムを地面に突き刺すと、

≪ＲＹＵ・ＴＳＵＢＡ・ＴＥＮＢＡ≫

リュウバテンにメダルチェンジしていた。
そこからヤイバスピナーに収まっているセルをコアと入れ替える。
賊刀『鎧』の性質を備え持ったヤミーなら、工夫次第で一発勝利が出来る方法をブライは知っている。

≪ＢＡＫＵ・ＭＡＭＭＯＴＨ・ＩＮＯＳＨＩＳＨＩ！ＧＩＮ・ＧＩＮ！≫
≪ＧＩＧＡ　ＳＣＡＮ！≫

ギガスキャンを久々に発動させると、ヤイバスピナーは灰色の波動を纏う。
そして、昂りに昂ったところで一気に！

「柳緑花紅！！」

――ウドン！！――

膨大なエネルギーと融合した鎧通しの拳。
それが落下してくるヨロイヤミーの体へ打ち込まれた瞬間、

――ドガァァアァァァン！！――

内部から崩壊し、数十枚のセルを置き土産に爆散した。

そしてオーズは、

「アンク！ウナギのメダルあったっけ？」
「ああ。――が、これで何とかなるのか？」

≪ＧＯＫＫＵＮ！≫

メダガブリューにセルを喰い飲ませた直後にウナギ・コアを受け取った。

≪ＴＡＴＯＢＡ！≫

♪～～♪～～～

軽快なコンボメロディが流れ出る。
それと同時にメダルも換装して読み込んだ。

≪ＴＡＫＡ・ＵＮＡＧＩ・ＢＡＴＴＡ≫

タカウバへと変化すると、セルによって威力が高まったメダガブリューに電気エネルギーをプラスする。
そしてバッタレッグで跳躍し、自らが振り下ろす力と自由落下の力さえ追加した。

「セイヤァァァア！！」
『うんあああああああああ！！！！』

ウニアルマジロヤミーはもろに”グランド・オブ・レイジ”の直撃を喰らい、爆発して幾千ものセルメダルに還元された。

「思ったとおり大漁だな」

アンクもこの結果に上々な様子だ。
そこへ一台のライドベンダーがエンジン音を立ててやってきた。

「おやおや、終わってしまったのですか？」

「悪いな金女。出番はとっくに無いぜ」
「別に構いまんよ（早くついたところで、チェリオにはなれないわけですし）」

刃介と金女の会話の傍らで、

「映司、よくやったな」

さらには珍しく褒め言葉まで口にした。
だがそこへ、

――ウイィィーーーン！！――

ブレストキャノンを頭、キャタピラレッグを足、ドリルアームとクレーンアームを針の尻尾、ショベルアームを左の鋏、カッターウイングを右の鋏として組み立てられた銀色の蠍型ロボットが現れ、セルメダルを掻っ攫ってきたのだ。

「ＣＬＡＷｓ（クロウズ）・サソリ！？」

金女は声を少し荒げた。
それはチェリオと対を成す、誕生の名を冠するセルの戦士が使う取って置きの手段なのだから。
そしてそれは尻尾部分でセルを吸い上げ、現れた三体の怪人へと与えた。

それらは与えられた大量のセルメダルを取り込んで歓喜する。

『力が沸くゥ！！』
『セルメダルもこれだけあると違うわねぇ』
『フフフ』
「お前ら・・・！」

ガメル、メズール、カザリ。

「まずはグリードの強化、成功です」

そこへ真木が現れた。
しかし、それだけではなかった、当然の事だ。

「らしいな」

ＣＬＡＷ'ｓ・サソリが出てきたということは、そういうことなのだから。

「伊達さん？」

伊達明は、グリード陣営に立っていた。

「突然で悪いけど俺、こっちに転職したから」

余りに衝撃的なことを唐突かつ軽めに告げる伊達。

「何言ってるんですか！？」

後藤も流石に喚き散らすように大声をだしてしまう。

「まぁそういうことだから宜しく」

伊達はバースドライバーをつけ、セルメダルを投入。

「変身」

――パカッ――

瞬く間に装甲を身に纏ってバースへと変身する。
そしてセルの弾丸が充填されたバースバスターの銃口を映司らに向けて構えた。

しかし、状況の悪化はそれだけではすまなかった。

『俺等も混ぜてくれないか』

銀粉を撒き散らしながら空より現れ出でる銀色のグリード。

「デシレ・・・・・・！」

ブライが睨んでいると、デシレは嘲笑うように言った。

『折角だ。戦いの前に、真っ赤な花で戦場を彩るか』

次の瞬間、

――斬ッ、斬ッ！――
――ブシューーーッ！！――

一言で述べよう。
金女の両肩から、命の液体である血が、噴水のように吹き出ていた。

『逆転夢斬』

それをやってのけたのは、爆縮地という技を併用し、薄刀『針』の柄と鞘を刀身に見立てた二刀流で金女の肢体を切り裂いたゼントウ。
その早業に、グリード側も驚いている。

「――――――――」

刃介は全身が血塗れて、意識を失い地面に倒れ付した実の妹を見た瞬間、完全に無表情になっていた。
しかし、両目だけは何かに沈んでいくかのように重い妖気を漂わせた。

そして、

『■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ッッ!!!!!』

刃介は全てをかなぐり捨ててグリードとなった。
そこには理性も誇りも想念さえ、何もかも弾け飛ばしている。
ただ一人の肉親を血染めにされた己のバカさ加減と敵への深き憎悪が彼を心身を変えていく。

その凶暴な口を大きく開け、天地鳴動の叫びをもって吼え続ける一本の刀には――――もはや人の心さえ見えぬほど、暗くて黒い闇へと堕ちていた。

完全形変体刀・我刀（ガトウ）『鋼（ハガネ）』。

暗闇色の感情と復讐心という欲望による、最強最悪の暴走！

＊＊＊＊＊

夢見町の端、丁度入り口とも言える場所に彼はいた。

「鋼たちに会うのって久々だよなぁ」

そこにいたのは軽装の高校生くらいの少年だった。

「柳たちにも内緒な上、アポなしで遊びに来ちまったけど、まあいっか」

などと能天気ぶっこいている者の名前はもうおわかり頂けるだろう。

戦国の世から時空を越え、全ての因縁を断ち切った異端の炎術士。

その名は、元火影忍軍七代目頭首・花菱烈火！

睡眠と医療と裏切り（後書き）

次回、仮面ライダーブライ！

超絶暴走と紅蓮のチェリオとＲｅｖｅｒｓｅ／Ｒｅ：ｂｉｒｔｈ

サカニビコンボ
キック力：２０トン　パンチ力：１５トン　ジャンプ力：１５０ｍ
　走力：１００ｍ４秒
身長：２１０ｃｍ　体重：９２ｋｇ　固有能力：シェルフィールド
　カラー：黒
必殺技：シェルドポイズン

サソリヘッド
複眼の色は白。蠍の尻尾を模した『サソリニードル』から無数の猛毒針を射出したり、エネルギーを伝達することで巨大化・伸長させて縦横無尽な使い方が出来る。

カニアーム
両前腕部にハサミ型武器『カニシザース』が装備されていて、それら二つを合体させることで甲羅型防具『カニシールド』としての使用も可能。

エビレッグ
脚部分に海老の胸脚を模した『エビスナッチャー』という鉤爪が装

備され、回し蹴りなどの威力が上がり、爪先からは多量極まる泡を吹き出す事も可能である。

超絶暴走と紅蓮のチェリオとＲｅｖｅｒｓｅ／Ｒｅ：ｂｉｒｔｈ（前書き）

仮面ライダーブライ！
前回の三つの出来事は！

一つ！復活したメズールとガメルが真木の元に集結！

二つ！ウニアルマジロヤミーが、睡眠欲を利用し大量のセルメダルを獲得！その一方で、刃介と七実は四季崎から重大な秘密を告げられる！

そして三つ！伊達明は一億の報酬金の為に真木と組み、そして金女がゼントウによって重症を負わされたことにより、刃介は我刀『鋼』として暴走した！

『■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ッッ！！！！！』

そこには一本の刀があった。
神々しくも禍々しい金色の波動（オーラ）をあたり一面に撒き散らし、憎悪と怨嗟に吼える妖刀が。
普段は赤黒い眼光さえ、その負の情念に呼応するかのように、紫色の邪悪な光を宿している。

だが・・・そこへ・・・

「――きゃっ！」

七実の体から十五枚のコアメダル・・・・・・そう、竜王が予備につくった十五枚がガトウに引き寄せられ、七実の体内から飛び出てしまったのだ。
刀系を十二枚、龍神系を四枚、変体刀系を二枚、そして今取り込んだ十五枚――合計で三十三枚のコアメダルがガトウの中にある。

そこにいた者達の反応が様々である。

まずグリード側は後悔していた。
コレほどまでに運悪く、目の前の妖刀に出くわしてしまったこと――いや、それどころかこの妖刀と出遭ってしまったこと自体に後悔していたと言って良いかもしれない。

映司（オーズ）と後藤とアンクは、恐怖していた。

今まで仲間として接してきた男がコレほどまでに豹変したことに。
さらに、自分たちには想像する事さえ赦されないようなモノを秘め続けていたことに。
そして、3人は知った。――目の前の妖刀が秘める家族への愛情を。

七実に竜王（クエス）は、一種の感激を覚えていた。
彼女等は元人間ではなく、あくまで人形（ニセモノ）に過ぎないが、本人の記憶においては、自分等は他者より優れすぎ、死ぬ時まで敗北を知らず、七実は両親からさえも恐れられては疎んじられ、竜王はその強さ故に機密漏洩防止の為に”夢幻惑い”で十二頭領以外の同胞達から自分に関する記憶を消したこともあった。
強い所為で孤独に生きてきた彼女等でさえ、目の前にいる一本の刀に崇拝にも近い感情を向けていた。
もしかして、自分たちをいとも容易く捻じ伏せるやもしれない、彼女達の愛する男へ。

『■■■

もまた高まっているのだから。

デシレは狂喜乱舞したい心境だった。
己の手でこれほどの作品を――しかも未完成の状態で既にこれだけの力を発揮するモノを作りつつあることにだ。心の隅には他の者が抱いているような恐怖や好奇などの念があったかもしれないが、それさえも押し退けてしまう程にデシレは心地好さを感じていた。
此の世の万物を生み出すことも消し去る事も出来得るであろう、欲望の神の雛形の姿を今、こうして見て拝めているのだから。

そして、

『殺す！！殺す！！殺す！！殺す！！殺す！！殺す！！殺す！！殺す！！』

黒い殺意が全てを斬り殺すかのように飛び出した。
そして彼の狙いは、血染めにされて地に伏している金女に視線が向けられた直後、実行犯と主犯であるデシレとゼントウに向く――――と誰もが思っただろう。

『コロス！！コロス！！コロス！！コロス！！コロス！！コロス！！』

だが現実というものは堅くて脆いモノだ。
どれだけ当たり前と思った想像さえ、容易くぶち殺してくる。
長々と語る必要はもう無い――ハッキリ言おう。

我刀「鋼」は、映司達や七実ら以外の全てに襲い掛かった。

『■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ッッ！！！！！』

表記不可の雄叫びで世界そのものさえ震え上がらせ、ガトウは動き出す。
大切な者を傷つけられた怒りと憎しみを、神々しい金色のオーラに混ざる禍々しい紫のオーラに篭めて。

まず最初にグリード側。

――瞬ッ！――

高速さえ越えたスピードで彼等の前に立ち、

――ザシュ！ザギュ！――

『うッ、きゃあああああああ！！！』
『メズール～～！！』

ガトウは両手の刃でメズールの体に幾数もの深い傷をつけ、さらにもう一度攻撃する事で百枚近くのセルメダルと共にタコが描かれた水色のコアを体外に出してしまう。
ガメルも一番親しい存在であるメズールの大ダメージに叫ばずにはいられない。

お次の標的は、カザリ。

――ブァン！ブァン！――

『なっ、なにぃぃ！？』

ガトウが手を思い切り振るうと、両手合わせて十の斬撃刃がカザリの体に襲い掛かる。

『ぐぁぁあああああ！！』

当然、カザリも百枚近くのセルを落とす中、ライオンのコアも一緒に弾け飛んでしまった。

勿論のこと、それを見逃すアンクではない。

（チャンス・・・・・・！！）

素早く本体である『右腕』を飛ばし、弾け飛んだライオンとタコのメダルを握って掴んだ。

そうして素早く信吾の体に戻る。

（こいつは良い・・・！セルメダルの代金だ・・・！）

などと、かなり身勝手な思考があったが、格段気にする事でもないのでほっとこう。

アンクの心境はコアを二枚手に入れたことで、先ほどまで感じていた恐怖と好奇は薄れた。

ガトウはそのままロクに唸りもせず、すぐさま主犯と実行犯に視線を釘付けにし、凶暴で残忍な口を獣のように大きく開き、両手と両

脚に力を入れる。一撃でも多く入れるため、一撃一撃に凶悪な威力を持たせるために。

『ヴゥゥオオオオオオ！！！』

そうして漸く表記可能な唸り声をあげ、ガトウという怪物は本能のままに動き出す。
まずはゼントウからだ。

『――速遅剣』

薄刀を振るった瞬間、刃渡りが自由自在に変化を遂げる技。
それは見事にガトウの体に入ったが、

『っ――逆転夢斬！』

すぐさま刃を引き、技を変更する。
悟ってしまったのだ――刃がガトウに触れた瞬間、速遅剣如きではガトウを破ることが出来ない。
そう悟らされ、柄と鞘を用いた簡易な二刀流による技を使った、しかしながらコレも・・・・・。

――ガシっ！――

ガトウはゼントウに超高速で接近し、彼の両腕を掴んで技を強引に封じてきた。
虚刀流を除き、大抵の剣士は刀という武器が無ければ戦力が大幅に削られる。

そうして、ガトウは口を大きく開いて悪魔のような凶貌を除かせた直後、

――ビカッ！！――

赤黒から紫に染まっていた両の眼光が、光を帯びた真紅に変色し、怪光線を出してきたのだ。

『ぐぉぉあああああああ！！』

光線の威力は当然ながら甚大で、ゼントウも大量のセルメダルを削ぎ落とされた。でも『針』とコアを護れただけでも上出来と言えるかも知れない。

そして最後は――――

『ヴゥゥゥウウゥゥゥゥゥ・・・・・・・！！』

『やっぱし、俺かよ』

残る憎悪は全てデシレに向けられている。

しかし、こんな状況にも歓喜するデシレだ――慌てた様子など、微塵もありはしない。

『痛手負うのは御免被るし、ちょいと荒療治だな』

デシレは相違って体内から何か奇妙なメダルを取り出し、それをガトウに投げつけた。

（なんだあのメダル・・・！？）

オーズの眼から見ても、そのメダルの正体は見当もつかなかった。
なにせ、虹色のメダルの存在など、この場の誰もが初見なんだから。

『ッッ』

投げつけられたメダルをそのまま引き寄せて取り込んだガトウ。
だがしかし・・・・・・。

『ヴッ・・・！ヴァァァァ・・・・・・』

体中から紫電や七色の波動がバチバチと彼に迸り、先ほどまでの勢いは無くなっていた。
寧ろ、何かを必死に抑え付けようと大人しくなっている。
その様子を見たデシレは、ゼントウとグリード達にこう叫ぶ。

『おーい、お前等ぁ！そろそろ引き上げ時じゃねぇのかぁ！？』

それを聞いた瞬間、真木が首肯した。

「皆さん、今のうちに逃げましょう。何時またアレが暴走するか解りません」
「みたいだな」

真木とバースは謎のメダルの影響下にあるガトウを見つつ、三人のグリードを連れて逃げ帰ってきた。
デシレも負傷したゼントウを連れ、翅を拡げて住処へ戻っていった。

『ぐッ・・・！うっ・・・！あ、アぁ・・・・・・』

ガトウは呻きながら何かに耐え忍び、最後には・・・・・・

『■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ッッ！！！！！』

再び狂い咲いた音を、大きく荒れ狂って裂けた大きな口から出し、

――ビューーッ！！――

背中から巨大な翅を二枚生やして凄まじいオーラを辺り一面に放ったのだ。
虫の翅のようでいて、悪魔の翼にも見える、その巨大な二枚。

このままどうなるのかと思い、誰もが固唾を飲み込んだが、ガトウはあらかた叫び終えたら、急に両腕をダラリとぶら下げて大人しくなった。一目で全身から力が抜けたことがわかる状態となる。

「・・・・・・・・・・・・・」

そして、ガトウの状態は完全におさまり、漸く鋼刃介の姿に戻ったのだ。
それに対しては、一番早く動いたのが――

「刃介さん！大丈夫ですか！？」

刃介を心配する七実と

「火野、後藤！救急車を呼んでくれ！」

金女の為、オーズと後藤に救急車を呼ぶよう指示するクエス。

「「・・・・・・・・・・」」

「おい、何やってんだお前等？」

呆然と立ち尽くす二人に、アンクが呼びかける。

それに二人はハっと気がつく。

「わ、わかった！直ぐに１１９番に！」

後藤は携帯電話を使って早速救急車を呼んだ。

「金女さん！しっかりして下さい！」

オーズは変身を解き、ポケットに突っ込んでいた明日のパンツで金女の傷口に押し当て、止血しようとする。

残った者が様々な意味で動き回る中でただ一人、観ることに徹していた男がいた。

（今の虹色のメダル・・・・・一体どんな力が？）

アンクだけは、刃介の体内に放り込まれた謎のメダルに興味を集束させていた。

＊＊＊＊＊

金女はすぐさま救急病院へ搬送された。
騒ぎが大きくならないよう、トライブ財閥や鴻上ファウンデーションと懇意にしている病院へ。
付き添い人として、竜王が傍にいることとなった。

そして、クスクシエでは、比奈が伊達の裏切りに驚いていた。

「――伊達さんが裏切るなんて・・・そんな・・・」
「驚くことじゃない。奴は最初から一億のために動いていたんだ」

アンクがズバっと言い切る。

「だが、俺達をあんな風に裏切る人じゃない！」
「どこがだ？俺等の前でハッキリ言ってたろ？」

アンクは奪ったライオンとタコを見つつ、毒を吐く。

「だが、不幸中の幸いだな。鋼が暴れ回ってくれたお陰で、二枚のコアを手に入れられた」
「そいつはどういたしまして」

刃介は皮肉気な口調で返事する。

「でも、あの虹色のメダルは一体なんなのでしょうか？」
「詳細は俺にもわからんが、体内に入ってきた途端、全身に半端じゃないエネルギーが満ちてきて、抑えねば危うく完全暴走するところだった」

それはつまり、ただ暴れ回るだけでは済まない事態になっていたかもしれない、という意味だ。
七実の問いに、刃介本人が苦々しく語る。
「にしても、伊達さんが裏切る理由って、やっぱり一億円ですかね・・・？」
「一億円・・・・・・そんなお金、一体なんに？」
比奈はまだ何も知らない。
「伊達さんはずっと、医者がいなかったり、医療の遅れた地域で活動していた」
「だから、医療関係の学校をつくりたいんじゃないかって」
「多分、それが伊達さんの夢だ。――だが、その為のお金を、汚い手段を稼ぐとは思えない」
後藤と映司が仮説を口にし、後藤は伊達の心境を浅はかにも察しようとする。
「フッ・・・夢ってのはお前ら人間が欲望を都合よく言い換えたものだ。綺麗も汚いもあるか」
「同感。欲望も夢も、方向性はどうあれ至極純粋だからな」
アンクと刃介は否定的な態度をとる。
「だがもし、伊達さんがそのことで俺達を裏切ったなら、体のことで焦っているのかもしれない」
しかし後藤は怒るのではなく、伊達なりの理由を推測した。
するとそこへ、クスクシエのドアが開いた。

「チィーッス！鋼のヤツ此処にいるって聞いてきたんだけどよ！」
入ってきたのは高校生くらいの少年。
「烈火か。随分とまあクソ忙しい時に来てくれたもんだなぁ」
「間が悪かったですね」
「ん？」
何も知らずにやってきた元火影忍者に、七実は彼のことを映司らに紹介し、現状を須らく伝えた。
「え、金女のヤツが、重症だと！？」
「今んとこ、竜王が付き添ってくれている」
「確かに、トンデモない時に来ちまったな・・・・・・」
仲間に裏切られ、仲間を斬り付けられ、最悪すぎるタイミングで遊びに来てしまったことを果てしなく後悔する花菱烈火。
「兎にも角にも、今は連中の様子を見てから、今後の方針を考える。みんなもソレでいいな？」
刃介の言葉に、否定するものはいなかった。
＊＊＊＊＊

武家屋敷。
そこには住人の四季崎と白兵しかいないのだが、今日はまたもや珍しい脚が五人もやってきていた。

「団体さんのお越しか」
「お邪魔させてもらいますよ、デシレ君」
「今は四季崎でいい。白兵（こいつ）のことも錆白兵と呼んでやってくれ」

茶の間に来ているのは真木を初めとする五人のグリード。
そして、伊達明も一緒だった。

「んで、今日は雁首揃えて何の為に来たんだ？」
「簡単に述べれば、勢力統一の為の同盟を結びに」

真木は相も変わらず人形を観て喋り続ける。

「鋼刃介くんの暴走によって、カザリ君とメズール君のコアが一枚ずつ奪われてしまったことですし、我々は本格的にブライに対する警戒を強めなければなりません。それに――」

真木は横や後ろに控えたグリード達や伊達へ一度振り返ると、

「それに、貴方が持っていた虹色のメダルについても是非お聞かせ願いたいのです」
「ああ、アレか。あいつはな、簡単に言えばコアの力を暴走させる特殊な代物さ」

――ピクッ――

コアの暴走、という点に真木は眉毛を動かした。

「まあ、暴走したグリードに世界を喰らい尽くして貰いたいお前にとっては、美味しいモンだろうな」
「それってどういう意味？四季崎記紀」
メズールはここで漸く口を開いた。
「ドクターは僕らの誰かを暴走させたいのさ。コア全部の器にして、そうして世界を終わらせる」
それに対してはカザリが簡潔に説明した。
「本気？ドクターの坊や？」
「何れお話しする時が来るまで」
真木はそうしてはぐらかす。
そこへ四季崎が切り込むように言った。
「期待させといて悪いがよ、あのメダルで暴走させられるのは、俺が作ったコアを軸にしてる奴だけだぜ。普通のグリードが使っても、トランプのジョーカーみてぇに、普通のコア一枚分になるだけだ」
そういった瞬間、真木たちの動きが少しだけ、完全に止まった。
一番最初にそれへツッコんだのは。
「おい、待て！あんたが作っただと！？」
伊達明だった。
「その通り。虹色のメダルは勿論、俺や白兵、そしてリュウギョク

などと言った連中のコアを創り出したのは、この俺なんだよ」

四季崎は肯定する。

しかし、ブライやキョトウについては触れないでいる。

「言っておくでござるが、この話を聞いたからと言って都合の良い話は吹っかけないで欲しいでござる。お主らの目的は集りではなく、同盟なのでござろう？」

白兵はそうして牽制するが、連中の目はギラついている。

なにしろ、コアメダルの製法を知る者がこれで二人いることになるのだから。

「だけどさ、態々目の前にコアを創れる奴がいるのに、はいそうですかと言って引き下がるわけには行かないね」

「意地でもコアを創ってもらうわよ・・・・・・！」

（うぅぅ・・・メズールとカザリ、怖い・・・）

目くじらを立てるカザリとメズールに内心怯えるガメル。

四季崎は立ち上がると、座りもせずに、床にボールを突いては投げ突いては投げを繰り返しているロストに近づきながらこういう。

「おいおい、大の大人が揃ってなんだよ？見っとも無いとは思わないのか？なぁ小僧？」

ポン、とロストの頭に手を乗せると、

「邪魔だよ！！」

左肩から片翼を現出させ、吹っ飛ばそうとするが、

「あめぇぞ小僧」

逆に四季崎が十枚の翅で吹っ飛ばした。

「うわあああっ！！」

ロストは障子を破って庭、放り出されてしまった。

「「「ロスト（アンク）ッ！！」」」

三人のグリードが驚きながら吹っ飛ばされたロストを観ていると、

「もう一度お主らに聞くでござる」

「集りに来たのか、同盟を組みに来たのかを」

真木は数秒間を沈黙と思考に費やし、

「申し訳ありません。こちらの失礼をお詫びいたします。改めまして「ちょっと、待てよ」――なんでしょう？」

――バッ――

四季崎が真木の人形を奪った。

「――――――ッッ！！？」

それに対して真木は今までの冷静さ全てを金繰り捨てるような動きで必死に人形を取り戻そうとする。

「お前な、話すときは目を見て言え。俺の目をきちんと見て言えたら返してやる」

そう言われた真木はパニック状態のままだが、人形の為に必死な表情で四季崎の目を見て焦り気味の口調で、叫ぶように言った。

「お、お、お願いします！いま、今までの失礼をおわ、お詫びしますので・・・・・どぉ、同盟を組んで下さい！そしてソレを返してください！！」

「なんか歯痒いが、まあ良いか」

四季崎はギリギリ合格点を出し、押し付けるように人形を返した。

こうして、四季崎と真木達による同盟が締結された。

もっとも、主導権は四季崎が握る形となってしまったが――これで、グリード達の勢力はさらに増して行くことにも成った。

「・・・・・・・・・」

伊達は静かに茶の間とは別の部屋に行こうとしたが、

「ッッ――――――」

また手酷い頭痛に襲われ、足元がふらついた。

視界の方も朦朧とし始めている。

（予想より早い・・・・・・）

＊＊＊＊＊

夕方の救急病院の廊下を歩く音。
スタスタという軽やかなものとコツコツというものの二種類。

「悪いわね、急に呼び出して」
「いや気にすんなよ。金女んトコに見舞いに行くんだろ？」

そこにいたのは私服姿の烈火と、鉄製のケースを持ったルナイト。
ルナイトに呼びつけられた烈火は、こうして金女が搬送された病院の廊下を歩いていた。
足音を揃えないまま、奥の奥へ行くと、そこには集中治療室のドアが。

「遅いぞ」

ドアの前で待っていた女性が軽く叱責する。

「りゅ・・・竜王!?なんでお前!?」
「病院でデカい声を出すな、この愚か者」

だけども、驚くのも無理はない。
烈火ら火影メンバーの記憶では、竜王は死んだままなのだから。
その情報が急遽更新されれば、そりゃ騒ぐ。

「金女ちゃんの容態はどうだった？」
「医者によると、出血が多くて危険らしい。幸い、必要な輸血は確保出来てるし、傷口もかなり綺麗だから直ぐに止血と縫合に入った

みたいだ。ついさっき、治療を終えた直後に意識が戻ったよ」
「ふー、良かったぜぇ」

烈火が安堵していると、

「それは上々だわ。・・・それで、喋れるの？」
「喋るだけなら問題は一切ない」

竜王からそれを聞くと、ルナイトは烈火にこういった。

「花菱くん。金女ちゃんと少しお話してきて頂戴」
「え・・・？」
「そして、話をした上で、これをどうするか決めて頂戴」

ルナイトがケースを開き、そこから取り出したのは、炎が刻まれた紅蓮のコアメダルと、所々にメタリックレッドのラインが付け足されたチェリオドライバー。
この二つの物を持たされ、強制的に部屋に放り込まれてしまった烈火。

でも、ベッドの上で包帯だらけの姿で、仰々しい設備や装置のコードがつながっている金女の姿を見た瞬間、困惑が消え去り、純粋に『自分に何ができる？』と思った。
烈火は金女に近寄り、「聞こえるか？」と聞いてみた。

「・・・・・はい」

薄らとしていたが、要は口を開いて声を出した。

「わかるか？俺だ、烈火だ」

「ああ・・・・・やっぱり、来たんですね」
「話してこいって言われたんだけどさ、よくわかんなくてよ・・・・・」
「深く、考えることなんて、ありません」
金女は薄らと微笑み。
「貴方がチェリオになりたいか――なってどうするかを決めるだけで良いのです」
「決めるだけで・・・・・・」
「貴方なら、決めたことは実行するだけでしょうし、アドバイスとしては、充分でしょう？」
金女は微笑んだ表情を悪戯めいた笑顔にする。
「本当に俺で良いのか？俺はもう、普通の人間なのに」
「私だって普・・・・・いえ、普通どころか人殺しです。それに引き換え、貴方はただ炎術士でなくなっただけで、まだ戦う力全てを失ったわけじゃない。まだ、そんなに体力持て余してるほど、元気じゃないですか」
金女はそういうと、真顔になってこう告げる。
「どんな選択肢を採るかは、君に全て任せます。でも、掴んだ選択に後悔するような失態だけは犯さないで下さい。――故に、自分の全てを、信じなさい」
「自分を・・・信じる・・・」
「不忍（しのばず）――私は暫く、忍者から患者にジョブチェンジするような身の上です。だから貴方に託します。同じ忍びとして、決意ある者として」

＊＊＊＊＊

その夜、鴻上ファウンデーション会長室。

「成る程。伊達君のために一億の前借を・・・・・・素晴らしい」

ケーキのクリームを泡立てながら、鴻上は頭を下げている後藤と話していた。

「一億は無理でも、お借りできる最大限をお願いできれば！」

「前借の限度額は君の年俸と・・・・・・今後何年働けるか・・・財団への貢献諸々と、欲望の大きさを考慮して算出される――里中くん」

指示され、ソファーに座りながら里中は電卓を打ち終え。

「７万８千円です」

「ッ・・・・・・」

一億の前には塵芥に等しい値だ。

「大きなマイナス要因は、君の欲望だ。かつての詰まらないプライドはなくなったが、欲望も小さくなったようだ。伊達くんのサポートという位置に、安住し過ぎたかな？」

と語る鴻上はさらに迫るように、

「伊達君がいなくなったらどうする？以前あんなにバースに成りたがっていたのに、すっかり忘れたようだ」

「いえ・・・今も何時バースになってもいいようにと！」

体は日頃から鍛えに鍛えている。

「君の欲望は、いつも頭（ここ）に留まっている。――体（ここ）で感じたまえ！！」

その言葉に、後藤は何も言い返せなかった。

＊＊＊＊＊

洋館に戻った真木達は、それぞれ就寝についていたが、伊達と真木はまだだった。

真木は人形に寝巻きを着せ、ベッドで横にさせている。

伊達はそんな真木に話しかけた。

「こうして見る限り、まだ人間だよなぁドクター？」

「さぁどうですか？」

曖昧に答える真木。

伊達はその後ろに飾られている『来るべき終末』が描かれた絵画を観る。

真木のシンボルカラーとなった紫の布が周囲にあることで、よりミステリアスな雰囲気になっている。

「なあドクター。・・・・・・世界を終わらせるって、本気なの？」

「終わらせます。人も世界も、終わってこそ完成する」

「そうかなぁ？ずーっと続くから良いんじゃないの？自分が死んだ後も何か遺る。ドクターだってその人形のこし――」

人形に触れようとした瞬間に支度が終わったのか、真木は人形を持って避ける。

「残れば醜い残骸です。美しいうちに終わらせなければ」

「・・・・・グリードになって、ね？――止めるのは無理か」

「私は既に一度、姉の人生を終わらせてます。グリードになってるとしたらあの時に・・・・・・」

そして、上の階に上がるべく、階段に足を伸ばす。

「君とは解り合えるとは思ってません。あの研究所にいた時からずっと」

「・・・・・なあドクター」

伊達はそんな真木を呼び止める。

「俺は結構好きだったよ。・・・・・・あんたも、人形も」

そう言って伊達が行こうとすると、今度は真木がこう言う。

「伊達君。明日再びオーズとブライに仕掛けます、私と君と四季崎の３人だけで。向こうも油断するでしょう」

伊達は小さく「OK」と言って、そのまま互いに部屋に戻っていった。

＊＊＊＊＊

鋼家の居間。
そこで営業と家事をしながら待機していた刃介と七実。

「・・・・・・・・・お」
「何かありました？」

刃介が何かを感じ取ったようだ。
その証拠にブラッドレッドの瞳が、見事な金色になっている。

「四季崎の野郎か。・・・コアが呼び合ってやがる・・・」
「来い、というわけですか」
「行くか。多分、火野達も来るだろうしな」

＊＊＊＊＊

町外れにポツンとある廃工場。

今となっては出入りする者も疎らな場所だ。

――ブゥゥウウウゥゥン！！――

「陰気臭い場所だな」

「だとしても、行かねば始まりません」

シェードフォーゼから降りて屋内に入ると、中には何も無いくらいにガランガランで、残された僅かな機材やガラクタや水溜りなどくらいのものだ。

だが今日は違う。まず目に付いたのは明るいライトで薄暗いこの場所を照らす車と、そのライトの光で照らされている映司とアンク。

「よう、火野」

「鋼さん！」

お互いの存在に気付く二組。

一方で車からは三人の人物が出てくる。

当然だが、真木と伊達と四季崎だ。

「君たちのコア――特に映司（キミ）の中にある紫のコアを貰います」

「俺だってあげたいところですけど・・・・・・無理ですよ」

「たかが人間が、これ以上グリード化されて堪るか」

真木の発言を全面的に否定する映司とアンク。

「そうですか。では・・・」

真木は一瞬、伊達と四季崎に視線を送り、二人はそれに気付いて動

く。

「これも一億の為でね」
『まあ、悪く思うな』
「伊達さん・・・・・・」
「四季崎・・・！」

ベルトを装着した伊達、変貌を遂げたデシレを見て、映司と刃介はなんともいえない感情に駆られる。
そこへ、一台のライドベンダーを駆るものが現れた。

「後藤さん！」
「・・・来なくていいのに・・・」

映司とは対照的な態度をとる伊達。
後藤はヘルメットをとり、車体から降りた。

「伊達さん。一億つくろうと思いましたけど、無理でした」
「えっ？」
「でもこんな方法で、夢を叶えるつもりなんですか？」

伊達な素っ頓狂な声も無視して後藤は問いかける。

「夢・・・？」
「医療関係の、学校をつくる夢です」

すると、伊達からは予想外の答えが乾いた笑いと一緒になって返ってきた。

「どっから聞いてきたそんな話？――違う。蛇の道は蛇・・・・・・

医者にも裏の世界があってさ、金さえ出せば最高の名医がいたりする。ただちぃとバカ高い」

「要するに、ブラジャクみたいな闇医者に、治療を頼み込む気だったのか」

「それも、最初から・・・ですか」

刃介と七実は答えを纏めた。

「まあ褒められた手段じゃないし、自分の手で一億稼ぐ賭けに出た。――わりぃな後藤ちゃん。俺って最初から欲望塗れなんだわ。”まだ死ぬ訳にはいかねぇ”ってさ」

伊達は今再び、後藤らを見てハッキリと

「その為ならお前達とも戦える」

敵対宣言を行った。

「薄々予想はしてたがよ・・・・・・」

「見ろよ。俺達の言った通りだろうが」

刃介は溜息混じりに、アンクは皮肉げに言った。

「だったら・・・・・・だったら俺が伊達さんを止めます！」

後藤はバースバスターを取り出し、構えた。

「やっと解りました。伊達さんを死なせないっていうのは、ただ伊達さんの命を心配するんじゃない。俺が・・・俺の知ってる伊達さんのバースを引き継ぐ！それが伊達さんを死なせないってことです。

その為なら、そのためなら俺も戦えます！」
その宣言を聞いた伊達は意を決したように、
「・・・・・上等」
セルメダルを手に持つ。
「変身」
伊達はバースに変身する。
「ちょ、ちょっと！それじゃ勝負になりませんよ！」
「バスターは出力アップしてきた！」
「でも！」
映司の介入を後藤は拒み、
「火野！いいから見てろ」
伊達（バース）も拒んだ。
互いにバースバスターを構えあう二人。
無言の時が流れ、僅かな挙動がいつ戦いの引き金となるかわからない状況。
刃介たちが見守る中で――――
バースは銃口を真木とデシレに向けた。

「すまねぇなドクター。こんな仕事は俺にしかできねぇ。あんたをグリードにするなってよ、会長が」

バースは最初から鴻上の指示で動き、裏切ったかのようにしていたのだ。
もっとも、戦う動機こそは嘘ではないようだが。

「そうですか。その為に・・・・・・」

真木もデシレも大して驚く様子は無い。
だが、数秒たってもバースは発砲する気配が無い。

「撃てませんか？」
「・・・・・・・・」
「伊達君。私にあそこまで近づいてきたのは、姉以外に貴方が初めてでしたよ。そうでなければ本当に協力してもらいたかったのですが」

真木は懐からペンを取り出す。
だがこの状況で普通のペンを持ち出すわけが無い。

「バースには自爆装置がついています」
『こいつはその遠隔装置だ』

それを聞いた瞬間、

「伊達さん！！」
「来るな！！」

映司が慌て、バースがそれを制する。

「マニュアルに書いてあったはずですが？」
「マニュアルは苦手なんだ・・・・・・」
「では実際に体感してみてください。――良き終わりを」

真木はそういってスイッチを押した。
伊達は思わず眼を瞑ったが――

何も起こらなかった。
しいて言うなら胸のリセプタクルオーブが少し、赤く点滅したというだけだろう。
真木は妙に思ってもう一度押すが、

「残念だったな！俺はマニュアルが大好きなんだ！あんたが研究所を出たときに、とっくに自爆装置は解除しておいた！」
「おお・・・後藤ちゃんナイス！！」

サムズアップを決めるバース。
そして、

「・・・・・・わりぃな、ドクター」

――ヴィンヴィンヴィン！！――

バースバスターから弾丸が発射される。
だがそれは防がれたしまった。

でもデシレにではなく、別の三体によってだ。
バースは高速で動くそれらによって吹っ飛ばされる。

「申し訳ありません。私は用心深いんです」

そこには、ガメル・メズール・カザリがいた。

『お前の行動は目付きで察せたよ』

『裏切り者は死ぬのね』

デシレとメズールがそういったのを皮切りに、突風・水流・重力波・光線が一極的かつ同時にバースへ襲い掛かった。

「うわぁぁあああああああああ！！！！！」

――ドガァァアアアアアァァァン！！！！！――

バースへの攻撃により、近くの物資が大爆発を起こし、凄まじい爆炎が起こる。

それを見た映司はすぐさまアンクからメダルを受け取る。

刃介も素早くプロセスを踏んで、

「「変身！」」

≪ＳＡＩ・ＧＯＲＩＬＬＡ・ＺＯＵ≫

≪ＳＡＧＯＨＺＯ・・・・・ＳＡＧＯＨＺＯ！≫

≪ＹＡＩＢＡ・ＴＳＵＢＡ・ＴＳＵＫＡ≫

≪ＹＡＢＡＩＫＡ・ＹＡＫＡＩＢＡ！ＹＡＩＢＡＫＡ！≫

「「おおおおっ！！」」

二人はサゴーゾコンボとヤイバカコンボに変身し、四人のグリードに突っ込んで屋外へと戦いの場を映す。

攻撃を喰らったバースはというと、原形こそは留めているが、全身からバチバチとショートを起こしている。当然、変身も強制解除された。

「流石だな、ドクター・・・・・・」

それだけ言うと、伊達は倒れこんでしまう。
真木は興味もないように、其の場を後にした。

「伊達さん！伊達さん！！伊達さん！！！」

後藤は伊達に駆け寄り、必死になって呼びかける。

「伊達さん聞こえますか！？伊達さん！！」
「ああ・・・・・・聞こえてるよ」

伊達は口から一筋の血を流し、まともに起き上がれない体で語りかける。

「後藤ちゃん、俺を死なせないってやつ、痺れたわー」
「しっかり！今病院へ！！」
「医者はココにいるっつの・・・・・・でも、もういいや」

伊達はどこか吹っ切れた様子で、

「後藤ちゃんが受け継いでくれれば、俺は死なないってことだぁ――そうだろ？」

「何言ってるんですか・・・！？俺にはまだ・・・・・・」

なおも戸惑う後藤に、伊達は全ての気力を込めて、眼前にいる後継者に告げる。

「自分を・・・・・・信じろ・・・・・・！」

最後に、口元を綻ばせると、伊達の体からは一気に力が抜けていった・・・・・・まるで魂が抜けて、体が死んだかのように。

「・・・・・・伊達さん？・・・・・・伊達さん！？伊達さん！！！」

幾ら叫んでも、伊達の眼が開くことは無かった。

後藤の両目から涙の雫が溢れたとき、

「なあ、後藤さん」

彼はやってきた。

その腰と手に、決意の証を携えて。

「君は確か・・・・・・」

「花菱烈火だ」

そこには、とても高校生とは思えない、戦士の面構えをした男がいた。

幾度となく非日常的な死闘や修羅場を潜り抜けた猛者の目だ。

「俺は行くぞ。大事なモン、託されたからな。あんたはどうする？」
「・・・・・・・・俺は」
後藤は沈黙ののち、手を伸ばした。
大切な人の使った力と、その原動力に。
「伊達さんのバースを受け継ぐ！！」
「上等だ固羅ッ！」
二人はゆっくりと歩き出す。
新しい心で見る、新しい戦場へ。

＊＊＊＊＊

屋外――そこでは、オーズとブライが苦戦していた。
「チッ、なら！」
≪ＹＡＩＢＡ・ＴＳＵＢＡ・ＴＳＵＫＡ！ＧＩＮ・ＧＩＮ・ＧＩＮ！≫
≪ＧＩＧＡ　ＳＣＡＮ！≫
ヤイバスピナーから眩い黄金の刀身を現す。
野太く長大なエネルギーの塊ともいえる刀身を左腕に宿し、ブライは必殺技の名を叫ぶ。

「我刀真剣！！」

金色の剣が全力で振り下ろされる。

だが、

『総員で防御！』

デシレの指示で、他のグリードたちが手を出し、それぞれの力を使って我刀真剣を止めたのだ。

一人一人では折れてしまうが、三人ならば耐え切れる。――まさに三本の矢。

結果としてブライの技は不発に等しい結果をのこす。

「チキショー・・・・・・」

他に打つ手はないかと思っていたとき、奴等はやってきた。

廃工場から現れ出でたその姿には決意と遺志が背負われ、迷いの影さえなかった。

「後藤さん！」

「烈火！？」

意外な増援の出現に、オーズもブライも驚きを禁じ得ない。

「伊達さん・・・一緒に戦ってください・・・！」

「オッチャン、金女・・・見ていてくれよ・・・！」

後藤は受け継がれたバースドライバー、烈火は新生したブレイズチ

ェリオドライバーを装着。
そして、後藤は銀色のセルメダル――烈火は紅蓮のブレイズ・コアを手に持って、胸に秘めた思いを新たにする。

「「変身」」

――チャリン――

セルとコアがスロットへと投入し、ブランクゲージへと送る。

――キリッキリッ――

グラップアクセラレーターを捻り、

――パカッ！――

銀と緑のセルリアクターと、銀と赤のコアリアクターが開くと同時に、二人の周囲には薄緑と緋色のフィールドが発生し、その中で二人は歩みながら装甲と仮面を纏う。

そして烈火が変身したのは、忍者（チェリオ）の面影を残しつつも、全体的に炎を連想させるデザインとなっていて、ブレイズ・コア同様に装甲部分は紅蓮となり、スーツ部分は黒に変色していた。さらにバイザー部分の色は、まるで超高温の火炎をイメージさせる蒼のままだったし、胸のリセプタクルオーブは二つに増えていた。

新・仮面ライダーバース、後藤慎太郎！
仮面ライダーブレイズチェリオ、花菱烈火！

仮面にあるバイザーを光らせ、二人は叫びながら走る。

セルメダルをさらに投入し、その勢いを倍増させる。

≪ＣＵＴＴＥＲ　ＷＩＮＧ≫
≪ＨＩＴＯＵ・ＨＡＳＡＭＩ≫

「「ハッ！！」」

背中に飛行ユニットであるカッターウイングと飛刀『鋏』を転送装備することで、二人は思いのままに空中を飛んだ。
その光景には一瞬、ブライやグリード等も唖然としてしまう。

バースもブレイズチェリオもそれにはお構いなしで、さらにセルを投入。

≪ＳＨＯＶＥＬ　ＡＲＭ≫
≪ＣＡＴＥＲＰＩＬＬＡ　ＬＥＧ≫

バースは左腕にショベルアーム、両脚にキャタピラレッグ。

≪ＳＨＡＴＯＵ・ＧＥＮ≫
≪ＴＯＵＴＯＵ・ＮＡＭＡＲＩ≫
≪ＣＨＩＮＴＯＵ・ＯＭＯＲＩ≫

ブレイズチェリオは左腕に射刀『鉉』と投刀『鉛』、両脚に沈刀『錘』を装備して更に飛行を続ける。

「「ハアアァァァ！！」」

飛行の際、両脚の重々しい装備を敵にぶつけることも忘れない。
二人のライダーは宙を舞い、途中に廃工場の錆たタンクに激突して

破壊したりもしたが、それでもノンストップでUターンし、飛び続ける。

「「ウオォォォォォ！！」」

戻ってきたところで、バースはショベルアームを振り回し、ブレイズチェリオは右手で忍刀『鎖』を抜いて振り回し、グリードらにダメージを与える。

そこからは一気に上方へと飛び上がり、廃工場の壁を突き破り、天井さえ突き抜けていく。

無論、それによって瓦礫なんかも発生し、アンクの周辺に落ちていく。

「あいつら、伊達より酷い」

ゆっくり降りてくるバースとブレイズチェリオに、しっかりと酷評を下すアンク。

だがそんな声も届くわけはなく、二人はセルを更に投入し続ける。

≪ＣＲＡＮＥ　ＡＲＭ≫
≪ＤＲＩＬＬ　ＡＲＭ≫
≪ＢＲＥＡＳＴ　ＣＡＮＮＯＮ≫

六つのアタッチメント全てを装備したバース・デイ！

≪ＡＮＴＯＵ・ＫＡＭＡ≫
≪ＳＥＴＴＯＵ・ＲＯＵ≫

暗刀『鎌』と切刀『鏤』を右腕に装備し、最後には

≪ＧＥＫＩＴＯＵ・ＫＵＲＯＧＡＮＥ≫

ブレストキャノンと同型ながらも、色はもちろん紅蓮で銃口やフレームは火炎を模したデザインとなっている撃刀『鉄』を胸部に装備。

七つのアタッチメントを全装備したブレイズチェリオ・グッバイ！

最強の重装備を全身に集めた二人の戦士。

全てのエネルギーはブレストキャノンと撃刀『鉄』へと集中する。

「シュートッ！！」

「イッケェェェ！！」

≪ＣＥＬＬ　ＢＵＲＳＴ≫

≪ＣＯＲＥ　ＢＵＲＳＴ≫

セルバッシュとコアバッシュが起動し、ブレストキャノンと撃刀『鉄』からはズドーンという轟音を立てて真紅のエネルギー砲撃が発射され、それは四人のグリードへと降り注いだ。

――ドゥガァァァァァァァン！！――

勿論、これだけの砲撃なので、周囲にも多大な被害が出ている。

辺り地面からは爆発による爆炎や煙等が巻き起こり、最早前方の様子が確認し切れない状況になる。

だがそんな中で、

――チャリーン――

（ッ！コアメダル！）

ブライはその音に気付き、右腕をチェインハンドとして飛ばし、煙から出てきた二枚のコアを掴み取る。腕諸共回収したコアは金色で、その片方には『鋸』、もう片方には『？』の文字が刻まれていた。

煙が風に流されていくと、デシレを先頭にカザリ達が倒れていた。

『なんなのあのバースとチェリオ！？』

『メチャクチャだわ・・・！』

『痛い・・・痛いぃ・・・』

倒れながらそう喚く三人。

『重装備の二人攻めとはいえ、俺から二枚も弾き出すとはな』

デシレはというと、相も変わらず冷静だが、今ので残るコアメダルは8枚となり、両前腕部の外装が崩れて紫色の素体を剥き出しにした不完全（セルメン）になってしまう。

「・・・・・・・・・ッ」

真木も戦々恐々としている中、そいつは悠々と現れた。

赤い服を着た一人の子供・・・・・・そう、ロストだ。

ロストはある程度まで近づくと、瞳を赤くして片翼を現し、空中に浮かぶ。

「もう帰るよ」

とだけいって翼を大きく羽ばたかせ、赤い旋風を巻き起こし、仲間共々姿を眩ましてしまった。
状況はそうして終了し、バースとチェリオの変身は自動的に解除された。

「・・・・・・・・・・・・」

烈火は無言のままブランクゲージからブレイズ・コアを抜き取ってポケットにしまった。

＊＊＊＊＊

廃工場内。
烈火が変身した件は一旦置いといて、みなは伊達の元へ歩んで行った。
特に映司は、倒れている伊達を見て、

「伊達さん?・・・・・・伊達さん!!伊達さん!!」

懸命に呼びかける。
それを居た堪れない表情で見る後藤と烈火だったが、

「・・・・・・・・・・・・あ、一つ言い忘れた」

伊達はまだ生きていた。
それどころか、上体を起こしてこんな事まで言って来たのだ。

「退職金、俺の口座に振り込んどいて」

いい笑顔でサムズアップしながら。

「「――――――ッッ」」

これには後藤も烈火も脱力せざるを得ない。
さっきまで自分たちの活力にもなっていた理由が一気に反転したのだから。

「フハハハッ――バカか？」

アンクも嘲笑った末に呆れ帰る。

「ホントしぶとい男だな」

刃介も刃介で半ば感心していた。

＊＊＊＊＊

後日、鴻上ファウンデーション・会長室。

「失敗したが、最初に約束した通り、危険手当だ」

「いやいやぁ、ホントに死ぬかと思いましたよ」
鴻上は札束をケースに入れながら伊達と会話する。
「バースの後継者・後藤くんを育ててくれた報酬と退職金」
そこへさらに札束達が追加される。
「しかし残念ながら、五千万にしかならない」
「フッフッフッフッフ」
伊達は笑いながらケースを受け取る。
「真木博士からの前金5千万がありますからね。ピッタリ、一億(こんだけ)です・・・！」
「素晴らしい！！」
伊達の計算された目標達成に、鴻上もテンションを上昇させる。
「君の欲望ミッション・コンプリィィトだぁ！！おめでとう！Ｗｉｎ！」
＊＊＊＊＊
救急病院――烈火は今一度この病院に来ていた。
ことがことなので、やはり一人でだ。

集中治療室から普通の個室の病室に移されたくノ一を訪ねるため。

「不負(まけず)――よくぞ勝って来ましたね」

「おうよ！」

医者達の技術とルナイトの魔術により、金女は奇跡的な回復をとげ、既に半分以上の包帯を外せる状態になっていた。もっとも、肩あたりはまだ包帯が巻かれているし、激しい動きも禁止された絶対安静の状態なのだが。

「お陰で私の溜飲も下がりましたよ。それから私のことですけど、お医者さんやシルフィード会長のお陰もあって、あと2・3週間もすれば退院できるそうです」

「そっかぁ。でもさ、いいのかよ？」

「なにをです？」

烈火は少し金女のことを案じるように述べる。

「その、仕事盗っちまってよ・・・・・・」

「問題ありません。今回のことは会長から『最後の大仕事』と言われてましたし、報酬なら既に貰っています。もっとも、途中退場ですから、約束の半額である一億でしたけど」

その瞬間、烈火が固まった

「え、ちょ、あの・・・・・・一億円？」

「聞き返さずとも、一億円です」

「えぇぇぇエェェェ！！？」

「不騒(さわがず)ッ」

――バギッ――

「んがッ！」

やかましく大声を出す烈火に、金女はベッドの上に置いてたマンガで脳天に打撃をくらわせた。

＊＊＊＊＊

そして、遂に伊達は海外の闇医者のもとへ行くべく、空港へと足を運び、映司らも見送りに来ていた。

「じゃあココで」

キャリー付きの黒いスーツケースを手に伊達は目的地行きの便へ向う入り口の前に立つ。

「手術、できるといいですね」

「さあな。神のミソシルだ」

「神のみぞ知るです・・・・・気をつけてくださいね」

「どうか御達者で」

映司に対し、さりげにボケをかます伊達に比奈がやんわりとツッコミ、七実もペコリと一礼する。

「ま、生き残らなきゃ学校もつくれないからな。――火野、お前も

いつか来い」
「え？」
「お前の欲、思い出せよ」

その大きな器とは裏腹に、あの事で涸れ果てた火野映司の欲望。
今も尚、ヤミーさえ怯ませる程に巨大な彼の夢。

「おいアンコ、鋼！ったくお前等は、別れの言葉ぐらいないのか？」
「余計な言葉はいらねぇだろ？何時かまた会うかもしれねぇんだしよ」

と刃介は返したが、

「・・・・・俺はアンクだ」

アンクは最後までぶっきらぼうだ。

「というか伊達。なんで鋼をハリガネと呼ばん？」
「今回の件でよーく身に染みたわけよ。鋼をブチキレさせたら、命が幾つあっても足らないってさ」
「チッ」

伊達の返答に露骨に舌打ちするアンクに、刃介も苦笑いしていた。

「そんじゃーな」

そうして、伊達は行ってしまった。

＊＊＊＊＊

――ヴィン！ヴィン！ヴィン！――

空港を見渡せる海沿いの場所で、後藤は植木鉢をターゲットにバースバスターの射撃を行っていた。
伊達に別れの言葉を告げる選択をあえてしなかったのだ。

（見送りませんよ、俺は――絶対、生きてまた）

そうして、恐らく伊達が搭乗したであろう飛行機が大空へ舞い上がるのを見上げつつ、後藤の心は――

（それまでは俺が・・・・・！）

紛れも無く、プライドや正義感とは違う一つの意思を、バースと共に受け継いでいた。

超絶暴走と紅蓮のチェリオとＲｅｖｅｒｓｅ／Ｒｅ：ｂｉｒｔｈ（後書き）

次回、仮面ライダーブライ！

不穏の影と町内会長と策士ロスト

ブレイズチェリオ
花菱烈火が変身するチェリオの特殊強化形態。
通常のチェリオとは違い、セルメダルではなくブレイズ・コアを用いて変身しており、かつての面影はあるがデザインやカラーもそれに合わせて変化している為、デザインは燃え盛る炎、カラーは紅蓮となっている。バイザーの色は以前と変わらず青色。

さらに従来のチェリオよりアタッチメントの数が一つ増えており、胸のリセプタクルオーブが縦に二つ並んでいることがその証明になっている。無論、変身にコアを使用しているため、スペックなどは通常のチェリオの数段上を行くモノへとパワーアップを果たした。
そして、炎熱を司るブレイズ・コアの恩恵で炎術士と同格の力を得ることが出来、武器を装備せずとも必殺技を発動できるようになった。

ただし、アタッチメントを転送装備するに限り、セルメダルを使う機構なのは以前と相違ない。だが、必殺技などを発動する際、『忍刀両断』以外のものを発動する＝ベルトによって発動するとセルバーストではなく『コアバースト』によるエネルギーの増幅と解放が

行われる。

身長：１９０ｃｍ　体重：９０ｋｇ　キック力：１７トン　パンチ力：１２トン
ジャンプ力：８０メートル　走力：１００ｍを２秒　必殺技：オーバーヒートブレイズ

ブレイズチェリオドライバー
既存のチェリオドライバーを改造し、ブレイズ・コアに対応できるように強化された変身ベルト。基本的な機能は変わらないが、コアメダルのパワーを扱う為にエネルギーの運用効率面などに関しては以前とは比べ物にならない性能となっている。
カラーもそれに合わせてかメタリックレッドが追加されている。

ブレイズ・コア
ルナイトが独自に作り出していた紅蓮のコアメダル。
炎熱属性の力が特別に強く込められたコアで、オーズ・ブライ・クエスなどのドライバーには対応しておらず、その証拠に裏面はセルメダルと同じバツ印が刻まれている。創ったまでは良いが、使いどころがなくて長い間お蔵入り状態だったが、チェリオシステムが正式に花菱烈火へと引継がれると同時にブレイズチェリオドライバーの起動キーとして運用されることが決定した。
セルメダルと違って、幾度と無く変身に使っても消滅することはない。

撃刀（ゲキトウ）『鉄（クロガネ）』
ブレイズチェリオの胸部に装備される大型の砲門。
カラーは紅蓮で炎がデザインされていること以外はブレストキャノンと酷似している。しかし、その威力は凄絶の一言に尽き、コアバ

ーストによって発射される『砲撃刀火（ほうげきとうか）』のそれは――理論上、暴走した巨大グリードにさえ甚大なダメージを与えるとされている。

ブレイズチェリオ・グッバイ
七つの装備をその身に纏ったブレイズチェリオの重装備形態。
当然のことながら、撃刀『鉄』が加わったことでチェリオ・グッバイの火力を遥かに凌いでいて、両手が塞がっている為に自動でコアバッシュモードとなり、装着者の意思一つでコアバーストを発動できる。
尚、ブレイズチェリオは転送装備を行った直後、その為に使用したセルメダルは即刻消滅するようになっていて、何時でもコアバーストが行えるようになっている。

暗殺とギャグと電撃作戦

とある深夜の古びた武家屋敷。
その母屋とは離れた土蔵で、一人の男が立っていた。――クワガタムシの姿を描いて刻んだ、一枚の緑色のコアメダルを手にして。

男の名前は四季崎記紀。
彼は土蔵の中に、あるスペースを設けていた。
土蔵の置くには、人の形に置かれたセルメダルの山がある。ざっとみて千枚以上はあるだろう。

「いよいよ、お前に新しい身体をくれてやる」

――カタカタカタッ――

クワガタ・コアは喜びを表すかのように、独りでに動いて音を出す。

四季崎はセルの山に緑色の布を被せると、その上にクワガタ・コアを乗せる。
すると、セルメダルは次々とコアメダルに集まっていき、どんどん歪な形に仕上がっていく。

四季崎はそれを見て、さらに懐からニ枚のメダルを取り出して、

「こいつもくれてやるよ。ただし――」

四季崎は緑の異形に、虹色のメダルを与えて告げた。

「恩返しを忘れるなよ、ウヴァ？」

そうして、昆虫王ウヴァは復活した。
尤も、コアの枚数がクワガタ一枚と虹色三枚ということで、頭部と両前腕部以外は焦茶色の不完全（セルメン）だ。
それでも、クワガタの顎を模した二本角、蟷螂のような緑の複眼と右腕の鎌、飛蝗のような口は、他の外装部分が崩れていても決して失われてはいなかった。

ウヴァは新しい体の調子を見るように背伸びをし、適当に手足を動かす。
そして、四季崎の顔を見てこう言い返す。

「ああ、感謝するぞ。礼として、俺の力を振るって見せようじゃないか！」
「かっかっかっ。頼もしい言葉だな」

四季崎は愉快そうに笑うと、

「それじゃまず、あいつ等からお前のコアの徴収といくか」
「是非ともそうしてくれ。何時までもこんな無様な姿では、身体に力が入らん」

欲望による脅威は、着々と力を付け直そうとしていた。

＊＊＊＊＊

翌日の早朝。
真木たちの拠点たる洋館。

「たのもー！」

そこへ渋い男の声がクリアに伝わり、二人分の足音も聞こえてくる。
その声に一番早く反応して言葉を返したのは、

「おはようございます。連絡も無かったので、少しビックリしましたよ」

何時ものように黒服で腕に人形を乗せた眼鏡の男・真木清人。

「まあな。俺の陣営に新たに加わる奴がいることだし、紹介しに来た」
「新入り、ですか？まさか、グリードだなんて言うおつもりじゃ・・・・・」
「当然だろ」
「冗談ではなさそうですね、四季崎さん」

真木の言葉に、四季崎は笑って答える。

「とりあえず、他の四人を呼んで来い」
「いいでしょう」

そうして、カザリ・メズール・ガメル・ロストが集まった。
四人はまだ御休み中だったのか、少々不機嫌気味だ。
しかし、そんなことなどどうでも良くなる事態がすぐさまニ発生する。

「久しぶりだな・・・・・・！」
「「「っっ！！？」」」
「・・・・・・？」

聞こえてきた鋭い男の声。
それを聞いたカザリとガメルとメズールは大層驚き、ロストは首を傾げている。

「まっ、紹介するまでもなかったろうがな」

四季崎は愉快そうな笑みのまま、部屋に入ってくる者を歓迎するような素振りをとる。

「まさか・・・・・・！？」
「どうして？」
「なんでぇ、ウヴァがぁ・・・？」

そこには、緑の革ジャンを着こなし髪をオールバックにしている、人間形態のウヴァがいた。

「俺が復活させたのさ。お前等が取りこぼした一枚でな」

四季崎は簡潔に説明し、続けてこう言った。

「単刀直入に言う。――ウヴァのコアを全部出せ」
「行き成り不躾な対応ですね」
「元々はウヴァのものだ。持ち主に返して何が可笑しい？」

真木に対しても強気に発言する四季崎。

「尤も――――」

四季崎は一気に笑顔を消して真顔となる。

「そっちの意見なんざ求めちゃいないがな」

そこには純然とした殺気が混ざっていた。

「ほ、本気なの？四季崎記紀・・・・・・」

「俺は何時だって大マジメだ」

四季崎はメズールの問いに平然と答えた。

「で、どうなんだ答えは？」

「・・・・・・・・・・・わかりました」

「ッッ、ドクター！？」

渋々ながらも真木が許可を出した事に、カザリが身を乗り出す。

「カザリ君。仮にも今の我々は同盟関係にあります。過去になにがあろうと、戦力の確保が急務です。ただでさ向こうには鋼くんや鑢くんを筆頭に、強敵が立ち並んでいる」

「くっ・・・・・・わかったよ。出せば良いんでしょ？」

カザリは現段階で同盟が破綻になることを恐れたのか、懐から緑色の昆虫系コアを全て出して、ウヴァに投げ渡す。

ウヴァは怪人形態となってそれを吸収することで、上半身には甲虫の如き外骨格の鎧が復活した。

『これで大分揃った・・・・・・！』

ウヴァは恍惚気な声音を出し、身体から虹色のメダルを排出して四季崎に返した。
元からコアの集中による暴走を恐れているウヴァにとって、未知のメダルはあくまで自身のコアを今此処で取り返す時までの代用に過ぎないのだ。

「そいつは良かったな。――さて、早速で悪いが、皆にはちょっくら一働きしてもらうぞ」
「コアの次は、君の訳解んない都合に付き合えって言うのかい？」

カザリが反抗的な態度で言い返す。

「そう言うなって。今回の作戦には、どうあってもブライとオーズの気を引き付ける役者が必要なんだ。闇の世界の人間にちょいと情報を流してみたが、それで現れる数人の人間じゃあ、時間稼ぎになるかどうかさえ今一わからんからな」

四季崎は溜息混じりにそう言うと、大げさに両手の平を挙げる仕草をとる。

「だから、お前たちには裏の人間たちが敗れたとき、連中に続いて現れて足止めをしろ。俺と白兵と真木は、その間に必要な物を取りにいってくる」
「おや、私は貴方方に同行しろと？」
「ああ。お前には露払いの役をするヤミーを何体か創ってもらう」

そうして、グリードたちの計画は、着々とその形を成していった。

＊＊＊＊＊

その頃、東京の某区の某市にある某所。
要するに知る人ぞ知る、曰くありげな薄暗い空間に、危険な裏の闇で生きる者達が集まっていた。
彼等は今日、最近になって突然リークされた情報について協議していた。

「では早速、本題に入ろう」
「なら、あの話は本当なのか？」
「あの相生が重症を負って療養中という話だが？」

協議しているのは三人。
薄暗い空間と、顔を覆うように被ったフードの所為で体付きや顔はよく見えない。
だが、かなり裏の世界に精通してそうだというのは判った。

「ああ。差出人不明の手紙に、あの女狐の痛々しい姿を写したもんが入っていた」

中央にいる男が懐から写真を取り出す。
そこには確かに包帯を身体に巻いて、病院着姿の金女が写っていた。

「これはまたとない好機だ。ここ数年、あの女が目ぼしい依頼を我々から掠め盗っていく所為で商売あがったりだぞ！」
「全くだ！奴が傷を癒し終えて、またこの暗殺業界に戻ってくれば、俺達は間違いなく立つ瀬がなくなる！」

「しかし、その写真入りの手紙は差出人不明だったのだろう？それに今、あの女は別の仕事を長期で契約しているとも聞く。暫くの間」
「「甘いぞッ！！」」
穏健そうな男の言葉を、中央の男と厳しそうな男が切って捨てた。
「我々の今後がかかってるときに、何を悠長なことを言っている！」
「躊躇すれば何時か後悔となって帰ってくるぞ！」
中央の男と厳しそうな男は追い込むように続けた。
「この際、多少のイレギュラーは見逃そう。今はあの相生忍者を如何にかすることが先決」
「俺達の持ち得る最強の殺し屋を選抜し、纏めて一気に嗾ける！」
「いや、ホントに、様子見とかはしなくていいのか？」
「「くどいっ！」」
こうして、差出人不明な手紙の送り主によって、金女は裏社会の連中に命を狙われてしまった。
だが彼等は、三人の内、二人は知らない。
（こいつらはもうダメだな。私とは合いそうにない）
闇側というのは、時として容赦ない裏切りがあることを。

＊＊＊＊＊

トライブ財閥本社ビル。
その会長室で、この財閥の総帥であるルナイトは、刃介と交わした契約に則り、彼の血液を吸っていた。
吸血鬼らしく鋭く尖った四本の犬歯によって首筋の肌を突き破り、血管へと到達させる。

「んっ・・・・・・んっ・・・・・・・んっ・・・・・」
「うぅっ・・・・・・あぁっ・・・・・・・」

血を吸う側も、吸われる側も何故か妙に恍惚な表情をしており、薄らと頬を赤らめている。
ルナイトが牙を刃介の首筋から抜き、今週の分の採血は終わったらしい。

「意外と長かったですね」

その様子を、何だか不愉快そうに見ている女が一人。

「そう言わないで頂戴よ七実ちゃん。これも立派な契約事項の一つなんだから♪」

ルナイトは椅子に腰掛けている七実にウインクしながら返答する。

「しかし、刃介さんまでお顔を赤らめていましたが？」
「すまんな。どうも血を直に抜かれる感覚って、どうも慣れなくて」
「・・・・・まぁいいですけど」

七実は若干不満足そうに頷いた。

「会長。例の仲介から、先ほど連絡が入りました」
「っ――聞かせて頂戴」

すると、バットが会長室に入ってきて、何やら重要そうな情報をもってきた。
ルナイトはバットの目前にまで近寄り、耳打ちされる形で情報を聞き入れる。
情報をのせた声が鼓膜を通して脳髄に伝わると、ルナイトはキツイ表情で問う。

「それって、マジなのよね？」
「ええ、ほぼ確定的かと思われます」
「そう・・・・・面倒なことになったわね」
「おい、どうかしたのか？」

悩ましげな表情をするルナイトに、刃介が質問した。

「・・・・・刃介。私たちトライブ財閥だろうと、鴻上ファウンデーションだろうと、大きな組織になればなるほど――そして得体の知れない怪物対策を担う者として、どうあっても裏社会の力を少なからず借り受けている」

ルナイトは真剣な顔つきで話す。

「どこから漏れたかは知らないけど、金女ちゃんが療養してる事が、彼女を目の敵にしてるアホ共にバレたわ」
「・・・・・ほう。そんで、今後の方針は？」

刃介は冷静さを装いながら、二重な意味で質問する。

「連中は何人かの刺客を送り込むつもりよ。当然、こっちの手勢で返り討ちにするけど」
「その手勢とは、私たちのことですよね？」
「正直に言っちゃえばね。あ、そうそう。念のため、日が暮れて月が出るまでには、金女ちゃんを別の場所に移しておくわ」
ルナイトは何時もの調子で語り続ける。
「人気（ひとけ）のかなり少ない場所に建てといた、私の屋敷（べっそう）あたりが最適かしらね」
「確かにそこなら、刺客が来ても人目を気にせず戦えるな」
「そういうこと。一応そこの地図をノーパソとスマートフォンに送っとくわね」
ルナイトは机の席に座りながら、ゆったりとした感じで補助面について一節つけたした。
「よーし、ついでに火野やアンクも呼んでおくか」
「あの人達なら、確実に乗ってきてくれるでしょうね」
こうして、色んな意味で最強無敵な護衛人衆が結成された。
＊＊＊＊＊
夕日が地平線に沈み、夕方は闇夜の時間に移り変わっていた。

当然、それが無人に等しい大自然一杯で爽やかな森林の中に建てられた大きな西洋風の屋敷――それが闇夜に閉ざされれば、一発でホラー劇場の舞台が完成である。

尤も今夜限り、この屋敷は無人ではない。

「いいな、二人共。火野たちが来るまでに、俺達で今夜の警備体制を決めとくから」
「はい」
「異論はない」

屋敷の入り口の真ん前で、刃介と七実と竜王の三人は軽い会議を行っていた。

「まず、金女には護衛対象であると同時に囮的役目を担ってもらう」
「それで一番眺めが良くて目立つ部屋に寝かしつけたのですか」
「連中を確実に誘き出せるが、危険な策でもあるぞ」
「だからこそ、俺等が総出で護衛にあたるんだろうが」

刃介は言い聞かせるような口調で続ける。

「持ち場についてだが、俺は屋敷内部、竜王はバルコニー、七実は屋敷周辺で頼む」
「了解した」
「委細承知」

これといった反論はなく、あっさりと三人は各々の持ち場に向かって行った。
ついでに言うと、この屋敷――外観的イメージは「ルイージマンション」をモデルにしてもらうと助かったりする。

まあ御陰様で暗くなれば不気味さＭＡＸのオバケ屋敷が出来上がるというわけなのだが。

＊＊＊＊＊

屋敷内部のエントランス。
刃介はそこにいて、スマートフォンを使っていた。

「ったく、火野やアンクの奴・・・・・・」

刃介はイラついていた。
夜中になっても全く来ないメンバーに。
仮にも共に死地を潜り抜けてきた間柄なのだから、一度か二度は即行で駆けつけてくれると思っていた刃介。

クスクシエの番号を入れて通話開始。
お決まりのトゥルルルル！トゥルルルル！という音が聞こえてくるが、一向に誰も出ようとしない。
遂には留守電モードになってしまう始末。

「チッ――今度はアンクだ。あいつなら出るだろ」

――トゥルルル、トゥルルルル！――

『はい、火野です』
「ん、火野か？」

アンクの番号に入れて映司が出たということは、恐らく今一緒にいるのだろう。

「俺だ、鋼だ。何時まで寄り道やってんだ？早く送ったデータの場所に来い！」

刃介は出だしに罵声にも近い声を出す。

だが、彼の怒りを増長させるメロディが、電話越しに聞こえてきた。

なんかこう、最近はＣＭで宇宙人が来店してきている、有名な回転寿司屋のテーマソングが・・・・・・。

「オイコラてめぇぇぇ！！何この一大事に寿司食ってんだ！！」

エントランスはおろか屋敷の奥にまで届きそうな怒声。

『ち、違うんです！これは――』

『おい映司、誰と話してんだ？んなコトいいから早く食うぞ。折角のマグロやカニが行っちまうぞ』

映司だけでなく、聞いたことのある声が・・・・・・。

「何お前ら！？人様の妹ほったらかして豪勢に回転寿司で夕食タイム決め込んでんじゃねぇよ！！」

『すいません。知世子さんが”偶にはアンクちゃんと一緒に美味しいもの食べて！”ということでして』

「だからって時間のかかる回転寿司に行くなよ！！」

留まるところを知らないデカい声。

「罰として特上の土産買って来いよ！俺と七実と竜王の三人分でだ！」

だが、ちゃっかりと奢らせようともするのが流石というべきか。
有無を言わさず刃介は続ける。

「ちゃんと連絡したろ？メール送ったろうが！」
『あ、俺ケイタイ持ってません』
『すまん。確認しそこねた』
「要するにアンクの凡ミスかい！！」

今までにないクオリティを誇るツッコミ。
だがしかし、

「――――――ッッ（人の気配・・・・・・おいでなすった）」

＊＊＊＊＊

同時刻、屋敷から１００ｍ離れた薄暗闇の森の中。

「ふん、臭うな。人の臭い・・・・・・それも複数」
「無駄な足掻きをする」
「どの道、我々に始末されるだけだというのに」

迫り来る刺客たち。

闇に紛れて姿はあやふやだが、微妙に殺気が漏れている。

「纏めて消すぞ。私たちは所詮、金で動く外道（ころしや）だからな」

そうして、事態はさらに加速を深めていった。

＊＊＊＊＊

「数は大体・・・・・・屋敷内に既に一人、外には主要な三人と有象無象共ってとこか。まあ、俺達三人なら充分カバーできるが・・・・・あのバカ共、明日になったらシバき倒すか」

さりげにこっちも殺気を漏らしながら呟く刃介。

だけど一応、

「おいテメェら。さっさとコッチに来い。来なかったら明日朝一で殺すから」

脅迫的言葉を残し、刃介は通話を一方的に切ろうとした――が

「・・・・・・アンク、鋼だ。今お前らどの辺にいる？」

念を押して聞いて見る。

『あ？俺なら鋼金女の直ぐ横だが』

「・・・・・・・・・へ？」

それを聞いた途端、刃介は頭より先に脚が動いていた。

＊＊＊＊＊

金女が寝ているヘッドが置かれている部屋。
その部屋には大きなガラス戸があり、そこから簡単にベランダへ出れるようになっている。
そのガラス戸に特殊な道具で丸い穴を切り開き、そのまま容易に部屋に入ってきた男が一人。

「ふっふっふ」

始末人Ｎｏ．１・枕のマル。
眼にも留まらぬ早業で、獲物の枕を爆弾入り枕と入れ替え、永遠の眠りを齎してきた、寝込み専門の殺し屋。

――カチッ――

爆弾の導火線に点火。

「御休み、お嬢さん」

――シュッ！――

本来なら、この一瞬でマルの仕事は終わっていただろう。

でも今夜だけは違った。

「ん・・・・・・！？」

幾ら引っ張っても、金女の枕を退かすことができない。

（ど、どうなっている？何故枕が動かない？というか、誰かに引っ張られてないかコレ！？）

そうは思っても、辺りには人影はない。

第一、誰かが引っ張ってたらどうあっても隠せるのは精々腕一本程度――全身を隠すには至らないのだ、このベッドの大きさは。

（ぬおおおお！！ナメるなよ！私は、この殺り方で、数多くの邪魔者を排除してきたんだ！こんなくノ一なんかに、くノ一なんかにいぃ！！）

かなり拘りすぎな殺しへのプライド。

だがそれが功を奏したのか、

――バッ！――

漸く枕を退かすことができた。

（おっしゃーーッ！！これで、君の永眠を約束する枕は、こっちだぁぁ！！）

心の中でやたらと騒ぎながら、マルは爆弾入り枕を置いた。

「ではお嬢さん、Ｇｏｏｄ　ｎｉｇｈｔ」

と言い残してベランダに立ったマル。
後は飛び降りて森の中へ雲隠れするだけだったが、

『おい、お前』
「ん・・・？」

聞き覚えのない男の声。
いざ振り返ってみると、

『これ返すぜ』

腕だけの赤い鳥の異形が、爆弾入り枕を持って自分に語りかけていた。

「ッッ――――あああああああああ！！」

マルは一瞬フリーズしたかと思えば、すぐさまベランダから飛び降りた。
しかし、ロープでゆっくり降りたわけじゃないので、脚がジーンとなってしまう。
そこへ、

『遠慮すんなよ』

――ブンッ！――

爆弾入り枕が投げられ、持ち主の足元に叩き付けられた。
そして導火線の長さが完全に０となり、

――ドカァァァァァン！！――

マルは永遠の眠りについた。

『フン、人間風情が』

マルをけなす赤い腕・・・・・・アンクはそう言うと、そのタイミングで刃介もドアを勢い良く開けて入ってくる。

「アンク・・・・・・そっか――腕だけになりゃ、自力で飛べるもんな」

『まぁな。何より寿司屋が此処に近かったのもある。兎も角、これで一人片付いた』

「そうだな・・・・・・」

刃介は半ば感心するように頷くと、スマートフォンではなく、バッタカンドロイドを起動させる。

「おい火野、聞こえるか？」

『あ、はい。そっちはどうですか？俺は刑事さんの身体、安全なとこに置いてきて、屋敷が見えるとこまでバイクで来てますけど』

「アンクが一人目を撃退したよ」

『ほっ、良かった』

相変わらずだな、と思いつつ刃介は会話を続ける。

「とりあえず落ち合うぞ。今どのへんにいる？」

『みんなを探すために高い場所に』

「高い場所！？アホかっ！竜王だってバルコニーじゃあ気配遮断して忍んでるのに、テメェなんかじゃ一発で見つかるだろ！！」

『そんなこと言ったって・・・・・・・・・・・・あ、いたいた。鋼さんが見えた』

そう言われて刃介はベランダから身を乗り出して周囲を見渡す。
すると屋敷に一番近い木の枝に、映司の姿が。
しかも何の警戒心もない無防備状態だ。これではすぐにやられる。

「こっちですコッチ！いやぁ熱いですねぇ。寿司屋に行く途中で、知世子さんに頼まれて買ったTシャツが幾つかあるんですけど、鋼さんも着替えます？」

なんて言いながら赤いTシャツを着ている映司。
そんな彼の背後に、

「振り向け、後ろだ火野！」
「え？」

――ガシッ――

「うあッ！？」

映司は誰かに両腕で首を絞められ、放されると同時に、地面に落とされた。

「――――痛ってぇ」

そして彼を地面に落としたのは、パッツンパッツンのTシャツを着たおっさん。

「な、なんなんですか貴方は！？」

始末人Ｎｏ．２・Ｔシャツの鯱。
Ｔシャツ専門の殺し屋。眼にも留まらぬ早業で、ＭサイズのＴシャツをＳサイズのＴシャツに着せ替え、獲物に永遠のパッツンパッツンを味あわせる、自分のＴシャツに絶対の自信とプライドを持つ、職人気質のＴシャツ好き。

「Ｔシャツ専門の殺し屋ってなんなの！？もはや殺し屋でもなんでもないよ！！ただのＴシャツ着たおじさんでしょ！？」

と珍しく渾身のツッコミを披露する映司。

「脱げ」
「え？」
「黙って脱げぇ！！」

鯱が映司のＴシャツを掴んだ。

「ちょ、放してください！」
「うるせぇ！」

Ｔシャツを脱がされそうになる青年と、青年のＴシャツを無理にでも脱がせようとするおっさん。

『おい何なんだこの絵面？キモ過ぎるだろうが！なにやってんだお前ら！？Ｔシャツなんざどうでもいいだろ！！』

アンクもノリに乗ってツッコム。

「お、重い！Ｔシャツが脱がせない！まさかこれはＭサイズではな

くＬサイズ！？」
「大して違わないだろ！？」

刃介も一緒にツッコム。

「ぬおおお！舐めるなよ！私はこのＴシャツ脱がせだけで、数多のＴシャツをパッツンパッツンにしてきたんだ！こんなＬサイズなんかに、Ｌサイズなんかにぃぃ！！」

――ビリィィィ！！――

そして赤いＴシャツが破けた。
だが鯱の眼にしたものとは、

「ッ！最初からＳ！！？」
「『どうでもいいわッ！！！！』」

今度はハモりながらツッコム。

「いや、その、Ｍは品切れだったんで、なんかすいません」

映司は上半身裸になるも、一応は謝っておく。

「いや、こっちこそゴメン。ＳならＳって言ってくれれば良いのに」
「なにこれ？なんでＳだったら良いんだよ？どんだけＭを敵視してんだよテメェ！？」

刃介はベランダから飛び降りながら鯱にツッコム。
だが映司は何時もの御人好しさ故か、Ｔシャツの入った袋を差し出し、

「あのー、良かったらこれ、Sサイズのティシャツ他にもありますよ」
「え、着てみて良いの？」
「何やってんだよ仕事しろよ！オメェ始末人だろ？Tシャツ試着しに着ただけじゃねぇか！！」
などという言葉も虚しく、鯱はさっさと白いTシャツを黒いTシャツに替えた。
「おっほー！やっぱりTシャツはSだよねぇ。この肌に吸い付くような着心地ぃ！」
といいながら上腕筋に力を入れてコブを盛り上げるシャチ。
だがしかし、袖んとこに変な余裕ができている。
「あれ？なんか思ったよりデカいな」
「あ、Mは入ってないけど、Lは入ってますから。別に大丈夫ですよね？」
そして結果的に、
「グハァッ！！」
――バタン！――
「はッ、嵌めやがったな・・・・・」
「なんでだぁ！？どうしてLサイズ着たら死ぬんだよ！？どんな設定ショイ込んでんだコイツ！？」
もう意味不明すぎてついていけなくなる刃介。

「なんか悪いことしちゃったな。でもこれで一歩前進ですね」
「前進って、こんなのを歩数に入れるべきなのか？」
呆れている刃介。それもこの上なく。
そんなとき、バッタカンドロイドが通話役として起動する。
『こちら竜王。なんか庭でＬサイズのＴシャツが裂ける音がしたんだが』
「どんな音を拾ってんだ！？テメェまでギャグに取り込まれるな！！」
と言ってる間に、
「おー、いたいた。遅くなってすまん」
竜王がこっちに合流してきた。
『お前、奴等が来てからどこにいたんだ？』
アンクがそれとなく訊いてみると、
「こんな熱帯夜で皆が熱い思いをしてると思ってな。台所にある冷蔵庫からチューパットを持ってきた」
「お前だけは信じてたのに何故だ！？どうして殺し屋のいる状況でＴシャツ着たり家のアイス取って来たりしてんだ！？まともなの俺とアンクと七実だけじゃん！」
なんか色々と失望するかのように、刃介は叫ぶ。
因みに、映司はこの際、袋から新しいＴシャツをだして着ていた。

『まあそう言うな鋼。あ、それから俺はオレンジ味で頼む』
「お前もかアンク！テメぇどんだけアイス好きなんだよ！つー今は舌のない腕だけで食っても意味無いだろ！！」
まあ実際、信吾（にんげん）に憑依してないアンク（グリード）が食事をしても意味がないのは確かだ。しかし仲間はずれにするのは可哀相なので一応食わせてやることにする。
そうと決まればさっさとチューパットを均等に分けるとしよう。
ここにはソーダ味とオレンジ味があるが、二本を折れば四本になる。
『さっきも言ったがオレンジにする』
「では私はソーダで」
「俺もソーダにします」
綺麗に行き渡った。
だがそこへ、なんか身体に包帯を巻いてる鋼金女らしき人物が、布団を引き摺りながら、
「お・・・・・・・オレ、ンジ・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」
『・・・・・・・・・』
「魘されてるようだな」
無理矢理竜王が理由をでっちあげた。
「じゃあ分けようぜ」
「オレンジィィ！わ、た、し――ガシッ！――」

『オイ！なに魘されてるふりしてリクエストかましてんだ！誰の為に集まってやったと思ってる！』

アンクは金女の顔を掴みながら怒声を浴びせる。

「アンク、怪我人になんてことを！」

『こいつ絶対起きてやがる！完全に狸寝入りだぞコレ！』

「しかたない奴だな。ではオレンジ組はジャンケンして、負けた人は蒂ということで」

「ざけんなよ！ならソーダ組になる！蒂よりソーダの方がマシだ！」

竜王の滅茶苦茶な、というか投げやりな提案に怒る刃介。

「落ち着いてくださいよ鋼さん。別にソーダでもオレンジでも良いでしょ？」

「じ、じゃあ、火野さんは、蒂、で決定、です」

「魘されながら何とんでもないこと言ってんですか金女さん！！アンク、この人やっぱり起きてるよ絶対に！！」

遂に映司まで完全にギャグに飲まれた。

まあ、そうこうしてる間に・・・・・ある変化が起こった。

「――――って、あの、このチューパットさっきと何か違いません？」

異変に気付いたのは映司だった。

「何がだ？」

「そういえばさっきよりスッキリ・・・・・・って、蒂がないぞ」

「「「『あ・・・・・・』」」」

気付いた時にはもう遅い。

――ドッバァァァン！！――

何か二つの影が地面から出現し、土煙を大きく起こしながら現れた。
それは蒂のある長いチューパットを銜えた二人組み。

「「チューパットの吸兄弟、参上！！」」

始末人Ｎｏ．３・チューパット吸兄弟。
チューパット専門の殺し屋。眼にも留まらぬ早業で、チューパットの長い方の奴を短い方の奴に摩り替え、獲物を永遠のブラザーコンプレックスに陥らせる。因みに彼等はチューパットを分ける際、横ではなく縦に裂く。ついでに、チューパット限定であらゆる達人や天才の力を凌駕する。

「なんだこの微妙極まる才能の無駄遣い！！？」

もはや殺し屋どころか汚れ稼業にすら関係なくなっている。
刃介は勢いのまま、地の文にすらツッコみだす。

「残念だったな。貴様等のチューパットの長い方の奴は短い方の奴に取り替えさせてもらった」
「貴様等には短いほうがお似合いだ」
「そこで永遠に、兄に長い方の奴を奪われる弟の気分を味わうがいい」
「「弟でもないのに！フハハハハハハハ！！」」

などと意味不明でウザい台詞を吐きながら、吸兄弟は去っていった。
しかし、

「『――――ッ』」

それを容認しないものが二人いた。

＊＊＊＊＊

去っていった吸兄弟は――――。

「兄貴、上手くいったな！」

「これで同志達の魂を浮かばれよう！帰ってチューパットの長い方の奴で祝杯だ！」

この台詞の意味はもう問い質したくもない。

しかし、そこへ――――

♪～～♪～～♪～～

なんか必殺なんとか人のテーマが。

「こ、このＢＧＭは！」

「バカな！我々以外にこのＢＧＭを使いこなす奴が！」

そして、

――ブスッ！――

二つの汚い肛門に、二本の短いチューパット。

「あ、兄貴！ケツに！」
「チューパットがぁ！」

んでもって、いっきに吸兄弟はチューパットに括りつけられた紐に力が加わったと同時に、強制で引き寄せられていった。

＊＊＊＊＊

場所は刃介らがいた場所にまで戻る。
アンクは急いで信吾の身体に戻り、刃介共々に、吸兄弟の一本釣りをなしていた。

「テメェらさ、マジ好い加減にしろ」
「チューパットを返せ」

刃介はおふざけへの怒り、アンクはチューパットへの未練。

「か、勘弁！もう食べちまった！」
「バカ、兄貴！」

肛門にチューパットがブスっと刺さり、紐は木の枝にかかっているので、吸兄弟は逆さ吊るしになっている。
そこへ歩み寄る二人の鬼神。

「ちょ、待って!返すから!必ず買って返すから!」
「命だけは助けてくれ!何本だ?何本長いのが欲しいんだ!?」
――ガシッ!――
二人は無表情でチューパットの短いのを掴む。
「「待て!待ってぇぇぇ!!」」
「「問答無用」」
――ブザッ!――
振り下ろされていた正義の鉄槌が、今再び汚い肛門から解き放たれた。

＊＊＊＊＊

その頃、四季崎らはというと。

「頃合だな」

闇夜のビル街で、建物の隙間に隠れていた。

「ねえ、本当にウヴァ達をオーズとブライにぶつけていいの?」
「・・・・・・・・・」

ついてきてるのは、カザリとロスト。
それから、

「確かに、向こうにも実質的に戦闘可能な人材が四人いるわけですからね」

真木清人である。

「言ったろ？ウヴァとガメルとメズールと白兵の役目は陽動。俺達は機を逃さず、迅速に行動する事を第一に考えるんだよ」
「まぁそれで目的達成に近づくと言うのなら良しとしましょう」

そうして四人は影から出て月光の下に身を曝す。
歩いていく先に足を運ばせながら。

＊＊＊＊＊

所戻って屋敷前。
主要なバカたちを片付け終えた刃介たちだが、一つ腑に落ちない点があった（金女のほうは、強引かつ無理矢理に寝床へ括りつけておいた）。

「そういえば、七実の奴はどうした？こんだけ庭で大騒ぎしてるのに全然来ないぞ」
「他の連中の相手してんじゃねぇのか？」

「その通りですよ」

会話にいきなり割り込んでくる女の声。
不気味で暗ーい森林から一人の小柄な人影が近寄ってくる。
正直な話、さっき聞こえた声がなければ、恐らく彼女を幽霊や生霊として誤認していただろう。

「鑢か。遅かったな」
「申し訳ありません。年甲斐もなく”草むしり”に夢中になってしまいました」

竜王の言葉に、七実は邪悪でイヤらしい笑みした。
この言葉から察するに、雑草は全て毟り終えたようだ。

しかし、七実の姿が月明かりによって照らされると、映司は思わず「うッ・・・・・・」と言ってしまった。
それもそうだ――なにせ今の七実の手は血塗れな上、顔にも人の血が飛び散っているのだから。
だけども、そんな七実の様子を見て、一人だけゾクゾクとした感じになっていた男がいた。

（ああ・・・・・・イイ・・・・・・）

読者の皆さんはお忘れかもしれないが、刃介の好みは”血化粧の似合う女”である。
手は血塗れ、顔にも血が付着し、それら全てを彩る邪悪でイヤらしい笑い――ハッキリ言って、刃介にとって今の七実の状態はドストライクだった！

「七実、ちょっと写真撮らせて？」

「いいですよ」

ついにはスマートフォンのカメラで写メを撮りだす始末。
しかもなんか、

「今度は座ってくれ。んでお前から見て左の方に顔を少し向けて、手を口元に。笑顔はそのままでな」
「うふふ」

なんか指示まで出しながら撮影している。
七実も満更ではないのか、刃介の望むように、血塗れた姿で邪悪かつイヤらしい笑顔をしている。

「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・」

そんな二人に、映司もアンクも竜王も、黙りながら右足と左足を交互に三歩ずつ後退させていた。
そんな緊張感もクソもない状況下で、突然の乱入者たちが現れる。

――ビリビリ！バチバチ！――

突如として、緑色の雷撃が五人へと降り注いできたのだ。
五人は即座に身体を動かし、雷撃をかわした。

「この攻撃は、まさか・・・！」
「またお客さんですね・・・・・」

刃介と七実は表情と雰囲気を入れ替え、雷撃のやってきた方向に視線を集中する。

『フン。やはり初撃は避けられたか』

「ウヴァ・・・・・・」

緑と黒に彩られた昆虫王ウヴァが、五人の前に姿をさらした。

さらに、

『まあ、そう簡単にいく相手じゃないものね』

「メズールか・・・・・・」

『でも、俺達が勝つ！！』

「ガメルまで・・・・・・」

これでやってきたグリードは三人。

そこへさらに、

『拙者に、ときめいてもらうでござる』

ビューっという旋風が吹くと同時に、薄刀『針』をもったゼントウまでもが現れる。

「お前ら。今度の敵はさっきのバカ共じゃねぇぞ」

「わかっております」

「言われずともわかっている」

「全くだ。――映司、ほれ」

「うん。行こう、みんな」

五人のうち三人は、ドライバーを装着してコアメダルを投入。

そこへスキャナーを滑らせる。

「「「変身・・・・・・！」」」

≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＥＮＢＡ≫
≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！ＲＩＯＴＥ！ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！≫
≪ＴＡＫＡ・ＴＯＲＡ・ＢＡＴＴＡ≫
≪ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！ＴＡＴＯＢＡ！ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！≫
≪ＢＡＲＡ・ＳＡＲＲＡＣＥＮＩＡ・ＲＡＦＦＬＥＳＩＡ≫
≪ＢＡ・ＳＡ・ＲＡ！ＢＡＳＡＲＡ！ＢＡ・ＳＡ・ＲＡ！≫

ブライ、オーズ、クエスに変身した三人。

「では、私も」

七実もキョトウへと変貌する。

『参りましょう』

それを見て、ウヴァはガメルの肩を小突いて指示を出す。

『ガメル、やれ』
『うん、わかった！』

するとガメルは、身体からゴリラ・セルとゾウ・セルを取り出し、自らの額に出現させた投入口へチャリンと入れた。
すると、ガメルの腹部と背中から二体の異形が現れる。

投入されたセルメダル通りなのか、ガメルが願ったのかは知らないが、現れたのはゴリラヤミーとゾウヤミーだった。

『ウホォォォ！！』
『パオォォォン！！』

本能のままに、誕生してすぐに吼える灰色の異形たち。

「質では勝てぬ故、量で押す策か」
「なんともまあ浅慮だな」
『どうとでも言え。今日は戦いに来たのであって勝ちに来た訳じゃない』

意味深なウヴァの台詞に、

「ウヴァ。貴様ら何を企んでいる？」
『答える義理はないな、アンク』

いくら虫頭と揶揄されたウヴァと言えど、こっちの作戦を安易に漏らすほどバカではない。
一方的に会話は打ち切られ、戦いが始まる。

『では拙者は、お主の相手をするでござる』
『成る程。時間稼ぎに丁度良い人選をしたというわけですか』

キョトウ対ゼントウ。

『俺のヤミー！一緒にブライ、倒すぞ！』
『ウホォォォ！』
「ヘッ、上等だな」

ガメル＆ゴリラヤミー対ブライ。

『久しぶりに手合わせしましょう、リュウギョク？――いえ、クエス』
『パオォォォン！』
「面白い。望むところだ」
メズール＆ゾウヤミー対クエス。
『オーズ！俺のバッタを返してもらうぞ！』
「そういうわけにはいかないんだよね」
オーズ対ウヴァ。
ここに四つの戦いが始まった。
まずは、ブライとガメルらの戦いを見てみよう。
「奥義、風花乱舞！」
――ブンブンブンブンッ！――
ブライは片足を高速で振るい、それによって発生した真空の刃が幾つにもわたって、ゴリラヤミーに命中した。
『ゥホアアア！！』
全ての刃が、命中してゴリラヤミーは向こう側に吹っ飛ばされた。
『ああ！俺のヤミーを、虐めるな！』

「じゃあ今度はお前だ。奥義、快刀乱麻！」

――シュシュシュシュシュ！！――

今度は両の手刀を――幾つモノ残像ができる程のスピードで振るい続け、防御の薄いガメルの上半身に次々と攻撃を当てていく。

『うぅぅあああああ！！』

当然、それにつれてセルメダルもドンドン、チャリンチャリンと落ちて行く。

「そんじゃ、良い子はさっさと寝てろ！奥義、星拳波動！」

――バンッ！――

『うわあああああッ！』

ガメルはブライの右拳から放たれた一撃を喰らって、またもや吹っ飛ばされてしまった。
しかし、

『うぅ・・・痛いな・・・』

ガメルの生来的頑丈さは想像以上のものがある。

「おいおい、けっこう腰いれて打ったんだがよ」

ブライが溜息混じりに喋っていると、

『ブライやっぱ、怖くて嫌い！フンッ！』
「あぁそうか――って、おわッ！？」

ガメルが重力波を放ち、自分の身体を無重力状態にしてきたのだ。

『オリャーッ！』
「ぐおッ！」

そこから一気に重力をさらに操作して、無重力でフワフワ浮いていたブライには、地面に減り込むほどの重力をかけた。

「あんま図にノンなよ、小僧（ガメル）！」

ブライは本能が赴くままに、肉体を動かし、無理矢理に立ちあがった。

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

しかもスキャナーまで使ってみせる。

「奥義、電光石火！」

――シュバッ！――

その時、ガメルは再びダメージを受ける。
超高速の領域で振るわれた一本の手刀によって。

『うぅわあああああッ！！』
「よし、今度はそっち！」

ガメルに傷を負わせると、ブライは狙いをゴリラヤミーに絞った。

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

「トォ！」

ブライは跳躍し、空中で現れた血錆に染まった三つのリングを潜っていく。

『ウホッ！』

ゴリラヤミーは抗おうと、屈強な拳から大きなエネルギーを纏わせてパンチと共に放っても、

「チェェェエエ！！」

ブライは傷を負っても迫ってくる。

――ドンドンドンドン！！――

ゴリラヤミーが胸板を叩いてドラミングをして重力をいじり、ブライの体重に干渉しても、

「スゥゥゥ！！」

上から下へと降ってキックしてくるブライの勢いを増長させるだけ。

そして、

「トオーーッ！！」

『ウオアアアアッッ！！』

リオテキックが炸裂し、ゴリラヤミーは一枚のゴリラ・セルを残して消滅した。

次はクエスとメズールの方を見てみよう。

『それッ』

――バシャーーン！――

「ふっ、無駄だな」

メズールの水流弾。
それを前にしてもクエスは全くの余裕で、

「全て飲み干す！」

逆に水流弾を吸収してしまったのだ。
以前クロユリヤミーとシラユリヤミーがそうであったように、植物とは根に近づいてきた栄養や水分を吸収して生きている。
ならば植物系のバサラコンボならば同じことができて当然ではないだろうか。

「私の返す後手はこれだ。真庭忍法――疾風迅」

――瞬ッ！――

クエスは視認できるかさえ怪しい速度で動き出し、メズールが些か

不安を感じていると、

『パオォォン！』

ゾウヤミーが一声鳴いて、軽くジャンプして両足による巨大な一撃を地面に向けて行う。

すると、地面が大地震のように大きく揺さぶられたのだ。

「ん・・・ッ」

クエスもこれには動くスピードを緩めなければならない。

『そこよ！』

今度のメズールは手からウォーターカッターレベルの高水圧のを放射する。

「くッ」

避けられないと悟り、クエスはそのままウォーターカッターを受けてしまった。

攻撃を身に受けて「くぅっ」という声を漏らすクエス。

どうやら、殺傷性に優れた攻撃までは吸収できないらしい。

「――――お返しだ」

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

クエスはバサラコンボにおける初めてのスキャニングチャージを行うと、「ハッ」という掛け声をだして上空へと跳び上がる。

するとクエスは、両腕にあるサラセニアフィーラーを自由自在に操り、ゾウヤミーの身体を鞭状の触手で雁字搦めにした。

『パオッ！？』

「気付いたか。もう遅いがな」

そう、雁字搦めにされた時点でゾウヤミーの運命は決まっている。クエスは空中にて、自分とゾウヤミーとの間に現れた白・緑・赤のリングに向けて両足を向けながら、サラセニアフィーラーを全力で引き、ゾウヤミーと自分の距離を勢い良く詰めていくと同時にリングを潜っていく。

「バサラキック」

呟くような一言の直後、

『パオォォォォォン！！』

――ドカァァアアァァァン！！――

ゾウヤミーは爆発してしまい、後には一枚のゾウ・セルが地面に落ちていた。

「やはり、実力は８００年前と変わらないようね。というより、より増している」

「当然だろう。私とて、今の今まで遊んでいたわけではない」

女ライダーと女グリードは互いににらみ合い、より戦いを激しくしていった。

その次はオーズ対ウヴァ。

『オラァァ！』
「ハアァッ！」

ウヴァは右腕の大鎌、オーズはメダジャリバーを互いにふるって凌ぎを削りあっている。

『俺のコアぁぁぁ！！』
「だから渡せないって！」

≪ＳＩＮＧＬＥ・ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

「セイヤッ！」
『ぐおォッ！』

オーズはメダジャリバーにセルを一枚投入して開放し、ウヴァに斬撃を浴びせる。

「まだまだァ！」

≪ＤＯＵＢＬＥ・ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

「セイヤァァーーッ！！」
『グオァァァ！！』

今度は二枚のセルを用いて、ウヴァの身体を切り裂く。
それによって得た隙を利用して、

「アンク！ラトラーター！」
「しくじるなよ！」

アンクは二枚のコアメダルをオーズに投げ渡す。
オーズはタカをライオンに、バッタをチーターに換えた。

≪ＬＩＯＮ（ライオン）・ＴＯＲＡ（トラ）・ＣＨＥＥＴＨＡ（チーター）≫
≪ＬＡＴＡ（ラタ）・ＬＡＴＡ（ラター）！ＬＡＴＯＲＡＲＴＡＲ（ラトラーター）！≫

ライオンの頭、トラの腕、チーターの脚。

「ハァァアアアア！！」

ラトラーターコンボによる激しい閃光を伴った熱線照射（ライオディアス）により、

『んうぅ・・・・・・っ！』

ウヴァは思わず複眼を手で押さえてしまう。
熱線より閃光のほうが効いているようだ。
昆虫の目は人間のような単眼とは異なり、視界が数多もの六角形として構造されている分、ガメル程.Ｊｓないにせよ、この攻撃は効いていた。

（今だっ！）

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

オーズは閃光と熱線が治まりつつある中、コア三枚の力を解放し、身体と両腕と両脚を構えると、前方に出現した三つの黄色いリング

を、今再び光と熱を帯びながら駆けていく。
そうして遂に、
「セイヤァァアアアアッッ！！！！」
両のトラクローによるX字型の引っ掻き、ガッシュクロスが決まった。
『ぬぁあああああああああっ！！！！≫
直撃した一撃に、ウヴァは１００枚近くセルメダルを噴水のように放出してしまった。
だがそこへ混じって・・・！
（コアメダル！）
アンクは右腕（ぼんたい）を飛ばし、ウヴァから出てきた二枚のコア――カマキリとクワガタを手中に収めたのだ。
『お・・・おのれ、俺のコアを・・・！』
ウヴァはボロボロになりながらも恨みがましい声を出している。
今にも呪詛のオーラが現れそうになった時、一つの朗報である悪報が舞い込んでくる。
それは一機のバッタカンドロイドだった。
『ウヴァ君。そろそろ時間です。引き上げてください』
『なに、ふざけるな！コアを二枚も盗られたまま帰れるか！』

自分の肩に乗り、真木の言葉を伝えるバッタカンに怒鳴り散らすウヴァ。

『言っておきますが、これは四季崎の命令でもあります。もう一度こちらの言い分を聞きますか？』

『くっ・・・・・・わかった、帰ればいいんだろ！？』

ウヴァはほとんどヤケクソ気味に吐き捨て、ガメルとメズールとゼントウに大声で呼びかける。

『撤収だ！お前ら早く撤退しろ！』

それを聞いた三人のグリードは、

『あら、もう時間なのね。――また会いましょう、クエス』

『あ、メズール、待ってぇ！』

『ふむ。今宵今晩はここまでにござるな』

さっさと退散していってしまった。

『坊や達。私からの冷たいデザート、思う存分味わってね♪』

メズールが最後にそう付け足すと、四人のグリードは完全に森林の暗闇へと姿を消した。

しかしその代わりに現れてくれたのが、これまた体力的にも持久的にも面倒な奴等だった。

森の置くからゴゴゴゴゴ、という効果音がつきそうな勢いでこちらにやってくるのは、

『『『『ンシャーーーッ！！』』』』
『『『『シュシューーッ！！』』』』

合計で５０体はいるであろう水棲系ヤミーたち。
電気を逆らせるウナギヤミーと、口から黒い墨を吐くタコヤミー。

それを見たオーズは、

「ここは俺に任せてください！」
「映司、さっき盗ったのを使え」

アンクは昆虫系三枚をオーズに手渡して、オーズ自身は手馴れた手付きで換装し、オースキャナーを走らせる。

≪ＫＵＷＡＧＡＴＡ・ＫＡＭＡＫＩＲＩ・ＢＡＴＴＡ≫
≪ＧＡＴＡ・ＧＡＴＡＧＡＴＡＫＩＲＩＢＡ！ＧＡＴＡＫＩＲＩＢＡ！≫

クワガタの頭、カマキリの腕、バッタの脚。
昆虫系のガタキリバコンボだ！

「いくぞ！」

オーズは全身に力を入れると、その瞬間に――一人が二人、二人が四人、四人が八人、八人が十六人っといった具合に分身していき、最終的には五十人にまで分身する。
これぞガタキリバコンボの固有能力、ブレンチシェイド！

「「「「「「「「ハアアアアアア！！」」」」」」」」

「「「「「タァァァアア！！」」」」」
「「「「「「ウオオォォォォォ！！」」」」」」

ガタキリバたちは一斉にウナギヤミーとタコヤミーの大群と正面衝突する。
５０ＶＳ５０――それぞれ一対一のタイマンバトル。

ある者は頭のクワガタホーンでの頭突き、ある者はクワガタホーンでの雷撃。
ある者はカマキリソードでの二刀流高速剣術。
ある者はバッタレッグでの蹴り攻撃や跳躍による翻弄。

正直に言うと、ガタキリバ一体一体のスペックはヤミーらのそれを越えていた。

『ンシャーーッ！』

ウナギヤミーは電気を纏った鞭を振るうも、

「ハアッ！」

カマキリソードの刃がそれを切り刻む。

『シュシューー！！』

タコヤミーは黒い墨を吐き出すも、

「ダアッ！」

クワガタホーンの雷撃に掻き消される。

ヤミーたちは数多くの戦闘で経験値を稼いでいる火野映司の変身したオーズ・ガタキリバコンボの前に全ての抵抗手段を潰されていた。

≪≪≪≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫≫≫≫
≪≪≪≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫≫≫≫
≪≪≪≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫≫≫≫

五十人のオーズは一斉にスキャニングチャージを発動。
全員の脚部にエネルギーが伝達されていき、

「「「「「セイヤァァァァァ！！！」」」」」
「「「「「セイヤァァァァァ！！！」」」」」
「「「「「セイヤァァァァァ！！！」」」」」

総勢五十人によって放たれる同時攻撃技・ガタキリバキック！
それらは一人一人、一体ずつのヤミーの身体にドデカい一撃を浴びせた。

『『『『『ンシャアアアアア！！！』』』』』
『『『『『シュシュウウウウウ！！！』』』』』

そうして、五十体のヤミーは等しく爆発しては消え去り、後には何百何千ものセルメダルが地面に落ちていた。

＊＊＊＊＊

方や、四季崎の塒である武家屋敷。
その居間では、四季崎・真木・カザリ・ロストがウヴァ達の帰りを待ちながら、四人で卓袱台を囲んでいた。

「一応、作戦は成功だな」
「ええ。しかしコアが二枚、向こうの手に渡ったのは痛かったですね」
「心配すんな。どうせ何時か必ず奪い返せる代物だ」

真木とは反対に、陽気に振舞う四季崎。

「でもさ、そんな意味のなさそうなメダル、一体なんに使うの？あの虹色のメダルの方がよっぽど役立ちそうだよ」
「フォース・コアのことか。アレは言うなれば辿り着く為の材料だな。しかし、今は”コッチ”の方が重要だ・・・・・ことを上手く進めるために」

カザリに返事した四季崎は、懐からあるものを取り出す。
ウヴァ達と言う囮を使い、グリード四体で挑んで得てきたもの。

そこには、曇りガラスの如く、クリアに分類されるけれども不透明なコアメダルがあった。

「・・・・・面白そうだね、それ」
「お、わかるか小僧？」

そして、この場で初めて喋ったロストに、四季崎はニヤけながら答

える。
この先にある新しい策略に思いを馳せながら。

＊＊＊＊＊

トライブ財閥会長室。
普段は豪勢で綺麗なつくりをしているこの場所は、この夜に限っては荒れていた。
荒らされたといったほうがいいだろう。

「くッ・・・まさか・・・」
「直接くるとは、思いもよらなかったっすよ・・・・・・」

床にはバットと吹雪が仰向けや上向きになって倒れている。
その身体と服装はボロボロだった。

「ホント・・・今日は最悪の日ね・・・」

ルナイトも、机に身体を寄り掛からせながら、ゼェゼェと息を吸って吐き、生傷だらけの身体を無理に起こした。

「もう財閥(ここ)で、不用意なコアを置いておくのは拙いわね」

ルナイトは傷が痛むのも省みずに、特別な鍵穴のついた引き出しに手をかけ、ポケットから鍵を出して鍵穴に差し込んで開けた。
そして、無作法な手付きで引き出しを開け、中に入っている古びた

奇妙な箱を取り出して机上に置いた。

「時期を見計らって、火野君に託すとしましょう」

その箱は古びていながらも、どこかの王族が所持していそうな気品を感じさせた。

ルナイトは箱を開けて中身を確認すると、決意を新たにしながら、これら三枚のことを告げる。

「・・・・・・Ｒｅｐｔｉｌｅ・・・・・・」

物語という歴史は、加速へのレールに乗った。

行き着く先にあるのは、虚無に還元されし終末か？無限の進化をゆく再生か？

暗殺とギャグと電撃作戦（後書き）

四季崎記紀

『刀語の世界』における戦国時代を実質的に支配したと言われる伝説の刀鍛冶。その正体は何千年にも渡る占術師の家系において史上最大とされた未来予知能力者で、通常系変体刀九百八十八本と完成形変体刀十二本を何百年も先の未来の技術を逆輸入して製作した。尚、虚刀流開祖の鑢一根とも出会い、虚刀流が誕生するにあたって協力した人物でもあり、鑢一根とは親友関係にあった。

今作品に登場する彼は、当然オリジナルではなく、四季崎本人が並行世界に存在する魔術師や錬金術師の技術を盗み、自分と完全同一の人形にコアメダルを与えてグリード化させた存在（その方法で、七実・竜王・白兵なども複製しグリード化させた）。なのでグリードとしては、欲望を意味するＤｅｓｉｒｅの綴りを変えて『デシレ』と名乗っている。

完成形変体刀と同じ銘の文字が彫られた特異な金色のコアメダルを十二枚ほど宿していて、これら全てを取り込むことで刃介は完全変化する。

今作品では８００年前に完了系変体刀・虚刀『鑢』以上の刀を創るべく、その素材として鋼一族をブライの最適合者として選んだ。そして、刃介の代でそれが叶うに値する状況になったとして表舞台に現れた。

彼の目的は刃介を完全系変体刀・我刀『鋼』として完全変化させた後、全てのコアメダルの器とすることで『超完全体』へと進化させ、神をも超越した全知全能の存在にすることを目論んでいるようだが、その真意は未だ謎のままである。

年齢：不詳　職業：刀鍛冶　所属：無所属　身分：当主　所有刀：呪刀『鎮』
身長：不詳　体重：不詳　趣味：不詳

呪刀（ジュトウ）『鎮（シズメ）』
四季崎が現代の『ブライの世界』でつくった新たな変体刀。
切っ先から柄の末端を含めれば１ｍ５０ｃｍに達する長刀。影のような漆黒の刃とは反対に、柄と鍔は純白で梵字が彫ってある。黒鞘にも３ｍ～から４ｍもの経文が巻き付けてあるなど、オカルト要素を随所に盛り込んでいる。
鞘の経文は、所有者の意思に応じて、対象を捕縛する封印具としても活用される。
尚、現段階での限定奥義は未だ不詳である。

フォース・コア
通称『虹色のメダル』と呼ばれる未知のコアメダル。
四季崎が造ったコアを基盤とするグリードのパワーを、乗法の如く増大させては暴走させる力を秘めている。だが８００年前の錬金術師と魔術師によって造られたコアを基盤とするグリードに対しては、トランプのジョーカーやワイルドのように、コア一枚分のエネルギーとなるだけである。
尚、四季崎の手元にはこのオーメダルが多数あるようで、ガトウを抑え込む為やアルトリアの力を暴走させる為、ウヴァの復活の際などにも用いている。

錆白兵

『刀語の世界』において、”剣聖”とまで謳われていた凄腕剣士。
完了系変体刀の候補作である全刀『錆』とされる一族の末裔だったが、全ての物体を刀とする特性が不十分だった為、自らを『失敗作』や『錆まくりの折れた刀でござる』とまで言っていた。
しかし、完成形変体刀の中で最も扱いの難しい薄刀『針』を難なく使いこなすなど、純粋に剣士としての技量は一級品に値するものである。

前述の四季崎記紀の説明文に記載されている通り、彼もまた本物と完全同一の人形にコアメダルを与えられてグリード化した存在である。
だが、性格も能力も原典とは何も違わず、度々キョトウとなった七実の相手役をしては時間稼ぎをしたり、ヤミーを作成してのサポートなどを主要な務めとしている模様。
グリードとしての名前は『ゼントウ』で、犬系・甲殻類系・植物系のコアメダルを担当している。

年齢：二十　職業：堕剣士　所属：無所属　身分：浪人　所有刀：薄刀『針』
身長：五尺三寸（約１６０ｃｍ）　体重：十一貫五斤（約４４？）
趣味：剣法

必殺技
・爆縮地（ばくしゅくち）
・逆転夢斬（ぎゃくてんむざん）
・速遅剣（そくちけん）
・刃取り（やいばと）
・一揆刀銭（いっきとうせん）
・薄刀開眼（はくとうかいがん）

不穏の影と町内会長と策士ロスト

その日、鑢七実は夢を見ていた。
本物が「刀語の世界」で生きていた頃はおろか、今の偽者すら疎らにしか見ない夢。
それはいつも決まって、彼女が幼い時の記憶が元になった夢・・・・・・正確には、彼女の過去をそのまま投影した夢と言える。

まず最初に、父の鑢六枝の言葉。

”――七実――お前は、お前は余りにも、例外的過ぎて――俺には――お前を育てることは――できない――”

あらゆる武術家にとって、七実はいわば恐怖と忌避の対象だ。
ありとあらゆる努力と修行を、無意味にしてしまう。

”お前は化物だ――お前は生まれてくるべきではなかった――”

次には母、みぎりの声。

”――可哀相、可哀相な子――貴女は本当に可哀相――”

嘆きの声も、やがては。

”――貴女は、楽に死ぬ事さえできないなんて――貴女は死ぬ事もできず、生きることもできず――”

哀れみの声となる。

”この生き損ない――あなたは、貴女なんて、貴女なんて、死んで楽になればいいのに――”

（下らない）

七実は何を今更と思った。
これでは死霊山や護剣寺の再現と何も変わらない。

（消えろ）

そう念じてみると、六枝とみぎり――二人の幻影は消え去る前にこういった。

”――覚悟すらないというのに――”

（そうかもしれない）

七実は否定しなかった。
才能の化身である彼女には、覚悟など必要ない。

得ようと思えば何時でも得られる。
勝とうと思えば何時でも勝てるのだ。
何の修行も要らないし、何の決意も要らない。

だから、彼女には覚悟の意味がわからなかった。
そう、所有者と出会うまでは。

（でも・・・・・あの人の為なら、私は・・・・・）

鋼刃介の為なら、七実はあらゆる悪行だろうと覚悟だろうと、背負

うことができる。
初めて知った恋心――それが彼女にとって唯一の覚悟の証だ。
完了系変体刀・虚刀『鑢』にとって、究極の形の一つがここにあった。

＊＊＊＊＊

「・・・・・・・・・・・・・」

鋼家の寝室。
刃介が中央となり、その左右では七実と竜王が寝ていて、川の字状態になっている。
七実は三人の中で一番早く目覚めるのが通例となっていた。

「はぁ」

何時ものように、溜息の似合う姿だ。
七実は上体を起こし、まだ寝ている刃介と竜王の寝顔を見る。

「覚悟・・・・・・ですか」

目覚めたばかりもあって、まだ夢の内容は覚えている。
だからこそ、彼女は今こうして彼の傍に居るのだ。

「父さん、母さん・・・・・私、所有者（こいびと）が出来ましたよ。そして、

今までなかった覚悟（モノ）も――――」

独白するように呟く七実――――そこには一片の嘘さえない。
七花がとがめの野望と復讐心に惚れ込んだ様に、七実は刃介の深遠なる欲望に惹かれていた。

そんな時、

「あのー、すいません」

妙にテンションの高いおっさんボイス。

「・・・・・・はい」

若干雰囲気をぶち壊されて苛立つも、七実は寝巻きの襦袢を整えて行く。

「いやぁすいませんね。こんな朝っぱらから」
「お気になさらず。それで、何のご用件でしょう？」
「はい。私、新しく町内会長になった下田と申しまして、今後からこの夢見町に防犯カメラを多数設置することに致しました」

下田は不自然な笑いをしつつ、七実に説明する。
七実は試しにと外に出ると、確かに防犯カメラがあるのを見た。
もっとも、この鋼雑貨店だけでなく、この辺一体全ての建物と道を監視するように、多数設置されていた。

「町の皆さんが息苦しくなるのでは？」
「すいません。危険かつ不審な行動をとらない限りは、何の問題もありませんので」

「しかし、これはちょっと・・・・・・」

七実もこれだけの機械の目に絶え間なく見られていると思うと、決して良い気分にはならない。

「兎に角、宜しくお願いします！」

下田はそれだけいってまた別の建物や家に向っていった。

「はぁ」

そんな下田を見て、七実はまた溜息をついていた。

＊＊＊＊＊

その頃アンクは、

「――――――ッ、ヤミーだ」

暗い夜の空に轟く雷鳴と共に敵の気配を察する。

「映司、行くぞ！」

アンクはソファーから飛び降りた。

だが映司はまだ眠っている。

「おい映司！」

アンクは当然映司を叩き起こそうとするが、それはすぐに止まる。

そこには火野映司ではなく、泉信吾がアンクと同じ服装で、口から血を流しながら眠っていた。

「――――――ッ！」

驚く他なかった。

信吾の身体は今自分が使っている筈なのに。

アンクは信吾の身体にかかっているのは、実は布団ではなく、何時の間にか赤い羽根に変わっているのを理解すると、恐怖にも似た感情に駆られて後退していってしまう。

「アンク」

そこへ映司の声がした。

でもそこには何時もの暖かみがない。

「お前のメダル――――お前のメダル、貰うよ」

信じられない一言が、さも当たり前であるかのように、あの映司の口から出てきた。

「・・・映司・・・お前・・・」

アンクはドアに後退するのをやめ、次は窓に向って後ずさりしていく。

だって、今の映司は映司じゃない。まるで、『紫』の力に呑まれたかのようだから。

そこへトドメを刺すように。

「君は僕なんだから、早く僕の所に戻って」

窓の外では、ロストが上下逆の状態で現れる。

「・・・・・・ふざけるな！」

アンクは『右腕』を突き出す。

いや、突き出そうとした。

――ガシッ――

「オーズが組むべきアンクは、お前じゃない」

映司が紫色を纏いつつ、『右腕』を冷淡に掴んだのだ。

「・・・・・・・・・・・・」

ロストはそのまま部屋の中へと窓から入ってきた。

おびえにも似た表情を浮かべるアンクも、今では赤子同然。

怪人の姿となり、ロストは素体がむき出しになった右腕を動かす。

『お帰り、僕』

そして、

――ガシッ！――

＊＊＊＊＊

「――――――ッッ！！？」

そうして、アンクは夢の世界から戻ってきた。
ロストがここへやってくる可能性はともかく、映司にまで裏切られるという、最悪の悪夢に、アンクは鼓動を一気に早めて息を荒げる。

「なに？どうかした？」

後ろからは何時も通りな映司の声。
振り向くと、そこにはモップを手に掃除している映司の姿。
アンクは千鳥足でカウンターの席から一気に映司に近づき、

――パシッ――

映司の顔を掴む。

「な、なんだよ？」
「お前の中の紫のメダル、なんともないだろうな？」
「あ・・・今は、別に・・・」

と率直な答えを返す映司。

「絶対に抑え込んどけよッ！！」

怒鳴るように、アンクは叫んだ。

「なんだよ急に？」

映司はそういいながらアンクから離れて掃除を再開する。

だがアンクは、

「クソッ・・・なんでこの俺が夢なんか・・・・・・！？この身体のせいか・・・？」

店の奥で、なんともいえない苛立ちと困惑に遭っていた。

そんな時だった。

「おはようございます～！」

陽気な男の声が、店のドアが開かれると同時に聞こえてきた。

やってきたのは着流しに黒い羽織、麦藁帽子といった服装の中年男性だった。

「朝早くにすいません。私、町内会長になりました――下田権造と申します」

新しい町内会長の下田は、名刺を映司に差し出して自己紹介する。

「え・・・ああ、お世話になってます」

「あの、店長さんは？」

「ちょっとまだ・・・・・」
「ではちょーっと確認して貰えますか？」
下田は腰が低い割になんかテンション高めで話を進めていく。
”すいません”と付け加えて。
「――――フッ」
アンクはそんな下田を見て、面倒そうに声を出した。
映司は下田につれられ、店の外に出る。
下田は電柱や標識などにあるものを取り付けたといった。
それは何かというと、
「今後の町内の安全のために、防犯カメラを設置しましてね」
「な、成る程」
といった映司だが、いざ周囲を見渡してみると、クスクシエ周辺から見える物だけでもかなりの数がある。
夢見町全体となれば、いったいどれだけの数のカメラを仕込んだのやら。
「随分沢山ありますね」
「世の中物騒ですからねぇ。それで、不審者を取り締まってるんですが、その中でですねぇ」
下田は妙な笑いを顔に貼り付けたまま、ある物を映司に見せる。
「これ、すいません」

「？――――うおッ！？」

アンクがクスクシエの屋根に上っているシーンを収めた写真。

「この方、昼夜問わず窓から出入りしてますよね？――あのすいません。それで貴方、以前公園で寝泊りをしていたという、目撃情報が・・・・・・すいません」

何度も頭を下げてくる下田。

正直、つっかかりにくい。

「すいません。それでですね、町を健全に保つために・・・・・・自主的な退去を、お願いできればと・・・・・・」

「そんな、退去っていきなり・・・・・・！？」

「町を為なんです。どうか、どうか宜しくお願いします」

下田はまた頭を下げて其の場から歩み去ってしまった。

呆然とする映司に構うことなく。

「なんなんだ？」

「俺にも何がなんだか」

アンクは下田の行動と言動に首を傾げ、店の中に戻っていった。

映司は首をかきながら、下田の後ろ姿をみている。

今度はその辺の主婦に話しかけているようで、あの低姿勢と妙な笑いをしながら、呼びかけを行っている。

映司もうついていけず、店の中に戻る事にした。

しかし、この時から既に災いの目は地表に顔を出していた。

下田が町の住人に呼びかけを次々に行う中、一人の少年が木の枝の上でそれを見ていた。
左手に、一枚のセルメダルを手にして。

「取り戻さないと、僕を・・・・・・」

少年の左肩から赤い翼が現れていた。

＊＊＊＊＊

同時刻、刃介と七実は少し遠出してデパートにいた。
いつもなら古びた店や商店街で買い物を済ませる鋼家の面々だが、今日に限っては買おうと思ったものが商店街では売っていないため、定価での購入覚悟でやってきたのである。

因みに竜王はというと、買うものも特にないので此処にはおらず、街中をぶらついている。

「んで七実、目ぼしいものはあったか？俺はとっくに買っといたが」

和風コーナーから刃介が二袋を片手にやって来る。
七実はというと、何かを収納するケースやバッグといった物のコーナーにいた。

「あ、刃介さん。丁度こっちの買い物も終わったところです」

そういう七実の手にも袋がぶら下っている。

「なに買ったんだ？」

「それは後での秘密ですよ」

「そっか。じゃあ先にこいつを竜王に渡すか」

今日こんなところに来て買い物しに来た理由は、鋼家の面々のモチベーションを上げるべく、贈り物を買い合おうと言う物だった。

しかし、竜王はまだこの時代の文化については深く馴染んでいるわけではない上、忍者である彼女が選びそうなものがデパートで手に入るとも思えず、已む無く彼女をショッピングから除外したと言ってもいい。

「あいつ喜ぶかな？」

「さあ？それは本人に渡さないことには」

刃介は七実と竜王用に二つ、七実は刃介用に一つだけ贈り物を買っていた。

後にこれが、みんなの絆をより深めるのだと信じて。

＊＊＊＊＊

それから幾ばくか経った頃、帰ってきた知世子と比奈に、例の写真を見せるやいなや、二人の表情は怒気のそれに豹変した。

特に知世子はカンカンである。

「なによこれ？いくら町内会長でもこんな権利ないわよ！こんな隠し撮りしたり、映司くんのこと調べたり！おまけに出てけって！！」

知世子は写真を破り捨て、怒りを露にする。

「酷すぎます。映司君が出て行くなら私だって！」

「ダメだよ比奈ちゃんまでそんな！」

「だって！」

なんだか荒れてくる状況において、アンクだけは冷蔵庫からアイスを取り出して齧りつつ、

「なにをガタガタ言ってる。別に出て行く必要ないだろ」

「その通り！大丈夫！私今からきっちり講義してくるわ！」

行動力の塊とさえ言える豪快振り。

「全く！今度の町内会長は腰の低い人だなーって思ったけど、とんでもないわぁ！！」

怒りＭＡＸで外に出ようとする知世子。

だが、

「あッ――それはそうとアンクちゃん聞いたわよぉ。今日誕生日なんだって？」

「――はっ？」

「え・・・？」

アンクも映司も、聞き覚えのないことだった。

「おめでとう！なんで言ってくれないのよぉ？今夜は盛大にパーティーしましょ？お店なんて御休み」
「・・・・・・意味わからん」

アンクはそれだけいって上の階に行ってしまう。

そこへ比奈が映司にこっそり説明するべく、店の隅へ。

「え・・・刑事さんの、誕生日・・・？」
「うん。それで、やっぱりお祝いしたいなと思って――――」

比奈はこっそり買っといた品を黒い紙袋の中に入れていた。
プレゼントは青い包装紙で包み、赤い紐で閉じている。

「プレゼント選んでたら、知世子さんに会っちゃって」
「アンクの誕生日って言っちゃったんだ」

なんて妙な展開になっていたようだ。
そこへ知世子は、

「講義してくるわ。後は任せたわ」

変に男前な雰囲気で出て行く知世子。

「・・・・・・良いんじゃない」
「え？」
「やろうよ誕生日パーティー！鋼さん達も誘ってさ。アンクは刑事さんの代理ってことで」

＊＊＊＊＊

鴻上ファウンデーションの会長室。
そこでは、烈火と後藤が呼び出されていた。

烈火は何時もどおりのラフな服装で如何にも学生という感じだが、後藤は濃い緑のジャケットを羽織っていて何処か傭兵的雰囲気がある。
そして、二人の傍らには多くのセルメダルを収納したリュックサック型のケースが置いてある。

「Ｈａｐｐｙ　ｂｉｒｔｈｄａｙ　ｔｏ　ｙｏｕ！」

鴻上はピアノで誕生日の歌を弾きながら歌っていた。

「新しい仮面ライダーバース、後藤慎太郎くん！ブレイズチェリオ、花菱烈火くんの誕生だ！」

二人を正式なライダーシステムの後継者とする通達のため、鴻上はここに二人を呼びつけたのだ。
後藤のところには里中がケーキを運んでいて、ケーキには”新・仮面ライダーバース　後藤慎太郎”とチョコムースで書かれている。

対する烈火には。

「はい、花菱くん♪赤ワインベースでつくった、取って置きのカクテルをご馳走するわ。あ、勿論ノンアルコールね」

ルナイト・ブラッドレイン・シルフィード自らが祝いの祝杯を齎していた。

「伊達君と金女くんが抜けた穴をしっかりと埋めてくれたまえ！」

「はい。正式に許可して頂いた事、感謝します！」

「俺も全力でやってやるから、期待してくれよ！」

後藤と烈火はそう意気込む。

「ただし、問題が一つ」

鴻上は演奏をやめて立ち上がる。

「チェリオシステムは忍刀『鎖』があるから何とかなるとして・・・・」

「後藤君も体感したとおり、バースには、サポートがいたほうが戦いやすい」

二人の会長はそう断言する。

「それは、確かに・・・・・・しかし、簡単に選んで頼めることでは」

「私が選んでおいたよ！」

すると鴻上の視線は後藤の横にいった。

勿論それは烈火よりさらに横。

つまり、

「よろしく」

里中エリカ。

「新しいコンビの誕生だぁ！Ｈａｐｐｙ　ｂｉｒｔｈｄａｙ. Ｈａｐｐｙ　ｂｉｒｔｈｄａｙ!」

「まぁ・・・頑張ってね?皆の希望ある戦いを祈って、乾杯！」

謳う鴻上に対して、シルフィードは赤ワインが注がれたグラスをカチンと打ち鳴らした。

＊＊＊＊＊

その頃の映司らは。

「なぁ頼むよ。刑事さんの代わりにパーティーに出てくれ！」

「下らないんだよ。なにがパーティーだ」

「比奈ちゃんへの恩返しと思って！」

「あ?恩返し?」

何時俺がアイツに貸しを作った?とでもいうような表情。

「ほら、あの時にもうお前が憑いてなくても刑事さんが助かるって聞いたとき、比奈ちゃん言ってくれたろ」

――どうする？アンクに、出てってもらう？――
――もう少し、お兄ちゃんと、一緒に居て――

「・・・・・・・・・・・・」

「刑事さんの身体使えてるのは、比奈ちゃんの御かングぅ！」

アンクは映司の口にアイスを突っ込んだ。

「恩に着せるな」

アンクはソファーから降りて

「この身体を使うか捨てるかは俺が決める。比奈の奴がどう言おうが関係あるか」

とアンクは言い切った。
しかし、この会話は全て壁越しで聞かれていたのだ。

（あの時、私がアンクにああ言ったのは・・・・・・）

比奈だった。
映司は部屋から出ると、

「あっ、大丈夫、もっかい話して見るから」
「映司くん。もしあの時、アンクに出てって欲しいっていったら、映司くんどうしてた？」

だが、アンクの言葉が壁越しで比奈に伝わったという事は、この会話もアンクに聞こえているということだ。
映司の返す言葉とは・・・・・。

＊＊＊＊＊

真庭竜王は、夢見町をあてもなく散歩していた。
刃介と七実が帰ってくると思われる時間まで、適当に時間を潰すためだ。
因みに今日は赤い浴衣である。

そんな時、何となく通りかかった道で、妙に立派な和風の屋敷にさし当たると、正面の門でなにやら文句をいっている女性を見つけた。

「白石か・・・・・・？」
「あら、真庭さんじゃない！」

なんだか珍しい組み合わせになったな、と思いつつ、竜王は知世子に歩み寄る。
実はこの二人、一度だけ刃介と映司の手引きで顔を会わせたことがある。

「この家の人間になにかあったのか？」
「それがね、この家に住んでる町内会長ったら酷いのよ！町中に隈なく監視カメラ置くし、映司くんとアンクちゃんに出て行けって言うし！この家に来ても対応は奥さんで、会長はいないって言うし！」
「それはなんというか・・・・・・確かにやり過ぎだな」
「でしょー！？」

なんだか知世子が一方的に乗ってきた。

「だがさっき見ていたが、多少の文句程度でどうにかなる輩ではあるまい。時期を見計らってもう一度ぶつかってみればいい」

「んー・・・・・・真庭さんがそういうなら・・・・・・」

そうして、知世子と竜王は一旦引き返した。

＊＊＊＊＊

下田邸。

そこの家主である下田は、

「漸く帰りやがったなぁ！白石知世子、反抗的！真庭竜王、思慮深い！」

下田は監視カメラが映していた映像から、知世子と竜王に対する評価を鉛筆で紙に書いていく。

辺りにはレポート用紙だかメモ帳なんかの紙が散乱していたりするのだが。

監視カメラの映像は、ノートパソコン一台だけでなく、下田の目の前にある薄型液晶テレビ二台にも映っていた。

「えーっと、次はぁぁ・・・・・・」

狙いは別な方向に、

「おっ、今日はゴミの日じゃないぞ！――中田家、ゴミ出し違反・・・！」

続いて、畳みらしきものを家の前で干している家には

「八木家・・・・・・非常識」

非常識なのはこっちである。

「清水家、敷地からの、はぁみぃだぁしぃ」

車の洗車をやっているだけの清水家。
だがそんな、酷評？を受けた連中はというと、

『きゃあああアア！！』
『うわアアアああ！！』
『ぎゃあああアア！！』

白ヤミーに襲われていた。

「へっへっへっへへへへへ！！」

下田はその映像を見て愉快そうに笑っていた。
しかし、

「ん・・・！」

七番カメラ――クスクシエを監視するカメラから、アンクと映司の姿が映る。

そして、

「またあの二人ぃぃ！！」

別のカメラには、ヤミーの気配を察して大またで走る刃介と七実の姿まであった。

「それにこいつらも！！」

＊＊＊＊＊

そんな時、一人の若者が橋の上から不要になった古い家具や道具を土手に捨てていた。

いわゆる不法投棄というやつだ。

だが勿論そこも監視されていて・・・・・・。

『うぅぅっ・・・・・・！』

「あっ、うわぁっ！？」

青年は白ヤミーの登場と攻撃に怯え、成す術もなく橋の下に落とされ、背中から土手に落ちてしまった。

そこへ、

「あらよ！」

刃介が白ヤミーを蹴り飛ばした。

「おい、さっさと失せちまえ。――あっ、卓袱台とかは俺が貰っていくぞ？」

「それから、不法投棄は犯罪ですよ」

ついでにリサイクル的なことも忘れていない。まあ、実際はもったいないと思ったからだろうが。

刃介の欲望丸出しな一言と、七実のちょっぴりとした善意的一言。

「ひえぇぇぇ！！」

青年は卓袱台もカラーボックスも古い電化製品もおいて逃げてしまった。

「火野、行くぞ」

「はい！」

同時に駆けつけていた映司にも指図し、二人同時に白ヤミーへ拳と蹴りを喰らわせる。

そこへ、

「映司！」

「アンク！」

アンクが現れ、映司に三枚のコアを投げ渡す。

刃介もそれを観て、ドライバーを装着する。

「「変身！」」

≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＥＮＢＡ≫
≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！ＲＩＯＴＥ！ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！≫
≪ＴＡＫＡ・ＴＯＲＡ・ＢＡＴＴＡ≫
≪ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！ＴＡＴＯＢＡ！ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！≫

ブライとオーズに変身すると、二人はトラクローと魔刀『釦』を展開・装備して白ヤミーに斬り掛かろうとする。

『ウォォォ・・・・・・！』

だが、そこへもう一体の怪物、全身が鋭利な切っ先で構築された鉄色のナマクラヤミーが現れる。

「四季崎まで絡んでるようだな」

ブライが監察するようにナマクラヤミーを見やる。
すると、白ヤミーはその間に、全身を赤い卵で包み込む。
そしてソレが割れると、

『ホッ！ハッ！』

なにやら似非拳法みたいな動きをとる、なんだか頭部に変なシワがやたらとあって気色悪いヤミーが！

「ニワトリ・・・・・というか、軍鶏（シャモ）？」
「ということは・・・・・・」
「チッ、また俺のメダルで遊んでるのか」

ロストもこの件に絡んでいるということだ。

『オーズ、ブライ！邪魔は止めてもらおう！』
『オマエラ、邪魔ダ！』
「上等だな！さっさとセルに両替してやる！」
「よし、行くぞ！」
戦闘開始！

＊＊＊＊＊

グリードの洋館。

「ヤミーを造ったようですね、二人共」

真木は何時もの場所で、中央の階段を下りつつ、カザリとチェスをしているロストと、”来るべき終末の絵”の前で座る四季崎に話しかける。

「早く僕を僕のモノにしなくちゃいけないから」
「かっかっか。流石はアンクの片割れだ」
「確かに、頭（ここ）の成長具合は凄いよ」

そうしていると、ロストは駒を動かして「チェック」という。
カザリも「ほらね」と言った。

「成る程。ここまでハッキリ意識が確立していれば、確実にもう一人のアンク君を取り込めるでしょう」

真木は何時もと変わらない声音だ。

『８００年前とは違う、新しいアンクってわけね？』

「――――そうなります」

真木はメズールが肩にかけてきた手を振り払って答えた。

「チェック」

真木は盤上の駒を勝手に動かす。

そこへメズールも、

『チェックメイト』

駒を勝手に動かしてキングをとった。

『詰めが甘いわよ。ドクターの坊や』

そういわれて、人形の頭がガックリとくる真木。

『ん～～～！』

さらにガメルがこちらに突進し、盤上の駒を全て床にぶちまけた。

『メズールぅぅ、俺つまんない！』

『あらあら・・・・・』

どうやら最近かまってもらえず、この始末の模様。

「あーあ、メズールの悪い癖だ。ドクター、気に入られちゃったみたいだね」
「・・・・・・迷惑です」
率直な感想を述べた。
その時、
『それはいいが、ヤミー二体だけでどうにかなるのか？』
ウヴァが入り込んでくる。
『あっちにはリュウギョクと虚刀流がいるぞ』
「わかってるって。その為にも白兵には、なんかあったらヤミー差し向けるよう言っている」
四季崎はそうウヴァに言葉を返す。
そんな面々とは距離をおくように、ロストはガラスの傍にたった。
「僕は、僕を――――」

＊＊＊＊＊

所戻って武部橋の周辺。
軍鶏ヤミーとナマクラヤミーとの戦いを吟じるオーズとブライ。
軍鶏ヤミーはというと、あの胡散臭い拳法は伊達ではなかったよう

で、思いのほかオーズを翻弄していた。

『ハッ！』

軍鶏ヤミーは背中や肩から赤いリボンを大量のだし、それをオーズに絡めて行く。

「なんだこれ？」

困惑するオーズをよそに、何度も何度も、軍鶏ヤミーは似非拳法の動きをしながらリボンを増やしていく。

一方でナマクラヤミーはというと、

『斬ッ！』
「ヤバッ！」

両腕を振るっただけで、光速レベルの斬撃刃を飛ばしてきたのだ。恐らく切れ味については、斬刀『鈍』と同等だろう。

「映司、メダル換えろ！」
「刃介さん、これを！それから頭は持参ので」

アンクは三枚、七実は一枚のメダルを相棒に投げ渡す。
上手くキャッチした二人は、すぐに行動に移した。

≪ＳＨＡＣＨＩ・ＧＯＲＩＬＬＡ・ＣＨＥＥＴＡＨ≫
≪ＹＡＩＢＡ・ＯＮＩ・ＴＡＣＨＩＵＯ≫

オーズはシャゴリーター。

ブライはヤイオニタへとメダルチェンジ。

まずオーズはチーターの俊足でリボンを避けて走行する。
軍鶏ヤミーはそれにいらだったのか、頭から炎を噴射するも、シャチヘッドから繰り出される水流によって消火。そこへオーズは一気にゴリバゴーンでキツいパンチをお見舞いした。

ブライの方は、真っ向からナマクラヤミーに挑んでいた。
ナマクラヤミーは当然腕を振るい斬撃刃を飛ばすが、ブライは魔刀を盾にして進み、接近すると、タチウオレッグにある魚刀『鋒』を脚と共に振るって攻撃。
そこへさらにヤイバヘッドでの頭突きつきだ！

『オワアアアッ！！』

軍鶏ヤミーは川に落とされ、

『クッ！』

ナマクラヤミーは状況の悪さを悟ってどっかへ逃げてしまった。

「逃げられたか。まぁいい、あんまメダルが溜まってる様子じゃなかったしな」

ブライはそんなことを言っていたが、この光景も全て、下田によって監視されていたことを、彼等はまだ知らない。

＊＊＊＊＊

一方、後藤と烈火は会長室でケーキを食べたりしていた（カクテルはさっさと飲み干した）。

「バースに必要なサポートは色々あるが、一番必要なのはチームワークだ」

後藤はソファーでファッション雑誌を読んでいる里中に説明しているが、

「それが崩れれば「大丈夫ですよ。私たち既にチームじゃないですか」

里中は聞き流している節がある。

「私が会長秘書で、後藤さんは秘書補佐。因みに役職は今まで通りなので、私が上司ですから」

「はいはいはいはい。わかったわかりました」

後藤も後藤でなんか諦めている様子。

「大変だな、大人って」

「君もいずれ通る道だ」

烈火に対しても社会のルールを匂わせている。

んで、里中は腕時計を少しみて、

「そろそろ休憩終わりですね」

といってゴリラカンを手に取り、ピッという音を出させた。

「・・・・・スイッチ切ってたのか？」

「え、マジ？」

「休憩中ですから」

どこまでもマイペースな里中。

というか、さっきまで絶賛戦闘中だったわけだが。

「バカ、敵はいつ現れるか「後藤さん、チームワークですよ」・・・・・はぁ」

この調子に、さすがの後藤も溜息が出る。

烈火はさり気にケーキの上に乗っている、プレートを割ってその下半分を齧りながら感想を言った。

「ホント、面倒だな。会社ってよぉ」

「俺もついさっきから、そう思えてきた」

＊＊＊＊＊

映司と刃介らは、逃げていったヤミーの足取りを追っていた。

「まずはニワトリから探すぞ。鳥のヤミーは巣に定期的にいる筈だからな」

そう。変体刀系のヤミーについてはまだ詳しくわかっていないため、まずは軍鶏ヤミーから片付けることにしたのだ。
街中を走り回る四人――そうしていると、大通りで警官たちが住人になにか話している場面に出くわす。

すると、映司の瞳は紫、刃介の瞳は金色になっていた。
アンクはそれに勘付き、

――オーズが組むべきアンクは、お前はじゃない――

悪夢を思い返した。

「おい、一度力を使えたからって好い気になるな。暴走の危険は消えたわけじゃない」
「確かにそうですね。既にグリード化した刃介さんは兎も角、火野さんは人間ですし」

グリードとしての意見を述べる二人に映司は

「でも気をつけるのはアンクもだろ？鳥のヤミーが現れたってことは！」
「ロストの奴が狙ってるということだからな」
「ロスト、か。あの目障りな偽者にはちょうど言い呼び名だ」

アンクはロストのことを嘲笑いながら、ヤミーを求めてまた走り出す。

＊＊＊＊＊

下田家。

「こいつらぁ・・・！」

下田は監視カメラの動きを制御するレバー式のリモコンを使いながら四人のことを監視していた。

だがその時、クスクシエのカメラに知世子がドアップで映ったのだ。

「んッ？」

そして、七番のカメラに袋が被せられた。

＊＊＊＊＊

そんでもって、肝心の知世子はというと。

「いいんですかね？町内会のカメラを・・・・・・」

比奈は持ち前の腕力で知世子に肩車をしていた。

「こういうのは話し合いで解決しなきゃ。それまでは保留！」

「それでカメラの視界封じか。中々斬新だな（これでヤミーのほう

へ、挑発できるかもしれん）」

竜王は影でこっそりとこういう工作を知世子の発案のもと行っていた。

「では次に行くか。脚立や梯子で届かない場所は私がやる」

「頼りにしてるわよ！」

＊＊＊＊＊

再び下田家。

今まで言い忘れていたが、下田が監視に夢中になっている間、その後ろで下田の妻が半紙と筆と墨を以ってして書道をやっていた。

和服を着てるだけ合って、中々の達筆ぶりのようだ。

もっとも、

『フッフフ～～！』

隣の間から軍鶏ヤミーが似非拳法のリズムで歩いてくるのが一番のシュールぶりだ。

＊＊＊＊＊

そしてまた知世子たちは、

「これが終わったらアンクちゃんの誕生日パーティーの準備しましょ」

「でも、アンク嫌がってたから」

「昔から変わらんな。あの捻くれ鳥は」

８００年前、戦闘場面でしかアンクと会っていない竜王だが、それでも大方の性格はつかんでいるつもりだ。

「それは知らないからよ」

「なにをだ？」

「誰かに祝ってもらう嬉しさとか楽しさとか」

などと言いつつ、梯子を木にかけて上る知世子。

向う先には監視カメラ。

先ほどと同じく、袋を被せておく。

「ようは食わず嫌いね。今夜はたっぷり口に放り込んであげましょう」

「そうですね」

知世子は梯子から降りて「よしッ」と意気込む。

だがそこへ、

「ッ、ヤミー！」

竜王が逸早く勘付いた。

『コラー！』
「鳥――ロストか」
現れた軍鶏ヤミーに竜王が警戒し、比奈が後ずさる中、
「え？なにこれぇ？」
なんか陽気な感じでいる知世子。
危機感の欠片もない。
「とりあえず一旦店にまで逃げるぞ」
「は、はい！」
「え、ちょ、待って！」
比奈は梯子、竜王は知世子の手を引いて走った。
『お前たち反抗的だぁ！』
「しゃ、喋った！なに、本物？って、なんの本物よ！」
「口を動かしてないで脚を動かせ！」
三人はそうして纏めて逃げている。
本来なら竜王がクエスになって戦うところだが、生憎知世子がいるのでは、グリードとしての力さえ使えない。
「（えぇい、仕方ない！）――二人共、ヤミーは私が何とかするから、先に行け！」
「え、行けって真庭さん！？」
「良いから行け！」

――ガシッ！――

竜王は知世子と比奈を荷物ごと持ち上げ、

――ブンッ！――

「「きゃあああああッ！！」」

向こう側へブン投げた。

「手荒ですまんが、今は逃げ延びる事を考えろ！」

「でも真庭さんが！」

「知世子さん、ここは任せて、私たちは逃げましょう！」

「で、でも「良いから早くしろ白石！」――は、ハイ」

漸く比奈と知世子が撤退してくれた。

そこへ、

「おい、竜王！」

「刃介、来たか！」

増援登場！

だが、

『来タ来タ』

ナマクラヤミーまでやってくる。

しかし、そんなことは関係ない。

「「「変身――！」」」

≪Ｒ・Ｏ・ＴＥ！Ｒ・Ｉ・Ｏ・ＴＥ！≫
≪ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！ＴＡＴＯＢＡ！ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！≫
≪ＢＡ・ＳＡ・ＲＡ！ＢＡＳＡＲＡ！ＢＡ・ＳＡ・ＲＡ！≫

オーズ、ブライ、クエスは早速戦闘に入った。

＊＊＊＊＊

その頃、後藤たちはというと、ゴリラカンの報せを受けて早速出撃しようとしていたが、里中が。

「里中！着替えなんかしてる場合か！」
「鋼たちに先を越されちまうぞ！」

烈火と後藤はメイクルームのドアをドンドンと叩いた。

「あんな格好で戦闘できると思いますー？」
「ったく、わかった先に行くぞ！」
「どうぞぉ」
「あぁもう女ってメンドくせぇ！」

苛立ちを露にしながら、烈火と後藤はメダルリュックを背負いながら現場に急いだ。

＊＊＊＊＊

≪ＴＡＫＡ・ＴＯＲＡ・ＣＨＥＥＴＡＨ≫
≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＳＭＩＬＯＤＯＮ≫
≪ＢＡＲＡ・ＫＹＯＵＫＥＮ・ＥＢＩ≫

タカトラーター、リュウオニドン、バラキビ。
それぞれ亜種形態になると、一気に敵へ突っ込んでいく。

『餌食ニナレ！』
『それしか能がない！』

ナマクラヤミーは貫手を繰り出すように腕を突き出し、光速レベルの斬撃を繰り出す。
軍鶏ヤミーもリボンを大量に放ってくる。

「って、うおわぁぁ！！」
「チッ、面倒な技だ」

リボンによってオーズは拘束され、ブライもさっきより本気がかった斬撃には近づきにくい様子。

「なら私が！」

そこへクエスが行こうとすると、

『おっと、、ソッチもだ！』

軍鶏ヤミーは漏れなくクエスにもリボンを巻きつけようとする。
クエスはキョウケンソードで必死にリボンを切り裂き続ける。

「火野！」
「鋼！」
「烈火！」
「後藤さん！」

更なる増援が到着。
烈火と後藤はメダルリュックを降ろすと、ドライバーを装着。

手首につけている腕輪に嵌めているセルメダルとブレイズ・コアをとり、

「「変身ッ」」

――チャリン――
――キリッ――
――カポンッ――

二人は展開されたフィールドの中で、次々と装甲をまとっては仮面で顔を隠し、新・仮面ライダーバースと仮面ライダーブレイズチェリオに変身する。

『バースか！』
『ブレイズチェリオ！』

ヤミーらの言葉を無視して、二人はメダルリュックをあけ、中にある大量のセルの中から一掴みする。

≪ＤＲＩＬＬ　ＡＲＭ≫
≪ＣＵＴＴＥＲ　ＷＩＮＧ≫

まずはバースがカッターウイングを背中から外してオーズ目掛けて投げると、カッターウイングはオーズを縛っていたリボンを容易く切り裂く。さらにドリルアームの磁力を利用して、まるで変則ブーメランの如く軍鶏ヤミーになんども攻撃する。

≪ＥＮＴＯＵ・ＪＵＵ≫

ブレイズチェリオは炎刀『銃』を握り、引き金に指をかけて、パンパンパン！という銃声を鳴らし、ナマクラヤミーに攻撃する。下手な鉄砲も数撃ちゃ当たるというかのように、ただナマクラヤミーに向けて、連続かつ乱射しているのだが、ある意味注意を引くには打って付けかもしれない。

「よし、行くぞ」
「はい！」
「ああ」

ブライとオーズとクエスは、その隙をつくように突っ込んだ。

『オォ！ハァ！』
『斬ル斬ル斬ル！！』

だが、軍鶏ヤミーは持ち前のフットワークで翻弄し、ナマクラヤミーは本気中の本気と言えるような勢いで両腕を振るい続ける。

「厄介な組み合わせだぜ！」

「全くだ」

翻弄系と圧倒系のヤミー。
思いのほかに、この組み合わせは面倒である。

「「ゥオオオ！！」」

――ヴィンヴィンヴィンヴィンヴィン！！――
――ザシュザシュザシュザシュザシュ！！――

バースバスターの弾丸と忍刀『鎖』の連結刃。
ブレイズチェリオとバースはメイン武器を使って二体のヤミーを牽制する。

だが、

――カチ、カチッ――

「――しまった！」

バースはメダルリュックの位置を失念し、無計画に弾を打ち切ってしまった。
すぐに補充しようとするが、

『フンッ！』
「「うわッ！」」

オーズ共々赤いリボンで縛られてしまった。
これを観たアンクは、

「チッ・・・・・・何とか換えられるか？」

といいつつ、右腕を飛ばして二枚のコアをオーズに届けようとする。

が、

『させるか！』

軍鶏ヤミーが赤いリボンでアンクを捕えようとする。

もちろんアンクは避けたが、その先には抜け殻状態の信吾が。

本来ならリボンが一直線にむかって信吾の頭に当たっていただろう。

――ガシッ――

七実がリボンを掴まなければ。

「ナイスキャッチだ」

「それはどうも」

その様子にブライは軽く褒める。

でもオーズには、

（そっか・・・アンクが憑いてるってことは、刑事さんにはこういう危険が・・・）

今回は上手く止められたが、次回以降にも保証があるとは限らない。

「おい火野。このままじゃ埒が明かない。紫でいくぞ」

「・・・・・・ッ！」

オーズはブライの提案に無言で首肯し、身体から紫のメダルを出し、それは既に治まっているメダルを押しのけてくぼみに治まった。
その際の衝撃で赤いリボンも吹っ飛び、立ち上がったオーズはブライと一緒にコアをスキャンする。

≪ＲＹＵ・ＷＹＶＥＲＮ・ＤＲＡＧＯＮ≫
≪ＰＴＥＲＡ・ＴＲＩＣＥＲＡ・ＴＹＲＡＮＮＯ≫
≪ＲＹＵ・ＷＡ・ＤＲＡＧＯＮ　ＫＮＩＧＨＴ！≫
≪ＰＵ・ＴＯ・ＴＹＲＡＮＮＯ　ＳＡＵＲＵＳ！≫

「「ウオォォォ！！」」

リュワドラコンボとプトティラコンボにチェンジし、メダグラムとメダガブリューを装備した。

『ッ・・・あいつら・・・』

アンクは宙に浮かびながら、怪訝な声音を出していた。
当然、オーズがまた紫の力を使ったことに。

オーズとブライは無遠慮に戦斧と大剣を振り回し、二体のヤミーに一部の隙も与えないようにする。
ザシュ、という音が聞こえ、刃がヤミーに届くと同時に、

――ヴィンヴィンヴィン！！――

バースに巻きついていたリボンをセルメダルの弾丸が破った。
起き上がったバースはその射手の姿を見つける。

「お待たせしました」

そこには髪をツインテール、赤い半身には赤いチェック柄、下半身には黒いスカートといった服装の――

「里中・・・・・・!?」

「おいおい、それの何処が戦闘用なんだよ?」

「勝負服です」

「「・・・・・・・・・・・・」」

もう何も言い返せない。

里中はバースとブレイズチェリオを尻目に、持ってきたトランクケースをあける。

ケースの中には、何十枚ものセルメダルと、九種類のカンドロイド、四つのセルバレットポットがあった。

里中は四つのセルバレットポットのうちの一つを手に取り、

「後藤さん」

華麗に一回転してバースに投げ渡す。

この行動になんの意味があるのか?

多分彼女なりの流儀というかペースだろう。

「・・・・・・まぁいい」

バースはとりあえず弾丸を供給した。

ブレイズチェリオも少し戸惑ったが、直ぐにバースと肩を並べると忍刀『鎖』をサイドバックルの鞘に納め、セルメダルをスロットに投入。

≪ＣＡＴＥＲＰＩＬＬＡ　ＬＥＧ≫

≪ＣＨＩＮＴＯＵ・ＯＭＯＲＩ≫
≪ＳＥＴＴＯＵ・ＲＯＵ≫

それぞれ装備を行い、バースはキャタピラレッグで接近しながらバースバスターを連射。さらには通り様にキャタピラレッグで足蹴にしていく。
ブレイズチェリオも沈刀『錘』で接近し、通り様に切刀『鏤』で攻撃する。
里中もバースバスターによる射撃で援護する。

『ンッ、引キ時ダ』

ナマクラヤミーがそういうと、軍鶏ヤミーは自身とナマクラヤミーを覆い尽くすように――赤いリボンによる半球体をつくった。それによって攻撃は全て弾かれる。

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

クエスはその半球体を破るべく、キョウケンソードにエネルギーを伝達させる。

「喰らえ」

冷徹な一言と同時に放たれた一対による斬撃。
機械のような正確無比な動きで振るわれた刃は、半球体を見事切り裂いた。
しかし、消滅したそれの中からヤミーの姿は現れなかった。

「逃げ足の早い奴等だ」

クエスは舌打ちでもするように言葉を吐く。
だが、この富田公園の戦いも、監視カメラがバッチリ押さえていた。

＊＊＊＊＊

下田家。

「火野映司、オーズ。鋼刃介、ブライ。真庭竜王、クエス。そしてアンク・・・・・・排除っと」

また陰湿なメモを取り出す下田。
そこへ、

――ガンッ！――

「もっと詳しくメモしなさい！」

下田の妻が亭主の頭を掴んでテーブルに突っ伏させた。

「申し訳ありませぇん・・・・・・」

この様子からして、下田はあくまで傀儡。

「気持ちがいい。人を支配するって、本当に」

下田の妻が半紙に書いたと思われる文字の数々を考えると、

”知り合い支配”
”ご近所支配”
”一族支配”
”メル友支配”
”兄弟支配”
”姉妹支配”
”親戚支配”
”全部支配”

軍鶏ヤミーの親は・・・・・・。

「この家だけじゃ足りない。もっとこの町を、もっとこの町を、ぜーんぶ！支配する！」

下田の妻だった。

（うぅぅ・・・・・なんでこんなことに・・・・・・）

町内会長になるところまでは異論はなかったが、度を越して細かいメモまではやりすぎと思っていた下田。しかし下手に逆らえば妻はおろかヤミーの攻撃を受ける。

早く自由になりたい、そう強く願ったとき。

「不憫でござるな」

「え・・・誰・・・？」

声だけが聞こえた、若い男の声だ。

もっとも、姿までは見えない。

――チャリン――

「う・・・っ」

何かを入れられた下田。

すると、彼の背中から白ヤミーが誕生した。

「って、うおおおあああ！！」

さらにパニクる下田。

『おぉぉ・・・・・・』

白ヤミーは唸り声をあげ、下田の頭を掴んだ。

「ヒィっ」という悲鳴を上げる下田のことなど気にも留めず、白ヤミーは下田の”自由になりたい”という欲望を引っ張り出した。

何種類もの絵の具を混ぜ合わせたような、スライム状の歪で奇妙な物体。

不完全ながらも形をもった欲望を、白ヤミーは喰って飲んで、自らの栄養とした。

すると、白ヤミーの身体からはどんどん濃い体毛が生えていき、それが全身に及ぶと、

『アオォォォォン！！』

オオカミヤミーへと成長した。

「へぇ、面白いじゃない」

『仲間だ仲間だ！』

軍鶏ヤミーとその親は、欲望のままに突っ走っていく。

＊＊＊＊＊

そして、ロストは。

『・・・・・・・・・・・・・』

右腕（アンク）が欠けている事で不完全（セルメン）な右前腕部を眺め、拳に力を入れていた。

『僕は・・・・・・僕を全部手に入れる――――！』

今この時、一秒だろうが一分だろうが、ロストの策略は刻々と遂行に向っていた。

アンク（オリジナル）譲りの知能によって。

不穏の影と町内会長と策士ロスト（後書き）

次回、仮面ライダーブライ！

独裁とパーティーと呑まれた右腕

独裁とパーティーと呑まれた右腕（前書き）

仮面ライダーブライ！
前回の三つの出来事！

一つ、アンクを取り込もうと画策するロスト！

二つ、夢見町全域が、監視カメラで支配された！

そして三つ！映司は、アンクに憑依されている泉信吾刑事に付き纏う身の危険を悟ってしまう！

独裁とパーティーと呑まれた右腕

軍鶏ヤミーとナマクラヤミーが逃げ仰せ、一同は若干の焦りを見せていた。
もっとも、ブライあたりはまだメダルのたまり具合を考慮し、余裕の態度だったが。

アンクはさっさと信吾の身体に憑依する。

「ふぅ・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」

その様子を見て、映司は比奈の言葉を思い出す。
アンクに出て行って欲しい、と言ったらどうしてたかを?

その時の答えを蒸し返すのは先にする。
だが、映司は自らの中にある曇ったナニかを感じずにはいられなかった。

「おい如何した火野?なにそこで固まってんだ?」
「あ、いえ、その・・・・・・」

唐突に刃介が呼びかけ、映司は少しテンパる。

「まあ兎に角、今はヤミーが動くまで休むぞ。一旦、クスクシエにでも引き返すか」
「あ、はい」

そうして一同は、後藤・里中・烈火と、刃介、七実、映司、アンク、

竜王といった感じで別れた。

＊＊＊＊＊

クスクシエに変える途中の道。
そこで映司らは俄かに信じ難い光景を眼にした。

身体に奇妙な羽が刺さった警官たちが、町の住人達に注意している。
しかもその内容はというと、

「車は一家に一台だ」
「外出は夜の八時までに済ませなさい」
「路上での私語は禁止する」

などと、現代社会においては有り得ない縛りの数々。
規則のキツい学校か？と言いたくなる光景だ。

ついでにいうと、

「従わない者は排除します」

明らかに法を外れた命令まで出している。

「操られてるな、ヤミーに」
「えっ？」

「あいつらに付いてる羽根見てみろ」

アンクにそういわれ、映司は改めて警官たちを観察する。
そこには、黒い羽根があった。
軍鶏ヤミーの肩なんかにも、黒い羽が多く生えていたことも思い出す。

「束縛癖の強い欲望だな」
「カメラだけでなく、警官まで投入・・・・・・あとであのポリ公ども、減給は免れないな」

竜王が真面目な表情をしていると、隣で刃介が些か嘲笑うようにしている。

「支配欲・・・・・地味に嫌な欲望に目を付けたものですね――ロストも」

七実もまるで他人事のように振舞っているが、声音だけは真剣そうにしている。

「まるで独裁者かなにかだ・・・・・・」
「俺達を町の連中ごと炙り出す気か」

＊＊＊＊＊

下田家。

「あー違う。もっと右」
「み、右？」
「なんか違う」
下田は妻に、怯えた表情で指圧をしていた。
だが、
「もうなんでそんなに下手なのぉ！？」
「も、もう一回やらして！」
後ろに軍鶏ヤミーが控えている為、どうあっても寝転んでいる妻の背を指圧せねばならなくなっている下田。
なんかヤミーがいなくても、日常的に観れそうな絵面だ。
「んー、なんか違う」
「え、違う？」
『・・・・・・・・・・・・ハァ』
そんな様子に、オオカミヤミーは呆れた溜息を吐き出していた。
＊＊＊＊＊
真木たちの洋館。
「折角ヤミーつくったのに、二人・・・・・・三人は動かないの？」

カザリはテーブルで一人、チェスの駒を好き勝手に動かしているロストと、床で将棋を指している四季崎と白兵に話しかける。

「目的はアンクのコアメダルでしょ？」

カザリはロストに向っていった。

「隙を待ってるんだよ。あっちの僕にはオーズたちが付いてるから。でも、ヤミーたちが動けば何時か・・・・・・」

ロストは赤い駒を全て投入し、黒いキングを全方向から囲む陣形をとる。

「小さくても、必ず隙ができる」

つまり、チェックメイト。

「――――性格が右腕（アンク）っぽくなってるんじゃない？」

「鳥類王（アンク）は僕だよ」

ロストはそういって、黒いキングを倒した。

「面白い展開になりそうでござるな」

白兵は駒を動かし、護りを固めながらを呟く。

「確かに、これは面白くなってきた」

四季崎は自分の駒を動かし、固まった獲物を自分のものとする。

「なにせ吸血女（シルフィード）が造り出し、俺らで盗み出したコアをいよいよ使うんだからな」

そしてパチンという音を盤上にだし、「王手」の一言が発せられる。

＊＊＊＊＊

クスクシエ。

「白石、泉」

まず先頭には竜王がたって店に入る。

「みんな！」

「真庭さん大丈夫だった？変な怪物に「問題ない。一応撤退させた」

竜王は知世子の相手をしながら茶を濁す。

その間に、映司や刃介や七実も店の奥に入っていく。

「映司くん、アンクは？」

だが比奈はこの場にアンクがいないことに気付く。

「ああ、先に部屋入ったと思うけど」

「大方、まだ窓から入ってるんじゃないか」

といいながら、比奈ごとで、一同は二階の部屋に向う。

＊＊＊＊＊

「いよ、アンク」
「――ふんっ」

ドアを開ければ、そこには何時もの通り、ふてぶてしい態度をとったアンクがいた。

「早速ですが、これからどうするんですか？」
「決まっている。ヤミーの巣を見つけて乗り込むんだよ」
「おいおい、ちょっと待てよアンク！」

七実の問いかけに強引な言葉を言うアンクを映司が宥める。

「またそんな無茶して、刑事さんの身体を傷つけたらどうするんだよ？お前が憑いてるってことは、巻き添えを食らうことだってあるんだから」

映司の言葉に、アンクは苛立ちながら反論する。

「余計なこと言うな！俺はまだこの身体を手放す気はない！タダの人間だろうと、ないよりはマシだ」
「わかってるよでもっ！少しは比奈ちゃんにも考えてもらわないと、

後悔してからじゃ遅いんだ！」
「一度いいと言ったことを取り消せるかっ！！」
「・・・・・子供みたいなこと言うなって」
（（（ホント、子供の口喧嘩・・・・・・））

刃介ら三人は、心の中でそう思った。
議題とすべきことは真剣だが、映司とアンクの言い争いは子供染みている面がある。

「ちょっと待って！」

そこへ比奈も割り込んでくる。

映司くん。私、答えは変わってないから。――ただ、どうしてそうなのかは、実はずっと考えたりして・・・・・だから映司くんにも訊いてみたの」

――もし・・・もし私があの時、アンクに出て行って欲しいって言ったら、映司くんどうしてた？――

その答えは。

「・・・・・・・・・・・・――――追い出してたよ」

長い沈黙の末、答えを出した。

「約束だから。――刑事さん助けるって」
「・・・・・・・・・・・・」

その言葉に、アンクは黙って俯き、

「・・・・・・・・・・・・・・」

比奈もまた、黙って映司のことを見上げていた。

「それがお前の答えなんだな、火野」

「・・・・・・はい」

刃介の出した確認の質問にも、映司は一言だけだが、返事をした。

＊＊＊＊＊

クスクシエ一階の正面玄関。

「なんだかアンクちゃんの誕生日パーティーする感じじゃなくなってきちゃったわねぇ」

お玉をフライパンで簡単に武装した知世子は、ドアのまでスタンバっていた。

その時、ドアからガチャガチャという音がした。

その直後、ドアの下の隙間から一枚の書類が送られてくる。

恐らく操られた警官によるものだろう。

知世子はその書類を拾って目を通す。

「夢見町住人規則？」

なんだか手書きっぽいこの御報せには、ハッキリ言って時代が時代ならクーデターが起こっても仕方のない内容が数多く記載されていた。

一、住人は朝五時に起床。夜は八時以降外出禁止。
ニ、仕事も学校もない者は、毎日六時間の町内清掃を命じる。
三、町の風紀を乱す行為の禁止を命じる。
四、ゴミ出しは決められた曜日の朝七時から八時までの時間厳守を命じる。
五、夜間に限らず、騒音や騒動を発しないことを命じる。
六、夢見町共有場所への侵害禁止を命じる。
七、住民は規則を守っていない者のことを町長にまで報告することを命じる。
八、町内会長下田権造の命令には絶対服従を命じる。

「なにコレェッ！？」

知世子はあまりに御したい規則という呪縛の数々に、表情を一変させた。

＊＊＊＊＊

下田家の門前。

「以上、規則を犯した者には、夢見町からの退去を命ずるっとー」

下田はドデカい木製の看板を門前に置いた。

最後の部分を半ば言わされながら、やたらと筆で達筆に書かれた条例立て札を置かされている。

「・・・・・ああ、何時まで続くのやら?」

本音で語ると、ヤリ過ぎだろう?と思ってる下田。

しかし嫁さんが怖いという情けない中年であった。

＊＊＊＊＊

ちなみに、下田の妻はというと。

「徹底させなさい。自由など要らない。規則正しく、ルールに沿った生活。反抗的な者は処分」

庭でゆったりしながら、彼女はご満悦な表情だ。

「その全てを、私が決める」

独裁者モード、本格化である。

『シュシュ！シュッ！』

目の前にはシャドーボクシングをしている軍鶏ヤミー。

『（チッ、いけすかねぇ）』

心の中で舌打ちしながらも、腕を組んで家の壁に背中を預けるオオカミヤミー。

だがしかし、仮にも白兵の命令ゆえに今は黙っている状態だ。

だが、こうしてる間にも、下田の妻の欲望は満たされ、セルメダルとして蓄積されている。

＊＊＊＊＊

クスクシエ。

刃介たちはヤミーの気配とセルの音を感じ取った。

「いくぞ」

「はい」

五人は早速外へ行こうとする、

「あの、みんな」

途中で知世子が規則条について何か言おうとするが、五人はそれを後回しにして屋外に出ようとする。
勿論、ドアを開けて。
だがそのドアの向こうには、

「火野映司、アンク、鋼刃介、鑢七実、真庭竜王」
「お前たちは全員排除だ」

警官たちが待機していた。
刃介は露骨に舌打ちする。

「一つ訊くが、なんでまだ規則を破ってない俺等まで退去なんだ？」
「町内会長の命令だからだ」
「ハッ――国家権力どころか、町内会長の犬に成り下がるとはな」

刃介は明らかな侮蔑の視線をむけている。

「その権限はきちんと上層部から取ったのか？」
「そ、そうよ！こういう強引な手段使うなら、上の人からの命令もらいなさいよ！」

刃介の勢いに便乗し、知世子も乗ってくる。

「黙れ。従わないのなら強制撤去させるまでだ。この料理店も、雑貨屋も営業停止にするぞ」
「ならその権限をきちんと上司から書類として貰って来い。そうでない限りは、テメェのやってることは言い掛かり以外の何者でもない犯罪だろうが。営業妨害で訴えるぞ？」

とことん喰らいつく・・・・・・というか、向こうのペースを噛み砕いていく刃介。
だてにいままで、闇の世界で数多くの死線をかいくぐってきたわけではない。
さらには値切り交渉で培ってきた口弁もある。

「貴様・・・ッ」
「口で言ってもわからないなら・・・・・・！」

警官たちは刃介の物言いに腹が立ったのか、警棒を手にしだした。
刃介はそれを観て、”夢幻惑い”で如何にかしようとすると、

――バギッ！――

「上等じゃない！」

知世子が警官の一人を蹴り飛ばした。

「やるぅ！」

刃介は口笛を鳴らしながら知世子を褒め称える。

（よし、今のうちに・・・！）

その隙に刃介・映司、アンク、竜王はさっさとドアから外へ出て行った。

「はぁ。ここで言い争っていても仕方ありません。冷静な態度でお帰り頂きましょう」

すると、何かを閃いたのか、残った七実はスマートフォンを使って何処かへ電話をかけてきた。
その間、警官たちは知世子と多数対一の格闘を繰り広げていて、なんだか勢いのある知世子のほうに分があった。

「どうだ、参ったか！」

Ｗｉｎｎｅｒ．知世子！
その時の表情は実に晴れ晴れとしていて。

「知世子さん、凄い・・・・・・！」

比奈の表情も嬉々としていた。
一方で七実はというと、

「はい・・・・・・はい・・・・・・そうなんです。えぇ、早めにお願いいたします。――あ、今目の前にいるので、お電話代わりますね」

スマートフォンを持ちながら警官たち（半ばグロッキー）に近寄り、

「少しよろしいでしょうか？貴方達の御上から、少しお話があるそうです」

丁寧な口調でスマートフォンを警察の手に無理矢理握らせた七実。

その後、警官たちの表情は一気に青くなったのだ。
受話器越しから聞こえてきた声、それは彼等が所属する警察署のトップたる署長だった。
勿論、屋内にいた彼はまだヤミーの支配下ではなく、七実の訴えも

真摯に　なって聞いてくれた。
知世子が警官たちと格闘してる間に、トドメとして道中で撮影した映像や写メを添付すれば、あとは全自動と言っていい。

店に無理矢理入り込んできた警官らは減給半年を言い渡され、電話越しに「全員直ちに署へ帰還しなさい。今直ぐに――――！」という怒りボイス付き。

半ば半べそをかきながら逆に退去させられていった警官らを見て、

「うふふふふ」

七実は悪どく笑っていた。
だが、

「――――あら、いけない。早く刃介さんたちを追いかけないと」

漸く諸悪の根源討伐を思い出す。

「二人共、あとのこと宜しくお願いしますね」
「え、ちょっと!?」

知世子の制止もきかず、七実はヤミーの巣へとダッシュしていった。

＊＊＊＊＊

その頃、刃介らは巣に向って駆けていた。
電車の路線が近くにある坂道を登っていくと、そこには立派な門構えの屋敷がある。

「さっきから勘付いていたが、やはり町内会長の家がヤミーの巣になっている」
「竜王、気付いてたのか？」
「ああ、白石がここに抗議しに来ていたからな」
「知世子さん、ホントに・・・俺達のために・・・」

映司は知世子の勇気ある行動に感動していた。

「兎に角押し入るぞ」

アンクが『右腕』を振りかぶるようにして、映司にコアを渡す。
その瞬間、

――ビュンビュンビュン！！――

無数の赤いリボンが門の向こう側から此方に向ってきた。

「「「変身――ッ！」」」

≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＥＮＢＡ≫
≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！ＲＩＯＴＥ！ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！≫
≪ＴＡＫＡ・ＴＯＲＡ・ＢＡＴＴＡ≫
≪ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！ＴＡＴＯＢＡ！ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！≫
≪ＢＡＲＡ・ＳＡＲＲＡＣＥＮＩＡ・ＲＡＦＦＬＥＳＩＡ≫
≪ＢＡ・ＳＡ・ＲＡ！ＢＡＳＡＲＡ！ＢＡ・ＳＡ・ＲＡ！≫

三人は急いで異形の姿に変わると、

「ハァ！セィ！」
「オリャー！」
「フッ、ハッ」

メダジャリバー、魔刀『釦』、サラセニアフィーラーでリボンを薙ぎ払う。

「突入だ」

ブライはそういって先陣をきり、門に体当たりして邸内に入った。
だが、

「・・・・・・また犬どもか」

警官たちが警戒心バリバリで大量に待機していた。

「すいません。これ以上はご遠慮ください。すいません」

そこへ、よくもまぁぬけぬけと、なんて思えるくらいの表情と低姿勢で言ってくる下田。

「町内会長・・・・・・！」
「あいつ、ヤミーの親だが、俺のメダルの痕跡がない」

アンクは得意の察知能力を披露する。

「どちらかと言えば、錆白兵の気配だな。大方、あの下田を使ってヤミーを造ったのだろう」

「つーことは、相手取るヤミーは三体になったってことか」
「じゃあ、ニワトリは誰を親にして？」

オーズはブライやクエスと違い、ただただ困惑するばかり。

「――――映司、突っ込め。ニワトリの親は屋敷ん中だ」
「え、無理だって！この人たち傷つけるわけにはいかないし」
（（甘ちゃんが・・・・・・））

ブライとクエスはとことんオーズの御人好しさに呆れていた。
適当に殴って気絶させれば言いという考えに何故至らないのだろうか？

――ビュンビュン！――

そこへまたもリボンが飛んでくる。
三人が再び切り裂こうとしたとき、

『ィルルルル』
『キァァ』

プテラカンとハヤブサカンがそれを遮る。
四人は周囲を見渡すと、

「危なかったな」
「遅くなってわりぃ」
「後藤さん！」
「烈火か」

塀の瓦に登る後藤と烈火の姿がある。

「ってぅぅおお！？」

下田は予測できていなかった事態に驚き、屋敷の中に逃げ込んでしまった。

それに伴い、警戒を強くする警官たち。

「人間の盾か・・・・・・」

「どうなってるんだ？ヤミーはどこだ？」

「あの、それが・・・・・・」

後藤の問いに、オーズは言いにくそうに屋敷を観て、

＊＊＊＊＊

そして屋敷内では、

♪～～～♪～～～

下田の妻が琴を奏でていた。

和の雰囲気溢れる光景だが、

『～～～～！』

『・・・・・ケッ』

意味不明な動きをとる軍鶏ヤミーと、より不機嫌になっているオオ

カミヤミーによってシュールさは増していた。

＊＊＊＊＊

一旦退却した映司たち。
その後の下田邸の様子を探るべく、カンドロイドを利用していた。
バッタカンドロイドを主軸にして、ウナギカンドロイドを情報受信機、クジャクカンドロイドを映像投影装置にして、邸内の様子を観察する。

「ヤミーのやつ、立て篭もる気か」
「確かに、これだけ人間がいると、突っ込めないな」

アンクと後藤は困ったように言うが、

「全く面倒だな。いっそのこと、魔眼を使って眠らせた方が手っ取り早い気もしたが」
「だが既にヤミーの支配下だからな。効果の浸透具合も落ちてしまうだろう」

刃介と竜王も意見を述べる。

「あそこじゃ戦えません。鳥のヤミーは親を巣に閉じ込めて餌を運ぶんだから、何時かは餌を取りに出てくるんじゃないかな？何が餌なのかはわかりませんけど」

と言う映司の言葉に、烈火が閃いた。

「そっか。あのキモ鶏冠野郎を炙り出しちまおうぜ！」

「今度はコッチから監視して、機会を待てば！」

後藤も烈火の意図に気付き、運良く近くに置いてあるライドベンダー二台に近づき、セルメダルを投入してはボタンを押していく。

≪ＴＡＫＡ－ＣＡＮ≫
≪ＴＡＫＯ－ＣＡＮ≫
≪ＢＡＴＴＡ－ＣＡＮ≫
≪ＵＮＡＧＩ－ＣＡＮ≫
≪ＰＴＥＲＡ－ＣＡＮ≫
≪ＫＵＪＡＫＵ－ＣＡＮ≫

≪ＨＡＹＡＢＵＳＡ－ＣＡＮ≫
≪ＨＯＵＯＵ－ＣＡＮ≫
≪ＹＡＴＡＧＡＲＡＳＵ－ＣＡＮ≫
≪ＲＹＵ－ＣＡＮ≫

「「ヤミーを見張れ！」」

二人の指示で、カンドロイドたちは一斉に下田宅に向っていった。

「俺達は一旦戻る」
「なんかあったら直ぐにいくぜ」

二人はメダルリュックを背負って帰ろうとする。
そこへ、

「そういえば、里中さんは？」

映司が聞いて見ると、

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・支度が間に合わなかったそうだ」

「大人って・・・・・・勝手だよな・・・・・・」

それだけ言い残して二人はさっさと行ってしまった。

「向こうも大変そうですね、刃介さん」

「あぁそうだｎ・・・・・・って七実。随分遅い到着だな」

ここへきて漸くナナミが合流。

「すいません。警官を相手にしてたら時間をとってしまって」

遅くはなったものの、けっこう速めに走ってきたようで、小袖が着崩れていることもあって、刃介はその言葉を信じることにした。

「まあいっか。今は一度帰って英気を養おう。七実がここへ来たと言う事は退去命令もどうにかなったようだしな」

「あ、はい」

映司らはそうして、二手に別れていこうとしたが、

「――――あ、そうだ。鋼さん、ちょっと待ってください」

「ん、なんだよ？」

「今日、刑事さん兼アンクの誕生日パーティーするんですけど、一

緒にどうです？」

色々とあって遅くなったが、漸く誘いの言葉をかけられた。

「・・・・・どうするお前ら？」

「私はいいですよ。贈り物をするのに良い機会ですし」

「私も、別に構わん」

「じゃあ決定ですね！」

映司は思い切り喜んだ表情で声音も明るくする。

「んで、場所はクスクシエか？さすがに何時も場所じゃ味気ないだろ」

「じゃあ、どこでやります？」

映司がそう逆に尋ねると、

「テメェらっぽい場所でやるのはどうだ？」

「え？・・・・・外でですか？」

「ああ。色々と後始末のしやすい川とかが良いんじゃないか？」

映司は少しばかり驚いていた。

まさか刃介が多少ながらもノリ気になってくれていることに。

「仕切るのが好きなんだな、鋼？」

「まあまあ、そういうなアンク」

「偶には良いじゃないですか」

そうして、一同は近くの橋の下の河川で誕生日パーティーを開くことにした。

＊＊＊＊＊

時は流れて夕方。
映司とアンクと刃介と七実は、さっさと場所取りを済ましていた。
元々、人通りなど全くないので、余裕ではあったが。

「なんか、最初の頃みたいだな・・・・・・ずっと野宿で」

映司は川でパンツを洗いながらそういう。

「最初は、戦いも一杯一杯で、お前もすぐ乱暴なことするから、大変だったよ」

水を絞りながら、パンツを木の枝にかける映司。

「フッ――それが今じゃ、追い出せる気でいるとは、偉くなったもんだな」
「偉くっていうか、今の俺ならできるでしょ？」

映司は瞳を紫にしてみせる。

「火野、あまり紫を頼るなよ」
「そうして力を過信して、８００年前の――王様（オーズ）も暴走した」

刃介とアンクはそう戒める。

特にアンクは、王に裏切られている。

「火野さん。これからどうするんです？コアを含め、アンクさんのこと」

「比奈ちゃんの返事次第かな」

「だからそう言ったらだ！本気でできるつもりか？」

空気はなんだじゃ怪しい方向へ。

「・・・・・・そう言わないで欲しいと思った。――今はまだね」

映司はアンクと向き合い、

「お前は、ロストって奴に狙われてる。ちょっとでも不利になれば、全部持ってかれる」

「・・・・・・・・・・・・・」

アンクは少し黙り、後ろに振り向く。

「それがお前らに何の関係がある？」

「・・・・・・・・・・・・・困る」

簡潔に、映司は答えを出した。

「確かに困るな、色んな意味で」

「戦力的にも困りますけど、一番困るのはアンクさんでしょ？」

「・・・・・・・・・・・・・」

三人はアンク共々、また沈黙を決め込んでしまう。

そこへ、

「みんな！」

比奈がやってきた。

「四人ともお腹空いてるんじゃないかと思って、お弁当つくってきた！」

手提げの麦わらバッグを見せる比奈。

アンクは四人の中で一番早く、比奈に近寄ると、その速度をあげる。

「ッ！？」

――ガシッ――

アンクは『右腕』で、比奈の細い首を掴んだ。

「アンク！」

「自惚れんな映司。お前も比奈も、俺は何時でも潰せる――最初の頃と同じだ」

――グッ・・・！――

アンクは『右腕』の力を強めていく。

「・・・・・アンク・・・・・・」

比奈の表情からは動揺が残っているが、その手はゆっくりと下にぶら下がっていった。

まるでアンクが自分を殺すわけがないと、信じるように。

するとアンクは、少しだけ動揺する。
だが次の瞬間にはキツイ表情で手に力を入れ、また焦ったような顔で力が抜けていく。

「違うと思うけど」

それを観た映司は、一言だけを投げかけた。

「アンク。テメェ何焦ってんだ？」
「今ここで、火野さんはおろか比奈さんを潰すメリットすらないというのに」

刃介と七実の言葉がトドメとなったのか、アンクは何かが納得いかない、雲を掴むような感覚の中、比奈を放した。

「・・・・・・・・・・・・・・」

そうして、何も言わずにただただ沈黙するアンク。

「・・・・・・・・・・・・・・」

そんなアンクを観て、比奈は微笑んでいた。
アンクの中に、何かが芽生えつつあるという希望を胸にしながら。

「みんなぁぁぁ！！」
「誕生会の支度、手伝ってくれ！」

そんな時、知世子と竜王がリニアカーで色々な物資を運んできた。
それを観て、比奈と刃介はこう言った。

「正確な誕生日は、今度ルナイトに効いとくがよ――今日んトコは一応」
「アンク。誕生日おめでとう」
「・・・・・・・・・・・・」

そういわれても、無愛想に顔を逸らすアンク。
映司と七実はそんなアンクをみて、どこか安心したように笑っていた。

そうして夜になり、アンクと信吾の誕生会が始まった。

正直な話、パーティーのレベルは少しショボかった。
まあ野外でのパーティーということもあって、大した機材があるわけでもなし、知世子がギターを弾いたり、比奈が楽しく踊ったり、映司が料理を出したり、そんな風にしてアンクを持て成す。
語るべきことといえば、その程度だ。

アンク自身はバースデイケーキの蝋燭の火を無愛想に吹き消す程度で、格段喋ったわけでも動いたわけでもない。
ただ単に周りの三人が勝手に盛り立てているだけにも見える。

比奈はその誕生日会の中で、一つの結論を出した。

（あの時、私が思ったのは――お兄ちゃんも戦いに協力したいんじゃないとか、意識の無いお兄ちゃんをずっと見てるのが辛いって、勝手なこととか。でも、多分大きな理由とかはなくて、ただ一緒にいる時間が積み重なっちゃったのかなって。嫌いとか、好きとか言

う前に、一緒にいる時間が――――）

それが、比奈の結論。

そんな様子を見ながら、刃介は別のスペースで七実と竜王に贈り物を渡していた。

「どうだ、気に入ったか？」

刃介が渡したのは――竜王には化粧道具一式と苦無型の簪だった。化粧道具は直ぐ見つかったが、簪については形が形なので少し難航した。

「化粧など、諜報の時以外は全然しなかったのだが・・・・・」

「時折で良いからしてみろ。口紅だけでもかなり違うぜ。なにより竜王は、化粧映えしそうだからな」

七実には、鎖付きのロケットだった。中には刃介と自分でのツーショット写真が入っている。

下手な化粧品や装飾品より、こういう想い出の品の方が似合うと思ったのだろう。

だがしかし、七実への贈り物は一つだけではなかった。

「七実。実はもう一丁あるんだ」

「写真（これ）だけで私は充分嬉しいのですが」

「良いから、目ぇ瞑ってろ」

「・・・・・・・・・・」

言われたとおり、七実は静かに目を瞑った。

両目への光という情報が遮断され、七実が闇の中で頼りにするのは

触覚と聴覚。

――チャリ・・・・・・――

まず最初に感じたのは、鎖の音と、首筋に感じる冷たい感触。
どうやら首にロケットがかけられたようだ。

――スッ――

次は、左手をそっと触れる感触。
だが直ぐに、自分の薬指に冷たい金属の感触を感じて、思わず目を開けてしまった。

「あちゃー。やっぱし開けちまったか」

刃介は頭を軽くかきながら軽口を零す。
七実は改めて自分の手と刃介の左手の薬指を見る。

「七実。ちょいと安物だが、受け取ってくれるか？」

二人の左薬指には、同じ指輪がされていた。
刃介の言うとおり、指輪に嵌められているのは、小さな紫の宝石――紫水晶（アメジスト）。
誠実、心の平和、高貴、覚醒、愛情――そんな意味の篭った宝石だ。

「刃介さん・・・・・・」

「これからも頼む」

刃介は七実のことだけを見つめて微笑んだ。
他のものには決して見せない、安らぎと愛情に満ちた笑顔を。

「はい。不束者ですが、宜しくお願いします／／／／／」

そんな刃介に、七実も顔を赤らめながら答えた。

そんな二人の様子を間近で見た竜王は、二人の邪魔にならないよう、心の中で拍手をしながら、微笑んで見守った。

＊＊＊＊＊

好い加減夜も明けて日の光が、ぼんやりと地平線から見えてきた時間帯。

鴻上ファウンデーションの会長室で、後藤と烈火はソファーで仮眠をとっていた。

いつヤミーがでてもいいように。

「・・・・・・・・・・・・まだ餌を取りにいかないのか」

「あぁぁ、眠っ」

＊＊＊＊＊

所戻って、刃介達もパーティーを終えていた。

しかしここで、映司があることに勘付く。

「ああっ！」
「なんだ？」
「餌わかった！」
「ほう」

＊＊＊＊＊

下田家。
そこでは家主の下田も、流石に疲れたのかモニターの前で寝ていた。
「あなた、昨夜は何も無かったでしょうね？」
異様に早起きな妻の声で、一瞬にして目覚める下田。
「今日も規律は守られて――――」
障子を開けて妻がモニターを見た瞬間、先ほどまで寝ていた下田共々、絶句した。
「ッああ！！」
モニターは次々と映らなくなっていた。
だが生き残っているモニターにも、カンドロイドたちが群がって、それぞれのカメラに攻撃している。
機能停止していくカメラと接続されていた各モニターは意味を成さ

ないガラクタになっていく。

「ッ！――な、な、何だこれぇ！？」

「何やってんのよぉぉ！！」

すぐさま憤りという八つ当たりは、下田へと降りかかる。

当然、それに反応して・・・・・・。

『やめろぉ！折角の餌がぁ！』

『やっと暴れられそうだなぁ！』

餌を奪われて激昂する軍鶏ヤミーと、戦えるという僅かながらもの自由に歓喜するオオカミヤミー。

＊＊＊＊＊

「なるほど。町を支配・監視している映像が餌か」

「だから最初にカメラを設置したんだよ。餌は後で自動で供給される」

アンクは納得し、映司が捕捉する。

「連中も考えたな。それだけあって、今回は気配と闘志が丸出しだ」

竜王もヤミーらの気配を感じ取る。

「んじゃ行くか」
「ええ」

五人は現場に駆けて行こうとするが、映司はアンクにこう言って置く。

「刑事さんの身体、気をつけろよ。あんまり酷かったら、やっぱり取り上げるから」
「やれるもんならやってみろ」

買い言葉を言いながら、アンクは映司と共に走る。

「あの、刃介さん」
「なんだ？」

そこへ七実までもが刃介に話しかける。

「私のプレゼント、この件が終わった後でよろしいですか？」
「ああ。期待して待ってるぜ」
「はい！」

そうして、五人は本当に戦いへと赴く！

＊＊＊＊＊

鴻上ファウンデーション会長室。

「おはようございまぁ・・・・・・・・・・・・」

里中は定時どおり、日もすっかり姿を現した頃に出勤してきた。
だが、そこに後藤たちの姿は無い。

なにかと思って周囲を見ていると、書置きのメモがあることに気付いた。

”すぐに出撃できれば、俺達のギャラから5%ずつ払う。頼む！―
―後藤、烈火”

「5%・・・？」

なんかその時の里中の表情と声音が、どことなく不満げだったことを一応付け足しておく。

＊＊＊＊＊

何処とも知れぬ場所。
特徴といえば、すぐ近くに電車の路線と駐車場がある程度の場所。

そこに軍鶏ヤミーとオオカミヤミーはいた。
多くのカンドロイドたちに付き纏われ、足止めをくっているようだ。

そこへ、

「おはよう」
「流石に早起きだな」
映司とアンクは軍鶏ヤミーに。
「そっちは狼か」
「朝と夜のヤミーですか」
「奇妙な組み合わせだな」
刃介と七実と竜王はオオカミヤミーに。
――ブゥゥゥゥゥゥン！！――
さらにそこへ二台のライドベンダーが到着する。
「すぐにまた寝てもらうがな」
「狼野郎の腹も掻っ捌いてやるぜ」
乗っているのは烈火と後藤。
『貴様等ッ！よくも！』
『やっと戦れる！』
軍鶏ヤミーは怒り、オオカミヤミーは喜びを表しながら、リボンと毛針を飛ばしてきた。
だがしかし、後藤と烈火はバイクから降りてかわす。
軍鶏ヤミーとオオカミヤミーは、次の標的として映司や刃介を狙うも、

「映司！」

四人は避け、アンクは映司にコアメダルを投げ渡す。

そして、

「「「変身・・・ッ！」」」

≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＥＮＢＡ≫

≪ＴＡＫＡ・ＴＯＲＡ・ＢＡＴＴＡ≫

≪ＢＡＲＡ・ＳＡＲＲＡＣＥＮＩＡ・ＲＡＦＦＬＥＳＩＡ≫

この間、軍鶏ヤミーとオオカミヤミーはリボンと毛針を飛ばして攻撃した。

だが、三人の周囲を回るメダルのオーラがそれを遮る。

≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！ＲＩＯＴＥ！ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！≫

≪ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！ＴＡＴＯＢＡ！ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！≫

≪ＢＡ・ＳＡ・ＲＡ！ＢＡＳＡＲＡ！ＢＡ・ＳＡ・ＲＡ！≫

リオテコンボ、タトバコンボ、バサラコンボに変身完了。

後藤と烈火も、

「「変身ッ」」

――チャリン――

――パカッ！――

バースとブレイズチェリオに変身する。

――ヴィンヴィンヴィン！！――
――ザシュザシュザシュ！！――

バースバスターと忍刀『鎖』で、リボンと毛針を撃ち落とし、切り落とす。
そうして、五対ニという確実な優勢のまま勝負に本腰を入れようとしたが、その途端！

――斬ッ！ザンッ！！――

「「「「「ッッ――――！」」」」」

突如として複数の斬撃が五人を牽制するように放たれた。

「ふ、漸くお出ましかよ」

ブライがそういった直後に、

『コノママ、アッサリ決着デハ詰マラナイカラナ』

ナマクラヤミーが片言で喋りながら登場する。

ブライはナマクラヤミーと。
オーズとバースは、軍鶏ヤミーと。
クエスとブレイズチェリオは、オオカミヤミーと。

それぞれの標的を定めて戦いあう。

ブライは得意の獲物の刃を、ナマクラヤミーの斬撃とでぶつけ合い。
オーズはメダジャリバーで近接戦、バースは射撃で後方支援。
クエスとブレイズチェリオは二人共身軽さを生かしてのヒット&ウェイで翻弄する。

だが、それを何時までも許す奴等ではない。

『鬱陶しい』

オオカミヤミーがそう呟くと、彼は息を大きく吸い込み、

『ッ！アオォォォオオォォォン！！！！』

恐らく夢見町全土にいきわたるであろう、大音響の咆哮を喉から鳴らしたのだ。
当然、距離的には２０ｍも離れていない皆はというと、

「んああ、耳が！」
「なんだこの声は！？」
「頭が割れそうだぜ！」
「くッ、まさか・・・・・・！」
「意外と効くぜ・・・・・・」

効果があった様で、五人の動きが一斉に鈍った。
三体のヤミーはコレを機に、同時に攻撃を仕掛けようとした。

しかし！

――ブオォォオオォォォン！！――

ライドベンダーのエンジン音。

「ちょっと待ったーーーッッ！！！」

それに跨って駆る若い女の声。

そして、

――ドギュィィィィィ！！――

『『『ンガァァアアアアア！！！？？』』』

さり気なく前後の車輪によって轢かれるヤミー三体。

「ルナイト・・・・・か？」

「ほかに誰がいるのよ？」

思いのほかいいタイミングで乱入してきたルナイト。

もっとも今回はバイクに乗ってくる関係上、獣耳っぽいデザインの付いたヘルメットで顔を隠し、首から下の肢体全てを覆い隠す漆黒の革作りなライダースーツ姿だ。

なんというか、池袋の首なしライダーみたいな格好である。

ついでにいうと、革作りのライダースーツはルナイトの身体にピッチリと張り付いていて、彼女の爆乳や括れた腰、熟れた桃のような臀部や細い手足のラインを扇情的に魅せている。

「火野くん、ちょっといいかしら？」

「え、俺ですか？鋼さんじゃなくて？」

オーズは鴻上、ブライはルナイトと契約を交わしているので、ルナ

イトがオーズに用件があることにオーズ自身少しだけ驚いている。
ルナイトはそれに構うことなく、頭のヘルメットを取り去ると同時に、ライドベンダーの後部座席からあるものを取り出した。

「この三枚を、貴方に託すわ」

そうしてルナイトは、箱ごとオーズに託す。
オーズは慌てながらもそれを受け取り、箱を開けた。

「こ、これって・・・・・・！」
「橙のコアだと・・・・・・・！？」

託された代物をみて、オーズとアンクは驚く。

「いいから早く使いなさい」
「あ、はい！」
『ヤラセンゾ！』

ナマクラヤミーはそれをみて、すぐに妨害へと行動を移したが、

――ガギンッ！――

ブライの刃によって阻まれた。

「あんま調子に乗ってんじゃねぇぞ、このＫＹが」

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

コアのエネルギーは、ラインドライブを通して魔刀へと供給される。

「チェストォォォオオ！！」

そして、リオテスラッシュが決まり！

『ヌアアアアアアッッ！！』

――ジャリィィィィン！！――

ナマクラヤミーは大量のセルに還元された。

「火野！コンボチェンジの間は俺等で守る！手早く済ませろ！」

――ヴィンヴィンヴィン！！――

バースは引き金に指をかけながらオーズにそう叫ぶ。

オーズはその求めに、無言で頷いた。

――ヴィンヴィンヴィン、カチッカチッ――

「ッ、弾切れか！」

バースはそういってメダルリュックの元へ走ろうとする。

だが、そこへバースに何かが投げつけられ、ガン！という音がした。

投げつけられたのは、満タンのセルバレットポット――投げたのは、

「5％じゃ、その程度です」

タクシーに乗ってきた里中。

「・・・・・充分だ！」

バースはメダルを補充し、また発砲する。

オーズは皆がヤミーの相手をしてる間に、メダルの感想を終えて、オースキャナーを滑らせた。

≪ＣＯＢＲＡ（コブラ）・ＫＡＭＥ（カメ）・Ｗ（ワニ）ＡＮＩ≫

≪ＢＵＲＡＫＡＷＡＮＩ（ブラカーワニッ）！≫

紫の複眼が特徴的で、コブラの長い身体がターバンのように巻きついている頭。

カメの甲羅を半分割したような盾――ゴウラガードナーを備えている両腕。

ノコギリの刃や猛獣の歯牙を模したラインドライブ――ソウデッドサイザーという両脚。

オレンジのような茶色のような、爬虫類系のブラカワニコンボだ！

『ヒィッ！』

咄嗟に軍鶏ヤミーはブラカワニコンボの脅威を直感的に感じ取ったのは、赤いリボンのドームを作って防御に徹した。

――ヴィンヴィンヴィン！！――

バースと里中がいくら発砲しても、ドームが傷つく気配はない。

そこへクエスが、オオカミヤミーの相手をブレイズチェリオとに任せて、オーズと立ち並ぶ。

「私が奴をいぶりだす。お前がそこを突け！」
「えぇ！」

クエスはオーメダルネストから、焦茶色のコアを三枚だして、それをコールカテドルに入れてスキャナーで読み込む。

≪ＯＯＫＡＭＩ（オオカミ）・ＫＹＯＵＫＥＮ（キョウケン）・ＫＩＴＳＵＮＥ（キツネ）≫
≪ＫＡＭＩＫＡＭＩ（カミカミカミカミ）！ＫＩＴＳＵＮＥ（キツーネ）・ＫＡＭＩＫＩＴＳＵＮＥ（カミキツネ）ーーッ！≫

狼の如く雄大な牙と強大なオーラをした頭。
一対の小太刀、キョウケンソードを携えた腕。
両脚の付け根から膝にかけてまで垂れ下がっている九本の尻尾、キツネテイル。

大自然にその咆哮を響かせ、轟かせ、揺すであろう犬系のカミキツネコンボ！

「ウオオォォォォアアアア！！！！」

クエスは先ほどのオオカミヤミーのそれを遥かに凌駕した叫び声を天に向けて放った。
普通に考えれば味方さえも巻き添えにするだろうが、カミキツネコンボの場合は違った。

「あれ？そんなに煩く聞こえない・・・・・・」
「成る程。あのコンボは音を操るのか」

オーズとアンクがそう分析する傍らで、

『ノアアアアアアアアッッ！！！？？』

軍鶏ヤミーだけは溜まらずにドームを突き破ってきた。
これも一重にクエスの”錆狼慟哭（セイロウドウコク）”の御陰だろう。

「火野、今だ！」

クエスに言われ、オーズはスキャナーを動かす。

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

エネルギーをチャージしたオーズは、両脚蹴りの体勢で地面を蛇のようにクネクネと高速でスライディングしていく。
すると軍鶏ヤミーの眼前には三つの橙色のメダル型リングが現れ、オーズはそこ目掛けて飛び上がると、

「セイヤァァアアアア！！！」

ワニ型オーラを纏いながら、必殺の挟み蹴り（ワーニングライド）を叩き込む。

――ジャリィィィィン！！――

それによって軍鶏ヤミーは爆発し、大量のセルメダルがばら撒かれる。
オーズは必殺技を叩き込み、少し息を整えて「御休み」とだけ言った。

一方でオオカミヤミーはというと、

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

ブレイズチェリオと交代していたクエスと対峙していたが、どうにもその命運は怪しい。

クエスは頭、腕、脚といった三つの部位に高エネルギーを通していき、ラインドライブもそれによって妖しい輝きを放つ。

クエスはまず、九本のキツネテイルを活性化させ、一本一本に命を吹き込むような精度で巧みに操り、オオカミヤミーを縛り上げた。

『このっ、クソッ！放しやがれ！』

「そう言われて放すバカはいない」

クエスは至極まっとうな意見を述べ、キョウケンソードに力を伝達し、オオカミヘッドからは見えない”音の衝撃波”を出しながら、

「――――ハァァアアアア！！」

一気に駆けていき、不可視の”音の衝撃波”で相手にぶつかると同時に、キョウケンソードでズタズタに切り裂いた。

身動きの取れない相手に対して卑怯とも言う輩もいるかもしれないが、生憎のところ竜王は暗殺専門の忍者であり、卑怯というのは寧ろ褒め言葉だろう。

まあ御託を長々と並べるより――オオカミヤミーは、クエス・カミキツネコンボの必殺技（ハウンドリムーブ）で倒されたのだ。

「ま、上々だな」

そして、クエスは己が仕上げ方に、余裕そうな声を出して締め括った。

「やったな、里中のネエちゃん」

とブレイズチェリオが言うも、

「タクシー」

「ちょ、えぇぇ？」

さっさと帰っていく里中のマイペースに、ほとほとついていけなかったりもする。

＊＊＊＊＊

ついでに、下田家では。

「なにこれ？テレビ二台も買っちゃってる！」

妻が正気に戻ったはいいが、その間の記憶はないようで、なんだかお決まり展開になりげな下田。

「えっ！？いやいや、君が買えって言うから買ったんじゃないの！？」

「言い訳しないで直ぐ返してきなさい！」

「いやちょっと、買っちゃったモンはもう返せないでしょ！」

「何でもいいから早くしなさいったらぁぁぁ！！」

――ガン、ガン、ガン、ガン、ガン！！――

どっちにしても、妻によって頭をテーブルに突っ伏させられたり、ぶつけられたりする下田権造（さえないオッサン）であった。

＊＊＊＊＊

「大丈夫かな？」

そんな夫婦喧嘩の声は外にまで漏れ出していて、門前にいる映司にまで心配される始末。

「家の中でやってる分には、問題ないだろ」

「確かに、ただの夫婦喧嘩程度なら安いものだ」

「・・・・・そうだね」

アンクは規則条の看板を倒し、刃介はそれを踏み砕いた。

「んー、意外と嫌なものですね。夫婦喧嘩というのは」

「鋼と鑢の場合は一方的な気がするぞ。ここと同じで」

「七実。今後はソフトに頼めないか？なんかこう、もっとお前に惚れちまいそうなやり方で」

「うふふ、良いでしょう。私は刃介さんに惚れ直してしまいましたからね」

んでもって三人は夫婦喧嘩に耳を傾けながら話す。
まあ、惚気感が漂ってはいたが。

＊＊＊＊＊

クスクシエ。

「いやぁスッキリした。元に戻って良かったわぁ」
「そうですね」

店の前で知世子は張り切り、比奈は掃除をしていた。

「ただいま」
「お帰りなさい」
「また来たぜ」
「いらっしゃいませ」

映司や刃介らが来ると、知世子はすぐさま暖かく出迎えた。
店に入っていく五人をみて、比奈はあることを思い出して、掃除用具をおいて急いで店の中に戻っていく。

カウンターに置いておいた黒い紙袋。
そう、アンクへのプレゼントだ。

「これ、お兄ちゃんに用意したんだけど」

比奈は早速アンクにプレゼントを渡そうとする。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

若干の沈黙。

「――――フッ」

アンクは一息ついて比奈の前を通り過ぎて――行こうとした。

だが、乱暴な手付きでプレゼントだけは持って行った。

比奈はそれに喜んで笑顔となり、店のドアで見ていた映司らも笑顔になっていた。

「あ、私アンクさんの反応見てきますね。刃介さん、贈り物はその後でいいですか？」

「好きにしろ」

「では」

七実はそうしてプレゼントの袋を持ったままニ階に上がっていった。

＊＊＊＊＊

途中でアンクに追いつき、一緒に部屋に入ると、

「アンクさん、どうでしたか？」
「どうもこう――――ッ！」
「――――ッ！」

感想を聞こうとした時、気配を感じて後ろを振り返る。
そこには、

『戦いの後って一番油断するよね。隙だらけだよ、僕』

ロスト。

『まあ、御陰様でこっちの作業も捗るがな・・・・・・・！』

デシレ。

＊＊＊＊＊

クスクシエの一階。

「「「――――ッ！」」」
「三人とも？」

映司は瞳を紫、刃介は瞳を金、竜王は瞳を虹。
それぞれがグリードの気配を察知した。

「上だ！」
「アンク！」
「七実！」

比奈を含め、四人はすぐさま二回へと上がっていった。

＊＊＊＊＊

ドアを乱暴に開けると、そこには崖っぷちな光景があった。

「アンク！」
「アンク！」

ロストによってセルメダルを次々に吸収されていくアンク。

「七実！」
「鑢ッ！」

デシレによってフォース・コア三枚を投入され、身体の均衡を崩され苦しんでいる七実。

「うぅッ！くッ、ああっ！」
「うぁぁ・・・！くぅっ・・・！」

自身のメダルを奪われていくアンクと、能力を暴走させられかけている七実。

状況はまるで違うが、二人に置かれた状況は実に拙い。

比奈と映司は吸い込まれそうなアンクに手を差し出して掴み、竜王と刃介は七実の身体を思い切り抱き締めて気を確かに持たそうとする。

『さあ・・・・・・！』

『終いだなぁ』

ロストは吸収の勢いを強め、不完全な右腕にアンクのメダルをどんどん絞っていく。

デシレは頃合を見て、先日ルナイトのところから奪い取ってきた曇りガラスのような不透明なコアメダルを七実に投入した。

『『――――フハハハッ・・・・・・・！』』

そして遂に、

――バタン！――

アンクが消え、信吾の身体が倒れる。

「くぁッ――！」

七実の身体からは、凄まじい量のドス黒いオーラが放たれ、刃介らを跳ね飛ばした。

『『フッ・・・・・・』』

ロストとデシレはそうして窓から外へ出て行く。

だがしかし、そこへ・・・・・・・。

『アァァ・・・・・・！』

キョトウまでもが低い声で唸り、窓の外へ出て行ってしまった。

「七実！！」

「アンク！！」

みんなは急いで店の外に出て、空に浮かぶ二体の異形の姿を確認した。

デシレはトンズラこいて帰ってしまったようだが、もう二体だけはそこにいた。

『お帰り・・・僕・・・・！』

赤い左の片翼を広げて宙に浮かぶロストは、とうとう右腕（アンク）を取り込んだ。

そして、右肩からも翼を広げ、ロストは真紅の翼を堂々と大きく広げたのだ。

そこから堕ちる赤き羽根には、なんとも言えない優雅さを演出させながら。

『うふふふふ・・・・・・！あはははははははははは！！』

七実・・・・・・いや、キョトウの心は完全に変わりきっていた。

さっきまであった鑢七実としての心はどこにもない。

今目の前にいるのは、身体を禍々しい紫色に染め上げ、壊れ果てた大きな笑いを発し、巨大な二つの翼で空を舞う一匹の邪龍。

最悪のシナリオが、ここに実現してしまった。

独裁とパーティーと呑まれた右腕（後書き）

次回、仮面ライダーブライ！

兄妹と遺志の力と映司の決断

カミキツネコンボ
キック力：１５トン　パンチ力：１０トン　ジャンプ力：１８０ｍ
　走力：１００ｍを４秒
身長：２００ｃｍ　体重：８７ｋｇ　固有能力：音響支配　カラー：
焦茶　必殺技：ハウンドリムーブ

オオカミヘッド
口部分から破壊音波を伴った大音量の咆哮「錆狼慟哭（セイロウドウコク）」を発する。

キョウケンアーム
一対の小太刀型武器・キョウケンソードを装備しており、スピーディな連続攻撃を得意としている。

キツネレッグ
両脚の付け根から太腿後部に垂れ下がっている九本の尻尾・キツネテイルを操り、敵を捕縛したり鞭のようにして攻撃したり吹っ飛ばしたりするなど、応用の利く使い方が可能。

兄妹と遺志の力と映司の決断

今、空には神代の光景を思わせる怪物が、大きな翼を広げて浮かんでいた。

『お帰り・・・僕・・・！』

遂に右腕(アンク)を吸収することに成功し、ご満悦な声を出すロスト。
右肩と左肩から真紅の大翼を現し、赤い羽根を落としながら幻想的な雰囲気を纏う。

『うふふふふ・・・！あはははははははははは！！』

禍々しい紫色に染め上げられた体色と、身体中に生えた強靭な龍の鱗。
背中から巨大な翼を広げて大笑いするキョトウには、鑢七実としての面影が微塵もなかった。

それを地上から見上げ、一同は絶句する。
だが比奈は、

「アンク・・・・・・映司くん、アンクは！？」
「・・・・・・アンク・・・・・・」

問われても映司が回答を持ち合わせているわけがない。

「七実・・・・・・まさか・・・・・・」
「人格が変わっている・・・・・・」

刃介と竜王も、キョトウの変わりように声をすり減らした。

『これで僕は・・・僕になる・・・！！』

『あははっ・・・！消えちゃえ・・・！』

ロストとキョトウは、赤と紫の波動を地上に向って放つ。

その力は想像以上に強く、四人は思わず身構えたり後退さりしてしまう。

『ははははは！ははははははは！！』

『ふふふふふ・・・・・・・！！』

ロストとキョトウは高笑いをして、盛大に盛り上がっている。

だが、それも突如として途切れた。

ロストの右腕が、奇妙な反応を起こしたのだ。

『っ――メダル・・・足りない・・・？』

そう。吸収できたのはアンク自身であるタカ一枚と、クジャクが一枚。

今現在、ロストのコア枚数は8だ。

それを証明するように、ロストの右側頭部は不完全なままだ。

『あら、あそこに・・・・・・』

するとキョトウは、比奈のことを指差した。

正確には比奈が握り、隠している物を。

ロストはそれに応じて、右腕に紅炎を灯す。

『――――フッ！』

ロストは右腕から、一発の炎弾を放つ。
当然、映司らはそれを避け、どこか安全な場所へ逃げていった。

ロストは大して苛立つ様子はない。
映司らにではなく、

――グァガガガッ、ギギギィッ――

『へー。意外と悪足掻きするんだ』

右腕（アンク）に対してだった。

『急ぎなさい。このままでは、あの人達が逃げてしまうわ』
『焦らなくても、すぐに追いつけるよ』

そうして、キョトウとロストは空を翔ていった。

＊＊＊＊＊

映司、刃介、竜王、比奈は必死に脚を動かしていた。
そして、人目などロクにつくことのない、地下にある水の処理施設の一端にやってきた。
地面には冷たい水で犇くこの空間には、無機物しかない空虚な雰囲気だけしかない。

「比奈ちゃん。もしかしたらさっき、アンクから何か？」

映司が質問すると、比奈は素直に答えた。

アンクは吸収される間際、比奈に一枚だけだが、コアメダルを託していたのだ。

ロストが完全復活しなかったのはその所為である。

「これ、アンク・・・？」

託されたタカを見せて訊ねる比奈。

「いいや。コレは道具としての核（コア）だ」

「魂の核（コア）は、ロストの奴が・・・・・・」

それを、竜王と刃介がバッサリと見抜いて教えた。

そんな時、

――バサッ――

――ピチャ――

何か二つの物体が、降り立って薄い水面を踏んだ。

『返してよ。僕のメダル！』

ロストは大げさな動きをしながら、右腕で何かを求めるように手を伸ばす。

『抵抗しても無駄ってことくらい、わかるわよね？』

そこへキョトウが傲慢な語りをしてくる。
もはや映司や刃介に残った選択肢は一つ。

（拙い・・・今オーズになれるメダルは・・・）

メダルホルダーを持っていたアンクは吸収された。
つまり今は映司自身が持ち得るコアで変身するしかない。

（やはり、キョトウに対抗するには・・・・・・）

刃介も、別人格となったキョトウを前にして、戦慄を念をおぼえる

『大人しく渡せば、命を助けてあげてもいい』
『お利巧な選択ぐらい、できるわよね？』

映司と刃介の選択など、最初から決まっている。
二人は瞳を紫に変色させると、身体から紫のコアをだしてキャッチする。
ベルトのバックルに三枚のメダルをいれ、スキャナーで読み取った。

≪ＲＹＵ・ＷＹＶＥＲＮ・ＤＲＡＧＯＮ≫
≪ＰＴＥＲＡ・ＴＲＩＣＥＲＡ・ＴＹＲＡＮＮＯ≫
≪ＲＹＵ・ＷＡ・ＤＲＡＧＯＮ　ＫＮＩＧＨＴ≫
≪ＰＵ・ＴＯ・ＴＹＲＡＮＮＯ　ＳＡＵＲＵＳ≫

「「オオオォォォォオオオオオオオオオ！！！！」」

変身した二人は、すぐさまプテラアイとリュウアイを紫に光らせ、
ロストの右腕とキョトウの身体をよーく観察した。

プテラアイには、ロストの右腕が未だに赤い波動を纏っているように見え、リュウアイには、キョトウの紫の波動のうち、胸の内の中央にまだ血錆色が残っていることを見つけた。

（まだ消えてない。少しだけど、アンクの気配はある）

（本来の人格が深層意識に幽閉されている。だがしかし・・・・・・）

キョトウについてはまだ詳しく解らないが、アンクとロストは、

――お前と、もう一人のお前が一つになったら、どうなるんだ？――

――・・・・・・多分、弱いほうが消える――

ロストが現れて間もない頃、そんな会話をかわしていたことを思い出すオーズ。

（今ならまだ・・・・・・！）

（檻を潰せば・・・・・・！）

＊＊＊＊＊

クスクシエ店内。

「――――映司くんも比奈ちゃんも、鋼さんも真庭さんも慌ててどこ行っちゃったのかしら？なんか騒々しかったけど・・・・・・」

知世子がそう思案していると、二階の部屋から誰かが降りてくる音が聞こえる。
知世子は階段のある方向に目を向けると、

「あらアンクちゃん。どうしたのその格好？」

そこには、アンクと瓜二つの顔立ちをした、白いYシャツを着た黒髪の好青年が。

「あ・・・・・・いえ・・・・・・初めまして」

青年は軽く頭を下げて挨拶した。

「比奈の兄の、泉信吾です」
「えぇぇぇ！？」

＊＊＊＊＊

――ピチョン、ピチョン、ピチョン――

今は地下は、上から落ちてくる水滴以外には何の音もない静寂の世界。
向かい合う二対の異形。
グリードのロストとキョトウ、プトティラコンボとリュワドラコンボ。

――ピチョン、ピチョン、ピチャッ――

そして、

「「オォォォオオオオオ！！」」

オーズとブライは同時に駆け出した。

『『ハァアッ！！』』

ロストとキョトウは右腕と左腕を振るい、オーズとブライが走る軌道に爆炎を起こしていく。

「「うあ、ぅお・・・・・・」」

二人は面食らったような声を出してしまうが、それでも闘志が消えることは決してない。

なおも向っていき、ロストとキョトウに肉弾戦を挑む。

「ハアッ！タアッ！」

「オラッ！オリャ！」

『フフフ・・・ハハハ・・・！』

『うふふふふ・・・・・・！』

しかし、ロストとキョトウの実力は高く、オーズとブライの攻撃は見透かされてしまっているかのように防がれてしまっている。

だがそれでもオーズとブライは拳を止めず、足を止めず、目の前の敵に当たっていく。

（映司くん、あんまり力使ったら、また暴走して――――！）
（刃介、今は焦るな。焦ったが最期、二度と・・・・・・）

比奈と竜王は戦いを見守りつつも、危惧せずにはいられない。

オーズとブライは、ただバカの一つ覚えとでもいうように、ロストとキョトウに立ち向かい、逆に反撃されている。

『好い加減に諦めてよ』
『貴方達の知っているアンクも・・・・・・私もね』

ロストはそう言って右腕から攻撃を繰り出そうとする。
しかしながら、

――ピタッ――

『ッッ――――あれ？なんで・・・・・・！？』
『まだ、馴染んでいない？』

右腕がロストの遺志に反し、動かない。
キョトウもその現象に少しばかり興味を持ったようだ。

するとその隙をつき、ブライが動いた。
ロストもキョトウもすぐに返り討ちにしようと思ったが、ブライのとった行動は、二人にとって２７０度は違ったものだった。

ブライは、キョトウを精一杯抱き締めたのだ。

『な、なんの・・・つもり・・・？』
「頼む、七実。戻ってくれ・・・戻ってきてくれ・・・！」
懇願するように、ブライはキョトウを抱き続ける。
キョトウは戸惑いながらも、
『言ったはずよ。私の意志は幽閉した。今の私は貴方の刀じゃない』
声音だけは冷静さを保たせている。
「だとしても、俺は・・・・・・俺は・・・・・・！」
『（なんで・・・・・・なんで、この男は・・・・・・！？）』
理解できなかった。
今の段階では、自分とロストほうが優位であるはずだ。
なのに、今自分を抱き締めている男の温もりが、こうも心地好く感じるのかと。
『なにやってんの、キョトウ？早くコイツらつぶ――ドゥガッ！！――ぐおぁあ！！？』
ロストが、自ら身動きを封じているブライに攻撃しようとすると、突如としてキョトウの腕が動き、ロストに光弾を浴びせたのだ。
『か、身体、が・・・・・・手足が・・・・・・言うこと効かないで勝手に』
『そっちも、馴染んでないみたいだね・・・・・・！』
どうやらアンクと七実の遺志が想像以上に強いことを知ると、

『『フンッ！』』

ロストとキョトウは共に波動を撒き散らし、爆煙を起こして姿を眩ました。

濃い煙の中、ブライの「ぐぅッ！」という痛みの声が聞こえる。

そうして煙が晴れると、そこには壁によりかかるブライと、変身の疲労で四肢をつく映司の姿。

「映司くん！」

「刃介ッ！」

比奈と竜王は急いで二人に駆け寄る。

「ごめん――あいつら逃がしちゃった」

「ったく、二人の気配と意思が残ってたってのに」

映司とブライは悔しそうに言った。

「それって、じゃあ、消えてないってことだよね？」

「アンクと鑢を何とかする方法は、まだあるということか」

比奈と竜王は、まだ僅かに残る希望を見出し、ほんの少しだけ表情を緩めた。

「今のところはね」

「だが時間の問題だ。一分一秒を争うぞ」

『タカーッ』

『リュアーッ』

映司はタカカン、ブライはリュウカンを起動させて、ロストとキョトウの捜索にあたらせた。
少しでも希望の確率を上げる為に。

＊＊＊＊＊

その頃、ロストとキョトウは、とある小さな山岳地帯にいた。
ロストは岩に腰かけて右腕を凝視し、キョトウは草木に背を預けながら胸に手を当てていた。

『――早く全部手放せばいいのに・・・・・意識も、何もかも・・・・・――悪足掻きは止めなって言ってるんだよ!!』

――ガツッ!ガツッ!ガツッ!ガツッ!ガツッ!――

ロストは憤りのあまり、右腕で地面の岩を殴る。
殴るごとに、地面の岩が砕かれていく反面、チャリンチャリンとセルメダルが右腕から削れていく。

『どうして、あの男の抱擁がこんなにも気持ちイイの・・・・・・・？これも貴方の所為なのかしら、ホントの私？』

キョトウは胸に手を当てたままの姿勢で、ただただ自問自答を試みた。
深層意識に幽閉された鑢七実という、もう一人の――本来の人格に

向けて。
今のキョトウに、俄かながらも愛情の念を刻み込んでいる、天才過ぎる怪物に。

＊＊＊＊＊

クスクシエに引き返してきた一同。
ドアを開ければ、そこにはパルテノン紛いの白い柱がやたらとあって、雰囲気だし用か白い幕がやたらと張られている。

「お帰り～！今日はギリシャフェアよー！」

知世子自身は、頭に草冠をして、身体には白いゆったりとした服をしている。
久々にみる店全体のコスプレだ。

「あ、そんなことより比奈ちゃん。お待ちかねよ、大事なお客様が」
「ヘッ、お客様・・・？」

知世子は笑顔で頷くとそこを退き、その後ろの様子が比奈に見えるようにした。
白い幕には一つの影がテーブルから立ち上がり、姿を見せた。

「――――え・・・？」
「比奈」

泉信吾は、優しい笑顔を浮かべた。

「お兄、ちゃん・・・・・・」

「刑事さん・・・・・・」

比奈と映司は当然驚く。

「そういえば、アンクが憑いてなくとも自然回復できるんだったな」

「ならば、今こうしてるのも必定か」

逆に刃介と竜王は納得している。

「ははははッ、比奈は相変わらず、驚くと子供の頃と同じ顔になるな」

口調も性格も、間違いない。

「やっと戻った。――心配かけたな、ごめん」

「・・・・・お兄ちゃん・・・・・お兄ちゃん！お兄ちゃんッ！」

「うおッ！」

比奈は短く駆け、信吾に抱きついた。

信吾は少し驚くも、その表情は嬉しそうだった。

「比奈、ありがとう」

そう言って、信吾は抱きつき返した。

まさに、感動の再会だ。

「戻ったんだ、刑事さん・・・・・・良かった」

映司は、目の前にある暖かな光景に、心の底からそう思った。

＊＊＊＊＊

さて、感動の再会はこのへんにして、一同は二階の部屋にあがった。

椅子やベッドに座ると、信吾は唐突にあるものを二つ差し出す。

オーズのコアを収めていた、黒をベースに青いラインのメダルホルダー。

一方で、銀色をベースに金色のラインが刻まれた見知らぬメダルホルダー。

「えッ、これって、どうして？」

「つーか、こっちのホルダー・・・・・・なんなんだ？」

映司と刃介は当然驚く。

オーズのメダルホルダーにあったコアは、ロストやキョトウが持っていったものとばかり思っていたからだ。

「あの時、とっさに隠したんだ、彼が。そして、彼女もこれにメダル入れて、隠した」

あの時、とはロストとデシレに裏をかかれた直後のことだ。

二人は急な奇襲もあって、タンスの下とベッドの下に隠したのだ。

「土壇場で、出来る限りの可能性を残したんだよ――自分が消えないための」

信吾は神妙な顔つきでそういった。

「七実って人も、鋼さんへのプレゼントを、こんな形で活かしたんだ」

「あいつ、このメダルホルダーを贈ろうとしてたんだな・・・・・・」

刃介は三枚ずつある、赤・黄・緑・灰・青の五系統あわせて、十五枚のコアメダルが収まった新品のホルダーを手にとってしんみりとする。

なお、ブライ用のメダルホルダーは、オーズのとは違い、最大３０枚までのメダルを収納できる大きさだ。ついでにいうと、オーズのメダルホルダーは最大２４枚までだ。

「オーズのは、比奈がプレゼントしたんだよな？」

「・・・・・・・・・・・・」

比奈はオーズのメダルホルダーを手に取り、丁寧に埃を払った。

「泉信吾。アンクに憑依されていた間のことは、わかっているのか？」

「大体は、彼を通して感じることが出来た」

竜王の質問に、信吾は素直に答えた。

「だから、映司くんの御陰で、比奈が無事でいられたこともわかってる。俺を助けようとしてくれたことも。それに、鋼さん達も理由はどうあれ、映司くん達に協力してくれた」

信吾はそこまで言うと椅子から立ち上がり、映司と刃介の目を見て言う。

「本当に感謝してる――ありがとう」

それは嘘偽りのない言葉だった。

刃介と竜王も立ち上がり、信吾の顔をじっと見る。

「なんていうかよ、どうもしっくりこないな」

「確かに。顔だけならまだしも、声までとは」

「え？」

刃介と竜王の発言に、信吾は疑問をもった。

「お兄ちゃんがアンクなら言わないようなこと言うから」

「すいません。顔が同じだから、ちょっと不思議で」

比奈と映司も立ち上がる。

「ふふふ・・・・・・」

信吾は軽く笑い、次の瞬間には真剣な表情になる。

「映司くん。これからは、俺も戦いに協力させてくれないか？自分たちだけ助かって、それで終わりってわけには行かない」

「あ、いえ、でも・・・・・・」

「お兄ちゃん・・・・・・」

気持ちは解らなくもないが、ついさっきまで危険な綱渡りを、身体だけでとはいえさせられていたのだ。

映司と比奈の表情も曇る。

「頼む・・・！何も出来ない悔しさは、もう充分味わった・・・！」

信吾の思いは堅かった。

＊＊＊＊＊

そこで、信吾をつれて映司らは河川の近くにやってきた。

古びたドラム缶にありったけの乾いた木材を入れて燃やし、あとは信吾がメダルホルダーを持って、映司が信吾から１０ｍくらい離れれば準備完了。

「じゃあ信吾さん！あくまで試しで練習ってことで！」

「わかった！」

オーズにおいて日常茶飯事だったメダルの投げ渡し。

地味なようでかなり重要なこれができねば、協力もなにもあったものではない。

「あの、でも鋼さんまで付き合わなくても」

「気にするな。観てるだけってのは存外に暇なんでな」

刃介は映司の隣に立っていた。
その１０m先には、銀のホルダーを持つ竜王がいる。
信吾が黒のホルダーからタトバの三枚を手に持つのを観て、竜王もリオテの三枚を手にとる。

「まずは・・・・・これだな」
「よし」

そうして、二人はメダルを勢いよく投げた。
気持ちのいい金属音をさせながら飛んでいく三枚ずつのコアメダル。

――パシッ――

刃介が華麗にそれを受け止める。
そして、

――ピューーン――

「おああッ、ちょ、ちょっ！？」

映司側はというと・・・・・・。

「・・・・・映司くん！すまん！」

三枚のコアメダルはあらぬ方向に飛んでいってしまい、地面に落ちたソレを映司が拾い集めている。
これが戦闘中ならコアを盗られて死んでいる。
正直な話、コアを拾う映司の姿はカッコ悪かった。

「あ、大丈夫です！一つずつ、ゆっくりでいいですよ！」
「（おいおいおいおい・・・・・玄人モドキの素人を甘やかすなよ）」

刃介は映司と同じタイミングでカテドラルにメダルを入れているが、映司の甘さには呆れていた。
ここまで致命的なミスを笑って許す甘さに。

とはいいつつも、

「「変身」」

≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＥＮＢＡ≫
≪ＴＡＫＡ・ＴＯＲＡ・ＢＡＴＴＡ≫
≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！ＲＩＯＴＥ！ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！≫
≪ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！ＴＡＴＯＢＡ！ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！≫

「オッケーです！」
「ふんっ」

とりあえず変身完了。
信吾はそれを確認すると、本格的な戦術練習に入る。
わざわざ用意したドラム缶をみて、

「あの炎が敵とすると、敵性は水のコンボか。しかし、コンボの多用は、体力を消耗するから・・・・・・」
「まずは一部分だけでも、それと同じ能力を付加し、別の要素で足りないものを補い」

信吾と竜王はそう論理づけ、ホルダーから二枚のコアをとる。

「すごい。お兄ちゃんホントに全部見てたんだ」
「ああ」

信吾は短く返事し、

「映司くん。まずはメダルをこれに！」
「刃介も頼む！」
「はーい！」
「応よ！」

オーズとブライが了承すると、まずは竜王はコアを二枚投げた。
当然、ブライは平然とその二枚を手中に収める。

「やってみろ」
「はい」

信吾は竜王の動きを真似ようと、少し身構え、腕を何度か振って調子を確かめると、

――ブン！――

半ば力任せに投げた。

「おーっと、取れた」

シャチはいいが、

――ポカっ――

「痛ったた・・・・・・」

チーターが頭に当たった。

「カッコ悪い」

「はぁぁ」

ブライは率直な感想を述べ、竜王も溜息する。

信吾自身も、申し訳無さそうに俯いた。

まあ、いつまでウジウジしても始まらない。

≪ＳＨＡＣＨＩ・ＴＯＲＡ・ＣＨＥＥＴＡＨ≫

≪ＺＥＵＧＬＯＤＯＮ・ＯＮＩ・ＳＭＩＬＯＤＯＮ≫

オーズ・シャトラーター。

ブライ・ゼオニドン。

「よし。まずは高速移動しながら水で牽制！」

「わかりました！」

「はいよ！」

そういわれ、オーズとブライは俊足を活かし、あたり一面を走り回りあがらドラム缶に近寄る。

そして、ドラム缶との距離が一気に縮まったところで、

「「――ハァァァ！！」」

ゼウグロドンヘッドとシャチヘッドから水を噴射して消火する。

「うん、コンボは相手に隙が出来てからか。――よし、色々試してみよう！」

というわけで、

≪ＬＩＯＮ・ＵＮＡＧＩ・ＢＡＴＴＡ≫
≪ＨＡＹＡＢＵＳＡ・ＨＯＵＯＵ・ＴＡＣＨＩＵＯ≫

オーズ・ラウバ。
ブライ・ハヤオウタ。

≪ＳＡＩ・ＧＯＲＩＬＬＡ・ＣＨＥＥＴＨＡ≫
≪ＢＡＫＵ・ＨＡＣＨＩ・ＹＡＴＡＧＡＲＡＳＵ≫

オーズ・サゴリーター。
ブライ・ババチラス。

≪ＴＡＫＡ・ＵＮＡＧＩ・ＺＯＵ≫
≪ＹＡＭＡＥＫＯ・ＪＡＧＵＡＲ・ＩＮＯＳＨＩＳＨＩ≫

オーズ・タカウゾ。
ブライ・ヤジャガイ。

≪ＬＩＯＮ・ＧＯＲＩＬＬＡ・ＴＡＫＯ≫
≪ＫＡＢＵＴＯ・ＭＡＭＭＯＴＨ・ＩＮＡＧＯ≫

オーズ・ラゴリタ。
ブライ・カブマンナ。

≪ＫＵＷＡＧＡＴＡ・ＫＡＭＡＫＩＲＩ・ＷＡＮＩ≫

≪ＹＡＩＢＡ・ＭＥＧＡＬＯＤＯＮ・ＴＳＵＫＡ≫

オーズ・ガタキリワニ。

ブライ・ヤイメバ。

といった具合に、亜種形態の大盤振る舞いだ。

「そろそろ、コンボいってみようか？」

「了解でーす！」

と、そろそろ漸く、ここでコンボを発動する。

なお、今度ばかりは八回目ということもあってか、やっとのことでまともにメダルの投げ渡しが出来たことを追記する。

≪ＳＨＡＣＨＩ・ＵＮＡＧＩ・ＴＡＫＯ≫

≪ＳＨＡ・ＳＨＡ・ＳＨＵＴＡ！ＳＨＡ・ＳＨＡ・ＳＨＡＵＴＡ！≫

≪ＢＡＫＵ・ＭＡＭＭＯＴＨ・ＩＮＯＳＨＩＳＨＩ≫

≪ＢＡＭＡＨＩ・・・・・ＢＡＭＡＨＩ！≫

オーズ・シャウタコンボ。

ブライ・バマーイコンボ。

二人は得物であるウナギウィップと重刀『鉞』を手に持ち、適当に振り回す。

久々になるコンボなので、調子を測る意味も込めて。

「二人共、もういいか？」

と竜王からの一言。

ブライとオーズはハッとなり、すぐさまスキャナーを手に取る。

≪≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫≫

「ハァァァ・・・・・！セイヤァァアアア！！」

「チェェェェストーーーッ！！」

オクトバニッシュと、バマーイショッキングが決まった。

しかしそれらの様子は、

――ピピピッピピピッ――

一部始終、バッタカンドロイドに見られていた。

＊＊＊＊＊

「泉刑事の身体は完全に元に戻ったようだねぇ」

「まあ、これが自然の摂理ってものよね」

鴻上ファウンデーション会長室。

バッタカンドロイドからテレビ送られてくる映像を、鴻上とルナイトを始め、数人が目にしていた。

「しかし、あのアンクがまさか取り込まれるなんて・・・・・・」

「それよりも、鑢が変わっちまったというほうが・・・・・・」

後藤と烈火が驚きと悔しさに、歯痒い思いをする。

「オーズとブライにメダルを残してくれたのは幸いだった」
「でなけりゃ、ブライは兎も角、オーズはプトティラとブラカワニだけになってたでしょうね」

鴻上とルナイトは冷静に思案する。

「つまり、もうアンクさん達がいなくても大丈夫ってことですよね？」
「里中・・・どうしてそうビジネスライクなんだ・・・？」
「ビジネスですから」
「いや、鋼の気持ちだけでも考えてくれよ！」

などという小芝居もあったが、

「というか、グリードに取り憑かれた人が元に戻って、妹さんと暮らせるようになった――これってハッピーエンドじゃないですか。何か問題ありますか？」
「だけど、それじゃ鋼の奴だけが！」

烈火はなおも里中に食い下がる。
片や、鴻上とルナイトはというと、

「アンク君と鑢くんの件もそうだが、火野（こっち）君も深刻なことになりそうだ」
「そうね。刃介と違って、火野くんはまだ人間ですもの」
「人の身でありながら紫のコアメダルを体内に宿す。このまま力を使い続ければ・・・・・」
「待っているのは、終末・・・・・」

＊＊＊＊＊

その頃、真木と四季崎は、キョトウとロストのもとに赴いていた。
真木は水筒を片手に、もう片手には蝙蝠傘。
四季崎は編み笠を被り、片手には無銘の刀を握っている。

「まだ完全に取り込めてませんか、もう一人のアンク君を」
『もう一人のアンクなんて居ないよ。僕は僕一人だ』
「しかし最初に存在していたのはそのもう一人の方ですからね――遺志も強い。時間がかかるのも当然でしょう」

真木はそこまでいうと、

「――が、オーズにアンク君がついておらず、向こうの最大戦力がこちらに来た今、コアメダルを奪う最大のチャンスでもあります」

水筒を開けて、真水と一緒に溶けかけの氷まで地面にぶちまける。

――チャリン――

そして氷にセルメダルを投入すると、そこから不気味な光が漏れ出し、一体の青い異形が紫の光から表れる。

『うぅぁあああッ！』

青を基調とした体色に、全身に生えたトゲと、右腕と一体化したトゲ鉄球――アンキロサウルスヤミー。

それを観た四季崎は、キョトウに話しかける。

「どうだった虚刀『鑢』？」

『さぁて、どうかしら？偽の私じゃ、真の私を幽閉するのが限界だもの』

キョトウは自らの胸をさすりながら答える。

「まあ、そうだろうな。シルフィードから盗んだ『マインド・コア』は、あくまで投入対象の精神に干渉し、対象者の負の感情を軸にして別人格を造る特異なコアだ。鑢七実ほどの相手に使うとなると、フォース・コアで不安定になったトコを狙うしかなかったがな」

説明しながら、四季崎は一枚のセルメダルをキョトウに手渡す。

「やってみろよ、ヤミーの生成を」

『うふふ。面白そうな狂宴になりそうだわ』

――チャリン――

キョトウは手渡された何でもない普通のセルを、その辺の岩に投入する。

すると、岩からは紫の波動が現出し、そこから一体の怪物が現れる。

『ガァァア・・・・・・！』

それの名は、ドラゴンヤミー。

「かかかっ。だったら俺も一肌脱いでやろうじゃねぇか」

四季崎は軽快に笑いながら、セルメダルを一枚取り出す。
そしてソレを手にしていた無銘の刀にチャリンと投入する。

『んぉぉぉ』

無論、それによってさらにもう一体の化物が生まれ出でた。
鉄色と黒色が混ざり合った体、決して折れることも曲がることも錆びることもない、絶対的な存在感――カンナヤミーだ。

＊＊＊＊＊

泉兄妹の住むマンションの一室、そのベランダに映司は立っていた。
夕焼けを見やりながら、表情を鬱々としたものにしている。

（やっぱり、タカちゃん達だけじゃキツいか。ちょっとでもアンク達の気配をつかめれば――）

そう思った瞬間、また瞳が紫になる。

（――――ッツ）

映司はなんともいえない心境の中にあった。

「まだ見つからないんだ・・・アンク・・・」

そこへ比奈もベランダに出てきた。

「比奈ちゃん・・・・・・折角お兄さんと久しぶりに会えたんだから、少し忘れてお兄さんとね」

「でもっ」

とリビングに戻された比奈だが、その直後に見たのは、自分がつくった色とりどりの料理――

「あっ、ダメ。折角盛り付けたのに！」

「味見味見。比奈の料理久しぶりだからさ」

を抓み食いする信吾。

「もう、崩れちゃった・・・・・・」

「うん、美味い」

「え、ホントッ！」

どこにでもある、平凡で幸せな日常。

映司の目には、この光景が眩く尊いものに映った。

「映司くん。お兄ちゃんが抓み食いしちゃったけど、どうせだからこのまま夕食にしない？」

「お、いいなそれ。映司くん、どうだい？」

「あ、はい。それじゃ、お言葉に甘えて」

テーブルにすわり、食卓を囲む三人。

（戻ってるんだよな、比奈ちゃんの日常・・・・・・・・・・・・・・・
ホントだったら、今までずっと続いてた筈の、お兄さんと一緒に生活）

そう思うと、嬉しく思う反面、苦い思いもあった。
まるで、自分という存在が酷く歪に感じるほどに。

「映司くん？」
「――――え？」

ワンテンポ遅れて反応する映司。

「お腹空いてないの？」
「あ・・・・・・」
「遠慮するな。腹が減ってはなんとやらだよ」

箸を全く動かしていない映司に、泉兄妹が呼びかける。

「お兄ちゃんこう見えて大食いなの」
「また余計なことを・・・・・・まあ、映司くんも沢山食べて」
「はいっ、頂きます」

映司はそうしてやっと箸を動かし、エビフライやシュウマイを口に入れていく。
食べ物を租借して胃袋に放り込む映司。
しかし、その租借している間の表情は、味のない物を食べてるかのようにどこかスカっとしない。

「映司くん・・・美味しくなかった・・・？」

不安になった比奈が訊ねると、

「あ、いや。あんまり美味しいからビックリしちゃって。すっごい美味しいよ！比奈ちゃん料理も上手なんだね」

「ふぅ良かった～！ちゃんと料理するの久しぶりだから」

すると信吾が、

「なんだ、けっこう料理好きなのに」

「まあね」

その当たり前な会話を目の当たりにして、

（もう、この二人が戦いに関わる必要は無い。俺や、アンクにも・・・・・）

一つの考えを纏めつつ、箸を動かして腹を満たし続けた。

そうして、食事が終わった日も暮れたころ、

「何かアンクのことがわかったら何時でも連絡して」

「すぐ行くから」

「・・・・・・・・・・・・・」

帰り際の玄関で、映司は微笑んだ。

「え？」

「良かったね比奈ちゃん。お兄さん元気に戻ってきて」
「映司くん・・・・・ありがとう」
「お休みなさい！」
映司はそうして部屋をでて、マンションの敷地から脚を遠ざけていった。

＊＊＊＊＊

（アンク・・・比奈ちゃん、お前を助けようとしてくれている。けど戻ったら、お前は信吾さんの身体を使うかもしれないのに・・・・・だから、あの二人にはもう近づかない）
映司はクスクシエに一旦だけ戻り、決断した。
――ありがとうございました
映司――
置手紙を残し、親しい人達から離れ、映司は孤立奮闘覚悟で出て行ったのだ。

＊＊＊＊＊

（ただ・・・・・・）

映司はタカ・コアを手にしつつ、

「お前は助けなくちゃな」

それだけは決して曲げようとはしなかった。

「（お前はあの時助けを求めてた）――そんなの初めてだよ」

映司はそうして歩き、槍の雨ならぬ

「パンツの雨でも降るかもね」

とジョークまじりにふざけた。

その時、

『キィィィ！』

タカカンの音声が聞こえてきた。

「――いた・・・・・・！」

＊＊＊＊＊

トライブ財閥の会長室。
この夜遅くになって、刃介と竜王はルナイトを訪ねた。
当然、マインド・コアについて知ってるかどうかを。
「ごめんなさい・・・・・・私が余計な物つくって、盗られた所為で・・・・・・」
「謝るな。オメェに責任はないだろ」
頭を下げるルナイトを、刃介はあっさり許した。
「にしても、どうしてあんなメダルを？」
「私は人間の頃、風や重量のほか、感情への干渉が得意だったの。もっとも吸血鬼になった影響で、気流操作と重力操作が特化された反面、精神干渉スキルが減退した」
竜王の質問に、ルナイトはまず前置きをする。
「８００年前の王様は、私に”心変わり”を起こさせるメダルを造らせたのよ――まだオーズが無く、グリードが誕生して間もない頃にね。でも実際造ってみたものの、完全体のグリードたちの欲望はそれを跳ね除けてしまった」
「それで王様自身が、神様（オーズ）になって戦うことになったのか」
ルナイトは顔を俯かせた。
やはり現状の危険性を生み出してしまった責任を感じているのだろう。
「んで、七実を取り返す方法は？」
「８００年前には、別のコアでグリードを暴走させるなんて発想す

らなかった。残念だけど、私の力じゃ無理ね。コアを無効化する『紫の力』しかない」

例えコアメダルであろうと、全ての欲望を虚無にする紫のメダル。
その脅威は刃介もよく知っている。
だが、そこには一つだけ問題がある。

「怖いな、正直言ってよぉ」
「なに？」

刃介は”怖い”という単語を発したことに、竜王の顔つきが疑問を憶えるものとなった。

「下手すりゃ、俺は惚れた女を、殺すかもしれないんだぜ？」

そう。正確にマインド・コアを砕くことができなかった場合・・・・・万が一に七実本体といえるコアを――そう思うと、手先が震えた。

それを観た竜王は、そっと刃介の手を握った。

「竜王・・・・・・？」
「刃介。失礼するぞ」
「はっ？ちょ――――!?」

ゆっくり優しく、真庭竜王は鋼刃介との距離を零にして、唇を重ねて、お互いの温もりを共有した。

（あら・・・・・・）

それを観たルナイトは”やるわね”とでも言うように感じたが、流石に言葉にしたりはしない。

竜王は目を閉じた状態で、目の前にいる男に全てを捧げるような美しい雰囲気で、握っていた手を放して刃介に抱きついていた。

刃介は顔を赤らめ、かなり困惑しているが、それも短い間で、すぐさま竜王が何を伝えたいかを悟ると、竜王の身体を抱き締め返し、唇を離した。

若干、二人の間に熱っぽい空気が漂っているが、そんなことは問題ではない。

「ありがとよ、竜王。御陰で目ぇ覚めたぜ」

「お役に立てて何よりだよ、我が戦友よ」

礼と応を交わし、二人は抱き締めあっていた身体を放し合う。

「さっきまでのお前は、欲望でギラついていた瞳を失っていた。そんなお前は、余りにもお前らしく無さ過ぎるからな・・・・・・」

「自分でもそう思う。全く、さっきまで何ビビってたんだ俺は?出来るか出来ないかなんて、この手でやって見せて、可能にしちまえば良いだけなのによ」

その遣り取りを観て、ルナイトは嬉しそうに無言で首肯する。

そんな時、

『リュアァァァ!』

リュウカンドロイドの音声が聞こえてきた。

「ふっ、来たか。行くぞ、刃介！」

――バッ！――

そう言うと竜王は、赤い浴衣を脱ぎ捨て、中に着込んでいた忍び装束姿に早変わりする。

「ああ。四季崎に目に物みせてやっか」

刃介も欲望の光を取り戻し、ギラついた鋭い目つきになる。

「いってらっしゃい、二人共。今度来たら、手料理くらいご馳走するから」

「ありがてぇ話だ。こいつは意地でも勝って来ねぇとな」

そうして、ここにも決意するもの達がいた。

ただ一重に、たった一つをこの手にする為に。

＊＊＊＊＊

夜明け直前。

映司は独り、橋のような場所を通っていた。

「独りで行く気か？」

「水臭ぇじゃねぇか」

そこへ二人の若者の声。

「ったく、その無鉄砲ぶり好い加減直せよ」

「お前の一番の悪癖だな」

さらにもう一組。

「後藤さん、烈火くん、鋼さん、真庭さん・・・・・・どうして？」

「俺らにもカンドロイドの声が聞こえたんでな」

「それにデータは、財団や財閥に送られてくる」

刃介と後藤が応えた。

「あんた、独りで全部ヤル気か？」

「烈火くんにさえお見通しなんですね。でも俺、アンクを助けに行くんです――グリードの」

「なら尚更、私たちの手がいるな。我々も鑢に手を差し伸べねばならない」

と竜王は言うと、

「それに俺や花菱はアンクではなくお前と鑢を助ける」

「あんたや鑢になんかあったら、金女からの頼み、守れねぇしよ」

「ああ。お前らを死なせたら・・・・・・伊達さんに怒られるしな」

そう言ってもらえて、映司が「ありがとうございます」と言った。

刃介は、みなの表情を見て心構えを確認する。

「行くぜ、野郎ども・・・・・・！」

東から昇って顔を見せてきた朝日を背にして、五人は共に歩いていった。

＊＊＊＊＊

どことも知れない山岳地帯の平地。

そこに五人は辿り着いた。

周囲には味気ない石や岩、険しい崖、鬱葱と生えた木々。

そんな大自然の中、メダルを宿す三人の目の色が変わる。

その気配にもとづき、一同が一斉に方向転換した。

『・・・・・・・・・・』

『・・・・・・・・・・』

『・・・・・・・・・・』

そこには、アンキロサウルスヤミー、ドラゴンヤミー、カンナヤミーがいた。

『オーズ！バース！』

『ブライ！クエス！』

『ブレイズチェリオ！』

三体のヤミーは２０ｍほど離れた場所から、

『『『この先に行かせる訳には行かない！』』』

堂々と宣言した。

「つまり、この先にアンク達がいるのは間違いないというわけか」

「ですね」

「ならば話は早い」

「力づくでも、通らせてもらう」

「そんじゃあ行くぜ」

五人は各々のドライバーを装着。

後藤は腕輪、烈火はポケット、竜王は懐からメダルを取り出す。

映司は黒のメダルホルダー、刃介は銀のメダルホルダーから。

そして、

「「「「「変身――ッ！」」」」」

――チャリン――

――パカッ！――

≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＥＮＢＡ≫

≪ＴＡＫＡ・ＴＯＲＡ・ＢＡＴＴＡ≫

≪ＢＡＲＡ・ＳＡＲＲＡＣＥＮＩＡ・ＲＡＦＦＬＥＳＩＡ≫

≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！ＲＩＯＴＥ！ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！≫

≪ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！ＴＡＴＯＢＡ！ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！≫

≪ＢＡ・ＳＡ・ＲＡ！ＢＡＳＡＲＡ！ＢＡ・ＳＡ・ＲＡ！≫

ブライ、オーズ、バース、クエス、ブレイズチェリオ。

五人のライダーに対するのは三体のヤミー。

オーズはメダジャリバー、バースはバースバスター、ブライはメダマガン、ブレイズチェリオは忍刀『鎖』を構える。

緊張の糸が一気に高まると、

「「「「「「オオオォォォォォオオオォォォォ！！！！！」」」」」」

――ヴィンヴィンヴィンヴィン！！――

まずはバースが後方支援としてヤミーらに射撃。

――ザシュザシュザシュ！！――

ブレイズチェリオも中距離から連結刃で切り刻む。

「フッ！ハア！タア！」

「オラオラオラァァァ！！」

「トォ！セイッ、ヤァァ！」

その援護を受けながら、オーズとブライとクエスは各々の武器で敵を切りつける。

――ザンザンザンザンザンッッ！！――

『うおッ、ごわぁ！』

『うぅおぉ！』

『ん～～ッ！』

ヤミー達もこの攻撃に怯んでいる。
このまま波に乗れば勝てる！そう確信したが、

――ガシッ！――

攻撃を素手で受け止められてしまった。

『その程度か？』
『拍子抜けだよ』
『クックック』

――バシッ！――

「ごあああっ！」
「くっ・・・！」
「んな・・・・・・！？」

アンキロヤミーは右手のトゲハンマー、ドラゴンヤミーは翼での羽ばたき、カンナヤミーは頭突き。
それによって三人が吹っ飛ばされると、

『フッハハハハハハハハ！！』

アンキロヤミーはトゲハンマーからトゲを一斉に射出して小型ミサイルのように爆発させる。
幾ら撃っても再生するので、際限のないトゲミサイルがライダー達を襲う。

『ギャオオオオオオオオ！！』

ドラゴンヤミーは神話に出てくる悪竜そのものだった。
ゴジラのような叫び声を出すや否や、口から破壊性抜群の光線を息吹のように吐き出す。

『カーッカッカッカッカッカ！！』

カンナヤミーはあちらこちらに、直線型の斬撃波と撫で斬り型の斬撃波を放ちながら高笑いしている。
あたりは土煙に塗れ、状況がよくみることができない。

≪ＤＲＩＬＬ　ＡＲＭ≫
≪ＣＡＴＥＲＰＩＬＬＡ　ＬＥＧ≫
≪ＡＮＴＯＵ・ＫＡＭＡ≫
≪ＨＩＴＯＵ・ＨＡＳＡＭＩ≫

「「オオオォォォアアアア！！」」

バースはキャタピラレッグによる走破をしながらドリルアームを突き出し、ブレイズチェリオは暗刀『鎌』を腕にして飛刀『鋏』による飛行突撃をおこなう。

一方でオーズとブライ、

「メダルは・・・・・よし、これだ」
「えーっと、メダルは、どれが・・・・・？」

ブライは即行でホルダーから取り出すも、オーズはどのメダルを使うべきか判断しかねているようだ。

≪ＲＹＵ・ＭＡＭＭＯＴＨ・ＩＮＡＧＯ≫

ブライ・リュウマンナ。
だが、オーズはまだ迷っている。

「おい早くしろ！」
「す、すいませ――ボガァァアァァン！！――うわあああああ！！」

迷っている間に、アンキロヤミーのトゲミサイルが、バース達諸共オーズらに降りかかったようだ。
吹っ飛ばされたのはオーズだけでなく、メダルホルダーもだ。

「いったた・・・・・って、メダル！」

オーズは急いでホルダーを回収する。

「やっぱり、アンクがいないと・・・・・」

オーズは多種多様なコアメダルを三つの部位に使うことでトリッキーな戦いを可能とする。
だが正規コンボと亜種形態を含めて１２０種類を越えるオーズの形態を深く理解し、メダルを的確に投擲できる作戦参謀がいなければ、思いのほか戦いに支障をきたしてしまう。

「ぐおぁ！」
『隙ありだぁぁ！』

そこへドラゴンヤミーが、クエスに一発お見舞いして、オーズに襲い掛かろうとする。

「火野、退け！」
「うわっ！」

ブライはオーズを無理に退けて重刀『鉞』を一本のグレートアックスモードとし、そのまま力任せにドラゴンヤミーの脳天目掛けて振り下ろした。
しかし、

『無駄な、足掻きだぁぁ！』

ドラゴンヤミーは口から紫の波動を放ち、

「んぉあ・・・・・・！？」

ブライの変身を強制解除させたのだ。

「は、鋼さん！」

オーズは当然心配するも、

『フアァァァ！！』

――バアァァアァァァン！！――

「うおぁぁあああああ！！」

アンキロヤミーのトゲミサイルが炸裂し、オーズに直撃してしまった。

「火野！」
「刃介！」

バースとクエスが声を荒げた。
そこには仰向けで倒れる刃介と、変身が解けてうつ伏せになっている映司。

『ヘッヘッヘ・・・・・・！』

ヤミーたちはトドメを刺そうと二人に歩み寄っていく。
だが、

――ギュルリリリリリリリリリ！！――

キャタピラレッグの駆動音。

――ビュオォォォオオォォォォン！！――

飛刀『鋏』のエンジン音。

≪ＯＯＫＡＭＩ・ＫＡＮＩ・ＫＩＴＳＵＮＥ≫

カミカニツネにメダルチェンジしたクエス。

バースはアンキロヤミーに、ブレイズチェリオはドラゴンヤミーに、クエスはカンナヤミーに突っ込んで行き、映司と刃介との距離を一気に離していく。

「二人共、今のうちだ！」
「アンクと鑢の元へ！」

「ここは任しとけってんだ！」

三人はそういってさらに移動速度をあげていく、

「すいません！」

「感謝する・・・！」

映司と刃介は立ち上がり、よろめきながらも気配のする方へと走っていった。

＊＊＊＊＊

ふらつきながらも走り、刃介と映司は森の中に入り込んだ。

（（気配はある・・・・・・いる、七実（アンク）だ！））

二人は僅かにも残る確かな気配を頼りに、千鳥足にも似た歩調で歩いていく。

だがそうして歩いているうちに、ある二人と出くわした。

黒い蝙蝠傘を差し、右腕には奇妙な人形を乗せた眼鏡の男。

頭に編み笠を被り、背中には呪刀『鎮』を帯び、目元に菱形の刺青をした和装の男。

「真木博士・・・・・・」

「四季崎、テメェ・・・！」

映司はなんともいえない表情だが、刃介の顔には明確な敵意があった。
だがそれに大した反応をすることなく、四季崎は無言のまま。
真木にいたっては、その目を紫に光らせ、映司の身体もそれに反応する。

「おっ、うぅっ、あぁっ・・・・・・・!!」
「火野!」

メダルの呼び合う感覚に苦しむ映司。

「火野、我刀。アンクと虚刀に会うのは諦めてくれよ」
「完全に吸収されるのも時間の問題です」
「ざけんなボケナス!!んなことで諦められるか!!」

刃介は怒りの念を剥き出しにして怒鳴った。

「まぁよぉ、オメェの気持ちは解らんでもない。でも今はな――――」
「火野くん。君の中にあるメダルの話をしましょう」

そうしてまた真木は瞳を紫に変色させる。

「おぉっ、あぁぁ!うぅっ・・・・・・・!!」

それと同時に、メダルの活性化によって苦しむ映司の瞳もまた、紫色となっていた。

「テメェら・・・・・・!」
「待て待て。今日は話をしに来てやったんだ」

「話、だと・・・？」
「そう。お前らにとって大事なお話だ」

そう言った時の四季崎の顔は編み笠で隠れていたが、声音と口元だけは、確実に笑っていた。
まるで、渾身の作品がもう直ぐ完成する、と意気込んで喜ぶ芸術家のように。

兄妹と遺志の力と映司の決断（後書き）

次回、仮面ライダーブライ！

異変と欲望神と愛ゆえに

異変と欲望神と愛ゆえに（前書き）

仮面ライダーブライ！
前回の三つの出来事は！

一つ！比奈の兄・泉信吾がアンクから解放され、比奈と再会！

二つ！その二人を巻き込まない為に映司は、クスクシエから去る一方、刃介はルナイトと竜王の激励により、気力を取り戻す！

そして三つ！アンクと七実の救出に向った映司と刃介の前に、Ｄｒ．真木と四季崎記紀が現れた！

異変と欲望神と愛ゆえに

とある緑豊かな森林地帯。
草木が青々と生い茂る大自然の中で、奇妙な運命に身を置く二組の男たちがいた。

片方は、火野映司と鋼刃介。
片方は、真木清人と四季崎記紀。

話をしやすくするため、映司と真木、刃介と四季崎とで別けさせてもらう。

「んで、話ってのはなんだよ？」
「ああ。まずはお前について簡単な話からしてやろう」

四季崎はそういって薄らと笑う。

「前にも聞いたろうが、俺の狙いはお前を『超完全体』とし、神さえも凌駕する存在にすること――完全系変体刀・我刀『鋼』として成就だ」
「ああ聞いたよ。聞いてるからさっさと次の話題に進んでくれ」
「せっかちな奴だな。まあ良い、欲望に正直で結構なことだ」

四季崎はわざとらしく、手を上げてみせる。

「今現在、俺はお前を試している。キョトウを倒し、虚刀『鑢』を取り戻せるかどうかを？その成果によって、正式にお前を我刀『鋼』として認める」
「御託はいいから肝心な部分に突入しろ」

刃介は不機嫌さを一切隠さずにズカズカと言い切った。

「だからそう焦るなって。――俺がこんな体(てい)になってまで、お前を完全な者にさせたいと考える理由についてだが・・・・・・」

そう、そこだ。

一番聞きたい部分である。

「ズバっと言っちまうとだな、娯楽だよ」

「・・・・・・・・・・・・へっ？」

耳を疑った。

戦国時代⇒８００年前⇒現代にかけてまで、多種多様なコアメダルを造り、人形(ななみ)達を造り、魔法まで使った男の動機が、娯楽。

余りにも衝撃性のない答えに、刃介の頭から力が抜けていく。

しかし、そんな答えでは納得できない欲望が踏みとどまらせた。

「四季崎。このごに及んでおふざけに付き合ってる暇はねぇんだがよ？」

「ふざけた理由？全く持ってそうだな。だが一族の目的が潰えた今、刀作りの為に生み出された俺に残ったのは、やはり刀を創るって言う欲望だけだ」

四季崎は編み笠を深く被り直しながら、表情を愉快げに歪めていく。

「目的がなければ、幾ら刀を創っても仕方がない。だったら、自分が楽しむ為に作ればいいんだ。どんな芸術家だって、作品を作る過程に喜びを見出し、作品を仕上げたときに満足する。かっかっか、

俺も同じになっただけだ。ただし、規模（スケール）は果てしなくデカいがな？」

四季崎はそう告白する。

ありえない解答に刃介は、思わず拳を握ったが、すぐに解いた。

そのバカげた考えで七実はあんな目に遭っているが、逆に言うとそのバカげた考えがなければ、七実達と出会うことさえなかったのだから。

「そうか・・・・・『超完全体』とやらに、俺がなったとして、お前はその先に何がある？」

そう。刃介が完全変化するということは、四季崎の魂を宿したコアメダルも、刃介に取り込まれるということだ。

だがそれは裏目に考えてみると、

「その先だと？そりゃあお前と共にあるだろうさ。俺は、神さえも殺せるお前の道筋を、内側から見物させてもらう。まあ、作品が展示会でどう評価されるかを見に行くようなものか」

「っっ！！」

――ガシッ！――

刃介は無意識に四季崎の胸倉を掴んだ。

力をくれることについては感謝するが、四季崎を楽しませる作品や玩具になるつもりはない。

「言葉は選んだほうが良いぜ？」

「善処しよう。だがよ、俺は己が欲望を満たすぞ。お前の無限の我欲によってな」

四季崎は胸倉を掴まれながらも、なお痛快そうに笑っている。

「――――チッ」

舌打ちしながら、刃介は乱暴に四季崎を放した。

「そこまで言うなら成ってやるぜ、欲望の神に・・・・・・・！しかし、後にも先にも其処へテメェが介入する余地はおろか、一部の隙もないってことをよーく憶えておけ・・・・・・・！」

一方で、そんな会話を隣で聞きつつ、映司と真木は。

「頂きたいんです、そのメダル」

真木は映司のメダルを貰おうと、力を強める。

「っっ――すぐにもあげたいんですけどね・・・・・・貴方が、世界を終わらせるなんて、言わなければ・・・・・・」

映司は半ば土下座にちかい姿勢になりながらもコアを押し留める。

「抵抗は無駄です」

「うっっ！！」

メダルの共鳴になお苦しむ映司。

映司は無意識に、其の場を離れて別の場所に走っていった。

「お、おい火野！」

そんな映司を観て、刃介は後を追っていった。

＊＊＊＊＊

その頃、バース達は。

――バガァァアアァァァン！！――

『『『ぐがぁぁあああああああああ！！』』』

三体のヤミーの身体を廃工場へと吹っ飛ばしていた。
壁が脆く崩れるも、それを突入口にして三人は追い討ちでもかける様に接近していく。

『このっ、よくもぉ！』

アンキロヤミーは怒り、右腕からトゲミサイルをバンバン発射し、

――ヴィンヴィンヴィンヴィンヴィンヴィンヴィンヴィンヴィンヴィン――

バースはそれを弾丸で弾いていく。
だが、

「うわっ！」

バースバスターを上方に逸らされてしまう、
その隙にアンキロヤミーは強力な冷気によってバースを凍らせた。
胸から下が凍りついてしまい、思うように動くことが出来ないバース。

だがそれでもバースは、

――ヴィンヴィンヴィンヴィンヴィンヴィンヴィンヴィンヴィンヴィン！！――

なおも攻撃を続けた。

「ウッシャアアア！！」
『フゥアアアア！！』

片や、ブレイズチェリオはドラゴンヤミーとで攻撃を交えあっていた。

≪ＥＮＴＯＵ・ＪＵＵ≫

胸のカプセルが開くと、両手には炎刀『銃』が転送される。

――パンパンパンパンパンパンパンパンパンパン！！――

連続して発砲される弾丸。
それは次々とドラゴンヤミーに当たるも、

『その銀弾鉄砲で、なにができる！』

ドラゴンヤミーは翼をはためかせ、途中から弾丸を防いできた。
その翼のはためきには強力な冷気が含まれていて、

「くっ、こんちくしょう・・・・・・！」

ブレイズチェリオは、腰から下を氷付けにされてしまう。
しかし、それで諦める花菱烈火ではない。

「うおおおおおおおおおお！！」

――パンパンパンパンパンパンパンパンパン！！――

そして、クエスはというと。

≪ＳＡＳＯＲＩ・ＳＡＲＲＡＣＥＮＩＡ・ＫＩＴＳＵＮＥ≫

ササラツネに変化したクエスは、カンナヤミーに対して中距離戦を行っていた。
三つのパーツもどれもが、彼女の意のままに動く触手としての役目を果たすからだ。

「タァアア！！」
『ドゥアア！！』

二人の戦いは実に拮抗していた。
カンナヤミーの攻撃力は警戒さえしていれば、なんとか凌げる程度のもの。
だが、決して折れず曲がらず錆びないという特性ゆえに、常軌を逸

したタフさを持つ。
マラソンマッチを覚悟はしていたが、このままでは氷付けになった仲間を助けられない。

（くっ・・・・・・）

クエスは内心で焦った。

そしてバースらは。

『ここまでだなバース』
『終わりだよ、お前らは』

バースは弾切れ、ブレイズチェリオはセルネルギー切れで、其々の銃火器が撃てなくなった。
補充しようにも、脚が凍っていては動けない。

「・・・・・悪いが終わるのはお前らだ」
『ほう。その状態でどう終わらせるつもりだ？』
「俺らのドライでぐうたらな上司が出勤してくるんだよ」
『なに？』

四人がそう話していると、

――ヴィンヴィンヴィン！！――

『『っ！？』』

突如として、メダルの弾丸が二体に襲い掛かった。

それを撃ちこんだのは一人の女性で、彼女はゆっくりと、明るい陽射しが立ち込める正面の入り口から姿を見せた。

「おはようございます」

里中エリカ。

例え死地でもビジネスライクを貫く女である。

「里中っ！」

「頼むっ！」

「了解」

里中は早速満タン状態のセルバレットポッドを二つ、バースとブレイズチェリオに投げ渡す。

バースはそれをバースバスターの銃口と連結させる。

ブレイズチェリオは忍刀『鎖』を抜刀し、合体させてセルを投入。

≪≪ＣＥＬＬ　ＢＵＲＳＴ≫≫

「こういうことだ」

「憶えときやがれ！」

バースバスターと忍刀『鎖』には多大なエネルギーが増幅・解放され、

「「オオォォォアアアア！！」」

必殺の銃撃と斬撃が放たれた。

『『んっ！』』

アンキロヤミーとドラゴンヤミーはその危険性を瞬時に悟り、咄嗟に身体を横に転がして避けた。

当然、後方では凄まじい爆発がおき、直撃していれば確実にやられていただろう。

爆発によって、相当な煙も発生し、それを煙幕にしたのかどうかは知らないが、

「――――逃げたか」

「後で厄介にならなきゃいいんだがよ」

二人がそう言っていると、

「おい、そっちはどうだ？」

クエスが駆けて来る。

「そういうお前は？」

「いや、ダメだった」

「そっか。そっちもか」

そんな三人を遠目で見ていた里中は、

「ふあぁぁ」

朝早くということもあってか、欠伸をしていた。

＊＊＊＊＊

所もどって森の中。

「火野、待てって！」

「うぁ、はぁ、くぁ・・・・・・！」

がむしゃらに、逃げるように走る映司と、それを追いかけるべく走る刃介。

「言っとくが、今はどれだけ逃げても無駄だぜ」

急に刃介は声音を冷やした。

だって、

「とっくに、先回りされてるしよ」

「――――！？」

そう言われて漸く気付いた。

今時分の眼前に、例の人形が置かれていることに。

持ち主は人形を拾い上げてこう言った。

「火野くん。君は知ってて見ないふりをしてるんですか？」

「え・・・・・？」

「自分がグリードになろうとしていることに」

衝撃的な事実は、時としてあっさりと、そして残酷に突きつけられる。

「おい、真木。その話、どうしてもする気か？」
「当然です。そうしなければ、火野くんは何時まで経ってもメダルを譲渡しません」
「その程度でどうこうなる男じゃないぜ」
「かかか。そいつは何とも、筋金入りの偽善ぶりだなぁ」

四季崎も途中で混ざりつつ、話は進んでいく。

「一体・・・どういう・・・ことですか・・・？」

映司は近くにあった大木に身を寄せながら聞いた。
すると、真木は小さな紫の布を地面に敷き、その上に人形サイズのテーブルや椅子を並べだす。

「いいですか火野くん。グリードとはその名の通り欲望の塊です。――が、逆を言えば欲望しかない。・・・・・ただ欲し続けるしかなく、どれだけの欲望を抱こうとも、それが満たされる喜びを味わうができないんです」
「まあ、我刀と虚刀とリュウギョクは例外だがな」

四季崎も途中で、玩具の食べ物を並べたりなどで手伝うも、真木は「ヤメテクダサイ」と片言で言っていた。

そんな時だ、戦闘を区切って駆けつけた後藤たちが、茂みに隠れるようにして到着した。

「真木博士？」
「四季崎・・・！」

「火野さん、かなり危険っぽいですけど」
「まあ、鋼の奴がいるから、なんとかなるだろうけど」
四人はとにかく、少しの間様子を見ることにした。

「どういうことですか？」
映司は訊ねた。
「例えば欲望が満たされたと感じる方法の一つ、感覚――視覚（みる）、聴覚（きく）、嗅覚（かぐ）、味覚（あじわう）、触覚（ふれる）。つまり人間の五感」
真木は具体的な例を述べる。
「率直なところ、正常なグリード達が見る世界の色は、くすんでいるわけだ」
まるで、画質の悪い――光の質が可笑しい動画のように。
「音は濁って聞こえる」
まるで、耳に空気や水分が詰まっているかのように。
「君もそろそろ何かを感じている筈です。いや、感じなくなっていると言った方がいいですか」
「だからこそグリードは際限なく欲する」
人形・テーブル・椅子・食べ物を飯事のように置き終え、四季崎と真木は立ち上がった。

「連中がコアメダルを九枚そろえ完全復活した暁には、人が正常に感じるソレらを永遠に貪るだろう。人間ごと喰らいつくしてな」
「人間、ごと・・・・・・・！？」
映司はその解答に恐怖を感じ出していた。
「それをさらに大きく暴走させてば、世界そのものを喰らう。それでもなお満たされない絶望的な深い欲望で。それは、塵一つ残らない美しい終末」
真木は何時もの口調と何時もの表情でそう語った。
己が目指すモノを。
「一つ訊いていいか？」
「なんです？」
「さっきの説明だと、俺らが異常なグリードだと言われているようだが」
「だからこそ、オメェは完全に到るに相応しいんだよ、鋼刃介」
四季崎は刃介にそう述べ始める。
「お前は人間の頃から、グリードのように満たされない無限の欲望を秘めていた。なにをしても、なにを感じても、満たされない空虚な日々を送っていた。しかし本物のグリードになって以降は、鑢七実を始めとする多くの仲間と出会い、共に戦い、ある程度は満たされた心地を味わったはずだ」
その推察に刃介は反論しなかった。
全てが、紛れも無い真実だからだ。

「しかし、お前の欲望がそれに合わせて巨大に膨れていく。満たされた喜びを味わえば、もっと心地好い幸福を求めて、時間が許す限りお前の欲求と幸福は、捩れた螺旋の如く連鎖する」
「じゃあ、どうして七実と竜王まで？」
そうだ。
七実や竜王にそのような論理は通じない。
なにせあの二人は『無欲』なのだから。
「その辺については俺自身も詳しく解らんから、仮説だけ言っておく。――あの二人の原典は知っての通り、本来は生まれてくることさえ許されなかった才能の申し子だ」
その許されなかった可能性は、四季崎一族の歴史改竄によって開かれた。
「あれほどの逸材となれば、コアメダルとの驚異的な同調（シンクロ）を果たし、『無欲』であるからこそ、グリードの最大の特徴である『欲望』が無いんだろう」
「・・・・・・・・・・・・・・」
言われてみればそうだ。
竜王とて、以前コアメダルを生産したのも、欲望とは違う何かの感情が働いていたようにも思える。少なくとも、彼女は人間の世界を喰らい尽くすような性根をしていない。
「だからこそ、お前らは幾らコアを宿しても暴走しない。正規のグリード達には無いものがあるからな」

四季崎はそう締め括った。

「・・・・・・だったら、尚更メダルは渡せませんね」

映司は真木を睨みながらそう断言する。
それがどんな結果を齎すかを承知の上で。

「しかし渡してしまえば、君は美しいものを美しいと感じられるままに、終末を迎えられますよ。――こうならずに」

真木は両手を見せた。
おどろおどろしい紫のオーラを毒気のように纏わりつかせた、異形の両腕を。

それを見た刃介は、「チっ」と舌打ちをして。
負けじと自分も両腕をグリード化させる。

そして、

「火野、退散すんぞ。迎えも来てるしな」

――〜〜〜〜〜〜〜〜ッッ！！――

表現のできない音をだし、両腕から五大属性の他、様々なエネルギーを当たり一面に、右腕から放射してぶちまけた。

「「――――ッ！！」」

こんなやりかたで煙幕を張るとは、真木も四季崎も予想だにしていなかった。

その隙に、

「火野！」
「鋼ッ！」
「刃介！」

仲間達の声と足音が聞こえ、それに伴い、映司と刃介の気配も遠ざかっていく。
そうして、全ての気配が全て感じられなくなるほどに遠ざかった頃に、煙幕も消えた。

後に残ったのは、

「・・・・・・・・・・・・あ」

さっきの騒ぎのせいで、変な体制で倒れている人形と、

「ＷＯＷ！！？」

奇声を発するオッサンと、

「お前、アホだろ？」

呆れ返るオッサンだけだった。

＊＊＊＊＊

鴻上ファウンデーション。

そこで鴻上は紫の葡萄ワインを飲みながら報告を聞いていた。

「――なるほど。Ｄｒ．真木はもうそこまで」

「火野さんよりグリード化が進んでいるようでした」

報告しているのは当然、里中だ。

「メダルを受け入れようとした者と抑え込もうとした者の差・・・・・だろうが・・・・・何しろ前例は同じ血族における同じ理由による三件だけだ。――人がグリードになるという」

そうしていると、鴻上はなにかを思い立ったのか、少し考える。

「・・・・・８００年前に暴走したオーズは・・・・・・そういうことかもしれないね」

人の身でありながら、二十枚を越えたコアを一度に解放して吸収するも、暴走して果てた欲望の暴君。

「オーズとしての器無き者はグリードに」

鴻上はそう言って、グラスにワインを注いだ。

例え器に酒が納まり切らずに零れ落ち続けようとも。

それが、何かの末路とでも言うかのように。

＊＊＊＊＊

無論、比奈たちも映司の異変を聞く事になった。
後藤と烈火の口から、だが。

「映司くんが・・・・・・グリードに・・・・・・・」

ショックのあまり、身体の力が抜けて椅子に座り込んでしまう。

「まさか・・・・・・」

信吾も信じられなさそうにしている。

「真木博士の話によると、もう何か異変があっても可笑しくないらしいが」
「・・・・・そう言えば昨夜――比奈。夕飯食ってるとき、映司くんの様子が可笑しかったときがあったろ」

そう言われて思い出す。
食事のおかずを口にしたとき、映司の表情がどこか曇っていたことに。

「喰い物ってことは、舌・・・・・・味覚が？」

流石に体力派な烈火もこれには気付いた。

「そんな・・・・・・感じなくなってたの？・・・・・・それなのに」

それなのに、映司は自分の料理を美味しいと言ってくれた。
その残酷とさえ言える優しさで。

「映司くん・・・・・・・・――――ダメ。そんなの、絶対ダメ・・・！」

比奈は立ち上がる。

「映司くん止めなきゃ！これ以上戦わないように！」

＊＊＊＊＊

どこぞの川岸。
そこで、映司は川で獲った魚を焚き火で焼いて食べていた。

「・・・・・・なんか、味の抜けたガムみたいだ・・・・・・」

いよいよもって、自分がどんどん怪物に近づいていくことを認識させられる。
パチパチと燃える焚き木の音を背景に、映司の表情はどんどん曇っていく。

「いよッ！」
「やはり此処か」

そんな時、映司を訊ねてくる二人の人物。

「鋼さん、竜王さん」
「やっぱし、ここでサバイバルライフか」
「だが、今ひとつ物足りんようだな」

二人は見抜いている。
映司の言葉を聞いていたが故、味覚が無くなったことに。

「今思うと、アンクが身体とアイスに拘った理由が解る」
「グリードの身体では味わえん五感を、人間のそれで初めて味わえたんだからな」

そう言う二人の言葉に、映司が虚空の彼方へと語りかける。

「アンク(おまえ)ちゃんと言えば良いのに」

恐らくそれは、此処にいないアンクの向けられたものだろう。
だが、あの捻くれ鳥のことからして、

（まあ言うわけないか）

とあっさり自己内で納得する。

「火野、俺達もいいか？」
「あ、どうぞ！」
「ありがとう」

刃介と竜王も座り、棒に刺さった魚を手にして口に運ぶ。

「・・・・・焼きたては、やっぱ熱いな」
「えぇ。今の俺でも、熱いのはわかります」
そうして三人は、ただひたすらに静かに、食事を続けていた。

＊＊＊＊＊

日が沈みきった頃、洋館の広間ではガメルが駄菓子を口にたくさん放り込んでいた。
階段に座りながら食べるのもマナー的にあれと思うが、オツムが幼い彼にそんな常識は通用しない。

「うん！美味い！」

駄菓子や洋菓子、スナック菓子を食うガメル。
それが何の意味になるのかも知らないまま。

「メズール、これ美味い！――あげる」
『あら、ありがとう』

すぐ隣にいるメズールは素直にお菓子を受け取る。
だが、

『ふんっ』

ガメルに気付かれないよう、すぐ後ろに捨てた。

わかっているのだ。ガメルの母親役をしているメズールは、人並み以上に理性がある。
だから解っている。そんなことは、無駄であるのだと。

しかし、ガメルはただただ、胃袋を満たすことで味覚を満たしているつもりになっているだけ。
それゆえに、

――ガリッボリッ――

無機物（けんだま）であろうと噛み砕いてみせる。

「ん～～ッ、美味いぃぃ！」
『良かったわねぇガメルぅ？一杯食べていいのよ』

などとやっている二人を眺めながら、二階のテラスでカザリは、

「ふッ、全く、わかりもしないくせに」

嘲笑じみた声を出す。

「――――メダル、取りにいくの？」

そうして、すぐ目の前にいるロストに話しかける。
右腕の調子をみているのか、さっきから指を閉じたり開いたりしている。

「真木たちがヤミーを使ってオーズたちを誘き出すんだ。ついでに紫のメダルも一枚くらい貰おうかなぁ？」

例え子供であろうと、やはり根幹はアンクなのだということを再認識せざるを得ない言葉だった。

＊＊＊＊＊

「では今言った通りに。――ブライとオーズは必ず来ます」
『・・・・・わかった』

真夜中のビルの屋上で、真木はアンキロヤミーに命令を下した。
アンキロヤミーはそれに従い、すぐに走って言った。

その両隣では、

『じゃあ良いわね？上手くやりなさいよ、私のヤミー』
『ああ、問題ない』

キョトウがドラゴンヤミーに命じ、

「わかったなら、早めに頼むぞ」
『御意』

四季崎はカンナヤミーに指示を出した。

『うふふふふ・・・・・！ブライに勝ったら、あの人を私のモノにしちゃおうかな？本当の私を差し置いて、偽者の私が・・・・・・
ははははッ、きゃはははははは！』

キョトウは自らの欲望を剥き出しにして高笑いする。
それを見ていると、
「――――――ッッ！？」
真木の身に異変が起きた。
彼の瞳はいきなり紫となり、真木自身も苦しみだす。
そして、
「真木清人」
四季崎は、目の前にいる者に声をかける。
「お前の流儀に合わせてこう言っておいてやる」
眼前にいる、紫の異形に向って、言う。
「ヒトとしての〝終末〟におめでとう。これからは、『ギル』と呼ばせてもらうぜ？」
『ギル、ですか。良き名前をありがとうございます――四季崎氏』
世界終末のカウントダウンへ続く導火線は、今此処に用意された。

＊＊＊＊＊

翌日の真昼間。
とある円形の広間には、人が多く集まっていた。

買い物に来たもの、散歩に来た者、自慢のパフォーマンスを路上で披露する者、商売をする者、ただただ通行路として利用するもの。

そこには理由こそ違えど、交差する全ての人間が平等にいた。
そう、この時までは。

「ん・・・・・？・・・・・・えッ！？」

とある一人のサラリーマンが、足元の変化に気がついた。
急に冷えて動かなくなった足は、氷付けにされていた。
当然、周囲の人間たちも、自分たちが凍らされていると気付く。
気付いたときには、広場にいた人間全てが、身動きを封じられていた。

そこへさらに混乱を投入するのが、

「――――キャアアアーーーッッ！！」

一人のＯＬの叫び声に皆が振り向き、見てしまった。
アンキロヤミー、ドラゴンヤミー、カンナヤミーの姿を。

『『『フッ――ウゥアアアアアアアア！！！！』』』

猛々しく叫ぶ三体のヤミー。
そんな混沌的状況を見つめるものが二人いた。

『ふぅぅん』
『ほう』

赤き鳥の異形、ロスト。
紫の龍の異形、キョトウ。

＊＊＊＊＊

刃介らも、ヤミーの気配を逸早く察して走っていた。
全力で走る三人は、刻一刻と現場に近づいている。

しかしその時、

――キィィィッ！――

一台の黒い車が止まったのだ。
それも刃介たちの進路を遮る形で。

「映司くん！」

乗っていたのは、助手席に比奈、運転席に信吾――この二人だけ。
この二人はドアを開けて車から降りた。

「映司くん、行っちゃダメ。戦いを続けたら映司くんは――」
「ヤミーなんだよ。それに・・・・・アンクもいる」

「でもッ」
「そっちは後藤くんや烈火くんが行ってくれる。映司くん、少しは自分の身体のことを考えるんだ」
比奈と信吾の二人にそう言われても、
「大丈夫ですよ！自分のことは自「大丈夫じゃない！」
映司はなお止まろうとせず、比奈も思わず叫んだ。
「映司くん、味もわからなくなって。このまま、どんどんグリードに・・・・・そんなの酷すぎる！」
「幾ら言っても無駄、かもしれんぞ泉？火野（こいつ）は後天的とはいえ、人間として故障してるんだからな」
「「えッ・・・・・？」」
刃介がそう言うと、泉兄妹は口を一瞬だけだらしなく開けた。
「こいつはどうでもいい他人の為に一々命を賭けやがる。・・・・・・人間ってモンが命賭けて誰かの助けになるとき、それは大抵自分の利益も絡んでいるからだ。そうでなければ、吊り合いが取れたもんじゃないし、それ以前に人間って奴は理屈ぬきで自身を一番にせにゃならん」
「火野は恐らく、その何かを判断する為の命・・・・・・天秤そのものを何時も賭けの対象にしている。最後の最期にとっておかねばならん者を、時として躊躇なくな。――そんな生き方を続けていれば、何時か壊れ果ててしまう」
火野映司という人間の歪な生き方。

それを、正反対な刃介らが説いた。

「ただ唯一の救いといえば、このバカの理想が借り物ではなく、自分から生み出したものであることだ。万が一、紛い物であり借り物の理想だったら、俺は間違いなくこいつを殺している。そういう奴に限って、最後には惨たらしい最期が待っているからな」

「本当に空っぽな人間は、たった一つの理想をどこまでも貫く通せるものだ。しかし、長いときの中で、いつか借り物の理想は磨耗して、破綻していることに気付いて、そして過去の己を恨み呪う」

刃介の一言一言を聞くたび、比奈の顔色は青くなっていく。

映司がこのまま一生をオーズとして過ごした場合、起こりかねない最悪の結末を予見させられて。

「まあ尤も、他人である俺らがどうこう言おうが、この阿呆が変わらない限り意味は無い」

「火野映司が、破滅の結末を辿るか、理想の果てに何を見るかは、この男次第だ」

＊＊＊＊＊

片や広場では、状況は悪化の一途を辿っていた。

人間たちの行動を縛る氷はより大きく成長し、体の自由は減っていく。

なにより、このまま放置されれば凍傷にもなりかねない。

アンキロヤミー達はその光景に満足げな声音を出しつつ、近くにいる適当な人間の胸倉を掴んでこういった。

『『『助けて欲しいならオーズとブライに頼め・・・・・・！』』』
「「「おーず？ぶらい？」」」

言葉の意味が理解できないサラリーマンや主婦や学生は、顔にありありと？を浮かべる。
するとアンキロヤミーたちは別の人間の胸倉を掴み、

『『『早く叫べェッ！！』』』
「「「お、おーずとぶらいってなんだよぉ！？」」」

当たり前の反応が返ってくる。
しかしながら、

『うるさいぃ！』
『見せしめだぁ！』
『二人や三人、減っても問題あるまい』

するとアンキロヤミーとドラゴンヤミーは、口から冷気を吐き出して二人の人間を完全に氷付けにした。カンナヤミーは自慢の刃を人間の首にあてる。

そして、

――バリィィィィン！！――

氷付けにされた人間二人が木っ端微塵にされ、

――ザシュ！――

――・・・・・・・・・・・ゴロン――

一人の人間の首が、周りを朱色に染めながら落ちて転がった。

「「「「「きゃあああああああああ！！！！！」」」」」

「「「「「いやあああああああああ！！！！！」」」」」

「「「「「うわあああああああああ！！！！！」」」」」

当然、残った人間たちは恐怖のどん底に叩き落される。

『『『どうした？叫べぇっ！』』』

トドメとさえ言える一言にとうとう、

「助けて・・・・・・助けて！オーズ！」

「頼む・・・・・・来てくれ！ブライ！」

遂に人々は、オーズとブライを招き寄せるための、ルアーとして起動させられてしまった。

次々と連鎖反応をおこして巻き起こるオーズ＆ブライコール。

『『『もっと叫べェっ！！』』』

だがその時、

――ブゥゥゥウウゥゥゥゥン！！――

バイクのエンジン音。

『『『っっ！！』』』

それはライドベンダーに乗った、バースとブレイズチェリオ。
ライドベンダーは一直線にヤミーに向って駆けていき、

――ドカっ！――

『『『うおわあああああ！！』』』

ヤミーとライドベンダーが衝突し、戦いが始まった。

＊＊＊＊＊

一方、大勢の叫び声は映司らにも届いていた。
映司の表情は、一変して、思いつめたものになり、

「・・・・・・行かなくちゃ」

映司は直進して走った。

「ふんにゅ！」

だが比奈がそれを許さない。
映司の腕を掴んで放そうとしない。

「比奈ちゃん・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・」
「――心配しないで、大丈夫だから」

映司は微笑んだ。

「なんで？なんで笑ってるの？映司くんのことだよ！」
「確かに、俺は鋼さん達が言ったとおり、可笑しな人間かもしれない。――それでも、せめて俺の手が届くなら・・・・・・」

映司の歪な決断はかたい。
だが、そこへオーズとブライを求める声も強まっていく。
恐怖の声音が濃くなった、悲鳴に近い叫びが大きくなる。

”オーズぅ！”
”オ～ズ～！”
”ブライぃ！”
”ブ～ラ～イ～！”

「止めて・・・・・勝手に呼ばないで・・・・・・映司くんは神様じゃない！！」
「・・・・・・・・・・・・」

比奈の言葉に、信吾も言葉が出なかった。

だがそれでも助けを求める声は止まらない。
それどころか、時と共にどんどん大きさと強さを増して行く。

”オ～ズぅぅ！！オ～ズ～～！！”

”ブライ～～～！！”ブゥウライ～～～！！”

「・・・・・止めて・・・・・・・」

比奈は、顔を俯かせて小さく呟く。
だがそれもすぐに臨界点を突破する。

「止めてッ――――」

そして、比奈は映司の身体から離れ、全力で叫んだ。

「止めてッッ！！！！」

それは最早絶叫とさえ言えた。
しかし、哀しいことに、求める声は決して止まることは無い。

「火野、泉。私たちは先にいくぞ」
「なあ、火野。お前が歪に成ってまでそうする理由、何時かきちんと聞かせて貰うぜ」
「・・・・・・はい」

そうして、一足先に刃介と竜王は駆けていった。

「「変身！」」

≪ＨＡＹＡＢＵＳＡ・ＨＯＵＯＵ・ＹＡＴＡＧＡＲＡＳＵ≫
≪ＨＡＯＵＲＡＳＵ！≫
≪ＯＯＫＡＭＩ・ＫＹＯＵＫＥＮＮ・ＫＩＴＳＵＮＥ≫
≪ＫＡＭＩＫＡＭＩＫＡＭＩ！ＫＩＴＵＮＥ・ＫＡＭＩＫＩＴＳＵＮＥ！≫

ハオウラスコンボは空を翔る、カミキツネコンボは大地を駆ける。
そして、残る一人は。

「・・・・・比奈ちゃん。――――ごめんね。・・・・・・でも、ありがとう」
「・・・・・・・・・・・・・・・ッ」

もう、引き止める言葉すら失った。

「――――ッ！」
「映司くん！！」

駆け出した映司の後ろ姿に、比奈はもう名を呼ぶことしかできなかった。

「変身！」

≪ＬＩＯＮ・ＴＯＲＡ・ＣＨＥＥＴＨＡ≫
≪ＬＡＴＡ・ＬＡＴＡ！ＬＡＴＯＲＡＲＴＡＲ！≫

ラトラータを旋風の如く疾走し、追いつくことは叶わなくなってしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

残された比奈はもう、身体中の力が抜けて、立つことすらままならずに地面へと全ての体重を預けてしまっていた。

＊＊＊＊＊

「オーズゥゥ！」
「オ～ズ～！」
「ブライィィ！」
「ブ～ラ～イ～！」

ただただ、名前しか知らない者の名を叫ばされる人々。
叫ばなければ、粉々にされるか、首を刎ねられるか。
だから、男性も女性も老人も子供も、等しく叫んでいる。

誰だって、死ぬのは怖いのだから。
だがそこへ、救済者は現れる。

――ピカァァアアアア・・・・・・・！！――
――ブヴォォオオオオオ・・・・・・・！！――
――ウィィイイイイン・・・・・・・・！！――

眩し過ぎる黄色い閃光。
燃え盛らん紅蓮の業火。
波の如く轟き渡る音響。

その発信源は、人々からすれば、一種の英雄に見えたかもしれない。

「「ウオオオッ・・・！ハアッ！」

ラトラーターのライオディアスとガッシュクロス。
ハオウラスのコロナフィーバーによる炎熱波。
カミキツネの刃から放たれる超高周波加熱。

――バリィィィィン！！――

それらの一撃は、容易に自由を奪う氷を砕いた。

「逃げて！早く逃げて！」
「さっさと退いてろ！邪魔だ！」
「走れ！今は兎に角、走れ！」

オーズとブライとクエスは、広場に降り立ち、自由になった人々にそう叫んだ。
人々は歓喜の悲鳴を上げながら、我先にと命令されるまでもなく逃げ出していく。

「ひ――火野！」
「鋼、来たのか！」

その一方で、バースとブレイズチェリオはヤミーを相手にしながら、頼もしい増援の登場に喜んだ。

「刃介。私は烈火たちの方を」
「ああ、頼む。こっちにもお客さんがいるしよ」

クエスはそうして、バースらの加勢に向った。
そうして一分も経てば、残るのは異形の者達だけだ。

『遅かったね』
『でも、来てくれた』

オーズとブライの前には、堂々とロストとキョトウが現れる。
3～5mの距離で相対する二組――だがそこで、オーズは気づいた。

「アンクの気配が・・・・・・？」
『そう。随分抵抗したけど・・・・・・消えたよ』

当然のようにロストは答えた。

『でも、一つだけ気になってる。――ねぇ、アイスって美味しいの？』

右腕（アンク）の記憶でも垣間見たのか、ロストはそう質問する。
無論、真似事もしてみたが、身体がセルで出来上がっているロストでは、信吾を使っていたアンクとは感じ方がまるで違う。

「さぁ？でも、一つだけ言えるのは、あいつはそう簡単に消えるほど、素直じゃないってことかな」
『じゃあ、僕を倒して確かめてみたら？でもその前に、僕のメダルを返してよ！』
『私のメダルも返してもらうわ』
「「違う。お前のメダルじゃない」」

ここで、初めてオーズとブライの声が重なった。
二人は確信を持って言い放つ。

「「あいつのだっ！」」

そうして紫のメダルが三枚、二人の身体から現れる。
オーズとブライはコアを掴み、既に入っているメダルを押しのけて投入した。

≪ＲＹＵ・ＷＹＶＥＲＮ・ＤＲＡＧＯＮ≫
≪ＰＴＥＲＡ・ＴＲＩＣＥＲＡ・ＴＹＲＡＮＮＯ≫
≪ＲＹＵ・ＷＡ・ＤＲＡＧＯＮ　ＫＮＩＧＨＴ！≫
≪ＰＵ・ＴＯ・ＴＹＲＡＮＮＯ　ＳＡＵＲＵＳ！≫

「「ウオオオオオオオオオ！！」」

二人の狂戦士は咆哮し、世界を揺さぶった。
オーズは大地に、ブライは空間に、それぞれ腕を突き立てることで、メダガブリューとメダグラムを掴み取る。

『『――フッ！』』
「「ハッ――！」」

ロストは右腕から火炎、キョトウは左腕から魔弾。
オーズは口から冷気を、ブライは口から龍神気焔。

二つの攻撃はぶつかり合い、簡易な煙幕になると、二組は互いの相手に向って駆け出し、刃と腕を交差させる。
その様子は実に勢いがあり、見ているだけで血肉が沸き踊りそうな熱いものがある。

「「オオオオオッ！」」

ブライもオーズも、手にした得物と手足を乱暴に振り回すという力任せな原始的な戦法であるのに対し、キョトウもロストも、敵の攻撃を極力防御してダメージを軽減して隙の出来たところに小出しのカウンターを決める戦法だ。

だがそれでも、お互いはお互いに、着実な傷を負わせていた。

そんな戦いに、比奈たちは漸く駆けつける。

「映司くん、鋼さん・・・・・・」

「結局、俺達が望んでる通りに戦うんだな――彼らは」

「なんで?私映司くん達に戦ってなんて・・・・・・」

鉄製の手摺につかまりながら、上部から様子を見る泉兄妹。

信吾の意外な意見に、比奈は反論するも、

「比奈は・・・・・・アンク達のことも助けたいと思ったんじゃないのか?」

信吾の言葉通り、アンクにタカを託されたとき、そのコアメダルがアンク自身ならと、少しだけ希望を持ったのも事実。

「同時に俺のことも助けたい――けど映司くん達が戦うのはイヤだ。――俺も同じだよ。さっきの人達もそうだ。・・・みんな勝手な望みを言う・・・それを黙って、全部引き受けるんだ彼は」

火野映司とは、あの事件を機に壊れ、そうなってしまった人間。

「それに鋼さんは、きっと鑢七実という恋人を救う為なら、俺達や

映司くんを裏切り殺してでも助け出す。本当に愛しているから、一番好きな人だから。――決して欲深さだけが、彼を動かしているわけじゃない。そんな不器用な愛ゆえに、彼は戦っている」

比奈は信吾の言葉を聞きつつ、目下で行われている戦いを見つめる。その激しくも切ない戦いを。

「そんなことが出来る人間だけがきっと・・・・・・」

＊＊＊＊＊

鴻上ファウンデーション会長室。

「オォォォォズ・・・・・・！」
「ああ、ブライ・・・・・・・！！」

モニターで戦いを観ていた鴻上とルナイトは、欲望王と欲望神の名を告げる。
鴻上は満足そうな表情で、ルナイトは複雑そうな表情で。

＊＊＊＊＊

さて、ここらでバース・ブレイズチェリオ・クエスの戦いを見届けよう。
まず最初にバース。
――ドガッ！ドガッ！ドガッ！――
アンキロヤミーに肩を掴まれて手摺に身体を押し当てられ、殴られ続けているバース。
しかし、
≪ＢＲＥＡＳＴ　ＣＡＮＮＯＮ≫
セルを投入してブレストキャノンを転送装備。
砲門をアンキロヤミーの胸に押し当てる形となった。
今度は逆にバースがアンキロヤミーの肩をガシっと掴む。
今度はセルを二枚投入して、
≪ＣＥＬＬ　ＢＵＲＳＴ≫
充填完了！
「ブレストキャノン・シュート！！」
――ズガァァアアアアッ！！――
『ぐわぁぁぁあああああああ！！』
零距離砲撃を身に受けて、アンキロヤミーはセル一枚を残して消滅した。

次にブレイズチェリオ。

「オォォラアアアア！！」
『くッ、小僧如きが！！』

炎の戦士と紫の異形は、互いに肉弾戦闘を繰り広げていた。
元々喧嘩なれしている烈火は、一対一の状況ではこれが一番相応しいと思ったのか、あえて武器なしで戦っている。

「行くぞ、弾炎！！」
『うおわぁぁ！？』

ブレイズチェリオはここで、手から幾つモノ炎の玉を生み出し、ドラゴンヤミーに投げつけて怯ませた。

≪ＣＯＲＥ　ＢＵＲＳＴ≫

そこでコアの力を解放する。
エネルギーは忽ち脚部に送られて行くと、ブレイズチェリオは気合の入った掛け声と共に跳び上がり、

「喰らいやがれ！オーバーヒートブレイズゥゥゥ！！」

灼熱の業火を纏った必殺の右足キック。
それは見事に、ドラゴンヤミーの胸に突き刺さった。

『ぐがぁぁあああああああ！！』

そうしてドラゴンヤミーもまた、セルを一枚だけ残して爆発した。

そしてクエス。

「悪いが前振りは無しだ。一気に決めさせてもらうぞ！」

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

「真庭忍法――――！」

ここで竜王は初めて、ライダーの状態で忍法を発動する。

それもエネルギーを増幅開放した上で。

最初に、幻惑（夢幻惑い）の魔眼によって敵の動きを止め、次に影分身にて敵の逃げ場を奪い、剛力無双で強化した腕力を、疾風迅による超高速で振るい――――！

「劉殺生（りゅうせっしょう）ッ！」

その手に握った刃で、敵を一気に八つ裂きの肉塊に変える必殺忍法。

『ぎぃぃぎゃあああああああ！！』

同時に複数の強力な一撃を多方面から喰らい、如何に頑丈なカンナヤミーといえど、耐え切れずに爆発した。

ジャリーンという多くのセルメダルの音を地面に打ちつけながら。

＊＊＊＊＊

所戻って激戦を繰り広げる二組にもう一度注目する。

二組の戦いは何時の間にか互角に持ち込まれていて、片方が刃を突き出せば、もう片方は腕を突き出し、双方は同時に傷を負い合う。
攻撃の勢いで二組は後退し合い、遂には膝までついてしまう。

『お前・・・・・・ッ！』
『貴方・・・・・・ッ！』

赤い鳥のグリードと紫の龍のグリードが、怒りか焦りか、そんな声を出すと、ブライとオーズは何処か苦しそうな声を息と一緒に吐き出す。
次第に、バリバリという波動が二人の身体を駆け巡る。

「「うぅッ！あぁッ！」」

恐竜コアは、、映司のグリード化の進行に伴い、力を増している。
それに龍神コアも、以前投入されたフォース・コアによって活性化している。

「「ふあぁ、うおぉッ・・・・・・！」」

苦しみの中、それでもオーズとブライは立ち上がる。
そうして、

「「――――ヴヴォオオオオオアアアアアア！！！！！」」

オーズはエクスターナルフィンを広げ、テイルディバイダーを振り回す。
ブライはアルティメットフライズを広げ、ドラゴンネイルを鋭く生やし、蒼穹にまで届く咆哮を上げ続けた。

それを観て、仲間達は・・・・・・。

「火野、鋼・・・・・・暴走だけはするな！！」
「負けんな二人共！あいつらを助け出すんだろ！？」
「刃介！己を決して見失うな！」

変身を解いた三人はそう呼びかける。
だけど比奈は、

「映司くん・・・・・・」

もはや観ることもままならず、其の場に座り込んでしまった。
というより、目を逸らしたというのが正しい表現だろうか。

「しっかりしろ！」

そんな比奈に、信吾が叱責して励ます。

「比奈が映司くんの手を掴むんだろ！？」
「・・・・・・・・・・・・」

「このまま彼らを、都合の良い神様にしちゃいけない」
「お兄ちゃん・・・・・・――うん」

比奈は気付いたように、もう一度戦いの場を見つめる。

そうすると、ロストは真紅の大きな両翼、キョトウは禍々しい翼を張って、オーズとブライと同時に大空へと舞う。

二重螺旋を二つ創造するように、二組の異形は上昇を続ける。
そうしてもう頃合と思われる高度に達すると、先手を打ってきたのはオーズとブライだ。

「「ヴうぉおおお！！」」

ザシュザシュという音を立てながら、空中で俊敏の飛行し、ロストとキョトウの身体を通り様に切りつける。

『『ウアアッ！』』

無論キョトウとロストは火炎と魔弾で反撃する。
しかしオーズはそれを本能的に巧みに避け、ブライはメダグラムで真正面から叩っ斬る。
オーズとブライはロストとキョトウの背後に急旋回すると、

「「ヴオゥッ！！」」
『『うッ――ぐあああ！！』』

強引に力技でぶっ飛ばし、近くにあったビルの壁に叩き付けた。
ビルの壁は二体の異形がぶつかり、その力の方向性（ベクトル）の関係上、真横へそれるような、大きな傷跡が残る。

だがこの程度で終わるほど安くは無い。
二組はまた高速飛行を開始する。

――ィガンッ！ィガンッ！ィガンッ！――

遥か遠い高度で、何度となくぶつかり合う両者。
三度目の次である四度目になるとき、折れたのは・・・・・・。

――ィガンッ！！――

『『うあッ、うわあああ・・・・・・！！』』

ロストの片翼とキョトウの片翼だった。
翼を片方失い、バランスさえも失い、地上に向けて落下していく二体に。

「「ヴアアアッ！！」」

――ゥガンッ！！――

トドメをさす様に、ブライとオーズの刃が、もう片方の翼を?ぎ取った。

『『ぅああ、うあああああああああ！！』』

完全に空を翔る資格を奪い取られ、無様に落下した二体は、元の広場の地面に激突する。
その直後の姿には先刻までの余裕はおろか、戦意すらも切り取られたように無残だった。

斬られた翼が最期を告げるように、羽や鱗となって空から舞い落ちると同時に。

「「ウオオオァァァ！！」」

処刑人が振るう断罪の刃が、容赦なく襲い掛かる。

「「ヴアアアッッ！！」」
『『――――ッッ！！』』

――ザンッ！！――

オーズによるロストの身を裂くような一撃と、ブライによるキョトウの胸を突く様な一撃は、間違いなく――――

――パリンパリンパリィィン！！――
――パリィィィン！！――

コアメダルを砕いて見せたのだ。

『ッッ――まさか・・・・・・！？僕の、コアが・・・・・・・ッ！僕のォォ！！』

そして、

ロストは届かない空に腕を伸ばし、

『うわあああああああああああああッッ！！！！』

魂の宿ったタカ・コアは勿論のこと、クジャクとコンドルを一枚ずつ砕かれ、その存在は爆炎の中に消え果た。
そして、キョトウは・・・・・・。

『うッ・・・・・・あッ・・・・・・・』

なんと、ブライにマインド・コアだけをピンポイントで砕かれたにも関わらず、恐るべき自我でほんの僅かながらの悪足掻きを見せていた。
キョトウは、ゆっくりと歩み、佇むブライの仮面に両手を添えてこう言った。

『所詮・・・・・・偽者じゃあ・・・・・・・叶わない、恋・・・・・・・だったな』

こうして、キョトウもまた爆炎の中で消滅して逝った。

だがしかし、満身創痍にして疲労困憊となったブライとオーズは、もはや得物を握るだけの体力さえない。立ち込める煙幕の中、なけなしの体力を振り絞って歩き、それも叶わなくなって四肢をついてしまう。

濃い煙幕は少しずつ晴れていき、オーズは誰かに助けを請うように右手を伸ばし、ブライは誰かの存在を求めるように身を乗り出した。

「「ぁぁぁ・・・・・・!ぅぅぅああ・・・・・・・!」」

そんなオーズの手を掴み、ブライの身体を抱き締める
それは一体誰かというと、

「映司くん・・・・・・」
「刃介さん・・・・・・」
（比奈・・・・・・ちゃん・・・・・・）
（戻った・・・・・・七実・・・・・・）

安堵の念が心に浮き立った直後、

「「うッ！おぉぉ・・・・・・！ぁぁぁ・・・・・・！」」

紫の装甲は煙のように消滅し、映司と刃介という素体が現れる。

「映司くん！」
「刃介さん！」

倒れる二人。
比奈は映司を抱き起こし、七実はただただ刃介を精一杯抱き締めた。

「七実・・・・・大丈夫だよな？」
「はい。御陰様で、戻って来られました」

刃介は今一度、七実に強く抱き締められ、自分も彼女の細くて小柄な身体を抱き締め返す。

「映司くん、大丈夫・・・・・大丈夫だから」
「あ・・・・・アンクは？」

そう。七実がこうして戻ってきたのだから、アンクも戻ってなければ可笑しい。
だがその時、チャリンチャリンというメダルの音が聞こえてきた。

それは一枚のタカ・コアを起点に、何十枚ものセルメダルが集まり、赤き異形の腕となる音だった。
七実はキョトウの意思が消滅して分解した後、僅か数秒という短時間で肉体の再構築を完了させたが、捻くれ鳥はそうもいかなかったらしい。

「アンク！」

だがそれでも、修復はまだ終わらない。
先ほどまでロストを構成していたセルメダルと、残ったコア四枚は次々と集結していく。

そして、

目の前には、何時もと同じ、右腕だけを異形とする金色の奇妙な髪型をしたアンクがいた。
遂にアンクは、己が肉体を取り返すことに成功したのだ。

「映司、鋼。今度ばかりは礼を言ってやっても良い。――目障りな偽者（ロスト）が消えてくれたからなぁ」

曲がりなりにも一応は感謝するアンク。
だがその視線はすぐに、映司から別の人物に向けられる。

そこにいるのは信吾。
アンクは彼と同じ顔で歪に笑い、近寄っていく。

信吾は自分と同じ顔をした人物が無言で歩み寄ってくることに、些か怯えを感じながらも真っ直ぐアンクを見据えた。

「後は・・・・・・」
「――――っ？」
「アンク！？」

信吾の惑い、映司の声。
それら二つに関係なく、アンクは笑った。

何時も通りの、皮肉と欲望に満ち溢れた、あの笑いを浮かべた。

それを見守る刃介。
すると、七実の頬に何故か涙が伝っていたことに気付き、彼女が自分を抱き締める力をより一層強めていることにも気付いた。

「ごめんなさい」

その時の七実の声は、自分への失望と侮辱、刃介への愛情と感謝――――そして何より、切なさと悲しみの感情が乗った声音だった。

異変と欲望神と愛ゆえに（後書き）

次回、仮面ライダーブライ！

コウモリと想いの激突とアンクリターンズ

コウモリと想いの激突とアンクリターンズ

今現在、奇妙な構図がとある広場にて出来上がっていた。
それは、同じ顔と背格好をした青年が向かい合っているというもの。
片方は穏やかな雰囲気をした黒髪で、片方は荒らしい雰囲気をした金髪だ。
ついでにいうと、金髪の青年の右腕は、鳥を連想させる赤い異形だった。

黒髪の青年の名は泉信吾――金髪の青年の名はアンク。
つい先日まで共生関係にあった二人は、今こうして対峙していた。

「後は・・・・・・」

アンクは見定めるように信吾の前に立っている。
ロストという別人格が消滅し、念願だったコアメダルの奪還を叶えたはずのアンクだが――

「アンクッ！」
「お前、まさか・・・・・・！？」

プトティラとリュワドラの最大解放を行い、変身を解いた直後で、身体に大きな疲労が蓄積している火野映司と鋼刃介だが、それでもアンクの狙いはどことなく予見できた。

――ガシッ！――

「ッッ！！？」

「お兄ちゃん！！」

アンクはその右腕で、信吾の首を掴み、彼の身体を持ち上げた。
苦しそうな声をあげる信吾だが、アンクの表情は何時も通り淡々としている。

ただし、

――チャリン、チャリン、チャリン、チャリン、チャリン――

その身を構成するセルメダルが、一人でに毀れていかなければの話だが。

「チッ、この程度も保てないか。俺の偽者が消えたのは良いが、その為にコアメダルまで・・・・・・」

先ほどの戦いで、オーズはメダガブリューの刃でロストを切り裂き、タカ・クジャク・コンドルのメダルを一枚ずつ砕いていた。
ブライのように、マインド・コアへのピンポイントではなく、関係ないコアまで巻き込んでしまったのだ。

「紫にそんな力があったとはな」

現在、アンクの核たるメダルは五枚。だが、それでも尚、肉体を構成するには到っていない。
コアメダルを一気に三枚も破壊された所為だろうか、

――ジャリィィィン――

アンクの身体はセルに還元され、何時もの右腕だけが残った。

『兎に角、こいつはまだ要る。もう少し大人しくしてもらおうか』

――グキッ・・・・・・・！――

信吾の首から嫌な音が聞こえると、

「ぅあ・・・・・・」

信吾の身体は力を失っていく。

「やめてっ！！」

比奈は兄の危険に必死に叫び、信吾を助けようと走るが、

――シュアアアアッ！！――

「きゃッ！」

アンクから夥しい量の赤い羽根と波動が溢れだし、比奈は思わず仰け反ってしまった。

その直後に、信吾の身体は力なく倒れ、セルと羽根に溢れた地面で横になってしまう。

「お兄ちゃん・・・・・・」

比奈はゆっくり歩み寄ろうとした。

しかし、

『――――――』

アンクは、信吾の右腕と一体化していた。

「比奈・・・・・心配するな。大丈夫だ」

信吾は最後の力を振り絞って、己の意志で言葉を発する。

「お前は、お前の出来ることを――」

それを境に、信吾の言葉は途切れ、瞳は赤く染まった。
そして信吾の頭はまたも力を失い、地面に伏した。

次の瞬間、信吾の目蓋は他者の力によって開かれ、それと同時に黒髪は金髪となり、髪形も右寄りで奇抜なものに変化する。
そして信吾の身体は右腕に持ち上げられるように立ち上がる。

そうして、信吾の背中から真紅の翼が生え、同時に赤い波動が突風となる。

（右腕だけでも、やはりグリードというわけか・・・・・）

刃介は改めて、アンクに秘められた潜在能力を認識する。
アンク本人はというと、二枚の大翼を広げ、周囲に赤い羽根を撒き散らしながら、

「フッ――コアが消えても、偽者がいないだけでこうも違う。８００年前と同じ、俺の力だ」

アンクが取り戻したものを確認すると、比奈は呆然とし、映司は表

現しきれぬ表情で立ち上がる。
おまけに後藤たちは、

「アンク、貴様・・・・・・！！」

竜王は怒り、

「比奈ちゃんの気持ちも考えろ！！」

後藤は憤り、

「火野や鋼だって、お前を助けるのにどんだけ苦労したと思ってやがるッ！！」

烈火は叫ぶ。

「それとこれとは別だ」

だがアンクは何時もの態度を崩さない。

「それとも・・・・・助けてやったんだから、この腕一本で我慢しろってつもりか？――冗談言うな」

――バサッ！！――

アンクは翼を大きく羽ばたかせ、強い風を巻き起こす。

その所為で、

「きゃアアッ！！」

「「うおぁぁぁッ！！」」
「うわぁああッ！！」

「くッ・・・・・・！」
「チッ・・・・・・！」
「・・・・・・・・・・・・」

比奈も映司も後藤も烈火も、皆壁などに叩きつけられるほどに吹っ飛ばされた。
ただ、竜王と刃介と七実はどうにか踏ん張って堪えた。

しかし、映司が吹っ飛ばされた影響でメダルホルダーが地面に落ちて開き、その衝撃でコアメダルが出てしまう。
その中で一枚だけ、元のあるべき場所に帰ろうと、アンクの足元に転がっていくメダルが一枚。
アンクはそれを容易に指先で掴んだ。

「残りも寄越せ。俺んだ」

タカ・コアを手にし、アンクは図々しさを絵にしたような物言いである。
映司はどうにかこうにかで立ち上がり、なけなしの体力でこう言った。

「・・・・・・その前に、信吾さんから離れろよ」
「・・・・・・言ったろ。この身体はまだ要る。早くメダルを「アンクッ！！」」

そこへ映司は、反省の色の欠片さえないアンクに激怒した。

「こんな酷いことしていいわけないだろッ！」

映司の怒りに反応するように、瞳の色が紫となる。

「信吾さんから離れろよ・・・！比奈ちゃんに返せ・・・！」

「くどいッ！！」

当然アンクはその要求を突っぱねる。

「いいからメダル寄越せッ！」

アンクは瞳を赤くすると、翼で今再び吹っ飛ばそうとするが、

「――――ッッ！！」

映司は身体から凄まじい紫のオーラを放出し、アンクの波動を跳ね返した。

その壮絶な力にアンクは驚愕する。

「この力・・・・・・！？」

驚いたのはアンクだけではない。

比奈や後藤も、映司の異変をこうして認識したのだから。

「信吾さん返せよ・・・！でなきゃ、コアを全部砕くッ！」

「映司ぃぃ！！そんなことしてみろ・・・・・・！！」

平行線とも直線上とも違う意思のぶつかり合い。

説得には一切応じないアンクに対して映司は、

「――ウオォッ！！」

溜め込んでいたもの全てを吐き出すように、先ほどとは段違いの波動を放射する。
その威力やいなや、真正面から向き合うことすら難しい。

「くぅ・・・・・・！」

アンクは今の状態では不利と悟って、翼を広げて空へと翔ける。

「お兄ちゃん・・・・・・」

比奈が愕然としてる間にも、映司は身体中に紫の力をまとって、アンクを追おうとする。

「火野ダメだ！止まれ！」
「このままでは、呑まれるぞ！」

後藤と竜王が必死に映司の身体を掴んで止めると、

「ぅあッ――あッ、はあ、あぁ・・・・・・！！」

映司から紫の波動が引っ込み、体力を消耗しきって膝を突いてしまう。

「アンクさん・・・・・・」

空高く逃げ去っていく鳥類王の姿を見て、七実は静かに呟いた。

「おい、七実。そろそろいいか？何時までもこの状態ってわけには

いかないだろ」

刃介は少しだけ気まずそうにしていた。

今、七実と刃介は抱き締めあうような体勢のままだ――さすがの刃介も気分的にも姿勢的にもキツいのだろう。

「ああ、そうでしたね」

「それからもう一つ、聞かせろ」

「なんなりと」

七実は刃介との距離が零のまま応える。

「さっきの”ごめんなさい”ってなんだよ？」

「それはですね・・・・・・」

七実は両手の平を刃介の胸板におき、刃介の顔を真っ直ぐ見据えて、

「こういうことです」

一気にまた距離を零にして、自分の唇と刃介の唇を重ねた。

（んな・・・・・・！？）

一体どういうつもりなのか、と困惑する刃介。

しかし、その狙いはすぐに明かされることになる。

七実は刃介と口付けしたまま、一方的に舌を絡めて、息を思い切り吸い込んだ。

それは刃介の酸素を奪うためではない、別のものを奪うためだ。

（ま、まさか・・・・・・！？）

刃介は七実が自分から何を吸い上げようとしているかに気付き、急いで後方に跳躍し、七実との距離を離した。

「おや、思いのほか、察しが良いですね。流石は私の所有者です」

「七実・・・・・・お前まで・・・・・・」

他の者達は続けざまに驚いた。

七実が刃介にキスした時は、映司・比奈・後藤・烈火あたりが顔を赤らめて目を逸らしたが、今は違う。七実の行動に視線が釘付けになっている。

「そんな方法で、俺の中のコアを吸い上げるとはな」

「いえいえ。そうは言っても、取り戻せたのはこの二枚だけです」

七実は着物の袖で口を隠すと、もう片方の手を口腔内に入れて何かを取り出す。

その手には、ワイバーンとドラゴンのコアメダルが一枚ずつあった。

彼女は次の瞬間、押し殺したような無表情を一気に崩し、本当に悲しそう言った。

「ごめんなさい、刃介さん」

その言葉にはさっきと同じく、自分への失望と侮辱、刃介への感謝と愛情が篭っていた。

「待て、七実！！」

刃介は呼び止めたがもう遅い。

――シュン・・・・・・・！！――

七実の姿は刃介や竜王でさえ捉え切れないほどの超高速で、彼等の視界から消失していた。

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

残された者達は、アンクに引き続いて、あれほど真面目で忠誠心の高い七実までもが裏切ったという事実を受け止めきれず、ただただ沈黙していた。

「なんでだよ・・・・・？なぜ、お前まで俺から離れるんだッ！？七実ぃぃぃぃ！！」

そして、刃介の哀れな咆哮は、当てもなく虚しい空へと消え失せていた。

＊＊＊＊＊

「まさか、お前が俺についてくるとはな」

「貴方についていくわけではありません。私には私なりの目的があ

るだけです」

とある橋の上で、アンクと七実は肩を並べてそう語っていた。
そんな中、アンクは『右腕』を見つつ、

（チッ――やっと偽者が消えたと思ったら・・・・・・コアが三枚も消えたとなると、完全復活は無理か）

だがその思惑は、

――ガンッ！――

橋の手摺を叩く音で払拭された。

「諦めて堪るか・・・！可能性はまだある・・・！」

かつての時より抱き続けたその欲望は、今尚滾っている。
そんな時、

「ほほぅ。合格点として連中に褒美やろうと思ったが、こいつは面白いことになってるな」
「ッ！」
「あら」

そこに現れたのは、七実が今この世界で存在している理由たる人物のコピー。

「だがしかし、これはこれで興味深いな。いやはや、世界って奴は微妙なトコで予測不可能だからこそ、思いがけない娯楽要素（イレギュラー）に満ちているもんだ」

天才刀鍛冶でありグリードの一人、四季崎記紀。

「なんのご用件でしょうか？」

「なーに。ただお前らにヤミーを作って欲しいだけだ。こいつとコレを使ってな」

すると四季崎は、自分の後方にある、何かを覆い隠すように被せられたブルーシートを取り外す。

その下に居たのは、一台の軽トラックと、運転席で眠っている中年男性だった。

「ちょいと睡眠薬をもって大人しくさせた。当分は起きないだろうぜ」

「俺達を利用するつもりか？」

「さてな。それはヤミーを生み出してからだ」

四季崎の対応にアンクは露骨に舌打ちした。

「アンクさん。とりあえず、やってみませんか？」

「フンッ――まあ、このまま何もせずに居るよりはマシか」

二人はそうしてセルメダルを一枚ずつ手に出し、アンクは中年男性に向けて、七実は軽トラックに向けて投入した。

――チャリン――

一人と一台にできた投入口にセルメダルは上手く入り込むと同時に、

『ううう、オオオ・・・・・・』

巨大で赤い卵から白ヤミーを一体、

『クァァァ・・・・・・・！』

軽トラックからは飛竜の如き異形を生み出した。

＊＊＊＊＊

泉家の部屋。

比奈はたった一人で、ここに帰ってきていた。

部屋に戻って真っ先に見えたのは、食卓のあるリビング。

つい先日まで、兄が戻ってきていた束の間の安息を思い出す比奈。

「お兄ちゃん・・・・・・・」

それと同時に、

（アンク・・・・・・どうして？）

わかっているようで、わかっていない疑問を、ただ一人で何処かに投げかけていた。

＊＊＊＊＊

「大丈夫とは言っていたが、辛くて当然だな。折角戻ってきた、お兄さんを――」

「それもそうですし、アンクがやったっていうのが余計に・・・・・・」

「あんな奴でも、仲間っぽい存在だったしな」

後藤と映司と烈火は、街中を歩きながら談義していた。

議題のほうは会話の通りだ。

「・・・・・俺、あいつが信吾さんに拘るのもわかるんです。――ずっと、身体欲しがってきたし・・・・・・あいつのコアメダルが九枚揃うこともなくなった訳だから」

「でも、あんなやり方は許せることじゃない」

「幾らなんでも、強引すぎっつーか、我侭すぎだろ」

後藤と烈火の言い分も正しい。

「はい・・・・・・でも、今は鋼さんのことも重要です。恋人に裏切られて、とても俺達じゃ慰められる状態じゃありませんでしたから」

そう。忘れかけていたかもしれないが、七実が離れたというのは一同にとって凄まじい衝撃だ。

特に刃介にとっては、この上ない負の感情が波となって押し寄せただろう。

「鋼さん・・・・・・多分・・・・・・・」

＊＊＊＊＊

その頃、当の刃介はというと。

「ウゥゥゥオオオオオッ！！」

――バギンッ！バギンッ！――

とある地下深くに作られた極秘の対ヤミー・グリード戦を想定した模擬戦闘（シュミレーション）を行っていた。

つまり、ここはトライブ財閥本社の地下と言うことだ。

「鋼さん、荒れてるっすね」

「当たり前ですよ、まさか、あの鑢さんが裏切るとは・・・・・・」

モニター室で、次々と白ヤミー・屑ヤミー・成長体ヤミーといった擬似標的（ターゲット）を次々と、変身せずに力技で破壊していく刃介を見つつ、吹雪とバットは呟きあった。

「ちょっと貴方達。不謹慎な発言は控えなさい」

「今はこうしてはいるものの、何時また何が刃介の心を刺激するか・・・・・・」

その一方で、ルナイトと竜王が慎重な態度をとっていた。

「オオオオァァアアア！！」

――ベギャッ！ベギャッ！――

刃介は際限なく、ありとあらゆる目標を一撃で秒殺していく。
そこには優雅さも余裕もなく、ただただ暴力だけが存在していた。

そうしていると、長いようで短いで戦闘訓練が終了したようだ。
その結果ランクはというと、

文句なしのSランク！

だが、

「おい、もう一回やらせろっ！」

今の刃介は訓練の結果などどうでもいい様で、単に激情となった心の刃の矛先を求めている。

「・・・・・会長」
「どうするっすか？」

バットと吹雪が訊ねると、

「仕方ないわね。もういっか「待てルナイト」・・・・・・まさか、ヤミー？」

待ったをかけた竜王の意思を即座に読み取ったルナイト。

「ああ、白と大が一体ずつだ」

竜王がそういった瞬間、

――バリンッ！！――

モニター室と訓練場とを隔てる強化ガラスが割れた。

人為的に、木っ端微塵に割られてしまった。

「丁度いいじゃねぇか。思う存分、殺せる相手が出来たみてぇでよ」

ガラスをぶち破った張本人である刃介は、無遠慮に四人に先んじてエレベーターに乗ろうとする。

「待て刃介。私も行くぞ」

そこへ竜王もエレベーターに入っていき、二人は地上へと戻って行った。

ルナイトは激昂極まっていた刃介の様子に、

「ふぅぅ・・・・・・折れかけてるわね」

溜息をついて、一言だけ吐き捨てた。

＊＊＊＊＊

とある港沿いの公園。
平和で穏やかな時間の流れるこの場所は、家族や恋人連れで賑わっている。

だが、その恋人たちに不幸が訪れた。

『ン～・・・・・・』
「うわぁぁッ！！」
「キャアアッ！！」

ベンチでアイスを食べているカップルの前に、一体の白ヤミーが現れたのだ。
白ヤミーは男の胸倉を掴むと、そのまま男を投げ飛ばした。
周囲の人達は恐怖にかられて悲鳴をあげながら逃げ出していく。
その間にも、男は白ヤミーに拳を一発、蹴りを一発くらわされる。

そして、

『んン・・・・・・！』

白ヤミーから赤い光と羽毛が大量も漏れ出し、全身を覆う。
そうして、光と羽根が治まったときには、白ヤミーはハゲタカヤミーへと成長していた。

『やっと、成長したか』

そこへタイミングを合わせるように、ワイバーンヤミーも上空より舞い降りた。

＊＊＊＊＊

当然、成長体のヤミーが二体も出現したこともあり、

「ッ――ヤミーだ」

映司はすぐに気配を拾う。

「よし、行くぜ！」
「ああ！」
「うん！」

三人はすぐに走り出し、戦いに赴いていく。

＊＊＊＊＊

「ぐあああぁぁぁぁぁぁ！！」
「いやぁぁぁああああ！！」
「ひぃぃぃ・・・・・・！！」

一方その頃、人々（カップルの男だけ）は次々とハゲタカヤミーと

ワイバーンヤミーに襲われていた。
幸いなことに殺されてはいないようだが、それでも怪我を負わされていることに違いはない。

だがそこへ、

「鳥のヤミー？ってことはアンクの・・・・・・」
「つくれるようになったらしいな」
「兎に角やるしかねぇ！」

映司達と――

「ドラゴンに引き続き、今度はワイバーンか」
「鑢の奴、アンクと結託したのか？」

刃介たちが到着する。

二組がヤミーと近接する途中、

――ヴィンヴィンヴィンヴィンヴィン！！――

セルメダルの弾丸による射撃と

――ブォンブォンブォンブォン！！――

全身を巨大な銀色の甲冑で包んだ者が、無骨な石刀が振り回してワイバーンヤミーを攻撃する音が。

二組はそれぞれの加勢者の姿を見る。

「里中さんッ――今日は早いですね」
「丁度新作の試食してたんで」

バースバスターを手にして答える里中。
ケーキの試食直後においても尚、きちんと御洒落（ファッション）に拘るその姿勢は本物だ。

「あ、あぁ・・・・・」
「ま、そんなとこだろうな」
「マジで掴みきれない奴だな・・・・・・」

映司はただただ愕然と頷き、後藤は相槌をうち、烈火は何とも言えない心境になりながらも、ベルトを身につける。

「凍空。お前が戦場に出てくるとはな」
「これも会長命令っすよ」
「双刀『鎚』と賊刀『鎧』って時点で、けっこう本腰だな」

竜王や刃介も会話しながらベルトを装着。

だが、変身の際に映司がメダルホルダーを開いて気付いた。

（そっか、タカはあいつが・・・・・・）

鳥類系の覧は三つとも空白。
それゆえ、ヘッドパーツ担当である別のメダルを使うことにする。

――パカッ！――

「「変身！」」

後藤はバース、烈火はブレイズチェリオ。

「「「変身――！」」」

≪ＣＯＢＲＡ・ＴＯＲＡ・ＢＡＴＴＡ≫

映司はオーズ・ブラトラバに変身。

≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＥＮＢＡ≫

≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！ＲＩＯＴＥ！ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！≫

刃介は何時も通り、リオテコンボに変身。

≪ＢＡＲＡ・ＳＡＲＲＡＣＥＮＩＡ・ＲＡＦＦＬＥＳＩＡ≫

≪ＢＡ・ＳＡ・ＲＡ！ＢＡＳＡＲＡ！ＢＡ・ＳＡ・ＲＡ！≫

竜王も何時も通り、バサラコンボに変身。

五人はそれぞれ構えて、二体のヤミーに突撃していく。

数の上ではライダー達が圧倒的に有利な上、里中や吹雪という助っ人もいる。

その上、オーズはとうと、

♪～～♪～～～♪～～～

何処からか取り出した縦笛・ブラーンギーを吹き鳴らし、弁髪型の後頭部から本物の巨大コブラが現れたのだ。

シャーという鳴き声を出すコブラを、オーズは笛の音を吹き鳴らし

て巧みに操り、ハゲタカヤミーに攻撃させる”カペロブラッシュ”を行使しているのだ。

――ヴィンヴィンヴィンヴィンヴィン！！――

そこへバースと里中の銃撃は着実にハゲタカヤミーにダメージを与えている。

一方でブライ達は、

「ハアッ！」

――ビュルルルルッ！――

『んッ！』

クエスのサラセニアフィーラーがワイバーンヤミーを捕え、

「否崩れ！」

――ズドン！――

吹雪が体当たりをして吹き飛ばし、

「鏡花水月！花鳥風月！」

ブライが奥義を二発叩き込む。

しかしここまでされて黙っているほど、二体のヤミーは優しくできていない。

――バサッバサッバサッバサッ！！――

「「「うおッ！」」」

「「く・・・ッ！」」

「ぅ・・・・・きゃあ！」

「こりゃ、強い風っすねぇ・・・・・・！」

二体のヤミーは翼を大きく羽ばたかせ、黒と紫の旋風を巻き起こし、ライダー勢を吹き飛ばそうとする。

もっとも、

「後如！」

――ズガッ！――

『『ぬぅぅ！』』

重さ数十トンに及ぶであろう双刀を持つ吹雪には関係のない話だが。

＊＊＊＊＊

同時刻、比奈は家で一人、考えていた。

（アンク・・・・・ちょっとは近づけたと思ってた）

誕生会の時、漸くそれを自覚した比奈。

（もしずっとこのままだったら、お兄ちゃんはもう・・・・・・映司くんとアンクもきっと戦うことになって・・・・・・）

思い描かれる最悪の未来予想図。

（そんなの絶対――）

ダメ、と思った途端、一つだけ思い出す。

――比奈は・・・・・・アンク達のことだって助けたいと思ってたんじゃないのか――

信吾の言葉が蘇る。

――同時に俺のことも助けたい。けど映司くん達が戦うのはイヤだ。・・・・・・俺も同じだよ、さっきの人達もそうだ。みんな勝手な望みを言う。それを黙って、全部引き受けるんだ彼は――

（私、また勝手なことばっかり思ってる。・・・・・・辛いことは、全部映司くん達に任せることになる・・・・・・）

――お前は、お前の出来ることを・・・・・・――

「・・・・・・ちゃんとしなくちゃ」

比奈は静かに、己が胸のうちにそう刻み込んだ。

＊＊＊＊＊

――ビュウゥゥゥゥゥゥン！！――

「きゃあああああ！！」

余りにも強すぎる黒い突風。
大型台風が直撃しているかのような風圧により、里中の軽い身体は、何かの柱に捕まっても吹き飛ばされそうに成っている。

「くそ・・・・・・！」
「うッ・・・・・・」

ただ、ライダー達だけは持ち前の強靭的な体力で、どうにか風に逆らっている。

≪ＳＨＯＶＥＬ　ＡＲＭ≫
≪ＡＮＴＯＵ・ＫＡＭＡ≫
≪ＥＮＴＯＵ・ＪＵＵ≫

バースは左腕にショベルアーム、ブレイズチェリオは右腕に暗刀『鎌』を装備して、その辺にあるモニュメントの柱を掴んで足場を固定する。

――ヴィンヴィンヴィンヴィンヴィン！！――
――パンパンパンパンパンパンッ！！――

双方は銃撃でハゲタカヤミーとワイバーンヤミーを狙い撃つ。

「ハアアアァッ！！」
「チェストォォッ！！」

そこへオーズとブライが空中から飛び蹴りをお見舞いする。

『『――ッ！』』

ハゲタカヤミーとワイバーンヤミーはそのまま空へと舞い上がると、一気に急降下して、通りかかった軽トラックの荷台に乗り込んだ。
その軽トラックの運転席には・・・・・・。

「四季崎・・・・・あ奴、今度は何を企んでいる？」

クエスが首を捻っていると、

「助手席に眠らされていたのはヤミーの親か・・・？いや、鳥のヤミーなら、親は巣に閉じ込められているはずか」
「――もしかして、あのトラックが巣ってこともっ」

バースの推測に、オーズが修正を施す。

「兎にも角にも、今はヤミーを倒す。そうすれば自ずと、あの二人が顔を出す！」

そしてブライは、まるで猪の様に走り出していった。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ鋼さん！！」
「うるせぇ！！テメェに何がわかる！？」

ブライはオーズの制止を振り切り、シェードフォーゼに乗ってトラックを追おうとしていた。

「鋼、ヤミーを倒すのはまだ後でいいだろ？」

と、意外なことに、ここでブレイズチェリオが割ってはいる。

「今は頭を冷やして、明日にでも・・・・・・よ？」

「・・・・・・・・・・・・チっ、仕方ねぇ」

ブライはそう無理矢理納得して、変身を解いて帰っていった。

「「「「――ふぅぅ」」」」

残された四人は、仮面の下でほっとした表情となっていた。

＊＊＊＊＊

とある雑木林。

あちこちに雑草や樹木が生い茂るこの地帯に、真木は蝙蝠傘をさしながら歩いていた。

すると、

赤い羽と紫の鱗が数枚落ちてきた。

真木はそれに気付くと、直ぐ傍にあるなんでもない木に注目する。

「成るほど・・・・・かなりグリードに近い」
「いえ、殆ど侵食されているようですね」
木の上にはアンク、幹の傍には七実。
「・・・・・・・・・・・・」
真木は黙っている。
「お前、映司が持ってる紫のメダル、狙ってんだろ？」
「ええ。より完全な力をつけなくてはなりませんから」
真木は何時ものように、傘をさしていても人形に語りかけるように喋る。
「なんの為に？」
「暴走したグリードが世界を喰らい尽した後、そのグリードを排除するのは私の役目です」
「それはそれは、用意周到ですね」
「だが、最後にお前が残るのは良いのか？」
アンクと七実としても、完全な無を望む真木にそう訊く。
「存在そのものが無であれば、美しい終末は穢しません」
「虚無王らしい御言葉ですね」
七実が珍しく皮肉を言った。
「協力してやってもいいぞ」

アンクは唐突に木から飛び降りる。

「ほう。それは例えば？」

「俺を”メダルの器”にしないかってことだよ」

＊＊＊＊＊

鴻上ファウンデーション。

そこの会長室では、主である鴻上が何時も通りケーキを作っている。

夕方のこの時間帯、この部屋に訪れた人間は三人。

「成るほど。アンク君と鑢くんがね」

「火野と鋼の元を離れるつもりのようです」

「なんか、今でも信じられねぇんだがよ・・・・・・」

訪れた人間のうち二人は後藤と烈火。

「七実ちゃんは兎も角、アンクならばそうなると予想してたわ。なにしろオーズは、グリードの天敵となるよう、私たちが造ったんだから」

ルナイトだった。

「鑢の奴は、どうにか刃介と会わせて説得するとしても・・・・・・」

「アンクが、泉刑事の身体さえ使わなければ・・・・・・」

烈火と後藤は、山積みの問題に頭を抱える。

「無理じゃないですか？」

そこへ里中も入ってくる。

「グリードって完全に復活したら欲望を食べるんですよね、人間ごと。――結局敵ですよ」

「いや、コアメダルを破壊すれば、完全な復活はない。火野と鋼が持ってる、紫のメダルならそれができる」

「それはダメだ！」

鴻上が、後藤の意見を真っ向から却下した。

「コアメダルは必要だよ。破壊してはいけない」

「何より、刃介が進んでコアをバンバン壊すとは思えないわ。彼ほどメダルの価値を見出している者はいない」

会長二人はそう述べた。

「しかし、人間への被害は「それは君たちが防ぎたまえ」

鴻上はことごとく意見を潰していく。

「貴方の望んだ、世界を救う仕事でしょ？」

「ただし・・・・・・」

鴻上はクリームをパン生地に塗りつける道具を、生地に突き刺して

「紫のメダル・・・・・これだけは破壊しなければならない。あらゆるモノを無にする力は、欲望さえも無にする！なによりっ、そんな力を持ったグリードなど最悪ッ！」

鴻上はそうして、

「Ｗｏｒｓｔ　Ｇｒｅｅｅｄ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｇｒｅｅｅｄ！！」

「言うなれば、世界の天敵ってことよ」

＊＊＊＊＊

夜中となり、映司は川沿いで焚き火をしていた。

（このまま、アンク達が戻らないなら・・・・・）

一人で物思いにふける映司。

だが次の瞬間、ふと川魚を刺し貫いている棒を持った右腕をみると、

「ぅお・・・・・ッ！？」

ほんの数秒だったが、確実にグリード化しかけていた。

若干不完全だったものの、異形の腕は真木のそれと殆ど同じ。

その不気味な現象に、映司は思わず荒い息をついてしまう。

んで、時間をとられてる間に、

――ジュウゥゥゥ・・・・・・・！！――

「ああッもったいない！！」

魚が焦げそうになり、必死に持ち直す。

「って熱ッ！！」

悪戦苦闘しながらも、映司は魚を食べようとする。

だがその時、スタスタとこちらに歩いてくる音がする。

映司は顔を上げて足音の主をみた。

「・・・・・・比奈ちゃん・・・・・・・」

映司はとっさに、無意識に右腕を隠すような仕草をとる。

「お弁当、つくってきた」

比奈は何時ものような笑顔で、弁当箱の入ったバッグを見せる。

映司が愕然とする中、比奈は映司の隣に座り、弁当箱をバッグから取り出す。

「玉子焼き作ったんだけど、ちょっと失敗して甘すぎかな？」

布を取りながら比奈は笑顔で語りかける。

味を教えたところで、映司に対しては無駄とわかりながら。

比奈は弁当箱を開けて見せて、指差しながら

「これは、少し辛めの明太子おにぎり。こっちはおかか」
「・・・・・・・・・・・・比奈ちゃん」

映司が蚊の泣くような小さな声で呟いてると、比奈は布を平らな石に敷いて弁当箱をおく。

「映司くん。――お兄ちゃんもアンクもなんて、都合の良いこと思わない。勝手なこと言わない。ちゃんと自分にできることをする」
「・・・・・・比奈ちゃん」
「それって、今はきっと、何があっても映司くんの傍にいるってこと。――戦いは無理でも、ちょっとは役に立てると思う」

それが比奈なりの決意だった。
映司は少し黙ると、

「うん――――って言って良いかわからないけど、今はそういう気分かな」
「じゃあ――――うん」
「・・・・・・うん」

二人はそうして時を過ごしていく。
尤も、

「ってああ燃えてる燃えてる！！」
「ああッ大変！！」

弁当箱の布に火がついたりもしたが。
映司が布を持って振り回し、なんとか火を消そうとする。

「ぅアチチチチチチッ！」
「大丈夫！？」
「も、もったいない・・・・・・」

＊＊＊＊＊

同時刻、とある場所で、軽トラックが停車していた。
荷台にはハゲタカヤミーとワイバーンヤミーが乗っている。
勿論、助手席には依然親が眠っている状態で閉じ込められている。

「どうだ二人共。ヤミーの塩梅は？」
「そろそろだな」
「ええ」

暗い闇夜で、四季崎は二人のグリードと言葉を交わしていた。

＊＊＊＊＊

鋼家の我刀流道場。

「オゥラアアアッ！！」
「フッ！ハッ！」

月が空の真上にあがるような時間で、刃介と竜王は打ち合っていた。
胴着も竹刀も持っておらず、竜王は忍び装束と二振りの忍者で、刃介は普段着とグリードの両腕。

ガチガチ！ギンギン！
そんな金属音が道場を彩っている。

別に二人は稽古をしてる訳ではない。
殆ど刃介の頭を冷やす為の洗礼みたいなものだ。

「刃介」
「何？」

稽古とさえ言えない行為の中、竜王は刃介に問う。

「鑢のことだが」
「――――――」

刃介の動きがピタリと止まった。
それに合わせて竜王も止まった。

「ははっ、滑稽か？今まで、俺のことを唯一無二の主人といってくれた女に、こうも無様に裏切られちまった俺がよォ・・・・・・」
「刃介。鑢は決して裏切ったわけではないと思うぞ。奴ほどの才能の化身が、何の考えもなく、己が利益の為だけに、お前を裏切るわけがない」

竜王はどこまでも真剣な目つきで刃介に語りかける。

「今のお前は、余りの衝撃に心が折れそうになっているだけだ。言わば”挫折”というものを味わっているに過ぎん」
「挫折か・・・・・確かに今の俺には丁度良い言葉だな。誰かに鍛え直して欲しいもんだ。俺は所有者だが、それと同時に刀なんだしよ」

刃介は両腕をダラリをぶら下げ、失笑交じりに、独白するように述べた。

「お前を鍛え上げられるのはお前だけだ。此の世で最も欲望を秘め、神にさえ届く妖刀など、刀自体でなければ・・・・・な」
「だから、最後まで諦めるなってか。しかし七実は何の因果で、俺んトコから離れたのやら?それともこれも、四季崎のシナリオで――」
「それは何れ本人に訊くしかあるまい。だがな、刃介」

竜王は一息つくと、刀を鞘に納め、両目をカッと見開く。

「その見っとも無い姿を、よもや鑢にまで晒すつもりではあるまいな」
「――――――――ッ」

その時、刃介はハッとなった。

「奴はお前がその生涯で、真実惚れた女で、だから一緒に居続けた。ならば、せめてあいつの前だけでは何時も通りのお前でいろ。愚痴なら、私やルナイトが幾らでも聞いてやる」
「竜王・・・・・」

月明かりだけが道場を照らす中、刃介は少しだけ見惚れていた。

何時の間にか、凛々しいようで優しく、そして自分のことを愛しそうに、儚い笑顔を向ける竜王の姿に僅かながらも淡い気持ちが芽生えていた。

「だがしかし、何時までも私たちに愚痴を零すなよ。主従だろと夫婦だろうと、腹を割って全てを話し合えてこそだ」

一方で竜王も自分の言っていることに、なんだか違和感を覚えた。個性派揃いの暗殺専門忍者集団の中でも、特に大きな生まれ持ち、人々の影で手を手に染めてきた自分が――――まして、裏切りや嘘吐きが常套手段の卑怯卑劣の一員が、何故こんな綺麗事を並べているのかと。

「・・・・・・・・・・・・あんがとよ、竜王」

刃介は沈黙の後、感謝を述べた。
その表情は、何かと触れ合ったかのように穏やかだ。

「どういたしまして、と言ったところかな？」

竜王も刃介の役に立てたことに、誇らしげな顔で笑って見せた。

＊＊＊＊＊

『ギィィ！』
『フゥゥ！』

「うわあああッ！！」

陽がすっかり昇って朝方になった頃、ハゲタカヤミーとワイバーンヤミーはカップルを集中的に襲っていた。
だが当然、そんなことをすれば、グリードやカンドロイドの察知能力に引っ掛かる。

――ブゥゥウウゥゥゥン！！――

そこへ現れる二台のライドベンダーと一台のシェードフォーゼ。
ライドベンダーにはそれぞれ後藤と烈火が、シェードフォーゼには刃介と竜王が二人乗りしていた。
そして映司は橋って現場に駆けつける。

「今度こそあのヤミーを・・・・・・！」
「ああ」
「確実にブチ殺す」
「そんじゃ、行こうぜ」
「うむ」

五人はそれぞれのベルトを身につける。
後藤はセルメダル、烈火はブレイズ・コアを手に持つ。
竜王は懐からコア三枚を取り出し、刃介と映司はメダルホルダーからコア三枚を取り出す。

そして、

「「「「「変身――――！」」」」」

――パカッ――

バースとブレイズチェリオ。

≪ＳＨＡＣＨＩ・ＧＯＲＩＬＬＡ・ＴＡＫＯ≫

≪ＯＯＫＡＭＩ・ＳＡＲＲＡＣＥＮＩＡ・ＫＩＴＳＵＮＥ≫

オーズ・シャゴリタ。

クエス・カミサラツネ。

ニ人は亜種形態に変身する。

≪ＨＡＹＡＢＵＳＡ・ＨＯＵＯＵ・ＹＡＴＡＧＡＲＡＳＵ≫

≪ＨＡＯＵＲＡＳＵ！≫

ブライ・ハオウラスコンボに変身。

五人はほぼ同時にかけだし、二体のヤミーとぶつかり合う。

幸い数の差ゆえに、戦いは思いのほか好調に進んでいく。

「はっ、セイ！」

ライダー達は、被害を出来るだけ小さくしようと、ヤミーたちと交戦しつつ場所を出来るだけ人気のない場所にしようとしていく。

――カチャ――

そんな中、バースとブレイズチェリオは、バースバスターと忍刀『鎖』をセルバーストモードにすると、

≪ＣＡＴＥＲＰＩＬＬＡ　ＬＥＧ≫

≪ＣＨＩＮＴＯＵ・ＯＭＯＲＩ≫

「「オオオォォォォォ！！」」

バースとブレイズチェリオは脚部のユニットを起動させ、猛スピードで二体のヤミーに体当たりした。
当然、その勢いでハゲタカヤミーとワイバーンヤミーは吹っ飛ばされる。
しかし、二体のヤミーは吹っ飛ばされて尚、鳥類と飛竜ゆえに、空中にて飛行し浮遊する。

――バサッバサッバサッバサッバサッ！！――

そうして二体は黒と紫の旋風を、翼を羽ばたかせて発生させる。

「うぅッ！」
「チッ」
「ぬ・・・・・・」

オーズはその風にタコレッグの吸着力で耐え、ブライはヤタガラスレッグの第三の足といえる尾羽を近くの柱に巻きつけ、クエスはキツネテイル全てを使って辺り一面に掴まっている。

≪ＣＲＡＮＥ　ＡＲＭ≫
≪ＡＮＴＯＵ・ＫＡＭＡ≫

バースはクレーンアーム、ブレイズチェリオは暗刀『鎌』を伸ばして物に掴まり耐える。

「鋼、火野！いけるか？」

ブレイズチェリオはそう言いながら忍刀『鎖』とバースバスターを手に持った。

「備えあれば、憂いなし！」

「全くだな――――といいたいが、私には遠距離攻撃は無理そうだ」

意気込むオーズとは対照的に、クエスはこの時だけ傍観に徹しざるをえないらしい。

「みんな、フィニッシュだ！」

「言われずともヤルっての！」

そう、ここまできたら、やることなど一つに決まっている。

≪≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫≫

≪≪ＣＥＬＬ　ＢＵＲＳＴ≫≫

「「「「オォォォォ・・・・・！」」」」

オーズのゴリバゴーンには青いエネルギーが溜り構え、ブライの鳥刀『鏃』の銃口には赤々とした火炎、バースバスターには集束されたエネルギー、忍刀『鎖』には高密度の力が集中する。

だがこの時、皆は気付くのに遅れていた。

昨日見たはずの軽トラックが、タイミングを見計らったようにここらに停車してきたのを。

だがもう関係ない。

「セイヤァァアア！！」
「チェストォォオオ！！」

四人が放つ、打撃・銃撃・斬撃・炎撃は見事ハゲタカヤミーとワイバーンヤミーに直撃。

――ジャリィィィィン！！――

一枚のワイバーン・セルは道路に落ちたが、ハゲタカヤミーの多量なセルメダルは全て軽トラックの荷台に降り積もった。

「「「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」」」」

ソレを見た五人は速やかに変身を解除した。
しかし、それは早計だった。

アンクと七実が、トラックの荷台に乗り込んだために。

「アンク！？」
「七実っ！？」

映司と刃介が叫ぶように言った。

「申し訳ありません、みなさん」
「狙い通り、セルメダルは貰った」

アンクと七実は何でもないような態度でセルメダルを握る。

「んじゃあ行くぞお前ら」
「ああ」

「お願いします」

運転席に座っている四季崎は、二人に確認を取ると、アクセルを踏んで発進した。

刃介はそれを見て苦々しい表情になる。

「火野、バイクで追うぞ！！」

「はいっ！」

＊＊＊＊＊

広くて見渡しのいい公道にでた軽トラック。

運転席でハンドルを握る四季崎、助手席にはいまだ眠っているヤミーの親。

荷台にはアンクと七実、そしてセルメダル。

そんな彼等を追跡する二台のバイクとその乗り手。

「アンク！お前何する気だ！？」

「なんで四季崎と一緒なんだよ！？」

映司はライドベンダー、刃介はシェードフォーゼのエンジンを噴かして道を駆けていく。

「グリードがメダルを集める理由は一つしかないだろ！！」

「この方は、その手伝いをしてくれているだけです」

アンクは荒々しく、七実は穏やかに述べた。

「だけど、お前のコアはもう！」

「ああ、誰かの御陰でな！――が、そんなことで諦めきれるか。８００年前からの俺の欲望だ！」

「だからって、関係ない人を巻き込むな！」

トラックとバイクという、奇妙な状態で会話する二人。

「七実！お前なにが目的だ？話してみろ！」

「今話しては意味がありません。後日にて、心行くまでお話します」

「待てるか！俺は今直ぐにお前の本音を聞きたいんだ！！」

刃介も必死に七実の事情を聴きだそうとしている。

だが――

「おい、火野に我刀。悪いが今回は、見逃してもらうぞ！こいつも既に用済みだしな！」

四季崎は運転席からそういうと、助手席側のドアを何らかの力で開けて、そこからある者を強制的に降ろした。

そう、ヤミーの親だ。

「っっ！！」

他者の命を重んじる映司は、この展開に思わずブレーキを踏んでしまう。

下手を踏めば無傷の人間を自分の手で傷つけるかもしれないから。

――ブゥゥウウゥゥゥン！！――

だが刃介はその合間を縫うようにしてバイクを走らせ、映司にアイコンタクトで「任せろ」と伝えると、そのまま追跡を続行する。

それに対して七実は、

「刃介さん。如何に恋人同士といえど、女には不可侵たる領域があるのですよ」

真顔でそういった七実は、

――バンッ！バンッ！バンッ！――

掌から紫と血錆の光弾を何発も放ったのだ。

「ぬぉあぁッ！？」

それによって刃介はバランスを崩してしまい、車体もろとも転倒してしまった。

たち篭る煙と炎の中、刃介は走り去っていく軽トラックに向って叫ぶ。

「七実ッ！！アンク！！」

しかしその慟哭は、もはや１００m以上も離れてしまった二人の耳には届かなかった。

＊＊＊＊＊

逃げおおせたアンクたちを乗せた軽トラックは、どこかの簡易なトンネルの前で停車する。

「ここまでくれば邪魔されないだろう」

アンクは周囲を見渡しながら確認するように喋る。

「では、早速具体的にご説明していただきますよ――四季崎記紀」

「そう焦ることぁねぇ。すぐにやるからよ」

四季崎は運転席から降りると、そのまま軽トラックの後方に回り込む。

「さて・・・・・これだけのセルがあれば、なんとかいけるか」

四季崎はそう呟きながら、懐に手を伸ばし、ある物を二枚取り出す。

「ッ、それは・・・・・」

「虹色のメダル・・・・・」

「正式名称は、フォース・コアなんだがな」

七実を一時的とはいえ暴走状態に陥らせたメダル。

七実はそれを目にして、眉をひそめる。

「アンク、右腕を出せ」

「・・・・・フッ」

アンクは何時ものように無愛想な態度で『右腕』を差し出し、何かを貰うかのように掌を此方に向けている。
すると四季崎は、フォース・コアをアンクの『右腕』に投げた。

「ンッ――お前、なんのつもりだ？」
「なーに。ただ単に、何時までも腕だけってわけにはいかねぇだろ？セルの量は身体を覆い尽くす程度だが、今はそれで充分なはずだ。丁度良い依代もあることだしな」

アンクは四季崎の対応に、軽く舌打ちしながら、二枚のフォース・コアを腕の中に取り込んだ。
それによって、砕けた本来のコアのうち、クジャクとコンドルの役目をフォース・コアが果たし出す。

――パチンッ――

四季崎はその直後に指を鳴らし、それと同時に大量のセルメダルが信吾（よりしろ）へと纏わりついていく。
四季崎の言うとおり、ハゲタカヤミーから得られたのは、全身を覆い尽くして余りある程度にすぎない量のセルメダルだが――今のアンクには充分だった。

纏わりついたセルメダルは器を起点に結合しあい、右腕と融合するようにして、器を異形の姿に変えていく。

『ほほう――流石とだけ、言っておいてやろう。二枚のコアと一個の依代。これを組み合わせりゃ・・・・・』

今のアンクは、何時もの右腕だけではなった。
そこには、右側頭部のみが紫の素体を剥き出していること以外――
先刻まで本物(アンク)の身体を無断占有していた偽者(ロスト)と同じだけの姿を取り戻した、鳥類王としてのアンクだった。

「なるほど。私たちにヤミーを作らせたのはこの為でしたか」
「かかか、そういうこった。――んじゃまあ、これで前座も終わった。皆と顔合わせをしねぇとな」

＊＊＊＊＊

片や、刃介らはというと。

「鋼さん、大丈夫ですか!?」

後から追いついてきた映司たち。

「俺のほうは良い。だが、あいつらを逃がしちまった」
「仕方があるまい。なにしろ、あの七実が向こうにいたんだ」

バツの悪そうな表情をする刃介を竜王が慰めるように宥めた。

「映司くん!鋼さん!」

そこへ比奈までもが現場に駆けつけてきた。
比奈は転倒したシェードフォーゼと、転倒した拍子に肩に擦傷をお

った刃介を見て、

「これって、アンク達が・・・・・・？」

「まぁな」

刃介が短く答えた。

「兎に角、今は一旦引き返そうぜ」

「ああ、今後の方針を練ろう」

と提案する烈火と後藤。

「そうだな、そうしよう」

「ま、ここにいてもしょうがねぇしな」

賛同し、バイクに跨る刃介と竜王。

だがしかし、

「――――比奈ちゃん、どうしたの？」

映司は、比奈が道の向こう側を見つめているのに気付いて声をかける。

その時の比奈はまるで、自分の手が届かないところへ行ったアンクたちの影を追うかのようだった。

（アンク・・・・・本当に・・・・・・）

＊＊＊＊＊

一方で、真木家たる洋館。
その広間では、カザリ・メズール・ガメル・ウヴァが、それぞれの位置に固有色の大布を敷いて、何かに興じながら時間を潰していた。

だがそこへ、

「みなの者、客人でござる」

いの一番に白兵が四人にそう告げた。
その直後に四人の視線は、白兵に向ったが、それは一時的なものとなる。

四季崎記紀が、アンクと七実を連れて登場しなければ。

「まさか・・・・・・！？」
「どうして・・・？」

カザリとメズールは、現れた客人の姿を、信じられないような目でみやる。

「アンクと、キョトウだぁ」
「デシレ、お前・・・・・・」

ガメルは何時ものような鈍い口調で驚き、ウヴァは些か苛立ちの篭った声を出す。

「さぁお前ら・・・・・・新しい仲間が出来たぞ」

「どうも皆さん」

四季崎はまるで語り手のように、歌うように告げる。
それに合わせることなく、七実は丁寧にお辞儀をして挨拶した。

四人のグリードの表情が固まる中、

「どうした？旧い仲間を歓迎してはくれないか？」

アンクはただ一人、歪な笑顔を借り物の顔に貼り付けて、背中から大翼を露にする。
炎の如く赤く栄えた羽が舞い、鳥類王の力を示すかのように。

コウモリと想いの激突とアンクリターンズ（後書き）

次回、仮面ライダーブライ！

敵勢合併と猫王と映司の欲

敵勢合併と猫王と映司の欲（前書き）

仮面ライダーブライ！

前回の三つの出来事！

一つ！復活したアンクは再び泉信吾の身体を乗っ取り、映司と決別！そこへさらに、七実までもが刃介の元を離れる！

二つ！多数のセルメダルと二枚のフォース・コアを与えられ、アンクは怪人態としての姿を取り戻す！

そして三つ！四季崎の手引きにより、アンクと七実は他のグリード達と合流した！

敵勢合併と猫王と映司の欲

時間を少し遡ろう。
それは、アンクが真木に”メダルの器”の話を持ち込んだ時のこと。
真木はアンクと目を合わせずに会話していた。

「暴走のことはご存知ですか？特に君はその可能性が高い。オーズにコアメダルを三枚も破壊されて「だからだよッ！！」」

アンクは絶叫に等しい声を出す。

「――俺はどうしても、完全で確かな存在が欲しい。その為なら、どんな危険だろうが、冒す価値はある」
「私からもお願いします。アンクさんの欲張りぶりは、刃介さん程でないにしろ相当ですよ」

頼み込んでくる二人のグリード。
七実までもがアンクの擁護に回り、真木はふと思った。

”彼ならあるいは”

＊＊＊＊＊

時は戻り、真木の洋館。

「おい、迷ってる暇があるのか？」
「今のオーズとブライは、コアメダルを破壊できるんですよ」
四季崎に連れられ、この屋敷に入ってきたアンクと七実。
「のんびりしてれば、グリードは、封印どころか・・・・・・消滅だ」
ガメル、メズール、カザリ、ウヴァはそれを否定したかった。
しかし、アンクと七実がこうして自分の身体を取り戻していることこそ、紫のコアの力を示している。
「消えたくなければ俺らと組め」
「取るべき選択は、わかっていますね？」
アンクと七実はぼんやりしているようでいて、その実かなり意の篭った声だ。
「狙いは一つ――――」
そして、
「――――オーズとブライと・・・・・・奴等のコアメダルだ」
＊＊＊＊＊

鴻上生体研究所の所長室。
そこで刃介たちは集まっていた。

「映司くん、クスクシエには戻らないの？」
「うぅん・・・・・俺、紫のメダルを抑え込んでるつもりだけど、何があるかわからないし――その、俺が変になってること知世子さんに気付かれるとアレだから・・・・・」

その言葉には反論できない。

「身体のほう、また可笑しいのか？」

だから後藤は映司のことを気遣う。

「あぁ、いえ・・・・・」

と返す映司だが、心当たりならもうある。
自分がゆっくりとヒトでなくなってきていることに。

「・・・・・それほどじゃないです」
「「「――――――」」」

その答えに、比奈・烈火・竜王は、映司が全身から紫のオーラを放ったことを思い出す。
明らかにヒトの域を超えた、あの力のことを。

「鋼さん、真庭さん。映司くんの身体のこと、もっとわかりませんか？」
「一体どうすりゃ、火野を元に戻せるとかよ？」

比奈と烈火は、人からグリードになった前例である刃介と竜王に訊ねる。
当事者であるこの二人なら何か手がかりくらい知ってるだろうと思って。

「俺達じゃな・・・・・・」
「火野のように、中途半端なグリード化は、とうに過ぎているからな」

二人は顔を見合わせながら困った顔をしている。

そんな時、

『教えるとも!!』

パソコン画面に鴻上の顔がドアップで映し出される。

『私としても火野映司くんのグリード化は是非とも阻止したいものだ』

ドアップから普通の距離になった。

『財団の地下保管庫に来たまえ。シルフィードくんも待っている』

＊＊＊＊＊

鴻上ファウンデーション本社。
そのエレベーターに乗り、地下深くへとどんどん降りていく一同。
そして最下層であるＢ２７に到達し、ドアが開かれた。
エレベーターから降りた一同は、地下保管庫に通じる大きな扉の前に立った。
『キーは解除してある。入りたまえ』
鴻上の声がスピーカーから流れ、それに従い、映司と刃介は取っ手引いてドアを開けた。
＊＊＊＊＊
洋館の屋敷。
「そうね。こうして嘗ての五人が揃い、新しい三人がいれば、オーズとブライの坊やからコアを取り上げるのも――そう難しい話ではないわ」
メズールはそうして賛同的な態度を取る。
だがカザリは面白くないようだ。

「へぇー。そう簡単にアンクを信用するんだ・・・？」
「信用なんてもの、セルメダル一枚分も価値もないわ。やるかやらないか――それだけよ」
互いにドライな応答だ。
「では、決まりですね」
七実が静かに告げると、何処からか赤い布がアンクの背後、血錆色の布が七実の背後に現れる。
だがしかし、
（なんなの・・・？僕がじっくり作り上げてきた場所を・・・・・・どうしてアンク達が？）
カザリだけはこの状況が気に喰わなかった。

＊＊＊＊＊

地下保管庫。
大きく重い扉を潜った一同は、最後の門とさえいえる、赤い幕を眼前とする。
そして、映司と刃介が先陣を切るように、同時に幕の向こう側に入っていく。

そこにあったのは、資料だった。
素人目でも数百年前につくられたことが解るような、古めかしい物品や羊皮紙などが、ガラスケースに入れられて丁重に保管されている。
だが、ことはそれだけではない。

生物の進化を描いた絵画、7×3のメダルを嵌め込む石の円盤、中央の机には多数のセルメダルと白い髑髏が置かれている。
そして、部屋の置くには豪奢な椅子と、その後ろにはタトバコンボのサークルを2・3倍にしたような大きさのレリーフが安置されていた。

「ようこそ・・・・・王の部屋へ」
「歓迎するわよ、現代の英雄達」

そこへ、灰色のビジネススーツを着た鴻上。
童話や御伽噺に出てくるような、魔法使いや魔術師の如き黄色いローブを纏ったルナイトが出迎える。

「「「「「「―――――――――」」」」」」

そうして、皆は悟った。
ここで、また新たな謎が解き明かされると。

＊＊＊＊＊

再び洋館――――の玄関前の庭。

「アンク、キョトウ、君に主導権を握ってもらう必要はないよ。というか、要らないな」

「ほーぅ」

「大口を叩くんですね」

明らかな喧嘩の売り文句。

「君らを信用するのは無理がある」

カザリは、人間態からグリード態に変貌した。

「お前も相変わらず疑い深い」

「いえ、臆病なんですよ。可愛らしい猫さんは」

次は、アンクがグリード態となる。

前回で説明したとおり、今のアンクは右側頭部とベルトだけがセルメンの状態だ。

これも一重に二枚のフォース・コアと、ある程度のセルメダルの御陰だろう。

一方で、七実がグリード態になることなく、玄関前の白くて短い階段に座り込む。

『慎重って言って欲しいなぁ！』

カザリは鋭い四本の爪を立て、アンクに襲い掛かる。

『欲望が報われる前に、奪われたくないし！』

カザリが次々と攻撃を手を加えようと、アンクは巧みにかわしていく。
さらには、翼を以って空中飛行して、
――バシュン！――
腕から炎を出して攻撃してくる。
カザリはそれで若干怯んだものの、着地の際にアンクの隙をつこうとする。
だが、
――ガリン！――
『カザリ！いつかの礼をしてやる！』
ウヴァは以前、折角復活させたメズールとガメルをカザリの陣営に奪われ、一時的にコアだけの状態にされた。
執念深い彼がその屈辱を忘れるはずがない。
結果として、二体対一の状態となり、カザリは不利になってしまう。
ちなみに、
「みんな～、頑張れ～」
「はぁ・・・・・・」
その光景をガメルは駄菓子を食べながら応援し、七実は何時ものように溜息をついていた。

＊＊＊＊＊

所戻って地下保管庫。

「グリードが欲望の塊であることは聞いてのとおりだ。――欲望には大きなパワーがある！」

鴻上は王の部屋を徘徊するように歩きながら話していく。

「８００年前――四人の錬金術師と三人の魔術師が秘密裏にコアメダルをつくったのは、欲望の王が世界を支配する為の手段（パワー）とするためだったわ」

そこへルナイトも語りに参入する。

「見たまえ」

鴻上は飾られていた進化の絵画を指し示す。

「水中から地上へ、そして空へ！」

始めは魚類だった生命は、後に両生類、爬虫類、哺乳類へと派生しながら進化し、現在の人類や動物たちとなった。

恐竜の一部もまた、絶滅を免れて鳥類へと進化して大空を舞っている。

「強く欲することは命をも進化させる！」
「王様が目をつけたのは、この生きる力だった」
「そのエネルギーを純化したメダルは人をさらに進化させやがて・・・・・」

人の上にあるモノ。
それは、

「神の領域に踏み込むだろう」
「だけどね、それだけの欲望を受け止める器となると、オーズの場合は特に難しくなるでしょうね」

鴻上は黄金で装飾された一個の杯を持ち出す。

「まず大きな器を持てるかどうか」

といいながら鴻上は杯にセルメダルをいれていく。

「しかしどんなに大きくても、既に一杯であればすぐに溢れる」

――チャリンチャリンチャリン！――

その言葉通り、杯は多くのメダルを受け入れて、もう空きの容量はなく、注がれたメダルは床に落ちていく。

「あの欲望の暴君の最期がそうだったわ」

ルナイトは顔を俯かせながら苦い記憶を掘り起こす。

「だが火野映司くん！」
「――――」
「君は大きな器を持てる環境で育ち、さらにそれを一度枯らした」
鴻上はそういって、杯をひっくり返し、ジャリンジャリンとセルメダルをぶちまける。
かつては政治家の裕福な家庭で欲を満たし続けていた映司が、欲を失ったのは海外での内乱で己が無力さを思い知り、挙句の果て他者の欲望に利用されたからだ。
「空になった器はどんな欲望も受け止める。それはまさに・・・・・・」
鴻上は一息間を置いて、
「オォォォォズの器だぁっ！！」
紛れも無い確信をこめて、鴻上は叫んだ。
「でもね・・・・・・」
だがルナイトはどうも面倒そうにことを告げだす。
「そんな火野くんの空白に、虚無を司る恐竜コアが入り込んだのは拙かったわね。火野くんは受け止めるのであって、刃介のように支配するわけじゃないもの」
「結果として、目に映るもの全てを破壊し、無にするマイナスの暴走へと繋がる！」

ルナイトと鴻上は二人そろって、椅子や机に腰を下ろす。

「Ｄｒ．真木にも同様のことが起きているだろう」

「どうすればいいですか！？どうすれば映司くんは！？」

比奈もこの説明で、いかに映司が危険な崖に立たされているかを痛感する。

「難しくあり・・・・・・簡単でもある！」

「火野くんみたいなのは特にね」

＊＊＊＊＊

その頃グリード達は。

「皆さん。もう止めにしませんか？」

『黙ってろ鑢』

『ああ、これは男と男の問題だ』

『あんま横槍いれないでよ』

七実の仲裁も聴かずに喧嘩を続ける三体のグリード。

「はぁ、全く・・・・・・」

頭を抱えながらまた溜息をつく。

そこへ、

――バシャアアッ！！――

大きな水流が三体をずぶ濡れにした。

『少しは気も晴れたでしょう？その程度にしなさい』

強引な方法で、メズールが喧嘩を止めたのだ。

七実はそんなメズールに便乗する形で、

「言うことが聞けないのでしたら、今度は分厚い氷の牢で頭を冷やしてあげますが」

半ば脅す形で掌を向ける。

『『『・・・・・・・・・・・・』』』

三体はそれに対する応答として、

「「「・・・・・・・・・・・・」」」

人間態となる。

「メズールとキョトウに助けられたな、カザリ」

「話に乗る気がないなら「いいよ、わかった」

と、カザリは承諾した。

「僕だって大勢で組んだほうが得だってわかってたんだ。例え気に喰わなくてもね」

「ふっ――――」

アンクは皮肉そうに笑うと、ウヴァと共に屋敷に入っていった。
次はメズールと七実が屋敷に入っていき、さらにガメルがカザリの横を通って行こうとすると、

「ねぇガメル」
「なに？」
「メズールがいなくなったらどうする？」

悪魔的な問いかけをしてきた。

「や、ヤダっ！絶対ダメだ！！」

それを聞いたカザリは、薄らと陰湿な笑いをした。

＊＊＊＊＊

クスクシエ。
比奈はそこで弁当をつくっていた。

「もしかして、映司くんとアンクちゃんの？」

知世子に勘付かれながらも。

「――――え？」

弁当箱を包もうとした時のこの台詞に、思わず問い返すような声を出してしまう。

「いいのいいの！詳しくは聞かない！・・・・・旅に出たんじゃなかったのねぇ、映司くん」

知世子は、砂漠地方で撮った際に偶然映司が映り込んだ写真を眺めながら言った。

「やっぱりね」
「やっぱりって？」
「同じ旅好きの勘かな？こういう旅をする人って、なんかこう独特のエネルギーみたいのがあるんだけど、映司くんずっと無かったから」

エネルギー・・・・・それは鴻上の言葉を借りれば欲望だろう。

「いつか出発して欲しいなって思ってたのよ」
「――――私も、そう思います」

尤も、現実はそう簡単にはいかないのだ。
それが良しかれ悪しかれだ。

＊＊＊＊＊

まあ、そんなこんなで、知世子のいう独特のエネルギー、会長二人の言う欲望。
それについてだが・・・・・。

”いいわね火野くん？一先ず、欲張りなさい、求めなさい”

映司にはまず最初に色々な服や装飾品を、財団や財閥系列のデパートなどで試着させたり、

”君自身、君個人に対する、君の欲望だ！”

次には公園の大きな池でボートに乗ってみたり、

”それがきっと、紫のコアの暴走を緩和するはずよ”

バッティングセンターで身体を動かしたり、

それらは全て、会長二人から言われた、映司の欲を引き起こす為の呼び水とするためだった。
しかし、映司は楽しむことがあっても、執着することはなかった。
とりあえず適当に満足したら、スパっと切り上げて他のジャンルへと移って行くのだ。

それでは全く意味が無い。
伊達も以前、映司に”自分の欲、思い出せよ”と言っていた。
今それを実践していて、日が暮れるまで一同は遊び通したのだ。

結果、

「こういうののので良かったんですかね？欲って・・・・・」

「いや、俺も殆ど遊ばなかったほうだからな・・・・・・」
「俺の場合ガキん頃はバトッてばかりだったしな」
「私もだ。というか、戦国時代に比べてこの時代の娯楽施設は実に面白いな」
「え、そうか？俺は結構楽しかったぜ。こんなに遊びまくったのは久しぶりだしよ」

上から順に、比奈・後藤・刃介・竜王・烈火である。

「俺も意外に楽しかったですよ。まだ、俺の欲がなんなのかはわかりませんが・・・・・・」

そして映司のこの反応・・・・・・焼け石に水もいいところだ。

「じゃあ旅。知世子さん映司くんが旅にでるといいなって」
「んー・・・・・・旅ね」

希薄な応答である。
そんな映司に業を煮やし、

「ちょっとちょっと火野くん。何か欲しいものとか無いの？」

運転席からルナイトが降りてくる。
もっとも、その服装はというと・・・・・・。

「ルナイト。お前はまず、そのコスプレへの欲望を火野に見せるだけで充分役立ったから、もう帰っていいんだぞ？」
「むーっ！――――あ、じゃあ、次はこういうのでどう？」

刃介の優しいようで微妙な物言いに、ルナイトは怒ったかと思えば、

何かを閃いたようで。

「それっ！」

「ぅお！」

刃介に抱きついて見せた。

「これならどう火野くん？」

「いや、ちょっと・・・・・・」

「ルナイト。火野が恋愛に精を出す感じじゃねぇのは一発でわかんだろ？」

刃介はルナイトに抱きつかれながら、抱きついてくる張本人に向って言い切る。

「つーかよ、ルナイト。お前のその格好で昼間中、俺だけがイタい目に遭ってたんだが？」

「えぇぇ？刃介の要望とおり露出は抑えたのに・・・・・・」

「えぇぇじゃないし、第一それはお前が着るにはマニアックすぎるわッ！」

正直に言ってしまうと、今日のルナイトの服装（コスプレ）は、真っ黒なセーラー服だ。

しかも服の生地が薄く、ノーブラノーパンの金髪爆乳美女が着れば、どこぞの風俗お姉さんにしか見えない。

おまけにルナイトはこれ見よがしにと刃介にベッタリとくっついて自慢の胸を押し当てていたりしていたが故、道行く男たちは総じて

刃介に嫉妬と殺意と欲望の念を送っていた。
例えばこんな感じの――。

”おのれぇ、一人だけ良い思いを～！”
”お前なんかに、一人身の辛さがわかるかぁぁ！？”
”ああ！なんて羨ましいんだあの白髪野郎！”
”結局、美女はイケメンにってわけかよ！”
”チキショーッ！俺にもその女運分けやがれぇぇ！”

みたいだったりするわけで・・・・・・。

「そっかな～？私はけっこう良いと「確かに着こなしぶりは凄いよ！でも屋外、それも真昼間の中を出歩く格好ではないってくらい察しろ！火野じゃなくてお前の欲望満たしてどうすんだよ！？」」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

刃介の渾身のシャウトが炸裂する。
本来なら彼女がセーラー服で登場した際、無理矢理にでも着替えさせたがったが、生憎刃介らは着替えなんて常備していないし、ルナイトも免許や財布といった最小限の小物しか持ってきていなかった。
結果としてこんな状況が出来上がってしまっているのだ。

「あ、あの、もう俺は充分ですよ？明日のパンツも少しの日銭（おかね）も如何にかなってますし！」

映司はその様子に見かねてそう告げた。
しかし、

「火野、そういうのが自分に欲が無いって言うんじゃないか？」

「このまんまだと、あんた益々グリードになっちまうぞ」

後藤と烈火は映司の物言いに釘を刺す。

「あ、すいません。――鴻上さんが言ってた欲望を持てる環境って、俺確かにそんな感じで、物凄い贅沢してたんですよね。・・・・・欲しいものは何でも貰えたし、美味しいものも沢山――」

「そうか、そういえばお前の実家は、相当な・・・・・・」

「ごめん。こんなのダメだったね」

政治家の子供として、幼少の頃から豪勢な生活を満喫していた映司に対し、今日程度の遊びなど、豪遊とさえ言えない、児戯に等しいさえ言えるだろう。

「あ、いや、そういうのじゃなくて・・・・・そんなのより、比奈ちゃんたちが居てくれたり、後藤さん達が心配してくれたりしたのが、メッチャクチャ嬉しかったなって！――それが一番・・・・・ありがとう」

映司はそうして、軽く頭を下げて礼を言う。

「ふぅ・・・・・火野、本当にそれで良いんだな？」

「はい！」

竜王が訊ねると、映司は迷い無く答えた。

「まったく、日の浅い私でさえ、これが一番お前らしいとさえ思ってしまいそうだ・・・・・」

こうして、みなの夜は更けていく。

＊＊＊＊＊

朝日が昇った頃。
皆は他にも映司を色々な場所に連れて行ってみたりもしたが、それでも映司が何かに執心できることは見つからなかった。
気付けば日の出が昇りきるほどの時間になっていた上、結構都会から離れた場所にまで来ていたこともあり、一同は帰る事にした。

後藤が運転する車には、助手席に比奈、後部座席には烈火と映司が座っている。
尤も、映司は眠っている状態だが。

そして、刃介はシェードフォーゼを駆り、ルナイトはその後部座席に座っている。竜王もライドベンダーに乗って刃介と並行してエンジンを噴かすように走っていた。

後藤と比奈と烈火は、眠っている映司と、バイクに跨る刃介を見て話し出す。

「このまま、映司くんたちは戦いを続けるんですよね。――アンクと鑢さんともきっと・・・・・・」
「火野はアンクとは最初からそういう関係だと言っていた。二人共、何時か戦うと判ってて・・・ずっと・・・」
「だけどよ、一番辛いのは鋼だろうぜ。色んなもん誓い合った相棒が、前振りなしで、あんなことしたんだからよ」

確かに一番辛いのは刃介だろう。
今はルナイトを軸とした仲間達との掛け合い故に気丈に振舞ってはいるが。

比奈は思わず黙り、どういう言葉を述べれば良いのか？
そう思考していると、

――キイィィィイイッ！！――

自動車一台と、バイク二台分の急ブレーキ音が地に響いた。
その理由は、彼等の前に立ちふさがっていた。

『通せん坊～！』

そこには、ガメル、メズール、ウヴァ、カザリ、ゼントウ、デシレがいた。
ガメルが述べたとおり、行く手を阻む壁のように並んでだ。

「火野起きろ！グリードだ！」

後藤は映司の身体を揺すって起こすと、烈火や比奈と一緒に車の外に出た。

「チッ、遂に本腰入れてきやがったか」
「何時かは来るとは思ってたけど」
「寄りにもよってこの機会でとはな」

刃介らもボヤきながらバイクを降りた。
するとそこへ、

――バサッ！――

翼を広げて飛行し、地上へ降りてきた欲望の鳥。

『・・・・・・・・・・・・・』

怪人形態のアンク。

「アンク・・・・・・」
「随分お揃いだな」
「つーか、なんでロストの姿になってんだよ？」
「大方、ハゲタカのセルでも使ったのではないか」
「さらにそこへ、四季崎（デシレ）が手を加えたってトコだろうな」

皆は各々の言葉を口にする。

『映司・・・・・・もう用件を言う必要はないだろ？お前の答えも判ってるしな』

２０ｍほど距離が離れた状態で、アンクは半ば一方的に語りかける。

「――俺もだ」
『上等だ』

アンクは右腕に炎を灯すと、

――シュバッ！！――

「「「「ッッ！！？」」」」

火炎を映司達に向けて放った。

当然、映司らは避けたものの、

――ボガァァアアアアン！！！！――

後ろの車が木っ端微塵に爆破された。

だがしかし、刃介はそれに見向きもせずに、アンクらにこう訊ねた。

「おいテメェら、七実はどこにいる？」

『フッ、お天道様を拝んでみろ』

「「「――――ッ！」」」

その一言で瞬時に察した。

刃介とルナイトと竜王は直感的にスライディングの要領で危険回避する。

その直後に、

――ドゥガアアァァァン！！！――

上空から奇妙な光が流星のように降り注ぎ、竜王の乗っていたライドベンダーを破壊したのだ。

そして、その砲撃手はアンクたちと刃介らの間に立つようにして、ゆるやかに降下して来た。

雄々しい龍の頭と、その龍が宝玉を掴んでいるような肩。
鬼の様に屈強な両腕と上半身、天馬のように精錬された両脚。
血錆色の体色をした体の所々を彩る紫の鱗。
そして、天より降下する役目を担う、血錆色の皮と肉と骨を紫色の鱗で覆った二枚の翼。

「七実・・・・・・」
『今はキョウトウですよ、刃介さん』

２０枚中１５枚のコアを奪還し、三枚のフォース・コアを宿した今、不完全（セルメン）なベルト以外は完全な姿を取り戻し、妖魔と竜種という二つの属性の両立を己が身で体現しているキョトウ。

『オーズ、ブライ！貴様等のメダル、根こそぎ頂く！』
『フフッ――――』
『行くわよ、ガメル！』
『うん！』

ウヴァがそう切り出し、いの一番に走り出すと、他のメンバーもそれに釣られるようにして走り出す。
ただし、

『メズールは、俺が守るゥ！！』
『え？あ、ありがとう・・・・・・』

ガメルの言葉に、メズールは若干戸惑いを覚えつつも、敵勢に向っていく。

だがしかし、それをただ見てるだけの仮面ライダーではない。

「比奈ちゃんは離れてて」
「ルナイト、オマエもだぞ」

映司と刃介は立ち上がりながら比奈にそう行って、他のメンバーと肩を並べる。

「数の上では向こうが上か・・・・・・」
「だが、出来る限り分散させて、タイマンに持ち込むしかねぇ」

五人はベルトを身につけ、メダルを手に取る。

「「「「「変身――ッ」」」」」

――パカンッ――

バース&ブレイズチェリオ。

≪ＬＩＯＮ・ＫＡＭＥ・ＣＨＥＥＴＡＨ≫
≪ＫＡＢＵＴＯ・ＴＵＢＡ・ＩＮＡＧＯ≫
≪ＢＡＲＡ・ＳＡＲＲＡＣＥＮＩＡ・ＫＩＴＳＵＮＥ≫

オーズ・ラカーター。
ブライ・カブバナ。
クエス・バラサラツネ。

深い谷の道となる赤い橋において、双方ともに戦闘準備完了！

「ハアッ！」
「アラよ！」

オーズはチーターの走力、ブライはイナゴの脚力で、地を駆け地を蹴る。
オーズはメズールとガメル、ブライはデシレとゼントウを相手取る。
そして、クエス・バース・ブレイズチェリオは、ウヴァとカザリの相手をする。

『『――――――――』』

だがしかし、アンクとキョトウは戦いに参加せず静観している。
戦いを繰り広げるうち、ここではもし仮に万が一、橋にダメージを与えて破壊したらという考えがブライの脳裏によぎり、

「おい！森ん中に移るぞ！」

そう叫び、

――ガシッ――

『『なに？』』

デシレとゼントウの身体を掴んで、バシュっという音を立てながら跳躍し、森の奥深くへと入っていったのだ。

「仕方ない。刃介の後を追うぞ！」
「ああ！」

クエスが刃介の後を追う、というと他のメンバーも次々に森へと跳躍していく。

『逃がすか！』

だがウヴァを筆頭としてグリードらもそこへくっついていくように戦いの場を変える。

＊＊＊＊＊

誰の手も加わっていないであろう緑豊かな大自然。

しかしそこは一転して、激闘の場となる。

バースとブレイズチェリオとクエスは、ウヴァとカザリを相手に善戦する。

しかし、オーズとブライは防戦一方だ。

『フンッ！』

『フアア！』

「くぅッ！」

ガメルとメズールの猛攻にオーズは、カメアームについている片割れ甲羅（ゴーラ ガードナー）を盾にしている。

「ハッ！」

時としては両腕のゴーラガードナーを合体させ、より強力な盾・ゴーラシールドデュオにして、攻撃を防ぐ。

≪ＧＩＮ・ＧＩＮ！ＧＩＮ・ＧＩＮ！≫
≪ＧＩＧＡ　ＳＣＡＮ！≫

「喰らえェッ！」

ブライは7枚のセルメダルをギガスキャンし、一気に発射した。

『悪いがそうはいかねぇな』

だがデシレはここ暫く使っていなかった呪刀『鎮』を体内から取り出すと同時に、鞘に巻きついていた経文を用いて、セルメダル攻撃を防いだのだ。
もっとも、その為に経文の縁などに焦げめがついていたりしたが、大した問題ではないだろう。

『逆転夢斬』

――ザンッ！――

「グッ・・・！」

そこへ空かさずゼントウが薄刀『針』の刃と鞘を用いての簡易な二刀流で、ブライの腹部にニ撃を叩き込む。

「チッ、このままじゃ埒が明かないな。火野、コンボで押し切るぞ」
「えぇ」

≪ＬＩＯＮ・ＴＯＲＡ・ＣＨＥＥＴＨＡ≫
≪ＹＡＩＢＡ・ＴＳＵＢＡ・ＴＳＵＫＡ≫

≪ＬＡＴＡ・ＬＡＴＡ！ＬＡＴＯＲＡＲＴＡＲ！≫
≪ＹＡＢＡＩＫＡ・ＹＡＫＡＩＢＡ！ＹＡＩＢＡＫＡ！≫

「ウゥゥオオオオオオオオオオ！！！！」

ラトラーターコンボへのチェンジと同時に、彼の体から超高熱線（ライオディアス）が放出される。

≪ＨＡＹＡＢＵＳＡ・ＨＯＵＯＵ・ＹＡＴＡＧＡＲＡＳＵ！ＹＡＭＡＮＥＫＯ・ＪＡＧＵＡＲ・ＳＭＩＬＯＤＯＮ！≫
≪ＧＩＧＡ　ＳＣＡＮ！≫

そこへヤイバカコンボとなったブライは、今度はヤイバスピナーに熱と光を司るコアをいれ、ギガスキャンを発動する。

当然それによって、

『うぁっ・・・・・！ぁあ・・・・・・っ！』
『目が、あ、痛い・・・・・・！』

熱と光に弱いメズールとガメルは、この手の戦法には滅法弱い。

「今度こそ喰らいやがれ！！」

さらにはブライが、解放につぐ解放で凄まじいエネルギーを宿すヤイバスピナーから、光を帯びた炎の剣を顕現させると、

「チェストォォアア！！」

勢いをつけにつけて振り下ろした。

『『のわぁぁあああ！！』』

当然コア六枚をスキャンしたこともあって、その威力は圧倒的なものがあり、デシレとゼントウは足場ごと向こう側に吹っ飛ばされてしまう。

しかしそこで、

――バシュッ！！×２――

――ヴガァァアアアァァァン！！――

アンクの火炎とキョトウの妖気がオーズとブライに襲い掛かった。

「「ッ！――うわあああああ！！」」

その攻撃は不意打ちということもあって、オーズとブライに想像以上に損傷を与えた。

――バチッ――

バックルから、コアメダルが弾けだし、変身が解かれてしまうほどに。

『『・・・・・・・・・・』』

アンクとキョトウは、地面に散らばった六枚のコアを手にしようと歩みだす。

「拙ッ」

刃介はそれを見て急いで立ち上がろうとした。
しかしその直前で、

――バッ！――

「比奈ちゃん・・・・・・！」
「ルナイト、お前」

二人の女が先にコアメダルを回収した。

『死にたくなければメダルを渡せ』
『例え知り合いとはいえ、容赦はしませんよ』
「アンク・・・・・本当に・・・・・・」
「七実ちゃん、貴女も、もう・・・・・・」
『俺達はグリードなんだよ！！』

アンクは比奈とルナイトの呟きに、大声で答えた。

『私たちの欲望（ねがい）の邪魔をしないでください』
「欲望（ねがい）って何かしら？」
『今のところ、貴女には関係の無いことです』

キョトウはルナイトの質問に、無機物や機械のように淡々と答える。

「ああ、そう・・・・・だったら、私たちの答えもハッキリしたわ」
「私は・・・・・私たちは・・・・・」

二人の女は立ち上がると、その確固たる瞳でこう叫ぶ。

「私はお兄ちゃんと映司くんを助ける！」
「私は最期まで刃介の味方であり続ける！」
『『――――――――――』』
その宣言を聞いた二体のグリードは、無言で右腕と左腕を構え、火炎と妖気を立ち篭らせる。
ゆっくりと二人に歩む二体の異形。
だがそこへ、
――ガッ！――
映司と刃介がアンクとキョトウに体当たりししたのだ。
「映司くん！」
「刃介！」
比奈とルナイトは、その隙をついてコアメダルを投げ渡す。
映司と刃介は上手くキャッチすると、
「ありがとう！早く逃げて！」
「それから、さっきの言葉、ちょいと痺れたぜ」
映司と刃介の言葉に、比奈は頷き、ルナイトは照れた風にして其の場から離れた。
『ったく・・・・・お前をオーズにしたのは損だったのか得だったのか』
「さあ？俺にとっては得だったけどね」

カテドラルに三枚のメダルが入れられ、そして傾ける。
だがその時、
『ガメル。今がチャンスだよ』
『うん』
カザリがガメルを焚き付けた。
ガメルはアンクとキョトウに向って走りながら、
『アンク、キョトウ！――オーズとブライと、メズール連れて行くってホントかぁ！？』
『はい？』
キョトウらにとって意味不明なこの発言。
しかし、カザリの姿を見た途端、これが策略であることに気付いた。
「「変身ッ！」」
≪ＬＩＯＮ・ＴＯＲＡ・ＣＨＥＥＴＨＡ≫
≪ＹＡＩＢＡ・ＴＳＵＫＡ・ＴＳＵＢＡ≫
『ッ――二人共、待っ『ヤメロぉぉおおおお！！！！』
キョトウが呼びかけた時にはもう遅い。
ガメルは全身から数百枚という多くのセルメダルを一気に放出し、
その勢いで四人を吹っ飛ばしたのだ。
殆ど自爆同然のこの行為によって、ブライとオーズの変身も途中で破綻してしまう。

無論、映司と刃介は起き上がって再び変身しようとする。
だが、

「（まさか・・・ッ）火野、気をつけろ！」
「え？」
『もう遅いよ』

そう、遅かった。

「うわあッ！？」

映司の持っていたモノは、一匹の猫に掠め取られた。

『フフフ、貰ったよ。これで僕のメダルは、九枚』

カザリの右手には、ライオン・トラ・チーターのコアが一枚ずつ。

「カザリ、てめぇ！」
『フフフ・・・・・・』

刃介の激昂には貸す耳すらないのか、カザリは無遠慮に己がコアを体内に帰還させた。

そして、

『うぅぁあああ！！うぅ、ふぅ・・・・・・！』

カザリの下半身は銀と黒と黄色で彩られた外装が復活し、背中からは巨大な鉤爪、後頭部の髪は触手のように伸びだした。

『ハアッ！』

そう、この状態がなんであるかは、最早言うまでもないだろう。

――バシッ、バシッ、バシッ、バシッ！――

カザリはその触手のような髪を用いて、アンク・ウヴァ・ガメル・メズールから、１・２枚ずつのコアメダルを奪い取ったのだ。さらには、バース・クエス・ブレイズチェリオにも攻撃を加えて。

『――――カザリ・・・・・・！』

自身のコアを持っていかれたせいか、アンクの目付きは完全に怨敵を見るソレへと変わっている。

『ごめん。信用できないのは、僕もだったね』

カザリは髪と爪をしまいながら、奪ったコアを見せびらかすように言った。

「・・・・・完全体・・・・・・・！？」

「これが、本当の力か・・・・・・・？」

「８００年ぶりだな、カザリよ」

「なんちゅー力だ・・・・・・！」

「メンドくせぇ展開になったもんだ」

上から映司、バース、クエス、ブレイズチェリオ、刃介の台詞だ。

『オーズ、ブライ。残りのメダルも、貰うよ』

カザリはそういって再び髪を操り、毛先についている針を弾丸のように連射してくる。
――が、

「快刀乱麻！」

――ガギンッガギンッガギンッ！！――

だがしかし、刃介は両腕をグリード化させ、高速の手刀で針を撃墜させていく。

「今だ、行け！」
「「「おおおおおおおおお！！！」」」
「後藤さん！真庭さん！花菱くん！」

刃介の号令でカザリに挑んでいく三人のライダー。
しかし、

『おっと、通れるのは一人だ』
『ハンデがありすぎでは、詰まらんでござろう？』

そこでデシレとゼントウが邪魔に入ってきた。

「クッソォ！」
「おのれ・・・！」

それによってクエスとブレイズチェリオが足止めをくってしまう。
すんなりと通れたのは、バースだけだ。

もちろん彼とて力量の差を理解したうえで、彼等は完全復活を果たしたカザリに挑んでいる。

だが、カザリの拳一発でバースの装甲は拉げ、鉤爪の一撃で深い傷がつく。
ほかにも蹴りの一発でシステムの各部は悲鳴をあげ、小さな回路がショートする音まで聞こえてくる。

「ぐぅあ・・・・・・！」
『フッフッフ』

カザリは大ダメージをおったバースを触手のような髪で縛り持ち上げる。
しかしその直前で、

≪ＢＲＥＡＳＴ　ＣＡＮＮＯＮ≫

ブレストキャノンを転送装備。

「出力を、最大に・・・・・・・」

≪ＣＥＬＬ　ＢＵＲＳＴ≫

「ブレストキャノン・・・・・・・シュート！」

――ズガァァアアアアン！！！――

『んッ』

バースが持ちえる最大火力の砲門から放たれた赤い砲撃により、カ

ザリは数枚のセルメダルを撒き散らしながら吹っ飛ばされてしまう。
当然、バースもその反動で吹っ飛ばされたが、

「火野、鋼・・・今だ・・・変身しろ」

その意思だけは固かった。
その思いに答えるべく、刃介と映司は己が身に宿る虚無の力を解き放った。

「「変身！」」

≪ＲＹＵ・ＷＹＶＥＲＮ・ＤＲＡＧＯＮ≫
≪ＰＴＥＲＡ・ＴＲＩＣＥＲＡ・ＴＹＲＡＮＮＯ≫
≪ＲＹＵ・ＷＡ・ＤＲＡＧＯＮ　ＫＮＩＧＨＴ！≫
≪ＰＵ・ＴＯ・ＴＹＲＡＮＮＯ　ＳＡＵＲＵＳ！≫

猫王カザリとの決着をつけるため、紫の狂戦士が今再び顕現する！

『フフ・・・・・』

ライオンの頭と髪、トラの鉤爪、チーターの俊足を誇り、風を司る獣の王・カザリは静かに笑いながら両腕を構える。

「「――――ッ」」

オーズはメダガブリュー、ブライはメダグラムを手にし、

「「うぅうぅあああああ！！」」

咆哮をあげ、カザリに一太刀を浴びせるべく、武器を振り下ろす二

人の戦士。

――ガギッ！ギガッ！――

「んぅ！」

だがしかし、カザリはその一撃を腕を盾代わりにして防ぎ、今度は矛である鉤爪で切り裂く。

「ンオォォォ！！」

だがそれでも諦めはしない。

ブライはドラゴンレッグから凶暴な悪竜の爪（ドラゴンネイル）を満遍なく生やし、

「ウオゥラァァッ！！」

手加減も遠慮も一切無く、全力を持って身を回転させ、二本の脚による回し蹴りを行う。

それによってドラゴンネイルはジュッジュッ、という音を立てながら脚から離れ、カザリの身体に向って一直線に飛んでいく。

『実直すぎかな？』

でもカザリはそれさえも容易く弾き返す。

「「ッッ、オオオオオ！！」」

オーズとブライは、それでもなお立ち向かっていく。

『無理しなくていいよ。もうボロボロでしょ？』

例えどれだけ強い敵に侮られようと、彼等は決して退く事は無い。

「ウッセェ！」

獣じみた叫びをあげ、ブライはメダグラムをカザリの脳天目掛けて振り下ろす。
カザリはそれを、真剣白刃取りで受け止めた。
ブライはそれを見て、仮面の下で笑う。

「オラッ！」
『ンッッ！』

敵の両手が塞がると同時に、ブライは得物を破棄してカザリの肩を掴み、全力で頭突きした。
それに怯んでしまったカザリに、ブライはその勢いを活かしたまま背に回りこんで、羽交い絞めを行う。

「火野！やれ！」
「鋼さん！」

ブライが叫ぶと、オーズもそれに答えてメダガブリューを強く握りなおす。

『うるさいなっ』

カザリはブライを邪魔に思ってバギバギと彼の頭を殴りつけるも、ブライは一向にカザリを放そうとしない。
それどころか、よりカザリが逃げられないような状況をつくっていく。

――ピキパキ・・・・・・ッ――

『（こ、凍ってる！）』

カザリの腰から下部分はブライの発する冷気によって、ブライの脚ごと分厚い氷に覆われていた。

「――――うぅオオオオオオ！！」

オーズはエクスターナルフィンとテイルディバイナーを実体化させると同時にはためかせる。

――バジンッ！――

肩からはワインドスティンガーを伸ばし、カザリの両肩に突き刺すことでさらに拘束を強める。

『ク・・・・・・ッ』

カザリは唯一自由な頭に生えている髪を伸ばして反撃しようとするが、

「させるか！」

――ブワァァア！！――

ブライの吐き出す龍神気焔が、カザリの髪さえも封じ込める。

そして、

「セイヤァァアアア！！」

――バギィィィ！！――

暴君竜の一撃が、カザリの魂に重い傷を与えた。
振り下ろされた戦斧の刃の音と共に、カザリとブライを縛っている氷はバギンと砕け、それと同時にカザリはブライとオーズから急いで距離をとる。

しかし、

『くッ、うッ――コアが・・・・・・コアが・・・・・・っ」

最も重要なコアメダルにヒビをいれられ、これ以上の戦闘は自殺行為に等しいと悟り、カザリはそのままヨロヨロと去っていった。

「・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・」

そんな猫王の後ろ姿を見つつ、身構えを解いた二人の狂戦士。
ブライは変身を解除し、荒い息と汗が目立つが、しっかりと二本足で立っているのに対し――オーズはそのまま倒れてしまい、変身も強制的に解除されてしまった。
後藤も先のダメージがきついのか、映司より先に変身を解いて仰向けになっている。

「映司くん！後藤さん！」
「刃介、大丈夫！？」

そこへ比奈とルナイトが駆けつけた。

「心配するな。俺達は大丈夫だからよ」

刃介は消耗した体力をさらに削ってそう言った。

「おい鋼！」

「刃介、そっちはどうだ？」

さらにはブレイズチェリオとクエスもこちらへ駆けて来る。

「あいつらはどうした？」

「四季崎たちなら、お前らがカザリを退かせたと同時に――」

「行き成り戦いを放り投げて逃げやがったんだ！」

冷静なクエスとは対照的に、ブレイズチェリオは激昂的に語った。

「そうか・・・・・・」

刃介は短く返事をしながら、少し離れた木と木の間に立っている二人の異形を視界にいれる。

他のメンバーたちも見ているであろう、アンクとキョトウの姿を。

『『――――――』』

アンクとキョトウはそのまま何も言わず、ただこちらへ一瞥して去って行った。

「・・・・・七実・・・・・・」

刃介はその去り行く姿に、哀しげな声音で、無自覚に呟いていた。

＊＊＊＊＊

オーズの刃によって深刻な損傷を与えられたカザリ。
完全復活を果たしたというのに、たった一枚のコアの不備で、セルメダルをチャリンチャリンと零してしまっている。
他のグリードらはカザリにメダルを奪われたと同時に撤退した上、己がコアを奪ったカザリを助けに来るわけも無く、薄暗いトンネルの中で無様な姿を晒すカザリのもとに、今回唯一戦場に出なかった男が現れる。

『ドクター・・・・・僕を、メダルの器に・・・・・・』

ライトでカザリの姿を照らす水色の自動車。
その操縦者である黒衣の男に、カザリは必死になって縋りつく。

『コアを、もっと・・・・・・！』

だがしかし、

――グサッ！――

『ぐわあッ！！？』

真木の右腕は、カザリの身体を貫いた。
カザリは激しい痛みの中、体から力が抜け落ちていく状態で真木の

肩を掴み、どうにかまだ立っている。
しかしそれも無駄なことでしかない。

『――――――』

真木清人の全身が、恐竜の王たる紫のグリード・ギルへと変貌した。

『ッ、あ――――ドクター・・・・・・』
『カザリ君。結局暴走しない君に用はありません』

丁寧ながらも、それゆえにどこまでも冷たい宣告。

『うあッッ！！？』

ギルの右腕がカザリの体から一気に引き抜かれる。
その傷口からセルメダルを何枚かこぼしながら、カザリの体からは全ての力がなくなり、立つことすら難しくなった。

ギルは真木へと戻り、

「良き終わりを」

右手にある無傷のコアを握り締める。
八枚の猫系コア、ウナギとタコ、サイとゴリラ、バッタ、コンドル。

それらを確認して、真木は無感情極まる態度で車に乗った。
最早グリードの姿すら保てず、人間形態で地べたを這いずるしかないカザリのことなど気にも留めずに。

＊＊＊＊＊

その後、カザリはヒビ付きのライオン・コア一枚と身体を構成するセルだけという悲惨な状態で、人間の町を彷徨っていた。
ただでさえくすんでいる視界は、より不透明でブレたものへと劣化してしまい、歩くのが精一杯だ。

いや、そんな生易しいものではない。
此の世に存在を繋ぎとめること自体が困難になっているといってよい。

「く、うぅ・・・・・・」

人通りのめっきり少ない細い路地で、カザリは遂に立って歩く力すらも失い倒れ、それと一緒に体から毀れていくセルメダル。

「――――僕ももう少しで、手が届く・・・・・・」

そんな無残としか言いようの無い有様においても、カザリの欲望は最期の煌きを放つようにして、彼の腕を伸ばさせる力となる。
その手の先には、彼の望む全てがあるのだから。

「全部・・・・・・僕の・・・・・・・――――」

虚しき欲望の化身が一人。
陽気な言葉の影に黒い策略を忍ばせし黄色い猫の王。
その象徴とも言える”余裕”は、今となってはもう面影すらない。

カザリはそこで真に力尽き、遂には肉体を構成するモノさえをただのセルメダルの山と消えた。
そして、大きなヒビの入ったたった一枚――ライオンの力とカザリの魂が封入されたコアメダル。
それは人知れずに、初めから無かったかのように粉々に砕け散り、一時だけの煌びやかな光の果てに消え失せた。

敵勢合併と猫王と映司の欲（後書き）

次回、仮面ライダーブライ！

虚無王とプロトバースと水棲女王

行き成りですが、ＭＯＶＩＥ大戦ＭＥＧＡＭＡＸに登場するという「ポセイドン」との被りを避けるため、急遽ブライの水棲系ヘッドパーツ担当のコアメダルを、クジラからゼウグロドンに変更しました。――悪しからず。

虚無王とプロトバースと水棲女王

グリード達の根城たる洋館。
カザリが欠いた今、グリード達は変わらず此処にいる。
そのくつろぎ振りからして、カザリの行く末など大して気にも留めていないようだ。

一階ではウヴァ・ガメル・メズール・四季崎・白兵辺りがくつろいでいて、
二階の小部屋ではアンクが赤いソファーでスマートフォンを弄りながら赤いソファーで寝転び、七実は血錆色の布が敷かれた椅子に座りつつ紅茶を飲んでいる。

そんな時に、ジャリンという音が、アンクと七実の近くにあるテーブルでなった。
黒衣の男が無造作に置いた、コアメダルの音だ。

「これはカザリの・・・・・・」
「あの時の状況と、ここにある枚数を考えると・・・・・・」

アンクと七実がメダルに興味と推測をもつと、

「お察しの通り、カザリ君自身であるコアメダルが破壊されたんです」

トドメをさした張本人である真木が悠々と答えた。

「「死(亡くなったのですか)んだのか?」」

声をハモらせる二人。

「ほう。随分人間に馴染んで来たようですね」
「――なに？」
「メダルの塊であるグリードに、命などありません。死んだのではなく、ただ消えた――それだけです」
「そうだったなぁ・・・・・・」
「――――」

真木の言い分はある意味正しい。
アンクはぶっきらぼうに返事し、七実は少し不愉快そうに眉をしかめながら部屋を出て、一階にいる同族たちを見る。

「ただのメダル――物でしかない」
「哀しい運命（さだめ）ですね」

二人は無表情で呟く。

「そこにある陽射しも、美しい花も、熟れた果実の味も感じられないただの物。――四季崎氏を始めとする例外も居ますがね」
「確かに、そうですね」
「ああ、今はな」

グリードは欲望のメダルの集合体。
故に物体であり生命ではない――よって、そこには感情も感覚も無く、バカの一つ覚えのような欲望だけしかない。

「そう、君は進化する。その為にもオーズと、彼の持つ紫のメダルを――」

真木はそう言い残して立ち去り、別の部屋へと移動していく。

「「――――――」」

アンクと七実は無言でもと居た部屋に戻った。
アンクは『右腕』を現すと、テーブルに置かれた十数枚のコアメダルに荒々しく手を伸ばす。
七実はその様子を――アンクがコアを得ていく様子をまじまじと見ていた。

そこへ、

「どうだアンク？調子のほうは」
「すくなくとも、虚刀『鑢』の表情は、あまり芳しく無い様でござるが」

四季崎と白兵が、階段を上がってきた。

「お前らには関係ないことだ」
「全くです」
「そうつんけんすんなよ。折角良い物を持ってきてやったんだ」

四季崎はそう言って懐に手を伸ばし、ある物を三枚取り出した。

「おぬしらにとって、これはかなり有り難い物になる筈でござる」

白兵がその三枚・・・・・フォース・コアを強調する台詞を口にする。

「ほほう、面白い。貰ってやろうじゃねぇか」

「私にも下さるのですか？」
「勿論だな。アンクには一枚、虚刀には二枚だ」
そうして、四季崎は荒っぽそうでいて、しかし正確無比な狙いをつけた投擲で、アンクの『右腕』と七実の体目掛けてフォース・コアを贈った。

＊＊＊＊＊

今から数時間前。
鴻上生体研究所の所長室。
そこではライダー達による今後の方針が話されていた。
「現状はハッキリ言って、俺達が押され気味だ」
「ええ。使えるコンボが、一つ減っちゃいましたからね」
映司は刃介の言葉に頷き、メダルホルダーを開いて残りのコアメダルを確認する。
だがそれでも、予期しなかった昆虫コアの入手や爬虫類コアの登場もあって、現在オーズの使えるコンボは五種類と結構まだ多めなのだ。
しかし、だからといって安心はできないし、何時何枚奪われても可笑しくないのも事実。

「バースの修理はまだ手間かかんのか、後藤」
刃介がそう訊くと、ノートパソコンでバースシステムのチェックをしている後藤は振り向く。
「ああ。――確かに状況は思わしくないな」
カザリの鉤爪で胸部装甲に深く大きい損傷を与えられた所為だけでなく、真木という最高の技術者が敵側という二つの要素も相まって、大掛かりなバースの修理にはこれまで以上の時間を要するようになってしまった。
「だから攻めませんか」
映司は唐突に裏をかく提案をする。
「ふむ。攻撃は最大の防御という意味か、火野よ」
「っつーことは、真木の家に行くってことか？」
竜王が受諾するように頷いていると、隣に居た烈火が訊ねる。
「真木博士の屋敷・・・・・伊達さんが情報を残してくれたから、場所はわかっているんだが・・・・・」
「まあ仕方ないだろ。今となってはグリード達の巣くう魔窟だしよぉ」
「でも、今回みたいに、いつか揃って攻撃してくるわけだし」
後藤と刃介の言葉に、映司はなおも攻め込む姿勢で行く。
「状況が膠着しきる前に、攻めて・・・・・」

「こっちにペースで始めるのも有りか」
後藤も映司の意見に賛同の意を示しだす。
コンコン、というノックの音。
「後藤さん。研究所に例のもの、残ってましたよ」
「そうか――――！」
里中は部屋に入ってくると、机の上に黒いケースに置いた。
黒いケースの中には、バースドライバーと同型のベルトがあった。
「バースの試作品です。性能はほぼ正規品と同じですが、装着できる武器はクレーンアームとブレストキャノンだけです」
「それでも無いよりはマシだ」
後藤は試作品のベルトを手に取る。
「あ、ちょっといいっすか？」
そこへ一人の青年の体育会系な口調が聞こえてくる。
首から下をライダースーツで包んだ１８０ｃｍという長身の青年。
「凍空吹雪か。何の用件で来た？」
竜王がクールに訊くと、吹雪はすぐに冷静な表情で答える。
「実はっすね、バースの最終メンテを財閥のほうでやることになったんすよ。うちんとこの会長の発案で」
「あのパツキン姉ちゃんがか？」

烈火は身を乗り出しながら少しだけ驚く。
チェリオシステムならいざ知らず、態々自分たちの管轄ではないバースシステムの修復を手がけようというのだから。

「なんでそんなことを？」

と、映司の治療の為に居合わせた比奈も質問する。

「なんでも、バースの強化改修をするとか言ってたっすよ。多分チェリオがブレイズチェリオになったように、特定のメダルを使う仕様になる筈っす」

それを聞いて後藤は内心で歓喜した。
今の状態では、バースは間違いなく味方面子の中において低スペックといえる。
だが、次に戻ってきたときの正規品はより強化されているとなれば、より良い戦況が出来上がるのだから。

「じゃあ、こっちのベルトは持って行くっすよ」
「ああ、頼むぞ」

後藤はそう言って、吹雪を逸早くベルトを渡して財閥に帰らせた。

「火野、やるか？」

喜びを表情に出すことなく、最終確認をとるように、後藤は訊ねる。

「はい！」
「でも・・・・・・」

「大丈夫。信吾さん必ず取り戻すから」
「・・・・・・映司くん・・・・・・自分のことも、ちゃんと守ってね」

比奈は不安げにそういった。
さっきの映司の発言には、信吾を助けるというものがあっても、映司自身を如何にかするという項目が無かったが故だ。

「・・・・・・・・・・・・うん」

暫しの沈黙をおいて、映司は頷いた。

＊＊＊＊＊

時と場所は再び洋館へ。
静かに椅子に座るアンクと七実。
その手には四季崎から与えられたフォース・コア。

――メダルの塊であるグリードに、命などありません――

思い起こすのは、真木の言っていた言葉。

「なんだか昔とは違うわねアンク。その身体の所為かしら？」

階段を昇ってきたメズールは、８００年前と現在を比較する。

「ねえ、人間の身体で味わう欲望ってどう？――食べて見て聞いたんでしょう？どうだった？」
「ふっ――お前らグリードにはわからない味だ」
「お前らグリード、ね。まるで自分は違うみたい」
その時、表情にこそ出はしないが、確実に場の雰囲気が変わった。
「ああ。俺は人間が気に喰わないが、グリードはもっと気に喰わない」
「――人の身体では大したものは味わえなかったようね。物足りないって顔してるわよアンク。どうしてかしら？」
言いながらメズールは階段をさらに昇って上の階に言った。
「・・・・・おい、鑢」
「なんですか？」
同席していたにも関わらず、さきほどから一切口を開いていなかった七実に、アンクが話しかけてくる。
「お前のベースは人間だったらしいな」
「厳密には、既存の人間を完全複製した人形です」
「そんなことはどうでもいい。肝心な部分は、人間だった頃の――原典のお前が味わった世界はどうだったんだ？」
「そうですね・・・・・・」
七実は顎に手を添えて考えると、
「正直なところ、多少広くなった程度で、世界の感じ方は今も昔も変わりません。ですけど・・・・・・」

「なんだ？」
「変わったところといえば、刃介さんに出会えたことと、目的があるということだけです」
「・・・・・・・・・・・・」
七実の答えに、アンクは黙りふけた。

＊＊＊＊＊

――バギンッ！――
一階の広間で、ウヴァはゴルフクラブ片手に、花瓶や壺を割って憂さを晴らしていたが、

「妙な気配がする・・・・・・」
理由は憂さだけではなかった。
そして、その予感は見事的中する。

――バリィン！！――
窓ガラスをぶち破って、ジュース缶のような物体が広間に放り込まれた。
そしてそれの正体はというと、

――ビカァァアアアッ！！――
――プシュウゥゥウウウウ！！――

凄絶な閃光と煙幕で、部屋を満たしまくったのだ。

そう、閃光煙幕弾だ。

「まッ、眩しい～～！！」
「くッ、外だ！！」

慌てふためくガメルと、焦るように屋外へと走るウヴァ。

「考えたでござるな・・・・・・」
「此処も潮時だな」

片や冷静に対応しながら外に出る白兵と四季崎。

「――――何時かは来ると思ってましたが」

そしてハンカチで口と鼻を覆いつつ避難する真木。
尚その際、金庫の中に入れておいた人形の回収も忘れない。

当然、これだけの騒ぎになればアンクと七実も廊下に出てくる。
そのタイミングを見計らって、

――バッ！――
――ドン！――

映司と刃介がバルコニーから窓を開け、そのまま勢いに乗って体当

たりをお見舞いしたのだ。

それによって、アンクはタカ・コアとライオン・コアを落としてしまい、それを映司が素早く手中に収めた。
一方で刃介はコアを奪うことは無かったが、代わりに七実を全力で押し倒して身の自由を奪っていた。

「返せ」
「悪いけど、こっちもメダルを盗られてるんだ」

アンクの要求に頑として拒否する映司。

「あら、押し倒す趣味があったのですか？」
「その冗談、こんな場所じゃ寒過ぎだろ？」

一方で七実の悪意の篭った洒落を、刃介はトゲのある言葉で返した。
双方は何時までも至近距離で居るのはまずいと悟り、距離をとった。

「お前もグリードらしくなってきたな」
「かもね」

「七実、今度こそ話を聞かせてもらう」
「いいいでしょう。しかし、触りだけですよ」

双方は３Ｍほど距離をとり、互いに気を張った。

＊＊＊＊＊

『目が痛い～、ゲフゲフッ』

怪人態となり玄関に出てきたガメル。
弱点の視覚を疲れた上、煙まで吸い込まされたこともあってかなり参っていた。

急いで階段を下りて庭に出ようとすると、シュルシュルという音が小さくなり、
階段に仕込まれた縄がピンと張ってガメルの脚に引っ掛かった。

『うッ！？』

それに引っ掛かったガメルは勢いよく転んでしまい、体よく都合のいい場所に落ちてくれた。

『あれぇ？――――あ、お菓子だぁ！わーい！』

自分が転んだ先に駄菓子がある。
余りにも不自然な状況だが、オツムのレベルが完全に子供なガメルには通用した。
嬉々として駄菓子の箱を手に持ったガメルだが、それによって隠されていた物に漸く気付く。

『って、ん？――爆弾！？』

正確に言うとダイナマイトである。

茂みの中からピッという音がした。

無論その直後。

――ドカァァアアァァン！！――

駄菓子によって隠されていた全てのダイナマイトが爆発した。

『ガメル！！』

『お菓子が爆発したッ。ん～～！』

そこへウヴァが現れ、直感的に茂みに隠れている迷彩服を着た里中の存在を気取る。

姿を見られるや否や、里中はもうスピードでダッシュする。

『待てコラーーッ！！』

怒り心頭な様子で里中を追走するウヴァ。

里中は林の中に入っていくと、頃合を見計らったようなタイミングと場所で、

「べぇぇぇ！」

あかんべをしたのだ。

そして、

――ズボッ・・・・・・！！――

『ぬぉわ！？』

落とし穴である。
しかも見事な嵌りっぷりだ。

「あ・げ・る！」

そこへ里中はさらに何かを穴の中に投入。

『おのれ――――ってぉおッ！！？』

それに気付いたウヴァは急いで身をよじって穴を抜け出ようとするも、

――ドカァァアァァァン！！――

投げ込まれた手榴弾は見事役目を果たし、

『う・・・・・・ッ』

ウヴァを黒焦げにし、白い煙まで吐き出させた。

里中は「よしッ」とガッツポーズをとる。
だがそこへ、

『ハッ！』

メズールが襲い掛かってきた。
だが、

「おぉぉ！」

クレーンアームの先端で木の枝を掴み、ターザンのように宙を舞うプロトバース――ー身体にデータ収集用の赤いマーカーのついたバース・プロトタイプによってメズールは蹴り飛ばされた。
そして予定通りの位置にメズールを蹴り飛ばしたプロトバースは、右腕を下に引き、それに連動して――

『あッ、いや！？』

緑色のネットに包まれ、メズールは宙に吊るされてしまった。

――ヴィンヴィンヴィンヴィンヴィン！！――

『ちょ、ちょっ、ちょっと？！』

そこへバースバスターによる連射。

『大丈夫でござるか？』

そこへゼントウが助けに入ろうとしたその矢先に、木の上から導火線の音が聞こえたかと思えば、

――ボガァァアァァン！！――

『ん、あ・・・・・・ッ』

行き成り落ちて来た大型の花火玉がゼントウの頭上で爆発した。

しかも爆発に混じって、小型の手裏剣が三十本ほど雨霰の様に降り注ぐ。
所謂クラスター爆弾の一種だ。

その証拠に、ゼントウの身体と足元に突き刺さった複数の手裏剣には強力な小型爆弾が埋め込まれており、先ほどの爆発から連鎖して、

――パンッパンッパンッパンッパンッ！！――

大型花火のような音を立てて次々と爆発する。

『あ、ん・・・・・・ッ』

この二段攻撃によってゼントウは膝を突いてしまう。

「おっしゃー！」
「ふむふむ」

それを見て出てきたのはクエス・カミキツネコンボと、実家が花火屋のブレイズチェリオ。

『かっかっか。甘いなお前ら』

そこへ聞こえてきたのはデシレの声。
しかし声の主の姿は見えない。

――が、いざ周りを見渡すと、まだ誰も引っ掛かってない筈のもう一つの落とし穴・・・・・そこから確実に声が聞こえていた。

『だってアレだろ？お前ら攻められるのが怖いから自分から攻めに来たんだろ？きっとそうだ。ポジティブだ、ポジティブになれデシレ！少しでもネガティブになればあの酒瓶の二の前だデシレ！』

「「なんか在り得ないのが引っ掛かってたァァッ！！？」」

こともあろうに、ウヴァやガメルが引っ掛かりそうなトラップに、こともあろうにデシレが引っ掛かっていた。

しかもこの落とし穴は刃介が掘ったもので――深さは約５Ｍで地の底には日本刀・両刃剣・戦斧・長槍・大鎌・チェーンソーといった凶器で満ち満ちているし、壁部分には油だがローションだか良くわかんない液体で妙にヌルヌルして超滑りやすいし、何よりデシレは両前腕部が不完全で爪を立てられなかったりと、三重苦の悪意的なトンデモ罠と化していた。

＊＊＊＊＊

そして、もう一方では。

――カシャ、カシャ――

刃介と映司はベルトを装着し、リオテとタトバの三枚をバックルに入れていた。

それからスキャンーを手に取った段階で、

「アンク、もう一度聞いておくけど・・・・・・信吾さんを比奈ちゃんに返す気はないんだよな？」
「七実。さっき言ったとおり、触り程度だろうが構わん――――話してもらうぞ」

屋敷の直ぐ近くながらも、日の当たる屋外に出た二組。
アンクと七実は、その手にフォース・コアを手にして、

――チャリン、チャリン――

アンクは『右腕』に一枚、七実は身体に二枚投入する。
七実のメダル投入はそれで終わったが、アンクのそれはこの程度ではすまない。
今度はネコ系メダルを二枚持って、

――ユゥン、ユゥン――

奇妙な音を立てながら、二枚のコアは左腕に入り込んだ。
そう、アンク自身ではなく、依代たる信吾へとコアメダルを投入したのだ。
その影響でピリピリとエネルギーが音を立て、瞳の色が少しばかりの間だけ黄色に変わっていた。

「アンク止めろ！！」

映司は流石にこんな常軌を逸したやり方に声を荒立てる。

「依代（こいつ）を使う意味、わかったろ？足りないコアメダル三枚分は、こ

の身体で補う。――俺は、依代(こいつ)ごと、メダルの器になるんだよ」

アンクの言葉は本物だった。

「グリードなんかより、もっと強い存在にな・・・・・・！！」

そうしてアンクは背中から一対の大翼を現した。

その欲望の深さと大きさを顕わとするように。

「刃介さん。私が貴方から離れた理由のことですが」

「嘘偽りは無しだぞ」

「わかっております。――――私には目的が出来たんですよ。それを遣り遂げる為に、四季崎記紀の力を借りている」

七実はどこまでも真剣な顔で語る。

「目的ってのは何だ？」

「貴方の悪いようにはなりません。寧ろ貴方の望んだ通りの事となるでしょう」

「ぁん？」

＊＊＊＊＊

再びグリード勢はというと、

『油断したな！』

『完全に先制されたわね！』
『皆して古典的な罠に引っ掛かったしな』
『『そうだけど、お前にだけは言われたくない』』

デシレに対してツッコむウヴァとメズール。
そこへ追撃とばかりに、

≪ＢＲＥＡＳＴ　ＣＡＮＮＯＮ≫
≪ＧＥＫＩＴＯＵ・ＫＵＲＯＧＡＮＥ≫

プロトバースはブレストキャノン、ブレイズチェリオは撃刀『鉄』を転送装備。
里中もバースバスター、クエスもキョウケンソードを構える。

≪ＣＥＬＬ　ＢＵＲＳＴ≫
≪ＣＯＲＥ　ＢＵＲＳＴ≫
≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

――ヴィンヴィンヴィンヴィンッッ！！――

ブレストキャノンシュート、砲撃刀火、ハウンドリムーブ、セルメダル超連射撃。

――ドガァァアァァン！！――

この同時攻撃により、ウヴァたちは纏めて吹っ飛ばされた。
そして、あの二組もこの林にまで移動してきた。
変身すらせず、ただ攻撃し、攻撃をかわすだけでの展開だが、

「七実よせ！」
「問答無用です。――虚刀流、雛罌粟から沈丁花まで、打撃技混成接続」
振るわれる神速の攻撃の波。
２７２種類という壮絶な嵐に曝される刃介。
「くっ、グァ・・・・・・！」
両腕をグリード化させ、高速で防ぐも、それでも神速には一歩及ばず、１３６種類の攻撃が入ってしまった。
それによって刃介の身体は吹っ飛ばされてしまい、コアメダルは守れたものの、セルメダルだけは２７２枚削られてしまった。
一方で映司も
――ブンッ！――
「うわッ！！」
アンクに殴られ、その拍子にメダルホルダーを落としてしまう。
その後にも続く、脇役は優勢で、主役は劣勢という奇妙な光景の中、
スタスタ・・・・・と歩み寄り、メダルホルダーを拾い上げる男が一人。
「アンクくん私に。――鑢くんは鋼くんを抑えてください」
「――――チッ」
「はい」

真木の言葉に舌打ちしながらも映司から離れるアンク。
それとは正反対に素直に従って刃介に抱きつく形で動きを封じる七実。

「今日こそ貰いますよ君の中のメダル」

その言葉の後、真木の瞳が紫と成る。

「うッ！かぁっ・・・うゥッ・・・！――ゥアウ！！」

映司が苦痛に苛まれながらも、決して己の意志を手放すことなく、逆に紫のオーラを放出して真木を仰け反らせた。
映司は立ち上がり、こうも宣言する。

「俺も大分慣れてきましたよ、メダルの扱い。でなきゃ乗り込みません」

「成るほど。私も急がなければならないということですね」

真木は平然とした口調でそう言い放つと、右腕をグリード化させて禍々しいオーラを発現させる。
そして禍々しいオーラは真木の全身を包み込み、メダルを音と共に彼の姿を完全に変えきった。

かの異形を彩るのは先ほどのオーラと同じ禍々しい紫色。
頭部はティラノサウルス、胸部にはトリケラの顔と角があり、首周りにはトリケラの頭骨後部を模したフリル、両肩にはプテラの頭、背中にはプテラの翼の如きマントが広がっている。

己が使命たる世界の終末を齎すべく、人間（どうぞく）を裏切り欲望（グリード）となった恐竜の王。

此の世の森羅万象全てを消滅・還元する”虚無王ギル”――――！

「え――――！？」

「真木博士・・・・・・・！？」

「マジ、かよ？」

映司、プロトバース、ブレイズチェリオは驚愕を顕わにし、

『『『――――ッ！？』』』

ウヴァ、ガメル、メズールも未だ見たことの無かったギルの姿に驚きを禁じ得ない。

『――――オオオァァァァ・・・・・・・！』

ギルは静かに唸ると、全身から紫の波動を無秩序に放出する。

『『『『『「「「――――――ッッ」」」』』』』』

「「「「「「「――――――ッッ」」」」」」」

敵側はおろか、味方のグリードさえも、一歩間違えば巻き込みかねないほどの勢いだ。

さらにその威力は凄まじく、周囲の木々は当然のこと、地面の雑草や芝生も綺麗に消滅してしまい、あとには雑草一本さえ生える気配がない。

『・・・・・・ウウゥァァァァ――――』

ギルは今の波動で、ライダー達がすぐさま撤退したのを確認すると、そのまま唸り声を止めて、洋館へと戻っていった。

＊＊＊＊＊

夕方となり、里中は車の中で鴻上に報告をしていた。
といってもノートパソコン越しのライブ中継のようなもので、第一里中はそんな大事な話の最中であろうと化粧を怠っていなかった。

『つまりＤｒ．真木は止められなかったというわけか』
「はい。思いっきりグリードでした」
『しかもメダルも、９０％近くが彼等の手にか』
「グリードのうち、一体か二体は完全復活するかと」

まるで他人事のように、化粧しながら報告する里中。

『些か・・・・・いやかなり、いや非常に拙いよ里中君！！』
「何か対策があれば、今日は残業しますが」

化粧を終えた里中は、化粧箱を置きながら、意外にレアな台詞を口にする。

『もはやオーズとブライとクエス・・・・・バース・プロトタイプとブレイズチェリオに戦ってもらうしかない』
「では、このまま直帰で。失礼しまー『待ちたまえッ！』

ノートパソコンの電源を切ろうとする里中に待ったをかける鴻上。
しかしこの”直帰”という単語と状況からして、鴻上の返事によっ

ては車で即刻帰宅しようとしたのが丸分かりである。

『戦いの助けになるものはある』

＊＊＊＊＊

鴻上生体研究所の所長室。

部屋の中の空気は実に陰鬱としていた。

なお、烈火には町の警護と見回りを頼んでいるので、この場にはいない。

「まさか・・・・・・真木博士があそこまでとはな」

「はい・・・・・・それにメダルもこれだけに」

残ったメダルはライオン・トラ・バッタの三枚。

「いや、まだある」

後藤はポケットから一枚のチーター・コアを取り出す。

「さっきの戦いでこれだけ手に入った」

といって映司に投げ渡した。

「火野。一応これ返しておくぞ」

唐突ながら、今度は刃介は懐からブラカワニの三枚を渡してきた。

「念には念をと思って、予めこの三枚だけホルダーから抜き取っておいたんだ」

「ッ！よかった！コンボが出来ればかなり・・・・・・！」

これで使えるコンボはラトラーターとブラカワニの二種類。

「早く信吾さんを助けないと！」

「・・・・・しかし、あの刑事とアンクが・・・・・・８００年前では考えられない展開だな」

意気込む映司とは裏腹に、竜王は首を捻っている。

「メダルの器、となれば何れ・・・・・・グリード化」

「そんなことさせませんっ――絶対に止めます！」

「ったく、この欠陥者は・・・・・・」

信吾の迎える最悪の結末、それに対し気概を見せる映司、そんな映司を見て呆れる刃介。

「どうして自分のこともそう思えない？」

「・・・・・・え？」

「火野、お前のほうがグリード化が進んでるんだぞ。比奈ちゃんの言ったとおり、どうして自分を守ろうとしない？」

以前にも刃介と竜王は映司のことをこう言い表した。

後天的ながらも人間として故障していると。

「そんなことないです！俺だってなりたくないですし！」

「だったら火野よぉ――ルナイトが言ってたテメー自身の願いを思い出せ、さっさとな」
「っはい！でもそう急には！」
刃介が追撃にかかり、映司は思わず何時もと違う勢いで言葉を発してしまう。
「・・・・・・すみません」
そしてそれに気付くと、意気消沈とした様子で謝った。
「ふぅ・・・・・・今はまだ致し方ないという訳か」
そんな状況に、竜王は溜息混じりだった。

＊＊＊＊＊

その頃、夜空に月が浮かび、白く儚い光を地上に齎している。
とあるビルにおいて、真木とアンク、四季崎と白兵と七実は集っていた。
「これで君は、コアメダルの半分以上を持つことになります」
真木はオーズのメダルホルダーをアンクに手渡した。
「君の望む進化には、まだ足りないと思いますが」

「お前の望む暴走にもなぁ――――する気もないが」

アンクは明らかな嫌味を込めて言い放つ。

だが次の瞬間、

「邪魔ですね」

七実は掌から妖気の刃を放ち、ある物を遮断する。

アンクの手からホルダーを奪おうとした、水の鞭を。

『これは、どういうことかしら?』

水の鞭の主であるメズールは、冷ややかな怒りを込めて質問してくる。

『勝手にメダルの山分けとはな』

『俺も欲しい!』

その横と後ろにはウヴァとガメルもいた。

「メダルにだけは目敏い方々ですね。流石は純正のグリード」

七実は珍しく嫌味を口にする。

『アンク、キョトウ。私たちのメダルまだあるでしょ?――だして』

メズールは何時にも増して積極的にメダルの分け前に口を出す。

まあ当然だろう。自分のコアが漸く揃う機会に恵まれたのだから。

「どうしますアンクさん?私はどちらでも構いませんが」

「・・・・・・フっ――――」

アンクは無愛想にそっぽを向いた。

『ふぅ・・・・・ねぇドクターの坊や。折角手を組んだんじゃない、独り占めなんて悪いことよ。アンクに渡すよう言って頂戴。――いい子だから、ね？』

メズールは真木の頬に手を添えようとするも、

「ごっこ遊びも好い加減にしたらどうです？」

真木はそれを回避した。

「四季崎氏の手掛けた者達と違い、君は純正のグリード。――味わえもしない愛情を幾ら真似たところで、グリードの君では見っとも無いだけです。本物を味わうには、人を喰らうしかない・・・・・・それがグリードですよ」

『――――――――』

それを聞かされると、メズールは人間形態となって、

「・・・・・だったら、余計にメダルが欲しいわ」

メズールの言葉を皮切りに、

『そうだ！』

ウヴァとガメルまでもが乗ってくる。

『俺達に完全復活させない気か？出せっ』
『俺のメダル出せぇ！』

勢いづく三人のグリード。

「おいおい、判ってるのかお前ら？数も質も、俺らが有利なのを」
「目先の欲望に塗れて、状況や後先が視えていない様でござるな」

だが、それを牽制するべく、四季崎は背中の呪刀、白兵は帯びた薄刀の柄に手をかける。
なまじ二人の実力を知っているだけに、三人のグリードは無意識に身構えだす。

「くっふふふハハハハ・・・・・・！」

アンクはその様子を見て嘲笑いだした。

「メダルメダルメダル・・・・・お前らほかに何か無いのか？」
『何が悪い？お前も同じだろうが！』

とウヴァが反論すると、

「・・・・・ああ、そうだよ。――最悪だ・・・・・・！お前ら正当なグリードと居ると、イヤでも思い知る」

アンクは不機嫌さを露骨に表して立ち上がると、

「コレ持ってとっとと消えろっ！」

――ジャリン！――

ほぼヤケクソ気味に、コアメダルを地面に投げつけるアンク。

『俺のコア！』

『メダルだぁ！』

青、灰、緑・・・・・・それぞれのコアメダルに三人のグリードが群がった。

「（はぁ・・・・・・哀れです）」

人間の浅はかさと醜さを、そのまま具現化したような光景に、七実は三人のグリードを見下しながら思った。

「アンクくん、同族嫌悪もけっこうですが君も気が短い」

「そう言うなよギル。楽しみが先延ばしになっただけだ」

「完全復活したグリードをぶつければ、向こう側への圧力になるでござろう」

「・・・・・まあ良いでしょう。メダルは何れ取り戻せますしね」

そのような会話をかわして、真木・四季崎・白兵は其の場から歩み去っていった。

そして、

「これで九枚。――やっと完全な・・・・・」

メズールは取り戻したコアメダルを胸に押し当てると、全身がメダルに包まれると同時に、水の弾ける音を鳴らしながら怪人態となる。

鯱の頭、ウナギの鰭型マント、女性らしい滑らか（プロポーション）さと色香を纏った

上半身、タコの吸盤がついた流麗なる細い両脚。
腰のベルトは銀、バックルは金という本来の色を取り戻した完全体。

『ぁぁぁぁぁ・・・・・・・!!』

メズールは８００年ぶりに得た本来の力に感動と快感を覚えたのか、喘ぎ声に近い声音を出しながら己が身を液体化させて何処かへと飛び去ってしまう。

『あ、メズール、待って!俺も九枚揃った!』

ガメルはメズールの後を追って必死に走り出す。

『チッ――俺の後1枚はオーズか』

ウヴァはクワガタとカマキリの二枚を見つつ、少し忌々しそうに呟いた。
そうして、バッタの跳躍力でどこかへと飛び去り、あとに残ったのはアンクと七実だけ。

「「・・・・・・・・・・・・」」

二人は静かに歩みだし、何処かへ行こうとする。

「あ、そういえば」

と思ったら、七実が何かを思い出したかのように立ち止まり、

「アンクさん、これどうします?」

これ、とはメダルホルダーのことだ。

「捨てて置け」

即答したアンク。

「そうですか」

七実も即答し、ホルダーをその辺に置き捨てると、そのまま二人は今一度脚を動かし、闇の中へと消えていった。

＊＊＊＊＊

「メズール～～！」

ガメルは自身のコアが九枚そろいつつも、メズールを探す都合上で人間態となっていた。
そんでいざ見つけると、

「メズール！メズール～！何処行くの？」

と、メズールの肩を掴みながら、

「俺も一緒に行く！」

何時ものように甘えだす。

しかし、

『ガメル。ごめんなさい。もうお飯事は終わり』

「えぇっ？」

メズールはガメルを優しく拒絶した。

『ドクターの坊やが言ってたでしょ？ごっこ遊びじゃなくて、本物を味わうの』

「じゃあ俺も！俺も行くメズール！」

『ダメよ！もうダメ！』

ここでメズールは、自分に縋りついてきたガメルを突き放す。

『私はね、ガメル。正直な話、あのブライとキョトウが羨ましいのよ。私たちと同じグリードなのに、人間と同じように食べて見て聞いて・・・・・そして、愛し合えるあの二人が』

メズールはとっくの前から気付いていた。

七実は本当の意味で刃介を裏切ったわけではないことを。

その行動の裏には、メズールでは感じられない「愛情」が潜んでいることにも。

『貴方じゃ私は満たされない・・・・・さようなら、ガメル』

所詮メズールにとって、ガメルは気に入った存在であっても、愛しい存在ではなかった。

彼女はせめてもの別れの言葉を口にして、姿を眩ました。

「メズール～～～！！」

そしてガメルは、今までになかったメズールの激変振りに、ただただ名前を叫んで呼ぶことしかできなかった。

＊＊＊＊＊

翌日の爽やかな朝。
柔らかな日差し、青々とした空、芝の生い茂る地面。
様々な人々が憩いの場として訪れる自然公園だ。

公園には池もあり、一部の鳥が水面下で泳いでいた。

「あの鳥ってなに？」
「あれはね、カモよ」

などと母娘が平穏な休日を享受していると、

――バシャーーーン！！――

『頂戴！！』
「「キャアアアッ！！」」

池の中から液体化したメズールが現れ、母娘を液体（からだ）で包み込んで吸収すると、さらに流動的で三次元的な動きをしつつ、その進行ルート上にいる母娘を片っ端から吸収していく。

そんな様子を見て、懐から一輪のバラを取り出す一人の堕剣士がいた。

「中々のものでござるな。しかし、ライダー達を相手取るにあたって、彼女一人では無理でござるよ」

かの剣聖はそういって、一枚のセルメダルをバラにチャリンと投入し、花を地面に放り捨てる。
するとバラは急激過ぎるスピードで成長し、突然変異を起こすことで”バラヤミー”と化した。

「おぬしの遣る事については、言わずとも判るでござろうな？」
『御意』

バラヤミーはそれだけいうと、メズールの後をついて行った。

しかし、これだけの騒ぎを起きた上、ヤミーまで出現した。
となれば必然的に彼等がやってくる。

「急げ！この気配、間違いなくメズールのものだ！」
「あいつらとうとう・・・・・・！」

竜王を先頭にして、ライダー一同は現場へと駆けつける。
そして母娘だけが液体によって吸収されていくのを目撃する。

「なんだあれは？」
「追いましょう！」
「合点承知！」

五人はより脚を速く動かして行った。

＊＊＊＊＊

どこぞの貯水槽の施設内。
メズールはそこに奪ってきた蓄えをしこたま置いていた。
まるでヤミーの卵のように無造作かつ無数に置かれたソレら。
メズールはその一つ一つを吟味し、愛しそうに撫でる。

『感じるわぁ。これが愛おしいってこと・・・・・・愛情の快感』

卵の中には全て、攫ってきた母娘が入れられていた。
まるで、卵の中からメズールへと愛情という欲望を吸収されているかのようだ。
彼女のつくる水棲系ヤミーとは完全に逆パターンである。

『ああ・・・・・・！全部私のもの・・・・・・！うっふふ、うっふふふ！』

何百個という卵に囲まれ、快楽の声をだすメズール。

『でも足りない！もっと・・・・・・もっと・・・・・・！！』

しかし、永遠に欠けたままのグリードが満たされることは決してない。

＊＊＊＊＊

「ここです！」

映司たちはメズールの後を追って、どうにかこの貯水施設に辿り着いた。

中に入ってみると、そこには例の卵がごまんと広がっていた。

「なんだこれは？」

「この卵って？」

首を捻る後藤と烈火とは裏腹に、逸早く気付いた映司と刃介は驚愕をあらわにし、前々からこれを知っていた竜王は苦々しい表情になる。

「みんな見てよ。これ中に人が！」

「やはり８００年前と同じ手口か」

竜王は卵に閉じ込められた母娘をみて、確信に到った。

「先に言って置くが、下手に触るなよ。今の状態で無理に出せば・・・・・」

竜王はそう注意を促すも、

『みんなお揃いのようだけど――――私の欲望の邪魔をしないで』

上のデッキからメズールが話しかけてきた。

「やはり完全復活・・・・・・！」

「こいつが欲望を貪るって事なのかよ」

「メズール・・・・・この人達を元に戻せ！」

などと言ってみるが、

『冗談でしょ？まだ味わい始めたばっかりよ。美味しくなくなったらあげるわ。うふふ、その時には命は無いかもしれないけど』

メズールは頑として聞こうとしない。

「これがグリードの欲望・・・・・」

「兎に角、この場所では戦えんし、メズールに有利過ぎる」

＊＊＊＊＊

そうして一同は一旦この部屋を後にして、外へ簡単に出入りが出来、なおかつ広くて戦いやすい場所に移動する。

だがその場所には――――。

『待っていたぞ』

「植物のヤミーか」

バラヤミーが待ち受けていた。

『あら、ゼントウの下僕が何の用かしら？』

『用も何も、貴女に助太刀しろと言われた』

『ああ、そう』

と短い会話をかわして、メズールとバラヤミーは肩を並べる。

一方で五人の戦士たちもベルトを装着し、

「「「「「変身――――！」」」」」

――パカッ――

≪ＬＩＯＮ・ＴＯＲＡ・ＣＨＥＥＴＨＡ≫

≪ＬＡＴＡ・ＬＡＴＡ！ＬＡＴＯＲＡＲＴＡＲ！≫

≪ＫＡＢＵＴＯ・ＨＡＣＨＩ・ＩＮＡＧＯ≫

≪ＫＡＢＵ・ＫＡＢＵＫＡＢＵＨＡＣＨＩＮＡ！ＫＡＢＵＨＡＣＨＩＮＡ！≫

≪ＢＡＲＡ・ＳＡＲＲＡＣＥＮＩＡ・ＲＡＦＦＬＥＳＩＡ≫

≪ＢＡ・ＳＡ・ＲＡ！ＢＡＳＡＲＡ！ＢＡ・ＳＡ・ＲＡ！≫

プロトバース、ブレイズチェリオ。

オーズ・ラトラーターコンボ、ブライ・カブハチナコンボ、クエス・バサラコンボ。

クエスとブレイズチェリオはバラヤミーを、オーズとブライとプロトバースへと向っていく。

「メズールなら、このコンボが効くはずだ！」

オーズはそういって、

「ウオオオオオオオオ！！」

ライオディアスで液体化しているメズールを干上がらせようとしたが、

――バシャ！！――

「うおッ！？」

熱線は一切効かず、逆に体当たりをかまされる始末だ。

メズールはそのまま飛行するようにバシャバシャとプロトバースとブライに体当たりをして一旦液状化を解くと、

『もう子供だましは効かないのよ』

完全体としての余裕と底力を見せ付けた。

「くっ、竜王！悪いが、俺のバイク持ってきてくれ！」

「こんな時にか？」

「こんな時だからこそだ！」

「――仕方の無いやつだ」

クエスはブライの目に宿る何かを悟り、そのまま施設の近くにとめてあるはずのシェードフォーゼを取りに走った。

なお、結果としてブレイズチェリオ対バラヤミーの戦いはというと、

≪ＳＥＴＴＯＵ・ＲＯＵ≫

≪ＣＨＩＮＴＯＵ・ＯＭＯＲＩ≫

切刀『鏤』と沈刀『錘』を装備し、一気にバラヤミーへと接近すると、

「オゥリャアアアア！！」
『ングァァ・・・・・・！！』

壮絶に削られていくセルメダル。
時と共にバラヤミーの力はどんどん奪われていく。

だがそこで何もしないバラヤミーではない。

『――――っっ！』

バラヤミーは身体中から蔓や蔦を伸ばし、メキメキとブレイズチェリオの四肢に絡ませていく。

「こいつ・・・・・・！」
『喰らえ』

バラヤミーはどこまでも冷徹な声で告げると、頭の見事に開花した薔薇から花弁の手裏剣を次々と飛ばしていき、ブレイズチェリオを苦しめる。

「こんなクソッ・・・！やられてたまるか！」

ザシュンザシュン、という具合にブレイズチェリオは『鏤』と『錘』で蔦や蔓を切り裂いていくと、装備していたその二つを解除した。

≪ＣＯＲＥ　ＢＵＲＳＴ≫

「いくぜ！」

そして、軸と成る左足にじっくりと体重をかけると、

「オーバーヒートブレイズ！！」

身体をハンマー投げのように振って、赤々としたエネルギーで滾る右足で、回し蹴りを決め込んだのだ。

『キ、ぎっ――がぁぁアアアア！！』

植物がもっとも苦手とする炎熱属性の必殺技をくらって、バラヤミーは猛火に包まれて爆発四散した。
大量のセルメダルを撒き散らしながら。

一方、ブライたちは。

「やはり試作品じゃ限界か・・・・・・」

「後藤さん！」

「――火野、鋼。俺に構うな！」

「あたぼうよ！」

プロトバースが半ばリタイヤ寸前の状態となっていた。
そんな時、

「刃介、持って来たぞ！」

クエスがシェードフォーゼを届けてきてくれたのだ。

「よし、これで・・・・・・火野、トライドベンダーだ！」

「え、どうして？」

「いいから早く！自販機はあそこにある！」

ブライはベンダーモードにライドベンダーを指差す。

「じゃあ！」

≪ＴＯＲＡ－ＣＡＮ≫

オーズはトラカンドロイドを投げ、トライドベンダーと合体させることで完成するモンスターマシン・トライドベンダーに雄叫びをあげさせた。

オーズがその鞍に跨ると同時に、ブライも愛機に追加要素を加える。

≪ＫＡＢＵＴＯ－ＣＡＮ≫

新しいカブトカンドロイドを起動させ、シェードフォーゼを合体させた。

色は緑に変わり、カウル部分にカブトカンから伸びたカブトムシ特有の巨大な雄々しい角、タイヤも平な形に変形して飛行補助を担う。

これこそが”シェードビートル”だ！

『ウゥゥアアアア！！』

液体となり、三次元的な移動をしながら攻撃してくるメズールに、オーズは地上、ブライは空中から反撃する――その手に、メダガ

ブリューとメダグラムを召喚して。

――ガシッ！バシッ！ビシッ！――

何度もぶつかり合う音。

「「ハァァアアッ！！」」

だが遂に、オーズとブライは同時に攻撃することでメズールを吹っ飛ばす。

吹っ飛ばされたメズールは液体化が地面を転がり、再び液体化しようと立ち上がった途端に、漸く今頃になって気付いた。

『ッッ！？』

自分の足が分厚い氷によって、足止めされていることに。

そこを狙って、オーズとブライは三枚のセルメダルを武器に投入した。

≪≪ＧＯＫＫＵＮＮ！≫≫

≪ＬＡＴＯＲＡＲＴＡＲ！≫

≪ＫＡＢＵＨＡＣＨＩＮＡ！≫

♪～～♪～～

流れるコンボメロディ。

それとは裏腹に、オーズは前方に出現する三つの黄色いリングを愛機と共に猛スピードで潜り抜けて行き、ブライは宙を飛ぶシェードビートル共々多重分身して急降下する形でメズールに接近し、

「セイヤァァアアアア！！！」
「チェストォォオオオオ！！！」

紫の刃が、水棲女王の力の源に、取り返しのつかない損傷を与えた。

『ィアアアアアアアアアーーーッッ！！！！』

メズールは許容しきれぬダメージに体表面が爆発した。
オーズとブライは愛機から飛び降り、その様子を見ていると、仲間たちがやってくる。

「火野、大丈夫か？」
「はい」
「やったな鋼！」
「派手な演出だったな」
「まぁな」

五人は確定した勝利に喜びを分かち合う。
だがそれでも、

『そんな・・・・・・！まだ、全然足りない！』

コアに重大な傷をいれられ、身体中からセルがこぼれていくメズール。

『もっとぉ・・・・・・もっとよぉ！』

必死になってどことも知れぬ場所へ手を伸ばすメズール。
誰もがメズールの無様な最期を予想したとき、

「――メズール・・・・・・メズール、メズール！メズール！！」

昨晩からメズールを探し続けていたガメルが、遅すぎるタイミングで現れたのだ。
ガメルは、弱りきったメズールを抱き起こし、彼女の言動に耳を傾ける。

『ダメなの・・・・・・全然足りないの！』
「なんで、なんで・・・・・・！？」
『グリード、だから・・・・・・――――』

文字通り、それが水棲女王メズールの末期の台詞となる。
メズールの身体は完全に力尽き、

「ッ、メズール！？――メズール～！」

身体はセルメダルの山となり、その中からシャチ・ウナギ・タコのメダルが一枚ずつ出て来た直後、小気味良い音を立てて砕け散り、消滅してしまった。
まるで、彼女が求め欲してきた、愛の儚さを物語るように――。
ガメルは無傷のコアメダルを手にして握ると、

「ウァァアアアアアアアア！！！！」

凄まじい慟哭を上げ、その姿を完全なものとして現す。
サイの角、ゾウの鼻と牙、ゴリラのように堅牢で屈強極まる上半身、
ゾウの如くずっしりとした両脚。
重量王ガメルの完全復活の瞬間だ。

しかし、

『アアアアアアアアアアアッッ！！！！！』

だがガメル本人は、完全復活できた喜びよりも、メズールを失ったという悲しみと喪失感のほうが遥かに大きかった。

「おわぁッ！？」
「うあぁっ！？」
「「「ぅアアァ！？」」」

ガメルの慟哭によって発生した激しい重力波によって、五人のライダーは総じて、近くの河へと落とされてしまったのだ。
しかし今のガメルにはそんなことは些事にさえならない。

『メズールぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！！』

純粋であり純真無垢であり・・・・・それ故にどこまでも我欲に忠実なグリードの嘆きの慟哭は、この辺り一帯だけでなく、天上にまで届かんとするのではと思うほどだ。
もう一度だけ言わせて貰おう――純粋すぎる純真無垢な心は時として、此の世の誰の力を以ってしても御しきれぬ物へと変貌しかね

ないということを。

2007

虚無王とプロトバースと水棲女王（後書き）

次回、仮面ライダー ブライ！

映司グリードと重量王と七実の願い

シェードビートル
カブトカンドロイドとシェードフォーゼを合体させることで完成させるブライ専用のスーパーマシン。カラーは緑。最高時速は７００ｋｍ。
カウル部分にカブトカンが合体し、緑色の雄々しい一本角が現れると、前輪と後輪が横倒し状に変形して凄絶な強風を巻き起こし車体を浮遊させる役目を担い、エンジン部分は高速飛行の為のジェットを役割を果たす。
また一本角（カウルホーン）の素材はメダジャリバーやの刀身やメダマガンの銃身と同じ金属で出来ており、例え巨大なダイヤモンドであろうと一撃で粉砕する。さらに強烈な電気エネルギーを付与することでヤミーやグリードにも重大なダメージを負わせられる威力を備える。
だがしかし、その特性上、このマシンを十全に機能させるには多大な電力が必要となり、結果としてカブハチナコンボでのみ運用可能という難癖付き。

映司グリードと重量王と七実の願い（前書き）

仮面ライダーブライ！

前回の三つの出来事！

一つ！刃介たちはグリードのアジトへの奇襲を慣行！

二つ！オーズの大半のコアメダルがグリード側に集結！

そして三つ！完全復活を果たしたメズールを倒した直後、ガメルもまた完全復活を果たした！

2009

映司グリードと重量王と七実の願い

『メズールーぅぅぅぅぅぅ！！！！』

その叫び声は、ただただ何か大切なものを失った子供のそれだった。
自分にとって、家族同然だったものを喪失した、そんな虚しい叫び声。

ガメルはひとしきり叫び終えると、自分の手にあるウナギ・コアを見て、

『メズール・・・・・・』

静かに呟いてどこかへ歩いていこうとする。
行き先すら定まっていないその歩みだったが――――

「ガメルくん。そのコアも渡してください」
「今となっては、宝の持ち腐れだからな」

真木と四季崎は、セルの山の中から残った五枚の水棲系コアを回収していた。

『イヤだ！』
「・・・・・さっきも言ったが、宝の持ち腐れだぞ」
『これは、メズールだから、俺が元に戻す！』

ガメルは駄々をこねるように言ったが、そんなガメルに四季崎は呆れながらこう返した。

「無駄なことだ。大体ソレはウナギだろ。頭であるシャチなら兎も角、そこに魂が発生することは有りえねぇぞ、小僧」

『うるさい！お前ら嫌いだ！』

事実を受け止める心の頭も無い幼稚なガメルに、このような説得は逆効果だ。

猪突猛進の勢いで突進してくるガメルに、四季崎はやむを得ず――――

「拳骨をやんないとわからないようだな、ガキ」

背中にある一本の刀へと手をかけ、

『呪刀「鎮」、限定奥義』

怪物（デシレ）となり、

『封刀呪縛（ふうとうじゅばく）』

その奥義の解放と共に、鞘に巻きつけてある長大な経文が生き物のように動き出し、ガメルの身体に纏わり突いて動きを止めた。

『な、なんだコレ！？』

『呪刀（こいつ）の備える二つの奥義の一つさ。まあ、ただ単に敵の身体と能力を拘束するだけなんだが、思いのほか使い勝手がいい』

デシレは感情を切り捨てた様に無感情な声で語った。

経文はガメルの野太い身体を縛り上げ、このままかと思われたが、

『うるさいっ！！』

ガメルはその時、奇跡的な強運と根性によって、

『うぅあああああああああああああ！！！！』

――バリバリバリッ！！ビリッ！――

『！？――――真木！』

経文に大きな傷が生じ、デシレは真木に向けて叫んだ。

『――――――』

真木は無言でギルとなり、ガメルの駆け寄ると、

――バシッ！――

――ビリッ！――

ギルがガメルの腹部に一撃を与えると同時に、経文がどんどん痛み出す。

そして、

――ビリッ・・・・・・！！――

――ッバアアアアア！！――

経文は、完全に千切れた。

さらに、それによってガメルが力任せに放出したオーラが一気に噴出し、デシレとギルを吹っ飛ばしたのだ。

その所為で二人の姿は人間のそれに戻ってしまう。

「ちぃ！やはり、あの時の傷を放置したのは拙かったか」

あの時とは、以前グリード総勢でライダー達に襲い掛かった際、ブライの攻撃を経文で防いだ時である。

「ッッ！！？無いよ！？無いよ！？――あ、あったよ！！」

一方で真木は人形を紛失？したのか、パニックに陥っている。

『俺は、メズールを、元に戻す！』

ガメルはそんな二人の様子など気にも留めずに、ウナギのメダルを持ったまま何処かへと去ってしまった。

「いいでしょう。君の欲望に良き終わりが訪れんことを」

「それは良いけどよ真木。なんで人形に海苔眉毛があんだ？」

そうして、真木と四季崎も何処かへ立ち去って行った。

その数分後、

――ザブン！――

河から大きな音を立てながら、這い上がってくるものが三人。

「くッ――――んッ」

「あぁ・・・・・チッキショ・・・・・」

「全く、行き成り泳ぐ羽目になるとはな」

後藤慎太郎、花菱烈火、真庭竜王。

三人は身体も服装もずぶ濡れのまま、陸に上がってくる。

「しかし・・・・・・刃介！刃介！」

竜王が真っ先に手摺に掴まりながら名前を叫ぶと、

「火野！火野！」

「聞こえるか！？返事しろ！」

続けて後藤と烈火も叫ぶが、その叫びは届くことは無く、無駄な時間だけが過ぎて行った。

＊＊＊＊＊

さて、刃介や映司らが落ちた河は、他の河川がそうであるように、最終的には海へと通じている。

したがって、二人も海の浅瀬へと流れていくことになる。

「――い、――！」

岩に寄りかかる形で意識を失っていた映司に、一人だけだが、呼びかける声があった。

「――い！――えないのか？」

その呼びかけによって、映司の意識は目覚めていく。

「起きろ火野！」
「あ・・・・・・鋼・・・・・・さん」
やっと意識が戻り、映司の目には自分と同じく、全身がずぶ濡れな刃介の姿がうつった。
束の間の安堵――だが、
「ア――ッ！！」
突如として映司の身体に、恐竜コアのパワーが駆け巡った。
瞳は紫となり、その次は、
「火野・・・・・・」
刃介の驚く視線の先には、グリード化した映司の左腕。
「ぅあ！！？――戻れ！！戻れ！！」
「火野！落ち着け！」
「あぁ！くぁあ！？うぅ！？」
刃介が必死に止めても、映司の動揺は収まらない。
いよいよ以って、完全にグリード化する一歩手前の状態にまで来てしまったのだから。
火野映司の両目に映る世界の色もまた、くすみ荒れていたとなれば余計にだ。
「気を落ち着けろ！時間が経てば、力（コア）が大人しくなれば、自分の意思で如何にか成る！」
「ぐィッ・・・！グっ・・・！」

論ずる間にも、紫は映司の身体を侵食し続ける。

「チッ！火野ォ、歯ァ食い縛れーー！！」

――ブン！！――

「ガッッ！！」

刃介は素手の状態で、映司のことを力一杯殴った。
それによって海面に吹っ飛ばされ、浮かぶ映司。

「火野。好い加減、頭は冷えたか？」
「・・・・・鋼、さん・・・・・・俺」
「話は後だ。まずは気を落ち着かせろと言った筈だ」

刃介はザブザブと水を掻き分けるようにして映司に近寄り、右手を差し出した。
映司はそれに応じて、右手を出したが、右手の指が思うように動かない。

（右（こっち）の手も・・・・・・！違う、震えてる・・・・・・）

映司は、否が応でも、自分がもう人とは違うものであることを、認めざるを得なくなっていた。
刃介はそんな映司の心を察し、彼の手を無理にでも引いて、陸地の岩に彼を座らせた。

「火野・・・・・ひでぇ面だぞ。なんか喋っておけ。ちったぁ心が軽くなる」

「――――怖いんだ、俺・・・・・・グリードになるのが」

独白は響くことも轟くことも無く、浅瀬の海の波音にかき消されてしまった。

＊＊＊＊＊

その頃、アンクと七実はというと、

「「・・・・・・・・・・・・」」

コアをグリードらにぶちまけ、メズールとガメルのコアが九枚揃った場所に居た。

そんな時、

『プテラ！』

――チャリン！――

上空をプテラカンが舞い、五枚の水棲系コアを落としていった。

「メズールの奴も・・・・・・」

コアを拾うアンクは言葉の途中で、

”メダルの塊であるグリードに、命などありません”

真木の言葉を思い出した。

「・・・・・消えたか」

「カザリさんの次はメズールさん・・・・・この分だと、重量王も」

アンクは自分たちに相応しい言葉を述べ、七実は今後の展開を読む。

”人の身体では大したものは味わえなかったようね。物足りないって顔してるわよアンク”

メズールの言葉を思い出しながら、二人はコアを回収し終え、どこかへ去ろうとしたが、

「「――――――」」

ふと目についたものがあった。

それは、オーズのメダルホルダーであった。

＊＊＊＊＊

（何とかして戻らなきゃ・・・・・）

映司はグリード化した左腕を如何にかしようと、混乱して削れた理性を必死に働かせようとする。

「火野・・・・・・」

さすがに刃介も、これでは話し辛い。

「俺の、欲望・・・・・・・」

と不意にでた一言。

紫の力を抑制すると言われた、火野映司個人の欲望。

「ところで、コアまで流されてないよな」

「あ、ちょっと待ってください」

映司は急いでポケットに手を突っ込み、残りのコアメダルを全て出した。

ラトラーターの三枚、ブラカワニの三枚、そしてバッタ。

「よし。一旦町に戻るぞ」

「はい。・・・・・・・・・・・ん？」

「どうした？」

映司は何か奇妙な違和感を覚えた。

何だと思って自分の身体を何度か叩いて見て確認したところ。

「無い」

「あ？」

「オーズのベルトが・・・・・・」

「な、に？――ちょっと待て、まさか・・・・・・！」

映司の告げた言葉に、刃介も酷く不安なものを感じて懐や袖に手を入れてみたりしたが、

「クソ、俺もだ！」

露骨に不愉快な表情を曝しながら、刃介はブライドライバーを探し、映司も必死にオーズドライバーを探した。

＊＊＊＊＊

誰もいないせいか、電灯はおろか電球一つすら点いていない薄闇。鎮まりかまりかえったクスクシエの厨房にて、勝手に冷蔵庫を開ける者が一人居た。

彼は冷蔵庫から一本の棒アイスを取り出して口にする。

「確かに、暫く、これが物足りなかったな」

アンクは独り言を述べると、アイスを持ったまま店内をフラフラと歩いた。

今でこそはアンク一人の、暗くて静かなこの場所だが、彼と映司が居候していた頃は、鬱陶しくなる程に賑やかで明るい場所だった。

当時は馬鹿馬鹿しいと思っていたが、アンクはその思い出に妙な感情を抱きだしていた。

「――――」

また再びアイスの味を舌にすり込ませるようにして一口食べると、一見下らない様で愉快な記憶が掘り起こされる。

アンクはカウンターに座ると、電球式ランプのスイッチを入れて明かりを灯す。

小さな明かりの傍には、メダルホルダーが置かれていた。

”食べて見て聞いたんでしょう？どうだった？”

「わからない味だ。お前らグリードには」

と、アンクはただ一人で、前回の会話の再現をした。

「・・・・・だから・・・・・」

すると、ドアの開く音がして、誰かが店内に入ってきた。

「――アンク・・・・・」

比奈だった。

「・・・・・・・・・・もしかして、戻ってきたの？」

「・・・・・・・・・・」

アンクは黙ったまま立ち上がり、比奈に歩み寄った。

「喰いに来た」

簡潔に述べ、アイスを見せる。

「美味かった」
「・・・・・・うん」
「他にも、色々だ。――だから・・・・・・」

アンクは、望みを果たしつつあるのに、自分が満たされない理由・・・・・自分の中に芽生えた本当の欲望を叶える為の一言を発する。

「この身体寄越せ」

混じりけの無い本音を言い放つ。

「・・・・・・え？」
「寄越せ」

比奈は理解するのにワンテンポ遅れこそしたが、それでも理解したのだ。
アンクの言葉は冗談や洒落でなく、本気であり真剣だと。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・ダメ。・・・・・・あげられない」

いくらアンクが本当に欲しがっていても、比奈にとっては代え難い肉親の身体だ。
はいそうですか、という訳には行かない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

アンクもこの返答を予想していたのか、ただ沈黙するばかり。
重くなるばかりの空気。

そこへ、

「おはよう」

知世子までもが登場してきた。

「ってアンクちゃん！うそヤダぁ久しぶり～。どうしたのよもう！心配してたんだから」

事情が知らないとはいえ、何時も通り知世子は明るく振舞うも、それだけで和やかになるほど、店内の空気は生易しくは無い。

「一人？映司くんは？今日はご飯食べてくわよね？」

食材をつめた袋をカウンターにおき、

「ていうか戻ってらっしゃいよぉ！屋根裏、あのまま空けてあるんだから、また映司くんと二人で、ね？」

と言った知世子に、アンクは至極冷徹な口調で、

「どっちかは戻ってくるかもな」

とだけ告げた。

そして、それ以上は何も口にすることなく、クスクシエから出て行った。

「え、どういうこと？ちょっと、アンクちゃん？」

知世子はアンクの言動に気に掛かるも、今のアンクが口を割るとも

思えず、ただその後ろ姿を見るばかり。

「――――――、」

だがそのアンクの言動の意味に、浅からず理解してしまった比奈は、床に倒れるように座り込んでしまう。

「ひ、比奈ちゃん？どうしたのよ？」

心配する知世子に構う暇もなく、比奈は泣いた。
用意された残酷な運命と、無力な自分の情けなさに。

＊＊＊＊＊

鋼雑貨店。
日常品を売り物にしているこの場所に、七実は戻ってきていた。
大して広くも無い売り場を歩いていき、草鞋を脱いで、店の奥にある鋼家の領域に帰ってきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

刃介と一緒に食事を共にした居間。
その食材を調理し、香しい匂いをたたせていた台所。
夜には布団を並べて一緒に眠った寝室。
お湯で身体の汗を流した風呂場。

次々と、見慣れたはずの我が家とさえ言える場所を、まるで初めて来たかのように、七実はじっくりとまじまじと、家の中を見て回った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

そして、我刀流道場。

刃介が初めてブライになった場所、刃介が初めてヤミーと合間見えた場所、刃介が自分を受け入れてくれた場所、刃介が自分に告白した場所。

「――――――――っ」

忘れることは出来ない、大切な想い出の場所。

本物だろうと偽者だろうと、バケモノ刀を愛してくれた人の・・・・・。

「あ」

気付いた時、七実は自分の頬に伝う感触に従って、指でなにかを拭き取った。

口に運ぶと、しょっぱい味のする一筋の涙を。

「本当に・・・・・・私は・・・・・・」

ここまで、変わってしまった。

そう言おうとしたが、口から出ることは無かった。

生きる事にも殺める事にも無感情で、自らが傷つく事にさえ気にしない冷徹な日本刀。

それが、鑢七実という存在だったはず。

それをコレほど変化せしめたのは、もはや偽者だからというだけではすまないだろう。

いや、そんなのは理由にすらならない。なぜなら此処に居る人形は、原典と寸分の狂い無くつくられたのだから。

ならばもう答えは一つ。

「刃介さん」

恋の暖かさ、愛の優しさを知ったから。

＊＊＊＊＊

「いかん、さっさとベルト見つけねぇと・・・・・・！ガメルも完全復活している今・・・・・・まずい、拙すぎるぞ！」

刃介は焦りを顕わにして懸命にドライバーを探す。

一方で映司はというと、後藤や比奈に言われた、自分のことも守る、という言葉を思い出しつつも

（ごめん、それはもうちょっと後で。この力は要るから・・・・・・・この力だけが止められる）

まるで呪いにでも憑かれたかのように、映司の歪な遺志は貫かれた

ままだった。

＊＊＊＊＊

――ズドン！！――

ガメルは街中に堂々と現れていた。
怯え、恐れ、逃げ惑う人々のことなどお構いなく、ガメルは目の前に居た男性に掴みかかる。
男性は怯えた表情のまま、

――ジャリン！――

身体をセルメダルの山に換えられ、哀れな最期を遂げさせられる。
だがガメルはそんなことは気にせず、セルの山に青い布を被せる。

『メズール、戻って』

布にウナギを乗せるも、当然なにか変化が起きる訳でもなく、

『ん？なんでかな？まだ、足りないのかな？』

ガメルは状況を理解しきれず、自分の憶測に従い、次々と逃げ遅れた人間をセルメダルにしていった。
だがそれは、ハッキリ言って悪戯にセルを増やすだけの愚行にすぎない。

その様子を高みの見物で眺めていたウヴァと白兵はというと。

「やはり幼稚でござるな、ガメルは。例えアレに宿るものがあっても、それは本当のメズールではないというのに」

「ああ。もう勝手にやってろしか言えんな。――俺は最後まで生き残らせてもらうだけだ」

＊＊＊＊＊

一方、竜王たちはいまだに刃介と映司の捜索にあたっていた。

だが、ここはまだ町の川沿いだ。とても映司らの今いる場所とは程遠い。

――ピピピピ！――

その時、後藤の懐にある携帯の着信音が。

「後藤だ」

『柏木西のビルにグリードです。バースの強化改修が終わったんで、コアと一緒に届けます。今どこですか？』

電話をかけてきたのは里中だった。

「西川浄水場だ。十四号ルートで向う」

『了解』

会話が終わり、通話も終了する。

「後藤よ。今の話はよもや・・・・・・」

「ガメルがビル街に現れたらしい。俺は新しいバースを受け取りに行く」

「そんじゃ、俺達の出番ってわけだな」

＊＊＊＊＊

片や、まだドライバーを探している映司と刃介。

海辺をかれこれ数十分も歩いているが一向に見つからない。

さらに、彼等のグリードとしての気配察知能力が、より面倒な事態を報せる。

「まずい、ガメルだ」

「虫の知らせが当たりやがった」

瞳を紫と金に変色させ、二人は自分等以外のグリードの波動をキャッチする。

より焦る二人だったが、その時になってやっと、

「「あった！」」

二人は嬉々として走った。

漣で常に濡れた、砂浜と浅瀬の境界というべきところに揃って流れ着いた二つのベルトへ。

だがしかし、

その二つのドライバーは、映司と刃介にそれを与えた者が拾い上げた。

「アンク」
「七実」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」

＊＊＊＊＊

後藤たちが十四号ルートと呼称するとある道路。
そこを並行するように、一台の自動車と一台のバイクが走っていた。
双方は、お互いに持っていたドライバーを投げて交換した。

投げられたベルトは自動車の助手席に、もう一方のベルトはバイクの駆り手の腰に巻かれる。
後藤の腰に巻かれた新たなベルトは、通常のバースドライバーと違い、色が銀から黒に変わり、グラップアクセラレーターの色も金から銀なっている。

「後藤さん、これを」

里中は仕上げに、全身装甲（フルプレート）が描かれた黒いコアメダルを一枚、後藤に投げ渡す。

「これが・・・・・。火野たちを探してくれ！」

「そのつもりです。届け物がありますので」

言葉の通り、里中の車の助手席には、ベルト以外にもう一つ、プレゼント用に包装された箱があった。

里中はその応対を皮切りに、里中は別の道へと曲がって行き、後藤はそのまま直進した。

――チャリン――

そして、受け取ったばかりの黒いメダル――アーマー・コアをバースロットに投入し、グラップアクセラレーターを捻ると、バックルのセルリアクターが解放される。

「変身！」

――パカッ――

その瞬間、ライドベンダーを疾走させる後藤の身体を青いフィールドが包み込む。

幾つモノリセプタクルオーブを起点とし、黒い装甲と緑のスーツが後藤の身体に展開されていくと、仕上げに頭部のUフラッシャーが赤い閃光を迸らせる。

再誕の名を冠する戦士、仮面ライダーリバースの誕生である！

＊＊＊＊＊

「「変身！」」

≪ＳＡＳＯＲＩ・ＫＡＮＩ・ＥＢＩ≫
≪ＳＡＫＡＮＩＢＩ・ＳＡＫＡＮＩＢＩ！≫

――パカッ――

竜王はクエス・サカニビコンボ、烈火はブレイズチェリオに変身。

「ガメル！無駄なことは止せ！」
『リュウギョク、邪魔するな！メズールが帰ってこない！』
「メズールは死んだんだ！貴様も見たはずだろ？」
『死んでない！絶対に戻る！』

ガメルはクエスの説得に一切応じず、二人に向って突進してくる。

「くっ、やはりダメか」
「倒すしかねぇってことかよ」

二人のライダーが覚悟を決めたその時、

――ブゥゥウウウウウン！！――

バイクの唸り声が轟いた。

「後藤！」

現れたリバースの姿に、ブレイズチェリオは歓喜の声を出した。

『バース？』

だがガメルはそんなのお構いなく、リバースの乗ったライドベンダーを力技で止めた。

ガメルに触れられたライドベンダーはたちどころに大量のセルメダルに還元させられる。

リバースはその直前に跳躍し、ガメルの背後を取った。

――ヴィンヴィンヴィンヴィンヴィンヴィンヴィン！！――

バースバスターを連射するも、バスター自体に強化は施されていない為、足止めすらしきれて居ない。

「だったらこうだ！」

≪ＣＯＲＥ　ＢＵＲＳＴ≫

リバースは手ぶらの状態でコアバーストを発動した。

すると、彼の両足にコアの力が送り込まれていき、

「ハッ！」

リバースは大きくジャンプした、丁度ガメルから見れば太陽と重なり合うようにして。

『うぅっ、眩しい・・・・・・』
「喰らえ！」
ガメルが勝手に怯んだうちに、リバースは右足によるキックを叩き付ける。
だがそれだけでは完全体――それも重厚なガメル身体に傷をつけられない。
そこでリバースは残った左足でガメルを蹴って再び空中へ！
「おぉおおお！！」
――ドゥガッ！！――
『ンアァァァ！！』
最初の一撃（キック）を行うと同時に再び空中へ舞い上がり、そして両脚による必殺キックを叩き込む。リバースの新必殺技、リバースリターンズ！
「おー、やるぅ！」
「よし、この機に乗じるぞ！」
リバースの善戦振りを見て、二人は加勢する為に駆けて行った。
しかし、
「先ほどのこととといい、多数対一は卑怯でござらぬか？」
そこへ三人に声をかけるものが一人居た。
「錆白兵・・・・・・」

クエスは低い声で名前を告げる。
ガメルを庇うような立ち位置で現れた、日傘をさした堕剣士の名を。

『あれ、ゼントウ？』
「ガメル。今回は助太刀するでござるよ」
『本当？』
「本当でござる。あくまで、この戦いだけでござるが」

白兵はそういうと、一枚のセルメダルを取り出し、投入口が出現した自分の額にチャリンといれると、瞬く間にゼントウの姿となり、身体から一体のヤミーを生み出した。
ワサワサと蠢く腕と足と、長く伸びた鋭い毒針が特徴的なサソリヤミーを。

『これで三対三でござる』

＊＊＊＊＊

トライブ財閥本社地下駐車場。

「じゃあ、私は刃介を探しにいくけど、戦いはそっちに任せたわよ」

ルナイトは映司にブラカワニの三枚を渡したときと同じく、首から下全てを覆い隠す黒いライダースーツとヘルメットをした姿で、ライドベンダーに跨っていた。

「承知しました。一度は途切れた契約ですが、紡ぎ直してくれるというのなら、今再び力を振るいましょう」

応対しているのは、同じくライドベンダーに跨り、焦茶色の忍び装束を着込み、奇妙なベルトを巻いた女。

「不忘（わすれず）――完遂したら、残ったもう一億お願いしますよ？大仕事には、報酬がつきものですからね」

「貴方らしい言葉ね」

そうして、二人の女は地下から地上へと向かっていった。

一人は探すため、一人は戦う為。

＊＊＊＊＊

所戻って海岸。

「それ返してよ」

「同感だな」

映司と刃介は、オーズとブライのベルトをもったアンクと七実を睨みながら言った。

「その前にお前に用がある」

「ガメルが暴れてるんだ、返せ！」
「おまけに白兵たちまで便乗してんだ！」

映司と刃介は待ちきれずに走り出す。
当然アンクと七実は、右腕や左腕から炎や妖気を放つ。

しかしそれはかき消された。
妖気は妖刀の右腕で、火炎は恐竜の左腕で。

鳥類の右腕と恐竜の左腕、妖魔の左腕と妖刀の右腕は、まるで鍔迫りあうようにぶつかった。

「お前、正気か？そこまでグリードに・・・・・・」
「身体は兎も角――正気だし、本気だよ。御陰でグリードのこともっとわかったから」
「ほう――で？」

アンクが質問した直後、

「電光石火！」
「鏡花水月っ」

刃介の手刀と七実の掌底がぶつかり、ドン！という鈍い音を立てるようにして衝撃波が発生する。
映司はその隙をついてオーズドライバーを奪還しようとしたが、さすがのアンクもバカではなく、とっさに反応して映司の腕をどかそうとする。
しかしなお食いついてくる映司に、アンクはそのままオーズドライバーを向こう側に投げ、映司の横へと力一杯投げた。可能な限り、ベルトから離すようにして。

「火野！」
「隙ありです」
――ドスッ――
「グァ・・・・・・！」
文字通り一瞬の隙をついた貫手が、刃介の腹に突き刺さった。
「な、め、るなァァ！！」
――ブン！――
「きゃッ」
刃介は七実が腹から腕を引き抜く前に、その血濡れた貫手を掴み、無理矢理にブン投げた。
その際に、七実の手からブライドライバーが離れ、オーズドライバーから２ｍほど離れた場所に落っこちる。
「七実。前々からずっと言っていたが、俺はお前に惚れてるし、俺にはお前が必要なんだ。だから、ちっとやそっとの理由で、手放すわけにはいかねぇ！」
「はぁ・・・・・貴方はそういうことには何時も本音で語る。だからこそ、こっちまで本音で喋りたくなってしまいますよ」
刃介と七実は相対しつつ、その果てしない緊張感で空気をピリピリさせる。
そんな中で映司は、

「アンク、俺は・・・・・コアメダルを砕く！――これ以上誰も、完全復活も暴走もしないように！――信吾さんをメダルの器になんかさせない！」

「思ったとおり、お前の言いそうなことだ。――だから俺も決めてきた。俺が必要なモノのために、邪魔なお前を潰す」

立ち上がる映司に、アンクは火炎を放ち、映司がそれを左腕で防いだ隙にアンクは跳躍して映司の背後に回りこむ。

アンクは映司の身体に拳やけりをいれ、浅瀬へと叩き込んだ。

だが映司もやられっぱなしではない。追撃してきたアンクを掴んで、逆に引きずり込んでマウントポジションをとる。

刃介と七実はというと、刃介が一方的に七実へ突っかかっていき、そのまま掴み合った体勢のまま浅瀬へと足が漬かって行き、そして隙を着いて七実が刃介を押し倒して馬乗りになる状態となっている。

「お前が欲しいものってなんだ？・・・人間か・・・？」

「もっと単純だ！世界を確かに味わえるもの――命だ！！」

「何故貴方はそうも戦いたがるんですか？貴方の願いはとうに叶っていた筈なのに」

「確かに俺は力を得た。だが、これだけじゃダメだ！もっと強い力が要る！」

アンクと刃介は、映司を蹴り飛ばしたり七実を突き飛ばして距離をとった。

「グリードは生きてさえいない。タダの物だ。そのくせ、欲望だけは人間以上ときてる。――喰っても寝ても触っても、絶対満たされない欲望・・・・・・！」

九枚という、欠けた数字によって此の世に現出したグリード。
その運命はある意味、変え難いものであり、耐え難いものでもあった。

「お前にはわかるまい。希望を失い、理想を失い、タダ孤独に欲望しか膨らませられなかった俺の、空虚だった時間がどれほど惨くて苦痛だったか」

刃介にとって、十歳から十五歳までの五年間、二十歳から現在に到るまでのもう五年間。
合わせて十年間は、刃介にとって本当に何も無い、灰塵の一掴みもないものだった。

「それがどれ程のことかは・・・・・・！」
「わかるよ。ていうかわかった。――それでもやる」
「自分はグリードになったからか」
「ああ」

映司は簡潔に答え、叫びながらアンクに殴りかかり、殴り返される。

「感情を空にせにゃやってられん程に、退屈で死にそうなくらい、俺には何も無かった！」
「確かに私にはわかりませんよ。だけど、そんなだから、私は今ここにいるんです」
「俺のためにって奴か？」
「ええ」

七実も簡潔に答え、意を決して刃介に平手を打り、同じように平手を打たれた。

「何がわかっただ映司！お前は何もわかってない！グリードなのに、何も欲しくない顔してんだ。調子乗んなよ！！」
「じゃあ七実、俺のためって何なんだ！？俺はグリードであり人間だ。何時までも悠長に待ってやってると思うな！！」
アンクと刃介はこのうえない激昂をさらす。
「お前は欲しがりすぎなんだよ！！命が欲しいなら、人の命も大切にしろ！！」
「知るか！！お前も何か欲しいと思ってみろ！そうすればわかる！お前、何か欲しいと思ったことあんのか！？」
映司とアンクは互いに殴り合い、言葉はどんどん激化していく。
「テメェには判らない。生まれた時から既に最強無敵のお前には、こんな俺のことなんざ！！」
「なら今直ぐ全てお話します！そうでないと、貴方は何時までたっても口に出さない！」
七実も声を荒げながら、目の前の男をまた突き飛ばした。
アンクと七実は、映司と刃介に馬乗りになって胸倉を掴み、
「あんのか映司！？」
アンクは映司の欲望を問い質し、
「貴方の今は、かつて望んだ満ち足りたモノの筈なのに、どうしてそうも戦いの力に拘るんですか！？惚れたと言うのなら、もっと私

のことだけを見てくださいよ！」

七実は己がキャラ全てを覆すような大きな声で、涙とも海水ともとれるものを頬に伝わせる。

「俺は・・・・・俺は欲しかった。――欲しかったはずなのに・・・・・諦めて蓋して、目の前のことだけを――――！どんなに遠くても届く俺の腕、力ッ！もっと、もっと！・・・・・・もう、叶ってた。お前から貰ってたんだ」

映司は目の前の女の子さえも助けられない自分の無力さを知って、無欲になると同時に何者よりも渇望していた。例えどんなに酷い状況だろうと、どんな人物にだろうと、どんな場所にだろうと、確実に差し伸べることが出来る救いの手を。

「あぁそうだよ、俺はずっと欲しかった。あんなクソつまらん平凡より、仲間と一緒に派手なバカ騒ぎやったり、惚れた女と一緒に暮らしてガキつくって、そんな凄まじく満ち足りた日常が欲しくて堪らなかった！――七実、お前は俺に力だけでなく、欲しかったモノ全部を、初めて出会った瞬間にくれたんだ！――そして、一度味わった以上もう二度と手放したくない！お前という最高の女も、最高に面白ェ人生も！だから俺は更に欲しくなった・・・・・この手にあるモノ全てを絶対に守れる、神をも殺せる力が！！」

四季崎の仕組んだ運命によって、奇しくも鋼刃介は今の鋼刃介としてここにいる。

だがその代償に、彼は人の身を失い、平凡な幸せを失い、理想さえも失ってきた。

だからこそ、最後に残ったものだけは何が何でも貫き通さなくては成らない。

「「そういえば、一度も言ってなかった」」

映司と刃介は、急に穏やかな顔つきと口調になると、長らく自分に連れ添ってくれた相方に向けて、たった一言だけの純粋な想いを告げた。

「「七実（アンク）・・・・・・ありがとう」」

＊＊＊＊＊

片や、リバースたちとガメルらは。

戦いの場はビル街からスポーツスタジアムの周辺に移っていた。

『お前らのことも嫌いだ！俺の邪魔ばっかりするな！』

怒りを顕わにするガメル。

≪ＣＡＴＥＲＰＩＬＬＡ　ＬＥＧ≫

≪ＤＲＩＬＬ　ＡＲＭ≫

≪ＳＨＯＶＥＬ　ＡＲＭ≫

「おおおおおおおおお！！」

リバースは両腕と両脚にユニットを装着し、真っ向からガメルに突貫していく。

『ンンンンン・・・・・・！！』
「おおおおお・・・・・・・！！」

リバースとガメルは互いの武器と豪腕をぶつけあい、互角極まる勝負を演じている。

≪ＣＥＬＬ　ＢＵＲＳＴ≫

ブレイズチェリオは忍刀『鎖』に六枚のセルを投入・解放し、両手で深く構えると、

「オンドリァァアアア！！」

全力で振り下ろし忍刀両断をサソリヤミーの頭にぶつけんとする。
だが、ガギという音がして、必殺の刃がピタリと止まった。

『危ない』

たった一言だけ、サソリヤミーは呟く。
その頭から、野太く鋭い毒針の尻尾を伸ばし、忍刀の一撃を防ぎながら。

「ヘッ、上等だぜ！」

ブレイズチェリオはサソリヤミーの実力を見て、より闘志を燃やす。

「流水剣！」

クエスは両腕のカニシザースを双剣代わりとして振るい、その刃を

ゼントウに向けて切り裂かんとしている。
今となっては竜王しか使い手のいない失われた真庭剣法・流水剣。
今回は邀撃の小流の型をとばし、初っ端から猛攻の激流の型で攻めていく。

しかしながら。

『刃取り』

ゼントウはそれら全ての斬撃を受けきった。
無論、刀身ではない。薄刀はその名の通り、針の如く薄く脆く弱い。
なら何処で受け太刀をしたかといえば、それはもう一つしかない――
――鍔だ。

「やはり、簡単には勝ちを取らせてはくれぬようだな」
『当たり前でござろう』

ライダーとグリードは、互いに距離をとり、何時でも攻め込めるよう身構える。
そんな時に、

――ヴィンヴィンヴィン!!――
――ヒュンヒュンヒュン!!――

「後藤ちゃん！見ない間にカッコ良くなったじゃん！」
「それはさておき、私たちの出番は残っているでしょうか？」

バースバスターの弾丸と手裏剣、そして二人の男女の声が場の空気を掻き乱す。

片方は背が高く、服の上からでもわかる筋肉質で、年齢は３０代ほどの男、伊達明。
片方は焦茶色の忍び装束を着込み、顔も額金と、襟巻と一体化した覆面で隠し、年齢は二十代ほどの女、鋼金女。

「伊達さん！？」
「金女かっ！？」

思わぬ助っ人の登場に、驚きを禁じ得ない。
伊達と金女はしてやったりと言ったに笑うと、プロトバースドライバーと通常版チェリオドライバーを手に持つ。

「伊達明、リターン・・・・・・！」
「ここからは、不忍（しのばず）です」

ベルトを腰に装着する。

『何だお前ら？』
『ほう。これはまた・・・・・・』

長らく戦場から離れていた二人のことをガメルは半ば忘れていたが、ゼントウは感心するように記憶を思い出す。

「「変身」」

セルメダルをスロットに投入し、グラップアクセラレーターを捻り、二人の姿は転送される分厚い装甲に包まれる。

伊達が変身するのは、正規のバースと同等の姿でありながら、リセプタクルオーブの周囲にデータ収集用の赤いマーカーが施され、U

フラッシャーを緑に閃かせた仮面ライダープロトバース。
金女が変身するのは、黒い装甲に銀色のスーツで身を包み、頭部の額金型のバイザーを青く光らせたくノ一、仮面ライダーチェリオ。

「伊達さん・・・・・・大丈夫なんですか？」
「金女・・・・・・傷はもう良いんだよな？」

リバースとブレイズチェリオがそう訊ねると

「Ｙｅｓ！！」
「不言（いわず）もがな」

プロトバースはサムズアップ、ブレイズチェリオはピースで答える。

『敵勢増援』

この様子を見て、またサソリヤミーが呟いた。

「さあ行くよ後藤ちゃん！」
「無茶しないでくださいよ！」
「勝ちますよ烈火くん！」
「応よ！先輩！」
「悪いな白兵。この勝負、私たちが制する！」

＊＊＊＊＊

場面は一旦海岸へ戻る。
そこでは今も尚、刃介と七実、映司とアンクが本音と身体をぶつけあっていた。
そんな彼らの様子を一望できる高所に、二人の男が現れた。

「「――――」」

それは真木と四季崎だった。
真木は右腕をグリード化させ、体内にあるトリケラのメダルを一枚出して映司に向けて放り投げる。
四季崎も袖から二枚のフォース・コアを手に取り、刃介目掛けて投げ放った。

「「うおぁ!?」」

当然コアメダルは見事二人の身体に入り込む。

「「ぐゥッ、うおあああああ!!」」

侵入してきた異物によって体内のパワーバランスを崩され、二人は大きく苦しむ。

「じ、刃介さ――ガシッ!ブンッ!――きゃあッ!」

七実は刃介に身体を掴まれると、そのまま力任せに海のほうへ投げ飛ばされてしまい、大きな水飛沫を立てる。

映司も左手でアンクの『右腕』を掴み、

――ギィッ!――

紫色の『左腕』で、殴るように何かを掠め取っていった。
その手には、タカ・コアが握られていた。

「「――――――ッ」」

瞳を虹と紫に変色させ、正気を失っている二人を、アンクと七実は信じられないものを見る目で、高所でこちらを見下ろす真木と四季崎を発見し、睨みつける。

＊＊＊＊＊

そして、五対三の戦いが繰り広げられているこの場所では。

「くッ、このままではジリ貧だな」
「じゃあ、ここは一発、デカいの決めようぜ！」
「うーん、あんま感心できねぇけど、やるしかねぇな！」

クエスが苦い声を漏らすと、ブレイズチェリオが捨て身の戦法を提案し、それにプロトバースが渋りながらも乗ってくる。

「また病院に戻ることになるかもしれませんよ？」
「大丈夫ですよ後藤さん。私も伊達さんも、そんな柔じゃありません」

リバースの案ずる声を、チェリオが宥める。

そして、四人はセルメダルを投入。

≪≪ＢＲＥＡＳＴ　ＣＡＮＮＯＮ≫≫
≪ＥＮＴＯＵ・ＪＵＵ≫
≪ＧＥＫＩＴＯＵ・ＫＵＲＯＧＡＮＥ≫

プロトバースとリバースはブレストキャノン、チェリオは炎刀『銃』、ブレイズチェリオは撃刀『鉄』を装備。

≪≪ＣＯＲＥ　ＢＵＲＳＴ≫≫
≪≪ＣＥＬＬ　ＢＵＲＳＴ≫≫
≪≪ＣＯＲＥ　ＢＵＲＳＴ≫≫
≪≪ＣＥＬＬ　ＢＵＲＳＴ≫≫
≪≪ＣＯＲＥ　ＢＵＲＳＴ≫≫
≪≪ＣＥＬＬ　ＢＵＲＳＴ≫≫

さらには繰り返してメダルの力を解放していく。

「充填完了！」

準備は整った。あとは、

『ンンンオオオオオオ！！』
『シェェアアアアア！！』

こちらに突撃してくる二体の異形を充分に引き付けて、

「「シュートッ！！」」
「砲撃刀火っ！！」
「獄炎刀砲ぉ！！」

――ドグァアアアアアアア！！！！――

ダブルブレストキャノンシュートはガメルに、砲撃刀火と獄炎砲はサソリヤミーに直撃した。

「「「「うあああああああ！！」」」」

「ん・・・・・・っ」

だが至近距離で撃ったせいか、爆発によって四人は後方へ吹き飛ばされ、その後ろに居たクエスも踏ん張るのが精一杯だった。

「やったか？」

とプロトバースが確認を取ると、爆炎の向こうには未だにガメルが悠然と立っていた。

それからサソリヤミーの姿は無く、代わりにセルメダルの山がある。

しかしこれだけの成果では、とてもあのリスクの応酬としては物足りない。

ついでにいうと、肝心のゼントウはそもそも突撃すらしていないため、ガメルの後ろで悠々とこちらを見物している。

「く、ダメか」

「丈夫すぎるっしょ・・・・・・」

『お前らな――ウっ、アっ』

ガメルはなおもライダー達に向っていこうとしたが、そこで遂にガタがきた。

『あれ？なんで・・・・・・！？』

ガメルの異変の理由。
それは言うまでも無く、デシレに封刀呪縛で動きを止められ、紫（ギル）の一撃を食らわされたあの時だ。
その虚無の力により、サイ・コアとゴリラ・コアにヒビが入ってしまったのだ。

（終わりでござるな）

ゼントウは薄刀『針』を納刀する。
当のガメルは、今の一撃でコアのダメージが臨界点に達し、遂には人間形態になるまで弱体化してしまう。

「あ・・・・・・ぁあ・・・・・・う」

立つ力さえも消え失せ、彼の命はもう一分ともたない事が一目瞭然である。
そんなガメルが目にするのは、自分の手から落ちたウナギ・コア。

「メズール・・・・・・」

ガメルはズボンのポケットに手を伸ばし、

「――これ、あげるぅ・・・・・・」

一本のキャンディを、ただの物であるコアメダルに差し出したのだ。

”ありがとう”

その瞬間、今際の際にガメルは見て聞いた。

記憶から織り成される完全なる幻聴であろうとも、彼の眼と耳には、優しいメズールの姿と声があった。

――ジャリン！――

――パリン、パリン！――

ガメルの身体はただの物であるセルに分解され、その中からサイとゴリラのメダルが一枚ずつ砕け散った。

人間組の四人はそれを見てベルトからメダルをぬき、変身を解く。

「やりましたね」

「ああ」

「一時はどうなるかと思ったぜ」

「兎も角、今はコアを――って！」

四人が気を抜いた隙をつくように、プテラカンが飛んできてガメルのコアメダルを回収して行く。

「させん！」

唯一警戒と変身を解かないでいたクエスはプテラカンを破壊するべく、頭からサソリニードルを何本か飛ばした。

『それはこっちの台詞でござる』

――チャリ――

だが、その攻撃は全て落とされた。

ゼントウの放った居あい抜き、一揆刀銭によって。

『こう言っては悪いと思うでござるが、今のおぬしで拙者に勝つのは無理でござる』
「なに？」
『今おぬしが持っている九枚は、元々拙者のコアであり、その特性は重々承知している。この場で戦っても勝敗は見えているでござろう』
「・・・・・・・・・・・・・」

クエスは口を閉じた。
彼女自身、確かに今のクエスの力には多少なにかが不足してきていることに気付いている。
おまけにそのメダルの提供元に勝てると思うほど、彼女は自信家ではない。
忍者とは自他を過小することも過大することもなく行動することが最善なのだから。

『判ってもらえたのなら、拙者はこれにて失礼する。――爆縮地』

シュンという風きり音を残して、ゼントウはガメルのコア7枚とウナギを持って消えていった。

＊＊＊＊＊

「四季崎、真木ぃ！お前どういうつもりだ！」
「何故こんな無用な手出しを？」

海岸の漣の音さえももみ消すようなアンクの声と、逆に波の音に混ざってしまいそうな七実の声。
だがその隙に映司と刃介は走り、砂浜に落ちているドライバーを拾い上げて装着した。
今尚その瞳を狂気に染めたまま、二人の周囲を三枚のコアメダルが舞い、勝手にバックルへと収まった。そしてスキャナーも自動的に動き出す。

≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＥＮＢＡ≫
≪ＴＡＫＡ・ＴＯＲＡ・ＢＡＴＴＡ≫
≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！ＲＩＯＴＥ！ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！≫
≪ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！ＴＡＴＯＢＡ！ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！≫

そうしてオーズ・タトバコンボとブライ・リオテコンボが顕現する。
尤も、オーズのタカアイは紫、ブライのリュウアイは虹に変色した、暴走状態ではあるが。

「映司・・・・・・」
「刃介、さん・・・・・・」

相方の変わり様に、アンクと七実はそれ以上言葉が出なかった。

「「うぅぅ――あああああああ！！」」

オーズとブライは獣のように跳び、アンクと七実に襲い掛かった。
最早その動きには正気も理性も一切感じられない。

そんな二人に、

「「――――――――」」

真木はプテラのメダルを一枚、四季崎はフォース・コアを三枚をさっきと同じように投げたのだ。
メダルはそのまま無防備に等しいオーズとブライに入り込んだ。

「「うおッ！？」」

コアの更なる投入によって、二人は限界を向かえ、変身が解けた。

「「うぁぁあああああ！！うぉおおあああああああ！！」」

二人は悲惨な叫び声を上げながら、その全身を禍々しい光に呑まれていき、そして――。

『『ン――――――ッ』』

完全にグリードと化した。
刃介（ガトウ）の場合は、口が完璧に開かれて内部の歯牙（ヤイバ）が剥き出しになった上、身体を彩るラインが虹色に変化している。

そして映司は、真木（ギル）のそれと似通ってはいるが、体色は暗紫色で頭部の色も髑髏のように白く、肩部分には特徴なマントは無く、毒々しいヒレがついている。

「あ――――！」
「・・・・・・ッ」

暴走した二人の変わり果てた姿に、アンクと七実はずぶ濡れの身体を起こして相対する。
勿論ここまで手が付けられなくなった二人に対抗して、

「うおおおおおおおお！！！！」
「はぁ――――――！！」

全身をグリード態に変貌させる。
多数のコアメダルやフォース・コアを取り込んだことにより、必然的に完全体と同じ姿になって。

アンクの場合は、今まで不完全（セルメン）だった右側頭部が復活して、金髪状の羽飾りがつけられている。
キョトウの場合は、背中に生えている一対（にまい）の翼が、三対（ろくまい）となってより幻想的な存在となっている。

『『ゥオオ！！』』
『『フッ・・・・・・！！』』

そして戦いが始まった。
いや、それは戦いという言葉で形容するべきかさえわからなかった。
擬音を使うことさえ戸惑うような、絵画や神話でしか拝めそうに無い光景。

ガトウの右腕とと映司（グリード）の左腕から放射される金と青の波動、キョトウの左腕とアンクの右腕から放射される紫と赤の波動。
それらがぶつかり合い、凄まじい爆発を止め処も無く起こしている。

これから起こる最大の試練を予感させるように、運命の神様は彼等の欲望に狂乱と混沌を――――。

映司グリードと重量王と七実の願い（後書き）

次回、仮面ライダーブライ！

神への進化と満足と昆虫王

神への進化と満足と昆虫王（前書き）

累計アクセス数が遂に２０００００を突破！
最終話に向けて、ラストスパートです！

神への進化と満足と昆虫王

とある海岸で、四体の怪物が争っていた。
片や金色の右手と紫の左手から、片や血錆の左手と赤い右手から。
双方は欲望の波動を放出しあい、ぶつけ合い、あたり一面はエネルギーの激突による爆発に見舞われている。
だが何時までもこの状況では埒が明かない。
それゆえに、双方は波動の放出をやめ、己が肉体を闘ぎ合わせる。

『映司のやつ、完全に暴走してんのか!?』
『間違いありません。現に、刃介さんまで・・・・・・』

赤い鳥の異形・アンクと、血錆と紫の妖魔龍・キョトウは、今自分たちに掴みかかっている二人の状態に、深い憤りを覚えた。

『『ヴォォ!!』』

金色の刀の異形・ガトウと、紫の恐竜の異形・映司（グリード）は、短く叫ぶと同時にアンクとキョトウに廻し蹴りをして浅瀬に吹っ飛ばすと、当然のようにしつこく追撃してくる。

『真木!なんで映司にメダル入れた!?紫のメダルが欲しいんじゃないのか!?』
『四季崎・・・・・・なぜ無粋な真似を!?彼を完全なモノにする筈では!?』

アンクとキョトウは、高台からこちらを監察している、人形を腕に乗せた黒衣の男・真木と、編み笠を被った和装の男・四季崎に睨んで糾弾するように問う。

「火野くんがどうしても渡してくれないんですよ。いっそ暴走させてしまえば抵抗しなくなるかと思いまして」
「案ずるなって。刃介（ソイツ）はその程度じゃ壊れはしねぇ。こいつは一種の強度試験と思ってくれないか」
と、二人が悠々と語っている間にも、
『『ヴぁあああああああああああ！！！！』』
二体のグリードが狂乱の咆哮を喚き散らしている。
だがその心中にて、二人はかつての記憶と共に思い起こしていた。
映司はかつて失った欲望・・・・・・どんな場所にも届き、誰かを救える腕、力が欲しかったことを。
そしてその欲望は、今が最高潮と言わんばかりに滾っていることを。
刃介は再認識した強靭な我欲・・・・・・己が望んだ暖かなもの全てを手に入れ、それを望むがままに守り通せる、神さえも殺せる力が欲しくて堪らなかったことを。
（（力を・・・・・・！！））
そして、
『ううううう・・・・・・！！』
『おおおおお・・・・・・！！』
映司（グリード）とガトウの身体から、三枚の紫が飛び出してくる。
コアメダルは二人の腹部に納まると、

「あああああああああ！！」

映司（グリード）が全ての変身の手順を省略し、周囲の海水を凍らせて直接プトティラコンボへと変身してみせたのだ。

「おおおおおおおおお！！」

≪ＲＹＵ・ＷＡ・ＤＲＡＧＯＮ　ＫＮＩＧＨＴ！≫

ガトウは自らと違う属性のコアで変身する所為か、コンボソングが歌われる中で、凄まじいオーラを発しながらリュワドラコンボに変身した。

「「・・・・・・・・・・・・ッッ！！」」

二人はそれぞれ、大地よりメダガブリュー、空間よりメダグラムを引っ張り出し、獣のように突貫していく。

一方は火炎と冷気という相反する属性で、もう一方は龍種と龍種という同属性での戦い。

勝負はハッキリ言って未だ動揺を隠し切れないアンクとキョトウのほうが若干押され気味だ。

しかし、

「アンクくん。倒すならさっさとしてください」

『引っ込んでろ！！お前に言われるまでも無い！』

真木は空気をぶち壊すように言い放ち、それにアンクがキレ気味に応えた。

「そんで、どうするんだ虚刀？」
『黙っていてください。私の遣り方で解決します』
四季崎の問いかけに、キョトウは若干はぐらかすように応えるも、
『こいつらを倒す・・・・・・命を手に入れるために』
『叶える・・・・・・今まで以上に、もっと、幸せを』
次に己の欲望を口にして、こちらに突っ込んでくるオーズとブライに、アンクとキョトウはそれぞれ腕を構える。
右手と左手には、赤々とした火炎球弾と禍々しい妖気の塊がある。
二人はそれを真正面からオーズとブライに向けて飛ばそうとした、
その瞬間、
”ありがとう”
ついさっき言われた、あの一言が脳裏をよぎる。
そしてそれが元になって、
――ドゥウウウゥゥウゥゥウン！！！――
二つの球体は、オーズとブライのすぐ横を霞めて行き、後ろの岩を粉砕した。
「「――――ッ！」」
これには二人の狂戦士も注意を後ろにむけたが、それも時間稼ぎにもならない程度のことにすぎない。

今再び、紫の獣と相対する二体の異形は、

『なんで・・・・・なんでだ!?』

『やはり、私は・・・・・・・』

アンクとキョトウは、困惑しながらオーズとブライに突っ込んでいく。

その困惑は次第にやり場の無い怒りに変わり、武器の有無に関係なく、狂戦士を圧倒する。

『なにがありがとうだ!?』

『今更、そんなことを・・・・・・!』

二人は思い出す。

初めて映司や刃介と出逢った日のこと、『力』を与えた時の事を。

”お前から貰ってたんだ”

『ああ、渡すんじゃなかった!』

”初めて出会った瞬間にくれたんだ!”

『こんな事になるとわかっていれば・・・・・・』

”刑事さんも、そいつも、朝からの長い付き合いだから”

『こんな奴に・・・・・こんな・・・・・・』

”俺はお前に惚れているからな。だから俺は、お前が欲しい”

『全てを隠して・・・・・・平和に、暖かな・・・・・・・』

”お前のメダルじゃない。――あいつのだ！！”

言葉で誤魔化すたびに、二人の記憶から引き出される相方の台詞。

「「ヴゥゥオオオオ！！」」

今ある現実において、求める力に呑まれ暴れ回る姿。

『映司・・・・・・』

『刃介さん・・・・・・』

『『力が欲しいなら、こんな程度で暴走してんな（ないで）！！』』

己自身と相方――双方のふがいなさに憤怒した二人の拳は、

――ズンッ・・・・・・！！――

紛れも無くオーズとブライの胸に突き立てられ、二人を砂浜に吹っ飛ばした。

その際、オーズから紫以外の全ての所有コアが飛び出してしまい、アンクはその内の一枚、キョトウはその内の三枚を掴むと同時に人間態に戻る。

「――アン、ク・・・・・・」

「な、なみ・・・・・・――」

変身がとけ、生身で砂浜に転がる映司と刃介。
その二人の姿を、右手でタカ、左手でブラカワニのメダルを持ったアンクと七実は、

「――このバカが」
「はぁ、全く――」

二人はずぶ濡れの身体に鞭を打つように、目の前で転がる相方二人に、侮蔑と呆れの言葉をおくる。
そこへ、真木と四季崎がこちらに歩み寄ってくると、

「――」
「うッ・・・・・・！」

真木が今再び、映司の紫を呼び込もうとしている。

「まだ抵抗するんですか？」

真木は無感情なまま、砂浜に落ちたコアのうち、ラトラーターの三枚とバッタを拾う。

「火野くん。本当に後戻りできなくなりますよ」
「それでも・・・・・・これは、要るから・・・・・・」

映司は砂浜に倒れながらも、断固としてメダルを譲ろうとしない。

「よく言ったぜ、火野。こんな、臆病眼鏡にくれてやるモノなんざ・・・・・・蹴りや拳で充分だ」

と、今度は刃介が体力を振り絞り、立ち上がりながら肯定した。

「――アンクくん。やはり火野くんは消してしまいましょう」

真木はそうアンクに告げた。

「虚刀『鑢』。さっさと我刀『鋼』を運ぶぞ、俺の屋敷に」

四季崎は一方的な意見を七実に叩きつける。

「「君達（オマエら）の欲しいモノの為に」」

そして、

「「・・・・・・・・・・・・・」」

その一言で、アンクと七実は、映司と刃介に近寄っていく。

「アンク・・・・・・」

「おい」

「忘れてた・・・・・・」

「あ？」

映司は倒れたままアンクの顔を近くで見て、急に何かを思い出したかのようニ、懐に手を入れて、

「一年分の、アイス・・・・・・」

それは、以前にも四人のグリード（実質的にカザリと真木）によって大半のコアを奪われ、映司とアンクが大喧嘩をした際、映司が提案した再協力の条件であった。

「・・・・・今日の分・・・・・・・」

懐から明日のパンツに包んである小銭を渡そうと、手を伸ばす映司。

「火野、オメェ・・・・・・・」

そんな映司の姿に、刃介は何ともいえない感情を抱きだす。

「では火野くん。・・・・・・良き終わりを」

そこへまたも無粋にはいってくるのは、右腕をグリード化させている真木。

「ッ！」

それに対抗して刃介も両腕をグリード化させる。

だがそれは無意味に終わった。

アンクの『右腕』が、真木の右腕を掴み、映司を庇うようにしているのだから。

「なんのつもりですか？」

「さあ？俺もなんのつもりなんだか？」

「放しなさい・・・・・・！」

「そのつもりは無い！」

その強い反発の意志は、アンクの『右腕』に炎となって灯り、真木の右腕を振り払う。

結果、仰け反らされた真木の腕の人形に、炎が移ってしまった。

真木はその火を見て、思い出してはならない記憶を呼び起こす。

結婚が決まった途端、自分を邪険に扱った実の姉を、結婚式前夜において・・・・・・眠っている隙に寝室へ放火を行って焼き殺した――トラウマというものを。

「ぅお、おおおおおお！！？」

真木はパニック状態となって火のついた人形を海へと放り投げた。

まあやってることは余人からすれば正しい。しかし投げた本人はというと、

「ダメだからぁぁ！！投げちゃダメだからァッ！！――無いよ！！無いよ！！」

「やっぱ、あいつ人形が絡むとただのボケになるな」

海に入って必死こいて人形を探す真木に、四季崎は溜息交じりで嘆息する。

「アン、ク・・・・・・・・――」

「・・・・・・・・・・・・」

映司は名前を言って気絶し、アンクは何も言わずに立ち去って行こうとする。

「戻って来い、七実・・・・・・・！」

「刃介さん・・・・・・」

身体はボロボロだが、いまだ眼光に鋭い欲望を秘めた刃介に迫られる七実。

そこにも下種な感情は欠片もなく、ただ純粋に七実と共にいたという欲望だけがある。

「悪いが我刀、それは後回しだ」

――ガッ！――

「ぐぉッ！」

四季崎は、刃介の鳩尾に光弾をぶつけ、無理矢理に意識を毟り取る。

「刃介・・・さん・・・」

七実は倒れる刃介の身体を抱きとめる。

「四季崎・・・・・・なんの為に？」

「何の為にって、屋敷へ運ぶ為だ。それに、迎えも来てるようだしな」

指指された方向には、自動車とバイクから降りてコッチへ向ってくる里中とルナイトの姿が見えた。

＊＊＊＊＊

「里中が火野を見つけて、財団で保護したそうです」

街中で後藤達は、スマートフォンに送られた情報に安堵する。

「兄さんはどうなったんです？」

だが、それは映司についての安堵だけだ。

「それが・・・・・シルフィード会長と、鑢と、四季崎が・・・・・鋼を四季崎の屋敷に連れて行ったらしい。何か相当重要なことがあるらしいんだが」

金女に問われた後藤は、詰まり気はあるものの、素直に応えた。

「そっか。まずは一安心、ってわけにもいかねぇか。ったく、俺が日本離れてる間にそこまで状況悪くなってるとはねぇ」

「黙っててすいません。治療に専念してほしくて・・・・・」

後藤はそうして伊達に謝り、メダルリュックを背負うと、伊達は後藤の背中を叩き、

「サンキュー」

とだけ言った。

「だけどよ、これからどうするんだ？世界の終末を防ぐってとこまでは判るんだがよ」

「まずは火野と合流して、あ奴のガードをこっちで固めるとしよう」

「そうすれば、真木博士も手出しし難くなると言う訳ですか」

烈火、竜王、金女はこれからのことを相談しあう。

「刃介のことは一旦後回しだ。四季崎はあいつを殺すつもりはないだろうしな。向こうは今、鑢らに任せて、私たちは火野の方に集中しよう。でなければ、この世は暴走した欲望（グリード）によって喰らい尽されるぞ」

竜王は目付きを厳しくしながら、起こりうる最悪の結末を提示した。

「話によると、けっこうな数のコアが真木博士に渡ったと聞いてますが、まだ足りてないんですよね。紫のそれが」

「そいつを火野から手に入れる前後に、世界の終末を始める気なのかもしんねぇな」

金女と烈火もほぼ事実に等しい未来を予測する。

「一度、財団に戻ろう」

後藤は話を全て纏めるべく、みんなにそういって本社目指して走り出す。

「すっかり逞しく成っちゃって。・・・・・お父さん嬉しい！」

「不解（わからず）――気持ちは判らなくもありませんが、なんかムカツクので止めて下さい」

父親気取りをする伊達に、ちゃっかり毒入りのツッコミをしておく金女であった。

そして、一同が全員立ち去ったとき、草の茂みからコソコソと現れたのは、

「完全復活まであと一枚」

「拙者は三枚でござるな」

ウヴァと白兵だった。

＊＊＊＊＊

クスクシエ。

今その店内は、比奈と知世子だけしかいなかった。

「そう。映司くんとアンクちゃん、鋼さんと七実ちゃん、それに比奈ちゃんのお兄さんも、そんな大変なことに・・・・・・」

比奈は遂に全てを話したのだ。

隠していた戦いのこと、オーメダルとグリードのこと、映司とアンクと信吾の関係、今の映司の状況などなど、比喩表現ではなく文字通り全てをだ。

「やっぱり、すぐには信じられないですよね・・・・・・」

「――――ううん。世界には不思議なことなんて一杯あるもの。メダルのお化けを信じるくらい屁でもないわよ」

と、明るく状況を飲み込んで見せる知世子。

「信じられないのは、比奈ちゃんのほう」

「え？」

「アンクちゃんか、お兄ちゃんか、どっちかに決めなきゃとか――映司くんとアンクちゃん、どっちかが戻ってくるなんて、そんなの

認めちゃダメよぉ！」

知世子は店に置いてある置物の人形を手にとってそういった。

「でも、何もかも都合よくなんて、勝手なこと言っても・・・・・・実際に戦ってる映司くん達が辛いだけです」

「うーん・・・・・正しいのかもしれないけど・・・・・・でもそんなの詰まんない。もっと欲張って良いじゃない！」

「知世子さん・・・・・・」

「映司くんも、アンクちゃんも、お兄さんも！って――ちゃんと欲張れるのは比奈ちゃんだけよ」

「ちゃんと、欲張る・・・・・・」

何の力も、何の知識も無い一般人に過ぎない知世子。

だが彼女は彼女なりに、一度か二度は世界を旅行して廻った経験がある。

その人生観は、同じように無力な常人である比奈の心に、何か尊いものを齎す貴重なアドバイスとなった。

＊＊＊＊＊

そんな頃で、アンクはどこぞの雑木林にいた。

孤独を味わっているのか、ただ一人で考えに耽っているようだ。

「（映司からメダル盗るの忘れてたな）――何をしてるんだか、俺は」

と自分に対して呆れていると、

「――――文句なら聞いてやる」

気配を察知して先に言葉を発した。

「アンクくん。君は人間に近づきすぎましたね。・・・・・・ある意味君の欲望通りですが」

「フッ、どこがだ？俺は相変わらず、メダルの塊だ」

「君をメダルの器にするのは中止です」

「ッッ――――！！」

突如告げられたソレに、アンクは木陰から急いで出て真木を迎え撃とうと、すぐにグリード態となるが、

――グサッ――

『ゥあ・・・・・・！』

ギルの右手は、アンクの胸に深く突き刺さった。

そしてギルの右手が、今まで集中させて来た多くのコアと、タカ・クジャク・コンドルの赤いコアを一枚ずつ抜き取ったと同時に、

――パリパリ・・・・・・ッ――

人間の姿に戻り、倒れ伏せながらも自覚した。

己が魂（コア）たるタカのメダルに、ある程度のヒビが入ったことを。

「――――――！！」

アンクはそれでも『右腕』から火球を飛ばして牽制する。

ギルはそれを難なくかわして真木に戻る。

「君が他のグリードよりはマシかと思っていたんですけどね、買い被りだったようです」

冷徹かつ非情な言葉だけを残し、真木は大量のコアを持って立ち去っていった。

当然、コアの殆どを抜き取られ、弱体化したアンクにそれを追う余力は無い。

今の彼が如何にか守り、残されたメダルは、一枚ずつのタカ・クジャク・コンドルと、フォース・コアが三枚。

「――全くだな。しかも馬鹿馬鹿しいのは・・・・・・・さっきからずっと・・・・・満足してるってことだ」

その時のアンクの表情は、どこか嬉しそうでいて、皮肉そうでもあった。

＊＊＊＊＊

鴻上ファウンデーション会長室。

「地下の保管庫？」
「なんでそんな所に火野を？」
「確か、王の間ってのがあるんだよな？」
「大丈夫なのですかそこは？」
「理由は聞いてません」

そこでは伊達と後藤と烈火と金女と里中がコソコソと話し合っていた。
なお、竜王は諸事情で別の場所にいる。

「ええい、後藤ちゃん、花菱。兎に角行ってみよう」
「あ、ロックされてますよ。出入り禁止だそうです」

里中はコソコソせず、ずけずけと事実を突きつける。

「え、どういうこと？何考えてんだ会長は？」
「さあ？私の業務ではないので、失礼します」

里中はどこまでもドライに振る舞い、バッグを肩にかけて移動しようとする。

「前から思ってたけどよ、あの里中って姉ちゃん、ドライすぎねぇか？」

烈火は里中の人物像として、マイペースで辛党でビジネスライクというものしか知らない。
だが、

「忘れてました」

里中は立ち止まり、

「後藤さん、これ」

ある一枚のカードキーを後藤に投げ渡す。

「マスターキーです。秘書補佐として、預かっといてください」

「里中・・・・・・」

「じゃ――お疲れ様です」

今度こそ本当に、里中は移動していった。

「あんがとよ！本当によ！」

「――ステキッ！！」

「不良（よからず）――烈火くんはまだしも、伊達さんの今の声音はＮＧです」

などと、里中が人情を見せた直後に、金女の毒舌が冴え渡った。

結果として、これで四人は地下保管庫への進入が可能となったのである。

＊＊＊＊＊

所戻ってアンクはというと、

『キィィ』

『リュー』

彼の頭上に二機の機械、タカカンとリュウカンが旋回すると、向こうから走ってくる主の手元に戻っていく。

「・・・・・お前ら・・・・・どうして?」

アンクは座ったまま首と目を少し動かして、自分を探し当てた者の姿を視認する。
そこには驚いた表情の比奈と、やはりかという表情の竜王。

「探したの。映司くんのやり方見てたから」
「それにしてもアンク。この様子だと、手酷くやられたらしいな」

竜王はあたり一面に散らばるセルメダルを見ながら言った。
グリードの観点からして、今のアンクは大量出血をしたに等しい。

「それで、なんだよ?」
「・・・・・もう一度、話したくて」
「帰って来い、アンクよ」
「・・・・・・・・・・・・」

アンクはその言葉に沈黙する。

「アンク。くどいようだが、深手を負わされたのだな?大方、真木あたりに」
「別に」

と返すも、アンクは判っている。
同じグリードであるが故、竜王はアンクの体内から多くのコアが奪われたことに気付いている。

「・・・・・この身体はなんとも無いから、安心しろ」
「アンクのこと、聞いたんだけど」

比奈はアンクの誤魔化しを押しつぶすように意味を明確にする。
アンクはセルを零しながら立ち上がり、木の幹を支えにしながら。

「もうすぐ返す」
「返すって・・・・・お兄ちゃんのこと？」
「要らなくなる」
「アンク。お前、よもや・・・・・・？」

竜王は勘付いた。
もうアンクに残された時間は、実に短いものになっていることを。

「リュウギョク。お前には、他にやることがあんじゃねぇのか？」
「アンク・・・・・。わかった・・・・・」

らしくない言葉に、竜王は頷いて其の場から走り去った。
自分が成すべき戦いの為に。

＊＊＊＊＊

地下保管庫の重厚な扉。
後藤はその読み込み機（カードリーダー）にのマスターキーをスラッシュする。
ロックが解除され、四人は扉を開けて部屋に入っていく。

王の間へと入った四人。
そこで一番に目についたのは、

「・・・・・・火野」

王の間に置いてある・・・・・・玉座とも言うべき場所に座る火野映司。
その風貌からは、王者の覇気さえも感じさせる。

「これは、招かれざるお客だが、火野くんを説得してもらうには良いかもしれないね」

と、鴻上がゆったり歩きながら四人に向けて言い放つ。

「説得？」
「火野映司くんはね、遂にその欲望の器を開いたんだよ」
「はあ？」
「不解（わからず）」

伊達と金女は、欲望の器についての詳しい事情は知らないため、素っ頓狂は声を出してしまう。

「伊達さん、金女さん。久しぶりなのに、すいません」

玉座に座ったまま映司は謝罪し、

「俺思い出したんです、俺の欲」
「と言いますと？」

映司は玉座から立ち上がり、

「力です。どんな場所にも、どんな人にも絶対に届く俺の手、力・・・・・俺はそれが欲しい」

瞳を虚無の紫に変えて欲望を曝け出した。

「手に入るとも!!君の素晴らしく巨大な器に、欲望の結晶!その無限のセルメダルを飲み込みたまえ!」

鴻上はリモコンを操作すると、途端に部屋の奥に張られていた赤いカーテンが脇に失せていき、そこには隠されていた無量大数の力!

「なんじゃこりゃ・・・・・・」

烈火もこの光景に唖然とする。

「欲望こそ命の源。欲望は生命の進化を起こす。君も全く新しい進化を果たす、真のオーズとして!８００年前に成しえなかった、神に等しい力を手に入れる!」

奥の間にある文字通り数え切れないほどのセルメダル――実際には有限だが、人が一目で数え切れないがゆえに無限と称されるほどの膨大で莫大なそれは、紛れも無く神への進化を促す呼び水となるだろう。

「しかしその為には紫のメダルがどうにも邪魔だぁ!このままじゃ、真のオーズどころか、真のグリードだよ!でもどう言っても彼は、紫のメダルを手放してはくれないんだよぉお!!」

鴻上はわざとらしく、演技っぽく、胡散臭く泣き出した。
いや、この男の場合、真剣（ガチ）で泣いてるかもしれないが、その両目からは雫が流れていない。

「伊達くん！！金女くん！！」
「冗談じゃねぇ。真のオーズもグリードも願い下げだ！！」
「大体、こんなことは私の任務に入っておりませんが」

伊達と金女は真っ向から鴻上の意思に反発する。

「火野帰るぞ。お前可笑しくなってるんだ」
「こんなトンデモねぇ量のメダル・・・・・どうなっちまうか、わかったもんじゃねぇぞ！」

後藤と烈火は映司の腕を引っ張ろうとするも、

「俺の器なら、飲み込めますよ・・・・・！」

映司はその腕を振り払い、目の前に広がる凄まじい力の結晶を恍惚とした表情で見ている。

だが、それもつかの間で、

「ッ――真木博士だ・・・・・！」

自分と同じ波動を感じ取り、映司は王の間から飛び出して行った。

「「火野っ！！」」
「火野さん！」

無論、それを黙って見過ごす彼等ではない。
後を追って走り出していった。

＊＊＊＊＊

同時刻、とある武家屋敷。
厳密には四季崎の現代における拠点の敷地内の庭に建てられた古風な土蔵の中。

「――――――・・・・・・っ」

その床の上で、鋼刃介は眼を覚まして両の目蓋を開けた。

「漸くお目覚めのようね」
「ルナ・・・・・・イト？」

自分の顔を真上から見下ろす金髪翠眼の美女。

「苦労したわよ。此処に運んでから眼を覚ますまで、こいつに警戒しっぱなしだったんだから」

忌々しそうに語る彼女の視線の先には、土蔵の奥深くで胡坐をかきながら日本酒を飲む四季崎の姿がある。

「俺は・・・・・確か・・・・・・」
「暴走させられて、正気を失っていたのですよ。刃介さん」

「な、なみ？」

今度は、彼が最も親愛を寄せる女性の声。
その声はルナイトのそれと同じく、上から見下ろすように聞こえてくる。
少しすると、自分の頭が柔らかで暖かな物に乗っていることを自覚し、彼女の細い指が刃介の頭を撫でてくれている。

そう、膝枕というものだ。

「・・・・・そういうことか」

刃介が現状を理解し、上体を起こした。

「かかかっ。やはりお前が俺の見込み通――――いや、それ以上の出来栄えだな」
「四季崎記紀・・・・・・・」

酒を飲み終えて此方に歩み寄ってくる四季崎。
だけど何故だろうか、何時ものような敵意が沸いて来ないのだ。
まるで、待ち望んでいたものが、すぐ其処に来ているような。

「さて、これで『強度試験』は終了。残るは最後の仕上げのみ」

四季崎は被った編み笠でも隠しきれないような愉悦の笑みを浮かべている。

「来い。お前がずっと欲しくて堪らなかった力を与えよう」
「俺の・・・・・・俺だけの力を・・・・・・・」
「そうだ。望むもの、守るもの、それら全てを法則を無視して如何

にかできる絶対的な力」
「ちょっと待ちなさいよ四季崎」
と、そこでルナイトが待ったをかけた。
「ついさっきまで身体中にエネルギー迸らせて暴走していたこの人に、より大きな力を投入すればどうなるか・・・・・・！」
「問題ないだろう。その確認の為に一度暴走させたんだからな」
半ば怒りの表情で迫るルナイトに対し、四季崎は飄々とした態度で受け流す。
「ですが、もう暫くの休養が必要です」
「いや、大丈夫だ七実」
「刃介さんっ」
刃介は立ち上がり、七実に優しく微笑んでから、四季崎と向かい合う。
「四季崎。力をくれるってんなら今直ぐに寄越してもらうが、その前に慣らしが必要だ。お前のことだから、コアだけでなく、他の大量のメダルを使うんだろ？」
「良い答えだな。確かにお前には一先ず『完全体』になってもらう前に、大量のセルメダルを取り込んでもらう。今までお前が稼いできた貯金は全て、ここに持って来てある」
「俺んチに入ったのか？不法な家宅侵入および窃盗罪にあたるなこれは」
「どっち道、持ち主のもとに還るんだから帳消しだろう？」
四季崎と刃介はそう言いあいつつ、土蔵の奥深くに歩いて行く。

四季崎は土蔵の一番の奥の壁に突き当たると、一旦振り返ってこう告げる。

「まずはお前が溜め込んできたセルメダル約２００００枚を返還しておく」

トントン、と音を立てるように壁を小突く。

すると、何やら床の下からガタガタという物音や振動が伝わってくる。

そして、上から一枚のセルがチャリンと落ちてきた直後、

――ジャリィィイイィィィン！！――

天井の一部がパカっと開き、天井裏に当たる部分から２００００枚のセルメダルが一挙に放出された。

「面白い」

刃介は邪悪に微笑むと、その身を金色に輝く一本の刀へと変えた。

『ヴヴヴぅぅぅおおおおお！！』

堅く閉じられた口が開き、鋭く牙が顕わになると、人間とは思えないような叫び声が響く。

それに呼応して、セルメダルが活性化し、力を欲する存在の口へとドンドン吸い寄せられていく。

湯水のようにあったセルメダル。

だがそれも、限りない欲望の前では、所詮有限のものでしかない。

一分と経つこともなく、２００００枚のセルメダルは全てガトウの体内へと吸収された。

『ヴゥゥ・・・・・・ふぅ、はぁ』

大量極まるセルを取り込み、ガトウは中腰になりながら息を整える。

「よしよし。じゃあ、これからお前に本番のメダルを与えるとしよう」

四季崎はそう言って床に手をつくと、何かを探すように両腕を動かし、そして何の変哲も無いような窪みに指を突っ込んで力任せに上へ持ち上げた。
するとそこには、

「隠し通路、というか、隠し階段？」

ガトウは刃介に戻ると、随分ベタな展開に眉を吊り上げた。

「そんな顔するなって。入ってるブツがブツなんでな、逆にこういう感じのほうが見つかりにくいだろ？」

四季崎は四角く刳り貫いてある穴に中に入り、釘で打ちつけてある縄梯子に両手両足を引っ掛けて下に下りていく。

「行くしか無いみたいね」
「らしいですね」

地下に通じる暗い穴を見ながら、ルナイトと七実は興味深そうにしている。

「それじゃあ刃介、先に」
「ああ」

刃介は三人の中で先に縄梯子に手足をかけて下りだす。
後続の二人も薄暗い穴へと入っていき、一分ほど下り続けると、そこで漸く明かりが見えてくる。
ペースを上げて、一気に下に行くと、そこには得意げな表情になった四季崎が、蝋燭に火をつけていた。

「本俸初公開となる俺の工房だ」

その言葉と共に、四季崎は指先に銀色の炎を灯し、手を振ってその炎を周囲に全てに振りまいた。
銀色の炎は後ろにいる刃介たち以外の全ての蝋燭に火種となり、真っ暗闇に等しい空間を光で満たす。

「っ――――こいつは、まさか・・・・・・!?」

工房内が明るくなったことで、刃介は凄絶な光景を目にする。
傍らにいるルナイトと七実も、その壮絶さに言葉すらないようだ。

「これが我刀『鋼』を超完全体するキーアイテム・・・・・・『無限のフォース・コア』だ・・・・・・!」

そこには、蝋燭の明かりによって虹色の淡い光を齎されたコアメダルの――――山!山!山!
地下の工房の大きさはおよそ一般的な一軒家と同じ面積である為、必然的にここにあるメダルの数も、決して無限というわけではない。
しかし、『無限のセルメダル』同様、一目で確認し切れない量を、

人は無限と呼ぶ。

「８００年間、人目を忍びながら手掛けてきた、俺の生涯における欲望の賜物だ」

四季崎はフォース・コアを指差しながら説明に入る。

「これらによってお前は進化を果たす、真のブライとして、真のグリードとして！８００年に及ぶ研鑽が、遂に神をも斬り殺す力へと到達する！」

四季崎はハイテンションとなり、口調にも熱がこもっていく。

「今のお前が持っている他系統のコアメダルは、確か二十枚チョイだったな。それらを取り込み、俺の中にある八枚を得た時にお前は完全体となる」

「そして、この半端ねぇコアメダルで・・・・・・」

刃介は、自分でも知らず知らずの内に笑顔となっていた。

まるで、長年の夢が叶った、無垢な少年の笑顔そのものだ。

「四季崎、本当に大丈夫なのですか？もし、コレの所為で刃介さんに何かあったら・・・・・・」

「心配すんなって。俺の刀鍛冶と魔術の腕前はお前自身が証明してる」

「・・・・・・・・・・・・」

それを言われたら返す言葉が無い。

四季崎はニヤけた表情で黙った七実を見て、次の瞬間には、

「それに第一よ・・・・・・もったいねぇ話だが」

笑顔は掻き消え、言葉の通り本当に残念そうな顔で、

「お前は壊れちまうんだからな」

「えっ？」

――パチッ――

――パリッ・・・・・・！――

指が打ち鳴らされた。

同時に聞こえてきたのは、七実の体内で何かにヒビが入るもの。

「かふっ――――」

苦しげな息が彼女の喉から漏れた――――吐血と一緒に。

「な、七実ッ！！」

「七実ちゃん・・・・・・！」

刃介とルナイトは、吐血をして膝をついた七実に駆け寄る。

「四季崎、テメェー！！」

「なんで七実ちゃんのコアメダルを！？」

二人は敵意を通り越して、ドス黒い殺意と憎悪と憤怒に身を焦がさん勢いで四季崎を睨みつけている。

「いやいや、俺だって勿体無いと思っている。何しろ虚刀『鑢』という枠組みを逸脱しかねん程の存在だからな。――いいや、もしか

したら、だからこそコイツを壊せたのかもしれないな」
「御託なんざ聞きたくもねぇな!!表に出やがれ!!すぐにでも殺してやる!!」

刃介は大声を上げて怒鳴り、懐からメダルホルダーを取り出して収められているコアを全て体内に吸収した。

「昂ってきたようで結構。そろそろ真木(ギル)も動いてる頃合だろうし、丁度良いか」

四季崎はそうして刃介共々地上へと昇っていく。
片や殺気、片や嬉々に心を染めながら。

残されたルナイトと七実は――。

「けほっ、けほっ」
「七実ちゃん、しっかり!」

地面に血溜りをつくる七実に、ルナイトは必死になって抱き寄せ、治癒魔術をかけようと精神を集中させ魔力を練り上げた直後に、

「いいんです。こういうのには、慣れてますから」

驚くほどに冷静な七実の声によって遮られる。

「私としたことが、忘れかけていました。死も苦も、四半世紀も連れ添った友人と大差ないというのに・・・・・」

元々、原典の彼女は、その特異体質が起因して重い病を複合的に患っていた。

その病魔一億とさえ言われたモノの大半が、致死性レベルばかりで、発症者が鑢七実でなければ酷すぎる死に様となったであろう。
だが、その病魔一億に拮抗するほどの自然治癒力ゆえに、七実は生きてこれたし、死に損ないと比喩された。――言葉の通り、苦痛と死に体は鑢七実にとっては友人といって差し支えないほどに慣れ親しんだ感覚なのだ。

「この人形（グリード）の体になって、全ての難業から解き放たれていましたとはいえ、不覚にも程がありますね・・・・・・」

そう、今の彼女は四季崎記紀のつくりあげた偽者。
さらにメダルの塊たるグリードとなったことで病魔一億からは無縁となっていた。

「病魔のことだけでなく、四季崎は何時でも、私たちを廃棄できた筈なのに・・・・・・」

ある意味、これは鑢七実の人生において最大級のドジである。
作られた、ということは細工が施されていても可笑しくは無い。
四季崎の贋作たるデシレならば、これを知っていて、細工を起動させるくらいわけもない。

「七実ちゃん・・・・・・ごめんなさい、私・・・・・・」

ルナイトはそんな七実をみて、謝った。
何も出来ない自分に、もう助からない――長くない彼女に対して。

「謝らないで下さい。今となっては、錆び付いて刃毀れした身ではありますが、まだ最後のお役目を果たすまで、消えるつもりも死ぬつもりもありません」

「・・・・・兎にも角にも、一度ここを出ましょう。また何かされたら、堪ったもんじゃないわ」

ルナイトは健気にも微笑む七実を負んぶして、縄梯子に手をかけた。

＊＊＊＊＊

≪ＲＹＵ・ＷＹＶＥＲＮ・ＤＲＡＧＯＮ≫
≪ＲＹＵ・ＷＡ・ＤＲＡＧＯＮ　ＫＮＩＧＨＴ！≫

「ヴォオオアアアアアア！！！！」
『あーらよっ！』

ブライ・リュワドラコンボのメダグラムと、デシレの呪刀『鎮』の刃が激突しあう。
ガギンガギンという、普通の刃物ならとっくに折れているであろう衝撃が空気中に充満する。

なにより二人は純粋な剣戟を繰り広げながら空を飛んでいた。
四枚の翼と八枚の翅を広げて、激突しては離れまたぶつかる、というサイクルを繰り返している。
だがこれを延々と繰り返すわけにはいかない。

『（そろそろか）』

デシレは頃合を見計らうと、一気に地上へと高度を降ろしていく。

「逃がすか！」

当然ブライもそれを追って降下する。
下りた場所は、ビル街の歩道の下に造られたトンネルの正面。
そこへ降り立った直後に、

≪ＰＴＥＲＡ・ＴＲＩＣＥＲＡ・ＴＹＲＡＮＮＯ≫
≪ＰＵ・ＴＯ・ＴＹＲＡＮＮＯ　ＳＡＵＲＵＳ！≫

火野映司がプトティラコンボに変身して、ギルと相対している状況と出くわした。

「火野！」
「は、鋼さん！？」
『おや、四季崎氏も来ていたのですか』
『今はデシレだ、ギル』

デシレの策略によって一気に緊迫してきた状況。
そこへさらに、

「「「「変身――――！！」」」」

――パカッ――

リバース、プロトバース、ブレイズチェリオ、チェリオが現れる。
それだけではない。

「変身！」

≪ＢＡＲＡ・ＫＡＮＩ・ＫＩＴＳＵＮＥ≫

クエス・バラカニツネも颯爽と駆けつけてきた。

≪ＤＲＩＬＬ　ＡＲＭ≫
≪ＳＥＴＴＯＵ・ＲＯＵ≫
≪ＡＮＴＵ・ＫＡＭＡ≫

リバースはドリルアーム、ブレイズチェリオは切刀『鏤』、チェリオは暗刀『鎌』を転送装備して、共に目の前の異形に挑んだ。

「火野！お前は力を使うな！」
「俺達に任しとけって！」

などとリバースとプロトバースが言うも、そうは言ってられないのが現実だ。

状況としては七対ニという数の上ではかなりのアドバンテージがあるというのに、ギルもガトウも一歩たりとも退かない勝負をしている。
ギルに到っては残りコアはたったの三枚であるにも関わらず不完全（セルメン）となるべき箇所が無い。これも一重に『人間という欲望の塊』を軸にグリードが誕生した結果なのかもしれない。

デシレは武器があるとはいえコアは八枚。
だが、持ち前の未来予知能力で一歩先を読んでいくこともあり、デシレも質の上でアドバンテージを得ていた。

『伊達くんですか？人生の終わりを逃したようですね』
「御陰様でね。――あんたも随分変わっちまって」
『御陰様で』

ギルとプロトバースはそう短く会話する。
思えばこんな戦場で二人が会話すること事態が初めてだった。

『フン・・・・・・ッ！』
『おら・・・・・・っ！』

ギルとデシレは、紫と銀の波動を周囲に撒き散らし、ライダー達を跳ね除ける。
その所為で、転送装備も強制解除させられる始末。

『おおおぁぁぁ・・・・・・！』

ギルはそこへ追撃をかける様に、

「うぅっ！」

立ち上がろうとするオーズの背中に紫の波動を浴びせる。
それによって体内とベルトのコア、合わせて7枚のそれが活性化し、必死に抑え込む様相を見せるオーズだが、

「このメダルは渡さない。手に入れた、俺の力・・・・・・！」

彼は立ち上がり、覚醒した欲望を開いていく。

「ウオオォォォォアアッ！！」

そしてオーズは、欲望の化身たるグリードへと姿を変える。
ありとあらゆるモノに、破壊と虚無を齎しかねない禁断の力へと。

「火野、やはりもう既に・・・・・・」
「マジ、かよ・・・・・・！？」
「不止（とめられず）、でしたか」

クエスもブレイズチェリオもチェリオも、オーズのグリード化に嘆くような声を出して立ち上がる。

『火野くん。完全な暴走も時間の問題ですよ』

ギルがそう告げると、リバースとプロトバースは、急いで映司（グリード）に駆け寄る。

「火野！メダルを博士に渡せ！」

力（コア）を捨てさせ、人間に戻らせる為に。

『でも、世界の終末を止めなきゃ。――俺は、この力で！』
「バカ野郎！！その手見てみろ。そんな手で何掴むってんだ？――何を守る？何処へ届く！？」
「何でも一人でやろうとするな！火野！！」

だが二人の説得も虚しく、

『俺は欲しい・・・・・力がッ！』

映司（グリード）は力任せに制止を振り払い、ギルに挑もうとする。
勿論、二人の戦友はそれを止めようと、必死になって映司（グリード）に食い下がる。

『全く・・・・・・』

ギルもその様子に溜息混じりで呆れる。

一方でデシレ達はというと、

――ガギン！ガギン！ガギン！――

「四季崎ィィィイ！！！！」

『いいな。もっと昂れ』

メダグラムの紫の刃と、呪刀『鎮』の黒い刀刃が幾度と無くぶつかり合う。

「何故ぇ、七実の命（コア）を！？」

『言ったはずだ。俺の欲望は究極を越えた超完全を生み出すこと。その為の作業工程だ』

理由を語った時のデシレの声音は、まさしく一本の刀といえる程に冷徹なもの。

「俺を昂らせ、狂気に満ち溢れさせ、欲望を極める為に――あいつを・・・・・！！」

『理解が早くて助かるな』

超完全体へのキーたる『無限のフォース・コア』。

それらを支配しきるには、今まで以上に巨大な欲望の力が必要となる。

刃介の永久に広がるソレの膨張に、ビッグバンの如く爆発的な加速をつける必要性があったのだ。

「鋼！よくはわからねぇが、加勢すっぞ！」
「兄さん、行きますよ！」
「こやつ等だけは、立場を捨ててでも倒すべきだ！」
そこへクエスたちも一斉に戦いへ乱入していこうとする。
だが、
『お前らは要らないんだ。悪いが長々と相手をしてやれそうにないな』
デシレは興ざめしたかのような声音で、呪刀をより強く握る。
それに呼応して、刀身に封入された魔力と呪詛がオーラとなって可視されだす。
『呪刀「鎮」、限定奥義――――』
所有者たる刀工は、両手で刀の柄を握り、真正面に構えて、
『呪刀詛悪（ジュトウソアク）』
そうして解放されたのは、此の世全ての悪と此の世全ての呪を、混沌なる闇にて交じらせたかのような、ただただ真っ黒な邪で歪なナニか。
陽炎のようにフラフラとうろつき、触手のようなものが獲物を探して蠢いている黒いモノ。
悪性に満ちた呪詛の集大成が、一本の刀から解き放たれた。
――ズィィィィイ！！――

黒いモノは、生き物らしき音をたて、凄まじい速度で縦横無尽に戦場を駆け巡る。

「チィ！」

ブライも予想外なこの攻撃方式に、舌打ちせずにはいられない。

『そらそらぁ！逃げてばかりじゃ意味がねぇぞぉ！』

デシレはここで刀身を振り回し、黒いモノの動きをより乱雑で予期しえぬものへと変えていく。

「やっべ！」
「くッ」

チェリオとブレイズチェリオは、脚力と身軽さを存分に使うも、それでも逃げるのが精一杯。
とても加勢出来る状況ではない。

『さて、そろそろ最大出力だ』

デシレは今再び剣を構え、上段に持ち上げて、ブンッ！と風を切る音を立たせて思い切り振り下ろした。

すると、

――ズィィィィィイイイ！！！！――

黒いモノは、獲物を食らうために這い回る獣から、純粋に目の前に存在を破壊する滅却の黒き光刃となって、ブライに襲い掛かった。

「刃介！」

その間際に、クエスがブライを庇おうと彼の前に立った直後、

「「うゥッ、わぁぁぁぁぁあああああ！！！！」」

破滅の闇が二人を纏めて喰らい飲み込んだ。

「兄さん！」
「鋼ッ！」

幸いなことに攻撃対象外だった二人は、大した傷など負う事すらなかったが、それでも仲間の窮地には叫ばずにいられない。
トンネルの外へ吹っ飛ばされ、アスファルトが砕け、地面から舞い上がった土煙の中にいるブライとクエスの姿は未だ見えない。

しかし、バジュンという音を鳴らしながら、バラとカニとキツネのコアメダルが、土煙の中から弾き出されてきた事で、ブライは兎も角クエスの状態を思い知らされた。
デシレは弾き飛ばされたコア三枚を拾って、

『もういいか』

と、頃合を見計らうように呟く。
デシレは三枚のコアメダルを手中にしながら歩き、ギルの隣で立ち止まる。

「きさ、ま・・・・・・コア、メダルを」
『こいつは元ある場所に返すことにしよう』

土煙の中から、忍び装束を血塗れにした竜王が、幽鬼の如き表情と足取りと声で出てきても、デシレは碌に相手にさえしようとしない。ギルはその様子に一瞥してから、真木に戻る。

「コソコソせずに君たちもそろそろ動いたらどうです？」
『お望みの品は此処にあるんだがな』

バッタのコア、バラ・カニ・キツネのコア。
それらが翳された時、

「お前が持ってたのか！！」
「取り返してくれるとは、感謝するでござるよ」

ウヴァと白兵が物陰から姿を見せる。
真木とデシレはそんな二人に向けて、最後のピースであるメダルを投げつけた。

「「――――ッ」」

ウヴァと白兵は手を前に突き出し、コアメダルは手を介して彼等の体内に帰還する。
それにより、二人の身体はパーソナルカラーの波動を滲ませ、顔には歓喜の表情が彩られる。

「これで九枚・・・・・・！」
「今再び、完全体に」

ウヴァのコアと白兵のコアの枚数は、言葉どおり不完全な完全となった。

「うぅぅおおおおおおお！！！！」
「――――――ッッ！！」

クワガタの顎らしき角、昆虫の硬い外骨格、カマキリの複眼と右腕の鎌、バッタの口と脚部。
艶やかな緑と黒の色彩で染まった蟲の王。
黒い甲殻類の鱗や甲羅で満ちた両腕、蔦や蔓が余す所巻きついた植物の両脚、犬科特有の凶暴な面と上半身。それらを錆色で穢した出来損ないの刀。

『ぬぅおおおッ！！』
『速遅剣』

――ビリビリビリビリ！！バチバチバチバチ！！――
――シュンシュンシュンシュンシュン・・・・・・！！――

ウヴァの雷撃とゼントウの剣撃は、周囲の物体を無遠慮に破壊していく。

『８００年ぶりだ。俺の本当の力・・・・・・！』
『久々でござるな。こうして全力を出せるのは』

昆虫王ウヴァと、全刀『錆』が完全復活を果たした！

「器に使えるグリードは、もう彼のみ」

真木はトンネルの上――ビル街の歩道に移動し、状況を観察する。
そしてメダルの器には、自動的にウヴァで決定した。

「これが完全復活か・・・・・・」
「メンドくさい時に、来てくれましたね」

二人のバースも、この最悪なタイミングで完全体のグリードが二体も現れたという事態に焦りを隠せない。

「――――竜王!!」
「じ、刃介!」

するとその時、土煙が晴れたと同時に、ブライが竜王に向って何かを多数投げつけてきた。竜王はそれが何かを瞬時に理解して、見事キャッチする。

「予備の十枚だ。竜王、完全復活しろ!」
「言われずとも、そのつもりだ!」

竜王は十枚の五色で二枚ずつの十枚のコアメダルを胸のうちに押し込んで取り込む。
それによって、彼女の五体からは五色の色鮮やかな波動が溢れだす。

「だぁぁあああああああ!!」

叫びと共に、彼女もまたグリードたる姿、リュウギョクへと変貌した。
赤き鳥の頭、黄色い猫の左腕、緑の昆虫の右腕、灰色の重厚な胴体、青い水棲の下半身。

『ほう。ならばおぬしの相手、この拙者が務めよう』
『ふっ――――!』

完全体と完全体による激闘がそうして始まる中、

『うゥゥ！』

映司（グリード）は唸り、

「うおおおおおおお！！ハァッ！！」

直接的にプトティラコンボへ変身する。

メダガブリューの刃を以ってしてガギンという音をウヴァの身体に叩き込むが、

「・・・・・・あ・・・・・・・？」

『完全復活をなめるな！』

ウヴァは優位にたった余裕さを発揮し、

「ぐあああああ！！」

たった一発の拳でオーズを吹っ飛ばして壁に叩きつけたのだ。

「伊達さん！花菱！金女さん！」

それを見たリバースは、三人に呼びかける。

「今から途轍もない一撃を準備する。時間稼ぎを、頼めるか？」

「水臭いなぁ後藤ちゃん。勝てるかもしれねぇってんなら、遠慮なんかすんな！」

「準備ってやつ、さっさと終わらせてくれよ！」

「では、参りましょうか！」

そうして三人のライダーが完全体のウヴァに挑んで行く。

『ふっ、纏めて地獄へ送ってやる』

ウヴァは向ってくる三人に本気の雷撃を浴びせていく。

リバースは複数枚のセルメダルを手に、早速準備に取り掛かる。

――チャリン――

――キリッキリッ――

――パカッ！――

≪ＤＲＩＬＬ　ＡＲＭ≫

≪ＣＲＡＮＥ　ＡＲＭ≫

≪ＳＨＯＶＥＬ　ＡＲＭ≫

≪ＣＡＴＥＲＰＩＬＬＡ　ＬＥＧ≫

≪ＣＵＴＴＥＲ　ＷＩＮＧ≫

≪ＢＲＥＡＳＴ　ＣＡＮＮＯＮ≫

右腕にはドリルクレーンアーム、左腕にはショベルアーム、両脚にはキャタピラレッグ、背中にはカッターウイング、胸にはブレストキャノン。

全てのアタッチメントを転送装備した重装備形態、リバース・デイ！

「出力最大ッ！！――みんな、退け！」

「「「――――ッ！」」」

リバース・デイの大声に皆は気付き、傷ついた身体を引き摺るようにしてウヴァから急速離れていく。

≪ＣＯＲＥ　ＢＵＲＳＴ≫

「ブレストキャノン！アームズシュート！！」

――ズドォォォォォオオオォォォォォォン！！！！！――

以前に発動させたバース・デイのブレストキャノンシュートとは、比べることさえ馬鹿馬鹿しくなるほどの超絶的威力を誇る砲撃。例え地下シェルターの防壁だろうが突破しかねない程の高威力。

『ぬぅぅぅおおおおおおおおお！！！！！』

その洗礼の直撃をうけ、ウヴァは凄まじい絶叫を醸し出す。

「よっしゃー！」

「これならいける！」

その様子を見て誰しもが、”ウヴァが砲撃を受けて苦しんでる”ように見えることだろう。

だがしかし、現実はどこまでも厳しかった。

ウヴァは実際のところ、直撃なんか受けちゃ居ない。寸止めのところで御自慢の雷撃を最大限に発揮して、リバースの攻撃と張り合っていたのだ。

――ドゥガァァァァァァン！！――

だがそんな状態は長く続くはずもなく、両者のエネルギーが互いに

爆発しあった。

「やったか？」

「あの、後藤さん、今その台詞は・・・・・・」

チェリオはリバースの台詞に釘を刺そうとしたがもう遅い。

濃い爆炎と黒い爆煙は、すぐさま晴れた。

それは決して風によるものではなく、

『ふぅ、中々やるな。危うくコアが弾け出るところだった』

ウヴァの闘気によるものだった。

「「「「ッッ！？」」」」

四人は、完全復活したグリードの底力を逆に思い知らされる。

無論オーズをコレを見て、

「やっぱり要る、力が・・・・・・力が欲しい」

そんな時になって思い出したのが、

”手に入るとも！！君の素晴らしく巨大な器に、欲望の結晶！その『無限のセルメダル』を飲み込みたまえ！！”

鴻上が述べていた、神に等しき力への到達手段。

「・・・・・・ッ」

オーズは其の場を一旦後にして、鴻上ファウンデーション本社へと

走っていった。
それら全てを眺め、ブライはデシレにこう告げた。

「四季崎！今直ぐ連れて行け、そして寄越せ！神を斬り殺す力を！」
『それを待っていたぞ、我刀流二十代目当主よ』

デシレは刀を鞘に納めると、ブライの腕を掴み、翅を生やして空へと飛翔していった。

「火野？」
「兄さん？」

＊＊＊＊＊

雑木林。
そこではアンクが、自らの容態を語っていた。

「ああ。壊れるだろうな」
「壊れる？アンクのメダルが？」
「多分な」
「そうなったら、アンクは？」

比奈は駆け寄って問い質す。

「メダルは壊れれば消える。当然俺も、消える」
「・・・・・それって・・・・・死んじゃうってこと？」

「・・・・・・・・・・・俺が死ぬと思うのか？」
「だって！今そう言ったじゃない！」

それを聞いたアンクは、皮肉と歓喜が入り交ざったような笑顔となる。

「ただのメダルの塊が、死ぬ・・・・・・か」

今度は純粋に皮肉な口調で語り、歩いていく。

「アンク！何処行くの？」
「戻る」

ついてきながら訊いてくる比奈に対し、当然のように答えるアンク。

「え？」
「俺がついてないと相当ヤバいだろ。あの使えるバカは」

＊＊＊＊＊

同時刻のトライブ財閥本社ビルの会長室。
そこにあるソファーで、七実は横になっていた。

「七実ちゃん、調子はどう？」

その直ぐ近くで、ルナイトが彼女の看病をしていた。

もっとも８００年の修練を積んだ凄腕魔術師といえど、重度の損傷を負ったコアメダルの修復は出来ない。
８００年前における七人全員が集ったとすれば、魔法に匹敵する奇蹟を実現できるだろうが、今は無い物強請りをしても意味が無い。

「ええ、さっきよりは頗る良くなりました。動き回る分には問題ありません」

七実本人はそう客観的に自分のコンディションを確認して告白する。
ソファーから降りた彼女にルナイトは申し訳無さそうに、

「ごめんなさい。私では、貴女の命を救えない」

深々と頭を下げて心の底から謝罪する。

「言ったはずです、謝らないで下さい。確かにこの胸の中にある魂は、何れ朽ち果てるでしょう。でも、こんな時だからこそ、私はあの人のお傍にいなければならないんです。――いえ、そうしていたんです」

七実は自分の足で立って歩き、部屋を出る間際にこう言い残す。

「私はあの人の刀ですから。そして、そうで在ることが、私にとっての欲望なんです」

＊＊＊＊＊

鴻上ファウンデーション地下保管庫・王の間。

「鴻上さん、そのメダル貰います。力が要るんです」

突如としてそこへ入ってきた映司は、開口一番で力を求める。

「・・・・・・・・・・・・・」

鴻上はゆっくりと振り返り、映司の姿を網膜にて捉える。

「あの火野映司くんが、ここまで欲望を解放するとは・・・・・・！」

その口調と相貌には、ただひたすらな感激があった。

「いいだろう。好きにしたまえ！！」

鴻上は映司の邪魔にならないよう横へと避けていく。

映司は、まるで夢遊病のような、それでいてしっかりとした足取りで『無限のセルメダル』に歩み寄る。

今まで己が心の奥底にて深い眠りについていた全ての欲望を覚醒させた火野映司には、もはや迷いも躊躇も戸惑いも、一欠片として存在していい無い。

今の彼の心は、純粋な過ぎるほどに”人々を助けたい”という欲望（ねがい）のみで埋め尽くされていた。

＊＊＊＊＊

武家屋敷の土蔵の地下工房。
デシレとブライは、この場所へと舞い戻っていた。

「七実たちは？」
『さてな。大方別の場所に移ったんだろうな』

開口一番でブライは七実のことを話題にし、デシレが適当に相槌を打つ。

「そうか。だったら遠慮なく」
『ああ、これで良い』

――グサッ――

ブライの右腕が、デシレの土手っ腹に突き刺さり、残る八枚のコアメダルをガッチリと掴んだ。

『そして――』

だがその状態でなおデシレは、自らの頭部にメダルの投入口を出現させると、九枚のフォース・コアとチャリンと入れ続けた。
結果として、

『ン・・・・・ォォ・・・・・・』

一体のヤミーが――九枚のフォース・コアを秘めたグリード紛いの

ヤミー誕生する。
ブライはデシレの背中から生まれ出たそれの姿を見ようとしたが。

『ンァァア！！』

謎のヤミーを奇声をあげ、目にも留まらぬスピードで地下工房から地上へと昇っていった。

『これで、良い・・・・・・！』

そして、

――ジャリン！――

満足そうな言葉を最期に言い残して、デシレの身体は多くのセルメダルとなって崩れた。

「・・・・・・・・・・」

ブライの右手には、引き抜いた八枚の変体刀系コア。
彼は左手を胸に当てると、そこから四枚の変体刀系コアを取り出す。

これで、全ての容易が整った。
ブライは十二枚のコアメダルを手中にし、『無限のフォース・コア』の真っ只中に立つと、それら投げて一挙にスキャンした。

≪ＫＡＮＮＡ≫
≪ＮＡＭＡＫＵＲＡ≫
≪ＴＳＵＲＵＧＩ≫
≪ＨＡＲＩ≫

≪ＹＯＲＯＩ≫
≪ＫＡＮＡＤＳＵＣＨＩ≫
≪ＢＩＴＡ≫
≪ＫＡＮＺＡＳＨＩ≫
≪ＮＯＫＯＧＩＲＩ≫
≪ＨＡＫＡＲＩ≫
≪ＭＥＫＫＩ≫
≪ＪＵＵ≫

誕生する――欲望の神が。
ありとあらゆる破壊と創造、終末と再生を司る者が。
今この瞬間、一人の男が進化して、誕生するのである。

神への進化と満足と昆虫王（後書き）

次回、仮面ライダーブライ、最終話！

明日への欲望と最終決戦と掴むべき未来

仮面ライダーリバース
戦闘で破損したバースシステムを特定のコアメダルによる変身に強化改修したことで再誕した新しいバースシステム。装甲部分は黒色でスーツ部分は銀。
全体的なスペックが今までのバースのそれを遥かに越えており、数値上では以前の倍にあたるものとなっているため、完全体のガメルとも対等に張り合えるほどの力量を発揮した。また、通常のバースより防御力が重点的に強化されている。
ブレイズチェリオと同じく、コアバーストによってパワーを引き出す機構へと改良されている為、転送装備を行っていない状態でもコアバーストによる必殺技、リバースリターンズの発動が可能。

身長：１９９ｃｍ　体重：９６ｋｇ　キック力：１６トン　パンチ力：７トン
ジャンプ力：約７０ｍ　走力：１００ｍを３．５秒

アーマー・コア
シルフィードがブレイズ・コア同様に作り上げた新たなコアメダル。色は黒色で、全身装甲（フルプレート）が描かれている。

リバース専用に精製されたコアメダルなので、オーズやブライのベルトには使用できないが、その分だけ封入されたエネルギーは多大なものである。

リバースドライバー
リバース専用の変身ベルト。
ブレイズチェリオのベルトと同じく、エネルギーの運用効率が向上するよう手を加えられており、かつてのバースドライバーの性能を大いに上回っている。

リバース・デイ
全てのアタッチメントを転送装備したリバースの重装備形態。
基本的な能力などはバース・デイと変わらないが、必殺技にあたる「ブレストキャノン・アームズシュート」の威力は嘗ての「ブレストキャノンシュート」のそれと比べると、出力によっておよそ3～5倍へと大きく進歩している。

明日への欲望と最終決戦と掴むべき未来（前書き）

仮面ライダーブライ！

前回の三つの出来事は！

一つ！自分の欲望を目覚めさせた映司と刃介は――力を、そしてメダルを求める！

二つ！一瞬でも欲望を忘れたアンクは、メダルを失い――七実は四季崎によって破棄され、死の淵に立たされる！

そして三つ！ウヴァとゼントウが完全復活し、世界の終末が始まろうとしていた！

明日への欲望と最終決戦と掴むべき未来

ビル街の歩道。
建物の一部として意図的に造られた道路。

「「「「うわあああああああああ！！！！」」」」

その人工的な道路の上に、下にあるトンネルの隙間から、吹き上げられた者が四人居た。
リバース、プロトバース、チェリオ、ブレイズチェリオ。

『ハアッ！』
『ふっ！』

それを追う様にして上に昇りながら戦うのは、共に完全体となって十全たる能力を発揮しているリュウギョクとゼントウ。

『フフフ・・・・・』

そして、九枚のコアを揃えて完全復活した昆虫王ウヴァ。

「この昆虫野郎！」
「舐めんじゃねぇぞ！」

プロトバースとブレイズチェリオは敢然と・・・・・いや、半ば無謀とさえ言える勢いでウヴァに突貫していく。

『フンッ』
「「ぐあッ！」」

無論、ウヴァの拳や蹴りによって退けられ、

≪ＳＨＯＶＥＬ　ＡＲＭ≫
≪ＳＥＴＴＯＵ・ＲＯＵ≫

リバースとチェリオが続けて攻撃してきたところで、

≪ＣＲＡＮＥ　ＡＲＭ≫
≪ＡＮＴＯＵ・ＫＡＭＡ≫

自分たちも後続していくも、

――ガシッ――
――バギッ――

『ゴミが』

装備をガッチリ掴まれた挙句、破壊されてしまう。
それによって変身がとけ、地面を転がる四人。

『今までこんな奴等に梃子摺っていたとはな――フッ』

ウヴァは近くの木製ベンチに荒々しく座って自嘲じみた声を漏らす。

『疾風迅！』
『爆縮地』

一方でリュウギョクとゼントウは激しい戦闘を繰り返している。

『剛力無双！』
『一揆刀銭』

攻撃の応酬は一歩も譲らぬ大激突。
剣聖と忍者のソレはこのまま終わり無く続けられるものかと思った矢先、

――ズゥドォォォォォン・・・・・・・！！――
――ズィガァァァァァ・・・・・・・・！！――

鴻上ファウンデーション本社ビルから鈍く重い音と共に白煙が巻き起こり、町の方では例の武家屋敷から眩く巨大で野太い黄金の光の柱が虹色のオーラ共々溢れだしている。

そうして現れたのは、

――ズシン・・・・・・！ズシン・・・・・・・！ズシン・・・・・・！ズシン・・・・・・！――

凄まじい重量を感じさせる足音通り、彼が歩いていくと、足を乗せた地面がメリメリと凹んで行く。

――バサァ・・・・・・！バサァ・・・・・・・！バサァ・・・・・・！バサァ・・・・・・！――

天地に大きく響く羽音。それは空を自由に舞う美しいの翅のはためく音。
一人の男の背から生えた十二枚の銀色の翅が、煌びやかな銀粉を放出している。

「火野・・・・・・」
「・・・・・・兄さん」

見間違えようなど、あろう筈が無い。
地を歩いて来る男・火野映司、空より飛翔してくる男・鋼刃介。
その様子から、二人に大きな変化があったのは一目瞭然。

『刃介、あいつ』
『ふむ。・・・・・・リュウギョク、おぬしの相手は後回しでござるな』

ゼントウもリュウギョクとの戦いを中断して、刃介が降り立つ場所を予想し、その際に対峙するであろう場所に行く。

その状況全てを高層ビルの屋上から眺めていた真木。
彼は背後から懐かしい声を聞くことになる。

「Ｄｒ．真木」

振り返るとそこには、

「久しぶりだね」
「あんまり、見たくない顔だったけどね」

プレゼント用に包装された箱を持った鴻上。
黄色いローブを着込んだ魔術師ファッションのルナイト。

「アレは？」
「オーズだよ。本当の」
「そして、真のブライ」

真木の質問に、鴻上とルナイトは素直に答えた。

「本当のオーズ？真のブライ？――しかしオーズのメダルは全てこちらに」
「忘れたとは言わさないわよ。８００年前、コアメダルは私たち三人の魔術師と四人の錬金術師によって、十枚ずつ造られたことを」

ルナイトの指摘の意味――それは間も無く判る。

「お見せしよう。これが８００年前の王が初めての変身に使った十枚目」

鴻上は包装された箱を開けて、

「――――タトバコンボだ！」

赤と黄と緑のコアメダルを取り出す。

「――――ッ！」

そして鴻上は、その三枚をビル屋上から思い切り投げた。
コアメダルは見事映司のいる方向に向かい、ウヴァと対峙する場所

にまで来た映司はそれを掴み取る。
刃介もまた、映司は力をキャッチした瞬間に、ウヴァとゼントウの眼前に降り立った。

「後藤さん・・・・・・伊達さん・・・・・・」

映司は既に装着しているオーズドライバーに、バッタ⇒トラ⇒タカの順でメダルを入れていく。

「金女・・・・・・烈火・・・・・・竜王・・・・・・」

刃介も装着済みのブライドライバーに、テンバ⇒オニ⇒リュウの順番でメダルを入れていく。

「「離れていてください（れないか）」」

そして、片手にスキャナーを握って、二人は同時に決め手となる一言を口にする。

「「――――変身」」

その瞬間、二人の周囲には色取り取りのメダルのオーラが飛び交う。
それは、何時もの規則的な動きとは無縁な動きであることは明白だ。

≪ＲＹＵ・ＯＮＩ・ＴＥＮＢＡ≫
≪ＴＡＫＡ・ＴＯＲＡ・ＢＡＴＴＡ≫

その中で、カテドラルに投入されたものと同じ色をしたオーラが、

逆三角を象るように、二人の前に現出する。
そして、逆三角形を象って並んだソレは、満を持したかの如く一つに重なる。

≪ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！ＲＩＯＴＥ！ＲＩ・Ｏ・ＴＥ！≫
≪ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！ＴＡＴＯＢＡ！ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！≫

赤いタカの頭、黄色いトラの腕、緑色のバッタの脚。
血錆色の龍の頭、血錆色の鬼の腕、血錆色の天馬の脚。

『無限のセルメダル』を飲み込み、始まりの三枚で変身したタトバコンボは、通常時とは全く異なる欲望の王者としての覇気を全身から漲らせ、まさに真のオーズというべき存在として顕現した。

『無限のフォース・コア』と十二枚の変体刀系コアと十二枚の刀剣系コアにより、リオテコンボは欲望の戦神たる神気を世界に轟かせ、真のブライであり真のグリードとしての力を示していた。

仮面ライダーオーズ！
仮面ライダーブライ！

此の世全ての欲望を受け止め支配する、王と神が降臨した――――！

完全系変体刀・我刀『鋼』――完全。

「「――――――――」」

王と神は、変身を完了し、ゆっくりと歩む。

『『――――――！』』

無論、ウヴァとゼントウは、鎌と『針』の刃を二人に向けて走っていく。

だが、オーズとブライはその突進を難なくかわし、逆に背中を強く押して転ばせようとする余裕まで見せている。

転びかけたウヴァとゼントウはすぐさまバランスを取り直し、すぐにでも反撃しようとするが。

――ガッ・・・・・・！――

ブライとオーズの拳による一撃が、そのような無礼を決して許さない。

ウヴァとゼントウが少しだけ地面を転げ回り、すぐに立ち上がるも、そこには右手にメダジャリバーを、左手にメダガブリューを持ったオーズと――左右の手に二振りの魔刀『釦』を持ったブライが歩み寄ってくる。

「「ハッ――――！」」

『『グッ――――！』』

一刀はウヴァとゼントウの余裕さを裂き、

「「フッ――――！」」

『『ヴッ――――！」」

一振りは優雅さを伴いながら敵を切り裂く。
基本形態として変身してなお、二人の実力は完全体グリードを圧倒して余りある。

「コアメダルの力で世界を終わらせるわけには行かない。欲望のメダルは、世界の再生の為にこそある！」
「――世界は終わらせるべきです」

一方でビルの屋上では真木達が言い合っている。

「違う。この飽和し伸び悩む世界も、欲望で一変する。欲望が新たな文化、さらなる高みへと導く――進化するのだ！見たまえ！あの欲望王（オーズ）と欲望神（ブライ）の力を！」

鴻上は、以前より考えていた”世界の再生”を説く。

「いいえ。・・・・・・何も存在しない”究極の無”――」

真木は腕に乗せていた人形を持って手にぶら下げ、

「――それこそ、人が到達し得る最高の高みです！」

人形を介さず、直接鴻上とルナイトの目を見ながら主張した。

「どうあっても、この優しくも厳しく、暖かくも冷たい世界で生きるつもりはないのね？」
『無論ですよ』

そして真木清人は、ギルとなった。

「「フッ――――！！」」
『『グッ――――！！』』

片や、ブライとオーズは、ゼントウとウヴァに斬撃を与えに与え、力を込めて柄を手にして体を１８０度回転させながら、区切りをつけるように斬り付けた。

――ガシャ――

二人は自ら武器を横に投げ捨てると、サイドバックルのホルスターに提げているスキャナーを手に取る。
後ろから、昆虫王と堕剣士の反撃が迫り来る中、

≪≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫≫

「「ハァッ！」」

二人は両脚にエネルギーが伝達されると同時に華麗なる跳躍で空へと舞い上がる。

現出する赤・黄・緑のリングと、連なり並ぶ三つの血錆色のリング。

「ウオオオオオオ！！」
「チェェェストォォォオ！！」

それらを真上から潜り抜け、双方の右足には凄絶なエネルギーが集

束し、

「「タアァッ！！」」

タトバキックとリオテキック。
それらは獲物の体に確実なダメージを与えた。

オーズとブライが着地すると、

『『うおォ、うァ・・・・・・！くゥ・・・・・・・・！！』』

ウヴァとゼントウの体からは火花が散り、霞むような声を漏らしながら、二つの異形は内側から発生した爆発に飲み込まれていく。
だがしかし、

『――――――』

――チャリン――

そこへギルが現れ、アンクから奪った物の内5枚のコアをウヴァに、四季崎（デシレ）から緊急用に預かっていた三枚のフォース・コアをゼントウに向けて投入する。
そうすると、爆発はビデオテープの逆再生の如く消えていき、そこには驚いた様子で自らの体を見分するウヴァとゼントウ。

『ォ、オ・・・・・ドクター！感謝するぞ！』
『命綱、感謝するでござるよ。――しかし、ながら・・・・・・』

ウヴァとゼントウは感激しながらギルに感謝する。
だが、ゼントウにはフォース・コアが投入されたことにより、彼は

軽度の暴走症状を起こしており、体から虹色の力場がバチバチといっている。

「・・・・・・あ――――」

「チッ、悪運の強い」

オーズとブライが意外そうに、忌々しそうに言葉を漏らす。

『手段は美しいとは言えませんが、齎す終末は、きっと美しい』

――チャリン――

『うおッ！？』

ギルは、ウヴァの後頭部目掛けて四枚のコアを投入した。

『――止めろ！これ以上はいい！俺は暴走する気はない・・・・・・！』

ウヴァは後ずさりながら、ギルから逃れるように述べた。

だがギルはそれをゆっくり追うように歩く。

『志という点では、オーズとブライを見習ってください』

『な、なぜ俺なんだ！？ゼントウを使えばいいだろ！！』

ウヴァは必死に逃げようとした。その為に、軽度の暴走症状を起こしているゼントウを指差す。

『四季崎氏の手掛けたグリード達では、私の望む暴走と終末は起きえません』

ギルは冷徹に述べ応えると、ウヴァは怯えたように逃げ出す。

――チャリン――

しかし、背を向けたことで三枚のコアが投入されてしまう。

『止せと言っている！』

生来の、怒りに我を忘れやすい性格ゆえ、ギルに牙をむこうとしても、

――チャリン――

飛んで火に入る夏の虫、とでも言うかのように、五枚のコアが投入された。

『うぅっ・・・・・・！お、うあ・・・・・・！ウ、うう――――』

過剰なまでにコアメダルを投入され、ウヴァの現在のメダル枚数は、２６枚となっている。

当然、体の内側から張り裂けそうな感覚に襲われ、苦しみだす。

「オオオオオオッ！！」

そこへオーズが特攻をかける様に、ギルに向って走り出すと、

「ハッ！！」

――ジャリン！――

オーズは腕を突き出しギルは腕で防ぐも、オーズの攻撃によってギルのセルが何枚か削られた。

『なるほど。ここまでセルメダルを――やはり君は危険すぎます』

――ドガッ！――

ギルは左手の拳でオーズを殴った。
オーズは少しの間地面を転げ回るも直ぐに立ち上がる。

『アァァァ・・・・・ン！』

ギルは紫の光弾を手から放ち、オーズに命中させようとしたが、

――ボォオ！！――

光弾は一つの火炎によって相殺され、

――ザンッ！！――

『ンン・・・・・・！？』

ギル自身は何者かの刃で斬られる。

背中の大翼から赤い羽根を散らしながら地上に降りた者と、禍々しい妖気を漂わせながら悠然と現れた者。

「アンク・・・・・・！」
「七実・・・・・・！」

オーズとブライは、想像こそはすれ意外な助っ人の登場に感嘆する。

『君らの属性はコウモリですか。またオーズとブライに付くとは』

ギルは興ざめした声音でアンクと七実を表現する。

言われた二人も、皮肉めいた笑みを浮かべる。

『――――俺は・・・・・・俺はイヤだぁ！』

そんな中、ウヴァは情けない言葉を吐いて、其の場から逃げていく。

『・・・・・・なんと言う見苦しさ』

ギルはオーズらの相手をやめ、ウヴァの後を追っていく。

そこには呆れと失望の念がありありと伝わってくる。

ギルがウヴァを追って姿を消した直後、

『うぅウゥうぅウゥっッ・・・・・・・・・・・・・！！』

ウヴァの怯えに怯えた、浅はかな悲鳴だけが静かに響いた。

しかし、敵でしかないウヴァのことを一々思うものなど、この場に残った面子の中には一人も居ない。

「アンク・・・・・・どうして・・・・・・・？」

オーズはアンクの前に立ってそう問う。

なお、ブライは七実と向かい合い、ただ互いの顔を見て頷き合っている。

――バッ――

アンクは『右腕』を突き出し、

「今日の分の、アイス寄越せ」

「――って、ちょ・・・お前・・・」

余りにも予想外でありえそうな言葉に、オーズは勿論のこと、全員が安堵した。

アンク自身も、どこか和やかな表情をしている。

だが、

「――うッ！あッ！・・・・・・お、ああ・・・・・・・！」

タトバコンボの全身から紫の波動が電撃のように駆け巡っていく。

そしてその波動はやがて、始まりの三枚の力を撥ね退けるかのように、タトバコンボを強制的にプトティラコンボへと変えてしまったのだ。

当然、紫のメダルの力があふれ出したことによって。

――パリィィン！！――

”始まりの三枚”は虚しくも砕け散り、消滅した。

「「「「――――――っ！？」」」」

「「「「――――――っ！？」」」」

その異常な光景は、見るもの全員の視線を釘付けにした。

「あぁッ、うッ・・・・・・！」

オーズは苦しみに苦しみ、最後にはプトティラの装甲が紫の霧となって消失する形で、変身が強制的に解けた。

なお、映司自身はパワーの暴走により、胸の押さえながら膝をつき、遂には四つん這いになってしまう。

それを見てブライは、

「やはり人間の身では、力がデカ過ぎたようだな。俺ほどじゃないにしろ、相当メチャクチャをやったようだな、火野」

「まあ、ちょっとだけ・・・・・・」

「この戯け。俺からすれば確かに”ちょっと”だが、ヒトの観点で言えば大いなる無茶だ」

映司を叱責しながら、カテドラルの傾けを直して平静に変身を解除した。

＊＊＊＊＊

星が輝く夜空――その下で刃介たちは、小さな祝いでもするかのように集まっていた。

もっとも、集まっていたのは、映司・刃介・アンク・七実・比奈の五人だけだが。

「おい」

アンクは比奈に、

「俺のメダルのこと、映司に言うな」

ヒビの入ったコアのことについて口封じを命じた。

「どうして？」

「俺と映司が上手く戦う為だ。――邪魔したくなかったら黙ってろ。いいな」

「・・・・・・・」

何時もの傲岸不遜な言い振りだが、今回ばかりはアンクの言い分にも一理ある。

それを偶然にも盗み聞きしてしまった刃介と七実は、

「やはり貴方もでしたか、アンクさん」

「ふっ――お互い、損な役回りをさせられたもんだな」

「えっ？まさか、鑢さんのコアも？」

「ああ。四季崎の野郎の術中に嵌った」

あえて、バラした。

七実のコアにも損傷があることを。

「まあ、一応火野には黙っててくれ」

「理由はアンクさんと同じ、と言えばわかってくれますね」

「・・・・・・・」

比奈はただただ、沈黙するしかなかった。
そんな時、

「お待たせぇ！」

映司が近くの露店から5本の棒アイスを買って来た。
そこで、一同は一時休憩をとる。

「なぁアンク。鑢さんは兎も角、お前が戻ってくるなんて、何かあった？」

映司は率直かつ核心的なことを訊いてきた。

「・・・・・ふっ――真木は俺をメダルの器にするのを止めた。となれば、奴に協力する必要はないし、この身体も必要ない」

それを聞いて映司はアンクの正面にまわり、

「――じゃあ・・・・・！」
「もう少ししたら、お兄ちゃんの身体、返してくれるって」
「良かったね比奈ちゃん！ホント良かったよ！・・・・・それだけが気になってたんだ」
（それだけって・・・・・）

比奈は、信吾のことを我が身のように喜んでくれた映司に感謝した。
だがそれと同時に、何とも言えない感情を抱いた。

「もうお前とも戦わなくてもいいってことか」
「――ふっ。決着がつけられなくて残念だったなぁ」
「これ以上の決着は無いだろ」

アンクとも軽口を叩き合う映司。
しかし、
「火野。本当にこのままでいいのか？」
刃介がそう訊くと、
「・・・・・はい。色んな意味で、これ以上は無いと思うんです」
映司は何かを吹っ切ったように答えた。
（どうして？なんだか、映司くんが遠くに行っちゃうみたい・・・・・）
そんな映司の姿に、またも不安感を募らせる比奈。
（お兄ちゃん、私、どうすればいい？――映司くんのことも、アンクのことも、お兄ちゃんのことも、鋼さんや鑢さんのことも、出来ることが見つからない）
事態は刻一刻と進んでいき、何の力も持たない比奈にとっては、濃密なようでいて過疎な時が流れる。
（何も言えない・・・・・私には、もう・・・・・・。ただ――）
比奈は何を思ったのか、映司とアンクの間に立った。
背中を向き合う二人の間に立った比奈は、ゆっくりとアンクの右手と映司の左手を掴んだ。

自分と言う中間点を介しても構わない。
ただ、この二人を繋げる何かになりたい――そんな願いゆえの行動だったかもしれない。

（泉・・・・・何となくではあるが――）
（――懸け橋になりたい、とはまでは行かなくとも、二人の何かを・・・・・・）

刃介と七実も、比奈が抱え込んでいる複雑に絡んだ感情を、上手く表現することは出来ずとも、理解していた。

＊＊＊＊＊

鴻上ファウンデーション会長室。
会長たる鴻上は、自分のポジションである机の上に、ワイングラスをおき、窓から外の様子たる摩天楼を眺めている。

「欲望ある限り・・・・・・何かが変わり、生まれる」

鴻上はワイングラスを手に持ち、

「今日と言う日を明日にすることさえ、欲望だ」

ガラス越しだが摩天楼にかざし、

「Ｈａｐｐｙ　ｂｉｒｔｈｄａｙ！！」

明日という名の誕生を祝っていた。

＊＊＊＊＊

トライブ財閥の会長室。

そこの主であるルナイトは、自慢のミニバーに座り、ワインセラーから取って置きの一本を引っ張り出して飲んでいた。

その様子からは何時もの妖艶さは無く、ただ一重に神秘的な雰囲気だけが漂っていた。

「決戦は恐らく明朝・・・・・これできっと、８００年前から続いてきた因縁にケリがつく」

秘蔵の赤ワインを口腔内に流し込み、舌でその味を堪能しながら、ルナイトはグラスを傾ける。

「そうしたら、私はどうしようかな？」

空になったグラスに今一度ワインを注ぎ、美麗なる吸血鬼は再び赤い酒を飲み干す。

この僅かなる、嵐の前の静けさとでも言うべき、平穏な時間を少しでも味わおうとするかのように。

「まあ、今は取り合えず――――勝利を願って、乾杯」

＊＊＊＊＊

明朝のクスクシエ。

「よいしょっと！」

知世子は一人、見せの準備を進めていた。

「さあ、今日も元気に――――」

だがその動きはある物を見て止まった。

客席のテーブルにある筈のない物が置いてあった。

黒いマッシュルームカットの鬘を被せられ、眼鏡をかけられ、黒衣を着せられた、不気味な人形がひっそりと其処に置いてあった。

そして知世子は、その人形の持ち主を、人形の身形から判断した。

「これって、真木さん？」

＊＊＊＊＊

そして、とある郊外の寂れたバイクの駐輪場。
ウヴァはそこで、人っ子一人いないこの場所で、何百ものバイクの陰に埋もれるようにして苦しんでいた。

『くっ、うぅぅ・・・・・・！』

恐らく、ギルによって更にコアを投入されたことでパワーのコントロールが限界を迎えているのだろう。

『ヤダ、止めてくれ・・・・・・！誰か、助けてくれ・・・・・・！』

しかし、こんな時間のこんな場所では――しかもこのような怪物がその台詞を吐いたところで、助けの手を差し伸べるものが居る筈もない。

『ぐぅぅ・・・・・・！ウァァァあああああ！！』

その無残な悲鳴を最期に、ウヴァの身体は暴走する力に耐え切れず崩壊し、残った膨大なコアのエネルギーだけが互いを求め合う欲望によって一つとなる。
多くのコアとウヴァのエネルギーが融合したことで、立方の八角形のような巨大な物体が実体化を果たす。

出現したと同時に巨大化しながら空高く上昇し、周囲にあるバイクを浮遊させてセルメダルに還元させていく。
本体の外周に現れた三角と三角が折り重なったの図形――六芒星は角ごとに、赤・黄・緑・灰・青・紫の巨大な円を成している。
物体が還元されたことで生産されたセルメダルは全て、その巨大な

六つの円の中に吸収されていく。

”メダルの器・暴走形態”の勢いは留まることを知らず、遂には高層ビルの一部や道路を走る車さえも吸収していく。

ブラックホールのように限りない吸収によって、メダルの器の下部からは大量の屑ヤミーが産み落とされる。その数は百や二百では到底きかず、下手に放置すれば一つの町を埋め尽くす生産速度だ。

『・・・・・・・・・・・・』

その様子をビル街で静かに見守っているギルは、己が両腕と飛翼（マント）を広げて、ゆるやかに上空へと舞い上がっていく。

それによって見晴らしが良くなり、ギルは終わり行く世界とその住人達に、

『良き終末を』

祝福と祈りの言葉を静かに贈った。

だがしかし、上空に浮かぶメダルの器の巨大さ、セルメダルに還元され吸収されていく建物。

それらの怪奇現象はすぐさま一般の大衆の目にするところとなった。

しかし、彼等が能天気に野次馬を決め込めるのはほんの数分程度だ。

彼等のテリトリーに、屑ヤミーたちが乗り込んでくればどうなるかは、訊くまでもないことだ。

「キャアアア！！」

「うわあああ！！」

「ば、化け物！！」

人々はあっと言う間に大パニックに陥り、屑ヤミーの成すがままに攻撃され、逃げ惑うしかない。
そして混沌に満ちたその状況を打破する為、全力疾走で駆けつける者達がいた。

「あれが”メダルの器の暴走”・・・・・・・!?」

映司は周囲のビルや物体をセルに変えて際限なく食らっていくそれを見て青ざめる。

「笑うしかないな。しかもオマケ付きだ」

アンクは地上に蟻の如く散乱し、人々を襲う屑ヤミーの大群を一瞥する。

「これ、どうやって戦うの・・・・・・・!?」

比奈が恐れながら訊けば、

「至極単純だ。全部まとめてブチ壊す!行くぞ七実!」
「委細承知」
「行こうアンク!」
「ああ」

四人は再び両脚を動かし、逃げる人込みの中を掻き分けるように走った。

『――――――ッ!』
『――――――っ!』

アンクと七実は、己が姿をグリードに変え――

≪ＲＹＵ・ＷＹＶＥＲＮ・ＤＲＡＧＯＮ≫
≪ＰＴＥＲＡ・ＴＲＩＣＥＲＡ・ＴＹＲＡＮＮＯ≫
≪ＲＹＵ・ＷＡ・ＤＲＡＧＯＮ　ＫＮＩＧＨＴ！≫
≪ＰＵ・ＴＯ・ＴＹＲＡＮＮＯ　ＳＡＵＲＵＳ！≫

映司と刃介は、太古の暴君竜（プトティラコンボ）と幻想の最強種（リュウドラコンボ）に変身した。

＊＊＊＊＊

鴻上ファウンデーション会長室。

――Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ　ｔｏ　ｙｏｕ♪　Ｈａｐｐｙ　ｂｉｒｔｈｄａｙ　ｔｏ　ｙｏｕ♪――

レトロなレコーダーからは誕生日の歌が奏でられ、

「♪～～～♪～～～～♪～～～」

鴻上は机の上で鼻唄歌いながらケーキ作りに没頭していた。
もっとも、この本社ビルも一応は夢見町のビル街に立っている。
そして、部屋の窓からが空中に浮かぶ”メダルの器・暴走形態”が見えるのだ。

つまり、

――パリィィィン！！――

窓ガラスが割れ、部屋の中の物がドンドン引き寄せられていくということ――メダルの器によってこのビルの一部も既にメダル化されつつあるのだ。

「ラ～ラ～ラ～ラ～ラ～ラ～♪」

にも関わらず、ケーキを作っている鴻上は、肝が座っているのか根性が図太いのか？

＊＊＊＊＊

「ったく、こんなザコに暇なんざねぇってのによ！」

『屑が邪魔すぎなんだよ！！』

街では、ブライ・アンク・オーズ・キョトウが、何百という屑ヤミーの相手をしていた。

だが倒せども倒せども、屑ヤミーは一向に減らない上、寧ろ増えているような気までする。

手間取る四人。

このまま下らない前哨戦が何十分も続くかと思ったとき、

――ヴィンヴィンヴィン！！――

何処かから弾丸が降り注ぎ、数体の屑ヤミーを蹴散らした。
四人はその弾丸が発射される音に聞き覚えがあった。

「火野、アンコ、鋼、七実ちゃん！遅れて悪りぃ！」
「ここは俺達に任せろ！」

近くのビルの非常用階段から飛び降りてくるリバースとプロトバース。

「不止（とまらず）――早く真木博士のところへ！」
「さっさと決着つけてきやがれ！」
『頼んだぞ、四人共！』

ライドベンダーに騎乗して、チェリオとブレイズチェリオとリュウギョクが。

仲間達が駆けつけてくれたのだ！

「お前ら・・・・・・！よし、行くぞ七実！」
『了解』
「アンク！」
『フン！』

なお、

「絶対戻れよ！」
「はい！」
『負けたら承知せぬぞ！』

「判ってるさ！」

決戦の間際において、激励をもらう。

四人は眉ヤミーの大群を仲間に任せ、二枚の飛翼と二枚の大翼と四枚の飛翼と六枚の大翼を広げ、空へと舞い上がっていく。

（映司くん・・・・・・アンク・・・・・・！）

比奈はそんな彼等を見上げていた。

片方だけじゃイヤだ、どちらも・・・・・・。そんな欲望と向き合いながら。

＊＊＊＊＊

メダルの器が浮かぶ上空。

『フゥッ！』

『オォ・・・・・・！』

――ボォッ！――

「ハアッ！」

『ン・・・・・・！』

――ザンッ！――

アンクとオーズは、メダルの器の周囲に浮遊しているギルに大して激烈な攻防を繰り広げる。

「そんじゃ、俺達――――ってウオ！？」

『まさか・・・・・・』

加勢しようとしたブライとキョトウだが、

――バンバンッ！――

拳銃の発砲音がすると同時に、赤と青の巨大な光弾が、命中スレスレのところを飛んでいったのだ。

「チッ、やはりあん時に始末しておくべきだったか」

ブライが険しい声を出しながら殺意に満ちた視線を、向けた。

弾道上から割り出したその先には、紛れもない敵がいる。

『ヤミー、ですか』

黒金の身体をベースに、赤と青のラインが両腕と両脚に刻まれている。

片腕は連発式自動拳銃、もう片腕は回転式自動拳銃――――マグナムとさえ言える程にサイズアップしたそれらが、それぞれの腕と足に融合したかのような変体刀系のヤミー。

両脚の巨大な銃口から赤と青の炎をジェット噴射させて宙に浮かぶ異形の名は、ジュウヤミー。

体内に九枚のフォース・コアを秘めたグリード紛いのヤミーだ。

『オォォ・・・・・・アァァ・・・・・・』

呻き声を上げながら、ジュウヤミーは両腕の銃口をこちらに向けて、

――バンバンッ！――

発砲してきた。

「くッ！仕方ねぇ。やるぞ七実！」

『ええ！』

ブライとキョトウは標的をギルからジュウヤミーに変更する。

――ガンッ！――

――バンバンッ！――

それによって、こちらでも壮絶な空中戦が展開する。

青と赤の銃撃、紫の打撃、血錆色の斬撃。

それらが交差し、ぶつかり合い、そして――――。

「「オオオオオオッッ！！」」

『『――――――ッッ！！』』

『『ヌゥ――――――ッッ！！』』

四人と二体は、共に天から地へと落ちていった。

＊＊＊＊＊

四人と二体が落下した場所は、一言で表すと廃材置き場だ。
苔の生えた土管が並び、赤錆の出来た鉄骨などが積まれている。

四人は落下のショックに備えきれず、無様に地面に這い蹲る形で着地してしまう。
だがしかし、土煙が晴れると、ギルとジュウヤミーが優雅に立ち上がる。

『この終末の素晴らしさを見て、まだ邪魔をするのですか？』
『オ前らノ方が、邪魔ダな』

＊＊＊＊＊

所戻ってビル街。
そこでは四人のライダーと一体のグリードが屑ヤミーの殲滅に尽力している。

――――ヴィンヴィンヴィン！！――――

そこへ甲高い銃声が鳴り、三体の屑ヤミーが倒された。
リバースが咄嗟に後方を振り向くと、

「お疲れ様です」

赤い革製の服を着込み、リーゼントヘアーで決めてきた里中。

「里中ちゃん！こんな状況でよく来れたね！」

「ビジネスですから」

プロトバースの言葉にもスパっと受け答えして、指にバースバスターの引き金をかける里中。

「流石は俺の上司だ！」

と、リバースも里中の根性に感心している。

戦力がこれで増え、ブライたちの決着までに事を済ませられると皆が思った時、

『全刀流継承者、錆白兵――尋常な勝負を求めて参上仕った』

剣聖、とまで呼ばれた堕剣士が姿を見せた。

「こんなタイミングで、厄介な奴が・・・・・・」

「おやおや・・・・・・」

ブレイズチェリオとチェリオは、ゼントウの登場に思わず舌打ちしたくなった。

しかし、そんなゼントウの登場を拒まなかったものもいる。

『暴走の方はもういいのか、白兵よ？』

リュウギョクであった。

『今となっては、あの三枚のことは問題にするまでないのでござるよ』

ゼントウは、鞘に納まった薄刀『針』片手に応答する。

『それよりも、拙者としてはおぬしが応えてくれたことが何よりでござる』

『随分な評価をしてくれているのだな』

『デシレが消え、今の拙者には為すべきことなどない。故に、拙者に残されたものといえば、決闘の果てにしかない』

ゼントウはそう告げると、体内からある物を三枚取り出してリュウギョクに投げ渡した。

投げ渡されたのは、『紫のコアメダル』――――。

『デシレから預かっていた物でござる』

『・・・・・正面からの果し合いなぞ、忍者にとっては恥でしかないのだが・・・・・・』

リュウギョクはコアメダルを握り締め、

『良いだろう。この日この時だけ、私はお前を好敵手と認めようではないか』

クエスドライバーを身につけると同時に、受け取った紫のメダルを入れていく。

『感謝するでござる』
『構うな。私が自分勝手に決めてやっているに過ぎぬ』
そして、
『変身』
≪ＺＩＺ（ジズ）・ＢＥＨＥＭＯＴＨ（ベヒモス）・ＬＥＶＩＡＴＨＡＮ（リヴァイアサン）≫
≪ＺＩ（ジ）・ＢＥ（ベ）・ＬＥＶＩＡ（リヴァイア）　ＢＲＡＶＥ（ブレーイブー）！≫
翡翠の複眼が輝き、天空を飛んで舞い上がる怪鳥の頭。
地を砕き蹂躙せん程に屈強な巨大なる怪物の両腕。
海を這い回り、暗闇の恐怖にて気圧す海獣の両脚。
旧約聖書に記されし三頭一対の怪物の力を一身に背負う勇者。
仮面ライダークエス・ジベリヴァコンボ！
その変身を見届けて、ゼントウは『針』の柄に手をかける。
『全刀『錆』こと錆黒鍵（さびこっけん）が息子――錆白兵（さびはくへい）』
『真庭忍軍十二頭領総補佐、真庭竜王（まにわりゅうおう）』
――いざ尋常に――
何処からか、心の中において誰かが腕を上げて開始の合図をとる。
二人は互いに身構え、何時でも攻守を行えるようにしている。
――始めっ！――

そして、己が矜持と誇りを賭けた、負けることも譲ることも出来ない死闘が始まる。

＊＊＊＊＊

廃材置き場。
そこではギルとジュウヤミー対オーズとアンクとブライとキョトウ。
四対ニの激闘が繰り広げられていた。

だが、九枚のフォース・コアを宿すジュウヤミーと、残り三枚のコアを十二分に使いこなすギル。
例え数で押そうとも、決しても確実な勝利は誓えない相手だ。
それを証明するように。

――ガジィ！！――

『ぐわああっ！！』

――バァン！！――

『くはっ――――』

アンクと七実は敵の攻撃を直に喰らい、変身が解けてしまっている。
だがそれでも、オーズとブライは、メダガブリューとメダグラムを片手に、

「「オオオオオオオオッ！！」」

敵に向って突撃していく。

だが、

――ガシッ――

その刃はいとも容易く止められた。

メダガブリューのそれはギルの片手で、メダグラムのそれはジュウヤミーの両手で。

「「――ッ！？」」

『メダル・・・・・・頂きます』

――ズドッ――

ギルは腕をオーズの胸のうちに突っ込み、紫のメダルを掴みだそうとする。

彼が腕を動かすたびに、オーズの胸からはセルメダルが零れ落ちていく。

しかし、

――パキッ・・・ピキッ・・・バキッ・・・――

『氷カぁ・・・・・・！？』

『ッ――なにを』

「今俺達の中には、貴方を絶対に倒せるだけの力がある！」

「とくと目ン玉に焼き付けやがれ！」

その言葉の直後、オーズとブライは武器を持った片手を大きく天に向けて伸ばし、

――ジャリィィイイィィィン！！！！――

それと同時に二人の身体から夥しい量のセルメダルが宙に溢れ出した。

「――――――・・・・・・・！？」

「この量は・・・・・・・！」

アンクと七実は立ち上がりながら、滅多にお目にかかれない、まさに出血大サービスの光景に言葉を詰まらせかけた。

そして、宙に漂う『無限のセルメダル』と”二万枚のセルメダル”は、

――ガブッ、ガブッ、ガブッ、ガブッ、ガブッ・・・・・・・・・・・・・・・！！――

次々とメダガブリューとメダグラムの腹の中へと喰い尽されていく。

「映司・・・・・お前、この為にセルメダルを？」

アンクは、映司が『無限のセルメダル』を得た理由は、真のオーズとなり人々に救いの手を差し伸べる力を得ること・・・・・そう思っていた。――だがそれは違う。

本当の理由は、今この瞬間にこそ明らかになった。

『バカな！君らもタダでは・・・・・・・！』
「「オオオオオオオオッ！！」」
――ガブッ、ガブッ、ガブッ・・・・・・・・・・・・・・・！！――
とうとう、『無限のセルメダル』と〝二万枚のセルメダル〟が喰い尽された。
「「ウオオオオオオオオオッ！！」」
二人の欲望の戦士は、あらん限りの雄叫びをあげ、全ての力を右腕に一極集中させる。
「セイヤァァアアアア！！！！」
「チェストォォオオオオ！！！！」
文字通り身を削った決死にして渾身の一撃。
振り下ろされた一刀は、凶暴な紫の色と力を宿し、ギルとジュウヤミーを切り裂く。
それからまるで振り子のように一回転してもう一度、ギルとジュウヤミーにその凶刃を叩き込んだのだ。
『『グァァアアアアアアアア！！！！』』
――ドガァァアアアァァン！！！！！――
振り切り、爆炎を背にするオーズとブライ。

だれもが確実な勝利を想像したであろう。
だがしかし、現実はどこまでも厳しく陰惨である。

「有り得ない」

七実は一言で言い表した。
正直かつ率直に述べると、ギルとジュウヤミーは消えては居なかった。

直上に浮かぶメダルの器の下部より、緑色の光が降り注ぎ、ギルとジュウヤミーは再生されると同時に防御フィールドによって守護されていたのだ。
意志さえもなくし、喰らうことしか能のないメダルの器が何故そのような行動を取ったのかは一切謎だが、ただ一つ言えたことは此方の戦況が一気に不利な方向へ傾いたということだ。

「あッ――ぐッ！」
「チ、ク、しょう・・・・・・！」

無理矢理な力を使った所為もあり、映司は倒れ、刃介も千鳥足めいた動きをしている。
変身まで解けたとあっては、状況の悪化振りが手に取る様にわかるだろう。

『――中々ノ威力デあッた』
『良い作戦でしたが――しかし、あれだけの力を使えばキミたちはもう・・・・・・』

ギルの言葉など一切合財無視して、二人は――

「「ウオオオオ・・・・・・・ッ！！」」

映司は瞳を紫にしてドス黒いオーラを、刃介は瞳を金にして銀色のオーラを放出しだす。

だが今の状況でそれは、自殺行為とさえ言えるだろう。

「「・・・・・・・・・・・・・」」

そんな二人を見てアンクと七実は、

――バジュン！――

火炎と妖気を、二人とギルの間を縫う様にして放った。

「映司！止せ。――これ使え！」

「刃介さん！今一度、コレに！」

手にコアを持ちながらそういうアンクと七実の姿に、映司と刃介のオーラが収まった。

アンクは手に持っていたクジャクとコンドルのコアを投げ渡す。

七実もオニとテンバのコアを力一杯刃介に投げ渡した。

そして、最後の一枚も、ワンテンポ遅れて。

――パシッ――

映司と刃介は嬉々としてその三枚を受け取った。

もっとも、

――ジャリン――

それと同時に、アンクの『右腕』が三枚のフォース・コアとセルメダルの塊となって散り散りとなり、七実『身体』が数多くのセルと十二枚のコアと五枚のフォース・コアなって崩れ果てた。
当然、それによって信吾の身体は糸の切れた人形のように倒れ伏せる。
映司はそれを見て、

「アンク・・・・・・どうして？」

最後に投げ渡されたタカ・コア。
そこには、今まで隠していたヒビが生じていたことに、映司はここに到って漸く理解した。

「七実、お前って奴は」

最後に受け取らせてもらったリュウ・コア。
解っていたとはいえ、そこにもやはり大きなヒビが入ってしまっている。

「わかってる。――アンク、お前がやれってことは・・・お前が、ホントにやりたいことなんだよな」

映司はコアだけとなったアンクに対してそういいながら、クジャクとコンドルをセットする。

「七実・・・・・・お前の死ぬ気の覚悟・・・・・・しかと受け取ったぜ」

刃介もまた、テンバとオニのコアメダルをベルトにセットしていく。
そして、残る一枚。
「「七実（アンク）・・・・・・行くぞ（よ）」」
決意の意志と共に、ヒビの入ったコアメダルがセットされる。
二人はスキャナーを力強く握ると、魂の芯まで振るわせる声音で――！
「「変身ッ！！」」
≪リュウ！オニ！テンバ！≫
≪タカ！クジャク！コンドル！≫
聞こえてきたのは、紛れも無くアンクと七実の声。
メダルの名称発生が、持ち主たる二人の魂によって叫ばれた。
≪ＴＡＪＡＤＯＲ（タージャードルー）！！≫
≪ＲＩ（リ）・Ｏ（オ）・ＴＥ（テ）！ＲＩＯＴＥ（リオテ）！ＲＩ（リ）・Ｏ（オ）・ＴＥ（テ）！≫
映司の身体中に紅蓮の炎が渦を巻くように燃え上がり、太陽の如く光り輝く。
不死鳥のシンボルが映司の身体を赤き鳥の化身とした瞬間、背中より炎の翼が三対（ろくまい）現出してみせた！
刃介の周囲にも神々しい血錆色の光が三つ現れ、一つの円となって彼の力となる。
一つの身体に、元あった欲望の魂と無欲なる一本の刀の魂が、合わ

さる事によって天上の神を越える存在となる！

複眼も仮面も赤くなり、翼が大きくなって飛行に特化したタカヘッド・ブレイブ。
背中に六枚のクジャクウィングを生やし、左前腕部にオーメダル解放器タジャスピナーを装備したクジャクアーク。
鋭い猛禽類の爪の冴とキレを鋭利なものとするコンドルアーム。

額に血塗れた刃が生え、黒かった複眼が紫に変色したリュウヘッド。
前腕部の篭手を鞘にして魔刀『釦』を収める屈強なオニアーム。
あらゆる者の追随を許さぬ速力にて天地を駆け行くテンバレッグ。

「「ウォォォアッ！！」」

仮面ライダーオーズ・タジャドルコンボ！
仮面ライダーブライ・リオテコンボ！

『『・・・・・！』』
「「ハアアアア！！」」

相方の思いを背負い、オーズとブライは今まで以上の気迫を持ってギルとジュウヤミーに突っ込んでいく。
勝負自体は、ハッキリ言って互角と言って良かっただろう。
しかしながら、ここでブライとオーズの勝率を倍増させるものが現れた。

――ンッ！――
――はっ！――

アンクと七実の幻影が、ギルとジュウヤミーを撹乱しているのだ。

「「・・・・・・っ」」

その現象に、ブライとオーズは些か漠然とした面持ちだった。
しかし、幻影のアンクと七実の表情は、素直な笑顔だった。
ならば、言葉で問うのは無粋だ。共に戦って勝ってこそ、二人に対する最大級の感謝となるのだから。

勝負は再会され、ギルとジュウヤミーは圧倒的な劣勢に立たされた。
プトティラやリュワドラに比べて遥かに劣るはずの、タジャドルやリオテに此処まで追い込まれることが、ギルらには全く理解できなかった。

だけども、ブライとオーズは以前より遥かに強くなっている。
朋友の願いを、力に変えることによって！

「「ハアッ！！」」
『『グヌ・・・・・・！！』』

タジャスピナーによる炎熱打撃と魔刀『釦』による妖気斬撃。
それを真正面から直撃させられ、ギルとジュウヤミーは大幅に仰け反らされ、二人そろって空へと飛んで行き、メダルの器を目指す。
恐らくより自分に有利な状況を築くためであろう。

ブライはそれを見て、手持ちにある殆どのコアメダルを手にして宙に投げ、そして一挙にスキャンしてみせた。

≪ＲＹＵ≫
≪ＨＡＹＡＢＵＳＡ≫

≪KABUTO≫
≪YAMANEKO≫
≪BAKU≫
≪ZEUGLODON≫
≪YAIBA≫
≪ONI≫
≪HOUOU≫
≪HACHI≫
≪JAGUAR≫
≪MAMMOTH≫
≪MEGALODON≫
≪TSUBA≫
≪WYVERN≫
≪TENBA≫
≪YATAGARASU≫
≪SMILODON≫
≪INOSHISHI≫
≪TACHIUO≫
≪TSUKA≫
≪DRAGON≫

スキャニングされ、解放されたコアメダルは全てブライへと吸収されていき、彼の力となる。
身体一つで収まりきらずに溢れだす8色の波動の光。
まさに神の放つ後光のような神秘性を感じさせるソレを、刃介（ブライ）は難なく己の身に納めきって制御した。

「っ――――フッ！」

それを見たオーズも、身体に宿る7枚の恐竜コアを外へ解き放つと、タジャスピナーの蓋を開けてオークラウンの窪み全てに収めると同時に蓋を閉じた。

「火野！」
「はい！」

二人は飛翔する。
オーズは六枚のクジャクウィングで、ブライは銀色に輝く十二枚の翅を背中に生やして。
ギルとジュウヤミーを追う最中、オーズはスキャナーをタジャスピナーに当てて7枚のコア全ての力を解放する。

≪ＰＴＥＲＡ・ＴＲＩＣＥＲＡ・ＴＹＲＡＮＮＯ！ＰＴＥＲＡ・ＴＲＩＣＥＲＡ・ＴＹＲＡＮＮＯ！≫
≪ＧＩＧＡ　ＳＣＡＮ！≫

ギガスキャンの準備が整った直後、遂に突入したのは”メダルの器・暴走形態”の内部。
下部にある巨大な水晶らしき箇所より入り込んだ先には、一面黄昏の様な奇妙な空間が広がっており、空間と外部の隔たりを現すかの如く円周状に巨大なメダルがゆっくりと回転している。

だがそんな幻想的なモンに浸っている場合ではない。
ギルとジュウヤミーは、紫の波動と、赤と青の砲撃を連発してくる。

『『――ッ！』』

更に其処へもっと威力のあるであろう大きな一撃が飛ばされてくる。
オーズとブライは咄嗟に腕を盾にしようとしたが、それは無意味な

動きとなる。

――ボガァァァン！！――

波動と砲撃は爆発した。

オーズとブライの眼前に現れた障害物に激突して。

そして、その障害物とは赤い翼と血塗れた翼。

「アンク・・・・・・！」

「七実・・・・・・！」

二人の目の前には、実像を伴った幻影がいた。

例え言葉を発することがなくとも、お互いの間に結ばれた思いの力の賜物とさえ言えただろう。

「我刀流究極奥義！」

ブライが今再び銀色の十二枚の翼を広げると同時に、ブライは二人となり、片方が前方でもう片方が後方に出現したのだ。

『ヌぁ・・・にィ・・・！？』

この事態に、ジュウヤミーはどうすることも出来ず混乱する。

そうやってブライは発動する。

ＳＯＤＯＭにおける竜王との決着以来、一度として使っていなかった、あの奥義を。

影分身を応用して、前方からは七花八裂、後方からは劉殺生を。

そうして敵を確実で完膚なきまでに殺しつくす。

「「望語（ノゾミガタリ）――ッ！！」」

一人の敵を敵を七回殺す、七花八裂・改。
複数の忍法と技法を同時使役して目標を肉片に変える、忍法劉殺生。
――ズドガァァァァァァァァン！！！！――

その二つの前後同時攻撃。
それによって、ジュウヤミーは断末魔さえあげる間も無く爆散した。
そしてオーズとアンクは。

「ハァァァ――――セイヤァァァァ！！」

アンクの特大火炎攻撃と、タジャスピナーからのギガスキャニング弾。
その二つは一直線にギルを目指して突き進み、ギルの攻撃を火炎が相殺していくことによって。

『ぐおッ――――ウゥアアアアアア！！！！』

恐竜コアによるギガスキャニングはギルの身体に見事命中。
それと同時に、ギルを中心とした円形の黒い孔が出現し、周囲の物体を吸い込みだす。

＊＊＊＊＊

地上のビル街。

『ふっっ！』

「せいっ！」

そこでは、ゼントウ完全体とクエス・ジベリヴァコンボが雌雄を決しようとしている。

――シュシュシュシュシュシュ・・・・・・ッ！――

――キンキンキンキンキンキン・・・・・・・ッ！――

途中、クエスが投げつけた7本の手裏剣さえも、ゼントウは『針』の刃にて撃墜させる。

「ならば」

それを見たクエスは両腕に力を込めて、右手を地面に突っ込み、左手で空間に孔を穿つ。

天地を砕いてつかみ出した物、それは二丁の機関銃（マシンガン）である。

「この時代での主力兵器か。――悪くない」

クエスは両の手に握られた”メダファイター”は、紫の銃身を鈍く光らせ、主のゴーサインを待ち受けている。

クエスはジャキという音を立てるようにして、両脇に獲物を挟んで引き金を指に・・・・・・。

――ズガガガガガガガガガガガッッ！！――

そうして発射され、音速を超えかねない勢いで、豪雨の如き銃弾はゼントウを襲う。

『くっ』

――キンキンキンキンキンキンキン！――

ゼントウはそれら全ての迎撃は早急に諦め、自分の急所に当たるであろう弾丸を的確に弾いた。
だが、その代償として身体の末端である手足には防御が行き届かずに手酷いダメージを負ってしまう。

「頑張っているところ申し訳ないが、さっさと終わらせてもらう」

クエスはそういって連射を中断し、両脇に挟んだ二丁のメダファイターのグリップやマガジンを折り畳み若干コンパクトにした。
そして、ガチャという音を立てながら、二丁の機関銃は連結する。

「確か、こういうのを、バズーカとか言うのであったな？」

言葉通り、それは二丁の機関銃を組み合わせて体を為したロケットバズーカ砲。
しかも肩に背負って使うほどに大きな物だ。

クエスは仮面の下で笑うと、オーメダルネストにある全てのセルメダルをメダファイターのメダル装填口へと流し込む。

≪ＧＯＫＫＵＮ！≫

装填が終了すると、砲身から月賦のような音が鳴る。
そして肩に背負って、畳まれたグリップとマガジンを下ろし掴んで見せる。

≪ＺＩ（ジ）・ＢＥ（ベ）・ＬＥＶＩＡ（リヴァイア）　ＨＩＳＳＡＴＳＵ（ヒッサーツ）！≫

――カチッ――

トリガーの音が酷く乾いた聞こえた直後、

――ズグァァアアアァァァァン！！！！――

砲身から竜巻とさえ言えるほどの強烈極まりないエネルギーが迸った。
濃い紫の光を窶したソレは、極太の一撃必殺の威力を誇っているのは一目瞭然だ。
普通ならこんなものを眼にした瞬間に、大抵の者は勝利することに絶望するだろう。

だがしかし、目の前にいる剣聖は違った。

『薄刀開眼』

解き放たれた一太刀。
そのたった一振りによって、クエスの”デスバニッシュメント”が霧散した。

「なに？」

『すまぬがこの薄刀は、外見通りに脆く弱いだけではないのでござる』

「――なるほど。お前の必殺剣といわけか」

クエスは大して驚かずに、メダファイターを地面に捨て置いた。

「そうとなれば、此方も奥義で応えるべきであろう」

≪ＳＣＡＮＮＩＮＧ　ＣＨＡＲＧＥ≫

三枚のコアの力が解放され、全身に紫のエネルギーが満ち溢れていく。

頭からは怪鳥（エアーズフラッグ）の大翼が力強く羽ばたきだし、両腕と両肩の悪魔（デビルファング）の牙が鋭い刃を生やして伸ばし、両脚には大海獣（シーズスケイル）の鱗が不気味な紫の炎を滲ませている。

「行くぞ」

『・・・・・・』

二人の間にあるのは一種の緊張感。

それも些細な物音一つで張り裂けるようなモノだ。

だがそんな物音を待つ必要はない。

なぜなら、

『薄刀開眼（はくとうかいがん）！』

「ラストテスタメント！」

とっくの昔に――既に勝負は始まっているのだから。

交差する紫の撃と美の刃。
一瞬にして距離と位置が逆転し、向かい合う形が背を向け合う形となる両者。
その激突の結果はと言うと、

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・うっ」

クエスは比較的装甲が薄いわき腹を押さえ、片膝をついた。
一方で、その後ろにいるゼントウは刀と鞘を手にして立っている。
しかし、その姿からは勝利の歓喜を感じ得ない。

『拙者の・・・・・・』

――パリッ、パリッ、パリッ――

『負けでござるな――――』

体内で三枚のコアに重度のヒビが入ったことを認識し、ゼントウは倒れた。
その拍子に人間態へと戻り、挙句の果て薄刀『針』までもが、ガラス細工特有の音を儚げに立てて割れ果てた。

薄刀『針』――破壊。

「よくぞ、我が奥義を見破ったものでござるな」
「お前が砲撃を奥義とやらで斬り払ってくれた御陰だ」

クエスは倒れる白兵に歩み寄った。

「薄刀開眼は、『針』の透き通る程の薄さと軽さを利用し、姿の見えぬ高速の秘剣を同時に複数見舞う技。脆くて弱いだけの刀と思いきや、美麗さ以外にも取り得があったのだな。尤も、お前でしか従前に扱えぬ奥義であろうが」

クエスは一人勝手に説明を行いだす。

「そこを衝いて、私は全身の装備を最大限に発揮し、お前の太刀筋に敢て飛び込んでである程度攻撃を受け、肉薄になったその身体に両の拳でぶん殴った。・・・・・・今更ながらに、こんな逝かれた戦法を取った自分が信じられん」

苦笑しながらクエスは語るも、白兵の顔には何か別の感情が浮いていた。

「ふ・・・・・・やはり、よいな」

「ん？」

「グリードとしてのくすんだ世界より、人としての鮮やかな世界・・・・・・」

白兵の表情には何処かスッキリとした色合いがあり、間違っても後悔なんてものは一片もない。

「どういう意味だ？」

「簡単でござる。拙者もデシレも、おぬしや虚刀のようにはなれぬ。ならば、人の姿である時だけでも人らしくあるため、魔術で誤魔化していただけのこと。異形の姿となれば、瞬く間に世界は色褪せる」

白兵の顔に、虚しくも儚い動きがあることをクエスは見逃さなかった。

「しかし、これほどの尋常な決闘において負けた、正々堂々と負けた。はっきり言って、心が軽くなったでござるよ」
「生まれ変わることがあれば、また幾度と無く挑むが良い。こう見えても私の信条は『輪廻転生』でな。こうして戦国の世以上に面白い戦に立ち会う機会を現代で得られたのだから、きっと来世でも――」

クエスの言葉を耳にして、錆白兵は心底満足した一人の剣士として、最高の笑顔となった。

「錆まくりの、折れた刀で、あろうとも・・・・・・此度の戦い、拙者を欲望を満たしてくれた」

彼は最後の最後に、一言だけを言い遺す。

「さらばでござる。我が好敵手よ」

――ジャリィィン！！――
――パリン！パリン！パリン！――

そして、錆白兵は無数のセルメダルと三枚のフォース・コアと己がコアメダルの塊として崩れていった。
その中から三枚、バラ・サソリ・オオカミのコアメダルが一枚ずつ砕け散り、消滅していった。

全刀『錆』――破壊。

＊＊＊＊＊

メダルの器・暴走形態。
その内部において、世界ではない別の終末が始まっていた。

『ああ、私の終末・・・・・私が完成してしまう――――』
『ン、ぐ、おぉ！アァ！』

ギガスキャンにより、虚無属性が最大限に増幅された一撃。
それによって、ギルの身体に小規模なブラックホールが生じてしまい、ギル自身とジュウヤミーに、永遠に明かない暗くて冷たい黒い闇の終末を齎したのだ。

周囲のオーメダルたちも、ブラックホールにどんどん吸い寄せられていく。
その証拠に、メダルの器は内側から押しつぶされるように形を損なっていく。

コアもセルも、みな等しくブラックホールに吸い込まれていく中、

「――――あっ」

タジャスピナーに収まっていた7枚の恐竜コアまで、ブラックホールに飲み込まれた。
しかも飲み込まれる直前、孔から発生している高密度のエネルギーによって砕けていく。

「（ま、拙い！）」

それを見たブライは急いでローグカテドラルを右手で覆い隠し、コアを持っていかれないようにする。

「火野！逃げるぞ！」

「は、はい！」

残った左手でオーズの腕を引き、共に逃げようとしたが、

――バシュ！――

そんな音と一緒に、オーカテドラルに収まっていたタジャドルのコアメダルが全て・・・・・・。

「アンクっ！！」

――パリンッ！――

その時、タカ・コアが小気味良く音を立てて、真っ二つに割れた。

そして、

――ドカァァァアアアアアァァァァァン！！！！！――

メダルの器・暴走形態は、空中にて派手な大爆発の果てに完全消滅した。

「――――――――――」

コアを全てなくし変身が解けてしまった映司は、空の上に放り投げられて、地上へと落ちていく。

意識などロクに残っておらず、このまま重力に従って落下していくのかと思いきや、

パシパシ、と映司の頬を叩く音と感触。

『映司！目ぇ覚ませ！死ぬぞ！』

映司の胸倉を掴みながら怒号を飛ばすのは、右腕だけのアンク。

「――――アンク？」

普通、コアメダルが壊れたのにどうして？とかいう疑問がでてきそうだが、

「もういいよ。もう無理だ。――お前こそ」

映司の口からは、諦めの言葉が発せられた。

『ふっ、俺はいい。欲しかったモノも手に入った』

「それって命だろ？――死んだら・・・・・・」

『そうだ。お前たちといる間にタダのメダルの塊が死ぬトコまで来た。――こんな面白い、満足できることがあるか』

「・・・・・・・・・・・・」

このままでは地面に激突してお陀仏だということも忘れて、映司はアンクの最期の言葉に聞き入っていた。

『お前を選んだのは、俺にとって得だった。間違いなくな』

などと言いながら、アンクはゆっくりと前に進んでいく。

「おい！どこ行くんだよ！？」

そんなアンクに映司が手を伸ばすと、アンクは振り返る。

『お前が掴む腕は、もう俺じゃないってことだ』

その遺言を最期にアンクは死んだ。

必死に伸ばした映司の手に、アンクの幻影が掴めるはずもない。

代わりに掴むことができたのは、真っ二つに割れたタカ・コアの片割れ。

「ッ――――アンクぅぅぅうううう！！！！」

＊＊＊＊＊

地上の廃材置き場。

メダルの器の大爆発を見た比奈は、その直下にあたるこの場所に走って出向いてきた。

そこで眼にしたのは、

「――――――」

信吾に取り付いた際のアンクの姿。
何も言わず、ただ満足そうな微笑だけを顔に浮かべるそれは、次第に色も形も失い消えていく。
そして消失した幻影の跡には、タカ・コアの片割れが遺された。
比奈は歩み寄り、その片割れを手にとって、

「アンク・・・・・ありがとう・・・・・・」

身命を賭してこの世界を守ってくれた知人に、最大級の感謝を贈った。
しかしながら、その静寂な時間を破り捨てるように、無残とも剛毅とも言える絶叫が聞こえてきた。

「うあああああああああああああああああ！！！！」

空から凄まじい勢いで、まるで隕石のように落下してくる者。

「は、鋼さん！？」

それは紛れも無くブライだ。
彼は絶叫を発してから３０秒と経たぬ内に、ズドン！という鈍く重い物音を地面一杯に打ち鳴らしながら、廃材置き場に落下してきた。

落ちた場所にはクレーターが出来上がっているあたりからして、彼に対してだけ如何に爆発の衝撃が加わったかがよくわかる。

「だ、大丈夫ですか！？」

比奈は急いで駆け寄ろうとしたが、

「心配すんな！お前を火野を！」

ブライは神業的で驚異的な生命力によってすぐさま面をあげ、比奈にそう告げる。

＊＊＊＊＊

「火野！！」

「――――ッ」

空の上で、映司に向けて叫ぶものがいた。

「掴まれ！早く！」

「後藤さん！！」

振り向いた先には、カッターウイングで飛行するリバースの姿。

「もう何でも一人でショイ込むのは止めろ！！俺達がいる、俺達の腕を掴め！！」

そう言って腕を伸ばしてくるリバース。
だが腕を伸ばしてくるのは彼だけではない。

「火野ォォ！！」
「映司くん！！」
「火野さん！！」
「映司くん！！」
「火野ォォ！！」
「火野ぉぉ！！」

伊達が、比奈が、里中が、知世子が、烈火が、竜王が。
仲間達が地上で寄り添い会うように集まり、火野映司に手を差し伸べている。

「映司くん！！」
「大丈夫だから！ドーンと来なさい！！」
「誰にも頼らないってのは、強いことじゃねぇぞ！！」
「火野さん！此処ですから！！」
「早く来やがれ！この強情野郎！！」
「私たちを信じろ、火野！！」

地上で自分の為に必死になって腕を伸ばしてくれている仲間。
それを目の当たりにした映司は、一つの結論に達する。

（俺が欲しかった力・・・・・・どこまでも届く俺の腕――それって）

――ガシッ――

映司は自らの腕を伸ばし、自分に力(うで)を貸してくれる仲間(リバース)のソレを掴んだ。

（こうすれば、手に入ったんだ）

あまりにも近くにありすぎたことで、灯台下暗しとなっていたモノ。
それこそが、映司の欲しかった力――仲間との絆であった。

仲間の力によって緩やかに降下する映司。
そんな映司のもう片方の腕を、仲間達は暖かな手で迎えてくれる。

（――でも、お前の手を掴んだのも、絶対間違いじゃなかった。
――絶対・・・・・・！）

映司はタカの片割れを深く握り締め、今は亡き仲間(とも)のことを想った。
白い雲と青い空を見上げながら。

「・・・・・・アンク・・・・・・」

静かに呟かれた名前。
映司はそんな風にアンクのことを考えていた。
しかし、そこで一つ気が付いた。

先ほど、自分に手を伸ばしてくれた者の中に、刃介の姿が無かったことを。

（そうだ、鋼さん・・・・・・）

映司は首を動かしてキョロキョロと周囲を見回す。
すると、映司らとは若干距離の空いた場所で、刃介の姿が見えた。

その腕に、今にも消え果ててしまいそうな、七実の身体を抱き締めながら。

「七実・・・・・・」

「刃介さん・・・・・・・」

お互いの名前を呼び合い、二人は互いを抱き締める力を強めていく。

「もう、そろそろ、限界のようです」

ベルトのコアと地上に残ったメダルで身体を再構成した七実だが、先ほどの戦闘によってリュウ・コアのダメージはより大きくなっていた。

「頼む、消えないでくれ・・・・・・！」

「消えるんじゃありません。生きて死ぬんです。今度は、刀として、十全に使命をまっとう出来ました。感謝しても、しきれません」

大粒の涙を流しながら懇願する刃介に、七実は儚い笑顔で彼を慰める。

「うふふ。それにしても不思議ですね。かつての私は、死んでいた方が楽ちんだと思っていたのですが」

生きるということは、起きて、歩いて、喋って、食べて、戦って、寝て――様々なことが要求され、以前の七実はそれら全てに煩わしさを感じていた。

「死んでいくことを考える方が、未来を見据えることだと思ってい

たのに」

悟りを開いたかのように、彼女は口を開き続ける。

「今は、この苦労と世界が、本当に愛しくてたまらない」

「だったら死ぬんじゃねぇ！その為なら俺は何でもする！神様の面に拳を叩き込んでやる！」

刃介が依然として涙を流したまま、怒号を飛ばした。

しかし、何時もの迫力は無く、そこには一重に恋人の命を心配する優しい青年の顔がある。

「でしたら、まずは・・・・・・誰かに、仲間に頼ることを覚えて下さい」

七実は何処かしら期待を持つような声で呻くと、刃介の胸に手を当てる。

「うッ――――なっ・・・・・・・！？」

その瞬間に、刃介は七実の手から得体の知れない力が体内に流れ込み、次々と大半のコアメダルの力が・・・・・・。

「封印、だと？――バカ野郎！こんな真似したら、お前は！」

「確かにこの状態で力を使えば時間は更に減るでしょう。でも刃介さん、私は貴方に――――かふっ！」

「七実！！」

寿命が尽きる寸前であることを示すように、七実は口から吐血した。

「もういい喋るな！！俺はもう何も要らない！俺はお前が傍に居てくれれば、それで満足なんだ！！だから、くだばるんじゃねぇ！！」

痛ましい恋人の姿に、刃介は獣のように吼えた。

「ありがとう、刃介さん。私を必要としてくれて」

「頼む、死なないでくれ・・・・・・！」

「ありがとう。私を愛してくれて」

「死なないでくれ、七実・・・・・・傍に、いてくれ」

刃介は七実の身体を必死に抱き寄せ、両目から悲哀の雫を河川のように流して顔を濡らし続ける。

抱き寄せられた七実は、愛しい恋人の温もりを直接感じ取りながら、何の迷いも悔いもない、安らかで穏やかな笑顔で感謝し続ける。

「満足（しあわせ）を一杯、ありがとう」

そうして、ジャリン、という金属音が無造作に響いた。

後に残ったのは、有象無象のセルメダルの山、封印されて石化した妖魔系コアと龍神系コアと五枚のフォース・コア。

そして、刃介の手に握られた――紫水晶（アメジスト）の指輪と、真っ二つに割れたリュウ・コア。

「っっ――――七実ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！！」

天に向う一人の嘆きの咆哮。
力を失ったことではなく、たった一人の女を喪ったことへの悲しみの涙が、頬から落ちて地面を僅かに濡らした。

その様子の全てを見届けていた仲間達は全員、ひたすたに涙を流した。
露骨に大粒の雫を零し続けるもの、哀しげな顔で静かに泣く者、地面に座り伏して顔を覆い隠すように大泣きするもの。

この日この時、世界は確かに救われた。
そしてその代価は、『命を得た欲望の鳥』と『幸せを得た刀たる女』であった。

＊＊＊＊＊

あれから随分と時間が経ち、色んなことがあった。
かつてのメンバー達は、元居た場所へと戻っていた。

信吾は刑事として復職し、元気に働いている。
比奈も服飾学校での勉強に今一度熱を入れて、夢を叶える道を創ろうとしている。
後藤は財団から警察へと戻り、今では凶悪犯罪者と日夜戦っている。
伊達は日本から離れ、医療の遅れた国や医者の居ない国において、様々な人達を治療する為に奮闘している。
鴻上ファウンデーションも何時ものように、欲望を原動力に高度な成長を続けている。

そんでもって、他の面々はというと、

＊＊＊＊＊

トライブ財閥社員寮の玄関。

「今までお世話になりました」

「いえいえ、こちらこそ」

そこには荷物を纏めて出て行く金女の姿があった。

目の前には管理人と思われる年配の人物がいる。

「それにしても、一体どんな仕事する為に雇われてたんだい？」

管理人が聞くと、金女は聖女のような麗しい笑顔と無垢な仕草で、

「不言（いわず）――禁則事項です♪」

さりげに有名な名台詞を口にして、アニオタっぷりを披露していた。

＊＊＊＊＊

とある高校の教室。

「烈火！新しい絵本できたんだけど、良いかな？」
「おう。柳の頼みだ、楽しみにさせてもらうぜ」

あの激戦を終え、花菱烈火は何時もの平和を享受していた。
恋人である佐古下柳との時間は、彼にとって癒しの時間である。

「烈火、柳。何話してんの？私たちも混ぜなよ♪」
「つーか聞こえたぞ！烈火、俺様が必死こいてアシスタントさせられて仕上がった絵本の感想を言ってみやがれ！」
「全く君達は。今度は何をバカ騒ぎしてるんだ？」

そこへ、級友の霧沢風子、石島土門、水鏡凍季也も乱入してくる。
何処にでもありそうな普通の光景。
だが、一度でも戦場や非日常を目に焼き付けた者は揃ってこう言う筈だ。

”この平和で賑やかな時間こそが、最も貴く輝かしい”

＊＊＊＊＊

トライブ財閥本社の会長室。
その部屋に堂々と据え置かれた会長の椅子と机。
だがそこに主人の姿はなく、

「会長代理ぃ。また二つの組織から情報提示を願う通達っすよ」
「またですか・・・・・・」

通達状を運んできた凍空吹雪。
その視線の先には、会長の椅子に座り、机に向って事務作業をするバット・ダークの姿がある。
しかも机には、『会長秘書兼会長代理』などというプラカードがぶら下っている。

「そんで、返事の方どうするっすか？」
「・・・・・今度また口を挟んできたら、貴方達のお国を大恐慌にすると伝えなさい」

会長代理の権限を得ているバットは、若干間を空けて命令した。

「ふぅ・・・・・・会長ときたら、本当に大胆なことをなさる・・・・・」

溜息を吐き出しながら、バットは主である吸血鬼のことを考えていた。

＊＊＊＊＊

クスクシエ。
あの戦いを生き延びた仲間たちは、今一度ここに集った。

扉を開けると、そこにはインド風の格好をした知世子が元気よく迎えてくれた。

比奈、信吾、知世子、後藤、伊達、烈火、金女、里中。
それから、柳、風子、土門、水鏡、陽炎。

皆は戦いの後の平凡な毎日を話し合い、底抜けに明るい笑顔で讃えあった。
ご馳走を食べて飲んで、本当に満ちたりた時間を過ごす。

だがそんな時、知世子があるサプライズを用意しているという。
テーブルの上にあるモノが置かれており、年季の入った布で覆い隠されていたのがソレである。
知世子はもったいぶる様に布をユラユラと動かし、一気に布を取り外す。

すると一同から驚きと歓喜の声が一斉に発せられた。
そこにあるのは二台のテレビ電話。
そして小さな液晶に映し出されているのは、海外の砂漠地帯にいる映司と、空港のロビーにいる刃介と竜王とルナイトだった。

あの決戦の日から数日後、映司は再び旅に出たのだ。
欲望を取り戻し、求めたものを手に入れて、明日のパンツと日銭を頼りに。
刃介たちもまた、新しい目的を果たす為に、これから旅立とうとしている。
新しい欲望を、その心に刻んで。

＊＊＊＊＊

「じゃあ皆、またね！」

映司はそう言って手を振り、テレビ電話のスイッチを切ってポケットに入れた。
そして立ち上がり、明日のパンツをかけた長い木の枝の棒をその手に持って歩みだそうとする。

だがその前に、ある物を見つめた。
割れたタカ・コアを掌にのせて――――。

「いつか・・・・・・もう一度――――！」

映司は歩き出す。
砂を踏み、確かな足跡を残しながら。

空虚だった器を、仲間との再会という願いで満たしながら。

＊＊＊＊＊

「ではまた会おう」
「じゃーねぇ、みんな～」
「それじゃあ、通話切るぜ」

空港のロビーである程度のことを語りつくし、三人はテレビ電話の電源を切る。
三人の周囲には多くの荷物があり、殆どが大型ケースに収められている。

「さてと、そんじゃまあ」

白髪頭、黒い着流しに黒いズボン。首には梵字が彫られた十字架をペンダントのようにかけ、両の薬指には紫水晶（アメジスト）の指輪をしている男――鋼刃介は、ゆっくりと立ち上がる。

「行くとしようか。海の外の世界へ」

それに合わせて、白菊模様の黒い上等な着物を身に纏い、流麗なる黒い長髪をポニーテールにした、凛々しい和風美女――真庭竜王は、期待に胸を膨らませるように言った。

「そうね。何時までも自家用機を待たせたら、空港の滑走路の一部をチャーターする料金もバカにならないもの」

美しいブロンドロングストレートヘアーと澄んだ緑色の瞳。
男を惑わす妖艶な顔立ちに、礼服姿でも目立つ豊満な爆乳といった、男を惑わす色香を纏った美女――ルナイト・ブラッドレイン・シルフィードは、素敵な笑顔で凄い台詞を言ってくる。

一同は荷物を手に持って、自家用機へと続く通路を歩いていく。
そんな時、刃介は不意に足を止めて、両前腕部をグリード化させてある物を取り出す。
それは、割れたリュウ・コア。

「――――――」

七実のかけた封印によって刃介は力の大半を喪失しており、今では約2割未満しかグリードの力を使えない。しかもこの封印は相当に強固かつ高度で神代レベルの術者か、封印をかけた当人でなければ、解放することはできないらしい。

尤もそれでも、未だに刃介がグリードであり人間であることは変わりないのだが。

要するに、今となってはコアの力による変身が出来るのは竜王のクエスのみである。

封印されていないコアメダルは、一枚ずつ欠けた植物系・甲殻類系・犬系のコアと、ジズ・ベヒモス・リヴァイアサンの三枚と、竜王の体内に秘められた五系統による十五枚。

「俺は、絶対に・・・・・・」

新しい欲望は、割れたリュウ・コアを――鑢七実を復活させること。

無論、日本においてもその方法はないかと探したが、糸口さえ掴めていない。

だから三人は出国して旅をするのだ。

自分が今、一番欲しいものを取り戻すために。

「待っていてくれよ七実。今はコレが俺の欲望なんだからよ」

誇らしげに、刃介がリュウ・コアに告げた。

「何やっているのだ刃介？」

「早くしなきゃダメよ？」
「ああ、今直ぐに行く」
刃介は何時の間にか先に行っていた二人を追う様に歩き出した。
「（頼りにしてるぜ、お前ら）」
旅の最中、刃介は目の前にいる二人には色んな場所で手を貸してもらうつもりだ。
七実の言い遺した通り――仲間に頼り、共に力を合わせるために。
当たり前の望みを持ちながら、それを叶えられずに散って逝ったグリード。
大きすぎる欲望による悲哀と儚さを体現した者たち。
そこには救いがあったかどうかはわからない。それでも、同じグリードでありながら答えを得て、望みを果たして逝ったグリードもいる。
生きて死ぬ命を得たアンクと、刀としての忠勇を尽くし女としての幸福を得た七実。
その願いの成就はきっと、誰もが望んだことでした。
欲望――それは生命を強く、弱く、醜く、美しくするモノ。
例えどれほどの才能と努力を以ってしても叶わない欲望もあるだろう。
だがそれでも、自分以外の誰かがそれを望んだとき、理想は必ず叶う。

そんな夢と希望に満ち溢れた、未来を掴み取る前向きな物語。
望語は、ここに静かに幕を下ろすのでございます。

明日への欲望と最終決戦と掴むべき未来（後書き）

ジヴェリヴァコンボ
身長：２１５ｃｍ　体重：９７ｋｇ　キック力：２５トン　パンチ力：２０トン
ジャンプ力：２３０ｍ　走力：１００ｍを３．５秒　固有能力：環境改変能力
カラー：紫　必殺技：ラストテスタメント

ジズヘッド
複眼の色は翠緑。エアーズフラッグという巨大な翼を生やしての飛行や羽ばたきによる攻撃が可能。空の属性を司っている。

ベヒモスアーム
両腕と両肩に牙の形をした刃、デビルファングを生やすことで、敵の捕縛や攻撃の補助を行う。地の属性を司っている。

リヴァイアレッグ
脚部に不気味な紫の鱗、シーズスケイルを発生させて高密度のエネルギーを込め、硬度や鱗の鋭利さの上昇によって蹴りを補強する。海の属性を司っている。

メダファイター
クエス・ジベリヴァコンボ専用の機関銃型メダルウェポン。
最初は二丁の機関銃としてクエスの手によって地面と空間から引き摺り出される。
初期形態でも、その高速連射によって敵を遠距離から圧倒する戦法が可能になる。
また、二丁を組み立てて一つとすることで、ロケットバズーカ形態

となり、セルメダルを投入することで必殺砲撃「デスバニッシュメント」を発射する。

――予告――

聖杯戦争。
万能の願望機・聖杯を巡って、七人の依り代（マスター）と七人の使い魔（サーヴァント）が争い殺し合う大儀式。
剣士（セイバー）、槍兵（ランサー）、弓兵（アーチャー）、騎兵（ライダー）、暗殺者（アサシン）、魔術師（キャスター）、狂戦士（バーサーカー）。
この7つの役割（クラス）において召喚される、あらゆる時代のあらゆる国の英霊達。
本来は7体だけのサーヴァントが召喚される聖杯戦争に、例外にして規格外の八番目が現れる！

「サーヴァント・アヴェンジャー・召喚に従い推参させてもらった」

それを現界せしめた八番目のマスター。

「汝の力、我が勝利の為に役立てておくれ」

この出会いが、二人の運命（フェイト）のスイッチを入れる！

〔3・・・2・・・1〕

「変身！」

アヴェンジャーが変身した戦士、

「幻想キタぜぇーーー！！」

その名は、

「仮面ライダーファズム！

――ミッションスタートだ！」

〔SABER（セイバー）・ON〕

〔ARCHER（アーチャー）・ON〕

〔LANCER（ランサー）・ON〕

〔CASTER（キャスター）・ON〕

「これが、妄のサーヴァントの力・・・・・！」

ファズムドライバーとアストロスイッチで、未知なる敵・ゾディアーツとサーヴァントと戦い、聖杯戦争に勝ち抜け！仮面ライダーファズム！

その手に、幻想を掴み取れ！

「今回の第五次聖杯戦争は、中々どうして、面白くなりそうだ」

「成る程。ファズムがこの時代に」

新連載『Ｐｈａｓｍ／ｍａｓｋｄ　ｒｉｄｅｒ』！

英雄（ヒーロー）スイッチ・オン！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3933p/

仮面ライダーブライ　～欲望の物語～

2011年11月18日00時20分発行